

現代日本
文學全集

21 正宗白鳥集





正宗白鳥集

杉浦非水裝幀

改
造
社
版

昭和四年二月一日印刷
昭和四年二月三日發行

現代日本文學全集 第二十一篇

著者 正宗白鳥

發行者 山本美

東京市芝區愛宕下町四丁目六番地

印刷者 杉山愛二

東京市牛込區市ヶ谷加賀町一ノ二二

發兌

東京市芝區愛宕下町四丁目六番地

改造社

振替東京八四〇
電話芝(43) 四三二二番番番番

「正宗白鳥集」目次

卷頭寫眞(照影)

序 詞(筆蹟)

創作篇

塵 <small>ちり</small>	埃 <small>あか</small>	玉 <small>たま</small>	突 <small>つ</small>	何 <small>なに</small>	處 <small>こ</small>	地 <small>ち</small>	獄 <small>ごく</small>	微 <small>ひ</small>	光 <small>ひかり</small>	徒 <small>と</small>	勞 <small>ろう</small>	形 <small>かたち</small>	泥 <small>どろ</small>	人 <small>ひと</small>	毒 <small>どく</small>
………	………	………	………	………	………	………	………	………	………	………	………	………	………	………	………
	三	八	八	二	二	四	三	三	三	三	三	二	二	二	一四〇

命 <small>いのち</small>	綱 <small>つな</small>	二五
----------------------	---------------------	----

入江 <small>いりえ</small> のほとり	………	二〇
----------------------------	-----	----

牛部屋 <small>うしべや</small> の臭 <small>にお</small> ひ	………	三九
------------------------------------------------	-----	----

死 <small>し</small> 者 <small>もの</small> 生 <small>なま</small> 者 <small>もの</small>	………	三〇
--------------------------------------------------------------------------------	-----	----

心 <small>こころ</small> 中 <small>ちゆう</small> 未 <small>み</small> 遂 <small>すゐ</small>	………	三六
----------------------------------------------------------------------------------	-----	----

毒婦 <small>どくふ</small> のやうな女 <small>むすめ</small>	………	三三
------------------------------------------------	-----	----

人 <small>ひと</small> さま	………	三九
------------------------	-----	----

生 <small>う</small> まざりしならば	………	三七〇
----------------------------	-----	-----

戯曲篇

人生 <small>じんせい</small> の幸 <small>さち</small> 福 <small>ふく</small>	………	三九二
-----------------------------------------------------------------	-----	-----

安土 <small>あづち</small> の春 <small>はる</small>	………	四〇八
--------------------------------------------	-----	-----

隨筆評論篇

歡迎 <small>げんげい</small> されぬ男 <small>おとこ</small>	………	四三四
------------------------------------------------	-----	-----

光 <small>みつ</small> 秀 <small>ひで</small> と紹 <small>しょう</small> 巴 <small>は</small>	………	四四六
----------------------------------------------------------------------------------	-----	-----

人 <small>ひと</small> 生 <small>なま</small> 五 <small>ご</small> 十 <small>じゅう</small>	………	四五九
---------------------------------------------------------------------------------	-----	-----

東 <small>とう</small> 京 <small>きやう</small>	………	四六八
------------------------------------------	-----	-----

クリスマスとお正月 <small>おとしげ</small>	………	四七一
-------------------------------	-----	-----

追 <small>お</small> 憶 <small>おぼ</small> 記 <small>き</small>	………	四七五
-----------------------------------------------------------	-----	-----

影 <small>かげ</small>	………	四八〇
---------------------	-----	-----

泉 <small>いづみ</small> のほとり	………	四八三
---------------------------	-----	-----

わが文 <small>ぶん</small> 學 <small>がく</small> 小 <small>せう</small> 觀 <small>くわん</small>	………	四八六
------------------------------------------------------------------------------------	-----	-----

ダンテについて	………	四八九
---------	-----	-----

(附) 隨筆

跡	………	四九九
---	-----	-----

年譜	………	五〇〇
----	-----	-----

The Imperial Hotel
of Tokyo

自作を讀直して回顧するは、人間は、
少くも文學藝術の方面では、**進歩**
發展は甚だ遅々たるもので、**修養**
の**効果**の微弱であることが**察**せら
れる。自分まつて感^じるばかりでは
他の作家まつてもさう感^ぜ
らぬことはない。

正宗白鳥

塵 埃

「原稿出切り」と二面の編輯者は叫んで、兩手を伸し息を吐き、やがてゆらりゆらりと、ストロップの側へ寄つた。炎々たる火焰の悪どく響くらしいストロップを煙で取巻いて、破れ椅子に坐してゐるもの、外套のまゝで立つてゐるもの。議會の問題や情夫殺しの消息、明日の雑報の註釋説明批評で賑つてゐる。

「築島君、その女は美人かね」編輯の岸上が一座の中へ割り込んで間を發した。

「實際いゝ女ですよ、青さめて沈んでる所は可憐です、僕はあんな女になら殺されても遺憾なしですね、裁判官たるもの宜しく刑一等を減ずべしだ」三面の外勤築島は、煤けた顔に愛嬌笑ひをして表情的に云ふ。

「そんなのいゝ男は、殺されたくても、女の方々御免蒙るさ」

「先づ何であらうと、僕は天命を保つて、十分に面白く日を送りたい、いくら色男になつても、出刃庖丁ですばりとやられちゃ駄目だからね」硬派の大澤が立ちかゝつた。

「安心し給へ、見渡したところ、一座中そんな心配のありさうな人はいないから。まあお互ひに銀座のほこりを毎日吸つて、ほこりの中の黴菌に生血が吸はれつちまふまで生きてゐるさ、つまり大壽を保つ者は濟し崩しに枯れて行くんだよ。しかしね、稚い木が風に折られてゐるのを見ると、多少風情があるが、蟲に喰はれた枯木を見ると淺間しくなる。こんな枯木の人間が到る處にあるぢやないか」

「岸上流の哲學か」と大澤は時計を見て、縁の切げた山高を被り、「どりや 枯木伯大枝の駄法螺を聞きに行かうか」と、戸口へ行つた。

「枯木でも風が當りや鳴るんだ、大枝なんか、つまり悲鳴を揚げてゐるのさ」

一座はそれ／＼自分の席へ歸つて、編輯局は暫らく静かになつた。予は北側の机で、窓硝子の壞れから吹き込む鋭い風に、春筋を揉まれながら、小野道吉君と差向ひで、校正に従事して局外から編輯の光景を窺つてゐる。南米遠征の企てで破れてより、何か有望の事業に取り

かゝる迄の糊口のためにと、或人の周旋でこの社の校正掛となつたのだが、何時の間にかやら、もう三ヶ月になつた。こんな下らない仕事を男が勤めてゐて溜るものかと思ひながら、詮方なさいの一日逃れで、撼天動地の抱負を胸裡に潛め、鐵啞鈴で鍛へた手に禿筆を握つて、死灰の文字をほじくつてゐるのだ。で、校正刷の堆積が先づ片付くと、予は机に眩を突いて、外ながら外交記者の壯語澤山の太平樂に耳を傾け、あの人は、毎日内閣や議會に出入し、天下の名士と席を同じうして語り、酒酌みかはして懇談する身でありながら、何故立身榮達之道を開かず、ストロップで炙つた食パンを食つて、鬢髮徒らに白線を加ふるに至つたのであらう。明けて二十六となるべき予は、社中最も年少の紐であつて、今こそ破れ布子で髪蓬々としてゐるが、明年を思ひ、明後年を考へれば、想像の絲は己れを中心に、幾百の豊かたる繪畫や小説を織り出す、艶麗な景も浮べば、勇壯な潮も湧く。今二三日で四十歳になる、五十歳になると云ひながら、腰辨の身を衰れとも感ぜず、無駄話に笑ひ興じてゐる彼の人々の氣が知れぬ。予は若しも四十幾歳まで、この籐椅子の網が尻ですり切れるまで、この渦巻く編輯局の塵埃を吸

はねばならぬと、天命の定まつてゐるとすれば、未練はない、今日此處で舌を嚙んで死んで見せる。食パンの味は一度で澤山だ、三百六十五日晝の辨當にして味ふ必要はあるまい。自分の一生が食パンだとすれば、二三年経験すれば足つてゐる、何も五十迄も六十迄も食パン生涯を續けるにも及ぶまい。

かく思ひながら小野君を見ると、小野君は雁首のへこんだ眞鍮の煙管で臭い煙草を吸ひながら、社内の際ぎも耳に入らぬやうに、ぼんやり窓を眺めてゐる。まだ染々話もせぬが、二頭が胡麻麴になるまで三十幾年この社に勤務してゐるので、この社創立以來社で育ち社で老いた三人の一人であるさうだ。

「どうです、小野さん、今夜はかねての約束を實行して、何處かで一杯やらうぢやありませんか」と予は小聲で云つた。今日は月給日なれば、どうせ一杯やらすにはゐられぬので、一人よりは二人の方が興が多いから、仲間に引込まうとした。小野君はにやり／＼笑つて、暫らく考へてゐるが、「さうですなえ、一度だけお附合しませうか、何處か安直な處で」と、やうやく同意らしい返事をする。

やがて編組員は一人減り二人減り、六時にな

ると、夜勤の津崎が懐手で、のそり／＼と入つて来て、肥満な呑氣な顔を電氣の光にさらし、けた／＼ましく喫をして、「畜生、風を引きさうだぞ」と云ひながら、袂から瓶詰を出して、「今夜は一人で忘年会だ、給仕、鯛でも買つて来て呉れ」

「又電報を間違へて呪まれんやうにし給へ」と、岸上は歸り支度で二版の大刷を見ながら云つた。

「なあに勤める所は此度勤めるさ、これでもね、雪が降らうが、風が吹かうが、子の刻までは關所を預かつて、勤務無二の僕だからこそ、忝けなくも年末賞與大枚十圓を頂戴したのぢやないか、爲すべきものは忠義だね」と笑ひながらいつたが、急に情氣で、「しかしね、岸上君、今年に僕もつく／＼歳晚の感を起したよ」

「さうか、君の感懐なら、先づ冷酒の飲むべからざる所以か、前借の憤むべき所以ぐらゐだらう」

「いや僕は眞面目に感じたのだ。もう夜勤も二年だが、得た所は、體量が一貫目ばかり衰へて近眼が數度を加へた位だ。實は今日晝寝から起きて考へたね、十兩の恩賜は有難いが、今年になつて、風邪に罹ること七度、下痢をす

ること三度だよ、何のことはない、肉を殺ぎ血を絞つた結果だと思へば、あの僅かな金に恨がある」

「でも君は肥つてるから、自分で自分の身を食つても食ひでがすらあ、は、は、岸上は靴の音高く階子段を駆け下つた。津崎は今日は珍らしく、不平を並べたい風で、校正の席へ来て、競くちやの大刷をのぼし、目を擧めて點檢せる小野君の側へ立ち、

「小野さん、もう四五日しかありませんね」

「さうですなえ、又一つ歳を取りますよ」

「小野さんは月日を超越してゐるから羨ましい、僕も去年までは自分の歳を忘れてゐたんだが、この暮は妙に氣になる」

津崎といふ男、常に給仕を相手に、シャツ一枚になつて相撲を取り、或は冷酒を呷つて都々／＼を唄つたりするので、社中第一の氣樂者と思つてゐるのに、今夜は魔がさしたやうに哀れつばいことを云ふのを、予は不思議がつてゐた。

「なあに歳を取るのが氣になる間が結構ですあ」

小野君は氣のない調子であつたが、役目を済ますと、予を促して、早速社を退いて、銀座の賑かな通へ出た。星は氷のやうに燦いて、風

はなくとも、皮膚の隙間に觸れる空氣は針のやうだが、街上は暮の忙しさを集めて活氣に満ちてゐる。で、小野君が垢染みた襟巻に首を埋めて、元氣なくしよんぼりと立つてゐるのは、如何にも見すばらしく、場所違ひの氣味がする。予は福神漬を買つて、「何處へ行かう」と訊いたが、小野君は頻りに「安直の處」を繰返すのみである。予は京橋附近で飲食したことはない。予は京橋へ行くので、嵐か大雪でもなければ當てこの文明の恩澤に浴したことはない。

本郷三丁目の停留場から一町計りして、色の褪せた細暖簾に「蛇の目鮎」と白く染め出した家がある。狭くはあり、綺麗でもないが、予が自炊の面倒な時に駆け込む、筋向ひの細暖簾に比べれば疊に坐るだけでも勝つてゐる。殊に此處のみは、滅多に學生に犯されないのが有難い。

本郷一面西洋料理といひ、ピヤホールといひ、大學や高等學校の學生が、月末に郵便局から引出した金で、贅をやる處のみだが、此處は暖簾

の汚れてゐるお蔭か、お客は大抵予等と同類で、塵埃の中から搜し出した金を使ふのだ。

予は火鉢を真中に、小野君と差向ひで坐つて、獨斷で、かき卵、ヌタ、甘蔗などを命じた。小野君は乾からびた手の甲を火鉢の上でこすつてゐるが、食パン生涯の結果か、顔に汁氣がなく、目はどんよりして、何處を見てゐるのか分らない。

「僕にはまだ分りませんが、新聞の仕事も思つた程いゝものでもありませんね」と、予は黙つてゐるのも氣が詰るから、強ひて話の緒を開いた。

「さうですとも、何をやつてもねえ」と、小野君も言譯丈の返事をして、氣乗りがしない。又二人は黙つてゐる。外は俾の掛聲、下駄の音、威勢よく叫ぶ聲、非常の騒ぎであるが、小野君は社に居ると同じく、四面の騒ぎは耳に入らぬやうで、煙草すら吸はない。神經は無くなつたのであらうか感覺は消滅したのであらうか。これではパンとピフテキと、酒と茶との區別もないのであらう、二十年も坐らされたきり、一つ處にぢつとしてゐるのも無理はない。生れて以來、席は厭だ、絹蒲團に坐りたいと、假初にも思つたことはないと思える。

「でも貴方はよく長く社に辛抱してゐますね」

「へー、まあ仕方ありませんのさ」

女中が霜脹れの手で、膳を突き付けるやうに並べて、銚子からは湯氣が立つてゐる。予が満ちたといふのを、小野君は一口に飲み干した。流石にこれにまで無神經ではないと見え、急に人相が變つて来る。二杯三杯と、予もいゝ氣持になつたが、小野君は木彫の像に魂が入つたやうに、筋肉がゆるやかに動き出した。

「貴方は随分いけるやうですね」

「まあ好きな方ですよ、矢張り酒といふ奴あ甘いもんだ」と、餘瀝を舐めて、疊の上に置いた杯を眺め、背を丸くしてぐつたりしてゐる。

「そりや結構だ、私などは酒がそんなに甘いつていふ譯ぢやないんだが、獨り身で、外に樂みもないから、仕方なしに飲むんです」

「しかし仕方なしにでも飲める方が、呑みたくても飲めんより結構でさあ、はー、いや、全然貴方が羨ましい」

「僕が羨ましいつて云ふんですか」

「私は悪い癖があつてね、酒を飲むと、若い人が羨ましくなつたり、自分の身が衰れつぽくなつて仕様がないうんですよ、平生は何の氣なしに聞いたり見たりしたことが、急にむら／＼と思

出されるんでしてな」

「さうですか、ぢや一つその思出した所を承
りたいもんだ」

予はこの木像が何を思つてると、一方なら
ず面白くなつて、矢鱈にお酌をした。

「なあに私達の思つてゐることはね、皆んな下らな
いこととさあ、よく原稿にある文句だが、碌々と
して老いるつていふのは先づ私達の事とせう、

一體碌々といふ文字は、先生方はどんな意味で
遣つてるんか知りませんがね、私は『碌々』の中
にはいろんなつらい思ひが打込まれてるんだと

獨り定めにしてるんです、碌々として老いるつ
て、決して春氣にぼんやりして老いるんぢやな
い」と、ぐたりと垂れてる首を振つたが、急に反

身になつて、「はゝゝゝゝゝゝ、まあ人間は若い間
若い間、さ、差上げませう」と、聲も鬨も持つて、

今迄の小野君の喉から出たとは思へない。

「貴方は馬鹿に長くお勤めなすつたんだから、
新聞生活はよく御存じとせう、これで精勤すれ
ば有望なものですかね」

「さあ、それですよ、全體世の中に職務を忠實
に盡してりや、それで自然に立身するつていふ
ことはあるんですかね」

「無論あるとせう、又さうなくちやならん筈だ、

僕はまだ世間の經驗に乏しいけれど、よく雜誌
なんかの成功談に出てるぢやありませんか」

「はゝゝゝ、雜誌や新聞に虚言がないものならば
ねえ、いや活字の誤植よりや、書く人が腹の
中の誤植を正す方がいゝのさ」

「何しろ校正掛は張合のない仕事だ、僕も早く
どうかしなくちや」

「さ、私も昔は度々さう思ひましたがね、思
つてゐる間に、ずん／＼月日は立つてしまふ、し

かし、まだどうかしようと思つてゐる間は頼も
しいが、私達はどうかなるだらうで目を送るん
ですよ」

「だがその方が氣樂でいゝかも知れん」

「まあね、初めの間は波の中でぼちや／＼やつ
てまさあ、それが次第に大きな波が幾度も幾度
も押かぶせて來りや、どうせ叶はないから勝手
にしると、流され放題に目を限るやうになりま

す、社でも、随分波が立つんですが、私達のや
うに扱手の切れない者は、其度にぎよつとして、
手足が萎けて了ふ。萎けた擧句が碌々として老
いるんですよ」

窪んだ目縁がほんのりと赤くなつて、眠つて
ゐた目が輝く。

それから暫らくは無言で、着をつまき杯を

干してゐた。紺暖簾が寒い風にゆらめいては、
隙間から人影が絶えずちらつく。室内には自分
等の外に、片隅に外套を着て烏打帽を被つたま
ま、風呂敷包を側に置いて、忙しきうに飯を食
つてゐる男があつたが、箸を置くくと、直ぐ勘定
を濟ませて、目をぎよろつかせ、あたふたと出
て行つた。

予は勢のよい血汐が全身に漲つて壓へ切れ
ぬやうで、處もかまはず「玉郎酒酣」を歌ふ。

小野君はくづれかゝつた膝に兩手をくの字な
りに突いて、謠曲を低い聲で誦ふ。節まはしが
友人ぶつてゐる。

「貴方は謠曲を稽古したのですか」と、予は驚
いた。

「四五年前に一寸やつたことがありますよ」

「綿々として餘裕ありますね、貴方にそんな
風流の嗜みがあるうとは豫想外だ」

「なあに風流だなんて、そんな氣樂な量見で
始めたんぢやないのですよ、私にやね、津崎君
のやうに大びらで不平を云ふ元氣はなし、さう
かつて、外の人のいやなことは自分にもいやだ
し、どうかして鬱憤を晴らして、苦勞を忘れよ
うと思つてね、會計の竹山君の後へ喰付いて、
素人謠曲の組へ入つたんですよ、長屋で謠曲な

「ちややお能も見にお出でせうね」
「どう致して、お能拜見どころの騒ぎですか、まあ聞いて下さい」と小野君は居住ひを直して、「素人組の連中は、今月は梅若、来月は寶生と、見て廻つて色んな批評があります、私はそんな眞似は出来なから、まあ『能樂』つていふ雑誌を社から貰つて、それを讀むのがせめてもの慰めだつたんでさあ。所がその雑誌さへ社に没収されることになつて、私の手には落ちぬやうになつたのです。それが社の規則だから仕方がない、社の方ぢや屑屋へ賣つても、一銭か二銭だらうが、私に取つちや、大變な樂みで、月々心待ちにしたんですがね。朝に一城を奪はれ、夕に一國を奪はる、拙い警だが、弱者はますます權力を削がれてしまふんだ。そこで私あ、すつかり斷念しました、謠曲も止めて、夕食でも濟むと茶を飲んで、ころりと横になつて、天井の蜘蛛の巣でも見てるんです」

平生表情に缺けてる小野君の顔も、憂色を帯びて来る。
「だつて雑誌一冊位、譯を云へば呉れんこともないでせう」

「いや、それを主張する丈の元氣があればいいんですがね。何時か、物價は高くなる、子供は殖える、困り切つた擧句、五重の塔から飛下りる氣になつて増給を願ひ出たんです、するとい今ので不服ならお止めになつても差支へはないと嚴命が下るんです、丸で雷に打たれた氣でさあ、つまり私のやうな無能な者は、社でも必要でなければ、世間にだつて不用な者だ。生きてる丈が有難いお慈悲だと思ひ返してゐるんですよ」

「ハムムムと凄く笑つて、「や、斯うしちやゐられない。子供に春着一枚も造つてやらないで、親爺が酒を飲んでもゐられまい、さ、歸りませう」と、よろ／＼と立ちかゝつた。
予は期定を引受けて、外へ出た。小野君は「濟みませんなあ」と數十度も云つて予に別れてとぼ／＼と小石川の方へ行く。予は暫らくその後、姿を見送つたが、小野君は荷車にぶつつかつて、頻りに詈をしてゐた。
その翌日、出社すると、小野君は元の石地藏で、何處を風が吹いてるか、冷然としてゐる。築島や大澤は相變らず、パンを嚙つて氣焔を吐いてゐる。予も亦一日を校正に過ぎねばならぬ。己れには將來があると、心で慰めながら。

私は「評論」など執筆しながら、刻々に自己の心に浮ぶ思ひをそのまゝに書流すことの困難にたび／＼氣づいてゐる。私は政治についてはさして興味を有してゐないから、自己の政治觀を存分に發表するのを憚る恐れはないが、文學藝術や、道徳や、その他人生存上のいろいろ／＼な問題について、自己の所感を思ふ存分に吐出すことをいつも躊躇してゐる。

言論の絶對的自由はどんな國でもどんな社會でも許されぬに極つてゐるが、傍から妨害されなくつても、當人自身が周圍と妥協し讓歩すべく餘儀なくされる。赤裸々で銀座通りを歩くことは出来ない。他の評論家諸氏はさういふことを全く感じないのであらうか。爲政者の壓迫のために自由に言論し得られない憾みがあるだけで、自己自らおのれの言論を束縛して、直截におのが思ひを云ひ切れないと氣づくことがないのであらうか……私は今度も時評の筆を動かしながら、本當の「私評論」の六ヶしきをつく／＼感じた。

(「文藝評論」の断片語より)

玉突屋

「二本歸り三つ」と、ボーイは蟲の喚つた出つ齒を出して大聲で叫んだ。彼れは薄い座蒲團の上へ几帳面に坐つて、兩方の袖を掻き合せてゐる。年齢は十五六で、顔は青くて脹れて、髪の毛は薄い。

背廣を着たでつぶり肥つた男は、臺にすり寄つて身を屈め、鳥差しが鳥を狙ふやうな態度で、キューを突出した。

「三つ」と、ボーイは袖口から細い棒を出して、ゲーム盤を動かし、横を向いて欠伸をした。

向うの一臺は突手もなく、四つの玉が倦しげに片隅に抱き合つてゐて、瓦斯の光は鈍いが、手前の一臺は明るい光の下に、紅白の玉が追ひつ追はれつ縦横無盡にころがつてゐる。ストーブを後にキューを逆に出いて、帯を緩くだらしないくしたまゝ立つてる角帽の青年は「又やられさうだな」と呟いて、相手の突振を見てゐたが、急に後を顧みて、「中原、後で君ともう一度やらう」と力んで云つた。柱にもたれてワツ

フルを掴んでゐた中原は、時計を見て、「もう十二時ぢやないか、明日にしよう」と落着いた聲で云ふ。

「いや、明日は芝へ行つて、あの話を定めて來なくちやならん」

「なに、芝の方は急がなくてもいいさ」

「だつて早く定めなければ氣になつてならん、相手が愚圖だから」

「急勝ちだね」と、中原はゲーム盤を見て、「栗山さん、今日は全勝ですわね」

「へムム」と、栗山はキューを扱いてゐたが、

コツツと音がして、手玉は外れたので、「こりやどうした」と、禿頭をつりりと掻いて、厭な笑ひをして、ストーブの側へ来た。

「さあ一キューで取り切るか」と、角帽は勢よく立上り、チヨークをギシ／＼付けながら玉臺を見て、チエツと舌打して「厭な玉だね」と、首を二三度捻り、「かう行つてかう來るか」と、臺の上に乗り上つて、邪慳にキューを出した。兵

児帯がだらりと垂れる。

「二つ」と、氣拔けのした聲でボーイが呼ぶ。「おい五だぜ、確かり見とれ、ゲーム取りならゲーム取りらしくするんだぜ」と横目でじろりとボーイを見た。

「五つ」とボーイは數へ直して、目をぱつちり開けたが、次第に上目蓋が垂れて來る。生欠伸が喉を突いて來るのを漸く噛み殺したが、涙が目に浮ぶ。

角帽は眉を顰め、口を捻り、首を動かし、襟を寬くボタンの取れたシャツの廣く出てるのも關はず、熱心に突いてゐる。栗山は葉巻の先を爪でつまみながら、「玉は今時分からよく突ける、不思議なものだ、世間がしんとして來るとキューも湧えて來ると、ストーブに顔がほてつてゐる。

「ぢや、今夜は徹夜して突きますか」と、角帽はクシヨンの方向を目で計つてゐる。ボーイは氣遣はしきうに栗山の顔を見てゐたが、栗山は

「へムム、徹夜も面白いな、明日は日曜だし」と、悪くすると徹夜案が成立しきうなので、幽かに溜息をついた。で、坐り直して、足の痺れを撫り、ぺこ／＼の腹に力を入れ、「二つ」「三つ」と付元氣で叫んだが、頭は次第に下つてぼろつとすると、と、身體が地べたからすゝくと

引上げられるやうな氣になり、そのまゝ遠い處へ持つて行かれさうになつたが、ガチャツと音がしたので目を細く開けて、「三つ」と夢心地で叫んだ。十二時が打つた。

栗山は火の熱で汗ばんだ手に白粉を振りかけ、立變つてキューを執り、「早いものだ、もう十二時だ、家に居りや、とても今時分まで起きてらりやしない」

「中原昨夜の今時分はどうだい」と、角帽は意味ありげにや／＼と笑つてゐる。「フ、ン」と、中原はコークスを指先で抓んで、ストーブへ投げ込み、「お蔭で今日は二時頃まで寝てしまつた」

「起きては玉を突き、飲んちや寝てりや、それで春は來るんだが、どうもかう玉突屋にばかり日參しても困るよ」

「いゝぢやないか、學問で喰へなきやキューボーイになるさ、その方が洒落てるぜ、フツ／＼フツ」

「それも呑氣でいゝね、しかし何時までもこんなことをして遊んでもゐられまいよ」
「良心が咎めるか、君やそんな事をちよい／＼考へ出すから酒も玉も上達しないんだよ」
「さうだね、少くとも君を對て負かす程にな

らなくちや癢に觸らあゝと、ワツフルの残りをむしや／＼平らげた。

「勝負有」とボーイは三人の顔を順々に見たが、北風が玻璃窓に吹きつけるので、音を聞いただけで首をすくめて、兩手を前垂の下へ入れて背を丸くした。

「さあ、も一度」と、角帽は目を光らせて、玉を並べる。
ボーイは根めしげな顔付をして、「栗山さん、も一ゲーム如何です」と哀れな聲で云つた。
「もう廻いから止さうか」と、栗山は迷つてゐる。

「一時前か」と、ボーイは獨言のやうに云つたが、角帽は帯を締め直して威勢よく、十分もあればゲームになりますよ」と促すので、栗山は時計を見て、「今二十分だね、ぢや、やるかな」とキューを執つて、「どうです、十位下げますかね」

「なあに大丈夫、今度負けたら玉はお止めだ」
「いや君の止める／＼も當てにやならんよ」と、中原は腰を掛けたまゝ、足拍子を取つてゐる。
ボーイはゲーム盤を直して、「二つ」「三つ」「五つ」と數へ出したが、少し當りが途切れると、前

に屈みさうになる。眠りをまぎらしたくも、軍歌も歌へず、足も動かせず、手も動かぬ。で、證方なしに齒を喰ひしぼり目を見詰めて心を凝らしてゐると、かつとした目眩しい光が前に擴がつて、青い臺と白い玉と紅い玉とが、浪の上にでも漂うてゐるかの如く見える。しかし無意識に「二つ」「三つ」と叫んでゐたが、やがて口も目も絞んで、心がとろ／＼になり、自分の故郷で弟を連れて綿眼井捕りに行つてる氣になつた。

枝の上に緑の羽を重ね合つて、一處にピー／＼鳴いてゐる。で、鶴竿を持つて近寄らうとしたが、身體が縛られてるやうで近づけぬ。矢鱈に藻掻いてると、ズドンと音がして、鳥は飛んでしまつた。
「おい吉公」と角帽は怒鳴つて、「居睡りなんかしないでゲームを取れ、今までよく數へなかつたんだらう、聲がしなかつた」
「いえ、數へてゐたんです」と、出鱈目に數を取つて、「十八ゲーム」
「ふん、いよ／＼取切るか」と、角帽はにこにこして臺を廻つてゐる。
「さあ、それが濟んだら、おれが最後の一撃を與へて歸ることにしよう、もうそろ／＼眠くなつた」と、中原は欠伸をした。

夜番の拍子木が地の底からのやうに幽かに
聞える。

ボーイは百年も千年も「二つ」「三つ」と繰返し繰返し叫ばねば、打倒れて熟眠は出来ぬ運を背負つてやうに感じて、涙聲で「當りゲーム」

淡島寒月氏

「中央公論」の六月號に、生方敏郎氏と内田魯庵氏とが、この頃逝去した淡島寒月氏について語つてゐる。寒月といふ人は明治最初の西鶴本の蒐集家で、紅葉も露伴も氏の藏書を借覽して、元祿文學を學んだのだといふことは、私も學生時代から知つてゐたが、氏に關して、その他のことは何も知らなかつた。まだ生き

てゐるのかしら、もう疾づくに死んでゐるのではないかと思つたこともあつた。

それで、私は今度、生方内田兩氏の追憶記によつて、はじめ趣味の人淡島寒月の一生についていくらか知れることを得たのだが、私がかつて白く感じたのは、七十近くまでの長い生涯を、殆んど何等の金取仕事をしないで過す人が、今日の時世にでも、まだ随分存在してゐるといふことである。江戸時代には、父祖の遺産などを手頼りにして、貧弱な風流を樂んで一生を過した人が多かつた。(それは壓制政治の下で、自由にして己の天分を發揮し得なかつたでもあつたらうが) いくらか昔の世でも、白癡か病人でない限りは、何もしないで日を送る譯には行かないから、狂歌や俳諧を學ぶとか、書畫をいぢるとか、和蘭の骨董でも集めるとか、何かの道樂をはじめなければならなかつたのであらう。酒色の慾に沈溺するよりも上品で高雅でいゝのであらうが、私は江戸時代の風流人に對しては、ちつとも敬意が寄せられない。

私はトルストイのことを書いた後だつたので、淡島寒月とトルストイの二人を對照させて考へた。トルストイは豊富なる資産を有し

てゐるに關はらず、自ら好んで、焦慮煩悶して、八十餘年の間悠然として南山を望んだことは一度もなかつた。「カリフのアブツラマンは、その一生の中に、十四日の幸福な日があつたと云ふが、私には吃度それだけの日もなかつたに違ひない」と、彼れはゴルキ、とチエホフとに向つて云つてゐる。

寒月のやうな一生を過す人もあり、トルストイのやうに一生を過す人もある。キリストをもマリアをも閑餘のオモチヤとして扱つてゐた江戸の通人の目には、トルストイの如きは、血迷つた新五左衛門で、話せない奴として映つたであらう。私などは、二人のうちのことちらのやうにして晩年を過したらいゝかと思つたが、どちらにもなれさうでない。

(『文藝評論』より)

何處

(一)

可愛い目元をほんのり酒に染めた女が高くさし掛けた傘の下に入つて、菅沼健次は敷石傳ひに門口へ来た。

「ちや明後日、峠度ですよ」と、女中は笑顔で覗き込み、艶氣を含んだ低い聲で云つた。

「むゝん」と健次は女の顔をも見ず、引たくるやうに傘を取つて、さつさと急ぎ足で歩き出したが、五六間も歩んで我知らず振り返ると、「鳥」と行書で書いた濕つた軒燈の下に彼女がぼんやり立つてゐる。

健次は何の譯もなく微笑する。女も微笑して、胸を突出して會釋する。

それも一瞬間で、健次は傘を肩にかけ、側目も振らず上野の廣小路へ出て、道を山下の方へ取る。

昨日の天長節に降り通した雨は、今日も一日経間なく、濕つぽい夜風が冷たく顔に吹き當る。往來の人々は皆傘を斜めに膝を曲げて、ちよこ

ちよこと小股に急いでゐる。健次も膝から下はびしょ濡れになつたが、敢てそれを氣に留めるでもなく、只いゝ氣持で、口の内で小唄が何か咳いて、沈んだ空へ酒臭い息を吐きながら、根岸の近くまで来ると、横合から底の深い大きな蝙蝠傘が、不意に健次の蛇の目によつつかる。チエツと舌打して避けようとする機會に、蝙蝠傘の男が聲をかけて、

「やあ君」と立留つた。健次は少し驚いて、

「やあ君か、何處へ行つた」

「君の家さ、今夜は雨だから、峠度ゐるだらうと思つたのに、何處を浮れてた、いゝ顔つきをしてるぢやないか」

「そりや氣の毒だつたね、これから僕の家へ行くからぢやないか」

「いや、もう遅いからよさう」と、蝙蝠傘の男は長い身體を屈めて、下駄屋の時計をのぞいて見て、「もう彼此九時だね」と一寸考へ、「實は君に少しお頼みがあるんだが……此處で話して

もいゝが、どうだ其邊の珈琲店へでも寄つて呉れんか」と、首をまはして周圍を捜す。

「ぢや、さうしよう、この先きにいゝ家がある」と、健次は先きに立つて、半町ばかり泥濘の中を通つて、擦玻璃に一品亭とある小さい西洋料理店へ行つた。

客は一人もゐない。白布で蔽つたテーブルの上に火鉢を置いて、籐椅子が四五脚周圍に不秩序に置かれてある。健次は火鉢の火を掻き廻して、

「君は馬鹿に寒さうぢやないか、さあ當り給へ」と云つて、巻煙草に火を付けて、反身で椅子に寄つかゝり、頻りに瞬をしながら仰向いて煙草を吸ふ。

今迄板の間に腰掛け、左右の袖を掻き合はせて居眠りをしてゐた小娘が、高い足駄を引摺つて、

「お誂へは」と寝呆聲で聞く。

「寒いから日本酒がいゝだらう、料理は何がいゝ、ピフテキにでもするかと、骨太い手を火鉢の上に翳しほかんとしてゐる相手の顔を見て、黙諾を得て、健次は小娘に命じた。

この丈高き男は織田當吉と云ひ、健次が昔

の同窓の友で、今は私立學校に英語の教師を勤め、傍ら翻譯などをしてゐる。年齢は健次より僅か一つ上だが、健次の小柄で若く見えるのに反して、格段に老けて見える。丈の高きのみならず、それに釣合ふ程に肉付きもよく、見た所魁偉なる人物であるが、何處となく身體にゆるみがある。鬚氣が足らぬ。顔は平たく目は細く、耳は福々と垂れてゐる。

「君は相變らず氣樂さうだね、殊に今日は愉快な顔をしてるぢやないか」と、織田は健次を見て、ゆつたりした聲で云ふ。

「はゝゝ、さう見えるかな、これで二三日打續けだよ、まあ社の方が暇つぶしで、遊ぶ方が本職のやうなものだ、しかし本職となると、遊ぶ方法に苦心する。如何にして遊ぶべきかが、僕の當面の問題である」と、陽氣な聲で、一寸柱田博士の假聲を使ひ、顔に愛嬌を湛へて微笑笑する。

「まあ遊ぶ間は遊ぶがいゝやね、しかし今もね、君の母堂と話して来たんだが、健次も此頃は酒好きになつて困ると云つてたよ、祖父さんのやうにならなきやいゝがと云つてゐられた」

「さうか、僕の母方の祖父は、大酒呑みで終ひには狂人になつて死んだんだからね、それに僕

の顔が次第に祖父に似て来るさうだから、母は心配してるだらう」

「何、さうでもないらしい、只早く嫁を貰ひたいやうな話をしてゐた、僕にもいゝのを見つけて呉れて、本氣で云つてられたよ、親は有難いものだね」

「さうかね」と、健次は嘲るやうに云つて、「君も精々美人を捜して呉れ給へな」

「そんな氣があるんなら周旋しよう、しかし何だよ」と云ひかけた所へ、小娘が銚子を持つて來ると、織田はポカンとして、前の話の緒を忘れてしまひ、健次の矢繼早にさす盃を三四杯引受けた。

「で、君、僕に用事と言つて何だい」と、健次は強い調子で押付けるやうに云ふと、織田は、「何、急な事でもないんだがね」と、前に自分が頼みがある」と云つた癖に、その用談を避けるやうにして、ピフテキの小さい切れをもぐ／＼させながら、顔に響め「非常に堅い」と吹き、暫らく無言の後、「僕も弱つたぜ、親爺の病氣がますますよくないんで、入院させなくちゃならんだ、まだ確定はしないが、どうも胃痛らしい」

と、フォークとナイフを持つたまゝ、仰向いて云つたが、顔にも言葉にも弱つてる様子はい

見えず、例の通りポカンとしてゐる。

「さうかい、そりや困つたね」と、健次は少しも手を付けぬ皿を見詰めたなりで、氣のない聲で云ひ、心でも左程同情してゐる風はない。織田は相手に頓着なく、悠長な聲で、

「妻は身が重いし、母はあの通りの無精者で、一日煙草ばかり吸つてて役に立たず、妹は學校へ行つたきりで、遅くまで歸つて来んから、何もかも僕一人でやらなくちゃならんのでね、本當に困るよ、それでこの四五日は學校も缺勤ばかりしてゐる」

「ぢや妹を學校へやつて、君は缺勤して家の世話をしてるんだね、しかし病人の看護なんか君の適任ぢやないね」

「だつて仕方がないさ、どうも一家の主人となると面倒なものだ、今に君も結婚すると困るぜ、何だのかだのと、そりや五月蠅くつてね、それに子供なんか出来なきやいゝんだが」

「そいつあ當然だから仕方がないさ、しかし僕だつたら、家が五月蠅けりや一日外へ出てゐらあ、女房の産の世話から借金と言譯まで亭主がしなくつたつていゝ」

「さうもいかんよ、君、それに僕の月給が安いから、平生だつて内職をしなくちゃ引足らんの

に、病人が出來ちや災難だ、だから此頃は酒どころぢやない、煙草も止めてしまつた」と、少し萎れた。その様子を見ると、健次は急に不慣れになり、
「だが君は感心だよ、家庭のために犠牲になるから」と云つて、後を見て、「もう一本」と叫んだ。

「僕はもういゝよ、遅くなると家で心配するから、そろ／＼歸らなくちや」
「まあいゝさ、久振りだから、も少し話をしようぢやないか」と、健次は少しも手を付けぬ皿を押しつけ、煙草を銜へたまゝ腕組して、半ば目を閉ぢ、降りしきる雨の音やら、幽かに響く俵の掛聲やら、前を通つての按摩の震へ聲に耳を傾け、森とした淋しい空氣に心が吸込まれ、

快活な色も顔から失せかゝつて來たが、コトンと鈍子の音がするので、振返つてパツと目を開けた。悪夢から醒めたやうに、鋭く四圍を見まはし、やがて眉をびりゝとさせ、二本の指で熱さうに鈍子の首を持つて、
「さあ受け給へ」と、無造作に相手の盃へどぶどぶと注ぎ、「そして肝心の用事は何だい」と問ふと、織田は言憎さうに暫らく口籠り、
「少し無理なお願ひだがね」と、盃を持つては

置き／＼して、「又原稿の事さ」と、氣の毒さうに云ふ。
「うん原稿の周旋か、僕が引受けてどうかしよう」と、健次は快く首づく。織田はやうやく安心したらしく、甘さうに盃を呑み干して健次に差し、

「實際忙しい間に書いたので、よくはなからうが、格別苦心して、一機軸を出したつもりだから、まあ讀んで呉れ給へ、物はゴルキーの小説だ」
「さうか、いゝだらう」と、健次は軽く答へて、物が何であれ、譯筆が何であれ、そんな事は身を入れて聞かうともせぬ。

「それからね、少し無理だが原稿料を早く貰つて呉れまいか、月初めから一文無しだから、それに……」
と、健次の煙草を一本取つて、指先きで揉みながら、何をか訴へんとする。それと見て健次は頭から打消し、
「よし／＼、それも僕が受合つた、引替へに貰つてやらう」
と話を轉じ、「で、君は此頃箕浦に會つたか」と何時も長々と聞かされる無味の生活談や金

錢論は避けようとする。
「うん昨日見舞ひに來て呉れたがね、會ふと例の通り大きな人生問題を論じてる。讀書も盛にやつてるやうだし、此頃は長い論文も書いてるさうだ、いづれ君の所へでも持込むだらう、しかしね、僕が云ふんだが、箕浦なんかは已惚が過ぎる、人生がどうの宇宙がかうのと、人間が御託を並べるのは、身の程知らずの極だ、獨身で親爺の腰でも嚙つてる間は、そんな事を道樂にしてゐられようがね、家庭でも造つて、一人前の人間になると、そんな事は馬鹿々々しくて問題にもならんさ」

と、多少の活氣を帯びて論ずる。健次は微紅の艶々した頬に靨を見せ、切れの長い目尻に皺を寄せ、
「はゝゝゝ、珍らしく君の名論を聞くね、しかし箕浦はコツ／＼根氣よく學問を聞けてるし、文章も上手になつたぢやないか、感心だよ」
「今に肺病か腸病になるのが落ちだ」と、織田は澄ましてゐる。

「いや博士ぐらゐにやなれらあ」と、健次は皮肉に云つて、「だが箕浦は君の妹に惚れてるよ」と、少し乗出して、聲を低くする。
「馬鹿なことを」と、織田は締りない大口を開

けて、ハッ／＼と笑ふ。

「うんにや惚れてる、君の目にやどうだか、僕には一目瞭然よ」

「さうか知らん」

「さうだとも、それにね君の妹のラブしてる男がある」

「え、本當かい君、虚言だらう、君はよく色んなことを云つて、僕を調戲ふからいかんよ、若し本當なら相手が誰れだか聞かせて呉れ給へ、僕も一家の主人だから、妹の身の上についても責任があるんだもの、間違ひのないやうに警戒しなくちやならん」

「いくら警戒したつて駄目さ、歳頃の女が色氣づくのは當然ぢやないか、で、若し相手が分つたらどうする、妹を柱にでも縛りつけるかい」

「君、そんな馬鹿な真似をするものか、僕は何さ、向うが相當の男だつたら正式の結婚さすし、不相當の男だつたら思ひ切り切らせる」

「成程譯の分つた兄様だ、何處の親だつてそれと同様の事を申します」

「だつて主人の義務としてそれが當然ぢやないか、君ならどうする」

「僕なら放任とかあ」

「馬鹿な、君も箕浦流の空論家だね」

「ふん、僕と箕浦とは一荷にならんぜ、向う様は本をどつさり抱いてるから貫日があらあね」

「君は氣樂な事ばかり云つてるが、僕は何時も確信してる、人間は要するに僕のやうにならぬや虚言だ、遅かれ疾かれ君なども同じ道へ落ちて来るんだ」

健次はぞつと寒氣がして、思はず手を火鉢に握り、織田の顔を見詰め、

「お互ひに君の道連れになつて、テク／＼歩きで、電信柱でも數へて行くんだね、大通りの左側を歩いてりや、自然に日本橋へ出られる」

「君、戲言は止して、今の話の相手は誰れだい、一體向うの男は妹を思つてるんかい」

「さあ、どうだかね、よく知らんよ」

「誰れだらう」と、頬杖ついて、眞面目に考へてゐる。

健次は人差指でテーブルを打ちながら、「先あ左程にも思やせぬ」と小聲で唄つてゐたが、急に何をか感じて、額に皺を寄せ、邪慳に煙草の吸口を噛み出した。

織田は思ひ飽んで面を上げ、「君は不慮に煙草を吸つてる、毒だよ」

「毒だつていゝさ」と、健次は吸殻を吐き出し、

「僕は阿片を吸つて見たくてならん、あれを吸ふと、身體がとろけちやつて、金鶏動草も壽命も入らなくなるさうだ、阿片だ／＼、あれに限る」

と、獨りで合點してゐる。それが戲語とも思はず、眞から感じてゐるやうなので、織田は細い目を丸くして、

「よくそんな下らぬ事を眞面目で考へてゐね、阿片でなくつたつて、快味を感じるものは幾らもあるぢやないか」

「さうかね、僕はこれ程煙草を吸つても、眞に甘いと思つたことは一度もないよ、酒だつてさうだ、ピフテキだつてさうだ、一寸舌の先で甘いと思つても、染々と五體がとろける程快味を感じたことがない。どうも物足らんね、それで何時も思ふんだ、何處か世界の隅つこに最上の珍珠が潜んでるに違ひない、僕はそいつを捜し出すと、何にも代へられんちふぢやないか」

「馬鹿な」と、織田は一口に斥けて、「まだ甘い料理を食はんから、そんな事が云つてられるんだ、櫻木の鳥なんか食べて、甘い物がないなんで廣言する權利はないよ」と、天雞羅鱈梅盛

などの名代の家を敷へ上げ、諍々とその説明をし、「近々長篇を譯して仕舞つたら、藏田屋でも寄るよ」

健次は苦笑して、「何れ御馳走にならうよ」と立上り、「もう十時だ、行かうか」と、勘定を濟ませて外へ出た。雨は稍々小降りになつたが、道は暗く風は冷たく、健次は來る時の元氣に引變へ、傘を兩手で持つてゐる／＼と慄へたが、織田は前と同じく泰然自若、急かす騒がず、長靴を踏占め、電車道へ向ふ。

(二)

健次の家は御行の松を右手に見て、暗闇には危険な道を一町ばかり入つた曲り角にある。土藏付で、狭いながらも庭もあり周囲を高い板塀で取りかこみ、可成りの物持の住宅と見られるが、その實屋根も壞れ柱も傾き、大雨には臺所で傘をささねばならぬ有様。本當なら隅から隅まで大修繕を施さねばならぬので、近所の差配なども見兼ねて、頼まれもせぬに家屋敷を檢分して、「早く手をお入れなさらなくちや御損ですぜ、何なら私がお引受けして、見積りを立てて見ませう」と注意するが、健次の父は、「近々どうかしよう」と云つて、別に心に掛ける風は

ない。健次は早くから、「こんな陰氣な古びた家はうり拂つて、山の手へでも引越した方がよからう」と勧め、母は全然同意して、せめて此家を修繕して他人に貸し、自分達は小ぢんまりした借家に住まつた方が幾らいゝか知れぬ、第一

こんな廣い家にゐては、世間から有福に見られて、何かと取上げられる金高も多くて不經濟ではあるしと説くが、穩かな父もこればかりは頑として聞入れぬ。おれは此家で息を引取るつもりで越して來たのだから、決して他へは移轉せぬ。それに借家は厭だと云ふ。彼れには借家

(三)

住ひは不見識だといふ氣があるのだ。菅沼家は微祿ではあつたが、旗下の家柄、健次の父は十四五の頃、維新の高中に浮沈して、多少の辛苦を嘗めた。その後も生活には惱んで、遂に四國九州の郵便局にも二三年つづ勤め、今は多少榮達して會計検査院に奉職してゐるが、五十五歳の老朽で、地位も安固ではなく、長官のお慈悲の下に脈をつないでゐる。俸給も左程多くはない。それに健次の下に女の子が二人、支出は容易ではないが、彼れはあまりくよくよく病む風はなく、毎晩の晩酌二合に陶然として太平樂を並べ、健次は一人前の男になつたし、娘は二人とも容色はよし、おれは

まだ／＼お墓へ入る心配はなし、これからおれの世界の中だ、健次に嫁を貰つてやり、姉嬢でも片付けたら、おれは第一に役所を止めて隠居をする、恩給も下るし心掛りはないから、うんと好きな事をして遊べるんだが、おれは物見遊山はせん、差詰馬術の稽古がしたいな、全體子供の時から馬が好きで、馬術の達人になるつもりだつたが、世が變つて算盤ばかり持つて來た。しかしこれからやる、自分の慾といつては外に

何もないが、一つ馬だけは買つて見たいと、この老人は馬の話になると夢中になつて來る。先祖に馬術の名人があつたとかで、その秘傳の巻物が桐の箱に入つて、土藏に保存されてゐる。これと一領の甲冑と一口の無銘の刀劍とが一家の寶物、老人の自慢の種だ。冑は疎らに星のついでる古色蒼然たるもので、鎌倉時代の作、刀は國弘の作だらうと云ふ。そして老人は毎年元日は此等の寶物を床の間に飾り、家族を集めて禮拜し、三方ヶ原合戦以來の祖先の武勇を談じ、この冑や刀に籠つてる精神を忘れてはならぬと説き聞かせ、獨り喜んでゐる。

健次は少年時代に此等の武具に興味を感じて、父の留守中竊かに土藏へ忍び込み、漆の割げた鐵櫃を開けて、昔の戦争を連想し、或は

兩腕に力痛を出して胃を持ちまはつて悦しが
つてゐた。殊に刀が大好きで、恐々拔きはな
ち、齒を喰ひ締り腫を据ゑて、その冴えた光を見
詰めては感に打たれることが多い。刀は武士の
魂だとは父からも屢々教へられ、自分でもこ
の家傳の寶刀を見る毎に、義の爲には死を厭は
ぬ、如何なる苦痛をも忍ぶ、辱しめられるれば死
すなどの感じ、その明晃々たる切先から彼れ
の眼に染み込むやうであつた。性質は父とは
餘程違つて痛が強く、母の故郷、彼れの生地た
る丸龜の尋常小學に學んだ頃も、試験の成績が
他に劣ると口惜しくて夜も眠れぬといふ程であ
つたが、東京の學校へ通ふこととなつては、殊
にこの考へがひどい。その爲に學課の復習を勵
むのみならず、身體の訓練をもつとめた。瘦つ
ぼちと嘲られるのも無念である、年嵩の學生に
腕づくで意地められるのもつらいし、腕力を養
ひ筋肉も發達させねばならぬと、寒中シャツ一
枚で木刀を揮つたこともある。力試しだとい
つて二人の妹を箆に入れて擔ひ、引くりかへつ
て傷をつけたこともある、母からは悪戯が過ぎ
ると叱られたが、彼れには悪戯でも慰みでもな
いのだ。幼い心にも自分の脆弱な體質が情な
く、行く先々が案じられてゐたので、外目には

滑稽とも見える體格修養も、自分には最も眞面
目な行爲であつたのだ。しかし生來の體質は變
りやうがない。それで度々母に向つて、
「何故僕をこんな小ぼけな身體に生みつけたん
です—
と詰り、涙をこぼしたときさへあつた。その
癖友達の間へ出ると、「瘦せててもおれは強い
ぞ」と力んで、喧嘩をしかけられて逃げることは
ない。或日も俄鬼大將に鬪られた時、ナイフで
切りつけて、相手を驚かしたこともある。
歳を取るに従つて、戶外遊戯は止めて、勉強
部屋へ閉籠り、課業外の雜書をも涉獵するやうに
なり、最早體質の苦勞はしなくなつた。で、中學
から高等學校と順序を踏んで進んだが、一家の
財政からいふと、それだけでも容易ではなく、と
ても大學を卒業する望みはなかつた。しかるに
健次が他の學生と對等の交際もして、別に見す
ばらしくもなく、文科の英文學を終へることの
出来たのは、一に桂田文學博士の助力に依るの
だ。桂田家と菅沼家とは昔から縁故の深い、上
博士が健次の學才を認めたためである。
大學三年の生活、健次の頭腦は非常の變化を
來した。元法科へ入りたい氣もあつたのを、桂
田との關係から文科と定つたので、入學後も

心は迷ふ。自分の素質から云つても學者で安ん
じてゐられさうぢやない。多量の書物を讀んで
一生を終る、下らないぢやないか、それよりも
政治家にでも實業家にでもなつて、自分の考へ
が具體的に目の前に現はれるを見、生きた人間
生きた事件の動搖起伏に接する方が面白くはな
いかと思ふこともあつたが、さりとて斷じて一
を去つて他に就く氣にもなれぬ。それに課業と
して學が哲學の問題、外國の詩歌小説、新刊の
雜誌雜著、皆過敏な神經を刺激して、妄想は留
め度がない。制服制帽を着け、博士夫人恩賜の
紅梅を散らした水色の風呂敷を抱き、兩手を
ポケットに入れ、大學の裏門から上野を抜け
て、根岸の古屋へ歸る間、彼れは妄想の道を辿
つてゐたのだ。單調の道には飽いてしまつた。
しかし彼れは一度も泣言を云つたことはない。
人生の寂寞とかを文章にして雜誌へ寄稿したこ
ともない。同窓の冥想家からは淺薄と云はれる
程あつて、飛花落葉に對して、深沈な感に耽り、
自然の默示に打たれるでもなく、友人にでも遇
へば、急に沈んだ心も浮立つて、快活に談笑し
聲句百出諧謔雜機。クラススの集會に缺席す
ると、菅沼はどうした」と、衆口一致して遺憾
の聲を發する程であつた。テニスもやる、玉突

もやる、彼れはクラスの快男子として通つてゐた。そして二年目の試験前、制服を囚衣の如く感じ、引脱いで自由の身とならんとしたが、博士夫妻の強硬な反対に會ひ、その時は恩人に背く程の勇氣もなく、ぐづぐづで卒業まで我慢したものの、成績は圖抜けてよくはなく、博士夫妻の期待に背いた。彼れの弱い身體は長年月の學校生活に倦み疲れ、最早席順の高下を争ふの根氣もなく、虚榮心も失せ、他の連中が卒業試験の準備に夜を徹してゐる間に、獨り球戯場にゲームを争ひ、或は牛屋の二階で女中に圍繞されてゐた。櫻木に出入し始めたのも此頃からである。卒業後は博士の推薦で、中學教師となつたが、これは三月ばかりで辭職、今日まで一年あまり雑誌記者を勤めてゐる。

(三)

大抵の家は戸を鎖し、暗闇の森閑とした道を、健次は雑念に煩はされ、俯首いてコツコツ進んでゐる。彼れは七歳で先祖以來のこの都へ歸つてより二十七歳の今まで殆んど一日もこの道を踏まぬことなく、目を贖つても、路次の隅々まで間違へる氣遣ひはない。

そしてこの界限の見る物開く物に飽きくし

てゐる。父は交番の角まで來ると肩の荷が下りるやうな氣がすると云ふが、健次は此處まで歸ると、足が滯つて後へ引かかへしたくなる。彼れは今纏田に別れ、その長靴の重い音の次第に消ゆるを聞きながら、「阿片を呑みたい」を繰返した。他人が甘さうに吸ふのを見て羨ましく、煙草を吸ひ習つたが、自分には左程の甘味もない。阿片々々、自分が内々求めてたものはあれだ、阿片さへ吸へばこの世からなる極樂淨土へ行けるのだ。アルコールランプに點火し、長椅子に身を埋め、長い煙管で匂ひを呼び、沈睡に陥る支那人は、祖先の詩人が夢想した無何有の境に遊んでゐるのだ。阿片を喫ぎに支那へ行く。迦南の樂土は其處にありと思はれる。

教師の職は蓄音器か鸚鵡の役廻りだと感じて、否應なしに辭職し、もつと活氣のあり動きのある役をと志し、現在の職を求めたが、これも此頃は厭で溜らぬ。どうせ長くは續きはしない。いつそ向うから不勉強の爲め免職と來ると、新なる地が開けさうだが、當分そんな運も向いて來さうでない。だから明日は桂田を訪ねて「現代の思潮」とか何とかの問題で、的の字づくめの談話を筆記して來なくちやならん。

雨はしよぼく／＼と飽きもせずに降つてゐる。電燈の輝いてる或別邸の犬は今夜も飽きもせず生命限り吠え立ててゐる。

健次は睡い目をして元氣のない欠伸をした。先々月の初め、殘暑のまだ酷しい時分、西日の當る桂田の書齋で、長々しい文學論、獨逸語やラテン語交りの味のない只六ヶ敷い議論を筆記させられ、浴衣の着流しでありながら、汗に漬つて弱つたことがあつたが、その時下座敷から柔かいピアノの音が洩れ聞え、博士の頑固な言葉を追ひのけては、健次の耳に忍び込み、腸まで盪かさうとした。そして彼れの筆記はい、どろもどろに亂れ、間違へ書誤りの夥しかつたのを、そのまま雑誌に掲げて博士の怒りに觸れたが、あの時ほど博士が怖い顔して激しい言葉を吐いたことはない。で、後々までも健次の耳には、その音楽が染みついて、踏飽いた道を歩んでる時など、耳の底でびん／＼鳴り響いて、心に異様な感じが起る。

ピアノの主の博士夫人も美しい、櫻木のお雪も美しい、纏田の妹も醜くはない、紅葉や緑雨の小説の主人公の如く、女が生命の凡てなら、憧れたり煩悶えたり若い盛りは今時分、さぞ戀に忙しいことであらうが。

「しかし自分は箕浦ぢやない」と、自分の胸に答へた。その聲は他を嘲つた自尊心から出たのであらうが、絶望の詞も交つてゐる。で、彼れは煙草を銜へ袂からマツチ箱を取出したが、マツチは一本もないので、舌打して箱を投げつけ、傘を持直してさつさと歩き出した。目の前には自分の家の軒燈が、今にも消えさうに微かに光つてゐる。

彼れは雨にふやけた藩戸を両手で開け、成るべく音のせぬやうに敷石を傳ひ、玄關の隅へ傘を投げ出すと、母は雨戸を開けて釣ランブを差出し、

「おや衣服がびしよ濡れぢやないか、この冷えるのにそんなに濡れちやつては身體に毒ですよ」

と、氣遣はしさうに健次を見詰めてゐる。

「今日は早く歸る筈でしたが、又友人に誘はれて遅くなりました、明日は屹度早く歸ります」と、言はれぬ前に言譯しながら、足袋を脱いで、爪先で寮所へ歩いて行き、足を濯いだ後、そつと柄杓から口うつしに冷水を呑んだ。臺所には盥を握系、柱を傳つた雨の雫がぼたりぼたり落ちてゐる。

健次は長火鉢の前へ戻つて、着物を脱いで母

の手から捲卷を取り、酒氣の名残で温かい肌にはふはり纏ひ、菊を染め出したハツ橋の略帯を柔かく締めて胡坐を掻き、「皆なもう寝たんですか」と、隣室の父の高軒を聞いてゐる。

「あ、もう二時間も前から寝てらあね、それにお父さんは風邪氣だといつてね、お夕飯が済むと直ぐにお休みさ」と母は戸締りをして火鉢の側へ戻り、「お前、織田さんがお出でだよ、何か用事がおありのやうで、大分待つてゐなすつたがね」

「いや、織田にや途中で會ひました、親爺が病氣だとか云つてた」

「さうだつてねえ、餘程お悪いんだつてねえ」と眉を蹙め、「織田さんも大抵ぢやあるまいよ、稼人はあの方一人で、それで病人なんか出来てはね、……でも感心な人さ、一生懸命に働いてゐなさる」

「何、あの男は他人が思ふ程苦にしちやゐないさ、呑氣な人間ですよ」

「さうでもあるまいよ、厄介者が多いんだから、浮の空ぢやゐられないさ、お前だつて今の間はどんなにしててもよからうがね、もうそろそろ先々の事も考へなければね、お父さんも口ばかりは元氣がよくても、何時までもお役所通ひも

出来まいし、織田さんのやうにお前が家の心棒になつてお呉れでなくちゃ」と、何につけてもお定りの御教訓が始まりかけたので、

「ですがね、お母さん、織田の大木なら心棒にでも大黒柱にでもなるでせうが、私のやうな瘦せつぼちぢやお役に立ちませんよ」と、健次は如何にも無邪氣さうに笑つた。母も釣込まれて青い顔に笑ひを浮べ、

「馬鹿お云ひでない」と云つたが、話は巧く外れて「さう云へばねお前家の胃は大變い、物で世間に類が少いんだとさ、今日古物列賣とかへ出すとね、誰れだか目の利く方が見て、大變褒めてゐなすつたつて、だからお父さんも、あれ程世間へ出すのを厭がつた癖に、今日は歸るとその話ばかりして、大喜びで被入しやるんだよ、賣つたらば大變なお金になるんだらうね、あんな薄汚い胃だけど」

「さうでせう、今は物好きな人間が多いから、……買手があつたら早く賣つたらいいでせう」

「でもね、お父さんは餓死しても、先祖の寶だから人手にや渡さないつて、獨りで力んでるんだから」

「まあお父さんはあれが生命よりも大事なんだからいゝさ」と、欠伸をして、「今にお父さんの

望みが届いて、馬でも買つたら、あの甲や胄を着て刀を差して、この汚い家から手綱を執つて妖怪退治にでも出て行くでせう、さうなるとお父さん萬歳だが、何年先のことかなあ」

老母は險のある目で健次を見て、「お父さんやお前は何かさう呑気なんだらう、私一人にやきもきさせといてさ」と、長煙管をボンと邪慳に叩くので、健次は片膝立てて逃支度をし、

「呑気なものですか、お父さんは馬を買ひたくつて、臆辨當で齟齬してゐるんだし、私だつて、胸に苦勞の絶えたことはありやしない」と、眞面目か戯言か分らぬ云ひやらしをしたが、急に生眞面目になり、「一昨日の晩にね、お母さん、私は小路でお父さんに會つたんですよ、向うでは氣が付かなかつたやうだが、私が後から見ると、あの蝙蝠傘を突いて、馬丁と何だか話をしてる。話の筋は分らなかつたが、柳の木に軍人か誰れかの馬が繋いであつて、お父さんがその馬から目を離さずに見物してゐるんです。凡そ十分間もして、お父さんは名残惜しさに振り返り／＼して歸つて行つたが、私はそれをぢつと見てね、その時はやはりお父さんに早く馬を買つてあげたいと思ひました」と云つて、立上つた。

母は呆れた風で見上げて、

「直ぐお寝なさい」「いや少し勉強してから寝ませう、明日は八時に起して下さい」と、書齋へ入ると、母は追馳けて来て、マツチを擦つて手づからランプを點火し、

「お前、二四ばかり持つてゐないかい、千代の月謝だの何だの、私の手元に大變不自由してゐるから」と、低い聲で歎願する。健次は無言で、裏口からぐちやぐちの杓を手渡して机に向つた。

書齋は土藏側の八疊の室、家中で最も醜くない部屋だが、それでも疊は茶色をして處々擦りむけ、壁には斑點が出来てゐる。小形の本箱が二つ並んで、健次が中學時代からの教課書や愛讀書が、ぎつしり詰込まれ、プルタークの英雄傳傳牛全集透谷全集などの背皮の金字が微かに見える、しかし此等の書物は微塵りの玻璃戸から引出されたことなく、机の上には新しい經濟書が置かれてゐる。

健次は二三の郵便物を手にとつたが、一つは箕浦からで、二三日中に會談したい、云ひたい事が山ほどあると書き、尙それだけでは飽氣ないと思へ、今月の諸雜誌を讀み、何れも輕浮な文字の多きを悲しむ、我々は滔々たる弊風に感

染せず、徒らに虚名を求めずして眞面目なる研究を續けたしと書き添へてある。又一つは織田の妹からの手紙で、「秋の日だの望の夜だのの五六首の歌を認めて、雜誌へ出して呉れと切望してゐる。健次は二つの手紙を抽斗へ入れ、

書物を擴げて二三枚讀んでゐたが、やがて投げ出して濃い眉をびりりとさせた。「箕浦の所謂眞面目なる研究は五年前に過ぎ去つたのだ」と、

兩手で頭を抱いて目を瞑つた。すると歸宅の途中と同じ雑誌が湧き上つて留め度がない。天井には鼠が暴れまはつて、時々チュツ／＼と鳴聲がする。一家四人はすやくと眠つてゐるが、毎夜その寢息を聞くぐらゐ彼れに取つて厭な氣のすることはない。人中へ出てゐる時には心が動搖して紛れてゐるが、獨り黙然と靜かな部屋に坐つてゐると、心が自分の一身の上に凝り固まつて、その日常の行爲の下らないこと、

將來の頼むに足らぬこと、假面を脱いだ自己がまさ／＼と浮び、終には自分の肉體までも醜く淺問しく思はれて溜らなくなる。その時こんな下らない人間を手頼りにしてゐる家族の寢息が忍びやかに聞えると、急に慄れに心細く、果ては萎れてしまふ。健次は昨夜と同じ考へを経験し、心細くなつ

て萎れて、遂にぶつ倒れて、睡る氣ではなくても自然に眠つてしまふ。

雨滴は同じ音を繰返し、鼠も倦みもせず騒いでゐる。

(四)

翌朝目の醒めた頃は、目伏しい日光がカツと照り渡り、半身を蒲團の上に持上げると頭がぐらぐらする。健次は手を伸して縁側の障子を開けた。壺の細い花の小さい、黄白の野菊の間に突立つた物干竿には、シャツや足袋がぶら下つて、水気が盛んに舞ひ上つてゐる、父も妹も出掛けたと見え、家内はひっそりして只母の洗濯の音が聞える。

健次は勇ましく跳ね起きて、直襟身支度をし、獨りで食事をしていると、母は濡手を拭ひく茶の間へ入り、

「今日は直ぐに社へお出でかい」

「いえ、一寸桂田の家へ寄つて行きます」

「え、先生のお宅へ、ぢや先生にも奥様にもよろしく云つてお呉れよ、ほんとに暫らく御無沙汰して申譯がないんだが、變にお思ひなさらぬやうにね、お前も先生や奥様の御機嫌を損ねんやうに氣をおつけよ、これまでだつてお世話に

ばかりなつたのだし、これからもどうせあの方にお手頼り申さしにやならんのだしね、だからお前鹿相の事を云つちやならないよ」

と、柔しく幼児にでも説聞かすやうに云ふ。

健次は「え」と氣のない返事をして茶漬を掻き込み、「ね、お母さん、私は當分社の近くへ下宿したいと思ひます、家からぢや社へ遠くつて、此頃のやうに忙しくぢや、少し不便でもあるし、それに年内に著作をしたいんです」と、平生よりも落着いて穩かに云ふ。

「えッ、下宿するつて」と、母は噂のまゝ、長火鉢に寄りかゝつたなり、健次の顔を見て驚いてゐる、「だつてお前、下宿すりや物が加ふる許りぢやないか」

「何、下宿料なんか安いものでさあ、それに私に少し考へがあるから、さう云ふことに定めて下さい」

「まあお父さんに聞いて御覽な、私にやお前の云ふことが分らないよ、學校へ通つてる時とは異つて、もう一家の主人となる身分でさ、家を出て下宿するて一體どうしたんでせう」と、向きになつて責める。

「その代り暮にや少し金を造つて、妹に春衣位買つてやりますと、健次は宥めるやうに云つた

が、母は腕に落ちぬらしく、頰に青筋を立てて少し慳食に、

「春衣どころぢやないよ、暮にはお前を當てにしているんだから、一人で浮々遊んでられちや困らあね、それに下宿なんかして、無駄なお錢を使ふつていふ方があるもんぢやない、まあお父さんを御覽なさい、今朝も加減が悪いのに早くから出て被入しやつたのに、お前は毎日々々お酒を呑んぢや遅く歸るしさ、三十近くもなつて、何故かう考へがないんだらう」と、鐵瓶をこすりく、目に皺を寄せてゐる。

「私だつて考へてるさ」と、健次は小聲で云つて、母を相手に理窟を云ふ氣もなかつたが、自分似てると云はれる母の顔の、年齢よりも老けて、淋しく沈んだ間に、神經の鋭く動くを見て、何となく氣の毒になり、

「ですがねお母さん、私は家へ歸ると氣が減入つて仕方がないんです、一時間もしつとして晝物を見ちやゐられんです、何だか穴の中へでも入つてるやうで、氣が落着かなくなるし、微臭い臭ひがして息がつまります、お父さんは住み馴れてるから、此家が一番いと云ふんだけど、私にや一日居りや一日壽命が縮まる氣がする。去年まではさうでもなかつたが、此頃は

殊にひどいんです、だから下宿でもしたら、少しは気分が直るかと思つて、昨夜獨りで定めたんですと、健次は今も鬱陶しい毒氣が壁の隅から噴き出て、自分を壓迫する如く感じた。

「それがお前の我儘だよ」と、一口にはね付けて、「家が汚くつて厭なら厭で、お前が自分で修繕でもする氣にならなくちゃ」

「だつてこんな家を手入れしたつて駄目さ、しかしお父さんが好きなんだから仕方がない、私だけ何處かへ逃げ出すんさ」

と、健次は母に何を云つても無駄だ、自分で無言實行すればよいと思つて口を噤み、母が何か云ひかけるのを冷かに見て、新聞をポツケツトに捻込み、中折を被つて急いで外戸へ出た。

ステツキを小脇に挿み、新聞を出して、「模範的學生」や「醜業婦」の記事、經濟論から運動界の消息まで、何物をか捜し求むる如く、残る限なく目を通し、漸く読み終つた時分、彼れは千駄木の桂田家の玄關に立つてゐた。

(五)

博士はフロックコートを着て椅子に腰掛け、新着の外國雜誌を讀んでゐたが、健次を見る

「さあ掛け給へ、今日は筆記に來たのかね、約束をして置いたんだが、急に用事が出來てね、これから文部省へ行かにならんから、又明日か明後日に来て呉れ給へ、しかしまだ少し間があるから、まあ腰をお掛け、今もこの雜誌を讀んでてね、西洋の學者の研究心に感服してんだ」と鈍い目を向けた。

「さうでせうね、どうしても西洋の學者は驚かしてやる書棚を顧みたら、高張つてる書棚を顧みたら、どうです、此頃は何を研究してゐるかね」と、博士はお定りの問を發する。

「何もやつちやあません」
「そりやいかん、社の方も怠けるといふぢやないか、それについて君に忠告しようと思つてたんだが、實は先日編輯長が來てね、君が此頃は怠つて困るといふ話だ、一體私は青年が新聞や雜誌に關係することは初めから好まないから、君にも懇々注意したので、矢張眞面目に教育事業に従事するやうに望んだんだが、君が是非やりたいつて、矢も盾も溜らん有様だから紹介はしたけれど、竊かに氣づかつた、雜誌記者なんか私立學校出の者が適任で、君などは不適任だからね、しかし編輯長の話によ

ると、初めの間は大變熱心に働いて隨分役に立つといふから、多少安心もした話だが、さう早く厭になつちや困るね」

「そりや初めの間は珍らしくつて譯もなく面白から、氣乗りがして働けるんです、知らん人と懇意になつたり、有名な博士なんか會ふのを悦しがつたんですけれど、今ぢやもう好奇心がなくなりました、戀女房だつて一年も添つてりや鼻につきますからね」

「君は年々眞面目でなくなる、學校時代とは人間が違つてしまつた」と、博士は締りのない顔を擧め、小さい耳朶を掻きながら、「君に比べると箕浦は感心だ、以前は遅鈍な男だと思つたが、此頃は忠實に勉強してゐる、度々私の所へ質問を持つて來るが、中々研究心に富んでる」

「さうでせう、箕浦君には僕も感心して、あの人は書物を積み重ねりや天國へ届くと思つて、迷はないで書物の塔を築いてゐるんですから、しかし私には紙の踏臺は檢吞でなりませんと、健次は唇のあたりに微笑を堪へ、パツチリした澄んだ目には、博士の胸の底の紙魚の跡まで映つてゐる。

博士はますます苦い顔をして、「どうも君は眞面目でない、今から讀書を申しむやうぢや、

人間は發達の見込みがないと斷言出来る、これから國家に盡さうといふ青年が、こんな浮薄な根性を持つてどうします、確に讀書もせずに書物を輕んじたり、人間の義務を満足に盡しもないで、世の中を攻撃したり、大間違ひの話ぢやないか、しかしこれも今の雜誌や文學が作つた惡結果の一つだらう。どうも輕佻だ、浮薄だ。過渡期には免れんことだが、武士道の精神も衰へるし、新倫理觀が青年の間に缺乏してゐるから、こんな歎かましい現象が起る。して見ると私なども進んで積極的に救済策を講ぜねばなるまい、元來通俗的の片々たる議論を世間に發表することは好ましくないので、成るべくは精力を自分の事業に集中して、自分の新哲學を組織したのであるが、今の青年の通弊を見ると、どうも社會の爲國家の爲に黙々に附してゐられん、私も當面の問題について飽くまで意見を發表しなければなるまい」と、演説調で云つた、それが如何にも眞面目で、心底から憂世の情が溢れてゐるので、健次は氣の毒になり、

「ぢや私の雜誌へも、そのお考へを書いて頂けますまいか、私共は人生の經驗にも乏しいんですから、先生方の御意見を伺ふと非常に爲になります」と、穩かに殊勝らしく云ふと、

博士は顔をやめて頻りに首肯き、

「つまり何さ、君などはまだ一讀書が足らん世間で苦勞をしないから、空論に迷はされるんさ」と時計を見て、

「ぢや二三日中に筆記に来て下さい、少し纏つた考へを述べよう、それには私が十年前前に書いた『東西倫理思潮』を參考にするから、君も一應目を通して貰ひたい、多少今とは考へが違はんでもないが、大體はあれでいゝ」

と、ひよつくり立つて書架を捜し出した。博士は漸く四十を過ぎたばかり、教授の中では幅の利く方ではなけれど、有名な讀書家で、語學は英獨佛に熟達してゐる。一生學問に生れて来た人といふべく、遊戯と云へば五日並べずしてゐるのは、多年の讀書に疲勞した結果かとも思はれる程で、卒業後も地位を争はず榮華を望まず、親護りの可成の財産あれば生活の上には憂ひはなく、只書籍の中に身を埋め、結婚も三十五六の時、親戚の強固なる勸告で漸く決行した位。日常自分の學問で凡ての社會を指導し得らると確信し、青年にも親切である溫和な良紳士だ。

健次は今書架の前に立つた、胸の長く足の短

い博士の後姿を見て、その十年一日の如く迷ふことなく書物に耽溺する一生を羨ましく又不思議に思つてゐると、博士は厚さ一寸程の假縁の四六版を引出して、指先で表紙の埃を弾きながら机の上に置き、

「この中要點は一々原書から直接に引附したのだから、自分でも確かだと信じてゐる、兎に角一應讀んで下さい、君も必ず益する所があるに違ひない」と、處々開けては二三行小聲で讀み、頻りに首肯してゐる。

かくて博士は十年前の己れを回顧し、健次は博士の舊著を無理強ひに讀まされる苦痛を豫想して、暫らく無言である。鈍びた日光はカーテンの間から洩れて、青い机の上に細く一線を劃してゐる。昨日に變つてボカ／＼と温かく、健次は締め切つた居間に息の詰るやうに感じた。

「貴下、まだお出掛けになりませんの」と、細君が不意に戸を開けて、半身を現はしたので、博士は漸く氣がつき、

「ぢや二三日内に」と、健次に云棄てて、手袋を握つたまゝ階下へ下りた。

(六)

健次は細君に添うて博士を玄關に見送り、そ

の俾の後から自分も歸らうとしたが、強ひて引留められて元の書齋へ舞戻り、母の傳言を慇懃に述べた。

細君は眉を擧め袖を動かして、「まあ、ひどい煙だ」と、カーテンを手繰つて窓を開けた。烟は渦を巻いて風のない空へ流れて出る。

「で、奥さん何か御用ですか」と、健次は浮腰になつて問うた。

「別に用事といふ程でもないんだけど、一寸お話ししたいと思つて、貴下お急ぎなの」と、上目蓋を上げて健次を見た。

「え、もう社へ行かなければ」と、力なく云つて、見るともなく細君の油氣もない頭の髪から、爪先の汚れた足袋まで見下した。洗ひざらしの地味な錦仙か何かを着て、只傘模様の桶袴の襟に艶があるばかり、健次は席で包んだ美人像を連想した。

「では、何時かの西洋小説の續きは聞かして頂けんですね、私あの女の行方が聞きたくてならないんだけど」

「いや、もうあんな馬鹿々々しい話をする氣にやなりません、女は虎列刺か何かで死んぢまつたとしとけば、それで直ぐ結果が付いてしまふんです」

「それぢや酷いわ、あんなに苦勞しちやつて、これからと云ふ所で死んぢまつては、…あの續きは屹度面白いに違ひない」

「そりや小説家が有りつ丈の拵へ事を書き並べて長くするから、矢鱈に面倒になるんですが、世の中の事はさう謎へ向きに出来てやしないのでせう、假りに女と男と日比谷公園で出會はうと約束しても、その晩女が電車で轢かれて死ぬるか、男がペストに罹るか分つたもんぢやない」

と、投げつけるやうに云つてハツ／＼と笑ふ。細君は頭を替へて掻きながら淋しく笑ふ。

「貴下は何故そんなに暢氣なんだらう。私はね、堪らない程衰れた小説か芝居が見たくつてならないんですが、西洋にはそんな小説はないんでせうかねえ」

「そりや幾らもあるでせう、先生は日本の小説はお嫌ひだが、西洋のものはお讀みのやうだから、聞かせてお貰ひなすつたらいいでせう」

「だけど先生に話して頂くと、ちつとも面白くないんですわ、悲しいことでも凄いいことも、御當人がちつともお感じなさらんのだもの」

「そんな事を感じてた日にや大學者にやなれんでせう」

健次は椅子を離れて窓側へ寄りかゝり、冴え冴えした空気に觸れ、窓前の青桐の葉の黄ばんで中にはもうぼろ／＼に朽ちかゝつてるのを見て、暫ら黙つてゐたが、

「奥さん、もう葉が枯れて來ましたね、この前伺つた時にや、まだ青々してたのに」と、何をか感じた風で向き直つて、「秋になつたせゐか、この書齋も寂として静かですね、此處で先生は何にも不満を抱かないで、一心に不朽の事業をして居られるんだ、葉が枯れても落ちてても、そんな事にやお構ひなしで、本ばかり見て被入しやる。僕等も矢張先生の後を追つて、當てにならん不朽の事業でも企てるのが本當なんです」

「そりや私にや分らないけど、男と生れたら誰れだつて世間を尊敬される身分にならなきや虚言なんですせう、貴下は一度も將來の事をお話しなさらんから分らないけど、全體どうなるの、今日はそれを聞きたいのよ」

「聞いてどうなさるんです」

「少し私に考へがあつて」と、目に媚を呈した。「將來のことつて何も纏つた考へはありません、只今日社へ行つて織田の拙い原稿を賣付けようと思つてるばかりで、跡は何が何やら眞暗闇です」

「織田さんといへば、あの方もお困りのやうねえ、二三日前にも、もつとお金の取れる仕事はないかつて頼みに入らしたつたが、全くお困りのやうね、だから先生も大變同情なすつて、是非相當な職を見つけてやりたいと云つて被入しやる。同じ様に學校を卒業なすつても、貴下と織田さんとは丸で反對ぢやありませんか、顔つきを見てもお話を聞いてても分りますわ、織田さんは何故あゝ元氣がないんでせう、全くいたいしたいわ」

「しかしね、奥さん、織田は貴女方が思つていらつしやる程くよくよしてやしませんよ、あの男は自身の書いたものは一度だつて描いと思つたことはないんです……で、私の將來を聞いてどうなさるんです」

「私此頃氣がくさくさしちやつて、いふんな事が考へられるのよ、……何しろこんな小人數の家に用事もなくつてぢつとしてるんだから、氣が滅入つちまふ筈でさあね、でね、色んなことを考へてね、つまり貴下を立派にして見たくなつたの、私にや子供はなし、また此からも出来つこはないでせう、だから私は歳を取つて、何も樂みがないやうな氣がしてならんから、貴下を自分の子と思つて、世の中へ立派な人間とし

て働かせて見たくなつたの」

「立派な人間でどうするんです」

「そりや一口にや云へないけど、洋行して大學者になるとか、大發明をするとか、そりや貴下の腕次第で、男は何でも出来るぢやありませんか。お金のことなら、私がどうにでもするから、家のことは心配しないで、目的を立てて一心に勉強する氣にお成りなさいな」

「ですが此迄お世話になつたのに、此土御臣介になつちや濟みませんもの、それに先生だつて御承知なさらないでせう」

「いゝえ、先生には私から巧く云へば大丈夫、只貴下が先生の前で眞面目な口さへ利いておれば、それで深山なよ」と、細君は右の手を机に置き、左の手で袖口を掴んで、側の椅子に腰を掛けてる健次の額を覗くやうにして云ふ。健次は細君がその品のある顔に巧みに彫り込んである長い睫毛、黒い瞳、青くぼかした白目に艶を含んで自分を見るを見馴れてゐる。

「貴女は何故そんなことを思ひついたんです」

「だつて私は女だから、自分で世間へ出て働きますも何も出来やしないでせう、せめて男の子が一人あれば、私の手で理想的に育て上げれば面白いでせうけれどね」

「ぢや貴女は子供が欲しいんですか」

「えゝ、そりや欲しいわ、初めの間は子供なんか、さぞ五月蝍からうと思つてたけど、今ぢや欲しくつてなりませんわ、音楽を習つたり、いろんな事をして来たけれど、矢張駄目ね、此頃は何つてことはない、厭あになるんですよ、子供でもなくちや、一生はどんなに淋しいでせう」

「貴女も淋しいんですか」と、不思議さうに見て、「儂かな壽命だけれど、人間は何かで誤魔化されなくちや日が送れないんですね、酒で誤魔化したリ戀で誤魔化したリ書物で誤魔化したリ、子供に綺麗な着物を着せて飛んだり跳ねたりさせて慰みにしなげりや、人間は毎日泣面をしてゐなくちやならん、私の母だつて私を玩具にしてるんです、貴女だつて玩具が要るんでせう」

「だつて貴下、自分の子を十分に教育して、思ふやうに立派な人間に仕立てれば、どんなに樂みでせう」

「しかし貴女にや子供は出来んから、私を子供代りにしようと思ふですか、急に老人になつたんですね」

「私も老込んだでせう」と、神經がビリ、と動

いた。もう藻掻いても匍ひ上ることの出来ぬ谷に落ちた気がした。

健次が家族の如く屢々出入し初めたのは四五年前の昔だが、その頃は寶石入の指環を光らせ、博士の細君仲間では珍らしくはい、で、来る人々を攫へては、音楽の話や小説の話に夢中になり、健次などが小説の話から戀の話に移り、こそく無遠慮に女の品定めなどをする

と、「いやね普沼さん」と云つて肩を擧めながらも、心では悦しがつて、顔一杯に艶々しい色が漂ふ。健次は何時もの快活な美人が教授の細君たるがために、花々しく交際社會へ出る機会のないのを遺憾としてゐた。で、細君は暇な身體だから年中飾装をして、狭い社交の範圍内では羽振りを利用して、園遊會などに招待されると、主人を促して出掛けぬことはなく、新婚當時は夏の休暇に必ず温泉か海濱へ旅行したが、そんな時には自分で服装を擬らすのみならず、博士の髪刈り振りから手袋の色合まで八釜しく干渉する。汽車も一等でなくては承知しなかつたものだが、この二三年以來はその態度が急に變つて、頭髮も丸髷に結つたかと思ふと、手づくねの束ね髪で平氣でゐたり、古代模様の品のいゝ丸帯を締めてたかと思ふと、唐縮緬の

艶のない腹合帯に代へたり、家にゐてもこつてり白粉をつけてるかと思ふと、戸外へ出る時でも素面で氣にもしないことがある。そして細君には寵兒が一人缺くべからざるものになつてゐて、健次の目にはそれが誰であるかよく分つてゐる。博士の殊に親しくしてゐる四五人の學生は、常にその家へ出入し、細君の發起で晚餐に招かれることもあるが、その中で殊に細君の寵を辱うする者が一人ある。それが箕浦であることもあれば、健次自身であることもある。で、その寵兒となると、芝居のお伴も仰せ付かる、矢鱈に物を呉れたがる。一寸寸訪問しても、側を離さないで、頻りに話をしかける。

「健次は立上つて、風呂敷包を持つたまま、室内を行戻した。

「家へ来ないつて、何か外にいゝ事が出来たのですか」
「さうでもないけれど、もう此迄の友人や長く交際つてゐる人にはあきくしました、これから新奇に事を始めなくちや自分の身が腐つてしまひます」
「だから私が云つてゐる通り、新奇に何か目醒しい仕事をお始めなさいな、男なら何でも出来るぢやありませんか、御自分の名を世間に歌はせようと、人の上に立つて自分の威光を見せようと、男にや世間が廣いぢやありませんか」

「急に眠くつて仕方がないんです」と、又欠伸をして、「それに今朝から、母と先生とそれから貴女とに小言ばかり云はれて、意氣銷沈した所です、結婚しろ、眞面目になれ、勉強せいと此頃お題目のやうに私の四方に聞えるんでうんざりしてゐます、だから私は下宿屋へ逃げつちまふつもりです、もう此家へも滅多にお伺ひしません」

「それで貴女は私が苦しんで仕事をし、世間に知られるのを御自分の慰みにしようといふんですか」

「そりや楽しみでさあね、これまで家の者のやうにしてるんだし、私は貴下が好きでならないんですもの」と口元に力を入れて幼児を絞すやうに云つた。

健次は長椅子に身を埋め、微笑して、「僕はね奥さん、誰れにも好かれたくも同情されたくもないんです、貴女がいくら同情してくだつたつて、私と貴女とは霞を隔ててお話しするんです、現在の親だつて自分の子を解し得ないで、勝手に自分の頭で拵へ上げて喜んで悲しんだりして、つまり人間は自分一人だ、自分と他人との間には越えることの出来ん深い溝渠が横はつてるんです、箕浦だつて織田だつて、要するに私からは赤の他人で、互ひに本性を包んで交際つてるんです」

「貴下、今日は、どうかすつたの、いやに理窟ばかり云つて。……ですけど人の本性が分らないけりや分らないで、それでい、ちやありませんか、好かれたら好かれたで、それ以上穿鑿するにや及ばないわ」

と、今日は常の如く無駄話に笑ひ興するこ

ともなく、二人で黙つて相手を見てゐたが、書生が戸を開けて、「箕浦さんがお出でになつた」と知らせたので、健次は急に細君に挨拶して、歸りかけた。

「貴下、下宿屋へ何時お移りなさるの」と細君は階子段で尋ねた。

「まだ降りません」

「私遊びに行きますよ」

(七)

社の階子段は社員の多年の足の力であつて、砂埃がその中に溜つてゐる。健次はそれを一つ一つ踏み上げる毎に、夕暮の果てのない旅路を辿るごとく感ずるのだが、たま／＼編輯の相談會だとか、自分の月給の前借の談判だとか、多少でも波瀾があると、少しは活氣がついて二階へ駈ける。今日は織田の原稿を賣付ける役目を帯びてゐるので、編輯長の年中變らぬ顔を見るに、張合ひがあつたが、さて説き付けて見ると、彼れは頭として聞かぬ。さう幾月も續いて同じ人の翻譯は出せぬといふ。大威張りで受合つたものを拒絶されては顔が立たぬと思つたが、強請する譯にも行かず、少し萎れて社を出た。

彼れは何時ものやうにガツカリして電車に乗

つたが、織田の方も棄て置けぬので廻り道をして麹町のその家を訪ねた。家族に會つては面倒だから、勝手口から便所の側を通つて座敷の縁側へ出ると、織田は既に夕闇の迫つてゐるのにランプも點火ず、障子を開けて机に向ひ何やら書いてゐた。

「おい君、原稿は駄目だぜ」と突如に云ふと、織田は頭を上げて「やあ」と云つたきり、じろじろ健次の顔を見て、「駄目かい、何故だ、困るねえ」と、むく／＼と身を起して、縁側へ出た。

「まあ心配し給ふな、おれがどうかする、まだ十や二十の金にや不自由しないよ」

「當てにしたのに困るねえ」

「今に僕がどうかしてやらう、これから何處かへ出掛けなさいか」

「僕は出られりやしない、留守番がないから」

「病人はどうだ」と、健次は今思出したやうに小聲で聞く。

「別に變りはない、まあ上り給へ、今君のシスターが見舞ひに來て呉れて、僕の妹と何處かへ出て行つた」

「さうか、彼女も此頃は浮れ歩いてやがる」

織田はランプを點火で、薄い座蒲團を出した、健次は靴を穿いたまゝ、縁側から寢そべつて、室

内を見まはした。狭くはあり裝飾もないが、彼れの家ほど見つともなくはない。床の隅には新聞や原稿紙の側に、ナポレオンの小さい石膏が置いてある。これは織田が學校時代に五圓で買ったものだ。

「君の家も陰氣だね」

「うゝん」と氣のない返事をして、織田は書いてしまつた原稿の枚数を數へてゐたが、模一重の隣室にはコホン／＼咳をして、それから咳が聲がする。

健次は厭な顔をして起直つて、小さい聲で、

「僕はもう歸らう、細君にも會はないから、よろしく云つて呉れ給へ」と石段に立つと、

「まあ待つて呉れ給へ、君に話がある」

「だつて、此處で話なんかしちや悪いんぢやないか」

「何、構やしないが、君が遠慮するなら、一寸其邊を散歩しながら話さう」

と、織田は帽子も被らずに小さい庭下駄を引掛けて外へ出て、直ぐ近くの九段坂の方へ向つた。

「柱田さんがね」と、織田は両手を懐内に入れて、健次を下目に見て、「君何だよ、あの人が僕に同情して、遠からず僕にいゝ職を周旋して

やると云つてたよ」

「さうかい、ぢや僕も君の原稿に苦勞しなくともよくなるね、で、僕に話といつて何だい、金なら明日までに必ず拵へやる」

「それも是非頼んどくが、實は妹の事で話したいと思つて」

「何だ妹のことだつて、シスターを誰れかに遣るんか」

「まあそんなものだ、でね、一言で言ふと、あれを君が貰つて呉れんか」

と、織田は事もなげに云つて、無論健次も左程反對もすまいと思つてゐる。

「僕にかい」と、健次は冷笑した。

「昨夜君の注意で少し氣がよりになつたから、歸つて妻に訊くと、妻が、そりや屹度菅沼さんだらう、あの方なら丁度相當だから、早く定めてしまふがいゝつて云ふんだ、僕も同意だから一つ君承知して呉れないか」

「そりや細君の見當違ひだぜ、多分何だらう、シスターが邪魔臭いから、早く追片付けたらだらう」

「いや、そればかりぢやない、僕も早く定めて妹の身に間違ひのないやうにしたいんだ、世間に悪い噂でも立つと困るからね、あれについて

や、僕も責任を感じてるんだからね」

「ぢや僕をシスターの防衛隊とするんだな」と、面白さうに笑つたが、織田は飽くまで眞面目で、

「打明けて云へば、さうして貰ふと僕も大いに助かるんだ、今ぢや實際弱つてる、彼奴にや金がかゝつてねえ」と、平生の癖で枯り強く一つ事を繰返し出すので、健次は弱つたが、頭から反對も出来ず、

「僕よりか箕浦にやり給へな、君はあの男を嫌つてるが、情合もあるし人間がセントルだからいゝぢやないか」

「いや箕浦にや困るよ、あゝいつた詩人肌の男は僕は蟲が好かん、花の散るのを蝶々だと思つたり、木の葉が落ちるのを見て、萬物凋落の秋が來たといつて涙を流す奴には信用して、妹を託するに足らんと思ふ」

「そりや尤もだ、君は箕浦を評する時には妙に名言を吐く、平生は平凡な涙臭い事ばかり云つてるのに。しかし君の妹は箕浦には釣合つた縁ぢやないか」

「いかによあの男は…それに箕浦ぢや妹は制取して行けやしない」

「君にも手綱は取れんだらう」と、健次は眠りの

足らぬ目をこすつた。身體は倦くて持て餘すやうである。

空は晴れて、空気が肌にく、周囲は人も多くて騒がしいが、二人は元氣なく刻み足に歩いてゐた。

「やあ、今日もやつてるな」と、織田は向うを見たので、健次も目を向けると、坂の中途に一團の群衆の中から、演説めいた聲が聞える。

「何だ！ ありや、廣告屋か！」

「救世軍だよ！」

「さうかと、健次は別に氣にも留めなかつたが、自然に側へ近づいたので、立留つて、人垣の間からのぞくと、木綿の紋付を着た二十前後の青年二人と、黒い袴をつけた若い女とが立つてゐて、その一人が今演説の最中である。左の手を腰に當て右の手を動かし、色の黒い角張つた顔で少し何向け、

「今私が申上げた通り貴下方も罪の人です、早く悔い改めなければ誠の人間にはなれません、つまり罪惡のある人だから」

と、ゴツ／＼した調子で、甘味も辛味もない言葉を食べ／＼叫んでゐるが、満身に力を籠めてゐるため、顔は少し赤くなり、額には汗さへ浮んでゐる。

「あの男は何を云つてるんだらう、何の事やら分りやしない」と、健次の側の老人が笑つて去つた。

「馬鹿ツ」と何處からか聲がする。

子供が二人前へ進んで、口を開けて不思議さうに見つめてゐるのみで、外の者は皆冷笑してゐる、通りがかりに物好きに足を留めて、何だ耶蘇か、喧嘩かと思つたのにと、失望して行く者もある、誰れも眞面目に聞く人もないのだが、かの青年は聲を張り肩を怒らせて、

「皆様遺憾なさい、神様にお頼りなさい、日本國の興廢は軍人や政治家によつて決するのでありませぬ、神様の道を世間に行ふか行はぬかによつて定まるのであります」と説く。

健次は甲去り乙來る間に、知らず／＼前に進んで、その演説振りを見つめてゐたが、織田は後から肩を叩いて、「おい君、行かうぢやないか」と聲をかける。

「まあ待て、もう少し聞いて行け」

「何が面白いんだ、こんなものが」
と織田が云つたが、健次は何も答へず、目を傳道者から離さない。そしてかの青年は話を續けて今日の社會の淫風や飲酒の害を堅苦しい拙い言葉で述べ立ててゐると、誰れの惡戯か、小

石が彼れの肩を掠めて健次の前に落ちた、健次は思はず後退したが、かの傳道者は微塵も動かす泰然として説を進める。

かくて凡そ二十分もして、健次は指物を女の手から貰つて群衆を分けて出た。

「君は何故あれが面白い」と、織田は長く待たされたので恨めしさうな顔をする。

「面白いぢやないか、彼奴は地球のどん底の眞理を自分の口から傳へると確信してゐる。あの顔付を見給へ。自分の力で聽衆を皆神様にして見せる位の意氣込みだ。人間はあゝならなくちや駄目だ」

「何にも感心しない君が、何故今夜に限つてあんな下らないものに感心する？」
「さうさ、僕は救世軍にでも入りたいな。心に無いことを書いて、讀者の御機嫌を取る雜誌稼業よりや、あの方が面白いに違ひない、あの男は欠伸をしないで目を送つてるんだ、生きてらあ」

「はゝゝ」と織田は大口開けて勢無く笑つて、僕は青年が淺薄な説教なんかして目を送るのが不憚になる」

「しかし淺薄や深刻は本當は問題ぢやないんだね、打たれやうが罵られやうが、自分のして

事が何であらうと關ふものか、もつと刺激の強い空気を吸はにや駄目だ」と、健次は歎息する如く云つたが、織田のぼんやりした顔を見上げると、急に「ぢや此處で別れよう」と、早口に云つて軽く會釋し九段の坂を下りた。で、「まだ話があるんだ」と、織田が呼留めた時は、もう人影に隠れてゐた。

(八)

まだ月初めであれば、健次も五六枚の紙幣はポツケツトに溜ませてゐるので、櫻木へでも行からかと思つたが、お雪の顔も、もう見飽いて鼻につく。型に取つた定り文句を並べるか、キヤツ〜と騒ぐ外には能がなく、頭から足の裏まで何處を押したつて、碌な音一つ吐き出さぬ癖に、二三日續いて足を向けると、此方に思召しでもあるやうに自分定めに自惚れたがる女中共を相手にして、拜顔料を差出すのは馬鹿馬鹿しいと今夜は思ひ留まつた。で、彼れは西洋料理店でウキスキーを傾け、二三品の洋食を食ひ、それから氣まぐれに神田の西洋書店へ立ち寄つた。何か自分を刺激して、新しい生命を惹起すものはないかと、新着の文學政治宗教から工業や銃獵の書類まで、残る限なく覗いたが、

どれにも自分を魅するやうな破天荒の文字が滲んでゐる氣もする。で、あれか此れかと撰擇を重ねた擧ぐ、遂に或露國革命家の自傳と、偶然目についた柵の或冒險家の北極紀行とを購つた。書物を抱へて上野で電車を下りたが、酔ひはまだ醒めず、家へ歸るのも厭であれば、ふらふら公園を歩いて銅像の側のベンチに腰を掛けた。後へもたれて目を瞑つてると居睡りをしさうで、足元に力がなく、身ぐるみ地の中へ吸ひ込まれさうな氣がする。電車の音も遠い世界で響いてゐる如く、自分は此のまゝ動けなくなるやうに感ぜられる。身をベンチの背に投げ出し、帽子の落ちさうなものも關はず、心を夢現の境に迷はせてゐたが、書物が膝から這り落ちるので、パツチリ目を開くと、木の葉が顔に觸れる埃を含まぬ澄んだ空氣が身に染み、自分の周囲のみは薄暗いが、空には星が多く、目の下には燈火が煌いてゐる。四五間前には黒い人影が二つ、深沈に話をしてゐたが、やがて暗闇の中に消えてしまつた。

彼れは孤獨の感に堪へぬ、淋しく心細くてならぬ。少年時代に自分より強い奴、春の高い奴にぶつ付かつて喧嘩をしてゐた頃は、身體中に生命が満ちて、張合のある目を送つてゐたのだ。近松や透谷の作を読んで泣き、華々しいナポレオンの生涯に胸を躍らせた時分は、星は優しい音楽を奏し、鳥は愛の歌でも讀んでゐたのだ。しかし不幸にも世が變つた。何が動機か幾つ歳の歳にか、自分にも更に分らぬが、星も音楽を止め鳥も歌を止め、先祖傳來の星冑も白金作りの大刀も、威光が失せて、自分には古道具屋の賣物と變らなくなつた。今から思ふと、子供の折によく自分に喧嘩を吹きかけた隣の鐵藏なんか懐かしい。彼奴のお蔭でどの位元氣よく力んでゐたことか。今の自分はどちらかと云へば愛されて日を送つてゐる。箕浦も織田も桂田も、いやそれ許りぢやない、桂田夫人にも織田の妹にも櫻木のお雪にも愛せられてこそゐれ、さして嫌はれてはゐない。何處にも鐵藏が居ないのだ。「愛せらるゝは幸なり、愛する者も幸なり」聖人だの詩人だのは勝手な定義を云つてやがる。少くもおれにや適用出来ぬことだ。愛せられれば愛せられる程、自分には寂しくて力が抜けて孤獨の感に堪へぬ。いつそのこと、四方から自分を憎んで攻めて來れば、少しは張合が出來て面白いが、撫でられて舐められて、そして生命のない生涯、それが何にならう。「迫害される者は幸なり」つていふ此奴は

當つてる言葉だ。苦しめられようと泣かされようと、傷を受けて倒れようと、生命に満ちた生涯、自分はそのが欲しいのだ。

健次は立上るのも物憂さうに、かう考へてゐる中に、酒が醒めて夜風が冷くなつた。彼れは主義に酔へず讀書に酔へず、酒に酔へず、女に酔へず、己れの才智にも酔へぬ身を、獨りて哀れに感じた。自分で自分の身が不憫になつて睫毛に一點の涙を流した。

静かな風が足許の落葉を吹きころがし、樹上よりも二片三片頭を掠めて飛ぶ。

巡查が横目で健次を見返りながら、悠然として歩いてゐる。

健次は無意識にベンチを離れ、帽子を被り直して、暗闇の道を逃つて新坂へ出た。

「結婚？」と、思はず口へ出したが、その瞬間口元に皮肉な笑ひを洩らした。

「ノンセンス！ 結婚して家庭を造る、開闢以來億萬人の人間が爲古したことだ、桂田の家庭織田の家庭、家庭の實例はもう見飽いてゐる」と胸の底から答へる。

(九)

翌日は日曜であれば、一家は遅くまで眠り、

九時頃に茶の間に揃つて朝食の膳をついた。近來健次が家族と一緒に食事をするのは、殆んど日曜の朝のみである。年齢の割合に老人めいでもゐないが昔には白髪が多く、上目蓋のたるんでる父と、肉付のよく目と口には品のある姉嬢の千代と健次によく似て小柄で愛嬌のある末娘の光とが健次を挟んで坐り、母は下女兼帯で甲斐々々しく立働いてゐる。

父は出勤時刻にせかれぬ爲、役所の話などをして、ゆる／＼飯を食ひ、皆々の顔を見て、獨りでほく／＼喜んでゐるが、もう膳を離れて煙草を吸ひながら新聞を讀んでる健次に向つて、

「何か面白いことがあるかい、何とか中將の姦通事件はどうなつた」

「今日は何も出てゐませんよ」

「どうも軍人が腐敗しちや困るな、武士道の精神が衰へるとそんなことが出来て来るんさ。今

の中に社會に士氣を鼓吹しなければ、日本の國家も將來が案じられるて」と、父は鼻水と膝に

落して、「今ぢや學校教育も柔弱に傾いてるからよくない、それに家庭で小さい時分から武士

の魂を叩き込まんから、堅固な人間が出来ないんだ、東京でも今は素町人ばかり跋扈する

から、風儀が紊れるのさ」と、口には慷慨めいた

ことを云つたが、顔は如何にも呑氣で、此まで苦勞を重ねて來た影は何處にもない。そして素町人呼はりはこの人の口癖で、自分でもそれが愉快でならぬと見える。

「素町人でも何でも早くお金持になることさ」と、母は横合から補走つた聲を發した。

「本當だわ、お金がある方がいゝわ」と、お光は

一も二もなく母に加勢する。

「せめて男爵にでもなれるといゝけど、昔は旗本下だつて武士だつて詰らないわね」

と、姉嬢は眞面目に感じた。で、暫らく父子で、武士の魂だの素町人根性だのと言合つて、果ては無邪氣に笑つた。

笑つてしまつて、膳が片付くと、姉嬢は今迄黙つてゐた兄に向つて、

「兄さん、今日は上野で音楽會があつて、ソロの上手な西洋人が出るんですつてね、新聞にや出てゐなくつて」

「さうだね、出てゐるかも知れんよ」

「兄さんも聞きに被入しやいな、屹度面白いわ」

「私も行きたいと云ふんだらう、兄さんにお構ひなしで一人で何處へでもお出でなさい」

「切符を買つて呉れだらう、そりや眞平御免だ」
「酷いわ兄さんは、自分一人で勝手に遊んで、何一つ私の頼みを聞いて呉れたことはないんだもの」

「本當だわ、ねえ姉さん」と、妹も相槌を打つ。

「織田さんとこの兄さんは、そりや妹思ひよ、平生だつて何だの彼だのと世話を焼いて、お花見にでも音楽會にでも、峠度連れて行くんだわ。だから幾ら兄さんが學問が出来たつて、人間として織田さんの方がえらいのね」

「チエツ、生意氣云つてらあ」と、健次は横を向いて、今日は如何にして暮らすべきかと考へてゐる。

「兄さんは何故音楽が嫌ひなんだらう、文學士の方は皆音楽や芝居が好きなのに、兄さんばかりは、ちつとも趣味がないのね、音楽ぐらゐ研究なさればいいに」

「だからお前は箕浦の女房にでもなつて、年中キニューくピンく騷げばいい、彼奴とお前とはよく似合つてらあ、おれはもうお前のべちやべちや音楽だけでうんざりしてゐる」
姉嬢は少し頬を赤くして横を向いて、口を噤

んだ。

父は健次の巻煙草を取つて火をつけ、二人の話を面白さうに聞いて、微笑々々してゐたが、二人が黙つてしまふと、

「どうもおれには分らない、學問をした男が、音曲に夢中になるなんて餘程變だ、健次にはおれが昔から武士の精神を教へ込んでるから、そんな柔弱な氣風に染まないんだらう」と、自分で首肯してゐる。

「そんな武士の精神なんか下らないわ、お父さんは何ぞといふと兄さんの最良ばかりして厭になつちまふ」

「は、は、そんな事を云ふものぢやない。兄さんは菅沼家には大事な寶だ、うんと勉強して立派な人間になつて貰はにや、おれが御先祖に申謝がないぢやないか、だから傍から邪魔をしないで、思ふ存分にやらせなくちや……今の間貧乏がづらからうと、それが何だ、貧乏を苦しめて見苦しい根性になるのは、それが素町人だ。度々話して聞きたが、菅沼家は代々高潔な考へを以て忠孝と武勇を嗣んだ家柄で、系圖に少しの疵もないんだ。だから健次もよく心得て、名譽を世界に傳へるやうにせねばならん」
健次は平生父から小言を聞くことなく、他人

の前でも自分の自慢をされるのを厭に感じてゐたので、今も自分が大英雄にでもなるやうに期待する口振を聞くと、急に不快になり、新聞を押しつけて、ふいと自分の部屋へ逃げた。

「お父さんは兄さんばかり大事にするから我儘になるんだわ、學士にまでなつて、親や妹の世話が出来なくちや駄目ですよ、お父さんももうお役所なんか止して大威張で兄さんに養つてお貰ひなさればいいのに、……本當にしまらないわ、外へ出ではお酒を飲んで、何か話でもすると、惡口ばかり云つて、あれぢや何時まで立つても立派な人間になれやしないわ、え、そりやなれないに定つてるわ」と、姉嬢はさきも口惜しさうに云ふ。

父はハツ／＼と笑つて、「まあ黙つて見て居れ、お前達にや分るまいが、おれにや健次の氣性はよく分つてる、今に何か爲出かすに違ひないからよく見て居れ、男の腹の中は女にや知れんものだ、學士になつた位で、ハイカラでもつけたり、妹に花簪なんか買つてやつて喜んでるやうな健次ぢやない」
「お父さんは兄さんを買被つてるんですよ、だから老人には何も分らないんだわ、今に後悔することが峠度あると私思ふわ」

「は、は、は、下らないことを云ふもんぢやない、お前らは今に健次の妹だと云はれて名譽に思ふ時が来る」

「私、ちつとも兄さんなんか當てにしちやゐないわ、何であんな人」

と、新聞を引寄せて書き物に目をつけ、熱心に讀み出した。妹娘は縁側へ出て猫の頭を撫でながら唱歌を唄つてゐる。

健次は障子を締め切り、机に向つて正坐し、「革命家の自傳」を開いた。心を凝らし素早く走り讀みしてゐたが、著者が貴族の家に生れ幼時より宮中に出入する敘述を讀み終ると、書物を伏せて仰向けに寝た。自分とは縁の遠い境遇の異つた人の閱歴が如何程の興味があらうぞと失望した。そして机から書物を引下して、

只氣まぐれに處々抜讀すると、農夫に伍して革命を説いたり、國を脱走して他國に流浪するあたり、さも面白さうに書いてあるが、最早健次にはそれが光のない艶の失せた文字と見え、少時父から義勇隊や白虎隊の話を聞いた時ほどにも、胸も躍らず血も湧かず、目を瞑つて心も動くに任せてゐると、自分の左右前後には火花も散らず、鱗の波も聞えず、只銀座には埃が立つて、うじよくと人の歩いてる様が頭の中に

浮んで来る。

で、彼れは縁側の障子を叩けて、庭を見と、父は日曜毎の役目を怠らず、草履を穿いて掃除をしてゐる。昨日と同じく空は冴え風もなく、日は生温かく照つて、竹箒持った老人の影のみが緩く動いてゐる。健次は欠伸をして、又書物を枕に寝ころび、兩手を投げ出して、うとうとしてゐるが、暫らくすると妹共の騒ぐ音がして、終ひには英語の朗讀が聞える、學校の懇親會で、織田の妹と二人で朗讀するといふ英文の對話を誦讀してゐるのであらう、太くて甘つた

れた聲で、如何にも陽氣さうに讀んでゐる。健次は心がむしやくしやくして、俄かに起上り、帽子を被り出支度をして、玄關まで出かけたが、又引返して何氣なく妹の部屋へ侵入すると、妹は彼れを見上げて、ばつたり朗讀を止めた。

「おい、一寸見せろ」と、健次は妹の手から洋紙を取上げて見ると、「二人の不幸なる娘」と題して、その會話が書いてある。

「今お稽古してゐるんだから、兄さんは彼室へ行つていらつしやい」と、妹は健次の手から洋紙を奪ひ返した。

「おれが茲で直してやるから、讀んで見ろ」と、健次は帽子を被つたなり坐り込んだ。

「兄さんは直ぐ冷かすから厭だけど」と否んだが、漸く納得して、自分の分だけを拾つて讀んだ。筋は幼馴染の二少女が、一人は東北一人は九州と十年も離れてゐた後、或處で思ひがけなく巡り合ひ、その間の境涯の辛酸を語り合ふ哀れな物語、發音の法則は滅茶々々がよく記してゐて、目を細め言葉の調子も哀れげに、表情澤山で朗讀し、「この次には二人とも、もつと幸福な人間に生れて來ませう」と、涙で別れる所で、會話が終ると、

「上手でせう」と、千代は兄を見て、息をついた。中々得意らしい。

「うん巧い、よく覺えられたね」
「もつとお稽古しなければ不安心だわ、織田さんに負けちゃ厭だから」
「あの女も稽古してゐるか」
「え、そりやしてゐるわ、外の人も一生懸命ですもの、私今日も午後から織田さんとこへ行つてよ」

「病人のある家へ行つたつて駄目ぢやないか、まさかあの家で、芝居の眞似なんか出来まいし」

「一緒に外の家へ行くんだわ」
「箕浦の家へでも行くんだらう」

「行つたつていゝでせう、悪くつて」と、わざと拗ねて見せる。

「悪いと云やあしないよ、毎日でも遊びに行きたい、あの男なら親切に發音も直して呉れるし、音楽の議論ぐらゐ聞かせて呉れらあ、……」

それからお前、織田へ行くんなら、これを持つてつて呉れ」と、健次は今思出した如く、書齋から紙入を持つて来て、紙幣を反古紙にくるんで妹に渡し、「これだけ織田にやるんだ」

妹は不審さうに兄を見て、「これをどうするの、織田さんの兄さんに貸すのですか」

「何でもいいから、只持つてけばいゝんだ」

「だつて私が持つて行くのは變だわ、それに兄さんはよく織田さんにお金を貸すのね、何故織田さんばかり好きなんだらう、あの家よりやい

くら私の家の方が貧乏だか知れやしないのに、本當に兄さんは變な人ね」と、妹は反古包をひねくつて、その金目まで覗いて見てゐたが、

「お前にやるよりや、織田にやつた方が、いくらやり榮がするかも知れやしない」と、健次は無邪氣に笑つて、當てもなく戸外へ出た。妹は坐つ

たきり目を据ゑて、「兄さんは何故だらう、お鶴さんに心があるから、あんなに織田さんを大事にするのぢやないか知らん、さう云へば思ひ當

ることが幾らもある、屹度さうだ、戀で煩悶してゐるんだわ」と、自分の身に引くらべて想像に耽つてゐた。

(十)

健次は短い秋の一日を持餘した。上野の公園をぶらつき、或は珈琲店へ入り、或はピアー

ホールへ入り、それから社の同僚を訪ねて、氣采りのせぬ話に相槌を打つて、漸く二三時間を空費し、その宅を出て、湯島天神の境内を通り抜けて歸路に就いた。特筆すべき事件は少し

もない。忙しい人は仕事に心を奪はれて時の立つを忘れ、歡樂に耽れる人も月日の無い世界に遊ぶのであるが、此頃の健次は絶えず刻々の時と戦つてゐる。酒を飲むのも、散歩をするのも、氣焔を吐くのも、或は午睡をするのも、只

持扱つてる時間を費すの爲のみで、外に何も意味はない。そして一月二月を取留めもなく過しては、後から振返つて、下らなく費した歲月の早く流るゝに驚く。

彼は激烈な刺激に五體の血を湧立たせねば、日に／＼自分の腐り行くを感じ、青春の身

で只時間の蟲に喰はれつゝ生命を維いでゐる現狀を溜らなく思つた。そして空想を逞うして

色々の刺激物を考へた。普通の麻醉劑は何の效目もない、酒なら燒酎かうキスキーを更にコン

ダンスした物、煙草なら阿片、戀なら櫻木のお雪や織田のお鶴のやうな女と、甘つたる言葉

を交換したのでは微温もする氣遣ひはない。正義も公道も問題ぢやない。自分を微温の世界から救ひ出して、筋肉に熱血を逃らすか、腸ま

で蕩かすもの、それが自分の唯一の救世主だ。革命軍に加つて爆裂彈に粉碎されようとも、山

賊に紐して縛首の刑に會はうとも、結果が何であれ、名義が何であれ、自分が刺激する最初の

ものに身を投げて、長くても短くても、或は即刻に倒れてしまつてもよい。そしてこんな刺激

物が自然に自分の前に現はれねば、自分から進んで近づいて行く。渦が捲き込んで呉れねば、

自分で渦の中へ飛び込む。鐵藏があるなければ自分で鐵藏になつて喧嘩を吹かけて行く。戦争も

革命も北極探検も人間の退屈醒ましの仕事だ。平坦の道には倦むが、險崖を攀上つてゐれば、

時をも忘れ欠伸の出る暇もない。

初めから退屈醒ましと知つて荆棘の中へ足を踏
込めるものか。理由もないのに獨りで血眼にな
つて大道を馳せ廻れるものか。何故毎日の出来
事、四方の境遇、何一つ自分を刺激し誘惑し
辱にするものがないのであらう。只日々世界の
色は褪せ行き、幾萬の人間の響動は草や尾花の
間ごとと同じく無意義に聞えるやうになつた。自
分の心が老いたのか、地球其自身が老い果て
て、何等の清新の氣も宿さなくなつたのであら
うか。

彼は目を移して道の左右を見た。夕日は電
信柱の影を金物屋の壁に印してゐる。壁の隅に
は薄霧で「法樂加持」と書いた大福寺の廣告が
貼りつけられ、その片端が剥げかゝり、ふら／＼
動いてゐる。牛乳配達と點燈夫とが前後して走
つてる後から、白い帽子を戴き裾の廣い黒衣を
着け、腰に長い珠数を垂れた天主教の尼が二人、
口も閉ぢ側見もせず、靴は土を踏まぬが如く、
閑雅に音をも立てず歩んで来る。深く登んだ空
を煙突の黒煙が擾亂し、その側を一系列の鳥が横
切つた。書間の温かさも急に薄らいで、健次は
肌寒く感じた。

彼は足と心を疲らせて、兎に角家へ歸つ
た。妹は他所行の大切の紋羽二重の羽織を着た

まゝ、茶の間のランプを點火てゐた。

「あら、兄さんお歸り、私も今歸つたところ
よ」と、マッチを火鉢へ棄てて、艶々しい顔を見
せた。

「織田は何をしてた」

「勉強してゐるわ、でね、お金を渡すと、何だか
極り悪さうに受取つて、兄さんにお禮を云つて
たわ」

「さうか」と、健次は所在なきに、火鉢の前に片
膝立てて坐り、火箸をいぢつてる。妹はその側
で羽織を脱いで疊みながら、ちよい／＼兄の顔
を見上げては、

「織田さんは二三日中に兄さんに遇ひたいと云
つてましたよ、是非話を定めることがあるんだ
つてね、兄さんも知つてるでせう、どんな話だ
か、私も織田さんの言振りで荒方推察してはるけ
ど」

「さうか」と、健次は氣に留めぬ風なので、妹
はわざと調戲ぶ氣で、

「當てて見ませうか、屹度あの事だわ」と莞爾し
た。

「あの事つて鶴さんの縁談だらう」と健次が小
憎らしい程平氣なので、妹は、

「兄さんはよく御存じね、同意するんでせう、

兄さんも」

「どうかねえ」

「どうかねえつて、それでい／＼やありません
か、其の事で私兄さんに話があつてよ」と云ひ
かけた所へ、母が勝手から入つて來たので口を
噤み、羽織を箆筒へ収めた。

「さあ御飯だ」と、母は膳立して、汁のこぼ
れる鍋を火鉢に掛けた。

健次は「まだ飯は欲しくない」と云つて、自分
の居室へ入ると、妹は後から駈けて來て、ラ
ンプを點火した。平生に似ず親切に煙草盆まで掃
除して持つて來た。

で、健次が机に脇を突いて煙草を吹かし、相
手にする風はないのに、その傍に坐り、

「でね、兄さんと口を切る。今の話、兄さん
も考へてるんでせう、どうなさるの」

「何だい織田の事か、それを聞いて何にする」

と、健次は不審さうに妹の顔を伺みた。

「何つて事はないけど」と、目を外して、「私、
今日織田さんからも、お鶴さんからもいろんな
事を聞いたのよ」

「何を？」

「織田さんの方ぢや、もうちゃんとして一人で定め
てるんだわ、それに向うでは、兄さんも家のお

母さんもお父さんも、庇度承知することと思つてららしいのよ、お鶴さんも兄さんから聞いたのか、今日は様子が變つてるし、明日お稽古に私の家へ被入しやいと云つても、何時も来たがる癖に厭だつて云ふんですもの」

「おい、下らない話は止せ」

と、机に向つて、經濟書を開いて、ぼんやり読んでゐたが、妹は尙ほ側に坐つてゐて、

「だつて兄さんも早く結婚なすつた方がいゝでせう、家の爲から云つても、兄さんの身が定つて、お父さんの責任を軽くしなくつちや仕様がないですもの、それが一番の孝行だと思ふわ、それにお鶴さんは一家の主婦として缺點がないんだから、私からも兄さんに勧めたい位よ」

「お前どうかしたのか、酷く今日は眞面目くきつた事を並べるね」と、健次は笑つて、「お前はよくお鶴さんの悪口を云つて、あれぢや家は持てないなんて云つてたぢやないか、急に滞節したね、御馳走にでもなつたんかい」

「あら酷いわ、私織田さんとこで少とも御馳走なんかになりやしないわ」

「でも御馳走になつた顔付をしてるぢやないか、箕浦の家へも寄つたのか」

「え」と妹は曖昧な返事をする。

「お鶴さんと二人で朗讀でもして騒いだのか」

「え、兄さんによるしくと云つてたわ」

「お鶴さんと一緒にいくと、あの男が優待するだらう」

と、健次は何気なく云つたが、妹の耳にはそれが鋭く響いて、急に考へ込んだ。健次は箕浦から屢々戀愛論を聞かされたのだが、先日或雑誌に載つた彼れの抒情的の美文を讀んだ時、それが彼自身の事を書いてるので、相手は織田の妹だと感付いた。そして自分の妹の籍かに箕浦を思つてるのが可笑しくもあり、可哀さうでもあつた。しかしそれを妹に知らせる氣でもなかつたのだ。で、

「學校の懇親會は何日あるんだと、聞きたくもないことを、わざと柔しい聲で問うた。妹は確に答へもせず、暫らくして浮かぬ面を上げ

て、

「兄さんは結婚する氣ぢやないんですか」と、さも妹の身の上にも重要問題でもある如く感じてゐる。

「私の利益なんて酷いわ、兄さんの爲を思つてるから聞いて見てるのに」と、袂の先をひねくつて言葉もはきくしない。

「有難う、しかしおれは近々下宿屋へでも行つちまふんだ」

「本當に？」と、妹は目を丸くして、「何故下宿屋なんかへ」

「何故でもないさ、もうお前方のお喋舌も聞飽いたから」

妹は兄の氣心を知りかねて、只變な人だわ、お鶴さんを好いてやしないのか知らん、それとも表面ばかりあんなに澄ましてるのではなからうかと思つてゐたが、末娘のお光が「姉さん、早く被入しやい、御飯だよ」と、駈けて来て、引張つて茶の間へ行つた。

(十一)

四五日はかくて過ぎた。目を醒ますと、屋根には霜を置いて朝日がキラ／＼と照つてることもある、雲の低く垂れてもある。培養せぬ菊は蟲に喰はれて自然に萎れて行く。父子は前後して出勤する。健次は毎日同じやうなことを考へて、一日の仕事を決ませて歸ると、相も變らず母は篋れた顔をして待つてゐる。一家

には何の波瀾もない。母は年中、廢屋に煙つてゐるのだから、偶に戶外へ出るか、異つた人が訪ねて来ると、見たり聞いたりした何でもない事を、物珍らしさうに誇張して問はず語りするのを樂みにしてゐる。妹の千代は思ひ出して朗讀の稽古をしてゐるが、平生ほどお喋舌もせず、多少鬱いでる風も見える。織田は忙しいので手紙を送つたきり訪ねて来ない。先月から赤痢が流行して、根岸近傍にも大分患者があるやうだが、菅沼の一家は數年來風邪以上の病人はない。で、父は家族が皆健全で目出度い、と一人で喜んで、自分が少し風邪氣があらうと腹加減がよくならうと、瘦我慢を出して出勤してゐる。しかし今度の寒さ當りは我慢し切れなかつたと見え、或日役所を早退けにして歸り、お定りの晩酌も止して、行火へもぐり込んでしまつた。

健次は父の代りに海苔を肴に一本ガブ呑みにして、書齋へ入つたが、寝るには早しランプと隠めつくらをしてゐた。すると、その朝桂田夫人の筆で晚餐會招待の葉書の来たことから、桂田に借りた「東西倫理思潮」を木箱の上に置いたまゝ手にも取らず、談話筆記に行くのも忘れてゐたことを思出し、それを取出して飛びく

に讀みかけた。西風がカタ／＼と雨戸に當り、隣家の柿の葉の散る音が幽かに聞える。父は時々呻吟いてゐる。

次第に健次の目は書物を離れ、鋭い神經は風の音と父の呻吟とに煩はされ、火鉢へ俯首いて眉を蹙め、煙草の吸口を噛んでゐると、門の戸がそつと開いた。それが木枯しで自然に開いたやうで、健次は思はず薄氣味悪く感じた。忍びやかに敷石に音がする。誰れかが来たらしく、やがて低い聲で母との話聲がする。

「あゝ、織田だな」と、健次は離れ島に人の訪ねた如く、救助の舟でも来た如く望みを掛けて待つてゐた。

暫らくして織田は「ヤア」と、例の頓間な聲をして入つて来て、火鉢を隔てて坐つた。新調と思はれる緋入を着て、髯も剃つて、髪も綺麗に分け、愉快さうな顔付をしてゐる。

「非常に遅く来たね」
「遅くなくちや君があるないかと思つて」と、織田は珍らしく敷島を袂から出して火を付け、「僕は今日非常に愉快だ」
「愉快だつて、君からそんな言葉を書くのは不思議だ、親爺の病氣でもよくなつたのか」

「いや、親爺は變らないがね、今日僕は桂田さんの紹介で新職業に有りつゝいたんだ、神田の木屋で辭書の編纂だが、報酬も非常にいゝんだよ」

「さうか、面倒臭い厭な仕事だね、辛抱出来るかい」
「面倒臭いなんて云つた日にや、いゝ仕事はありやしないぜ、報酬さへよけりや、僕は何でもやる、それに君、僕は長篇を昨日譯してしまつたよ、あの金が入ると、借金を残らず拂へるし、醫者の方も綺麗に片付くから一安心だ、君にも一杯奢らあ」

織田は平素健次を無二の親友と思ひ、互ひに喜憂を分つつもりでゐるので、今日も吉報を傳へに來たのだ。

「そりや結構だ」と、健次は口先では云つたが、心ではこの魁偉なる人間が、信州誰の抜けぬ頭の眞中の禿げた老母と、頬の赤いよく肥つた細君のために、年中専念一意腸目も振らず稼いでゐる様を憐憫に感じた。

「僕も二三年跳き通しだつたが、これからは少しは樂になるだらう、随分君にも迷惑を掛けたがね、もう大丈夫だ。節儉すりや月末の拂ひに困ることはない、何しろ學校の月給は三十圓だ

から遣切れなかつたが、辭書からは六十圓づつ呉れるんだよ、丁度倍だからね、それに内職に翻譯を續けてやつてけば、小使錢は取れるし」と、織田は自分の現状を想つて悦しくならぬ風だ、で「尙世帯話を續けて、「家賃は収入の五分の一を超過してはならぬ」とか、「消費組合に入れば幾らづつ經濟になる」とか、終ひには將來の家計の豫算計畫を細く説き出した。

妹共はもう寝たのか、家の内は静かだが、隣家から赤兒の泣聲が洩れ聞え、柿の葉もカサと音を立ててゐる。健次は火箸で炭籠を引寄せ、どつきり添炭した。最早酒の氣もなくなつて寒い。せめて織田が何時ものやうに苦痛を訴へるのなら、聞いても多少張合もあるが、大得意で生活の勝利を談ずるのだから健次は聞いてゐても眠くなるばかり。

「それでね、父の病氣がどうかかなり次第もつといふ家へ轉宅して新しい生活を始めるつもりだ、それについて妹だけ持て餘し者だが、あれに對する責任さへ免れりや、僕の重荷は卸りてしまふんだよ」と、織田は抑揚緩急のない調子で云つて相手の顔を見て答を促した。

健次は五月蠅だと思つて、何か云はうとした所へ、母が茶盆と菓子皿を持つて來た。「今

織田さんに頂いたんだよ」と、母は茶を注いで、中腰で二つ三つ世間話をして行つた。皿にはチョコレート・クリームが黄いろい紙に包まれて並んでゐる。健次はそれを手に取つて、端を前齒で噛んだが、厭な顔をして、喰餘しを机の端へ置き、

「もう君、縁談は止さうぢやないか、僕はもう聞きたくない」と、命令的に云ふ。

織田は腰へ付けられて暫らく黙つてゐた。「だが、君の爲にも結婚する方がいゝと思ふ、今も母堂に話すと母堂も賛成して、さうなると結構だと云つてる、それに何だよ」と、四圍を睥して聲を低くし、君のシスターについても僕が考へてる、今度の事は四五日前に鶴にもよく話したんだがね、その時彼女に聞くと、お千代さんは箕浦を思つてるんださうだ、それだと丁度いゝぢやないか、シスターを箕浦へやつちまつては、何なら僕が周旋する」

「だつて君は箕浦は嫌ひだと云つてたぢやないか」
「しかし君のシスターが好いりや仕方がないさ、君も早く妹を片付けて、定りをつけて、活動し給へ、君は我々とは異つて才があるんだから幾らでも發展出来る」

「うまく煽動するね、煽動たつて駄目だよ、僕に發展の道がある位なら、君等に云はれなくても疾くに發展してゐる」と、健次は眩枕で横になつた。

「箕浦の自働家でも君にや感心してるよ、二三日前にも見舞ひだつてやつて來て、何時か君は異彩を放つだらうと云つてた、實はその時妹を君におつ付けたいと彼男にも明したのだ」

「箕浦は何と云つてた」
「彼男かね」と、織田は云ひかけて躊躇して、「別に何も云やしない、丁度いゝだらうと云つてた」
「さうでもなからう、しかし君はいろんな事をするね、千代にも何か話したね」
「いや碌に話しもしないが、妻や妹を通して多少聞いたことはある」

「さうか、彼女が此間、君の家から歸ると、僕に向つて頻りに結婚を勧めるから、變だなど思つたが今分つた、彼女も歳が歳だけに生意氣な事を考へてやがらあ」と、舌打して起上つた。健次は腹の中で、「妹は箕浦に對する競争者のお鶴を自分に當がつて、箕浦を一人占めにしようと思つてるんだらう」と、妹の腹の底まで小憎らしく感じた。あんな男を珍重して戀とか何と

か云つてゐるのを蟲唾の出る程厭に感じた。

織田は健次の目付の鋭くなるを見て、「何を考へてゐるんだ」と聞く。

「君も餘計な世話を焼くね、自分の事だけで飽き足らなくて」

「餘計な世話ぢやない、友情から考へたんだ、一家の幸福のために僕の云つた通りにし給へ、どうせ通る道なら早く通つた方がいゝぢやないか」

「いゝ仕事に有付いたと思つて馬鹿に大家めいた事を云ふね、しかし僕は君や箕浦とは異つて何處へ行くんか方角が取れんから仕方ないさ」

「ぢや僕の説は用ひないんか、それで君はどうするんだい、責任の重い身體で」

「さあどうするかね」と、他人事のやうに云つたが、急に鬱陶しい色を呈した。

「君は學生時代と同じやうな氣であるが、よく家族の事を思はんで浮々してられるね、目の前に君の責任がころがつてるぢやないか」と純田は眞面目な口調を止めぬ。

で、織田が母と話して歸つた後、健次は冷い蒲團の中へもぐり込んで、「彼奴も馬鹿野郎だ」と呟いた。しかしこれは他人の間で氣焰を吐いてる時に叫ぶとは異つて、滅入つた絶望の聲だ。

(十二)

翌日は妹嬢寵愛の小猫が、晚餐の總菜用の魚を銜へて縁の下へ逃げ込んだので、一家は大騒ぎ。父は襦袍を着たまゝ寢室を出て来る。母は青筋立てて怒鳴り立てる。暫らくして何食はぬ顔の猫は鈴を鳴らして長火鉢の側へ降り、目を細くして口べたを舐めずつてゐると、皆なに頭を打たれた。母の愚癡が靜まると、家族は煮豆で晚餐を食つた。

健次はかねて頼んで置いた或社員の見せて、日其前に月島の或下宿屋の空間を檢分した。廊下に立つと、安房上總の山々が夢のやうに、ぼんやり水煙の向うに浮び、強い風が絶え間なく寄せて来る。隣室の話聲も風に渡れば波の音に没して聞えぬ。彼れは幼い頃讃岐の濱で恣に鹽風を浴びて遊んだことを懐氣に思出した。その瞬間新生涯を此處で始める。根岸の古屋を去つて腹一材に鹽氣を吸はうと決し、

二三日中に返事をすると約束した。で、家へ歸ると、母や妹に聞かされた一日中の大事件は猫と魚の話であつた。

(十三)

翌日桂田の家で晚餐をかねて小園遊會が開かれ、博士夫妻の親戚の青年男女、箕浦織田等の家族、凡て十數名が招待された。健次もその一人だが、生憎編輯締切の當日なので、原稿の計算やら雜誌の體裁やらの相談を持ち掛けられ、漸く夜店商人が店を出しかけた時分雜誌社を出て、生温かい空つ風に曝され、千駄木へ向つた。既に來賓は揃つてゐるらしく、笑聲も賑か

で、玄關には綺麗な女下駄や、磨き立てた靴が幾つも並んでゐる。客間へ通されると博士の傍に當る久保田と箕浦とが食卓を隔てて博士と向ひ合つて、盛んに話をしてゐた。

襖を開けると三人は一緒に頭を上げて健次を見た。床の間には大輪の白菊を生けてあり、鴨居には風の跡の海波を寫した新しい油繪を掲げてゐる。少尉の軍服を着けた久保田の顔は赤銅色をして、まだ文明に疲れない太古の活氣に漲つてゐる。箕浦の青い寶石入の襟留は、その際立てた白い顔黒い眼と相照らして光つ

てゐる。

「菅沼さん暫らくですね、相變らず元氣がい、つてちやありませんか」と久保田は快活に笑つた。

「どう致して、一寸見渡したところ、元氣は貴下一人で専有してやるやうだ」と健次は久保田の側に坐つた。卓上にはキユラソーの徳利が置かれてゐる。

「さあやり給へ、貴下が來なくちや、僕の相手が無い」と、久保田は杯を差し、「今日日は散々に君の噂をしたんですよ、箕浦君と叔父とでね、頻りに貴下の攻撃を始めるから、僕が一人で辯護しました。ハッくくく」

「さうですか」と、健次は杯を受けて、箕浦の顔を見た。箕浦は少し頬を赤め、

「僕は攻撃したんぢやないよ」と顔を外して、「久保田さん、今のお話の續きを聞かせて下さい、非常に面白い、貴下の話振りがお上手だから、僕には演習の模様が目に見えやうです」

「いや、もう止ませう、それより庭へ行つて、娘子軍を襲はうぢやありませんか」と、久保田は立ちかゝつた。

「何を話したんです、去年は貴下の決闘獎勵談を聞かされたが、今年はもつと痛快な新聞題が

あるんですか」と、健次が問ふ。

「なかに、僕が大演習に行つたから、今もその話をしたんです。しかし下らないき、演習話なんか。新聞で見ると面白さうだが、實際飯事見たいなものですから、あんな事をやつたつて、實戦に役に立ちやしない、先づ昔のお鷹狩のやうなものさ」と、久保田は縁側を下りて赤鼻緒の草履を穿き、健次を指招した。「さあ菅沼さん被入しやい、貴下は我黨の士だから」

「僕は少し休んでから行きます」と、健次は獨りでキユラソーを三四杯傾けた。博士と箕浦とは哲學上の問題を論じ出した。庭には花行燈が二三つ點され、燈火の側では著音器で喇叭節か何かが開え、草花の間を黒い影が動いてゐる。

「さして廣い庭でもないが、夜目には奥深く、一際すげれた樅の木は冴えた空を摩してゐる。」「織田は來てゐないか」と、四方を見廻した舉句、箕浦に問うた。

「あ、仕事が忙しいと云つて、出て來ない」「彼の妹は?」「來てるよ、君の妹と一緒に」

「さうか」

著音器が止むと、久保田の陽氣な太い聲が庭一杯に擴がり、やがて小兒等の萬歳の叫びと女

共の笑聲が聞える。

「君彼處へ行かうぢやないか」と、健次は箕浦の躊躇するのを無理に手を執り、庭へ連れ出した。博士は食卓に膝をついたまゝ、二人の後姿を見送つてゐる。

箕浦は久保田が四五人の子供を相手に訓練の眞似をしてゐるのを見て、歩を止め、

「あんな騒ぎの中へ行つても面白くない、何處か外を散歩しようぢやないか、君に話したいことももある」

「さうか」と、健次はどうでもいゝと云つた風で、箕浦の後について植込に添うて、人氣ない方へ向つた。丈長きコスモスが風に搖られて、淡く白い花瓣が肩に觸れる。箕浦はその一輪を手折つて、鼻で嗅いで弄んだ。

「君も此家へ來出してから、もう五六年になるね」と、健次は突如に聞いた。

「うん、君が一番の古參で、織田と僕と、皆なよく來たものだ」

「しかし君や織田はこの家に何か跡を残してゐるが、僕は物を壊しただけで、何にも貢獻してゐないね、この草花も大抵君が種を卸したんぢやないか、客間の油繪だつて君が周旋して誰れとかに畫かせたのだし、つまり君の盡力でこ

の家もこの庭も大分艶がついたが、僕の見た所ちや肝心の先生夫婦は大分艶気がなくなつたね、君にやさう思はれんかい」

「だって二人とも以前と異はんぢやないか、今夜は細君もひどくめかして若々としてる」

「しかし幾ら飾つても、心の艶は失せてる。僕にや二人が綺麗なお墓の中に埋もつてるやうに見える、あれで細君は獨りで藻掻いてるが、とても抜け出られやしないよ、君なんかにもい

ろんなことを云ふだらうが、つまり我々の若い息を嗅いで、腹の蟲を慰めてるんだ」と、健次は嘲るやうに云つた。

「馬鹿な事を」と、箕浦は淋しく笑つて、「先生の家に何時来ても穩かな柔かい空氣が漂つてるぢやないか、僕はこんな平穩な生涯を送りたいと思ふ」

「千駄木の哲人に對して、麴町の哲人になるんか、まあそれもいゝが、君は此頃は細君に可愛がられてゐないね、去年は箕浦さんでなくちや

夜も日も明けなかつたけれど、もう厭いてゐるらしい、寵愛が僕に移つてる」

「だが、細君は我々の仲間にや、誰れに對しても親切だよ、先日も織田のことを心配してたから、僕がよく話をして置いた」

「そりや細君も暇だから、人の世話を焼いてるが寵愛は別だね、目付が違ふ、言葉の味が違ふ、一人で焦慮して一人でベスマスチックになつてるから面白い、しかし君にや分るまい、一年間寵兒であつた癖に」

「そりや君が主觀的に見るからさう見えるんだ、細君は誰れに對しても平等で、何時も同じ調子ぢやないか」

「君にやさう見えるんだね、ぢやそれでもいゝ」と、健次は無愛想に云つて口を閉ぢた。蟲の音が遠く近く聞える。

「菅沼さん」と、久保田の呼ぶ聲がして、健次は振向いたが、箕浦は俯首いたまゝ草花の周圍を歩みながら、

「實は過日から君に會ひたかつたのだ、僕の手紙は見て呉れたらう」

「うむ見たよ、用は何だつたか、もう忘れてしまつたが」

「僕は近々に慈善音樂會を企てるんだが、君も賛成して盡力して呉れ給へな、先生も奥さんも助力して呉れる筈だが、君も助けて呉れ給へ」

「音樂會か、僕にや適任でないが、しかし君がやるなら助けてもいゝ」

「是非頼むよ、尙詳しいことは後で話すがね、僕はその會で自分で新作を朗讀するつもりだ」と云つて、箕浦は聲が沈んでゐる。

「此頃は頻りに朗讀が流行る」と、健次は獨言のやうに言つて、「君は大論文を書いてるさうだが、まだ出来ないか」

「あゝ、もう少しになつて完成しない、それに此頃はいろんな疑問が湧いて來て、思想が錯亂していかん」

「何故」

「何故つて、考へりや考へる程、自分の立てた理窟が分らなくなる、織田のやうな單純な人間は幸福だね」

「まあ、幸でも不幸でもないゝさ、僕はもう腹が減つて來た、彼方へ行つて何か食はうぢやないか、織田の妹やマダムにも會ひたくなつた」

と、健次は植込の中を横切り、黄ろい花、白い花を無慈悲に毟で散らした。箕浦は相手の顔を見て、低い聲でわざと平氣に、

「君は結婚するのか」

「織田が頻りに運動してる、どうなるかね」

「その方がいゝだらう、定りがついて」

「何が定りがつくもんか、それよりや君こそ早く細君でも情婦でも掛へ給へな、僕にや女をて

ものあ肉の塊としてあるから、口先や目つきで慰藉されたり愛を渡がれたりする必要はないが、君はさうはいかない。圓滿平穩なスカートホームで奴を造らなくちや、君の全身が満足されまい、僕は君の作物を讀む毎に、凡てが細君を欲する不安の聲を發してやるに感ずる。織田も君も僕も學校時代にいろんな夢を見て、世の中へ出ると、皆失望したり、考へも變つたが、君は終始一貫して、君の沈鬱症は戀人の手で電氣を掛けて貰ひさへすれば直ぐ癒る。だから早くさうし給へ、織田のやうに食ふに困るんぢやなし」

「君は故意に不眞面目なことを云ふ。悪い癖だ」と、箕浦は少し顔を赤らめ、「婦人に對しても、戀愛に關しても、もつと眞面目に深い意味を見なくちやならんよ」

「さうかねえ」と、健次は冷かに云つて、「併し僕自身もさう信ずれば仕方がない、人間は寄生蟲、女は肉の塊、昔から聖人がさう云つてゐる」

「まさかそんな聖人もあるまい、君は已れを欺いて趣味や情熱を蔑視してゐるんだと、空を仰いで、「見給へ、空は冴えて、月も鮮かに出かゝつてる、蟲でも秋の氣を感じて鳴いてゐる」

「ふん」と健次は嘲笑つたが、「しかしね、僕等寄生蟲にも血が流れてるし脳が働から、餘計なことを考へていかん、僕の拳にも力がある」と、秋風に長い髪を吹かせ、思ひに沈んでる箕浦の手を握つて急いで歩んだ。

月は木の間に洩れて、新しい光を縁側に投げてる。今迄庭で戯れてゐた連中も大方は各間に集まり、二つの食卓の上には鮎や柿や栗が盛上げられてゐる。健次は縁側に立つて一座をみ渡した。月陰に細君とお鶴とお千代とが鼎形に坐り、鮎を食ひながら、何か話しては笑つてゐる。光を正面に受けて、細君の白い齒と、紅と碧の二つの指環のちらちら動くのが目を惹いた。

「菅沼さん、此處へ來給へ、貴下がゐなくちや駄目だ」と、久保田が呼んだ。彼れは顔を熱柿のやうにして、胡坐を掻き、その前には博士が三四歳の男の子を抱へて、獨り笑壺に入つてゐる。

久保田の聲を聞いて、細君もお鶴も箸を置いて健次を見上げた。健次は目禮して、「お鶴さんにも暫らくだね」と、柿の皮を入れた盆を跨いで、三人の側へ割込む。「箕浦君、來給へ、便でに鮎でも抓んで來て呉れ」と、通路を塞

がれてぶづ／＼してゐる箕浦を指招いた。「兄さん、久伊田さんが呼んで被入しやるぢやありませんか、彼處へ被入しやらなくちや悪いでせう」と、千代は兄をこの平和な群から追出さうとする。

「後で行くから、お前は酒でも取つて來て呉れ」
「彼處で召上ればいゝに」と、千代は不承々々に立つて行つた。

お鶴は月袖を抱くやうにして袴の上に置き、半ばは口を開いて、浴ました顔で正面を見てゐるが、健次が壓制的にその側へ箕浦を引据ゑると、

「兄がよろしく」と會釋した。
「お鶴さんも今日は淑女然としてゐるね、それよ箕浦君に酌をして、うんと飲まして下さい、今日はこの人も憂愁の雲に銷されてゐるから」と、健次は妹の手から銚子を奪つて、お鶴の前に置き、箕浦の手に盃を持たせ、

「さあ飲み給へ、君のライフはこれで幸福になる、君の不安の念も消えてしまふ」
「僕は飲みたくない」と、箕浦は不快な顔をして、盃を下へ置いた。
「飲みたくなくても、僕が勧めるんだから飲ん

でもいゝだらう」

「菅沼さんはほんとに厭制的ね」と、細君は眉を擧めて、口元で笑つた。

「ぢや仕方がない、僕が飲まう、さあ注いで下さい」

お鶴は伸び上つて、不恰好な手付で二三度酌をした。

「兄さん、あまり召上つちやいけなくつてよ、今夜ね、お父さんが話したいことがあるから、早く連れて歸つて呉れつて、私云ひつかつたのよ」と、千代は兄の顔をのぞき込んで小聲で云つた。

健次はそれには答へず、盃を嚙りついてガブ呑を續けてゐた。一座は皆食つたり飲んだりして腹を脹らせ顔を赤らめ、次第に賑かになる。久保田の鬢音はますます高く、女共の笑聲を壓倒して響いてゐた。すると幹事役の書生が闕の外に立ち、羽織の紐をひねくつて餘興の報告をした。

「第一、菅沼令嬢と織田令嬢の英語朗讀、來客は座を改めて拍手した。健次はそれと見るや直ちに小皿に盛つた鮎を持って、書生部屋へ逃げ込み、藍枕で横になり、手摘みで食ひながら、室を見廻してゐた。空なしの小洋燈の光が

細く照らし、月隅には小さい本箱と赤毛布でくるんだ夜具があるのみで、裝飾は外に何にもないが、只机の側の壁に新聞附録と思はれる美人の石版摺が張りつけられてある。朝夕その持主の無聊を慰めてゐるのであらう。

健次は酒氣を發して、うと／＼してゐた。客間では拍手相ついで、尺八の音が消えるとピアノの音が聞える。

「兄さん被入しやい、もう歸るんですよ」と、千代は戸を開けて聲高く呼んだが、返事がないので側へ寄つて搖り起した。それでも返事がない。

「仕様がないうね」と呟いて去つた。後で健次は目をパツチリ開けた。妹の締切らなかつた戸がギイ／＼と幽かな音を立てて動いてゐる。久保田の詩吟とドタンバタンの音が流れ込む。

「オ、騒々しい」と呟いて、細君は手燭を持つて二階から下りて、何氣なく書生部屋の戸口を覗いて、「あら菅沼さん、此處にゐるのですか、どうなすつて」

「又千代なんかの金切聲を聞かされちやならんと思つて逃げて來たんですが、寢ると立つのが面倒臭くつて」と、健次は大儀さうに坐つた。

「随分無性だわね」と、細君は手燭を吹き消して廊下へ置いた。

「奥さん、貴女の演奏も濟んだんですか」

「貴下聞かなかつたの」と、細君は指先で柱を叩きながら、雪のやうな腕を露はしてゐる。薄光に土耳古模様の帯がぼんやり浮んでゐる。帯留の金具が光つてゐる。何だつてあゝ何時までも若いんだらうと健次は思つた。

「さうですか、私がうと／＼してる間に、何だかい、音がしたと思つた、まだ皆なゐるんですか」

「子供連れは歸つたけれど、貴下の連中は皆ゐますよ、さあ被入しやいな、これから面白い話があるんだから」

「先生や箕浦の話も儂が生えてるからなと、健次はひよ／＼と立上つた。緩んだ帯を不確な手で引締め前を掻合せて、戸口を出た。オ、デコロンの香ひが鼻を突いた。酒臭い息は細君の顔を無遠慮に撫でる。薄暗い廊下を無言で緩く歩いた。

この夏ピアノを洩れ聞きして心に妄想を描いた時が心に浮ぶ。小説の話に何か感じて細君が人間は獨身の間ですよと云つて、露氣のあめ目を向けたことを思出す。お鶴や千代の前ですら、美に誇つてる様子が思ひやられて傷々し

くなる。と、直ぐ博士の灰のやうな面が目につく。

彼は自分か細君の龍兒である、自分は勝利者であると思つた。で、幼稚な空想放縱な妄念が錯亂して湧き上つた。

しかし廊下傳ひは僅かに一分間、火花の如く消えては浮ぶ空想も僅かに一分間に過ぎなかつた。障子を開けると、残者を圍んで四人がばらばらに坐つてゐる。

「今日は何だか蒸暑いね」と、細君はぼ一つと紅らんだ顔を擧げた。

「普酒さん、何處へ雲がくれしてたのです。皆な一つづつ隠藝を出したのだから、貴下も一つやらなくちやならん、箕浦さんもワイオリンを弾いたのですよ」と、久保田は健次の手を握つて、「否だと云へばこの手を放さない」と、笑ひながら、グツと力を入れて握り締めた。

「ぢや何時までも握つて給へ」

「さあお演んなさい、謹聴する」

「何をやります、貴下の好きな決闘ですか」

「ハ、ハ、決闘も面白いが、一つ都々々一でも端唄でも」

「唄へるの、普酒さん、貴下は何時も無藝ね」と、細君が添口した。

「何、唄位唄へなくはない」と、健次は自己流に「秋の夜」を兩開聲を張り上げて唄つて、巧くとも拙くとも何うでもよいと云ふ風だ。

「巧い感心々々」と、久保田は怒鳴つて兩手を亂打し、「さあ視杯を獻じよう……それから、一つ僕の愛國の唄を聞かせます、謹聴し給へ」と、胸を突出し、兩手を膝に置き、目を細くして土佐節を唄つた。「死ねや死ね〜五十年の命

何の惜がる國のため」と、強い響きが締切つた座敷の中に擴がり、響きと共に、壁に映つた角張つた肩が動揺する。

唄ひ終ると太い息を吐いて、「どうだ諸君巧いでせう、こんな小さな部屋ぢや調和しないが、荒海の波の音を聞いて唄ふと、百萬の蒙古勢でも退治する氣になる。つまり愛國の精神を唄つたのです、なかにヴァイオリンやピアノは駄目だ」と怒鳴り、いつたり首を垂れて、「我々青年は太平洋の波の音を三味線にして、この唄を唄はにやならん、それに不服な奴がありや、僕が相手になつて決闘する」と云つて、又飛上るやうな聲で笑ひ、健次に凭れかゝつて、

「貴下は我黨の士だ、國家のために自愛して呉れ給へ、僕は戦争に行つて死ぬんです、國家のために死ぬるんです、今年日露戦争が遅か

つたら、僕は遼東の野に屍を曝すのだつたが、無念だ」と、叫んで、健次の肩から立ち落ちると、そのまゝ、逞しい握拳を投出して、大の字なりに寝て、正體がなくなつた。

博士は最初からあまり口數を利かず、只座中の話を聞いて微笑々々してゐる。酒も二三杯は付合ひに飲んだが紅味は何處にも見えぬ。お鶴と千代とは速應して人形のやうに並んでゐる。箕浦は夢見る如くうつとりしてゐる。一時の騒ぎが大嵐の跡のやうに静まり、只久保田の荒い鼻息に名残を留めてゐる。

暫らくは互ひに打見守つたのみで、誰れも口を利かぬ。疲勞の色が人々の顔に現はれかけた。

「もう歸らうか」と、健次は箕浦を見て小さい聲で云つた。

「あゝ、もう遅くなつたね」と、箕浦は金鎖の小さい時計を出して見た。

「まだ早いぢやありませんか」と、細君は慌てて引留めて、お愛想に茶を注いで廻つた。健次は立ちかけて又坐つた。外の連中も容易に立ちさうでない。で、お鶴と千代とが久保田の寝姿を見て、何やら耳語している間、健次は膝を崩して煙草を吸ひながら、細君の顔を見詰めた。細君

は淋しく笑つた。健次は何か云はんとしたが、口も心も疲れてしまつたのか、そのまゝ口を噤んだ。

一座はそれ／＼に異つたことを思つて、化石のやうに坐つてゐる。健次は張詰めた気が弛んで誰れかに縋りついて、自分の本音を吐いて泣いて見たくなつた。「世界に残された淋しい人が二人ある」と、自分が頼りなく厭になる、細君の顔も同じ思ひを現はしてゐるやうに見える。で、無意識に酒を飲んで目を轉ずると、煙草の煙に巻かれた鴨居の額の海波が騰げに凄く色を見せ、床の間には菊の花片が何時の間にか散つてゐて、燈火の薄い光に漂つてゐる。戸外は暫らくは寂としてゐる。「どうした大變靜かだね」と、博士は沈黙を破つて、力のない目を見張つた。

人々の異つた思ひもばつと消えて、互ひに目と目で歸りを促し、一同に挨拶して座敷を出た。健次も後から續いて行つた。細君と博士とは玄關に立つて、若い男女の影を見送つてゐた。

戸外へ出ると、健次は四辻に立留まり、箕浦に向つて、

「君はこれから歸らんか、何時だらう」

「もう九時だよ、歸らなくちゃ仕方がないぢやないか」

「しかし僕も物足らん、このまゝ歸つちや寝れりやしない」

「ぢや何處へ行く」

「兎に角君はお鶴さんを送つて行くんだから此處で分れよう」

「さうか」と、箕浦は千代に目禮し、「ぢや菅沼君近日訪問するよ」と云つて、お鶴と並んで曲角を曲つた。

健次は箕浦を忘れお鶴を忘れ久保田を忘れ、桂田夫妻がああ駢ぎの後で悄然差向ひでゐる株をのみくつきり思ひ浮べ、夢のやうに薄暗く彼の家を遮つてる立樹を顧みてゐると、

「いゝお月夜ね」と、千代は空を仰いで詠歎の聲を發して、「兄さん何を考へて？」

「おれは最少し散歩して歸るから、お前は先に歸れ」

「だつてお父さんは兄さんを持つて被入しやるんですよ、早く歸らにやいけないわ」

「今日に限つて親爺は何の用があるんだらう、病氣でも悪いんか」と、健次は今朝も朝寝をして父の病床を見舞はずして、社へ行つたことを思出した。この二三日は父と染々話したこ

とはない。

「別に悪くもないの、今日はお浦から起きてる位ですもの」

「さうか、ぢやおれに何の用があるか、お前知らないか」

「何ですか、よく知らないわ、…だけど、今日お隣の諸岡さんがお見舞ひに被入しやると、お父さんは何だか心細いことを話してたやうだわ、兄さんのことも云つて」

「おれのことを？」

「え、…お父さんは一生苦勞したばかりで、ちつとも取柄のない人間で終るんだけど、兄さんを立派に育て上げたのが大業だと思つてね、自分は今死んでも残り惜くはない、魂は子供の頭に傳はつてる、健次は男らしい大きな考へを持つてるから何時かは、えらい學者とか政治家とかになるよと云つてたわ」

「諸岡の隠居にそんなことを話したのか、親爺の十八番だ、話の種が盡きるとおれのことを持出す、聞く奴も聞く奴だね」

「でも平生とは話振りが異つて、何だか憐れつぽさうだから、私可笑しかつたわ、それでね、諸岡さんがお交際に見さんを褒めるとさも悦しさうだつたわ、病氣になつてからは、馬の話は

立消えになつて、私達にまで、どうかすると、兄さんの話ばかりしたがるんだから變だわ」と云つて、間を置いて小聲で、「あんな風だとお父さんもう老耄ちやつたのね、今夜あたり屹度兄さんに遺言でもするんだわ」と云つて無邪氣に笑つた。

千代は止切れなく家庭の話をして、兄さんどうなさるの。「兄さんが何とか今の中に極りをつけなくちゃ」と、此頃に珍らしく大人びた口を利いたが、健次は只厭な氣がして、あまり相手にしなかつた。

(十四)

それから二三日して、父は寢床を離れ、縮入の重ね着に襟巻で身を固め、トボくと出勤するやうになつたが、家の者にも目につく程寢れて、以前の元氣は急に失せたやうだ。そして毎晩健次の歸るまでは目を合はさず、絶えず氣に掛けて待つてやるやうになり、たま／＼顔を見ると、十年も別れた子にでも會つたかのやうに、一分間でも長く側に置きたがり、何とか話をしかける。それが我子の氣分を害ねぬやうに如何にも遠慮勝の態度である。健次には父の心根がよく見え透き、自分が家にゐなければ心許な

がつてゐることを知つてゐるが、それが却つて不快で溜らず、大抵は外してしまふ。次の日曜には朝餐が済むと、父は健次の意を迎へてか、彼れが雑誌に書いた「社會と文學」と題する間に合せの平凡な議論に對し、馬鹿褒めをした上、自説をも吐きかけたので、健次は苦笑した。「一人に褒められたくて書くやうな頓問な眞似をするものか、質問ちやあるまいし」と、自分が詮方なく爲てることが、何だか他人から褒めて貰ひたさに勤めてると思はれるのが不愉快だ。自分は名譽の接待に興りたくはない。

で、彼は父の前をそこ／＼に逃げ出した。足は行場所に迷つて、遂に麴町に向ふ。織田の住んでゐる町まで来て、訪はうか訪ふまいかと躊躇してゐると、前の三階建の二階の窓には、色の黒い耳に環を嵌めた女と、青い腹掛をした辮髪の男とが頭を並べて、聲高に分らぬ言葉で饒舌つてゐる。路次を隔てて隣の洋服店から、香の高い色の白い毛皮をぐる／＼巻きつけた西洋婦人が犬を連れて出て來た。二人の支那人はそれを見ては面白さうに笑つた。その邊に散らばつてた子供等は婦人の前に集まつた。婦人は口笛を吹いたり、何か早口に云つて、犬を絞してゐた

が、やがて店から肥満の男が出て來ると、一緒に勇ましく去つた。支那人も引込んでしまふ。健次は無心に見てゐたが、町が元のやうに淋しくなつて、埃を含んだ風が顔に吹きつけると、身震ひして路次を入つた。すると向うから織田が大きな身體を縮めて、例の懐手でノソリ／＼やつて來て、

「大層寒さうな顔をしてるね」と、微笑々々顔で云ふ。

「何處へ行くんだい」

「一寸買物に、今箕浦が來てるから御馳走しようと思つて……君もいゝところ來た、まあ上つてゐ給へ、直ぐ歸つて來る」

健次は何時ものやうに縁側から上つた。座敷の真中に箕浦が坐つてゐて、瀬戸物の火鉢には藁灰の中に、どつきり火が盛つてある。この前來た時よりも部屋の様子が明るさうだ。織田の母が茶を持つて來て、手短に挨拶をして引込んださきり、細君の顔も見えねば病父の聲もしない。「静かだね」と、健次は平生よりは低い聲をして、「君は此頃此家へよく來るさうだね、織田と話が合ふかい」と、箕浦の向うに腰を据えて、そのチカ／＼光つてゐる顔を見た。

「いや、滅多に來んのだが、今日は織田が葉書で僕を呼びつけたのだ」

「さうか、織田が君に會ひたがるのは不思議だね、何の用事だらう」

「別に用事でいふ程でもない」と、箕浦は澄ましてゐる。

「織田も多少得意になつてゐるだらう」

「どうだか、餘程忙しさうだよ」

「しかし今日は御馳走するちふんだから珍らしい」

「さうだ」と、箕浦の返事の空々しいのが目につく。

同じく交際の深い友人であれど、健次は織田に對すると、常に弱者を庇ふと云ふやうな態度を執り、箕浦に對すると、何となく厭へつけるやうな態度を執つてゐる。そして箕浦は彼れの態度を左程厭がりもせず、寧ろ自ら一步譲つて満足してゐる。自分の意見の批評も先づ彼れに求め、いろいろの感想もその前に吐露する。

しかし今日は多く語らぬ。何となく隔てを置いて、何時ものやうに詩的話もせねば、人生觀染みたことも云はぬ。

健次も奥の病人に憚つて、元氣のいゝ口も利かず、暫らく黙つてゐた。去年のまゝで薄黒

くなつてゐる蚊帳の釣手が、隙間渡る風に緩く動いてゐる。箕浦の呼吸の音もよく聞える。で、互ひに睨み合つてると、次第に縁もない他人臭い色が相手の顔に讀める。

「此奴どうかしてるわい」と、健次は冷笑を洩して、皮肉の一つも云つてやらうかと思つてると、溝板に重い足音がして、やがて織田は歸つて來た。

「馬鹿に畏まつてゐるね、どうしたい」と、大人振つた音聲で云つて、目尻を下げてジロ／＼二人の顔を見た。織田はこの前とは打つて變り、心に餘裕の出來たのか、後に病人のゐるのも忘れてゐるやうだ。平生なら箕浦が喋舌のを黙聽するのだが、今日は自分から話題を持出して氣焰も吐く。

「だが、仕事は勤まるかい」と、健次は話半ばに聞くと、

「勤まるとも、それに彼店の主人が僕の家の事情を聞いて、同情して呉れてるしね」と、ますます得意で、仕事の話まで持出して、「僕ももう四五年したら、基礎が堅くなるよ。目算もちやんと立つてる」

「生意氣な口を利きやがると、健次は腹で思つた。

細君は大きな腹をして、青い顔に髪を亂したまゝ、刺身に麥酒を運んで來た。健次はこの寒いのにも思つたが、一二杯呷つて、低い聲で、

「君、お鶴さんはゐないか」

「あゝ朝からゐない」

「妹でもゐないよ、君の家は羨びてるね」

「なあに、今に僕の後継者が生れるから、大いに光彩を放つさ、君も早く後継者を作り給へ、空論を吐かないで」

「四五日會はん間に大層先輩になつたね、箕浦君も教訓を聞きに來るんかね、この人に」

「まあ、さうだ」と、箕浦は麥酒で濡れた手をハシケチで拭ひながら、「君と話すこともあるんだ」と言ひだした。

「何を、音楽會の事か」

「いや、それ許りぢやない」

「ぢや話し給へ」

「まあゆつくりでもいゝ」

「ぢでいゝぢやないか」

「歸り途に話さう」

「因循だね」と、健次はもう微醉に目を染めて、思はず聲の高くなるに氣づいて一寸後を顧み、「僕はもう直ぐに歸るんだから、今話し給

へ、どうせ君はお鶴さんの歸るまでゐるんだらうから」と小聲で云つて笑つた。

箕浦は「そんなこと」と云つたばかりで黙つてしまつた。織田は無神経な顔で絶えず微笑してゐたが、「今日は僕が話があつて来て貰つたんだ」

「例の事でかい」

「うん」

「でどう極つた、君の重荷はどうなつた」

「君は僕の説を用ひんから仕方がないさ、僕も考へ直さなくちや」

「さうか、君も何時の間にか、箕浦君と意氣投合するやうになつたんだね」

と云つたが、健次は腹の中で、「織田の奴、とうとう箕浦に妹でも賣付けるんだらう」と思ふと、不思議に氣がむしやくしやして、麥酒を二三杯グイ呑みにして、急に立上り、「さあ歸らうと、二人が引留める間もなく縁側を下りた。

「氣まぐれな男だなあ、何を考へ出したのだらう」と、織田は懐手のまゝ暫らく閑の上に立つてゐた。

健次の足は行場所に迷つた末、遂に千駄木へ向つた。

ダマスクスへ

「冬」もりの北山おろし吹く時は風のたよりに知らせてたべ。筑波の山のかなたには君もゐますと聞く時は……」

信乃と告別の際の濱路のみやびやかな口説は、十歳前後の私の心を湧かした。爾來わたしの讀書読みはいろ／＼に變遷した。

今假りに、數十年來の私の銷閑の具ともなり心の糧ともなつた古今東西の數多の書冊の中で、どれを一つ撰ぶかといふと、今の私の氣分では、躊躇することなく、ストリンドベリーの『ダマスクスへ』を取上げるのである。私は

彼れの物は随分讀んでゐる。しかし、『死の舞踏』や『癡人の懺悔』などは棄ててもいい。彼れの一生の道程を描いた『ダマスクスへ』だけ

で澤山である。これは、今の私に取つては經典のやうに思はれる。これは讀者を喜ばさうとして書いたものではない。多數の見物を喜ばさうとして書かれたのではない。この戯

曲が外國で上演されたかどうかとも私は知らないが、こんな戯曲については上演の能不能は問題外としていい。寡聞なる私は、戯曲の形式でこんなものを書かれたのは、外に一つも知らない。

口すぎのために、活動、小説、戯曲などそれ／＼に人を喜ばすものを書かなければならぬまいが、やがて死ぬべき運を背負つて短い生命を生きてゐる我々は、仁者の如く人を喜ばすことばかり考へてゐるは許らないではないかと、私には思はれる。ただしも、喜ばれなくつても、小さな『ダマスクスへ』でも書いてゐる方が、自分の死生の苦に對する鬱憤が晴れていゝやうに思はれる。

『闇はどこから』
『先づそのものから——でなければわたしには分らない』
『それは多分ほんの影であつたのだ。なぜといつて影には光が付きものだからね。しかし闇には光は必要でない』
『もうお止め。いつまでもいつても切りがない』
『左様なら』

(一) 白鳥勝筆集 (一)

地獄

これは今から十四五年前のことである。

中國のある小都會の東の町はづれ、鬱蒼たる山の麓、左右の田地や農家よりは一段高い處に、木造の西洋館が三つ建つてゐる。上手に一つ離れてゐるのがB——學院といふ耶穌敎學校。それから斜に半町ばかり下つて二軒並んでゐるのが米國宣敎師の家族の住宅。最も眺めに富んで、居ながらにしてガラス窓越しに、市街は云ふに及ばず、それを取圍んだ田野まで、遠く見渡される。春でもあらうなら、この近所には櫻の樹が多いから、この白塗りの西洋館が花で包まれ、自ら得も云はれぬ風情を添へるのだが。

時は秋の末。寒い風さへ吹き荒んで、木梢が悲しげに音を立ててゐる。前夜の雨はまだ乾かず、朽葉は泥に塗れたまゝ靴や下駄に踏躪られてゐる。西洋館からはストーブの烟が豊かに舞ひ上つてゐるのみで、午後の二三時頃には屹

度小庭で戯れてゐる美しく二女の影も見えず、シーソーといふ遊戯器械の側には鶏が羽掻を縮めてクス／＼喉を鳴らしてゐる。

學校の小使部屋から、小柄な色の淺黒い四十前後の女が把手の壊れた扉をガタビシ開けて出て、吹きさらしの廊下で鐘を鳴らすと、やがて「ドヤ／＼と學生が入口へ出て離れ／＼に坂道を下りた。かの女小使は手拭を被り、如露と笠とを持つて空室へ入つて掃除に取掛つたが、ふと窓の側にまだ居残つてゐる一人の學生を見つけて、

「今日はお寒いぢや御座いませんか」と、お愛想を云つた。

「さうですか」と、學生は閉ぢてた目を開けて低い聲で云つたが、直ぐに又目を閉ぢて壁に頭をもたせ、兩手を帯に挟んで考へ込む。

小使は一つ／＼椅子を片寄せては掃いてゐたが、學生は容易に歸らうともせぬ。見知らぬ顔だが、學生が變に見えし邪魔にもなるから、一貴方、どうかなきさいましたかと、側へ寄つて

馴々しく問うた。

「いゝや、どうもしない」と、學生はさも五月蠅いと云はねばかりに答へて、其處を動かかなかつた。

「ぢや、何をしていらつしやるんです、御氣分でも悪いんなら、私の部屋でお休みなさいましな」と親切に云つたが、學生は何とも答へないのて、いよ／＼不思議に感じて、「ねえ、さうなさいまし、火鉢にどつさり火が熾つてますし、お湯も沸いてゐますから」と、顔を覗くやうにして促すと、學生は物をも云はず、ツカ／＼と出て行つた。教科書のノートブックを置き忘れて行つた。そして小使がそれを氣付いて、窓を開けて呼留めようとした時は、もう影も形も見えなかつた。

「變な人だ、何時入學した人だらう」と、小使は訝りながら、夕暮まで掃除やら戸鎖りやらを手一つでやつてゐた。

學院は小ぢんまりした二階建である。教室は常に掃除が行届いて、壁でも床でも汚れ目が少く、机でも腰掛でも普通の私立學校とは比較にならぬほど小綺麗だ。敎課目は略々中學程度で、別に神學部があるが、これはほんの四五人の學生が、外人から學資を補助される返禮に學

ぶに過ぎぬ。普通の學生は論理科で、耶穌の講義を聞かされる位が、他の學校と異つてゐるのみで、學科目はさしたる耶穌臭味はない。そして校規は極めて自由で、英語研究の便利は多い。しかし耶穌といふ名の思まれるためか、學生の人数は一年から五年級まで凡てを合はせても、僅か五十人に充たず、その大半は信者の子弟である。

小使はこれ等の學生の顔々を大抵記憶してゐる。辨當時に茶を與へたり、着物の統びを縫つてやつたり、下宿生には自ら進んで洗濯までしてやる。二年三年この學校にゐてこの女の世話にならぬ者は一人もない。當人もそれを樂みとしてゐる。夫には生別れ子供には死別れ、獨りぼつちこの女はまだ老いもせぬのに世間を離れて尼のやうな生涯に満足し、忠實に學校の用事を務めて暇には若い者の世話をしたり、孤兒院の子供の衣服を縫つてやつたり、獨り神を念じ聖書を読んだりして、心寛やかに日を送つてゐる。そして此頃は學生の辨當の喰ひあまりを棄ててしまふのが勿體ないと云つて、二三羽の鶏を飼ひ、その生んだ卵は、恩人たる宣教師P氏に捧げてゐる。

で、今日も掃除が済むと、鶏を塋屋へ入れ、

神に感謝して夕飯の茶漬を味さうに食べた。食べてしまふと針差しを出して冬物の仕立に取掛つたが、書に見たかの變な學生が折々思ひ出される。青い顔をしてゐるが、臍でも悪いんだらうか。書物を忘れて、今時分困つてゐるやあしまいか。明日は氣をつけてゐて、あの人が来たならば、早速書物を渡して、何とか氣の靜まるやうな口を利いて上げようと思ひつけ、一口の柔しい言葉も、一針の縫物仕事も何んなにか神様の御意に慥であらうと自ら感に打たれてゐた。

二

女小使がから思つてゐる頃、かの學生は農家の座敷で、火鉢を抱へて首を縮めてゐた。だだつ廣い不恰な部屋で、一方は帯戸で仕切り、壁に沿つて長持と古寫籠が並び、床の間には斑點のある天照皇大神宮の掛物がかまつてゐる、そして古寫籠や長持や掛物は彼れの頭の中に染み込んで、背を向けてゐても目を障つてゐても書物を読んでゐても、この室に居る限りは全くそれを忘れることが出来ぬ。終ひには眞夜中の暗い時にも、ハツキリ見えるやうになつた。或時にはそれが堪へがたい恐怖の種となることも

ある。まだ幼い頃乳母から心中の話を聞いたことがあるが、その男と女とは親々に妨げられた擧句、物置部屋の長持の中で自害したのである。血に染んだ有様、死人の顔付。乳母の話のままに、今も尙ほ頭に刻まれてゐて、この長持の中に心中した男女が血塗れになつて居りはせんかと思はれ、そんな馬鹿な事がと打消しながらも、矢張り心が其方へ取られて一夜憤んだこともある。しかし今夜彼れが火鉢を抱へて考へてゐるのはその長持の男女ではない。學校の聖書の講義で聞いたソドム、ゴモラの慘狀が目目に浮んで離れんのである。一度深く頭に喰入らせたものをば、容易に取去れんのが、彼れの特質であつて、今日はその昔話が彼れの全心を奪つてゐるのだ。市民の腐敗を憤つて、天から焔を下して全市を燒盡したと聖書にも書いてあるし、宣教師のP氏が片言の日本語交りで、尤もらしく説明した。しかし彼れはどうしても理解出来ぬので、P氏と争つた。それ程人間の不品行が嫌ひなら何故初めから善人はかりつくらなんだ、一度悪い人間の種を播いて置きなながら、それが悪事をしたと云つて罰するのは理に外れてゐる、無茶苦茶だ、と青い頬に赤味を帯びて、片言の英語交りで詰つたが、P氏は例の

悪魔を持出して苦しむ辯解をした。で、その時は耶穌教は誑を云つて誤魔化すものだと思つたが、誤業が終つて考へて見ると、或はそれが眞實ぢやないか、理に合つても合はなくても、そんな事が實際有るのぢやないか、と思ふと、その恐ろしい光景が強い刺戟を頭に與へて目の前にちらちらするやうになる。

彼は一晩それ苦められた。

三

彼れの名は秋浦乙吉、年齢は十八、信者でもなく、又宗教に心を傾けてゐるでもない。此地の縣立中學を三年級まで經て、成績も群を抜いてゐたのであるが、繁瑣な規定の窮屈なものと、學友の粗暴な舉動、團體的壓制の激しいのに堪へかねて、教師や保證人の留めるのも構はず、獨斷でこのP學院へ轉校したのである。教場の深沈で束縛もなく、惡い友人のないのが何よりも悦しく、獨り讀書に耽つてゐる。去年の暮から一年越し、毎日曜に病院へ通ひ、絶えず服藥してゐるが、此頃はそれも止めた。初めから醫者の診斷が氣に入らなかつたので、藥の效目は些とも信じてゐない。醫者は慢性胃加答兒が原因で、神經も衰弱してゐるといつて、何

時も相變らずの水藥と粉藥とを呉れるが、その病名が乙吉には不服であつた。自分は胃病でも神經衰弱でもない。眞の病源は後腦の一部にあるので、其處に何か有毒物が溜んでゐるに違ひないと確信してゐる。そして二三度醫者に向つて所信を述べ、後腦の四みを示して、「此處を切開して見て下さい、それでなければ幾ら藥を飲んだつて駄目だと思ひます」と懇願したが、醫者は只笑つて、

「そんな處が切開出来るものか、安心して服藥しとればいゝよ、不養生さへしなければ乾度癒る」と眞面目に聞いても呉れぬ。

乙吉は、死んでもいゝから切開して呉れと強請して、醫者に叱られたこともある。で、わざと醫者の注意に背いて不消化物を食ふ、夜更かしをする。そして三月たつても四月たつても、病氣が少しもよくならぬので、ますます診斷の間違ひを確信し、醫者に對して、「それ見る」といつた態度を見せてゐる。

かうして醫者に勝つのは多少の慰めにもなつたが、その中學食も嵩張つて、とても無用の藥代を支出する餘裕はなくなり、自然に病院通ひを怠るやうになつた。どうも自分は後腦の異状のために倒れるのだ、祖父のやうに發狂する

か、叔母のやうに卒倒して死ぬるか、どの道異様の死は免れないのだと、さながら首の座に直つてゐるやうに、觀念の手を合せてゐた。子供時代に縁側から轉んで腹を打ち、一時不省に陥つたこともあり、魚の身が思ふやうに撚れぬと云つて、ひた泣きに泣き入り、そのまゝ氣絶したこともあるさうだが、その時から、生命の半ばは消え失せてゐるのかも知れぬと、自分の一生はさも離れがたない惡運に取付かれてゐるやうに感じてゐた。

彼れの郷家は祖父の代から田舎で指折の資産家であつた。そして父銀藏は寒い風にも當らずに人となり、幼少の頃から暇に任せてアラ／＼遊んでゐるが、十五の年にもう茶屋酒を飲み覚え、一二年の間に五六里以内の遊女屋で誰知らぬ者もなかつた。兩親も折檻の手段が盡きて、嫁でも貰つたならば多少身が堅まるだらうと、これ一つを最後の名策として訪方へ口を掛け、銀藏が十八の歳に無理やり結婚させた。しかし常人は一人の女房位に満足して、あんな面白い所を見棄てられるものかと、四五年は身代のあるにまかせて道樂をし、放浪息子名は近村に鳴り響いた。そののらくらの間にも三人の子を拵へたが、二人は襦袢の中に死んでしまひ、

中の一人だけがやう／＼に呼吸をつづけて生立つた。それが即ち乙吉である。乙吉は父が二十一の遊び盛りに生まれ、物心のついた頃は、先祖傳來の大きな母屋は人手に渡り、離家を建直して、家族は其處に住んでゐた。

乙吉は小學時代から書物に親しみ、又乳母や祖父の側で物語を聞くのを好んでゐたが、戸外の遊戯には少しも興味を持たなかつた。朋輩に接することも嫌ひであつた。「後の山には天狗が棲んで、夕闇に遊んでる子供を攫つて行くことがある」と向うの川には河童が居つて、泳いでる子供の血を吸ふことがあるなどと聞くにつけ、山も川も只恐ろしいものとなつて、厥摘みにも水泳ぎにも行きたくはなかつた。生得記憶がよくて、一度覺えたことは決して忘れず、時々夢をも長く覺えてゐることがある。度々風邪に罹つて發熱するが、そんな時には吃度幻の中に正體の分らぬ異形の者が現はれて、夜具の前後左右から、自分を壓迫して来るやうに感ぜられる。全癒して後も、幻は頭から拭ひ去られない。成長しても病んで發熱すると、必ずこの幻が空中に現はれる。そして彼れはその幻に攻められると、看護の者に向つて大きな者が来る大きな者が来ると叫ぶのが癖で、

父からは「又大きな者が始まつた、臆病な奴だな」と笑はれてゐた。

或日小學の教師から、天狗も河童も狐憑も皆無智の昔人間の拵へ事で、人は萬物の靈長で、人の道さへ踏めば、世界に恐ろしいものはないと教へられた時は、急に頭が軽くなつたほど悦しかつたが、かの「大きな者」は教師の説明でも消え失せない。中學へ入る頃からは最早大きな者を只妄念としてその存在を認めなくなつたが、その代りに更に恐ろしい思ひに苛まれるやうになつた。遺傳の理法、生理上の定則、此等を教師から聞き、書物や雜誌で讀む度に自分は見事なる刑狀持ちで、何時その處となるかも知れぬ。

そして今彼れの唯一の慰藉は人に見られぬ部屋で一人讀書に耽ることである。

四

彼れはこの九月に學校へ入學すると共に、女宣教師から英文の聖書を貰つて、暇々に和譯のと對照して讀み、時々學校の聖書科へも出席してゐれど、是迄は一度もその教へから深い感じを與へられなかつた。しかるに今日のソドム、ゴモラの簡單な昔話は初めて彼れを刺戟

して、色々の聯想を起させる。長く／＼火鉢の側に坐つと坐つて、一途に考へ込んでゐると、ソドムの町焼滅の景が一つの油繪となつて心に浮ぶ。

そして、果しもなく自ら疑ひ、自ら恐れてゐる間に、神經は冴える、夜は更ける。温かい善哉餅を賣歩く「善哉々々」の聲が遙かに耳に震ひつく。

「秋浦さん、御勉強ですか」と、聲を先立てて、帯戸を開け、宿の息子の米松が入つて来た。如仕事や野菜の出商ひが厭で、四五年前から尾の道の材木問屋へ奉公してゐるのだが、此頃は病氣のため歸省して休養してゐるのだと云つてゐる。しかし兩親との話の様子では、彼地で何か不首尾な事を出来して解雇されたらしい。退屈だから時々話に來るが、乙吉はそれが厭でならぬ。で、どうかして一刻も早く撃退しようと思つて、

「明日の下讀をしようんですよ」と、わざと机へ捻ぢ向いたが、相手は祭しの利く奴ぢやない、ちやんと坐つて煙管を取出し、
「貴君は御勉強が過ぎるから毒ですぞ、過ぎたるは尙及ばざるが如しと孔子様か誰れかが云つてるぢやありませんか、だから貴君も偶にや

私ども無學な者とお話をなさるのが薬になり
まさあ一と、抱け聲で云つてこつく。

乙吉は無言で顔だけ相手の方へ向けた。如何
にも所在なささうだ。

「親爺はすっかり貴君に感心してまさまあ、こ
れまで色んな書生さんをお宿め申したけれど、
貴君ぐらゐの御勉強一方の人はないつて、始終陰
でお噂をしてゐますよ。私は又金一の方でやつ
つけるつもりだから、學問と云つちや、手紙一
本破りに書けやしませんかね、その代りこの胸に
や、六韜金儲けの虎の巻と云ふのが、ちや
んとしまひ込んであるんですからな。今に運さ
へ向いて来りや占めたものだ。左様さ、貴君が
大學校をお卒業なさる時分にや、私だつて一身
代仕上げるに云ふ運びになるでせう。學者にな
るのも金持ちになるのも、つまりや同じ道なの
さ」

「ぢや貴君は何をして儲けるつもりなんです」

「金になることなら何でも」と、目をパチクリさ
せて、吸殻を吹出すと共に不慮に唾を火鉢の
中へ吐き、火箸で灰をかけながら、「仕事に好き
嫌ひはない、何でもやる決心してるんだけれ
どね、一度海賊の仲間に入れと云はれた時にや
ぎよつとしましたよ、何ぼ金が取れたつて海賊

ぢやね、一寸二の足を踏みまさまあ」と、獨り
でガラ／＼笑ふ。

乙吉は小氣味が悪く、目を俯せて横見をして
ゐた。しかし米松は驚かない。そして自分が讚
岐へ村木買占めに行つて、競争者に一泡吹かせ
たこと、尾の道の遊廓で遊んだこと、町藝者が
幾人ぐらゐ居て、その中の小富といふのは上方
にも珍らしい中國切つての美人であること、そ
の美人とも可成深い馴染を重ねたのだが、もう
一息で自分の物になる所だつたのを惜しいこと
をしたとか、女を口説くには色んな手があるん
で、かう行くかどうか御出でなさるかなんて、際
をねらつて掛引をやつてる間が面白い、商賣
も同じでさあ、などと自慢さうに話して、
「若い時にや偶にや遊ばなくちやねと峻かさ
やうに云ふ。親爺の手助けをして大根抜きをす
るのも厭だし、市街をぶらついてても小遣錢もな
ければ張合もないし、毎日角帯に前掛をかけて
欠伸ばかりしてゐるのも辛氣くさいので、乙吉
でも引張出さうと思ひ、度々謎をかけて見るが、
乙吉は初めから相手にしない。一寸の散歩にも
彼れ目を避けて出る。

「私はどうせ長くこの土地に居りやしません、
遅くとも今年中には何處かへ行きます、成るべ
くなら神戸か大阪へ行きたいものだが、…旅
へ出ると、そりや面白いことが多い。私はこれ
で九州から四國、紀州の方まで飛歩いてますぜ」
と米松は小止みなく話の種を探つて、倦むこと
がない。波に洗はれる高松の城、樹木に囲まれ
た琴平神社、播州灘の眺め、室島の景。その縮り
のない聲の中に風情を帯びて現はれて来る。
「舟で寝て、苦の中でお月様を拜むなんて洒落
てまさまあ、いつそ海賊にでもなつて臺灣の邊へ
でも乗出した方が面白いかも知れん」と、獨り
笑つて愛想よく暇を告げて行く。乙吉は邪魔者
の退散すると、居住ひを直して机に向つたが、
不思議にも米松のゐる間は、ソドムの光景も自
分の痛苦も忘れてゐたので、彼れの去ると共に
われに歸ると、頭の軽くなつてゐるのを感じた。

五

翌日は風も静まつて、八時頃には月外はいゝ
氣持に暖かい。乙吉は定刻に遅れぬやうに身支
度して學校へ向つた。道で二三の同級生に出會
つたが、目禮したばかりで、わざと間を距てて
歩んだ。校門の側には早出の學生が白毛の長く
垂れてる狎を抱いて戯れてゐる。其處を通り抜
けると、女小使が襷がけて竹垣の側に蹲んで

るのが見える。何をしてゐるのかと、近寄つて、上からソツと覗いて見ると、鶏を膝に抱いて、唐辛水を呑ませようとしてゐる。羽の艶のない鶏冠の朽ちた鶏で、白目を片寄せてゐる。女小使は乙吉を仰ぎ見て、

「貴方お忘れ物をなすつたでせう、唯今出して差し上げます」と、笑顔で云つて、「どうもこの鶏がいけませんのでね、今朝から鬱ぎ込んで、どうかしてのやうなんで御座いますよ、貴方失禮ですけれど、この水を呑ませて下さいませんか、一人で自由になりませんのですから」と、鶏の口を両手で開けた。それにつれて自分の口も開ける。乙吉は詮方なしに茶碗を持つて、邪慳にサツと唐辛水を注ぎ込んだ。餘沫は女小使の白い前垂を濡らした。鶏は身震ひして幽かに喉を鳴らした。女小使は鶏を傷かしさうに、ソツと朝日の中に置いて、部屋から書物を持つて来て、「貴方、昨日は大變御氣分が悪かつたやうでしたが、もうおよろしいんで御座いますか」と、さも案じるやうに問ふ。

乙吉は目を張つて、その顔を見て、「僕は昨日も今日も同じことと云つて、何故自分の氣分の悪いことを知らんのだらうと心で思つた。

「冷えるのがお毒なんですよ、お休みの時間にや此室へお温りにお出でなさいました：本當にねえ、これからストローブのない教場ぢや堪りませんわ」と云つて女小使は始業の鐘を鳴らした。

乙吉は今日の學課に聖書科のないのを遺憾に思つた。若しそれがあつたら、教師に向つて疑問を提出するのだが。

第一、何故神は不公平にも弱い人間と強い人間とを造つたのか。苦しい思ひをしに生れたくないものを、何故この世の中に生み落して、日々夜々に苦しめるのか。神の有無を知らぬ迄は訴ふべく怨むべき所もなかつたが、若しも有りと信ずるならば、自分に不幸を下した兇首が明かになるのである。自分の病源が後腦の一部にあるが如く、自分に不幸を植えつけたものは全智全能不熱愛の神である。そしてかの宣教師は神の代表者だと云つてゐれば、彼れに向つて自分の疑問を發して疑ひの晴れるまで聞いて見てやる。

と、彼れは机の上に洋紙を置き、ペンを以て與へられたる英作文に取掛りながら、心は外に向つてゐた。受持教師たる宣教師の細君は、口を閉ぢ頬をふくらし目に愛嬌を湛へて、ドシド

シと力を入れて室内を行きつ戻りつしてゐる。乙吉はチラチラその方を見ながら、頑丈な身體の機關の整つた人だと思つた。そして聯想はその女の上にと及んだ。彼等の一家族は神を信じてゐて、絶えず喜びに満ちてゐると云つた。

して見ると、彼等は一度も苦痛を感じないであらう。不眠の苦み頭腦の憤み、五官の混濁をも感じないのであらう。死の恐れをも知らぬのであらう。夫婦兄弟の軋轢もなく、自分の家の將來の心配もないのであらう。

乙吉は不思議でならぬ。苦痛を知らぬ人、絶えず喜びに満ちてゐる人が、自分と同じ世界に生きてゐるのが不思議でならぬ。この教室には十一人の同級生がゐて、彼等は皆自分より學力は劣つてゐるが、絶えず喜びに満ちて、宣教師と同種類の人間であるらしい。彼等の或者は日曜日に孤兒院へ行つて、腫物で惡臭を放つてる子供などを集めて、面白さうに暮してゐるが、それも不思議だ。自分はあんな子供を見ると、見たばかりで恐怖を感じ、自分の身にも傳染して、今にも身體中腫物で、蔽はれて、微塵動もならぬやうになりはせぬかと思はれるが、かの孤兒も平氣であるならば、その保護者も平氣である。

だが、實の父さへ自分とは全然云ふこと爲すことが異つてゐるのだから、縁の遠い耶蘇信者や世間の人の心持の、自分と異つてゐるのは當然かも知れぬ。

で、辭書を手繰る音、ペンの音が、前後の机で入亂れてゐる間に、乙吉のみは一つ疑ひを繰返して、それが解釋されれば、心が課業に向はぬかの如く、ペンは徒らに濡れ又は乾いて、女教師が答案を取上げるまで、一字をも紙上に刻まなかつた。

この日乙吉の隣には佐野といふ顔の青白い斜眼の男が席を占めてゐた。この男は漢學や數學では人並以上の成績を見せ、繪畫は群を抜いてゐるが、英語は極めて劣つてゐて、又努力して學ばうともしない。そして教師から何か云はれると、腕組みをして頷を突出し、ニヤニヤ笑つて相手を馬鹿にしたやうな風をするのが癖だ。しかも外人は馬鹿にされたとは氣付かず、傍へ寄つて手を執らぬばかりにして教へ、「貴方、傾けること一番いけません」と一日毎に忠告しないことはない。そしてこの男が教師から英語で話しかけられた時に答へる言葉には何時も「I can not」が混らぬことがない、次に現はすべき適當な英語が考へ出せぬ時には

「I can not」だけは間の楔に云つて置く。

此日は不思議に辭書も繰らずに、ペンを走らせてゐたが、教師が取上げて見ると、洋紙一面に教師自身の歩き姿、左右三人の學生の似顔が畫いてある。それが如何にも滑稽に出来て巧いので、教師も左程小言を云はず、唯微笑して、皆なに見せて批評などした。

「秋浦君のが一番巧いぢやないか」と、衆評が一致して「特色が出てると、ジロく、實物と見比べてる者もある。

乙吉も横合から春延びして見た。頬骨が高く、頭が尖り、その尖つた先へ二つの疣が毒々しく描かれ、上唇へ鼻汁が傳つてゐる。彼はそれをみると、青白い頬をサツと赤くして苦笑し、思はず鼻汁を吸つた。外の連中も自分等がポンチにされたのを見て悦しがり、進んで顔を突出して「おれも畫いて呉れ給へ」と求むる者があるが、乙吉は自分の顔の真相を初めて見たやうに感じて不快でならなかつた。そして次の時間には席を外へ轉じて、佐野の目を避けるやうにした。彼れはこの時から佐野を憚つてゐたが、佐野は案外にお人善しにして、次第に乙吉にも近づいて呑氣に口を利く。

「親爺が耶蘇だから僕をこんな學校へ入れたのだけれど、僕は日本人だから毛唐は嫌ひだ、君は耶蘇でないのに何故こんな所へ入つたのだい」と言教師の悪口を云つたり、耶蘇教會の儀式を滑稽的に嘲る様子がある。そして彼れに連れられて女小使をも訪ねるやうになつた。

六

十二月二十日前から學校も冬季休暇となり、下宿から通つてゐる學生も皆故郷へ歸つた。乙吉一人は歸らない。そして休暇の翌日は握飯を持つて、二三里東の或る有名な寺まで遠足したが、その結果は豫期に反して、寺にも田舎道にも珍らしい面白味もなく、却つてこのために發熱して、一日食を絶たねばならなかつた、で彼れは遠足は一度きりで思ひ止まり、明けても暮れても讀書してゐた。讀書に目的があるのではないが、書物を措くと共に、恐怖の念が身を取巻く。彼れの讀書の聲は彼れの念佛で、その聲の止まると共に無間地獄へ墮ちるのである。障子の外は直ぐに田圃で、墓地のある丘が眞向ひに見えるが、彼れはその障子を減多に開けることすらない。米松の外にこの部屋へ入つて、

讀書の邪魔をする者はなく、乙吉自身も戸外へ出ることは稀である。所が、或日ふと女小使を訪ねて見たくなつた。

これ迄三四度あの小使部屋へ行つたのであるが、何時も佐野と一緒にあつて一度も一人で行つたことはないで、別に懐かしい思出のあるでもないが……

嘗て佐野に誘はれ英文法の一時間を休んで、小使部屋で火鉢に當り茶を飲んで過ごした時、佐野が適化た眞似をして女小使を笑はせた後で、

「叔母さんは一人ぼつちだから、死んだらどうするだらう、病氣になつても困るだらう、僕が此校にゐる間は一人で引受けて世話をして上げるけれど、僕がゐなくなつたら、誰れも世話の仕手はありやしない。だから叔母さんも死ぬるのは今の間だね、今の間なら安心して、極樂へでも天國へでも行きたい處へ行けるんだが、ぐづぐづしとると心細いことになるよ、どうせ僕は來年あたりこんな耶穌學校は止めて、東京へ繪を習ひに行くつもりだから」と云ふと、「まあ呆れた人だ、佐野さん位意地の悪いことを云ふ人はありやしない。私はちつとも心細いことはないぢやありませんか。Pさんでも、

孤兒院の名取さんでも、皆さんが私を身内の者のやうにして下さるんですもの。それに何時死なうと病はうと、神様のお思召し次第になつて居れば、ちつとも案じることは御座いません」と女小使はキツパリした調子で云ふ。

「そんなことを云つても駄目だよ、叔母さん、毛唐人のPなんかが當てになるものか。叔母さんは縫物が巧いんだから、こんな厭なところにゐないで食つて行けさうなものだがある。その方が第一に身體の爲にもいい、僕はこれで人相を見ることが巧いんだが、叔母さんは次第に影が薄くなるやうだ。もつと賑かなところへ出なけりや、今に木乃伊になるよ、何なら僕がお母さんに頼んで、いゝ家へ世話をしてあげてもいいんだが」

「飛んでもないことだ。佐野さんは悪魔のやうな事を仰有る。」と少し口元で笑つたが、目付は平常よりも最と沈んだ色を帯びて、「私は若い時分には、神戸だの大阪だのと波り歩いて賑かな處ならそれを見厭いとるんですわ、佐野さんなんかの夢にも御存じないことを見厭いた擧句にPさんのお世話になつて、此處までお伴をして來たんですもの、いくら貴方が手を引張つて町の中へ連れ出さうとなすつたつて、どうし

てオイツレとこの山の中から飛んで行けるものですか」

「ぢや叔母さんぢやない、尼さんだ」と云つて、佐野はケロリとしてゐたが、女小使が時刻を見て鐘を鳴らしに出て行くと、乙吉に向つて小聲で、「君あの女は元色んな事をやつたらしいよ、毛唐の妾にでもなつたのだからかも知れん」と、出鱈目の悪口を云つて笑つた。

乙吉はこの時の事を思出したのである。成程佐野の云つたやうに、何だか曰くのありさうな女だがと、自分の幼い頭で想像を凝らし、さぞ暗い恐ろしい道を通つて來たのであらうと思ひ、この休暇にあの部屋で何をしてゐるであらうかと、遂に訪ねて見る氣になつた。校門を入つて行つたが、用もなく話もないのに、突如に戸を開けるのも變だと氣壓れがして、暫らく四邊をうろ／＼してゐた。手水鉢の堅い氷も音を立てて融けかゝつてゐる。岸下の道には木の間がくれてP氏の娘二人の活潑な姿が見える。外人嫌ひの佐野も、「あの姉嬢だけは綺麗だ。日は眞珠の如く頬は薔薇の如し、この市の中にあれに比べられる女は一人もない」と云つたが、全くそれに違ひない。と、彼れは靜かな温かい草原に彼等の戯れるのを見つてゐたが、氣付

かぬ間に部屋の中から聖書を讀み聲がして、やがて泣くが如き祈りが始まつた。これが乙吉の耳には一語々々凄く響く。で、暫らく突立つたまゝでゐたが、聲が止んでも最早入りかねて、逃げるやうにして歸つた。歸つた後もその聲が染込んでゐて離れない。

その晩は崖下の道を散歩しながら、暗い中に、小使部屋の燈火が一つ薄く光つてゐるのを見歸つた。

二三日して又行つた。この時は窓が開け放されてゐて、かの女の手拭を被り、紙幣を持つた姿が見えた。そして向うから聲を掛けて、「貴方はお國へお歸りなさらないで、懐かしさに云ふ。あの上りなさいましな」と懐かしさに云ふ。

乙吉は部屋へ入ると、畏まつて坐つた。話は女小使の方から持出されて、乙吉は只簡單に受答へするのみであつたが、不思議に居心地がよい。學生一人々々の氣風の異つてゐることや、宣教師の家族の皆善人であることも語られた。神様の不思議な恩寵も語られた。先日孤兒院に糯米の盡きた時、院長が獨りこの後ろの山へ上つて終日斷食して祈禱をしたなら、其翌日

亞米利加の慈善家からの寄附金が着いたことも語られた。

しかし乙吉の心を動かしたのはこんな話ではない。

女小使は朝長代りに食べた蒸し芋の残りを、自分にも食べ、乙吉にも勧めながら、一何時か教場へ書物をお忘れになつた時には、大變お顔色が悪いし、御様子が変わるから、どうなすつたのかと思つたので御座いますよ、でも此頃は御丈夫さうで結構ですわ、御勉強最中にお身體が悪くつてはねえ」と、もう氣遣つてゐるらしい口を利いて、「私はあの時から、何だか貴方の事が氣掛りでならなくつてね、始終思出してはお祈りをしてゐたんですわ」

「叔母さんは祈禱が好きかね、晝でも聲を出してやるんだね」

「お祈りに晝も夜も差別はありませんわ、悲しいことがあつても、悦しい事があつても、屈託があつても、何につけ、忘れないうちにお祈りをしてさへ居れば、お前の一生は仕合せなんだから、暮れんもお祈りを忘れなさいなと、名取さんに度々云はれてゐますから、痛くつても痒くつても、直ぐお祈りをする氣になるんで御座います」

「でも叔母さんのお祈りを聞いてると、些とも悦しさをぢやないかね、何だか悲しさうで恐い

やうだ」と、乙吉は次第に打解けて胡坐を掻いて云つた。

「お聞きなすつたんですか、私は、さあ神様の前に手を合せて、お祈りをするとなつと、これ迄の事や先々の事が一度に思出されて、一生懸命になるんで御座いますよ」

「一度に思出されるつて、何が思出されるんです、恐いやうな心配事があるんかね、僕は叔母さんが、まだ若いのに、こんな尼寺みたいな處へ五年も六年も籠つてゐるのは、屹度譯があるんだらうと思つてゐるがね、もう決して此處を出て行かん方がいゝよ。もう一度結婚したり、子供を生んだりしない方がいゝと思ふ。僕はどうせ天死するに極つてゐるんだが、その代り嫁も取らず子も生まんのだからねえ」と、乙吉は其處に立派な理由でもあるやうに云つた。

女小使は乙吉の眞面目な顔を見て笑つて、「何故そんな語らんことをお極めなすつたのです。折角學問をしていらつしやるのに」

「だつて人間さへなければ世の中に憂い事もなくなるし、痛い事もなくなるんだ、未來に地獄があると云ふけれど、その地獄は人間を入れるために出来たんぢやないか、人間さへなければ幾ら地獄を拵へたつて何にもなりやしない。僕は

幾ら地獄を拵へたつて何にもなりやしない。僕は

は地獄があると、思はんけれど、その代り年中胸や頭が痛くつて仕方がないんだもの」

「そりや貴方が信者におなりなさらんからですわ、地獄は信者の行く處ぢや御座いませんよ、神様さへ信じてゐれば未來だつてこの世だつて……」

「叔母さんは人がいゝから宣教師に騙されてゐるんだ。僕はどうせ信者にやなれんのだから、ひよつとして未來に地獄があつたら、其處へ投込まれるかも知れん。それだつて構ふもんか、一人ででも入つててやらあ」と、感激した調子で云つた。

女小使は驚いたやうに少し口を開けて、乙吉の顔を見詰めてゐた。平生はあまり口を利かぬ乙吉も、この日に限り、ふとした機會で調子づいて、かねて自分一人で思つてゐることを相手構はずに喋舌つた。女小使は受太刀になつて、詮方なく、「さうで御座いますかねえ」と氣のない返事をしてゐたが、やがて乙吉は目を据ゑて、聲を沈ませ、

「叔母さんは此處を止めさせられるか、さうでなくとも歳を取つたらどうするつもりかね、天國へ行くにしても、それまで飯を食つて生きてなぐちやなるまい。僕はどうせ親命の生きてる間

に死ぬるんだから、生活の心配はないんだけれど」と、氣遣はしさうに聞いた。

「その御心配には及びませんよ」
「さうかね、宣教師は當てにやならんよ」
乙吉は立上つて、三方が板で一方だけ小さい日本室のある、この粗末な部屋をジロジロ見ては考へてゐたが、突如に「左様なら」と云つて戸外へ出た。女小使は暫らく小首を傾けて、呆氣に取られてゐた。そして「あの人は胸が悪いと云つたが少しどうかしてるかも知れん、氣の毒な人だ」と思つた。

やがて小使部屋では祈禱の聲が起つた。學校が休暇になり、仕事も少くなつてからは、女小使は、矢鱈に祈禱に耽つてゐるのである。

七

乙吉は三年間もこの市にゐても、つひぞ一人會ひたくてならぬ人は出来なかつたが、この女小使ばかりは妙に心に叶つた。夜深けて讀書してゐると、ふとその女の祈禱の聲が胸かに哀れげに耳元で響くやうに感ずることもある。蒲團を被つて眠につくと、三方板で圍まれた眞暗な部屋に、白い前垂をした女の、手を合せて祈つてる姿が目先の先に浮上つて來ることもある。

一刻でも祈禱の聲を止めれば、直ぐに息の音も止まるのではないかとも思はれる。或夜も夢ともつかず、人の氣もない處で、その女が祈り自分が讀書してゐる有様がみえた。

そして彼女は遠慮氣もなく、二三日づけて女小使を訪問した。訪問すると多少心が落着いて頭が軽くなる。で、
「僕も此處へ移りたいな、叔母さんの祈りを聞いてると、安心して書物が讀めるし、夜もよく眠れるだらうが」と云ふと、
「さうですかね、ではもつと家がお綺麗だとお留め申してもいゝんですが、これぢや、貴方のお寝みなさる處もありませんからね」
「いや、僕は寢床なんか何處だつていゝ、留めて呉れませんか。僕はこんなになつて圍つて隙間のない部屋が好きなんだからね、此處だとびつしやり締めとけば戶外の音が聞えんし、誰れも入つて來ないからいゝ、僕の今居る室は締めが悪いから、色んな者が忍び込んでいけないんだ」

「だつて貴方、こんな窮屈な日の當らん處では身體にお毒ぢやありませんか」
「僕は此頃は身體に毒にならうと薬にならうと、そんな事を考へたことはない」

と云つて、乙吉は弛んだ目をこすつては、粘つこくなる口の中をモガ／＼させ、果はコロリと横になり、心安げにスヤ／＼と眠る。一時間もすると、吃驚して跳ね起き、

「叔母さん誰れも来なかつたかね、聲がしたやうだが」と四圍をキョロ／＼見る。

「誰れも来るもんですか、寢呆けていらつしや。……今日は温かだから裏の山でも散歩なさいまし、その方がお身體にもよう御座いますよ」と、女小使が勧めると、乙吉は素直にその言葉に従つて出て行く。

後で女小使は讚美歌を唄ひながら、晚餐の支度に取り掛つてゐると、乙吉は散歩の歸りに又立寄る。

女小使は親切に話相手になつてゐるもの、次第に不安心を感じ出した。あの人は少し變なのだから、どんな機會で間違ひが起らんとも限らんが、係合つて當惑をしなければよいがと案じるやうになつた。

乙吉は無二の親友を得たつもりで、日に一度は必ず訪ねる。夜でも寒い風を厭はずに行くことがある。行くとき何時も後頭部の疼痛を訴へたり、宿の者の冷遇を訴へたりする。或時は眞面目で、「僕は昨夜夜中に目が醒めるとね、變な

物が足許に見えたから跳起きて、マツチをつけてね、もちつとであの部屋を焼打ちにしようかと思つた。矢張腦が悪いから氣が變になるんだね」と云つて女小使を恐ろしく感じさせた。しかし乙吉は外の人に向つては、嘗てこんな話をすることはない。

八

歳は改つたが、この地は一般陰曆本位であるから、別に新年らしい模様も見えぬ。米松はかねて明けたら何處へか行きますと云つてゐたが、三日が過ぎて、仕事も定まつた風はなく、相變らずの懐手で暮してゐる。次第に乙吉を見限つて、「話せぬ奴だ」と近よらなくなつたがその代りに、夜毎に近所の百姓や小商人の家へころげ込んで、夜更しをするやうになつた。かの女小使とも孤兒院出入の米屋で二度會つたのを縁に、その部屋へ獨りで遊びに行くやうになつた。

或夜、例の如く宿の者が早寢の床へ就いた後まで、乙吉は讀書の聲を絶たなかつたが、不意に何物かに喉を絡められるやうに感じて、書物を置いて振向いた。唇は乾き喉は粘り、目は眩迷して心臓の鼓動も早い。火鉢に堆い炭火

は悪どく顔を照らしてゐる。彼れは頭を抱へて机にもたれた。自分の身に破壊の時が来たやうに感じた。そして暫らくして我知らず立上り、兩戸を開けて田圃道を下りた。足袋裸足で暫らく歩いてゐたが、足は自然に小使部屋の方へ向いた。左右の人家には燈火も消えてゐたが、月は冴えて道は明るく、畦に沿つて並んでる藁束が光つて見える。

彼れはゾツと寒氣がして心も少し落着いたが、何となく宿へ歸りたくない。四方は寂として、恐ろしく耳に響いてゐた犬の聲も遠くへ消えた。すると丘の方で女小使の祈禱の聲がしてゐるやうに感ぜられる。はてな、四五町も隔つてゐるのに聞える筈はないと首を傾けて耳を澄ました。矢張聞える。地の底を傳つて来るらしい。

彼れはその音を踏んで、小使部屋に近づいた。今夜は宿で寝たくない、成るべくなら小使部屋に留めて貰ひたい、彼處なら安心して眠れるし、又自分の身體に何んな事があらうと、あの叔母さんの傍なら、さう恐るゝに足らんと思ひながら、戸口へ行つて聲を掛けようとする、不意に賑やかな笑聲が室内に起つた。彼れは身震ひして思はず耳を蔽つた。そして耳を蔽つた

ま、校門を出たが、まだ笑聲が耳元に響いて、
蔽うた手が離せない。で宿の方へ駆け下つて、
藁束の側に蹲つてゐたが空の星もグラ／＼動
いてゐる。

こんな不穩な世界に皆が安眠してゐるのは
奇怪だ。鐘でも鳴らして目を醒まさせてやらう
かと思つた。

でも、何處を通つたか、自分もしかと覺えぬ
間に、元の寢床へ歸つて夜明頃まで眠つてゐ
た。

翌日は發熱したが、強ひて十分に食事をし
て、戸外へ出掛けようとする、米松が戸口に
立ちはだかり、氣取つた風で卷真を吹かしなが
ら、目に冷笑を浮べて、

「やあ、又學校の小使部屋へお出でですか」と
云ふ。

乙吉は返事もせず、米松の腕を推しのけるや
うにして駆け出した。そしてあの男は何故自分
の行先きを知つてゐるんだらう。不思議な氣味の
悪い奴だ。彼奴が來てから、自分の宿は一層不
穩になつたのだと思つた。二三町して振返ると

彼れは高戸口に立つて、此方を見てゐるので、
どうも氣になる。彼奴おれに惡意を持つて探偵
してやがるぢやないかと、道を外らして遠廻り

して、後から丘に上つた。市街は眼下に眺つ
て、川は穩かに流れ、平生と異つた所もない。
西洋人の庭には五六人が寄りつ離れつ温かい日
光の中で遊んでゐる。昨夜の異狀を知つてゐる者
は世界中で自分一人であらうか。

かう思つて、彼れはソツと學校の裏手に下り
た。蟲を銜へた鶏がチヨ／＼と小使部屋の
方へ逃げて行つて、窓の下で羽を擴げた。乙吉

は拔足差足の心持で近寄つたが、部屋には何の
音もしない。昨夜遅くけたたましい笑聲がし
たのが變であつたが、何か異狀が起つたのでは
なからうか。あの女が死骸にでもなつてゐやし
ないだらうか。

で、彼れは幾度か躊躇した後、扉を細く開け
て覗いて見た。女小使は俯首いて丹念に縫物
をしてゐる。

漸く安心して内へ入ると、小使は、「お出で
なさいまし」と云つて、少し後退りして席をつく
り、乙吉を坐らせたが、何時ものやうに笑顔も
見せねば、柔しい言葉をも掛けぬ。そして縫物
をしたがら、屢々偷目で乙吉を見る。

乙吉はそれとも氣づかず、「叔母さん、昨夕は
何ともなかつたかね」と問うた。

「えつ、昨夕……」

「どうもなかつたかね、僕は昨夕恐かつた」と
乙吉は昨夕の話をしようと思つたが、女小使
が恐れるだらうと案じて、明かにそれとは語ら
なかつた。そして、

「僕は叔母さんだけは信用しとる。だから何處
か危険のない土地に叔母さんと二人で住んでゐ
たい氣がするんだが……何處にもそんな處はな
ささうだ」と悲しさを露で云ふ。

「貴方は何故お國へお歸りなさらないんです。
お父さんもお母さんも被在つしやるのだから、
久振りでお歸りなすつたらいいぢやありません
か。ねえさうなさいました」

「僕は那だよ、二度と國へは歸らんつもりだ」
と、兩手で頭を掩んで擗ぶつた。

女小使は當惑して黙つてゐると、乙吉は戸
棚や箆箆を疑り深い目で見つて、

「叔母さん、夜になると箆箆にでも錠前を卸し
とく方がいゝよ」

「だつて、中には何んにもないんですもの」
「いや、錠前はちゃんと卸しとく方がいゝ。今
夜からさうしなさい」

「あゝ、よう御座います、貴方がさう仰るん
だから」
「屹度だな」と、乙吉は念を押して、「僕はもう

誰れにも口を利かつもりだが、叔母さんにだけは何でも話すよ」

九

その日から宿の者は、彼れに近づかず、三度の食膳をも押付けるやうに置いて、帯戸をビシヤリと締めて行く、夜になると、栓張をもかうて置くらしい。そして二三日の内に珍らしく保證人の伊藤が訪ねて来た。米松は何かヒソヒソ話してゐたが、乙吉に向つては別に用事もなく、只部屋の模様を見て、

「どうです、身體の加減はいゝんですかい」と問うたばかりであつた。そして歸りにコツソリ米松に向つて、

「別に變つたことはないぢやありませんか、平生からあんな人間なんだ」と、氣にも留めなかつたが、米松は、

「しかし留守居の女は、ひどく恐れてて、あの人に来られちゃ困ると云つてるんですからね、私の家だつて間違ひでもあつちや困りますよ、何なら貴方のお宅へでも引取つて下さいませんか」

「だつて私もどうする譯にも行かんのだから、當分やらうとして、いよゝ變だつたら、國の

親爺でも呼んで連れて歸らすさ」と伊藤は係合ひを面倒臭がつて、米松の言葉に身を入れて相手にもならないで、サツサと歸つてしまつた。

後で乙吉は不快でならぬ。伊藤の奴、何を米松と打合せてたんだらう。この夏も自分の轉學の邪魔をしゃがつたが、今度も亦何かして自分を陥れようとしてるんぢやないか知らん。

しかしさうはさせんぞ、見て居れ〜と獨り力んだ。そして小使部屋で讀書しようと思ひ、四五冊の書物を抱き締めて傍目もふらずに學校へ行くと、女小使の姿は見えぬ。教員室の窓は開いて、二三の日本人の教師が火鉢を圍んで居り、廊下には五六人の學生が掲示を讀んでゐる。

「うん、明日から授業が始まるんだな」と、乙吉は今初めて思出して、その掲示を駈け寄つた。

で、瞬きもせず掲示を見据えて、暫らく身動きもしないでゐると、黒の襟巻で顔の半ばを包んだ佐野が、後から肩を叩いて、「秋浦君、休暇に何か面白いことがあつたかい」と云ふ。

「君の國は何ともなかつたか、此地は餘程變つたよ」

「さうか、僕は昨日歸つて来て聞いたんだが、君の宿の息子は小使の婆あと喰付いたつてね

え」と、佐野は鼻の上に小皺を寄せる。

「誰だらう、僕あちつとも知らんもの」と云つて、乙吉は心の中で、佐野といふ男、よく寝呆けたやうな事を云ふと思つた。

「誰なものか。これから押かけて見ようかな。あの女は元が元だから、それ位な事あやりにねない」

「君も僕をいぢめるつもりだな」と、乙吉は瘦拳を握締めて反抗の態度を示し、

「僕は君等が何と云つても恐れやしない、決心しとる決心しとる」と、尖つた聲で云ふ。

佐野は驚きもせず、「何を決心したんだい」と空呆けて、「休暇の間に大分様子が變つたな、君の顔も妙に歪形になつた」と云つて、罪もなく笑ひ、「どうだ、久振りで其邊を歩かうか。まだ白哲美人にもお日に掛らんが、健在かね」

と、乙吉を誘つて西洋館の横手を下り、日當りのよい金相品に添うて歩いた。乙吉は油斷をしない。馬鹿め。おれを騙して、何處か階穿へでも連れて行かうとするんだらうが、その手は喰はんぞ。おれだつてこんな奴等にや負けやしないぞ。恐いもんか、何處へでも行つて見ろ。

と、滿身の勇氣を揮つて斜かひに後からついて行つた。

佐野はさきも心地よげにフラ〜と歩いて口笛を吹いたり、詩を吟じたりしたが、乙吉は全く口を噤み、充血した日は異様に光つてゐる。

「僕はこの休暇中に、うまく親命を口説いてね、三月か四月にや、東京へ給を習ひに行くことになつたよ。君もこんな吝な學校は止して東京へ一緒に行かうぢやないか。僕はね、給の稽古を學校の英語なんか打ちやらかして、給の稽古をするつもりだ。この邊も記念に畫いとかうと思ふが、此處から崖の上を見渡すといふ景色ぢやないか、あの檜の木の前へミスPでも立つてるといふがね」

と、佐野がその方を顧みると、乙吉も無言で顧みたま。檜の木には小鳥が群がらつてゐる。崖の上には、綱の帶を半纏の上に締めた老婆が、落葉や木片を拾つてゐる。後の山から寒い風につれて異形の薄雲が湧き出て来る。

佐野は歩いては留まり、歩いては留まり、薄寒くなるのも厭はず容易に歸らうともせぬ。乙吉は足も疲れ、張詰めてゐた氣も弛み、佐野をも米松をも、今は忘れたるが如くなつたが、それと共に、かの鬱蒼たる山が、一種異様の光を帯びて来た。風につれて、悲鳴をあげて頭上を掠めるものがある。

「そりや来た」と彼は凄く叫んだ。「何を云つてるんだ、吃驚するぢやないか」と、佐野はその斜眼をピク〜動かした。

「先日から彼奴がこの邊を荒廻つてるんだ」と乙吉は地べたに蹲んで、頭を壓へたが、やがて、フイと立つて、烏泥田の用捨なく、無我夢中で飛んで、自分の宿へ歸つた。

十

しかし彼は揭示場で見た授業時間を忘れず、翌日定刻に學校へ行つた。最初の一時間は何話であつて、外人教師は「如何にして冬季休暇を送りしか」といふ題で、順繰りに答を求めた。佐野は昨日求めた安物の繪具箱を持つて片隅に腰掛け、悦しさに弄んでゐるが、問答の番が来ると、何時もの「何を云つてるんだい」と云つた調子で、"I can not" の連續を始め、遂に不得要領で終つた。學友はクス〜笑つてゐるが、當人は平氣で、役目が濟むと、又繪具いぢりを始めた。教師から「授業中そんな物を用ひてはなりません」と注意されても、聞入れないで、頭りに洋紙へ繪具を塗つてゐる。そして教師が顔色を變へて、繪具箱を取上げ、「時間中預つて置きます」と持つて行かうとすると、矢庭

に立上つて、それを拂取り、「何をすゝ」と叫んだ。教師は首をブル〜振はせながら不都合を責めたが、如何ともしがたくて、身體を轉じて次の席に向つて質問をした。その學生は柔順に流暢な英語で聖書の研究や、田舎の會堂へ行つたことを話した。二三人を経て乙吉の番となつた。彼は佐野と教師との争を見て心が動搖してゐたので、質問されると、彈機仕掛のやうに跳上つて聲に力を籠め、「私はこの休暇にこの空中に恐ろしい物の存在してゐることを、確かに發見いたしました」と英語で述べ、後は日本語で、

「我々は互ひに警戒してゐなくぢやならん。何時この市は踏潰されるかも知れんぞ、何時この市の人間は息の根を絶たれるかも知れんぞ。佛しもう駄目だ。いくら用心しても我々の力に及ばんのだ。最早遠からず、何もかも滅茶苦茶になるんだ。誰吐きの西洋人も、正直な女の小使も皆な一度に目も口も潰れてしまふ」
彼は俄かに口を閉ぢる。顔の色は急に蒼ざめて、宙にぶら下げた手は次第に縮んで来る。場内は暫らく寂として、學生は互ひに顔を見合せてゐた。
「は、あ、奴狂人になつたな、道理で變だと思

つた」と、佐野はノック乙吉の側へ来て、手を執らうとする、乙吉は唐突飛び出して、「そら来た。逃げる」と扉を両手で押開けて、小使部屋の方へ駈けて行つた。

今まで顔見合せてゐた連中も、急に騒ぎ出して、總掛りで取押へて、保證人の家に運び込んだ。

で、翌日佐野が見舞ひに行くと、彼れは書物を読んでゐて、さしたる異状も見えぬ。

一君もあんな下らない學校は止して、僕と一緒に遊び給へ。そして春になつたら、東京にけうちやないか」と云ふと、

「さうさ」と、乙吉は暫らく考へて、「いや、駄目だよ。東京へ逃げて行つたつて駄目だよ。僕も色々工夫して見たけれど彼奴には敵はんからね」と萎れてしまふ。

散歩の途上

散歩の次手に鳩居堂へ寄つて、其處に陳列された歌麿の美人繪を見たことがあつた。美術に對して批判力の乏しい私も、見惚れるほどに美しく思つた。全身に媚態を備へてゐるのに感心した。銀座の街を歩いてゐる今様の美人に比べると、夢幻の美しさがあつた。風俗ばかりでなく、顔面容姿の變遷が面白かつた。しかし今日の女子だつて、僕れた美術家が描いたなら、現代らしい藝術美を發揮して、後世の鑑賞家をして大正の美人繪に隨喜の涙をこぼさせるであらう。我々が過去の美にあこがれ、現代を散文的に感ずるのは一つの迷妄で、後世の人間は、大正の蕪雜の世を顧みて美しい夢を感じるのに違ひない。輕佻浮薄の誹りはあつても、今に多くの女子が洋服を着るやうになるだらう。ダンスが普及するであらう。日本音楽が亡んで西洋樂が田舎の場末にまでも行渡るであらう。男子もこんなイガ栗頭ではゐられなくなつて、頭の髪を分けて、香水やコスメチックで美しくしなければ世間へ出られなくなるだらう。私など幸

ひに今の時代に生れたため、服装や髪形に面倒な思ひをしないでゐられてよかつた。

私は西洋樂に何等の興味がなく、三味線樂にはつねに感動さされてゐるのであるが、數百年の間日本國民を樂ませた三味線も、今はその役目を果して、滅亡に瀕してゐる。亡びに近づいてゐる音樂として聴いてゐると、三味線の音にますゝ哀れが感ぜられる。歌舞伎芝居だつて同じことだ。先日芝居好きの田舎の老人が市村座の「助六」を中途で見残して歸つて来て、「とても退屈で辛抱が出来なかつた」と云つてゐたが、老人でさへさう感じるやうになつたのだ。やがて、舊劇も舊音樂も少數の物好きに愛酷されるだけのものになつて、時代は動いて行くだらう。新進の作家が既に作家の跋扈を氣にしてヤキモキしてゐるが、さう案じるには及ぶまい。先進者は次第に歳を取つて時世に遅れつゝあるのだから、早晩文壇も變化するだらう。戦争みたいに一朝一夕に老人を叩潰すことの出来ないのは、文學の性質上如何ともし難いのだ。

(「文學評論」の「散歩の途上」より)

微光

土用太郎——二三日降續いた涼しい雨も上つて、今朝は朝から日が暑く照つた。

お國は昨夕も寝そびれて、明方からやうく浅い眠についた。そして取留めない不愉快な夢を見てゐた。日の醒めた時はもう九時に近い。急いで部屋の掃除を済ませて風呂へ行つた。時間を氣にしながらも念入りに磨き立てた。昨夕結つた銀香返しを自分で取替うて、顔は臙脂白粉で色取つた。二三の祕密の手紙を机の中から取出して細かく引破つた。一度部屋の内を見廻してから階下へ下りて、神さんに留守中の事を頼んで、若しも留守に旦那が遊びに来るやうだと、氣をつけて上げて下さいと、封筒に包んだ五十錢銀貨をソツと手渡した。

「お早くお歸んなさい。お家へもよろしく」と、神さんは門口まで見送つた。
其處から宿俣に乗つて、道々土産物を二包も買つて、切通の坂まで行つた。大和屋と看板

の出でゐる小さい西洋菓子屋の前で、車夫を呼留めて、店先で下りて、「姉さん」と聲を掛けながら、店へ上つた。

「まあ國ちゃん」と、姉は仕事の手を休めて、呆れたやうに云つて、奥から妹を見詰めた。縮緬の羽織に羽二重の帯、あの縮緬のやうな着物、は縮かも知れんと思ひながら、「些とも來ないのね。どうしてゐるの、居所も知らせないんだもの」

「どうせ來月になつたら、引越さうと思つてるから」

お國は狭い板の間を通つて、茶の間へ入つた。箆笥の上の枕時計は丁度三時を指してゐる。

四時の汽車にはまだ間があると思つて、少しは心が落着いた。團扇を使ひながら、

「姉さんは何時の汽車で行くの、私四時で行くよ、姉さんは一緒に行けないでせうね」

「さう急に行けるものかね。本所の姉さんが明日の朝の汽車で立つと云つて來たから、私もその積りでゐるんだよ。國ちゃん明日にしたらど

う？ どうせお母さんの病氣も今が今危ないといふんぢやなからうし、同じ事なら一緒に行つた方がいゝよ」

「だけど、わたし、今日でなくちや都合が悪いの。それに本所の姉さんと一緒ぢや厭だわ」

「まだそんな事を云つてゐるの、お前も執念深いね」と、姉は汚點の多い顔に微笑を浮べて、「本所の姉さんも今は随分苦勞があるらしいよ。彼處の兄さんも出世してお金が出来たものだから、道樂をして仕方がないんだつて、此頃も淺草の藝妓を受出すとさ騒いでゐるさうだよ」

「だつて、そりやあの姉さんが悪いからさ、夫の不身持は大抵女房が仕向けが悪いからですよ」

と、お國は言葉強く云つて、姉の境涯を小氣味よく思つた。「よくあんなに吝けにしてゐれるわね、今だつてさうでせう。あれほど吝にして御亭主に道樂をされるなんて、姉さんも器量物だよと嘲つた。二三年前に本所の姉が僅か三十圓ばかりの金を立替へて呉れなかつた爲に、自分が厭な男の妾になつて、それからますます淺ましい境遇に沈んで來たことを思ふ

その姉の悪口を並べたが、此處の姉は向う最辰

ばかりして、些とも同意しさうでない。それに忙しく立ったり坐ったりして、落着いて話も出来にくい。三錢五錢のお客にもお世辭を云つてゐる。

「この商賣も煩いものだわね」と、お國は店の方を見て、「もつと氣の利いた商賣をしたらどう？」

「お前が資本でも貸して呉れば、何でも始めますよ」

「飲食店か何かだと儲けが多いでせう、洋食屋なんかいゝわねえ。……私時々思つてよ。

どうせ私は眞面目に働く氣になれやしないんだし、かうして歳を取るばかりで、先の當てもないんだから、いつその事、吉原へでも身を賣つて、その金を姉さんやお母さんへ上げようと思ふことがあつてよ」

「馬鹿お云ひでないよ」

「だって、私本氣でさう思つてよ、どうせお女郎なんか私には勤まりやしないんだけど、さうしてお金だけ取つといて、直ぐに自害して死んでしまふの」

「大變な覺悟ね」姉は笑つたが、「冗談は冗談として、お前も些とは眞面目に考へなさい、姉妹でありながら、居所さへ分らないやうだ

と、私だつて心配だよ。今度故郷から来た端書だつて、わざ／＼よしやまで持つてつて、お前の所へ届けて貰つた位なもの。お母さんものんなに心配してるか知れやしないよ」と、親身に意見するらしかつた。

「姉さん」と、お國は改つた調子で、「その話もう止して頂戴。そんな事を云はれると、私故郷へ歸りたくなくなるから」

自分の身の上の事は、薄ぼんやりの姉さんなぞに彼云はれたくはない。眞面目に考へてどうかなるものなら、馬鹿な私ぢやない、疾つくだうにかしてゐる。で、早く姉の側を離れたくなつて、

「私、もう出掛けなくちやならない」と、時計を見て立上つた。

「まだ早いよ、水でも飲んでからお出でな」

「私深山……ぢや、彼地へ行つて、病氣の様子で電報を打ちますよと、忙しく暇乞ひして、店先へ出ると、姉は追駈けて来て、小聲で、

「病氣が左程でなくつてもね、スグゴイと電報を打つてお呉れよ。さうでないとな家を出憎くつて仕様がなから」

「え、」
お國は首肯して俥に乗つた。

二

上野の停車場に着くと車夫に風呂敷包を持たせ、謹まじやかに歩いて二等の待合室へ入つた。時間が早いから、手紙で打合せをして置いた河津さんはまだ来てゐないだらうと思つて、よく捜してもせず、周囲の視線を避けるやうにして、片隅に腰掛けた。そして二年前にその人と人目を忍んで、此處から大宮まで行つたことなど心に浮べて、あの時の樂みを再び繰返したかつた。あの時は濃雪が降つてゐた。寒い風に吹かれたながら相合傘で宿屋まで行つた。火鉢に騎した河津さんの手の紅く膨らんでゐるのが、可愛らしくも痛々しくもあつた。

と、お國は昔に流れる汗をも、騒々しい物音を忘れて、懐かしい思出に耽つてゐると、今まで新聞臺に身體を曲げて、据付の新聞雜誌を讀んでゐた男が、不意に頭を掲上げて、口元に微笑を湛へて側へ来た。「姉さんは來ないの」と柔しく聲を掛けた。

「アラ」と口の内へ云つて、お國は夢から醒めて、「姉さんは明日に延ばすんですつて」

「ぢや、却つて都合がいゝね」
「え、」

「切符はまだ買はないの」

「え、まだ」

「ぢや、僕が買つて来よう」と、男は切符口へ行った。

お國は横から男の姿を見詰めた。此間久振りに出會つて淺草公園を散歩した時には、夜だつた爲か、何となく面裏れて萎れてゐるやうに見えたが、今見ると、元のやうに凜々しくて、顔に歳は取つてゐない。薄い髭を生やしかけてゐるのも却つて愛くるしく見える。新しい麥藁帽子、絞りの兵兒帶、涼しさうな浴衣姿が似合はしかつた。

男は二枚の青切符を持つたまゝ、時間表を見たり、其處等をコツコツ歩き廻つたりした。お國は目で男の後ばかり追うてゐた。

やがて兩毛線行の改札口が開いた。男は女から風呂敷包を取つて、先に立つてプラットホームへ出た。人氣のない室を見て乗つたが、其處へは後から老人が一人入つて来たばかりだつた。

お國は直ぐに羽織を脱いで、首筋の汗を拭うた。汽車が動出すと、涼しい風が窓から流込んだ。

「私、やう／＼落着いてよ」と、今まで歴へて

ゐた息を吐いた。胸は清々しくなつた。東京が後へ／＼消えて行くのが氣持がよかつた。かうして何時までも旅をしたいと思つた。

「僕も久振りの旅だよ、此頃は汽車に乗るのも珍らしい」と、男は向合つて窓際に腰掛けて、外を眺めながら、落着いて煙草に火を點けて、「突如にあの手紙を見て、どうしようかと一寸考へたよ。先日きりで會はん方がお互ひのためにいいと思つて、今日はお来まいかと思つたんだが、

意志が弱くてとう／＼お伴をするやうになつちやつた」と笑つて、「どうせ姉さん達と一緒になら、他所ながら様子を見るだけだと思つたら、誰れも来なかつたんだね。お母さんの病氣はどんなのだい、さう悪くもないだらう」

「どうだか」と、お國はそれには冷淡に答へて、「ぢや、此間きり貴方はもう會はないつもりだつたの」と、これには力を入れて云つた。

「どうせ仕方がないんだもの。國ちゃんだつて、もう浮氣は止しちやつて、その何とか云ふ人に眞心を持つてた方が身のためだよ。だから僕は會ひたくても會はんつもりだ。それに僕も學校を出たんだから、これから職業を捜さなくちやならんし、以前のやうにしちやゐられな

い」

「皆な私が悪かつたんだわね、私のために卒業も一年遅れたんだから……皆な私が悪いんだから、これから又貴方に御迷惑を掛けて、出世の邪魔をしようとは、夢にも思つてやしないよ。だけれど、今日貴方に來て頂いたのは、この先何時お目に掛れるか分らないやうな氣がして、こんな折にでも緩くり會つて置きたいと思つたからだわ。浮氣々々つて、貴方に會ふのが何故浮氣なんぞせう」

お國の氣色ばむのを男は押静めようとして、情愛を含んだ目を向けた。そして後の窓に眩を突いて、居眠りをしてゐる老人を憚るやうに、チラとその方を顧みた。

「昨日の貴方の手紙だけは破らないでチャンと持つてるのよ」と、帯の間に小さく疊込んでゐるのを取り出して擴げて、「貴方一度讀んで御覽なさい」

「自分の手紙を讀む必要はないさ」と、男は手に取らうともしないのを、「必要があるから云ふんですよ」と、無理に押付けた。

手紙はペンで書いてあつて、處々爪痕がついてゐる。男は半ばは眞心、半ばは戯談のつもりで、一晩掛つて書いたその手紙を讀返した。

先日の浅草の散歩の樂みから、過ぎし昔の思い出を、字面の美しい文字で細かに書いてある。

「本座の側にて一時間餘も待ちあぐみて、御身も何かの障礙にて家出もならぬことならんと諦め、失望して歸宿せんとする刹那に、御身の幽かなる聲を耳に致し候。幽かなれどその聲は小生の一生に耳を去らざる聲にして、今孤燈の下鮮かに思出され萬感交々至り、一滴の涙なきを得ず候。冴え渡る月光に浴して、湯島天神の境内まで、互ひに語らふ言葉もなく歩みて、其處にて一生の別れを告げ候ひしは、御身も尙お忘れならぬ事と存じ候。大宮の雪湯島の月、忘れ難き記憶は爾後屢々小生を悩ましもし慰めも致し候。」

「あの時には己が罪をやつてたよ、僕はその繪看板を見ては悲しい思ひをしたのだ」と、男はその後暫らく生きる瀬もなく暮してゐたことを思つて、「國ちゃんは十日もしたら忘れちゃつたらう」と、手紙を疊んだ。

「え、十日どころぢやない、二日も立つたら忘れちゃつた。私、薄情だから」お國は早口に云つて、再び手紙を開いて、「貴方よく讀んで、その爪痕の處を」

「それがどんなのだい。眞面目に將來の忠告

をしてるんぢやないか」
「さう……」
お國は爪先で目印したあたりを注意して讀んだ。其處には情深い、柔しい、涙を誘ふやうな文字が、濃く鮮かに浮んでゐる。——△△とかいふ親切な人を大木の蔭と頼んで、心安く日を送られるならば、小生の絶え間なき心掛りも稍々安んぜらるゝ次第なれば——なんて。

「貴方私が今氣樂に目を送つてると思つて」と、涙早い目を濡ませた。

「今はそんな話は止さう」
男は湧上る感情を紛らすやうに快活に云つて、手紙をズタ／＼に引裂いて外へ棄てた。一片二片舞戻つて車の中へ落ちた。お國は黙つてシホ／＼した目で男の顔を見てゐた。

やがて汽車が大宮に着くと、かの老人は手鞆を下げて下りて、新に子供連れの夫婦が入つて來た。急に賑かになつた。細君は座に落着くと先客の二人の顔を疑ひ深い目で見つた。お國も見ぬ風で見返した。

「サイダでも買はうか」男は獨言のやうに云つて、前を通る賣子を呼留めてサイダとお茶とを買つた。

「飲まないか」と、小さい茶碗を出したが、お國

は軽く首を振つた。
汽車が動出すと、男は罐を口に當てて、生温くて酸ばいサイダを、不味さうに飲んで、手に持つたまゝ膝の上に置いた。お國はふと前に屈んで奪ふやうに罐を取つて、「私も吞みたい」と、日えるやうに云つて、口呑みにした。

「貴方、まだ吞んで？」
「もう深山」

「ぢや罐を捨てよう」と、お國は立つて窓に投寄つた。百姓家の門に立つてゐる子守が此方を見た。重さうに荷物を背負つた男が線路を傳つてゐる。稲の葉は青々と風に戦いでゐる。異様の雲が空の片隅に卷上つてゐる。踏切の側で汽車の過ぎるのを待つてゐる俤には、厭らしく白粉を塗つた平顔の女が乗つてゐる。

幾度か罐を振つたが、お國は氣遣れがして投棄つて得なかつた。かの夫婦は笑ひながらその方を見つてゐる。思切つて目を瞑つて手から離すと、線路で碎ける音が痛いやうに響いた。胸を轟かせながら座に戻つて、「物を壊すといふ氣持ね」と、小聲で云つた。

「ぢや、その土瓶も壊すといふ」男はお國が白い腕を出して物を振上げた姿を、再び見たかつた。

「だつてお茶は飲みたいから：私忙しくつて書御飯も食べないの。お土産を開けようかしら。貴方食べたくない？」

「折角買つて来たのに手をつけちゃ悪いぢやないか」

「ウ、ン構はない」

風呂敷包を解いて、菓子箱を開けた。五つ六つ最中を紙に包んで、側の子供にもやつた。

汽車は鏡橋を渡つた。馬を洗つてゐる農夫の赤い顔が直ぐ前に鮮かに見えた。首を振りくゞ男の子が二人泳いでゐる。白壁を照らしてゐる光も最早暑苦しさうではない。

「瀟洒したい、處だね、何といふ川だらう」と、男が訊いた。

「これが思川でせう、私小さい時に兄さんに連れられて来たことがあつてよ。此處では鮎がとれるの」

「ぢや、明日歸りに寄つて見ようかな、東京へは明日の晩歸ればいゝんだから」

「私も一緒に歸つてよ」

「だつて病氣見舞に行つて、さう早くも歸れんだらう」

「さうね：でもどうかして歸つてよ」と、お國は決めてしまつたが、「もう東京へも故郷へも行

かないで、オーツと遠方へ行つちまひたい」と、溜息吐いた。

日光は山にも野にも消えて、黒ずんだ森には淡い水気が細く棚引いてゐる。夕闇の中にチラホラ火影が見えた。

「あの町らしい處が栃木だね」と、男は窓から覗いて、「廣々として景色のよきさうな土地だ」

「え、」お國は氣のない返事をした。

停車場から僅て二人は晃陽館に向つた。大通の左右には軒毎に赤い提灯を點火して、人の往來が賑かだ。著音機を据ゑた店先にはいゝんな人が群がつてゐる。「天王様のお祭だらう」と、お國は思つた。

三

障子を取りはづして風通しのよい宿屋の二階で、二人は湯上り浴衣を軽く着て、夕餐の膳に向つた。前の縁側を袴を着けた教員らしい人々が往來したが、どれも一度づつ不遠慮に二人を見た。隣には酒盛が始まつて、調子外れのザレ唄も聞える。女中がキヤツ／＼と騒いでゐる。

「煩さいね、もつと静かな部屋はないのかい」と、男は給仕の女中に訊いた。

「本當にお氣の毒で御座います、何處も塞がつて居りまして」と、手首に汗を浮かせてゐる女中が答へた。

「ぢや、隣が静まるまで、僕は町を散歩して来よう。國ちゃんはまだもう家へ行かなくちやなるまい。どうせ今夜は看護して上げるんだらうし」と、男はこれで別れるのを名残惜しがつたが、お國は、

「私今夜は家へ行かないと、平氣で云つた。病氣見舞に来たんぢやないんかい」

「だから明日になつたら、一寸行つて見るわ」

「吞氣だねえ」男は勝手な女だと思ひながら、却つてそれを喜んだ。

女中が膳を下げるのを待つて、お國は小聲で、

「私、あの女中を一寸知つてよ、小さい時分に叔母の家の子守をしたの。確かお鶴とかいふのよ」

「ぢや、向うでもお前を覚えてるだらう」

「どうだか。私は様子が異つてから知らないでせう、田舎にゐると何時までも同じやうだね」と、心で田舎者を嘲笑つて、「あの子は一度居眠りして背中の子供を落つことした事があるの。打ちどころが悪くつて氣絶してそりや騒

ぎだつたの」と云ひながらその時分を臆に思浮べた。シク／＼泣出したお鶴の顔や、吃驚して眞着になつた、叔母の顔が見えた。あの時からあの子の顔には傷跡が残つてたが、

「子供の折の傷は次第に大きくなるんですつてね、歳を取るほど」と、男に訊いた。

だが、男はそんな話には気が向かない。生返事して、「もう大分涼しいから、其處等をブラブラしようぢやないか、隣が静かになるまで」と、身を起したが、お國は知人に會ふのを厭がつて、一足も月外へ出ようとしなない。

男は一人で出て行つた。

お國は階子段まで男を見送つてから、暫らく縁側に立つて、土蔵の横から斜に町の方を見た。瓦斯の光で薄明るい店先に、肥つた男が素裸で煙草を吸つてゐる。その前を白い衣服や黒い衣服が続いて通つてゐる。月琴の音が陽気に近づいた。それを見たり聞いたりしてゐると、お國は今朝から引立つてゐた心が次第に弛んだ。この頃日増しに身體の衰へるにつれて、周囲の物の音物の色が鬱陶しくなつて來たが、チラ／＼隙見する故郷の色は一層懶く見えた。

で、部屋へ入つて、檢束なく坐つた。四年前、

十六の春に踏出したから、一変も歸つても見ねば、殆んど音信にも接しなかつた故郷は、流石に懐かしくなつて、知人に他所ながら會つて見たかつた。つひぞ思出したことのない、幼友達の誰彼れが、影のやうに浮んだ。父と姉とに連れられて、勇ましく東京へ行つてからの四年間も、悪い夢に魘はれてゐるやうに、取留めもなく浮んだ。

早く河津さんが歸つて來て側にゐて呉ればと、身を持ちあぐんで其處へ俯伏しなつて目を閉ぢた。

店先に駄菓子並べた中野の百姓家の臺の上を、お安が涎を垂らしながら、ヨチ／＼歩いてゐる。本郷座の房州海岸の場では、高田の作兵衛が泣いて貰ひ子の素性を話してゐる。河合の美しい環と、着飾つて實の子を訪ねて行く自分がつになつた。

「お母さんが抱つこして上げよう」と、梅月で買った最中を見せても、お安は側へ寄つて來ないで、身體に觸ると、聲を張上げて泣出した。

お國は膨らんだ手の甲を涙で濡らした。生んだばかりの可愛らしい子供を人手に渡して、泣いて縫付く自分を足臍にした憎い／＼鈴木木の

悪相が、其處へ現はれた。憎いよりも次第に恐ろしくつて溜らなくなつた。

四

「お前は東京へ行つて磨上げたら、何處へ出しても恥かしくない女になるよ」と、別れ際に叔母に煽られたお國は、十六の秋には、最早垣一つ隔つた隣の家の食卓木の甘い言葉に乗せられて、姉の家を飛出して身を隠した。天神下の棟割長屋に貧しい所帯を持つて、男の指圖のまゝに日を送つた。覺束ない手先で雜物をもした。男に手を取つて教へられて讀み書をも學んだ。戀文はかう書くものだと幾度も稽古させられた。「雨の日風の夜もお前様の面影を忘るゝ暇は御座なく候、柔しいお言葉は今尙耳に響くやうにて、心も空になり申し候」といふやうな文句を誦んじた。「戀する時と悲しみと何れか永き何れか短かき一といふ、或雜誌にあつた新體詩の一節をも説明して聞かされた。

「お前、まだそんな心持は分るまい」と、鈴木は邪氣ない顔を見て訊くと、

「私、分つてよ」と、お國は涼しい目を見張つた。

その頃からこれまで知らなかつた物懐かしい

やらな、何か待遠しいやらな氣持が、絶えず胸に湧いてゐた。教はつた文字を集めては戀文を書いて喜んだり、「戀しき御許へ」と誰れに宛てるともなく書いて見たりした。鈴木に連れられて諸方を散歩する折にも、行違ふ若い男や女が類りに自分の方へ目を配るやうに思はれ出した。鈴木は定つた仕事もないのに、いろ／＼に無理算段しては香水や白粉や、女の悦しがるものを買つて御機嫌を取つてゐた。「今におれがお前にいゝ服装をさせて立派な女にさせてやるよ、も少し平地しておいで。おれだつて二三年の内には些とは出世するぜ、何時までも貧乏な思ひばかりさせとさやしない」と、口癖に云つてゐた。そして晩酌の相手をさせては、面白可笑しく艶いた話をしたり、淫らな事をも云つた。お國は大人しくそんな話を聞いてゐたが、次第に厭な氣がし出した。お酒に酔つて詩を吟じたり薩摩琵琶を唄つたりするのは面白けれど、何故あんな下品なことを云ふんだらうと、厭々「お止しなさい、そんな下らない話は」と、言葉先を壓へるやうにした。

二月三月。十七の春になつて、身體付も日に子供放れして、姿や素振りも品やかになつた。木綿着で水波をしたり、用足しに行つた

りするのを見て、近所の女房達が惜しい女だと噂してゐるのが、お國の耳にも入つた。坂上の麵麴屋の老翁も馴々しい口を利いたり、厭な目付で見たりした。

「あの禿爺さん、氣味の悪い奴だよ、私、もう彼處へは買ひに行かない」と、或日晚餐の食麴麴を買つて来て、お國は憎體にいつて、その老翁の様子を訴へた。

「彼奴も助平らしい面をしてやがる」と、鈴木は笑ひながら聞いてゐたが、やがて戯談らしく、「どうだその爺さんを騙して、ウンと絞取つちや。おれが甘い方法を教へてやるぜ」と勧めた。「随分溜込んでるといふ噂があるから、甘く釣寄せて捲上げるんだ。さうでもしなけりや、當分二人の生活も立ちやしない、それも、おれもお前が可愛いから、もつと小洒洒した身装をさせて氣樂にさせて見たいんだが、此處暫らくおれの出世をするまでは駄目だからなあ」と、一杯機嫌で本氣で説付けた。

お國は呆れて知らん顔をしてゐたが、二三日引續いて勧められると、終ひには恐ろしくなつて来た。情なくてシク／＼泣出した。同じ家にあるのが、それから厭になり出して、鈴木の柔しい親切らしい言葉も底氣味悪くなつた。

五

厭になつて、酷い目にも會はされて、手向ひもした事が、今ランプの側で鬱き込んでゐるお國の胸に鋭く現はれた。

「どうしたんだい、目を問ませたりして」と、河津は何時の間にか前に突立つて笑つてゐる。

「貴方、何處を歩いて」と、お國は頭を下げて淋しく笑つた。頭も稍々軽くなつた。

「一通り町中歩いて来たよ、倭町の角に大きな麻問屋があるね、増田新吉といふ瀬戸物の表札が出てるが、あれかい、叔父さんの家は？」

「さう、…明日は彼處へも行かなくちやならんし、私明日が苦になつてよ、お母さんにも會ひたくなかつた」と、焦躁した氣持を顔に現はしたが、河津が脇枕して、興ありげに女の顔を見守つて黙つてゐるのを見て、「貴方後悔してゐるんぢやなくつて、今日此處へ来たことを」と詰つた。

「そんなことがあるものか」河津の快活な言葉には深い情愛をも含んでゐるやうだつた。

「さう、本當、後悔しない？」と、お國は念を押して、安心した。

隣の部屋では、酔倒れてゐた客も歸つて、嵐

の後のやうに急にヒツソリした。女中は跡片付をして隔ての襖を開けた。三間突通して風は冷つこく流れた。煙草盆や座蒲團を持運んで、二人は真中の部屋へ移つた。女中は次の間に蚊帳を釣つて引下つたが、二人は容易に寢床に就かなかつた。

「まあ、いゝ月だ」お國は縁側に差込んで来た月影を見て、身輕に立上つて、手欄に寄つて、明るい光を治びた。そして男を手招きして側へ立たせて、ウツトリ夢見るやうな目付をして、「何か面白い話を聞かせて頂戴な、哀れつぼい話を聞きたいわね」

「哀れつぼい思ひは二人でサン、爲厭いたぢやないか」

「私達の事は厭き、私達に關係のない哀れつぼい事を聞いて泣きたい」

「よく泣きたがる人だね、剛情つ張りの癖に」

河津は手欄に身を凭らせて、女が苦しい二三年を送つた今でも、以前のやうに甘い涙を喜んでゐるのを不思議に思つた。以前鈴木目の目を忍んで、上野近所で出會つた時分に、男の泣き方が少ないと云つて恨んだことをも思出して、「僕はもう大人になつたから泣かないよ」と云つて笑つた。

「へえ、學士になると泣かなくなるの、泣かなくて戀が出来て？」

「出来るとも、戀は悲觀すべきものぢやないさ」

「だけど、私そんな経験はない、戀をして悲しくなかつたこと私一度もないのよ。貴方に會つてた時分だつて、只の一度だつて涙の出ない事はなかつた」

低い聲で止切れくりに、言葉もなく話して居る間々に、互ひの心には昔の事が小説のやうに浮んだ。そして男は段落のついた物語を振返つて思出すやうだつたが、女は尙物語の中を小迷つてゐる氣でゐる。

天神下の前の家に二階借りして學校通ひしてゐた河津の制服姿は、今も目の前にあつて心を震ひ動かした。日毎にそれとなく二階を見上げては、せめてもの心遣りとしてゐたが、何が縁になるか知れぬもので、不忍池に火花があつた夜、宿の人に招かれて二階にそれを見に行つてから、互ひに口を利くやうになつちやつた。

「私本當に不思議だと思つてよ、貴方とは切つても切れない縁があるんだわね、迷信のやうだけど、前世の約束事とか何とか云ふんぢやないかと思はれてよ」お國は深く思込んで、さう

云ひながら、男の指先に觸れた。

「さうかも知れん、一生の別れを三度もしてゐる癖に、矢張この世でかうして會へるんだからね……しかし随分恐ろしい目もしたよ、當分は平氣で道が歩けなかつた」

「だけど、私、これからだつて、まだ幾度怖い思ひをするからしない」

お國は物に驚くやうに息を震はせた。鉦屑や木切の堆い路穴を見下して、「私、かうして高い處から下を見てると、誰れかに後から突落されさうな氣がして、ゾツとすることがあつてよ」と、手欄に堅く掴まつて、「私西洋館の三階から飛下りようとした事があつたの、天神様の近所に黒川といふ大きな家があるのを、貴方知つてゐるでせう。彼處の書生さんがね、家の中を見せてやらうつて、私を三階まで連れて行つて、出口に錠を下して、私を追廻すの。私夢我夢中で階下へ飛下りようとしたのよ、さうするとその書生さんが怖がつて、戯談だ〜と云つて、出口の戸を開けて哭れたからよかつたけれど、随分怖かつてよ」と、ドキ〜胸騒ぎをさせた。

河津はその話を二三度聞かされてゐるが、一度は男に追廻されるのが自惚らしかつた。一度

は男の服らしさを嘲るやうだつた。今は只物を恐れるやうに力なく話した。
 「眠くなつた」と、河津は欠伸をして寢床へ入つて、廣々と手足を伸したが、お國はまだ暫らく縁側に首垂れてゐた。

六

翌日。昨日よりも暑さが烈しくて、見る物が乾き切つて、戸外は恐ろしく見えた。お國は化粧した顔に汗に浸して、眩しい道を喘いで、宿屋から二町にも足らぬ自分の家へ行つた。麻間屋の前を蝙蝠傘で避けて、角を曲ると其處に有つた管の下駄屋は見當らなくて、駄菓子屋の側に薄汚い氷店があつた。肌襦袢一つで、見覚えのない神さんが水を削つてゐる。土間にゐる四五人の目が此方に注がれたので、お國は顔を背けたが、後から見詰められてゐる氣がして、歩き振りをも諱しんだ。
 家の軒には町名の入つた祭の提灯がブラ下つてゐる。闖を跨ぐと、襖を外した奥の座敷まで家中が見透かされた。量張つた風呂敷包を上り口に置いて、お國は真先に上の姉の後姿に目を付けた。着物のさう美しく見えぬのが何よりも悦しかつた。

「まあ、國ちゃん」病人の枕許に坐つてゐる二人の姉と叔母とが、足音を聞きつけて振り返つた。

「昨日停車場でお金を落しちやつたから、今朝出直して来たの」と、姉に言譯して、「お母さんの病氣はどんなの。私、今度は永くゐるといふんだけど、急用が出来て、正午過には歸らなくちやならない。」

この人達の中らゐて、煩き自分の身の上の事を訊かれたり、世帯染みた話を聞かされるのを好まないで、着くともう一刻も早く此處を離れようとしてゐた。高い枕をして白い敷布の上にならぬ肌を現はしてゐる母は、首を持ち上げて、それとは思はれぬほど大人びた娘の顔をヂツと見てゐたが、やがて涙ぐんだ。

「お母さん、撫でて上げようか」と、お國は指環の光つてゐる手を母の肩に當てた。そして叔母や姉が左右から、この頃の事を訊かうとすると、「私、今日はお母さんの見舞に來たんだから、私の事なんか何にも聞かないで頂戴」と、ツケツケした調子で斥けた。

叔母は皆の揃つたのを喜んで、御由走拵へに臺所の方へ行つた。母は小聲でお國の氣に障らぬやうな事を云つてゐたが、やがて快く眠

入つた。

「暑さに中つたんだよ、歳が歳だから餘程悪いんかと思つたけど、これならまあ安心だ」と、上の姉は先に立つた次の間へ退いて、一人ヂツとして母の寝顔を見守つてゐるお國をも呼んだ。その室には佛壇があつた。今の姉の手で捧げられた線香の煙が微かに棚曳いてゐる。ほの暗く位牌が並んでゐる。お國は信心の厚い母に導かれて、小さい時分から佛壇に馴染んでゐたが、今その方へ目がつくと、急に妙な氣になつて、その前に跪いた。恭しく線香を上げて、鉢を叩いた。床しい煙と香ひが流れてイラ／＼した心を鎮めるやうだつた。珠数を爪繰つて看經をしてゐた母の姿が懐かしい。「いつそ尼さんにもなれんものかしら。若い美しい尼姿はどんなに他人の目に見えるだらう」と、髪を卸して袈裟を纏つた自分をウツトリ思ひやつた。

「國ちゃん、氷をお上んなさい」と、下の姉の聲に、お國は座に加はつた。姉は年中暇のない身體を今日一日は氣樂に休ませた悦ばしさに、歳に似合はずはしいでゐる。三人並んでゐる中で、見劣りする顔形をも身装をも氣に留める風はなく、商賣の掛引や出錢の高を話してゐたが、それをお國は憐憫に感じた。あんな厭な

御亭主に何時までも連添つて色戀もしないで、何が面白いらうと、その氣樂さうな様子に思かしく思つて、黙つてツンとしてゐた。

「此處にも人手が足らんのだから、私、一月も来てて介抱して上げたいんだけど今の中はとも駄目と、姉は米水二杯を飲干して、浴衣に垂れた滴を拭ひながら、お國を見上げて、「お前がどうかして此處にゐて呉れるといふんだがね、三人とも側にゐないやうぢやお母さんも心細いよ、どうせ先が知かいんだから誰れかが側ゐて孝行して上げるといふ。叔母さんの家の世話にばかりなつて、實の子が打放つといぢや、義理が立たないと思ふよ」

「さうだとも。お國もこれ迄の事は仕方ないとして、もうそろ／＼身を堅めなくちやならんよ。何も東京で暮す必要はない、田舎で氣樂に暮す方がいくら増しだか分りやしないよ。さうしてお母さんと一緒にゐて上げれば、お母さんも喜ぶだらうしね、私達も安心するのだよ」と、上の姉も説き諭した。

「さう」とお國はその姉には横顔を見させて冷淡に答へたが、やがて、「私、お母さん一人ぐらゐる東京へ連れてつて立派に養つて上げるよ。死ぬるまで些とも不自由な思ひなんかさせないで

世話をして上げるよ。お母さんの身體を動かしてもいゝ位になつたら彼地から迎へに来てもいい。その積りにさへなりや、私だつて甲斐性なしぢやないんだから」と、力んだ。

「大變な元氣だねえ」と、上の姉は笑つて、「だけど、氣ばかり勝つてて無分別な事をおしでないよ。お前だつて何時までも若くはないんだから」と意見らしい口を利きかけたが、お國の面付の小憎らしく説諭しても聞入れさうもないのを見て口を噤んだ。

風は吹通してぬれど生温くて、目の前に照付けてゐる眞晝の強い光は、眠不足のお國の目を眩ますやうだつた。御輿を昇廻る聲が暮くしく表通りに聞えた。上の姉は開立てて、それを見がてら宮詣りに行きたがつて、姉妹を誘つたが、お國は首を振つて、「二人で行つてお出でよ、私、お母さんの側についてゐるから」

「ぢや、留守番して御馳走して待つといで、お晝飯までに一寸お詣りして来よう」

二人は面白さうに出て行つた。叔母は甲斐甲斐しく臺所で胡瓜揉みを拵へたり、魚を煮付けたりしてゐたが、二人が聲を掛けて行くのを目を擧めて見て、「この日盛りに出歩かなくたつてよささうなものだに。手傳つて貰はうと思

つてたに逃げて行つちやつた」と、獨言のやうに零した。

「叔母さん、手傳はうかね」所在なげに坐つてゐたお國は立つて臺所を覗いて、「水でも汲んで来て上げようか」

「ウ、ン。お前さんは珍らしいお客様だからヂツとしておいでよ」と、叔母はお國の臺所へ入るのを拒むやうに手を振つた。

「だけど、叔母さん、私御飯は欲しくないのよ、それにもうお暇しなくちやならないの。今夜彼地で手を外せない用事があるんですから」と云つて、呆れた顔をした叔母のくどく引留めささなのを厭へるやうに、主人持の不自由さ忙しさを、早口に眞實しやかに述立てた。人のいゝ感じの鈍い叔母は別れを惜みながらも強ひて引留めもしなかつた。

で、お國は愚圖々々してゐて、親類近所の人の目に觸れて歸りそこなはぬやうにと、身支度をして安心して久振りに快く寢付いた母の寝顔をソツと覗いて、心で別れを告げた。何となくこれで一生會へないんぢやないかと思はれた。親の壽命を氣遣ふよりも、自分の壽命が盡きかゝつてゐるやうな氣がしてならなかつた。

七

急いで宿へ歸ると、河津は下座敷へ引移つてゐた。ピールのコップを前に置いて、目縁を紅くして、お鶴といふ女中を相手に話をしてゐる。「お歸りなさいまし」と、女中は笑顔をして迎へて、空嚙を持つて出て行つた。お國は疑り深い目で見送つて、「あの女は何か私の事を話さなくつて」

「何故? : : 何も云つてやしない」
 「さう。あの女は元からよく商口を利いて仕方がないの」と云ひながら、留守に自分の爲にならぬ噂をされてやしないかと氣遣つた。そして、晝餐を食へながらも、給仕してゐるその女中と、河津との顔を見ては、藤口の跡を捜らうとした。

「暑い土地だね : : こんな土地に長居をする必要はないよ、早く歸らうぢやないか。歸つて涼しい處で息を吐きたい」河津は直ぐにも立ちたい位だったが、お國は浴衣に着替へて、グツタリ疲れた身體を畳の上に伏せて、頻りに粘り唾を吐いてゐた。

「私、東京も厭」と、子供らしく首を振つて、「せめて一晩でも知つた人のゐない土地で、ソーツ

と靜かに寝かして下さい、貴方の側で何にも氣に掛けないで、一日眠りたい」

「ぢや歸り途だから、大宮へでも寄るといふんだが、僕は十分に金を持つてゐないよ」

「私、指環を質に置くわ。一度東京へ行つてお金を拵へて大宮まで来ていふ」と、キツとした口調で云つて、お國は延と石入の指環を引抜いて、「二つで二十圓は貸して呉れてよ」と、男の前に置いた。

「だけど、それを無くしちや困るだらう、後で買つて呉れた人に言譯が立たんぢやないか」

「いゝえ構はない。後はどうなつたつて構はないのよ、私、かうしてお互ひに暑い思ひや厭な思ひをして語らなく別れたくない」男に少しでも悪い記憶を残さずのもつらかつた。出る前に樂みにしてゐたこの旅が、飽氣なく終りさうなものも口惜しかつた。

「さうさ、どうせ又何時會ふか分らんのだから、僕だつて別れ際をよくしたいよ、あの時月夜に湯島で別れたのは、後の思出のためには非常によかつたのさ。今度も大宮へ行つて何時かの部屋で松風でも聞かう。かうして田舎の宿屋で汗みどろになつたのが、一生の見收めぢや實際不愉快だからね」

河津はかう云ひながら、今度の旅をも美しく色取りたかつた。一生の別れといふのが、尙更旅に味ひをつけた。だが、お國は男が平氣で口にするその言葉や聞くと、さながら死刑の宣告でも聞くやうな氣がした。この人を離れた後の東京生活は、淋しく懶く張合のないやうな氣がして、最早一日も我慢が出来たらうかと思はれた。そして男が自分をどんなに思つてるかと、不安心でならなかつた。黙つて見てゐると、暑さにもめげぬそのキビ／＼した顔付と様子とは輕もしくあつたが、以前のやうに女に氣を兼ねて、その機嫌を害ねぬやうに勤めた、あの幼々しい様子のなくなつたのが物足らなかつた。

「二年の間に外にどんな情婦が出来たか分りやしない」と、さう思ふと、このまゝ手放す氣にはなれなかつた。

「兎に角この汽車で出かけよう」旅行案内を見てゐた河津は、慌しく手を打つて勘定を急がせた。

やがて俥に乗つた二人は、町の左右に日もくれず、一途に心を停車場の方へ向けた。

八

大宮の萬松樓の二階に二日ほど氣儘に遊ん

で、歸るともなく二人は上野の停車場に着いて、再び會ふ機会を約束して別れた。お國は別れてから溢々電車に乗つて、壽町の宿へ向つたが、自分に關係のある東京の誰彼れが、不斷より一層強く心を壓へるやうに浮んだ。

それに——大宮から金策に一人で歸つて、よしいやの主婦に指環の質入を頼みに行つた時、主婦が中野にゐる子供の噂を傳へて、「あの子も此頃は暑さ中りか何かで弱つてるさうだから、一度様子を見に行つておやりよ」と勧めたことが、絶間なく胸を脅かした。「あんな實の親に懐かない、子供に會つたつて仕方がない、死んだつて私もうあの子に會はない」と、あの時元氣よく答へたことも情なく思出された。だが、「いくら自分の生んだ子だつて、懐かないものに會つてやるものか。いくら會ひたかつたつて會はない」と、直ぐに強情に自分の心を叱付けて、造瀾ない思ひを振亂しもした。

燈火の見えぬ薄暗い路次を通つて、突當りの二階家の前へ來ると、お國は立留つて、兩戸の締つてゐる二階を見上げてから、玄關の戸を開けた。「只今」と聲を掛けたが返事が無い。心を振込んだランプが薄明るく、赤兒の寝顔を照らしてゐる。「楕はない人送だ」と呟いて手搜りに

二階へ上つて、燈火を點け兩戸を開けた。嘘せるやうな温氣を拂つて、衣服を着替へながら、部屋の様子を見た。煙草盆には巻煙草の吸殻が堆い。新聞一枚擴がつてゐる。硯箱の下から一通の手紙が、食出てゐたが、それには「歸り次第端書にて一報これあるべく候」と書いてあつた。今日此處で待ちあぐんで、自棄に煙草を吸つてゐた人の顔が見えるやうだ。彼地から端書の一本も出さなかつたのが、あの人の氣に障らなかつたらうか。

で、お國は氣ぜはしく筆を執つて、申譯やら歸京の知らせやらを書いて、ポストへ入れに行つた。そして風呂へも入つて、路次の角へ來ると、二三間離れた乾物屋の軒下に腕組みして日を凝らして此方を見てゐる男に氣がついた。屢々宿の近所に突立つて、執念深い目向けの男だ。お國はそれと知ると身慄ひして脇目も振らず路次を通つて、家の中へ駈込んだ。戸口に男の足音がしてゐるやうな氣がする。

「どうしたの姉さん」と、今戸外から歸つて、縁側に腹俯ひになつて涼んでゐる十五六の男が、黒瞳勝の涼しい目を上げた。「向ひの馬鹿が又追驅けて來たの」と、お國は薄暗い玄關の方を顧みて、「勝ちゃん、一寸出

て見て頂戴」
「ア、彼奴どん殿つてやるといゝんだと、勝太は拳に力を入れて跳起きて、楕子戸を開けて見廻して、「誰れもゐやしないよ」
「さう、……本當に氣味の悪い奴ね」

お國は一人ぼつちでゐるのに堪へられなくて、二階へは上らなかつた。片手を突いて斜に坐つて、勝太を相手に冗談口など利いた。勝太は物恥かしさうに、お國の顔を見ながら、無邪氣に顔間な調子を合せてゐた。先日お國に教はつた喇叭節を、透通つた聲で唄つた。「ラブに貰うたハンカチーフ、紅葉の模様とは氣にかゝる、……トコトツトツト」唄つてから極り惡さうに、「僕は駄目だ、僕のやうな唄ひ方ちや三味線に合はんでせう」

「でも勝ちゃんの聲はいゝ聲だね、こぢから何か本式に稽古するといゝよ」
「ちや、姉さんが教へて呉れるといゝな。さうしたら僕習ふんだけど」
「お安い御用だ、何時でも教へて上げるよ」
「旦那は怒らないかい」勝太は眞面目で訊いた。
「怒るかも知れないね、だけど怒つてもいゝさ」お國が本氣らしく云ふと、

「旦那を怒らせたなら、姉さん困るだらう、旦那のお蔭でかうして生きてられるんだから、御機嫌取つて氣に入る方がいいよ」

「御機嫌なんか私、取らないよ。若しも旦那に嫌はれたら、勝ちゃんどうかして呉れなくつて」と、日元に媚を含んだ。

「どうかしようたつて、僕は駄目だなあ、お金なんか一銭もないもの」

「ぢや、一緒に死んでお呉れよ」

「あゝ」と、勝太は考へてゐたが、「僕、死んぢやつてもいいなあ」と、口に力を入れた。

「さう、一緒に死んで呉れて。私嬉しい」

お國はさも悦しさを顔をした。そしてその戯れの言葉を眞實にしたいやうな氣になつた。

此方の死にたい時には何時でも死んでやらうと云ふ男のあるのが、何となく心を引立てた。そんな話をするだけでも心の慰めになつた。

「ぢや、勝ちゃん、これからお湯を沸しつてお茶を入れるから、貴方お茶請けを買つて来て頂戴」

お國は「勝ちゃん、好きなものを」と、銀貨を渡して、急いで買つて來させた。そして二階の長火鉢に炭を繼いで、埃のかゝつてゐる茶道具を拭ひ、勝太の歸るのを待遠しがつた。

九

その翌日、旦那の朝川からの手紙に、「會ひたいが、會社の用事が忙しく、五六日行くことが出来ぬ」とあつた。怒つてゐる風のないので安心はしたものの、少しの小遣錢もないのが不安心だつた。で、又よしやの女房に頼んで縮緬の羽織を質に入れたが、最早外には質草にするやうなもの一つもない。冬物はすっかり流れてしまつたさうだ。女房に意見されて、無駄費ひを憤むやうに自分でも心付いたが、歸り途に松坂屋の前を通つて、意氣な浴衣地が目にうつくと、もう素通りは出来なかつた。そして買つて來た反物を仕立屋へやつて、その仕立上るのを待遠しがつた。

朝は日の差込むまで、眠るでもなく寝てゐて、起きると、四疊半の拭掃除と飯事染み副食物拵へをするのが一日の仕事の凡てになつてゐる。壽町へ來てから満二月、三日目五日目に朝川が遊びに來る外は、手持無沙汰に日を送つた。過ぎ去つたことを繰返し／＼考へては氣を腐らせてゐた。その當座こそ鈴木から居所を覗まして、付纏はれなくなつたのに、稍心も輕くなつてゐたが、次第に退屈で溜らなくなつて來た。

三四ヶ月前まで世話になつてゐた品川の質屋の隠居とは異つて、朝川さんは獨身ではあり、氣立も面白いけれど、その代り先々の當ては不確かでない。歳が若いだけにお金にも不自由してゐるらしいから、何時手切れ話にならんと制限らぬ。と、折々は取越苦勞をもした。品川にゐる時分に始めた三味線の稽古をもつと続けようかとも思つたが、何時まで此家にゐるか分らぬので、そんな氣にもなれなかつた。

半日も火の氣のない長火鉢の側に寄掛つて、音も立てずチツと坐つてゐると、階下の女房が階子段の中途から、「姉さん、また鬱いでるんですか、お茶でも入れますから、お話しに入らつしやい」と、聲を掛けるのが極りになつてゐるが、お國はそれを煩さがつた。二度に一度は階下へ下りて、茶請を奢つて、近所合壁の噂をも聞いて、調子を合せて笑ひ興じもすれど、女房のガラガラした話振りには何時も氣持を悪くした。馴々しく人を見下したやうな口振も厭だつた。

だが、女房のゐない折には、屢々勝太を二階へ呼んで、小聲で流行唄を教へたり、冗談口も利いたりする。「勝ちゃんはどうな女が好き」私のやうなんぢや厭など云つては、勝太の恥かむのを見て悦しがつた。

或夜も胸苦しくて、頻りに苦い唾を吐いてゐると、勝太はその背を擦つて介抱した。そしてお國が首伏になつて何時かウト／＼してゐる間に、ソツと手を胸元に當てた。生れて初めて柔かい肌に触れた。

「胸を押へて頂戴、其處が悶へるやうだから」と、お國は氣付いて目を醒して云ふと、勝太は顔を背けて、指先に力を籠めた。

「勝ちやんの手は大層慥へるのね」お國は顔を上げて、冷かすやうな目を向けた。

その翌日、眞晝の暑さ盛り、朝川が浴衣掛けで遊びに来たが、勝太はその目を避けるやうにした。

荒々しい足音をさせて二階へ上つて、朝川はいきなり汗の流れてゐる肌を脱いで、「おれもこんなに痩せちやつた」と、浮上つた肋骨を撫でた。お國は濡手拭を絞りながら、

「私も目が窪んだでせう、病氣したから」

「女の夏瘦はいゝさ。男の夏瘦は見すばらしいけど」

「でも女だつて、瘦せるのはいゝ氣持はしないわね、私、鏡を見る度に心細くなつてよ」

「歳の加減で仕方がないさ。いくらお前だつて今に艶がなくなるぜ」

「いやですよ貴方、そんな心細い事を云つて」

「だつてそれが事實だもの」

「私、そんな事實なんか聞きたくない」

「ぢや、お前も女だから、矢張お世辭が好きなんだね」

朝川は無造作な口を利いたが、お國はその言葉の裏に彼れの心を讀んだ。あれでも私には思ひを寄せてゐるんだと思つて、心を安めたが、その人の此頃の懐工合や家の事情を竊かに搜りたくて、

「此家は北が塞がつてるから暑いでせう、風通しが悪くて。何處かもつと涼しい家へ越しぢやどう？ 先日よしやへ貸間を氣をつけて呉れつて頼んどいたの」と訊いた。

「さうか」と、朝川は氣乗りのしない返事をした。

「成るべくなら小さい家を一軒借りた方がいゝのよ。こんな處にゐて洗濯まで人に頼むやうぢや却つて不経済だわ」

「だけど、洗濯なんかして、その柔かい手を荒らしぢや詰らないぢやないか。經濟を考へるやうな柄でもないのに」

「さうね、私、所帯持が下手だから駄目ね。どらせ人の妻になる資格はないわね」

「其處がお前の値打だよ」

「だから、ほんの一時の玩具にされるばかりなのね。……あゝ詰らない」と、お國は持前の哀しげな口振で云つた。そして大儀さうに身を起して、朝川を縁側へ追ひやり、手拭を被つて、埃でザラ／＼してゐる部屋の中を拭掃除した。箒を持つた手には力が入らない。白くなつてゐる机や茶箱筒や縁側を氣の済むまで拭ふには、幾度か手を休めて溜息を吐かなければならなかつた。

掃除が済むと、朝川は部屋の中へ寝そべつて、簾越しに、燃えつきさうな隣の屋根を眺めてゐた。お國は髪を結びに行つた。そして縁側には魚屋へ廻つて、刺身を洗へて、煙草や水蜜桃をも買つて来た。

「今日は泊らないで歸るよ、明日早く用事があるんだから」と、朝川は座敷熨壇に火を起しかけてゐるお國を尻目に見た。

「歸る／＼つて、自慢さうに云はないで下さい。私聞かんんにビク／＼するから」

強い光は縁側から離れて、部屋の中も涼しげに見え出した。お國は珍らしく身體を働かせて、腹の空くを覺えた。團扇で風を呼びながら、食卓の前に寛やかに坐つて、「一人ぼつち

で御飯食べると心細くつてよ、晩御飯だけでも毎日貴方が食べに入らつしやるといふと、云つて、心でもさう思つた。

「姉さんと、階下から勝太の呼ぶ聲がした。お國は箒を置いて、階子段から覗いたが、誰れか訪ねて来た者があるらしいので、コツソリ下りて行くと、玄關にはよしやの女房が立つてゐる。その顔が不審とは異つて、いかにも無愛想らしいのに、胸騒ぎがされて、「何か用事があつて」と、小聲で訊いた。

「今日鈴木さんが来たよ」と、早口に隣いて、「居所は大抵見當がついてるから、近日此度捜し當てるつて」

お國の胸は早鐘のやうに打つた。「そしてどんな身装をしてて。襦袢を着てるでせう」

「さうでもないよ、洋服を着て新しい麥藁帽子を被つてたよ。此頃は仕事が出来て食ふにも困らないから、貴女も安心して下さいつて、私にさう云つて、氣樂さうな風だつたよ」と云ひながら、女房は帯の間から手紙を出して、「次手があつたら、これをお國に渡して呉れつて、私の家で書いて行つたの、私決して居所を云はなけれど、お前さんも用心して見つからんやうにおしなさい」

女房はそれだけで歸つた、お國は足が地につかぬやうであつた。二階へ上ると、氣が遠くなつて耳が鳴つた。

「どうしたんだ、眞着になつて」と朝川が驚いて訊くと、お國はホロ／＼涙を流した。

「私にはいろ／＼の祕密があるんですから……貴方にもこれつきりお目に掛れないかも知れない」

「何故？ 悪い男でも隨いてるんかい」

「さう！ 貴方愛想が盡きたでせう」

お國は目を仰げ、頤に手を當てて斜に男の顔を見た。

「今日その男がどうかしたのかい、譯を話して聞かせないか」

「私、譯なんか話したくない」と、封をも切らない手紙を食卓の上に置いて、「私、自分でこの手紙を讀む氣になれないから、貴方讀んで御覽なさい」と云つて、中にどんな事が書いてあらうと構ふものか、どうせこの人とも今日限りの縁だと自棄に思詰めた。

青い封筒に小村お國殿と筆太く力強く書いてある。朝川は初めてその女の本名に氣付いて、暫らくお國の顔と、その封筒とを見比べて、

「お春といふのは世を忍ぶ假の名か」と、目元に

冷笑を流へた。

お國は無意識に手を伸してその封筒を奪はうとしたが、もう甲斐のないのに氣付いて、「名前なんかどうだつていふさ、時と場合で自分の勝手な名を付けますよ」

「だけど、あまり幾つ名前を持つてると、自分の名を呼ばれても他人のやうな氣がするだらう。どうも初めの間は春ちゃんと呼んでも、ぼんやりしていることがあつたよ」

朝川はそれだけでも、この女の前生を透視した氣がして、興を起した。裁判官が證據物件を調べるやうな心持で、封を切つて量張つた巻紙に注意の目を向けた。「御身に卒氣なく別れてより、雨の日風の夜一日とても面影の忘れる暇なく、何事も手につかず、打たれて日を送り居り候。せめて酒でも飲んで鬱を晴さんかとも存じ候へども、御身の嫌ひな酒を口にすると思へば、杯持つ手も心苦しう候」

朝川は聲を出して一息に讀んで、中々字が巧いね、文章だつてさう拙くはないと云ひながら、その次の感情を誇張した數節の文句を默讀した。お國は顔を背けながら耳を澄して、折々手紙の方を窺見した。

「……小生も數日前より△△會社へ奉職いた

し、最早衣食の費には窮せざることと相成り候へば、幸に安堵なされるべく候。御身には此迄さまぐの苦勞を掛け候が、今はその心配も消されたれば、一日も早く御身と以前の如き睦じき生活に立歸ることをのみ希望いたし居候。御身と小生との關係はとて他人の窺知る所にては無之、幾度か仲違ひをして、放れぐの境遇を經來るとも、一朝一夕に相別るゝ如き淺き縁とは覺えず候、されど小生が如何に慕へばとて、御身が小生に對して些しの情愛をも抱かざるに於ては、何とも致し方なく候へど、兎に角一度お目に懸りて、とくと衷情を吐露し、御身の心底をも承りたく候、都合にて只の一二時間或はほんの十分間五分間にて満足いたし候。ゆる、是非小生の切なる願を叶へて、面會被下たく、指圖通りに何處へでも罷出で相待ち申べく候。若し御身が再び小生と同居して苦樂を共にするの心、毫末も無之とならば、快く別れの杵にても酌みかはして、小生は他の婦人を娶り、御身とは兄となり妹として交際を結びたしとも思居り候。それもこれも厭はしく一切無縁の人となりたしとならば、小生も涙を吞んで諦め申すべく候。逃げ隠れて何時までも決着致さざるやうにては、御身も絶えず心

懸りとなるべく、お互ひに寢醒め悪しき次第に候。くれぐれも今一度面會いたさるゝやう願上候、よしやの細君を面會の座に加へてもよろしく候。——心亂れて思ひの萬分の一も述べがたし、只會ひたしとの一念に迫られてかくこそ、折返して返書賜はりたく候。」「神田の△△會社内とあるぜ」と、朝川は手紙を巻きながら、「かう云はれば、お前も會はない譯に行くまい。」「そんな優しさうな事を書くのが、あの男の何時もの手なんですよ。」「お國は今にもその男が来るやうな氣がして、女關の物音が絶えず耳に障つた。「ひよつと貴方に御迷惑が掛ると悪いから、早く歸つて下さい。私一人だとどうなつたつて構はんから。もう貴方には一生逢へないんだ」と、さう決めてしまつても、食卓の上に突伏した。朝川は手盛りで緩々飯を食ひながら、根掘り葉掘り訊いて見たが、碌に返事をしない。パケツに水を汲んで縁側へ持つて來た勝太は、二人の様子を怪しんで、見返りく下りて行つた。寄席の鳴物が聞え出した。書間の風は次第に靜まつて、電車の音は際立つて啞しい。暫らく柱に凭れて、薄暗い中で煙草を吸つてゐた朝川

は、身を起してランプを點けた。その光に目醒めたやうに、
「貴方、私を不人情な女だと思はないで頂戴。私誰れにでも不人情な事をした覚えはないんだから」と、お國はその青い顔を上上げて、突如に云つた。激動した感情は稍々櫻めて、心細く、誰れにでも纏りつきたいやうな氣になつてゐた。「貴方、後で悪くは思はないで頂戴」と、幾度も確めた。
「さう一人で泣いたり騒いだりしても、おれには些とも分らない。兎に角當分は此處にゐて、自分で方針を考へたい、ぢやないか、おれは今の事を聞いたつて、今直ぐお前を棄てようとは思はない。」「朝川は氣拙い思ひをしてゐたが、わざと泰然として云つた。お國はそれを手頼りありげに見て、何時までもこの人を放したくなくなつた。急に顔の亂れを直して、寂しい微笑を浮べて、「私、一寸した事で、直ぐ世の中に生きてられんやうな氣になつてしまふの。今も二度ともう貴方にお目に掛れんやうに思はれて、鈴木が怖いよりも、その方が餘程悲しいの、外に誰一人手頼りになる人が、私にはないんですからね。」「ぢや、この家でその男に見つかりさうなら、

早く外へ移つたらいふと、朝川は事もなげに云つて、
「手紙の様子から見ても、鈴木と云ふ奴、さう分らず屋ぢやなさうだ、相當に教育もある男らしいがなあ。お前の方でも弱點があるんだらう、多少不忠實な事もしてらんぢやないか」と、相手の目顔や言葉付に注意して、隠れたる意味を讀まうとした。

「貴方、そんな女と思つてて、私そりや鈴木のために盡したのよ」と云つて、お國はその盡した一例をあらかこれかと選出さうとした。「ああ、今思つても情なくなる」と、胴震ひして、「私、鈴木を迎へに吉原へ行つたことがあつてよ、大海日前で北風がヒュー／＼吹く日に、着物や羽織を質に入れてやう／＼拵へたお金を持つて、方角さへ分らないのに、人に聞き／＼して其處まで行つたの。極りが悪いし、恐ろしいやうな氣がして、その家の前をウロ／＼して居る間に、心細くなつて泣出しちやつたの。泣いて居る所を其處の人に見つかつて、譯を話して二階へ上ると、花魁や叔母さんが、いろ／＼に勞はつて呉れて、可哀さうだつて、皆なして涙を零したのよ。私、その時十六だつた」
その聲音でも、十六七の娘らしくして話し

た。そして朝川の心よりもお國自身の心に、幼々しく小娘が粗末な着物を着て、あの華かな世界に男を訪ねて行く様子が哀れに浮んだ。
鈴木から質置く術も學んだ、花を引く術も學んだ。「そんな下等な事はしたくないと思つてる中に、何時の間にか覺えちやつた。だけど、私これから先生きてる間は、潔白な高尚な日を送りたい。卑しい女になり切つて死にたくはないわ」

「今更高尚な女で澄ましてるよりや、いつそ高橋お傳みたになつて、毒婦お國の墓と棺桶の上に書かれた方が面白いぢやないか。まだ人殺はしたことはないんだらう、戀しい男のために着物や指環を質に置く位が關の山だらう」朝川は意地悪さうに云つたが、「しかし、おれはお前が好きだよ、當分世話をしてやるから、ビクビクしないで安心しといで」と、親切らしくも云つた。
お國はそれには返事をしなかつたが、稍々あつて、「私、今日貴方をお家まで送つて行く」と、屹とした顔をして云つた。不斷から夜を恐ろしがつてゐるのに似合はず、深く決心して、十時近くに朝川に隨いて戸外へ出た。三丁目の角で電車を下りて、あまり話をしないで二人は静

かに歩んだ。涼みがてら散歩してゐる人はまだ多い。夜店もまだ並んでゐて、鹽賣の高い聲が響いてゐる。薄暗い人氣疎らな處に盲人が尺八を吹いてゐる。お國はその人の顔を顧みて、十銭か二十銭施したい氣がした。
「千駄木までまだ餘程の道だぜ、もう歸つた方がいゝよ」
自分の淋しい通りまで來ると、朝川は命令するやうに云つて、足早に歩き出した。

「え」と云ひながら、お國は苦しい息を吐いて、遅れぬやうに足を運ばせた。壽町の宿は思まはしくなつて、今夜は其處に宿りたくなかつた。この知らない道ですげなく別れるのも堪へがたかつた。
次第に道は薄暗く、戸を鎖した家が多い。處處の軒燈の闇を照らすのが却つて寂しかった。世を狭められた落人のやうに、お國は自分達の事を思つた。二人の下駄の音が耳に響いて、行違ふ人影が何となしに胸を騒がせた。
「此家がおれの家だよ」と、朝川がふと立留まつたのに吃驚して、夢から醒めたやうに其處を見詰めた。竹藪を後にした、門構の住善ささうな音のしない家を見詰めた。「内へ入つちや悪いが知らん、誰れの日にも掛らないで、こんな家

に住みたい」と思ひながら、男の氣を兼ねて、それは口に出さないでゐると、

「ぢや、お前は俵に乗つてお歸り、俵屋まで連れてつてやる」と、朝川は謔もなく云つた。そして引返して寢鎮まつてゐる俵屋に聲を掛けた。軒下には蓋團扇で蚊を拂つてゐる婆さんと、肌襦袢一つの女房とが立話をしてゐたが、その婆さんが裏口へ廻つて呼び起して呉れた。

「ぢや、都合であの家を引越してもいいよ。鈴木木の事件がどうかなたら知らせしてお呉れ」と、言放つて、俵の支度のまだ整はぬ間に朝川は振返りもせず歸つてしまつた。

「何てあゝ戀を解しない人だらう」お國はグツグツ疲れた身體を俵に寄せ掛けて、さう思つた。大學の前には夜店が疎らになつて、尺八の音は消えてゐる。

十

二三日は玄關の物音を氣にして日を送つた。魚屋や鳥屋へも勝太に頼んで、自分は成るべく外へ出ないやうにした。そして哀れを訴へるやうな手紙を苦心して書いて、居所の分つてゐる諸方の男へ送つた。品川の老人へも、河津へも、朝川へも。服で溜らなかつた神田の

通番頭へも人懐かしい手紙を遣つたが、待つてゐても、誰れからも返事が來ない。手紙の文句の拙いのかともどかしがりもした。誰れにも顧みられぬかと思ふと、一日が徒らに長くて暮しかねた。

或日階下には天理教の先生が來て、三四人近所の婆さん達をも招いて、講釋を始めた。女房が物知顔に先生の後について御利益を説いてゐる。お國は階子段に腰掛けて、退屈まじりに皆なの話に耳を傾けた。教祖お光が十三の時發心して、慾も得も棄てて、只管人のため教のために一生を捧げたことが、爽かな口調で述べられてゐる。

「日本の人間は皆天照らす天照皇太神様の氏子ぢやで、何よりも崇め奉らねばなりません。私の國の伊勢ではお祭にこぼれ松葉に棲折笠で踊るのぢやが、あれも御日の命が天の岩戸で踊つたのが基なのぢや。皆な大神様をお喜ばせ申さうと思ふからで、この教で踊るのもつまりは同じ道理ぢやぞな。なに事も天の理に叶はねばなりません。人間の内心中は、それすつかり天の鏡に映るから隠さうたつて隠されん」と、女房も精つこい口調で、鹿爪らしく説いた。婆さん達は殊勝に相槌を打つてゐる。

お國は屈んで隙間からソツと階下を覗いて見た。羽織袴で上座に控へた男は熱さうな目をバチ／＼させ、頻りに扇子を動かしてゐる。揃ひも揃つて薄汚い婆さんが居並んでゐる。一人の婆さんの頭の眞中がテカ／＼光つてゐるのが、上から見下された。一人は話に感じたのか、顔で拍子を取りながら聞いてゐた。縁側には勝太が行儀よく坐つて、一座の人を見廻してゐたが、お國は竊かに彼れを手招きした。二度三度繰返した。

やう／＼それと氣付くと、勝太は笑顏をして、足音を忍んで二階へ上つて來た。

「貴方、天理教好き？」お國は小聲で訊いた。「ウ、ン、僕は大概ひき、あんな迷信は無教育な奴のすることだ」

「だけど面白さうね、天理王の歌は。勝ちやんはよく知つてるんでせう。一つ其處で手踊りをやつて御覽なさい」とお國は見覺えの妙な手付をして、「かうやつて踊るんでせう、私三味線を弾くから、其處で天理王の命をやつて御覽なさい」

「ぢや、僕やつて見ようか」と、勝太は階子段の方を顧みてから、母の身振を眞似て踊りながら口の中で唄つた。階下からは嚴かな拍子が聞え

る。お國は久振りに三味線を卸して出鱈目に弾いた。勝太は面白がつて同じ身振を繰返し繰返ししたが、次第に調子に乗つて歌ふ聲も高くなつた。三味線の音にも勢ひがついた。

お國は自分の弾くその亂れた音に惹込まれて心も同じやうに亂れた。根の盡きまで叫つて踊つて、馬鹿騒ぎをして見たい。打つなり殺すなり勝手にしろと、誰れかに向つて啖呵を切つて見たい。

「勝ちやん、お酒を飲まうか、河内屋から二三合取つて来てお呉れよ」と、撥を下に置いて云つた。

「誰れが飲むの、姉さんかい」

「あゝ、私、気がくさくさするから一人でお酒でも飲むんさ、いゝ子だから買つて来てお呉れよ。私に親切な男は世界に勝ちやん一人だから」

「本當に飲むの、勝太は怪しんで目を丸くしたが、それでも否みかねて、素直に言付に従つて出て行つた。

階下の連中は何時の間にか歸つたらしく、聲も音もしない。長屋から浪花節語の單調な歌を促すやうな稽古聲が、埃と油煙の滲んだ生温い風に吹かれて来る。お國は顔を歪めて自然體さうに頭を振動かした。そして三味線を手に

して、幽かな爪弾きで思出し／＼品川で習ひかけた端唄を口の内で唄つた。手先は覺束なくて幾度か行詰つた。上目を使つて考へ／＼弾直し弾直したが、思ふ處に依まらない。

「……月は野末に草の露、チンチンチリソツ」
と、調子外れの不快な音が響いた。で、自分が愛想を盡かして、三味線を後の方へ荒々しく押しつけて、怠い身體を伸した。「何が何して何とやらあ」と、長屋ではまだ飽きもせずに、同じ事を煩々／＼繰返してゐる。その屋根に鳥のやうな鳥の棲まつてゐるのが、簾越しに見える。何事が起つたのか子供等の閑の聲がして、路次の彼方へ驟行く足音が騒々しく聞えた。

「姉さん、取つて来たよお酒を」と、勝太は饅語を前に突付けた。

「私、もう飲みたくなかつた」と、お國は淡黄ろい酒の色を見詰めただけで、もう逆吐きさうな氣持になつた。「勝ちやん、其處に坐つといでよ、階下へ行つちや厭」

ろくに話もしないで、二人は日暮頃まで其處にゴロ／＼してゐた。

十一

二三日折を見ては勝太を相手に自堕落な話

などして目を送つたが、勝太に離れると、俄かに萎れかへる。遺瀆ない思ひに償まされる。男氣を離れて、尼のやうに一生を清淨潔白に過さうかと、氣まぐれに思ふこともあつた。

でも續げざまに、二度三度野川や河津へ手紙を出した。河津からはよ、しやを経て返事が来たが、これで見ると、その人は故郷の和歌山へ歸つてゐる。夏を此處で過したらば、一度東京へ上つて、それから九州の會社に奉職するかも知れぬ。縁あらば上京の際お目に懸り申べし。兎に角わが愛する御身のことなれば、日々幸福を祈らぬ日とはなしと、情のありさうな心細いやうな事を手短かに書いてゐる。そして町名や番地は、封筒にも手紙の端にも記してゐない。

お國は幾度も繰返して、男の心を讀まうとしたが、「縁あらば」といふ言葉が、考へれば考へるほど、冷淡に感ぜられた。もう會はんつもりか知らんと思ふと、心細いより腹立たしい。男に厭がられるよりは、此方から男に愛想づかし文句でも云つてやつた方が氣が利いてゐると思つて、筆を執つて手を奮はせながら、二三行書いて見たが、書いてゐる中に、湧した心が緩んでしまつて、手紙など書いてゐられなく

なつた。邪慳に巻紙を丸めて口で囓占めて、其處に俯伏しになつた。

「人を馬鹿な、服なら勝手になさい。貴方の方で世間の口が怖かつたり、出世の邪魔になるのを心配なさるんなら、私の方でも何も追掛けはしません。貴方は大人しい、奥様でも早く貰つて長生をなさい」と、面と向つて言つてやりたくつて溜らなかつた。世間の義理に迫られて、別れともないのに別れても、互ひに心の中では忘れぬ暇もないほどと思はれてゐればこそ、せめてもの心遣りとなるのだが、男の心、自分の影が薄くなつてゐると氣付くと、立つても坐つてもみられぬ氣になつた。

「燈火も點けないでどうしたんだい」と、その晩朝川が outbreak に入つて來た。

「私、氣分が悪いの」と、お國は哀れげに云つてランプを點けて、「貴方はもう來ないのかと思つてよ」

「でも、お前はよく辛抱出来るね、一人此處にゐて。一人で昔の事なんかを考へるのが、一番好きだと云つてたけれど、もう考へ事にも飽いたらう、勝公を連れて活動寫眞でも見に行かうか」

「いゝえ、私外へは出たくない、芝居だの活

動だの些とも見たくないわ、人混みの中は恐ろしいやうで嫌ひ」

「それ程小膽でもなささうだが」と、朝川が笑ふと、

「私、これで秘密の多い女ですからね」と、お國は過去の自分を心の中で燦かせて、さながら重大な秘密でもあるらしく思過して、「だから私、外の人やうに面白さうな浮いた氣にやなれないのよ、キヤツ／＼云つて笑つてる人を見ると癢に觸つてよ」

「若い癖に妙だね」朝川はお國の神經の顔中に動くのを見た。

「彼はよしやの周旋で、何の氣なしにこの女を此處へ置くやうになつてからも、會社の歸りに氣粉れに立寄るばかりだつた。誰れといふ當てもなく、不意に色町へ寄つて偶然に見た女に對すると同じやうにこの女にも對してゐたが、この二三度はさうばかりでもなくなつた。何かしら心に縛りを残され出した。口數の少くぼんやりしてゐた以前とは異つて、身悶えする様のチラつくのが、彼の心にも響いて來た。その手痛い處を針でつゝいて見たくもなつた。」

「だつて鈴木さへゐなくなれば、お前は苦勞はなくなるんだらう。さうすればその男を殺すか

殺されるか、何方か縛りをつけたらいいぢやないか。逃げ隠れして心配ばかりしてる中に若い盛りは過ぎてしまふぜ」

と、朝川は煽てるやうに云つたが、お國の心には四五日前とは異つて、鈴木を恐ろしさが、大分薄らいでゐた。一刻も早く此處を逃げねばならぬ程に思つてゐない。

「たとひ鈴木がゐらなくなつたつて、私もう駄目」と、投げ出すやうに云つた。

「この世に愛想が盡きたのかい」と、朝川は茶筌筒の上の纏詰に目をつけて、「酒があるやうだね」

「貴方飲まない？ 私、今日は少しぐらゐ飲んでよ。酔つて云ひたい事がある」

お國は銅壺の中に銚子をつけた。男も女もこの部屋で酒を飲んだことがないので、食卓の上の杯洗や猪口を見ても異様に感じた。酒の香の漂ふのが、下戸の朝川の心をも惹立てた。飾のない淋しい部屋を眺かに見せた。二人の間はこれまでになく親しみを加へた。酒の道具は品川の老人の晩酌に用ゐたもので、外に間に合せの安物の世帯道具の中では異彩を放つてゐる。猪口は深く見えて底が淺く、底には不慮に女の姿が描かれてゐる。朝川はその繪を

見てから、まだ生温い酒を一息に呑んだ。お國は顔を擧めて鼻を押へて、二三杯グイと呑みほした。苦しきうに息を吐いて、身體を崩した。がしかし、顔には色が現はれない。

「強いね、僕よりや強い」と云つて、朝川は直きに眞赤になつて脱枕で横になつた。

「男の癖に弱いのね、貴方は甲斐性が無い。私は自分で飲まなくたつて、酒呑の相手ばかりして来たんですからね、自然に傳染したのかも知れない」

お國の音色は酒氣を帯びた。手酌で有りたけを飲んでしまつて、「貴方、私を棄てない？」と、目を据ゑた。

「棄てたらどうするんだい、」

「どうもしないさ、私、今夜直ぐ出て行くの。厭だと云はれて、何時までも唄付いてるやうな私ぢやないんですからね」

「ぢや、棄てなかつたら」

「それなら、棄てないといふ證據を見せて下さい。口ばかりぢや不安心だから」

「ぢや、證文でも書くんかい。何年何月まで期限を極めて。それに血判でも捺さうか」

「血判で血を出すの」お國は血と聞いて氣味を悪がつた。

「それを怖がるやうぢや駄目だね。昔の女は小指を切つたり、血で誓紙を書いたりしたんだよ。あらゆる禍様に誓つて、若しも背いたら如何なる罰を受けて、未來は奈落の底に沈まうとも決心するんだから確かだね」朝川は調子づいて云つた。

「そんな昔風の事は厭だわ」

「ぢや、今風の起誓はないもんかね」

お國は眞面目に考へ込んだが、そんなものは容易に思當らなかつた。話は自ら外へそれて、一私、もう誰れの云ふことも信ぜられない。

貴方の仰有ることだつて、信じちやあませんよ、力を籠めて云つたが、やがて情を含んだ作り聲をして、「かう思つてよ私、戀した時には、早く二人で思切つて心中でもした方がいゝと思つてよ。何時までも生きてれば、その中に何方かが厭になるんだから、それよりや飽きも飽かれもしない中に、二人で仲よく死んぢやつた方が、いくらいゝか分りやしない。：：貴方さう思はない。：：私、本當にさう思つてよ。

あの時に死ねばよかつたのにと今日もつくづくさう思つたの。貴方にこんな話するのは濟まな

いけれど、私、三四年前に惚れた男が一人ありました。その男も私に惚れて居りました。會つ

てはその人の身が立たないやうな破目になつたから、私の方から縁を切つて上げることに極めて、二人で池の端を歩きながら、別れ話をしました。その時その男が別れちや生きてられんから、いつそ死んで呉れつて、私の手を握つて泣いたの」と云つて、その時の事を芝居でも見てゐるやうに感じた。一生に又とない見せ場は思返す度に、人に話す度に哀れさ樂しさの彌増したが、それと共に技巧も次第に加はつた。自分の心の中でも最早虚偽と眞實との差別のつかぬほどに、事實が潤色されてゐる。

「ただ、男といふものは、三年も立てば前の事なんか忘れちやつてるわね」

「どうだか。それからその男に會はんのかい、」

偶にや會つてゐるんだらう」

「私、此處へ来てからもその人に會つてると貴方思つてて。居所さへ分らないんだわ」

「可哀さうだね」

朝川の聲は皮肉らしく聞えたので、お國は折角興に乗つてゐた話の先を折られた氣がして、「貴方といふ人も信用出来ない人らしいわね、私、もう誰れをも信じない」と、食卓に品置れかゝつて、目を細く寄せた。それが馬鹿に色つぽく朝川の目に見えた。

「信ずるも信じないもないさ、かうして今夜此處にゐるんだから。明日からはどうなるか、何方だつて當てになりやしない」

「だから詰らない」お國はよろめいて、男の脇杖の側に頭を垂れて、「貴方はねえ、奥様が早くお持ちなさい。今の中だといふ奥様が貰へますよ」と云つて、酒臭い息を吐いた。私のやうな卑しい女なんかに関係しないで、いゝ所のお嬢さんを貰つて仲よくお暮しなさい、人間はそれが一番幸福なんですよ……貴方さう思はない？」

「さう思はないね。男だつてお前のやうに氣儘勝手手に世を渡つた方が面白いさ。その日くの風次第がいゝぢやないか」

「そりや貴方がまだ夫婦の情愛を知らないからですよ。小さい家で貧乏暮ししても、世間晴れて夫婦で世帯を持つてれば、言ふに云はれない樂みがあるのだから」

お國は鬱陶しい氣持でさう云ひながら、次第に涙聲になつた。鈴木と世帯を持つてゐた昔が不思議に偲ばれた。近所の神さん達から奥様と呼ばれてゐたのが懐かしかつた。だが、鈴木と邪慳な態度や厭らしい言葉も、其處に現はれて直ぐにそれを擯棄した。

暫らく二人の話が途切れてゐたが、不意に階子段から聲を掛けて、神さんが荷籠を持つて来て、「今日はお珍らしいんですね」と、酔倒れてゐる男の顔を見た。

お國は吃驚したやうに顔を上げて、「お神さん、私、これまでお酒なんか飲んだことないわね。一度ぐらゐいゝでせう。何も好きで飲むんぢやないけど、お神さん察して下さい。貴女だつて苦勞してゐるんでせう」と、云ひながら、神さんの方へにじり寄つて、その足にからまつた。神さんは呆氣に取られた。

十二

その翌日、お國は珍らしく朝川を電車まで見

送つて来て、一日重苦しい頭をゆきがつて、寝たり起きたりしてゐた。そして夕方になつて、つい假睡の夢を見てゐたが、ふと目醒めると、畳の上と思掛けない朝川からの手紙が來てゐた。簡単な端書の外には、嘗て音信などあつた例がないので、吉か凶かと、胸騒がせながら急いで開いた。「御身の事念頭に殘りて、今日一日忘れかね候」と、最先に走書きしてある。お國の顔色は軟いだ。「……僕もこれ迄とは異つて、親身になつて世話を致すべく候間、安心なさるべく候。御身の様子を見れば、如何にも痛々しげにて氣の毒に存じ候。……明晩六時頃行く」と、巻紙の量張つてゐるのに似合はず、手短かに書いてある。

お國は悦しくもあれど、稍々飽氣なかつた。世話致すとか氣の毒に思ふとか云ふ言葉は、お國の胸を躍らすだけの力がない。河津の手紙朝川の手紙、蜜のやうな言葉や文字に飢えてゐるお國を満足させることが出来ない。何故もつと切ない戀の思ひを明らかに書かないんだらうと思つて、恐々鈴木の手紙を茶算筒の引出から取出して讀んだ。柔しい文字はその方に多い。行李に藏めてゐる古手紙の中から、河津のを三四通搜出して見たが、あの頃には、震ひ付きたい

やうなのがある。人目を憚つてソツと手渡しする鉛筆書きの紙切れにも悦しい文句が溢れてゐる。

お國はあれから長い年月を送つたやうな氣がした。

翌日は髪を結うて化粧して待つてゐたが、朝川は約束の時間に遊びに來た。それから四五日殆んど續け様に來た。お國は一人で淋しい懶い考へに耽ることも少くなり、食物の味もよくなつた。

「貴方此處へ越して來ちやどう？ 一緒に居ちやよくないの」と、或日、座敷焔爐に火を起しながら、振向いて云つた。

「來たいけど、僕にもいろ／＼事情があるから駄目だよ」

「事情といつて、貴方は貴方だけで勝手にどうにでもなるんでせう。私、これで一軒家を持つてばさう不経済の事はしなくつてよ。臺所にだつて、無駄な費えはしないわ、随分貧乏世帯の経験もしたんだから。——二階借なんかにして、洗濯まで人に頼むのは本當に勿體ないと思つてよ」

「さうだね、まあその中考へとかう」と、朝川は立つて話を避けて、「お前はそんな所帯染み

た話はない方が値打があるよ、男の話でもしての方が似合つてらあ」と笑つた。

「そんな浮氣者に見えるかしら」と、お國は襟を掛けた自分の姿を見廻した。

「何處か身體が弛んでるさ、もう元のやうにやならないよ」

「私、さう云はれるとソツとしてよ。貴方だつて、ほんの一時の玩弄物にする積りなんでせう。皆なさうだ」と云ひながら、あの人もある人も、河津さんだつて、今から思へば、矢張そのつもりだつたのだと、これは心で思つた。

「玩弄物にされたと思はないで、玩弄物にしたと思へばいゝ。僕なんか女に玩弄物にして貰ひたいものだね」

「そんな輕薄な事、私思つても厭だわ」お國は厭さうな風をして氣取つた。

八月一杯はかうして日が送れた。お國は頬が稍々肥えて艶も少しはよくなつた。これ迄厭がつてゐた出歩きもするやうになつて、勝太を誘つて活動寫眞を見に行つた。朝川に連れられて宮戸座の夜芝居をも見た。一番目の妖術遣ひや立廻りは、芝居馴れぬ目には譯が分らなくて馬鹿々々しい氣がしたが、中幕の實録千代

萩は見てゐる中に、涙が、まれる程感に打たれた。

自分の實の子に別れるといふことが、人間の哀れの極みと思はれた。

「私昔の芝居はどれも時代おくれのやうで、見たいとは思はなかつたけれど、この芝居には人情が籠つてる」と、半巾で涙を拭ひながら、舞臺の役者の臺詞や仕草にも一途に感心した。そして翌日は勝太を連れて、その幕だけ立見をした。

十三

三日續けて見て、その芝居にも泣いた時分、よしやから使を寄越して、直ぐに來て呉れと云つた。河津にしても鈴木にしても、親姉妹にしても、よしやの關所を経てのみ、お國と消息を通ずるので、お國も自分の關係の深い世間を見るには、その家の閨を跨がねばならぬのである。

暫らくウカ／＼して忘れてゐた世間を思い出して、よかれ悪しかれ様子を知らなくなつた。

「お前さん、此頃はちつとも來ないね、いゝ事があると思えて」と、其家の神さんは、お國を見ると直ぐ冷かすやうに云つて、「お前さんが三月も一つ所で辛拘するのは不思議だよ、そんなに仲がいい、んかい」

フ、ンとお國は鼻の先で笑つて、何とも答へなかつた。

「私又國さんが厭になる時分だらうと思つて、いゝ口を捜しといたんだよ。急に見つけて呉れつたつて、さうあるもんぢやないからね」
「さう？」と、お國は神さんの垂れた餌に目を向けさうでもなく、「私、もうあの人きりで止さうと思つてるの。あの人と切れたら女中奉公してもいゝから、妾なんかになりたくない」と、手強く云つた。

「あれになるの此れになると、お前さんも随分よく氣が變るね、だけど中野の方へもつと仕送りをしなくちや悪いよ、あの子が可哀さうだ」

「いくら可哀さうだつて、親に懐かない子は仕方がないわ」

「だからお前さんは人情がないと云ふんだよ」と、神さんは笑ひながら、「この人は好きな男さへ側におれば、外の事にや頓着しないんだから」

「ぢやどうすればいゝの」と、お國はムツとして、さも手向ひするやうに、「私、これから外の事に頓着するから、お神さん教へて頂戴。私何にも知らないんだから」
「氣が短くなつたね、お前さんも、もう怒つたのかい」

神さんは冷かしてしまつた。そしてお國の身装を見ながら、朝川から碌に手當もないんだらうと察して、「涼しくなつても大丈夫なの」と訊いた。此頃入れればかりで出したことのない質物は通帳に珠數驚ぎになつてゐる。二三年苦勞してゐるんな男に拵へて貰つたものを、ムザ／＼流してしまふのは勿體ないぢやないかと思ひ見した。

「着物なんか何時だつて出来るさ」と、お國は例になく冷淡に答へた。そして今夜或男に一寸顔を見せてやつて呉れ、近くの洋食屋へ來る筈だから、會ふだけ會つて洋食の御馳走になればいいと、神さんに頼まれるのを、すげなく斷つて、聞きたかつた世間の噂をも聞かないで、サツサと歸つた。

「よしやのお神さん、まだ私を利用してよと思つてるんだよ」と、憎さげに云つて、朝川に向つて有るまゝにその謬を話して、同情を求るやうに訴へた。

だが、朝川の耳には、それが打明けた親しい言葉としてのみ聞えなかつた。重荷を肩に懸けられるやうな氣もした。神さんの勧めを斥けて機嫌を害ねて、自分のみ手頼らうとするお國の心盡しを喜ぶよりも、こんな女の一身を引

受けるのが煩さく思はれた。それにこんな女の云ふ事が當てになるものか、何か企んで男の氣を引いて見るのかも知れん、と疑はれもしたが、表面にはそれと顯はささないで、

「だけど、よしやを怒らさない方がいゝよ。あの神さんは、お前を實の娘のやうに可愛がつてるんだし、いろんなお前の祕密もあの人だけは分つてるんだから」と、柔しく諭した。

「さう思へばこそ、私も随分あの人のお御機嫌を取つて來たんだわ、あの人だつて私のためには餘程利益してるのよ。この上利用ばかりされてちや切りがない」

「だけど、意地悪く出してお前を利用してよと思へば、あの神さんどんな事をするか知れないぜ、親切さうだけど當てになりやしない。お前の事をおれに吹聴した時だつて、そりや口先が甘かつたからね」

「凡てがさうよ」と、お國は同意したが、さう思ふと、よしやに自分の生死の鍵を握つてゐられるやうな氣がして恐くなるので、「だけど、あの神さん、さう悪い人ぢやないの」と、自分の迷ひを打消さうとした。

その夜お國は落着いて眠れなかつたが、目醒し時を、枕許に拵えて、不斷より早い朝川の

出勤時刻に遅れぬやうに、早くから起きて甲斐甲斐しく朝飯の支度をした。そして止められるのに強ひて電車まで見送つた。朝風は浴衣一枚の肌を薄寒く浸みた。正午時からは小雨さへ降出して羽織でも引掛けたいほど、假寝の足の先は今迄に覺えない冷たさを覺えた。もう秋になつたのだ。秋といへば着物の事が何よりも先づお國の心を奪つた。古物で間に合はずにしても、今の中に質屋から出さなければ、洗張りにやるにも手遅れがする。

「急に涼しくなつて心細く候」と、その夜朝川へ宛てて、手紙の後へ添書した。

朝川は何の氣なしに讀んで、「涼しくなつてその二階も住みよくなるだらう。障子を締める時候となれば、油煙の吹込まぬだけでもい。お前の怖がる隣の馬鹿男に見られぬだけでもいい。家の庭には秋の花を着けた。今度の日曜には百花園へでも行かう」と返事を書いた。一何を着て百花園へ行くんだらう」と、お國は思つた。

十四

冷しい一日が心細い秋を知らせて、その翌日から又暑さが盛返した。二三日濁つた西風が吹

きまくつて、息をするにも苦しかつた。晴れた空も黄ろくて、何處を見ても埃が立迷つてゐる。二階は折々風に揺られた。お國は二階にヂツとしてゐられなくて、階下へ下りて不斷嫌つてゐる神さんのがさつな話の相手になつた。「私事、この頃の時候に息のつまるやう覺えられ候が、御許様には御無事にや、今日も御出あるやう御待申候」と、亂れた文字で朝川へも書送つた。だが、朝川からは音信がない。遊びにも来ない。待遠しがつて追かけて二度も手紙を出した。「幾日も一人でこんな處にゐて日が送れると思はれますか、私にはそんな辛抱氣はありません。階下の神さんの氣の利かない伊勢訛ばかり聞かされてゐるので、頭が痛くなりまして。あの馬鹿が今日も二階へ小石を投げつけました。よしやは怒つてるのかあれから音信がない。あゝ私は淋しくて仕方ありません」と、二度とも同じやうな事を書いた。

「僕は社用にて多忙を極め居れば、當分其處へは行くことかなはず候」朝川の返事は端書で簡單だ。

お國はそれを一目見たばかりで、一途に欺かれたやうに思込んで、顔色も蒼くなつた。忙しいつて此間まではあれほどせつせと來てゐ

たものを、一寸も立寄れないほどに毎日用事のあらう筈がない。と直ぐに、「男には忙しいといふ事が、どんな口實にもなるから結構です。女にはそんな調法な言辭の道がないから不便ですよ。忙しいあなたは何時までも入らつしやらないでもよろしい、御勝手になさい」と、ツケツケ書いた。そして夢中でポストへ驛付けてそれを投入したが、手紙がポストの底へ落ちて降かな音が強く胸に響いた。もう取返しをつかぬことをしちやつた。よくも考へなかつたから、どんなはしたない文句を書いたかも知れない。と歸る途々案ぜられた。

二三日掃除を怠けてゐたので、部屋の中は荒れてゐる。外から歸つて見ると、汚れ日が著しく目立つた。だが、お國は身置を使つて其處等を整頓したり雑巾掛をしたりする氣になれなかつた。暫らくザラザラする壁の上に身を横へながら、勢のない目で荒れた部屋を見てゐた。

赤い達磨の模様をついた湯石が茶箆筒に伏せてあるが、あの出雲焼は河津さんが下宿屋で使つてゐたものだ。紅い柿の實が青い葉に抱かれてゐる相馬焼の土瓶は、初めてよしやの世話で採る賣つた男の買つて來たものだ。茶箆筒も用箆筒も鏡臺も、それらの由來を持つてゐる。

淺黄の袋に包まれた三味線は、別けて今お國の心を惹いた。母から下の姉に譲られたのを、三味線など手にする暇もない姉から更に貰受けたのである。姉は小さい時から音曲が好きで、母に手ほどきされて近所の師匠へも通つた。常盤津の積古本が机の高さぐらゐあつた。「容色が お國さんほどだつたら、藝者になるといふ」と、米屋の伯父さんが、姉の三味線を聴きながら、頼かに誰れかに話してゐたこともある。「姉さんほど三味線のお稽古しとけばよかつた」と、お國はふとそれを思出した。

十五

その日午過ぎによしやの神さんが訪ねて来た。何時ものやうな柔しいニコ／＼した顔付して機嫌を害てゐる風は見えない。お國が悦しさに迎へて、「明日あたりお神さんの家へ行かうと思つてたの」と、お世辭を云ふのを耳にも留めず、「お前さんにも驚いたね、そんなに身體を臺なしにして。顔だつて頭だつて見つともないよ」と、坐るが早いか、押かぶせるやうに云つた。「今からさう色氣がなくなつちや頼もしくないね」

「私し、そんなに汚くなつて」と、お國は頭に

手を當てた。

「此頃は磨きが足りないから、前の國ちゃんとは思へんやうになつたよ。本當に氣をおつけな。今からくすんでた日にや、どの位損だか知れやしない」

「私し、品川にゐた時分は、毎日のやうに髪結さんへ通つてたけど、此頃は煩さくつて」と、お國は言譯しながら、鏡臺に向つてつく／＼自分の顔を見た。さう醜くなつたとは思はれない。でも氣に懸つてならぬので、

「これから髪を結つてお湯に入つて来ようかねえ、何だか氣持が悪くなつたから。……お神さん、今夜活動へでも行つちやどう？」と、ふと心を浮つかせて、「私し、お神さんに話したいこともあるんだから」と云つたが、自分でも何を話さうとするのやら、まだハッキリ極らなかつた。「今日は黒岡々々しちやゐられないの」と、神さんはもう立ちかけて、「今夜でも都合で遊びにお出でよ。旦那は今日来ないの」

「来ないでせう」

その何氣ないお國の音色が、神さんの耳には不審を起させて、「どうかしたのかい、どちらかに厭な事でもあつたのかい」と問返した。

「さうでもないわ」とお國は曖昧に答へて、「私し

今夜行つてよ貴女の家へ」

そして神さんの歸つた後で、髪を結つて湯に入つて、久振りに念入りに化粧した。少しは元氣もついた。部屋が汚れてゐるのが今更のやうに目についた。足袋だけ買立ての新しいのを穿いて、爪立足して階下へ下りた。後でざつと掃除しといて呉れと勝太に頼んで置いて、久振りに俥に乗つてよしやへ行つた。

「珍らしいね、島田に結つて。よく似合ふよその方が」と、神さんは側へ寄つて、横からも後からも見た。

「私し、これでまだ價値があつて、お神さんは一日見ただけで女の相場が分るでせう」と、お國はお目見えに来たやうに氣取つて坐つた。

「さうねえ」神さんは長煙管に煙草を詰めたが、横目で見つて、「まあ小間使さばりとしても云つた所だらうね、一寸身體が崩れるけど、少し氣を付けてりや、處女で通れるんだよ」と戲談のつもりで云つた。

「だけど、そんな窮乏な思ひはしたくないよ、お國は飽くまで眞面目に考へて、「それに私、どうしても悪擦れがないから、幾ら利益になつたつて、口先で厭な人の御機嫌を取れないよ。さう薄情な眞似は出来なないしね」

「何時まで経つても腕がないね」と、神さんは笑ひながら、「だけれど、本當はそんな腕なんかない方がいゝんさ。お前さんはもういゝ加減で堅氣になつた方がいゝんだよ、私は何時もさう思つてゐるんだけど、お前さんは直ぐに自棄を起すからよくない」

お國は誰れでもそんな事を云ふと一口にけなした。一時凌ぎだと思へばこそ、どんな男でも一緒になつてゐられるもの、戀しくもない男と、何で一生の縁を結ばれようぞと、不斷の信仰を力強く述べた。神さんは軽く聞流して、「ぢや、朝川さんはどちらの方なの。一時凌ぎの方がいゝ、それとも一生の縁の方なのかい」と冷かした。

「どちらでもないわ、あの人はい」お國は明らかに言兼ねた。神さんに心の中を見透かされたくもない。

「けれど、あの人もいろゝ家の事情があつて、何時まであゝしてもゐられないんでせう。此間もそんな話をしてたから、私氣の毒になつてよ、多少でも世話になつた人に迷惑を掛けたくないからね。それに私、壽町のあの家はつくづく厭になつたわ、全く壽命が縮まるやうだわ」

「ぢや、どうするの」
神さんはわざと澄ましてゐる。お國はその目顔に注意しながら、何とか云つて呉れるのを心待ちにして黙つてゐたがやがて堪へかねて、「どうしたらいいと思つて、お神さんは」と、答を促した。

「私にもいゝ智慧はないよ、お前さんも随分我儘だからね」

「我儘かねえ私。それでも随分並の女よりや苦勞も辛抱もして来たんだけど」

お國は神さんの言葉が皮肉に聞えたので、それを跳ねのけるやうにかう云つたが、俄かに手頼りなくなつて、どうにでもなれと云ふ氣になつて、「いつを身を賣つちまはうかしら、私は採を立てる男がこの世界に一人だつてあるんぢやなし、好きでもない男二人に喰付いてゐるのも、もう厭々したし」と、情なさうに云つた。

「それ程に覺悟してゐるのなら、私もどうかして上げるよ」

「覺悟するもしないも、私には外に仕方がないんだから……私、お安が可愛い。あの子にさもしい思ひをさせたくない」と、お國は獨言のやうに云つた。
その夜は壽町の荒れた宿へ歸りたくもなく

て、グツ／＼してゐる中に夜が更けたので、つひに一夜をよしやで送つた。故郷や、妹の噂も臆に聞いた。鈴木が此處へ二三度索りに来たことも聞いた。しかし其等の噂は不斷ほど面白くも恐ろしくもない。「勝手にしろ」と毒舌を利いた。

十六

「ぢや、私に一切任せときなさい、心當りもあるから明日の二時頃までに兎に角此處まで来てお呉れ。時間を間違へないやうに、此處だよ」と、翌朝神さんに念を押されて、お國は堅く約束した。

暫らく一所に滞つて、汚れて腐りかけてゐる水の流出すやうな心持になつて家へ歸つた。よかれ悪しかれ、この狭苦しい部屋を出て何處かへ行くのだと思ふと、だらけてゐた心も稍々引立つた。そして雨戸を開けながら、掃除の手傳ひに來た勝太に向つて、「勝ちゃん、私近頃中に此家を越すかも知れないよ。勝ちゃんのやうな人、私好きなんだから、別れたくはないけれどね」と、名残惜しさうに云つた。
「何處へ行くの」と、勝太は驚いて、詳しい譯を知りたかつたが、それを糺すのも憚られて、

て尋ねもしなかつた。

「人間は情ないものね。貴方さう思はない？」と、お國は障子に片手を掛け、稍々首を傾げて、人懐こい目付して、「一生會へなくても私の事を忘れないで頂戴。折角懇意になつたんだから」と云つて、勝太が萎れて箒持つ手も力なげなのを見てゐた。

誰れにも忘れられたくない。どの男にも悪く思はれたくない。お國は此處を出る時に勝太から記念に文鏡を貰つて行く約束をした。

「あなたはちつとも来て下さらない。私も困つて居りますけれど、あなたも御迷惑の事があるのだからと察せられます。あなたが明ら様に仰有らないのをいゝ事にして、何時までもかうしてゐるのは心苦しく候へば、近日分別をきめようと思居り候。私は如何ほど悲しい目にあつても好きな人に迷惑を掛けたくはありません。あゝ私ほど不運な者が父とありませうか、好きな人と末長く添ひとげる資格はないのですよ。何卒お察し下されて、悪く思はないやうに偏にお願ひ申し候。書いてゐる中にも涙が留め度なく出て、筆も運びかね候。實際涙を流しながら朝川への手紙を書いた。

そしてその一日はそはくして暮した。よし

やの神さんの心當りといふのは何の事だかと、多少氣掛りでもあつた。自分で夕餐の支度をするのにも傾けて、近所の五錢堀一の洋食を取寄せた。

「姉さん、近くにお引越しなさるんですか」と、階下の神さんが階子段から半身を出した。

「さう極まつた譯でもないんです」と、お國はくどく話込まれぬやうに卒氣なく答へて、退屈醒ましに借りて讀んでゐる「をしへ」といふ天理教の經典を返した。神さんはそれを頂いて受取つた。お國は用事ありげに背を向けて、茶算笥のあたりを索つてゐたが、神さんが階下へ下りると、つと立つて障子際へ寄つて、薄暗い屋根から屋根を眺めた。眺めてゐると氣が遠くなつて来る。障子の庭から例の馬鹿の喉を鳴らす聲のみ聞えた。お國はその夜ランプを點けたまゝ床に就いた。

翌朝は階下の者も寢過してゐたが、氣立たましい郵便の聲にお國は眞先に目を醒まして、玄關へ下りて行つた。朝川からの手紙で、今日午前中に行くから待つて居れと云ふのである。

「矢張會へたのだ」と、思つて、俄かに自分といふものに強味が出来た。長火鉢に火を起して鐵瓶に湯を沸かして、枕時計に絶えず目を注いで

ゐた。よしやへ行く時間の迫るのを氣遣ふ心は次第に薄らいで、朝川の足音ばかりが待たれ出した。勝太は折さへあれば二階へ上つて来ては話を仕掛けようとしたが、お國は確に取合はないで、現はに不愛想な風を見せた。「約束を違へる人ぢやなかつたのに」と、自分が侮られたやうな氣がして、時計の針の動く度に疑ひを増した。正午が過ぎて一時となり、二時近くもなつて、よしやへ行く時間の來たのに氣はつきながら、身拵へもしないでゐた。

朝川が何の氣もなく入つて來た時は、もう二時を過ぎてゐる。お國は何時もの笑顏をも見せないで、わざと澄まして目を外の方へ向けた。「お前の分別といふのはどんな事なのだ」朝川はいきなりかう云つて、部屋の様子に何の異狀もないのを、稍々不審がつた。

お國は暫らく返事もしない。朝川は自分で茶を入れて飲みながら、此間來た時よりこの部屋の中も住みよくなつたと思つた。西窓に差した日影も快くなつた。日の下の屋根の照返しに顔を火照らしてゴロゴロしてゐたあの時とは、僅かの間に時節は著しく移變つた。「もうセルでも着なくちやならんね、おれのと一緒に拵へようか」と、朝川は御機嫌を取るや

うに云つた。

お國は尙暫らく黙つてゐたが、やがて横へ向いたまゝで、「貴方、此間の私の手紙を讀んだでせう、随分貴方にも御迷惑を懸けたわねえ」と、言葉付がよそ／＼しかつた。

「ぢや今日から迷惑を懸けないつもりかい。何かいゝ事が見つかつたのか」

「いゝ事のあらう筈はないわ、私のやうな性質では」

「ぢや、どうするんだ」朝川は手荒く問詰めた。

「聞かないで置いて下さいその事は」と、お國は首垂れて溜息吐いて、「私、貴方にもう一生會へないんですからね」

「一人でさう極めてたつて譯が分らんぢやないか、僕は此間のお前の手紙を允談だと思つて讀んでた。僕の方でさう不實な事もしないのに、お出掛けにあんな事を云へる筈がないから。お爲ごかしで何か企んでるんだらう」

「私、そんな女と見えて」と、お國は顔を上げて正面に男を見た。

「どうだかなあ」と、朝川は空呆けてゐたが、やがて、「女といふものは當てにやらんものだ、昨日と今日とで直ぐ氣が變つちまふから」と、獨

言のやうに云つて、詰らななさうに後に倒れた。兩手を組んでそれに頭を載せて、目を瞑つて考へ込んだ。

お國はちつと見てゐる中に痛くしくなつた。別れともなささうな男の素振を憐れむの心が起つた。「あゝ貴方が可哀さうだ」と、真心から云つて、好きな女に別れる男の切なさを思遣つた。

「私、一寸したことでも一途に思込んでしまふ性質ですからね、貴方との關係だつて、ひよつともう駄目だと思込んでやつたから、ごつとしてゐられなくなつたの。貴方の風を見てると、何だか心配がありさうだし、此頃は滅多に入らつしやりもしないから、それで一人で考へてよしやへも相談に行つたの。どうせ誰れかの世話になるかどうかしなければ、生きてゐられないのですから」

「ぢや、その方は極めてたのかい」

「いゝえ、どうだか分りやしない……貴方これからどうして？」

「どうするつて、お前の方で出て行つちまふんなら仕方がないさ。おれは又千駄木のあの寂しい家に一人でくすんでるさ」

「ぢや、私、よしやの方を斷つちまふ、決して好

きで行くんぢやないんだから」お國はもう涙聲になつて、「貴方だつてあの家に一人でゐては寂しいでせう、私だつてこんな家に一人でゐたくはない」

「だから計畫通りに何處へでも行くさ。僕はお前の幸福の邪魔をしたくはないよ」

「何が幸福なの」お國は自分の境涯を假りにも幸福と思はれるのが厭だつた。「貴方がそんな事云ふのなら、尙更よしやへは行かれないわ、貴方の仰る通りにするから、どうにでもして下さい。いくら苦痛な目に會つても構はないのよ」

だが、朝川は進んで將來の指圖もしなければ、頼もしい口を利きもしない。吞氣らしく煙草のみ吸かしてゐる。時計の針は三時を過ぎた。お國は落着いてゐられなかつた。

「私、もう駄目だ」と、凡ての望みの絶えたやうな氣になつて、「今度又時間を遅くしちやもう駄目。これで二度も三度も約束を違へたんだから、よしやでも愛想を盡かしてしまふ」

「ぢや、早くお出でよ僕も電車まで一緒に行かう。用事を繰合はして来たんだから、愚圖々々しちやゐられない」と、朝川は思切りのよささうに立上つて、素早く帽子をも被つた。そして、

「この部屋もこれで見收めかねえ」と云ひながら、部屋の中を歩廻つた。

お國の耳には「見收め」といふ言葉が淋しくも哀れにも響いた。明るい部屋の中も陰氣に見え出した。其處を歩いてゐる男の顔にも鬱陶しい色が見えた。で、自分の心も滅入込みさうだつたが、強ひて氣を張つて、「まあ此處へお坐んなさい、眞面目にお話したいことがあるから」と、朝川を引据ゑるやうにして坐らせて、「私、もう何處へも行きたくないわ、貴方きりもう外の男には會ひたくない。貴方だつて私に別れるのは厭なんです。それならいつそ一思ひに死んで呉れなくつて」と、言葉は落着いてゐた。

「馬鹿に死急ぎをする人だね、死ななくちやならん場合が來た、その時に死ぬるさ。その覺悟さへありや少々苦くつたつて生きてられんことはないよ」

「いゝえ、そんな事駄目よ。貴方はまだ経験がないから、さう思ふんだけど、死にたいと思つた時に直ぐ死ななくちや、とても死ぬるものぢやないのよ」

「だけど、も少し辛抱して居れ、おれも餓死はささないから」
「えゝ」と、生返事をして、お國は目を伏せてゐ

たが、明日から先此處に寝起する情さしがみじみ胸に染んだ。「貴方も五日か七日に一度ぐらゐしか來れないんでせう」

「あゝ、當分それ位しか來れないね」

「ぢや、私どうして後の日を送るんでせう」と、今更のやうに自分の日々の生活があり／＼と目に見えた。

「まあ、もし今のやうにして居れば、別れるなら別れるで、一日田舎の景色のいゝ處へ行つて、快く別れよう。お互ひに悪い思ひを残したくないからね」

「だつてこんな服装では何處へも行かれないわ、女は男と違ふんですからね」

朝川は女の言葉に恨みがましい調子の際立つたのを認めて、自分がろくに世話をもしなかつたのを恥しめられた氣がしたが、口では「さつきに死ぬなんて云つた人が、服装を氣にするのは可笑しいね」と笑つた。

「私、死ぬる時だつて、見つともない風なんかしたくないわ、思切り好い着物を着て死んでよ」と、お國は知れ切つた事をといはぬばかりに答へた。

朝川は歸りかけては腰を卸して、不歸のやうな穩やかな平凡な話に耽つてゐる間、西窓も薄

暗くなりかけた。「鳥でも焼いて食べるにいゝ時候になつたね」と、夕餐の支度を彼此と云つてゐた。お國は氣の進まぬらしく、直ぐには買物にも出掛けようとしなかつたが、其處へ玄關から威勢のいゝ聲が聞えた。よし、やからと云つて、お國の名を呼んだ。

お國は我知らず立上つて這るやうに階子段を下りた。神さんの唄が自轉車に乗つて來てゐる。「今直ぐ來て呉れ」と用向を傳へた。直ぐ後からとお國は手短かに答へて、胸騒ぎをさせながら二階へ上つた。

善し悪しを考へる餘裕は心になかつた。「兎に角行つて來てよ」と云つて、イソ／＼身支度をした。ザツと白粉や臘脂をもつけた。

「ぢや、僕は歸るよ」と、朝川は立上つたが、お國は惶ててそれを押留めて、
「私、二三時間で歸つて來るから、それまで待つてて頂戴。向うの様子もお話したいし、このまゝ別れるのは厭だから」と繰返しながら、願み／＼階下へ下りた。

俣の上では空想が火花のやうに散つた。よし、やでは何が待つてるんだらう？

徒と
勞

電車は絶え間なく騒しい音をして、直ぐ下を走つてゐる。冴えた午前日の日光が汚れた格子から斜に差込んだ。

押入が突出て、鴨居が曲つて、襖の代りに煙ぶつた障子が嵌つてゐて、二室続きのこの二階の部屋は見るから不恰好だ。廣い方の部屋は何一つ置かれてゐないが、階子段の側の狭い部屋には粗末なテーブルと椅子とが壁際に据えられてある。薄い座蒲團と安火とのあるのも部屋に相應はしい。一寸見ると苦學生が室借をしてでもゐる様に思はれるが、その實此處の主人公はそんな苦しい境涯にゐるのではない。三十四

歳のこの年まで、只の一錢だつて自分の腕で儲けたことはない。先々月親の家を離れて此處へ移つてからも、月々十五圓つづつ送つて貰つてゐる。十五年前に或私立學校の政治科を中途で止してから、碌に書物も讀みもせねば、以前に學んだ事をも大抵は忘れてしまった。折々テー

ブルに向つて、何か書散らしたり、天主教に關係した二三の書籍を開けて見ぬでもないが、それが一時間とも續いたことがない。讀んでゐること書いてゐることが明かに頭に入りもしない。毎日戸外へ出て昔馴染の教師や友人を訪ねて歸ると、押入から夜具を引出して、それに括まつて寝て、強い近視で凹んだ濁つた目を据ゑて、何處ともなく眺めては、電車の音も耳に入らぬほどの深い空想に沈んで行く。そして倦むこともない。飽くこともない。十年一日の如く希望が目の光に燦いてゐる。

彼れは十年前雜司ヶ谷の畑の中の一軒家で、神の聲や魔物の聲を聞いてから、世界が全て造つて見え出した。その當時から學課を抛つてしまつた。獨り森の中を散歩したり机の前に正坐したりして、人間離れた聲に耳を傾けては考へた。楡の葉がカサ／＼音をさせても、その音につれて神の聲が聞える。

「亞米利加へ行け。亞米利加へ行けば手易く巨萬の富が得られるぞ。その金で貧民救護所を建

てよ。日本政府の誤つた施政方針を正して、日本の貧しき國民を救ふのが、汝、澤井壯吉の使命である」

その言葉は日に／＼彼れの心に刻まれて、次第に閑棄てにきれなくなつた。經濟學や憲法論を安閑と學んでゐる時ではないと思はれた。で、故郷の父へ手紙を寄せて大抱負を述べ、巨額の旅費を請求したが、その手紙には不慮の文句が多かつた。父は驚いて、東京の親戚に頼んで彼れの様子を索らせて、いよ／＼普通外れの行爲を見届けた舉句、無理強ひに故郷へ引戻した。

それから十年の長日月、壯吉は中國の山間に若い盛りを送つた。數ヶ月は精神病院へも入れられて、偏執狂の病名をつけられた。東京の知人とは端書一枚の遣取もせず、この世に亡き者と噂されてゐたが、去年の秋の末ヒョッターリ墓から出て來たやうに知人の前に現はれた。

「君にこの世で會はうとは思はなかつた。よく長い間田舎にゐられたね、何をして暮してゐたの、昔彼れを新橋に見送つた親友の日笠は、訝しさに堪へぬやうにその額付や素振を見たが、壯吉は平氣で、

「彼地では天主教を研究しました。先づ人間の

根柢を究めねば駄目ですからね」と云つて、天主教の有難味を説いた。

「ぢや貧民救護所の方は當分見合せたんですか」

「どうして、見合せるところぢやない。一日だつて忘れたことはありませんよ」

「しかし、もう十年にもなるぢやありませんか、少しは着手したんですか」

「なに、着手しようと思ふと何時でも出来るんですがね。さう早く奇臭いものをつくるよりは少々遅くなつても大組織にやる方がいゝんですからね、それにはあらゆる方面の知識を吸収して、自分を完全無缺にしてから着々歩を進めなくつちや駄目です。先づ人間は宗教で心を神聖潔白にしなくちやならんと思つて、私は一番高尚な天主教に入つたのですが、この次には、政治を研究します。田舎でも少しは政治上の活動をやりかけたんですよ。しかし田舎は迫害がひどいので、私の政治思想は君も知つてゐられる通り過激な點がありますからね」と、急に聲を潜めて「探偵がつけて五月蟻くして仕様がありませんでしたよ、だから半歳ばかり私は尼寺に隠れてゐました。東ではどうでせう、矢張我々に探偵が後をつけるでせうか」

「なに東京ではそんなことはないでせう」「さうですか、心配は入りませんか」と、くどく訊いて、稍々安心して、「近々政黨に入らうと思ひます、政治研究のためにはそれが便利ですから……さうして四五年政治をやつたら實業界へ入るつもりですよ。日露貿易をやつて、旁ら政治上でも日露の親睦を計らうと思ひます。貧民救護はそれからさあ」と先の長い計畫を語つた。

彼は東京に居残つて居る僅かの知人の住所を日笠に訊いて、順々に廻つては自分の抱負を語つた。その時父が郡長を辭したため、家族を擧つて東京に移轉したので、まだ新宅や荷物の整理がつかないのに、彼れ一人は家の用事に手出しをせず、毎日小遣錢を貰つては、忙しうに知人の訪問をしてゐた。

その中、父の家には自分の業務の助けと感じて、一人家庭を離れて、この魚屋の二階に住むことにして、父の家へは滅多に出入をもしない。

二

今日も壯吉は朝から、或先輩の哲學者を訪ねて、日露貿易を論じてゐたが、正午近くなるの

に氣付いて、盡きぬ話を中途から切つて、歸途に就いた。山高帽を被り五つ紋の木綿羽織を着て、ステッキを持つて江戸川端を歩いた。花は名残なく散つてをれど、温かい日曜の今日青葉の下を散歩してゐる人は多い。川の中も賑かだつた。しかし壯吉の目には周囲の鮮かな色が明かに映らない。何の感じもなく素通りしながら、心の中で哲學者との會話を繰返した。將來日露同盟が成立して、世界は此度日露で統一される。日露大帝國が將來の世界だと、おれが云ふと、彼奴驚いて、そんな馬鹿々々しい空想を抱いとつちや駄目だと云つた。日露貿易もいが餘り空想に走らないで、手近な所から着々始めたらどうだらうと意見した。君は餘程現代の思想に遅れる、主義や理想に忠實な所は敬服だが、さう精神が一つ處に停滞して、自由な發達を妨げられては困ると云つた。確かにさう云つた。今は哲學でも抽象原理や形式的理論を繰返しては駄目だ。生活の指南車としての哲學を欲するのだ。レーベンスマートとしての哲學が必要なんだと、五月蝋い哲學の議論をした。だけど彼奴には我々の遠大な抱負は分りやしない。時代の思想に遅れるの何のと、そんな奇臭い氣味で何が出来るよ。

あの男もあんな腐れ儒者ではなかつたがと、獨言を云つて、ふと立留つた。そして首に掛けた紐を手繰つて、懐から大きな囊口を出して、目を凝らして一々中を改めた。僅かの銀貨と銅貨の外に、守本尊ベテロの小さい彫像、マリヤの旗、珠數と印とが紛失もしないで元のまゝに入つてゐる。確めて安心して再び懐に收めて、坂道を急いで上つて、魚屋へ入つた。

「歸りました」と、上り口に腰掛けて子供に乳を飲ませてゐる女房さんに、帽子を取つて會釋した。

「お辨當がそこへ来てゐますよ。端書もあるでせう」女房さんは首を曲げて後を見て不愛想に云つた。

「どうも、お世話様」と、壯吉は柔しい聲で感謝に云つて、弱い目で其處等を索つて、黄ろい辨當箱を見つけた。端書をその上へ載せて、柱時計の側に捺寄つて見て、「もう十二時過ぎだ」と驚いたやうに獨言を云つて、忙しきうに二階へ上つた。

羽織を脱いで袖疊みに疊んで、押入の中へ入れ、部屋眞中に胡坐を掻いた。心で神に感謝して辨當の蓋を取つた。厭な臭ひのするの構はず、舌鼓打つて隔々までほくくつて食べた。

空いた箱は階子段の側へ置いて、茶も飲まないで、コロリと横になつて疲れた足を伸した。そして指先で端書を引寄せて見たが、それは海邊の繪端書だつた。小さい字が繪を取巻いて書かれてある。

「僕は今朝和歌山からこの土地へ来た。霞のやうな春雨に傘も翳さないで、松林の中を歩いて海邊へ出た。砂の上にボートが横つてゐるのので、左右に人影がない。海は音を立てず穏かだが、遙か彼方を濃い雲に遮られて、その奥の方が物凄く見える。見詰めてみると、今更のやうに世の淋しさが身に染みた。君を初め東京の知人が懐しくなつた。(濱寺より、日笠生)

壯吉は二度繰返して讀んだ。やう／＼その意味を知つた。此處へ移つてから、嘗て一度だつて端書や手紙に接したことはないで、物珍らしきうに暫らく手から離さず、つく／＼繪を見詰めながら、聲をも出して讀んだ。日笠だけはおれの説を理解してゐる。昔から友人の中で話せるのはあの男ばかりだつたと、その歸京が待遠しい氣もした。

繪葉書の繪は彼れの頭に次第に大きく映り

出した。黒い雲に蔽はれた波打際と日笠が長い鐵の杖——學生時代に彼れが日笠に與へたもの——を提げて歩いてゐる。その海には露西亞行の汽船が纜を解いて乗出してゐるらしくも見える。雲の奥には露西亞の大陸が横つてゐる。

格子の下から聞える電車の響と共に、大海の波音が何處からか湧いて来る。夢のやうな現のやうな二三時間を壯吉は送つてゐたが、不意に「兄さん」と若々しい男の聲がして、障子が開いた。弟の眞造が角帽を被つて袴を穿いて其處に現はれた。壯吉は夢から呼醒されたやうに慌てて起きて、弟の前に座蒲團を押し付け、「疊が汚れるからこれをお敷きよ、學校へ穿いて行く袴が汚れちやいけないから」と、柔しく云つて、強ひてそれを敷かせて、「今日は緩くり遊んでおいでよ、もう用事はないんだらう」

眞造はそれに答へず、兄の落着いた顔をジロジロと見ながら、「随分賑々しい處だね、よく辛抱してゐられるね、僕なんか一日もこんな家で勉強出来やしない」

「さうかい、おれには此處の方がいゝがなあ、家にあるよりや」

「僕だつて此頃はるたくないさ、厭な事ばかり

目に付いて仕方がないんだもの」と、眞造は力を籠めて云つた。

「厭な事がありや此處へ来て勉強するといふ。この隣の部屋も空いてゐるんだから」

「だつて僕は家を出られやしないさ、家の始末は何も彼も僕一人で行つてつちやならないんだもの。兄さんの方が餘程氣樂だ」

「お前もコセ／＼せずに氣樂にしてもらいよぢやないか、おれの事業が極りがつき次第、お前にも多額の収入のある仕事を分けてやるよ、安心して勉強しておいでよ」

「僕一人の事はどうでもいゝけれど、家に財産が無くなつたら、兄さんはどうします、どうして生活しますか」

「そんな心配は入らんよ。おれは政治研究の手段として新聞社に入るつもりだ。△△新聞の社長に頼んで、この隣にある△△新聞小石川支局へ出勤することにしたんだが、まあ當分見習ひのつもりで通つて、將來主任記者になる準備をしようと思ふ。政治や實業をやるにも一時新聞記者になつとくと、非常に便利な事があるんだつて」

「本當に社長が使つてやると云つたのですか、そして仕事は何をやるの。月給も呉れるんか

ね」眞造は不審がった。

「なに、月給なんかどうでもいゝさ」壯吉は僅かの給金など口にするのも厭だと云つた風で、

「當分無給で働くつもりさ、昨日は集金掛について方々を廻つたがね、あの新聞は随分よく賣れるんだよ」

「そんなことは記者のする事ぢやないだらうが」

「だつて新聞に入る以上、何でもやつて見なくちや駄目だよ。配達でも集金でも探訪でも、新聞に關係したあらゆる事をやつてから、立派な主任記者になれるんだらう。お前はさう思はないかい」

「どうだか」

「おれは天主教を十年研究したんだからね、何をやるにも基礎から堅めて行かなくちや」と壯吉は着黒い角張つた顔にニヤリと薄氣味悪い笑ひを湛へた。そして「御馳走しようかい」と元氣よく云つて、藁口を持つて階下へ下りた。

眞造は眉を擡めて頰杖をついてゐるが、ふと立上つて格子際に添うて戸外を眺めた。兄は電車道を横切つて、向側の紅谷の店先に立つてゐる。頻りに指差して竹の皮に包ませてゐる。思ひなしか後姿は窺れて見えた。包を持つて

穩かな日光の中を歩いて来る顔形は、あの父と母との生んだ子とは思はれない。家族の誰れにも似てはゐない。

唯一人の兄、唯一人の相談相手が、あの眉を捲ぶつて歩いてゐる男なんだ。蠟のやうな目で自動車の後を見送つてゐる男なんだ。眞造はそれを見てゐると、今更のやうに手頼りない感じが胸に迫つた。崩れかゝつた家を支へて行くのは、自分の纖弱い腕一つである。自分が離れたら四五人の家族は皆儻ましい境涯に陥らねばならぬ。それが今日の前に見えてゐるやうだ。

眞造はこの二三日家庭の不快な空氣に堪へなくなつて、つい兄に會つて訴へたらばと思つて來たのだが、兄は矢張元のやうな兄で、眞面目な話など出來さうではない。と云つて、縁の遠い親類や友人に打明けて相談されることではない。

彼れはわざ／＼此處へ來たために一層心が滅入つた。兄の顔を見たために苦痛が更に増した。

「さあドツサリお上りよ、旨さうなのを選んで來たんだよ」と、壯吉は色の赤い餅菓子を一掴んで頬張つた。お茶も階下から貰つて來て、弟

の前に置いた。旨さうなのを取つて強ひて弟の手に渡し、その食べるのを悦ばさうに見た。「兄さんは何か少しでも金の取れる工夫はないだらうか」眞造は睡じい兄の素振を見ても「兄の行末が案じられた。」

「少しぢやない、ドツサリ金儲をするつもりだよ。親爺にもさう云つて安心させといってお呉れ。月々幾らかづつ貰ふのも當分の内だよ。どうせおれは相続権がないんだから、財産も皆お前のものだけれど、當分その中から貸して呉れたつていゝだらう、幾十倍にでもして返すんだからね」

「僕は相続権を譲られて些とも有難くはなかつた。兄さんの思つてるほど財産はありやしないし、あつたつて當てにやしない」
「だつて一萬や二萬はあるつて、お前が云つてぢやないか」

「だけど、親爺に職はないし、皆な居喰してちや駄目だ。それに親爺は自分だけ別居するつもりであるらしいんだ。自分は二十歳位から親の手を離れて、獨りで生活して學問して來たんだから、子供も獨りで好きなやうにやればいゝと云つてゐるんだもの」
「それでいゝぢやないか、おれも好きなやうに

やつて來たんだから」

「兄さんはそれでいゝさ、だけど僕はどうします。まだ學校が二年も掛るし、お種やお母さんの世話も一人ではしくぢやならんのだし」
眞造は瘦せた顔の黄ばんだ疵の高ぶつた母と、胡麻鹽頭の肥つた父とが、其處に、兄の側に動いてゐるやうに思つた。だが、兄には立入つて家の様子を話しかけて暫らくして二階を下りた。

三

戶外へ出て自分の家へ歸りかけたが、ふと此頃熱意になつた兄の友人の目笠を思出して、氣晴しに訪ねて見る氣になつて、引返して目白臺のその家へ行つたが、目笠は旅からまだ歸つてゐなかつた。「あの人も氣樂だ、一人ぼつちで繋累もなくて勝手な事をして」と、その身の上が見ても、皆自分より幸福な人のやうに思はれるので、陽氣な學友に會つて、平生のやうな浮いた話をする氣になれぬから、近くにある友人の家へも立寄らないで、ブラ／＼雜司ヶ谷から護國寺のあたりを歩いて、日暮方に竹早町の家へ歸つた。

父も母も妹も茶の間に揃つてゐて、平生と違つた様子は見えない。妹の手でランプがつけられた。父は田舎から來た長い手紙を丁寧に巻いて封筒に収めた。
「何を云つて來たんでせう」母は重さうに首を傾げて尖つた聲で訊いた。

「清衛が目が悪いのに、平八が重いインフルエenzaで、今月になつて些とも仕事が出来んのださうだ」と、父は事もなげに云つて「平八も若い間に勝手な事をした報いだから仕方がない」
「よくそんなに根氣よく手紙を寄越せるものだ。平生は端書一本呉れない癖に、少し工面が悪いと無心ばかり云つて來て」と、母はツケ／＼云つた。

「お種のこと一寸書いとるけれど、平八の云ふことはうっかり信用が出来まいよ。尾ノ道の材木問屋の息子が是非周旋して呉れつて頼んでるから、次手があつたら寫眞を送つて呉れと云ふんだが……」

「へえ、尾ノ道の人から頼まれたんですつて、そんな遠方では話にもなりやしない」さう云ひながら、母はその男の素性などを父に問訊さうとした。父は手紙にあるだけの事を氣乗りのしない口振りで話した。

眞造は食卓についても、何時ものやうに遊んでその目の瞭をするのでもなく、両親の素振にのみ目を留めてゐた。母はキョト／＼皆な顔に目を配つて忙しきやうに食事をすする。父は緩くり囁占めて不味いものを旨きやうに食べてゐる。

食事が済むと、父は用算筒から帳簿を出して、算盤を弾き出した。貸金が預金か、此頃の父は帳簿の調べが唯一の消樂になつてゐる。田舎では一時凝つてゐた謡曲も、語はなくなつた。

眞造は算盤に向つてゐる父の目の、次第に險しくなるのを感じて、見てゐるのも厭であつた。

「僕は風呂に入つて来る」と、わざと威勢よく云つて、母から湯銭を貰つて戸外へ出た。珍らしく長湯をして歸ると、二階の書齋にはランプが明るく點いてゐる。父に隠して此頃吸ひ覺えた巻煙草に、火をつけたまゝ、袂に隠して、ソツと階子段を上つた。机に寄つてお種が雑誌を讀んでゐる。音のせぬやうに墨の上に腹這ひになつて、煙草を出して吸うてゐると、

「あら兄さん、私些とも知らなかつた」と、お種が胸を講かせて雑誌を伏せて振向いた。赤く

太つた頬には笑がみえた。

「何を讀んでるんだい」眞造は横からその雑誌の表紙を見た。

「一日笠さんの紀行文は随分六ヶ敷いのね、よう分らんわ、先日新聞に出てゐた『朝』といふ小品文は分つたけれど」先月田舎の女學校を卒業して來たばかりのお種は、覺えかけの東京言葉で云つた。

「お前のやうな田舎ツべいにや分るまいよ」と眞造は手を仰して雑誌を取つて、二三行讀んだが、面白くないので、其處へ投出して、「學校でもこんな雑誌を讀んでたのかい」

「うゝん」とお種は卑しく首を振つて、「内所で讀んでたのが分つてから、急に嚴しくなつて、一冊も持つてゐられんやうになつたの、東京の女學生はどんなものを讀んで」

「雑誌屋に出てるものは何でも讀んでるだらうよ。お前もこれからセツセと雑誌勉強でも始めさ、どうせもう東京の學校へ入れつこはないんだから」

「私、もつと學問したい」お種は兩手を机の上で組んで、無邪氣に身體を動かして、

「兄さん達は自分の好きなだけ學問してるんだから、私だつてもつと學校へ行かなくつちや讀

らないわ」

「お前の友達で此地の學校へ入つた人があるのかい」

「あつてよ、二人あるの。今月二人とも女子大學へ入つたの、吉住さんと長濱さん。二人とも私よりや學校の成績が悪かつたのだから」

「成績なんかどうだつていゝさ、女の學問はどうせ贅澤なんだから。お前も財産家の家に生れてりや、洋行でも出来るんだけど、こんな貧乏な家ぢや、女に贅澤學問をさす餘裕はありやしないよ」

「さう云へば兄さんの學問だつて贅澤でせう。今時大學を卒業したつて、そんなにお金にならないうでせう」

「おれは月給取りになりたくつて學問をするんぢやない、精神的の大事業をするんだぞ」と、眞造は氣取つて云つた。

「ぢや壯いきんのやうになるのね」と、お種は笑つた。そして近視らしく目を細めて、不器用に十字を切つて、壯吉の眞似をした。

「馬鹿だなあ」と云ひながら、眞造もつい釣込まれて笑つたが、やがて、「おれは責任が重いんだから、お前も浮々してちや駄目だよ」と眞面目になつた。

「私だつて責任が重いわ。女だつて兄さんが思つてゐるほど浮かりしちやるませんよ」

「そんならいゝが、眞造は妹の苦のななさうな風を見た。そして今の中にこの女一人だけでも片付けたと思つた。男の家柄や地位はどうであらうと、財産のある家へやりたいと思つた。しかし今それを口に出して云ひかねて、種ちやんはこれからお母さんの世話をしなくちやならんよ、あんなに身體が弱いんだし苦勞性だからと柔しく云つた。

「えゝゝお母さんはお父さんに對して、もつと權利を主張しないから駄目！」

「女はそれでいゝんさ、何のつもりもなく眞造は云つた。新聞紙に落してゐた煙草の灰を庭へ棄てながら、階下の静かなのに心を留めて、「お父さんはゐないんか」と訊いた。

「どうだか、私お父さんのことなんか知らない」

その剛情らしい言葉を眞造は忌々しく思つた。

四

「お母さんもゐないよ」と、妹は階下へ下りて視察して來た。

眞造は胸をどきどきさせたが、「ちや、お前階下で留守番しといで」と、平氣らしく命じた。

「何處へ行つたのだらう、臺所の階下を開放しにしちゃつて」

「だから留守番しといでよ、無用心だから」と、眞造は妹を階下へ追遣つた。そして階下を開けて、心當てに母の行先を眺めた。暗い樹木の中に燈火がチラ／＼見えたが、その近くの一つが母を導いた光だと思はれた。父の通つてゐる女の家へ後をつけて行つたに違ひない。無分別な外間の悪い眞似をしなければよいが、……彼は母に同情するよりもその狼狽した端ない仕事を憎んで、葉立てないで父のなすまゝに打遣つて置けば、世間にも知れないし、父もさう財産を傷けるやうなことはしないだらうにと母の焦々した火花のやうな性分を厭つた。

燈火は動きもせず消えもせず其處を照らしてゐる。空は曇つて、底冷い風が肌を染んだが、眞造は手欄の側を離れないで、厭らしいその場を想像した。——十年前田舎の中學に通つてゐた時分、父が町外れの淋しい家へ若い女を置いて、それと氣付いた母が跣足で駆込んで釣ランブを叩落した騒ぎがあつたが——

其處のランブはまだ光つてゐる。それを見詰めた眞造の心には五分か十分の間も長く待遠しかつた。疑ひと恐れが續いて起つた。

「お母さん」妹の周章しい聲が、不意に彼れ的心を呼醒した。耳を留めて階下の様子を窺つてゐると、母は、兄さんはと、妹に向つて訊いた。「二階で勉強しとる」田舎びた聲で妹は答へた。

間もなく母は階下段を上つた。眞造は怖いものでも來たやうに、ソツと顧みたが母の目付は異様に光つて小氣味悪く見えた。聞きたくもない事を聞かされるだらうと心で後退りされた。

「今大野のお爺さんに會つて相談して來たんだがね。あの人も身を入れて聞いて呉れさうぢやない。あんな手頼りにならん人でもなかつたのに」母は火鉢を隔てて腰をも落着けない。

「さう他人に立入つた話をしない方がいゝでせう」眞造は大人振つた口の利方をして「お父さんはどんな場合だつて身代を叩潰すやうな人ぢやない」と云ひながら、十年前にもさうだつたと思つた。

「それにしてもお前、自分のものは子供にも譲らないと云つてゐるんだからね。これ迄とは違つて役所は止めるし歳も取つたんだから、お金を持つてゐなくちや淋しいつて、大野へ行つても

さう云つてゐるんださうだよ」

「それ程好きなお金なら、無くさりやしないさ、僅かな月給なんかから拵へた財産だから、惜しいのも無理はないんだ」

「だけども此頃は餘程調子が變なんだから、どうするか分りやしない。昨夕だつてお前、子が子らしくないから、家にゐても面白くないと云つて外へ出て行くんだもの」

「だつて僕もお父さんの金の話ばかり聞いちゃゐられないさ。それに兄さんはあゝだし、僕が學校を用ゐるまでは、財産の減るのは覺悟してな

くちやならんさ。せめてお種だけでも早く片付けたらいいんだが、何處か田舎の財産家へ遣つとけば、この先お母さんもまさかの時に手頼りになれていい。手頼りにされる親類でも遣つとかにや困る時がありますよ」

「だけど親類なんか當てにならないよ。實の親だつてあんなになるんだから」と母は刺立つた調子で、「今の中にお前が確かり勉強して、早く卒業して皆なの世話をしなくちゃ」

「え」と生返事して、眞造は左右から壓迫されて居るやうに感じた。母をも避けて一人でゐたくなつて、「まあ心配しないでいらつしやい、私もよく考へとくから」

と、机の方へ向直つて、書物の頁を繰つた。そして母が遠慮して階下へ下りるを待つて、仰向

けに寝て手足を伸した。昂奮した頭には數多の不快な姿が忙しく浮いては消えた。茶の間では母が絶え間なく喋舌つてゐる。何時ものやうに妹をして父に背かすやうな話をしてゐるのだらう。彼れはこの家を飛出て自分一人きりの氣

儘の生涯を始めたくなつた。兄のやうな境涯も羨ましい。親には離れ兄弟もなかつた若い時分の父の境涯も不合せとは思はれない。ふと玄關の格子戸が靜かに開いて誰れかの聲がした。

「旦那さんかい、此頃ちつとも来ないんだね」と母が云つた。

「私も此頃は忙しいんです、今日眞造が来て呉れましたよ。お母さんも暇があつたら入らつしやい。あの魚屋は三井家へ出入するんだから、いゝ魚があるんです。今度お母さんにも御馳走

させよう」

「まあ此方へ上つたらいいぢやないか、そんな處へ突立つてゐないで」

「今夜は緩くりしちやゐられませんか。今護國寺まで行つて來たんですが、何だか氣掛りだつたから一寸寄つて見たんです、これから歸つて又

仕事があるんですよ」

眞造は兄の歸つて行く下駄の音を聞いてゐた。何を思つて不意に寄つて不意に去つたんだらうかと、裏に見た醜い兄の顔が物法く思はれた。

五

我知らず吸過ぎた煙草に舌を痛くして、その夜は寝苦しかつたが、明方になつてグッスリ寝入つて、目醒時計の音をも知らずに過ぎた。妹が雨戸を開けて呼醒すのを夢の中に聞流した。

快く眠足つてやう／＼目を醒すと、枕許の障子が開いてその側には父が胡坐を掻いて、煙管で長閑に煙草を吸ひながら、降濺ぐ雨に煙つた谷向うの高臺を眺めてゐる。父は若い時分から早起きが癖で、役所を止めてからも、日の出る前に目を醒して家の者を呼起すのが例になつてゐて、此頃でも一日も違へたことがない。そして町簿調べの外に用事もない娛樂もなければ、煙草氣を提げて二階へ上つて、何處ともなく眺めては三四時間を過すことがある。此頃は眞造が側にもさう話を仕掛けず、靜かに朝な朝な景色を眺めながら、何かしら考へてゐ

る。「よく眠つた」と、眞造は欠伸をして起上つたが、父は素知らぬ風をして一方に目を注いでゐる。顔を洗つて朝餐を食べて来たが、父は身動きもしてゐない。口蓋を剥落してから一層平たくなつた肉付のいゝ顔は、土氣色をしてゐれど、まだ朽衰へた風はない。煙管を持つた手は骨が太くて濃い毛が生えてゐる。追つた肩の間には高く皺が寄つて目の邊には涙味があつた。眞造は見るともなくソツと父の様子を見詰めてゐたが、やがて袴を穿いて風呂敷包を抱いて、「行つて来ます」と言置いて階下へ下りた。

父は暫らくして不精らしく立上つて、本箱や油絵の額を見ながら、二三度部屋を歩廻つて階下へ下りた。お種は不行儀に腹這ひになつて雑誌を讀んでゐる。

「種も大分東京になれたから、そろ／＼裁縫の稽古でも始めにやなるまい」と、その側に立ちながら見下して云つた。

「誰れが裁縫を習ふものか」お種は小面憎い口を利いて、尙雑誌を讀續けた。聲を出して讀出した。

「女が裁縫を知らんと、嫁に貰つて呉れる所はないぞ」

「なくつたつて些つとも困らない」

「お前は困らなくつたつて、お父さんが困るぢやないか、女が年頃になつて衣服一つ縫へんやうぢや外聞が悪い、お父さんまで恥かしいぢやないか」

「フワン」と小さい聲で嘲るやうに云つて、「そんなに世間恥かしいやうな子を生まなけりやい」と、わざと雑誌を持つて横へ向いた。

「さうだ、生まなけりやよかつた。氣狂ひや親不孝ばかり生むつもりはなかつた」と父は自分をも嘲るやうに云つた。そして口を嚙んで、淋しさに坐つてゐた。母がお種を指圖して雜巾掛をしたり、二人で綿巻に綿を巻いたりしてゐるのを、他所の人のやうに見てゐた。臺所の御用聞の外に訪ねて来る人もない。表の格子戸の鈴は一度も鳴らなかつた。用事のない父は正午まで一處に坐つてゐた。母は仕事をしながらも、白目を寄せてはチラ／＼父の方を疑ひ深く見た。

田舎にゐた時分には、座敷の床の下に小さい瓶を埋めて、その中に月々餘つた銀貨銅貨を収めて、暇な折々取出しては數へて見るのが楽しみだつたが、今はその楽しみすら得られない。預金帳や貸金帳を檢べるのは、現金を并べて見るほどの興味もないし、毎日では楽しみも薄らい

だ。それに外に収入の道もないので、帳簿の金高も減つて行くばかりである。月々減つて行くのが身を切るよりもつらい。眞造の學資や、壯吉への無駄な仕送り、月々心に深く染込むやうになつた。

で、彼れは屢々高利貸でも始めようかと思つた。大野の老人が自分で片棒擔いで周旋役になつてもいゝと勧めたこともある。今もその氣の起らぬでもない。だが、それに伴つた危険に思ひ及ぶと、容易に手出しをする勇氣はなかつた。

「彼奴が来たのが些つとは家の利益になつたらうか」彼れは弱々しい老込んだ妻を見てはさう思つた。そのキョト／＼した風をして、落着きもなく始終家の中を動いてゐるのも五月蠅かつた。

午餐を喰つてからは、毎日の例として、一時間ほど書寫をする。目が醒めると、果物が旨い物を食つて、徒らに目の暮れるのを待つばかりである。今日は眞造の歸る前に、退屈醒しに近所の大野を訪ねた。其處の老人は昔の私塾友達で、一時は可成りの財産をもつたがいろいろの商賣で失敗り續けて、今は横濱の商館に奉公してゐる獨息子からの仕送りで、貧し

い生活を立ててゐる。澤井吉文が職を失つてから東京へ移つたのも、この老人の手紙の文句に乗せられたからであつた。

「よく降るぢやありませんか、私共は雨だと一足も戸外へは出られませんよ」と、眼鏡を外して、讀掛けの義士傳を押しつけて客を迎へた。

吉文はムツリして座に就いた。

「貴方は何時も御丈夫で結構だ、私は此二三根根がなくなつてしまひましたよ。第一眼が悪くつてね、眼鏡なしぢや新聞を一行も讀めませんで」と、老人は口を利く度に身體を震はせた。

「お互ひに年寄の仲間入をしたのだからね、心細い譯さ」と、吉文は幽かに笑つた。

「しかし貴方は若いよ、懐に餘裕があると歳を取るのも速いと見えますな」と、冷かすやうに云つた。「どうです、先日お話の旅行は、私も都合がつけばお作したいんだが、今の所少し實行が六ヶ敷いので残念だ。まあ夏になつたら今年は久振りに温泉へでも行かうと思つて、今から楽しみにしてゐるんです」

「いや、私も當分は旅行は見合せませう、その前に家の事をちやんと極めときたいと思ひます、今のやうだと経費が膨脹するばかりで不安

心でならない」

吉文は「永く一人で眞面目に思詰めた別居の計畫を話して、老人の同意を得ようとした。最も親しいこの人から眞造にも話して貰はうとした。自分自身が直ぐに話すのは後見したい気がしたのである。

老人は相手が鹿爪らしく話すのを、竊かに面白がつて聞きながら、「それもさうですな」と軽く首肯してゐた。

「私も若い時分から苦勞ばかりして来たのだから、これから少しは樂をしなくちやなりません。もう先が知いのに、生活の心配ばかりしてゐちや、折角苦勞の仕甲斐がなかつたやうなものだ」と、吉文は沁々と感じて云つた。

「それもさうですな。しかし眞造さんは私の家の小僧とは違つて、順當に大學を卒業なさるのだから、將來の確かな當てがついてゐるんださあ」

「いや、あれも純物らしいからどうなるか分りません。それに私が側についてちやあの子の爲にもならん。學資は疲てゐても自然に湧いて来るやうに思つて、艱難辛苦の味ひを知らないから、學問にも身が入らん譯です。私共お互ひに若い時分には生柔しいことで學問したのぢやな

かつた」

「火の氣もない處で素給で我慢してゐましたつけな」

「眼くなる」と井戸端へ駈付けて、ザブ／＼釣瓶から水を浴びたこともあつたが――

「いや、あれが螢雪の苦みで木式の學問でせうな。今時ストロブの側で電燈で勉強するのは譯が違ふ」

二人は互ひに昔を思出してよく話が合つた。暫らくは懐かしい追憶の心が浮んで、目の前の慾も得も忘れてゐた。

「兎に角決心なすつたのなら、少しの間でも望み通りにやつて御覽なさい。私も掛り合ひで仕方がない、御子息にも話すだけは話して見ませう」

「さうして頂けると私も非常に有難い、無論あれだけの人数で食つて行けるだけのものは付けてやるつもりです。私が離れりやどうせ貴方に監督もして貰はねばならんのだから」

吉文は老人の同意を喜んで、財産の分配に立合つて貰ふ約束をもした。

六

二三日過ぎた、大野老人はまだ訪ねて来ない。

吉文も朝の内の静坐と帳簿いぢりと、夕方からの幸宅行との外に不慮と異つたことはない。澤井の一家に目に見える波は立たなかつた。眞造の不安は自然に薄らいだ。母の事々しい口口さへ避けてゐれば、何事をも損念しないで日を送られた。で、學校から歸つても、食事の外は二階にのみゐて、減多に茶の間へ顔出ししなかつた。たまに母が物云ひたげに側へ來ても、外すやうにとめた。何かに託つけては奥々戶外へ出歩いた。或晩、「兄さん、何處へ行くの」と、遊び友達のないお種は、ステッキを持つてブラブラ出掛けて行く兄を羨ましがつた。「お母さんと毎晩留守番ばかりさせられて、本當に詰らないわね」と母に訴へた。

「お前一人何處へでも遊びに行つてお出でよ。電車にさへ乗れば賑かな處へ出るのに造作もないんだから」

「だつて私一人ぢや、知らない町は恐いわ。お母さんも行くといふんだけど」

「お前、一人で歩くのが恐いの。東京の町は田舎のやうに暗くはないんだよ」と、母は笑つて押揃ふやうに云つた。

「臆病者ともどもおはれたやうに、お種は負けぬ氣になつて、「ぢや私、一人で行つて來る」と力

んだ。二三度母や兄に連れられて、上野や向島の花を見ればかりで、東京に馴染んでゐないので、氣配れもしたが、一人氣儘に歩きたい好奇心もあつた。そして母が道筋を彼此教へるのも耳にも入れずに、裏口から垣根の狭い道を傳つて通りへ出た。田舎者らしく見られぬやうにと、傍目も觸らずにスヌ／＼歩いた。左右は次第に明るくなつて、御通院前まで來ると電車の響や、夜店を圍んだ人ばかりで逆上るやうになつた。賑かな大勢の中に割込んで行くのも一人では心細くなつて、ふと思出して壯吉の家を訪ねた。あの兄を連出して、其處等を散歩しようと思つた。

魚屋の二階には、吉新聞を笠にした小さいランプが疊の上に置かれてゐる。氣味の悪いほど薄暗い。明るい外から來ると穴倉へでも入つたやうだ。兄はキチンと坐つて、ランプを隔てて眩枕で横になつてゐる男と、元氣のいゝ聲で話をしてゐた。

「一人で來たのかい、よく來たね」と、壯吉は愛想よく妹を迎へて、前からの話を續けた。

お種は洋語交りの理窟つぽい話が面白くなくて、陣の方で手持不沙汰にしてゐたが、やがて其處にゐる男が、かねて聞いてゐた日笠だと知

れた。身装や顔付も兄に似て書生染みてゐて、豫想とは全く違つてゐるのを不思議がつた。日笠は壯吉の議論を言葉少なに聞いてゐたが、やがて生欠伸をして身を起して、

「ぢや、君の大事業が成功して理想の養育院でも建つたら、僕も其處へ入れて貰はうかなあ」と云つて、お種の顔を横目で見つた。

「あゝいゝとも、だから安心してゐたまへ。僕一個はどうせ君達のため人類全體のために犠牲になるんだからね」と、壯吉は音楽的に輕快に云つた。犠牲とか人類全體とかいふ言葉は彼自身の耳にも氣持よく響いた。

「令妹は何か用があるんぢやないか」と、日笠は注意した。そしてあまりに追つて來る壯吉の議論を避けるやうに、立上つて椅子に腰を掛け

「種ちゃん、用事はないのだらう。まあ樂にしておいでな」と云つて、壯吉も立上つて机の側に寄り、「僕は家の事は弟に任せてゐるから、家庭的の用事は少しも僕にないんだよ」と、日笠の耳元で聲を強めた。

「長男がそんなに無責任ぢや困るね一日空は空嘯いて、椅子の側へ顔を捻向けて賑かな人通りを見た。

「無責任かね、君……だつて僕は天主教へ入つてから童貞の誓願を立ててるんだよ。一人が童貞の生涯を送れば、その一族は如何なる罪があらうとも、未來永遠に救はれるんだからね。齷齪家庭の事に關係したり、外形的の親孝行をしたり、そんな呑臭い事をしなくつたつて、僕は一族の靈魂を救つたよ」と、さも得意らしく云つた。

「童貞の誓願まで立てたのか」日笠は決心に驚いたやうに振向いて、「君はもう三十四歳だが、一生清淨潔白で送るのかね」

「童貞の一生ほど尊いものはないんだつてね。僕は半歳ほど尼寺に住んでたが、女も尼さんは神聖なものだよ」

「どうだかそれや分らんね。しかし君は婦人を斷つてしまつてから今迄一度も後悔したことはないかね」

「一度誓つた以上は決して破ることは出来ないよ、僕の一族は僕によつて救はれてるのに、それを再び地獄の底へ墜せるものか、その代り僕が清淨である限りは家の者は安心していゝんだ。母や弟がよく家庭の事を苦にするけれど、それは畢竟僕の信仰に手頼つてゐないからなんだよ。さうだらう」

「さうだらうね、僕も一人君のやうな兄弟を持つたいものだ。さうすれば未來の保證がついてから、生きてる間は思切リ欲望を恣にするんだが」

「君はニヤリと笑つて、「僕の一家は幸福だよ」と云ひながら机の引出から、黒い海松のバンプを捜出して、「これは田舎の宣教師に貰つたんだが、僕にや無用だから君に進呈しよう。宣教師が町の店でこれを見付けて、十木ばかり皆な買占めて、僕等に分けて呉れたんだよ」と、手でバンプを小磨つて、日笠に渡した。「其處に置いてある書物も大抵同じ宣教師から貰つたんだが、その中で讀みたいものがあつたら、どれでも持つて行き給へ。僕はもう書物は入らないんだから」と調子に乗つて、其處等にある持物の凡てを日笠の手に押付けさうな勢だつた。

日笠は五月蠅がつて、「もう澤山だ」と、バンプだけ袂に入れて、机の上の烏打帽子を被つて歸りかけたが、壯吉は強ひて引留めようとした。「もつと遊んで呉れたまへ、君に話したいことがまだ溜つてゐるんだよ。好きな物を何でも奢るから、もつと聞いて呉れたまへ。ねえ、いゝだらう、此處で燈火をつけないで考へると色々世間の人の知らん事が考へられるよ、

時々不思議な聲が聞えるよ」と、死霊でも乗移つたやうな素振をして、聲をも潜めた。

「さうかね、しかし今夜は二時間ばかり君の議論を聞いたんだから、それで澤山だよ。後は又この次に承りませう」

「どうしても歸らんかねえ」

「どうして一人の徒弟と思つてゐる日笠に離れたくはなかつたが、日笠は容赦なく振放して二階を下りた。そして頭の軽くなつたやうに感じた。

「彼れにまだ詳しく云つときいた事があつたのに」と壯吉は階下まで見送つて来て獨言を言つた。喉舌り疲れてガツカリして、壁に凭れて首垂れて目を瞑つた。

「兄さん、そんな風をしてどうしたの、何か氣味が悪いやうだわ」お種は初めて口を利いて、ランプをテーブルの上に置き、グツと心を繰上げて、出来るだけ明るくした。そして焦付いた笠を取除けて、書汚した半紙で新しい笠をつくつてゐると、壯吉は怪しい夢から醒めたやうキョト／＼部屋の中を見廻しながら手を振つて、

「ランプは下へ置け、テーブルの上だと外から見えていかんよ」

「何故見えちやいけないの、ランプは疊の上に置くものぢやないわ」

「馬鹿ツ」と、例にない慳貪な聲を出して、壯吉は妹の手からランプを奪つて下へ置いて心を引込めた。

お種は呆れて兄の顔を見てゐたが、その顔は次第に怖くなつた。

壯吉は後退りして元のやうに壁に背を擦付け、首を垂れて口を嘔み、傍に人のゐるのも忘れてゐた。

今朝早くから支局の集金掛のお伴をして、小石川區内を殆んど残りなく引廻された上に、久振りに逢つた日笠と話込んだため、身體も心も不眠より疲勞して、稍々もすればウトウト居眠をしさうになつた。だが、今夜はまだ計畫すべきことが残つてゐるので、自分で心を引立てて、臉を張つて眠らぬやうに勉めた。薄暗い中に白い目が開いたり閉ぢたりした。

突立つて見てゐたお種は、最早小氣味悪くなつて、息を殺してソツと階下段を下りて逃げるやうに戶外へ出た。壯吉はそれと氣付かずに、一處にヂツとしてゐて醒めるでもなく眠るでもなく時を過した。政治運動や露西亞貿易や貧民救濟所や、毎日繰返して倦まない計畫が、形を備

へて其處に現はれて消える。波の向うに雲のやうに横つた陸地が見えた。自分の指圖に従つて黒い人や白い人や、人も歌ともつかぬものが動いた。次第に聲が殖えた。自分を誑かす聲が聞える。手を合せて禮拜する者もある。彼れは驚しいその聲に吃驚して目を開けて、慌ててランプを吹消し、格子の間から密かに外を覗いた。自分の大事業の陰謀を誰れかが妨害しようとして、屋根のあたりに見張つて居りはせんかと思つたからである。

「お前何してるの、こんな暗闇の中で」

「お母さんか、どうしたんです、今時分」

「お母さんか、どうしたんです、今時分」

「お母さんか、どうしたんです、今時分」

「お母さんか、どうしたんです、今時分」

「お母さんか、どうしたんです、今時分」

「お母さんか、どうしたんです、今時分」

「お母さんか、どうしたんです、今時分」

「お母さんか、どうしたんです、今時分」

「誰れの家だつていゝぢやないか、今夜だけでもお母さんのいふ通りにおしなさい」と、母は叱るやうにも云つた。睡しても見た。此處五六年落着いて大人しくしてゐるので安心してゐるもの、どんな機會で病院にゐた頃のやうに暴れ出さぬとも限らぬと案じられた。

しかし壯吉は聞入れない。「今夜は私に取つては大切な晩ですが、一足も此處を出て行きません」と、力を籠めて言放つた。膝に置いた握拳に力を入れた。ピクリとも動かない風を見せた。

母はその滑稽染みた風を見て眉を顰めて、暫らく黙つてゐた。

「どうしたんです、お母さん。私の事はもう心配しないで、早く歸つてお休みなさい。もう夜中近いんでせう」と、稍々あつて壯吉は柔しく母を慰撫つた。

「まだお前宵の口だよ、あんなに外は賑やかなだから、少し散歩でもしたらどう」

「賑がですつて、夜が更けるとあんな騒ぎが起るんですよ。僕は今夜は眠らないで、何時までもかうしてゐるんですよ」

「ぢや、お母さんも此處に宿らうかしら。家にゐたつてどうせ眠れないんだから」

「ぢや、お母さんも此處に宿らうかしら。家にゐたつてどうせ眠れないんだから」

「お母さんもさうですか。ちやお宿んなさい。僕が居れば大丈夫です、僕が側に居れば保護して上げます」

「何をお云ひだい。保護するの何のと。それよりもお前自身に確かりしなくちや駄目だよ。お母さんがおぬなくなつたら、誰れがお前の世話をして呉れます」

母は不憫なやうな前掻いやうな思ひをして向合つてゐた。壁の上は埃でザラ／＼するほどだった。風は何處からか忍んでランプを煽つた。壯吉は引立つてゐた心の再び弛んで、口の中何か咳きながら、居睡をしかけた。そして母が敷いて呉れた蒲團の上に倒れて軀をかき出した。

「よく眠さへすればいゝんだ」母はランプを差出して、口の端に泡を浮せてゐる壯吉の寝顔をツク／＼見詰めて後、戸締りをして、ランプを消して階下へ下りた。魚屋の女房さんに氣を付けて呉れるやうに頼んで置いて家へ歸つた。

七

壯吉は翌朝まで熟睡した。女房さんが辨當を持って来て戸を開けたのを目を醒して、慌てて飛起きて顔を洗つた。支局へ出て行く時刻の

追つてゐる氣がして、急いで袴を空き羽織を着て、掃除もせず取亂したまゝの部屋で辨當を食べてゐると、母と弟とが不意に入つて来た。昨夜の母や妹は夢の中の人のやうに頭から消えてゐたので、

「朝早くからお母さんまで、一緒に何處かへ行くんですか」と、不思議さうにその顔にも言葉付にも昨夕のやうな不審な様子はなかつた。

「お前こそ何處へ行くの。袴なんか空いて。昨夕はよく眠つたのかい」母は壯吉の不審のやうなのに安心したが、眞造は仰山さうに母に嚇されて来たのが馬鹿々々しかつた。で、今更兄の譚言を聞くでもないと思つて、

「ぢや僕だけ先へ歸りますよ」と、スツと立掛けた。

「だつて、まだ學校へは早過ぎるだらう。丁度い、折だから兄さんにも家の事を話して、三人で極めるものはちやんと極めといたらいいと思ふよ」

何だ、こんな兄に云つたつてと、眞造は厭な顔をして黙つてゐる。

「失禮しました」と、壯吉は辨當を食べてしまふと恭しく會釈した。一大層甘さうね。お母さんも一度馳走になりました

いねと云つて、母は甲斐々々しく其處等を片付けて、夜具を干したり掃除をしたり、押入から汚れた物をも出した。二人の子を側に据ゑて、からして働いてゐるのはさも悦しさうだつた。見違へるほど綺麗になつた部屋に朝日が差込んだ。騒々しい中には雀の晴やかな聲が格子の側に聞えた。母は窓際に突立つて物珍らしさうに賑かな朝景色を見てゐたが、やがてこの

邊は陽氣でいゝね、お母さんも此處へ來ようかねと、子供らしく云つて、寒い目に微笑を湛へて坐つた。明るい光に照らされたその顔は、頬骨が黄ろい皮膚を透かして見えるやうで、目の下には環が出来てゐる。

「お母さん、僕はもう出掛けなくちやなりませんが」と壯吉は氣兼ねながら云つて腰を浮かせてゐる。

「新聞の見習ひなんか一日ぐらゐ止したつていいだらう、それ所ぢやないんだから」と、母は浮々して居た今迄の氣分が俄かに變つて、溜息吐いて眉を寄せた。不意に電氣でもかゝつたやうに、口のあたりがピリリと動いた。青い筋が目立つて来る。

眞造は目を他所へ向けた。母のそんな顔付を見る度に、自分の家の陰鬱な空氣を感じられる

ので、成るべく見ない様にしたが、直ぐ側にそんな顔付をした母がゐると思ふだけで、もう心が重苦しくなつた。母は周圍を懼つて潛めながらも、持前の尖つた調子できれ／＼に父の事を話してゐる。兄に人並の量見のないのを忘れでもしたやうに立入つた話をして、眞面目に相手の智慧を借りたさうである。

「お母さんは思々しくつて、幾度も家を出て行かうかと思つただけで、お母さんには歸つて行く家なんかありやしない。それだつてこの歳になつて、自分で稼いで口過ぎは出来はしないだらうしき：本當ならお前が惣領だから皆なの世話をしなくちやならんのだよ。歳から云つても、お父さんはもう隠居でもして、お前が家の事を一切引受けて始末するのが本當なんだよ。あんな女にムザ／＼身代を潰されて、黙つて見てるつてことはあるもんぢやない。お前だつて月々仕送つて貰はなくちや困るだらう」

母は相手を強く刺激するやうに云つたが、壯吉はろ／＼母の言葉に耳を留めず外の事に思ひを馳せてゐた。そして、

「私は僅かな金ぐらゐる念頭にありません。大事業がそろ／＼始まりさうなんだから」と、平然として云つた。

「ぢや、お母さんが乞食になつても構はないんかい。家の事なんかどうなつたつていゝのかい。人情のないお父さんに好きなやうにさせといて、お前達黙つて見てるつもりなの」と、母は曇みかけて云つて激した。目も只ならぬ色をした。

壯吉は却つて落着拂つて、病の高ぶつてゐる母を不審げに見詰めてゐたが、「そんなに私の家が危険になつたんですか、お母さんまで追出されさうになつたんですか、先日家の前を通つた時も、何だか變な奴がウロ／＼してゐるやうで氣に掛つて寄つて見たんだが、矢張さうだつたんだ、さうに違ひない」と獨り合點をした。

「何だつて。變な奴がウロ／＼してたつて」と、母は垂出して訊いた。

「え、この邊へも折々やつて來るんですよ。僕の事業も彼奴のために妨害せられるんですよ」「どんな人だい、それは。女かい、男かい。女ぢやないの」と、母は氣色ばんだ。眞面目に考へた。

「どちらだかよく分らないが、兎に角いけない奴ですよ。あんな奴を生かしくと、皆なの迷惑になるんですよ」

壯吉は支届へ見習ひに出掛けることなど忘れ

てしまつて、心は只管その變な奴の事のみ凝固まつた。目鼻立は明かに吾ばないが、鋭い非凡な智慧と力とで、自分達に仇をなしてゐると思はれた。自分の計畫もそのために阻礙されさうな氣がした。母や弟妹にまで災を被らさうとしてゐるのだ。

彼はふと自分と其奴とが世界に睨合つてゐるやうに感じた。

「お母さん、どうかして彼奴を退治しなければなりませんね。何ならお母さんは此處へ寝宿りなさい。私が身に代へても保護して上げます」と、氣を張つて云ひながら、懐から例の藁口を引出して、珠數やマリヤの旗を見た。それを見たと急に心丈夫にもなつた。

母は先日からは程手頼りになる言葉を聞いたことはなかつた。眞造やお種からも、當てこんな情味の籠つた言葉を聞いたことがない。で、壯吉の顔を自分の頬に擦寄せたいぐらゐる悦しかつた。睫に涙をさへ浮べた。

「たとひ、二階借して暮したつて、壯さんの側にゐれば、お母さんもそれで安心なんだよ」と、前後を辨へずポツ／＼となつて云つた。世間に捨てられた娘一人子一人が差向つてもゐるやうな感じを起して、それに酔つてゐた。

眞造は二人の話を聞いてゐると、次第に心が沈んだ。母迄も気が變になつたのぢやないかと思はれた。振返つて見ると、母の顔が却つて不穏な悪相を帯びてゐる。

「さあ歸らう。お母さんも歸つたらいいでせう。兄さんも何處かへ行くだらうし」と、強ひて母を引立てて外へ出た。そして傳通院前母に別れて、本郷行の電車に飛乗つたが、學校へは行かなかつた。湯島天神から池ノ端へ下りて、公園の茶店に腰掛けたりして一二時間を過した。心に残つた母や兄の影を忘れようとして、僅かの小遣錢で煙草を買つて、淡い煙を吹きながら葉巻の蔭を歩いた。正午になつても自分の家へは歸りたくなくて、心行くばかり自分を慰めて呉れるものが欲しくなつた。せめて母や父の顔の見えぬ處に住みたかつた。孤兒が却つて羨ましかつた。

八

壯吉は母と弟との歸つた後も、暫らく一つ處に坐つたきり動かなかつた。目を睨つては十字を切つたり、何かを拂除けるやうに手を振つたりした。正午の辨當が來ても食べようとはせず、心は一瞬に凝固まつてゐた。母や弟や

妹の首に蛇のやうに絡付いたものがありさうに見える。血の氣を吸盡されたやうな痛ましい顔をした母の救ひを求めぬ聲が聞える。軒燈の點きかける頃、彼れは晩の辨當をもそのまゝにして竹早町へ行つた。物に驚いたやうに格子を開けて茶の間の上つて、突立つたま目を据えた。

一壯さん、どうしたんだい」と、母は胸を講かせた。お種も眞造も父も箸を持つたまゝに一緒に目を向けた。

「お母さんこそどうもないんですか」と、壯吉は母を庇ふやうにその側に坐つた。お種は恐ろしさうに身體を斜にして、兄の息を避けた。だが、みんなが氣遣ふやうな變つたことも起らなかつた。十年前のやうに暴れ出しさうでもない。狂態は見えなかつた。

父は眉根を寄せたばかりで、黙つて箸を執つた。外の者も再び膳に向つた。

「お前御飯は？」と、母も落着いて、腰を持ち上げて、茶鉢筒から茶碗を出さうとした。

「僕は食べたくないのです」と、壯吉は押しめて、一僕は今夜から此家へ留らうと思ふんですがいいでせうか」

「どうせさうしなくちやならんのだ。何時までもお前一人を氣儘にさせとかりやしない」と父も云つた。だが、眞造一人はこれから又毎日兄の不快な舉動を見せるのを豫期して、一家撞つてゐるこの茶の間が一層陰鬱に感ぜられた。

その夜壯吉は玄關の三疊に寢床を延べて寢たが、何時までも寢付かないで、目を開け耳を聳て、絶えず家の中の物音に氣を付けてゐた。そして少しでも物音がなると首を持ち上げて枕許のマットを擦る。夜中にも幾度か起上つて豆ランプを點けて部屋々々を見廻つた。

「どうかしたのかい」と、母が不意に夢から醒されて訊くと、

「ヂツとして寢ていらつしやい、私が夜番をしてるんだから、安心していゝんです」と、聲を溜めて答へた。

朝まで一睡もしなかつた。

そして翌朝眞造に手傳はせて、魚屋の二階から荷物を運んで來て、玄關に置いた。日笠にだけ轉居の通知をして、「至急來て來れ」と書添へた。日笠はその端書を見ると轉居を訝りながら直ぐに訪ねて行つた。變事でも出來たのかと、秘密を察するやうに様子を見た。

「又此處へ舞戻つたんだね、何故だい」と、締切つた玄關の狭い部屋で、周囲を憚つて訊いた。「大事業も當分見合せとなつたのか」

「なにあに、着々と歩を進めてるさ。しかし僕が此家を離れると變な奴が祟つて来るらしいから、當分僕が宿込んでやるんだ。いざとなると、僕が身を捨てても家の者を救つてやるよ」と、壯吉は手強い決心を示すやうに云つた。眠らない爲か、不斷の落着いた顔が焦立つてゐた。「君當分僕に代つて事業の計畫を進行させるといふ呉れたまへ、君なら大丈夫だから任せとされる」

「さうかね」日笠はいゝ加減の返事をした。そして何故この男をこんなに打棄てて置いて、病院へも入れないだらうかと怪んだ。狭い部屋には煙草の煙が満ちた。壯吉は煙に咽びながら、

「君は何故あのパイプで吸はない」と、日笠の吸つてる吸口付の煙草に目をつけた。

「あれで吸ふやうないゝ煙草は買はないから」

「奢臭いね。もつといゝ匂ひのする煙草を吸はなくつちや駄目だよ」と、命令するやうに云つて、「おれが奢つてやるかな」と、袋口から銀貨を取出して茶の間に行つた。

その間に眞造が外から歸つて玄關へ上つたが、日笠を見ると、急にニコ／＼して二階の書齋へ誘つた。

「先日から貴方にお目に掛りたかつたんですよ。旅行は面白かつたでせうね」と懐かしさうに云つた。

「えゝ、時候がよいから、何處へ行つても氣持がよいです」

「さうでせうね、僕も旅行したくつて堪らないんです、少し貴方の旅行談でもきかせて下さいませんか。僕は自然が好きですからね」と障子を開けて、新緑を掠めて來る風を迎へて自分に座を設けてゐると、其處へ壯吉は「ナイル」を一室持つて上つて來た。眞造は兄の顔を見ると、湧立つてゐる興を急に醒して、言葉の調子まで鈍つた。

壯吉は「ナイル」を取出して、日笠と弟とに一本づつ渡して、彼等の吐出す煙の渦巻くのを一心に見詰めた。それが盡きると更に他の一本を取出して吸はせた。そして見詰めてゐる中に、何時となく居睡をし始めた。はては横に倒れて熟睡に陥つた。

旅の話が続けてゐる日笠は話を轉じて、「兄さんも此頃は大分弱つたんぢやありませんか」と、

壯吉の寢息も以前よりは力がなくなつたと思つた。

「さうです」と云つたきり、眞造は兄の事を彼此話したくなかつた。

「これで、始終函を使つてたんだから根が盡きたんでせう」と、日笠は歳よりも老いて醜い壯吉の顔を覗いて見て憐んだ。唇を動かして折々口の中で寢言を云つてゐるが、その意味は明かに分らない。

二人は寢た男の前に置いて、暫らく黙つてゐた。

九

壯吉の目の醒めた時は二人連立つて散歩に出た後だつた。徒らに寢過したのを悔いて、慌てて二階から下りて、部屋々々を見廻つた。

「兄さん、五月蝋いよ、そんなに歩き廻つて、針仕事をしてゐるお種は舌打して毒々しく云つたが、壯吉は耳にも留めない。得心の出来るまで部屋を見廻つた。夜になつて家族が睡に就いてからも、彼れは寢床へ入つては起き／＼して落着く暇はなかつた。豆ランパを手にして二階の階下を隈なく忍び足で歩いた。母の寢顔や父の寢顔に目を投寄せては見廻つた。折々立留つ

ては疊の上に捲れてゐる火影を見つけた。

半過ぎて、母はその幽かな足音に驚いて目を醒したが、寝衣を引摺つて、薄明るい火影に白い目を動かしてゐる男が、幻しのやうに見えたと共に身震して、鏡く叫んで、家中の者を呼起した。

父は壯吉の手からランプを奪つて、壓付けるやうに坐らせたが、壯吉は手向ひもせず首を垂れて、一僕一人が寝ずの番をしてりや大丈夫です。安心してズツと寝ていらつしやい。幾ら戸の外まで来てても入りやしないよ」と素直に云つて、懐からペテロの彫像を出して、恭しく十字を切つた。

「お前こそ氣を落着けて寝ろ」と、父は後から蒲團を掛けてやつた。そしてランプを明るくして、家中揃つて壯吉を取圍んで通夜をした。

一僕は十日でも二十日も少しも眠らなくつて構ひません」と、壯吉は同じ事を繰返しつた。そして皆なが氣遣はしい顔をしてゐるのを不感に思つた。

不感でも話の少ない家族は眠い目を張つて、それ／＼に思ひに取つてゐるのみで、互ひに口を利かなかつた。

新聞配達達の鈴の音が次第に近づいて、格子戸

の外から投込まれた。

「僕があゝして此處へ新聞を投込んだことがあるんですぜ」と、壯吉は今迄忘れてゐたことを不意に思出した。

その様子が可笑しいので、父も母も笑つた。

「お前が最少し當り前になつてそれだけ働いてりや、少しはおれの力になつたのに」と父は嘆息した。

壯吉は毎夜々々の寝ずの番で次第に瘦衰へて、見るも泣くなつた。その願きに紛れて父の別居の企でも延び／＼になつた。

「入院させなすつちやどうです」と、大野老人は勧めたが、父はキツバリした決心もしなかつた。長い間自分の血潮を絞取られて育て上げた樹木の、何の效もなく枯れて行くのを、手を束ねて見ながら、痛ましくも腹立しくも思つてゐた。

小感錄 (文壇觀想より)

C社氣付で私におくられた英文の書翰が、C社から私の家へ回送された。披いて讀むと、それは Junko Juman Tetter であつた。この手紙を寫して九人へ送れ、そして幸運の鎖を切るなど書かれてあつた。最初は米國の二官吏から發せられて、世界を三週すべく豫想され鎖となつた人々はすでに百名に近かつた。なかには日本の公爵も將官も入つてゐる。鎖を切つたものは、九日のうちに災害立ちどころに到ると云はれてゐる。

しかし、私は、かういふものを迷信として笑ふ時には行かない。かういふことでも大多數の人々が信じれば、それが人生の大眞理として世界に通用されるのである。歐米で十三の數を厭ひ日本で丙午の女を嫌ふのは、愚かなこととのやうに思はれるが、さう云へば、キリストの教へだつて釋迦の教へだつて、多數が信じてゐるらしいから我々がそれにかかれてゐるまでのことである。天文學者や生物學者の學說だつて同じやうなものだ。歴史上の人物の批判などにさうだ。だから、同人物に對する見解が時代によつて違つたりするのだ。

泥 人 形

守屋重吉は朝から、静かな小石川の場末の家に静坐してゐたが、日暮前から何時ものやうに散歩に出た。まだ三月の初めだけれど、春めいた温かさで、重ね着が重苦しく感ぜられた。賑やかな下町へ出て懇意な洋食屋で軽い食事を済ませて有樂座の方へ歩いた。そして、入るともなく其處へ入つて、案内された席に着いて厚ぼつたい外套を脱いで、身も軽くなつて、番組を見るとき、加賀太夫の「蘭蝶」呂昇の「柳」など、聴かぬ先から心を喰かすやうな曲目が記されてゐる。

間もなく幕が開くと、蟬足の赤い見臺が強く目を惹いた。番組によつて、見臺に向つた色の淺黒い目付の鈍い男が松尾太夫で、全釣女を語るのだと知れた。久振りに聴く三味線の音は重吉の耳にも懐かしかつた。それを聴きながら、自由自在の聯想に心を遊ばせてゐた。七八年前に或音楽會で林中が同じ者を語つたこと

も想出された。その緒らびた顔と冴えた音色があり／＼と浮んだ。疲れた焦立つ心が續まつて、うつらうつら夢路に引入れられさうであつた。明るく光と快い音色は、其處等の裝飾を凝らした聴衆の姿を一層美しく見せた。音曲に聴惚れた人々の顔には邪慾の相は消えてゐた。

やがて、幕が下りて撥音の絶えると、彼れは新なる氣持で場内を見渡した。立上つた女の後姿、笑つてゐる女、横向きに白目を寄せてゐる女、いろ／＼の女を見渡してゐたが、暫らくして、ふと自分の側に坐つてゐる女が目にとまつた。見た事のある女のやうな氣がする。あれかと記憶を呼び起したが、横顔ではよく分らなかつた。結立つた丸髷で、蟬足の美しさは目の醒めるほどだつた。軽いお召のコートを迂り落すやうに脱いで鶉色の縮緬の羽織を見せた。篋の隙の紋がついてゐる。側の母らしい人と話してゐたが、やがて振向いた顔は派手で、そして氣高かつた。目が大きくて眉が長くて、色は

飽くまで白かつた。重吉は注意しながらも、容易にそれと定めかねたが、次第に疑ふ餘地もなくなつた。去年の春一度、矢澤の家で會つたかね子といふ女に違ひない。女はかうも變るものか……

夫らしい男が早足で歩いて来て、母の隣の空席に腰を掛けた。顔が廣くて柔和な目付をしてゐる。重吉はその新夫婦の身の上に想像を走らせながら、自分で自分の眼の鈍さを喫つた。不斷着に海老茶の袴を着けて、束ね髪の前髪のないあの時の女に、これだけの容色が備つてゐようとは知らなかつた。「あの女の姿はいゝし、顔の道具はよく揃つてゐる。あの位なのはさう手易く得られやしないよ」と、矢澤が勧めたのを、無下に斥けたが、それが今となつては、殘惜しいやうな氣がしてならなかつた。周圍にそれに比べられるやうな女は見當らない。

で、重吉は廊下へ出て、呂昇の繪葉書を買つて、その餘白へ、「一年目で思掛けなく、珍らしいかね子さんに會ひました。有樂座には、洗向きの女で、場内に異様を放つて居ります。私は自分の目の玉を執り扱きたいと思ひます」と、鉛筆で書いて、矢澤夫人に送ることとした。そして獨り廊下をぶら／＼したり、東洋軒で紅茶

を飲んだりして、「常澤」は終りの一つを聴いたばかりだった。

新内を一段聴き終ると、最早三味線の音にも巧みな肉聲にも倦んで、外の冷たい空気に觸れたくなつたが、さて思切つて座を出ることも出来なかつた。恣に、席に身體を凭らせて、呂昇の涼しい目の動き、扇を含んだ口元の動くのを見てゐた。豊かな聲で語りながらも、長い一段に疲れたのか、疲労の色が遠くからも見えた。

重吉は節その物の面白さよりも、白い柔かい顔に苦澁の色が微見えるのに一層の興を寄せた。

幾時間も同じ氣持で、靜かにいろ／＼の音色を樂むことは、彼れには出来なかつた。ふと路傍に立止つて、二階から洩れる尺八の音に耳を傾けたり、稽古三味線に引寄せられたりする時には、催眠歌を聴かされる赤ん坊のやうに、無邪氣な夢心地になるのだが、樂堂で心構へして名人の曲を聴いてゐると、次第に思ひは繁く感情は濺ぎされて、神經はその重荷に堪へがたくなつて来る。

彼れは外の聽衆に後れて戶外へ出て、ホッと息を吐いた。唄ひ手彈き手の巧拙よりも、どの音色にも潜んでゐる遺瀾ない思ひのみが、暫らく心に響いてゐた。日毎夜毎、幾月も幾年も遺瀾

瀾ない思ひにのみ悩まされて來た彼れは、詩からも唄からもその思ひをのみ汲取つた。陸摩羅毘でも、月琴でも、筑摩川や鞍馬山のやうな大陸摩でも、彼れの耳には遺瀾ない思ひを傳ふるに過ぎなかつた……

日比谷へ出て堀端に沿うて、彼れは歩んだ。電車に乗るのも忘れたやうに、九段まで歩いて來た。左右の人家は皆戸鎖されて、最終に近い電車は慌しく馳せてゐる。彼れは幾臺もそれを通過した。そして、何時までも自分の家へ歸りたくはなかつた。

二

二三日して、重吉は有樂座で見たかね子の事を話しがてら、牛込の高臺の矢澤の家へ遊びに行つた。舊い友人で、去年の夏頃から殊に繁々出入りしてゐるので、東京中で彼れの懇意な家庭としては矢澤以外にはなかつた。少くも紳士らしい家庭では、外に近付はなかつた。そして、其處では、戯談を云つたり氣儘にゴロ／＼してゐても、多少言葉も慎しんだり、態度をも眞面目にしてゐた。自分の境遇や、將來の方針や、故郷の事情なども、眞面目に話し眞面目に聞いて貰ふ事があつた。五月も六月も不規律な放縱な

目を送つたり、苦しい空想に耽つたりした後では、こんな眞面目な話相手は欲しかつたのだ。結婚して世間並の着實な生活を經驗せよとの親身な忠告を、折々は聞きたかつたのだ。純潔なる處女と三々九度の盃を取交して新郎新婦の契を結び、世間晴れて美しい家庭をつくるといふ心に、折々はなりたかつた。自分にはそんな人間普通の樂みの經驗されぬやうに出來てゐると知りながら、將來にそんな望みのありさうに思つて見たいこともあつた。

「おかねさんにお會ひなすつたんですつてね」と、矢澤夫人は重吉を見ると、快い笑ひを流して云つた。

「え、會ひましたよ。向うでは忘れたのかどうだか、知らん顔をしてゐました。何處へあの人は嫁いたんでせう?」

「印刷會社の社長の子息だとか云つてましたよ。奥さんまで自用车に乗つて出るんださうですから、随分お金持なんでせうよ」

「あの位の女なら、何處へ連れてつても幅が利くやうな氣がしましたよ、僕も惜しいことした。これまで貴女の紹介なさつた女で、かねさんが一番立派ですね」

重吉はこの細君に勧められて、五六度眞物や

寫眞で見合ひをしたことを追想した。七年も前に、或女學校の生徒と團子坂へ菊見に行つたこともあつた。

「貴女も私に結婚ささなくちや、七年間の骨折が無駄になりますね。若し私が外の人の世話で結婚するとか、何時までも獨身であるやうだと、貴女は大事業に失敗したやうなものだ。しかし目出度く成功しさうぢやありませんね」

「私、もうく懲りくしましたよ。自分で馬鹿々々しくして仕様がありませんわ。ただ折角お世話しかけたんだから、貴方のだけはどうしても纏めたいと思つてゐます。二度ともう仲人なんかになりやしないけど」

「しかし貴女の紹介した女は皆な相當に綺麗でしたね」

「それや、私の目で選擇してかゝるんですもの」と、細君は浮いた調子で云つて、「私の方で行く力を入れてても、肝心な貴方が本氣だか戯談だか分らないんだから、本當に張合ひありませんよ」

「萬更戲談でもないんだけど、矢張縁遠いんですね。しかし、僕は七年前にお八重さんと結婚しとつたら、幸福なスピードな生涯が送れたのかも知れませんね。今でも時々あの人の事を

思い出しますよ。今も矢張越後の女學校で教師をしてるんですかね」

「え、さうでせうよ。もう子供が二人出来たんでせう」

「早いものですね。僕はあの淋しい顔付が気に入つてたんだが、今見たら丸で變つてるでせうね」重吉は小さな目の細い肌理細かな女學生を心に浮上らせて、「僕はよくも悪くも、あの時分に結婚しとけばよかつたのにと思ふことがありますよ」と、歎息するやうに再び繰返して、「實際七年の間にいろ／＼の碌でもない經驗を積んだんですからね。矢澤君なんかの知らん事も出来たけれど、その代りに垢がついてしまつた。初心で素直に人間の一生が送れたかも知れんのが、次第にこんな變則な頭になつちやつたんですもの。僕はもう成らうことなら平靜に日が送りたいんです。身體はいくら働かせたつて、いくら忙し仕事をしたつて構はないから、頭の中だけ平穩無事でゐたいんだけど、どうしてもそれが出来なくなつたんです。今日も一日机の前に坐つてたんだが、心がちつと坐つちやみないんです」

「だつて、今からでも遅いんぢやありませんよ」と、細君は結婚によつて、重吉を暗闇から救ひ出

さうと思つた。素行上の世間の不評判をも、鬱陶しくなる顔色をも、片日の老婢と二人きりの、見ても氣の毒げな淋しい生活をも、洗捨てて新しい人となるには、結婚するに限ると思はれた。度外れの喫煙さへ奥さんがあつて、側で氣をつけてゐたら止むことと思つてゐた。

「私、貴方の奥様になる方はお任せせだと思ひますよ。氣兼ね勞は入らないし、お國には、どつさり財産はあるしと、不斷よく云ふ事を繰返した。

「さうでもありません。若し僕に妹があつたら、僕のやうな男とは結婚させませんね」重吉は眞面目に正直にさう云つて、「七年前の僕ならどうか知らんが、今の僕は眞心で女房を可愛がる事が出来るか知らん。姉ががないの、生活に困らぬのと云つたつて、それよりも女に男の愛情が何より必要なんでせう」と、當然の事を深い意味がありさうに云つた。

「そりや、さうですとも。だけど、夫婦となれば自然に情愛が出来ますよ」と、細君も閉古したことを云つた。

で、その日も話の緒のつきかゝつた或女の話をして、二三日中に先方から返事が来る筈だと知らせた。「さうですか」と云つただけで、

（113）

重吉は別に深入りして頼みもせず、吉報を待設けるでもなかつた。

向うで承知したら、いよく結婚するんだらうかと、重吉は我れとわが心を疑つてゐたが、約束通り二三日立つと、矢澤から話したい事があるから、来て呉れといふ端書が来た。吉にしろ凶にしろ、先方の返事を聞くのは、多少の興味があつた。で、彼れはその夜傳で其處へ行つた。返事は二月も前に或男と契約が成立つてゐると云ふことだつた。しかもその男は矢澤の細君などの知人だつた。

「小野瀬さんに訊いて貰つたんですがね、外の人とは違つて、私達の知つてる人に極つたのならもう仕方がありませんわ。もつと早く気がつけばよかつたんだけど」と、細君は折角重吉が氣乗りがしかけると、かうなつて破れるのを残念がつた。

「だけど當人は君の方がいゝと云ふんだから、どうかならん事はないがね」と、矢澤は横から口を出した。

「ちや、文句はないさ」重吉は笑ひく「云つた。

「私、そんな事不賛成！」細君は手強くさう云

つて、最早その女について話すのを厭がつた。「しかし貴女も一月頃から、度々あの女を私に推薦して、私もやうくその方へ心が傾いてるんだからこのまゝ手を東ねて退きたくない氣がしますね。私が自分で身命を賭して掛つちやどうです」

「そんな無茶を云ふものぢやありませんよ」と、細君は一概に斥けて、小野瀬さんの奥様もその代りに一生懸命、足を搦粉木にしてもいゝのを捜して上げると云つてゐると云つた。

「だが、あれが駄目になるやうぢや、僕はいよいよ縁がないんです。貴女も御面倒でせうから、もう全然止しちやつてはどうです」

「いゝえ、私、止しませんよ」と、細君は斷言したが、纏て、主人に向つて、「あれを守屋さんに見せませうか」と囁いた。主人は「あゝ」と軽く答へた。で、細君は次の室から、小さい寫眞を袖に捲ふやうにして持つて、「小野瀬さんの遠縁の人ですつて。田舎の人なの。女學校を一番で卒業して、學問でも大變よく出来るんですつて。二十歳ださうですが、寫眞で見てもそりや初心なの」と、前置をしてから、寫眞を机の上に置いた。重吉はその前置で、見ぬ先から略々想像はついていた。

色気のない田舎びた娘の半身像はランプの光に照らされた。何時ものやうにいろんな批評が皆なの口から不遠慮に出た。細君の豫期してゐた通り、重吉は少しも乗出して來なかつた。「先方で望むのなら何時か東京へ遊びにでも來た時に、見合ひぐらゐしたつていゝ」と、どうせ無駄とは思ひながら、頭から斥けもしなかつた。穩かな結婚といふ事に一縷の望みを置いてゐたため、縁談と全く絶縁したくはなかつた。一つ破れて又一つと、移り行く間に、せめても

の慰めがあるやうな氣がした。

「ちや、來月お花見にでも來た次手に、三越か何處かで、他所ながら見ることにしませう」細君は多分不首尾に終りさうだから、正式の見合しては先方に氣の毒な思ひをさせるかも知れぬと氣遣つてゐた。

三

去年から定職を失つてゐる重吉には、日曜も祭日も只の日も、些しも區別はなかつた。晝と夜との束縛をも受けなかつた。それに今は時日を限られた仕事も持つてゐないので、日々を生かします／＼働いてゐた。新聞を見ても、騒々しい記事よりも音楽會や芝居や演藝のたよりに

目をつけて、自然に足を其處へ向けた。矢澤を訪ねた翌日も、正午過ぎ家を出て濱町河岸を歩いて、明治座の一幕見に入った。「長町女腹切」の刀屋の場が開いた所だつた。派手な元祿姿をした延若のお花が、店先に極り悪げに坐つて遊解言葉で何やら云つてゐる。近松の特色なのか、舞臺から受ける感じはあまりに淡過ぎて、どの役者も間が抜けてゐるやうに思はれた。重吉は目を心をも一途に芝居の方へ向けてはゐなかつた。十幾年も芝居を見続けたのが癖になつて、今でも主なる小屋へは廻り目毎に、殆んど漏れなく足を向けてゐれど、三幕四幕と續けて見る氣にはなれなかつた。煙草を吸ひながら、其處等に漂ふ芝居らしい匂ひを嗅いで退屈な時間を過してゐた。混合つた大入場などへ入つた時に鼻を敷ふ人いきれを悦しがつた昔を偲んだり、見物の拍手や褒め言葉を耳に留めたりした。その花道から、椎の木に飛礫を打つてゐた先代菊五郎の「いがみの権太」の姿が臚に思ひ出された。あれはもう十幾年も前のことであるが、あの時分にはどんな役者が並んでゐたらうか。鬼小島だの忠彌だの馬場三郎兵衛だのと、先代左團次の扮した酔ひどれ姿が影のやうに舞臺の上にならつた。「お堀に育ちし雁鴨を」と、語尾

を引延した臺詞が、今聞いてゐる元祿言葉よりもむしろ鮮かに耳に響いた。立ち見場は客が疎なもので、彼方此方と處を變へて見てゐたが、鐵棒に身を擦寄せてゐた洋服の男が振返つた機勢に重吉を見ると驚いたやうに聲を掛けした。それは六七年前に重吉が或新聞の劇評を擔當してゐた時分劇場の招待席で懇意になつた、箕水といふ雅號を持つて居た男だつた。

「妙な處で會つたね」

「時々は覗いて見るんだが、相變らず詰らないね」

二人は後の窓の下で蹲んで互ひにその後の消息など語合つた。舊劇通の箕水は口を極めてこの頃の芝居を罵つて、「此處等の立見の奴まで素人臭くなつちやつて、下らない所て手を打つてやがらあ」とまで云つた。

「しかし次第に芝居も綺麗になるね。僕は學生時分には食麵麩を持つて来て、大入場で一日暮してたものだが、いゝ悪いを云ふ餘餘はない、どれだつて面白かつた。それが劇評なんか二三年やつたお陰で、すつかり面白味を無くしちゃつたんだよ。どんな芝居だつてぼんやり見てりや、それ相應に興味はあるんだけど、批評の

癖がついたからいけないんだ。僕は劇通の小理窟が癢に觸つてならなかつたんだが、今は自分とその癖がついちゃつた。君なんか病膏育に入つてゐるんだから駄目だね。こんな綺麗な小屋でいゝ童物を着た役者が踊つてゐるんだから、面白くない筈はないさ。この檻にゐる見物で面白がらんのは君と僕とだけだぜ」

重吉はかう云つて、相手の氣焔を冷笑した。

箕水は「そりや、さうだが」と相槌を打ちながら、新聞を止めてから溜つてゐた日頃の不平をまだ洩らさうとした。それが芝居を観るよりも面白さうだつた。職人らしい男が、聲の高い箕水の方を睨みつけて、「靜かにしろ」と叱つた。

「悪く云ひながらも、君だつて意々見に来るんだから」と云つて、重吉は箕水を離れて、前の方へ身を寄せた。舞臺では源之助の「伯母」が白鞘の脇差を牛七に見せて、「この刀ゆゑに二代つづいて悲惨な最期、刃の相性見て貰うたれば、持人に三代祟ると聞いた」と愁はしげに語つてゐる。珍らしくもない趣向だが、刀の祟りといふことが、重吉の神經に鋭く觸れた。間の抜けた生温い舞臺にも生氣が煌いた。あの生白い半七か、面長な伯母か、誰れかが、三代目の最後の祟りに倒れねばならぬのだらう。生中祟りを

避けようとして、却つてその爲崇りを受け
る人間の運命の恐ろしき、人間の智慧の淺き
が、其處の舞臺に片影を見せてゐるやうに思は
れた。重吉は電氣で明るい小屋の中を見下しな
がら、恐ろしい聯想を遣うた。最早舞臺も舞臺
でなく、役者も役者でなく、彼れ一人の心の目
にいろ／＼の暗い影が徂徠した。

やがて、幕が終ると、重吉は箕水の側へ行つ
て、「歸らうか」と誘つたが、箕水が時計を出し
て見て、「まだ少し暇があるから、最后一幕見て行
かう」と答へた。「ぢや、また何處かの立見で會
はうね」と笑ひながら、別れを告げて一人戸外へ
出た。

まだ日の暮ればかりなので、直ぐ家へ歸る
にはあまり早過ぎた。再び濱町河岸を通つて
兩國橋の上で、寒いながらも柔かい春めいた
川風に吹かれながら、左右の灯影を見てゐた。
そして今宵一夜でも、快い酔ひ地になれる處は
ないだらうかと考へた。

「……時子様御出京相成り明日午後小野瀬
宅へお遊びにお出でなさる由なれば、あなた様
も何卒私方へお遊び下されたく願上候。
お話しはお目に掛けて申述べべく候」と云ふ
手紙が、重吉の許に着いた。そんなに早くと、

彼れは不審かりながら、正午前から矢澤を訪ね
た。

「どうしたんでせう。あれ程よく言つたの
に、親類中へも前觸れをして、お父さんがわざ
わざ見合ひに連れて來たんですつて」と細君は
稍當惑してゐるらしい。

「小野瀬さんの知らせ方が悪かつたんでせう」
「い、え、小野瀬さんはそんな事は云つてやら
なかつたんださうですよ。青山の伯母さんとか
が、當人を東京へ嫁けたがつてるさうですから、
その伯母さんが庇度勸めてやつたんでせう」と
細君は解釋を下して、「今日見に入らつしやい
ますか」と訊いた。

「そりや行きますさ、また行かなくちや悪いで
せう。見たからつて、遠慮はしませんからね、
いけなければ直ぐ止すだけだし」

「それはさうですよ、外の事とは違ひますも
の」細君はさう云つて、テールに身を屈めて、
寫眞を取り出して見詰めたが、「悪い容色ぢやな
い、田舎の初心なお嬢様だ」と、獨言のやう
に云つた。

最早見合ひに對する清新の感じは、微塵も重
吉の心に起らなくなつてゐた。十年前春雨の降
止んだ夜中頃、友人に誘はれて、初めて或遊廓

へ入つて、派手な姿の姫を含んだ女を側で見た
時には、流石に心の鼓動を感じたが、三十歳を
過ぎた今は初々しい素直な心は更になかつた。
それに長い放逸の生涯は婦女子に對する敬慕
の念を全く失はさせてしまつた。どんな淑女
貴婦人の前に出たつて、心の襟を正す氣にはな
れなかつた。

「僕ももう一度處女のやうな心になつて見た
い」と彼は歎息した。

これまでの見合ひの語などしながら、午飯の
御馳走になつてゐると、小野瀬の家から使が來
た。細君は一寸自分だけで様子を見て來ると云
つて箸を置くと、そのまゝ出て行つた。直ぐ近
所だが、案内手取つた。そして歸つて來る
と、息をはずませながら、コートを着たまゝ日
を据ゑて重吉を見て、「ごく初心の」と、力を
込めて云つて、「氣を付けてよくごらんさい、
そりや初心の。寫眞の通りなのですよ」

「さうですか」重吉は冷淡に云つた。
「お父さんが可愛がつてゐるんですわね。私は
小さい時分に死なれたから、あんなにされるの
を見ると羨ましい」と、細君は自分の結婚の當
時の手頼らない氣がしたことを追想した。

「ぢや行かうね。髻を剃つて來ればよかつたん

だが一と、笑ひながら云つて、重吉は細君と一緒に出た。「ごく初心い」を細君は違々繰返した。

彼方へ着くと、重吉は先づ、よく肥つた小野瀬夫人と玄關で初対面の挨拶をしてから、座敷へ案内された。其處には正面に、目の窪んだ頬のこけた、一見して直ぐ田舎の實直な商人と氣付かれる五十恰好の父と、ごく初心で節氣のない、肩上げのある不鬚着のまゝの娘とが坐つてゐた。勝氣な顔付をした老人の伯母が少し離れて控へてゐた。重吉は一目見渡して、何のために自分が此處へ引出されて来たかといふ感じをした。あまり口も利かなかつた。拭掃除も行届かないやうな薄暗い座敷で、その座には色も香もなかつた。矢澤の細君のみが光つてゐた。座の白けぬやうにといろ／＼の話を持出したが、その舉動や顔形や話振りが不思議なほど立派に見えた。如何にも灰汁抜けがしてゐると思はれた。

やがて、暇を告げて外へ出ると、「貴方どう思ひました？」と、細君は直ぐ訊いた。「成程初心いですね」重吉は眞顔で云つて、その上何とも云はなかつた。細君にはかさねがさね面倒をかけた。どうか早く縁談の纏るやうに

とはその日顔に讀まれた。先方にしても、わざわざ田舎から親子連れで出て来たのに、それを膠もなく斷るのは如何にも氣の毒な氣がした。

で、彼れは一度ぐらゐ見たのでは返事も出来ぬから若しも東京に滞在してゐるやうなら、その中今一二度會つて見よう、簡単に答へて、細君に別れた。初手から待設けてはゐなかつたが、その場を見た後は何となく心淋しかつた。で、近所の知人を訪ねて、夜になつて、家へ歸つて、暫らく自分の境涯を考へてゐたが、やがて、故郷へ宛てて手紙を認めた。：若しも結婚するやうな事があつたら、自分と故郷の家との關係を定めて貰つて、自分だけ獨立して東京で氣樂な一家を構へたい：と、父に宛てて初めて長い手紙を書いた。

四

翌朝、風がざわ／＼吹いてゐた。重吉は例のやうに冷い水で身體を洗つて、新聞を讀みながら、牛乳と麵麴で軽い朝食を済ますと襦袢を着たまゝ、窓際の小机に向つた。そして側にあつた五六冊の支那の詩集を一つ取上げた。無差別に目に觸れるものを讀んだ。歐洲近代の大家の小説や戯作を讀んで人の世の慘ましい姿をあ

りありと見せつけられるに倦んでゐた彼れは、少年時代に好きだつた詩集や本朝處初新誌などを行李の底から引出して見る事があつた。十餘年の都會暮しで見飽いてゐる汚らしい世間から離れて、樵夫の唄を聞きながら漢籍の論議をしてゐた山中の私塾を追想してそれを読んだ。臆げに記憶に残つてゐる詩に出會した時は殊に悅しい。夢中で吟じてゐた美しい詩句に、今は新しい感じも添つた。青春の過ぎ易く歡樂の醒め易きを數ずるの聲は其處にも此處にも聞かれた。「咸陽市中數黃犬、何如月下傾金罍、君不見官朝羊公一片石、龜頭剝落生莓莓……」二十年前漢學教師に何氣なく聞いてゐたのが、今になつてその詩を生かす力となつた。「咸陽市中數黃犬」重吉はそれを口の中で繰返して、榮華の果敢たさを唄つた聲に耳を傾けてゐた。すると玄關で開馴れぬ錆びた聲がして、老婢は「志賀さん」だと取次いだ。

座敷へ通すと、それは時子の父であつた。懇懇に挨拶して、見ぬ風で座敷の様子など見ながら、俗な商人などとは違つた讀書作文に耽る人の風雅な樂みと、それに伴ふ苦勞とを、かうもあらうかと推察して話した。重吉は何故の訪問かと訝りながら、言葉少なに答へた。

「私達の生活は傍で見ているやうに幸福ぢやないんです」と、相手の想像を簡単に打消した。彼れはこれまで度々、仲人や女の父親の前で自分にケチをつけたことがあつて、その爲に嫉はれもしたが、却つて父親に買はれたこともあつた。正直で男らしいとさへ云はれた。

「あれは内氣ですから、賑かな處へ出るのは、餘り好みませんので、一日家にぢつとしてゐても何とも思ひません」と、女の父は云つた。そして、十分ばかりして、勉強の邪魔をして如何にも濟まなかつたと云つた風をして暇を告げた。重吉は直ぐに襖を閉めて座に戻つた。そして、「志賀氏來訪。小生の方より未だ諾否の返事を致さざるに直接の來訪は稍々壓迫の感あり。目下小生多忙に付數日を経ざれば、再度面會をなす餘暇無之候」と、矢澤へ宛てて書きながら、幾度會つたつて仕方がないと思つた。

二三日して、父と母とから、返事が來た。父のには結婚に同意して、當座の費用は通知次第直ぐにも送る。後の事は追々に極めるとあつただけだが、母のには頼むやうに書いてあつた。何處の母でも思つてゐさうな事を書いて、母は歳も取り身體も弱つてゐれば、何時あの世の人

となるも知れぬが、生きてゐる中にお前の身の極るのを見ねば、安心して死なれないと、不斷云つてゐる事を更に強く訴へて、我が子の結婚する氣になつたのを非常に喜んでゐる。重吉は粗雑な、いら／＼した母親に對して些しも愛着心はなかつたが、時々はそれを喜ばせたい氣がしななかつた。一年と世の人を信ぜず、人と人の關係の手頼りないのを見て來た彼れも、子を思ふ母の心は疑ふことが出来なかつた。

彼れは結婚の利益をも考へた。世間の信用や、親類の信用や、金の融通にも獨身よりも便利なることを考へた。老いたる獨身者の身窄らしさも思つた。だが、それよりも、心の底では柔かな愛情が欲しかつた。浮いた色慾でない穩かな情愛の中に、疲れた荒れた心を休ませたかつた。結婚さへすれば急に世の中が幸福にならうとは、夢更思はないけれど、その外に心を休める術はなかつた。

さう思ひながら、彼れはふと自分の量見も次第に老いて來たと氣付いて、云ひやうのない厭な氣がした。心が結婚に傾いてゐながらも、あの女とは

極めてゐなかつた。で、何の便りもしないで五日過ぎてから、矢澤を訪ねた。上ると直ぐにその話が出た。

「時子さんだけ、伯母さんの家に泊つていらつしやるんですつて、何時お會ひになりますか？」細君は時子の父が初対面ですつかり重吉に感服して急に乘氣になつてゐることをも話して、「年齢よりもお若いし、確かりした方だつてそりや褒めてゐるんですつて――」

「どうもさうらしい。僕はよく他所の親爺に惚れられる」と、重吉は笑ひながら、「だけどあの親爺は少し輕率らしいですね、今に後悔の種を描くんだらう。僕の事はよく調べたんでせうか」

「それは調べなさつたでせう。いくら輕率でも大事な娘を嫁にやるとなつたら、いゝ加減で濟して置けませんからね」

それ程大事な娘を自分のやうな心持の男に嫁さうとするのを、重吉は可笑しく思ひながら、

「ぢや今日でも會ひませうか。早くどちらかに極めなくちゃ、先方も困るでせうから」

「さう！ では電話を小野瀬さんに掛けて見ませう」

細君はコートを着ながら、「私もどつさり仕事が出来たことに云つて、自動電話を掛けに行つた。

三時頃連立つて来ると極つてから、矢澤や重吉は戯談を云ひながら、細君の手助けをして、座敷を片付けたり庭の掃除をしたりした。この座敷では去年の夏も見合ひがあつたのである。重吉はそれを思出しながら月日の早く立つのを今更のやうに感じた。

「去年お壽司を貴女が拵へたんだが、今日は何を御馳走するんです？」

「今日は何もないよ」と、細君は下女を坂下の菓子屋へ行かせてから、「あれで服装やお扮飾が東京風になつたら、見違へるやうになるんですよ」と云つた。

「矢澤君は初めてだから、よく氣をつけて見たまへ、第三者の公平な目で批判して呉れたまへ。」

細君の味方にはならないで」と、重吉が云ふと、「ウ、ン」と矢澤は薄笑ひをして首肯した。

戸外を通る足音に二三度騙された後三人連れが玄關先に現はれた。時子は一番後から、大柄な伯母の背に隠れるやうに入つて来た。この前よりも身装を變へて、髪も綺麗に結つてゐる。俯首してゐて目鼻立はよく分らなかつた

が、稍々大人びて見えた。伯母は姪を東京へ嫁けたさきにいる／＼と重吉の歡心を買ふやうに努めた。

「志賀が先日は御無禮いたしましたさうで」と、詫びるやうに云つて、「當人も素手で歸つては、親類中に土産話がないと申しましてお伺ひしたんで御座いますよ。さあ、歸つて来ると御飯も食べないで貴方の話で持切りで御座いますして、かう襦袢を着て机に向いていらしたのが、あれは乾度お日醒になると直ぐに、顔もお洗ひにならないで御勉強なさるに違ひない。お暇すると左様ならと仰つたさきリビツシャリ、障子を締めて奥にお入りになつた。あゝなくつちやならないつて申しますんで御座いますよ。それは一國者ですから」と手眞似つきで話した。

「それ程の勉強家でもないんですよ」と、重吉は擦つたいやうに感じた。

細君はじろ／＼と重吉と時子の顔を見ながら、話を賑はした。

客の歸つた後で矢澤は、細君に同意した様な批評をして、眞心から結婚を勧めた。細君も度々の奔走に疲れただらうが、重吉も見合ひに飽いた。

「ぢやあれで往生しますか」と、つい口を交した。女振りがよくても、發明らしくても、いざ結婚となると何時も後退りしてゐたものが、六年の操をふとした機會で破らうとした。「鯛で精進落ち」とはこんな事だらうとも思はれた。

「これでお極めなさるので、では直ぐ小野瀬さんへお知らせして来ますよ」と細君は悦しうに云つて、やう／＼安心してゐるやうだつた。七年の骨折は水の泡とはならなかつた。

「しかし、これがおとくさんだつたら、奥さんにお禮の云ひ榮がしますがね」と、重吉は戯談らしく云つた。おとくさんとは先約があると云つて斷つたあの女であつた。

「まあこれから私も忙しい」と、細君はいよ／＼祝言の濟むまでの仲人當然の務めを數へた。それよりも重吉の家の準備やら衣服やら勝手道具の買入れまで指圖して、面倒を見なければならぬ、母や姉の役目までも一人で引受けてしななければならぬ。それが武家氣質の手堅い祖父の躰を受けて育つた細君は、六ヶ敷い仕來りに背くのが厭だつた。自分が中に立つた上は世間體の恥かしくないほどの儀式をも踏ませたかつ

た。重吉はとうにでもと細君に何もかも任せて歸つたが、結婚するのは自分ぢやない、他所の男のやうにも思はれた。

五

「おれも近々結婚するんだぜ、家も引越すんだ」と、翌朝老婢に知らせると、

「そりやまあ」と老婢は意外な顔をして、やがて「お目出度いことだ」と獨言のやうに云つた。

儀式や行儀作法は一切踏みつけて来た野育ちの重吉は、矢澤夫人の手引で窮屈な思ひをさゝれさうなのを、今から煩はしく覺えながら、何のためにこんな事をする氣になつたんだらうかと昨日のうつかりした返事を悔いもした。新聞を持つて温かい縁側に腰掛けて、隣の屋根に遮られた狭い空を仰いで、淡い白雲の靜かに流れてゐるのを、怠り氣持で見てゐたが、ふと目を下へ移すと、開かれた新聞の寫眞版が、自ら目に映つた。一つは見覚えのある顔だつた。取上げて讀むと、或女學校の優等卒業生の顔を並べてゐるので、木村とくもその一人だつた。

「些つとした連で、この人が自分のベターハーフになる所だつた」と、重吉は口惜しくもあり可笑しくもあつた。目隠しして偶然相觸れた男と

女とが契を結ぶやうな見合結婚をして、それで一生を樂しく送られるのを不思議に思ひもした。が、一日二日立つと、「どうだつていゝさ」と彼れは意の如くならぬ場合に、何時でも自分に向つて放つ言葉を放つて、最早結婚前といふ特別の考へも起さなかつた。矢澤夫人の見立で牛込の新宅へ移つてからも、その日くを不規律に送つた。先方と打合せて、結婚や祝言の目取が極つて羽織袴の禮服をも誂へ、兄弟やら二三の知人やらにも知らせた。

「それは何よりお目出度い、女房ほど調法なものはありませんよ、商賣人とは違つて、二人の間の利害關係が一致しますからね。待合へ行きたかつたり、遠出したくなつたりしても、女房を連れて行きや玉も祝儀も入りやしないよ、兜町の店で懇意になつた男は笑ひながら云つた。「どうせ道樂の味を覺えた者は、結婚したつて時々は遊ばないで居れるものぢやないが、しかし外へ宿ることはお止しなさい。それから、女房はよくも悪くも初めので一生辛抱するんですね。私なんか今の女房が三度目のだが、何かにつけて最初のが思出されて仕方ない。決して幾度も取換へるべきものぢやありませんよ」と忠告もした。

「それがいゝでせう。君もそれで生活の意味が新に發見されるかも知れない」と、或先輩が云つた。

「僕もこれまでの癖を止めて、新に生活の意味を發見しますかね」重吉はその先輩の聲音を鸚鵡返しに矢澤夫人に向つて話した。

「此方は氣樂さうに云つてられるけれど、彼方ぢや今時分大騒ぎをしてるでせう。親類へお別れに廻つたり、親兄弟の別れの盃があつたり、それにお支度が大變でせうからね。大抵は東京で拵へなさんださうですが、着物は何處かしら、同じお金をお掛けなさるんなら、私大彦へお訊へなかつた方がいゝと思ふんですがね。田舎の方はどう云ふのか、よく松屋へ行くさうですよ」

細君は呉服屋行きの相談相手になつて、自分の物馴れた目で反物の見立をしたかつた。小野瀬さんの奥さんは些とも構はん方らしいからと商榷さうに云つた。

「しかし僕の家に今度は財産が出来ますね。これまでは質草がなくなつて一時の融通も困つたけれど」

重吉はさう云つて、細君が小野瀬から聞いて來ては知らせる花嫁の支度を想像してゐた。

櫻の散らぬ間にと云つてゐたのが、温かい今年は春が早く、江戸川の花は早半ば散りかゝつた。曆を繰ると仲人の極めた四月七日は、もう二三日となつた。老婢は矢澤夫人の指圖で、障子を張り替へたり汚れ物をほごしたり、のろい手足を動かして庭の掃除などしてゐた。箆筒や長持や大きな鏡臺やいろ／＼のものが持込まれて、それを中の間に程よく並べて、「これがお奥様のお部屋だ、かうすると家に極りがついて来る」と、矢澤夫人は悦しきうに云つたが、重吉もそんな新しい道具の置かれたのを見ると、悪い氣持はしなかつた。自分の物が舊く見窄らしく見え出した。「成程結婚は有難いものです、駄つててこんなものを持つて来て呉れるんだから」

「さうですとも。これから家の中もお綺麗になりますよ」

「奥様はお幾つでせう」と、老婢は雑巾を持つたまゝ、小聲で矢澤夫人に訊いた。

「お二十歳。そりやい、奥様！」

「お二十歳? ……今の方なら二十歳でお早過ぎはしませんかね」

「早過ぎるものかね、今の學校を出た人は昔の

女とは違ふからね」

細君は茶の間や臺所を隅々まで改めて、足らない世帯道具を數へて、今夜でも買つて來なぐちやと重吉を促した。

重吉はその喚、細君に隨いて神樂坂の方へ行つた。「これが奥様のお茶碗」「これが奥様のお箸」「奥様が持つていらつしやるかも知れんけれど」と細君は買ひ物をしながら、店先で頻りに奥様呼はりをした。重吉にはそれが異様に響いた。人通りの多い坂を下りて、薄暗い店で祝言用の土器を買つて、元の道へ歸りながら、重吉はふと、

「縁といふものは不思議なものです、思ふに添はず、思はぬに添ふと、よく云つたものだ」と云つて、心淋しい遺瀧ない思ひが湧上つた。

が、誰れに切ない思ひを寄せてゐるのでもなかつた。以前は、自分の身も心も投込んで愛しもし愛されもする女が、何處かに潜んでゐるさうに思はれてならなかつたが、今はそんな幻は消えてゐた。それでゐながら、尙思ふに添はずといふ感じは、心の底に残つて居た。それがまた興もない結婚に多少の味ひを添へるやうだつた。

一世の中は皆なさうしたものですよ」と、細君は

意外にも染々した調子で同意した。

「しかし、どんな女とでも二年三年と一緒になる中にや、自然に人情が出来るものでせうな」

「そりやさうですとも、だから奥様は可愛がつてお上げなさいまし、妻となれば夫一人が手頼りなんですから」

「え、」

重吉はそんな話に深入りしたくなくなつて、途中で細君に別れて一人電車の方へ歩んで下町へ出た。夜更けまで賑かた町から町へと遊んだ。でも、流石に夜宿りはしなかつた。

七日のその日は、空は晴れて風も吹かなかつた。禮服を着けたいろ／＼の男が處狭きまでに集つた。重吉は矢澤夫人の洋意の「お頭つき」で午餐を食べて、風呂に入つて來ると、祝言の時刻は最早迫つてゐた。柔かい新調の衣服を着けて、側にあつた花嫁の鏡臺に自分の姿を映しながら、「かうなると、僕も立派に見えるね。成程馬子にも衣裳だ」と云つて笑つた。綿服のみを着馴れてゐた彼れも、服た氣持はしなかつたが、座中の人の想像してゐるやうな花婿といふ氣持は少しも起らなかつた。そしてせめては花嫁が今日一日だけでも美しく嬢婿であつて呉れればと頼み甲斐ない事を頼んだ。

豫定の時刻の遅れて、花嫁の俵の着いたのは日暮前だった。中なかの間で雑談してゐた人々は急に殊勝しじやうらしく澄あした。締切しぢぎつた障子の外そとに、二三人の軽い足音と、サラ／＼した衣服の音がした。矢澤夫人は後戻りして、縁側えんがはの障子を開けて、鏡臺かがみだいを持出して縁側で花嫁のお扮飾を直させた。

やがて、矢澤と重吉とが呼ばれて座敷へ行くと、花嫁は三枚襲かさねを重さうに着て、白粉おしろいの濃い額かぶたを首垂くびたれて取かしさうに坐つてゐた。仲人に馴れた小野瀬夫人は、間に立つて、身輕みかろに儀式を運んだ。重吉は花嫁と差向つて坐りながら、心こころの中に苦笑を禁じ得なかつた。三々九度の盃さかずきを手てに觸ふれながらも、自分の心では二世三世契せきを結ぶ氣は更になかつた。相手の艶うつくしくない唇くちびるに觸れた盃さかずきを、自分の唇くちびるに觸れるのが厭いやらしくて、そつと小指こゆびの先さきで唇くちびるを拭ぬつた。惚ほれた女おんなに對してさへ痘痕あざあとを齧かに見ることの出来ぬ彼かれれは、花嫁を最良目さいりやうめで見ることが出来なかつた。

「この方が神々しくついでいゝですな」と、座に連つた花嫁の父は、次の間へ來てから得心う得心したやうに云つた。
重吉は縁側で矢澤夫人に耳打ちして、「もつ

と顔かほを上げるやうに貴方あなたから云つて聞かせて下さい。俯首うつむから尚額やうがくが出るんだ。白粉おしろいもまだ濃過ぎる」と云つた。

やがて十數臺の俵は、兩側りやうがはに立つた近所の人に見送られて、神樂坂の料理屋へ入つた。二階の廣間には、花嫁の親類が待つてゐた。下座敷では幽かに三味線の音がしてゐた。新夫婦は正面まへに並んで坐らせられた。重吉は不審ふせんよりもつとめて快活くわいかつに話し、好まぬ酒をも強ひてよく飲んだ。花嫁の母の人のよきさうな柔和な顔や、それに似た姉の灰汁あじ揚げのした顔を見比べながら、花嫁の顔立の母に似ずして、間違つて父親ちちに生寫せいしやうなのを思ひなどしてゐた。一通り酒が廻つてから、先輩の祝辭いしご演説えんせつがあつて、最後に矢澤小野瀬兩夫人の「スキートホーム」の合唱があつた。田舎客はそれを珍らしがつて、この會あひだを嚴げんかに感じた。

矢澤夫婦が附添つて、新夫婦は家へ歸つた。重吉は禮服らいふくを脱ぬぎながら、「私もやう／＼人並ひとならの事をやつて來た」と云つた。
「これで私も肩かたが軽かろくなつたやうですよと、矢澤の細君ほこは息いきを吐ついて、「でもよく私の云ふ通りになすつた」と満足まんぞくした。
そして花嫁が一寸座を外した間に、「あの姉さ

んは灰汁あじ揚げがして、あの方が綺麗きれいですわねと、重吉が云ふと、
「お止としなさい、そんなこと」と、細君は手を振つて小聲こゑで「結婚けっこん當時たうじの事はよく跡々あとあとでも覚えてるのですから」
二人の歸つた後で花婿は初めて花嫁に向つて口を利いた。「お前は腹はらが空すかかないかい。何も食たべないで」
「えゝ空すかきませんわ」答こたへは案外あんがいはつきりしてゐた。
「人間にんげん一生いしょう饑うけさへなければいゝんだ」重吉は目が冴さえて容易やすに眠付ねいかれさうではないので煙草たばこを吸すひながら、「お前は何故なぜおれの所へ來る氣きになつたのだい」と訊きいた。
「父ちちがさう申まをしたから」
「只ただそれだけでかい。父ちちがさう云つたから、直ぐ承知しやうちしたのかい」
「いゝえ。私もいろ／＼考かんがへました。お話はなしの極きよくつてからは、夜も碌々ろくろく眠ねらないで考かんがへました。そして此方こちらへまゐるのは私わたしのために幸福きふくだと考かんがへました」
「それは分わからないね。幸福きふくだかどうだか」重吉はそれ以上あまり立入たていりつた話はなしはしないで普通ふつと花嫁の心こころに浮うんでゐるさうな幸福きふくの内容ないようを想像さうぞうし

ながら、淋しい夜を送つた。
二人は互ひに眠苦しかつたが、その苦しさの意味は違つてゐた。

六

次の日は小氣味悪く温かくて、風は盛んに埃を吹付けた。時子は明け方僅かに目暮んだばかりで、老婢の雨戸を繰開ける音を聞くと、慌てて起上つて臺所でまご／＼してゐた。重吉も起きて、所在なさうに頬杖ついて、淋しい外の春を眺めてゐた。昨日磨立てた縁側は早くも白くなつてゐる。庭の土も乾き切つてゐる。紅い椿が三輪花を着け、葉隠れに名も知らぬ白い小さい花が咲いてゐるが、どれも色が褪せて見え

た。
「厭な天氣だねえ」と、獨言のやうに云ふと、
「困るわねえ」と、時子が答へた。

「寫眞を寫さなくちやならんが」と云ふと、「いやいや」と時子は物におびえたやうに胸に手を當て目を丸くして身震ひした。その黒い目に艶氣のないのが、初めて重吉の目についた。と、
「おれも寫眞なんか寫したかあないよ」と重吉の言葉は自ら尖つた。寄添うた二人の姿を永へに紙の上に印したくはなかつた。そして、花

嫁を側に坐らせて、「お前は今日からそんな袖の長いべろ／＼した衣服は脱いで、木綿着物でシャン／＼働くんだよ。遊んでるんで結婚したんぢやないから」
「私、遊ぶつもりはありませんわ。ですけど、木綿物は持つてゐませんから」
「何故？」

「だって、木綿物なんか持つてつちやいけないつて、小野瀬さんが仰つたんですもの」
時子は小野瀬さんの奥様が父や伯母に云つたことをボツリ／＼無邪氣に話した。重吉は私立大學の教授である。洋行をしたこともある。交際

際は廣くて名のある人々が絶えず出入するのだから不斷でも木綿物など身に着けてゐてはいけな

いと、堅く云渡したさうである。そして重吉の方から非常に望んでゐるのだから、是非承諾して呉れと度々電報まで打つて勧めたださうだ。

「驚いたねえ」重吉はそれを世に云ふ仲人口かと思ひながら、「皆な虚言だぜ。教授ではないし、洋行なんかした覚えはないよ。第一お前を望んで結婚を申込んだんぢやない。一寸した拍子でこんな破目になつただけだ。おれも、女

でも何でも生命懸けて熱望するやうなものがある

れば、仕合せだつたが、三十年間そんなものはなかつた」と云ひながら、今まで怠つた心を引立てるやうに急に感じが湧いた。そして「お前の親爺に手紙をやつて事實を知らせてやらう」と眞面目で云つた。

「そんな事知らせなかつたつていゝわ」と、時子は何とも感ぜぬやうだつた。「もうかう極つたんだからどうだつていゝぢやありませんか」「しかし事實は明かにしとかなくちやならん。兎に角一度親爺に云つてやらう」

重吉は何か事件の出来る事を樂むやうに机に向つて巻紙を擴げて、無遠慮に底を打明けて書出した。時子は襖に片手を掛けて、坐つたまゝ春延びして、氣遣はしさに、
「父は氣が小さいから心配いたしますわ」
「それも止むを得ないさ。今の間ならどうにもなるんだから。お前のためにもその方がいゝんだぜ」

「何故？ どうなるつてどう？」
「おれの家が嫌だつたら、何時でも、さつさと田舎へ歸つてしまふさ」と、重吉は笑ひながら、小生の方では少しも苦情を申さず、候「だと手紙の文句を讀んで、封筒に明かに志賀儀作様と書いて、老婢に渡した。

冗談かと思つた甲斐もなかつたので、時子は
おどろくして、夫の心を解するに苦んだ。

「私、貴方の妻ぢやないんでせうか」

「まださうでもないね」

「あら……だつて世間ぢやさう云つて居ります
もの」

正午頃から、矢澤だの、田舎から上京した
重吉の弟だのと、四五人の客が来て時子は忙
しかつた。その翌日は二人連で、式の着物を着
て、埃に目も口も開けられぬ練兵場を横切つ
て、伯母の家へ行つて、歸り途に仲人の家へも
寄つて来た。時子は結婚前からの氣苦勞で身體
が疲れ切つてゐた。が、夜は快い眠に就けな
かつた。多人數の賑やかな家に育つた身には住馴
れぬ家の静かな夜が淋しかつた。一寸目蕩んで
も、苦しい夢を見た。まだ親みの出来ぬ夫は
眠付くと苦しさうな息を吐いたり、聞取れぬや
うに讒言を云つたりしてゐて、それが凄くてな
らなかつた。で、夜具の中に小さくなつて、夜
の早く明けるのを待つてゐることもあつた。そ
して書間眠くて堪らなくなると、汚い下女部屋
へ入つて、障子に松張棒をかつて、古椅子に凭
れて、假寝をすることもあつた。重吉は妻の姿
の見えなくなつても、別に氣に掛けもしないで、

自分一人の假寝もつゞけてゐた。

間もなく故郷の弟からと時子の父からの手
紙が前後して着いた。二人も子のある弟は、

兄の新家庭を案じたのか、「女房は兎角面倒な
ものなれば、あまり手荒くなさらぬやう」とか、

「獨身時分とは違ふものにて候」とか、穩かな
忠告めいた事を書いてゐる。

「……小野瀬さまの申されし事も、この良縁を

纏めんためと存ぜられ候へば、當方にては決して
悪くは存じ申さず候。……不行届の點は

重々有之候はんが、斟酌なく御指導被下度願
上候。……」時子の父の手紙はあまりに張合ひ

がなかつた。重吉は當での外れたやうな思ひを
してゐたが、ふと襖を開けると、時子は机の上で

袖屏風をして、幾つもの手紙を讀んでゐた。

「家から手紙が来たのか」

「はい」時子は讀掛けの手紙を抄上げるやうに
して「御覽遊ばせ」とそのまゝ重吉の側へ持つて

来た。

父の手紙母の手紙伯母の手紙、どれも皆長か
つた。讀まぬ前から察せられたやうな月並な事

が書いてあつたが、それでも讀んで行く中、かう
まで生みの子は可愛いものかと重吉は不思議な

くらゐに思つた。

「母はあれやこれやと心に掛けて、四五日は内
の事も手につかず候。お前も年も行かず、人

中へは出た事もないから、さぞつらい思ひもす
るだらうと案ぜられ候が、それを辛抱するの

が女の道。矢澤様の奥様にもよくお聞申して、
人に後指を差されぬやうに氣をつけらるべく、

母は明け暮れ祈り居候。風を引かぬやうに、
生水など矢鱈に飲まぬやうに……」

一母親はこれでいゝが、お前は父親にまで甘
やかされただね。あんまり大事にされ過ぎて

ると、重吉は父親の手紙を走讀みしながら云
つて、更に外のを取上げると、それは彼れの母か

ら時子に送つたのだつた。「……重吉は中々機
嫌の取りにくく男にて候へど、何卒御辛抱なし

被下度……」一寸見ただけで下へ置いて、

「お前は、親命の手から、おれの手へ渡された
ばかりだから、まだ何にも知るまいけれど、夫

の選擇を誤つたならば、一生取返しのつかん
ことが出来るぜ」

「私だつてその位のことには知つてゐますわ。
娘さんが離縁されてつらい思ひをしたのをよく

知つてゐますもの」

「あの大人しさうな姉さんは再婚したのかい」
重吉は振返つて、心にある姉の顔と見比べなが

ら、「お前も夜中に時々姉さんくつて、寢言を云ふぞ。餘程姉さんが戀しいんだね。お父さんとも、お母さんとも云つたことはないが」

「あら、私寢言を云つて？」時子は極り悪がつて、「私、姉さんなんか思つてやしませんわ。私とは丸で氣性が違ふんですから」

何故不斷睦じく話すこともなかつた姉さんを夢に見るんだらうと、時子は自ら疑つた。そして、重吉の執念き間に應じて、姉の麗縁前後の話をした。恩人の子息の切なる望みを斷り切れなくて、父が無理に嫁がしたのだが、夫は腦に異状があるのか人並の働きが出来なかつた。その癖女房を側から離さぬやうにして、ニヤ／＼薄氣味悪く笑つてばかりゐた。で、姉は終ひには病付きさうになつて逃げて歸つた。

「何故歸つて来た？」何故辛抱しなかつた？と、姉さんは毎日々々お母さんに責められてばかりゐたんですわ。ですから、今度私が彼方を出て来ます時にも、父はどんな事があつても、二度ともう家の岡を跨がせないつて、それは幾度もく／＼申しましたんですわ」

時子はさう云ひながら、姉が泣顔で鬱いであつた事、人に見られるのを恥かしがつて當分外へへは出なかつた事を思出した。

「だけど、姉さんもお前も親爺の命令通りに結婚したんだから、悪ければ責任は親爺にあるんだ。びく／＼しなくつたつていいよ」

「さうは行きませせんわ」折々こんな話はしたけれども、重吉の口から懐かしい甘い言葉は洩れなかつた。散歩にも連れて行かうとは云はなかつた。これまでは父の許しがないので、伯母の家に遊びに来てゐる時でも、芝居へも寄席へも一度も足踏みが出来なかつたが、これからは自由に賑かな處へ行かれる事と時子は思つてゐたのに、連れて行つて呉れさうでなかつた。

「私、櫻の花の散るところが見たい」と、謎を掛けるやうに、獨言のやうに云つた。「ぢや、江戸川へ行けば見られるぢやないか。一人で何時でも行つといでなさい」と、重吉は事もなげに云つた。

「江戸川ぢや話らないわ。私、夕暮に上野の花の散るのが見たいわ」

「櫻は何處だつて同じ事だよ」

「あら、同じぢやありませんわ。私、咲いた櫻よりや、夕暮にヒラ／＼散るのを見たくつてよ」時子は散る花を見て泣いて見たいやうな氣持

になつた。で、夕餐が済むと一人狭い庭に立つて、リボンを風に飄られながら、小聲でローレライを唄つてゐた。すると小夫が木戸を濡つて、鼻を地べたにつけて、周囲を歩き出した。「白來い／＼」時子は小犬を側へ引寄せて戯弄つた。

そしてその夜は、母や友達への手紙を書いたり、久しく打ちやつてゐた修葺日記を出して、思つた事を書いたりなどした。

七

結婚後一週間はかりは、毎日一人や二人の客があつた。花嫁を見に来る友達もあつた。一年も顔を見せなかつた古馴染が、一守屋の女房はどんな顔をしてるか見てやらう」と云はぬ許りの風で訪ねて来た。青山の伯母は氣遣はしさうに様子を見に来て、襖所までも覗いて行つた。矢澤夫婦は散歩の序などに屢々立寄つて、快活に世間話をした。男同士で六ヶ敷い話をしてゐる間に、細君は家の様子を見ながら時子に向つて、氣の付いた事を流石なく言つて聞かせた。時子はその通りにしなくてはならぬものと、一々心に留めて、自分の思つてゐることをも打明けた。袖の長い衣服の柄の田舎臭い事も、

細君の目についた。「奥様は踊をお稽古なすつたんでせう」と、時子の身體のこなしを見て、どうもさららしいと云つたりした。

重吉は来る客に對して、餘り新婚の話をするを好まなかつた。仕事に手も着けず、詩集など手にしながら、よく假鞍をしてゐたが、一週間も立つと、眠足つて疲れも去つたやうなので、ふと思立つて、夕餐を済して外へ出た。春雨が細やかに降つてゐた。傘を擔げて、軒燈の淡く光つてゐる道端を身輕に歩いた。久振りて廣々した空気に觸れたやうで、左右の店や歩いてゐる男女の姿も懐かしく見えた。江戸川まで出ると、そのまゝ引返したくなくて當てもなく電車に乗つた。すると急に明るく人の顔が目についた。乗合した四五人の若い女の目鼻が鮮かに注意を惹いた。結婚前よりも却つて強く心に映つた。「世間には若い女が多い」と、彼れはそれにとどれ程の意味があるともなく思つた。

電車は本郷本所行だつた。廣小路で下りて、角のピアホールへ入つて、温かい珈琲を飲みながら、雨に包まれて、どこか深沈な外の騒ぎをみて心をそゝられてゐた。幸福を求むるの情が留度なく起つた。日々に月々に物足らない思ひを忘れて、隨喜の涙にむせびたかつた。だが、

何處へ行つたら、どうしたら、と志す當てもなかつた。

で、彼れは其處を出て、その界限をのろ／＼歩いてゐた。雨はやゝ強くなつて、傘の半は衣服の袖に滴つた。電車通りを外れて横道へ入ると、河内屋といふ軒燈が向うに見えた。知つてゐる家だつたが、別に注意しないで、素通りしかけたが、ふと、腕手の木戸を開けて立つてゐた黒い影が、二三歩出て来て聲を掛けた。みるとそれは頬骨の尖つた、醜い顔の女中だつた。

「二言三言立話をしてから、重吉は表の格子戸を開けて、直ぐに二階へ上つた。去年の二月の或夜、この座敷で新内の流しを呼んで、拙い明烏を一段聞かされて以來、此處へ来たことはなかつた。「もうお前には會はないよ」と云つて別れた小松といふ女は、今はどうしてゐるだらう？」

「どうなすつたらうつて、此間もお婆さんとお噂してたの」と女中は懐こい聲をしてお愛想を云つて、「あの子はもうこの土地にはゐないのよ。貴方御存じ？」

「住替へでもしたかい」

「いゝえ、田舎へ行つたらしいの……あれは去年の暮だつたかしら、貴方に廣小路でお目に掛

つたつて」

「あゝ、黒い眼鏡を掛けて通つたよ。僕は面倒臭いから知らん顔してたけれど」

「あの女も止し方があんまりよくはなかつたらしいの。逃げるやうにして行つちやつたんでせう。よく賣れたんですけどね」

「あれも去年中に借金を済して、今年中に看板を借りて氣樂にやつて見るんだなんて云つてたがねえ」

三月あまり馴染んでゐた女ではあるが、重吉は詳しい消息を聞きながりもしなかつた。「あれも面白くない女だつたが」と、昔の偲ばれるやうな心にはなれなかつた。

「さうね。傍で見ても、別にお氣に入つたといふ風はなかつたのね。でも、貴下があればど一人の藝者にこだはつた事はなかつたわね。何處かよかつたんでせう」

「さうでもないよ。あの時分不用な金があつて始末に困つたから。しかし女の方では僕が惚れてでもゐたやうに自惚れたらう。だから、僕がもう來ないと言つた時でも、まさかあれ切りとは思つてゐなかつたらしい」

「思切りがいゝわね、貴方は」

「さうばかりではないが、何か異つた事情が出

來なけりや、一人の女をそれ程有難がつて、熱
することは出来ないね。あの女に關係したか
らつて、誰れ一人僕を悪く云ふ者もなければ羨
ましがる者もないし、女も僕も命掛けに惚れ
るんでもなければ厭で溜らんと云ふんでもない
もの。興味の起らう筈はないさ」

「矢張、貴方は變つてゐるわねえ」

女中は誰れをか呼ぼうとしたが、重吉は其氣
にもなれなかつた。が、このまゝ家へ歸る氣に
もなれない。「寄席へ行かうか」と、女中を誘つ
たが、外の女中がゐないから、家が開けられぬと
斷られた。一人では行きたくもなかつた。で、
重吉はあまり無駄口を利かぬこの女中を相手に
見覚えのある二三の藝者の噂や、料理屋や待合
の盛衰を聞きながら、欲しくもない酒を二三杯
飲んで、横になつた。

繁吹が静かに窓に音を立てた。窓の下の路次
では色つばい聲を念に女が相呼んでゐる。重
吉は此處で覺えた端唄など思出した。そして
早くから一人寢床に就いて、珍らしく快く眠
つた。

「ローマに結うてみたけれど、矢澤様の奥様に
勧められて、今日初めて丸鬚に結ぶ。御元服な

されてお日出度う御座いますと、髪結ひさんに
云はれて恥かしき心地す。お祝儀に五十錢包ん
でやつた。主人が矢澤様からお祝ひに頂いた反
物でお羽織を縫はうと思つて、寸法を量つた。
裁板がなくて困つてゐたら、婢やが張物板を持
つて来て呉れた。晩の御飯が濟むと主人は外
出してお歸りがない。婢やといろ／＼なお話を
した。十一時過ぎると婢やが欠伸ばかりして、
且那樣はお歸りのほどは分らないと云ふ。先へ
寢させて一人で起きてゐた。隣の支那人の子供
の泣く聲や、犬の吠ゆる聲が雨の中に聞えて、淋
しい事云ふばかりなし。目が深えて、眠くはな
けれど、最早二時が打ちしゆゑ寢床に就くと、
時子はその夜ペンで日記をつけた。
翌朝、空は名残なく晴れた。重吉は傘を提げ
て午過ぎに家へ歸つたが、時子は氣を兼ねて側
を過ぎかゝるやうにした。

老婢は歯齧を病んで、四五日娘の家へ歸つて
ゐた。その間にも重吉は毎日外へ出ない日はな
かつた。そして家へ歸ると、何時も座敷や臺所
の汚れてゐるのを黙つて見てゐた。

「暫らく御無沙汰しました」と、矢澤の細君が仕
事の歸りに、勝手の手障子を掛けて入つて來た。

時子は風呂へ行つてゐた。「如何です」と、茶の
間で自分で茶を入れてゐた重吉に訊いた。
「此處のお嬢様にも困りますよ」と、重吉は眉
を擧めて、「御覽なさい、こんな埃だらけの處
にぞろ／＼してやがるんだから」
「本當にねえ」細君は周圍を見て、「臺所も散
らかつて」と云ひながら見兼ねたやうに、箒
を取つて茶の間の掃除をし出した。

「掃除なんか構はんけれど、僕が見ても、日
にあまる野呂な事をやつてますぜ。いゝ着物を
着ても汚れた處へべた／＼と平氣で坐ります
よ。昨夕も筍を煮ると、鍋に一杯煮てるんだ
から驚く。田舎で多人數だつたから、その通り
やるんだらうが十人家内と二人暮しの區別が
つかんのは、藜麥を辨せざる女ですね。先日も
壽司屋から手傳ひに少女を寄越したんですが、
さうすると、御主人様とその女を差向ひに坐ら
せて、自分でお給仕するんだから面白いでせう」
と、重吉はわざと面白さうに云つた。

「へえ、二十歳にもなつて、そんな筈はない
と思ふんですがね」

「これで僕がもつと若くつて、向う様がお雛様
のやうだつたら、飯事のやうにさぞ面白いこつ
てせうがね」と笑ひながら、「おかねさんはこん

「なぢやありませんかね」

「いゝえ」と、細君は首を振つて、「あの女はそりや怜悧で、よく氣がつかますよ。見た所お轉婆のやうだけど」

「さうですかね。僕は氣の利かん女は實に嫌ひだ。第一話が出来ませんからね。東京の水を漕つてゐない、男に對する訓練が少しもないんだから、女の形をした人形に過ぎんのだ。それも安本龜八の丹念の作ならいゝが……」

何時ものやうに、毒々しい言葉を出すと、重吉は感興に乗つて來た。細君は其處をキチンと月付けて、「困つたものだ」と云ひさうな顔をして、

「あんまり貴方に遠慮して被在しやるからですよ。貴方がもつと柔しくなさつて、時々は外へ連れて出て、世間をお見せなさいといふんですよ」

「もうあの聲までも不愉快になつた。そして何か云ふと、どう遊ばせと來るんでせう、どうもあの遊ばせが可笑しい」

「私、奥様の遊ばせ言葉は、東京へ來てお覺えになつたんだと思ひますわ。どうも調子が變だ」

細君は仔細らしく考へて、注意してやらうと

思つてゐた。そこへ、時子は座立てて歸つて來た。「せらお歸り遊ばした」と、重吉は笑ひながら座敷へ入つた。

細君は時子から手頼りない思ひを告げられた。そしてその手を引いて、重吉の側へ連れられて來た。

「さあ件よくなさいまし」と、手を握らせるやうにした。

「貴女お母さまになつて下さい」と、時子は細君の方へ身を擦寄せて、甘つたるい調子で云つた。

「えゝ、こんな大きな娘が出來まして」と、細君は悦しさに云つた。

重吉は苦笑した。そして矢澤の細君の前では快活に話してゐられるけれど、細君が歸ると話をする氣にはなれなかつた。

別々の人間が住んでゐるのに過ぎなかつた。つとめて何か云つて見ても心の融け合ふことは一度だつてなかつた。

ともすれば、縁も由所もない娘を預かつてゐるやうに思はれてならぬ。

だが、時子は淋しい悲しい思ひを一度も故郷へ知らせてはやらなかつた。青山の伯母が根柢

り葉州に尋ねても、心の中を明らかに打明けなかつた。

「女は一度片付いたら、どんなにつらい思ひをしようとも、其家を死場所と思つて、辛抱しなければなりませんよ。苦勞に負けないで意地を立通すやうでなければ人間ではない。お前さんの家は守屋の家より外はないといふ事を一日も忘れてはなりませんよ。主人が不機嫌であつたらそれは妻としての仕向けが悪いからだ、自分の身を責めて、何事も主人大事とつとめてこそ、お前さんも立派な女となれるんですよ」と、男まさりの伯母は切口上で云つて聞かせた。

「私、どんな事があつても、志賀の家へは歸りませんわ」

時子は結婚前に、父に云はれ母に云はれ、多年愛讀して居る「淑女の美德」や「婦人の鑑」に教へられて、自分でもさう思ひ詰めてゐた。「如何に夫が無情なりとも、真心を以て盡しなば、やがて愛情を以て酬いらるゝことあらん」と、日記に書いて、それからは毎日晴雨を書入れると同じやうに、「今日は主人機嫌よろし」とか、「今日は機嫌あし」とか記した。夫の無情を獨りて極めて、自分がその犠牲となつて盡すと

思ふと、「婦人の鑑」の中の女に自分が成り澄した気がして、淋しいながらも一種の誇りがあった。

「お前、行つて見たい處があれば、一人で何處へでも行つたらいいぢやないか。家にゐたつてどうせ用事はないんだから」と、重吉は或日、次の間で所在なさうにしてゐる時子を見て云つた。その言葉は優しかつた。それに力を得て、時子は、

「あら、用事がない事ないわ、幾らもあつてよ。洗張りもどつきり溜つてるんですけど。私遊んでやしないのよ」と、口を突いてハキ／＼云つた。遊んでゐると思はれたくはなかつた。

「そんなに忙しうに働かなくつたつていゝさ」と、重吉は笑ひながら、
「家にちつとしてばかりゐると、身體のために悪いよ。病氣になつちや困るからね」
「だけど、私、何處にも病氣つてないのよ。……貴方こそ身體が悪かあないの」

「悪いね。結婚してから、尙悪くなつたやうだ」
「あら」と、驚いた目をして、「ちや困るわ……私、貴方が夜中に寢言云ふのを聞いて、屹度お腹に心配があるからだと思つてゐましたわ」

「おれは謔言を云ふんかい。初めに聞いた」重吉は寢た間も心の鑑まらぬのに氣づいて、「どんな謔言云つてる？」と訊いた。

「何だか苦しうよ。厭世的ですわ。それに女の名前も云つてよ」
「女の名前つて誰れを？」と、重吉は不思議がりながら問詰めた。その気色はむのを見ると時子は氣おくれがして頻りに打消さうとしたが、
「貴方、すうちやんと云ふ女を知つて」と微笑を含んで云つた。

「すうちやん？」重吉は思出すのにも手間取つた。ずつと以前思ひを寄せた事はあれど、近年書間には心に浮びもしなかつたお鈴といふ女の事だらう？ で忘れかゝつた形を呼びしなうら、「お前此處へ来る前に、懐かしいと思つた男の一人や二人はあつたらう」と訊いた。

「何故？ 私にそんなことがあるのですか」
「だけど、一人もないと云ふのは可笑しいね。當然の人情を備へる限りは女が二十歳にもなつて、あの人は好きだ位に男を思つてたこととが、一度もないといふのは可笑しい。少くも思はれたことはあるだらう。それもなかつたかねえ」

さう云はれると、時子は自分が腑甲斐ない様にも思はれたので、「だつて、私には男のお友達はないんですもの」と、辯護するやうに云つたが、やがて、ふと一つそれらしいものを思出し

て、「私、一度杖の中へ手紙を入れられたことがあつてよ。お稽古の歸りに入れられたのよ。私、氣が付いてから餘程父に見せようかと思つたけど、それでは却つて後が怖いやうな氣がして直ぐ破つて棄てちやつたの」と、これで女の資格でも出来たやうに話した。

「ちや直ぐ棄てちやつて、自分でも見なかつたのかい」
「ええ。そんな場合には見ない方がいゝんでせう」

「なに、見た方がいゝさ。一生に又と付文されることはないだらうから」
「ちや、見とけばよかつたのに」と時子は殘惜くないではなかつた。「付文と云つて、中にどんな事を書いてるんでせう？」

「さあ」重吉は首を傾げて、「そりや、男次第でいろいろ違ふだらうね」
「わ、男と云ふものはどんな事を思つてるんだか分らなくつてよ」
「おれも女が腹の中で何を考へてるんだか分

らない」

「私、女よりや男の方が軽薄だと思はれてよ。さうぢやないんでせうか。女を弄ぶと云ふ事聞いているけれど、男を弄ぶと云ふ事は聞いたことがないから」

「どちらだつていゝさ。今にお前だつて男の心が分るやうにならあね」

「私、早く分るやうになりたい」

時子はこの頃になつて、ふと胸に萌した疑を解きたたくて堪らなかつた。夫の素振が胸に落ちぬので男といふものの心が暗闇のやうに分らなくなつてしまつた。何を苦しんでゐるのだらう。男は女に對して何と思つてゐるんだらう。底の知れぬ井戸のやうに汲取れさうでなかつた。恐ろしいやうでもあつた。父や伯父や姉嬢や或ひは校長さんも男であつたけれど、あの人は疑はしい人ではなかつたが……男は強いもの、女は弱いもの、「男は外で働くもの、女は内を治めるもの」と、ぼんやり男と女の區別をしてゐて、その外には學校の修身科でも、「淑女の美德」でも、立入つて男の心を教へては呉れなかつた。……あゝ男の心が知りたい！

「貴方、何か心配事でもあるんぢやなくつて？」

と、折々窺み見して知つてゐる夫の曇つた顔色を思出し、意味ありげに訊いた。

重吉は、何故かそんな事を問はれるのを好まなかつた。「月末の拂さへ満足に出来ればそれでいゝんだよ、たとひおれに心配事があつたらつてお前が立入る必要はないんだ」

「だつて、それで済ましちやゐられませんわ。それぢや二人が同居していると同じことなんですから」

「それでいゝさ。夫婦といふものはそれでいゝんだよ」

重吉が煩ささうにするので、時子はそれきり口を噤んだ。

八

時子の里から、一夜宿りでもいゝから、是非来て呉れと、屢々手紙を寄越した。青山の伯母もわざ／＼来ては、頼むやうに先方の願ひを傳へた。さうでないと、親類や昵懇な家に義理が立たず、あらぬ噂を立てられるからと氣を揉んでゐた。重吉は四月中にと答へて置いたが、その四月は幾日も餘さなくなつた。

庭には躑躅が赤く咲き、白く咲き、山吹も色付いた。楓の若葉を溜つて来る風は柔かかつた。

重吉は毎年この時分には、郊外を散歩する習ひだつたが、今年も山の手線に乗つて、澁谷目黒代々木のあたりを散歩し出した。青々とした田舎へ旅立つのは面白くないでもないが、務めとして行くのは厭だつた。で、確と日は極めないでゐたが、去年丁度若葉の頃その山の中を汽車で素通りしたことが、折々思出された。

あれは善光寺詣での歸り途だつた。諏訪の温泉に一泊して、翌日、三等列車の窓から左右を眺めながら心淋しく歸京の途に就いたが、其折列車は初鹿野といふ山の底の停車場で、三十分も停車した。其處のプラットホームで見上げた、青葉に色取られた左右の山は、一年近い月日に蝕されて、曖昧な形をしながら、彼れの記憶に浮んだ、笹子の隧道の入口は油煙で汚れてゐた。「あれで長さが三哩ぐらゐあるんだ

す、彼方の口は馬の目ほどに見えますよ」と、隧道の方を指差してゐた人があつた。車の内では草鞋を穿いて、手の裏に濃い毛の生えた男が、風呂敷包の中から尺八を出して吹出した。どんな顔だつたかどんな衣服だつたか忘れたが、その音色は今も彼れの記憶の中に震へてゐる。青葉の谷底で笛吹く男、それを聞いてゐた一人旅の彼れ、彼れはその時を顧みて、いろ／＼の

連想を自由自在に惹起した。

「厭でも近くにまた彼處を通らなくちやならんのだが、今度はどんな感じがするだらう」と思ひながら、或日の午後、急に思立つて、「明日お前の家へ行くんだぜ」と、時に知らせた。そして、夕方矢澤の家へも知らせに行つた。

「そりや結構ですわ。お里歸をなされば彼方でも安心なさいますよ」と、細君は云つた。

「どうだか」と、重吉はどうせ自分には、田舎者の要求するやうな煩瑣な儀式は守れやしないんだからと思ひながら、「僕は元は結婚したら、直ぐ旅行するんだと、よく貴女に云つてたけれど、今度いざ旅行すると、矢張り一人旅の方が面白いやうな気がしますよ。二人だと自由を束縛されるやうでいけない。僅かの間の汽車の旅でもさうだとすると、人間は矢張り一人がいい」

「そんな事はありませんまいよ。汽車の中もお楽しみでせう」と云つて置いて、細君は、「だけど新婚旅行も詰らないのですわね。私もも猫根へ行つた時も、本當に詰りませんでしたよ」

「でも、新婚旅行は人間の一生で最も面白いものと相場が極つてるんですがね。僕は結婚して見て、何だか欺かれたやうな気がしますよ。」

長火鉢の趣味も些ともないしねえ。結婚といふ最後の妙薬も、僕の心に利かなければ、もう匙を投げてしまいと思ひます」重吉はかう云つて、獨合點の歎息をしながら、まだ何か心を湧立たすものが、待つてゐるに思はれぬでもなかつた。

間もなく時子も訪ねて來たので二人で一緒に神樂坂の方へ土産物を買入れに行つた。重吉の買物が濟むと、時子は洋品店や、鐘詰屋などへ寄つて、自分の紙入から札を出して、心當りの知人への土産物を買つた。

「お前は明日が楽しみだらう」と、重吉は人に見られるを取ちるやうに俯首して離れて歩いてゐる時子を顧みたり。

「いゝえ。私歸りたくはありませんわ。屹度煩さいと思ひますから」

「煩さいのはおれの方だ。お前は久振りで皆なに可愛がつて貰へらあね。彼方へ行つたら、親爺やお袋に隠立てしないでよく家の事を話して見ろ」

「いゝえ、何んにも私云ひませんわ」
「お前が云はなくても、おれは遠慮しないで云ふよ」
「何を〜」と、時子は氣遣はしきうに訊いた。

重吉はそれには答へなかつた。そして、「お前だけ二等に乗せて、おれは三等で行かうか」と、冗談ともつかず云つた。

「あら、それだけは御免遊ばせ」時子は世間の思惑や、出迎人の手前を氣遣つて、泣顔をして云つた。

「ぢや、お前も三等に乗るんかい。三等も込んでやしないし、二等よりや汽車の中が面白いから。第一經濟だしね」

「だつて、不慮とは違ふから三等では變ですわ。私汽車賃拂ふから、二等に乗つて下さいな、ね」

「お前は金持だからね。随分持つてるらしいね」と、重吉は流し目に見ながら、先に店先でちらと見た紙入の量から中身を想像したが、時子は拘徒にでも見込まれたやうに、懐を底つた。

「あら、私お金なんか持つてやしないわ」
「持つてたつて、お前から鐘一文取らうと思つてやしないよ。安心してゐなさい」
家へ歸つてから、荷造りに夜を更した。時子はあれやこれやと考へて、明方まで厭付かれなかつた。

「留守をお頼みしてよ、よく氣をつけてお呉れなね」と、翌朝出掛に老婢に向つて、時子は一家の細君らしく云つた。

牛込から汽車に乗つた。重吉は空氣枕に頭を凭せて、ゴルキーの“A Confession”を讀出した。初めの間は屢々書物を置いては、窓の外を眺めてゐたが、やがて、物語に心が惹かれ出すと、目を外へ散らさなくなつた。何時もこの作者の拙くやうな人物で、珍らしくはなかつたが、無智の徒が素手で逆運と戦つて行くのが、何時ものやうに胸に響いた。「神は我敵たり、その石あらば、我それを天に抛ちしならん」と怒號したり、「死は謎なり、我その謎をとかんと欲すと冥想したりしたかと思ふと、泣いて神の前に「平和」を求めたりする憤み多き生涯は、讀む人の心に迫つて来た。その人物が妻を得ての喜びと妻を失つての悲みは、殊に重吉の心を惹いた。愛する女を得ては、嘗めるやうに可愛がり、女を失つては、食はず眠らざに鬱ぎ込む、その手強い自然の感情が羨しくもあつた。

時子は離れて腰掛けてゐた。そして、夫が書物を読んでゐる間、首垂れて行儀よくしてゐた。傍目にも新夫婦と見られるだらうと思つて

極りが悪かつた。

幾十の階道を通過すると、甲州の平野へ出た。重吉は書物を鞆に入れて、衣服を正しながら停車場の石禾といふ文字に目を着けた。八代傳で濱路姫が鞆に搜まれて来た處がたしか石禾だつた。大和尚の籠つてゐたのが、たしか石禾の何とか院だつたと思つて、「此處に古い寺はないかね」と、時子に訊いて、「濱路姫が此處等で驚きに振落されたのだけ。知つてゐるだらう。」

「知りませんわ、私」

「それさへ知らんのかい」

汽車は甲府へ着いた。此方を見詰めてゐる時子の弟の顔は、直ぐ重吉の日についた。目鼻立が憎らしく似てゐた。

「町を見ながら一緒に歩いて行かう」と、彼は小さい信支袋を提げて、二人並んで歩かうとしたが時子は厭がつた。五六間離れて道の片端を傳ひながら、淋しい通りを選つて歩いて自分の家へ近づくと、潛るやうにして駐込んだ。重吉は前に立つて、家の造りや店の様子を窺つてから入つた。

伯母や矢澤からの注意もあつて、志賀の一家は重吉にあまり煩さい思ひをさせぬやうにこつめた。夕餐を済ますと、二階の廣い座敷へ案内

して氣儘に疲れを休めさすことにした。重吉は寝ころんで、床の間の虎の掛物や甲冑を電燈の光で見つてゐた。新しい墨柔かい敷物は氣持がよかつた。

「確かりした家だね、間敷も多いやうだし。こんなに静かだと四五日寝て行きたいやうな氣がする。食物も非常に味かつた、あの鯛のケンチン蒸しをもつと食べた」と、時子に云つた。

「ぢや、幾らでも召上れ。あれは姉の家で拵へるんですから」

「竹川とか云つたね、その家は」

重吉は明日其處へ行くのが樂みだつた。この土地の第一の昔から名代の割烹店だと聞いてゐる。そして小野瀬を始め青山の伯母でも、志賀の身内にそんな家があるのを氣にして、云粉らさうとしたり、昔堅氣で、決して藝者を宿めなると言辭などしてゐたが、重吉にはそれが何でもなかつた。却つて有難かつた。

「おれは今夜一人で其處へ遊びに行きたいね」

「今姉さんに電話を掛けたのよ、私姉さんに會ひたくはないんだけど」

時子は階下へ下りたり上つたりした。父は「奥様少し馴れたかね」と、笑談らしく訊く位だつたが、母は小陰へ呼んで、生活の事や主人の

様子が訊きたがつた。「老人の下女は使ひにくいものだよ。浮かりすると此方が使ひ立てられるから氣をつけなくちやならんよ」とか、「お客様が出来てから、慌ててお菓子を買ひに行くやうぢやいけない。不斷用意しとかなければ」とか、何とか云つて聞かせたかつたが、時子はそれを煩さがつた。矢澤の細君の教へる事は青新聞の始末まで一々心に留めて、その通りにせねばならぬと思つてゐるが、母の注意は身に染みて聞かうとはしなかつた。そして朋輩の消息のみ知りたがつた。

翌日、重吉は袴羽織を着けて、父に連れられて三四軒親戚を廻つた。花婿様として出入りにジロく見られたり、縁側の隙間から覗かれたりするのが却つて面白かつた。自分が異つた人間になつたやうで、見てゐる人々よりも自分で自分が珍らしかつた。此方を憚つてあまりに手軽にするのが飽足らなかつた。いつそ初めから本式に婚入姿をして紋付の着物に白足袋を穿いて、出迎への行列でもつくらせ、町の者の目を惹くやうにしたらば興があつなかも知れぬと思はれた。

「この先の大東と云ふのは家内の一番の兄で、漢方醫です。七十以上で目も悪いし、耳も遠い

んですが一寸顔出しだけしませう」と、父は細い道を入つた。

其處では普請をしてゐて、大工が鉦の音をさせてゐた。鮑厨の上を踏んで離れて行くと、黒い焙烙頭巾を被り、茶色の羽織を着た老人が縁側に蹲んでゐるが、目を眩めながらそれと氣付くと、口を窄めて「ヤア」と度外れの聲を出して、「さあ上つたり〜」と座敷に迎へた。壁に添うた薬箱には「陳皮」「人蔘」「大黃」などの張紙がしてあつた。

「これはへえ、どうも」と、老人は簡単な挨拶を終ると、青筋の浮いた萎びた手に煙管を持つて、「普請を始めたものぢやで、私も氣骨が折れてならんわい」

「しかし後が氣持がいゝから結構です」と、父が云つた。

「いや〜氣樂も何もござせんで。雨が洩りや普請もせざあならん。大工を頼みや時々一本つけてやつたり、茶請けも出してやらにや、それ、仕事が捗取らんと云ふ譯ぢや。何時まで彼處に住めるこつたか分らんでも、こんな面倒な思ひをすると思へば、この世は苦婆娑ぢや。死ねば極樂生きたる中は苦婆娑ぢやてと、鐵だらけの顔に薄氣味悪い笑ひを浮べて、金があれ

ば、泥棒の用心をせざあならん。地所や田地を持つても、何だのかだのと税ばかり取立てられるのだ。お上からの預り物で、自分のものだから何だか分りやせんで、結局無いのが氣樂だらうかい。お前さんも娘があるんでいるんな苦勞をしないさる。片付けるまでも一苦勞ぢやが、片付けてからも中々安心は出来まいて。それぢやから、私は苦婆娑だと思ふだよ」

「しかし、その代り先になつて樂みもあるでせう」

「うん。それもさうかの。私も定めが生きたりや、今時分婿選びで一苦勞してゐるだらうてと、老人は身體を乗出して、重吉の顔を見詰めて、「貴方はお幾つにおなりだ」と訊いた。

「三十三。さうでしたな」と、父が代つて答へた。

「ふん、三十三と、老人は呟いて、それきり何も云はなかつた。

二人は暇乞ひして外へ出た。一妙な爺さんでせう。何時もあんなお談義をするのが癖になつてゐるんです。詰らん事から娘に目を突潰されたのですよ」と、父は云つた。

「さうですか」重吉は立入つてその譯を訊かうとはしなかつた。

竹川は三階建の大きな料理屋だつた。名士の書畫がその家の歴史を想像させた。寂りしてゐて、奥の廣い部屋にぶつとしてゐると、寺にでもゐるやうだつた。狭い庭には牡丹が鮮かに浮出てゐた。重吉は此處に小休みして後、父に誘はれて、酒折の宮や信玄の城跡を見に行つた。そして暮近くなつて再び其處へ歸つたが、疲勞は顔にも現はれてゐた。姉は父の側へ來て、その夜の披露會の打合せなどしてゐたが、やがて、

「お風呂の沸くまでお休みなすつたらいいでせう」と、重吉に云つた。

「あゝ、それがいい。私も疲れたから一寸横にならう」と、父も云つた。

で、女中に寢床を延べさせて、二人は枕を並べて横になつた。父は枕につくと、直ぐに高い聲を掻いて眠入つた。が、重吉には容易に眠られなかつた。仰向けになつて天井を見てゐた。信玄の城跡よりもその遺物を説明した薄汚いヨボ／＼の老人や、苦婆婆を説いた大東老人の顔が思出されてゐた。日影は窓から消えてしまつた。と、間もなく、姉が縁側に軽く足音させて入つて來て、浴衣を出しながら、湯殿の方

を指差して教へた。そして、「今、お時ちゃんも來ましたよ」と云つた。

重吉は浴衣に着替へて、湯殿の方へ廊下を傳つてゐると、白粉を濃くつけた時子が、氣息さうな顔付をして階子段の下に立つて、姉婿と話をしてゐた。姉婿は料理屋の主人らしくなく、實直な顔立てで四十あまりの男だつた。重吉はその人に軽く會釋して、瀟洒した湯殿へ入つた。

出て來た時分には最早、電氣がついてゐる。座敷では父は半ば身を起して、手紙を手から垂れてゐる姉と、ひそ／＼囁いてゐる。元の寢床の上に坐つて見るともなく見ると、父の枕許に落ちてゐる封筒の裏には青山の伯母の名が書いてあつた。手紙と二人の顔付、重吉は何か意味ありさうに思つた。

「どうでしたと云ひながら父は起上つて、素早く浴衣に着替へて湯殿へ行つた。

「重吉さん、貴方お時ちゃんお厭なの」と、ふと姉の滑かな聲がした。

「重吉さん」といふ言葉は、重吉は自分でも忘れてゐる位久しく聞かなかつた珍らしい言葉だつた。そして、さう呼ばれたのが、何となく快かつた。微笑しながら返事をしないでゐる

と、「可愛がつてお上げなさい」と、姉は重ねて云つた。片手を逆に突いて、身體を斜にしてゐる。

「えゝ」重吉は伯母から何か云つて來たんだと察した。

「貴方、随分遊ぶんですつてね。あんまり浮氣しちやいけませんよ」

「中々浮氣も出來ませんよ。：：：しかしこんな穢業は面白いでせうね」と、重吉は自分の事から話を外さうとした。

「面白いのですか。私の性分に合はないんですもの」と、姉もその商賣の話をするのを好まなかつた。「で東京で暮せれば仕合せですわね」

「いや、僕はこんな廣々とした静かな處でゴロゴロしていたと思ひます」

「ぢや、何日でも此家へお泊んなさいな。この通りガラ空きなんですよ。さうすれば私明日の晩お時ちゃんをダシに芝居を觀に行かうと思ふの。：：：いゝでせう。此處の父が八釜敷くて一人ではとても出して呉れないから」

「えゝ。だけど、僕は明日歸りませう。お時ちゃんだけは置いていてもいゝけれど」

「そんな事があるのですか。一人々々歸るな

んで」
父が風呂から歸つたので、話はそれで切れて、姉は廊下へ出て行つた。

披露會の席へは七八人の親戚が集つたが、かの大東老人は眼が悪いと云つて顔を見せなかつた。青山の伯母の注意とかで、藝者が「鶴龜」と「老松」とを踊つた。重吉はあまり口を利かないで、只差される盃を受けてゐたが、次第に結婚の呪と同じやうに氣が鬱いで来た。母に添うて坐つた時子の横顔が味氣なく日に迫つて来た。

で、苦しいほどに酔つた彼れは、座を外して、階下へ下りて、羽織袴のまゝで、以前の部屋に寝倒れた。酒で興奮させられて、何かしら物足らなくて堪らなかつた。いつそ、今宵一夜はこの部屋で獨り靜かに夜を明かしたかつたが、其處へ時子が目の縁を紅くして、苦しきうに息を吐いてやつて来た。

「今夜は此處へ泊るんですつて。私厭だけれど」
「おれは此處の方がいゝよ。何ならお前だけ歸つて、おれ一人此處へ寝かして呉れるといゝんだが、さうはならんだらうね。これで何だね、

お前と一生同じ部屋に寝なくつちやならんと思ふと、一生は長いものだね」
重吉は顔で笑ひながら、聲では歎息した。が、時子は何とも感ぜぬらしい。

「私、長生したくはないわ」と、首伏せになつて、顔を叩いて、「お祝ひだからついでついでついで、無理に三杯も飲まされたの：あゝ苦しい」
女中は土瓶を持って来て、重吉の枕許に置いた。時子にはにじり寄つてコップへ水をうつして飲んだ。そして、よろ／＼しながら兩戸を開けて冷い風に觸れた。廊下から電燈の光が小庭へ流れてゐた。石燈籠や植込みが夢のやうに見えて、植込みの奥は恐ろしきうに暗かつた。

やがてふと、廊下の片隅に、姉が横向きで何か見てゐるのが目についた。で、若しも姉が振返つて此方を見たらばと、見られるのが厭きに、慌てて兩戸を引寄せたが、その手荒い音に、姉は遠くから振返つて、目を撃めて薄暗い此方を見た。目付が何となしに怖かつた。

「姉さんはどうしたんでせう」と、時子は呟いて、重吉の側に坐つて、「何かしら私に云つちや、プリー／＼怒つてるのよ。そんなに急いで歩いちゃいけないだの、坐り方が悪いだのと、私

を見さへすりや、何か諺の分らない小言を云ふのよ。あんな人ぢやなかつたの」と云ひながら、如何にも不思議でならなかつた。「今も二階を下りかけると、耳元で、大勢の前へ出てる時はあんな風をするのぢやない、お前さんは本當に氣が利かない、姉さんは知らんよ／＼と、早口で云つて、トン／＼先へ下りちやつたが何故あんなだらう？」

「さあ」と、重吉は目で笑ひながら、「しかし、つまりは姉さんの方がお前よりや任せせだよ。これまでは苦勞して来たたらうが、此處の主人は穩かない、人らしいし、財産も非常にあるさうだから。それに舅もあゝヨボ／＼してちや、先は長くはないだらうしね」
「だけど、私、姉さんを幸福な人とは思はれないわ」
「も少ししたつたら、姉さんを羨ましがるやうにならあ」

「何故？：私、決して姉を羨ましいなんて思ひませぬ」時子はきつぱり言放つた。
この廣い料理屋には、三味線の音一つ聞えずして、夜は更けた。
翌朝、志賀の家へ歸る途中で、その午後の汽車で、出立することに、重吉は獨りで極めた。志

賀の家族や親戚は右左から口を酸くして引留めようとしたが、何の甲斐もなかつた。この土地に心残りのしてゐる時子はせめて今二三日の逗留をと念じてゐたが、望みも仇になりさうなのだ。

「もう一日泊つちやいけないの。私、お友達に貸してゐるものを取つて來たいんだけど」と思ひあまつて口に出した。親しい友達に會つて、異つた東京暮しの模様を訊かれもし、話してもしたかつたのだ。

「ぢや、お前一人で、もう二三日御厄介になるさ」と、重吉はむしろそれを望んだが、父はその目顔を見て、

「時もそんな我儘を云つちやいけない。御主人の御都合があるのに」と、叱るやうに云つて、我儘を云つたら御遠慮なく引ばたいて下さい」と笑つた。

母は時子を蔭へ呼んで、「外の時とは異ふから、今度は一緒に歸らなくつちやいけないよ」と注意した。そして、菓子や壽司や、竹川から取寄せたケンチン蒸やを、折に詰め出した。そこへ姉が見送りがてら訪ねて來た。

「一度東京へお遊びに入らつしやいと、重吉はお愛想を云つた。

「それ所ぢやない。此處へだつて減多に來られやしない」と、姉は誰れに云ふともなく云つて、「ぢや、今夜も老居へ行く當てが外れぢやつた」と零した。

次第に時が迫るので、母は僅かな間でも、二人の娘の側を離れぬやうにした。座中の人々はそれと異つた思ひをしながら、皆な用算筒の上の置時計の針に目を注いだ。机の上には、兩蓋の古風な銀側時計があつた。盛装した時子の胸には金鎖が燦いてゐた。

「守屋さんは時計をお持ちぢやないのですな」と、父は重吉の帯のあたりを見て、「時計も持つてゐる必要はありませんね」

「家の老父さんは金時計を幾つも持つてるの。貨金の抵當に預かつて、そのまゝになつたのがあるんでせう。取換へ引換へ出しては側へ置いて、御飯が食べたくなると、それをギイ／＼巻き出すの。まだ早過ぎると思つて、打ちやつとくと、さあ御機嫌が悪くて怖い目をしてブツブツつて外へ出て行くの。年を取ると、あんなに御飯が待遠しいものかね」と姉は云つた。

「この頃はあんまり長唄もやらんかね」と、父が訊いた。

「いゝ些とも。もう食べる一方」
重吉は前夜竹川で見た坊主頭の灰汁扱けのし老人を思出した。

「もうそろ／＼出掛けませう」と、父が最先に立つた。時子はふと胸を騒がせて、用もないのに、アタフタ二階へ上つて、自分の居間を見廻して來た。母の目は涙ぐんでゐた。

停車場まで見送つた姉は、「これが私の志だから」と、紙包をそつと時子に手渡して、「身體を大事におしよ。私にも時々手紙を送つてお呉れ」と、しみ／＼と云つた。

「え」と、時子は首垂れて、ハンケチを目に押當てて、「姉さんもお手紙をね」

人目がなければ、二人は手に手を取りかはして、思ふさま泣きたいやうな氣がした。そして姉は、汽車の窓から半身を現はした新夫婦の若い着飾つた姿の消え去るまで、プラツトホームに悄然と立つてゐた。

九

甲府から持つて來た入籍届を故郷へ送らうとして、重吉は幾たびか躊躇した。青山の伯母も田舎からの手紙で心配して、様子を見がてら訪ねて來て、「籍はどうなさいました」と、話次

手に思出したやうに何氣なく訊いた。
「今日あたり送ります」と、重吉は答へて伯母の歸つた後で、扇書を開けて見ると彼方の入籍届には、苦婆婆を説いた大東老人が證人になつてゐる。ちやんと印を捺してゐる。

「おれの方では誰れが證人になるんかしらん」と、それらしき人を想像しながら、時子呼んでそれを見せた。「お前は得心してるんかい。籍を入れると、お前の自由も失はれてしまふんだぜ」

「自由つてどんな自由？」時子は扇書を手に取りつて、注意して見た。

「國家の法律で、お前の一生が縛られるやうなものだ。後悔してない中によく考へて見なさい」

「だつて、もう仕方がないわ」

で、時子は封筒に収めた其扇書を、ポストへ入れに行きながら、何となく氣迷ひがされた。

證人つきの入籍に心丈夫ではあれど、今まで知らなかつた怖い淋しい手頼りない思ひもされた。「結婚済んだ」との伯母の電報を、甲府で聞いた時には、胸騒ぎのしながらも浮々として、怖い淋しい中にも、華かな思ひが湧立つたが、今はその華かな色は見えなかつた。そして針箱の前に

戻つてからも、縦掛けた切れを持つたま、庭の方を見ながら暫らくぼんやりしてゐた。庭には乾いた土の上に、椿の花が一つ落ちてゐる。落ちたのは斑入の一番綺麗なのだつた。

山吹も笹の葉のあたりに花を散らせて、葉の左右に繁つて、細い枝を支へられて重さうに垂れてゐる。鮮かな光は青葉に映つてゆらめいた。羽翳の白い蝶はその葉影を掠めて、垣根の外へ飛んで行つた。

重吉も庭の方を見入つてゐた。五月も最早十日過ぎでゐる。梅雨から土用、それから秋となり冬となり、今年も飽氣なく過ぎてしまふのが見え透くやうに思はれた。月日の徒らに過ぎて行くのがまざざと見え透いた。そして、自分の老い行く姿が影のやうに心を横切つた。何處か賑かな處へ行つて来ようと、彼れは何時ものやうに着流しで、ふと外へ出た。

重吉の出で行つた後で、時子も外懐かしく、久振りで家を出た。風呂へ行くか、買物に行くかだけで、此頃一日も遊びに出たことはなかつたのである。

甲府の手紙を度々入れたポストの側を曲つて、人の視線を避けるやうに俯目膝で刻み足で歩いた。その廣い道を通り抜けたら何處まで行

けるだらうと、道の盡きるまで極めたかつたが、一人であまり遠く行くのも氣遣はれた。自動車を通り、騎兵が通り、埃が顔に吹きかゝつた。

時子はふと右手に小さい寺らしい門を見つけた。先日髪結ひの中に、近所に「お釋迦様」があつて、參詣人が多いと云つてゐたがこの寺がそれかも知れぬと、つい入つて見たくなつた。向うに幽かにきらめく佛前の燈火を見ながら、敷石を踏んで入ると、お百度石が危げに立つてゐるのが目についた。斜に渡したタン屋根では五六人の女が數取を手に行きつ戻りつお百度を踏んでゐる。その中の一人は二十歳前後の若い女だつた。垢染みて飛白の纏せたメリンスの帯を締め、裸足で土を踏んでゐる。思ひなしか色の黒い肥つた顔にも愁ひの雲がかゝつてゐる。

時子は暫らくその人達の日まぐるしい足取を見てゐたが、次第に自分の心も暗い悲しい空氣に染んだ。そして奥深き佛壇の燈火は神々しく尊げに見えた。で、時子はお賽銭を投げて禮拜した。ふと思ひついたやうに、夫の身體の健かになるやう、自分に對して愛情の増すやうにと祈つた。其處の人達の中に混つてお百度も踏みたくなつた。

その夜十二時過ぎて、夫は歸らなかつた。時子は老婢の安らかな寢息を聞きながら、置ラソブの側に坐つて待つてゐた。日記のある限り書留めた。前の方を開けて読んで見ると、同じやうなことがばかり書いてある。その同じやうな文句を心に積重ねてゐると、何時か涙が頬を傳つた。

「もう日記なんかつけない。つけたつて仕方がない」と、日記帳を机の隅に叩付けた。

十

「如何です」と、矢澤の細君は何時ものやうに訊いた。

「お時ちゃんですか」と、重吉はわざと田舎の姉の口吻を真似て、「この頃は老婢と仲がよくなくて、二人で茶の間で何かしら、よく話してゐますよ」

「へえ。それは結構ですわ……お馴れになつたんでせう？」

「どうですか。……しかし調子が多少變りましたね。甘つたれた風がなくなつたし、言葉付にも厭味が取れたし……」

「だから、次第によくするんですよ。甲府へ入らつしやる前は、私達随分氣を採みましたよ。

貴方が詰らななさうな顔をしていらつしやるんだもの」

「今だつて詰つた譯ちやありませんがね」重吉は甘味も厭味も取れた時子は、今の所自分に障りにもならねば、快い刺戟にもならぬやうな氣がした。で、「僕の所は夫婦別ありなんです、支那人もいゝ事を教へて呉れた」と笑つた。

「別々の部屋にお休みになるんですか」と、細君は老婢からそつと聞いたことを思出した。

「さうでもありません。だけれど、どうも他所の娘を預つてるやうな氣がしますね」

「今にお子さんが出来たら違ひますよ」

細君は最早以前のやうに、乗出して時子の事を聞きたがりもなくなつた。矢澤も最早忠告めいたことを云はなくなつて、重吉に知らせなかつた結婚前の内情などを昔話として、心安く話した。「おとくさんが先約があつて、あんな風になつた時分に、その埋合せに製麻會社の娘を見つけたんだがね。先方で君の身持を調べて、頭から鬪つて來たんだ。さう云ふ譯だつたから、君も大抵な所で、我慢したらいゝと思つて、あんなに勧めたんだよと、重吉のよく知らない製麻會社重役の娘のことをも話した。

その娘は一寸綺麗だがいやに鼻が大きかつた

さうだ。

「身持がいゝの悪いのと云つて、僕はこれ迄傍で云ふやうな放蕩者ぢやなかつたんだ。なれなかつたんだ。女に現をぬかしたこともないし、第一眞に面白いと思つたことはないんだから。だけれど結婚後のこの頃からやうく放蕩の味が多少分つたやうな氣がする。そりや放蕩をするかしないか知らんが、心持が放蕩者になつちやつた」から云つた重吉の調子にも靡れた心があるはれてゐた。

「男といふものは随分勝手ですわね」と、細君はその量見を解しかねた。

「しかしお時ちゃんももう僕を離れられんでせうね。をかしたものだ。煙草臭くつたつて男の息はいゝんでせうね」

この夫婦が仲人になつてからは、以前とは異つて重吉もその前で剃出しにいろ／＼の事を話すやうになつた。時子を裸體で解剖臺に載せるのに躊躇しなかつた。

「仲人といふものは割の悪い役かと思つてたら、案外面白いものですね。他人の弱點がよく分つて」と、重吉は折々云つた。

時子は「淑女の美德」を遠ざけて、或夜わざわざ神樂坂へ行つて買つて來た「女ばかりの衛門」

を内證で讀出した。今迄些しも知らなかつたいろ／＼の事をそれから教へられた。「お前も着い顔をしてるね」と、或日重吉が云つた。

「ええ。私何だか瘦せたやうですわ」と、時子はさして瘦せてもゐない自分の細い手を見て強ひてさう思ひながら、「お隣の下女はよく肥つてゐるわねえ。私羨ましい！」

「だから、運動したり養生して丈夫になるさ。お前の一生はこれからだから。先になつてまたいゝ事があるかも知れないのに、今から弱つちや可哀想だよ」

「私を可哀想だと思つて」時子はそんな言葉に饑ゑてゐた。

「あゝ。そりや可哀想は可哀想だね。だけど、今更お前を處女として家へ送歸すことも出来んからね。こんな破目になつちやつたんだから、お前も仕方がないさ」

「仕方がないわ。私、貴方の妻ですわねえ」

時子は念を押すやうに云つた。重吉はその顔、艶のない顔をぢつと見詰めたが、それを「わが妻」の顔とするのが不思議なやうだつた。で、答へもしなかつた。

話はそれきり切れてしまつた。時子は夫の外へ出た間々に、「お釋迦様へお詣りするのを楽しみにしてゐた。お百度は踏みかねたが、屢々腕をまくつて、タハシで石佛を洗つたりした。そして折々は門外の茶店から駄菓子を買つて来て、おやつにそれを夫の前に出した。

重吉の氣付かぬ間に、「奥様のお釋迦詣で」が近所の噂となつた。

幽寂の境に觸れた時

數年前獨りで十和田湖畔へ旅行したことがあつた。青森から秋田の方へ廻つてゐた途中ふと思ひついたので、地理をよく調べもせず、驛夫に大略の道順を訊いただけで足を向けたのであつたが、この驛夫が十和田湖の事はよく知つてゐなかつたことがあとで分つた。大館から秋田鐵道に乗換へて毛馬内で下車すれ

ば、あとは自動車か車で湖水の上の發荷畔まで樂に行けるものを、私は大館から小坂鐵道で小坂の鐵山地まで行つた。其處で一泊して、その翌日案内者を雇つて五里の山道を湖水へ向つたが、五月一日であつたのに、その年は雪の多かつた年で、山上には積雪が二三尺もあつて、道が分らなかつた。役にも立たない冒険をすることを後悔しながら、後へ引返す譯にも行かなくなつて、日暮頃までかかつてやう／＼湖畔の茶店へ着いた。そのこの圍爐裏で温まつてから、小舟に乗つて宿屋まで行つたが、その小舟の上でこそ私は、珍らしく「幽寂の境に觸れた」のであつた。

かういふ光景を空想して、昔の詩人は、地獄を離れ淨罪の島へ渡る水路を唄つたのであらうが、詩を缺いてゐる私は、その時の氣持を十分に文字に現はすことが出来ない。山上の湖水と宵月と自分とが融和して一つになつたやうな氣持もした。幽寂の境に徹した時には、歌も句も出るものぢやないやうにも思はれる。

〔文壇劇評〕の「幽寂の境に觸れた時」より

毒

(一)

「一日午後晴雨に關らず、是非お訪ね申べく候につき、御在宅なさるやう願上候」と云ふ、湯原からの手紙を見ると、香取元一は扇を破めた。静かな沼の水に小石一つ投込まれたやうな氣がした。

春の末頃からの憂鬱症が、夏になつて激しくなつてゐたので、彼れは暫らく懇意な人との往來も絶ち、行馴れた處へも足踏みせず、能ふ限り人を避けて、自分の部屋を修道院のやうにして、心を落着けようとしてゐたが、この手紙一つでそれが最早破れさうに見えた。其處の明るい障子に醜い人影、煩さい世の影が差したやうに思はれた。

「お待ち申してゐます」と、折返して返事を認めたが、ふと思付いて、「私の部屋は取散らしてゐますから、近所の××軒へお出で下さい。正午過ぎに行つてお待ち申してゐます」と、書直

した。彼れはせめて自分の部屋だけは今暫らく濁したくなかつた。蜘蛛の巣や鼠の糞で汚されようとも、繁吹に窓を濡されようとも構はないが、人臭い息で汚したくはなかつた。

深夜に目醒めると、幾多の鼠が壁を攀ち障子を動かし、鏡い聲を立ててゐる。彼れは見えぬ鼠の姿を暗闇の中に描きながら、見えぬ知人の姿を心に浮べる。荒寺に遁籠つた弱武者が經て来た事を思出すやうに思出して見る。と、枕近くキ、ツと鳴聲立てて駈けて来る鼠の足音に驚かされるやうに、深く知合つてゐた或男や或女の不氣味な素振や言葉が、突如に其處へ生々と現はれて心を驚かすこともあつた。

今その人達は何處に寝て、どんな夢を見てゐるだらう。何を企んでゐるだらう？ 彼れは身に染みる夜の淋しき不氣味さに慄いて、明るい光に包まれた人の笑顔が慕はしかつたが、さて誰れに會ひたいと云ふ當てはなかつた。

た。分隔てなく交つて、可成りの執着をも持つてゐた男や女も、この頃の夜の思田には、只色の褪せた興のない單調な姿となつて現はれて、何故あんなに執着してゐたのかと怪まれるやうになつてゐた。そして、そんな人達に接してゐたため、自分の目も鼻も皮膚も、疲らされ荒らされて、心の艶を失ふやうになつたのだと思はれた。

彼れは今までの生活の思はしくもあり、堪へがたくもなると共に、僅かな報酬のために忙しかつた職業をも不意に止めてしまつた。自分のもつた親から授けられた少しの財産は略々使ひつくしてはゐるものの、半年や一年は遊んでゐても餓死をしさうではない。で、それ一つを手頼りなき世の手頼りとして、心も身體も休ませて、再び新しい力の湧いて来るのを待つてゐた。

折々は新しい書物をも讀んだ。子供の時分温かい縁側で夢心で物語を讀耽つてゐたやうに、朝日の流れ込む畳の上で、珍らしい書物を開いて見た。散歩するにも、人通りの少ない静かな町を選んだ。屢々程近い郊外へ出て、木蔭に憩うたり、大根畑や田の畦を矢鱈に歩いたりして、都會の中の人と人との關係をつとめて

頭から拭去らうとすることもあつた。

目を重ねるにつれて、彼は怪しみの餘りに、竊かに下町の雑沓場へも出て行つた。芝居や寄席をも覗いて見た。しかし、答人でもあるやうに、知人には近づくがず、その目を避けるやうにしてゐた。下女とも浮世囃一つするではなく、家の中は何時も寂としてゐた。

彼は或夜ふとこんなことを思つた。これで二年も三年も何處へも出勤せず、知人の家へも顔出ししないであつたならば、これまでの香取元一に對する世の人の好悪の念は自ら薄らいで、自分の名さへも忘れられるかも知れない。忘れられた自分は新に生れた人となつて、二十幾年の間付纏はれてゐた香取と云ふ名に累はされないので、自由自在の心のまゝの生活が出来るかも知れない。顛へつきたいやうに懐かしい新しい世界が其處に現はれて来るかも知れぬ。

さう思ふと、先祖代々の香取と云ふ名が堪へがたい程憎くなつた。この名を包んださまの記憶が忌はしくなつた。

たとひ人間に符牒が必要であつても、一つの名を名乗り通して、窮屈な思ひをしなくてもよい。祖父や父の忌はしい所行や、自分自身の愚

かな陳腐な所行を聯想させるやうな香取と云ふ名を棄てて、新しい名をつけて見た。

彼は晴々しい顔立の女の紅い唇から異つた名によつて自分を呼ばれたかつた。晴々しい顔立をした男の口から異つた名によつて自分を呼ばれたかつた。

TとかSとかの襷せた唇から出る「香取さん」と云ふ聲は、最早血を湧立たす力を失つてゐる。

だが、湯原の手紙は稍々薄らぎかけた過去を意地悪く呼びさせた。その見苦しい失策や、淺ましい行爲や、多くの知人には知られぬことまでも、湯原の頭には鮮やかに刻まれてゐる。脇の下の痣でも腰の腫物の痕でも、彼れの目には残つてゐる。

で、香取はその手紙を見ながら、自分が古い衣服を脱ぎ棄てようとする場合の一番強い邪魔物は、彼れ湯原であるやうに思つた。たとひ、自分が聖人君子に豹變しようとも、天一坊に早變りしようとも、昔の汚れ衣を突付けて、化の皮を剥がうとするのは、彼れ湯原であると思はれた。どんなに異つた装ひを擬らしても、彼れは一目で自分を見現はすことが出来る。「元一君あの時はかうだつたねえ」と、彼れが

鈍い聲で何気なく云ふことも、嚇されるやうに聞えて、身が縮こまることもあつた。

腹の中に悪意のない、むしろお人よしと云つていゝ男だと思ひながら、香取の目には自分の心を曇らすもののやうに見えた。で、久しくその家へは近づかないであつたのだが、どんな用事があつて、わざわざ訪ねて来るのだらう？ 暫らく誰れからも浮世囃を聞かされず、自分の口も啞のやうに堅く噤まれてゐたものを。

隠れ家の扉は湯原の手で開かれたくはなかつた。

(二)

香取は翌日久振り、××軒の階子段を上つた。

其處の二階は午後の濁つた日光を眞向に受けて、眩しいほど明るかつた。疊の上に置かれた低いテーブルの白布には處々黄ろい斑點があつた。

彼れは乾いた口を一杯の苦い珈琲で濕して、そのテーブルに頬杖ついて、湯原を待つ間の退屈を醒ましに、持つて来た書物を開いた。左程心を惹かれるでもなく、只白い滑かな紙に浮上つた鮮明な文字を、目先にさらせてゐるのに過ぎ

なかつたが、ふと、あるページに目が留まつた。心を籠めて同じ處を讀返した。そして、文字の間の人影を濃く心に浮べようとした。

その人はウェエヌの貴婦人だつた。類稀なる美人だつた。或時自分の身を古の名高い女神の彫像のやうに、美しい甲冑で裝ひ、その姿をある名畫工に描かされた。若い美しい盛りに、かうして永久に自分の姿を世に留めて置いて、花の色の褪せるに先んじて、人の目から身を隠してしまつた。一度にてもその面影に接した者に、些しの衰へた様をも見せたくはなかつた。

で、いよいよ今日を最後と自分で定めた日には、華美を極めた離別の宴を張つて、扮裝を凝らして其處へ現はれ、その翌日から、二三の召使ひを連れて、壁を廻らした庭園の中の静かな家に蟄居した。そして、幾年も絶えて人に會ふことなく、只一人で静かに一生を終るのを待つてゐた。家の内にはどの部屋にも鏡を置くことを許さない。で、次第に自分で自分の顔をさへ忘れるやうになつた。親兄弟でも友人でも一歩も此處の門を滑ることを許されない。

世の人にはこの貴婦人は昔の物語の美女のやうに思はれ出した。朽葉の散つた濕つた狭い道に立つて階上を見上げると、左右の窓は皆鎖

され扉は釘付けにされてゐる。只一つ婢僕の通ふ路のみ残されて、其處から生きた死人への食物が運ばれてゐる。——

香取は永久に美しく生きんとする人間の可憐しい望みと思つた。永久に世の人に讚美された強い慾望を其處に見た。その貴婦人は鎖された窓の中で、何を思ひ何を描いて、最終の日を待つてゐるだらう。幽かに洩れて来る戸外の馬車の音や人の騒ぎを聞いて、何を感じてゐるだらう。隙間洩る温かい光を見ても、庭の木の間で囀る雀の聲を聞いても、些し心も動かさないうでゐられるだらうか。籠の中に落へられて日數を經てゐる林檎が、昔の驪の失せて、日に／＼萎びても、自ら悲まぬやうに、窓の中の女も次第に衰へる自分を、平氣で見えてゐられるだらうか。

* Prisoner of Time : 書物の上の濃い黒い文字が、強く彼れの目に映つた。何處か見たことのある鎌を手にした西洋の神の姿が、ぼんやり思出された。その貴婦人の窓の側には、時の神が鎌を磨澄して待つてゐる。…彼れは心の中でそんな繪をつくつてゐたが、やがて、書を閉ぢて、目上げて煙草を吸ひ出した。壁に掛つてゐる卑しい裸體の寫眞版——おのれの

醜い姿を露出しにして恥づる氣もない女の繪を見るときもなく見てゐたが、すると、ふと、自分の目で見たある實在の女の姿が記憶から浮出た。その繪の女やあの物語の女とは色が違つて、生々しく實感を動かすやうに浮んだ、それは盲目の女だつた。

ある名高い會社の重役の一人娘で、春丈がすなりとして、色が白くて日鼻立が鮮かで、多人数の中へ出ては際立つて日に付く女だつた。金持の娘らしく聲澤に育つてゐたが、學課の出来榮も人並勝れたほどだつた。所が十八の春一夜の中に、二つの目が一度に物を見る方を失つた。父親の悪疾を受けてゐたためだとかで、名醫に診せても何の甲斐もなかつた。

「從姉の縁談を聞いて焦れて／＼仕様がないうですつて。焦れ出すと、いゝ着物でも何でも引裂くんですよ」と、それを見て來た人から聞いたことがある。

白く揃つた前齒を袖口に當ててピリ／＼と嘸裂くさうだ。側に仕へてゐる者も、稍々もすれば、端な女らしくない舉動に愛想を盡かして、お傷はしいと思ふ心も無くなるさうだ。が、その娘も心が落着いて機嫌がよくて、

顔に淋しい微笑を浮べることがある。そんな日にはどうかすると新橋へ行つてみたいと云ひ出す。で、自ら進んで髪を結つて入浴して、家中の者に助けられて盛装して、ダイヤの指環や金鐘を煉かして馬車に乗る。迂回して日本橋から大通を、周囲の物音に耳を留めながら、停車場まで勇ましく駆けつけさせる。そして付添の女に手を引かれながら、待合室へ入つたり、プラットホームに立つてゐたりして、悦しさに時を過ごすことがある。

何が楽しいと云つて、その娘にはお粧飾して人中へ出るくらの楽しいことはなさうだと云はれてゐる。

せめては大勢の人に見られたさに、停車場まで出懸けて行く。「色氣づいてるから困るんですよ」と、噂を傳へた女が付足した。

「ぢや、早く婚を取つてやつたらいいでせう。金持だから幾らでも候補者があるでせう」と彼れが答へると、

「でも、誰れでもと云ふ譯には行きませんからね」

「盲人にでも男振のよし悪しが分るでせうか」

「さあ、周囲の者の話で感付くでせうね」

一種の興味がある。……だけど、情が深過ぎて弱るでせうね」
彼は座輿のやうに何気なく話した言葉を思出した。そして、今思ふと、その不具の女に對して、眞面目に心を寄せられさうな氣分になるのを覺えた。世の人の思出にのみ美しい影を残して、戸鎖された窓の中に生きながらの木乃伊となつてゐる貴婦人の冷たい頬よりも、人臭い息と埃と油煙の間に、自分の醜い眼を曝してゐる女の燃ゆるやうな温かい唇の方が慕はしくなつた。

で、彼はその盲目の女を今一度見たいやうな氣がした。

(三)

食事時を外れてゐるので、客の出入はなかつた。家の中は寂としてゐる。雀が窓近く来て頻りに囁つたり、羽音を立てたりしてゐたが、それが不調のやうに單調な暮しい聲ではな

くて、静まりかける彼れの空想を揺動かした。一羽は影を映して軒先を飛んで行つた。日光は次第に障子の下へ沈んで、黄ばんだ弱い色を映した。

香取は約東の時の餘程過ぎてゐるのに、待人

の來もせねば、違約の通知をも齎さぬのをさして待遠しがりもせず、不平にも思はず、只快く静かに暮れて行く秋の目を、茫然見てゐた。このまゝで湯原が來なければ、やうな氣がした。その煩はしい言葉を聞かされなければと思はれた。今少しして日光が窓を離れたら、一人で食事をして此處を出て行かうと決めてゐたが、やがて、階子段に足音がした。穩かな部屋

の空気を搔亂すやうに慌しい音を立てて上つて來た。香取は夢から醒めたやうに心を取直した。

「非常に遅れて濟まなかつた、和泉町で話が面倒になつたから」と、湯原は息をはずませてテーブルの側に胡坐を掻いて、洋服の上衣を脱ぎながら、「急いだから暑い、今年は暑さが長かつたね」と云つて、部屋を見廻し、「君はよく此處へ來るんかね」

言葉付も慌しがつた。ポツケットから、ゴールデンバットを出して、爪の延びた指で吸口を嵌めて火を點けた。臭い匂ひが青い煙につれてその口から流れ出た。

香取は一度この煙草の悪毒が如激に酔つてからは、その臭氣を嗅いでも逆付きさうな氣持になる。で、自ら煙を遮けるやうにして後退りし

て、障子を開けた。早稻田の森の方まで鮮かに見渡された。窓の下では少女が麵麴屑を入れた籠を持って、茫然往來を眺めてゐる。

「何か食べますか」と云つて、香取は窓から首を出してその少女を呼んだ。そして湯原が今にも言出しさうな要談の一刻でも、延びるのを望んでゐた。が、湯原は素振の忙しさうなのに似合はず、直ぐには用向きを口にしないで、この頃の世間の出来事を話したり、相手の近狀を訊いたりした。

「僕はこの頃は新聞も讀んでゐないんです、家に居るか、この近所を散歩するか、その外滅多に人にも會ひません。出来れば今年一杯かうして、何もしないで暮したいと思ひます」と、香取は沈んだ聲で云つた。

「君も可成り忙しい思ひをしてゐたのだから、今年中ぐらゐ遊んでてもいいさ。それだけの餘裕があるのは、僕等に比べて君は仕合せだよ。僕はこれで二十歳の時から自分の腕で飯を食つて来たんだが、三十五の今日まで、只の十日だつて氣儘に遊んでたことはいからねえ。今年はせめて一晩泊りでもいゝから、君達と一緒に紅葉を見に田舎へ行つたらと思ふんだが、それも一寸六ヶ敷さうだ」

「池田に住んで大阪の郵便局へ通つてゐた時分には、休暇毎に箕面へ遊びに出掛けた」と、その溪間の紅葉の美しさを話出したが、香取は湯原の顔のあの時分と少しも違はぬことを思つてゐた。初めて下谷の下宿で會つた十年前に比べてもさしたる相違が見えぬやうだ。浮世の塵を浴びて來てゐながら、その濃い眉と黄ばんだ細い眼と脂切つた無神経らしい肥つた頬とは時の腐蝕を受けてゐない。

「君は病氣と云ふものを知らないでせう」香取はやがて前に置かれた麵麴を裂きながら羨ましさうに相手を見上げて訊いた。

「さうでもないね、これで生身だから」と、湯原は肌の寒さを感じて上衣を着て、僕もこの頃はどうかすると頭の痛むことがあるんだよ。身體の調子が少し狂つて來たらしい」と、眉を擡めて首を捻つた。

「君でもさうですか、憎いほど頑健に見えるけど」

「まだ弱つちやならんのだが。これから仕事をしよつてんだから」

湯原はさう云つて目を据ゑて、様子を索るやうに香取の顔を見て、「そこで君に一つ難題を提出すんだがね」と、微笑しながら言難さうに云

つた。

香取は目を上げて黙つてゐた。二三ヶ月世の煩さい關係を離れてゐたのが、その男の一言で無難にも破れてしまひさうに思はれた。まだ言出さぬ先から、その厚い唇や黄ろく濁つた白目や、臭い煙草の息が、言はるべき用事の内容の前觸れしてゐた。

で、煩さいこと怖いことの自分の身に振掛かるのを待つてゐると、

「外でもないがね、お多代的一件だがね」と、湯原は軽く切出した。「あれを當分君の家に預つて貰へんだらうか。なに、ほんの一寸の間でいゝんだがね……食料ぐらゐ僕の方から出していいよ。君の家にも汚れ物が溜つてゐるだらうから、その始末でもさすつもりで、少しの間置いて呉れないだらうか」

「え」と、香取は生返事した。そして、お多代の色の白い瘦せたヒステリーらしい顔を中心に浮べた。

「彼女があるかどうかどうも家の中が面白くないんだ。どうせ何處かへ片付けようとは思つてゐるんだが、今直ぐにと云ふ譯にも行かないし、實は僕も困つてゐるんだよ。和泉町へもその相談を持ちかけたんだが、彼家も大人數だから迷惑らしい

んだ。それは強ひて頼めば置いて呉れんこともないけど、何だか氣の毒なやうだね」
「彼家は駄目でせう、家の人数を減らしたい位に思つてるんだから」

香取は俯首いてナイフとフォークを動かしながら、相手の要求の意味を考へてゐた。上野町の湯原の家の中を思出して、そのゴタついてゐる様を想像してゐた。そして、自分がその混雑の中へ入つて行く由縁はないやうに思はれた。

沈黙が暫らく続いた。湯原は肉を含んでは、口と喉とで音を立ててゐるが、やがて、ナイフを置いて大きな息を吐いた。香取は夢から醒めたやうに目を上げて、

「僕は今一人なんですからね、若い者が一人ゐる處へ多代さんを泊めると云ふの」と言流んで、「他人に彼此云はれる位構ひもしないけれど……」

「だけど彼れならそんな心配は入らないよ」と、湯原は應被せるやうに云つて、「素性が分つてるんだもの。湯原の妻の従妹を預つてるんだと云へば何でもないぢやないか。それに君一人と云つたつて、下女もゐるんだしね」
「だけど、少し困りますねえ」と、香取は強ひて

口元に笑ひを浮べた。
「さうかなあ。外の事とは違つて無理にとも云へないし、僕も外の方法を考へるかね……」
に、田舎へ追返せばいいんだが、それも可哀想だと思つてね」

湯原は最早止まつたらしかつたが、さうなると香取は多少氣の毒にもなつた。上京の當座世話になつたこともあり、可成り面倒を掛けてゐるのに、その人の折入つての頼みを辛氣なく斥けたのが、氣の毒になつた。で、その理合せに、「酒を飲みますかと、機嫌を取るやうに云つた。この男の酒癖の悪いことはよく知つてゐるので、成るべく酒の相手にはならぬやうにしてゐるが、わざ／＼來たものをこのまゝで歸すのが變だつた。

「あゝ。先つきからさう思つてたんだよ。折角御馳走になるのに酒の氣がないと、どうも物足らない」と、湯原は急に元氣づいて、「ぼんの二三杯おしるしだけでいい。七時迄に本郷へ廻らなくちやならんのだから」と、時計を出して見た。

香取は自分で電氣を點けて、新に食物と酒とを命じた。彼れは永らく酒の香ひさへ嗅いだことがなかつた。いろ／＼の世の快樂に遠ざか

つたことが思出された。
「君はあまりやれん方だね、僕はいくら貧乏してもこの味だけは忘れられんよ。銚子が一本此處へ立つてるだけでも、何だか座が陽氣になるぢやないか」

湯原はこんなことを云ひながら、料理には手を付けず、甘さうに飲出した。そして時々思出したやうに時計を見ては、「まだ早い」とか呟いた。銚子が二本空になつた頃、香取の顔も紅くなつた。で、もうこれ切りと、珈琲を云付けたが、湯原は飽足らぬらしく、

「君にばかり奢らせちや濟まないから僕が麥酒を奢らう」と云つて、止められるも肯かず、蕨口から銀貨を出して、それを數へながら、自分で階下へ下りて、麥酒二本の代を拂つて來た。そして、その二本を兩手でぶら下げて、ニタ／＼笑ひながら元の座に戻つた。

食卓は酒の雫や料理の汁で見苦しく汚れた。空氣は「ゴールデンパット」の臭ひを含んでその邊に漂うた。湯原はその濁つた空氣の中で次第に生々した顔付になつたが、
「しかし、君はどう思ふね。多代は一才いゝ女ぢやないか」と突如に訊いた。
「えゝ、悪い容色ぢやないでせうね。色は白い

し、細そりしてて姿はいゝし」と、香取は何気なく云つた。

「何處かい、貰ひ手はないものかね」

「そりやあるでせう。：：それよりも看護婦にするとか、呉服屋の店員にするとか云つてたのは、もう止めにしたんですか」

「彼女も我儘だから、中々此方の云ふ通りにやしないよ」

湯原はふと考込んだが、やがて、「僕も今度と云ふ今度は弱切つてるんだ、思案に暮れると云ふ次第だよ」と、さも心配さうに沈んだ聲で云つた。

「何故です？」

香取はその男が家庭のために弱つてゐるのをさして怪みはしないが、酒に酔ひながら、こんな歎息の聲を洩らすのを不思議に思つた。何時もなら直ぐに酒に酔潰されて、見苦しい眞似をし出すのに、今日は心の底に何處か酔はない所があるやうに見えた。

「どうかしたんですか」と、再び訊いた。

それに直ぐには答へないで、湯原はグビグビ麥酒を呑んでゐた。香取は氣が詰るやうになつた。

「彼れを君の家へ置いて貰へなけりや、當分僕

を置いて呉れないかね」

「君なら構ひませんが、何故です？」

「この頃家を逃出したくてならんのだよ。男が家を逃出すなんて、少し不見識な話だが、止むを得ずんばさうでもしなければ、僕も安心して夜のみ眠れないんだからね。人間として自分の家で寝てゐながら、夜中警戒してゐるのぢや憐れなものだよ」と、湯原は歎息して、一然し可笑しなもので、獨合點をして首肯した。

「多代さんがその原因なんですか。香取の心にもぼんやりその家の様子が浮んだ。

「まあ一度来て見たまへ、僕の妻も昔間は鼻唄なんか唄つて、シャン／＼働いてるが、夜になると氣が變になつて、隅っこへ行つては蹲んでメソ／＼泣出すんだよ。先日も夜中にランプを點けてコソ／＼させてるから、起きて見ると遺書を書いてやがるんだ。：：湯原は話しかけて、ふと脚氣が差して、「まあそんな話は止さうよ」と、口を噤んだ。

香取もさして詳しい事情を聞きたくはなかつた。麥酒も盡きたのを機會に、「もう歸りませうか」と、浮腰になつて促した。

「まあ、も少し僕の對手をして呉れたまへ」

湯原は押付けるやうな手付をして引留めて、

また裏口から銀貨を出して、「まだある／＼」と云ひながら、ヒョロ／＼と立上つて、麥酒を取りに階下へ下りた。一本鷲攫みにして上つて来て、香取の側に胡坐を掻いて、コツプを押付けてた。

「しかし、多代はいゝ女だらう。君はさう思はないか」と、再び同じ事を云つた。が、前よりも言葉に力を入れて目付も底氣味が悪かつた。

「一體赤ん坊の顔は男親に似るものだらうか、君はどう思ふ？」

「さあ。似たけりや變でせうね」

「妙なものだね。子供の顔は親に似る。：：それ所ぢやない、細君の顔が次第に亭主に似て、亭主の顔が次第に細君に似て来ると云ふぢやないか。何時か雑誌で讀んだことがあるよ。人間は何でも傳染力を持つてるんだね」と、鹿爪らしく云つて、「二長町の奴なんか皆な没分曉漢だが、君は僕の味方だらう」と、香取の手を握締めた。

二人とも手の平が温かかつた。香取は立上つて、帽子を被らせて追立てるやうにした。

湯原は追立てられながら、外へ出て、江戸川まで来たが、香取の手を離すと、わざと地べたに蹲んで動かなかつた。「今夜は君の家に泊るよ。置いてけ堀にするのは殘酷だよ」と哀れさ

うに云ふ。

「ぢや、僕が連れてつて上げよう」と、香取は弱り果てて俥を呼んだ。自分も俥に乗つて隨いて行くことにした。

「君の家へでも何處へでもいい處へ連れてつて呉れ。今夜はおれの家へは歸らないぞ。君とは古い友達だ」

湯原は俥の上で首垂れて叫んだ。

(四)

酔漢を乗せた車夫は曳離さうにして、振返り振返りのろく断出した。香取は俥の上で腕組して、紅い顔を冷い風に吹かせてゐた。湯原の云つた言葉を止切れ／＼に思出しながら、その後を追つてゐると、行先の家がどんなに變つてゐるかと思はれて、不気味な中に多少の面白さを覺えた。

「何處へおれを連れて行く？」と、酔漢は折々首を上げて叫んだ。

切通を下つて上野町近くなつた時分、香取の酔ひは醒めて、薄着の肌は寒くなつた。泥濘に沿うた湯原の家は軒燈が消えて、兩戸も鎖されてゐた。入口の柳の木の下に俥を卸させて、格子戸を開けると、内から女の足音がして、玄

關の障子が細く開いて、ぼんやり白い顔が現はれた。そして怪しさに薄暗い此方を見詰めた。

「湯原さんが酔拂つたから連れて歸りました」と云つて、關に倒れてゐる湯原を抱くやうにして玄關へ引摺り上げた。

茶の間からランプの光が流れ出て、立つてゐるお多代の顔を横から照らした。さして變れてはゐなかつた。後れ毛が白い頬に垂れてゐる。酒臭い息に顔を覆めて、湯原を茶の間へ連れて行かうとした。

「僕は此處で失禮します」と、香取は一寸會釋して歸りかけたが、今まで黙つてゐた湯原に俄かに呼留められて、暫らく迷つた。こんな處にゐては、厭なものを見せつけられさうな氣がしたが、それでも最少し踏留まつてゐたくもあつた。で、帽子を被つたまゝ茶の間へ入つて、長火鉢の側で煙草に火を點けた。部屋の中には以前のやうに取亂されてはゐなくて、拭掃除も行届いてゐる。ランプのほやも綺麗に磨かれて光は明るかつた。

「酒を出せ／＼と、湯原は起上つて、付元氣で叫んだ。が、反響はなかつた。お多代はお茶を入れて二人の側に置いて、静かに次の間へ入つ

て襖を締めた。

香取は耳を澄してゐたが、次の間には微かに衣摩れの音のするばかりで、外に物音はしなかつた。

「奥様は……小聲で訊くと、
「居るだらう」と、湯原も小聲で冷淡さうに答へたが、その聲は泥酔漢の聲ではなかつた。周圍に氣を兼ねてゐるやうだつた。

二人は暫らく黙つてゐた。香取は歸るべき機會を失つて、帽子を脱いで、茶箆の後の狭苦しい處に坐つた。劈痕の入つた黄い壁には、死迎れた弱々しい蚊が幾つも、光を慕つて匍つてゐる。

「久振りで奥様に會つて行きませう？」と、思切つて云つた。

「あゝ、會つてやりたまへ」と、湯原は答へたが、次の間へ知らせようとはしなかつた。

香取は立上りかけたが、その襖を無聲で開けるのが躊躇された。聲を掛けるのも變だつた。で、「何をしてゐるんです、寝てゐるんですか」と、小聲で訊いた。

「どうだか」と、湯原は眉を動かして、壁の方へ向つて、酒臭い息を強く吹出した。
襖一重隔てて怖いものでも住んでゐさうに

思はれた。香取は自分達の滔々聲をも陰気に感じた。

ふと次の間でも聲がした。お多代が何とか答へてゐたが、やがて襖が少し開いて、平顔の女が首を傾げて覗いて、「まあ元一さんと薄笑ひをした。そして、おづ／＼茶の間へ入つて来て、闕近く坐つた。落着かぬ日は頻りに目叩きしてゐる。髪はちやんと丸髷に結つて、衣服も見苦くはない。以前よりは小綺麗にしてゐる。

「暫らく御無沙汰しました」と、香取は堅くなつて挨拶した。

「ほんとに暫らくでしたわね。私、是非一度貴下にお目に掛りたかつたのですよ」と、細君は懐かしさうに云つて、早くも眼に涙を浴べた。

「近日書問何つて、國技館の菊見にでもお伴しませう。何時だつたか團子坂へ行つたことがありますでしたね」

「さうでしたねえ。だけど、私も菊見なんかに行かれはしませんよ。何處かへ奉公にでも出ようかと思つてますの。私など無教育で、何一つ藝は出来ないんですけれど、ほんの口過ぎさへ出来ればいゝんですから。…その事で元一さんにも相談したいと思つたのですよ、何處か私

のやうな者にでも勤まる處はありませんでせうか？」

「さうですなえ」

香取は答へ様もなく微笑してゐた。細君の顔は麻立てられてはゐるが、見てゐる中に次第に鬱陶しくなつた。

「一生のお願ひだから、心當りがあつたら訊いて見て下さいませ、私一人飯死しなければいゝんです。私もあの時刺袖でも覺えとけばよかつたんですけれど、今となつちや後悔してゐるんですけれど、あの時は家の世話をして呉れる者がなくつて、そんな譯に行かなかつたんですからねえ」と、細君はさも心細さうに云つた。

「何故そんな氣になつたんです」香取は眞面目に訊くべき折ではないと思ひながら、打切棒に訊いた。

「でも、私が居ると邪魔になるんですから」言葉は弱々しかつたが、目は角立つて、胸の多い顔中に神経が通つた。そして、両手で自分の胸を抱き締める様にした。

「何を云ふんだ、馬鹿！」湯原は聲を入れながら低く叫んだ。「誰れが邪魔にしたと云ふんだ？」と眉を蹙めて云つて、香取の方へ向いて、「何と云ふ量見だか、この頃懇意な者さへ

見れば、今君に云つたやうなことはかり云つてやがるんだよ」と、情なさうに云つた。

香取は相手の顔を見ないやうに首垂れた。細君は口を閉ぢたが、やがて足音を盗んで次の間へ入つて襖を締めた。

「あんな女ぢやなかつたが」と、湯原は溜息吐いて、「しかしこれまで随分貧乏な思ひばかりさせたのだから、僕も成るべく手荒なことはしないんだがね。君も昔からの知合ひだから、菊見にでも芝居見にでも連れ出して少し保養させてやつて呉れたまへ。若しも馬鹿な眞似でもされた日にや、當りばかりぢやない僕まで迷惑するからねえ」

「さうですなえ」香取は湯原の氣遣つてゐる「馬鹿な眞似」を思出して、不意に可笑しくなつた……

夫婦がまだ公然の結婚をしないで、神田の玩具屋の二階を借りて、人目を忍んでゐた時、細君は妊娠してゐながら、とても添送ける望みはなささうだと思つて、取逆上せて、弟んを喉に當てたことがあつた。「なに、あれは狂言だよ」と、和泉町の湯原の義兄が後で笑つてゐたので、側でハッ／＼してゐた。で、

「昔から細君にはそんな傾向があつたんですね」と、それを云出した。湯原はそんな昔を思出したくはなくて、碌にその話に乗つて來なかつたが、でも微笑を答へて、

「今夜は折角君が来て呉れたのだから愉快に話したいものだね」と、急に調子を和らげた。そして、次の間へ入つて、二人に向つて、宥めるやうに何か云つてゐたが、やがて、和服に着替へて、手を執るやうにして細君を連れて來た。

「これから元一君に時々遊びに來て貰ふやうにしたらいゝだらう」と、子供を賺すやうに云つて、明るい長火鉢の側に坐らせて、「何かないかい、お菓子でも」と訊いた。

細君は身籠りに立つて、茶筌笥を搜して、錆びたブリキの鑊の中から鹽煎餅を掴み出して、菓子皿へ移してゐたが、その間にお多代は「お湯へ」と、一寸膝をついて、斷つて、臺所の方から出て行つた。その下駄の音が門の外へ消えると、湯原は心が軽くなつたやうに賑かに口を利き出した。細君に汲んで來させたコップの水を一息に飲干して、快く大きな息を吹いた。

「今日は香取君の方へ廻つて御馳走になつたのだが、彼方の方は静かだから歩いてても気分が清々するよ。彼方へ移りたいもんだね。狭くて

もいゝから、庭のある瀟洒した家へ住みたいよ。そして僕も植木いぢりでもして、呑氣にやつて見たいな」と誰れに云ふともなく云つた。細君は燈火に顔を背けて何とも答へなかつた。

「どうせ二人切りだから、下女も手傳ひも入らないのだし、部屋借りをした時の思ひをすりや、どんな狭い家だつていゝんだからね。全體この家だつて、今の僕にや少し分に過ぎるんだ。」

湯原はそれとなくお多代を只の邪魔者扱ひして、夫婦切りの門靜な住ひを望むやうな口振りを裝うた。

「香取君の近所へ越して、お互ひにまたぎ々往來するやうになるのもいゝね。お互ひに氣心を知合つてるから、自然話合ふからね」と、相槌を打つて貰ひたさうに二人の顔を見た。

「だけど、あんな場末ぢや不便で仕方がありませんよ。奥様は僕の居る邊へ來たことはないでせう、一度遊びに入らつしやい。」

香取は二人の間を取做すやうに、何とか氣の利いたことを云はうと思つたが、こんな場合に相應しい言葉が見付からなかつた。

すると、その中細君は臺所の障子を開けて身を隠して、暫らくしても出て來なくなつた。「おい」と、やがて湯原は聲を掛けた。

振返つて耳を澄まして、二三度続け聲に呼んでも手答へがない。顔は自ら曇つて來た。「何をしてやがるんだ」と、呟きながら、彼れはランプを持つて臺所を覗いた。

香取も隨いて行つて肩越しに見た。細君は壁の側に蹲んでゐる。そして燈火が顔を射すと、すつと立上つて、目をシヨボク／＼させて、奥の間へ入つた。其處には針差の側に緋縮緬の切れなどが周圍に不似合な華美な色をして、ゴチャゴチャ置かれてゐるのがちらと見えた。

湯原は襖を締めて元の座へ歸つて、「どうしたんだか、この頃は矢鱈に着物を拵へたがるんだよ。戸外へは些とも出もしない癖に」と苦笑して、「これまで年中粗末な服装をさせても苦情は云はなかつたのだから、その埋合せだと思つて僕も無理な工面をして拵へてやることはあるんだが……」

細君はわざとあんな眞似をしてゐるんぢやないかと、香取はふと疑つた。そして、利田の御刀磨ぎなどを再び思出して、

「君も子供があつたらよかつたんですねえ」と、暫らくして云つた。あの時の腹の兒は生れると直ぐに死んだのである。

「うゝん」と、湯原は冷淡に答へて口を噤んだ。

其處へお多代は濡手拭で包んだ石鹼箱を持って歸つて来た。磨かれた白い顔は二人の目の前を掠めた。

「此處へ来て少しお話しなさい」と、香取は聲を掛けた。

「え」と、お多代は躊躇してゐたが、湯原も側から口を添へたので、其處に坐つて、茶を入替へたり、火鉢に炭を繼いだりした。

女と云ふ女には久しく近寄らなかつた香取の目の前に、白い手が動いたり油臭い髪匂の匂ひがした。すると、我れから思ひて避けるやうにしてゐた以前の女までも連想された。

そして、湯原の秘密がまさしくと其處に浮上つたやうな氣がして、何喰はぬ落ました顔が小憎らしくなつた。「お多代はいゝ女だらう」と、酔拂つて云つた言葉が、今その閉ぢた唇で一層力強く語られてゐるやうに思はれた。

で、心を留めて見てゐると、次第に豫て知つてゐるお多代と同じ人とは思はれぬほどに見直された。短い眉も尖つた鼻も元のまゝだが、何故だか、その顔に魅力があるやうに感ぜられた。細君のよりは見劣りする艶のない衣服を着て、銀杏返しも崩れかけてはゐるが、世帯簾れの影はなく、淋しい顔立の中に生々した光があつ

た。潤みのある黒瞳は相手次第でどんな誘惑に富んだ表情をもしやうだつた。

で、香取は湯原を側に置いてこの女を見てゐるのが苦しくなつた。その誘惑に富んだ表情を想像すると、神經が顫へるやうだつた。

何氣なく世間話をしながら、前に並んでゐた二人の秘密の道筋を心當てに描いてゐると、お多代の姿はますます彼れを焦躁すやうになつた。そして、どんな目鼻立の揃つた美しい女を此處へ連れて来たつて、それよりもお多代の方へ心が惹かれさうな氣がした。

此家の秘密をも細かに知りたくなつた。

「香取は何氣ない態で、
「貴女はずつと東京にゐるつもりなんですか」と、訊くと、

「いゝえ」とお多代はきつぱり云つて、「故郷から何とか返事がまゐりますか答ですか」
「ちや、歸ることに極つたんですか。何時だつたか、和泉町の叔母さんに會つたら、どうかして東京で暮らすんだとか云つてましたか、それも駄目になつたんですか？」

「どうですか。私など東京のやうな處では何も勤まりませんわ」と、お多代は日は光つた。と、一なに、駄目になつたつて譯ぢやないかと、湯

原は傍から慌てて打消して「まあいゝ」と、その話を握き止めるやうにした。そして、
「今日酔つた粉れに何か君に云つたかも知れんが、あれはあの場きりのことにしといて呉れたまへ。僕も少し考へ直さうと思ふから。いづれ今度の日曜あたりゆつくり君に會つて話をしよう」と香取に向つて云つた。

もう歸つて呉れよと云はぬばかりの口振だつた。

で、香取は急に歸支度した。もつと此家の内情に踏込んで訊きたがりながら、飽氣なく立上つて、「僕も久振りで此方へ出て來ると、あんな淋しい處へ歸りたくなくなりませぬ」と、戯談らしく云つた。

「さうかねえ。夜具があると泊つたつていゝんだが」

「もう永らく他所の家へは寢ませんよ」
「自分の家で氣樂に寝られれば、それ程結構なことはいゝ」

二人は立ちながらこんなことを云つてゐたが、ふと、細君が襖の側に寄つて首を傾げて此方に氣をつけてゐるのが、隙間から見えた。香取は變な氣持になつて、「奥様にもよろしく」と云つて、素早く戸外へ出た。

が、このまゝ直ぐ歸る氣にはなれなかつた。まだ宵の口で、左右の狭い町は賑かだつた。彼れは何方の道を取らうかと、門の前で目を迷はせたが、やがて、眞向ひの床屋の明るくて小綺麗なのに氣付くと其處へ入つた。

椅子に凭れて鏡に映る自身の顔を見ると、濃い髭が伸びて薄汚かつたが、頬の色は稍々元氣づいてゐた。慮げられた體力が次第に回復して、若い命の芽をまた吹いてゐるやうにも見え

た。眠くなりさうな快い氣持で髭を剃られながら、側の客の話を聞くともなく聞いてゐると、頻りに町内の噂がされてゐた。酒呑みの筆頭

は誰れだとか、女道樂の大關は誰れだとか、町内の美しい女や財産家をも數へ上げて、一々批評を加へてゐた。古着屋の裏の二階家にはこの頃小意氣な女が移つて來たが、どう見てもお妾だ、薬屋横町の突當りの空屋も借人が

出來たと見えて貸家札が剥がれたと、手に取るやうに町内の模様を威勢のいい聲で語られてゐた。その様子だと、直ぐ側の湯原の家の噂も出は

原の臺所から直ぐ前に見上げられるので、彼の心の心にもその狭い二階の様が想像されて、話を聞いてゐても面白かつた。

床屋を出ると、湯原の家の前を横目で見ながら通抜けて、廣小路の方へ出た。平生何の氣なしに散歩する時とは異つて、今夜は周囲の人通りや物音が妙に心を動搖させた。陰氣な細君の顔や、誘惑に當んだお多代の顔や、秘密に苦し

でゐた湯原の平凡な顔が、頭の中に輝つてゐて、只見て通る縁のない人の顔をも濁した。あの茶の間の重苦しい空氣に暫らく浸つてゐたためか、最早淡然として其處等の物を見ることが出來なくなつた。

で、彼れは所在なく江戸川行の電車に乗つて、空家のやうな自分の家へ歸つたが、茶の間では小さいランプの心を細めて、下女が居眠をしてゐた。「誰れも來なかつたかい」と、滅多に訊かないことを訊いた。

下女は其珍らしい聲に驚いた様にキョトクして、「いゝえ何方も」と答へた。香取は自分でマツチを擦つて暗い座敷に入つたが、すると、今まで荒廻つてゐた鼠が何處へか

逃込んで聲を収めた。早稻田座の打出しの太鼓の音が、何時もよりは陰立つて響いて來た。近所の家はもう寢静まつてゐるらしい。彼れは机の前に端坐して暫らく煙草を吸ひながら、側に散らかつてゐた書物や着物の元の儘に散らかつてゐるのを見た。

「何故上野町まで隨いて行つたらう。當分あなた家へ近寄りたくはなかつたのに」

彼れはついた興に乗つて、あの家の闕を跨いだことを悔いた。そして、もう當分は又と出掛けまい、江戸の昔噺の好きな爺さんや婆さんのおゐる和泉町の家や、その外の懇意な家へ行つても、湯原の家へは矢張遠ざかつて居ようと思つた。

が、雨月一つ隔てた外の廣い闇の世界に、あの三人の顔のみが鮮かに浮出て見えて、消さうとしても消し難くなつた。同じ屋根の下に三人が夜を過してゐるのが不思議にもなつた。互ひにどんな夢を見てゐるのだらう?

彼れはその不安な夢の中に引込まれながら、昔語りに聞いた荆轲道心の發心の山嶽を思出した。假寝をしてゐる妻と愛妾の髪が蛇になつて障子に影を映しながら鬨つたさうだが……さう思ふと、軒を並べた幾萬の人家が、寂と

して聲も立てずに、安らかに眠つてゐるのが不思議になつた。

耳を澄ますと、遠くでは犬が吠えてゐるばかり、直ぐ障子の側では、庭の楓の葉が囁くやうにサラ／＼音をたててゐる。

彼れは身に染みる淋しさに堪へられなくなつて、懇意だつた二三の男と女とへ珍らしく手紙を書いた。謙遜した文句で、相手の愛情を乞ふやうなことを書いて見た。そしてその中の誰れからでも、自分を思つて呉れる情に燃えた返事の貰へるやうにと望んだ。

(五)

その翌日は平生より遅く目を醒ました。縁側に差込んでゐる冴えた朝日は、彼れの心の底へ染込んで、その寢醒めを快くした。

起きると、暫らく狭い荒れた庭を彼方此方歩くのが、この頃の習慣になつてゐるので、この朝も無心で庭へ下立つて、光を浴びたが、ふと氣付くと、見馴れぬ白つぽい瘦せた小犬が目の前に足を伸して日向ぼつこしてゐる。近づいても身動きしないで、懐っこい細い目で此方を見た。

「何處の大だい、この犬は」と、下女を顧みて訊いた。

「何處の大ですか、今朝半生屋に隨いて来ましたんです。儼じさうで可哀想だから、御飯をやるよ、悦しさにしてよく食べましたんですよ」と、下女は縁側へ出て来て、「白々」と舌たるい聲で呼んだ。

「食物なんか遣ると、出て行かなくなるぜ。外へ出してしまへ」

かう命ぜられて、下女は木戸を開けて、劬り追出さうとしたが、小犬は何時かその裾を濡り抜けては、庭の方へ舞戻つた。

香取はその様を見ながら朝食を食べてゐたが、食事が済むと、「ちや、おれが外へ連出してやらう」と云つて、小犬を誘つて、木戸から出て行つた。小犬は鼻を蠢かし尾を振つて、後になり先になり、さも新に主人を得たのを喜んでゐるやうだつた。

長い垣根を傳つて表通へ出ると、易者の黄ろい看板と、白塗の小さい板に書いたかみゆひの文字が先づ目に付く。香取の頭の曇り加減で、その二つの看板が怪しさうにも、手頼りなささうにも見えることがあつたが、今日はそれが澄んだ空氣の中に懐かしく色取られた。格子から顔を出した男の顔も暗々しかつた。

淋しい夜を送つた後で、こんな氣持にたれた

のが、香取は涙ぐまれるほど悦しなくてはならない。一度は厭がつてゐた和泉町の戸田の家でも、今日は自分を喜んで迎へて呉れさうに思はれたので、直ぐその方へ足を向けた。神樂坂下から、小犬を見返りもしないで電車に乗つた。

和泉橋を渡つて、林檎や柿や秋の果物の並んだ大きな店の側を曲つて、横へ外れると三味線の音が渡れてゐた。切髪品のいゝ戸田の婆さんが、孫に長唄を教へてゐるんだと直ぐ氣付いた。格子戸の前に立つと、今客を送出した細君が、「まあ、お珍らしい」と微笑を湛へた。

「上野町へも些とも入らつしやらないつて、何時だつたか、湯原さんが云つてましたよ。どうなすつたんです」

「昨夜彼家へ行きました」

「さう、どんな風でした彼家は？…今日お多代さんが此處へ来る筈ですよ」

その言葉が意味ありげに、香取の耳に響いたが、「さうですか」と何氣なく答へて、奥へ通つた。

湯原の家とは異つて、座敷の裝飾も行届いて、床の間には白い花瓶に黄白の菊が咲亂れて、掛物の墨繪の前に鮮明な色を浮かせた。張立ての

障子には明るい日が差してゐた。
香取はその光を自分の家よりもみえてゐるやうに思つた。細君が茶を入れて来る間、中二階の隠居部屋の意味に耳を傾けてゐると、「うたふ小唄の聲高輪に」と云ふ所を頻りに繰返してゐる。

「大分六ヶ敷いものを習ふやうになつたんですね」と、細君を見て云ふと、
「この頃は自分もお稽古が樂みになつたんでせう」と、細君も一寸耳を擧げてたが、さして興味もないらしく、其方へは話を持つて行かないで、一貴下は此頃何處へもお勤めにならないんですか」と訊いた。

香取はそれに答へるのが厭だつたが、仕方なしに、「え、私には勤まりさうな仕事が見つからんですから」
「そんな事はありませんまいよ。……では、お家で勉強していらつしやるの」
「え、」
「貴方はまだお若いんだから、御出世なさるのもこれからですわねえ」

「え、」
細君とのこんな話は、香取には少しも面白くなかつた。せめて、隠居が稽古を終つてこの座

に加はつて呉れ、はと望んだが、彼方は「チャンチャン」と、合の手が長く續いて、何時果てさうでもない。で、暫らくして、
「多代さんは何しに来るんです」と、香取はふと氣を變へて訊いた。
「一寸面倒な事があるんですの。あの女にも困つてしまふ……」細君は調子に乗つて云ひかけたが、「このまゝで内所で済ませたいと、私達

は思つてるんですがね。どうなりませうか」と言葉を決した。
「そんな大問題があるんですかね」香取は些しも譚を知らぬものやうに裝つた。
「それも成るべくなら、私一人でそつと始末を付けたいと思つてるんですが、今日あの女が来て何と云ひますか」

細君は湯原の家の事を言出しかけては隠すやうにしてゐたが、その一言々々が次第に香取の胸を曇らせた。昨夕上野町の茶の間にゐた時と同じやうな氣持になつた。そして、お多代が周囲の醜い意地の悪い人間に、汚されて苦められてゐるやうにのみ思はれ出した。この細君だつて口先で情深きうなことを云ふばかりで、その實薄情な人なんだから、どんな間違つた差出口をするかも知れはしない。

すると、どうかして自分の手で助けてやりたくて堪らなくなつた。お多代の胸に収めてゐる心配を打明けさせて力になつてやりたい。一日も湯原のやうな男の側へは、置くに忍びない。
で、香取は竊かにその方法を考へ込んで、細君が何を話しかけても、空々しい返事ばかりしてゐた。三味線の音までも陰氣になつて来た。
と、やがて玄關に女の聲がして、細君は立つて行つた。座敷へ連れて来るのかと、香取は心構へしてゐたが、お多代は茶の間へ連れて

行かれたやうだつた。
で、香取は一人座敷で所在なげに煙草を吹かしながら、次第に單調になつて煩さく聞え出した中二階の稽古三味線の音と、止切れぬに漏れて来る茶の間の話聲とを聞くともなく聞いてゐた。すると、兩方からの物音が、今朝から珍らしく徹透るやうに洩れてゐた心を、次第に濁してしまつた。あの婆さんが興に乗つて樂さうに彈出す音や、爺さんが微酔ひの上機嫌で話出す夢のやうな昔話は、彼の耳に快い龍眼歌となつて響くので、知人の中でもこの和泉町の老人ばかりは、死んだ祖父や祖母を思ひ出させるほどに懐かしかつたが、今日は和泉町の空氣も不純な波動で亂れてゐるやうだつた。

すると、どうかして自分の手で助けてやりたくて堪らなくなつた。お多代の胸に収めてゐる心配を打明けさせて力になつてやりたい。一日も湯原のやうな男の側へは、置くに忍びない。
で、香取は竊かにその方法を考へ込んで、細君が何を話しかけても、空々しい返事ばかりしてゐた。三味線の音までも陰氣になつて来た。
と、やがて玄關に女の聲がして、細君は立つて行つた。座敷へ連れて来るのかと、香取は心構へしてゐたが、お多代は茶の間へ連れて

行かれたやうだつた。
で、香取は一人座敷で所在なげに煙草を吹かしながら、次第に單調になつて煩さく聞え出した中二階の稽古三味線の音と、止切れぬに漏れて来る茶の間の話聲とを聞くともなく聞いてゐた。すると、兩方からの物音が、今朝から珍らしく徹透るやうに洩れてゐた心を、次第に濁してしまつた。あの婆さんが興に乗つて樂さうに彈出す音や、爺さんが微酔ひの上機嫌で話出す夢のやうな昔話は、彼の耳に快い龍眼歌となつて響くので、知人の中でもこの和泉町の老人ばかりは、死んだ祖父や祖母を思ひ出させるほどに懐かしかつたが、今日は和泉町の空氣も不純な波動で亂れてゐるやうだつた。

すると、どうかして自分の手で助けてやりたくて堪らなくなつた。お多代の胸に収めてゐる心配を打明けさせて力になつてやりたい。一日も湯原のやうな男の側へは、置くに忍びない。
で、香取は竊かにその方法を考へ込んで、細君が何を話しかけても、空々しい返事ばかりしてゐた。三味線の音までも陰氣になつて来た。
と、やがて玄關に女の聲がして、細君は立つて行つた。座敷へ連れて来るのかと、香取は心構へしてゐたが、お多代は茶の間へ連れて

香取の傷つけられた神經は、永い間茫然として平氣ではゐられなかつた。そして、お多代が此家へ来た用事と云ふのが、さまざまの幻想の種となつて、三味線の音に妨げられて聞取れない茶の間の音々聲が、針のやうに胸に觸れた。上野町で見た顔と、「私のやうな者は東京では何も勤まりません」と、寂しさに云つた言葉とが、目と耳とに粘付いてゐるやうに思出されて、邪氣のない田舎の女が希望を挫いて來たものを、酷たらしく苦めて傷けて歸すのが、痛々しかつた。自分に關係のない他所事とは思はれなくなつた。

で、今此家の細君がどんな智慧を付けてゐるのか、憐れなる女の運がそれで極まるやうに氣遣はれて、焦躁かしがつてゐたが、暫らくして滔々話は止んで、細君は「貴女も此方へ入らつしやい」と云つて座敷の方へ來た。お多代も後から隨いて來た。

「退屈だつたでせう、一人ぼつちで」と、細君は笑顔をして、障子を開放した。

「私はもうお暇します」と、香取は接穂なく云つて、今にも立上りさうな風をした。

「どうしたんです、稀に入らしつたのに」細君は不審さうに顔を見上げた。

「今日一寸行かなくつちやならん家があるんです」と、香取は言濁したが、直ぐに立上りもしなかつた。

「久振りでせう、御馳走しようと思つてののですけれど」と、細君は笑ひながら戯談らしく云つて、斜にお多代の方を見て、「これで香取さんも、一時は面白いことがあつたんですよ、随分お惚氣を聞かされたの」と、蓮葉な聲で云つた。

が、お多代は口元を一寸綻ばせばかりだつた。香取は「話らぬ事を仰山さうに喋舌られるのを恐れてゐた。細君は相手が興がらうとも厭がらうとも關はない自分許り面白さうに、話を進めようとして、

「何とか云ひましたね、あの女は」と、香取の方へ首を向けて、「湯原さんのお話だと、大變別嬪だつたさうですね。私、一度その人の寫眞でも見たいと思つて、幾度もお頼みしたのに、どうしても見せて下さらないんですね」

「私の家には女の寫眞なんか一枚もありませんよと、香取は卒氣なく答へて、細君が湯原から聞いた事に、尾に尾をつけて喋舌り出さぬ先にと、お多代に向つて、「貴女はずつと家へ歸るんですか」と訊いた。

「え、直ぐ歸りますわ」

「僕も上野の方へ行くんです」香取はせめて歸りに道連れになつてでも、女の今の境遇を訊きたかつた。

「まあ、お婆さんに會つてらつしやい、お珍らしいんだから」

かう云つて、細君は頻りに引留めようとしたが、香取は浮腰になつて、お多代が立ちもやらず、庭を見ながら愚圖々々してゐるのを焦躁かしがつてゐた。

「貴女はまだゐるんですか、僕はもう出掛けなくちゃ」と、何時だか時計の鳴り出すと、つと立上つて縁側へ出て、お多代を促すやうに云つた。

お多代もそれを機會に、「では私も」と、細君に暇を告げたが、直ぐには歸らないで、婆さんに挨拶しに中二階へ行つた。細君は香取を見送つて玄關へ出て、

「貴方は今日上野町へはお寄りなさらぬ？」と、譚あけりに小さい聲で云つた。

「え、今日は寄らないつもりです」と香取は振返つて、「何故です」と、小さい聲で云つた。

「ではい、なんですがね。お多代さんが今日此處へ來たことを、彼處の奥様に知らせたくないん

ですの、知らせちや一寸都合が悪いの
「さうですか：：そしてあの女の身の上は何とか極りがついたのでですか」

「と云ふ譯でもないんですがね、二三日中に何とかしようと思つてますの。：：その中お暇な時に入らつしやい、ゆつくり話して聞かせますから。随分長い間ゴタ／＼してたんですよと

細君は相手の好奇心を惹起すやうに云つた。
「私が暫らく引込んでた間に、いろんな事があつたんですね」と、香取は軽く笑つて戸外へ出た。すると、縁側にお多代の足音がしたやうだつたが、また細君に引留められたのか、容易に出て来なかつた。で、待ちあぐんで、果物店の側までフラ／＼歩いて、その角に立つて、廣い電車

通を見渡してゐた。幾臺もの電車の行過ぎるのを目で追うたり、向ひ側のいろ／＼の店を無心で見つてゐた。と、ふと、直ぐ側の牛屋へ學生らしい若い男が多勢入つて行くのに気がついた。

彼は慌しく帯の中から裏口を取出して見た。そして、幾らも入つてゐないので失望した。お多代から話を聞くにしても、出来ることなら、打寛いで甘い物でも食べたがらにしたいのに、これでは自分一人、快く午餐を食べるだけにも足らない……。

何時の間になくなつたのかと疑ひながら、彼は自分が唯一の手頼りとしてゐる財産の、次第に削減されてゐるのに強く氣付いた。やがて、飢渇された果には、再び人の中へ出て何かの頼い仕事をしなければならぬが、自分はそれに堪へられるだらうか……。

で、彼は半年先一年先の自分の姿を身察らし、痛ましいものとして見た。耳に騒々しい町の物音を聞きながら、心では今立つてゐる場所をも忘れたやうに淋しい夢に沈んでゐた。目の前を往來してゐる人々は、只幻のやうに見えて、以前彼れが使はれてゐた主人や同僚の顔や、その頃の仕事場が却つて明かに心に浮上つた。

と、其處へお多代の姿が現はれた。彼れは胸を躍らせて夢から醒めて、その方へ近づいた。

此處で待つてゐられたのを意外に思つたらしい顔付して、お多代は「どうもお待たせしましたと、足を留めた。

「近いんだから電車に乗らなくつたつてい、でせう、貴女に訊きたいこともあるし」香取は遠慮もなく連立つて歩き出した。そして二三町黙つてスタ／＼歩いてから、足を緩めて、

「湯原君は貴女を私の家へ預つて呉れと云つてゐましたよ」と、何気なく云つて、女の顔へ目を向けた。

お多代は眩しきやうにして、「さうで御座いますか」と冷かに答へた。

香取は自分の思つてゐることを、遺憾なく相手の胸に傳へようとしながら、相應しい言葉の見つからないのに苦しんだ。で、また暫らく黙つて歩いてゐたが、強ひて道伴れにされたのを、女が迷惑がつてゐるらしいのが目についた。そして、此方から口を利かなければ、女は何時までも黙つてゐさうだつた。

香取は氣分を變へようと思つて騒がしい大通りから、狭い道へ外れて行つたが、浮かりしてゐると、何も話さない間に上野町まで来てしまひさうだつた。で、突如に、「僕は貴女が困つてるんだらうと思つて、非常に氣の毒に思つてるんですよ」と、打切棒に云つたが、ふと感情が高まつて来て、我知らず言葉を續けた。「戸川の伯母さんだつて親身に貴女の事を心配してる風はないんですよ。あんな人の云ふ通りにしちや貴女のためになりませんよ。湯原君も無責任だし、あの細君も氣が變になつてゐるから、貴女はあの家に永くゐられないんでせうが、今の場

合よく考へて身の振方を極めないと取返しのつかないことになりませう。田舎から東京へ来た女で男に騙されて、酷い目に會つた者は幾らもあるんだから。僕は、貴女を預ることは湯原に斷つたけれど、しかし貴女の今の境遇をよく聞いた上で、都合によつては、出来るだけの助力はしてもいいと思ひます。金が入るんなら少し位僕が貸して上げたつていいんです。兎に角遠慮しないで何もかも僕に打明けて呉れませんか。昨夕上野町へ行つた時から、妙に貴女の事が氣になつて仕方がないです」

かう云ひながら、彼は湯原の肥つた顔を憎らしく思出してゐた。お多代は稍々呆氣に取られて、直ぐには返事をしなかつた。疑ひ深い日付をして男の方をそつと見てゐたが、やがて、「私どうなつてもよろしいんです」と、籠單に答へて、その話に立入りたくなかつた。が、香取は最早打棄てては置けなくて、相手の心にこびりつくやうな氣になつてゐたので、「あの伯母さんは貴女にどうしろと云つたんです？」と力を入れて訊いた。

「當分お屋敷へ御奉公に出るやうにと云ふんですけど……私、最少し考へて見ようと思つてます」

「お屋敷つて何です」

「彼家のお婆さんが昔御奉公してた家ですつて」とお多代は答へたが、直ぐにそれを嘲るやうに、

「どんな家ですか」と言足した。

「其家なら昔阿波守様とか云つて、老中か何かしてた家です。お婆さんが時々其時分の話をしてゐましたよ。今でも年に一二度は御機嫌何に行くんです。貴女もつと早くなら、そんな家へ奉公するのがよかつたかも知れないけど……」

香取はお多代の口から、湯原との關係を訊きたがつても、流石に露出しにそれを訊くのは憚られた。で、自分が女に信用されて、女の方から打明けて語へられるやうな機會を空想しながら、「どうせ貴女は湯原の家を出て行くんでせうが、その前に一度僕に會つて呉れませんか。僕の家へ来てほしいし、何處か外で會つてもいいです。僕の家へ來ると云へば、湯原君だつて何とも云やしないんだから」

「え、一度お伺ひ致しますせう、お差支へがなければ」と、お多代は輕く答へたが、やがて懐かしい調子で、「貴下は當分上野町へは入らつしやらない方がよう御座いますよ」

「何故です」と、香取は訝つたが、女の言ひかねたやうに黙つてゐるのを見て、獨りで呑込んで、「僕もあの家へは行きたかないんです。昨夕は仕方なしに行つただけで、もう行く必要はありませんよ」と、調子づいて云つた。

「徒士町の踏切を越すと、最早道は盡きかゝつて、上野町の通は目の前に見えた。香取は一步一步其處に近づくのを惜んで、飽氣なく別れる前に何か印象の強い事を云はうと思ひながら、その角まで来た。お多代は立留まつて、

「何方へ入らつしやるんです？」と、別れを告げようとした。香取は一足近づいて、

「公園の方から廻つて歸りませんか、天氣はいし、もつと歩いたつていいでせう」と、押迫るやうに云つた。

「でも、遅くなると、御姉が心配しますから」と、お多代は丁寧にあだちして、躊躇せずに行過ぎた。振返りもせず傍見もしないでスタク歩いた。

香取はその姿が消えるまで見送りながら、並んで歩いてゐる間に、チラ／＼目に觸れた目付や口元を一つ／＼鮮かに思浮べたが、それが、湯原に汚されてゐるかと思ふと、思ふだに堪へがたかつた。自分の肉身の者が惡漢の手にかゝ

つてゐるやうな氣もして、一刻も平氣で見ても
られないやうになつた。そして、今から直ぐに
何喰はぬ顔で湯原の家へ遊びに行つて最一度様
子を見たくなつて、その門の前まで行つたが、
「當分来るな」と云つたお多代の言葉と思出す
と、入る譯にも行かなかつた。

で、暫らく溝渠の橋の上に立つてゐた。昨夕
床屋で噂のあつた古着屋の裏の二階には、障子
を取拂つて、派手な襦袢や夜具が冴えた日に曝
されてゐる。湯原の家の格子戸の前には幾つも
古い足駄や下駄が干されて、其處にも日は流れ
てゐる。共同水道栓からは水が流れ出て、石
崖へ滴つてゐたが、その周囲には人影はなかつ
た。黒く濁つた溝渠には脂が斑に浮いて、日
に蒸されて厭な臭ひを放つてゐた。

廣小路の方の屋上の時計の、最早正午近くな
つてゐるのを見ると、香取は急に腹の空つたの
に氣付いたので、直ぐ電車の方へ歩いたが、こ
のまゝ家へ歸る氣にはなれなかつた。何となく
この近所を立去りかねた。で、つい近くの洋食
兼業のミルクホールへ入つて、牛乳と西洋菓子
と、堅いカツレツをも食べた。そして腹が膨れ
ると、差當つて爲すべきことも決せられぬので、

知らず／＼公園の方へ足を向けて、展覧會場
前のベンチに身を投掛けた。櫻の葉末は赤らん
で、靜かな風に散つてゐるのもあつた。彼れは
花の散る頃、ある友人と此處へ来た時に、ふと
一緒に話をしながら歩くのに堪へられなくなつ
て、わざと友人に別れて、人氣の少ない處を志
して、一人谷中の墓地の方へ行つたことがあつ
たのを思出して、颯と木枯に吹散らされさう
な木の葉を眺めながら、過去つた月日を指を折
つて數へた。

そして、彼自身あの頃から長い夜を通じて來
たのに氣付いて、思はず心が騒いだ。一步々々
世の人を離れて、自分の描いた幻影に取圍まれ
て仕んでゐたことが、無意味になつた。澄んだ
空と穏かな光。このベンチに腰掛けて、誰れか
が自分の耳元で柔かな懐かしい言葉を囁いて呉
れたらばと思つた。と、直ぐお多代の姿が目
に浮んで、心がそれのみに注がれ出した。

暫らく目を瞑つて苦い取留めのない思ひに沈
んでゐたが、ふと側に人の來た氣色がしたので
目を開けると、皮膚の黄ばんだ老人が擦れん
に腰を掛けて、怠さうに息を吐いてゐる。その
息は香取の顔に觸れさうだつた。
彼れは休息所を窺されたやうに感じて、つと

立上つて、池の方へ歩いた。

(六)

歸るともなく家へ歸つたのは、最早軒燈の點
く頃だつた。

机の上には昨夕出した手紙の返事が二つ來て
ゐた。彼れは燈火も點けず夕暮の薄明で讀んだ
が、只何でもない事が書いてあるばかりで、別
に心を惹くやうな文字はなかつた。で、それを
反古籠へ投込んで、縁側に出て四邊の夕暮の騒
ぎを聞いてゐたが、上野町の今時分の光景が闇
の中に見えるやうだつた。

「湯原はあの女をどうするつもりだらう？
お多代は彼家を出てどうするつもりだらう？
今日の約束を守つて、この家へ訪ねて來るだらう
か」

それが打棄てられぬ大問題となつて、刻々に
彼れの心に迫つて來て、それが極まるまでは、靜
かに家に落着いてゐられさうでなかつた。で、
何處へ行くかと云ふ當てもなく、紙入を袂に入れ
て、夕餐の支度をしてゐる下女の目を忍ぶやう
にして、そつと戸外へ迂り出て、思ひを散らす
やうに急いで歩いた。
そして賑かな神樂坂の方へ足が向いたが、其

處は縁日らしくて、平生よりも一層雑沓してゐた。

彼れは次第に足を緩めて、夜店などを傍見してゐたが、毘沙門の境内の見世物小屋から、客を呼ぶ皺皺れた聲が聞えると、何氣なく其處へ近寄つた。

左右に汚れた小屋が向合つてゐる。

左の長い小屋には、鶏のやうな手足を備へた若い女が、さまざまの藝をしてゐる繪看板が掛つてゐる。右の小さい小屋には、入口に細長い爺さんが突立つてゐて、幕の内に鐵漿をつけた婆さんが坐つてゐる。そして婆さんの命令に應じて、幕の影から幼い細い聲が洩れて來た。

「生れましたは下谷竹町三十番地。お手々が四つであんよが四つ……」

「これは新聞にも出ました因果な子供で御座います。今暫らくの壽命ですから、息のある間に御覽を願ひます」と、爺さんが後から付足した。

「これは麴町二丁目鶏屋の娘、親の因果が子に報い……と、左の方でも木戸番が平氣な顔して叫んでゐる。濃い白粉と濃い臙脂で色取つた女の顔のみが幕の中に見えた。

香取は顔を背けて逃げるやうに其處を出て、

濼端へ下りた。霽に包まれた遠い燈火を見詰めて、生温い夜風に吹かれながら、今朝からのことを考出して、

「お多代だつて自分とは何の縁もない人間だ。昨日までは其處等を通つてゐる女と同じやうに、一度も心に掛けたことのない女だ。そんな女のために自分の大切な心を少しでも苦めるのは愚なことだ。どんな境遇に陥らうとも、自分の目で見さへしなければ、會ひさへしなければ、何とも思はなく事が済んで行くのだ。

また暫らく彼方へ近づきさへしなければそれでいいのだと、自分で自分に言聞せて、何となく心の軽くなるのを覺えた。

そして、濼端に添うて歩いてゐたが、一日中諸方を彷徨いてゐたので、足は疲れて身體も懶かつた。何處か氣持のいい部屋で快く夕餐を食べて、今朝からの無駄な思ひを消して、快い眠を得たかつた。で、引返して坂を上りながら、左右の飲食店に目を留めてゐたが、やがて雑沓の中を經うて急いでゐる浪手な姿を見ると、この頃嘗て感じなかつた女懐かしい心が

激しく起つた。四五年前に年上の友人に連れられて、この土地の待合へもよく來たことがあつたので、二三人の藝者の顔は今でも臙氣に記憶

に浮べられた。

と、ふと、その一人がお多代に似てゐたやうに思はれ出した。で、彼れはその名を心の奥から捜出しながら、坂を横に外れて只覺えの待合の方へ足を向けた。

「やまと」と書いた軒燈が矢張元の家に出てゐる。が、彼れはその格子戸を開けるまでに、幾度も躊躇した。「其處へ入つて行つて何をするんだらう。あの女に會つたつてどんな話をするのだらう。云ひたいことも聞きたいこともありやしない」と、月に手を掛けながらも、入ると極めかねてゐたが、足音を聞きつけたのか、障子を細く開けて女が顔を出して、「何誰？」と聲をかけた。

香取は最う後退りされかねて、すつと入つて行つた、女は燈火に透かして彼れの顔を見てから微笑して、「西野さんのお友達」と、帳場へ向つて小さい聲で云つた。

「この前を通つたから思出して寄つたんだよ」と、香取は言葉をしながら、尋かれるまゝに二階の奥の部屋へ上つた。

女中は彼れの仲間が何時も長居はしないで手早く女を呼んで、直きに歸つてゐたことを知つてゐて、茶を入れると、「誰れをお呼びになりま

「す？」と訊いた。そして、彼れが西野と一緒に来た時分の馴染の女の名を思出さうとしても思出せぬらしかつた。

「薫次と云ふ藝者はゐなかつたかね」と、香取は訊いた。

「薫次さん？ あの妓はもうゐませんです」女中は冷淡に答へた。

「ゐないと聞くと、さも待焦れてゐた當てが外れたやうな気がして、他の女には會ひたくなくなかつたが、このまゝ歸れもしないので、「ぢや、誰れでも呼んでお出で」と云つて、それから二三品食べた物を眺へて、「飯だけ食べて歸つてもいゝんだから、早くして呉れ」

女中が階下へ下りると、香取は横になつて疲れた足を伸した。階下では電話の音がして女を呼んでゐるらしかつたが、彼れは知らぬ女に會つて話をするのが、煩はしく思はれ出して、いつそ獨り此處で靜かに眠りたくなつた。で、近所の寄席の物音を聞きながら、ウト／＼としてゐたが、やがて驚いて醜い夢から醒めると、女中が西洋料理を持運んでゐた。食卓を拭きな

が、
「どうなすつたの」と、怪むやうに香取の顔を見て、「何だかお眠さうだね」

「どうもいけない。厭な夢を見て」と、香取は獨言のやうに云つて、目を据ゑて明るい部屋を見た。張交ぜの屏風には蜀山人の飄逸な字が際立つてゐた。

「どんな夢を御覽なすつて？」と、女中は目に笑ひを含んで何氣なく訊いたが、香取は眞面目になつて、

「此家へ入る時分にうまく忘れたことが、夢に見えたんだよ」

「へえ、不思議ですわね。どんなこと？」

「女のことだがね」と、香取は飽くまで眞面目だつた。

「おや、お惚氣ですか」女中は浮いた調子で云つて、「私何を仰有るのかと思つてたら」

「なに、惚氣なんかぢやないんだ」と、香取は忌々しうに打消して、前に置かれたナイフとフォークを手に取つたが、何故だかこの女中にもあの話をして見たかつた。で、料理には手を着けないで、女中の方へ向いて、

「實は僕の知つてる女が、女房のある男に掛合つて困つてるんだよ。今は男の方でも關係を絶つつもりでゐるらしいし、女は尙更別れ

るつもりでゐるらしいんだが、こんな場合二人とも綺麗に別れてしまへるだらうか。二人とも

心残りがなく一生他人になつてしまへるだらうか。君はどう思ふ？」

「さうですわね」女中はあまり氣乗りがしないらしく、「お神さんがあつちや、どうせ別れなければなりませんわね」

「だけど、それきりで済んでしまふものかね」

「どちらかで惚れてれば、容易に切れないでせうよ」

香取は進んで詳しいことを話さうとしたが、階下から女中を呼立てる聲がしたので、白ら話が切れた。

女中が立つて行くと、彼れは血を引寄せた。そして、知らず／＼今見た夢を繰返してゐたが、ふと氣付いて恐ろしいほど淺間しく思はれた。

お多代を憐むばかりでなくて、心の底は忌はしい執着が根を張つてゐる。湯原との關係から、最早あの女には一生正當の色慾が許されぬやうになつてゐると思ふと、尙更意地悪い慕

はしさが増して来た……

彼れはずつと以前、まだ頬の肉の柔かく膨んでゐた頃、ある年上の卑しい女に迷はされて酷い目に會ひかゝつたのを、湯原の取做して無事に済んだことがあつたが、その折の光景が今の

心持に照らされて恥かしく浮んで来た。

「二度とあんな真似はしたくない」彼れは自分の心一杯の思ひを無理に壓潰さうとした。そして長い間、女といふ女に近寄らなかつたために、こんな事で悩むやうになつたのではないかと思つたりした。

食事の終つてナイフを投出した時分に、足音が襖の前に留まつて、藝者の姿が珍らしく彼れの目に映つた。近寄るのを見てゐると、今雑沓の中でチラ／＼目についた女のやうな水々しい美しきはなくて、藝者らしくもなかつたが、黒い髪と白い顔とは、流石に若い女らしい艶があつた。

「何故さう顔ばかり見ていらつしやるの」と、女は面赤さうにした。

「よく見ると不思議だよ、今夜からしてお前に會つてゐるのが僕にや不思議だよ。僕はこの春から女を絶つたんだからね」と香取は眞顔で云つた。そして、この女によつて戒を破つた後が氣遣はれて、このまゝで歸らうかと迷ひながら、

「お前は何時から此地へ出てゐるんだい」と、訊きたくもないことを訊いた。
「まだ出たばかりですわ。二月ぐらゐでせう」

「些とはお馴染が出来たかい」

「いゝえ、お馴染なんかありませんわ」

「でも二月の間にや、随分いろんな客に出てらだらう」

日に三人としても百八十人だと、香取は其處まで考へ持つて行つて、側にある女の身がいろ／＼の男の毒を盛つた器のやうに思はれ出して、藝者と云ふ名や、派手の色合も、快い浮いた連想を起させなくなつた。

「よく厭にならぬね」と、笑ひながら云ふと、
「厭だつて仕方がありませんわ」と、女は窮屈さうに答へた。

そこへ女中が襖の外から聲を掛けて、次の間へ案内した。香取は明るい部屋から薄暗い間へ入つた。女は燈火の下で捌けない話をしてゐるよりも、結句氣樂になつたやうな風だつた。

やがて、香取は枕許の細いランプをも消して闇にしてしまつた。そして再び明處へ出るまで、空想の女としてその女に觸れてゐた。お多代の顔や朋が闇の中に描かれてゐた。

(七)

彼れは身體中汚されたやうな氣がして、やがて其處を出ると、急いで家へ歸つて、風呂へ入

つて念入り皮膚を磨いた。

そして机に向つて、所在なげに美しい詩のやうなヴェニス貴婦人の物語を讀続けたが、紙の上には生きた女の影のみ差した。最早戒を破つた俯のやうに、卑しい慾望は以前よりも却つて力強く心に渦巻いて、動もすれば想像がその方へのみ向いた。燈火を消して早く寢床へ入つて、つとめて眠を得ようとしたが、淋しい部屋は平生よりも一層淋しくて、誰れかが側にて呉れなければ、安んじて眠れさうでなかつた。ふと起上つて、寢卷のまゝ茶の間へ行つて、長火鉢の前に坐つた。そして古足袋を繕つてゐる下女に言付けて、茶を入れさせながら、
「今夜は淋しくて仕方がない」と、同情を求めるやうに沁々と云つた。
下女は不思議さうに主人の顔を見上げて、「今夜は感心にお隣の子が泣かない」と、それが淋しい原因である様に云つた。
「お前はよく淋しいと思はないでゐられるね、毎日何を考へてゐるんだい」
「何も考へることは御座いません。仕事でもしてゐませんと、居睡がついて困りますけれど」
「考へることはないかね。こんなに暇で淋しいと、お前も毎日何か考へてゐるだらうと思つてた

のに」

「奥様がないと、どうしても家の中は淋しう御座いますよ」と、下女は力を入れて云つて、長火鉢を隔てて差向ひに坐つた。そして何時かのやうに眞面目に結婚を勧めたさうだつた。

「一人ぢや暮せないものかね。おれはどうかして一生一人でゐたいと思つてたけれど、かう淋しくつちや、生きてるよりや、死んだ方がいと思ふよ。實際夜中に目が醒めた時分にや、明日の朝日を見る前に死んだ方がいと思ふことがある」

「え」と、下女は目を丸くして、「あまり御勉強が過ぎるから根が疲れるんでせう」

「勉強なんかしてやしないよ。おれも今にまた働かなくちや食へなくなるのだが……」

「これで奥様がお出来になつたら、何をなさるにも張合があつてよろしいんですよ」

「だけど、おれなんかにや確な子供は出来ないからね」香取はふと毘沙門で見た不具者を思出して、「手が四つで足が四つの子が生れたらどうするだらう」

「まあ厭な。そんな子が滅多に生れるものですか、何故そんな事を仰有るんでせう？」

「しかし生れんとは限らないさ。おれの知つて

る金持の娘で十八で盲目になつた女があるよ、父親の梅毒が傳染つてたのだらう」

「それは親御が悪いんで御座いますよ、普通の者なら貴下……盲目の生んだ子でも、目がちゃんと明いてるんですもの」

「さうかねえ。お前なんか何事もさう極めて安心してゐられるかね」

香取は世の中で自分一人がこんな下らん事に惱んでゐるのか知らんと、下女の羨びた顔を羨ましさうに見てゐた。

そして、茶を飲んで煙草を吸つて、暫らく下女と近所の噂などしてゐた。さうしてゐると、幾らか心が鎮まるやうなので、夜の更けるまでもつと茶の間にゐたかつたが、下女が次第に眠たげな顔をするのを見ると、強ひて話相手にするのが氣の毒になつて、自分の居間へ歸つた。

翌朝も穏やかな温かい日が照つた。彼れは縁側で日向ぼつこしながら、隣の軒先に羽を光らせてゐる雀を見てゐたが、ふと氣付くと昨日の瘦せた小犬が庭の片隅に目を細くして、氣樂さうに前足を伸して蹲つてゐる。何時の間に歸つて来たのかと怪んで、下女に訊くと、下女は些とも氣付かなかつたと云ふ。

「變な犬だね、よくこの家を覚えてたものだ」と、彼れは庭へ下りてその側へ寄つたが、小犬はやがて身を起して、其處等を嗅歩き出した。

「も一度何處かへ棄てて来てやらう」と、獨言を云つて彼れは身支度した。そして、犬を誘ひながら表通へ出た。後になり前になりして江戸川に沿うてフラクへ傳通院近くまで来たが、

其處から伴を振捨てて、急に電車に飛乗つた。

何處まで乗つてゐようと思ふ氣もなく、目を瞑つて窓に凭れてゐたが、何時の間にか電車は廣小路へ来て停つた。と、彼れは豫め其處を指して来たやうに慌てて下りて、溝渠の方へ歩いた。

昨日この邊へ来てから僅か一日しか立つてゐないのに、餘程の日數を經てゐるやうに思はれて、上野町の模様もあれから著しく變つてゐるさうな氣がした。

お多代はまだゐるんだらうか。湯原の留守に女同士がどんな風にしてゐるんだらう？ 彼れは怖いものに近づくとやうにその家の前まで行つた。玄関には明るい日が差込んで、中には人の聲がしない。で、思切つて聲を掛けて入つて行つた。

「はい」と、間を置いてお多代が返事をして、奥

から出て来たが、香取の顔を見ると、驚いた様な目付をした。そして、後に氣を兼ねながら挨拶して茶の間へ通した。

「奥さんは？」と訊くと、

「居ますよ」と云つて、お多代は身を擦寄せ小聲で、和泉町へ行つてゐたことは秘密にして呉れと頼んだ。

香取は首肯しながら寛かに坐つて、次の間に目を付けてみると、細君は先日よりも晴々しい顔付をして、袂を開けて、「此方へ入らっしゃい、元一さん」と云つて、自分が先に立つて、玄關の脇の座敷へ導いた。

座敷には縁の壞れた柳行李が出してあつて、帯だの襦袢だのと女物がその側に散らかつてゐる。濡紙包も一つ轉がつてゐる。一目見ると香取は略々感付いて胸を轟かせたが、何氣ない風で、

「それはどうしたんです」と、細君に訊くと、

「私もう此方をお暇して神戸へ行くんですよ、今夜の夜汽車で立たうと思つてますの」と、お多代が答へた。

「今夜？：そんなに早く立つんですか」と、香取は驚いて、お多代の顔を見詰めた。これほど心に掛けてゐる自分に一言も告げないで、不意

に立つて行かうとするのが恨めしかった。そして、神戸へ行つてからの事を訊きたかつたが、言出す力もないほどに心が萎れた。どうせいい事があつて行くとは思はれないが、この女の將來はどう落着くものだらう？と、暫らく口を噤んでゐたが、細君は行李を隅へ押除けて坐つて、

「私達もいゝ家があつたら、他處へ引越さうと思つてゐるんですよ。その中空家捜しを兼ねて元一さんのお家へも邪魔に上るかも知れませんが」と、懐っこさうに云つた。

「え、是非入らっしゃい」と、香取は辛氣ない聲で云つて、最早細君の側にゐるのも厭になつたが、細君は不思議に調子づいて、知人の噂などし出した。香取は氣乗りのしない受容へをしなから、つい相手の口からお多代に關した事が漏れはしないかと待設けてゐたが、それらしい話は只の一言も出なかつた。で、終ひには焦燥しくなつて、座を立てて歸りかけて、

「お多代さんは神戸へ行つて何をしますか？」と、訊くと、

「行つて見なげりや分らないのでせう、何をされるんだか」と、細君は簡単に答へた。

「さうですか」と、香取は見送つて出たお多代に

向つて、「兎に角もう會へないのですね」と、口元に淋しい笑ひを浮べた。

細君に妨げられて、離別の言葉さへ云へないのを残念がりながら、其家を出て、昨日のやうに公園の方へ歩いて、昨日のベンチに腰掛けた。

あの行李と濡紙包とを持つて女一人夜汽車で東京を去つて、確かな目的もない土地へ赴く……

……彼は心をその一點に凝らして、夜更けてからの停車場や、神戸までの途中の驛々を描き出してゐたが、ふと出立の時刻を聞かなかつたことを悔いた。分つてゐれば人知れず見送つてやるんだが。

暫らくして彼れは、再び上野町の溝渠の側を通つて電車に乗つて、最早明日から此方へは近づかないと決心した。そして、お多代を中心にして湯原夫婦や戸田の細君が、それらに秘密を持つてゐるらしいのが心に掛つたが、その秘密はつひに晴れさうではなかつた。

で、二三日、香取は人間の秘密を底氣味悪がつて、動もすれば心を戦かした。毎日空はよく晴れてゐたが、戸外へは出ないで、部屋の中で身動きもしないほどにしてゐた。湯原に誘はれてから、二三日目に觸れた、いろんな人の顔を忘れようとしてゐた。

三日目の朝珍らしく郵便の聲が聞えた。自分で立つて行って手に取つて見ると、封筒の裏には所を書かないで、樋口多代とのみ書いてある。胸を轟かせながら、ふと消印に目をつけると、それは本郷であった。封を切つて、慌しく讀んだが、假名が多くて、文句が分り難かつた。

「都合によつて神戸へは行かないで、此處に間借りをして、一人で暮して居ります。お手事もあらばお遊びにお出で下さい。書間だと何時でもお目にかゝれますから。是非お話し申したいことがあります、一度お訪ねしたいとは思つて居りますが、人目が憚られて差控へて居ります。尙私たちが東京にゐることは、誰れにも内所にして下さるやう呉々もおたのみ申します」といふ意味の文面が、二三度讀返してから、やうやく判ぜられた。巻紙の端には、追分町八代とら方と窮屈さうな字で書添へてある。

香取は意外なこの手紙を見て、生返つたやうに悦しかつたが、机の前に坐つて落着いて考へてゐると、疑念は留まなく起つた。何が何やら譯が分らなくなつた。

くなつて、その住所を口の中であらう練返しながら戸外へ出た。四邊に目を散らさずに足早に歩いて追分町まで来た。二三度人に尋ねて漸くその家を捜し出したが、表の古ぼけた門の戸は鍵が掛つてゐるのか、引いても押しても開きさうでない。怪んで、竹垣の壊れ目から覗くと、縁側の雨戸は開いてゐる。庭にコスモスの咲いてゐるのを見えた。

聲を掛けるのも憚られて、遠廻りして裏口を捜して見たが、外に出入口はなかつた。他所の二階家が背中合せになつてゐる。で、表へ戻つて試しに二三度軽く門を叩いたが、内から何の手應へもない。留守か知らんと思つて歸りかけたが、後髪を牽かれるやうな気がして、思はず手強く門を叩いた。すると、「何方？」と聲がして、やがて内から人の近づく氣色がした。その聲と足音とはお多代に違ひなささうだ。

「あら」と、お多代は門を開けて香取の顔を見て驚いて、「貴下とは思ひませんでしたよ。手紙が届きましたか？」

「え、僕も何だか氣掛りだから直ぐ来たんです」

「よく来て下さいました」お多代は慎ましやかに云つて、家の中へ連れて入つた。

今まで寝してゐたらしく、座敷には女枕と薄い掛蒲團が出してあつた。お多代はそれを急いで片付けて次の間から小さな汚い座蒲團を持つて来た。

香取は坐るが早いか性急に、「貴女は何故神戸行を止めて此家へ移つたんですか」と問ひ詰めた。

「急に考へ直しましたの。神戸へ行つても目的がないんです」と、お多代は言譯して、「だけど從姉や月田さんには、神戸へ行つてることにしてゐるんですから、何卒何も仰有らないで下さいまし」

「え、その心配は入りませんよ。僕ももう彼方へは行かないんだから。：：：しかし、貴女は此家へ何をしてゐるんです、何もしてゐないんですか。一體此家は何をする家です」と、香取は胸に込上げる疑ひを一時に晴らさうとして、疊掛けて訊いた。そして、部屋の中を見廻した。

お多代は莞爾して、「今ゆつくりお話ししたしますわ」と云つて、次の間へ入つたが、暫らくして茶盆と菓子鉢とを持つて出て来た。亂れた髪を梳けて顔も洗つて来たらしかつた。先日よりも顔に艶があつて生々としてゐる。香取はその紅い唇に目を留めてゐた。

「今日はお留守番をさせられてるんですよ。此處の主人は呉服物の出商ひをして、昨日から田舎へ行つてますの。早くても二三日しなければ歸らないんでせう。お神さんはゐるんですけど、随分弛慢のない人なんです。昨日も主人が出て行くと、直ぐに隣近所へ遊びに出て歩くと、今日も留守の間に生命の洗濯をするんだつて、親類の娘を誘つて芝居を観に行つたんですよ」

と云つて、お多代は月十圓の食料で、この座敷に置いて貰ふことになつてゐることや、その中自分と相應しい仕事を捜して、一人立ちで東京で暮らすつもりでゐることなど、ボツ／＼話して、「人の世話になるよりや、その方が餘程氣樂だと思ひますわ。此處へ越して来た目から氣分が清々するやうですわ。お神さんがゐないと話に来る人もないから、私一人の家のやうですよ」と、これまでになく打解けた様子を見せた。

香取は心を留めて聞いてから、暫らく黙つて考へてゐたが、やがて、「だけど今の所困つてゐないんですか。湯原君が少しは世話をして呉れるんですか」

「いえ、義兄が何で貴下」と、女は目に角立

て、慌しく打消して、「私もうあの人の世話になりませんの」と強く云つた。

「しかし湯原君は貴女に對して責任があるんでせう、此處にゐることは知つてゐるんですか」

「いえ、義兄にも知らせませんの。神戸までの旅費を貰つて傳で出て、途中から逃げるやうにして此處へ来たのですわ。私がこんな處にゐることが知れたら、どんな目に會はされるか知れませんわ」と、女は憎えたやうな顔をして、一寸言葉を切つて、「ですから、誰にも知らせたくないんですけれど、差當つて宿の保證人に困つてますの。私前金で食料を入れてるんですから、保證の必要はないだらうと思ふんですけど、此處の主人が舊弊で、四五日中にどうしても宿受を極めて判を捺して出して呉れと云ふんですの……その事で貴下にお願ひしたいんですが、御迷惑ですわね」

「いや、保證ぐらゐる何でもないです、どうせ形式的に過ぎんのだから」と、香取は直ぐに受合つた。そして女が湯原の毒手から離れて自由の身となつたことが、他人事とは思はれぬほど悦しくて、「貴女はいづれ將來の事も考へてゐるんでせうが、人に騙されんやうになさい。僕は何か貴女が氣の毒でならんから、出来さへすれば

力になつて上げたいんですよ」と、眞面目で云つて、湯原との事を訊きたさうにした。お多代は後見たいことなど、鶉の毛程もなかつたやうに空果けてゐたが、やがて、

「私、從姉さんには随分いぢめられたんですよ」と、口を切つて、訴へるやうに話し出した。

「元を云へば、私の方から無理に頼んで御厄介になつたんぢやないんですからね。此方は無んなのに從姉さんが身體が悪いし、ひもを借りるにしても、全くの他人だと氣骨が折れるから私に是非来て呉れ、當分家の手傳ひをするつもりで来て居れば、その中一生東京で暮らされるやうにしてやるつて、それは幾度も／＼手紙を寄越したんですの。私、餘程迷つたんですけど、終ひには斷れなくなつて、決心して来たんですわ。近所の人にも暇乞ひして、一生東京の人になるつもりで来たんですからね。それに難辭付けられて追返された日にや、私故郷の人に會はず顔がないやうな氣がしますから、どうしても歸らないつもりでゐますの、持つて来た衣服まで無さう云つてゐる中に、今まで平氣だつた顔を曇らせて、涙をさへ浮べた。

「私彼家へ来てから彼此一年になりますけど、

下女がはりに追使はれてたばかりで、些とも自分のためにはなりません。滅多に戸外へも出られないんですもの。今年の一月でしたか、戸田さんのお婆さんと貴下に新富座へ連れてつて頂いたでせう。あれつきり物見遊山に出たことはありませんわ。それはまあどうでもいいんですがね。東京へ来た位なら何か習つて身に藝をつけたいと思つてるんですけど、そんな事にや些とも構つて呉れなかつたんです。私欺されたんですねえ」と云つて、淋しく笑つて、「東京へ来てから手だつてこんなに荒れちやつたの」と、白い華奢な手を出して見た。

が、その手は少しも荒れてはゐなかつた、香取の目にはこれまで自分が觸れたどの手よりも美しく見えた。

「私もう懲り／＼しましたから、これから誰れをも手頼りにはしませんの。どうぞこの年齢まで苦勞ばかりして来たんですから、どんな苦勞だつて辛抱出来ることはありませんの」と、暫らくして浮々した調子になつて笑顔をして、「これから時々お遊びに入らして下さい。私の身もその中どうなるか分りませんが、當分此處を自分の家にしたかと思つてますから」と云つて、身輕に立つて、障子を開けて、「汚い家

だけど、静かでないでせう、庭もあるし。あの壊れかけた門を見ると、私田舎の家を思出すんですよ」

そして、お多代は縁側に立つて、外を見ながら、「本當にいゝお天氣だ」と呟いた。

自分の今の境遇を悲しんでゐるのやら、ゐないのやら、香取は女の心の奥を少しも索りかねて、思案してゐたが、やがて、自分も縁側へ出て、女の目を向けてゐる方へ目を向けてゐると、自ら田舎の家が思出された。

不思議にも、十一二の時分秋の夜、隣家の門の側に熟つてゐる棗を盗みに行つて、春の高い友人の肩車に乗つて、門に登つたことが思出された。そして、棗は杖が遠くで取れず、門は下り難くて泣き出したことがあつたが……。

「何だか田舎染みてますね、この家は」と、彼れは其處に昔の幻を見ながら、感じを籠めて云つた。そして、眩しさうにして端近く立つてゐる女を見上げて縁側に腰を掛けた。古ぼけた門や色の朽ちた竹垣や、コスモスの淡い花の色や、愁はしげな女の顔の色が、冴えた光の中に浮上つて夢のやうに見えた。珍らしく安らかな夢心地になれた。煩はしい世を逃れたヴェニス の貴婦人の宿へでも来てゐるやうに思つても見た。

そして、女の身の上について、立入つた疑惑は暫らく忘られて、只かうしてゐれば、自ら心が平穩になるやうだつた。で、

「もつと遊んでてもいいんですか、僕がゐても迷惑にならんですか」と、何気なく甘えるやうに云つた。すると、

「何故ですと、女は不快な目付して、何時までいらしつても些とも迷惑ぢやありませんわ」

香取は自分の言葉が女の顔色を變へさせたのを悔いた。

「私一人ですから、晩まで遊んでいらつしやいな。もう、お正午ですから、御飯でも食上つて……と、女は臺所の方へ行きかけた。

香取はふと思付いて、後から追つて行つて、幾らかの金を強ひて手渡しして、何か近所で出来る甘い物を誂へてこさすことにした。女は黄ろい羽織を引掛けて出て行つたが、暫らく手間取つて来て、「親子井を云つて来たんですよ、貴下お好き」と訊いた。

「え、好きです」

香取は女が自分の家のやうに食事の支度をしてゐるのを樂んで見てゐた。そして、一緒に食事しながら、ずつと以前にある女と同じ鍋を突いてゐた以來、今日ほど樂んで箸を執つた

ことのないやうに思はれたので、無邪氣にそれを口に用して云つた。

「従姉さんから一度そのお話を聞きました」と云つて、女は可笑しがつて、「今はお會ひなさないの、その人に」

「もう會ふものですか。もう女なんかに入入りはしませんよ、馬鹿らしいから」

「それはさうですわね」

「だけど、女の友達は一入欲しいと思ひますよ。人の細君でも何でもいいから、自分の心を撫でて呉れる者があつたらと思ひますよ。湯原君の細君なんか元は姉か母親のやうな氣がしてたけど、此頃は、厭な人間になつちまつた。女つてもものは世帯苦勞するとあんなになるものか知らん」

「厭ですわね、あんなになつちや」と、女は眉を擧めたが、それを取消すやうに、「だけど、悪い人ぢやないんですよ。誰れにも惡氣のある人ぢやないんですよ。病氣なんでせう」

「子供がないからかも知れん、一度出来かゝつただけだ……」

「さう」と、女は軽く云つて、「貴下はお家でどんなものを召上つてるんです」と、突如に訊いて話を外すやうにした。

「何故です」と、香取は女の問ひ方の變なのを怪んで、「湯原君の家とさう違つてはゐませんよ、普通の物ばかりです。あの家でも拙い物ばかり食べてるやうですね」

「え、一」

女は何か氣に掛つてゐるらしく、ハキ／＼話を進めなくなつた。香取は氣に留めぬやうに装ひながら、相手の顔を見詰めて、秘密を持つてゐるらしいその心の底が、隈なく明るくされないのでを焦躁しがつた。が、先方で避けてゐるのに、あまり諄く訊くのも意地悪く取られさうに氣遣はれたので、何時か自然に女の口から明されるのを、氣永に待つてゐようと思つた。宿の受人になるのは、女と自分の關係を付けて置くために却つて都合がよかつた。

で、彼れは半紙に細く筒條書きにして何か書付けてある證書を女から受取つて、碌に讀みもしないで、「印を捺して直ぐ郵便で送ります」と、疊んで懐に入れようとしたが、女はふと手を伸してそれを取返して、

「随分勝手な事はかり書いてあるんですよ」と、披いて見せて、處々指差しながら、「宿主の都合次第で斷つた時には三日以内に立退いて呉れとか、部屋を汚したら相當な辨償をして呉れと

か書いてあるでせう。それに借手の方から一月以内に出て行くと、間代は拂戻さないなんて、随分勝手過ぎると思ひますよ」

「さうだね」と、香取は一通り軽く目を通して、「こんな事を書いてても、宿料さへ拂つとけば何も面倒なことはないんですよ。宿料を滞らせて逃出してもすると、受人が責任を負はなくちやならんのだけだ……しかし一月分なら、僕が引受けたつていゝ」

「ぢや、私夜逃げをしますよ、此處が厭になつたら」

「え、その時は葉書を送つて下さい。僕が跡片付に来るから」

「それは戲談ですけど」と、女は調子を變へて、「此處のお神さんには何か遣らなくちや悪いでせうね」

「そんな事はどうだつていゝさ」

「さうですかしら。だけど私の性分では何か心付けをしなければ氣が濟まんですよ。それに、かゝるして家の者のやうにしてるんですから」

「ぢや、幾らか包んでやつたらいいでせう」と、香取はそれを機會に紙入から紙幣を取出して、「この中で、貴女の氣の濟むだけお遣なさい。」

澤山遣る必要はないんですよ」と、女に手渡ししようとしたが、女は押返して、手を振つて、

「そんな物いゝんですの。わたしよ〜困つたら、貴下にお願ひしてお借り申しますけど、まだ當分は構ひませんの」

「まあいゝから取つときなさい」香取は紙幣を疊の上に置いて立上つて、「僕はもう歸りますよ。非常に長居をしたと、云つて戸外へ出て行つた。

そして、半日を其家で送つて金を置いて来たために、先日からの鬱陶しい心が稍軽くなつたやうだつた。

(九)

家へ歸ると、直ぐに證書に捺印して送つたが、それに添へて「あまり屈託して身體を害はぬやうになさるべし」と書いてやつた。折返して女から簡単なお禮の葉書が来た。

女はその用事ばかりで手紙を寄越したのかも知れぬが、香取の心にはその目からお多代の身體が暗く明るく絶えず映つてゐた。氣分のいゝ時には女の姿が晴々しくなつて、今の境涯が却つて安らかなやうに見え、心の沈んだ時には女の姿も儼げになつて、その日々の生活が前よ

りも痛ましきうに見えた。或夜も眞夜中に不快な眠からふと目をさますと、女が寢床に坐つて、胸に手を當てて悄然首垂れてゐるやうに思はれた。湯原の細君の剃刀騒ぎも思出されて、思詰めると、女は誰れでもあゝなるのかも知れないと、恐ろしくなつた。「一夜逃でもしたら」と先日戯談らしく云つた言葉までも、女の心の底を微めかしてゐるやうにと取られ出した。

で、果しない妄想が湧上ると堪へられなくなつて、燈火を點けて机の前に正坐して、煙草を吸ひながら、つとめて心を落着けようとしてゐたが、やがて、巻紙を擴げて、自分の思つてゐることを、清慮なく細かに書出した。自分の想像に浮んでゐるこれまでの女の所行を責めたり悲んだり、將來を戒めたりした。自分はあの時から憐れなる貴女を一刻も念頭から去つたことはい、思出すと立つても坐つてもゐられぬと書いて、

「貴女は最早純潔な女としては通れぬ身だから、たとひ糊口の道はついたにしても、この先幸福に眞直な生涯は決して送れぬことと思ひます」と、わざと嚇すやうに書いた。思

「……貴女が田舎から出て来るやうになつた事情や、此方へ来てからの事を考へると、悪運に

取付かれてゐるやうに思はれます。一生とてものがれる事の出来ない恐ろしい者に付纏はれてゐるやうな氣がします。貴女ばかりぢやない、私だつてさうだ。私は戸田の細君などのやうな氣樂な人間ではないんです。毎日淋しい手頼りない日を送つてゐます。丁度貴女のやうに……これまでいゝにして悪運に罹らぬやうに返つて来ましたが何時かは酷い目に會はされさうに思はれてならない……」

自分の感想染みたことを、秩序なく書續けてゐる中に、長い巻紙も盡きてしまつた。それをお多代に宛てて出す氣にはなれなかつたが、只女を目に浮べて、思ふ事を書いてゐると、自ら心が紛れた。

で、彼れはそれを一度讀返して、机の上に擴げたまゝ、燈火を消して寢床へ入つた。すると夢ともなく、現ともなく、誰れかが側にゐて、頗りに自分を語つてゐるやうな氣になつた。

「東京へ来てから幾度もお目に掛つてるのに、何故その時早く私を助けて下さらない。あの時分に何故見向きもなさらなかつたのですか？」

「今になつて焦慮したつてそれが何になりますか？」

私の方で幾ら思つても、女の方から云出されはしません。もう此世では貴下との縁はないんです。

まだ同じやうなことを云つてゐたが、その人はお多代らしくない悪相を帯びた女だつた。香取は押潰されるやうな苦みを感じて、目を醒まして起上らうとしたが、身體は快く眠つてゐるのか、少しも自由にならなかつた。

朝目を醒ますと、枕許の手紙が昨夕の苦い夢の名残として先づ目についた。彼れはそれを忌はしいものやうに力強く引裂いたが、いくら裂いても裂け切れぬものが部屋の中に残つてゐるやうだつた。

長く續いた秋日和は今日も變りさうではない。暫らく氣付かぬ間に北隣の庭の楓葉の眞紅に染んでゐるのが、隙間からテラ／＼目についた。彼れは自分の部屋で呼吸をするのが重苦しいやうで、遠く戶外を見てゐたが、高く低く屋根から屋根が何處までも續いて果しがなかつた。

そして、家もない人もゐない野原へ只一人逃げつて、心に蟻つてゐる人影を消してしまつて、自由に息をしたいやうな氣がして、表へ出て行つた。

が、彼れは走つてゐる電車を見ると、それに背

いて淋しい方へ足を向けられなくなつて、考へる間もなく飛乗つた。上野町へ行つてお多代の出た後の様子を見て来るか、追分へ行くか、この二つの外に差當つて訪ねたい家はなかつたが、三丁目まで来ると、つと電車を下りて、脇目も觸らず追分まで歩いて、かの床しい古い門を入つて行つた。目の細い肉付のいゝ頬のテカ／＼してゐる四十恰好の主婦が庭に立つてゐた。

「お多代さんはゐますか」と訊くと、不思議さうに此方の顔を見て、
「樋口さんですか」と問返して、「ゐますよ」と冷淡に答へた。

その聲にお多代は障子を開けて微笑したが、目を浴びたその顔は先日よりも蒼く見えた。香取は縁側から座敷へ上つたが、机の上の薬瓶が先づ目についた。

「何處か悪いんですか」と、氣遣はしさうに訊くと、
「悪いつて程でもないんですけど、胃が少し悪いです」と云ふ。
「家にぢつとしてゐるからでせう、少し散歩でもしちやどうです。こんなに天氣がいゝんだから」

香取は突立つたまゝ、今直ぐにも外へ誘ひ出

したさうにしたが、女は怖がつて立たなかつた。そして、二度三度勸めると、さも厭さうな顔をするので、香取も強ひかねて、其處に腰を卸した。女は先日ほどハキ／＼しないで、あまり口數も利かなかつた。遊びに来られたのを喜んでゐる風も見えなかつた。が、暫らくして、ふと、
「貴下はあれから下谷の方へ入らつしやらないのですか」と、意味ありげに訊いた。

「一度も行きませんよ、何故です？」
「私が東京にゐることが皆なに感付かれてゐるやうなんです。戸田さんでもさうとばかり思つてるらしいんですよ」

「何故？ だつて誰れも知らせる人はないのでせう。僕は寄付きやしないし……」
「それはさうですけど」
香取は自分の所爲ではないと飽くまで辯護して、「此處にゐると知れたら困るんでせう。それしたらどうしますか？」

「仕方がありませんわ、私も覺悟してますの」と、女は態と平氣らしく云つた。
「覺悟つてどう覺悟してゐるんです」彼れは自分の上にも危険の近づいてゐるやうに感じて、力を入れて問詰めた。

「貴下どうしたらいいと思つて？」女はふとこ

れまででない馴々しい甘い言葉で、目に媚を
浮べて云つた。

「さあ」

香取は眉を顰めて 白い歯で唇を噛んで一
途に考込んでゐたが、やがて「僕も場合によ
つちやどんな責任を負うてもいいです。貴女が
神戸へ行かないで東京にあるのを、僕の所爲に
したつていいんです。そのために僕が不名誉を
得たつて構はないと言切つた。そして、最早自
分とは、正當な戀中にはなり得ない女のため
に、知人間に名譽を失つて物笑ひの種になるの
を心苦しく思ひながら、その苦みは何となく
懐かしかつた。二人の間の隔りが取れて、こ
れまでのやうな清慮氣がなくて、女を見てゐら
れるやうになつた。

「私が無理に貴女を勸めて引留めたことにしと
けばいいでせう。何處か途中で出會つたとか何
とか口實をつけて……僕も責任を以て貴女を一
人立ちで暮らして行けるやうにすると受合つて
もいいんです。今度湯原や戸田の細君に會つた
ら、私の方からさう云ひますよ。その代り貴女
もそのつもりで、この後あの人達に非難されな
いやうに注意しなくちやなりませんよ」

「ええ」と、女は軽く答へて、「だけど、成るべ

く貴下からは何も仰らないうで下さい。却つて
御迷惑になりますから」

「しかし、貴女も逃隠れして心配してゐるよりや、
いつそ明らかになつた方が氣楽ぢやありませんか。
僕も今となつちや、もう自分の迷惑なん
か構ひませんよ。それに貴女と私の間には些
とも疾しい事はないんだから」と、香取は次第に
感情を昇らせて、「僕は先日貴女に會つた時か
ら、毎日いろんな事が考へられて仕方がないん
ですよ。折角落着きかけてた心がまた痛み出し
て仕方がない。あの時湯原君を送つて上野町へ
行かなければよかつたのに……矢張僕の身にや
悪運が取付いてるんだ」と、歎息した。

「が、かうなつた上は最早どう云ふ結果になら
うともそれを考へてはゐられない。お多代と離
れては淋しくて暮らされさうではない。このま
ま身の破滅にならうとも、二日でも三日でも二
人で、恣な晝と夜を送りたかつた。
男の愛情のある哀れげな言葉に感動したの
か、女の涙も涙に濡れてゐた。香取もそれを
見ると涙ぐんだ。そして二人は暫らく黙つてゐ
た。主婦は庭の方から不思議さうに此方を顧み
て聞耳立ててゐる。

「私、何も彼も貴下にお話したい」と、お多代

はふと溜息吐いてから云つた。
「何をです」と、香取は胸騒ぎさせて顔を上げ
て、「何をです？」と強く云つて、恐ろしい言葉
を待設けたが、

「今直ぐお話しは出来ませんわ」と、女は首垂れ
た。
「だけど、それを聞かざりや、僕は安心が
来ませんよ……今でなければ何時話すつもり
なんです」
「何時と云つて」と女は言流んだが、やがて、「で
は後で手紙に書いて出しますわ」
「手紙は直ぐ呉れますか。成るべく細く書いて
送つて下さい、隠立てをしないで」
「ええ」

「それから葉書でも毎日の様子を知らせて貰
へるといいんだが。貴女の方で呉つた事情が
出ると、僕は直ぐ来て見ますかし」
お多代は真心を籠めた男の言葉を聞きなが
ら、氣乗りのしない返事をしてゐたが、「では私
困つたことが出来たら、貴下にお知らせしてよ。
困つた時に人に頼むのは私願ですけど」と、や
がて決心したやうに云つた。
「それは他人にはうつかり依頼しない方がい
んですよ。だけど、僕を兄妹とでも思つてたら

信用して打明けられるでせう」と云つて、香取は突如に、「貴女は今幾つですか？」
「年齢を訊いてどうなさるの。私もう二十二になるんですわ」

「ぢや僕とは五つ違ひだ。矢張僕の方が兄だよ。何だか僕が弟のやうな気がするけれど」

「私そんなに老けて見えて」と、女は不快らしい顔付をして、「上野町に一年ゐたばかりでこんなになつたんですよ」と怒めしさに言つた。

「些とも老けちやゐないさ。東京へ来た時よりや若くなつたくらいですよ、綺麗にもなつたし」と、香取は眞顔で見話めた。

「綺麗だなんて。眞面目に聞いてれば愚弄つていらつしやるんだわね」と、女は面羞さうにして、口元に微笑を含めた。

「愚弄ふもんですか。僕は本當にさう思つてる。去年初めて見た時分にや、色の白い女とは思つてたけど、何處か田舎吳かつたが……」

「どうせ田舎者ですもの、私なんか」

「だけど、今はあの時のお多代さんとは思へませんよ。見馴れた人は気が付かんか知れないが、田舎へ歸りでもしたら、皆なが吃驚しますよ。先日の夜上野町で貴女がお湯から歸つて茶の間へ入つた時には、僕だつて見違へるやうだ

つたからな」香取は心の震へるやうにその時を思い出して、「あの薄暗い處へ貴女の白い艶のい顔が見えた時は、僕は生返つたやうな気がしたんですよ」

「貴下もいろんな事を仰るわね」と、女はわざと澄まして、「幾ら煽つてたつて容りませんよ」と云つたが、日は心の中の悦しさを隠し切れなかつた。

香取は次第に調子づいて、浮ついた口を利き出した。女も面白さうに聞いて、姿勢を崩して運葉な素振をもした。

やがて主婦をも座敷へ呼んで、一緒に晝飯を食べて、世間話に耽つた。が、主婦は見かけに依らぬお世辭のない口の重い女で、座敷を添へては呉れなかつた。時々は存在な言葉で人を輕んじたやうなことを云つた。「今時の女は學問したつて針一つ碌に持てないし、花を生ける術も知らんのだから困つたものだ。衣服の縮柄の目立さへ出来なから、變な身装をして歩いてる女が多い。流行だつて何だつて自分の身體を見てからのことだ」と、高慢らしく次の間にあつた反物を持つて来て見せながら、興もない説明をした。

「あんな事を云つて、反物を賣付けようとする

んですよ」と、お多代は主婦が茶の間へ引込んでから小聲で云つて、「町の呉服屋よりやこの家で買ふ方が安い事は餘程安いですの。貴下が若し衣服をお拵へなさるなら、此處で買つておやんなさい。その方が餘程得ですよ」

「ええ……」香取は氣の無い返事をした。そして短い日の最早暮れかゝつてゐるのを見て、暇を告げて、立上つた。女は引留めもしなかつた。

歸り際に手紙の事を念を押して戶外へ出て、大學前まで何も考へず脇目もふらず、足早に歩いて来たが、ふと心が騒出した。何氣なく聞いてゐた主婦の話の端に疑ひの種が宿つてゐるやうな氣がした。「この柄は仕立てると貴女にはよく似合ふんですよ。何時か着ていらつしやつた袴が一寸こんなでしたね。どうなすつてあれは？」と訊いてゐたが、それで見ると、以前からの知合ひであつたかも知れない。お多代に對する素振の他人行儀でなさ過ぎるのも不思議だ。

あんな家と懇意な筈はないんだがと、彼れはその家にまた解けがたい秘密が潜んでゐるやうに思はれて、自分の家へ歸つてからも暫らく想像を逞くしてゐた。

約束の手紙は翌日一日心待ちにしてゐたが、つひに来なかつた。で、責めるやうな語調で催促の手紙を出すと、やうやく簡単な返事が来たが、「何もかもお知らせする」と云つた言葉は忘れたやうに、只「たいくつして居りますから遊びにお出で下さい」と、卒氣なく書いてゐる。

あれ程堅く云つて置いたのにと、香取は腹立たしくなつて、「先方が困つて頼んで来るまで、此方から行つてやらない」と決心して、これまでの餘計な心盡しを思かしく思つた、宿受の印を捺したことを悔いた。

「他人の傷つけた女を助けるために苦勞して、自分の僅かな財産を減らしたりして、加之に知人から變に疑はれなどしては、此上もない馬鹿を見ねばならぬ。何もかも打明けて向うから歎願するやうでなくては、好意の寄せ甲斐がない」と、冷やかに自分のしたことを批評する氣分にもなつた。

そして二三日を過ぎた。忘れるやうにと頻りに心を外事に注がうとして、久しく跡絶えてゐた或友人を訪ねたり、「やまと」へも二晩続けて足を運んだ。先日は耳に留めなかつた女の名

も分つて、少しは無駄口を利用して、長居をするやうにもなつた。女の顔は最初の時よりも次第に立勝つて見えた。話してゐる中に、ふと、この女にでも都を離れて淋しい田舎へ行つて見たくなつて、

「何處か連れて行つてやらうか、泊り掛けで」と突如に云つた。

「え、連れてつて下さい」と、女は半ば疑ひながら悦しさに云つた。

「何處にしよう」と、香取は考へたが、只の海岸や温泉へ行くよりも、世人の信仰してゐる寺か宮かへお詣りして見たい氣がして、「僕はまだ一度も行つたことがないんだが、成田へ行つて見ようか。お前は知つてるかい」

「いゝえ。私まだお詣りしたことないの。……だけど成田山は那だわ」

「何故？」

「でも二人で彼處へお詣りすると、縁が切れるんですつて」

「まだ切れるも切れないもないぢやないか」と香取は笑つて、「しかし厭なら外にしたつていい。鎌倉へも……」

「鎌倉？ だといゝわ。私、大磯へも鎌倉へも行つたことないのよ」

女は急に浮々として、一日も早く行きたさうにした。成るべく貴下に御迷惑を掛けぬ様にする、と、祝儀や玉の勘定まで出した。

香取はその中電話で日取を知らせることにして、女の家の名と電話番号とを書留めた。そして、もう三度目の馴染でありながら、矢張り泊らうとはしないで、止められるのを振切つて、更けぬ間に其家を出た。北風が吹いて外は寒かつた。先日中の程かな小春日が崩れて、俄かに冬の近づいたのが薄着の肌感ぜられた。

今年も程なく暮れんとしてゐる。仕事もしなければ、楽しい思ひ一つしなかつた癡人のやうだつた一年が、間もなく過ぎんとしてゐる。彼はせめて新しい歳を迎へるといふことだけでも微かな望みを置いて、早くこの厄年のやうな一年の過ぎて、厭な記憶の消えてしまつたらばと思ひながら、空家のやうに寂とした薄暗い自分の家へ歸つた。

歸ると、直ぐに机の上を見て、葉書の來てゐるのに氣付くと、若しやと心を動かしたが、それはお多代からではなくて、湯原からだつた。明日の午後訪問すると知らせて來たのだ。

前觸をして置くほどなら、只遊びに来るのであるまい。何か用事があるだらうが、お多代

の事で訊きに來るのではなからうか。若しさう
だつたら、詰らぬ疑ひを受けぬやうしなければ
ならない。と、彼れはその場合の辯解の言葉
を豫め考へて、女のために自分のために
も都合のいゝやうに辯はうと企てた。

そして、湯原の話の様子で、直ぐお多代に會
はねばならぬかも知れないと思つて、その夜女
に宛てて「……こんな譯だから明晩お訪ねす
る」と、手紙を送つた。

湯原の言葉次第で、却つて女と自分との間
の一層近くなりさうな氣もして、明日の午後を
待受けるやうになつた。

で、夜が明けて正午となると、時計の針を見
詰めながら、戸外の足音に耳を澄してゐたが、
やがて下駄の音が家の前に留まつて、快活な
湯原の聲がした。香取は稍極りの悪い思ひをし
て、縁側へ出て客を迎へた。

湯原は茶の間を覗いて、「相變らず達者で結構
だね」と、下女と近狀を話合つてから、緩
くり書齋へ入つて來た。平生の通りの顔をして
ゐる。

「閑靜でいゝね」と、障子を開けて庭の方を眺
めたり、机の側に重ねてある書物を引出して見
たりして、急に用事のありさうではなかつた。

でも何か言出すだらうと、香取は心に油斷し
ないで、やがて、遠廻しに細君の様子など訊出
した。

「この頃は兎に角落着いてよく働いてるよ。
時々例の癖で何か考へては鬱いでもこともある
けれど」と、湯原は眞面目になつて、「お多代は
君に迷惑を掛けつつね。あれもどうが片付け
るつもりだが……」

そして、相手のさう云つた心を計りかねて、
香取が黙つてゐると、

「君も時々訪ねてやつて呉れたまへ。あゝして
一人であつると淋しくつて、碌でもないことを考
へんとも限らないから」と、湯原は眞顔で云つ
た。「僕もあれについちゃ責任を以て相當の處
置は付けるつもりだが、兎に角極りの付いてし
まふまでは、誰れにも内緒にしときたいんだよ。
自分でも成るべく近づかんやうにしてるんだ。
何しろ家内があつた風なのに、戸田の家でも親切
ごかしに突付きたがるんだから、巧く收まるこ
とまで傍から壞されて面倒で仕方がなかつた。
自業自得と云へば云ふやうなもの、僕も實際
困つたよ。しかし先づ聞く事が濟みさうだから
いゝが、萬一の場合には君は僕の味方になつて
大いに助力して呉れたまへ」と云つて、調子を

變へて、「あのことだけは僕の一生の失策だが、
まあ大目に見て呉れるさ。一寸した迷ひだから
ねえ」と笑つた。

香取は聞いてゐる中に、皆なが連類になつて
自分を欺いてゐるとのみ思はれて、身體中の血
が頭に上るやうだつた。が、ちつと心を鎮めて、
相手の顔を見ないやうに俯目になつてゐた。
そして無意識に返事をしながら、次第に目の
前の事を忘れて、自分の家の中がさまざまに
想像され出した。

「どうだ、先日あの洋食屋へでも行つて見よ
うかと、湯原は暫らくして云つた。

「えゝ……しかし僕はこれから神田の方へ出
掛けなくちゃならんです、三時頃から」
「ぢや、もう時刻だね」と、湯原は時計を見て、
「其處まで一緒に行かう」
と直ぐに立上つた。

香取は否みかねて、厭な思ひをしながら、連
れ立つて外へ出た。が、湯原は途々「今日は遅
くまで君の家で遊んでたことにしといて呉れた
まへ」と頼んだ。

そして、別れて電車に乗つて香取は神田まで
來たが、何處と云ふ目的はなかつた。で、市街
の角に突立つて、夢のやうに周圍の動搖を見て

ゐるが、やがて、立つてゐるのが堪へられなくなつて、手近い牛乳屋へ入つて、倒れるやうに椅子に腰を掛けた。

「湯原は本郷行に乗つたのだから、今追分に行つてゐるかも知れない」と氣付くと、二人の姿が醜い様をして目にちらつき、その顔は自分も嘲つてゐるやうに見えた。心に力を入れて拂退けようとするほど、いろんな不様な姿勢をした二人が一層色濃く浮んで、外の人間の顔は影が薄くなつた。

「お牛乳を召上るんですか」と、側で催促する主婦の聲で驚いて顔を上げて、

「あゝ」と、香取は俯さうに返事をした。そして、再び同じ事を繰返して考へてゐると、根が盡きて、見る／＼壽命が縮まりさうだつた。「明日の朝行つて見る。それから事だ」と、心を宥めたが、すると又會つてどう云つたらいか果しなく案ぜられ出した。

で、此處にちつとしてもゐられなくて、一息に牛乳を呑んで、直ぐ外へ出た。氣を散らす様に周囲を見ながら歩いたが、目に觸れる人間の顔は皆怪しい色をしてゐた。

ふと彼れの顔が店先の鏡に映つて消えたが、それが驚れて死相を帯びてゐるやうに見えたの

で、彼れは身震ひして、逃げるやうに急いで歩いた。

知らず／＼神樂坂まで来たので、「やまと」へでも寄つて休んだら、幾らか氣が晴れるかと思つたが、興もない遠出の話など、浮いた事を聞いてゐられさうではないので、側まで行つて引返した。

また當てもなくブラ／＼歩いてゐたが、ともすると、先にさつと見た自分の顔が見すばらしく痛ましく思出されてならなかつた。で、ふと日に付いた洋酒屋へ入つて、舶來の葡萄酒を買つて家へ歸つた。そして、コップへ一杯呷つて、酔ひの出るのに力を得た。朽ちた唇を臙脂で色取つて欺くやうに、自分の肌を酒で染めて隠してゐるのだと知りながら、紅く勢付いて來る顔を見てゐると幾らか慰められた。

やがて怠くなり眠氣さして來たので、彼れは啖餐も食べないで、毛布を被つて假装をした。不思議にも平生にない熟睡に陥つて、下女に注意されて寢床へ入つたも夢中だつた。薄ら寒くなつて日の醒めた時は、最早眞夜中を過ぎてゐる。下女の安らかな寢息と枕時計の音とが忌はしい鼠の騒ぎの間に懐かし聞えた。次第に書間からの事を彼れの静まつた心に浮

べて見ると、自分で自分の心根が淺間しくもあり、愚しくも思はれた。お多代と自分の間には何の關係もないのではないか。手頼りのない可哀想な身の上だと思へばこそ、助けや氣にもなつたのだが、湯原の方で引續いて世話をしてゐるのなら、自分は構ひ付けないでも安心してゐられるではないか。どうせ初めから縁のなかつた女のために、大切に庇つてゐる自分の心に傷を付けては取返しつかぬ事になるのだつたのに……

で、彼れはそれきりで濟ませて、朝になつても訪ねて行かぬことに極めたが、その代りに最後の手紙を送ることにして、ランプを點けて机に向つた。

「……最早一生お目に掛らず候。貴女の將來は如何に成行くか知れねど、以後如何なる場合にもお手紙をお送りなきやう願上げ候。上野町の方へは當分近寄らず候へど、萬一貴女の手から悶着を惹起したる際に、小生は少しも責任を負ふまじき候。宿の保證もなるべく取消し下されたし」と、一氣に書き下した。そして、再び寢床へ入つて、温かい日が枕許に差込むまで起きなかつた。起きたつて世の中に用事ななければ、樂みもなかつたのである。

「思切つて今日にもあの女と旅をして見ようか」と、暫らくして起きて、落葉の覆れた庭を見ながら、ふとその氣になつた。

で、あの手紙を自分でポストへ入れに行つた次手に、自動電話へ寄つて、辰村家へ電話を掛けた。柔しい聲が聞えた。

「小菊と云ふ女はありますか」

「私、小菊ですよ。貴下何方？」

「僕は香取。先日約束した處へ今日行かうと思ふんだが」

「今日ですつて」と、驚いたやうな聲をして、「あまり急ぢやありませんか」

「都合が悪いんかい」

「さうねえ」と云つて、電話口を離れて家の者と何か話してゐた。

「ぢや、二三日後にしよう……」

「明日だといふんですがね、勝手ですけど」

「ぢや、さうしよう」

香取は相手がまだ何か云はうとしてゐるのを耳に留めずに、直ぐに電話を切つた。

(十一)

折角氣乗りのした鼻先を折られて、詰らない氣がして其處を出た。いつそ一人で旅に出よう

かとも思つたが、田舎の宿で悄然して時を過しかねる自分の姿が、今から目に見えるやうなので躊躇された。

彼れは廣い都の何處にも、自分の身を落着ける處がなかつた。そして、只歩いてゐると、一度拂退けた雲がまた湧立つて心を鎮したが、すると、昨日まで念頭に置かなかつた湯原の細君が、不思議に懐かしく思はれ出した。何も知らないのだからかと思ひの毒にもなつて、つい訪ねて見たくなつた。

で、湯島の梅月へ寄つて栗饅頭を買つて、それを手土産に持つて行つた。細君は襷掛けで拭掃除をしてゐた。よく見ると、先日よりもまた元氣のいゝ顔をしてゐる。塵立てた頬には髷が出てゐる。

「お一人だとお忙しいでせう」と、香取がお世辭を云ふと、

「でも忙しい方が私達にはいゝんですよ」と快く答へて、「どうせ働くより外に能がないんですからね。本當に因果な性分だ。一日だつて氣樂に遊ぶ氣にやなれないんですよ」

「その方が結構仕合せかも知れない。遊ぼうたつて、さう面白いことはないんですからね」

香取は細君が淺黒い手足を動かして、座敷の隅々まで丹念に掃除するのを、邪魔にならぬやうにして暫らく見て居た。大略片付いてから、細君は襷を取つて一息吐いてから、ふと思出したやうに、

「昨日は湯原がお訪ねしましたつてね、大變御馳走になつたと云つてましたよ」と、笑顔をして云つた。

「え」と、香取はドギマギしながら、「湯原君は何時頃に歸りました？」

「随分遅かつたんですよ。歸つて来て煙草吸つてる中に十二時が打つたんですよ」

「さうですか」

「お宅を出た時がもう餘程遅かつたんでせう」

「え」と

それきりで話は外へ移つたが、香取の頭には昨日の三時から十二時までの事が渦を卷いて細君の仕掛ける世間話など耳に入らなかつた。

「この頃湯原君は毎晩家にゐるんですか」と、やがて何氣ない風で訊いた。

「え、用事のない時は大抵家でごろ／＼してますよ。遊びに出るつたつてお金がないんですよ。昨夕は貴下に御馳走になつて、お酒の香ひをさせてましたけど、この頃滅多に他所で飲んで來ることはありませんの」細君は安らかな

目付をしてゐる。
「家ゐてどんな話をしてるんです？ 毎日二人ぎりで、話があるんですかね。僕なんか下女と二人でゐて、何か話したくつても種がありませんがね」

「そりや召使ひと夫婦とは遊びますよ。…でも先日雨の降つた晩、湯原が何か一人で考込んちやつて、気が鬱いで仕方がないつて、一緒に鈴本へ落語を聞きに行つたんですよ。私一年目に寄席へ入つたのですの」

「ぢや、この頃は此家も平穩無事なんですね」と、香取は何時かの晩の細君の狂人染みた様子を出しながら、皮肉らしく笑つた。
それが不快に聞えたのか、細君は今まで機嫌のよかつた顔を曇らせて、「何故です？」と詰つた。

「いえ、何でもないんです。湯原君が家に落着いてさへゐればいゝんだが…。」と言濁しながら、香取は我知らずお多代の事を打明けたさうになつたが、強ひて心を壓へて、「寄席は面白かつたんですか」と訊きたくもないことを訊いた。

「私落語は義太夫ほどに好かないんですけどね、それでも随分笑はされましたの。圓藏であ

の馬のやうな長い顔した男があるでせう。あの男はよく喋舌るんですねえ。私よくあんなに口が動くかと思つて呆れましたよ。それがこんな話なんですの」

細君は機嫌を直して、さも珍らしさうに「轉宅」といふ落語の筋を語りながら獨りて笑つた。
香取は聞いてゐるのが次第に慵くなつて、つい受答へをするのを忘れて外見をしながら、外的事を考へてゐるが、話が終ると、
「神戸からは音信がありましたか」と、突如に訊いた。

「無事に着いたつて知らせて寄越したきりですよ」
「さうですか」
「あんな女、東京なんかへ來ない方がいゝんですよ。悪い風を見習ふと碌なものになりやしない。私些とも知らなかつたんですけれど、田舎でも皆なに爪弾きされてたんですつてね。随分男狂ひもしてたらしいんですの」

細君は氣の置けぬ話相手を得たのを喜んで、手厚く待遇して緩くり遊ばせようとしてゐるが、香取は細君の顔を見てゐると、次第に氣の毒なよりも愚鈍に見え出した。これで湯原の家も無事に治まつて行くのかと思ふと、不思議で

ならなかつた。そして、話をしてゐるのも齒痒くなつて、急用でも控へてゐるらしく言譯して、間もなく其處を出た。

豫期に反して細君が少しも感付いてゐないのが、却つて物足らなかつたので、若しも誰れかが秘密を發いて教へてやつたらどんな結果になるだらうと、その後の騒ぎを想像しながら歩いてゐるが、途々お多代らしい女が頻りに目に付いた。胸騒ぎして見詰ると、どれも皆あの女よりは醜かつた。目許に口口のあたりにか、何處かにあれほどの懐かしさがなかつた。するとお多代を見つけた男は皆忘れがたい愛着の思ひを寄せてゐるやうに思はれた。二三人連立つた湯歸りの藝者にも出會つたが、その歩振りが妙に卑らしく見えたり、水々した顔立が浮ついた淺慕な女のやうに思はれたりした。

で、彼れは訪ねて行かうと決心もしないのに、風に逆つて追分の方へ足を向けた。そして只その方へ歩いてゐると云ふことだけでも、心に張合ひがあつた。
門の前に來ると、耳を澄しながら、二三度行戻りした。矢張物音がしない。門に觸つて見ると、掛金が掛つてゐた。
で、怖いものに觸るやうにして、そつと叩く

と、内から大儀さうな返事をして、女が門を開けに來た。香取は相手がどんな顔して迎へるかと、平氣を装つて見入つてゐたが、其處へ現はれた女の顔は、例に似氣なく陰険に見えた。女は淋しい微笑を浮べて挨拶して、「今日は乾度入らつしやるだらうと思つてたんですよ」と云ひながら、急いで座敷へ駈込んだ。

座敷にはまた枕や掛蒲團が出たであつた。手早くそれを片付けてから、箱火鉢を眞中へ持出して、「今日も私のお留守番なの。主婦はまた朝から遊びに出てるんですよ」と、呆れたやうに云ふ。

香取は昨夕其處にゐたらしい湯原の姿を目先にチラつかせながら、暫らく考込んでゐたが、

「どうなすつて？」と、女に訊かれたので我に返つて、

「今朝僕の出した手紙はまだ着かないんですか」と、目を据ゑて問詰めた。

「いえ。昨日此家へ入らつしやると云ふお手紙を頂いたきりですわ。…今朝のお手紙つて、どんなこと？」

「今に着いたら分るでせう」と、香取は意味ありげに云つた。

「どんなこと？ 何か大事なお手紙？」と女は氣遣はしげに訊きながら、用心深い目で男の様子に注意してゐたが、やがて俄かに首垂れて可憐らしい目付をして、「私今日こそ何もかもお話ししますわ。黙つてちや貴下を騙してたやうだから」と、聲を震はせた。

香取は容易ならぬ恐ろしい言葉がその口から出さうに思はれて、今直ぐ聞かない方がいゝやうにも思はれた。

「私、脅迫されてるんですよ、昨夕も脅迫されてるんですよ」

「何と云つて？…だけど、昨日會つた時だつて、脅迫なんかする人間とは見えなかつたが…あの人はそんな人ぢやないんだが…」

香取は湯原と云ふ名を口にするのさへ不快なので、それを避けるやうにした。

「それは貴下がよく御存じないからですよ。初めからそんな人なんですよ」

「で、どう脅迫するんです。何時までも關係を絶たんと云ふんですか」

「ええ」と、女は曖昧に答へてから、稍心を落着けて、「私ね、どうされたつて關係はないから、姿を隠さうと思つてるんですけど。…思案に餘つてることがありますの」

「……」

「私、もう只の身體ぢやないんですよ」

女は案外平氣で云つたが、香取は目に見えるものが皆、女も自分も一緒に、地の底へ沈んで行くやうな氣がした、頭がクラクラした。

「ぢや、妊娠して居るんですか」と思はず云つて、自分で自分の聲を疑つた。

で、二人は暫らく口を噤んでゐた。木枯しが庭に吹付けて、サラ／＼と落葉の轉がる音がした。火鉢の粉炭は火花を散らしてゐる。

「昨夕もそりや恐ろしいことを勧めますの…薬を飲めつて云ふんですよ…私どうしてもあの人の云ふことなんか聞かないつもりですよ」

わ

やがて女はきれ／＼に云つた。そして目に涙を浮べてゐたが、言葉いことを打明けたので心が稍軽くなつたらしく、「私誰れにも知らせないで、一人で屈託して居たんですから、貴下悪く思はないで下さい、自業自得と思はないで下さい。そりや私が悪いんですよ、皆に憎まれてばかりゐて、味方つて一人もないんですよ…貴下にまで憎まれちゃ、私立つ瀬がない」

香取は女が手を合せて自分一人に助けを乞う

てゐるやうにのみ思はれて、一時疑ひも憎みも消えて、只手を執つて思ふ様泣いてやりたくなつた。外の世間は次第に心から遠ざかつて、只二人が苦しい夢を見てゐるやうだつた。口に出して互ひの思ひを語らなくとも、唇は觸れなくても、心と心とは最早融合つてゐるやうに香取には感ぜられた。

「で、これからどうするんです？」

「どうするつたつて、外に行く處がありませんから、當分此家にゐようと思ひますわ。身體さへ輕くなれば、またどうにでもなるんですから」

「だけど、貴女の身體はどうしたつて元のやうにはならんのだ」

「それはさう！ どうせもう誰れも相手にしては呉れないでせうから、私一生一人ぼつちで暮らすつもりですの」

「だけど、女が一人ぼつちで東京で暮らせるものですか」

香取は女の幽かな希望をも無體に押し潰して、最早何處にも助かる道のないものやうにのみ思込んだ。たとひ男に傷つけられたにしても、相手が湯原でさへなかつたならばと、無慈悲な悪運をも悲んで、「事情が分つたら僕

も此家へ遊びに来る譯に行かない」と、萎れて云つた。

「こんなお話しだから、もう来て下さらないんですわね。愛想の盡きた女だと思つていらつしやるんでせう」

「いや、これでお別れだからと女は氣を引くやうに云つて、せめて今日一日緩くり遊んで行つて呉れと頼んだ。香取も立ちかねて、膝を崩して坐つたり、脇枕で寝ころんだりして時を過した。何時の間にか話は急所を外れて、田舎の思出や此家の夫婦の噂などに移つて、香取の心は次第に鎮まつた。最早底の底まで知合つた間のやうで、何でもない話にも深沈な味が添つた。

と、其處へ郵便の聲がした。女は受取つて来て、「貴下からのですよ」と封筒を見てみると、香取は慌てて起上つて、咄嗟に手紙を奪取つて、寸々に引裂きかけた。女は突立つたまゝ、氣に取られてゐたが、「何故そんなことなされる。何度酷いことが書いてあるんだわ」と、やがて恨めしさうに云つて、手紙の反古を奪はうとした。

香取は取られまいとして争つて、終ひにその紙片を火の中に投込んだ。女は煙を咽びながら、肩を息をした。

「何も變つたことは書いてやしないんだけど、僕の面前で僕の手紙を讀まれるのは厭だから」と、香取は快く笑つて、障子を掛けて煙を出した。

「貴下は無法人ね」と云つて、女は飛散つた灰を箆で掃出しながら、「私貴下に差上げたいと思つて、手紙を書いているんですよ。だけど貴下が御自分のを破つちやつたから、私も破つちまひますわ」と、口元に笑ひを浮かべた。

「今其處にあるんですか」と、香取は目を張つて飛付くやうに云つて、「先日詳しいことを書いて送ると云ふ約束だつたんだから、それは僕に見せる義務があるね」

「だけど見せませんよ」と、女は鬨弄ふやうに云つて、「私の目の前で私の手紙を讀まれるのは別ですもの」

「いや、家へ歸つてから讀んだらいいでせう：本當に書いてるんですか」

「あら、讀だと思つていらつしやるの」と云つて、女は針箱から手紙を取出して、上書を見せながら、「お歸りになる時お渡ししませうね。私二日もかゝつて一生懸命に書いたんだから、

私の記念と思つて大事にして下さい」と云つて、袂へ隠した。

「記念が手紙ぐらゐぢや、あまりお粗末だな」

「だつて私何も持つてゐないんですもの……もうお正月が来るんだけど」

香取は今更のやうに部屋を見廻したが、女の所有物で金目のありさうな物は一つもなかつた。先日と同じ洗曝らしい瓦斯織が何かを着て、白い指に嵌めた指環も見窄らしかつた。で見ている中に、一時の浮付いた心が沈んで、

「僕もこれまでに二三人の女を思つたことがあつたんだが、何時も何か知らん障礙が出来ては頭を痛めるばかりだつた。氣持のいゝ思ひをして遊んだことなんか、一度だつてありやしな。僕が親しくする者は、皆な悲惨なやうな氣がする」と、ふと、獨言のやうに云つて、「貴女はさう思ひませんか」と、感じを籠めて相手を見詰めた。

が、女はその言葉の意味を判じかねて「え」と軽く答へて、世の中の事は障礙の多いもので「すわね」

「實際さうだ。殊に僕は誰れに交際つてても、直ぐに何か知らん障礙が出来て来る」と、香取

は獨りて考へ込んだが、すると、知つてゐる人々は皆毒氣を含んでゐるやうにのみ思はれ出した。

「あんまり脅迫するやうだつたら、仕方がない、貴女も身を隠したらいいでせう。あんな人の世話にならなくなつたつて、身の極りはつきさうなものだが……矢張り一人ぢや處分が出来ないんですか」と、やがて問詰めると、女は横を向いて、怠さうに身體を崩して溜息吐いた。

で、再び問詰めたが、女は耳を蔽はぬばかりにして、「もうそのお話は止して下さい」と、俯さうに押し止めた。

香取は口を噤んで、半ば身を伏せた女が、さも道場のないやうにその片手を彼れの膝に乗せるのを、ぢつと見てゐた。

が、彼れはやがて身震ひして立上つた。女の手の温味が傳はると急に怖氣づいて、逃げるやうに眼を告げた。女は何氣ない様子で門の側まで見送つて来て、別れ際にふと思出したやうに、袂の手紙を取出して、男の手に握らせた。

やがて釣金を掛けて女の家へ入つて行く足音を聞いてから、香取は一度振返つて暫らく門の方を見詰めた。そして、手紙を披きながら、表通へ出た。假名の多い分り難い手紙を當推

量で讀んで見ると、今打明けて話したやうなことを微見かせてゐるばかりで、豫期したほどの異つたことも書いてなかつた。が只「毎日心細くなつた時には、貴下のお顔を出出して居ります。そして、私が若しも氣儘な身であつたならと情なく思ひます」といふ終ひの方の覺束な文字が、彼れの目を惹起けた。

茫然してゐたものが確められたやうで、こんな文字をも喜んで、彼れは手紙を袂に入れて、家へ歸る氣もなく電車の方へ歩いてゐたが、次第に以前と同じ滅入つた氣持になり出した。

「いつそ湯原の考へ通りにして片をつけたら。薬を飲むかどうかしたら」と、ふとその一點にのみ思ひを籠めた。女の身の危険や、湯原との關係は暫らく忘れられて、新に憎らしい邪魔物が其處に現はれてゐるやうな氣がして、たとひ脅迫しようとも、湯原の手でその邪魔物を取除ける工夫をさせたかつた。

で、電車に乗つてからも、その工夫や結果を思込んで、家へ歸つたが、机の上には男名前で小菊からの手紙が来てゐた。堅苦しい、男文字で、今朝の失禮を詫言ひ、今夜にもお出で下さい、お約束の件でお話をしたいと、明暗に書いてある。代筆である上に前後に極り文句の添

へてあるのが、彼れは厭だつたので、手紙に引寄せられる氣はしなかつた。

そして、その手紙とお多代のを大事さうに机の引出に仕舞つて、當分は何方へも顔出すまいと決心した。湯原が始末を付けるまで追分へも近寄らぬことにした。子供の處分がどう極るかと氣遣ひながら、どちらにしてもその経過を見るに堪へられなかつた。

で、彼れは以前のやうに、強ひて書物を讀んだり、冬枯の郊外を散歩したりして、二三日淋しい日を送つたが、ともすれば胎兒の姿がさまざまに無残に想像されてならなかつた。夜中の夢には母親に抱かれた可愛らしい子供が見えたり、手足の撈取られた化物のやうな子供が見えたりした。

或朝も目を醒まして、晴やかな日影を見ながら、若い身空で一刻の平和も得られない自分を憐んだ。寒い風にも當てぬやうに、自分の心を庇つて来た一年の休養も何の甲斐も無かつたことを情なく思つた。

「鎌倉へでも行つて見ようかな」と、彼れは氣が進まぬながら、強ひて思立つて、自動電話へ行つた。そして、小菊と打合せをして、正午時分に用意をして「やまと」へ出掛けた。

(十二)

「今小菊さんから電話で知らせて来ましたよ。今日入らっしゃるんですつてね」と、其處の女中は顔を見せると云つた。

「さあ。行かなくちやなるまいね」と、香取は詰りななさうに答へて、「あの女は運がいゝね、僕にでも出くはさなかつたら、遠方へ連れてつて呉れる者なんかありやすまい。僕だつて何も彼女と行きたいつて譯ぢやないんだが」

「さうねえ」と、女中は眞面目に同意したが、「でも、あの女ならお連れなすつてさう恥かしくはありませんよ。衣服だつて一通り持つてるんでせう」

「衣服なんか粗末な方が却つていゝよ。僕がこんなだから」

香取は自分の服装の書生らしくて、藝者を連れて旅に出る人とは見えぬのに初めて氣付いた。そして、外に収入もなければ手頼るべき人もない身で、こんな事に無厭遣ひをするのが愚しく思はれ出した。戀しいお多代に指環一つ帶一筋買つてやらないで、何の興もない女と贅澤な旅行をする自分の心根が分らなかつた。小菊が、このまゝ止す氣にもなれなかつた。小菊

の方では、客が待遠しがつてゐるだらうと思つたのか、二度も電話を掛けて遅刻の申譯をした。香取は急立てでもしないで、一時間あまり寝たり起きたりして待つて居た。

と、やがて女中と話をしながら、小菊は階子段を上つて来て、次の室に姿を見せた。黒い眼鏡を掛けた白い顔と、縮緬の羽織と、丸髷とが、香取の目にも派手に映つた。女は極りの悪さうに躊躇してゐたが、「さあ奥様をお連れ申しましたよ」と、笑つてゐる女中に引立てられて入つて来た。手にはオベラバックを掲げてゐた。

「何が入つてゐるんだい、その中に」

「何も入つてやしないわ。だけど、空手だと變ですから」と云つて、女は坐つて、長襦袢の仕立上げるのを待つてゐたために遅くなつたと申譯をした。

香取は時間を量つて、女だけ仲で停車場へ向はせて、自分は後から電車で行くことにした。そして、女が家の者の賑やかな聲に見送られて行く後姿を、二階の窓から見下してから、階下へ下りて

「彼女まだ服装が揃はないね。衣服はいゝが、コートさへ着てゐないし、手袋も嵌めてゐないやうだね」と笑つた。

「でも丸血がよく似合ひますわね。女振がよくなつて、見違へるやうだ」と云つて、女中と主婦と小さい娘とが、左右からお土産をドツサリと頼んだ。

「お土産よりも、僕は何處へ行くか、何時歸るか分らないよ。二人で駆落しようかね」と、戯談らしくなく云つて、香取は其處を出た。道を急がうとはしなかつた。

久振りに停車場へ来たので、珍らしさうに騒々しい場内を見上げると、端近く出て待つてゐた小菊の姿が直ぐ目についた。

「鎌倉行は今直ぐ出るんですつて」女は側へ来て急立てるやうに云つた。

「何。遅れたらこの次でもいゝさ」香取は緩くりして切符を買ひに行つた。

汽車は横須賀直行で、軍人が四五人乗つてゐた。香取は斷えず窓の外を眺めて、女に向つてはあまり口を利かなかつた。女も大人しくしてゐて、時々小聲で途中の地名を訊くぐらゐだつた。

鎌倉に着くと、最早燈火が點いてゐた。香取は淋しい處をを選んで、材木座の清光館へと俵夫に命じた。學生時代に試験後の休養のために四五日其處に泊つて、屢々近所を散歩したの

だが、それが今記憶から薄らいで、道の左右が明かに思出せなかつた。二つの俵は只淋しい暗がりを曲りくねつて、波の音のする方へ馳せた。

宿屋の玄関に着くと、二階の海に近い部屋へ案内された。障子を開けると、沖の方に斑に浮いた漁火が見渡された。

「淋しい處だわね、私途中が怖かつたわ」女は珍らしさうに周囲を眺めてから、部屋の中に落ちて、「こんな静かな處に一人でゐたらどんなでせう」と、深く感じてゐるやうに云つた。

「さあ」香取は氣のない返事をした。そして一人で遠い土地へ来てゐるやうな氣持になつてゐた。

「私今は貴下一人が手頼りよ」と、女は斜に男を見上げた。

「ぢや、僕が今夜中にゐなくなつたらどうする？」

「ゐなくなるつたつて、私一緒に隨て行くから、何處へでも」

「海の中へでもかい」

「え、海へでも山へでも行つてよ」

さう云つて微笑してゐる女の顔を、香取はちつと見詰めながら、人里離れた淋しい土地へ女

一人連れて來れば、あらゆる媚を男に捧げるものやうに思つて、若しもお多代を誘ひ出したのだつたらと空想し出した。

女中の持つて來た襦袢を着て一緒に湯殿へ下りて、温かい鹽湯に浸つてゐると、その空想は一層濃しくなつた。湯氣に包まれてゐる女には、少しも男を憚る風は見えなかつた。

部屋へ歸つて、女の化粧の濟むのを待つて夕鏡の膳に向つた。土地の者らしい女中が鹿爪らしく、女の間に登へながら給仕をしてゐたが、香取は一人黙つて空腹に舌鼓打つて皿から皿を漁つた。

やがて膳が下げられると、女は火鉢に寄つて、巻煙草に火を點けて男に渡した。

「あの女中は随分色が黒いわね。お湯から歸りに見たら、一人も綺麗な女中ではゐないのよ」と、侮蔑むやうに云つた。

「初め此處へ案内した女は一寸可愛らしいぢやないか。馬鹿にいゝ目をしてゐる」香取は心に留めてゐないのに、わざとさう云つた。

「貴下あんな顔がお好きなの。私あしの女の顔は曲つてるやうに思つてよ」

その言ひ方があまりに眞面目なので、香取は思はず吹出した。

「さうぢやないかしら」と、女は考へて、「こんな田舎で女中なんかしてて、將來はどうするんでせう？」

「女中だつて、それ／＼先の當てはあるだらうよ。他人のことよりもお前はどうするんだい」

「私？ 私ちやんと考へてるわ。何時までも藝者なんかしてゐないの」と、女は直ぐに勢よく云つて、問返されるのを待つてゐたが、香取が

只「さうかね」と冷淡に答へて、進んで訊かうともしないのに拍子抜けがして、「私來年一杯で

厭氣になるのよ」と、獨言のやうに呟いた。

其處へ番頭が宿帳を持つて來たので、香取は身體を起して、出鱈目に姓名を書留めて、次手に繪葉書を取寄せた。そして、何處へ送らうかと

迷つてゐると、女は氣に入つたのを四五枚選んで、袖屏風をして、コソ／＼何か書出した。

「何處へ出すんだい、お見せよ」と、香取が手を伸すと、女は筆を持つたまゝ、遠くへ逃げて行つて、

「私出したい所がどつきりあるのよ、お母さんの家へも、神田の姉さんの家へも……私一

度も繪葉書を出したことはないんだから、こんな折に方々へ出したいわ」と云つて、暫らく覺束

ない筆を動かしてゐた。が、書終つて太息吐い

て、「貴下幾枚書いて？」
「僕は出したい所がないよ」香取は書きかけた一枚を引裂いてゐた。

女は残つた繪葉書を見比べながら土地の實景を訊いて、明日を楽しんでゐたが、ふと思出し

て、家へ電話を掛けたいと云つて、男の許しを得て階下へ下りて行つた。

香取は一人になると姫下へ出て、闇の中を透かして、心當てに長谷や江ノ島の方を見てゐた。

すると、向ひの部屋から若い男と女とが手拭を持つて出て来て、靜かに廊下を傳つて階下へ

下りて行つたが、他人に見られて面差さうに顔を背けた女の素振で、それが新婚の夫婦ではな

いかと思はれた。

島田に結つた初々しい顔立は、見えなくなつてからも、暫らく彼れの胸に懐かしい影を留めた。人間の幸福はあの二人の中に宿つてゐるやうに思はれた。そして、闇の中に見付けた燈火

のやうに、結婚と云ふ事が彼れの心に燦いた。あゝして夫婦の契りを結んで、都を離れて二人

のみで旅をしてゐたらと羨ましかつた。

が、妻として目差す女は彼れにはなかつた。知つた女の顔を思出してゐると、お多代の顔のみが意地悪く目の前に迫つて来て、それを撞

消すだけの魅力を持つてゐる顔は何處にもなかつた。

と、其處へ階子段に足音がして、小菊が微笑して現はれた。側へ來ると、

「便利なものだわね、こんな遠方から話が出來て」と云つて、男を連れて部屋へ入つて、「私

皆なを羨ませてよ。清子さんも松香さんも家にゐたから、交り／＼お話しして來たのよ」

「ぢや、お前の素性がこの家へ分つてしまつたね」と香取は笑つて、「新婚旅行のつもりだつたのに、化の皮が現はれたね」

「どうせ仕方ないわね。だけど私氣をつけて話してたのよ」

「今時分家に愚圖々々してゐるやうだと、お前の朋輩は皆な賣れないんだね」

「さうでもないわ」と打消して、女は五六人の名を云つて、それ／＼の稼高や借金を數へ上げた。

それを聞いてゐると、つまり小菊自身が一番の流行ばらしいので、香取は、心では信じぬながら、「藝者つてそんなに稼げるものかね。ぢや何時までもやつたらいいぢやないか」と煽

てるやうに云つた。

「でも、私なんか生れ付がこんな稼業に向かな

いんですよ」と、女は眞面目に答へて、「私これで陰氣な性分ですからね。如きによくさう云はれるのよ。小菊さんは鬱いでていけないつて」

「さうかね、お前ぐらゐだと、藝者として鬱いでゐる方かね。何か心配があるんかい」

「別に心配つてないわ。どうせ藝者してれば、それは厭な思ひすることは幾度もあつてよ。だけれど初めから私覺悟してゐるから、さう苦にはしないのよ。それに如さんには大事にして貰へるし……只ね」と、云掛けて、女は火鉢に擦寄つた。そして、巻煙草に火を點けて、唇を尖らせて不器用に吹かせながら、無邪氣な口調で、「私副食物に好き嫌ひがあつて仕様がなしの。だけれど外の人が食べてるのに私だけ食べない譯に行かないでせう。私我慢して食べてますけど、嫌ひな物を出された時は、本當に情なくなつてよ」

「それだけが今の苦勞なんかい」見た所二十歳にもなつてゐるさうな女が、それ位のことを苦勞らしく云ふのを、香取は不思議に思ひながら、「ちや、早く誰れかに落籍されたらいいぢやないか。そんなお客様は一人もないんかい」

「だつて、厭な人と一緒にゐたかないわ。厭な

人と一緒にゐるよりや、藝者してゐる方が勝しよ……だから私から思つてるの。借金さへどうかなつたら、老婢を使つて小さい家を持つて、彼家の看板だけ借りて勤めようと思つてるの。さうすれば自分の好きな物が食べられるから……それは何時のことだい。さうなつたら僕も時々遊びに行くんだがね」

「え、入らつしやい。御馳走しますから……私來年中にはさうなりたいわ」

「僕も來年はずといふ月日を送りたいわ」香取は自分の心に向つてさう云つたが、ふと打解けた氣持になつて、「お前は今惚れた男があるんかい。一人や二人はあるだらう。いろんな男に會つてるんだから」と、今までになく力を籠めて訊いた。

「そんなこと訊いてどうなさるの。私惚れたことも惚れられたこともないのよ。可哀想でせう」

「だつて僕が惚れてるぢやないか、惚れてゐなぐちやこんな處まで連れて來やしないよ」と、香取は眞顔で云つて、「お前はさう思つてゐないのかい」

「まさか……」と女は笑ひながら、何と答へようかと逡巡つてゐるが、やがて品をつくつて、「こ

んな種業をしてる間は惚れたつて話らないわね。どうせ藝者だからつて、私達の云ふことは眞に受けて貰へないから」

「さうでもないさ」

「それに私、思つたことも口に出せない性分なの」

「ちや、僕に惚れてても口に出しちや云へんのだね」

「え、さうなの」と、女は戲談らしく言粉らせた。そして、男の様子の眞面目なのに當惑して、悦しがらせに艶をつけようとしたが、相應しい言葉も見つからなかつた。で、今朝家の如さんがね、小菊さんはい、お客様が出來て運がいゝつて、今朝さう云つてよ」と、わざと重々しく云つた。

「僕でもない、お客様かね」と、香取は擦つたいやうな氣がして、この先女の爲になる氣遣ひはないと、木地を剥出してしまひたくなつたが、折角かうして二人連立つて來て居りながら、互ひの興を醒ますのも愚なことだと思返した。そして、女の小さい自負心を傷つけるやうなことを口に出すよりは、遽にでも親切な口を利くやうに心を決めて、「僕もお前が自由の身だつたら世話をして遣るんだがな。まさか借金を拂

つてもやれないけど」と、眞實らしく云つた。
「見ていらつしやい。今に自分で氣儘な身体に
なりますから……さうしたら私貴下のお家へ
行つてよ。行つてもよくつて」と、女も眞實ら
しく云つた。

「あゝ」
「東京へ歸つたら、一度貴下のお家へ行つて見
たいわ。いゝでせう」
「下檢分かい。そして家が汚かつたら考へ直
さうと云ふんだらう」

「あら、家なんかどうだつていゝわ。私いゝ
家にゐたいともいゝ衣服を着たいとも思はない
わ。只氣樂に暮らせればいゝと思つてよ」
「若い癖に情つてるんだね。ちや春着の心配も
ないだらう」

「えゝ」と女は同意しかけたが、ふと心に雲が
掛つて、「でも藝者してゐる間は、身装を構はない
譯に行かないわ。無理にでもいゝ服装してゐる方
がつまりは得よ」

「あの土地ぢや、お前なんかいゝ服装をしてる
方ぢやないか」

「さう！ だから何處の宴會へ出てもね、さ
う恥かしい思ひしたことなくつてよ。……だけ
ど、私今年中に是非拵へたいものがあつてよ。

お召のコートとね——セルは持つてゐるけどあれ
は厭だわ——それに小ぢやい金時計を買ひたい
わ。お向ひの山田屋さんが先日からいらんなの
を持つて来て見せるの。その中にこの位の」と、
指で可愛らしく輪を造つて見詰めて、「そりや
いゝのがあるの。私あればつかりは他人に賣ら
せたくはないわ。どうせ彼處へは一度にお金を
拂はなくつてもいゝんだから……」

女の調子づいて喋舌るのを、香取は神妙に聞
いてゐた。が、進んで女の喜びさうな返事を
も與へなかつた。言葉が切れてからもぢつと耳
を澄ませてゐると、汽車の音が靜かな空を破つ
て、自分の持つて来た銀側の懐中時計を見る
と、まだ九時になつたばかりだつた。

「まだ眠くはないね。何か面白い話をして呉れ
ないか。お前の憶氣でも聞いてやるよ」と云つ
て、彼れは次の間へ床をのべに來た女中に命じ
て酒を持つて來させた。そして二三杯ガブ呑み
してから女に猪口を差して、面白く話をしと迫つ
た。何かロマンチックな話がその艶のいゝ唇
から洩れるやうにと望んだ。

「面白いお話つてどんなこと？」女は迫られる
ほど退避して「面白いことつて些ともないわ」

「ちや、悲しい話でもいゝさ。泣きたいやうな
目に會つたことぐらゐあるだらう」
「えゝ、それは幾度もあつてよ。だけど、そん
なお話したつて詰らない」

「ちや、僕が話して聞かせようか」
香取は素直な聽手に向つて、自分の昔からの
戀物語をしたかつた。左程でもない事にも色艶
をつけて話して、聽手に自分と同じ感じを傳へ
たかつた。さうして快い受答へをされれば、
寂しい心を慰められて自ら元氣づく様に思
はれた。で、暫らく心を凝らして過去を呼び起し
ながら、

「かうしてお前と差向ひになつてると、他の女
の顔が二つ目につくやうだよ。どうしても僕の
頭の底から消えないんだね。何だか其處にゐる
やうな氣がするよ」と云ふと、

「何故？ 變だわね」と、女は何の氣なしに自
分の左右を見た。
「お前は一度思込んでた男でも、別れたら直
ぐ忘れられるかい」

「それや忘れやしないわ。本當に思込んだら忘
れられるものぢやないわね」

「女もさうかね。女の方が男よりは忘れつぽ
いやうな氣がするけれど……僕はこの頃も戀

しい女が一人あるんだ。その女よりやお前の方が艶がいゝし、齒並もいゝんだが」と、香取は其處にゐる女の顔と目に見えぬ女の顔とを見比べてゐると、女は顔を背けて、
「厭だわ、そんなに見てゐちや」と、下卑た調子で云つた。

「まあ辛抱して大人しく聞いてて呉れ」と香取は頼むやうに云つて、眞面目で話出さうとしたが、

「お徳氣ならもう澤山よ」と、女は手を振つて、浮薄な笑ひをした。

それを見ると、香取は急に興が醒めて、最早話をする氣もしなかつた。で、残つた酒を飲干してから、横になつて目を瞑つてゐた。

「貴下の顔は眞赤よ。眠いでせう、もうお休みなさいな」女は側へ顔を措寄せて云つた。

香取も寝るより外に仕方がないので、力なく立つて柔かい蒲團の中へ入つた。小菊は女中を呼んで、部屋を片付けさせてから、便所へ行つたやうだつたが、やがて歸つて來ると、「どの部屋も燈火が消えて、もう皆な寝てるわね。東京には今時分寝てる家なんかありやしない」と獨言のやうに云つた。

そして、暫らくすると、「貴下、此方は温かに

なつてよ」と、呼醒ます聲が香取の耳に入つた。が、彼れは返事をしないで、酒の氣を吹出したがら、闇の中に動いてゐる自分の心の影を追つてゐた。其處の寢床にゐる小菊の寢姿よりも、自分の家や、今見た向ひの部屋の新夫婦などが、いろ／＼に想像に浮んだ。で、彼れは紺夜具に包まれながら、矢張寢苦しかつた。

戸の外では唸りさうに犬が長吠えをしてゐる。
「よく眠てるのね」と、女は獨言を云つて欠伸をした。

(十三)

翌朝女中が火を入りに來るのを待つて、彼れは寢床を離れた。鹽湯で温まつて二階に上ると、温かい日が廊下に差込んで、頬に觸れる鹽を、氣持がよかつた。で、障子を開けたまゝ、磯の茅屋越しに穏かな海を見下しながら、今日の道程を考へてゐると、女は次の間でお化粧をしながら、土地の名所を訊いたり、煩さくお土産の相談をしかけたりした。
「日が短いから、ゆつくり見物は出來ないぜ。肝心な名所だけ見たら、江戸島へ廻つて、今夜東京へ歸ることにしよう」と、香取は豫定通り

に二三日を此處で送る氣にはとてもなれなかつた。
「そんなに早く？」と、女は意外に思つて、折角の旅だから今日一日延してはと、二言三言逆つて見たが、逆ふほど男の決心は堅くなるばかりだつた。
さう極ると、一刻も無駄にするのが惜くなつて、女は急いで身装して、食事をも手早く済ませた。
そして、向ひの新夫婦が俵を連れて出て行つた後で、二人は歩いて海岸の方へ向つた。濕つた細い道を通抜けて、浪打際へ出ると、香取は長谷から稲村ヶ崎へと、うろ覚えの名所を指差して教へた。女はそれよりも足許の貝殻を珍らしがつて、氣に入つたのが目に付くと、立留つて拾つては手巾に包んだ。そして、斷出しては男に追付いてゐるが、次第に息が苦しくなつて、
「私足が怠くなつて轉びさうよ。少しの間休ませて頂戴な」と、男の手に縋り付いた。
「ぢや、僕が手を牽いてやらうか」と云つて、香取は足を緩めて連立つて陸へ上つたが、ふと氣付いて見てゐると、引指つて内輪に歩んでゐる女の足取は弛慢がなくて、如何にも卑しい勤めをしてゐる女らしかつた。顔はまだ明るい日に

曝しても艶々しく見えたが、足取は色を賣るに
疲れてゐる女としか思はれなかつた。

すると侮蔑の念がむら／＼と湧上つた。人目
に降じさうに歩いてゐると見られるのも厭だつ
た。で、通掛りの俵を呼んで、長谷まで急が
せることにした。

大佛と觀音とを見て、直ぐに電車に乗つて江
ノ島へ向つたが、彼れの心にはまだ電車のなか
つた時分に、草鞋穿きで材木座の宿を出て、歴
史で覺えてゐる名所古蹟に残らず立寄つて、汗
みどろで七里ヶ濱を歩いたことが、四邊の景色
を見るにつれて懐かしく思出された。あの時

分は星月夜の井で溺いた喉を潤はし、力餅で饑
を凌いだのだつたがと思ふと、女などに心を累
はされなかつた初心な昔が戀しくなつた。「何
だ女なんかを連れてやがつて」と、藝者など引
張つて見物してゐる男を見ると、竊に嚙つて

ゐたものだが、今は彼自身が其嚙らるべき一人
になつてゐる。

が、今の彼れにはそれを嘲るよりも、むしろ
こんな女でも道伴れにしたいほどに心の淋し
いのが悲しかつた。

乗合せた客は少かつたが、土地の者らしい
鐵漿をつけた中年増は、小菊の頭の髪から足の

爪先までに目を注いで、やがて横目で男をも見
下した。

電車を下りると、藤澤の方からの電車も着い
て、江ノ島行らしい客が四五人下りた。その中
の小柄な年増を見ると、小菊は、「私の知つた
人がゐてよ。困つちやつた」と、小聲で云つて、
道を避けようとしてゐたが、先方が横目で此方

を見てゐるので、急に笑顔をつくつて側へ寄つ
て、「あら、お師匠さん暫らくと、會釋した。
「おや」と、年増は今氣がついたやうな顔をし
て、「此頃は何方？」

「ずつと遠方ですの」
二人は並んで歩きながら、何彼と話出した
が、香取は一人離れて先へ進んだ。橋近くなつ
てから、小菊はやう／＼追付いて「あんな人に
會つて厭になつちまふ」と云つて、そつと後を
振返つた。

「誰れだい、あれは」
「常磐津の師匠よ。私去年までお稽古に行つ
てたんですけどね、そりや厭な人なの。後で此
度私のことを連れの人に話してでせう。いゝ
加減なことを云ふ人だから」

「ぢや、お前は何か後目たいことがあるんだら
う？」

「あら、さうぢやないわ。私後目たいことな
んかなくつてよ」と、女は目に力を籠めて云つ
た。

長い橋を渡つて、島へ着いた時分、最早正午
を餘程過ぎてゐた。香取は岩屋まで坂道を上
下するのが煩はしくて、「お前も疲れたやうだ
から、晩までこの邊で休んで歸らうぢやないか。
何處まで行つても同じやうなものだよ」と、女

を説伏せて、眺めのよささうな宿屋へ入つた。
女は足の疲れよりも、またあの年増に會ふのが
氣になつて、話の種にと思ひながら、強ひて島
巡りをしたがりもしなかつた。

七里ヶ濱が眞向うに見渡される二階の一室に
落着くと、女は障子を開けて、今來た道を眺
めながら、
「名所つてさう面白いものぢやないわね」と云
つた。

「さうだとも」と香取も同意して、女の側に立
つて、人氣のない小舟が二三艘波に揺れてゐる
のを見下しながら、「お前なんか、こんな淋しい
處へ來るよりや、東京で芝居でも見えた方がよ
かつたらう」と云ふと、

「さうでもないわ。氣が清々してよ。誰れにも
氣兼ねしないで、こんな土地で暮らしてたら、

壽命が延びるだらうと私思つてよ」

「だけど、かう云ふ名所へ來ると、誰れかしら知つた人に會ふぜ。目に一人ぐらゐるはお前のお客が見物に來るだらう。今もあんな薄氣味の悪い、婆さんに會つたし」と、香取は皮肉らしく云つたが、ふと思出したやうに、「お前は三味線が巧いかい。一度も聞かなかつたが」

「私些とも彈けないこと、女に早口に空々しく答へたが、やがて火鉢の側に坐つて、「藝者になる前から、常磐津は随分習つたのよ。厭で厭で仕様がなかつたのに、お母さんに責められて、無理にお稽古に行かされてたのよ」

「ぢや、お前を初めから藝者にするつもりだつたのかい」と

「さうでもないわ。だけど、私お稽古してよかつたの。身に藝がなかつたら、今時分どんなになつてたか分らなかつただけど」と、女は獨りで何か感じてゐた。

この女にも秘密があるのかと思ひながら、香取は退屈凌ぎに女の生れた土地や親兄弟のこととを訊いてゐたが、少しも興は湧かなかつた。

そして、一日の旅も長く東京を離れてゐるやうで、留守中に異つた事でも起つてゐるやうに思はれてならなかつた。で、食事を済ますと、直ぐ

にも歸りたがつて、

「かうしてても話もないし、矢張東京がいゝね。やまとへ行つてお前の三味線でも聞く方がいゝよ」と促すと、

「さう、ぢや今夜は彼家へ泊つていらつしやい」と云つて、女も快く應じて歸支度をした。

宿を出ると、土産にいろんな貝細工を買つたが、その量張つた包は香取自身の手に掲げた。女は流石に心残りのされるのか、兎もすれば島の方を返返つて、見残した處を男に訊いてゐた。

「今度誰れかに連れて來て貰つた時に緩くり見物するさ」と云つて、香取は道を急いで、藤澤から汽車に乗つた。そして、汽車の進むにつれて、今まで見てゐた景色は、次第に頭の中に薄らいで、東京の知人の顔が濃く浮んで來た。

新橋に着くと、最早周囲は夜だつた。底冷い風が頬に染んで、温かい飲料と火鉢が戀しかつた。

で、彼れは電車で直ぐに歸らうとしたが、女は寒さうに身體を締めながらも、何かと銀座で買物をしたがつた。「やまとの姉さんに何か買つてやらなくちや悪いわね」と、謎を掛けるやうに云つて、氣の利いた品物を考へ出した。

「其よりお前の手が冷さうだから、手袋でも買

つといで」と云つて、香取は仕様事なしに女に紙幣を渡して、自分は懐手をしながら、天下堂の前に風に背いて悄然立つてゐた。そして、あまり手間取るので、其處等の店先を覗きながら行戻りしてゐたが、何を見ても自分に買ひたいと思ふ程の慾は起らなかつた。目を凝らして品物を選分けつてゐる客の顔付が不思議に見えた。

「お待遠様」と、待ちあぐんでゐる所へ女は出て來て、悦しきうにして、「此處には何でもあるのね。私迷つちやつた」と云つて、再び貝細工の包を男に持たせながら、「残つたお金で貴下のお金入れを買つたんですよ。あんな汚れて見つともないから」と、出して見せたさうにしたが、香取は押留めて直ぐに電車に乗つた。

女が勢づいた聲をして、やまとの格子戸を開けると、駈け出た女中はあまり早いに驚いて、「面白かつたでせう」と云ひながら、意味ありげに二人の顔を見比べた。

「よく少いたのよ、休む間は些ともなかつたの」と、小菊はさも疲れたやうに云つて、見た事聞いた事を誇張して、留度なく話出した。「此方はかう云つたの、あゝしたの」と、男の方を指差して、さも睦じかつたらしく、女中の前で噂

したが、それは香取の耳には全然他人事のやう

に聞えた。

やがて彼は其家の風呂に入ったが、その間に小菊は家から持つて来させた黒い襟の懸つた衣服に着替へて、氣樂さうに女中を相手に旅の話をして笑つてゐた。

「鳥でも取つて呉れ。食事して今日は早く歸るんだから」と、香取は風呂から出ると、直ぐに云付けたが、女は睨むやうな目付をして押留めて、「如さん緩くりでいゝんですよ」と、側の女中に云つた。さうして、自分の家の半玉を二人呼ぶやうにと男に強請んだ。

「ぢや、お前の好きなやうにするさ」香取はどうせこの後滅多に来るのではなしと、さして争ひもしなかつた。

でも、心置きなく落着いて遊んでゐようともしないで、見栄えもしない半玉を前に置いて、一緒に食事をしてから、遅くならぬ間に家へ歸つた。

下女は戸締りをして、行火を入れて寝てゐた。長く家を空けてゐたやうな氣がしたので、何か異つたことはなかつたかと、茶の間から座敷を注意したが、家の中は出て行つた時のまゝだつた。座敷の火鉢には煙草の吸殻が汚く亂れてゐる。

「誰れも来なかつたかい」と、火桶を持つて来た下女に訊くと、

「いゝえ、誰れも来ません」と、下女は何時ものやうに素氣なく答へて、蒲團を敷いて行つた。

香取はまだ眠くはなかつたが、机の前に坐つてゐても果しがないので、間もなく冷い夜具の中へ蕨練込んだ。そして、目を瞑つて興のなかつた旅中の事を思出してゐたが、すると、一緒にゐた間よりも、やまどから歸つた後の小菊の有様が一層心に留つた。今時分どこへ行つてゐるだらうと想像されて、厭な氣がし出した。

わざら旅へ連れて行つて、氣儘をさせて置きながら、歸つて来ると、その女はその夜から外の客に呼ばれてゐるのに氣付くと忌々しくなつた。これまではやまどとの格子戸を出ると、女の身の上などは直ぐに忘れて、些しもの心も蟬りにはならなかつたのに、今夜に限つて不思議に枕許に影を差した。

で、「もう二度と彼女は呼ばない」と、心の中で憎むやうに云つて、その姿を掻消すのには可成りの時が掛つた。

(十四)

翌日から香取はまた暫らく沈黙の目を續けた

が、お多代から幾日も消息のないのが不安心で、日々そればかりを待設けてゐた。湯原の日に觸れるのが氣になつて、此方からは立入つて手紙も出しかねたが、女の方で自分が輕んじてゐる筈はないのに、何も知らせて来ないのは變だと思はれた。すると女の體に若しや異狀でも起つてゐるのではなからうかと案ぜられて恐ろしくなり出した。湯原の勧めには従はないと云つてゐたが、萬一どうしたか分りやしない……

で、様子を見極めて来ようと思ひながら、痛まし女の身體を見るのがいぢらしくて、一日躊躇してゐると、或朝湯原が訪ねて来た。矢張不斷の通りの脂切つた顔をしてゐて、瘦せてもゐなければ、神經を疲らせてゐる風も見えない。

どんな事をしてゐても、心の苛まれず肉體の磨減らされないこんな男を見ると香取は羨むよりは、小憎らしく思つた。

「この頃自分の家ではどうしてゐますか」と、彼れは相手の言出すのを待ちかねて訊いた。「相變らずだらうね」と、湯原は冷淡に答へたが、やがて微笑しながら、「一寸寄つて見ようと思つてるんだが、どうだ、君も一緒にやつちや。僕の家よりや彼家の方が氣樂でいゝだらう」

「え、香取は黙つて考へてゐたが、たとひ厭な思ひをしよとも、いつそ湯原に隨いて行つて見ようかと思つて、「行つてもいゝんだが」と酸味に答へて、「しかし、何時までも彼家に置いとくんですか」

「當分仕方がないが、あれで巧く落着いて行きさうだよ。妙なものだ。こんなに無事に済むものなら、何も初めから慌てなくつたつてよかつたのさ」

「ぢや、貴下の家ではもう波瀾は起らないんですね」

「波瀾どころぢやない、天下泰平さ。今少ししたら僕の遺口を詳しく話してもいゝが、僕は何をやつてでも家庭の平和だけは亂したくないからね」と、湯原は誇り顔で云つたが、ふと言難さうにして、「それについて君に折入つて頼みたいんだが今月中幾らか立替へて貰へまいかね。この頃餘分の収入がないから、家内に秘密で融通することが出来るので困るよ。どうせ近に年末賞與があるんだから、決して迷惑を掛ける氣遣ひはないんだが、どうだらう？」

その謙遜した言葉を香取は直ぐには斥けかねた。此方の懐中に多少の餘財のあることを見抜いてゐるし、以前の關係を腹に持つてゐるのだ

と氣付くと、穩かに頼みを斥ける口實は見付かりさうでなかつた。で、迷惑さうにして、分明した返事をしないのであると、湯原は只の五圓でも三圓でもと、次第に値下げをして、「實は今日明日と差迫つてゐるんだが」と、相手の同情を求めめるやうに云つた。

「僕は今幾らも持つちやゐないんですよ」と、香取は不承々々に机の引出から、小菊の買つて呉れた裏口を取出して、湯原の目の前で開けて見せて、その中から欲しいだけ抜取らせた。

「皆借りる譯にも行かないね」と、湯原は照隠しに微笑しながら、中の物をそつと引出して、「洒落れた裏口だ」と、口金の音をさせて面白さうに眺めてから、机の上に戻した。

「高い裏口だからね」と、香取は呟いたが、湯原はそれを耳にも留めず、

「君も行くかね」と誘つて、もう浮腰になつた。強ひて勧める風はなかつたが、香取は二人の様子を見たくもあり、自分一人家に取残されるのも忌々しくして、一緒に家を出た。そして、途中であまり話をせず、二人別々の思ひに耽つてゐたが、道分に近づいた時分、ふと、

「貴下は心から彼女の女と分れる氣になつてゐるんですか」と、香取は眞面目に訊いた。

「さうだとも。何故？」湯原は足を緩めて側へ寄つて来て、「つまりは別れるより外に僕としていゝ方法はないぢやないか。君のやうに獨身ぢやないんだからねえ……僕も今まで獨身だつたらよかつたかも知れないよ」と、笑ひに紛らせて、「僕も可成り道樂をしたけれど、一度も信用を無くするやうなことはしなかつたからね。今でもそれだけは注意してゐるよ」

「しかし、男女の關係がさう簡単に片付くものでせうか。何方にも傷がつかないで済むんですかね」

「そりや當人の量見次第さ。だけど大抵は綺麗に收まつて行くらしいね。僕なぞ一體混付くのが嫌ひだから、何時も後先見ずの無分別はないんだが、人間にはついで魔が差すことがあるんだよ」と云つて、湯原は何か感じたらしく、「最初僕の方でどうしようつて氣は些ともなかつたのに、自然にさうなつたんだからね。決して皆なが邪推してゐるやうに僕に悪意があつたのぢやないよ。あれは去年の秋のことで、雨が降つてた晩だつたが……」

と、その馴染めの様子を話さうとしかけたので、香取は耳を澄ましたが、湯原は急に心變りして、「そんな話も馬鹿々々しいね」と話を外

した。

そして暫らくして、僕は今の女房と關係してた當座は、決して夫婦になる氣ぢやなかつたんだよ。それが相手があんな風だったから、何時までも離れられなくなつちやつたが、今になつてつく／＼後悔するよ。いつそあの時分に思切つて少し手荒なことをやつとけばよかつたんだが、僕はどうも不人情なことの出来ん性分だから困るよ」

「ぢや、これまで貴下の方から女に未練を残したことはないんですか。何時も女に付纏はれてたんですか」

「何時もつて、僕に付纏つた女は噓より外にありやしない」と、湯原は生眞面目に答へた。そして、酒屋の店先から聲を掛けて、直ぐに例の奴を肩けて呉れと命じた。

隠れ家の門を入ると、香取は躊躇して少し離れてゐたが、湯原は後側から上つて、「今日はお前の好きな人を連れて来たよ」と笑つて、自分で火鉢や座蒲團を真中へ持つて来て座をつくつて、「君は其處へ坐りたまへ」と、突立つてゐる香取を指招いだ。

お多代は軽く挨拶して、「上野町へ入らしたんですか」と、不思議さうに二人を見くらべて訊

いたが、その顔にも部屋の様子にも、香取が豫期してゐたやうな異状は些しもなくかつた。「今日は緩くり香取君と飲むんだから、主婦に相談して何か取つて来て呉れ」

湯原はかう云ひながら、火鉢に炭を盛つて胡坐を掻いて、落着いて煙草を吸出したが、ふと何か思出して、次の間へお多代の後を追つて行つた。襖の間から後姿を見せて、ヒソ／＼立話をした。やがて女を宥めるやうに云つてゐたが、女は「では勝手におしなさい」と、最後に傍へ聞えるやうに云つて、薬所の戸を開けた。不機嫌な顔をして門を出て行くのが座敷から見えた。

でも、湯原はニコ／＼して座敷へ戻つて、「我儘ばかり云つてやあがる」と、呟いて、「これで僕一人で来ると、時々煩さいことを云はれて困るんだが、今日は君が来て呉れて、丁度よかつた。久振りで氣樂に飲めるよ。僕の家の方が君も氣が置けなくつていゝだらう」と、左右を顧みながら、獨り悦に入つた。

そして、其處へ茶を入れて来た主婦を側へ引据ゑて、香取を自分の腹心の子分でもあるやうに吹聴して、「この人も女に掛けや却々障に置けないんだよな」と、次第に浮ついて、ゴ

ールデンバツトの臭い煙の中で、洒落を云つたり、主婦を冷かしたりし出した。

その不慮と異つた爆き振を、香取は珍らしさうに見てゐたが、次第に見苦しさに堪へられなくなつた。と、目頭お多代を相手に湯原がこの部屋で戯れてゐる有様が、いろ／＼に想像され出して、ちつとしてゐられぬ程に淺間しき、思らしさに心が震へた。湯原の骨太い毛の濃い手首や、濁つた白目や、身體中から蒸發してゐる人間らしい臭氣が、毒々しく胸に迫つて来た。

あらゆる醜いものを寄集めて人間の身體がつかられてゐるやうに思はれた。かうして色慾に浮れて孕ませて、同じやうな醜いものを殖して行く……

ふと夢を醒すやうに戸の音がして、お多代の妻が次の室に見えた。

「早い事にして頂きたいね。喉が鳴つてるんだぜ」と、湯原は調子づいて云つて、側にゐる主婦にも手傳ひを頼んだ。

が、騒ぎ立つほどの御馳走もなかつた。割げかゝつた一閑張の食卓には、刺身の外に茶葉の茹でたや、佃煮が並べてあるばかりだつた。でも、湯原は悦しさに猪口を取つて香取にも

差した。「お前は此處に坐つてお酌をしなくちやいけないよ」と、稍もすれば次の室へ避けたさうにするお多代を引留めては、二人に酌をさせた。

「僕はもういゝんです」と、香取は二三杯飲んでから、猪口を押退けて、手を振ると、

「では、もうお止しなさい。お酒なんか召上らふ方がいゝんですよ」と、女は柔しく云つて、「何時までも飲んでる人、私大嫌ひ！」と、眉を蹙めた。

「さう悪く云ひなされるな。まあ氣持よく飲まして呉れ」と云ひながら、湯原はへゝら笑ひをして、「散々おれに心配させやがつて。好きな酒ぐらゐ黙つても飲まして呉れたつて罰は當らないぜ」

「ふゝん」と、女は冷笑して、無愛想に酌をして、「心配々々つて、そんなに心配が自慢なの、貴下は男らしいからね」

「まあ待つて呉れ」と、湯原は滑稽な手付をして押留めて、「人前だから、今日だけはおれの棚卸しは止して呉れ。酒の肴にするにや、お前の口説は些し鹽が辛過ぎるよ」

「人前だと、利泉町の義姉さんの前でも誰れの前でも、縮上つてるんでせう」

「其處は男の智慧だね。男つてものは世間があるから、さう無法なことは出来ないさ。信用が大事だからな」と、湯原は香取の方を覗いて、「ねえ君、さうだらう」

「えゝ」

香取には二人の言合つてゐる意味が分らなかつたが、機嫌を取るやうな男の言葉を、女が押潰すやうにしてゐるのが小氣味がよかつた。湯原の手に持つた猪口からは、滴が垂れてゐる。

「大した信用だね」と、お多代は口元に微笑を湛へながら、横へ向いて獨言のやうに云つた。

その拗ねた素振を湯原は宥めかねて、手酌で續飲みを出した。で、暫らく部屋の中には聲が消えてゐたが、そこへ主婦が銚子の代り持つて來て座の白けてゐるのを見ると、取做し顔に、「お熱いのを一つ」と、皆なに酌をした。

「主婦も一杯おやりよ」と、湯原は急に勢付いて、「飲食には人数の多いほどがいゝよ。主婦だつて柿木も山の賑ひと云ふからね」と、口輕に云つた。

主婦は湯原の相手になるほど賑やかな口は利けなかつたが、酒は可成り飲める方らしく、辭退しながら杯の数を重ねて、肥つた頬を赤くし

た。そして、隣りの官吏の老人の嫁ぎめの噂をしてゐると、お多代は話の間にそつと茶の室へ入つて、襖を締めてしまつた。

「僕はもう歸りませう」

先きから居づらくなつてゐた香取は最早辛抱し切れなくなつて、立上つた。

「あんまり早いぢやないか」と云つて、湯原は今まで忘れてゐた香取に目を付けたが、強ひて引留めようとはしなかつた。そして、縁側まで送つて出て、「今日も君の家で遊んでることにしてから、そのつもりで」と耳打した。

香取は霜融でべたつく庭を急いで横切つた。門を出ると、酒臭い唾を吐きながら鼻紙で下駄の泥を拭つてゐた。すると、ふと、後に足音がして靜かに門が開いた。怖いものでも見るやうに、そつと首を振向けると、目に愛嬌を湛へたお多代が、明るい日光の中に浮出てゐた。

「僕に用事があるんですか」と、香取は聲を潜めて思はず周囲を見た。

「其處までお送りしませう。酔拂ひに取合つても詰らないから」と云つて、女は自分から男を誘ふやうにして表通へ出て、「あなた家に一日ちつとしてると氣が腐つちやつてよ。何處へでも行つて、清々した氣分になつて見たい」と、

温かい町を遠く目を据ゑて見た。

「だけど、湯原君を放散らかしてちや悪いでせう。斷つて来たんですか」

「それはいゝんですの。私晩まで何處かへ行つてゐたいんですけれど」

さう云ひながら、男の側に隨つて来た。香取は相手の顔を見ないやうにして、暫らく黙つて歩いてゐたが、女の下駄の音や衣服の擦れる音が、心を凌ぐやうに耳に響いて来た。それを避けるやうに、思はず狭い横道へ曲つたが、女の足音は矢張隨つて来た。で、何時まで黙つてゐられなくて、

「あれからどうしたんです？」と、訊く氣もないのに訊いた。そして、女が何か答へてゐる間に、左右の二階家を見上げながら、其處に一緒に上つて行つて、あの日の差した窓際に二人差向ひで坐る：その手順を空想してゐた。

ふと目を下へ移すと、女は柔かい肩から懶さうに手を垂れて、重たげに首を傾げてゐた。思ひなしか今日は帯のあたりが膨れてゐるやうに見えたが、それが香取の心を女から背かせないで、却つて手強い刺激となつて、次第にジタバタする思ひをさせた。

「あゝ、こんな處まで来ちやつた」と呟いて、女は不安らしく今来た道を顧みて、

「何處まで行つても仕方がありませんわね。私もう歸りますわ」と立留まつた。

香取も立留まつて、何か云はうとしたが、思つてゐることが喉に絡まつて言葉に現はせなかつた。女は男から何か利益になる事、手頼りになる事を云はれるのを待設けながら、

「歸つてまた厭なことを聞かされて……と、獨言のやうに云つて、「貴下ずつとお家へお歸りなさるの」

「えゝ、他方に行く處もないから」

「私貴下に聞いて頂きたいことがどつさりあるんだけど、今日は染々お話し出来ませんわね。でも近にまた来て下さるでせう」と云つて、女は重ねて念を押して、「では左様なら」と、日に力を入れて男の顔を見てから元の道へ歸つた。何のために此處まで見送つて来たのやら、女の心持が香取には分らなかつた。が、それはどうあらうと、二人が人目の煩きい都の中で歩いたり話したりしてゐるのが窮屈に感ぜられた。其處等に動いてゐる様々の人間や、目に見えぬ知人の顔や、明るい日光までも、自分の自由を妨げたもの、幸福を奪つたものとして、憎々し

かつた。

都が荒野になつて、世界が闇だつたら：彼れの今の抑へ難い慾望はその外になかつた。

で、彼れは低語かしい思ひをして、賑かな町を心寂しく通つてゐたが、やがて「やまと」の格子戸を開けた。

此家の二階にも日が斜に差込んでゐた。窪地を隔てて、高臺の西洋館が木の葉の間に白く見えて、淡い煙が静かに漂うてゐる。「もう直きお正月ですわね」と、女中は前に坐ると云つた。

それには答へないで、「此處は却々眺望がいゝんだね。僕は今日初めて見るんだよ」と、香取は障子の隙間から、向うの煙の舞上つては消えるのを見てゐた。

「今日も温かいですわね」と、女中も男の見てゐる方へ目を向けてゐたが、暫らくたつても男は身動きもせねば、言葉も掛けないので、「どうなさいます。直ぐ電話を掛けますか」と催促した。「さうだねえ」と、香取はふと氣付いて此方向いて、「誰れか外の奴を呼ぼうかね」と云つて、小菊では物足らぬ思ひがしたが、ふと、先日鎌倉までも連れて行つたのに、あれきりで外の女に移るのは愚かな氣もしたので、矢張その女を

と命じた。

「直ぐだよ」と、後から急立てる聲を聞いて、女中は階下へ下りたが、間もなく上つて来て、「お正午前から出てるんですって。何處だか出先を云はないんですけど」

「ぢや、些し待つてもいゝから、早く来るやうに云つてお呉れよ」香取はさうなる外、女の女を呼ぶ氣はしなくなつた。が、暫らく待つてゐても、何の音信もなかつた。

「出先さへ分つてれば、當人に話をするんですけど、幾ら訊いても、あの家で出先を教へて呉れないんですよ」女中は二三度電話口へ寄つて殿しい口を利いた後で、二階へ上つて来て言譯をして、「もつとお待ちなさいですか。それとも今日だけ外で御辛抱なさいますか」と、冷淡に訊いた。

「いや、今日はあの女でなくちやいけないよ」と、香取は生眞面目になつて、どうしても呼んで来るやうに女中と言付けた。

例にない執着を女中は不思議がつて階下へ行つた。香取は再び高に舞上る煙を夢のやうに眺めてゐたが、その中時間は餘程過ぎたらしく、日光は障子の下へ沈んで、隙間から染込む風は薄寒くなつた。で、障子を締めて、所在な

げに寝ころんで、疲れた目を閉ぢてゐたが、すると、姉の身體が世にまたない懐かしいものやうに現はれて、自分の唇が其處へ吸寄せられるやうだつた。

と、誰れだか側らゐて自分の楽しい空想を覗いてゐるやうな氣がして、そつと薄目に開けて見ると、部屋の中には人影はなく、煙草の吸殻のみが煙つてゐた。で、また目を閉ぢると、そこへ女中がアタフタ階子段を上つて来て、「今歸つたつて電話が掛りましたよ。今度こそ間違ひはありませんよ」と、やう／＼安心したやうに云つた。

「今までどんな家へ藻繰込んで穆いでたんだらう」と云つて、香取は身を起して、今迄の空想から心を移さうとつとめた。

電氣を點けて、火鉢にも添炭して、食卓を拭つて、茶を入替へて、望みの食物を伺つて、女中は階下へ下りた。書間は殺風景だつた部屋の、何となく色めいて來たのを見ると、香取は眼でも聴きたいやうな浮いた氣持になつた。そして自分に心を許した女を待受けてゐるやうで、階下の物音に耳を付けてゐた。

が、間違ひのない小菊の聲のしたのは、障子の外も夜になつて、高窓の西洋館が薄黒く聳え

て見える時分だつた。隣の部屋にも客が来て、女中を相手に馴染の藝者の噺をしてゐた。「こんなにお待たせして、何だか極りが悪いわね」と云つて、小菊は襖の側で躊躇してから入つて來た。

「今まで何處へ行つてゐたのか冷かしてやらうと思ひながら、その顔を見ると、香取は相手を厭がらせるやうな酷い事が云へたくなつて、僕ははまだ飯を食べないで待つてたんだぜ」と云つて、女懐かしい、心の中を素直に自分の目顔に出して終つた。

「さう。本當に濟みませんでしたわね。私、氣になつて／＼二三度此家へ電話を掛けたんですけど、どうしたんだか、些とも逆じゃないんですよ」

「……目の縁が紅くなつてるね」と、香取は不斷よりも女の顔を美しく見たが、一酒を飲んだのかい」

「え、私自身になつて飲んぢやつたの、……だつて焦躁つたくつて仕様がないうですもの」と、女は急に無理酒に慣れるやうな目付をした。「今夜僕はどうしても一人であらねないんだから、長くなるよ。家へさう斷つてお置き。外から呼びに來ないやうに」と云つて、香取はせめて

今宵はこの女を人手に渡さぬやうにと思つてゐた。

「私そのつもりで来たのよ。貴下と分つてれば、家から呼びに来る氣遣ひはないわ」

女は相手が悪しき氣遣ひをしてゐないのに安心して、馴々しく旅行後の事を訊いたり、年末に迫つたこの頃の色町の様子を話したりした。香取は話の中味よりも、聞馴れた柔しい聲を喜んで、いゝ加減な返事をしながら、茫然聞

惚れてゐた。そして、言葉が切れると、「もつと何か話してお呉れ。お前の話聲が切れると、外の事が考へられていけないから」と促して、「話がなくなつたら、三味線でも弾いてお聴かせよ」

「貴下、何か唄つて？」
「僕は何も知らないよ。僕は幾ら遊んでも唄なんか唄はうつて氣持になつたことがないから。：他人の唄つてのを聴いても些とも分らないんだよ。だけどお前のだけは聴いて見たい氣がする。一心に聴いてるのだから、何でも好きなものを弾いて御覽……」

女は望まれる儘に三味線を引寄せて、調子を合せながら、「貴下も唄つて騒いでたら氣が晴れるんですよ」

「さうかねえ。ぢや教へてお呉れよ。お前の後に随つて僕も唄つて見るから」

「え、さうして御覽なさい」
女は都々一のやうなものを二つ三つ唄ひながら、男の口元の胸かに動くのを見詰めてゐた。

が、何時まで立つても聲が少しも漏れて来ないので、張合がなくて、撥を持つた手を下へ置いて、「一人で唄つても詰らないわね」と、三味線を後へ押退けようとした。

「もつと弾いといで。かやつてればいゝんだから」と、香取は強ひて女に唄はせて、矢張小首を振りながら、唇を尖らせ、蚊のやうな聲で眞似をしてゐたが、やがて、ふと女が笑出した。

「どうした？ 何が可笑しいんだい」香取は目を張つて不思議がった。
「だつて、貴下の様子が可笑しいんですよ」と、女は聲を出してまず／＼笑つた。

「何故？ そんなに僕が滑稽に見えるかね」と、香取は俯目になつて自分の身體を見廻した。そして、自分の身に附いてつい忘れてゐたことが、急に思出される様だつた。

「そんな所ぢやないのよ。貴下が唄つてる時の様子が可笑しいのよ。こんなに顔ばかり振つ

て」と、女は目を細くして態とお道化で首を振つて、男の眞似をして見せた。が、その様子は香取の目にはさしていやらしくはなかつた。むしろ愛くるしかつた。で、

「僕に鏡をお見せよ」と、手を伸ばして女の懐鏡を取上げて、自分の顔を映しながら、生眞面目に今女のしたやうな身振をして見た。

「成程いやらしいね」
「何していらつしやるのと、其處へ入つて来た女中は、それを見て笑つた。

「此方はね、御自分の顔に見惚れてるのよ。唄ひつ振が乙だつて」と、小菊は面白さうに説明した。

香取は鏡を投出して、「男の顔つて醜いものだね。僕は暫らく自分の顔を染々見たことがなかつたが」と、苦笑して皮膚の硬張つた女中の顔を見詰めながら、「でも女の目には男の顔がよく見えるんかね。お前なんかよく客の顔付に目をつけてるんだが、男の顔をどう思つてる？」

「さあ、どうですかね。私達はお顔の鑑別は不得手ですから一向分りませんですよ。これで商賣柄者衆の姿のよし悪しなら、道で撥違つても直ぐ目につきますけど、殿方のお顔はど

うだつても構はない女ですからね。入らしつて下さる方を皆様美男子に思つてゐるんですよ」

女中は笑ひながら戯談らしく云つて、小菊に向つて、「でも、随分酷い美男子もあるわね。松香さんのあの女」と云ひかけて、下唇を反らせて、その容の顔付を真似て、「あの人は些とも此家へ来なくなたたのよ。何處か外の家へ行つてゐるかしら」

「さうでせう。…でも、松香さん時々あの人のことを憶けてゐるのよ。あんな口してゐる人が情が深いんだつてね」

香取は知人の顔を思浮べながら、彼等がそれぞれに女に愛せられてゐるらしいのを不思議に思つて、「僕は男が女に惚れる譯は分つてゐるが、女が男に惚れる譯は分らないよ。…でも女も男に惚れるんだね」

「それは當然でさあね。ですけど私なら顔で男に惚れようとは思ひませんね」

「私だつてさうよ」

で、女二人は色戀の話に興が乗つたやうに、互ひに勝手な事を喋り合つてゐた。それが眞心の聲であつてもなくつても、香取は只部屋の申が色っぽい言葉で賑ふのを喜んで、時々感心したやうな相槌を打ちながら、耳を傾けてゐ

たが、やがて女中が階下へ行くと、ふと夢から醒めたやうに、眞顔になつて、

「妙なものだね。何と云ふことなしにお前とも懇意になつたね」と、自分ながら不思議に思つて、「しかし、僕はもうお前に會へんかも知れないよ」

「何故？」

「…僕は呑気に藝者遊びなんかしてゐられる身分ぢやないんだよ。初めからお前にだつて分つてたらう」

問詰められるので、女は「そんなことはないわ」と、曖昧に答へて、「…偶あに入らつしやることも出来なくつて？」

「あゝ。僕のやうな者でも、もつと生きてゐなくちやならないからね。かうしてると、頭が軽くなつて下らない心配を忘れてるけれど、これが癖になつて毎日此家へ来たくなつても困るからね。だから今夜切りと思つて、お前も外の事を忘れて、精一杯僕を大事にして呉れよ。これで心残りのしないと云ふぐらゐにして貰ひたいね。僕は只の一度だつて女に可愛がられた例がないんだから情ないよ。男としてせめて一日でも、好きな女に可愛がつて貰ひたいがな」

さう云ひながら、香取は過去を顧みて自分のまだ経験しない強い快樂が其處に潜んでゐるやうに思つた。あの女も物足らなかつた。あの時分にも物足らなかつた。

(十五)

で、彼れは長い夜を快く眠る間もなく過して、翌朝霜の融けた時分に寝體を離れた。久振りに市街の中で朝を迎へたので、階下を通る物賣の聲や、賑かな足音や、人聲が珍らしかつた。日當りのいゝ障子際に意い身體を寄掛けて、側に坐つてゐる女の顔を見てゐると、思切つて淋しい自分の家へ歸る氣にはなれなかつた。朝食を食べてからも、さして話もないのに、半時間一時間と時を延した。

「かうしてても話らないから、何處かへ遊びに行きませう」女は退屈して、下町の年末の模様を見に行くやうに誘つた。

「僕は晝間藝者を連れて東京の市街を歩く氣にはなれないよ」と、香取は飽くまで斥けた。「お前は此處にゐたくなくなつたら、何時でもお歸りよ。さうしたら任様事なしに僕も出て行くだらうから」と、自分を持扱ひかねたやうに云つて、身動きもしなかつた。そして、只女が自

分の側を離れないでゐて呉れ、ばと念じてゐたが、女は相手をしてゐるのに困り果てたのか、やがて、「では私お湯に入つて来るわ。直ぐ来ますから待つていらつしやい」と、息抜きに立つて行つた。

で、暫らく一人ぼつちで目を瞑つてゐた。すると、そのまゝ暗い谷底へ落ちて行きさうで心が戦つた。目を開けると、明るい障子に自分一人の影が怪しうに差してゐる。誰れか側にゐて懐かしい聲で催眠歌でも唄つて、快く眠らせて呉れたらばと思つてゐると、其處へ女中が様子を見に来て、お愛想を言出した。

香取は此部屋に倦んで、「帳場へ行つてゐちや悪いかね」と、出抜けに云つて、「あの女はもう來なくつてもいゝから斷つて呉れ。そして日が暮れたら、お前と寄席へでも行かうぢやないか」と、急に思付いて、懐っこく云つた。

「え、寄席ならお伴したいわね。だけど小菊さんも連れて入らした方がいゝでせう。後で知れると悪いから」
「いや、あの女と一緒に、今夜また歸れなくなるから、お前だけの方がいゝよ」と云つて、女中が微笑かに笑つてゐるのを見て、「何も惚れてるからさうなんぢやないよ。只大勢で出て行つ

て、僕だけ獨り家へ歸るのが厭なんだよ」と言譯した。

そして、女中に隨つて帳場へ下りて行つて、長火鉢の前の厚い座蒲團に坐つた。主婦は買物に出でゐて、可愛らしい、娘が顔に不似合な甲高い聲で喋舌りながら、忙しうに周圍をうる／＼してゐた。お歳暮と書いた紙包が幾つか片隅に重つてゐて、其側には大きな厚ぼつたい羽子板が立つてゐる。鍵帷子を着た百日誓の凜々しい男が大きな目を開けて睨んでゐる。「誰れだらう、あれは」と香取は訊いたが、聞えないのか、煩さがつてか、側に返事がなかつた。で、彼は自分の記憶を索りながら、羽二重の似顔を見詰めてゐた。さまざまの舞臺と役者の顔とが浮んでは消えた。と、その芝居の土間の中に、自分が一人悄然坐つてゐる様が、今見えるやうだつた。そして、あの芝居を今一度觀たいと、華やかな世界を忍ぶ氣もしなかつた。

最早一生芝居の木戸口を滑らなくても遺憾はない。：凡ての感覺の死んでしまつてゐるやうに、世の樂みに些しの未練もなかつた。兄弟であれ友人であれ、誰れにも會ひたくもなければ、その動靜を知りたくもなかつた。世の凡ての男には些しの執着をも持つてゐないのに、

何故女に對してのみ愛着の念が絶えないのだらう？

「お退屈様：もうお風呂が沸きますよ」と、云つて、女中は臺所の方へ消えた。玄關には客の來たらしい氣色がした。

燈火が點いて、電話口で女の名前が呼ばれて、再び色めいた夜になるまで、香取は長火鉢の側を動かかなかつた。と、二階からも俯向ひの料理屋からも、陽氣な三味線の音が聞えて來た。前の銅壺には酒の匂ひが舞上つて、娘は立膝で海苔を焙出した。

周圍が慌しく動揺してゐると、香取は自分が其處にぢつとしてゐるのが邪魔になるやうに思はれたので、近所を一廻りして來ようと思立つて、家の者に斷らないで、そつと外へ出た。
人の目を惹くやうに派手に飾つた店先を見ながら、坂を下りてゐたが、昨日あの家へ入つてから餘程の日數を経てゐるやうな氣がして、賣出の提灯も今初めて目についたやうだつた。坂の左右に並んだ福壽草や萬兩の赤い實を見るにつけても、急に年の迫つてゐることが知られた。そして坂を下盡すと、元の道へ歸つて、「やまと」の前まで來たが、まだ忙しがつてゐるだらうと

思ふと氣懸れがしたので、素通りした。

で、再び大通へ出て、雑沓の中に入つてゐたが、ふと、留守の間の家の様子を見て来る氣になつて、次第に入通りの薄らぐ方へ足を向けた。心細い思ひをして、町外れの暗い道に入つて行つた。家へ歸ると、何時ものやうに茶の間の障子に微かな燈火が映つてゐる。下女に何か訊くつもりでその障子を開けて覗くと、言葉掛けを掛ける先に、水引のかゝつた紙包が目についた。

「誰れか来たのかい」と、彼れは急いで取上げて見た。「お歳暮、湯原」と、菓子折の上に掛いた文字で書いてある。

「上野町の奥様が書過から、夕方まで待つてゐなかつたんです。折角来たんだから、お目に掛けて行きたいつて、大變残念がつてゐなさいました」

「別に用事がありさうぢやなかつたかね」

「いえ、そんな風にも見えませんでした。別段お音傳もありませんでした」

下女は呆けた返事のみして、要領を得なかつたが、香取は細君の訪問が氣に掛り出した。下女と半日も話してゐる間に、どんな事を感付いたかも知れない。不躰湯原が細君の前で結つて

ゐた事が破れたかも知れないと氣遣はれた。

が、何時も此方へ来ると云ふ口實をつくつては追分へ行つて居た湯原の祕密の皮の剥げるのは、香取の心に意地悪い興味を起させぬでもなかつた。で、彼れは机の前に坐つてからも、心をその一點に凝して、事件の成行を今見るやうに描いてゐた。細君の手を借りて湯原を苦めるのが、次第に小氣味よく感ぜられて、萎れてゐた身體が俄かに勞づいた。

お多代がそのためにどれほど苦境に陥らうと、それはあまり念頭に浮ばなかつた。只湯原が氣樂さうにあの女と遊んでゐられなくなるのが、胸の透くやうに悦しかつた。

で、この新なる希望を見付けた彼れは、最早「やまと」の女中を連れて、寄席などへ行く氣はしなくなつた。

(十六)

紅く龜んだ手で傘を差して、吹付ける雨を冒して、香取は和泉町の月田の家へ急いだ。その朝葉書を見て、俄かに思立つたのである。

葉書には細君の名前で、いろいろ話したいことがあるから、年内に一度来て呉れ、前以て知らせて呉れば御馳走して待つてゐると書いて

あつたが、彼れは早くその話を聞きたいやうな氣がして、田坂に訪ねて行つた。

細君の注意で、濡れた衣服を脱いで、主人の着替へて、瀟洒した座敷で、新しい桐の火鉢に寄掛つて、切髪の老婆と向合つてゐると、心氣が改まつて、何となくゆつたりした氣分になれた。「去年も今時分伺ひましたね。江戸のお正月のお話を老婆に聞きましたね」と、あの時の光景を懐かしさうに願みる氣にもなつた。

「また一年齢を取ります。何時までも婆婆塞げをして。まだ業が盡きませんですかしら」と云つて老婆は笑つた。

そこへ座に加はつた細君も、豫期してゐる話を持出しけしないで、暫らく年末の景氣や、明けてからの計畫を話の種にしてゐた。香取は此方から訊出さうと思ひながら、折角和いでゐる自分の心を、細君の話次第で、亂さねばならぬのが恐ろしかつた。で、時刻を延し／＼してゐたが、やがて、ふと、

「貴下にお目に掛けたい人があるんですがね」と、細君が云つた。「今日入らつしやると分つてれば、此家へ呼んで置くんでしたのに……寫眞でもあるといふんだけど」

「誰れのことです」香取は氣付かぬ風をしてゐ

たが、細君の言葉の意味は略分つてゐた。そして、當てが外れたやうだつた。

「いゝ事なんですよ。私一人で極めてゐるんですけれど、ぢや、春になつてお話しませう」と細君は些つと句はせられたばかりで、話を引込めて、老婆と説いたやうなことを言合つてゐた。

香取はその事には興もなく、冷かに聞流してゐたが、稍あつて、上野町の噂を引出さうとして、「先日湯原君の細君が私の留守に訪ねて來ましたよ」と知らせた。

「へえ……。此方へは暫らく來ませんですよ」細君の答へは案外だつた。そして、「あの女も一時は騒立つて、始終私に泣言を聞かせた癖に、少し落着くと滅多に顔も見せない」と、不平らしく云つた。

「さう云へばお多代さんは、この頃どうしてゐんだらうね。矢張神戸へ行つてゐるのかしら」と、老婆はそれを疑つてゐるらしい目付をした。

「どうだか分るものですか。あゝ云つた女は直ぐに情夫を拵へるんだから、まだ東京にうろちしてゐるんでせうよ。私ちやんとさう晩んでますの。それに夏時分から外に情夫があるらしいと、私一人で思つたのですがね。どうも素振がさうらしかつたんですよ」細君は眞實しや

かに云つて、香取の方を見て、「でも、こんな事は上野町へ入らしても話さないやうにして下さい。東京にゐると知つたら、夫婦ともいゝ氣持はしますまいから」

「えゝ。香取は擦つたい思ひをした。そして、人間の所行の案外他人に分らないのを不思議がつた。では湯原は何時まであゝして、秘密の快樂に耽つてゐられるのだらうかと心の中に嫉ましかつた。

「東京は廣いから何をしてでも分らないんですよ」と云ふと、

「さうですとも」と、細君は言葉に力を入れた。

他人の素振に氣をつけて、ある事無い事尾に尾をつけて仰山に吹聴したがる細君さへ、少しも湯原の秘密を嗅付けてゐないらしいのが、齒痒くてならなかつた。平生の態度から押して、この人ばかりは感付いてゐると思つてゐたのに、こんな重大な事件をさへ見逃してゐると、相手の顔が白癡らしく見えた。

で、香取は雨を冒して態々此家まで來た甲斐のなかつたのを悔いてゐたが、でも、容易に暇を告げようとはしないで、午餐の御馳走にもなつて、平和な話を左右から聞かされながら、

愚圖々々してゐた。細君は春まで延すと云つた事を隠し了せないで、自分で樂むやうにチラチラ微見かせて相手の意向を索出した。

「決して貴下の爲にならんやうなことはしませんから、大人しく私の云ふことをお聞きなさい。間違ひの起らない中に、極めるものは早く極めた方がいゝんですよ」と、親切な口を利いて、「この頃はお家にばかりいらつしやるんですか」と、意味ありげに訊いた。

「えゝ。今年一杯は保養するつもりで、何處へも出なかつたんですが、來年からはまた働かなきゃ食へないんですよ」香取は明年後の自分を信じかねて、とても悠長な人並の結婚など思ひも染めないで、「私なんかにお世話なすつちや、貴女が迷惑なされるばかりですよ」と、少しも話に乗りさうな風を見せなかつた。

「そんな事があるものですか。……どんな人だつて相當の年齢になれば、結婚してぢやありませんか。一人よりも二人の方が仕事にも身が入つて、結句氣樂に暮らせるんですよ。それに貴下などは些とも將來の御心配がないぢやありませんか」

「さう思はれますかね」香取はまじく細君の顔を見ながら、さも凡ての人間の代表者に向つ

だ。：：痛々しい様子を傍の人に見せないだけでよい。：：

香取は果しない苦痛の種が其處にあるやうな気がして、自分の手で湯原を殺し胎児を殺し、果はお多代をも殺したらと、我知らず恐ろしいやうな樂しいやうな空想に沈んだ。さうすれば世界が晴々しくなつて、自分も生れ變つたやうになれさうだつた。心を腐らせてゐる毒氣が消えてしまひさうに思はれた。：：白く光つてゐる匕首やいやらしい塊から流出する惡血があり／＼と胸に浮んだ。：：

ふと後から怒鳴るやうな聲が耳に入つたので、彼は驚いて、左右を顧みた。綱引の俥が袂を掠めて、泥を跳掛けて行過ぎた。

先日湯原が立寄つた酒屋は直ぐ側に見えた。「こんな鬱陶しい日に、どうして暮らしてゐるだらう？」彼れは足を早め出した。

手土産を投出して、龜んだ手を温めながら、香取は針を持つたお多代の手の動くのを見てゐた。女は火影に横顔を見せて俯首いたまゝ、その手を休めなかつた。

「貴下のお家ぢや、もうお正月のお支度が出来て？」

「：：僕はこの衣服でお正月だ」

「：：春着をお拵へなさいな。私が見立てて上げますから。此家で買へば安いんですよ」

「え」

「：：お正月には貴下方は何をして遊びなさるの？」

こんな事が途切れ／＼に話された。女の言葉も顔付も穩かで、縫合はせた縲の跡を抜く音にも、穏かな心が現はれてゐるやうだつた。香取もかうしてゐれば、焦立つた心が柔かい手の平で撫でられてゐるやうなので、何時までもこのまゝでゐたかつた。互ひに痛い感じを惹起すやうな言葉を口にしないので、二人の座をも亂したくなかつた。正面に女の顔を見ないで、その指先や袷足を見ながら、恣に空想に耽つてゐる方が樂しかつた。

「これだけ月付けますから、もう一寸待つて下さい、ね」と、女は目を上げて子供らしい口を利いて、更に仕事に取掛つた。

戸外には雨足が衰へて、軒の雫も長閑に落ちてゐた。火鉢に掛けた湯沸からは盛んに湯氣を吹出した。香取は自分で茶を入れて、温かい茶を胸に染込ませながら、お愛想に女の話掛ける話に、軽い返事を與へてゐたが、女は

やがて、ホツと息を吐いて、周圍を片付けて、火鉢の側のにじり寄つて、冷たい手を翳した。そして、「お待遠様」と云ひたさうに媚を含んだ目を動かした。

「今年ももう四五日ですわね。何處も忙しうでせう。私、些とも市街へ出て見ないんですけど」

「：：僕は今朝から和泉町へ行つてたのです。彼處はもうお正月らしかつた」

香取は話の種を造らうと思つて、何氣なくかう云ふと、

「どんなでした？ 彼處は」と、女は力を入れて問返した。

何と答へていゝかと、香取は迷つて、暫らく口を噤んでゐたが、女は目を放さないで、

「私」のことを何か云つてたでせう。屹度」と、答へを迫つた。

「いや、そんな話は些ともしませんよ。何も知らないんでせう」

「さう？：：只遊びに入らしたつたの」

女はまだ不安らしかつた。で、香取はそれを打消して、自分が何も口外しなかつたことをも確かささうとして、

「彼處の伯母さんが僕に女房を持たせようと

思つてるんです。用事があると云ふから行つて見たら、その話なんです。」

「ぢや、いゝお話だつたのですね」と、女は微笑して、「貴下の奥様は何んな方だらう。私の知つてる人ぢやないんでせうね。」

「どんな女だか……どうせあの伯母が見つけたんだから、確なのぢやないでせう。」

香取はこの話に深入りしなくなつて、採消さうとしたが、女は興がつて、最早極つてゐることにして、何かと頻りに訊出した。「早くお貰ひなさいな、あんまり選好みすると却つてよくないの上と、眞顔で勧めたりした。」

香取は自分の結婚について、女が少しも心を悩ましてゐないらしいのを、飽氣なく思つた。

そして、今夜は女が浮々して、さも境遇に安んじてゐるらしいのを訝つて、また湯原に言ひくろめられたのではないかと疑ひながら、「あの後湯原君は何か云つてましたか、此間僕が此方へ来てゐた留守の間に、細君が僕の家へ来たさうですよ」と云つた。

女はドキツとして顔色を變へたが、直ぐに冷笑を浮べて、「どうにでも勝手にするがいゝ」とと呟いた。そして、横へ向いて、唇を噛んで暫らく黙つてゐた。その血相が怖いやうなので、

香取は自分の言葉を悔いて、相手を宥めようとして、

「僕はあるの細君に些とも會はないんですよ。久振りに今日寄つて見ようと思つて、門口まで行つただけで、厭になつて引返しちやつた。湯原君も大きな聲で面白さうに話をしてゐて、また酔拂つてゐるらしかつたから、攫まつちや大變だと思つて、逃げて歸つたんです」と、勢づいて云つた。

「面白さうな話つて、どんな話をしてました？」と、女は嚴い目付をして慌しく訊いた。

「どんな話だか、よく聞かなかつたのです。」

「聞いていらつしやればいゝのに。」

女は語るやうにかう云つて、何か考へてゐた勝手に云はせとけばいゝわね。

「え、」香取は相手の言葉の意味は分りかねたが、只機嫌の直つたのが悦しかつた。で、媚びるやうに、「僕もこの家へお歳暮をやらなくちや悪いでせうね、度々邪魔に来るんだから」と、云ふと、

「いゝんですよ、そんな御心配なさらなくつても」と、女は聲を潜めた。「私主婦が貴下の事を

よく思ふやうに……と不斷氣をつけてますの。だから、些とも主婦に氣兼ねしなくつていゝのよ。……今夜も何時までも遊んでいらつしやい。貴下さへ構はなきや、からして夜明ししたつていゝんですわ。主婦も背つ張りだし、私も夜が更けると、寂しくつて變なことがかり考へられるんだから、夜明しぐらゐ何でもないの。」

「僕も徹夜ぐらゐは構はないけど……だけれど、貴女は縫物が忙しいんでせう。」

「いゝえ。どうせ御年始に行く家はないし、何時まで掛つたつて構ひませんわ……主婦にお茶菓子を買つて来て貰つて、皆なで面白いお話しませう。」

女がいそ／＼して次の間へ行つた後で、香取は知らぬ間に煙草の煙で部屋の濁つてゐるのに氣付いて、縁側の雨戸を開けた。雨は上つて名残の滴が幽かに傾へてゐる。面に觸れる外の空氣は痛いほどに冷かつた。主婦が門の方へ出て行きながら、此方を顧みた目が、薄明に氣味悪く光つた。そして、その目が此方の心を見てゐるやうで、油斷のならない氣がした。と、

不意に、
「貴下近くにまた上野町へ入らつしやるんでせ

う」と、後で聲がした。

で、振向いて、物思ひに凝つてゐる女の顔を
見て、元の座へ戻ると、女は再び同じ事を訊
いた。

「年内に一度は行かなくちや悪いかも知れな
い。…何か用事があるんですか」

「用事なんかあるものですか」と、思はずさうに
男の問ひを押潰して、眉を曇らせて思案してゐ
た。

「人間は遠慮して小さくなつてちや駄目ね」女
は思案の果にかう云つて、口元に憎みを含んだ
笑ひを微かに浮べて、「馬鹿にしてやがる」と咳
いたが、やがて、男の顔に目を吸付けて、「ぢ
や貴下はこれから彼家や和泉町へ度々入らつし
やるんだわね。そして、此家へは来て下さらな
いんでせう」

「僕は成るべく来ないやうにするつもりです。
あの主婦が氣味が悪いから…貴女が此家を出
て自由な身體になつてから訪ねて行かうと何
時か思つてるんだけど、外へ出るたびに、つい
此家へ足が向いて仕方がない」

香取は無邪氣らしく云ふと、女は快く微笑
して、艶いた目付をして、「貴下が来て下さら
ないと、私、本當の一人ぼつちよ。皆なから悪

者にされて、味方になつて呉れる人は一人もな
いんですもの。まだしも此家の主婦は私の愚戾
をして、いろんな口を利いて呉れるんですよ。
初め思つたほど決して悪い人ぢやないの。だか
ら、心配なさらないで、今夜泊つていらつしや
い」

「だけど…」と、香取は決しかねた風をした
が、其處を抜出る力はなかつた。かうして女
の息に包まれてゐると、これまで味ひ知らなかつた
快感が湧きさうだつた。恐ろしいやうな
度外れな快感を覚えてゐるやうだつた。逃げ
ようたつて手足は自由に利かなかつた。で、彼
れは黙つて其處に坐つてゐたが、女の髪の毛か
ら爪先まで、彼れを刺激して、不自然な空想の
色を刻々に濃くさせた。

と、其處へ主婦が歸つて来た。「外は寒いんで
すよ」と云つて入つて来たが、その目も鼻も、い
くら思直さうとしても、香取の目には、意地悪
さうに見えた。自分の幸福を遮るやうに思はれ
てならなかつた。

「どうも御苦勞様、主婦も此處へ入らつしやい」
と、女は陽氣に云つて、座を開けて招いた。
主婦は肥つた身體を二人の間に据えた。そし
て女同士の呑氣らしい話が夜の更けるまで續

いた。
香取はつひに歸るべき機会もなくして、勧めら
れるまゝに、宿の主人の夜具にくるまつて、火
鉢の側で假寐をせねばならなかつたが、その夜
具には穢しい老爺の垢や、湯原の肌の脂が染
付いてゐるやうな氣がして、安らかに身體を落
着けることが出来なかつた。次の室からは主婦
の寢息が、静かな夜の空氣を破つてゐる。彼れ
は其息を押潰したかつた。…

夜明前から、女は深い眠に落ちた。香取は
主婦が兩戸を開けるのを待つてそつと起上つて
襖の外から一言聲を掛けて顔も洗はないで戸外
へ出た。最早日は高く、表は年末らしく賑
つてゐた。

彼れは脇目も觸らず自分の家へ歸つた。机の
上には昨日の朝の月田の葉書がそのまゝに置か
れてあつた。
「いろ／＼お話し上げたきこと有之候へば
…」この文句に心惹かされて出て行つたの
だがと、彼れはあれから今朝までの事を跡を追
つた。

すると、思はしい記憶が最つて来たが、不
思議にもその底に管で覺えない、儼が燦いてゐ

た。命掛けの冒險をして、力強い者を打倒したやうで、沈んでゐた心が急に魅力帯びて来た。

で、彼れは毛布にくるまつて横になつて、長い間憊んでゐた心をも身體をも休めた。珍らしく熟睡に陥つて、二三度下女に呼びかけられても目を開けなかつた。そして、名残なく夢から醒めたのは、部屋の中が薄暗くなつてからだつた。

見ると、床の間には鏡餅が供へられてあつた。三寶に大きな伊勢蝦が垂れてゐる。茶の間の燈火も不滅よりは浮えてゐて、注連飾が其處に投出されてあつた。

「お次手に雑者箸を買つて来てお呉んたさい」と云つて、下女は獨り量見て春の準備をしてゐたことを知らせた。

「今夜福壽草でも買つて来ようかね。外に入るものがあれば何でもさう云つて御覽」と云つて、香取は下女から盆だの皿だのと、足らない世帯道具の名を訊いて、夕餐が済むと、直ぐまた外へ出た。

そして、買物をしながら神樂坂まで出て、床屋へも入つた。ストロブに温まつてから、髻を剃られながら、見るともなく自分の顔を見てゐ

たが、その顔はこれまでのやうに見苦しく萎びてはゐなかつた。目にも口にも弾力があるやうに思はれた。傍の鏡に映つてゐる外の男の顔を見下げるやうな氣にもなつた。あんな並外れの快樂は誰れも知るまい……

其處へ入つて来た二三人の藝者の白い軟かい顔も鏡に映つた。知合らしい客を纏弄つたり纏弄はれたりし出した。と、小菊の顔までも思出されたが、そんな女の佯めいた言葉や甘つたる言葉は、彼の心を少しも咬しさうではなかつた。

で、「やまとの近くまで歩いたが、最早その稀薄な空氣に興も起らなくて、引返して家へ歸つた。まだ藩の閉ぢた福壽草の鉢を床の間に置いて、机の前に落着いて、部屋の中を見廻すと、来る春には何か望みを合んでゐるやうだつた。寂しい陰氣な空氣は彼れの左右から遠ざかつた。……自分だけが他人に與へられない禁制の快樂の底へ藻線込んでゐるやうで、知人が皆愚しく見えた。最早明日からの生活の事などは、風託する氣にはなれなかつた。最早誰れにも氣應れしないで、人中へ出て行かれる。お多代にさへも手強く物が云はれる……

彼れの顔には、憎い者の胸に刃を當てた時のやうな笑ひが微見えた。

「大晦日の晩には是非遊びに行きます、そのつもりで待つてゐて下さい」と、その夜お多代に葉書を送つた。

そして、今年の最後の夜に彼處へ行つて、彼處で除夜の鐘を聞く有様を濃い色取で芝居のやうに描きながら、眠に就いたが、ふと、あの主婦の躰を想起させた。

「どうも彼女の目が邪魔だ」彼れはその日が自分の心を眠んでゐるやうに思はれて、次第に不安の念が萌した。で、夢の醒めるたびに不安が増して、果は、主婦の前だけでは自分が萎縮けてゐるやうに思はれ出したので、その目を抉取りたくなつた。

(十八)

一日隔てて次の日は大晦日だつた。が、それまでにお多代から葉書一つ来なかつた。「あの夜から餘程憊んでゐさうなものだが」と、訝りながら、一日を送つて、暮れるのを待つて追分へ急いだ。

庭から聲を掛けて障子を開けると、お多代の姿は見えなかつて、主婦が笑顔で快く迎へた。何か捜出すやうな目付をして部屋の中を見てゐ

ると、
「今し方湯原さんと買物に出掛けました。直き
歸んなさるでせう」と云つただけで、主婦は茶の
室へ引込んだが、其處には珍らしく主人の聲が
してゐた。

香取は一人火鉢の側で寝たり起きたりして、
待つてゐた。二人が歸つて来たたらどんな風をし
てどんな口を利くだらうかと豫想しながら、次
第に心を興奮さしてゐた。そして、外の足音に
耳を澄ませてゐたが、容易にそれらしい音はし
なかつた。

時刻の経つほど、張詰めた香取の神經は疲れ
て、留度なく想像に浮かんで来る二人の言葉や
素振が針の先のやうに痛く響いた。で、心を紛
らすために、何か讀むものでもないかと、部屋の中
を捜したが一枚の新聞すら見當らなかつた。
痛い針の先から逃げるやうに縁側へ出ると、星
が目眩しく微動してゐる。通の物音が呻くや
うに聞えて来る。

と、やがて、下駄の音に交つた高い話聲が耳
を驚かして、門の戸が開いた。
「やあ、君かい」と、湯原は近寄ると、不審の通
りの聲をした。明るい處へ入つて来て、風呂敷
包を其處へ投出して、「一切通まで引張つて行か

れたよ」と、主婦に向つて襖越しに云つた。お
多代は提げて来たよせ袋を置いて、隠かな微笑
を浮べて挨拶した。香取はその目を羞明しが
つて避けるやうにして、
「貴下の家の用事は片付いたんですか」と、湯原
の方を見た。

「今年も苦しい思ひをして、やうやく遣繰りを
したのさ。だけど先づ無事に年が越せるから、
お日出度い譚だね」と云つて、湯原はふと氣付い
たやうに、
「君に借りたものも押はなくちやならないね。
皆拂ふ譯にも行かないが」と、紙入を出して、考
へながら、貸金の半分ばかりを前に置いた。香
取はそれを受取つて、そつとお多代の方を見る
と、女はよせ袋を開けて、中から鞆だの箸箱
だのと、色んな物の出て来るのを悦しがつてゐ
た。

「子供騙し見たいなものだね」と、湯原は手を伸
して取上げて見た。
「でも、割にいゝのが當つたんですよ」と云つ
て、女は石蔵の箱を取つて、その臭ひを嗅い
で、「これこそさう悪くないの。見て御覽なさい」
と、目の前を出した。
湯原は一寸手に取つて、「これでも何もかも揃

つたね。：：：ちや、これから皆なで年越蕎麥で
も食べようぢやないか」
風呂敷の中には下駄もあつた、肩掛もあつた。
お多代は暫らく其等から心を放さなかつた。
香取には二人の間が何の異状もないのが案
外だつた。お多代は先日來に見なかつた平和な
顔をしてゐる。蕎麥が來ると、主人も主婦も招
かれて入つて來たが、誰れも此處に並んでゐる
男女に對して、邪推の目を向けてはゐない。
その晴々しい世間話を聞いてゐると、香取は
ふと、先日之夜自分だけ夢を見てゐたのではな
いかとも疑はれた。が、それが夢であらうと
なからうと、かうして平凡な話を何時迄も聞か
されてゐると、刻々に心が苛まれるやうだつ
た。

「僕は歸らうかね」と訊くと、
「僕も少しして歸るんだから、一緒に行かう」
と、湯原は引留めた。
「香取さんは何時までいらしつてもいいんでせ
う。また此間のやうに夜明ししませう。元日
のお祝ひをしていらつしやい」と云つて、お多代は
湯原を流し目に見て、「歸るのなら、貴下だけお
歸んなさい。大晦日に御主人が家にゐなくちや
悪いんでせう」と、つけく云つて、そして、湯

「僕は歸らうかね」と訊くと、
「僕も少しして歸るんだから、一緒に行かう」
と、湯原は引留めた。
「香取さんは何時までいらしつてもいいんでせ
う。また此間のやうに夜明ししませう。元日
のお祝ひをしていらつしやい」と云つて、お多代は
湯原を流し目に見て、「歸るのなら、貴下だけお
歸んなさい。大晦日に御主人が家にゐなくちや
悪いんでせう」と、つけく云つて、そして、湯

「僕は歸らうかね」と訊くと、
「僕も少しして歸るんだから、一緒に行かう」
と、湯原は引留めた。
「香取さんは何時までいらしつてもいいんでせ
う。また此間のやうに夜明ししませう。元日
のお祝ひをしていらつしやい」と云つて、お多代は
湯原を流し目に見て、「歸るのなら、貴下だけお
歸んなさい。大晦日に御主人が家にゐなくちや
悪いんでせう」と、つけく云つて、そして、湯

「僕は歸らうかね」と訊くと、
「僕も少しして歸るんだから、一緒に行かう」
と、湯原は引留めた。
「香取さんは何時までいらしつてもいいんでせ
う。また此間のやうに夜明ししませう。元日
のお祝ひをしていらつしやい」と云つて、お多代は
湯原を流し目に見て、「歸るのなら、貴下だけお
歸んなさい。大晦日に御主人が家にゐなくちや
悪いんでせう」と、つけく云つて、そして、湯

原が人のよきさうに笑つてゐるのを見て、「私、明日お家や和泉町へ御年始に行つてもよくつて？」

「来られ、ば来たつていゝさ」

「ぢや、行きますよ、屹度。私、些とも構はないから」

「おれだつて構はないさ」

「ふゝん」と、お多代は幽かに冷笑を洩らして、勝ち做つた顔付をした。

それが香取の目には凄かつた。男を侮つたやうな太々しい心の底が見えるやうだつた。自分を憚つてゐないらしいのが憎くなつた。で、秘密を湯原の前で曝し出したらと思つてゐたが、湯原は女を宥め難しながら、歸りさうにしては、また腰を据ゑた。

「貴下はもつと遊んでて下さいな、淋しいから」と、女は香取の立上りさうにするのを見て、頼むやうに云つた。

「えゝ」と、香取は承知したが、此處に留まつてゐるのが、自分の身に危かしい氣がして、迷つてゐた。あの太々しい心や刺戟の強い肉感に、自分がへし潰されさうなのが恐ろしかった。

「さあ、一緒に行かう」と、湯原は何氣なく云つて、引立てるやうにして、戸外へ出た。外套の

襟を立てて懐手をして、足早に歩みながら、「僕の家の家も少し雲行が悪いんだからな。君も警戒しといて呉れたまへ。家の奴が君に會ふと、屹度何か訊出すから……」

「しかし、お多代さんは何時までもあゝして置くんですか。子供が出来ても……と云掛けて、香取はいやらしいその影を浮べて口を噤んだ。「仕方がないさ。僕もあゝして置いて時期を待つんさ」

香取はそれ以上に訊きやらもなかつた。電車で別れて、當てもなく電車に乗つたが、「やまと」へでも行く外落着くところはなかつた。

で、其家の二階へ上つて、身體を投出してゐると、太々しいお多代の素振が、自分を取殺すやうに、目の先を離れなかつた。

感想断片

私の信奉する『小説作法』の第一ページには、「いゝ小説を書くには、美學修辭學あるひは小説作法に拘泥する勿れ、自己を膨脹せよ人生によく目を注げよ」と書いてある如く、私の信奉してゐる『戯曲學』の第一ページには「戯曲に於て傑れた作家たらんにはまづ戯曲學など稱するものを抛棄せよ」と書いてあるのである。歌學者と歌人とは昔から違つてゐるのである。

私は先夜ある寄席で、ある若い男が現今の役者の假聲を使ふのを聴いて、そのうまいのに感心した。七八人のが悉く本物そっくりであつた。この男に比べると、圓右のつかふ假聲など甚だ下手だ。いろ／＼な藝事に於て、今の者必しも昔の者に劣つてゐるのではあるまい。役者だつてさうであらう。たゞ私自身も年齢の加減で、役者といふ者に對して、興味を失つてゐるので、みんなが誰らしく見えるのだらう。

(『白鳥屋集』の「感想断片」より)

命

の

綱

荒木は夕餐後ランプを點火すには早いし、散歩するのも大儀で、長椅子に身を横たへ、雲の低い雨のまだ霽れ切れぬ空を、ボンヤリ眺めてゐた。すると、廊下で二三の女下の騒々しい笑ひ聲が、バタ／＼と駈け行く草履の音と混濁になつて聞えたが、その中を縫うて男の冴えた笑ひ聲が通つて、ドシ／＼と重い聲音が荒木の部屋の前止まつた。

「居るな」と、宗谷と云ふ小柄な瘦せた男が、隙間から覗いて、それから「失敬」と笑顔で入つて来て、

「何を考へてる？ 鬱いでるぢやないか」と、床柱を後に胡坐を掻いた。

「君を待つてたのだ、あの事はどうなつた」と、荒木は椅子の上で細い目を開けて、柔しい聲で問うた。

「いや、又君を煩すんだね、今日も家にゐると五月蠅くてならんから、早速飛び出して来たのだ」

「しかし、もうあの女の所に泊るのは止せよ、

君の母堂から苦情を持たれて、僕まで困るから」

「あゝ、もう行かんよ」

「君のこつたから當てにやららん」

「ハ、ハ、以後は、謹なよ」と軽く云つて、廊下を通つてゐる下女を呼留め、

「おいお茶さん、先きの話は内所だよ、：：：それから一つお茶の濃い奴を飲まして呉れ給へな」

と、締りのない顔を仰向けて、ボンヤリしてゐる。年齢は荒木と同年の二十六だが、誰れの日にも三つや四つは若く見える。

「二三日前だったが、菅野女史が来て、君の情話を云つたよ。宗谷もあれぢや可哀想だなんて」

「ハ、ハ、ハ、全く弱るからね」と、宗谷は人事のやうに云つて、一昨日もこの通り母に引つかかれたんだからね」と、腕をまくつて赤い爪跡を見せて、「あれが怒鳴る時の顔つたらないぜ、それに髪が薄くなつて地頭が赤光りになつてらん

だから堪らない」

「老人が醜くなるのは當然だが、美人の方はどうしても元の鞘へ收まらないかね」

と、荒木は眞面目で氣に掛けてゐる。

「先づ六ヶ敷からうよ、：：：が、まあいゝよ」

と、宗谷は下女に茶を注がせて、悪洒落を云つて恐悦がつてゐた。

この二人は一昨年同じ學校を出てから、同じ會社に勤め、報酬も同じだが、荒木は下宿暮らし、宗谷は両親と妹二人とあつて、狭い家に住んでゐる。境遇も性質も違ふが、却つて實際は親密だ。で、荒木は宗谷の家庭に何事かあると、相談役ともなり仲裁役ともなり、柄にない大人ぶつた口をも利く。この春に宗谷が勤めを怠けて、宿直の番をも誤魔化したことが分つて、殆んど免職になりかゝつたのを、荒木が社長に数願して、漸く喰止めたのであるが、この時も當人は平氣で、朝から毛布を被つて寝こんでゐるので、母親は氣が氣でなく、今にも一家五人が餓死でもするかの如く心配して、終ひには我が子に向つて手を合せて、「この通り頼むから會社へ出てお呉れよ」と涙ぐんだ。宗

谷は毛布から頭を出して吹出し、
「拜んただけでは駄目だよ、お賽銭でも投げて
呉れにや、お神酒も供へて呉れるといゝね」
と調戲つた。すると、母は、

「この不孝者めが。親を馬鹿にしやがつて」
と、奥歯で喰ひしばつて怒つたが、それも一
時で、矢張涙聲で、

「お前が自棄になつちや、皆な路頭に迷はにや
たらぬい
と歎息する。

そして、宗谷が幾ら力を添へて、「何處か又い
い仕事があれば」と慰めても、中々承知しな
いで、自分で荒木の宿を訪ねて、社長へ取なし
を頼んだ。何なら自分が社長の前へ出て頭を
地べたへつけてお詫をするからと頼んだ。で、
お詫が叶ふと、宗谷は元の通りに出社したが、
別に以前よりも仕事に身を入れるでもなく、上
役の目録を憚る風もない。却つて荒木の方で心
配して、

「僕も君の爲に責任を帯びてるんだから、様子
だけでも眞面目になつて呉れにや困るよ」
と注意する程であつた。

宗谷は元學問嫌ひで、小學校時代から私立大
學卒業まで、只の一度も自分で好んで學課に向

つたことはなかつた。子供の時分は、小柄でも
力があり、小手先が敏捷くて、素人相撲に七人
抜きをやつて、筆や紙の賞品を取つたこともあ
る。聲がよくて、聞覚えの都々逸や、端唄を座
興に唄つても、捨てがたい江戸前の響きを傳へ
る。そして自分では學問するよりは、仕事師に
なるか、舟乗りになるか、いつそ米屋町へでも
奉公して、行々は立派な相場師に成立ちたい位
の老へを持つてゐたが、両親は物堅くて、と
てもそんな眞似をさせる所ではない。是非學校
へやつて官員さんか學校の先生かに仕上げて
見たい、借金しても諸道具を賣拂つても、家の
者が焼鹽を舐めても、この子一人が學校を卒業
さへすれば、後は一家安穩、親々も樂陰居が出
來ると定めた。宗谷自身は先々の事は抱負もな
いが、両親がさう定めたのならさうするさと、
自然の成行に任せて、朋輩が職工になつたり、
年俵奉公に出るに引變へて、制服制袴を着るこ
とになつた。

薄給で今の會社に勤めるやうになつても、宗
谷自身には左程の希望もない。只母が早くから
起きて辨當をも拵へて、時間が來ると、宗谷の夜
具を引ばづして、追立てるやうにするから、詮方
なしに出掛けて行く。衣服にも食物にも贅澤を

云はず、衛生の法など少しも顧みないが、朝夕
牛乳を五勺づつ飲む。これも自分に厭なのだ
が、母が牛乳が非常に薬になると聞いて、無理に
飲ませるので、仕方なしに飲むのだ。この一家
には最早不動産もなく、外に働か手もなく、只
私立大學卒業生宗谷眞藏一人が生命の綱となつ
てゐる。病氣になられて堪るものか。

所がこの宗谷が二三ヶ月前に情婦を拵へた。
自分から進んで戀ひ焦がれたのではないが或日
友人の家で出會つた女學生と懇意になつて時々
その宿へも遊びに行つて、無駄話をしてゐる間
に、自然に關係がついてしまつたのだ。流石
に悪くはない。月給は母の手で捲上げられ、遊
びに行く餘裕もなし、さう容易く地色の出來る
柄でもなし、それに何事にも諺文の少ない男だ
から、相手の女の容貌や氏素性を氣にすること
もない。で、始終微笑々々顔で、さも情婦が
出來たらしい素振をも見せる。母も薄々感付い
ても、大目に見てゐたが、或月末宗谷が月給を
持つて女の宿へ泊り込んで、朝まで歸らなかつ
たので血眼になつて急に騒ぎ出し、何處から
聞いたのか宿を押し當てて、二人の寝てる所へ
飛び込んで、宗谷の胸倉を攫んで、月給を掻き
たくつて歸つた。その擧句が荒木の周旋で、女

を宗谷の家へ同居することとなつたが、狭い家に大勢ゴタ／＼してゐるんだから、辛抱し切れなくて、十日も経たぬ間に女の方で逃げ出した。

宗谷は濃い茶を甘さうに二三杯呑んでから、コロリと横になり、春延びをして、

「僕も一生に一月でも下宿生活をして見たいな」と欠伸まじりて云つた。

「それよりや亞米利加行でも復活させたらいぢやないか。彼地でうんと儲けて此方へ送つて来るやうにすりや、君の爲にも家の爲にも却つて好都合だらう、劍持なんか彼地でうまくやつてゐるさうだよ」

と、荒木は宗谷がとても會社で永く用ひられる望みのないことを知つてゐるから、今から外の方法を取らさうとする。

「そりや出来ぬ相談だ、親爺やお母は外國へ行きや、もう一生會へない位に思つてるんだから……それどころ、僕あは積から先を知らないのだからね。二三日でも僕が姿を隠さうなら、それこそ警察へ搜索願ひでも出すだらうよ、僕の帯にや年中繩がついてて此處へ來てゐ

たつて親爺と母とが家でその繩を引張つてるんだよ」

「しかし君あ柔順だからいゝさ。僕等は一人でかうしてても、何だか會社の束縛を感じてるやうで厭でならんのだが」

「さうかい。結局僕の方が安心だらうよ。細付きで泳いでるんだから浮かうと沈まうと、責任は僕にやないんだ」と云つて、宗谷は喉をころがして笑つて、

「昨日も親爺が母の尻馬に乗つてブツ／＼怒つてね、貴様のやうに女に迷つてちや、屹度會社の方も忘れてゐるに違ひない、それぢや、社長さんに相済まんから、いつそ免職させて頂

くやうに、おれが社へお願ひに行くと、大變な權幕さ。僕あ可笑しくつて吹出すと、親を馬鹿にすると云つて、終ひにや刀を出して斬つてしまふなんて怒鳴るから、僕も神妙に手を合せて念佛を唱へて、さあ斬つて下さいと首を突出すと、母が泣くやら妹が留めるやら、そりや滑稽だつたよ。だが要するに、僕は死ねないのだ、

幾ら僕の方で望んだつて、死ぬる權利はちやんと取上げられてるんだよ。君なんか個人の自由だの生存の壓迫だのと云ふが、僕は死の自由がないんだからね」

と、べら／＼饒舌つて、足をバタ／＼させてゐた。薄い短い眉が垂れ、鼻の先がビク／＼と動いて、身體に何處となく餘裕がある。聲も上つ調子で氣樂さうだ。荒木は椅子の上からヂツと見下して、相手の話を眞面目で聞いて、その家庭のゴタ／＼した様を思ひやつて憐れに感じた。

宗谷は一しきり話すと、スツクと立上つて、「さあグヅ／＼してると呼びに来るから、僕はもう歸らうよ、君は又勉強するんだらう」と廊下を下りた。

その翌朝荒木が井戸端で顔を洗つてゐると、宗谷の母が不意に前に立つて、挨拶もそこ／＼に、

「倅は昨夜お伺ひしましたでしか、まだ歸つて參りません」

と、目に角立てて云つた。

「そんな筈はないが」と、荒木は落着いて云つて、靜かに手拭を絞つて、冷水摩擦しながら、「まあお上んなさいと云つたが、老母は氣が氣でなく、屹度又彼女の所へ漕り込んだのですよ、貴方

「は、今度の宿を御存じぢや御座いますまいか」
「僕はよく知りません、それに宗谷君も、もう彼處へは行かんでせう、何處か外へ行つたんぢやないですか」

「いえ、それに違ひないんですよ。昨日も易者に見て貰ひますと、表面は行かん風をしてこつそり行つてるんだから御注意をなさいと申すんですよ、筋度それに違ひありませんよ。一體あれにや電車賃と煙草銭しか渡してないんですから、どうしたつて外へ遊びに行けよう筈は御座いませんと、老母は四圍構はず甲走つた聲で云つて、スタ〜と通りへ行きかけたが、又舞戻つて、申しかねますが、會社へお出でなすつたら、社長さんにお願ひして、俸の行先をお調べ下さるやうにして頂きたいんですが」

と云ふ。荒木は勝手な事を云ふ人だと呆れたが、
「はあ承知しました」
と、氣安めを云ふと、老母は多少安心したらしく、

「本當に仕方のない男で御座います」
と云つて、廊下

荒木は二階へ上つて、深呼吸をしながら、廊下から見てゐると、老母は四辻に立つて、キョト

キョト四方を見て二三度行き迷うてゐた。

宗谷は定刻に出勤して、荒木から事情を聞いたが、只「さうかい」と云つて、別に氣にも留めず、例の如くに仕事をして、定刻に會社を出た。しかし彼れの運命は一日と縮まつてゐる。「役に立たぬ奴、無用の長物」だとは公評であつて、當人も認めてゐるのだから、荒木の力でも如何ともすることが出来ぬ。

で、その晩も氣掛りで散歩がてら宗谷の家を訪ねたが、二室切りの狭い家はひつそりしてゐる。冷えるとは云へ、まだ秋になつたばかりなのに、老父は袷を襲ね着して、火鉢に當つて指先を揉みながら、クウン〜と喉を鳴らしてゐる。老母は姉妹に按摩を取らせながら、居眠りをしてゐる。宗谷は座敷の柱に凭れて、玩具の人形を操つて目の玉を飛出させたり、舌を出させたりして遊んでゐる。
「静かだね」と、荒木が前に坐ると、
「む、嵐の後だからさ」と、宗谷は目尻に可愛い皺を寄せて、尙人形を動かしながら、自分の顔で拍子を取つてゐた。ホ一、二、と掛聲までする。

「よくそんな馬鹿な真似をするね」
「面白いぢやないか、昨夕煙草一つ買ふ代りと思つて、夜店で買つて来たんだ」

「さうか、君の家もそれで天下泰平だ。しかし社では動搖があるやうだよ」

「さうかい、僕なんか最先に免めさせられるだらうよ」
「さうでもないさ」
「だつてそれが當然だからね、どう思つたつて、僕が社で入用だとは思はれん」

「ぢや、やめたらどうする」と、憚つて小聲で問ふと、
「母に聞いて呉れ給へ、世間ぢや不用の僕でも、母は遊ばせときやしない、何かに任命するだらうよ」

四五日立つて、宗谷の父が荒木の宿を訪ねて來た。宗谷は最早免職させられてゐるのだ。そして父は「どうかかなりますまいか、貴方のお力で」と、無理強ひに頼んで「今度は六ヶ敷いでせう」と云はれても、中々承知しない。

「外でもよすがすが、どうかあれだけの月給の所へお世話下さいませんか。でなけりや學資は

使ひ損ですからな、自分にや車掌にでも土方にでもなるて云ひますが、折角身に付いた寶を棄てるのは惜うがす」

と、少し反身になつて、昔風のノンビリした頭を鹿爪らしく構へ込んで云つて、決して母親のやうに「家の者が食へんから」と、泣き事を云つて頼みはしない。

荒木は「さうですとも」と云つて、「いづれ又いい仕事を捜してみませう」と間に合せの安受合をして老人を撃退した。

しかし荒木は自分は他人の職業を周旋する勢力などありやうはなし、世の中はかの老父母の思つてるやうに、宗谷一家と荒木との爲に造られてゐるのではなしと思つて、氣の毒でもあるが、當惑もした。そしてかの老父母が押寄せぬやうに、不意に遠方へ轉居した。

十日も立つて、宗谷からの端書に、「僕も今は家の者にすら無用扱ひにされてゐる。しかしまだ死の自由は與へられず、生かして置いて身體を働かせようと、両親の思案最中なり」とあつた。

断片語

△芭蕉はさすがに傑れた詩人である。西行よりは遙かに詩人的天分に富んでゐる。しかし、私自身は詩作に巧みな芭蕉よりも詩作に拙い西行の氣持に共鳴を感じてゐる。自然に同化し、世俗から隠遁しようとしたところは、二理相似てゐるやうであるが、非常に違つたところもあるのだ。

△西行の和歌に於ける、宗祇の連歌に於ける、雪舟の繪に於ける、利休が茶に於ける、其貫道するものは一なり。しかも風雅に於ける、造化に従ひて四時を友とす。見るところ花に有らずと云ふことなし。思ふ所月に有らずと云ふことなし。思ひ花に有らざる時は夷狄に齊し、心花に有らざる時は鳥獸に類ひす。夷狄を出で鳥類を離れて、造化に従ひ、造化に歸れとなり」と、芭蕉はその「卯辰紀行」に於て云つてゐる。彼れの心境はかうであつたのだらう。花に徹し月に徹してゐたのである。少くも徹しようとし、また徹したつもりであつた。西行も、彼れが生きてゐた時代

の歌人の常套を脱しないて、月と花とを謳歌し、「願はくば花の下にて春死なむ」とか、「佛にはさくらの花をたてまつれ、わがのちの世を人とぶらば」とか歌つてゐたが、彼の心には、「風雅に従ひ造化に従ひ四時を友としただけでは安んぜられない、懷疑の霧が燃えてゐた。芭蕉の如き風流の樂天家ではなかつたのだ。

△「無常」を題として作歌しても、西行には、實朝や定家とは違つた深みをもつてゐた。云ひ廻しの巧みだけではない、實感が出てゐる。「まぼろしの夢をうつつに見る人は、目もあはさでやよをあかすらむ」の如き、技巧によつてつくられた歌ではない。天真素朴の萬葉歌人などとは心境がまるで違つてゐる。風雅を主とした後世の歌人の歌ひ得られるものでもない。「おどろかむと思ふ心のあらばやは、長きねぶりの夢も覺むべく」など、彼れは、屢々驚かんとことを望んでゐる。國木田獨歩が、「人生の不思議に驚かん」としたことが思出される。

(一) 文藝評論の「断片語より」

入江のほとり

長兄の榮一が奈良から出した繪葉書は三人の弟と二人の妹の手から手へ渡つた。が、勝代の外には誰も興を寄せて見る者はなかつた。

「何處へ行つても枯野で寂しい。二三日大阪で遊んで、十日ごろに歸省するつもりだ」と筆でぞんざいに書いてある文字を鐵縁の近眼鏡を掛けた勝代は、目を凝らして、判じ讀みしながら、
「十日と云へば明後日だ。良さんはもう一日二日延して、榮さんに會うてから學校へ行くとええのに」

「會つたつて何にもならんさ」良吉は卒氣なく云つて、「今時分は奈良も寒くつて駄目だらうな。わしが行つた時は暑くつて弱つたが、今度は花盛りに一度大和巡りをしたいな。初瀬から多武の峰へ廻つて、それから山越しで吉野へ出て、高野山へも登つて見たいよ。足の丈夫な間は歩けるだけ方々歩いとかなきや損だ」

「勝は何處も見物などしたうない。東京へ行つても寄宿舎の内にぢつとしてゐて、休日にも外へは出まいと思つるとの」勝代はわざと哀れを籠めた聲音でかう云つて、先きから一言も口を利かないで、炬燵に頬杖突いてゐる辰男に向つて、

「辰さんは今年の暑中休暇にでも遠方へ旅行して來なさいな。家の者は男は皆な東京や大阪や、名所見物をしとるし、温泉へも行つたりしとるのに、辰さんばかりは些とも旅行しとらんぢやから、氣の毒に思はれる。自分で東京へ行つて見たいとも思はんのかな」
「行けりや行つてもいゝけど……辰男は低い錆びた聲で不明瞭な返事をして、口端を舐めずつた。

「わしが東京に居る間に來りやよかつたのに。下宿屋に泊つて電車で見物すりや幾らも金は入らないんだから」
「勝と辰さんは電車を見たことがないのぢやから、兄弟中で一番時代遅れの田舎者だ。勝は岡山まで汽車に乗つてさへ頭痛がするのにな、東京

まで何百里も乗つたら卒倒するかも知れんから、心配でならんがな。その代り東京へ行つたら、三年でも四年でも家へは戻らんつもりだ」
「わしの春休みの間に行くやうにすりや、連れてつてやらあ。さうしたら歸りに大和巡りも出来るし丁度都合がいゝんだよ」

「いや、勝は一人で行かう。それくらゐの甲斐性がなければ、自分の目的を遂げられせんもの」

「口でこそ元氣のいゝことを云つてゐても、途中で腹が痛んだり、汽車に酔つたりしたらどうするんだい。自分の村でさへ出歩けない者が、方角も分らない東京へ行つてマゴゴすると思ふと心細くなるだらう。東京のいゝ家では、つい近所へでも若い女一人外へ出しやしないよ。榮さんが歸つて來たらよく聞いて見るといい」

「死んだつて關はん覺悟をしとるんだもの……」

勝代は負けぬ氣でさう云つて口を噤んだが、ふと不安の思ひが萌して顔が曇つて來た。良吉も話を外して小さい弟を絞しなどした。

そこへ晩餐の報知が階下から聞えたので、皆なドヤ／＼と下りて行つたが、勝代は一人後へ

残つて、二三度母の呼立てる聲を聞いてから、やう／＼炬燵を離れた。机の上の繪葉書帖に兄の繪葉書を挿んだ。そして、目を擧げて、夕月の寒さうに冴えてゐる空を仰ぎながら、兩戸を鎖して階下へ下りた。吊ランプを取圍んで、老幼取まぜて十人もの家族が騒々しく食事をしてゐた。勝代は空いた席へ割込んで、獨り生冷たい者返しに柔かい菜浸しを添へて、不味い思ひをして箸を執つた。

外の者の膳には酢味噌の飯鮓や海鼠などが付けられてゐて、大きな飯櫃の山が見る／＼崩されてゐた。

隣村まで来てゐる電燈が、いよ／＼月末にはこの村へも引かれることに極つたといふ噂が誰かの口から出て、一村の使用數や石油との經費の相違などが話の種になつてゐた。電燈を見た事のない子供達は、いろ／＼に想像しては喜んでゐた。良吉はメートルとかスキツチとかタングステンとか洋語を提出して電燈の講釋を出した。

「僕は東京の下宿にゐた時には、五燭の球を外して、二十五燭のを使つてたよ。さうすると晝のやうに明るかつた。此方でもさうするといふ。一つで家中明るくならあ。そして長い紐で

八方へ引張るさ」
「そんなことが出来るんかい。電燈も村へ來りや丸で歸る譯にや行くまいから、まあ義理に一つだけは付けることにしようが、畢竟無用の事ぢや」と、老父は云つた。
「しかし、皆な電燈にすると、手數が掛らんし、火事の危険も少うなつてよう御座いますぜ」と次男の才次はさう云つて、少くも二つは引かなきゃなるまいと言張つた。そして、博覽會見物に行つた際に見た東京のイルミネーションの美しさを語つた。良吉もそれに相槌打つた。

「夜も晝のやうだ」
平凡で簡單なこの言葉ほど、都會を知らぬ者の心に都會の美しい光景を活々と描かす言葉はなかつた。

が、辰男はこんな話に些しも心を唆られないで、例の通り黙々としてゐたが、只竊かにイルミネーションといふ洋語の綴りや譯語を考へ込んで、自分のテーブルに寄つて、頻りに英和辭書の頁をめくつた。かの字を索り當てるまでには餘程の時間を費した。

「あ、これかと」獨言を云つて、捜し當てた英字の綴りを記憶に深く刻んだ。次手にスキツチ

とかタングステンとかいふ文字を捜したが、これはつひに見付からなかつた。
廣い机の上には、小學校の教師用の教科書が二三冊あつて、その他には「英語世界」や英文の世界歴史や、英文典など、英語研究の書籍が亂雑に置かれてゐる。洋紙のノートブックも手許に備へられてゐる。彼れは夕方學校から歸ると、夜の更けるまで、滅多に机の側を離れないで、英語の獨學に耽るか、考へ事に沈んで、四年五年の月日を送つて來た。手足が冷えると二階か階下かの炬燵の空いた座を見付けて、そつと温まりに行くが、嘗て家族に向つて話を仕掛けたことがなかつた。直ぐ下の弟の良吉とは、一時隣國の山間の小學校で一緒に教鞭を執つたことがあつたので、多少打解けた話もしてゐたのだつたが、それさへ年を經ると共に、隔たりが増して、この冬の休暇には親身な話は只一度もしないで過した。

でも、良吉が傍で洗濯物や乾魚を小さい行李に收めて明日の出立の用意をしかけると、辰男も書物を描いて屢々その方を顧みた。
七八年前の冬休みに、兔を一匹需めて、弟と交互に擔いで、勤先から歸省したことが、ふと彼れの心に浮んだ。

と彼れの心に浮んだ。

階下では、老父母も才次夫婦も子供達も、彼方此方の部屋に早くから眠りに就いて、階下段の下の行燈が、深い闇の中に微かな光を放つてゐた。二階では良吉と勝代とが炬燵に當つて、一しきり東京話を聞いたり訊かれたりしてゐたが、やがて別々の部屋に別れて寢支度をした。

「良吉さんには當分會へんかも知れんな。來年高等學校を卒業したら、成るべくなら東京の大學に入れるやうな方法を取りなさいよ」と、勝代は兄の寢床を延べながら云つた。そして、自分には寒さに傷まぬやうにと、懷爐を腹に當てて眠つた。

弟と妹の安らかな寢息を耳に留めながら、辰男はまだ椅子に腰を掛けて、雑誌に出てゐる和文英譯の宿題をいろいろに工夫してゐた。

アルハベットの讀方から、満足に教師によつて手ほどきされたのではないので、全くの獨稽古を積んで來たのだから、發音も意味の取り方も自己流で世間には通用しさうでない。二年間東京の英語學校で正則に仕上げて來た良吉に屢々「田舎で語學を勉強したつて骨折損だ、それ

より早く正教員の試験を受けた方がいい、ゼー」と忠告されて、父や兄からもそれを最も賢い方法として説勧められたが、彼れは馬の耳に風で聞流して、否か應かの返事をさへしなかつた。で、家の者は彼れの心を量りかねて、涼み臺や炬燵の側での茶呑み話の折々、眞面目の問題として持出されたことは二度や三度ではなかつた。

「最初ヴァキオリンを習つて音楽家になりたいと云つたのを聞いてやらないんだから、それであんな風になつたのぢやないかと思ふ」と、ある時父が思當つたやうに云つた。

「そればかりぢやない。鼻がまだ直り切らんでせう。一寸見ると拗ねて居るやうぢやが、五年も六年も拗ね通されるものぢやない。身體に故障があるからでさあ」と、才次は云つた。

「あれぢや商人にもなれんし、百姓にもなれまいし、まあ弱でも吸れるくらゐの田地を分けてやるつもりで、抛つて置かか」

とどのつまり、かう解決をつけて、最早彼れの身の上を誰も問題にはしなくなつた。見馴れた日には、彼れの行爲もさして不思議には映らなくなつた。

十一時が鳴ると、辰男は椅子を離れて押入れから夜具を取出した。そして、便所へ行つた歸り

に、階下の炬燵の残り火を掻き立て、半身をすり込ませて、氣儘に温まつた。自ら睡氣の差すまで、かうして過してゐる二三十分間が、彼れには一日中の最も楽しい時間であつた。今日新に習ひ覺えた英語を口の中で繰返してゐたが、ふと弟の明日の出立が思出されて、自分が眠つてゐる間に掛けられては残念な氣がしたので、例よりも早目に炬燵を出た。

闕で仕切られてゐるだけで、嘗て襖の立てられたことのない自分の居間で、短い敷蒲團に足を縮めて横になつて目を閉ぢた。何時もならば、目を閉ぢると直ぐに睡眠に落ちるのだが、今夜は慣例を破つて、まだ睡氣の催さぬ前に炬燵を離れたためか、頭が冴えて眠付が悪かつた。

何處かの障子を破つてゐる猫の爪音が煩さく耳に付いた。辰男は「シツ／＼」と云ひながら疊をバタ／＼と叩いたが、やがてランプを點けて音のする方へ行つて見ると、猫は最早障子の破れ目から縁側へ飛び下りて啼聲を立ててゐた。雨戸を少し開けて猫を屋根の方へ追出しながら、辰男は久振りに自分の村の夜景色を眺めた。十数町を隔てた小學校へ往來する外には、春にも秋にも殆ど一歩も門を出たことがないのみ

か、家の周囲にどんな騒ぎがしてゐようと、減多に窓の外へ顔出したことがなかつたので、平生雨戸一枚隔てた外の景色とは馴染が薄いのだつた。

夕月が既に落ちて、幾百もの松明が入江の一方に繪のやうに光つてゐる。耳を澄ますと小波の音が胸かに聞えたが、空も海も死んだやうに鎮まつてゐる。宮を圍んだ老松は陰氣な影を映してゐる。彼れは他郷から歸省した者のやうに、今夜は少年時代の自分の姿を闇の中の彼方此方に見詰めた。……もつと快活で元氣のよかつた昔の事が未生前の時代のやうに心に浮んだ。

冬でも藁の笠を被つて濱へ出て、餌を拾つて、埠頭場に立つたり幸神湯の岩から岩を傳つたりして、一人ぼつちでよく釣魚をしてゐた。釣れども釣れなくても、兄弟や近所の友達と遊ぶよりは面白かつた。潮が満ちて湯が隠れると衣服を胸までまくし揚げて、陸へ上るので、衣服は何時も潮臭かつた。あの時分は川尻に蘆が生えてゐた。湯からは淺蛸や蜆や蛤がよく獲れて、綺麗な模様をした貝殻も多かつた。が、今は入江の魚が減つて、岩のあたりで釣魚をしたつて、雑魚一匹針にかゝつて來ないらしい。山や海の

景色もあの時分は今よりも餘程美しかつたやうに思はれる。向ひの小島へ落ちる夕日は極樂の光のやうに空を染めてゐた。漁夫の身體付からして昔は嚴のやうだつたり枯木のやうだつたりして面白かつた。

お宮の松には鼻が棲んでゐたのぢやがと、その不氣味な鳴聲を思出しながら、暗い梢を見上げてゐると、その木蔭から一羽の鳥が羽叩きして空を横切つてゐるやうな氣がした。

辰男は雨戸を閉めて寢間へ戻つてからも何となく物哀れな氣持がした。側の壁に懸けて置きながら日頃忘れ果ててゐたヴァキオリンに目がついて、久振りで弾いて見たくなつた。樂器を包んだ黄いろい袋は夜目にも目立つほど汚れてゐた。

山間の寂しい小學校にゐた間、傳給の餘剰を積んで購つて、獨稽古で勝手な音を出して、夜毎にこれを弄んでゐたことが、涙ぐまるやうな追憶となつて、乾いた彼れの心を潤はした。

「明日の晩には是非弾いて見よう。春高樓を弾いて見よう……彼れは新しい英字の變則な發音よりも、昔馴染のヴァキオリンの變則な音色に、一層強く自分の魂が打込まれさうに思

はれた。

三

辰男の明方の夢には、蕨の萌える學校裏の山が現はれて、其處には可愛らしい山家乙女が眞白な手を露出して草を刈りなどしてゐた。……誰かに呼立てられたやうな氣がして目を開けたが、左右の室には誰もゐなかつた。良吉は最早出立したのか知らんと、急いで階下へ下りると、弟は竹の手のついた煙草盆を膝に載せてゐる父親の前に不恰好なお辭儀をして、これから出掛けようとするところだつた。皆なが上り框に突立つて見送つてゐた。

辰男はそつと皆なの後に寄つて、黙つて弟の出で行くのを見てゐたが、直ぐに二階へ引返して、弟を乗せた俵が濱邊を過ぎるのを見下した。俵の音の消えるまで窓際を離れなかつた。

「良さんも行つてしまつた」何時の間にか勝代が傍に來てゐた。「これで勝が出て行かうものなら、辰さんは二階に一人法師で淋しうなるぞな」

「……」辰男は黙つて茫然してゐた。「早う嫁さんを娶りなさいな。小串に丁度よさ

さうなのがあつて、東屋の爺さんが話を持つて来たから、も一度よく問糺して、成るべくならあれにでも極めたたいとお父さんが云うて居つた。少々氣に入らんとするところがあつても我慢して、その人を嫁さんに貰うたらえうにな。傍の者が皆な相應だと思つたら、辰さんも強ひて否とは云はんでせう。勝代は母親の命令で、何氣ない風で兄の腹の中を索つて見た。

「……そんなことはお前が訊かいてもえう」辰男は鬱陶しい聲でさう云つて、自分の居間から齒磨粉と手拭を持つて来て、靜かに階下へ降りて井戸端へ出た。大きな酒樽にとつさり大根が漬けられてあつて、大嫌ひな糖味噌の臭ひが鼻を襲つて逆吐きさうになつた。

勝代は、何であら、變人なのであらう。家中で私だけが同情してやつてるのぢやないか」と忌々しく感じた。が、しかし、後で直ぐに心を和けて、自分がかうして一緒にゐるのも今暫らくの間だから、出来るだけ大切にして上げて悪く思はれぬやうにしたいと思ひ返した。……外の兄弟は皆な好きな學問をしてゐるのに、辰さんばかりは一生こんな汚い村の先生をして暮すんだもの、可哀さうだ。お父さんが不公平だと、兄の身の上を不仕合せな人として憫んだ。

そして、紙箒を持つて兄の机の上の埃を拂ひながら、書物の間に挿入である洋紙を覗いて、拙い手跡で根氣よく英字を書留めてゐるのに、感心もし、冷笑を浮べもした。その中には、同窓の誰にも劣らなかつた英語自慢の勝代にも解き得ない文句が多かつた。

「Nonsense」といふ言葉には圈點を附けて、ノンセンスと假名をも振つて大事さうに記してゐる。

「貴女の云ふことはノンセンスよなどと、朋輩の間で言合つたことを勝代は思出して、獨笑ひをした。そして、辰さんはこの英語の意味を理解して居るのか知らん」と訊きたかつた。

と、そこへ、辰男は梅干で茶漬の朝食を済まして、齒を吸ひく／＼上つて来たので、勝代は押入から洋服を取出してやつて、一晩まで勝にこのテーブルを貸してお呉れな。腰を掛けて勉強したら、お腹がよう減つて氣持がよくなるかも知れんから」

「……」辰男は自分の机や椅子を他人に——たとひ妹であつても——使はれるのが厭であつたが、他人に向つて——たとひ妹であつても——否と斷言することは出来なかつた、無論快い承諾を與へる氣にもなれないのだが……

「使つてもよからう！ 本はちゃんこのまゝにして置くがな」

「フーン」と辰男は微かな返事をした。カラアもネクタイも附けない洋服の上に短いトンビを着て、辨當を提げて裏口から家を出て、狭い車道を通つて學校へ向つた。

子供達も揺つて出て行くと、廣々とした家の中は大風の跡のやうに靜かになつた。母や兄嫁は立つたり坐つたり、何となしに家事に忙しかつたが、勝代はざつと二階の掃除をして、時問外れの朝食を一人で食べると、下女に吩咐けて、二階の炬燵に火を入れさせて閉籠つた。良吉の歸つてゐる間入學試験の準備を怠つてゐたので、最早小説など讀耽つてはゐられなかつた。上京までの日数を數へると心が惶しかつた。……若し落第をしようものなら、一年前に入學してゐる朋輩に對しても家の者や村の者に對しても、おめ／＼顔は合はされれない、とても生きてゐられれないと、神經を昂らせながら、英語讀本を披いた。

が、辭典を片手に精一杯研究してゐながら、心は動もせずと書物から離れて、外の思ひに疲れた。深夜も白晝のやうな東京で、落第した自分がモルヒネか何かの毒藥を飲んで自殺する悲

しい有様を空に描いたり、西洋の婦人と自在に會話を取かはしてゐる得意な有様に胸を轟かせたりして從らに時を過した。運動不足のために、柔かい食物も消化が悪くて、勉強に取掛ると、腹の重苦しいのが一層氣になつた。

辰さんのやうに一心不乱に勉強するつもりで、炬燵を離れて兄のテーブルに向つたが、裾の方が寒くて、手の先も冷えて、とても長い辛抱は出来なかつた。で、再び炬燵の側へ戻つて、額を櫓の縁に押當てて、取留めない空想に耽り出した。好きな蜜柑を母親が籠に入れて持つて来て呉れると、胃に悪いと知りつゝ手をつけ二つ三つ甘い汁を吸つた。

辰男は越つた時刻に學校から歸つて、テーブルの位置も書物の配置も亂されてゐないのに安心した。衣服を着替へて椅子に腰を掛けると、昨夕ヴァキオンの音を懸しがつたことを思出して、壁の方へ目を向けたが、感興は何時の間にか消えてゐて、そんな物を手に執るのさへ懶かつた。矢張英語修業に心が惹かれた。

夕日は障子の破れ目から、英文典の上に細い光を投げてゐる。下女はランプに油を注いで、部屋々々へ持廻つてゐる。

四

十日には旨い魚を買濟めて待設けてゐたのに、榮一は歸つて来なかつた。「もう四五日遊んで歸る」と大阪の市街を寫した繪葉書を寄越した。

誰よりも勝代が一番長兄の歸省を待ちかねて、母親に向つて頻りに噂をしてゐた。「榮一さんが春まで家に居つて呉れると、勝も東京へ隨いて行けるのぢやけれどな、戻つたと思ふと、直ぐにまた行つてしまふんでせう。東京で暮らすよりや田舎に住んで居る方が仕合せだと、よく手紙に書いて来るけれど、自分だつて、一月も田舎にはぢつとして居られんのだもの。…：學問した者は、こんな下等な人間はつかり住んで居る村へ戻つて来たつて話相手はないし、見るもの聞くものが嫌になつて仕様が面白い。勝には榮さんの心持がよう分つとるがな。…：勝も今の間にせつせとお姉さんと祖母さんのお墓へ詣つて置かうと思つとるけど、途中で人に顔を見られるのが氣味が悪いから、どうしても出て行かれん。勝は外を通つて人の聲を聞いても時々氣疎いことがありますぞな。ようあんな下卑たことを大きな聲で喋舌つてげら〜笑

つて居られると愛想が盡きてしまふ。こんな人間ばかりのゐる村で一生を暮らすとすりや糞になりたいたいと勝は思ふがな」

無口な母親は、娘の言葉に軽く雷同するだけだつたが、才次が傍で聞いてゐるものなら黙つて妹に話を續けさせて置かなかつた。兄弟中では稍常識に富んだ穩かな彼れは、決して烈しい口は利かないが、小間雜れた妹の言語態度が女學生めいてゐるのが氣に觸つて、抑搔ふか冷かすかしなければ蟲が収まらなかつた。

ある夜も勝代が、上京心得と云つたやうな事を書いてある東京の友達の手紙を母に讀んで聞かせて、母子が炬燵に差向ひで話込んでゐるところへ、筒袖を着た才次が、兩手を細い兵兒帯に突込んだまゝ、のそ〜傍へやつて来た。

「お前の友達は何んなペンで手紙を書くんかい」と、四角な桃色の封筒を手に取つた。

「昔風の候づくめの手紙なら巻紙に筆で書くのがよう似合うけれど、言文一致にや西洋紙にペンを使う方がえゝ。第一一枚の紙にも仰山に字が書けて、お父さんの口癖の經濟的にもなるんぢやもの」勝代は皮肉をまぜて答へた。

「まだ友達同士英語で手紙のやり取りは出来ん

かい」才次は差出人の名前を見て封筒を下へ置いて、

「この女も東京言葉を勉強しに、高い資本を費うて東京の學校へ入つとるのかい」

「そないな悪口は勝等には何ともないがな。此方に居る者でも、手紙にはお互ひに東京言葉を分らんとるんぢやもの」

「……東京の女子も變挺な言葉を使ふぜ。一寸道を訊いても、べら〜と云うて何やら譯が分らん」

「東京の人は一體口が早いんぢやらうか」勝代はふと眞面目に尋ねた。そして、卑しい田舎訛を朋輩に嗤はれはしないかと氣遣つた。

「口が早いばかりぢやない、何か知らん忙しさうでゴタ〜した處ぢや。若い間はあんな町で好きなことをして暮らすのもよからうが、歳を取つたら居れる處ぢやない。田地まで賣つて大阪や神戸へ行つた者が、よく見い、大抵は失敗つてヒョコ〜戻つて来るぢやないか。儲けて他所の錢を持つて戻る者は十人に一人もありやせん。大抵はこの貧乏村の錢を持出して都會へ捨てて行くんぢやから、村はますます貧乏になるばかりぢや。近い話が寺の坊主からして、わざ〜損をしに神戸へ投機をやりに行くとい

ふ有様だもの」

「來月の祖母さんの十三回忌までには、お住持さんは戻つて来るのぢやらうか」と母親が口を出した。

「法事よりも村に葬式があつたらどうするつもりでせう。坊主は寺の物を曾飛ばして他所へ行つてもよからうが、さう荒して出られちゃ、後ではこの寺へ來て呉れ手がないから檀家が迷惑ぢや」

「耶穌教で葬式をすると、却つて輕便で聖霊でえゝがな。勝はお經も嫌ひだし黒住のお祓ひも嫌ひぢや」

才次は宗旨などどうでもいゝので、妹が友達の耶穌信者が女學校で死んだ時の儀式の様子を話すのを難解につげずに聞いてゐたが、やがて、先き云はうとしたことに話を戻して、

「一家の者も東京なり神戸なり、出て行く以上は、その土地々々に一生落着くことにして、生活が六ヶ敷うなつて生家へ轉がり込まんやうにきつぱり極りをつけとかにやならんと思ふ。都會住ひをした者に田舎を手頼りにせられちゃ、此方で質素な生活をしとる者は迷惑するし、第一割に合はん話ぢやから、兄弟だからまさかな時にや世話になりやえ〜といふ輩見て居ら

れちや共倒れぢや」

「それは利己主義ぢやがな……」

「どうせ皆なが利己主義ぢやから、初めからさう極めとくに限るんぢや。辰男だけはこの村で別家さすにしても、此處とは少し離れて家を建ててやるとえ〜。直ぐ側に親類が並んでると、よけりやよし、悪けりや惡しで、嫉んだりけなしたりし合つて煩さいものぢや」

「昔は兄弟は近い處に居るのがえ〜と云うて、高松の伯父さんなどは直ぐ裏の地續きに、自分の家と間取りから柱の數まで同じい家を弟に建ててやつたのぢやが、今時はさうは行かんぢやらう」と、母親は反對もしなかつた。

「兄弟同士嫉むことまで考へとかいでもえゝがな。家の兄弟にはそんな下等な人間はありやすまいに」

勝代は細い眉の間に皺を寄せて、「辰さんはあないな風なのに、誰も構うてやらにや可哀さうぢやがな。勝は貧乏しても何處で暮らしてつても、辰さんの力になつて上げにやならん」と、昂奮した調子で云つた。

「他人のことよりや、勝は自分の身の間違ひのないやうに考へとれ。女子が愚圖々々して歳を取つて、英語を喋舌つて學校の先生になつたつ

て、何が面白いことがあらうぞい」才次は、眼鏡を掛けた妹の平たい顔を憐憫な思ひをして見入った。

「才さんに學費を出して貰やあせす：」勝代は兄が動もすると、自分の楽しい理想を破らうとするのが口惜しくて、かう言放つて、顔を見られぬやうに炬燵の上に俯伏した。

才次は歯い顔をして口を噤んだ。

「女子で月給取りになるのも、容易なことぢやあるまい」と、母親は感じのない聲で獨言のやうに云つた。

皆なが暫らく黙つてゐるところへ、辰男は階子段を軋ませて、のつそり下りて来て炬燵の空いた處へ足を入れた。

「辰さんはテーブルの下へ火鉢を置きなさいな。辰さん一人火の氣のない處に居つちや割に合はんぞな」勝代は今氣づいたやうに云つた。

「ランプを點けつ放しにしといちゃ危いぜ」才次は二階から差して来る燈火を見上げて云つた。

五

勝代は腹がチク／＼痛みかけると、懷爐だけ

では心許なくて、熱湯を注込んだ大きな徳利を夜具の中へ入れて眠ることにしてゐたが、ある夜、徳利の效目がなくなつて眞夜中頃に暫らく忘れてゐた筋しい痛みを感じ出した。階下へ下りて母親や兄嬢を驚かすのは氣の毒であるし、それよりも自分の腸胃のまだ癒つてゐないことを家の者に知られて、東京行を引止められるかも知れないのが恐ろしくて、腹を壓へて呻きながら我慢してゐた。が、疼痛は容易に収まらなかつて、呻き聲は自然に高くなつた。

次の室に寝てゐる辰男の耳にも入つた。彼れはふと目を醒まして、それと氣がつきながら、妹の様子を見に行かうともせねば、聲を掛けもしなかつた。寝返りを打つて再び眠りに就かうとした。が、呻吟が次第に耳障りになつて仕様がな。猫を追出すやうにこの睡眠の邪魔物を遠ざける譯には行かない。：：で、彼れはランプを點けて、そつと自分の寢床を、先日まで良士吉のゐた次の室へ持つて行つた。其處では呻吟聲が大分遠くなつた。

「辰さん：」と、勝代は襖を洩れる燈火に目をつけて、術なげな聲を出した。

辰男は返事をしない。右半の寒さに身震ひして、寢床の中へ深繰込んで、燈火を消した。

勝代は再び兄を呼んだが、返事がないので、寢床から匍出して襖を開けて更に呼んだ。「お父さんの机の上にある薬を取つて来て呉れませんか」と頼んだ。薬箱ひで醫者が呉れた薬さへ二度に一度は祕密で棄てたほどののに、今の場合父の常用の消化薬をさへ手頼りにする氣になつた。

確かに兄は起きてゐたのにと訝りながら、勝代は手索りてマチを捜して、ランプを點けて見ると、兄は例の處に寝てゐなかつた。近眼を擲めてやう／＼その寢床を見付けると、腹を壓へながら側へ寄つて耳許で聲を掛けた。誰にも知らさないで、そつと取つて来て呉れと頼んだ。

辰男は物をも云はず、突如に起上つた。そして、裾の短い寝衣のままランプを持つて階下へ下りて行つた。行燈の火は今にも消えさうに揺めいてゐた。彼れは父の部屋や兄の部屋には年に一度足を入れることがあるかないかで、部屋の様子がどうなつてゐるか知らなかつた。

音のせぬやうに襖を開けて入ると、子供の時分から見馴れてゐた赤毛氈を掛けた机が、以前の通りに壁際に据ゑられてあつた。机の上には大きな硯や厚い帳簿や筆立や算盤がごた／＼

と一杯に置かれてあつた。新聞に蔽はれてゐる碧い薬瓶を捜出しながら、彼ははふと大谷三といふ封筒の文字に目を留めた。母が先日問はず語りに云つてゐた縁談の周旋者の名前が大谷だつたので、彼れは封筒を取上げて覗いたが、手紙を引出して讀まうとはしないで、元の處に置いた。そして、柱に掛つた寒暖計を見て、「三十五度か、寒い譯だ」と思ひながら部屋を出た。どの室からも安らかな寢息が洩れてゐて一人も日醒めてゐなかつた。ガランとした家の中には寒い風が流れてゐる。

勝代は待ちかねた薬瓶を兄から渡されると、直ぐに手の平に薬を移して、「このくらゐの分量で利くぢやらうか」と兄に訊いた。

「そんな薬は毒にもならん代り利きやせん」と、辰男はぶる／＼慄へながら、顔を蹙めた。妹の苦しげな様を見下してゐた。

「水を持つて来て呉れなんだのかな」
「……徳利の湯で飲んだらよからう」
勿體振つた兄の言葉を妹は可笑しく感じた。

教へられた通りに、徳利の栓を抜いて口移しに湯を吸つた。太息を吐いて、いくらか安らかな氣持になつて、

「階下では皆な眠つたかな。勝は心細いか

ら、も少し其處で起きつてお呉れな」
さう云はれると、辰男は自分の寢床へ退くとが出来なかつた。

「勝はこないに身體が弱うぢや困るがな。外の兄弟は、丈夫なのに勝一人だけは……」
「……運動せんからぢや」

「この村にや厭らしい人間ばつかり居るから外へ出るのが恐ろしいもの。……辰さんは身體が強いからええなあ。家ぢや姉さんが早う死んだし、勝も長生せんやうに思はれるけれど、女子は婆さんになるまで生きて居らん方が結構仕合せなやうに思はれる。お姉さんは家で皆なに介抱されて死んだのぢやけれど、勝は他所の土地で一人で死ぬのぢや」勝代は疼痛が利ぐのにつれて、こんなことを云つて涙を浮べた。

辰男は幾度も嘔をした。寒さに堪へられなくなるし、妹の愚な言葉に興も起らないので、言葉の切れ目にその側を離れて、自分の寢床へ入つた。夜具の中へ首をすつ込めて足を縮めて、冷えた身體の暖まるので、いゝ氣持になつてゐたが、すると今見た手紙の内容がいろ／＼に想像され出して、自分に女房の出来るのが不思議でならなかつた。……學校の小さい生徒か母か妹かの外には、女と口を利いたことも

なければ、染々女の顔を見たこともないので、思出にも若い女の影ははつきり浮ばない。山間の學校にゐた時分には、土地の若い女に逢ふと、極りの悪い思ひをして顔を外らせてゐたのだつたが、今は平氣でゐて自然に目がつかぬやうになつてゐる。……彼れは自分の縁談から、どんな男にも、女房のあることに思ひ及んで、妙な氣がした。そして、勝代が出て行つた後で、まだ見たこともない女と自分とが、この二階に住ふことを、夢のやうに感じながら、ぐつすり睡眠に陥つた。

翌日學校の往歸りの途中でも、彼れは屢々結婚について珍らしげに考へた。擦違ふ女の姿形を無心に見過せなくて、穢しい田舎女の一人々々が頭の中に浸込んだ。テーブルに向ふには向つたが、今日は英字の解料に早く根氣が疲れて、所在なきに屢々机を離れては障子を開けて外を眺めた。

西風の風いだけ後の入江は鏡のやうで、漁船や肥舟は眠りを促すやうな音を立てた。海向ひの村へ通ふ渡船は、四五人の客を乗せてゐたが、四角な荷物を背負うた草鞋脚絆の商人が駈けて来て飛乗ると、頬被りした船頭は水棹で岸を突いて船を迂らせた。辰男は暫らく船の行

方を見入つてゐたが、乗客の笑ひ話は静かな
空気を傳つて彼れの耳にも入つた。入日の海や
野天の風呂場をも彼れは久振りに見下した。夜
は例よりも長く炬燵に當つて過した。

六

茶一が歸つて来たのは、豫報の日取よりも遅
れ遅れ、最早誰も忘れたやうに、暗にさへ上さ
なくなつた頃であつた。夕餐の膳が片付いて、
皆なが彼方此方へ別れてゐるところへ、俵夫の
提灯を先に、突如に暗い土間へ入つて来た。
散らばつてゐた家の者はまたぞろ／＼出て来て
一とところに集まつた。勝代も物音でそれと知る
と、書物を掲げて二階から下りて来た。

が、辰男一人は椅子から身動きもしなかつた。
二三日前から作り始めた英文に心を打込んでゐ
た。「眠つた海」一冊の行爲などが、自ら選
んだ課題であつた。大谷が間に立つて取做しか
けた談話は、碌に話し進まぬ中に立消えになつ
て、父の口から明ら様に彼れに告げて意向を確
める必要もなく済んだが、彼れは二三日妄想
に悩んだだけで、元の彼れに返つて、テーブル
に釘付のやうになつてゐられた。……
風が吹けば浪が騒ぎ、潮が満ちれば潮が隠れ

る。漁船は年々殖えて魚類は年々減りつゝあ
り。川から泥が流れ出て海は次第に淺くなる。
幾百年の後はこの小さな海は干乾びて、魚の
棲家には草が生えるであらう。……こんな自
作の文章を、辭書を練つては、一々英字で埋め
て行つた。

以前二三英語雜誌へ宿題を投書したこと
があつたが、一度も掲載されなかつたので、今
は全くそんな望みを絶つて、只自作の英文は
絹絲で綴じた洋紙の帳簿に綺麗に書留めて置
くに止めてゐる。自分ながら初めの方の比べ
ると、文章は次第に巧みになつてゐるやうな
氣がする。然語なども折々使はれるやうにな
つた。

階下が賑つてゐるので、炬燵に當りに行くの
を遠慮してゐたが、末の妹が息をせか／＼吐
きながら上つて来て、「茶さんのお土産」と云つ
て、栗饅頭を二つ机の上に置いて行つた。辰男
はインキに汚れた骨太い指で抓んで大口に食べ
た。そして、冷くなつてゐる手を内懐に入れ
て温めながら暫ら息休めをした。
妹と母とは、階下から夜具を運んで、次の室
へ兄の寢床をのべた。と、間もなく茶一が上つ
て来たが、辰男の方を一寸振返つたばかりで、

次の室へ入つて襖を締めた。直ぐには寢ない
で、手紙を書いたり雜誌を讀んだり、良吉が残
して行つた書物を手に取つたりしてゐた。矢鱈
に吸つてゐる煙草の煙は、襖の隙間から洩出
て、辰男の顔のあたりにも漂つた。

階下が寢鎮まつてから暫ら立つて、茶一は
部屋に漲つた煙を外へ出して、燈火も消して寢
床に就いた。平生眠付の悪いのが癖なのに、堅
い寢床が身體に馴染まなくなつてます／＼寢づらか
つた。

「辰はまだ寢ないのか。燈火が邪魔になつてい
けないな」
四年目で耳に觸れた兄の聲は、相變らず尖つ

てゐた。辰男はその聲を聞くと同時に、ペンを
筆筒に収めてインキ壺に蓋をした。ランプをも
吹消した。

翌日は日曜なので、辰男は目醒めても容易に
起上らないで、寢床の中で書物を讀んでゐた。
お土産の栗饅頭を一つ母が枕許に置いて行つ
て呉れた。風もないし、階下に差した朝日は春
のやうに麗かだつた。
茶一は早く起きて海岸を散歩して来たが、朝
餐後に一時間ばかり讀書すると、また外へ出よ
うとして階下の方へ行きかけたが、ふと振返

つて二辰。山へ登つて見んか」と誘つた。そして、二三歩辰男の居間へ踏込んで、テーブルの上に目を据ゑた。

辰男は立上りざま初めて兄の顔を熟視した。四年前よりも父の顔に著しく似通つてゐた。兄が身體を屈めて、英文文を二行見てゐる間に、辰男は帽子を被りトンビを落して直立してゐた。

一人はステッキを持ち草履を穿き、一人は日和下駄を穿いて、藝藝を逆り墓地を抜けて、小松の繁つてゐる後の山へ登つた。息休めもしないで一氣に登つたので、二人の額からは汗がぼた／＼落ちた。頂上近い處にある小祠まで来て、その側の石に腰を卸した。小祠は田舎の郵便箱のやうな形をしてゐる。扉は壊れて中には枯松葉が散つてゐるだけで、神體はなかつた。其處からは曲りくねつた海を越し山を越して、四國の屋島や五ノ山が微かに見えるのだが、今日は光が廻つて海の向うは模糊してゐた。

草履を穿いてゐる兄の方は却つて足が疲れ息切れがしてゐるが、冷々とした山上の風に汗を乾かして爽やかな氣持になると、今までの沈黙を破つて、弟に向つていろ／＼の話を仕掛けた。彼方此方に見える島の名を訊いたり、近くの山

の裾の村々の有様を訊いたりしたが、はつきりした答へは得られなかつた。

辰男は全で他郷を見渡してゐるやうで方角も取れなかつた。萬國史で見た西洋の天子の冠のやうな形をした小さい島が入江から眞近い處にあるのに今初めて氣がついた。入江に入りて来る漁船は皆その側を通つてゐるのに、彼は嘗て其處迄も行つたことがなかつた。

「あれが鶴島だ。樹がよく茂つてゐるから、あの周囲にはよく魚が寄つてると云ふぢやないかと、却つて兄に教へられたが、さう聞けば島の名前は子供の時から聞かれてゐるのだつた。

「しかし鶴よりも王冠によく似てゐる」と思つて、冠島といふ課題で英文を作らうと思ひつた。目の下の墓地も、海を渡つてゐる鳥の群も、辰男には皆英文の課題としてのみ目に觸れ心に映つた。飛んでゐる五六羽の鳥は鳶だか雁だか彼れの知識では識別けられなかつたが「ブラックボード」と名づけただけで、彼は満足した。

「辰は英語を勉強してどうするつもりなのだ。目的があるのかい」冬枯の山々を見渡してゐた榮一はふと弟を顧みて訊いた。ブラックボードの後を目送しながら、「飛ぶ

に相當する動詞を案じてゐた辰男は、どんよりした目を瞬きさせた。直ぐには返事が出来なかつた。

「中學教師の檢定試験でも受けるつもりなのか。英語は面白いのかい」と、兄は聲みかけで訊いた。

「面白くないこともない……辰男はやがて曖昧な返事をしたが、自分自身でも面白いとも面白くないとも感じたことはないのだつた。

「獨學で何年やつたつて檢定試験なんか受けられないやしないぜ。外の學問とは違つて語學は多少教師について稽古しなければ、役に立たないね」

「……」辰男は黙つて目を伏せた。

「それよりやそれだけの熱心で小學教員の試験課目を勉強して、早く正教員の資格を取つた方がいいやぢやないか。三十近い年齢でそれつばかりの月給ぢや仕方ないね」

「……」足許で柵の朽葉の風に飄つてゐるのが辰男の日についてゐた。いやに怪しい氣持になつた。

「今お前の書いた英文を一寸見たが、全で無茶苦茶で些とも意味が通つてゐないよ。あれぢやいろんな字を並べてるのに過ぎないね。三年も

五年も一生懸命で頭を使つて、あんなことをやつてるのは愚の極だよ。發音の方は尙更間違ひだらけだらう。獨案内の假名なんか當てにしてゐちや駄目だぜ。」

「……」
「娛樂にやるのなら何でもいゝ譯だが、それにしても、和歌とか發句とか田舎にゐてもやれて、下手なら下手なりに人に見せられるやうなものをやつた方が面白からうぢやないか。他人には全で分らない英文を作つたつて何にもならんと思ふが、お前はあれが他人に通用すると思つてるのかい。」

さう云つた榮一の語勢は鋭かつた。弟の愚を憐むよりも罵り嘲るやうな調子であつた。
「……」辰男は黒ずんだ唇を堅く閉ぢてゐたが、目には涙が浮んだ。無論他人に教へるつもりで讀んでゐるのではないし、他人に見せるために作つてゐるのではないし、正格でないことは常に承知してゐるが、全然無價値だこの兄に極められると、つくづく情なかつた。
「さあ、歸らうか」と云つて、榮一は裾の埃を拂つて、同じ道を下つた。墓地近くなつて、のろのろ下りて来る弟を符合せて、妹の墓と祖母の墓とへ詣つた。目が窪んで息の臭かつた妹の

死際の醜い姿は、辰男の記憶にはまぎ／＼と刻まれてゐて、妹という直ぐ思出したが、今墓場に立つてゐると、×子の墓と彫つた新しい石碑に對して追慕の感じは起らないで、石の下の中（下）で蛆に喰はれてゐる死骸の醜さが胸に浮んだ。

僧侶が投機に凝り出してからは、寺は兩戸を鎖して空屋のやうに汚れて、墓場の道は草が生え木の葉の散るにまかせてゐた。兄弟は朽葉を踏んで墓地を下つた。

「辰は家で許したら、學校へ入つて眞剣に英語の稽古をしようといふ氣があるのかい」榮一は前とは異つて穩かに話しかけた。

が、辰男は兄の言葉に甘えた快い返事はしよとはしなかつた。「別段學校へ入りたいといふことはありません」と、干乾びた切口上で答へた。

「せめて、もう四年も早く決心して、強硬に親爺に説付けたなら、東京に英語研究に行けんことはなかつたらうのに。勝代さへ行くやうになつたのでも。……しかし、お前は今からぢやあまり遅過ぎるね」
家へ歸ると、辰男は外に自分の置く處がないやうにテーブルの前に腰を掛けたが、作りかけ

の文章に目を向けるのが聊な氣がした。
午過ぎになると、所在なくて、文典など讀みだしたが、今までのやうに傍ら人無きが如き態度ではゐられなくて、兄の足音が聞えると書物を脇へ片寄せた。

七

階下で兩親が才次などが一家の雜務に取掛つてゐる間に、二階では三人が各自の部屋に籠つて、それ／＼に讀んだり書いたりしてゐた。

一人も他の部屋へ入つて無駄口を利くこともあまりなかつたが、階下から才次などが上つて来て勉強を亂すことは尙更稀だつた。良吉のゐた時分のやうな賑やかな笑ひ聲や打解けた雜談は二階では跡を絶つてゐて、榮一の歸省は勝代が豫期したやうな明るみを家の中へ齎さなかつた。

榮一は自分を憚つてゐる辰男に向つて強ひて話を仕掛ける氣はなかつたが、でも折々辰男に對しては神經を凝してゐた。ランプの下で難解な英字に青春の根氣を疲らせてゐる弟の青黒い顔の箇内の微動をも、極越しに見透してゐるやうに感ずることもあつた。しかし自分に對しみを寄せたがつてゐる勝代をば、極めて淡く見

過してゐた。妹の聞きたがつてゐる東京の女
學校や女學生の氣風について話をしてやるでも
なく、妹の東京行について一口も明らかに可
否の意見を述べなかつた。二十未滿の女が小説
で知つてゐる東京に憧れて、東京の何と云
ふ英語學校へ入つて、學問で身を立せて、一生
獨身で通すといふやうな乳臭い言葉を眞面目に
聞いて、兎や角と無用の陳腐な意見を述べる氣
にはなれないのだつた。そして、竊かに、「女
の子にまで高等な學問をさせるやうになつたと
すると、家の身代にも大分餘裕が出来たな」と思
つた。

大勢炬燵を圍んで居る時、

「わしが初めて東京から歸つて來た年に大病に
罹つて座敷で寝ると、勝が蚊帳の側へ俯つて
來ちや悪戯をしたり小便を垂れたりして煩さく
つて困つたよ。それが一人で東京へ行くやうに
なつたのだから、わしも知らない間に歳を取つ
たのだね」と、榮一は幾年か隔てて會ふたびに不
思議なほど異つてゐる妹の顔を見入つた。

「榮さんよりや才さんの方が老けて見えるが
な。才さんの頭にや白髪が仰山生えてる。も
う若白髪ぢやないなあ」勝代がさう云つて、兄
達の顔を見比べると、外の者も知らず／＼相互

の顔や頭に目を留め出した。よく見ると、離
れてゐた間の年月は誰の顔にも刻まれてゐた。
發育盛りの妹ばかり違つてゐるのではなかつ
た。

「何と云つても四十近くなると、人間はそもそ
ろ衰へ出すんだね」榮一は弟に向つて云つ
て、「おれ達が一生にやりたいと思ふ好きなこ
とをやつて見るのは今の中だけ、金を活かして
使ふのも今の中だけの氣がするよ」

「その事はわしの方が一層本氣で考へてると、
才次は話に乗つて來て、「少し資本が續けば、
この土地でも随分利益の上る事業があるんぢや
がないから些とも實行が出来ん」と云つて、老父
が何時まで立つても、財産の一部も彼等に手渡
ししない不平を徴見させた。

「おれは事業をやらうとは思はないが、今の中
に少くも氣儘な旅行をして見たいな、十分の路
用を持つて、二三年西洋へ行つて來られ、ばそ
れに越したことはないが、支那とか朝鮮とかあ
るひは日本の内地だけでも端から端までゆつ
つ旅行して見たいよ。も少し歳が老けると、足
が弱つたり不精になつたりして長旅が厭になる
し、旅行の樂みといふものが減つて來るからね。

内地なら旅行費なんか幾らもかゝりやしない。
千圓もあれば半年ぐらゐる方々で氣樂に遊んでら
れらあ」

旅行費に千圓とは、養澤の極のやうに勝代は
思つて、「東京で暮らすとすれば、見る物聞く物
が何でも揃うとつて、旅行なぞせいでもよから
うにな。東京でさへ年中居ると單調になるぢや
らうか。勝は去年の春から家の門の闕から外へ
出たことは數へるほどしかないぢやもの」

「わしは旅行しようとも學問しようとも思はん
が、自分の計畫を一度は成功しても失敗しても
實地にやつて見にや寢覺めが悪い。この歳まで
たつた一度も自分量見でやつたことはないん
ぢやから」と、才次は云つた。

「何が面白いことがあるのかい」

「それは一寸今云ふ譯に行かんのぢやが、自分
の得にもならんのに漁夫等の世話を焼いてやつ
ても話らんからなあ」

「しかし、この村の漁場をよくして村を繁昌さ
せるのは面白い事業ぢやないか。食ふに困らな
いで、さういふ公共的の仕事をやつてるのは愉
快ぢやないかなあ」

「いや他人のことだと思ふと都合ひがない。漁
夫の方から云うても、組長には相當な人間を他

所からでも頼んで来てそれで食へるだけの月給をやつて働かせた方が得なのぢや。月給を取らにや食へん人間なら、自然一生懸命に働いて、他村との懸合ひでも漁場の見廻りでも、行届くだらうし、漁夫等の望みなら無理なことでもやつて呉れるだらうが、名譽職の組長にやそんな眞似は出来ん。無理な注文をおいそれと聞いて飛廻る氣にやねんからなあ。

「さうかも知れんね」榮一は軽く弟に同意した。

「紀州の沖や土佐の沖ぢや、一網に何萬と鯛が入つたの鯛が捕れたのと云ふけれどこの邊の内海ぢや魚の種が年々盡きるばかりだから、次第に村同士で漁場の鬨着が激しうなるんぢや。漁夫もこの頃は將來の望みのないことに多少氣がついて来て、思切つて百姓になる者が出来て来たが、百姓だと米の飯に魚を添へて食ふ體に行かんし、こんな村ぢや海でも陸でもえゝこととはない」

かう云つた才次の言葉には力が籠つてゐた。「しかし、此處いらの奴は皆な身體は強いし、随分過激な労働には堪へるんだから、智慧と資本のある者が先立つて使つてやれば役に立つんだが……」

「そりや何處でもさうだ」

榮一は深入りして弟の計畫の底を叩かうとはしなかつたが、才次は平生胸の中にもだくしてゐる不満な思ひを兄にこそ洩らし榮がするやうに感じて、何かと問はず語りをした。可成りの財産のある家から良吉を養子に欲しいと申込んで来てゐるのだから、早くその話を極めて家の負擔を減らした方がいゝ、僅かな財産の分配をされるよりは當人のためにもいゝと云つたり、若しも夫婦養子の口があれば、才次自身大抵な家なら我慢して行つてやるつもりだ、こんな愚圖々々して蔑を取つてゐるよりはましだからと云つたりした。弟や妹が自分の知らない英語ばかりこそ、勉強してゐるのを彼れはさも目障りでならぬと云つたやうな口調で話した。

暫らく黙つて聞いてゐた榮一は、「ただけど、辰男が英語を樂みにして、一生通せるのなら、好きなやうにさせたいからいゝぢやないか。傍の者へ迷惑を掛けないのだから」と辯護するやうに云つた。

「差當つて迷惑は掛けんが、しかし、家族の一入として毎月同じ飯櫃の飯を食うとすると、自然に傍の者の氣を悪うすることがあるんぢや。自

癡でも狂人でもないんぢやから、外の兄弟並に扱はにやならんし、尙更始末に困るが、どうも不思議な人間ぢや」

「おれの子供の時分の氣持に似てやしないかと思ふ。おれも家にちつとしてゐたらあゝなつたかも知れないよ」

榮一は微笑しながら云つて、弟の話を外した。

勝代は疾くに炬燵を離れて、小さい弟を連れて座敷の縁側へ出て日向ぼっこをしてゐた。落葉や鶏の糞で汚れた小庭へ下りて久振りや築山へも登つたが、昔の庭下駄は歩きつけない足にも重くつて、直きに息苦しくなつた。

八

榮一は毎日の日課として後の山へ上つて沖を見渡した。瀬戸通ひの汽船が鳥々の彼方にはつきり見えて、春めいた麗かな日光の讃岐の山々に煙つてゐることもあれば、西風が吹かれて、海には漁船の影もなくつて、北國のやうな暗澹たる色を現はしてゐることも偶にはあつた。そんな風の強い日には、大きな家の中がきながら野原のやうで、いくら襖や障戸を閉切つても、何處からか風が吹込んで、寒さを防ぐ術もなかつた。

「これでは冬籠りも出来ないね。早く東京へ歸ることにしようか」と、榮一は故郷の様子を見ただけで満足して、再び都の小さい借家へ歸らうとした。不漁つゞきで、海鼠や飯鮎などの名産もあまり口へ入らないし、落着いて勉強も出来ないうし、殊に家族の中交つてゐると、急に歳を取つたやうな氣持になるのが厭だつた。

「明日の中に立たう」と、榮一は急に決めたが、竊かにそれを喜んだのは、辰男だつた。明日の晩から、何時までランブを點けてゐようとも、最早苦情を云ふ者はなくなるのである。彼れの英語の發音を試験したり、彼れの英文について無慈悲な批評を下したりしたがる素振を見せて驚かす者がなくなるのだ。……辰男はこの頃英字に親しめなくなつて、動もすると心が外へ散つて、寂しい詰らない氣持がし出したのを、兄の所爲と思つてゐた。

「この書物を讀んでしまつたからお前にやらう、荷物は成るべく軽くしときたいから」と、出立の前の夜、榮一は弟のテーブルの上に英書を二冊置いて行つた。

辰男は表題と著者の名前とを見詰めたが、讀方をも意味をも判じかねた。そして知らない文

字に攻められるのが恐ろしさに、内部をば開けて見ないで、手馴れてゐる自分の書物で蔽うて机の片隅へ押遣つた。

今夜一晚と極つたため、階下の恒礎には皆なが集まつた。珍らしく親爺も加はつて何かしら話が賑つてゐたが、辰男一人は相變らず、二階にぢつとしてゐる。書きかけの英文にも取留めのない疑ひのみ頻りに起つて容易に書續けられなかつたので、懷手をしてぼんやり、風に唸いてゐる障子を見てゐた。すると心が地ん、で、われ知らず机に頭を垂れて假寐をし出した。

やがて、夢の中の物音に驚いてふと目を醒ますと、ランブは机の向うへ押落されて、火は障子に燃移つてゐた。……辰男は氣拔けがしたやうな顔をして突立ちながら、聲も立てず、直ぐには手出しもしなかつた。……外では風がザワ／＼音を立ててゐる。疊は石油に浸つて青い焰を吐いてゐる。……この家は焼けると思ふと共に、灰燼になつた屋敷跡が彼れの心に浮んだ。

やがて、彼れは兩手に力を入れて、何年も動かしたことの無いテーブルを書物の載つてゐるまゝ、次の室へ移した。そして、座蒲團を丸

めて、火を叩消さうとしてゐるところへ、階子段に氣立たまし足音がした。「火事だ……」と、榮一の慌てた叫聲が階下にゐる人々の耳を劈いた。外を通つてゐた者をも驚かした。

大勢がどや／＼駈寄つて、口々に荒い言葉で指圖し合つて、燃付いてゐる障子を屋根から外へ抛出したり、バケツや手桶で水囊の水を掬つて來たりした。父の目も血走つた。妹も息を切らして素足で井戸端へ駈けた。皆なが騒出すと、辰男は後退りして薄暗い處に突立つてゐた。石油が燃盡きると共に火の手は見る／＼衰へたが、彼れのテーブルも書物もつゞ濡れになつてしまつた。轉け落ちたノートは半ば灰になつてひらく／＼してゐた。

先きから辰男の不注意を罵つてゐた父や兄は、火が消えて心が落着いてから、一様に彼れの方へ目を向けて問詰つたが、石のやうに身動きもしないで、堅く口を閉ぢてゐるのに呆れて、次第に相手にしなくなつた。

疊を上げて汚れ物を片付けて、念のために二階の部屋々々を見廻つて、階下へ下りたが、誰しも皆睡氣を醒ましてゐて、子供まで中々寢床へは入らなかつた。

見舞に來た隣近所の者が歸つて、表の戸を
卸した後、草臥休めの茶を沸して駄菓子を食べ
などして、互ひに無事を祝して夜を更した。

「電氣にしとけばこんな危険はないのだがね」と、榮一が云ふと、父は、

「電氣は不經濟なばかりぢやない、柱や鴨居へ穴を明けて家を臺なしにするから考へ物ぢや。今夜のやうなことがあるとすると保険はつけといた方がえい、かも知れんが」

「辰の奴、何か碌でもないことを爲出かしやせんかと思つた。これからは夜迎くまでランプを點けて置かせんやうにしませう。勝も他所へ行つて辰一人が二階に居ることになると用心で仕様がなから」と、才次は眉根を擧めた。

「しかし、こんなことは滅多にあるまいが、兎に角今年中には嫁を取らせて、別家させて、自分の始末は自分でやらせることにしたら、些とは普通になるだらう」

「さあ」才次は父の言葉は空々しく受けて、「一軒の家の災難はどんなことで湧いて來んとも限らん。今夜にしても、もう十分近う氣がついたら取返しがつかなんだのぢや」

皆なこの言葉が杜切れたところへ、時計が一時を打つた。寒さうに風が音を立ててゐる。父は

手爐を點けて部屋々々を見廻つて自分の寢室へ入つた。

勝代は燵の隅で眠るのが厭さに、何時までも炬燵の側にて假睡をしようとした。兄二人が最後まで話に耽つてゐるが、其處へ辰男は忍足で下りて來て、便所へ行くが早いか直ぐに階子段を上つた。

「まだ起きとるんか」と、才次は聲を掛けた。氣にかゝつたので、手燭を點けて見に行つたが、辰男は燵の隅つこの疊に夜着を被つて寢てゐた。

「榮さんの室に一緒に寢たらいいぢやないか」と柔しく説いたが、

「わしは此處でえい」と云つて、辰男は枕を直して目を閉ぢた。

闇の中に目を閉ぢてゐても、辰男は絶えず周囲の汚れた燵跡の頭に描き鼻で嗅いでゐた。ぐちやぐちになつてゐる書物や帳面に日に乾きねばならぬと思つたり、何と何とが焼失せたか檢べて見なければならぬと思つたりしたが、このまゝ塵屑にしてしまひたい氣もした。……

机上に安んじてゐた彼れの堅固な心が長兄の歸省前後から破れかけてゐたのに、今夜の災難は最後に下された槌のやうだつた。

すると、學校から歸つた後の毎夜々々の長い時間を何もしないで持てあましてゐる自分の姿が見窄らしく目先にちらついた。……以前ふとヴァキオリンが厭になつた頃には、語學に興味が起つて、心がその方へ吸寄せられたが、今度新しい道は開かれさうでなかつた。

陰鬱な氣懶い氣持が夜が更けるにつれて刻々に骨の髓まで喰込んだ。そして、いつそ今夜の火事が擴がつて、机も書物も家も、自分自身も焰の中に包まれて、燃えてしまへばよかつたやうに思はれ出した。

家から家へ火が移つて、村一面に焰の海となつて、見覚えのあるあの村の者共が顔や手足を燒焦がして泣叫んでゐる光景を彼れは夢みた。

九

翌朝辰男は火事話を避けるために、起きると直ぐに家を出た。始業時間までには餘程の暇があつたので、所在なきに、先日兄に隨つて上つた山の方へ足を向けた。墓地を抜けると、一步一步眼界が擴がつて、冴えた朝日は滑かな海を明るく照らしてゐたが、昨夕の不快な記憶が彼れの頭から消えなかつた。先日の方へ、永の眠めが英文の新たな材料として目に映らず、永の

年月自分を押籠めた牢屋の壁か何かのやうに侘しく見えた。……この先五年十年この土地にどうして生きてゐられるか生きる術が見つからなかつた。

白い雲の漂つてゐる海の方へ出て、何處ともなく旅から旅を續けたらと、ふと家出を考へたが、それも一瞬間の妄念に止まつて、旅費なしには一日か二日も他郷へ出掛ける無謀な勇氣を彼れは持つてゐなかつた。「見ず知らずの人は一椀の麥飯も食はしては呉れない。只では汽車にも汽船にも乗せて呉れはしない」といふことを彼れは今更しみるゝと考へたが、それにつけても、今まで無用な書物を買込んで月々の俸給を浪費したことが後悔された。で、これまでの俸給の總てを貯蓄してゐたらば、幾らくになつてゐたのにと、諸算をしながら、山を下つて學校へ行つた。

授業を終へて歸つて見ると、兄は昨夕の驟ぎのために、出立を一日延してゐた。火事の跡始末がついてゐて、障子が新に張替へられ、テーブルも久振りで綺麗に拭はれてあつたが、濡れた書物は西日の差した縁側へ亂雑に抛り出されてあつた。乾いて皺をつくつてゐた。

辰男はそれ等を本箱に収めて、親切一つ置か

れてゐないテーブルの前に腰を掛けた。「Fire, "Confignation", "Noncon", たゞいろ／＼の英語が頭腦の中に黒く綴られながら現はれた。

新に買った二分心のランブを小さい妹が持つて来たが、辰男は日が暮れても燈火を點げなかつた。記憶に刻まれてゐる英語を闇の中で果もなく綴つては崩し、綴しては綴りしてゐた。兄が既に整へてゐる旅の荷物を亂すのが厭きに、終日何もしないで退屈屈ましに、勝代は英語を讀ませたり、不審な字句を解いてやつたりしてゐるのが、袖越しに彼れの耳へも入つた。「辰は其處にゐるのかい、ランブも點けないで」榮一は襪を細目に開けて暗がりを透かし見して、「此處へ來い、此處へ」と、無理強ひに空いた座へ招いた。

妹の机には青い机掛けが掛つて、その上には木彫の奈良人形と、亡妹の寫眞を挿んだ寫眞立があつた。毛絲のランブ敷に据ゑられたランプの明るい光は、差向ひで炬燵に當つてゐる兄弟の手に持つた英書を照らしてゐた。辰男は燈光の邪魔にならぬやうな處に坐つた。

一わしも學校にゐた時分には、會話に身を入れて、西洋人の夜學校へも通つたりして、一時は

大抵の事は自由に話が出来たものだ。しかし今は丸で駄目だね。一寸した挨拶さへよく考へなくちや英語で云へなくなつたよ。日本にゐりや外國人と話をする機會はないし、會話の研究こそ全くの無駄骨だつた」

榮一は妹の「實用會話集」に出てゐる日常の用語を久振りで口ずさんだが、勝代は兄の唇の微動を見入つた。自分も二三年したらあんな風に巧みに採れるだらうかと夙々とした氣持になつて、

「……田舎者よりや東京生れの人の方が英語の發音が早く上手になるんせう」

「何故? 同じことぢやないか」

「……田舎者は日本語の發音でも下等で頑固ぢやから、それが癖になつてしまつて英語でもすら／＼と音が出し難いんぢやないかと思ふがな」

「そんな馬鹿なことがあるものか。……勝も東京へ行つて三月もすると、東京言葉を使つて田舎者を馬鹿にするやうになるだらうな」榮一はさう云つてから、辰男に向つて、「お前は今から學問したつて追付かんから、農業か何か實業をやつて見い、そんな頑丈な身體をしてゐるし、辛抱強いのに、机の前で羨けてゐるのは詰ら

ないぢやないか。先日山から見た鳥を借りて桃を栽ゑても、後の泥山を拓いても何か出来さうぢやないか。兄弟の眞似をしないで、お前一人は泥まみれになつて本當の田舎者になつちまふさ」

「そんなことは出来やせんなあ、辰さんと勝代は代つて答へた。「去年二百圓も出して、青年會の人が松を山へ栽ゑたんぢやけど、直きに枯れて了うたのぢやもの、桃もつく處へは何處へでも栽ゑてるし、この邊の土地は衰微するとも今よりよなりやせん」と勝は思ふがな。この先の鳥は漁夫が巡査に見付けられん様に賭博を打ちに行く處になつとるんぢやもの」

「へえ。あれが漁夫の賭博場かい。さう思つて見ると面白いね」榮一は一塵のいゝ思付のつもりで云つたことを、妹のために容易く打消された照れ隠しにかう云つて、

「しかし、自分で鋤鉋を持つて働くつもりなら何かやれんことはないさ」

「それはやれないことはありません」と、辰男は意外にはつきりした返事をした。

「ぢや、田地を分けて貰つて、百姓になり切つちやどうだい」

「さう云ふ氣にもなるんけど……百姓をして

米や麥をつくつても面白うないから」

「面白くなくつても、田圃に麥や、米が出来なきや困るぢやないか。……西洋の草花でも造りや綺麗で面白いかも知れないが」

「花なら自然に生えてるのが好きぢや。山に居つた時分に植物の標本を些とは集めたことがありました」

「植物の採集もこの邊にや珍らしいものはあるまいが、作州の山には高山植物があるんだらう」

「へえ。いろ／＼珍らしいものがありました。二三百は異つたのを集めて蔭干にして取つといつたのぢやけど、彼方の學校を止めた時に皆な焼いて來ました」

「そりや惜いね。學校へ寄附しとけば植物學の教授に役に立つのだらう」

「名が分らんから教へる時には役に立ちません。私にだけにしか誰にも分らんせう」辰男は雜草でも木の葉でも手あたり次第に採集して、出鱈目な名前を付けてゐたのだつた。

「それで満足出来るかね。世間で極めた名前を知らずに集めてばかりゐても樂みになるのかい」

「へえ。あの時分は樂みにしとつたんでせう」

今夜は何故だか珍らしくテキパキと話すのを聞いてゐると、榮一は弟の辰男を、永年家族が極めてゐるやうな低能兒とも變人とも思はれない氣がした。が、顔を見ると、光のない鈍い眼、小鼻の廣い平たい鼻、硬さうな黒い皮膚がどうしても愚ものらしく彼れを見させた。他人から戀愛を寄せられさうな潤みや光は、身體の何處にも持つてゐない。

「何か望みや不平があるのなら明ら様に云つたらいいぢやないか。おれが立つ前に聞いていたら、多少お前の爲になる様な事があるかも知れないぜ」と、榮一は優しく訊いて弟の心の底を索らうとしたが、

「そんなことは他人に云うたつて仕方がありません」と、辰男は冷かに答へた。押返して訊いても執念く口を噤んで、他所目には意地悪く見えるやうな表情を口端に漂はせた。

「仕方がないつて、お前なんかつまりは兄弟の世話にならにや生きてられない時が来るんだよ。兩親の達者な間に方法を立てて貰つたか

なきや駄目ぢやないか、無駄な事ばかり氣儘に勉強してゐても、企ふ道は些ともついでゐないのだから」

兄の聲が尖つて來ると、辰男は目を伏せて心

を外へそらせた。

「勝は學校を出てお金を取れるやうになつたら、辰さんに上げるつもりぢや、勝は利己主義は嫌ひぢやから」勝代は氣取つた口を利いた。

これで話を止めて、榮一は横になつて、挽春の響きを聞きながらうつら／＼假睡の夢に落ちた。勝代は温か過ぎる炬燵で逆上せて頭痛がしてゐたが、それでも座を立たうとはしないで、

「口が粘つて氣持が悪いから蜜柑を食べたいがな。辰さんは奢つて呉れんかな」とねだつた。

「お前が自分で買ひに行きや着つてやらあ」

「勝は物を買ひになぞ行つたことではないのに。

およしでも使にやりやえゝがな」

「自分で行かんのならわしは錢を出さんぜ」辰男は頑なに云つた。

「辰さんは時々意地の悪いことを云ふんぢやな」

勝代は階下へ行つて母にねだつて貰つて来た蜜柑の一つを兄の前に置いたが、辰男は手に取らなかつた。

十

榮一は翌朝俣で村を離れると、のび／＼した氣持になつた。二里も隔つた停車場までの途す

がら俣夫は頻りに村の話をして聞かせたが、それによると、隣縣の者が近い中に乗合馬車をこの近所の國道へ通さうと企ててゐるさうである。

「さうしたらお前達は困るだらう」と訊くと、「馬車などは永續きはしますまい。何でもその金主は、性の悪いことをして監獄へ入つとつて、この頃出て来たばかりぢやさうですから」と俣夫は答へて、「若旦那は澤山金を儲けてお歸んなさつたんぢやと昔なが云うとりますがな」

俣夫の話が自分のことや家族のことに關係し出すと、榮一は相手にならなかつた。そして、汽車に乗ると勝代の顔も辰男の顔も心に薄らいで、只入江のほとりの古めかしい大きな家の二階にあんな弟妹の住んでゐるのが、憎みも愛もなく顧みられた。

「辰はおれが違つた〇〇の英文小説を讀むか知らん」と、ふと、思つたが、それも瞬く間に消えてしまつた。

辰男は二三日テールの前に懐手をして腰を掛けたまゝ夜を過した。妹の貞をめぐる音を聞きながら……

讀書餘録

△アメリカの歌謡は、伊佛獨などの歐洲物に比べると、卑俗であるやうに云はれてゐる。アメリカ文學が平俗であることは、日本の文壇でも定評のやうになつてゐる。アメリカの宗教は俗悪だといふことも、内村鑑三氏などによつて屢々説かれてゐる。しかし、私は餘程前から、將來アメリカから新しい偉大な文學が現出するのではないかと空想してゐる。米國には歐洲のやうに、古くさい傳統的の垢がついてゐない。物質文明科學文明の盛んな國には傑れた藝術が起らないといふ理窟は、必ずしも全面を現はしてゐないのではあるまいか。

△晩秋のこの頃、私は、一菊の香や、奈良には古き佛達」と詠じた古詩人の心境を追想するとともに、若くして死んだ異國の詩人シェリーの「西風に寄せた」詩の激情にも心が動されるのである。「枯れつ葉を吹拂ふやうに死んだ思想を追拂へ……冬來りなば春遠からじ……」(『文藝評論』の「讀書餘録」より)

牛部屋の臭ひ

稼業がら潮の干満に關係の深い漁夫どもは、季節の變化や年中行事の何事にも陰曆を標準とした。伊勢の太神宮のお札と一緒に頒れる國定の曆には除かれようと、村役場などいくら陽曆の採用を奨励しようとも、隣近所の村々が次第に新の年月を迎へるやうにならうとも、この小さい漁夫村の一區劃だけは、迷はないう普通通りに歳を送り歳を迎へてゐる。海で生計を立てる者に取つては、陰曆に依つて區切りをつけた方が自然の道に適つてゐた。

今年もその舊の正月が來た。大晦日までには、不躰は淋しい濱邊にも小さい船や大きな船やが景氣よく並んだ。××丸と染出したり翠で書いたりした旗を立てたのは、多くは苦海を乗り越えて遠方から歸つて來たのである。陸の家はどんなに穢しくても、舟といふ舟は皆綺麗に掃除されて、飾藁を垂れ蜜柑や巾着などを供へられてゐる。潮が満ちると漣が舟端に戯れ、

潮が退くと牡蠣殻が模様やうにところ／＼色取つてゐる湯の柔かい泥が舟底に吸付いた。海が浅いのに、小川からは絶えず汚い水を吐出してゐるため、干潮時の海際には一種の臭氣が漂つた。村の者が無頓着に流す洗濯水の臭ひ、腐敗した食物の臭ひ、魚の臭ひや藻の臭ひや、糞尿の臭ひさへその中に交つてゐるのである。

潮の差退きの激しい海邊のやうに柔かい白沙はこの灣内の何處にも見られないが、その代りに袋の中のやうな此處の入江の魚は内海の中では殊に旨味に富んでゐる。濁つた泥海は魚の餌を豊かにするし、静かな水は魚の疲勞を少くした。そして、沖で勞れた魚などは鱗を休めるために、樹木の繁つた島蔭に集まつて來た。

海鼠や飯蛸の漁の盛りは年内に一先づ終つて、此處暫らくは松明の光が闇の海を照らさなくなつた。網曳の懸聲も舟唄も聞えなくなつた。が、海がひつそりとして來る代りに、陸は俄かに騒しくなつた。餅搗のために村中の井戸水が潤れて、全村の飲料水となつてゐる山の

藪蔭の「清水」さへ洒れかけた。

元日から毎日隣村の牛肉賣りが入つて來た。漁夫どもは注連飾をした神棚の前で車座になつて、この牛肉を喰つて酒を飲んで唄ひ囃して新玉の春を祝つた。澁紙のやうな顔色をしてゐても狼狽な唄を怒鳴つてゐても、年中潮風で鍛へた彼等の喉から出る唄聲は凜々として周圍に響いた。大鼓にでも合はすとその聲が一層よく調和した。七草まで毎夜濱の集會所で催される旅藝人の浪花節よりも、漁夫自身の無心のざれ唄の方がどれほど、快い音を含んでゐるか知れなかつた。

浪花節は毎夜客止の賑ひで、中日から書席をも企てられた。藝人と名のつくものがこの狭い貧乏村へ只の三日でも足を留めることは年に一二度あるかないかのだから、村の浮氣な娘だの、寡婦だの、あるひは高持までも、白粉を塗り塗りにしてめかし込んで、浪花節語りの宿へ押かけた。夜は集會所の樂屋口に立つて彼等が出て來るのを待受けた。

その中でも取分けて噂に上つたのはお村といふ三十近い女だつた。何時も笑つてゐるやうな顔をしてゐる大柄な女で、これまで三度も四度もこの土地の漁夫や隣村の百姓の家などへ

縁付いたのだが、何時も自分で退出すか先方から追出されるかして、半歳も尻の落着いてゐたことはなかつた。今は誰と極つた一人の亭主は持たないで、母親と二人家内で、蜜柑だの干物だの季節々々の物を駕籠で背負つて、近村を賣廻つてゐる。そして、盆とか祭とかの田舎の休日には、年下の男女の中にあつて淫かれ騒いで、悪遊びには人に遅れを取らなかつた。青葉の頃にこの村へ廻つて来る伊勢神樂の一座や、偶然に流れ込む祭文語りなどといろんな噂を立てられたこともあつた。

「またお村さんが：」と、朋輩の菊代は眉を擧めて貰んだが、この女は正月が来て、沖から若い漁夫どもが歸つて来て、お村のやうに臙脂白粉をつけるところではなかつた。同い歳で幼い時分からの遊び友達で、今も同じやうに背負籠を背負つて物賣をしてゐるのだが、菊代には八十を越してゐる祖母がまだ生きてゐる。母親は兩眼とも潰れてゐる。そして父親とか兄弟とか手頼りになる男切れは身内の中に一人もなくなつて、たつた一人の姉は、菊代が十二三の頃播州室津の飲食店へ身賣りして、惣嫁とかになつて、それきり音信不通になつてゐる。菊代にも二度ばかり確かに夫と名のつけられ

るものが出来たのであつたが、一人は兵役に服してゐる中幾度も服役してつひに死刑に處せられ、後の夫は繁累の多いのを厭つて朝鮮へ出稼ぎに行つたきり、五年六年葉書一本の音信さへしないので、自然に縁は切れてゐる。

で、正月になつても、菊代には心待ちにする舟はなかつた。隣近所共同の一つ春で餅を搗くにも、菊代は人前の恥かしい思ひをしたが、それでも微ばかりの餅は工面して拵へたが、餅の外には正月の支度とて、金のかゝること何一つ出来なかつた。何かの手傳ひに始終出入りしてゐる家主の家の仕舞湯へ入つて、其處の下女と髪結び合ひをして、注連飾は其處の作男に残りの臺で一個み、神棚へ垂れるものだけ造つて貰つた。祖母は何十年面影に變化のない枯木のやうな身體で、他家の飲み水汲みや使歩きをしてゐたのだが、年末に水桶を擔つたまま蹠踏いて、向う脛を擦割いてからは、戸外の便所へ出て行くのをさへ術ながつて、晝も夜も炬燵に臥せて、をり／＼心細いことを云つちや唸つてゐる。壁や塼を手索りに傳つて近まはりへだけ獨りでも出掛けられる母親は、質屋使ひを稼業のやうにして、一錢二錢の使ひ賃を貰つてゐるので、節季には菊代と一緒の餅米

搗きとこの質屋使ひとで盲目相應の役があつて忙しかつたが、一夜明けると用もないので、炬燵の中で眠飽きると、隣近所の女達を相手に、持前の高聲でげら／＼と笑ひ話をして興じてゐる。

一つ春で餅搗きをする仲間内は、便所も共同で、小川の裾の方に貧しい一區劃をつくつてゐるのであるが、菊代の家は先日まで、この村では可成りな大地主の濱屋の牛小屋であつたのを、新しい小屋が上の地面に建てられたので、その跡の不用になつたのを、無家賃同様で借りてゐるのである。小川の縁に堆くなつてゐる芥の臭ひやこの界限の家々から洩れ出るきま／＼の臭氣は、不潔な臭ひに馴れてゐるこの村の者の鼻にさへ、一種異様な刺激を與へたが、菊代の家には、その上に牛部屋らしい臭ひがまだ漂つてゐる。二枚の藁を敷いた板の間に寝起してゐるが、土間は元のまゝで、牛の五體から出た汚い物は日當りや風通しの悪いためか、まだ乾き切らないのである。冬の間はまだしも、梅雨時や暑中には、蠅と蚊と臭い温氣とでとても家の中にぢつとしてはゐられないのである。でも、祖母や母親は寒い冬よりも夏を戀しがつた。腰巻一つで埠頭場で涼んでゐられる夏の

方が、腹の減つて手足に皺が出来て身體の凍える冬よりもどれほど暮しいか知れなかつた。旨い南瓜や瓜が鯨腹食べられるし、旨い水が夏は錢入らずで飲まれた。

「おらに一合だけ神酒を飲ませて呉れ。それでおらも有難い正月が祝はれるんぢやから、祭には強請みやせんから、三ヶ日の中にたんだ一合だけ買つて来て呉れい。」

祖母のおみちは三日の朝向ひの家の老爺の酒臭い息を嗅いでから、矢も楯も溜らないやうな氣になつて、わざと哀れげな聲をして菊代に頼んだ。

「お婆がとう／＼お極りを云ひ出したなあ」

菊代は鼻で笑つて、「その間に新田の酒屋へ蜜柑を持つて行くんぢやから、その時に酒の糟を買つて来て上げらあ」

「阿呆吐かせ。酒の糟でお正月が祝へるか。」

：去年の秋にお上から盃とお金を五十錢頂戴した時に、これも長生したお蔭だから、早速神様に神酒を供へて、そのお餘りをあの盃で頂かうと思つたら、われは何と云うた。もう寒うなるからこのお金でお母の半纏を出しとくことにして、お酒は正月まで辛抱しなさいと云うたぢやないか。おらあよう覺えとるがな」

「お婆も勝手なことはよう覺えとるなあ。おらあ何もかも忘れてしまふから苦がないと先日も云うとつた辭に」

菊代が笑つて相手にもしないので、おみちは泣寝入りに寝入つた。其處へ長刀草履を引摺つて何處かで貰つた飴菓子を舐りながら歸つて来た母親のお夏は、菊代に諷を聞いて、

「そないに飲みたがつとのなら買つて上げたらえゝがの、われは知るまいが、お婆は昔は癪酒の一合ぐらゐり缺かしたことはなかつたものぢや。お初が重たい徳利を抱へてよう買ひに行きよつた。あの時のことを思ふと、お婆に酒の氣のない正月をさすのは不憫ぢやから一舐めでも買つて来て上げい」

お夏は薄々物の黒白の見えてゐた遠い昔を夢のやうに思出した。その時分には、亭主もまだ生きてゐて三度の食事に不自由しなかつたので、婆さんは婆さんで自分の稼いで取つた金は、皆な自分の飲食に費つてゐたのだつた。：：母親に生寫しといはれた姉嬢のお初の日々大きな香の高い姿や、貰ひ乳して育てた菊代の幼姿は、日の開いてゐた時代の懐かしい記念として、

をり／＼お夏の胸に浮んでゐた。今も車籠に當つて、口をもぐ／＼させたがら白眼を天井へ向

けて、過去つた影を捉へてゐると、先きから炬燵の上で誰憚らず鏡にわが影を映して獨りで樂んでゐた菊代は、ふと顔を上げて、

「お母はにや／＼笑つて、何か可笑しいことがあるんかな、口の端に飴の汁を垂りして……」

「お母は泣きも笑ひもしとりやせん、われの目にやさう見えるんか」お夏は例になく突慥食に云つて、手の甲で口端を拭つて、「……お母が今ひよつと戻つて来たたらわれはどないな氣がすんだらう」と出抜けに云つて、聴い耳を戸外の足音に留めた。

「お母にも呆れるがの、突拍子もないことを云ひ出すんだもの。盆なら幽霊になつて精靈棚へでも出て来るかも知れんけれど、お正月にどうしてお母が戻つて来るものか」

「われは何時でもさう云つて、お母の腹の中の樂みを腐らしてしまふ。お母が死んだといふ確かな報知があつたのぢやなし、今の今でもどないえゝ身装をして、お母もお婆も大丈夫で居つたかなというて此處へ入つて来んとも限りやせん。おしも婆さん處の喜左を見い。紀州沖で難船して七年も音沙汰がなかつたから、位牌まで拵へてお線香を上げたらしとつたのに、一昨年

の秋祭にひよつくり戻つて来たぢやないか。八

丈鳥（たけどり）は流れ着いて生命が助かつた上に、その鳥は暮らしえ、土地ぢやというて七年も其處で漁をして氣散じに暮らしとつたさうぢやないか。

それだもの、われ、お姉にしても何處ぞえ、鳥で不自由のない月日を送つとるかも知れやせん。

喜左も他國の者に親切にされても、つい家の事が思出されてぢつとして居れん氣になつたから、皆なに留められるのを逃げるやうにして、夜書通して此方へ戻つたといふから、お姉も何時身内が戀しうなつて戻つて來まいものでもないがの。どんな遠方に居つても、この頃は汽車や蒸汽船があるから、造作もないこつちやがな」

「何ほ便利でも冥途からは汽車も蒸汽も通つたらんからの」
菊代は欠伸まじりで云つて、炬燵の上へ額を當てて目を瞑つた。狭い道一つ隔つて向ひの家からは酔ひどれ聲の浪花節が聞えて來た。牛肉の焼つけく臭ひや酒の匂ひはます／＼烈しく窓から入つて來た。窓には疎い格子が嵌つてゐるだけで障子がないので、夜は舟板の壞れで風を防ぎ、書間は開けつ放しのまゝで明りを取つてゐる。

「菊は居らんのかいと、ふと窓の上の、地主の庭の方から聲がした。

「へえ、居ります」お夏は代つて返事をして、

「何ぞ御用で御座りますか」

「午餐のお菜にするんぢやから、魚を捜して來て呉れんか。何でもえゝから生かして持つとる處があつたら頒けて貰うて來て呉れいな」

「えゝ、承知しました。：：お松が去んどの間は、お事多う御座いませう」

お夏は窓の上の足音が消えてから、言附かつた用向を繰返して、菊代を促したが、菊代は夢現で返事しながら容易に立上らなかつた。平生過度な働きをしてゐたのが生中二三日骨休めをしたために、手足がだるくて、坐つたが最後、身動きもしたくなかつた。それに、初日から二日づけて浪花節を聞いて夜更しをしたので、

今はどやされても起きたくなかつた。
「用事だけして來てから眠りやえゝのにと、母親はやきもきしたが、菊代はわれ知らず快い夢に落ちた。

「どの舟にも今魚なんぞあるものか」と菊代はふと目を開けて、寢言見たいに呆けた口を利いたが、直ぐにまた寢息を洩らし出した。

二三度背を揺つても手應へがないと、お夏はその上を急立てることは出来なくなつて、炬燵の中の屑細い足を掴んで、「お婆〜」と呼立

てた。
「お婆二三寸起きて下んせ。：：大儀ぢやらうが、お前でも濱屋の魚を買ひに往て上げにやなるまいがの」

「おらがかい。：：おらに酒の一合も飲まして呉れりや往てもえゝが、只ちや一足も北氣にやなれん」と、婆さんは片手で支へて身體を少し持上げて子供菜みた口調で云つた。

「そないな無理を云うてうちを困らせるもんぢやない。足が疼うても濱まで往て來て下んせ。神酒は此處うちが飲まして上げらあな」

「ほんまにか。この頃は世間が皆なおらを欺してもならん。今度はお婆も諺をこくと承知せんどぞ」

婆さんは自分で疼い／＼と思過してゐた足を動して、二三度呻いてから起上つた。そして引摺り／＼戸外へ出たが、盲目のお夏と同じやうに杖は手にしなかつた。

頭巾代りに汚い手拭で頭を包んで、縮目も分らぬやうな單衣の上に縮の食出た猿子を着てゐるだけで、足袋さへ穿いてゐなかつた。魚桶を濱屋から持つて來て、心當りの漁夫の家を訊いて歩いたが、彼處此處に見覚えのない若い漁夫どもが五人十人寄り集まつて、飲んだり喰

つたり、面白さうな話をしてみたりした。

「誰かと思うたらおみつ婆さんか。お婆はまだ生きたつたのか」と、遠海へ出稼ぎに行つてゐた漁夫が道で挨拶ひざま、興醒めたやうな顔して婆さんをみつけた。

「へえ。…今年寒は温うておらのやうな老人には何よりぢやがの」

「まあ大事にして養生をなささい」

漁夫は卒氣なく云つて、にこつともせずに行過ぎた。婆さんはその男は誰だつたかと考へ考へ歩いてゐると、菊代の二度目の夫と考へ考へだつた何とか云ふ男らしくも思はれ出した。さうならば訊ねることもあつたのにと殘惜しさうに振返つたが、最早姿も影も見えなかつた。「まだ生きて居らいでか」と、婆さんは口の内で獨言を云つた。

二

正午前には静かだつた空も、季節がら、午饗の煙が家々の煙筒から噴出される時分には、西風が濱の松林に烈しい音を立てて、鏡のやうな入江もうね〜と皺をつくつた。菊代の家では風避けに舟板を窓へ立掛けたので、家の内は眞晝でも薄暗くなつて、籠の煙が何時までも

漂つてゐた。三人は節を入れて温かい雑炊を食べてからまた炬燵の中へ藻繰込んで、話もなく互ひ〜の思ひをほめて、してゐた。

やう〜眠足つた菊代は、昨夕の浪花節の續きを想像してゐた。鳴物などの藝事には子供の折から現を脱かす質で、祭文や阿呆陀羅經でも語り手の後に隨つて聞物れてゐたので、歳を取つてからも村に興行物のあるたびに工面のつ

く限りは減多に缺かしたことはないのだつた。しかし、今度とは二日も溜屋で不用な入場切符を呉れたので、無銭で聞きに行かれたものの、三日目の今夜からはさうは行かなかつた。正月の三ヶ日か済んだら、明日からは服でも問屋

で品物を借りて出賣をしなければ、芋粥も咬れないくらゐなのに、八錢の閑賃で耳の保養などは迂闊に出来なかつた。…二つの燭臺の明りで左右の頬を照らされながら、目を細くして覗

つてゐる寅若の姿が目にもちらつたが、それよりも菊代の心を喰かしてゐたのは、膝と膝との擦れ〜に込合つてゐる場内の賑ひであつた。

若い百姓や若い女どもが薄暗い席に矢鱈に入雜つて、息と息とを交互に通はせながら、語り手の聲に浮かされてゐる有様であつた。…不

斷は相手の得られない菊代も、其處では色めい

た仲間入が出来るやうな氣がした。昨夕は誰と誰とが前後に坐つて足を爪つたり膝頭でどうしたりしてゐたとか、誰と誰とが終ひの一席を聴かないで早く歸つたとか、いろんな噂が翌日の若い同士の口の上つてゐた。そして菊代自身は願つても噂の種になるどころではなかつたが、女房も情人もない若い漁夫と並んでゐると、今にも何事か起りさうで心がどきめきするのだつた。

マツチの空箱に入れて神棚にそつと載せてある自分達の總財産を渡つて行けば、木戸錢が拂へた上に、中入に振葉子の二三本は買喰ひの出来ないことにはないのだが、菊代はさう思つても直ぐにさうすることは出来なかつた。そして人寄せの太鼓がどん〜鳴り出すとそは〜して、や〜もすると手が神棚の方へ伸びて行きさうだつた。

朝から、行方不明の姉嬢の上を樂おし、思續けてゐた母親は、ふと菊代の方へ顔を向けながら、「われは遊びに行きたいのか、遊びに往てもえ〜けれど、お村さんのやうにならんやうにせい。われは一度ならず業障し奴に騙されてど〜えらい目に會うらんぢやから、若い男の居る處へは寄付かんやうにせい。何を云はれても本眞

にしちやならんぜ」

「阿呆云はんすな。お母がまた入らん心配をし出した」

「われが先きから尻をもぞ／＼させて遊びに行きたさうにしようのが、お母にはちやんと分つとるがの。萬が一われが婿にならうといふ者があつても、お母によく相談してからにせい、お母は目は見えいでも男の腹の中はよう分るんぢやから、隠さずに何でも打明けけるのがわ、れが身のためぢや、遠方から戻つて来た漁夫の居る間は若い女子は危いこつちや」

母親は周圍かまはずに聲高にさう云つたが、菊代が取合はないので、元の沈黙に返つて、姉の事をまた思續けた。西風はます／＼吹募つて舟板の隙間からびう／＼吹込んで白髪まじりのお夏の髪を亂した。火の消えかゝつた炬燵の中へ菊代が粉炭を一掴み入れると、ばち／＼火花が散つて、長く突出してゐる婆さんの足の裏へも頻りにとんだ。が、垢や何かで皮膚の硬ばつてゐる婆さんは、火の子の熱さぐらゐには怯えなかつた。そして一杯の酒が自分の目の前で注がれる時を夢まぼろしに見續けてゐた。「菊さん……寒いなあ。どがいしとなんさる？」

戸の外から聲を掛けて行過ぎたものがあつた。菊代は思はず伸上つて返事をしようとしたが、聲の主の急ぎ足には追ひつきさうでなかつたので、返事は喉で留つた。

「およしぢやないか、あの聲は。今朝橋の側で會うたらえ、匂ひをさせとつた。あれが香水と云ふものか知らんが高い錢を出して身體に匂ひをつけたつて、何の得にもならんこつちや。勿體ないのに」

母親がさう云つても菊代は黙つてゐたが、やがてそつと炬燵をすざり出て上り櫃の方へ行つた。「遊びに行くんなら行先をお母に云うといつて行けい」と聲を掛けられると、一直きに返つて来るがの」と答へて、表の戸を開けて横つ面を寒い風に曝した。一足崗を踏いで神棚の金入を顧みだが、そのまゝ戸の外へ出て行つた。小走りに小川の縁へ出て、袂を握合せて首を縮めながら、何處といふ當てもなく爪先で軽く歩いてゐたが、やがて、その足はお村の家の裏口に留つた。よく若い者の足溜りとなつてゐる家なのに、今はひつそりとしてゐた。戸の筋穴から覗くと、籠の火に照らされた母親の顔が先づ目についた。炬燵は何時ものやうに若い男の顔が動いてゐないで、お村が手枕して横になつてゐた。

様子を見定めてから菊代は戸を開けて、「寒くなつたなあ、叔母さん」と懐かしさうに聲を掛けた。

「あ、吃驚した」

火箸を持つたまゝ、思はず立ちかけたお村の母親は、相手の顔を見て安心して、竊へ薪をくべながら、お愛想など云つた。菊代は上り櫃に腰を掛けて、土間の筵に置いてある鹽魚や、板の間の背負籠に入つてゐる蜜柑やネーブルの量の多いのを羨ましげに見廻しながら商賣話を持出した。

「お正月なんぞ早う去んだ方がえゝ。菊さんは何時から商賣に出掛けなさる？」

「うちはもう二三日休んどりたいと思つとるけど、さうしちや居られまいなあ」

菊代は半ば自分に向つて云つた。お村のやうにちやんと用意が出来てゐるのではないし、今夜の間に問屋から品物を借りて置かねばならぬので、急に安閑としてはゐられない氣がし出した。

「せつせと稼ぎなされ。家のお村も三ヶ日が済んだら商賣に出て呉れんと困るがの」母親はさう云つてから聲を潜めて、「今の先きにも音松か茂平が耳の飽えるやうな聲を出して、やち

もない話ばかりして、その擧句にや、本氣だか戯談だか摺合ひをし出したのぢや。うちもこれまでに皆なのすることを大目に見て黙つとつたけれど、今日はあんまりのことで業が煮えてならんから、わい等は人の家を何と思うとると糞さんぐに怒鳴りつけて、擔棒を振廻して追出してやつたところぢやがな」

「叔母さんがそんなに怒るのはよく／＼のことぢやな」

「お前さんの家にはあんなやん、い、い、や者が寄付かんからえ、あの連中の機嫌を害しても後が氣疎いし、したいまゝにさせとくと方圖がないし、うちも困つて居るがな」

「叔母さんは人がえ、から……」

「だから娘がだらしのない好いた眞似をするのだと、妾代は他人事でも商痒く思ひながら、お村の寢様を顧みてゐたが、ぐつすり眠入つてゐるらしかつたお村は、意外にも暗々した顔をしてむく／＼と起上つて、

「お母は餘計なことを云はんすな」と叱つて、「菊さん、まあ上つて當りんさい。面白いことを聞かせて上げるから……」

「……」と笑ひ／＼囁いた。

「よう聞えんから、笑はいでぼつ／＼云うとくれな」

「ぢや一寸待つとくれ」

お村は笑ひを鑑めてから、菊代の福々した耳を掴んで引寄せて、再び囁いた。……それはおよしといふまだ十八九の不器量な女とある男との密會を覗きに行かうではないかといふことだつた。今夜家の者が浪花節を聴きに行つた留守に出會ふ約束をしてゐたのを、立聞きしてすつかり知つてゐるので、初心なおよしの様はさぞ面白からうと、さも面白さうに戯言まじりで話した。

「お前さんは阿呆臭いことばかり云うて」と、菊代は取合はぬ振りをしながら胸をわく／＼させてゐた。炬燵のほとりには今まで遊んでゐた漁夫共が噴荒らした蜜柑の皮や駄菓子の端切れの散らかつてゐるのが、夕暮の薄明りで目についたが、そんな物を見るにつけても、この家は若い者の出入が多いために、餘分な利得のあることを菊代は考へないでゐられなかつた。そして、この朋輩に負けんやうに商賣をしたいと發

作的に氣振つてゐた。

お村は相手が生眞面目になるのも構はずおよしを冷かしたり、浪花節の口眞似をしたりしてゐたが、その間に母親が膳立して、ランプも點けると、炬燵から匍出て、親子着向ひで茶漬を振込んだ。

西風は兩戸に音を立ててゐたが、自分の家に比べると、温かで陽氣で、身が違ひの人の住居のやうなのが菊代は殊更今日は嬉しなかつた。どんな仕事をしたつて、お村などに引けを取るんぢやないのにと、娘の手助けをしてゐる此處の母親と、邪魔をしてゐる自分の母親や祖母とを引比べた。若い者が寄つて来ないのも、盲目やよぼ／＼の婆さんがゐる穢らしい思ひをさせるからだと、何もかも不幸の元を二人に塗りつけるのが、考へ事した最後の行詰りだつた。

「うちも去んでお夕飯を食べようかい」と座を立つた。

「御躰走があると響んで上げるのにな」と母親は憐れみを含んで見上げた。

「今のことは別として、今夜は一緒に遊ぼうではないか。お前さんが出て来いや、此方から誘ひに行くぞな」

お村の押付がましい聲を後に聞きながら、菊

代は裏口から飛出した。三日月は磨き澄ました空に震へてゐた。何處でも月を鏡してゐたが、ところろに賑かな聲はしてゐた。菊代は祖母や母親の傍へ歸りたくはないので、遊ぶ道さへあれば夜遅くまで遊ぶでゐる氣だつたが、それには先づ空腹を癒さなければならなかつた。浪花節を聴くにしても、何かの遊び事をしてゐる人溜りへ出掛けるにしても、一文無しでは仕方なかつた。で、足許の暗い川端を傳つて自分の家へ戻ると、豆ランプが神棚で幽かに光つてゐた。盲目のお夏は、娘の留守の間は自分達老人には不用としてランプは消して置くのだが、お正月にはお燈明として神棚に載せてゐた。

菊代はランプの心を捻上げてから、取下さうとしながら、神棚をよく見ると、出掛けには確かに其處にあつた金入が見つからなかつたので、頻りに捜してゐると、

「金入ならお母が持つとる」と、お夏は訊かれぬ先、林から財布を出した。「今お婆に一台だけ買つて来て上げたのぢや。見い、お婆はいゝ氣持に酔つて寝とらうがな」

「まあ呆れた……」菊代は浮かりすると、踏付けさうな祖母の頭をランプを持つて見下したが、さう思つて見ると、黴くちやの顔にも稍人間

らしい紅味が差してゐた。微かに吐く息にも酒の香が混つてゐた。

「何ほせがまれても酒なんぞ買つてやるといふことがあるものか、うちが明日草履買ふ錢に残しといたのに、裸足で三里も五里もの道を歩いて商賣に出られるか、よう考へて見るがえ、」

菊代は輕くなつた金入を母の手から取るが早いか、恨めしさうに炬燵の上へぶつ付けたが、お夏は氣にも留めないで笑顔をして、「われは戸外から戻ると、何ぞれかぞれ苦情を云つてお母を困らせ居る。草履の穿代へが入りやお母のでも持つて行けいよ。お母は裸足でも構やせん

の。うちはお婆に正月の祝ひ酒を呑ましたのが何よりも悦しうてならんのぢや。これでもう死んでも残り惜しうないちうてお婆は上機嫌で、お飯も食べないで眠つたがの。われ、よう見い、お婆の寝顔も今夜は佛様のやうぢやらうがな」

「……」菊代は返事もしないで膳を引寄せたが、蓋を取るど、意外にも汁掛け飯の山盛りにされた井が入つてゐた。濱屋のお情とは聞かずとも分つてゐた。

「それはわれ一人で食べいよ。お母は雑炊の残りをお腹に一杯食べたから今夜は何にも欲しう

ないがの」

井からの温かい米の飯の香ひや鳥の香が菊代の鼻を抉つた。お夏は娘の箸の運びを快げに耳に留めながら、正月三ヶ日が案じたほどでもなく、穩かに過ぎたことを獨りで喜んで、神棚の金毘羅様のお札を心で拜んでゐた。

「今年こそお初の音信が聞かれますやうに……」菊代の心に魔が差さぬやうにと、明日の徳を祈つた上に、今夜はそれを附加した。

夢中で鳥汁飯を平げた菊代は、箸を擱くと、急に元氣づいて、約束したお村の訪れを待機へて何處へでも浮れ出す氣になつてゐたが、誰か一人聲を掛けて呉れるものもなかつた。で、また今夜も興もなく家内三人炬燵を圍んでごろ寝をした。晝寝を過ぎてたせむか、菊代は浪花節歸りの騒々しい足音に目を醒ましてからは、暫らく眠つたがなかつた。眠れないと、窓の隙間から吹込む風が身に染みて堪へられないので、母親の掛けてゐる蒲團の中へ藻線込んで、頭まで埋めて抱付くやうにした。夫に逃げられてから久しく忘れてゐた人肌を、菊代は今頃臭い母親の身體で思出した。

「……」

「それはわれ一人で食べいよ。お母は雑炊の残りをお腹に一杯食べたから今夜は何にも欲しう

ないがの」

「それはわれ一人で食べいよ。お母は雑炊の残りをお腹に一杯食べたから今夜は何にも欲しう

亂されなかつた。

三

三ヶ日が過ぎ寒が明けてから、厚い氷が張つたり爰が降つたりする日が續いた。菊代は毎日薄暗い間に起きて、商品満載した籠を背負つて、東西の村々へ出掛けて、日暮前にはほゞ賣盡して歸るのだつたが、家に休んでゐた日より却つて屈託がないだけでもよかつた。たまに顔馴染の出来た家へ寄つて、火鉢が焚火で龜んだ手を温めながら世間話をしたり、お茶を貰つて一日歩き通して、日當りのいゝ處で小休みして、川水や井戸水で喉の乾きを留めるのに過ぎなかつた。をりく道連れになるお村などが、餓饉屋や駄菓子屋へ寄つても、自分だけは誘はれないで素通りした。その癖菊代は風付の悪いせいかお世辭のないせいか、お村などよりも安物を持つてゐながら品物の捌けがのりいのだつた。七草が過ぎ飾卸しも過ぎると、處々の村々で初祭などがあつて、不景氣ながらも魚の値がよくて、骨惜みをしたくない漁夫や賣子は春早々可成り豊かな収入があつた。忘れてゐた漁夫も自分の村の恵比須神社の祭を済ますと、纜を解

いて漁場々々へ向つた。

船の出入のあるたびに質屋通ひの用事で忙しい盲目のお夏は、今度もいくらか儲けた。年末の使賃は凡て菊代に渡して借金拂ひなどの役に立てたのであつたが、年が明けて後ののは、半ば自分の懐中にして置くやうにした。村の者が少くも一生に一度は參詣するといふ讃岐の金屋羅へ、お夏もかねて詣りたいと念じてゐたので、五年十年前からその路用に當てるつもりで、零細な貯蓄をしてゐたのだが、何時の間にか貯蓄は一文無しに消えるのが例になつてゐた。でも思出しては一錢二錢と祕密で溜置くのだつた。

昔は此處の濱から屢々金屋羅詣りの船が出た。今は汽車や汽船の便利があるので、わざわざ和船を仕立てて行く者は殆んどなくなつたが、それでも花の咲く季節には、たまには近村の老若男女が團體をつくつて、旅費の廉いのを以て、時日のかゝるもの構はず、のろくくと和船で港々へ寄つて四國渡りをすることもあつた。お夏はその船の出るたびに、御利益のあらたかな象頭山の御社を憧憬した。「菊よ、われも一度金屋羅様へお詣りしとくと運が向いて来るぜ。お母もわれと一緒にら船

へ乗せて貰うてお詣りの出来んこともあるまいと思つとるけいどな」と、旅費の足らぬのを歎息した。

「目の見えんものがそでない遠方へ行かうなんて、お母もなか／＼大望を持つとらんぢやな、うちは何も願を掛けることはないし、金屋羅様へも大師様へもお詣りしようとは思やせんがな」
「さう信心氣がないと、われもこの先えゝことはあるまい。家のお婆を見い。若い時から飲食にばかり身を入れて、神詣りも、佛信心もせなんだから、歳を取つても樂な日は送れんぢやないか。今でもお婆はお宮の前を通つても頭を下げることはあるまいがな」

お夏は今年こそ來年こそと望みをかけながら、いざ船の出る場合になつて、自分に何の準備も出来てゐないのを知ると、落膽して、せめての氣休めに、參詣仲間の知合ひの老人に銅貨一つのお賽銭を託したり、お札や護符を買つて來て貰つたりした。土産に貰つた堅い板箱を有難さうにしゃぶつた。

この正月にも炬燵でうと／＼してゐる間に、またも金屋羅詣りを思ひ詰めて、例の貯蓄を志したので、質屋の使ひが並々ならぬ樂みになつた。菊代の商賣も正月は可成りに儲けがある

ので、さして母親に求むる所はなかつた。が、漁船が出てしまつて濱が淋しくなると、お夏の用事も暇になつた。米摺仕事も糶米所に奪はれて、滅多に依頼者はなくなつた。で、お夏の留守中には、日一日お燵で暮らすことが多かつたが、側で寝てゐる老婆には餘り口は利かなかつた。何年もかうしてゐるので二人の間には話の種が盡きたといふ有様で、たまに話をしても同じ事の繰返しに過ぎなかつた。殊に傷をしてからの老婆はそれを氣病にして、傍の世間話などに耳を留める氣持にはなつてゐなかつた。芋でも夢飯でも與へられたものを食つては、木枕に白髪頭をのせて眠入つて、目が醒めると口の内で譯の分らぬ獨言を云つてゐた。その突拍子もない獨言がたまに耳に入ると、お夏は聲を擧げて笑つた。

ところがある日、老婆はむくくと身體を起して、

「おらは今奇體な夢を見たがの」と、きつぱりした聲音で云つた。

「極樂へでも行つた夢を見たのかな」と、お夏は冷かすやうに云つた。

「おらは極樂や地獄の夢は一本も見たことがないがな、われ。…おらは今菊が目の醒めるやうな綺麗な着物を着て船へ乗つるとる夢を見た。濱は一杯の人だかりぢやつた。われにも菊の綺麗な身装を一目見せたかつたがの」

「呆けたことを云はんすな、…お前が夢に見たのは、菊ぢやない、お初ぢやらうがな。お初が綺麗な身装をして戻つて來ることなら、うち

は夢でなうて起きてる時にでも見るこゝろがあるんぢやもの」

「うんにや、おらは今確かに菊の夢を見たんぢや。何ぼ歳がよつても菊とお初との顔は見違へりやせん」と、老婆は力んで云つて、「われはどう思ふか知らんが、おらはな、菊がお初のやうに惣嫁にでもなつたら、擔歩きするよりやどれほど面白い目が見られるか知れんと思つとるぜ。

永年見たことのないお金が一時に取れて、われやおも好きなこととして氣樂に暮らせらあ。あの女にしても疎でなしの亭主を持つて難儀するよりは何れほどまししか知れやせん。われは菊の機嫌のえ、時にさう云うて見い」

「お前はどの頃もまださう言ふことを考へとるんぢやな、興醒めたこつちや。もうそがいなことは云はんすな。聞きともないから」お夏は腹立しげに云つた。娘がひよんな噂の立てられるのさへ腹うて、休みの日にはその出先を氣遣つてゐるほどなのにと、老婆の根性を憎々しく思つた。

「よしかあの女の身を賣つて、菊の身體と同じ重量の錢が手に入つたつて、代りのない菊に遠方へ行かれたら、うちやお前は どうして生きとれると思つとるのかいな。氣が狂うてもそないなことは云へたものぢやあるまいに」

「…お初のやうに遠方へ行かさいで近所の町で勤め奉公をさせりやえ、ぢやないか、菊がうんといやあ、世間にも祕密でおらが奉公口を捜して來てやるがな」

「阿呆云ひなさんな、お前が襦袢を垂れて町へ行かうもんなら、それこそ食かと思はれらあ。誰が相手になつて呉れるものか。お前の足が長途が踏めるくらゐなら、菊に恥を掻かせに町へ行くなりや、水汲みでも使ひでもして、お前の好きな酒を買うて飲むとえゝのに」

「われはようさう云ふけいど、おらの儲けた錢は取るが早いが菊に渡しとるぢやないか。一文でも隠立てして自分の榮耀をしたことはないが。われこそ菊に祕密で自分の使賃を隠しとるを吐し腐つて」

老婆は久振りにこんな毒口を呟いた。そし

て、自分や孫娘の幸福を、お夏が何時も妨げてゐるやうに一途に思詰めた。菊代が惣嫁にでもなれば、今夢に見たやうな美しい衣服が着られて、第一當人のために仕合せだ。老婆自身も米の飯に魚を添へて鱈腹食べられるし、寝酒の贅も盡せるのだ。：おらは本眞の乞食になつても苦とは思はない。菊代が仕合せになるためなら、襦を持つて物貰ひしたつて自分一人の口過ぎは屹度して見せる。結局その方が氣樂かも知れん。たゞこんな盲人が何時までも生きてゐるために、何かにつけて手足纏ひになつて、菊や自分の心まかせにならんのだ。と老婆は思つてゐた。で、われといふ邪魔物が死んで、おら達がつと樂が出来るまでは、おらはどうしても死にやせん、と腹の中で意氣込んで相手の顔を見た。

「お前は今日は仰山な元氣ぢやな。そないに元氣があるんなら、これから先も天子様からたびたびお杯を頂戴出来らあな」と、話を外したが、老婆は先きからの一つ事に暫らくこたはつて、お夏に突掛つた。

そこへ、菊代が何時ものやうに腹をびよこびよこに減らせて歸つて来ると、老婆は、「おらの云うたことを今直ぐ菊に話すぢやないぞ」と

お夏に曝いて、「われのことも秘密にしといてやる」と、きよとくした日付をした。そして、菊代が背負籠に残つてゐる蜜柑を一つ炬燵の上に投げて呉れると、急いで攫取つて寝ながら食べた。

四

窓の上の濱屋の庭先には、露が芽を萌出した。日に／＼彼方此方の地べたを割つて青い芽が開いて、濱屋の子供が珍らしがつて「今日はいくつ出た」と数へてゐるのがお夏の耳にも入つた。濱屋に飼つてある可愛らしい牝猫を追廻してゐる幾匹もの牡猫のいやらしい鳴聲も二三日前から日まじしに盛んになつた。

風のない日は周圍がすつかり春景色になつたのを、お夏は總身に感じて、用がなくなつても炬燵から匍出して、近所の女房達と立話をしたり、時としては索り足で埠頭場近くへ行つたりした。岩端に跨んで小波の音や櫓の音を聞いてゐると氣持がせい／＼した。そして、今年も四月の末か五月の初めにはこの埠頭場から出ると云ふ噂のある金世羅船に乗れたら、さぞ面白からうと、何十年の昔向ひの島柴刈に行つて以來嘗て乗つたことのない船の乗心地をさま

ざまに思ひやつた。：元結がはりの鬘で髪を茶筌のやうに結つた、蒼黒い顔したお夏の首ひた目の前には、麗かな日光が波に砕けてゐる。鳶が輪を描いて舞つてゐる。爪の延びた足許には寄居蟲が石垣傳ひにうよ／＼してゐる。：冬の間には繁殖した虱までも温かい日に誦はれて、彼女の肌着から匍出してゐる。

「南無、金世羅大権現様」と、お夏はふと海の彼方を仰いで、手を合せて拜んだ。「：：：」と、一心に祈願を籠めたが、差當つて痛切に何を願ふといふことはなかつた。只五體に觸れる春らしい柔かい風や日光に心が盪かされて、神や佛が懐かしく思はれたのだつた。

「そこで何をし居りんさる？」と、たまに聲を掛けて呉れるものもあつた。
「家で寝てばかり居ると身體に毒ぢやから」と答へて、聲の主に向つて、前に湛へてゐる海上の光景を詠いた。運送船が何艘沖に繫つてゐるとか、誰某が肥船を漕いでゐるとか教へられると、夢見るやうに穩かな春の海面を胸に描いて樂んだが、をり／＼は教へられもしないお初めの姿を海の上に浮べた。渡舟に乗つて向ひの村から直ぐそとまで戻つて来てゐるやうに思つて見たりした。：：「菊は笑うて相手にせんけ

れど、お初が無事で戻つて来まいものでもない」と、自分の胸に問ひ胸に答へた。神佛の御利益で自分の兩眼が開くといふことは信じないけれど、お初が生身を運んで、生れ故郷の母親の膝へ戻つて来るといふ不思議は待設けられないではなかつた。

親類は一軒もないし、上り込んで番茶の一杯も飲んで親身な話の出来家は村中に何處にもないので、お夏は海邊への往歸りにたまさか誰かに呼留められて立寄つても、自分の汚い身装を憚つて、岡の外に立つて話をするか、せいふく上り框に腰を掛けるかするくらゐで、いくら親切に云はれても疊の上へ匍上るやうな不遠慮な眞似はしなかつた。

「菊代が毎度御厄介になります」と、人の家へ寄ると、高い聲で、挨拶がはりにそれを云つた。

お夏が濱邊の春風に吹かれて、牛小屋での永い間の冬籠りの退屈を忘れてゐる時分に、菊代は籠を背負つて、雲雀の鳴いてゐる田圃道を辿つてゐた。

藪蔭の泉の水もやゝ温んで、湯を醫し汗を拭ふのに快くなつた。日が永くなつたので、歸りが遅れても暗い道を通る恐れがなくなつた。朋輩と道伴れになることは稀でも、他村の者や

旅の者に向うから話掛けられて一緒に歩くことはよくあつたが、見知らぬ人と取留めのないことを言合つてゐる方が、自分のの上をよく知つてゐる人達と話してゐるよりも、菊代には却つて氣晴しになつた。：：初大師詣りの連中の巫山戯ながら歩いてゐる間に交つて羨ましい思ひをしたこともあつたが、殊に彼女の心を惹いたのは、古ぼけた笈指に何か黒い字の書いてある巡禮姿の女であつた。

四十あまりの頑丈な女で、脚絆甲掛の足許輕げに歩いてゐた。巡禮には大抵連れがあるものなのに、この女は一人ぼつちであつた。

「××へまだ餘程遠う御座いますか」と尋ねられたのが縁となつて、峠を下りるまで道連れとなつた。

「何處へお詣りなさるんです」と、菊代が訊くと、

「名所見物がてら西國廻りしようと思つたります。去年は四國を八十八ヶ所無事にお詣りを済ましたしから、今年は××まで出て汽車に乗つて、一月がかりぐらゐで彼處の札所々々を打つて来ようと思つたりますのぢや」

「お一人ぢや淋しいでせうのに」
「獨りの方が結句氣散じですがな。歩きたいと

ころを歩いて、疲れれば汽車に乗るし、早く宿へ泊らうと自分の氣儘が出来ますもの。：：路用は不用心だから些とばかり手許に持つとつて、行先のお寺宛で爲替を家から送らせることにしとります。本眞に世の中は便利になりましたわいな。さうしとけば、途中でお詣りがいやになつても無性氣を出して取返す譯に行きませんからの」

「でも随分費用がかゝるんでせう」

「そりや、心掛一つでどうにでもなりますわな。かういふ服装をしてお精進物ばかり食べるのですから、宿錢だつて並の人よりやずつと安うて済まされます。處によつて無錢で泊めて呉れるところもありますし」

巡禮はさう云ひながら、ふと菊代の籠に目をつけて、三つ四つの蜜柑を買つて、直ぐ様それを割いて食べたが、三十三ヶ所の寺々の名前など語つた。

菊代は峠の裾で別れてからも、夕日を浴びた笈指姿が蜜柑の皮を投散らしながら足早に歩いてゐるのを睨みてゐるが、すると、盂蘭盆の夜など、母親はじめ近所合璧の老婆たちが鉦を叩いて、哀れな聲で唄ふ御詠歌が久振りに思出された。そして、一つ二つ口の内で唄つて見ると、自分も背負籠のかはりに笈指を掛けて、知

らぬ他の國へ行つて見たくなつた。

温かくなるにつれて、菊代は自分の家になす
ます厭氣が差して來た。お末やお鶴のやうに岡
山の紡績へ女工になつて行かうとも、あるひは
下女奉公に出ようとも、どんなつらい仕事をし
てもいゝから、自分の村と家とから遠ざかりた
かつた。

「こんなことを何時までしてゐたつて、面白い
ことはない」と、母親の側に空籠を抛却して當付
けるやうに云ふこともあつたが、

「商賣が大儀になつたら一日や二日草臥休め
をすりやえゝがの。おまちもさう云うとつた
が、われは商賣に焦り過ぎるのが悪いんぢや。
外の者に負けちや口惜しいなぞと思はいで、氣
を長う持つて居れよ」と、母親は慰めて、そん
な時に、菊代に媚びて力を付けてやるつもりで
かねての貯蓄の一部を、五錢でも十錢でも抛出
すのだつた。

「お母はお金持ちやな」菊代はさうされると悪
い氣持はしなかつた。それに、自分の手足を働
かさないで、豫期しなかつた錢が、たとひ一厘
でも一錢でも入ると、心の躍るやうな悦しさが
感ぜられた。
「お母が普通の人のやうで、うちと二人で精一

杯稼いだら面白からうのにな」
「もうさういふことを云うて呉れるな」
母親は手を振つた。

五

「菊さん〜……と幾度も呼ぶ低い聲が、親
子が早寝の床に就かうとしてゐるところへ聞え
た。眞先に聞付けた母親は、不審げに、「異な
聲ぢやな」と菊代に囁いて、「入らんせい、誰か
いな」と表へ向つて叫んだ。が、返事もしな
いで、荒々しい足音が小川の方へ消えた。

「誰か知らん。われには分つとるんか」母親は
胸をどきつかせた。

「うちはよう聞かなんだ」
「あれは通り掛けに呼んだ聲ぢやないぜ、秘密
でわれを呼びに来たんぢや。用心せいよ」

「またお母が妙なことを云ひ出した」
さう云つて笑ひながらも、菊代は母親の言葉
に心を動かされて、ふと眠氣を醒まして戸を開
けて見た。其處には誰もゐないし、周囲を見廻
しても眞暗で分らなかつた。が、先きの聲がた
だの聲ではないやうな氣もしたので、疑念晴ら
しに川端まで出て行つた。海の方から吹寄せる
温かい南風が、いゝ氣持に頬や鼻に觸れた。

「降るかと思うたらお星様が出て居る」と、拾
ひものをしたやうに喜んで空を見上げてゐる
と、
「おい、菊さん」と呼ぶと共に、男の手が肩に
觸つた。

菊代は吃驚して飛退いて、相手を見詰めた。
幽霊ではなくつて、五年前と同じ顔した繁松が
にや〜と笑つて立つてゐた。

「お主はうちをどがいしようと思つて此處へ來
た」と聲は消えたが、日は尖らせて體を震はせ
た。男の顔を掻きむしりたいほど怒りに燃えて
ゐた。

「まあそがい怒らずにわしの云ふことを聞いて
呉れい。譯をよう話すから。此處ぢや人に見ら
れるからお地蔵様のところへ行かんか、わしが
先へ行つとるから後から來い。えゝか。……若
し來なんたら、われが家へ行くぞ」

繁松は柔しく云ひながらも、脅すことを忘れ
なかつた。そしてすた〜と行過ぎた。「誰が
行くものか」と、菊代は腹の中で逆つてゐたが、
「われが家へ行く」と云はれたのが薄氣味が悪か
つた。以前例のあつたことで、母親へ酷く當る
だらうし母親の方でもこの男を憎んでゐるか
ら、大喧嘩が始まるかも知れないと思はれた。

それは兎に角、自分でも云つてやりたいことは溜つてゐるんだから、と、直ぐに後を追つた。

地藏様は橋はづれの小高い處にあつて、後は小さい藪で、左右には松などが疎らに生えてゐる。五六年前に二人が最初に出会つたのは此處だつたので、お地藏様と聞いてさへ菊代は妙な刺戟を與へられるのだつた。

少し逆上せて夢のやうだつたが、知つた人に會はぬ用心して、淋しい小道を選つて石地藏の側まで来たが、男の方は何處をまごつてゐるのか、まだ來てゐなかつた。菊代は一刻も待ちあぐんで、きよとく左右を見廻しながら立ちたり蹲んだりしてゐた。沖には鰯釣船の篝火が闇の中にちらほら光つてゐて、岸に寄せる波は不斷よりもやゝ高かつた。

「菊：：もう來とつたか。早かつたな。わしは藤屋で飯米を買うて船へ抛込んで來たんぢや」

下唇の曲つた目の爛れた人相のよくない繁松は松の蔭から忍び足で近づいてさう云つた。「うちはこないな處に愚圖々々しとらりやせん。聞くことは聞いて早う往なにやならんのぢや」菊代は突慥にさう云つたが、最早氣が緩んでゐて、「お前は船で戻つたのかな。自分の

船に乗つたらんかな」と訊ねた。

「な前に、圓太爺の船に乗せて貰うてやうく戻つて來たんぢや。：：わしはあれから難儀をしたぜ。三次の船で朝鮮へ行つたのはえ、が、ひよんなことから彼奴と喧嘩をして陸へ上つてから、いろ／＼な力業をやつとつたのぢやぜ。何方向いても知らん人間ばかりの中で稼ぐんぢやから此方の海で漁をしとるやうに氣儘は出來やせん。そりやまだえ、が、わしは何が祟つたのか、人違ひで牢へ打込まれて去年の盆時分まで丸三年といふものは半死半生の日に會うつた。やう／＼本眞の罪人が知れてから牢を出るにや出たが、着のみ着のまゝの一文なしぢやから」

「また博奕でも打つたんぢやないかな。朝鮮から戻つた人に訊ねても、お前が牢へ入つとると云ふことは一度も聞かなんだのに。陸でえ、仕事をして儲けとるといふ話だつたがの」

「博奕どころか、わしは狐に化されたやうな氣持で牢へ連れて行かれたのぢや。しかし、わしが牢へ入つとつたことは祕密にしとるんぢやから誰にも云ふな。無實の罪にしても體裁が悪いから」

「そんなことを人に云ふものか」菊代は肩と肩と擦合つてゐる男の顔を星明りで見詰めたが、思ひなしか、以前よりは寢れてゐるやうに思はれた。「今夜からお前は圓太お爺の家に泊るのかな」

「泊めちや呉れるけれど、彼處は子供が大勢居つて窮屈だから。わしは獨りで船へ寢てやらあ」

「これからは近所で漁をするつもりなのかい、お前。直ぐにまた朝鮮へでも行くのかな」

「わしはもう遠方は懲りた。お爺にでも使うて貰うて手練網でも曳かうと思つとる」男は石地藏の蔭に蹲んで、懐の財布を弄んで銅貨の音をさせながら、「われはこの頃は誰と一緒に居るんだい」

「極つとるぢやないか、お婆とお母と：：」

「それつきりか」男はにやりと笑つて、「二人とも何時まで丈夫で生きとるなう。お母は今でもわしのことを悪う思うとらうがな」

「そりや極つとらあ、あないに老人を酷い目に會はしたんぢやもの」

この男が母親を打つたり蹴つたりしたことはまぎ／＼と菊代の記憶に浮んだ。老人二人を抛散らかして、他所へ行かうとされて、男の不人情を怒つたことも思出された。

「お母にもよう謝つといて呉れい。さうすりやわしも明日お母の好きな物を買うて謝りに行かあ」

「……」この男が村へ戻つたことが明日になつて母親に知れて騒ぎ出されるのが菊代には恐ろしかつたが、「来るな」と斥ける力は出なかつた。そして、五年前のお地藏様の界隈はもつと樹木が茂つてゐて、月夜にでも人目を避けるに都合がよかつたことが氣に附いた。吹く風に竹藪はざわついて、野良犬の聲が間近に聞えた。

「わしは久振りで陸の家の中で思ふ存分足を踏ん伸ばして寝たいぜ」

暫らく經つて繁松は手に付いた泥を拂ひながら云つた。殊に風の吹いてゐる日に、捲られながら船で眠るのは、漁夫稼業をしてゐても辛氣なものでつた。

「うちはまたあの家で寝るよりや船にでも寝たいと思ふことがあるが」

「われ、そんなことを思ふやうになつたか。わしの船だったら連れてて寝させてやるのに」

二人は明日の晩の約束などして石地藏の濱通りへ下りた。菊代は男が指差した船の在所を駈つと見やつただけで、男を振切つて一瞥に駈けて、自分の家の戸口まで歸つた。戸は自分が明

けたまゝだつたので、母親などの寝姿が豆ランプの光で微かに見えた。静かに戸を締めて、氣取られぬやうにそつと枕に就いたが、すると母親は頭を掛けて出先を訊ねた。

「一寸用があつて行つとつたんぢやがの。そんなに煩さう訊いて下んすな。うちは眠たうてならんのぢやから」

がみ／＼叱りつけて置いて、菊代は直ぐに敷をかいた。そして、夜明け前に呼起されても容易に枕を離れないで、窓の上で雀の囀り出すまでぐつすり眠入つてゐた。

「菊は今日は休むんか、大儀なら休めばえ、がの」と母親に云はれると、

「こんな天氣のえ、日に休んで溜るものかと、菊代は威勢よく云つて、大急ぎで食事を済まして籠を背負つて出た。近所の者に顔を見られるのが厭きにすた／＼と傍目も觸らずに道を急いだ。しかし村を離れると足が次第に進まなくなつた。母親の思惑や村の人々の口の端や繁松の今後の所行がかはる／＼彼女胸を驚かして、商賣のことなどに身が入らなかつた。で、負けと云はれるだけ負けて殆んど捨賣同様に、時田の畔でも屢々荷物を卸して足を休めて、時

の經つのも忘れて考へ込んだ。……獨笑ひをして浮立つやうになるかと思ふと、自分は矢張自分一人を頼りにしてゐる盲人や老耆を大事にしてやつて、かねての覺悟通りに男に掛合はないで通さうかと思つたりした。

面白い目には會はずに、徒らに年を取つて来た菊代は、村に男の数は多うても、繁松の外には自分などを相手にして呉れる者のないことをしみじみ感じてゐるので、唇の曲つた爛れ目のこの男でも、取逃がす諦めはつかなかつた。以前の男の仕打に柔しいところや手頼りになるところの些ともなかつたことはよく知つてゐるのだけれど、菊代には最早男に對して選好みをする氣は些ともなくなつてゐて、相手が男の身體を具へてさへゐれば、二度でも三度でも石地藏の側で會ふだけ得だといふ氣持になつた。

それにしても石地藏の側だけでは物足らなかつた。……祖母はゐてもゐなくても同じやうなものだが、盲目で耳の敏い伶俐な母親が家に尻を据ゑてゐるのが、どれほど邪魔になるか知れなかつた。……お夏が可哀想ぢやから無賃で貸してやると、濱屋では牛小屋をお母に貸して呉れたのぢやから、お度は不都合のないやうにと義理を思つて、一吸博奕宿に貸して呉れと頼ま

れた時にも、われがさうしたけりや、濱屋へ斷つてからにせいと堅意地なことを云うて承知せんだ。男を連込むのも承知する筈はない。

これやあれやで胸を憐ますものの、菊代は平生に比べると、今日は村へ歸るのに張合ひがあつた。石地藏の裏藪に咲きこぼれてゐる紅い椿に目がついたり、石地藏の上に鳥の留つてゐるのが可笑しく思はれたりした。夕潮は岸を浸して、船端で米を磨いでゐる漁夫もあつた。

繁松の不意に歸つて来たために村の様子が異つて、其處等の人々の話聲はみんなその噂かと案ぜられたが、道で擦合つた人の誰もが菊代に向つて變つた口を利かなかつた。例のやうに、「温うなつたなあ」とか、「今日はよう賣れたかな」とか、たまたま聲を掛けられるばかりであつた。

六

「待つとるお初は戻つて来ず、戻らんでもいゝものは戻つて来るし、お婆、うち等はまた酷い目に會はされるぞな」

お夏は圓太爺に救はれて朝鮮から着の身着のまま、戻つて来たといふ繁松の名を聞いた時に溜息を吐いた。

「おらはどがいでも構はんがの、繁が来て呉れりや絆句賑かよからうわい」おみち婆さんは口先で毒づかれようとも、傍で大喧嘩がはじまらうとも、繁松の飲み餘しが一杯でも飲めて、たまには魚の頭ぐらゐる食べられる樂みがありさうに思はれた。

「彼奴が居ると菊が今のやうに一心に働いて呉れんぞ、うちはあがいな獄道奴に食ふや食はずしとかにやならん。繁も朝鮮で牢へ入つとつたいふから最後の果にや十作のやうになるんぢやらうから、うちは氣疎うてどうもならんがの。菊までも巻添になつて見んさい」

お夏はその有様が目に見えるやうで身震ひした。繁松とは違つて菊代のちやんとした亭主であつた十作が、脱營の罪科で死刑に會つたことはお夏の骨身に深く染んでゐて、菊代に男の出來るといふと、直ぐにかの死刑が聯想されて恐ろしかつた。：：他村から流れて来た繁松の顔は、目の開いてゐた時分に一度も見たことはないで、最初娘の入婚の格で會つた時からして、獄門に懸る顔のやうにお夏の心には映つてゐたのだつた。そして、半年ばかり養はれてゐながらも、睦まじく打解ける氣になれなかつた。

「氣疎や〜。男といふ者は何時お上に殺されるかも知れない」と、ある日隣の主人に話したことがあつた。

「縁起の悪いことを云ひなさんな。悪いことさへせにや咎めらるゝ心配はないよな」

「そりやその譯ぢやけれど、うちはどうも腑に落ちんがの」

「男は殺されるにしても、お前の家には女子ばかりぢやから安心だ」隣の主人はさう云つて笑つた。

男の子を生まいで絆句仕合せかと、お夏は自分の幸福をさういふ事にも求めようとした。今にも恐ろしい繁松がやつて来るかと待構へて、油斷しないでゐるが、夕方まで音沙汰はなかつた。戸を開けて入つて来た足音は菊代に違ひなかつた。

「戸はちやんと締めて置けい」

「こんな温い日は、開けとく方が明るうて陽氣でえゝのに」菊代は開けたまゝ家へ入つて、不斷よりも口敷を餘計に利いた。滅多に云つたことのない商賣の話をもした。

「お母、××の畝には桃の花が一面に咲いとるぞな。お母に一目見せたいと、うちは思つた。もうお彼岸が来るから、今年はお母もお婆も久振

りでお慕詣りをするにえまにな。：：お彼岸といへば、濱屋でお接待の手傳ひを一日して上げにやなるまいな」

「われが連れて来て呉れりや、お慕詣りにでも行かあ」と、お夏は大聲で云つて、「われは今日何か悦しいことがあるんか。桃の花の咲いとるのがそないに面白かつたのか」

「：：：」菊代は母親の顔を顧みると、急に陰氣になつた。

「お母は先きからわれが不憫でならんがの。お母やお婆に饑い目をさせてもえゝから、悪い奴に誑かされんやうにせいよ」

「そんな大きな聲を出して下んすな。人が聞いたら何事かと思はあ」

菊代は母親に背を向けて窓の側に立つた。濱屋の子供達は庭先で繩飛びをして遊んでゐた。姿は見えないけれど、濱屋の姉の弾いてゐる琴の音が二階の方から落ちて来た。夕日は長閑に土蔵の壁を照らしてゐる。

「菊はそこでどないし居るんならえ」と、庭先にゐる小さい子がふと身を屈めて窓を見下して笑顔を注した。

「菊は坊ちゃんの繩飛びを見て居ります」

「わしは此處で小使をしようか。その窓まで届

くぜ」と、子供は身體を突出して前をまくつた。すると、他の子供も寄つて来て、

「わいだつて負きやせん、見て居れ」と、身體を力ませた。臭い水の飛沫が窓の格子にまでも降りかゝつた。

菊代は驚いて首を引込めて、黙つて晚餐の支度に取掛つたが、賣残りの餘の干物を惜氣もなく焙つた。生臭い煙が小屋の中から流れ出した。

「一間屋の物を矢鱈に口へ入れると、儲けた錢を差引かれるんぢやから恐ろしい。向う見ずはわれしぢやならんぜ」

「干物を一枚ぐらゐ、たまにや食べたつて大事ないがの、うちほどなに辛抱したつて長者になれるんぢやなし：：」

「今日はわれもどえらい剛い氣になつたな：：」お夏は娘の氣に障つて争ひの起るのが氣遣はしさに、繁松の名を容易に口に出さなかつた。そして娘が焙つて呉れた干物には手をつけないで、麥飯に鹽を振掛けた湯漬を食べた。

「問屋へ行つて、戻りに濱屋で風呂へ入れて貰はう」

菊代は箸を擱くと、獨言のやうに言つたが、先きから隣の家の話聲に耳を留めてゐたお夏は、

「とう／＼やつて來やがつた」と、突如に叫んだ。「來るのなら、門口で祕密に呼出したりせいで、うち等の居る前で話を極めい」と誰に云ふともなく云つた。

菊代は呆氣に取られてゐたが、ふと隣の家の女房と一緒に入つて來たのは、襦袢を着た繁松であつた。

「繁さんもこれからは此村で身を入れて稼ぐんぢやといな。よう話を聞いて元々通りにして上げなさい」と、女房は仲人氣取りで云つて、夕闇を透して皆な顔を見廻した。

暫らくは皆な黙つてゐたが、お夏が調り出て何か口を利かうとする前に、菊代は土間へ飛下りるが早いから、川端の方へ駈け出した。

そして、濱邊を傳つて昨夕教へられた繁松の船の繁つてゐる處まで行つた。四五艘の漁船の中で稍大きいのが、朝鮮歸りの圓太爺さんの持船だといふことは直ぐに知れた。どの船にも人のゐる氣色はしなかつた。

菊代はどうなつたかと自分の身に關つた話の決着を氣遣ひながら、岩の上に身を屈して、船縁を眺つてゐる小波の音を聞いてゐた。後を振向くと、ところ／＼に燈火がついて、海陸の家でも障子を開けて夕風の吹入るにまかせてゐる。菊

代はそれ等の家々の娘や主婦の悪い品行を思出しては、構ふものかと自分に力をつけた。

「オー、われは此處へ來とつたんか、間屋へ行つとるかと思つたのに」

繁松は徳利をぶら提げて、突出た石垣の端から船へ飛乗つて、「誰も居らんからわれを乗せてやらう」と、岩の上へ歩板を掛けて、招いた。手を伸して捉まらせた。

伊部焼の船王様を正面に据ゑて、その前に蘆を敷いてゐた。菊代は男が點けたカンテラの光できよ／＼船の中を見廻したが、舟板は綺麗に拭磨かれて、者藝の道具もちやんと揃つてゐた。

「われはようあないな汚い家で辛抱しとつたな。臭うて／＼わしは一時もぢつとして居られなんだ。何ぼ陸で寝たうても、あない家には頼まれて泊る氣にやならんぜ」

「そんな無理を云はんすな。女子一人の腕で稼いだるんぢやもの、家賃の出る家に居れるものか」

「あの家からこの船へ來うなら氣がせい／＼しよがな。わしはお母に謝らうと思つたけれど、家の様を見てやめにしたぜ」繁松は長い間慕つてゐた陸の家の住み甲斐のないのに失望し

てゐた。五年前に愛想を盡かして振棄てた盲人や老婆は一層見窄らしくて、同じ部屋に起臥するの氣味が悪いやうであつた。

「われは當分船住ひぢや。われも夜此處へ來て泊れ。四太爺さんもう四五日休まにや船を出しやせんから、當分は夜の間はわし一人が留守番ぢや。夜遅うやつて來いよ。萬が一他人に見つけられたつて構やせんぢやないか」

「……」菊代はやく／＼笑つた。綺麗な船の中に人目を避けて、男と差向ひでゐるなんて、何年の間夢にも見たことのない氣保養であつた。男は買つて來た酒を温めたり、魚を煮たりした。舟板をめくると、水槽には清水が湛へられて、米櫃には白い米が入つてゐた。

「船乗りは陸に居るものに比べるとお大盡様ぢやぞな」と漢まじさうに云ふと、

「われはさう思ふか。さう思や船に乗せて連れて行つてやらうか、四國へでも朝鮮へでも渡らんか」

「ふん……」菊代は男の言葉が夢のやうなので眞に受けなかつた。

が悪いんぢや」繁松は昨夕の闇でよく見なかつた女の顔形を見詰めて、いと婆あ染みて、五年前よりも更に醜くなつてゐるのに興醒めながら、田鱈

目の悦しがらせを云つたりした。そして、温まつた酒を女に酌をさせて茶碗でぐい／＼飲み、女にも強ひた。菊代は興に乗つて、鼻を掴みながら一口だけ呑んだ。

「繁公……」煮えた小魚を箸の先でつまいてゐるところへ、岸の方から呼立てる聲がした。

「四太爺さんだ。……構やせん、一寸の間隠れとれ」繁松は慌ててゐる菊代を船底の水槽の側へ忍ばせて、舟板を嵌めて、自分は何喰はぬ顔でその上に胡坐を掻いてゐた。

「貴様はまた祕密で酒を喰つてるな。おらにも一杯呉れいと、赤銅色した爺さんは既に酒臭い息をさせながら入つて來た。」

「たつた二合ぢやもの、もう飲んぢまつた」繁松はさう云つて、女の飲み残した茶碗（徳利の餘瀝を振落した）

一口の酒をも吐出した。爺さんの威勢のいゝ聲のみはとぎれ／＼に耳に入つたが、繁松の聲は殆んど聞取れぬほど低かつた。

「貴様は甲斐性なしぢやぜ。え、歳をして居りながら、女房一人よう持たいで。…牢へぶち込まれるやうな間拔けた眞似をして可笑しな奴ぢや。貴様などは親はなし子はなし、何時何處でくたばらうと構はんのぢやから、命懸けのどえらいことをやつて見い。おらは貴様に米の飯を食はせて一兩二兩の酒手をやるくらゐ苦にやしらんがの。おらの前でそがいにびく／＼しとるやうぢや駄目ぢや」爺さんは一杯機嫌で毒口を叩いたが、目には柔しい微笑を浮べてゐた。

「お前がかういふことをやれと云やあ、わしは何でもやつて見らあ」

「さうか。そいぢや貴様、今から濱屋の菜園へ行つて、分葱を一握り盗んで来い。家の子供が貝を拾うて来とるから、あれを酢味噌にして一杯やらうぜ。今夜は闇夜だから知れりやせん、堀を飛越えて入つて見い」

「阿呆云はんすな。分葱ぐらゐで盗人にはなりたうないがな」

「高慢なことを吐すな。…菜園物で物足らに

や、土蔵の錠前でも切つて金庫でも盗んで来い」

「そんなことよりや、もつと氣の利いたことをして、お前を吃驚させて見せらあな」

繁松は爺さんが容易に座を立ちさうにしないので當惑して鬱き込んだ。酒はないし喰ふものはないし、じり／＼する氣持を紛らす術はなかつた。そして、菊代の身體を動かす微かな音も耳についた。いつそ破れかぶれで舟板をめぐつて、女を爺さんの鼻の先へ引括て見ようかとも思つたが、さうすると、明日から自分の食持にも泊り場所にも離れなければならぬのが恐ろしかつた。「貴様おらの大事な船を穢しやがつたな」と、爺さんがその日に角を立てて怒出すのが目に見えるやうだつた。

「お爺、今夜だけお前家に泊めて下んせ。四五日すりやまた沖へ出るのに、一晩も陸で寝んと、船を着けた甲斐がないもの」

「貴様は昨日高慢な口を叩いた辭に、もう陸が戀しうなつたか。貴様も不憫な奴ぢや、女子の子が待つとるんぢやないしの」爺さんはさう云つたが、今急に思出したやうに、「たしか貴様は盲人の娘の家へ入込んだつたんぢやな」

「あれや些つとした悪戯ぢやがの」

「いや、貴様にや丁度え、女房かも知れんぜ。乞食見たいな様をしとるから誰も相手にすりやせん。あがいな女子を女房にしときや何年沖へ出とつても、留守に間違ひの出来る心配がないから、漁業に身が入つて納句仕合せぢやらうかい」

「そないに腐して下んすな」繁松はむつとした。

「まあ腹を立てるない。…おらの先の女房はの、おらの留守に眞桑瓜二つで角の野郎と抱寝をしやがつた。痾病で死んだ後で知らせて呉れたものがあつたから、おらは何ぼ腹が立つてもどうすることも出来やせん。せめてもの腹癒せに、お墓を打倒して踏付けてやつたがの…それ、漁夫の女房は眞桑瓜二つぢや。えいか」

爺さんは獨りで喋舌つて獨りで面白がつてゐたが、やがてひよろ／＼起上つて、

「酒もないのに糞面白くもない。もう歸るから、貴様は後片付をして、火の氣のないやうにして後から泊りに来いや」と云殘して、掛聲かけて岸の上へ飛んだ。

繁松は生返つたやうな氣持で、急いで舟板を取つて、菊代を呼んだ。が、菊代は泣吃逆して身を持ち上げなかつた。そして、繁松が引出さう

として伸した手を力強く突きつけた。

七

「朝鮮へでも四國へでもお前の好きなところへ連れて行つて下んせ。うちは何處へでも行くがな。今直ぐに」

やがて船底から引張り出された菊代は、陸へ上らうとはしないで、涙ながらに氣色ばんで男に迫つた。「お前は先き何處へでも連れて行つてやると、うちに約束したぢやないか。船にお米もあるし、水もあるし、今夜夜中に出掛ける氣にやなれんのかの。人がうちを捜しに來りや夜中でも船の下へ隠れて居らあ」

「われ、氣が狂うたんか。この船はわしの船ぢやないのに勝手に出せるものか、よう考へて見い、われが遠方へ行きたいんなら、四五日中にわしが手筈を極めて、え、鹽梅に行けるやうにしてやるから、それまで待つて居れ。急ぐことあないぢやないか」

「思ひ立つた時に直ぐに行かにはや、愚圖々々してゐる間にや家が出られんやうになるもの。うちはこれまでに何處も一人で他所へ行つてしまはるかと思つたことはあつたけれど、お母や祖母のことが氣に掛つてどうしても行けなんだ。ぢ

やけど今夜なら覺悟がついたのぢや。この船が出せにや、傳馬にでも乗せて連れて行つて下んせ」

「路用も持たいで何處へ行けるか」

繁松は嘲笑つてゐたが、最早女と差向ひでゐるのが煩きさばかりで何の興もなくつた。

女は男の膝を搦ぶつたり腕を小突いたりして、船が駄目なら徒歩で村を逃げようと言出して止まなかつた。

「歩いて何處へ行たつて、御馳走してわし等を待つとるところはないぜ。わしは貧乏してもまだ乞食をした覺えがないからの」男の言葉はますます冷かだつた。「われは些たあ錢を溜めとるのか」

「……」そんな馬鹿げた問ひには答へないで、菊代は、「お前さへ約束を間違へにや、今夜中にうちが路用を拵へて來るぞな」と、目を見据ゑて云つた。

「えらいなあ、誰かに借つて來るんか」繁松は眞に受けなかつた。

「誰に借るものか、誰が貸して呉れるものか。皆なしてうちを蔑視つとりやがつて一菊代は船底で洩れ聞いた圓太爺さんの言葉を憎んで、村の人々にも憎みの刃を向けてゐたが、それにつ

けて、濱屋の土藏だの、金庫だの、と云つた爺さんの言葉も頭の中に響いてゐた。……濱屋の土藏や物置へは、年末の煤掃の手傳ひをした時や、平生でも屢々出入りして、その様子を彼女にはよく知つてゐるのだ。

で、菊代は薄暗い船の中に坐つてゐながら、濱屋の母屋から離座敷土藏や物置部屋の隅々まで、あり／＼と目の前に浮べた。欲しい物は何でも心まかせに奪つて來られさうに思はれた。

「繁さん。その時になつてうち抛たらかしちや承知せんぞ。厭ぢやと云うても以前のやうに黙つてお前を逃しやせん。え、事でも悪い事でもお前は卷添になる覺悟になつて居らんせ」

菊代はさう云つて、寝ころんでゐる繁松に夜着を被せて、後刻を期して、突出てゐる岸の上へ飛んだ。空はどんより曇つて生温い風が吹いてゐる。波に揺られてゐる一艘の傳馬船は彼女を目を惹いた。

時刻を忘れてゐたが、まだ宵の口なのか戸を鎖した家は少かつた。提灯を持った老和尙や、浪花節を唄つてゐる三人連れの若漁夫などに擦違つたが、菊代から途を避けるほどの遠慮もしなかつた。皆なを敵として引受けるやうな氣持

になつてゐた。

「オ！ 菊さんか。お母がお前を捜し居つたぞな。何處へ行つとつたならえ」と、ふとお今婆さんの聲がした。

「何處へ行かうとうちの儘ちやがな」

菊代は濱道から脇道へ外れて、ところ／＼に野菜を作つてゐる空地へ入つた。よく見廻しても周圍に人影は見えなかつた。自分の家の裏手へ廻つて、窓の側から石垣を攀ぢて濱屋の庭先へ匍上つた。母屋の階下の雨戸は皆締つてゐたが、二階の障子にはまだ燈火が映つてゐた。

まだ時刻は早いし、何處へどうして忍入るのやら見當がついてゐなかつたので、菊代は半ば夢中で石段の脇の埃溜の中へ身を潛めた。

「お婆今そこから濱屋の庭へ誰か入つたやうぢやな」と、窓の側で物案じしてゐたお夏が云つた。

「猫か犬かが通つたんぢやらうがな」

「うんにや、確かに人が入つたんぢや。そらまだ音がして居らあ」

お夏はさう云つて、竊かに濱屋へ知らせようとして出掛けた。

母親が下女のお松に話してゐる聲は、埃溜の中でもぞ／＼してゐる菊代の耳へも幽かに入つ

た。はつきり聞取れはしなかつたが、菊代は水を浴せかけられるやうに吃驚して、慌てて其處を飛出した。母屋の潜戸が開いて、お松の持つた提灯の光は庭先を照らした。險しい石垣を無闇に飛び下りかねてまご／＼してゐる菊代の姿は、お松の寝呆眼にも見逃されなかつた。

「まあ、菊さんかな。そこでないし居るのなら」お松はたゞ不思議に思ひながら、

「伯母さん、菊さんぢやないか。うちは今時分盗人が入る譯はないと思つたのに。伯母さんは寝呆けとるんぢやな」と、戸口を顧みて叫んだ。

「呆れたこつちや：」お夏はぞつししながら庭に立竦まつた。

「菊はどうしたのぢや」濱屋の人達は皆な戸口に集つて、お松に手を執られた菊代の着極めた顔を訝しげに見詰めた。

「狐にでも憑かれたんでせうぞいな」

お夏はさう言濁して、菊代の手を掴んで「さあ家へ戻れ」と引張りながら、とぼ／＼と索り足で川端を傳つて、自分の家へ入つた。家には豆ランプさへ點いてゐなかつた。

「お母はもう何にも聞きともない。氣疎や氣疎や：」

お夏は明日の口からのわが世の恐ろしさに職いてゐた。この時にふと心に浮んだ姉嬢のお初の影は、昨日までの思出にあつたやうな婆の何處かに生きてゐる姿ではなかつた。お墓の彼方から手招きしてゐるのだつた。背負籠の繩切や、上り口の上にある横木や、炬燵の踏臺やが、自分のために用意されてゐるやうに、彼女の心に浮んだ。

「菊は何を泣いとるんぢや、繁と喧嘩でもしたのか、明日仲直りをして、家へ連れて来て一杯飲ましやえ、がの」老婆はさう云つて、身を起して、「おらがランプを點けてやらう。眞闇ぢや仕様がな」とマツチを索つた。

窓の外では、濱屋の主人が提灯を持つて石垣の側を彼方此方検分してゐた。そして時々窓の方へも目をつけた。

死者生者

騒々しくつて埃もよく立つてゐるこの電車
通も、街燈の點く頃からは、外日には小瀟洒し
た涼しげな住みよささうな町として見られた。

鬱陶しく繁つてしかも埃に汚れてゐる並木の
櫻も、白い燈火を浴びて夕風にそよぐと、葉脈
がみづ／＼した色を帯びた。麻暖簾を垂れた恭
會所には、團扇を弄びながら片膝を立てたり

など氣儘な身構へして、三組四組の客が黒白を
戦はせてゐる。その隣の玉突場には無駄口で
賑はせながら紅白の玉を轉がせてゐる。筋肉の
逞しい男達が汗みどろになつて、激しい柔道

の稽古をやつてゐるのが鐵格子の間から覗かれ
た。こんなさまざまな勝負事を立見しながら
散歩するのも夏の夕の一興であつた。見馴れ
ない人々も親しげに思はれた。

玉突屋から二三軒隔てて理髪店があつて、そ
の直ぐ隣が八百屋だつた。土間を二つに仕切つ
た斜面に並べられた野菜や果物は、夜目には殊
に色取が美しい。バナ、だの枇杷だの夏蜜柑だ
のの甘酸はい匂ひが店先に漂つてゐた。魚屋

や牛肉屋の汚い臭ひには自ら顔を背けても、
果物の色や香りには食欲が刺激された。

溜池の方を本店にして此方は支店として、仕
事は職人任せで、自分は監督役でをり／＼見
廻つてゐる床屋の隠居は、蒸暑い晩などには、

使ひ古しの藤椅子を櫻の木蔭へ出して、隣近
所の様子をしながら、時々は側へ寄つて来る近
所の知人と世間話をしながら、屈託のない夕
涼みを楽しんでゐることもあつた。自分はベン

キの臭い臭ひが厭だけれど、仕事場を塗變へた
り、氣持の悪い風をおくる扇風機を備へつけ
たり、本店に劣らぬやうに支店をも綺麗に飾つて
繁昌させて、次男が兵役から歸つて來ると、自
慢して引渡すのを、今から思浮べては楽しんで
ゐた。

床屋が綺麗になるにつれて、八百屋も次第に
面目を改めた。際立つて變ることがないやうで
も絶え間なき榮枯盛衰は此處等の商家にも現は
れてゐて、何時も店先にくはへ煙管で頑張つて
ゐた胡麻鹽頭で殿い顔した藥屋の老人は、忌

中と書いた簾が出た後は、つひに姿を見せな
くなつた。八百屋の看板の八百清といふ屋號が
何時の間にか、八百信と變つてゐるのに、ふと
目のつく散歩客もたまにはあるだらう。新し

い柳が出来ていろ／＼な鐵詰や鐵詰が置かれ
た。以前よりも色艶のいい、旨さうな上等物の
水菓子が置かれてゐるやうだつた。代が變つた

のかと思ふと、家にある人間は以前から見馴れ
た顔だつた。薄い髪を櫛巻にしてゐる顔の割に

身體の横幅の廣い主婦が田舎訛りで何か云つて
ゐた。ひどい反つ顔で色の精黒い小柄な下女が
以前のやうに其處で働いてゐるのが殊に目につ

いた。二十を少し過ぎたくらゐる女盛りで、派
手な浴衣に紅い襷を掛けて、笑つてゐるやうな
顔してゐても、生地醜さは隠されなかつた。
で、通りすがりの縁のない人からでも、をり／＼
は侮蔑の目を向けられた。

「でも一生懸命に磨く」と見えて些とは綺麗に
なつた。初めて見た時にやまるでお化見たいだ
つたがと、床屋の隠居も獨りでさう思つてゐ
た。

八百屋の下女のおてつは影日向の差別なく素

直によく働いてゐた。妹は飯倉のあるお屋敷に奉公してゐるのだが、姉の方はさういふ處では勤まりさうにないといふ母親の考へから手足を働かせさへすれば事の足りるやうな處ばかりを渡つて来た。が、おてつは何處へ行つても居た、まれぬほどの不平を抱いたことはなかつた。怒鳴りつけられても打たれても涙の出るやうな思ひをしたことはなかつた。この八百屋でも最早一年あまりも安い給金で激しい仕事を辛抱した。家で下女の勤めをする外に御用附にまでやられた。靈南坂の奥の方にたつた一軒飛離れた得意先の勝手口へも毎日顔出ししなければならなかつたので、雨の降る日には尻を端折つて籠を抱へて、傘の重みに難堪することがあつた。見掛けは頑丈な體格をしてゐても、よく酸つばい汁を吐いたり腹下しをしたりするので、そんな時には力が抜けて歩きづらかつたが、自分から一日でも休むことはなかつた。

「親方の加減が悪いんだから、私が代りに一人て廻つてるのよ」と云つてゐたが、去年おてつが来た時から前の主人は青い顔して死もすると床に就き勝ちで、買出しに行つて來ると、打つ倒れてせいゝ息を切らしてゐた。

「借金だけやらゝ柳つて、これから商賣が

自分のものになると思つてると、こんな目に會ふだもの敵はないと、主婦のおきくは零しながら、いろゝゝな賣藥を買つて來て、お粥の外に厭がる牛乳をも飲ませてゐた。

「こいつを飲むと逆つて、氣持が悪い」

亭主の清吉は何を食べても腹に障るのにじれて、時としては女房にも當り散らした。近所の醫者に掛つてもはかゝしい利目は見えなかつた。

「東京の醫者は藥代ばかり高く取りやがつていゝ、加減な藥を呉れるんだから、幾ら飲んだつて役に立たん。おれはこんなものより大村さんの煎じ藥の方が利くやうな氣がするぜ」清吉は幼い時分の腹痛が一杯の煎じ藥で直ぐに癒つたことをふと思出して、矢も楯も溜らぬやうに、「あれはよく利いた。こんな西洋の酸つばい水藥や何かよりや、あの苦い煎じ藥の方が腹の皮へ浸込むから效能も多いんだ。お前が信造に手紙をやつて至急に送らせるやうにして呉れ」

「東京から田舎へ藥を頼むなんて逆さまごとだ」と、おきくは亭主の氣迷ひを笑ひながらも自分もその氣になつて、甲府在の亭主の従弟に宛てて葉書を出した。亭主よりもおきくの方が文

字をよく知つてゐるので、平生よく代筆してゐるのだつた。

「大村さんの煎じ藥が利かんやうなら、おれの病氣は當分直る見込みはないかも知れん。直らないとすりや、おれもいつその商賣を思切つて、誰かに譲渡して、田舎でゆつくり養生して、死ぬにしても生れ故郷で死にたいと思ふよ」

清吉がやゝもすると故郷の家と人とを話に出して、あれほど熱心であつた今の商賣を厭ふやうになつたのだ、おきくは胸甲斐なく思つて、笑つて開流してはかりはゐないで、時としては手酷しく叱りつけた。

「田舎に家や田地があるぢやなし、誰もお膳を据ゑて私達を待つてゐやしないよ。彼地へ歸つたつて、その身體で荒仕事が出来やしないしね。第一出て來た時の事を考へると、見窄らしい様をして私は歸る氣にやなれないやな。千兩箱を背負つて、隣近所へ大盤振舞でも出來るやうになつたら、そりや私だつて甲州の山中へ引込む氣にならうけれど」

「おれの痛い痒いが分らんから、お前は勝手なことばかり吐かしやがる。こんな商賣を何年やつたつてお大盡になれるんぢやなしさ。おれ

はこの身體ぢや大きい慾は持てない。粥の湯を啜つても御先祖の土地で安穩に暮らしたいぜ。おれが足腰が立たなくなりや、お前だつて氣樂なことを云つちや居られまいがな」

「なあに、お前さんが一月や二月休んでゐても、私一人で結構やつて見せるわな。自分で買出しにも行くし、車でも曳いて來らあね。どんなことになつてもこのまゝで凹みやしないよ。意地づくでもやり通さなければ私にや寢醒めが惡いだでな」

「おれは懶けるんぢやない」
清吉はつけくといふ女房の言葉を開解んで、自分の苦しいのが相手には分らぬらしいのを低語かしく思つてゐた。もつと優しくいたはつて呉れて、自分が痛みを感じた時には女房の方でも痛いやらな目顔をして呉れるのが至當だと思つてゐるのに、自分の側でさも旨さうに味噌汁を啜つたり、舌鼓を打つて四杯も五杯も温かい飯を食つたりしてゐるので、清吉は忌々しくなつてならなかつた。

「お前さんほど耐へ性のない人はないよ」と、これほどの病氣を無造作に思つてゐるらしい女房の心を憤つて、側の茶碗を取つて庭へ投げたこともあつた。

二

おてつは此處へ來てから間もなく、病人の不意の差込に手當をするため、主婦の命令で夜遅く隣の床屋へ湯を貰ひに行つた。最早店を仕舞はうとしてゐるところで、職人どもは訝しげにおてつを見入つた。

「どうも済みませんですけど」と譯を話すと、「へえ〜幾らでも持つてらつしやい、残りものだから」と春の高いのが茶化すやうに云つて、麥酒の空罐へ一杯鐵砲風呂の湯を詰めて呉れながら、

「昨夕夜中にも親方の加減が悪かつたのですか
私、私便所へ起きた時分にお隣ぢや燈火を點けて起きてゐたやうだつたね。主婦の聲も聞えとつた」
「私は二階に一人で寝るから些とも知らなかつたのよ」
「ぢやおれ達とお隣同士だね。一昨年だつたか、占ひの爺さんが室借しとつた時には、夏の中は兩方で窓を開放して、よく話をして居つたよ」と、春の高いのが春の低い職人に向つて云つた。

「僕は先日の朝一寸覗いて見ただけが、隣

の二階には疊も敷いてなきさうだね」おてつが出て行つてから、春の低いのが云つた。
「あゝ。易者の爺さんは面白い奴で、窓越しで賭なんなかよくやつたものだ。角力が好きでね。なに見に行きやしないんだがね。夏場十日間は毎晩商賣から歸ると、翌日の取組の賭が始まるんさ。此方が先へ寝てると、あくる朝吃度店へやつて來て、十日間一日も賭を缺かしたことはなかつたね。易者だつて駄目だ。始終見込を外してゐるんだから」

「どんな上手な易者でも自分の事は分らないものだとき。…さう云へば、お隣の病人は長くは持たないぜ。胃だらうつて豊さんが云つてたよ」

「不斷粗い物ばかり喰つてるから病氣になるのさ。易者の爺さんがさう云つてたが、そりや酷いんだつてよ。あの主婦は慾にかけちや恥も外聞も構はないのだからね」

「他人事ぢやない、誰しも不斷の食物が肝心だあね」
二人が戸締りをして仕事場の火を消して、野猿梯子を踏んで、二階へ上ると、小僧の邦太は隅つこに小さい頭を出して眠つてゐた。微かな鼾を聞いてゐた。

「僕等の床をのべてるから感心だよ」
「邦公、おべつかをつかつてやがるな。今から根性がませてゐていけない。君が拳固を喰はせかけたから、御機嫌を取るつもりでこんな真似するんだよ」

「でも可愛いぢやないか」

二人は每晚の話の種にしても話し飽かぬほど樂みにしてゐる愛宕下の馴染の賣女のこと、今夜は口に出さず、親方の蔭口を利かないで、寢床に就くと正體もなく眠入つてしまつた。

おてつは湯の入つた麥酒罐を主婦に渡して、ちろ／＼と介抱の手傳ひをした。が、病人の疼みは薄らぐがなかつた。先日から飲みつゞけてゐる田舎の漢法醫の煎じ薬は一時は病人の氣休めになつてゐたが、今夜は何の利目も見せなかつた。

「上田さんに来て貰はうかね」と、主婦は止切れ止切りに診せてゐる近所の醫者を呼ぼうとしたが、

「遅いから、明日まで我慢しよう」と、病人は冷汗の浸出てゐる身體に力を入れて、齒を喰ひしづつた。

「我慢が出来りや、上田さんなんか呼ばない方がいゝよ。あの人は一時のがれの誤魔化しだけ

ら。それよりやその中に評判のいゝ病院へ行ってよく診て貰つて緩くり治療することにしたらいゝだらう」

夜中に醫者を叩起してはいゝ顔をしないだらうし、往診料だの何だのと無駄な入費がかかるのだしと、主婦のみか病人自身でも念頭に置いてゐた。

「折角煎じたのだから、もう一口飲んで御覽な」

「苦くつてとても飲めない」病人は苦い汁を鞆の延びた頸へだら／＼と滴らしてゐた。そして、右へ左へぬたうちながら呻いてゐたが、やがて、

「おれは二階に寝たいから蒲團を持つて行つて呉れ」と身體を上げた。

「何を云ひ出すんだね。動いちゃ悪いだらうにや」

「寢床が變つたらいくら氣持がよくなるかも知れない」

「そんなことがあらずか」と、おきくはふと甲州訛りを出して叱つたが、病人が強ひて望むので、おてつに夜着を持たせて、自分は病人を介抱しながら二階へ連れて行つた。天井は低いし、掃除など行届かないので、穢臭ひ臭ひがし

て氣持が悪いだらうのに、病人は其處に寝倒れて暫らく呻いてゐた。

おてつは壁際へ自分の寢床をのべて眠つた。「お前も寝ろよ。もう大分よくなつたから」と、病人は女房にも二階へ夜具を持つて来るやうに勧めた。

「氣が利かなくつても、おてつが来てくれてから、おれは餘程氣丈になつたぜ。どう云ふものだから、おれはこの頃は夜中に目が醒めた時に、誰と云ふことはない知つた人間を思出すんだ。三人でも四人でも知つた者が側に寝てゐてくれ、ばい」と思ふことがあるよ」

「病氣のせるだか、お前さんも次第に妙なことばかり考へ出すよ」おきくは怠い笑ひを浮べて、「それで二階に寝る氣になつたのかい。おてつの方に寝るのがいゝよ。病氣するとそんな好奇なことが考へられるかね」と冷かすやうに云つた。

「それはさうぢやない」病人は眞面目に打消して、不斷望んでゐることを口には出さないで、竊かに思ひやつてゐた。……一日も早く稼業を止めて、親類縁者の住んでゐる田舎へ歸つたなら、身體にもいゝし、どれほど心丈夫になるか知れないと、日ましに思慕つてゐるのだつた。

幾らも金は持つて歸れなくつても、こんなに患つて生れ故郷を懐かしんで歸つて行く自分を、古馴染の八達が見殺しにすりやしない、皆なしで親切にいたはつてくれさうなものだ。女房

だつて稼業に氣を取られてゐるから、おれの苦痛を十分に憐んでくれないのだ。……

おきくは不承々々に夜具を運んで来て、病人と下女との間に横はつて、今まで我慢し切つてゐた眠たい眼を閉ぢると、おてつと二人掛け合ひで高い聲をかき出した。清吉は獨り目を醒ましてゐながらも、二人の寢息を手頼りとしてゐた。が、疼みが薄らいで来ると、自分の手

だの足だの目に立つほどの衰へが涙ぐまれるほど悲しくなつた。一度々々の激しい疼みに五體の肉の削がれて行くのを自分で撫でて見ながら、側の二人の女の憎いほど肥つてゐるのを羨ましがつてゐた。そして、女房が田舎行を

承知しないとすると、信造をあゝの男の望み通り此方へ呼寄せて、自分の代りにこの商賣をやらせようかと心が折れて来た。先日からおきくも頻りに望んでゐて、親切ごかしに話を持出してゐるのを、自分の手傳ひをさせてゐる間に、横取りせられはしないかと氣を過して、何時も

話を進つてゐたのだつたが、今夜のやうな心

細い思ひをする時には、信造でも誰でもこの家にのてくれる方がよかつた。人手があればおきくももつと自分の介抱に身を入れて呉れるかも知れない。……

さう決心がつくと、直ぐにさう云つて女房を喜ばせたくて、「きく、きく」と聲を掛けながら、足を伸して女房の腰を突いた。が、熟睡に落ちてゐるおきくは何とも感ぢなかつた。強く突くと、足を避けて口の内で何やら寢言を云つた。「同じ食物を食つてゐながら、おれが次第に痩せるのとあべこべに、此奴はどうしてかう

身體の何處から何處までもぶく／＼と肥るのだらう」と、足の指先で相手の皮膚を撫でて楽しんでゐたが、すると、田舎で子供の時分に、おきくが女だてらに川で泳いでゐたことが思用された、男の子に負けないやうに泳ぎも上手だつた。

「あ、吃驚した。何をするんだね」おきくはふと夢を破られて頓興な聲を出した。煤ぶつたらソップの淡い光は病人の青褪めた微笑を照らしてゐた。

「お巫山戯でないよ、明日も早く起きなげやならないんだからね」と云つて、おきくはくるりと背を向けて、「頭を枕に落した。

「お前に聞かせることがあるんだ。……些との間起きとれよ」
「もう遺言なんか聞かないよ。私は明日の朝の仕事があるんだから、お前さんの遺言道楽のお相手にばかりなつちやゐられないよ」

「馬鹿。お前にもつと樂をさせようと思つてるんぢやないか。おれもどちらつかずで愚圖々々しとつても仕様がなから、信造を呼寄せようかと思つてるんだ」
「本當にその氣になつたのかい」
おきくは振返つて寢呆眼で病人をちらつと見たが、そのまゝ目を瞑つて快い眠りをつけた。清吉は飽氣ない思ひをして、今自分が云つたことを考へ直してゐたが、人手を借りないで二人で汗水滴らして稼いで、日々の上り高を計へては瞞み合つてゐた昔の夜が懐かしくなつて涙が流れた。

三

信造は一月も立たぬ間に、肥桶の臭ひを落して、角刈頭のきび／＼した目鼻立ちの、八百屋の御用間などには惜しいほどの若者となつた。主婦に熱心に仕込まれて獨りで買出しにも行けるやうになつた。自轉車の稽古もはじめた。

まには骨休めに近所の活動寫眞や浪花節へも出掛けたが、そんな時には主婦かおてつかが案内に立つた。

「今日は信ちゃんも奏館へ行くのよ」などと吹聴して、おてつはよく床屋の職人に押揃はれた。

「羨ましいいね。あんまり見せつけるものぢやないよ」

「私ね、活動は飽きくするほど見てるんだからさう面白くはないのだけど、信ちゃんはおかから来たばかりだから、そりや面白がつて見てるよ。私ね、寝る前にはいろんなことを話して聞かせるの」

「今に二人で世帯を持つて別に商賣でもはじめるんだらう。僕等も信ちゃんにあやかりたいものだね」

「人を馬鹿にしてるよ」
おてつは押揃はれたために、隣の職人の手の隙にのみる時には、戸口に立つて笑顔を見せたり聲を掛けたりした。

床屋と懇意になると、おてつは色の青白い目のばつちりした可愛らしい小僧の邦太が、手荒くこき使はれてゐるのを感然に思ふやうになつた。筒袖に白い消毒衣をつけて高足駄を穿いて

仕事の手傳ひをやつてゐる邦太は、二人の職人から不斷荒い言葉をかけられるばかりでなく、兎もすると、首筋を掴まへて小突き廻されたり、頬べたを殴られたりした。

「バリカンは罐で消毒だけしときやいよ。お前なんかが下手にいぢるとまた壊れるぜ」客の耳の穴をほじくつてゐた一人はさう云つて、横目で邦太の方を見てゐたが、やがて、「そら云はないこつちやない」と云ふが早いか、耳搔を持つたま、邦太の側へ寄つて、バリカンを取つて、「高木さんまた齒を壊したよ。…螺旋を取つていぢつちや調子を狂はせてしまふ。幾度云つても聞かないんだな」

邦太は頭の天邊を拳骨で一つ二つ突かれた。が、彼れは目尻に微笑を湛へて、機械の先を見入つてゐた。

そこへ、親方が秋草を生けた花瓶を持つて奥から出て来ると、かの職人は口を尖らせて大袈裟に知らせた。「邦、親方に謝らないか。戯談ぢやないぜ」

「どうも済みません」邦太は指圖通りに云つて頭を垂れた。

「此奴は少し生ちゃんだからね」親方は花瓶の置場に迷ひながら軽く云つた。

「本當に強情だよ。何が面白くつて機械いぢりをするんだね。お前達に機械は直りやしないよ」

「本店にゐた時にも吉の奴と二人で電氣の球の中の針金を壊したことがあつたよ」親方はそんなことを云つて職人に跋を合はせてゐたが、やがて手を洗つて奥へ入つた。

高木と呼ばれた香の高い職人は先きから黙つて顔剃りをやつてゐたが、仕事は済むと、脚に置かれたバリカンの齒を意地悪い日付で緩べてから、突如に邦太の頬を平手で二つ三つ續けて打ちにした。先きの拳骨とは異つてピシヤツと勢ひのいゝ音がした。

「馬鹿つ。悪戯をさせに連れて来たのぢやないぞ」言葉は後から出た。

邦太は首を縮めて目をばちくりさせた。涙が日蓋に浸出た、が、疹みが去ると元の通りけりとして、表を通る自動車は玻璃越しに眺めてゐた。

おてつは通りすがりにちらとこの打擲の様を陳見したのだつた。そして、暫らく立留つて呆氣に取られてゐた。何故あんな可愛い兒を惨い目に會はすのだらう。家の主婦でさへ私を打つたり蹴つたりしたことは一度もないのにと、

自分の弟の處げられるのを見たやうな腹立たしさを、春の高い職人に向つて感じた。で、あくる日の午過ぎに、本店から親方が連れて来た子供を乳母車に載せて遊ばせてゐる邦太に會ふと、

「昨日はどうしたの。痛かつたらう、あんなに打たれちゃ」と慰めてやつた。

「……」邦太は小鼻をびくつかせて、ふんと笑つて答へなかつた。

「あんなに邪慳にされて、お前さんは辛抱がいわね」

邦太はこの女の言葉や乳母車の子供の泣聲に氣を留めないで、電車や自動車の街上の騒々しい物音に心を取られて、のろ／＼櫻の木蔭を歩いてゐた。自轉車に乗りたいたと彼れはかねて望んでゐたので、自轉車を輕妙に駛せてゐる人間を屢々羨ましさうに見送つた。八百屋の御用聞にでも牛肉屋の小僧にでも、自轉車に乗れる家に使はれた方が、床屋で働いてゐるよりやどれほど仕合せであるか知れないと、彼れの子供心にもそれ一つが儘にならぬ浮世として、時々思出されたのである。

何氣なしに琴平の宮の前まで乳母車を押しして行つた。嬰兒の泣聲があんまり烈しくなると、

邦太は手で口を蔽うて叱りつけたりした。薄毛を頂いたこの嬰兒が顔をくしやく／＼させて泣く有様は、醜い厭らしいものとして彼れの目に映つた。で、賺して泣止ませようといふ氣にはなれないで、自分が高木などに打たれるやうに自分もこの子をビシャ／＼打据えたいやうな氣がした。柔かい耳朶を引張つたり、鼻をいぢつたり、頬べたを抓つたり、嬰兒を玩具みたいにしてゐると、犬や猫を弄んだり、機械いぢりをしてしたりする時よりも、餘程いゝ氣持であつた。

で、往きにはあたりをきよろ／＼見ながら機械的に乳母車を押ししてゐた彼れも、歸りには屢々珍らしさうに嬰兒のふは／＼した肉付に指を觸れて樂んだ。弄ばれると、嬰兒も何時かへら／＼微笑を洩らした。都の埃は立つてゐても、爽かな初秋の風は二人の頬に觸れてゐて、邦太は久振りにいゝ氣持で店へ歸つた。

「邦ちゃん」と、その後おつが會ふたびに親しげに聲を掛けるのを、邦太は一度も返事をしないで訝しげに見てゐた。そして、側へ寄りつかれると、女臭い鼻息が鼻を衝くのが厭きさに、直ぐに避けるやうにした。が、時々嬰兒の守をさされる時には、今まで知らなかつた愉快を感じ

出した。涕や涎を滴れた顔は汚いけれど、柔かい肉の塊りであるこの子の手で、耳朶でも頬べたでも、恣にいちぢり廻し小突き廻すのが、次第に彼れに不思議な快感を與へた。で、乳母車で近所を曳き歩くよりも、抱いたり負つたり、二階などへ連れて行つたりして、玩具にしてゐることもあつた。

「守をさせに來させたのぢやないぜ」職人は忙しい時には忍び音で怒鳴つた。

四

「矢張信造に來て貰つてよかつた」清吉は、絞りの三尺を締めて、矢立と煙草入とを腰の左右に差して、出て行く信造の後姿を見入つて、頼もしげに云つた。

「さうとも。あの人はもう田舎なんぞへ歸る氣は些ともない。どうしても東京で仕上げて家を持ちたいと云つてるんだから、こんな商ひでも身を入れてやつてらあね。お前さんさへ元のやうに丈夫になりや、どし／＼面白い商賣が出るんだよ。おてつなぞに廻らせといたんぢやいゝお得意は取れつこはありやしない。屋敷屋ぢや先月には店の商ひを別にしても、千圓から入つたといふぢやないかね。値が高くて店

が立派だとあゝ盛つて行くんだもの」

「屑瀝屋にてつ張らうたつておれ達には及びもつかないや」清吉は興もなさきうに云つた。稼

業が可成りに榮えて日々の生活に附りのないのは元より有難いことだが、それよりも信造が實

の弟も及ばぬやうに大切に呉れるのが悦しかつた。「信造にしろおてつにしる些とも悪

氣のない人間だからいへよ」

「おてつも使ふには重寶だけれど、この頃は妙だよ」おきくは冷笑を洩らして、小唄か何か口

ずさみながら洗濯をしてゐるおてつを横目で見ながら、小聲で、「お前さんは氣がつかないのか

い。あの女がいやに身のまはりを構ふやうになつたよ」

「さうかい。歳が歳だから無理はないさ」

清吉は寢床の上に胡坐を掻いて、窪んだ目で

おてつの方を顧みだが、信造が来てからおてつ

の様子が變だと譯ありげに云はれると噴出した。

「まさか。…お前はそんなことに氣を廻す女ぢやなかつたがなあ」

「さうでないにしても、若い者二人を二階に寝

かすのはよくないと思ふよ」

「だつて外に寝かすところはなないぢやないか。

おれ達が二階に寝て、あの二人を階下へ寝かしたつて同じことだしさ」

「お前さんは目敏いんだから、夜中にでもよく氣をつけといでな」

おきくがまことしやかに云ふのを、清吉はう

んらんと素直に聞いてゐるが、さういふ色つぼ

いことに思ひを馳せると自分の息までが臭いやうな氣がした。

「いくら物好きでもあの女ぢやあね」と力のな

い笑ひに紛らせて、寢床に横はつた。

が、おきくは初めの中は心に掛けなかつた夜の

二階から、この二三日は頻りに面白くない思

ひをさされることがあつた。夜中にふと變な夢

などから目醒めた時に、鼠の音だの寢言だのに

胸騒ぎさされることがあつた。いくらお仲見た

いな顔をしてゐたつても、若い女と男とを一

つ部屋に寝かしては、どんな間違ひが起らないとも限らないと案ぜられ出した。おてつが

湯上りなどに白粉や香油をつけたりするのには服

らしくて、つい冷かしたくなつたが、おきく自身、亭主の長忠ひにかまけて汚れ次第に身装ふ

りを構はないでゐるのが省みられた。

おてつとは僅か五つしか歳が違はないのに、

頭の髪をたゞの一度も満足に結はないで、手足

を荒らしてばかりゐるのが多少氣に掛らないではなかつた。鏡に映る自分の顔が歳よりも老けてゐるらしいのが、今更のやうに目立つた。

で、三日過ぎぐらゐに風呂屋へ行つたものが、

隔日かあるひはついでに通ふやうになつた。久

振りて薄い髪を洗つて髪結びの手を借りた。

「主婦、私は一度島田に結つて見たいわ」と、

おてつは主婦の頭を見詰めて、ひそかに髪の毛の濃い自分を誇つて、島田に結つたならと、自分の影を幸福に描いてゐた。

「島田にでも女優巻にでも好きなやうに結ぶがいゝさ、お前さんにはよく似合ふだらうから」

おきくは椰揄つたが、おてつは髪を結ぶ餘裕

など與へるところか、自分のしてゐた臺所仕事

も大方はおてつに働かされた。病人の肌着でも下帯でも自分のまでも、おてつに洗濯させるやうにした。汚らしいいくら何でもなかつたけれど、主婦が身仕舞に氣を取られ出してから、前

よりも仕事で忙しくなるのがおてつにはつらかつた。

「そんなに働いてゐて、お給金がたつた一圓五十

十銭なの。もつと上げて貰つたらいゝぢやないかね。お前さんのやうな人を私の家でも捜して

ゐるんだから。正直でよく働いて呉れる女中

はなかく見つからないのだよ」と、下女に出られて困つてゐる川瀬さんの奥さんが喉かすやうに云つた。

「どこへ行つたと同じことだから、馴れた處に居つてゐるのがいゝつて、お母さんが云ふですよ」

「お給金を溜めてお嫁入の支度をしてゐるのだらうね」

「私など無器量だから誰も貰つて呉れやしませんよ。一生獨りで通すつもりなのよ。その方が結局氣樂でよ御座んすわ」と云つて、おてつはへゝゝと笑つて迷ひもしなかつた。

二階に信造と寢床を並べてからは、おてつのもろい神經もいくらか鋭敏になつて、今まで氣に留めなかつた周囲のことが、多少稀くも痛くも感ぜられ出した。そして、時々は信造に向つて話した。

「家の親方は病院へ入院したらいゝだらうにね。少々お金がかゝつても、早く直して稼いだ方が得だらうと思ふよ。信ちゃんがさう云つて勧めるといゝわ。私でさへたまにはお腹の疼むことがあるんだから、親方はあゝ瘦せるまでに随分疼みが酷いんだらうと思ふと氣の毒でならないのよ」と、他人の疼きを感じたりした。

「なに、また直る時が來たら直らあ」信造は卒氣なく云つた。日が經つにつれて、おてつなぞと親しく口を利きたくなくなつてゐた。二階へ上るや否や、寢床へ入つて直ぐにぐつすり眠るやうにしてゐた。

「でも出来るだけのことはして上げたいゝだらう。親方はこの先き長かあないやうに私には思はれるよ。親方が死んだらこの家はどうなるのかわらん」

「どうなるのかなあ。おい等にや分らないが、死ぬるなんて縁起でもないことを云ふなよ」

「さうしたら信ちゃんがこの店を貰つて商賣をするんだらう。親方が先日主嫁にさう云つたつたもの。信造に此家を譲つてお前は田舎へ歸れて、先日遺言見たいなことを云つてゐたよ」

「おい等は一生八百屋稼業をやるために東京へ來たのぢやないや。へゝんだ」と、信造は相手を下げたやうな目付口付をして、戯れに威張つて見せた。
「薄々しい口調や體格はおてつを刺戟して昂奮させた。本當だわ。お前さんは八百屋の御用聞なんかにや勿體ないわ」と、心からさう思つて云つた。「ぢや、何になるつもりなの」

「藥屋や質屋の番頭さんも坐つてばかりゐるんぢや氣づまりで厭だし。……おらあ先日から自分に似合つた東京の商賣を氣をつけて見てゐるのだが、自動車の運轉手になりたいなあ」

「だつて危いぢやないの。人でも殺して御覽なれ」

「おいらあ自分で自動車に乗れる身分にやなれつこはなないんだから、せめて運轉手になつて東京に乗廻して見たいなあ。仲夫は御免だし、自轉車もあんまり面白いのぢやないや」

「信ちゃんも醉狂な人だよ。もつと地道な商賣をしようとは思はないのかね」

ふと興に乗つて二人の聲が高くなつたが、すると、階子段の方から失つた聲が聞えた。
「騒々しいぢやないかね。階下には病人が寝てゐるんだよ、分らないのかい」

階子段を中途まで上つてから叫んだおきくは、それだけでは飽足らなくて、階上まで上つて行つた。二人は寢衣のまま立竝んでゐた。おきくは迂散臭い目付で男女を見比べたが、おてつのにやゝ笑つてゐる顔付は小櫃に觸つて溜らなくつて、
「さつさと寝たらいいぢやないかね。朝いくら呼んでも早く起きもしない癖に」と、つつけんと

んに云つた。

「ぢや目醒し時計を私の枕許に置いていて下さいな。主婦より早く起きますから」

「生意氣お云でないよ。……お前は餘計なお喋り舌なんかしないで、自分のすべきことをちゃんとしさへすればいいんだよ」

おきくは相手が自分の前で恐入つてゐないのが、この時無闇に腹立たしく、「黙つて寝ろつたらお寝よ」と、おてつの肩に手を當て、押倒すやうにした。先きから夜具を被つて目を閉ぢてゐた信造は、おてつがどんと寝倒れる音に薄目を開けて顧みたら、すると、主婦が此方へ怖い目を向けてゐたので、慌てて寝返りをした。

「階下には病人があるんだから、些とは遠慮してをれ」と、おきくは心を押し下階下へ下りた。

夜が更けたと云つてもまだ終電車の通るには餘程間があつた。隣の床屋の職人は二人で俄かに思立つて、邦太に言合めて置いて家を忍び出した。「少しの間だから成るべく起きとれよ」と吩咐けて、八百屋のと向ひ合つた二階の窓を開けさせてゐた。

市中であつても虫の音が彼方此方に聞えた。邦太は窓に凭れて居陣りをしながら、月に一

度か二度は吩咐けられる厭な役目を守つてゐたが、隣の二階の物音には何となしに聞耳を立てた。

「喧嘩をしてゐるんだな」と面白がつたが、後はひそく話になつて静まつてしまつた。

五

書間はさうでもないけれども、夜になつて亭主の側に寝てゐるのを、おきくは日に／＼味氣なく思詰めた。悪いと云ひながらも時々起きて店先へ出たり、信造などに指圖したりして、商賣に氣を紛らせてゐた頃は、その中には全快して、働き手揃ひで稼いで店も擴げる話などして、

まだしも頼もしかつたが、寢床に就きつきりになつたこの頃の亭主の變れた顔からは、將來の望みは何一つ得られなかつた。醫者も首を傾げてゐたが、とても助かる見込みがないとすると、東京へ死にに來たやうな亭主の不運が可哀想でならなかつた。せめて生きてゐる間だけは好きなやうにさせて大事にしようと思つてゐたが、眞夜中などに譯の分らぬことをくどく／＼云はれるのはつく／＼惱まされて、早くこんな思ひから逃げられたらと、死ぬるものなら早く死ねと、むごい思ひが頭を擽めることがあつた。

胸が締めつけられるやうで、吃逆し上げる苦しさを覺えた時には、病人はよく「南無阿彌陀佛」を續げさまに口にした。それが不明瞭な力のない聲で吐かれた。

「かう云つてゐると、いくらか氣が紛れる」と云つてゐた。

「何か外の事を云つたらいいぢやないか。陰氣でいけないよ」と、おきくが顔を擽めると、

「外の事を云ふ氣にはならないよ。南無阿彌陀佛だと御利益があるかも知れんぢやないか。お前も神佛を拜んで呉れ。女でお前のやうに信心氣のないものはないぜ」

「一家にや神棚もお佛壇もないから拜まつたつて拜めないよ。南無阿彌陀佛なんか聞いてても哀れでいけないから、何れこんな病氣くらると元氣を出して御覽な。その方が峠度いいよ。お前さんは病氣に負けるからいけないのだよ」

「お前は病氣をしたことがないからそんな思造りのないことが云へるのだ」

泥色をした亭主の恨めしさうな口振りはおきくにも凄かつた。その長くのびた爪で此方の胸へ飛びついて來さうに思はれて身震ひした。「お前さんが望むのなら金毘羅様へお百度でも踏むわ。水垢離でも取らあね」

「さうして呉れるかい。明日の日にも金毘羅様へお詣りして呉れ」

「あゝおきくは氣休めに受合つたものの、眞面目に神佛へ祈願するやうなしをらしい心になれなかつた。東京へ来た當座一度遊びがてらに羽田のお稲荷様へ詣つて、商賣繁昌を祈つて御供物を頂いた時には、何となしに御利益があるらしく思はれたが、かうも衰へた死相を帯びた亭主の病氣が、神佛の力で癒らうとはどうしても信ぜられなかつた。

「おれは後一年でもいゝから丈夫な身體になりたいぜ。おれの壽命が盡きとるのならお前の壽命を一年取つておれの壽命に足しをして呉れ。お前は長生をすのだらうから、一年ぐらゐおれに譲るやうに金毘羅様にお願立てをして呉れ」

「あゝいゝとも、二年でも三年でも」

「おれの云ふことを戯談にするんか」女房がいゝ加減にあしらつてゐるのを知ると、病人は心細くもあり腹立たしくもなつた。

「だつて困るぢやないかね。私の壽命を切取る譯にや行かないしき」

「お前に親切氣がないからだ」

「そんな無茶を云ふもんぢやないよ。私は一日

働いて眠くつてならないのに、かうして夜中に起きてるんぢやないか」

おきくも我慢しかれて荒々しく云つたが、すると、病人の窪んだ目には涙が溜つた。

「眠いくらゐが何だ。おれは今夜にも死ぬるかも知れんのに、お前は眠いくらゐがそんなにつらいのか」

「……」

おきくは例のやうに御機嫌を取らないで、頑なに口を噤んで目を背けてゐた。そして、病人が殊更めいた術ない聲して者切らぬことを言出すのを聞いてゐられなくて、ふと寢床を離れて寝衣に細帯を締めたまゝ、鼻所口から廻つて表へ出た。終電車も餘程前に通つた後で、周囲は寢靜まつてゐた。

薄着には冷た過ぎる夜風に吹かれてゐると、胸の蠕りが融けて生返つたやうな氣持がした。月は東京のやうな市街にでも照つてゐるといふことを今初めて感じたやうに空を見上げて不思議に思つた。……おきくは病人の臭い息のしな

いとところでのびくと手足を伸ばして心まかせに休息したかつた。

「主婦 どうしたんです」躡んでゐるおきくの後から、突如に聲がした。

「おや、今時分何方へ？」

「へゝゝゝ。……御病人は些とはよくなりましたかい」

「そりやいけませんね」

床屋の職人は二階を俛いで邦太を呼んだ。兩戸は開いてゐるのだが、寢込んでゐるのか返事がなかつた。例なら一人が迷れの肩車に乗つて隣の廂へ飛びついて、窓から二階へ入るのだが、今夜は主婦に見られてゐるので、さうも出来なかつた。

「仕様がないなあ」と呟いて、「邦……邦公ツ」と聲に底力を入れて呼んだ。

女の所へ遊びに行つたのだなと、おきくは興がつて見詰めてゐるが、「私が二階から呼んで見ませうよ」と云つた。

「お氣の毒ですがさう願ひませうか」

「どういたしまして」おきくは笑ひくく云つて、「でも、朝まで家を空けないでちゃんと歸つて來なされるから感心ですね。引留めたせうに、さぞと些つと押揃つた。

「そんなんぢやありませんよ」

「お二人とも色男だからね。油断は出来ないうよ。……ちよんの間の隠れ遊びつて面白いもの

ですつてねー

「主婦も口が悪いや」

おきくは珍らしく戯談口を叩いたのでいゝ氣持になつて自分の家へ入つた。そして、病人が何か云つてゐるのを見向きもしないで、いそいで二階へ上つて兩戸を開けて、「邦きん」と二度呼立てた。はては、屋根へ踏出して隣の窓の障子を開けて呼んだ。

「落ちたら大變だ。泥棒見たいだね」と、二人を見下して云つた。

邦太は眼呆眼をこすりながら窓から顔を出した。おきくは、「左様なら」を云つて、兩戸を鎖したが、眠氣が去つて頭は浮えてゐた。先きからの物音にも夢を破られないで、おてつや信造は正體なく眠つてゐた。階下からは「おきくおきく」と呼んでゐたが、その聲を聞くと、おきくは階子段を下りるのが厭で溜らなかつた。階下の電氣の光を受けて、上り口が明るいはかりで、二人の寢姿はよく見えなかつたが、信造の男らしい深い息を聞いてゐると、そのきび／＼した逞しい身體が闇の中にも描き出された。おきくは素り足で二階を彼方此方と歩いてゐた。二人の寢床の中へ割込んで眠りたかつた。「おきく、お前は危をしてるんだよ」階下の聲

におきくは眉を擧めて舌打ちした。返事をしないでゐると、暫らくしてふと上り口に亭主の顔が現はれた。階子段に足音の前觸れもしなかつて出抜けだつたので、おきくはぎよつとした。見馴れた亭主の顔がまるで亡者のやうだつた。

「先きから何をして騒いでゐたんだ」

病人はその／＼上つて來たが、おきくが何か云はうとしても言葉が口から出ない前に、信造の足に蹴躓いてばつたり倒れた。

「危い……」

おきくは思はず叫んで、病人を擁抱して、「ちつと寢てればいいのに。私は夜遊びから歸つた床屋の若い衆に頼まれて小僧さんを起しに來ただけだよ」と、邪慳に云つた。

「そりや餘計なおせつかいだ。外へ出たり二階へ來たり、おれが物を云つても返事もせんぢやないか。おれが疼い目をして、今に今死んでも、お前は何とも思はんのだな」

「もう澤山だよ」

おきくはこの瞬間、亭主でも何でもない只の亡者に取つかれてゐるやうな不氣味さを覺えて、持つてゐた手を離したが、すると、病人は獅噛みついて、髪の毛をも握つて、「出て行き

たきや出て行け」と怒鳴つた。

「何をするんだよ、この人は」

おきくは我武者に相手を突放した。寢床の側の躡ぎにやうやく目を醒ました信造は、譯が分らないので夢を見てゐるやうな氣で、マツチを擦つてランプを付けた。胸をはだけて脛も露はな夫婦のしどけない様は滑稽だつた。おきくから譯を聞いて、病人を慰めながら階下へ連れて下りたが、おきく自身容易に下りて行かなかつた。

「吃驚したよ。おいらの腹の上へ打倒れたのだもの」

信造は思出すと可笑しくつて溜らないやうに、おきくに向つて云つて、元の寢床へ薄線込んで、「姉さんも早く階下へお出でよ」と急立てた。

「さう追立てなくつてもいい、ぢやないか」おきくは不承不々に階下へ下りた。そして、物をも云はずに夜具を引被つて、直ぐに空敷をかいてゐた。

六

「今日は」と、床屋の職人に朝夕の挨拶するたびに、おきくは意味ありげな笑ひを送つてゐた

が、先方ではあまり取合はなかつた。そして、職人達は、いけ好かない主婦として商口を利いてゐたが、おてつから夜中の取組合ひの話を知くと、それを誇張して考へて、寄つて来る近所の若い者に笑ひ話の種として吹聴した。

「主婦は床晚二階へ留つて来るのかも知れないぜ。お前さんは用心してゐないと信ちやんを取られるかも知れないぜ」と、職人はおてつを擲擧つたりした。

「いやな事云ふもんぢやないよ。信ちやんが聞いたら怒るよ」

おてつは眞に受けなかつたけれど、いゝ氣持はしなかつた。先日の晩夢現で見てゐた騒ぎも、さう云はれて見ると、疑ひを容れられないでもなかつた。信ちやんに聞く譯には行かないが、これから寝たふりをしてそつと様子を見てみようと思つた。

で、例は目を瞑りさへすれば直ぐに眠入れるのに、その夜は思詰めた一心から、夜明け前まで齒を喰締めて起きてゐた。かうして起きてゐると、夜の長いことがおてつにもつく／＼感ぜられて、信造の前後不覺に寝てゐるのが不思議でならなかつた。階下も静かで何時まで立つても人の来る氣色はしなかつた。

天井で鼠の荒れる音や、彼方此方で吠える犬の聲を聞きたがら、夜中といふものはこんなにも寂しいものかと思つて、耳を澄まして退屈な時を過した。

あくる日おてつは居睡をしつづけた。午過ぎに靈南坂のお得意へ品物を届けて来た歸りに、どうにも我慢出来なくて、道傍のお寺の石段に腰を卸して、一しきりぐつすり寝入つた。搖起きて目を醒すと、巡査が前に立つてゐた。

「注意されただけで叱られもしなかつたが、頭を下げてお詫言をして家へ急いだ。」

「何處をまご／＼してんだよ」主婦に劍突を喰はされたので、時計を見ると、短い針が最早四時を廻つてゐた。

二晩つゞけておてつは眞夜中まで睡を我慢したが、つひに堪へられなくなつた。病人の苦しきうな聲は時々聞えても、何時もよく眠る信造の側には別に異常はなかつた。で、安心して平生の通りに、快い眠を樂んだが、しかし、以前よりは多少目縮くなつたのか、眞夜中にふと何かに脅かされたやうに目の開くことがあつた。

「信ちやんや主婦に暗いことは此ともない」と、おてつは床屋の職人に向つて、一度躍起となつた。

て辯護した。

「戲談だよ、そんな事のある譯はないやね」と、職人は笑ひ／＼謝つた。

が、この戲談半分の噂も何時となしに、信造の耳に入つたので、信造は驚いた。根も葉もないことを云はれるのも口惜しかつたし、殊に病人に對して氣の毒でならなかつた。

で、「相談がある」と云つて、おきくを二階へ呼んで、

「姉さん、おいらは暇を貰うて故郷へ歸らうかと思つてるけん」と少し涙を熱くして云つた。

「甲州の方に急用でも出来たのかい」

「おいらは矢張田舎で働いてゐるんが氣樂でいいと思ふよ。東京は口が煩さいでな」

「お前さんのことを誰か悪く云つたといふのかい。何だね、そのくらゐのことでき」おきくはほんやりある事と思つて笑つた。

「姉さん知つてゐるんですか。他の事とは異つて厭なこつたからな」

「お前さんも氣が弱過ぎるよ。おてつとどうかうつて、誰かに擲擧はれたのだらう」

「あの女なんざ」信造は吐出すやうに云つた。

「姉さんだつて知つたら厭になるに違ひないや」

信造が遠廻しに微笑かすのを、おきくは興ありげに聞いてゐた。「馬鹿にしてるよ」とにつたり笑つて、

「あまり馬鹿げて怒られもしないぢやないかね。そんな話らないことを氣にして田舎へ行つちまふつてことがあるものかね。却つて變に思はれるわね」

「おらあ大將の病氣を心配して、御利益がありや鹽斷ちでも發斷ちでもするくらゐに思つてるのに」

信造は昂奮して云つたが、相手が噁などにさして驚いてゐないのを見ると、彼の若い心にも多少の安易が得られた。

「初めから来て呉れなきや兎に角、今になつてお前さんに出て行かれちや、この商賣は今日が日から止めつちまはにやならないよ。それに、私でさへ見窄らしい様をして故郷へ歸るのは死んでも厭だと思つてるのに、お前さんは此方でも何も出かさないで、のこく歸つて行く氣になれるのかい」

さう云はれると、信造は自分が輕はずみに過ぎたことや意氣地なしに見られることが恥かしくなつた。そして、主婦と差向ひであるのが極まり悪くなつて目を外した。今まで夢にも思つ

てゐなかつたことで心が濁らされた。

「僕當に力になつてお呉れな。私はどうしてもやり通すつもりだから、信ちゃんに味方になつて貰はにや困るよ」おきくは含羞んでゐる信造を見守つて、「病人は無理ばかり云つて私をいぢめるし、信ちゃんにまで愛想をつかされちややり切れないよ。……他人がどんな噁を立てようとなはないぢやないかね」

「……」信造は話を外すために、病人は東京の評判の醫者に診せて、入院したのがよければさうしたらいいぢやないかと、生真面目に注意した。

「私も以前よくさう云つてゐただけど、病人が病院へは行きたがらないさ。上田さんの見立てぢや、どうしたつて助からないらしいから、當人の云ふやうにして樂に息を引取らせた

いと私は思つてるんだよ。あの身體ぢや俥にも乗れりやしないし、ぢつと寝かしくの何が何より藥なのさ」

「癒る見込みはないのかね」
平生をり／＼話合つてゐる病人の容體話は、つまり同じ言葉の繰返しであつて、何方にも以前ほどの熱心は消えてゐた。

「私は半歳の餘も介抱してゐるんだもの。根も

盡きちやつたよ。こんなお役目けもうそろ／＼切上げて貰ひたいものだね」

「主婦、親方が呼んでゐますよ」
おてつの聲におきくは又かか厭々座を立つたが、信造は居づらい席から救ひ出されたやうな氣がした。

「おれは頭を刺りたいから床屋へ連れて行つて呉れ」と、信造を招いて云つた。

「動いても悪くなけりや連れてつて上げるけれど」
「なに、悪くなくても構はん。おれはくる／＼

七

「私も以前よくさう云つてゐただけど、病人が病院へは行きたがらないさ。上田さんの見立てぢや、どうしたつて助からないらしいから、當人の云ふやうにして樂に息を引取らせた

いと私は思つてるんだよ。あの身體ぢや俥にも乗れりやしないし、ぢつと寝かしくの何が何より藥なのさ」

「癒る見込みはないのかね」
平生をり／＼話合つてゐる病人の容體話は、つまり同じ言葉の繰返しであつて、何方にも以前ほどの熱心は消えてゐた。

「私は半歳の餘も介抱してゐるんだもの。根も

盡きちやつたよ。こんなお役目けもうそろ／＼切上げて貰ひたいものだね」

「主婦、親方が呼んでゐますよ」
おてつの聲におきくは又かか厭々座を立つたが、信造は居づらい席から救ひ出されたやうな氣がした。

坊主になりたいよ!

「さう伸びてゐちや氣持が悪いだらうな。一分刈りにしたらいいだらう」

「いや、おれは髪が伸びて煩さいから刈りたいのぢやない。坊主になりたいんだよ。佛様のお弟子になつたつもりで居りたい」

胸苦しいをり／＼南無阿彌陀佛を呟いてゐたためか、信造は可笑しく思つて、頭を刺つて氣が晴れるものならそれもよからうと同意して、肩を貸して土間まで連れて來た。店先には明るい日が差してゐて、そこに並んだ色さま／＼の水菓子や野菜物は、病人の目にくら／＼と映つた。

「大丈夫かい」

信造はさう云つて、下駄を穿かせようとしたが、骨と皮になつた足は下駄の重みにさへ堪へられなかつた。表を通りながら此方を顧みて額を擡めた者もあつたが、そこへ歸つて來たおききは、

「何處へ行くんだね」と血相變へて叫んだ。そして信造から譚を聞くと、「お前さんにも呆れるよ。病人が何と云つたつておいそれと外へ連れ出すつてことがあるものか。轉んで怪我でもしたらどうするんだよ」と、二人を叱りつけて、

病人を抱へて元の寢床へ運んだ。

「床屋などへ行つて病氣が悪くなつて御覽なね、私の所爲にされるよ。これだけ氣をつけてるのに、お前さんを粗末にたやうに思はれちや割に合はないからね」

「ぢや、お前がおれの髪を刺つて呉れんか」

「私に刺れるものかね。何を云ふんだよ。坊主になるなんて縁起でもない。もつと氣分がよくなつた時に床屋の若い衆に來て貰つて刈つて貰へばいいぢやないか」

「どう云ふ譚だか自分でも分らないが、おれは坊主になつたら氣が安まるやうに思はれ出したのだ」

病人は今結つて來たらしい女房の髪を見入つて、「お前に親切があるんなら、おれと一緒に頭を刺れ。お前が尼になつて其處にゐて珠數をつまぐつて呉れれば、今にでもおれは安心して死ねるのだけ」

「私が尼になつたらよく似合ふだらうね」おききは危く噴出さうとしたが、白目を寄せて見上げてゐる相手の顔を見ると、自ら笑ひは留つた。「坊主頭ぢや店へも出らりやしないよ。人が狂人だと思ふよ」

「狂人と思はれるのが何だ」

病人は恨めしさうに云つた。自分の心持が

どうしても女房に吞込まれないのが、軋軋しく、手も顔も足もふる／＼震はせた。……狂人と思はれるのが何だ。髪を切るのが何だ。……自分のこの術ない手頼りのない氣持は長年連れ添ふ女房にも分らないのだ。

「お前は髪を結つたりして、それが面白いのか」

執念く詰られるのに答へやうもないので、おききは店の方へ出て行つた。そして、來合はせた客に向つてお世辭などを云つてゐたが、病人はその快活な聲を聞きながら、先き久振りに出て見たいろ／＼に色取られた店の様子を思ひ起してゐると、ます／＼心が焦立つた。昔見馴れた自分の店でも遠い處にある珍らしい世の中ので、其處に立働いてゐる女房や信造やおてつが始ましかつた。枕許の障子の裾の方に差してゐる光のしよんぼりしてゐるのに引替へて、表通の袂は眩いくらゐに燦いてゐたやうに彼れには思はれた。

で、病人はひとり憐れむやうに殊更に呻いてゐたが、ふと簾智の側の剪力が日につくつと、寢床から菊出して取つて來て、耳朶の上までも延びてゐる髪を滅茶々々に切り散らした。

「主婦、大變だよ」薬所から覗いて見たおてつの叫び聲に、おきくは駈けて来て剪刀を奪取つた。気が狂つたのかと見てゐたが、病人は頻りに髪を掴んで、もつと切つて呉れと強請らんだ。

「仕様がないね。ぢや、床屋に来て貰はうよ」と、おきくはおてつに吩咐けた。

春の高い方の職人が道具箱を提げて来るまでに、寢床のまはりは大急ぎで掃除され、散らかつたものも片付けられ、病人の寝衣も取替へられてゐた。得度の式でも始まるやうに、信造も寢床の側に鹿爪らしく控へてゐた。

職人は病氣見舞の無駄口を暫らく利いてから、皆で評議の上で、一分刈りにすることにした。信造は病人の身體を支へたが、垢臭い、脂臭い、齒屎臭い臭ひに鼻を外した。

冷たいバリカンが頭の皮に觸れるのはいゝ氣持であつた。前に振り落される長い髪を見てゐると、長患ひの自分の惱みをまぎ／＼と見せられてゐるやうに病人は感じて涙をこぼした。

「私はまたこのくらの髪を延びるまで生きやゝまいよ」

「なあに髪なんぞ直きに延びますぜ」職人は大急ぎに片付けたが、年の内に店の普請をす

る話などをしてゐた。

「これで薛張りしたらうね」と、女房の持つて来た鏡に自分の映るのを、病人はちらと見たが、懶いやうに鏡を押退けて横になつた。

「綺麗な坊さん」と、おきくは笑つて店の方へ出た。

「南無阿彌陀佛々々々々々々」と、今は苦痛を紛らすためでなくて心から念佛を唱へてゐると、清吉の胸にも少しの間俗態を離れた安らかな諦めが得られた。そして暫らくはすや／＼と眠入つた。

「あんなことを云ふやうだと、もう死に時が来たのだよ」と、おきくは火鉢の側で一服吸つてゐる信造に云つた。

「大將は幾つだね」

「丁度だよ。こんなに早く弱るのは働き過ぎたからだらうよ。露月町に奉公してゐた時分には、其處の主人が肺病で寝たつ切りだったので、獨りでも何かもやつてゐたのだつて。さういふ譯で店が潰れたのだから、碌にお給金も貰へないで、手ぶらで甲州へ歸つたのだらう。あの病氣は露月町で傳染つたのかも知れないと私は思ふよ」

「だつて、肺の病氣が腹に傳染るつてことはあ

るまい」信造は主婦の無智を腹の中で笑ひながら「姉さんは大將と一つ違ひだつたれ」と、来た時よりは小満酒して女振りが上つたと思つて見てゐた。

「私なんかもうお婆さんだよ。身體一つを資本であがいてゐるんだもの」と、おきくは甘つたれた聲を出した。

「なあに歳よりは若いよ」

「信ちゃんもお世辭が旨いよ」

「だけど、身装ふりなんぞどうでもいゝ。うんと稼がなければならぬ。私はさう思つてゐるから、信ちゃんも若い女なぞに目を移さないで、お金を儲けることに一心になつてお呉れと、おきくはとろけかゝつた心を引締めて真顔で云つた。

「東京の若い女はなかく、油斷がならないから浮かり迷はないやうにおしよ」

「おいらもそんな馬鹿ぢやない」

信造は先日から主婦の日顔や言葉付やいろんなもので、絶えず好奇心を刺戟されたが、何事もなく過ぎてしまふのを低低しく感じてゐた。そして、眞心から病人の介抱をしてゐるらしいのを見ると、一寸厭な氣がした。

「南無阿彌陀佛」

病人の幽かな寢言に、二人は目を見合せて微笑した。

八

信造は最早おてつを優しく扱はなかつた。下女見たやうに指圖して時々は荒つぽく叱り飛ばしたりした。おてつはそれを気にしないで云はれた通りに働いて、「信ちゃん」と呼掛けて苦慮のない話を仕向けたが、快い返事は得られなかつた。活動寫眞や寄席などへも信造一人で行掛けることはあつても、一緒に連れて行かれることはなくなつたので、おてつは何よりの樂みを失つた。それどころか、主婦が言付けたのか、常人が望んだのか、信造は階下へ夜具を持つて下りて、二階では寝なくなつた。

「親方が何時死ぬるかも知れないからだらう」と、おてつは獨合點をしてゐた。

「若い者を同じ部屋に寝かしとくのは爲にならんとお前が云つたから、信ちゃんに階下へ寝て貰ふことにしたのだよ」と、おきくは病人に言譯した。病人はそんなことを云つたかどうか覺えてはゐなかつた。信造が傍に付いてゐて呉れるのは一時心丈夫であつたが、若い者の太い寢息が衰へた神經の煩らひになることが多か

つた。

「おれが夜中にでも急に息を引取るやうな事があるかと思つて、用心に信造を此處へ寝かしとくのだらう。それならさうとはつきり知らせて呉れ。おれも覺悟をしなきゃならんから」

「さうぢやないと、よく譯を云つてるぢやないか」

「……おれは當分靜かな處にゐたいよ。夜中に目を開けて見ると、信造の大きな身體が目障りになつて仕様がな」と、病人は目の前を手で拂退けるやうな眞似をした。

「ぢや、見なければいゝぢやないか。電氣を消しといたらいゝだらう」

「消したつて駄目だ。元の通り信造を二階で寝させて呉れ。側にゐなくてもおれが二階にゐると思へばおれは手頼りにしてゐられるのだ」

「そんなに人間が邪魔になるのなら、私だつて此處にゐちやいけないだらう。私も二階の隅つこでも寝てゐようかね」

さう云つて笑つてゐるおきくの顔を、病人はぢつと見入つて黙つてゐた。(女房のがつしりした身體や荒つぽい寢息が目に觸れ耳に觸れてゐればこそ、淋しい夜中でも怖い物に魂を激して行かれないのだつた。疼痛が激しくて念佛

の效目もない時に女房の五體を唯一つの身の置き場所でもあるやうに、その膝に身體を投げかけ、その腕に縋り、その肩に縋りついて呻くのどつた)

以前のやうにむづかつて無理を云つて、物を投げつけでもしさうな氣振を見せる勢ひが最早なくなつてゐて、昨日今日はやゝともすると、憐れを乞ふやうに相手を見据ゑるのだつたが、おきくには黙つてゐる夫の心の中などはどうでもよかつた。今生の義務として時刻が來れば無理にも藥を飲ませたり、背を撫でさすつたりしてゐたが、相手が黙つてさへゐれば、その苦痛は何とも感ぜられなかつた。そして、信造をおてつの部屋から離して自分達の側に置いてゐるといふことは、病人のためよりもおきく自身のためにどれほどの心の安易が得られたか知れなかつた。

「信ちゃん、お前さんは此づらいのかい」おきくはある夜夜具の中でごそ／＼音を立ててゐる信造に聲を掛けた。

「あゝ……」

「どうしたのだい、お前さんは眠つても起きないくらゐの寢坊だつたのに」

「矢張おてつ側の人が寝工合がいゝのかい」
と、おきくは一寸擲諭ひながら笑つた。

「馬鹿云ふなよ」

信造は怒つたやうに云つて主婦に背を向けた。そして空敷を掻いてゐたが、一捻り倒れさうな骨と皮との病人を汚いとも思はないで、看護してゐる主婦の様子を見てゐると、自分が蹠り物になつてゐるやうな気がしないではなかつた。病人の寝床の悪臭は實際以上に彼の鼻を衝いた。……六本木の活動寫眞で見た怪談の光景が夢ともなく現ともなく彼の頭に浮んだ。

「お前さん手を貸して呉れ……ぐつと喉佛を壓へると手應へもなかつた。

ふと薄目を明けると、明るい電氣の下で主婦は病人の側にすやくと眠つてゐた。何だか聲がしたやうだなと思つたのは病人の聲だつた。

「信造……」

「苦しいのかい」

「おれは今さう思つてゐたのだが、おれが死んだら、おきくが何と云つてもお前は故郷へ歸れ……」幽かな聲で云つてゐるのがこれだけは聞取れた、がその後はよく耳へ入らなかつた。

「あゝ、おれも田舎の方が呑氣でいゝと思つてるよ」

信造は相手の顔を見ないで答へた。

八百屋の看板の書替へられたのは春になつてからだつたが、自轉車の赤い文字の「清」が消されて「信」となつたのは去年の秋の末頃だつた。信造がどうしても階下では寝ないで、おてつ一人が階下に寝るやうになつたことを、おてつ自身床屋へ來て話した。「信ちゃん」といふ馴々しい言葉は彼女の口から出なくなつた。

「お前さんはまだ此方に奉公してゐるつもりかい」と職人が訊くと、

「どこへ行つたつて同じことだから居馴れたところゐるつもりなのよ」と、おてつは答へた。

そして、おてつは御用聞やら臺所仕事やらで相變らず忙しかつた。二人の汚れ物の洗濯までしてゐた。

農民藝術

私は地方語を好まない。しかしして、私は地方語を驅使して地方人の生活を深刻に描寫し得る自信はないので、企てもしないが、日本にその國民の過半を占めてゐる農民の生活の真相を描いた文學の出て來ないの不思議に思つてゐる。長塚節氏の「土」はいゝものらしいが、その外には、大したものゝなささうである。

この泥臭い氣の利かない感じの悪い地方語でも、大天才の手にかゝつたら、生々として來て、我々の心が捉へられるやうに響くのであらうが、時々目に觸れる田園小説の田舎言葉の臆列の如きは、たゞ薄汚いばかりのやうで讀むに堪へない。

(文學評論の「感想片々」より)

心 中 未 遂

いよ／＼今日となつた。

おすゑは最早うつかりしてはゐられない。昨日までは、何か急にいゝ事が湧いて来て、奉公話も自然立消えになりはしないかと當てにして、神や佛を一心に念じてゐたのであるが、それも空頼みになつてしまつた。いよ／＼今日からは、子供の顔も見ないで日を送らなければならぬ。知らぬ人の間に交つて馴れない勤めをしなければならぬ。

おすゑは辨當を抱いて勸工場へ出掛けて行く妹を見送つてから、暫らく火鉢の側に首垂れて鬱いでゐた。平生なら容易に行火を離れない母親も、今朝は早く起きて、何をするともなく、一室きりの家を彼方此方廻り廻つてゐる。壁と一重の隣の家で子供の暴れてゐるのが、床に響いてゐる。

「長島町へは一寸顔出ししといた方がいゝだらう。黙つてゐて、後で知れると、彼處でも氣

を悪くするだらうから」と、母親は勧めたが、おすゑは、

「私、もう彼處へは行きたくないよ」と、角立つた言葉で答へた。

おすゑは母親の言葉を煩さがつて、返事をしないのでゐた。長島町の旦那の世話で、ミシンの術を習つただけけれど、今から思ふと、それが身の仇になつてゐるかも知れない、苦勞してあんな事を覚えなければよかつた。と、おすゑは今その旦那に對して恩を感じるよりも、むしろ忌々しく思つた。「身に一つ藝があれば、一生喰外れはないものだ、旦那はよく云ひ／＼してゐたけれど、當てになりやしない。いくら男に負けぬやうに稼いだつて、こんな羽目になつちまつて」

おすゑはこれまでの自分の苦勞を顧みると、自分で自分が傷はしかつた。世間にこれほど苦勞した女が外にあらうかと思はれた。夫婦共稼ぎで身代を仕上げるつもりで、身粧も關はなれば、碌に物見遊山に行つたこともなかつた。

寒くつても暑くつても、洋館へ生地を取りに行つたり、筒袖で夜業をしたりしてゐた。……それが何になることか、夫が辨天町の女狐に誰かされに行く資本になつたばかり。食べるものも食べないで買つたミシンの機械さへ、何時の間にか無くされて……

おすゑは一年この方姿も見せない夫の事を思出してゐると、神祇が高ぶつて、心が燃立つやうだつたので、ふと今日の場合を忘れて、恐ろしい夢を見ながら、齒軋りしてゐたが、その中頃の家の時計が九時か十時かを打つたので、夢から醒めたやうに周囲を見た。

「もう叔母さんが迎ひに来る時分ぢやないかね」と、母親が云つたが、その言葉はおすゑの胸には釘を打たれたやうに響いた。

「もう浮かりしてられない」と、おすゑは身を起して、「ぢや、私が湯に入つて来るよ」と、大人しく母親に告げた。

見ると、よく眠つてゐると思つてゐた朝吉は、パツチリ目を開けてゐる。「お母さん、朝は先きから起きてるんぢやないの」と、不平らしく云ひながら、急いで抱起して、乳を與へた。

そして、「お前もお湯に連れてつて上げようね」と背負うて出た。朝吉はウ、／＼と喉を鳴

らしながら、素直に母の背に鈍付いて、大きな澄んだ目を張つてゐた。その目もその口も可愛らしくて、諺を知らぬ人には、人形のやうだと褒められたこともあるが、さう云はれるたびに、おすゑは穴へでも入りたいやうな氣になつた。

朝吉は人形のやうに魂がないのである。口一つ利けないのである。去年の春脳膜炎で死に掛つたのを、注射の力でやうく命拾ひをしたものの、この先き五六年の壽命も六ヶ敷いと、醫者から無慈悲な申渡しをされてゐる。どうせ人並になれぬ身體なら、強ひて長生をさせたことも望まない。たとひ五年が三年に縮まらうとも、それは諦めてゐる。残り惜しいとは思ひはしない。だけど、どうせ短い命なら、息のある間は見窄らしい服装をさせたくない。粗末な物を食べさせたくない。そして、母の懐で静かに息を引取れるやうにしたいものだ。明日から預つて呉れる筈の里親が、いくら親切であらうとも、子煩悩であらうとも、他人の側で死なせたくない。

おすゑはさう思詰めると、いつそこのまゝ朝吉を連れて、人の氣づかぬ遠い處へ逃げて行つて、淵へでも海へでも飛び込みたいやうな氣にな

つた。うか／＼湯屋の前を通過ぎて、一二町當てもなく歩いた。そして、去年の夏の晩、ふとした事から變な氣になつて、子供を背負つて、涙に萎れながら海岸通を行きつ戻りつしてゐる中、巡査に見咎められ、驚いて家へ駆戻つたことなど思出してゐた。

ふと、目の前に始終病兒の薬を買ひに行く藥屋の看板が見えたので、おすゑは思はず足を留めた。何だか其處を通つて店の方にみられるのが厭だつた。それに、薄着の肌と素足とに觸れる風が急に寒く感ぜられて、頻りに嘔が出さうになつた。首を捻向けると、思ひなしか、朝吉の顔も寒さに慄へてゐるやうであつた。

と見ると、おすゑは急いで後戻りして湯屋へ入つた。知人も来てゐないし、子供連れも来てゐないのに安心して、ゆる／＼二人の身體を洗つた。朝吉が兩手で湯桶を叩きながら喉を鳴らしてゐる間に、おすゑは取留めのない考へに耽りながらも、身體申残の隈なく磨上げた。頬は次第に紅味がさして、胸にも手にも暖かい血がめぐつた。鏡に映つた様は自分の影ではないやうに見えた。

ふと、入口から母親が顔を出した。「先きから叔母さんが来て待つてるよ。此處にゐるんなら

い、けど、外へ廻つてるんぢやないかと思つて」と身體に似合はぬ大きな聲を出した。何時にな長湯を怪んで迎へに来たのだつた。

「さう？ 直ぐ歸るよ」

おすゑは歸つて叔母の顔を見るまでに、よく自分の量眼を極めて置かねばならぬと思つたが、さて異つた考へも浮ばなかつた。只胸がわく／＼するばかりだつた。

歸ると口數の多い陽氣な叔母に急立てられて、化粧をして衣服を着替へた。里親の來るのを待つことさへ許されないので、朝吉を母に渡し、後髪を牽かれるやうな思ひをして汽車に乗つた。

「用事があつたら、何時でも私の家へ電話を掛けな。今度のことは私が引受けたのだから、決して心配おしでないう。この先決してお前さんを困らせるやうなことはしないんさ」と云つて、叔母は茶屋奉公の心得などを話した。

が、おすゑは身を入れて聞いてはゐなかつた。大森まで連れて行かれて、梅の花や南天の實で白く赤く色取られた給のやうな高樓を仰いで、「彼處だよ」と叔母に教へられた時は、「まあ綺麗な家だわね」と、思はず云つて、夢見るやうにうつとりした。あんな家で自分のやうな者が勤ま

るだらうかと氣遅れもした。

二

からしておすゑは、自分で確と覺悟をしたとも覺えぬのに、何時の間にか梅屋の女中の一人となつた。日當りの悪い陰氣臭い賑町の路次裏で、手足を黒くして根限り稼いでいた先日までの事を思ふと、自分でも不思議であつた。

見るもの聞くものが珍らしくて、此處にゐる人や遊びに来る人の心の中が分らなかつた。皆な苦勞がなくつて、お金の自由になるのが不思議に思はれた。そして、おすゑはお祝儀を頂くた

びに極り悪い思ひをした。
廊下に立つと、遙かに海の方までが廣々と見下されて、煙を曳いて見えつ隠れつする汽車の響きが強く聞えた。あの汽車に乗りさへすれば、雨も濁り流れるけれど、とおすゑは塵々汽車の行方を心で追つて、煙や音が消えると、淋しい思ひをしたながら、騒々しい周囲を顧みた。庭の枝に釣した鈴は微かに動いてゐて、快い匂ひは鼻を掃めた。美しい顔の男がしどけなく酔つて、藝者の肩に縋つて、笑話をしながら向ひの廊下を通つた。咲盛つた梅の花を隔ててその様を見てゐると、さながら芝居を見て

ゐるやうだつた。

「おすゑどん、新二號でお呼びですよ」と、下の廊下から、丸顔の女子が仰向いて、金切聲で叫んだので、おすゑはやらやく、我れに返つた。小聲で返事をしてバタ／＼と駈付けて、小高い新二號の障子を細めに開けて、御用を伺つた。

無骨な顔した若い男と、年増女と差向ひで澄してゐたが、女の方が軽く首を曲げて、「ちよいと横になりますから、お床を伸べて下さいな」と、事もなげに云つた。

「おすゑはその意を呑込みかねて、「お床を伸べるので御座いますか」と問返して、もじ／＼してゐた。

「さうですよ」と、女は流し目に見て、険しい調子で簡單に命令した。

おすゑは思はず顔色を赤らめた。そして、極りの悪い思ひをして、客から顔を見て、恐る／＼寝床を敷いて障子を締めた。逃げるやうに階段を下りて、何處へ行くともなく廊下を傳つてゐると、長逗留をしてゐた二人の支那人の一人を今送り出して来たおのぶが、擦違ひさま酒臭い息を苦しきながら、貴女に電話よ。牛込からだつて、早く行つてらつしやいと促した。

電話は牛込のさのやといふ待合にゐる叔母からであつた。自分の家に變事でもあつたのかと氣を廻して、胸騒ぎをしながら急いで聞いたが、

叔母の聲とは思はれぬやうな聲で、不明瞭な話が繰返された。幾度聞直してもよく分らないので、側にゐた朋輩に代つて聞いて貰ふと、その用向は何でもなかつた。「……明日叔母の家のお客様が二三人連れて遊びに行くからい、座敷へ御案内して大切に扱つて呉れ」と云つて、

「よく辛抱おしよ」と附足したさうである。「承知しました」と、おすゑは自分で電話口へ出て答へて、「叔母さんどうぞ来て下さいな」と懐かしさうに云つたが、その答へは聞えなくて電話は切れてしまつた。

朋輩にはそれ／＼懇意な客があるらしいのに、おすゑにはまだ一人として顔馴染がないのだから、叔母の語のお客でも自分の名を差して来るのが悦しいやうだつた。で、帳場へ通して、いゝ座敷を空けて置くことを頼んだ。

一つ用事が済んでも、次の勤めには氣が付かないので、やゝもすれば廊下立つて、ぼんやり何處ともなく見詰めてゐた。そして、朋輩に呼ばれては、俄かに慌て出した。まだ番號さへ覚え切れない座敷へ迷ひ／＼顔を出しては、

不器用な相手して、自分の持場の五六組を大方送り出してしまふ頃には、ランプが部屋々々に配られて、花の色も見分けがたくなつた。容を見送つて行く提灯が、後の薄暗い丘の方へ小さく動いた。書間の混雑も大風の跡のやうに静まつて、今朝から酒びたりで暴れてゐた梅の間の客も、ばた／＼酔倒れて、馴ばかりが洩れてゐる。

最初からひっそりしてゐて、あまり女中の手を煩はさなかつた新二號の二人連れも、そろそろ歸支度をした。おすゑは賑かな座敷よりも、静かなこの二人に一層心を惹かれて、近くの廊下を通る折には、わざと足音を忍ばせて、耳を澄ましてゐたのだつたが、今前後して廊下へ出て來る二人の様子を、薄暗い處から見ぬ振りで見詰めてゐると、女の顔は初め見た時よりも、もつと醜くて厭味に思はれた。そして、男の顔は凄々しく頼もしさうに見えて、今日此處へ來たどの客よりも、心に適つたやうに思はれた。で、女の方が遠慮氣もなく、何だか横柄らしいのが小面憎かつたが、それよりも、何故この男がこんな厭な年上の女なんぞと一緒に來たのかと、尙痒くなつた。この男にやら、どんな女だつて思付くだらうに、何處がよ

くつて、こんな女なんぞに……と、おすゑはこれまでにない多額の祝儀を女の手から貰つて、石段の下まで見送つた後も、俵の音の消えるまで、その方へ心を留めてゐた。「あのお客様は何でせう、變だわね」と、廊下の柱に凭れて小聲で何か呟ひながら酔を醒ましてゐるおのぶに訊くと、

「先月の末だつたがね、雨の降る寒い日に一度來たことがあるの。その時は私の番だつたの。中々調子のいい人でせう」

「でも、随分氣六ヶ敷さうな人ね」

「さうでもないよ、顔は何だけど、腫張りの面白いだよ。この前は私も暇だつたから、お酒のお相手なんぞして、いろんな話をして笑つて、随分面白かつたわ」

おのぶはさう云ひながら、おすゑを相手にせぬやうに、背を向けて歩き出した。おすゑは立入つて二人の身の上を訊きたかつたけれど、軽く口を利きかねた。

三

雨戸は鎖されて夜は更けた。微かに震へてゐる木の葉の音や、風鈴の音がおすゑの耳には淋しく浸入つて、便所へ行くのさへ恐かつた、寢

床に就く前に、貰つた祝儀を勘定して、財布の中へ収めたが、思ひの外に金高は多かつた。これでは月五圓の里扶持や母と妹の暮らしの足しぐらゐの造作なく仕送れるらしい。矢張叔母さんの云つた通り、割のいい稼業に違ひない。かうと知つたら、もつと早く奉公に出ればよかつた。あんな苦勞ばかりしないで済んだのに……と、獨り思耽つて元氣づいてゐたが、すると、母や妹にも此方の事情を知らせて、安心させたくなつた。

で、朋輩が梅の間の藝者の悪口や、明日の附込の噂などしながら、寢床へ入つた後で、おすゑは一人寢衣のまゝ、枕許で、眠い目を張つて、覺えない筆を運んでゐたが、暫らくして不意に手紙の上に打伏して、吃逆泣きをし出した。

「どうしたの、おすゑさんと、直ぐ側に寝てゐるおきよが、頭を上げて訊いた。どうしたのさ。何處か加減が悪いの」

おすゑは胸を押へたまゝ、はつきりした返事をしなかつた。

おのぶもおとくも、眠入らうとした目を開けて、様子を見ると起上つた。そして左右から「どうしたの〜」と、次第に側へ擦寄つて、氣

遣はしさうに柔しく訊いた。が、おすゑは極りが悪くて、容易に打明けないで、泣聲を我慢してゐたが、涙のみ湧出て頬を傳つた。

「本當にどうしたのさ。云はなくちや分らないぢやないの、人にばかり氣を揉ませて。おのぶはやがて懐食な口を利いた。側を離れて寝衣の袖を掻合せ、首を締め眉を盛めて見下した。

「お腹が痛いんだらう」と、おとくは欠伸を噛みながら云つた。

「済みません。私、乳が張つて来て仕様がなないんです。」

おすゑはかう言譯して、目を拭つて顔を上げた。目の縁は赤くなつて、萎れた頬は誰れの日にも痛々しく見えた。

「乳が張るつてどうなるの」と、おのぶは不思議さうに相手の胸のあたりを日をつけたが、年上のおとくは、自分でそんな覺えがあつたやうに、乳の張つた時の氣持の悪さを言葉で強めて話して聞かせた。そしておすゑに勧めて、茶碗の中へ絞り出させた。

「乳呑兒を他人に預けてゐちや、氣に掛るだらうね」

「でも、よく思切つて打遣つて來られたのね」
「おすゑさんの陰氣にしてるのも無理はないわ

ね

互ひにこんな事を言合つて、その兒の事やおすゑの身の上を、相擁り葉擁り語出した。おすゑは自分の恥を曝すやうな氣がして當栗した。

で、明ら様に語るまいとしたけれど、親切づくで問はれるのに黙つてもゐられなくて、止切れ止切れに、目の悪い老母や人並でない朝吉や、づぼらな前の夫の話をした。朝吉が嘔で白癩であることだけは隠して、夫の病氣を受けて、

生れながらに目を病んでゐると話した。「いくらお金が入つても、今の中にいゝお醫者に見せて、目だけは療治させようと思つてゐます。若しか潰れでもしたら、一生難治しますからね」と云ひながら、自分の話を憐れつぽく感じて、

新に涙を流した。

その素振と話の事柄は、手易く女達を動かして、聽手は皆貰ひ泣きをした。おのぶは禰袴の袖を濡らすほど泣いた。同情の言葉は一時小止みなくみんなの口の上つた。

「だから、私は一生結婚なんぞしないわ」とおのぶは深く感じじやうに云つた。「そんな目に會はされるよりや、一人である方が幾らましだ

か知れないわね」
「私も本當にさう思つてよ」と、おきよも相槌

を打つた。

「私、朝ちゃんとかに會つて見たいわ。も少しして暇になつたら、一日此家に連れてらつしやいな。皆なして大事にして可愛がつて上げるわ」

「おすゑさんのことを思ふと、私達は罰が當るわね。自分で稼いだけ自分の好きなことに遣つて。……私、これからも無駄なお錢は費はないよ」誰れかが殊勝らしく云つた。

「おすゑさんは大人し過ぎるからいけないんさ。御亭主がそんな不始末をするんなら、思切り仕返しをしてやればいゝのに。私だつたら黙つて勝手な眞似をさせときやしないよ」誰れかがつけつけ云つた。

「しきり、皆ながそれぐに喋舌つてゐたかと思ふと、やがて欠伸まじりで物云ふ力も衰へて、誰れからともなく、何時の間にか皆な寢床へ入つてしまつた。

おすゑも後から、冷たい夜具の中へ入つて身を縮めた。暫らく朋輩の寢言や齒軋りの音に果はされて、眼もやらず術なさうにしてゐたが、すると、浴室の後の簾の中に捨てられた犬の子

が、コソコソ音をさせては、泣聲を立ててゐる

のが、氣味悪く耳についた。

四

その翌日は露かに冷たい春雨が降つた。折角の日曜も雨のために振りの客は少かつたが、廣間で日本橋の銀行の連中六十人からの大宴會があるので、朝から可成り忙しかつた。義太夫の師匠まで襷掛けで膳立の手傳ひをした。おすゑも氣を詰めて立働いた。そして、二時頃やうやく配膳の濟んだ時分、帳場から氣立たましい聲でおすゑの名が呼立てられた。昨日の電話の人達が傳を連らねて来てゐるのである。

今までの混雑に紛れて忘れてゐた叔母の知らせを思出して、慌てて玄關の方へ下りて行つた。洋服や和服の四人連れが賑かな話をしながら、其處に立つてゐて、皆な目がおすゑの顔に向けられた。

おすゑはこんな場合に相應しい言葉が口から出なかつて、ドギマギしてゐたが、折よく傍にゐたおきよに、「新五號へ御案内したらいいですよ」と指圖をされたので、黙つてその方へ導いた。

「一昨日君の叔母だといふ人から、君のことをよく聞いたよ。勤まるだらうかつて叔母さんは心配してたよ。……どんなだい」と、客の一人

が、坐るが早い、顔を見詰めて訊いた。「些とも馴れませんか」と、おすゑは低い聲で答へた。廊下へ出たが、今聞いた言葉は、この頃嘗て聞いたことのない愛情のある懐かしい調子を帯びて耳に残つた。そして、姿形も四人の中でその男が際立つて勝れてゐるやうに思はれた。

で、叔母の様子をよく訊いたり、叔母への言傳をしたり、この人なら打解けた話も出来さうだつたが、外の人達が憚られた。「あの人一人遊びに来たのならよかつたのに……」

二度目に、お説へを伺ひに行くと、皆なが恣に打寛いで、高聲で議論めいたことを言合つてゐた。おすゑは自分が顔を出す、皆なが自分の方ばかり目を付けるやうな氣がして、窮屈だつた。そして、自分の目の向け處に困つたが、かの柔しきうな男が乗出して、穩かに口を利いて呉れたので、その人に向つて、お好みを訊いた。特別の註文をする人は外になかつた。名前を三浦といふらしいこの人が、一座の兄弟で、何もかもこの人まかせといふ風に見えた。

「お酒は成るべく早く」と、三浦は後から聲を掛けた。

おすゑは廣間の側を通りながら、そつと覗くと、其處には最早酒が廻つてゐて、座も入亂れ、騒がしい間に三味線の音もしてゐる。大勢の客の顔付や服装が、それ／＼に異つてゐるのを見比べてゐると、中々に面白いので、暫らく立つて見てゐたが、すると、盃の取次をしてゐるおとくが、ふと振返つて、意地悪い目付で此方を見た。

おすゑは慌てて行過ぎた。後で小言を云はれさうなのが氣になつた。「貴女は成るべく廣間の方を手傳つてお呉れよ」と、おのぶに云はれても、「え」と返事したばかりで、其處へは寄付かなかつた。自分の持場だけでも忙しくて暇がないやうな風をして、何處へ行くにも廣間の側を避けて遠廻りした。

酒が出て料理が揃つても、新五號の客は悪巫山戯もしないし、皆な穩かだつた。客同士で議論めいたことを言合つたり、女話をしたりしても、女中に向つてはさして戲談を云はなかつた。

おすゑは勤めよかつた。そして、黙つてお酌をしたながら、客の話を耳を留めてゐた。三浦、倉賀、大井、田川、四人の名前も、自ら分つた。「今だから話すけれど、それに避けないんだ」

と、口髭の濃い顔の角張つた大井が、紅くなつた口元に笑ひを含んで、勢ひのいゝ聲で云つた。「今あの女は庄司と一緒にゐるんだよ。先日庄司のお袋が来て、譯を話して、貴下に申譯がないから別れさせやうにするつて云つてたけど、僕は初めから庄司に對して何とも思つてやしない。あんな奴に付纏はれて馬鹿な奴だと思つてる……」

「いくら君が呑氣だつて、まさかさうでもあるまい」と、三浦が話を遮つた。「そして、庄司の事件は何時頃のことなんだい」

「一昨年の暮時分だよ。その時は彼奴が自分の給料ぢや、とても下宿屋の拂ひも出来ないから、おれの家に同居しつたんだが、おれは富士見町へばかり行つて、滅多に家にやゐなかつたしね。庄司は只の一晩だつて遊びにや出ないで、家にばかり寝てるんだから……どうも火事のあつた晩に出来たらしいよ。あれは十二月の五日だつたよ。おれは相變らず留守だつたが、夜中に近所に火事があつたんだ。あの時二人が目醒まして騒いだに違ひないが、屹度その時に關係が出来たんだ」

「それはどうだか。君も申々空想を遣しうするね」

「あの細君は廻覽文庫か何かに入つて、よく小説を読んでたから、小説で感情を刺激されたのかも知れない。僕等にも時々小説の批評を聞かせたりしてゐたよ。だけど庄司はよく平氣で君の家にゐられたね」

「彼奴は愚圖だからさ」と、大井はさも卑むやうに云つて、「二人が續いて家を出て行つたからおれも氣が付いたのだがね……最初に嗅が氣分が悪いから、大崎の姉の家で二三日保養して來ると云つて出て行つたきり、二三日立つても歸らなかつたが、さうすると、一週間ほどして、庄司の奴も荷物を持つて芝の下宿屋へ引越して行つたんだよ。大晦日前だし、金に困つてることが分つてるのに、變だなと、その時どきつと胸に轟いたね」

「で、君は庄司に向つて何とか云つてやつたかい」

「いや、何も云やあしない。彼奴が出て行きや、話相手はないし、おれ一人家にゐたつて話らないから、戸を締めて出ちやつたよ。そのまゝ、拂ひも何も打ちやつて、三ヶ日が濟むまで方々うろついてゐたんだが、その時だよ、泥棒にやられたのは……金目のある物一つもなかつたけど、茶碗だの、井だの、臺所道具を一切毛

布にくるんで持つて行きやがつた。おれも一寸情ない氣がしたよ。女房はゐないし、飯を食はうにも茶碗はないし、どうしようかと獨りで考へてたが、仕方がないから、思切つて、その日に空つぽの箆笥や火鉢や、ありつたけの物を捨賣りにして、表札ももぎ取つて、宿無しになつちやつた。……結局その方が氣楽だつたね」

「どうだか」と、今まで口を噤んで、矢鱈に肴を突つてゐた倉賀が首を上げて、「あの時は君も影が薄いやうだつたぜ。庄司の話は今更めて聞くんだが、その爲だね」

「なあに」と、大井は力んで相手の言葉を跳返して、「おれも持餘してゐたんだから、丁度よかつたのさ。……ところで、仲人が來て別れ話が極まると、おれは質に入れてゐた彼女の衣服をすつかり出して、姉の家へ送返してやつたからね。えらいだらう」

「君にしちや感心だね。だけど、今一緒にゐる女よりや、前の細君の方が戀しくはならんかね」

と、三浦が眞面目で訊いた。

「さうでもないさ」大井は事もなげに答へたが、ふと口を噤んで、飲みさしの盃を執つた。

「何でもあの頃、君が指ヶ谷町の結婚媒介所へ女房の候補者を捜しに行つたといふ噂があつたが、本當かい」

「なあに、あれは悪戯さ、いろんな女が来てゐて面白いちふから、愚弄ひ半分で行つたんだよ」

「ぢや、本當に行つたんだね。まさかさうぢやあるまいと思つてたのに」

皆なが冷かすやうに笑ふと、大井は憎げた目を屢呷きながら、頻りに酒を飲出した。

おすゑは彼方此方と酌をしながら、一座の話を聞惚れて、大井といふ男の身の上を、さも珍らしいことのやうに興を覚えてゐたが、「おすゑさん、ちよいと」と、障子の蔭から呼立てられたので、詮方なく座を外して行つた。

「竹の間で先きから呼んでよ。もうお立ちになるんだらう」と云つて、おのぶは擦寄つて歩きながら、「忙しき日には、一つのお座敷へさう長く付いてゐなくたっていゝんだよ。構はないから打ちやつといて、外へもちよいと廻つてお呉れよ。四人もゐるのなら、藝者でも呼んだらう、いだらうにね。…あの人達は何をします人？見たところ皆な頑固な人らしいわね」

「さうねえ」おすゑはかの四人の様子が、家にゐた頃の知合ひの保険會社の社員に、何處か似てゐるやうな気がしてゐたのだが、若し見當違ひをしておのぶに笑はれはしないかと思つて、口に出しては云はなかつた。

竹の間の御用を済まして、直ぐに前の座敷へ行つて見ると、もつと續いて聞きたかつた大井の身の上話は止んでゐた。大井は手枕をして足を投出して寝入つてゐる。おすゑは枕を出して寛かに頭を安めさせた。足許へは捲巻を掛けてやつた。

「この男も顔に似合はん罪のない奴だよ」と、三浦は寝顔を見下してから、おすゑを見上げて、「一寸その男の首筋を見て御覽。今でも屹度痣がついてるよ。女に囁付かれた大事な形見なんだよ」

「へえ」と、おすゑは呆れたやうに首の方を顧みしたが、側へは近寄れなかつた。すると、倉賀と田川とが左右から大井の襟を寛めて、首筋を覗いたが、痣の跡は最早見付からなかつた。「色男の勳章もなくなつてるよ」皆なが笑ふのに誘はれて、おすゑも面白さうに笑つた。そしてふと打解けた気分になつて、

「貴下方はさのやへよく入らつしやるんですか」と訊いた。

「なに、よく行くこともないんだがね。少し譯があつて、僕はある家とは懇意にしてゐるんだよ」と、三浦が答へた。「叔母さんには随分世話になつたよ。一昨日の晩も氣晴しに、二三時間話しに行つたのだが、その折一日梅見にでも行きたいと云ふことから、つい君の話が出てね。」

是非この家へ遊びに行けと云はれて、皆なを誘つて來ることにしたのさ

「折角入らつしやつたのに、雨天で生憎でしたわね」と、おすゑは馴々しく云つたが、氣の利いたお世辭は口から出なかつた。叔母に向つて、自分の事をよく傳へて貰ひたい、待遇が悪かつたと云はれたくないと思ひながら、答を快く遊ばせる術は分らなかつた。

燈火のつく前に四人連れは俥にも乗らないで、冷たい雨の中を出て行つた。門の外で大井は「握手しよう」と云つておすゑの手を握締めた。

五

書間は絶え間なく動いてゐると、さまざまの客の話を聞いたり、様子を見たりしてゐる

のが珍らしいので、心が紛れてゐるけれど、夜になつて部屋々々が静かになると、手廻りのない思ひに沈んだ。そして、賑かな朋輩同士の中へは入れなくて、一人除物のやうになつてゐた。

足が棒のやうになつて、根の疲れた身體を温泉に浸すのは、此處にゐる一つの役徳で、外のお湯とは違つて身體の心までも温まるので、叔母の云つた通り、弱つてゐる身體には何よりも藥になるやうだが、朋輩と一緒にゐるのは氣が引けた。おきよなど口の端たない手合ひに愚弄はれるのが厭だつた。

母屋から隔つた湯殿では、皆なが遠慮氣もなく勝手な口を利き合つてゐるので、おすゑは一人暗い處へ寄つて、黙つてそれを聞いてゐた。首を振つて小さい聲で義太夫を語る者もあつた。

「私、今年夏まで此處にゐて、お師匠さんにみつしり復習つて貰はうかしら。どうせ習ひかけたくらゐなら、人中へ出て語れるやうになりたいうよ」と、おさだは語り止めてから云つた。「お前さんは聲がいゝからだだからね」と、酒臭い息を吐きながら、湯氣の中にだらしなく横はつてゐるおきよが冷かすやうに云つた。「私なん

ぞ、今月一杯ぐらゐでこんな家は御免だよ。早く東京へ歸りたいよ。……どうせ奉公するにしたつて、東京の方がいくら勝しだか知りやしない。……今年こそ止さうと思つたのに、花の間だけ助けて呉れて、無理に連れて來やがつて……思切つて赤坂へ行けばよかつたのに、お母さんが義理立てしたために、いゝ口をふいにしちやつたよと云つて、「あゝ口惜しい」と、頓興な聲で叫んだ。

「誰れだよ。狂人のやうな聲を出してきと、新に入つて來た一人が、湯氣の中を透かして見ながら嘔をした。

浴槽の中で眠さうに欠伸をしてゐるものもある。互ひに耳打ちしてクス／＼笑つてゐるものもある。皆なの聲が止切れると、寂とした夜の空に、大の聲が響き渡つた。

「おや、おすゑさん其處にゐたの。ゐないのかと思つたら」と、ある一人が振向いて聲を掛けた。「そんな隅つこにゐなくつたつていゝだらうにね。黙つてて人の内所語を聞いてるなんて、餘程が悪いよ。……黙つてる人が一人でもゐると、何だか氣が差して厭なものだよ。……さあ此方へ入らつしやい。お湯を汲んで上げるから」

「えゝ、有難う。私、もう上がるんですーおすゑは身體を縮めて、逃げるやうに朋輩の側を潜つて、手早く着物を着けて、湯殿の外へ出た。が、直ぐには女中部屋へ入らないで、吹きさらしの波廊下に立つて、雨の霽れかけた暗い外を見てゐた。そして、皆なが湯から出て、女中部屋へ入るのを待つて、後から隨いて入つた。

次の室の柱時計が一時を打つた。今まで喋舌つてゐたのが、早くも寢息を吐き出した。口の中で音をさせたり、聞取れぬ謔言を云つたりした。起きてゐるのは、昨夕書き残した手紙を書きつけてゐるおすゑと、他所行の羽織を縫つてゐるおよしとばかりであつた。おすゑは昨夕までは長く勤めるつもりで、母や妹へ安心させるやうな手紙を書かうとしてゐたのだが、今夜はどうしてもそんな氣になれなかつた。むしろ勤まりさうでない不安を訴へたくなつた。一今時分東京へ電話が掛るでせうかと、出掛けにおよしに訊くと、

「あゝ、掛けられるでせう」と云つて、およしは針を止めて、「何處へ掛けるの。叔母さんの家？」

「いゝえ、私、今何處へも掛けるのぢやない

の。一寸訊いただけなの」
が、叔母とは何時でも電話で話が出来るといふことが、多少力になるやうに思はれた。東京は此處から近いんだから、その中一日暇を貰つて、叔母のゐるさのやといふ家へは遊びに行きたい。：：どうせ他人の中で氣兼苦勞をするほどなら、東京へ行けばよかつた。：：

おすゑは叔母に相談して、朝吉を東京で里子にやつて、自分も東京で奉公したらと、これまでつひぞ思付きもしなかつたことを考へ出した。で、さうなつた後を夢のやうに考へてゐると、氣が迷つて、今夜も落着いて細かい手紙は書けなかつた。

六

空が晴れると、目の届くかぎり最早春景色であつた。枝を渡つてゐる雀の聲も陽氣に響いた。雑巾掛けをしてゐる冷たい手も、冴えた日に柔しく温められた。穴のやうな路次裏に住んでゐたおすゑの目には、廣い畠の中に働いてゐる農夫の姿も非常に違つた生活をしてゐる人のやうに見えてゐたが、その農夫の野良仕事が晴れた日には羨ましいほど愉快げに見えた。

「あんなにして誰れに氣兼ねもしないで働いて

ゐたら、氣が清々していゝだらうに」と思つたりした。
空高く風が舞つてゐて、子供が畦道を駆けてゐる。

おすゑは拭掃除を済ませると、朋輩と代り合つて髪を結つて、身装した。最早正午近くなつて、チラホラ客の姿も見えた。電話も東京から掛つてゐたが、暫らくしておすゑの名が呼ばれた。

「叔母さんかしら」と云つて、急いで行つてみると、「誰れだか男の人だよ」と、おきよは受話器を渡した。

「ちや、あの客だらうと、おすゑは三浦や大井の顔を出しながら、受答へしたが、先方の聲を聞くと變な氣がした。二三度聞返して、それと知ると、おすゑは目が眩んで耳が鳴つた。

「ちや、さうします。私の方から行きます」と、おどく／＼しながら丁寧な言葉で答へて、直ぐに電話の側を離れた。朋輩が此方を不審げに見てゐるのが面差くて、酒場所を求めて便所へ入つた。

「この頃おれも東京へ来て、いゝ仕事にありつてゐるんだ。お前の方で忙しくて出られなければ、おれの方から其處へ訪ねて行かう。：：と、

かう夫の聲がしてゐたのに異ひなかつた。穩かな調子だつたし、會つた上でよく調を話すと、これまでの事を讀むやうに云つてゐた。そして四谷の何處とか、今の居所をも教へた。

おすゑは逆上せた耳でぼんやり聞取つたことを、ぢつと思出してゐたが、夫に會ふにしても此處へ來させたくはなかつた。若しも今日か明日、不意に妙な服装をして來られでもしたらどうしようと思つてゐると、落着いてはゐられない。

で、叔母に電話を掛けてよく相談したかつたけれど、さうすれば明ら様に家の者に知られるのが恐ろしかつた。何とか用事を拵へて半日でも暇を貰ひたいと考へながら、とても主人の前に出て云ひ出せさうではなかつた。手紙で叔母に訴へるにしても、手紙を書く暇はないし、急の間には合はない。

おすゑはその目自分の名を呼立てられるたびに、夫が來たのではないかとビク／＼した。そして、客の前に出てゐても、客の話などに氣をつけてはゐられなかつた。どうかして、電話のあたり人にのめない折に叔母と話をしたいと思つて、隙を見てゐたが、憎らしくもその側には此處誰れかがゐた。おすゑはその人達を自分

の敵でもあるやうに心の中で睨んだ。

この目の客の中には、若い書生さんがあつた。角帽を冠つて木綿袴を着けてゐる。一人で池上の方を散歩して來たと云つて、座敷へ案内したおすゑに向つて、懐つこく本門寺の話などした。

「君はよく知つてるだらう、近くだから」

「いゝえ、まだ一度もお詣りをしないんで御座いますよ」

「直ぐ其處に見えてるのに。…一日少し早く起きて行つて御覽よ。いゝお寺だよ」

書生は頻りに話の種を造らうとして、絶え間なくいろいろなことを喋舌つた。女中の名を訊いたり、おすゑの身元調を始めた。去年此處で仲間の宴會をしたことがあると云つて、

「おきよさんといふ人はまだこの家にあるかね」と、やうやく知合ひの女中の名を考へ出して訊いた。

「え、居りますです」

「ぢや、手が隙いたら一寸此處へ遊びに來るやうに云つてくれよ。僕は去年酔つぱらつて、大變あの人に迷惑を掛けたんだよ」

おすゑは座を立たうとしながら、口数の多い

この客の言葉の容易に切れないために、立つ機會がなくて、愚圖々々してゐたが、

「今おきよさんを寄越しますから」と云棄てて、やうやく出て行つた。そして、馬鹿正直にわざわざおきよを捜して、湯殿の側でお客の言葉を傳へた。

「へえ。私そんな人は知らないよ」と云つて、

おきよは直ぐに行く風はなかつたが、暫らくして、おすゑが膳を持つて行くと、おきよは何時かの間に廊下立つて、梅を見てゐる書生さんと、べちや／＼話をしてゐた。

「御酒を召上がるんですつて」と、おきよは指圖した。

「僕は飲むといけないんだが、おきよさんが勧めて仕方がないんだよ」と、書生さんは此方を顧みた。

「持つてまゐりませうですか」と、おすゑは迷つて、生眞面目に訊いた。

「私に任せてお置きなさいな。いくら貴下が酔つたつて、私がちやんとお家へ送つて上げますよ」と、おきよは書生さんに向つて云つて、自分階下へ下りて行つた。

おすゑも二三度お銚子の取次をしたが、おきよは屢々その座敷へ顔を出して、酒の相手をし

ては長く側に坐つてゐた。義太夫を喰つたり、戯談を云つたりしてゐた。

「この方は貴女を大變褒めて入らつしやつてよ。大人しくつて容色がいゝからつて。…：その上にまだいゝ事があるんですつて」と、笑ひながらおすゑに向つて、「だから、私貴女に奢らせようと思つてるの」

「本當にさう云つてゐたんだよ」と云つて、客は何を思つたのか、袂を索つて名刺を取出して、おすゑに渡した。

おすゑは恭しく頂いたが、名刺の表をよく見もしないで、帯の間に挟んだ。そして、引留められるまゝにおきよの後の方に坐つてゐたが、おきよは馴々しく客の煙草を取つて吸ひながら、微酔ひの上機嫌で、自分の恠氣話をしてゐるのだつた。小石川の華族様のお屋敷に奉公してゐた時分に、其處の若様に付纏はれて困つたといふ話をして、客は身を入れて聞いてゐる。

「君もその人が好きだつたのなら、いゝぢやないか。何も逃げるには及ばないだらう」

「今になると、さう思ふんですけれどね。…：だけど、私の方が可哀想で、とても決心が出来なかつたんですの。いつそ私がお暇を買つて

姿をかくした方が、後々のお爲になるだらうと思つて、その方が學校へ行つて入らつしやる留守に急にお屋敷を出たのですわ。：：それつきりお日にも掛れないし、手紙を一度差上げることも出来ないんですもの。情ないでせう。私、初めの間は人に隠れて泣いてばかりましたよ。泣いて泣いて泣いた挙句に、自業になつて、どうでもなれて勝手放題に目を暮らす氣になりましたの。甘しくもないお酒でも、その時分から無理に飲むやうになつたのですわ」

目顔に感情を籠めてさう云つてから、おすゑを顧みて、「私が女の癖によく飲むからおすゑさんは呆れてるわね」

「そんなことはないわ。私もお酒が頂ければいゝと思ふわ」おすゑは幽かに答へた。そして二人が面白さうに盃の取りやりをしてゐるのを見てゐた。書生さんの酔つた目元はますます可愛らしくなつた、英語まじりで何か分らぬことを云つては、獨りで快活に笑つた。おきよと二人で唄つたりした。

「僕は今夜此處へ泊らうかね、さう極まれば安心して飲めるから」と、興に乗つて云つた。

おすゑは二人に指圖されて、お銚子の通ひをしてゐるが、自分が座を外してゐる間には、

話聲が静かになつてゐるのに氣を留め出した。廊下に立つて、夕日が障子の裾を匂つてゐるその座敷を、遠く見詰めてゐると、いろ／＼のことが空想されて、おきよの素振が忌はしくなつた。

暫らくして燈火が點いてから行つて見ると、書生さんは一人倒れて眠つてゐた。おすゑは火を直しながら、その寝顔を見守つてゐた。ふと思出して、貰つた名刺を出して見ると、入江といふ名前だつた。

入江さんと名を呼んで掻起しかつたけれど、それだけの碎けた氣持になるのさへ躊躇された。で、自ら目醒めるのを待ちながら、膳を片付け酒の罍を拭ひ、座敷の中を綺麗にした。客はますます心地よさうに深い寢息を吐いてゐる。

「泊るつもりか知らん」と思ふと、おきよの今までの様子が變に氣になつて厭だつた。で、階下へ下りがけにおきよの方に目を付けたが、おきよは謹み深い顔をして、嚴しい新客を離れの方へ案内してゐた。

「おすゑさん、お話に入らつしやい」と、ふと後から呼掛けられたので、振向くと、長逗留の支那人が襦袢を着て、手拭を持つて、湯殿へ行

くところであつた。

「張さんはお一人でお退屈でせう」と云ふと、

「私明日東京へ遊びに行きます。貴女は行きませんか」

「一緒に連れてつて下さつて。：：本當に連れてつて下さいな」おすゑは周圍に服輩のゐないのを見て、甘えるやうな様子をした。

「私、二三日東京に泊つて來ます。貴女は泊ること出来ますか」と、支那人は微笑して側に寄つた。

「え、泊つて關ひませんとも。東京になら幾日でもゐたいんですわ。だから連れてつて下さいな。張さんのやうな親切な方に連れてつて貰ひたいんですよ」

おすゑは例にない言葉な調子で云つたが、やがて自分が言過ぎたのに氣附いて、笑顔で支那人に挨拶して側を離れた。

慌しく鳴る呼鈴に答へて、行つて見ると、書生さんは夢から醒めて欠伸をしてゐた。「遅くなつた。直ぐ歸るよ」と、懐の時計を出して見て云つた。

「お泊りぢやないんですか」と、おすゑは訝しげに訊いた。

「いや、泊らない方がいゝよ」と眞面目で云つて、「近々に、も一度繰くり来るよ。今度来る時には何か土産を持つて来ようね。君は何が好き？」

おすゑは只笑ひに紛らせて答へなかつた。そして、帳場へ下りて、勘定書を持つて来ると、書生さんは衣服を締直して、袴を着けて待つてゐた。

「おきよさんは何をしてる？一寸呼んで貰へないかね」と、拂ひを濟ませてから云つた。

おすゑは承知して座敷を出たが、おきよの居所を捜さうとはしなかつた。多分離れにゐるのだらうと思ひながら、それを幸ひに會はさないで歸してやらうと思つた。そして、受取を持つて座敷へ出ると、

「何處にゐますのか、幾ら捜しても見付からないんですよ」と、誠にやかに云つた。

「變だね、外へは出りやしないだらうにね」と、客は物足らなさうだつたが、押して會はうとも云ひかねて歸りかけた。

おすゑは庚申の小祠の側まで見送つて別れを告げようとしたが、書生さんは別れともなささうにして、

「せめて、その大通まで送つてお呉れよ。急に

淋しくなつていけないから」と、頼むやうに云つた。

おすゑは否みかねて、素直に並んで歩いた。左右は畑で道は薄暗かつた。後を見上げると、小高い梅屋の部屋々々の燈火が闇の中に光つてゐる。おすゑはこのまゝ汽車まで行つてしまひたい氣がした。

路傍の小溝を縁取つた小笹が淋しそうに幽かな音を立ててゐる。ふと二臺の俵が掛聲をして來て、二人の間を分けて梅屋の方へ進んだ。

「これから彼處へ泊りに行くんだね」と、書生さんは羨ましさに云つて、「僕は其處から停車場まで駆足で行かう。寒くなつたから」

「でも汽車にお乗りになれば、お宅まで直ぐですわね」

「あゝ。新橋へ着いたら、また一杯やつて、銀座をうろつて家へ歸るんさ。東京はまだ背の口で賑かだよ」

大通へ出ると、活潑に別れを告げて、書生さんは足早に歩き出した。おすゑは暫らく立留つてその足音を見送つてゐた。

上りか下りか、汽車の音が闇を破つて耳に響いた。おすゑは人氣のない路傍に一人で立つてゐると、今に横濱へでも東京へでも行きたかつ

た。馴染難い朋輩の中へ入つて、寝苦しい夜を送るよりも、今夜一晩でも親しい身内の側で、氣樂に眠りたかつた。電話で嚇かされた夫に對する恐怖は次第に消えてゐて、今ひよつと此處へ會ひに來て呉れ、ばい、いと、知人の戀しさに堪へられなかつた。

二臺の俵は客を送り込んで歸りかけた。おすゑはそれに乘つて停車場へ行かうかと幾度も心が迷つた。

七

翌日の正午近くなつて、かの支那人は東京行の支度をして、わざ／＼おすゑを呼んで、「貴女と一緒にいきますか」と、眞面目に訊いた。

「行かれたら後から参りますわ」と、おすゑは小聲で答へて、相手の柔しい目付が自分の顔に注がれてゐるのを見てゐた。髪を綺麗に梳つて、顔もよく磨いて、油臭くなくて、支那人らしい厭らしさは感ぜられない。外套を後から掛けてやると、支那人はポケットから名刺入を取出して、名刺の裏に自分の泊る東京の旅館の名を書いておすゑに渡した。

おすゑはそれを昨日貰つた書生さんの名刺と一緒に大切に仕舞つた。そして、出た後の支那

人の部屋の掃除に取掛つたが、ふと浮いた氣持になつて、聞覚えの壺坂のサハリを口の内で唄つた。

三浦だの入江だの、あの支那人だの、いろ／＼の若い男に自分が柔しくされることを思ふと、驚陶しかつた心も一時晴々した。…縁のない人にでもあなたに親切にして貰へると、おすゑは今初めて自分の身に價値がついたやうに思つて、蒸けてゐた身體も伸々した。

が、すると、自分を粗末にして酷い目に會はせた夫に對する怨みが、これまでに増して激しく胸に込上つた。自分のいゝ男前も立派な人にさへこんな可愛がられる私を、今更取返しつかない憐れの者にしやがつてと、口惜涙を浮べた。そして、會ひさへしたら、かうもあゝも云つてやると、今までの自分の苦勞を心の中で數へ立てた。

さう思ひながら、再び紙幣を執つて、梅の枝の影の映つた障子を拂つてゐたが、やがて、差込む日を受けて燦いてゐる机の上の鏡立に目がつくつと、その前に屈んで、自分の顔を見詰めた。わざと笑つて見たり、乾いた下唇を反して見たりした。こんなに蕎麥津が多かつたか知らんと、今初めて氣がついたやうに氣にかけた。

庭では離れの客が寫眞器械を持出して、彼方此方寫してゐた。女中や男衆を呼んでさまさまの姿勢をさせて寫しなどしてゐて、おすゑが廊下へ出ると、手招きして、仲間に加はらせようとした。が、一度も寫眞を撮つたことのないおすゑは、自分の姿がどんなに映るかとおそまされて、いくら勧められても、思切つて前へ出て行くことが出来なかつた。そして朋輩の様子を羨ましさうに見てゐた。

やがて、寫眞騒ぎが済んで、庭に集まつてゐた大勢もばら／＼に散つた。「貴女も寫しとけばいゝのに」と朋輩に云はれて、おすゑは後悔しながら、一人後から食事に行きかけると、飯炊きのおしきが側へ来て、「先き貴女に電話が掛つたよ。寫眞を撮つてると云つたら、また後で掛けると云つてたよ」と知らせた。

「さう？」と軽く云つて、おすゑはおしまから歡を背けた。取次いで貰つた禮をも云はないで、無愛想な顔付をして行過ぎた。
待つてゐた電話は夕方まで掛つて來なかつたが、その間におすゑの心は絶え間なく動搖した。どうしていゝのか、確かりした決心は何時までもつかかなかつた。只此處で夫に會ふ氣には

どうしてもなれたかつた。ふと其處へ夫の姿が現はれて、主人や朋輩の目に觸れたらばと、思つただけでも恥かしくて、ぢつとしてゐられなかつた。ともすれば、胸騒ぎがして身體が慄へた。

おすゑは夕方までに、何の考へもなしに屢々女中部屋へ入つた。そして、行李を開けて自分の持物を改めた。財布を帯の間に挟んで座敷へ出たかと思ふと、また元の處へ仕舞つたりした。

日が暮れると、幾度も隙を見て裏門の坂道へ出てゐたが、おとくは「今日いやにぼんやりしてるのね。どうかしたの」と訊いた。

「いゝえ」と事もなげに答へたが、おすゑは悪い企てを見破られてもしたやうに相手の目が眩しかつた。

八

晩の混雜も一先づ片付いて、女中共も氣樂に息の吐ける時分、おすゑは夢中で裏門から大通へ出た。逃出す決心をしたのではなかつたが、家の中に落着いてはゐられなかつた。そして、通で俥を見つけると、考へる間もなくそれに乗つて、停車場へ向つた。時々後を顧みては

傳を急がせた。

切符を買つて上り列車に乗込むまでは、大罪を犯したもののやうに恐ろしくて、行先も不安だったが、列車が動き出すと、温かい思ひが胸に湧いた。兎に角叔母にさへ會へば始末は付いて呉れるだらうし、東京でなら誰れに遠慮もしないで、夫に會ふことが出来る。東京でなら朋輩を憚らないで朝吉に會ふことも出来る。東京には自分に柔しいあの支那人なども行つてゐる。……

で、おすゑは手頼りになる人々の中へ入つて行くやうな氣持で東京の市街へ踏込んだ。牛込のさのやといふ家を探ねて行く途々、叔母に告げるべき體裁のいゝ言譯を思案しながら歩いた。

「その石垣の横手を上つて行つた突當りの家ですゝと教へられたので、指差された石垣に沿つて行くと、さのやの軒燈は直ぐ目に映つた。

狭い道の左右には、同じやうな小さい家が並んで、梅屋のやうな構への大きな家は一つもなかった。おすゑは叔母のゐる家と思つたより見窄らしいのに驚いた。これなら、いくら田舎でも梅屋などに勤めてゐた方が幅が利くと思ひながら、暫らく勝手口に立つて、家の様子に耳を

止めた後に、隙間から言葉を掛けた。

「何方？」と答へて、戸を開けて顔を出したのは叔母のおきくであつた。戸の蔭に身を寄せてゐるのを、軒燈の光で覺束なく見分けて、

「まあ、お前どうしたのさ。どんなに心配してゐたか知れないよ。先き梅屋から電話が掛つて、私吃驚しちやつたよ」と、聲に力を入れた。

先を越されたので、おすゑはおどろ／＼して、言譯も口から出なかつた。叔母は一足外へ出て来て、おすゑの顔を見詰めたが、「兎に角家へお入りよ。こんな處で立話も出来ないから」と、愚圖々々するおすゑを家へ引入れて、玄關脇の、子供が一人でゐる部屋へ連れて行つた。

「彼處に居づられれば、手紙で一應私に知らせて呉れよ。いゝのに。出抜けて吃驚しちやつたよ。一體どうしたの？」

問詰められると、おすゑは涙ぐんだ。自分の淺暮な仕業が恥かしくなつたが、外に尤もらしい口實は思付かないので、夫の電話の事を、さも嚇文句を聞かされたかのやうに大袈裟に話した。……勇吉があの家へ来て若しも無法なことでも云出したら、私は構はないけれど、主人にも濟まないし、叔母さんの御迷惑にもなり

やしないかと思つて、私心配で仕方がなかつたんですの。」

「何て氣が小さいんだらう、お前さん」と叔母は笑つて、「それつばかりのこと何でもないぢやないかね。あの男だつて、自分から勝手に別れて、今更文句をつける譯もなからうしさ。此方からこそ話をつけて子供の養育料くらゐ取つてやつていゝんだもの。……居所が分つてれば、私が出掛けて、幾らでも出させるやうにして上げるよ。……」

兎に角今から梅屋へ歸れはすまいから、今夜は此處へ泊つて、明日の朝の内に歸ることにすればいい、一人で歸るのが厭なら、私が隨いて行つて言譯をして上げる、今先方へ電話で知らせとくから、安心して茶の間で家の老婆さんと話でもしといでと、叔母は獨合點で極めた。そして、茶の間へ誘つて行つて、主人の老婆に引合はせて、一夜の宿を頼んだ。僅か四五日の間にも汚れ目が脱けて、持前の容色が引立つたおすゑを、自分の姪として人中へ出すのが悦しかつた。

が、おすゑは老婆に向つてはき／＼口は利けなくて、容易に火鉢の側へも寄れたかつた。叔母が電話で梅屋の主人に丁寧と言譯をしてゐる

のを渡聞きしながら、最早再び彼處へ行けるものかと思つてゐた。たとひ、叔母が連れて行つて呉れるにしろ、そんなつう／＼しい眞似は私には出来やしない。……と、自分の處置を案じて萎れてゐた。

「さう怒つてやしないよ。只ね、家が忙しいんだから、明日早く歸つて呉れつて」と、叔母は安心したやうに云つて、「お前も一言斷つて来ればいゝのに。私はまた此度濱が戀しくつて歸つたことと思つたから、電報を打たうかと思つてゐたんだよ」

「どうも済みませんでした」と、おすゑは畏つて頭を下げた。その様子が叔母の目には子供染みてゐて可笑しかった。

「でも居づらくはないんだらうね。濱にゐて、荒仕事をするよりや餘程氣樂だらう」と、力を付けたが、

「え」と、おすゑは曖昧に答へた。

「まあ二三ヶ月辛抱しといで、その中には私も老へがあるから」

叔母は家の者に、少しも遠慮する風はなかつた。そして座敷はひつそりして、さして客が來てゐさうには思はれないのに、二階へ上つたり電話口へ立つたり、緩くり話をしてはゐなかつた。

た。「一寸手傳つて貰はうかね」と云つて、持込まれた井を膳に載せて、おすゑに渡した。

おすゑは窮屈に坐つてゐるよりは、手助けでもする方が却つて氣樂だつた。指圖された通り階下段を上つて、話聲のしてゐる右手の部屋へ入つた。瘦せかけた貧相な男と、鼻の低い藝者とが、不審さうに此方を見た。おすゑは顔に愛嬌を浮べて、恭しく膳を置いて、直ぐに引下つたが、襖の外へ出ると竊かに冷笑した。

よく見ると、まだ二つ三つ部屋があるらしいけれど、どれも狭い粗末な部屋としか思はれない。こんなだともとも梅屋ほどのいゝ客は來ないだらうにと、叔母が何時までも此處に勤めてゐるのを怪んだ。そして、周囲の客の氣色に耳を留めながら、階下へ下りかけると其處へ叔母が忙しさうに上つて來て、小聲で用事を言付けた。

おすゑは叔母の後に隨いて、奥の室へ入つて寢床を伸べた後、方々の戸締りをした。どの部屋にも一人の男と一人の女とがゐた。

「この近所の家は皆こんな稼業をしてゐるんでせうね」と、階段を下りながら訊いた。

「あ、この通は皆な待合だよ」
「随分どつさりあるんだわね」

茶の間には目の大きな小娘と若い女中とが、戸外から歸つてゐて、夜食の支度をしてゐた。おすゑは食事の仲間入を勧められるのを斷つて、叔母の情で、一人先へ寢床に就いた。

夜は更けてゐるし、身體は疲れてゐるし、床に就くと、張詰めた氣が一時に弛んで深い睡りに陥つた。誰れかに呼び起されたやうな氣がして目を醒ますと、最早薄明るくなつてゐた。側には叔母と、一人の女中とが、正體な目醒つてゐる。おすゑは異つた人と寝てゐるのを不思議さうに見廻して、昨夕梅屋を抜出たからの事を夢のやうに思出した。裏門を出て淋しい野徑を道つて、ふと目に付いた俥に乗つたことを思ふと、

自分が狐に抓まれてゐたやうな氣がした。

で、あれほどの家を諷もなく出て來た輕卒が後悔されたが、「……だけど、もう彼處へは行かない」と溜息吐いて、叔母が何と云つて勧めようとも、足を向けまいと覺悟をした。東京にゐたつて、五圓の里扶持ぐらゐ稼げないことはない、自ら恃む氣にもなつた。

戸外には物賣りの聲がし出した。次第に人通りも繁くなつた。冴えた朝日がいゝ氣持に隣間を渡れた。すると間もなく、次の間から老婆が聲を掛けて皆なを呼び起さうとした。おすゑはそ

れに答へて、叔母を揺起して、自分も起上つた。兩戸を繰開けると、顔に觸れる朝風は底冷たかつたが、空はよく晴れて、何方を見ても春めいてゐた。

おすゑは田舎の梅の散りかけてゐる話などしながら、甲斐々々しく朝の用事を手傳つた。客は皆歸つて、座敷の障子は開放された。夜具や座蒲團は縁側に持出されて日に干された。其處らが片付くと、叔母は、温かい窓際に寄つて息休めをしてゐるおすゑに向つて、今思出したやうに、

「さあ、これからお湯へ入つて、直ぐに出掛けることにしようね。愚圖々々してるともう正午だよ」と促した。

「さうねえ……」おすゑは浮かぬ顔をしてゐたが、やがて、「叔母さんにお氣の毒だから、私一人で行きますわ」

「一人で？」叔母は意外に感じた。「今日はお天氣がいよし、私も梅見がてら一日遊んで来たんだよ」

「でも、何だか濟みませんわね」
「何故？……私は些とも構はないよ。お前さんのことは私が引受けて來てるんだから、これから、よくなつて呉れさへすれば、私は些とも

骨惜みはしないよ。……せめて梅の間だけ彼處で辛抱しといでな。外へ行かうたつて、さう急にいゝ家があるもんぢやないからね」
かう柔しく云はれると、おすゑはますく叔母に逆ひかねた。自分の望んでゐることは一言も口に出せなかつた。そして、叔母の手で引摺られて、梅屋の鬮を跨ぐことを思浮べると心は滅入つてしまつた。

「來月になつたら、一日お暇を貰つて、一緒に濱へ行くことにするから、それまで我慢しといでな。朝吉のことは些とも心配することはありやしない」と、叔母は相手の滅入つた影を見つけたやうに云つた。

「……私ね。折角東京へ來たんですから、次手に買物をして行かうと思ふんですがね。……それに一二軒寄つて行きたい家もあるんですけど……」

「そんなことは今度にして、今日は早くお歸りよ」叔母は口早に打消して、急立てて湯屋へ連出した。

そして、途すがら、若し前の夫が會ひに來てどんな甘いことを云はうと決してその言葉を眞に受けるな、浮かりして馬鹿な目を見ないやうに氣をつけよ、と、染々と説聞かせて、

「またあの人に掛り合つちや、これまでの苦勞が何にもなりやしない。お前さんにもよく分つてるだらうね」と念を押した。

「え、と、おすゑは首肯した。

「お前さんは若いんだもの。賑町の裏長屋で煙つてゐるには及ばないんさ」と、叔母は横濱へ來るたびに咬かすやうに云つてゐたことを繰返した。

湯屋には幾人も藝者が行つてゐたが、叔母の顔を見ると、左右から皆親しきやうに言葉を掛けた。

九

叔母は身支度を濟ますと、一度梅屋へ電話を掛けて置いて出掛けた。通へると手土産の菓子折を調べた。おすゑは後に隨いて電車に乗ることは乗つたが、素直に向うへ行く氣にはなつてゐなかつた。そして、電車が意地悪く駛せるにつれて、心は目眩しくして焦立つた。

ふと思切つて、叔母に打明けようとしたが、叔母の平氣な目顔を見ると、今更ら云出す機會はなかつた。で、新橋に着いて、切符を買つて、待合室に休んでゐる間も、さして口は利かないで、話をし向けられても卒氣ない返事をするば

かりだつたが、不慮の氣性を知つてゐる叔母は深く怪しみしなかつた。

發車時間も迫つて來た。おすゑは最早一刻も躊躇されなくなつた。自分の生死の別れる瀬戸際に立つてゐるやうに、只恐ろしさ厭はしさに戰いたが、すると、ふと智慧がついて、

「私、一寸便所へ行つて來ますわ」と云つて、慌しく待合室を出た。叔母が何か云つたけれどそれは耳に入らなかつた。

混雑の中を分けて、後をも見ずに、ひた走りに走つた。息を切らし、餘程の道を迷延びたと思ふ頃立留つた。そして周圍を見ると、幸ひに叔母の姿は見當らなかつた。が、往來の人は不思議さうに此方を見てゐた。おすゑは思はず首垂れて、胸を鎮めて當てもない道を靜かに歩んだ。

方角も分らないし、これから自分が行くべき處も分らない。……おすゑは思ひあぐんだ果に、電話で聞いた夫の居所を、唯一の手頼りにして、思出さうと一念を凝らしたが、あの時狼狽へてゐたので、四谷と覺えてゐるばかりで、詳しいことは記憶に残つてゐない。訪ねるには手筈がない。

でも、差當つて身の置場はないので、おすゑ

は四谷を目當てにして道を取つた。歩き疲れると電車に乗つた。此處が四谷だと教へられて、見付で電車を下りて、あたりを見廻し、歩き出した。すると、横顔や後姿の夫に似通つた男が頻りに目に付いたが、よく見ると、どれも赤の他人だつた。

ほかほかと温かい日の中を、いろいろの人間がごたごたと通つてゐる。おすゑは若しも夫に行會はないかと當てもなく歩いてゐる中、身體は汗ばんで心はぼんやりして來た。そして、暫らくの間は只機械のやうに足を動かしてゐた。

どの町を通つたのか氣付かぬ中に、再び塙端に出た。見覚えのある神樂坂の方が直ぐ目の前に見えた。おすゑはわれとわが心を強ひて落着けて、路傍に足を休めて、この後の處置をよく考へようとしたが、何處も人目が繁くて、相應しい休み場所は見當らない。

で、誰れかに急立てられるやうな氣持で更に歩み出した。公園ぐらゐありさうなものと、目の届く限りを搜したが、そんなものは何方にもないらしくて、行つても、只電車や俵や雑多な人間が、絶え間もなく通つてゐる。

おすゑは泣出したくなつた。……叔母には一生會はず顔はないし、外に知人のゐない東京

では、差當つた奉公口の世話を頼む處もありはしない。……おすゑは朝吉の里扶持の出道も杜切れてしまつて、最早浮ぶ瀬のない身になつたと思ひ詰めてゐたが、すると、この上一刻も東京などにゐる氣はしなくなつた。こんな土地に一人であるのが心細くなつて、「生きるも死ぬるも朝吉の側へ歸つてからのこと」と、極める

と、今までどうかして東京で手頼りを求めようとした幽かな心の力も弛んで、一途に横濱の家へと急がれた。

新橋へ來て切符を買ふ前に、朝吉への土産に飴でも買つて行かうと思つて、金入の中を検べると、中には名刺が二枚疊み込んであつた。入江といふ書生さんのと、服といふ支那人のと。おすゑはふとこの二人の顔立や、柔しい言葉

十

を思出して、廣い東京を顧みた。

汽車を下りた時は、長い日も暮れてゐたので、おすゑは家へ歸るのに都合がよかつた。路次近くなると、近所に氣を配つて、薄暗い處を選んで通つた。足音さへも忍んだ。そして、自分の家の前まで來ると、戸の側に控寄つて内の様子

に甘えてゐる子供の聲が隣の家から洩れて来るばかりである。

妹はまだ勸工場から歸つてゐないのか知らんと疑ひながら、結句妹のゐないのを喜んで、そつと戸を開けて入ると、意外にも親子の姿が直ぐ目についた。

「あゝ、姉さんが」と叫んで、妹は呆れた顔して立上つた。その聲に驚かされて、行火に頭を押付けてゐる母も顔を上げて、目を覚めて此方を見た。

「どうしたの、姉さん。さつき叔母さんが来て、そりや大變だつたよ。私達もどんなに心配したか知りやしない」と、妹は忙しく言葉を續けた。

おすゑは叔母といふ言葉を聞くとぎよつとした。「そして、叔母さんはどうして？」と、やうやく問返した。

「東京へ電話を掛けとくつて、今し方郵便局まで行つたところなの。……姉さんが今夜此方へ歸つて来たければ、警察へ願つて捜して貰ふなんて、叔母さんも大變心配してゐたよ。……でも、まあよかつたわね」

母親も行火から匍ひ出て、娘の前に躍り寄つてくどくど譯を訊き出した。が、おすゑは自分

の仕業について、母や妹も安心さすやうな詳しい話はしなかつた。

「叔母さんは怒つてゐるだらうね」と、訊いて、最早何處へ行つても、叔母の手をのがれられぬのを覺悟した。

「いゝえ、些とも怒つてやしないよ。只姉さんが無分別なことをしなければいゝがと、そればかり心配してゐたよ」

「私、叔母さんには本當に濟まないことをしちやつた」

おすゑは悲しうな聲でかう云つたが、叔母がさして怒つてはゐないのを知ると、心が稍鎮まつた。で、火鉢の側へ寄つて、消えかゝつた火を熾して、冷たい手を翳した。あたりをよく見ると僅か四五日の間に家の中が一層汚れてゐるのが目に立つた。こんなだつたかと疑はれるほど、疊は赤茶けて、壁には齧隙が出来てゐる。そして物の儲えるやうな厭な臭ひが鼻を襲つた。おすゑは夫に離れてから一年あまりこんな家で暮らしてゐたことを思ひ浮べ出したが、すると、

「そら、叔母さんだ」と、妹が悦しうに叫んで、上り口へ駈けて行つたので、おすゑも思はず振返つた。

叔母は些しも邪慳な顔付をしてゐなかつた。「お前さんも随分人困らせをするぢやないかね」と、一言怨みまじしいことを云つただけだつた。

差向いて坐つて、新橋で吃驚したことから、今までの道筋を口軽に話した。そして穩かにおすゑの腹の中を尋ねた。茶屋奉公が厭なら厭で、この先どうするつもりか、確かりした量見がついてゐるのかと問詰めた。

「私、奉公が厭ぢやないんですけれどねと、おすゑは涙ぐんで、「梅屋へだけはどうしても行く氣になれませんの。……」

「ぢや、早くさう云へばいゝのに」と、叔母は事もなげに云つて、外の家なら勤める氣はあるんだね。……お前さんは陰氣だから、あんな騒々しい家には性が合はないかも知れないよ。馴れてれば何でもないんだけどね」と、暫らく考へてゐた。それを機會におすゑは、

「私、同じことなら東京で奉公したいと思ふんですがね」と云つて、叔母に見棄てられまいとして、そのいゝ返事を待焦れた。

が、叔母はすぐに快く引受けては呉れなかつた。相手の心を危むやうな口振であつた。どうせ今夜の終列車で歸ればいゝのだからと、緩

くり話を極めることにした。そして、皆なに蕎麥を寄つて、笑ひ興じながら箸を執つた。

「お前はあれから何處へ行つてたい。活動でも見てゐたの？」

叔母の言葉は冷語のやうにおすゑの耳に響いた。で、

「いくら私が馬鹿だつて、そんな氣樂な眞似が出来るものですか。どうして叔母さんにお詫びをしようかと思つて、そればかり考へたんですわ」と、眞面目に言譯した。

「さうだらうね、お前のことだから。……だけども、今の若さでそんなに物を苦しめてゐちや壽命が縮まつてしまふよ。あんまりづうくしい女になつても困るけれど、くよくよしてゐたつて、何處からも御褒美が降りやしないんだからね。若い内に些とは面白い目をしたなきや話らないと思ふよ。それも人によりけりだけど、お前なんぞ氣の持ちやう一つでこれからいくらもいひ月日を送れるんさ。……梅屋へも彼處の主人と牛込の家とが懇意だから、私が無理に頼んで上げたのに、お前のやうだと私も張合が抜けちやつたよ」

叔母は調子に練をつけてこんなにかつてゐたが、何となしに東京の戀しくなつてゐるおすゑの心には、それが一々強く響いた。梅屋で黙つて聞いてゐた朋輩の身の上話や、いろ／＼の東京の客の浮いた話を思出してゐると、その方へ心は惹寄せられた。何時までも此處で暮らして、長島町の伊豆屋へ僅かな給金でその日稼に出て行くのは、甲斐性がなき過ぎるやうに思はれた。それにこの前彼處の旦那に相談もしないで、梅屋へ行つたのだから、旦那も此處氣を悪くしてゐるだらうと案ぜられた。

で、叔母の方から勧めるのを心待ちにしてゐたが、叔母は母や妹を相手にして、外の世間話をし出した。櫻が咲いたら一日花見に出掛けるやうにと、妹と約束したり、この秋の父親の法事には是非此方へ来て立派にしたいと云つたり、獨りで座を賑はせた。おすゑの顔にはちら／＼目をつけながら、肝心な話は持出さないで、やがて時刻を見計つて、歸支度に取り掛つた。

うになつて藻掻いてゐたが、母親に聲を掛けられて、ふと目を醒ました。

「やつぱり身體の加減が悪いのかね。大變魔されて」と、母親は行火越しに覗いた。

「うゝん。私何處も悪くないの」

「さうかい。……だけど、お茶屋奉公は随分氣骨が折れることだらうな。おきくもいる」と世話をし呉れるけれど、お前はもうそんな處は斷つたらいいだらう。長島町の旦那にお頼みすれば生活は立たんことはなからうから」
「私もう伊豆屋へ頼みに行かないよ」おすゑは拗ねたやうにさう云つて、母親から顔を背けて寢返りした。折々術なささうに溜息を吐いてゐた。

日が暮れて妹も歸つて來たが、おすゑは食事拵へをも母や妹に任せて、自分は手出しをしなかつた。そして、早く戸締りをして、三人枕を並べて寢床に就いた。妹は昨夕の夜更しと一日の疲れのために直ぐと眠入つたが、おすゑの目は却つて夜になつてから冴えてゐた。
と、ふと郵便の聲がして、戸の隙間から手紙が投込まれた。おすゑはランプを點けて枕許に蹲んで披いて見た。それは剛い男文字で書かれた叔母の手紙であつた。

十二

「……梅屋の主人にはやうやく申譯相立ち候へば御安心なされたく候。さてお前様の考へはいかが相成候や。若しも再び當地にて勤めたしと望み居り候はば、とくと決心して未永く勤めるつもりにてお出であるやう吳々も注意申し候。さすれば荷物も當家にて預り置き申すべく、若し何時までも御地にて暮らさるゝことに極り居らば、二三日中にお届け申すべく候へば、至急御返事下されたく候。尙只今よろしき勤め口は無之候へども、お前様の覺悟次第にて、當分當家にて手助けをなし下さらば好都合と存じ候。主人も左様申し居候。兎に角よくよく御考への上御返事相成たく待居候。」

おすゑはこれを読むと俄かに浮立つた。母親を呼び起して、手紙の文句におまけをつけて話して、明日の朝直ぐに出て行くことに決めた。そして、母親が氣遣はしがるのを頭から打消して、

「私、これから氣を持直して、二三年せつせと稼いで、彼方で世帯を持つて、お母さんや朝吉を皆な連れて行くことにしようと思ふよ」と、勢ひづいて云つた。
夜中に幾度もランプを點けては起上つて、する事もないのに家の中をまご／＼してゐた。

翌日さのやの園を跨ぐと、叔母はあまりの早さに驚いた。「驚りもしないでまた來たんだね。もうとても來ないだらうと思つてゐたのに」と笑つて、機嫌よく迎へた。

「此方に置いて頂けるんでせうか」と云つて、おすゑは自分の堅い決心を微見かした。
「當分手傳つてゐてお呉れなと、叔母はおすゑに耳打ちして、も一人の女中も都合で暇を出すことになつてゐるから、當分その代りになつて勤めて呉れと云つた。

おすゑは叔母と二人で働くのが悦しかつた。で、見たところ人のよささうな老人の主婦に挨拶をして、事が極まると、直ぐに叔母の指圖を受けて甲斐々々しく立働いた。

此家の内職の様子も時々話して聞かされた。養子夫婦は此頃京橋で鳥屋を出してゐて、老婆は何もしくなくつてもいいのだけれど、住み馴れたこの土地を離れたくないと云つて、この稼業を續けてゐることや、今のところ殆んど叔母一人で切り廻してゐることなどが分つて來た。お光と云ふ小娘がよく京橋から遊びに來ては、金切聲を出して小間しやくれたことを喋舌つた。

そして、老婆の前で常勢津を浚つたり、女中を誘つてお汁粉を食べに行つたりした。おすゑも来た翌日お作を云付けられて御馳走になつた。

梅屋のやうに坐り込んで客のお相手をするこ
とがないのは氣榮だつたが、その代り面白い浮いた話を聞くこともないし、朋輩のない代りに、老婆やお光に一層餘計に氣兼ねをせねばならなかつた。實入りだつても梅屋と比べものになりさうではなかつた。

「今階下にもた女中はこの頃此處へ来たのかい。一寸いゝ女だね。……あの女はどうかならんかい」と、ある老人の客が云つてゐるのが、おすゑの耳に入つた。

「さうですなえ。貴下ならいゝでせうよ。まあ當人に當つて御覽なさいな」と、叔母は笑ひながら答へてゐた。

「人を馬鹿にしてゐるよ。禿頭の癖に」と、おすゑは心で嘲つて、その座敷へ行くと、わざと無愛想にした。

二日三日と立つ間に、藝者に顔馴染も出来て、多少客の名前をも覺えた。一寸ぐらゐ叔母が家にゐなくてもさうまごつかなくなつた。

ある日叔母が勘定の滞つてゐる客の家を二三軒催促に廻つてゐる留守の間、おすゑは老

婆に灸を据ゑてやつてゐた。小さな艾では利かないと云はれて、思切つて大きくしたが、火が膚を灼くのを見てゐると、自分の方が却つて身體が慄へた。

「熱いでせうねえ」と、同情して訊くと、
「熱くなくつちや利かないよ。私の身體なぞは馬鹿になつてゐるから、灸が中々應へないんだよ」と、云ひながら、老婆は尚を囁めて我慢してゐた。

身柱にも三里にも据ゑてしまふと、老婆はさも快ささうに息を吐いて、「お前も時々灸を据ゑるといゝよ。私が點を下して上げるから」と、今にもさうしさうだつたので、おすゑは恐れて退出した。

と、そつと格子戸が開いて、静かな聲がした。叔母の留守に變な客に來られてはと案じながら出て見ると、客は梅屋で見たことのある人だつた。

「君は此方へ來てるんかね」と、客も氣がついた。

おすゑは二階へ案内して、奥の座敷へ通すまでに、やう／＼客の名前を思出した。「貴下は確か倉賀さんでしたわね」と、馴々しく言葉を掛けた。

「君が此處にゐようとは思はなかつた。三浦はこの頃此處へ來ないかい？」

「どうですか。私四五日前に來たばかりですから、何方にもまだお日に掛りませんのですよ」

おすゑは梅屋で會つた四人連れを思出した。一座の中で一番大人びて男前も立派だつた三浦や、皆なに挿簞はれてゐた大井の顔付や話聲はよく心に残つてゐたが、この人の事はぼんやり思出されるばかりだつた。でも、顔を知られてゐるだけに心が融けて、梅屋のあの日の話などしてゐると何となく懐かしかつた。「お馴染は？」と訊いて、藝者を呼ぼうとしても、叔母さんが歸つてからでいゝと云つて、倉賀は縁側近く寝そべつた。そして、座を立たうとするおすゑを引留めて、彼處を出て來た譯を訊いたら、三浦や大井の身の上を話して聞かせたりした。

「叔母さんのコレは來るかい」と、ふと拇指を突出したり、鼻を指差したりして變に笑ふので、「コレつて何です」と、おすゑは怪んだ。

「何だ自ばくれて。……落語家の情夫さ。來るだらう」

「あんな事云つていらつしやる」

おすゑは戯談として聞流したが、倉賀は、「ぢや、君はまだ知らないんだね。よく氣をつけといで、今に遊びに来るから」と、誠にやかに云つた。

が、そんなことがあるものかと、おすゑは些しの疑ひも起さなかつた。最早日影も縁側から退いて、そろ／＼晩の支度をせねばならぬ頃となつたので階下へ下りて行つた。倉賀は緩くり遊んで行くつもりで、食物を眺へて酒をも言付けた。

叔母は丁度歸つて来たところで、衣服を着替へてゐた。倉賀の名を聞くと、「三浦さんの連中ではこの人が一番確かなんだよ」と云つて、「とん子さんを掛けて？」と訊いた。そして、忙しさうにおすゑに晩の指圖をしてから、二階へ上つて行つた。

お光は鳥の土産を持つて、泊りがけで遊びに来て、老婆の顔を見るや、「私、お腹が空いて空いて仕様がないの。紀ノ善のお壽司を御馳走して下さいな」と強請んだ。

おすゑは叔母の留守の間に樂をしただけ、何かしら身體が忙しいのに、傍でお光がはしやぎ廻るので、思々しく思つた。少し宥めたらよささうに思ふのに、老婆は商癖いほど甘かつた。

「こんなに我儘で贅澤で、本はどうするんだらう」と、自分がこのくらゐの年頃から、苦勞ばかりして誰れにも大事にされたことのないのを思合はせて、妬ましかつた。そして、壽司の残りをお皿に取つて呉れても、心で逆ふつもりで、手を付かなかつた。

「遠慮深いわね。遠慮してぢや人間は損よ。：おすゑさんは叔母さんとは丸で性が異なわね」と、お光は小間しやくれた口を利いた。それがおすゑの耳には痛く響いた。

灯が入ると、一度に三組も客が来て、座敷は寒がつてしまつた。おすゑは戸惑ひして、屢々叔母の小言を喰つた。倉賀は馴染のとん子を歸した後も、まだ愚圖々々してゐたが、おすゑの姿を見るたびに呼入れて、さも話したいことが溜つてゐるやうな口吻で話した。

「まだ手があかないんかね。何時もこんなに忙しんかい」

「いゝえ、さうでもないんですよ。今夜のやうなことは私が来て初めてですよ」

「：：僕は一つあの後の大井の話は緩くり君にして聞かせたいんだけど」と云掛けて、「も少し待つてゐるから、手が隙いたら僕を神樂坂まで送つてつて呉れないか。今夜は縁日だから賑か

だよ」

「中々遊びに出しては呉れないでせう。とん子さんを連れて入らっしゃればいゝのに」

「いや、彼奴と歩くのは御免だよ。家鴨のやうな態をして歩きやがるからね」と、倉賀はさも厭さうに眉を擡めて、「叔母さんに聞いて御覽。僕とならいいつて云ふから」

「えゝゝゝ」

おすゑは隣座敷で鳴つた手の音に答へて出て行つた。そしてその客を送り出して、ふと外を見ると、淡い月が道を照らしてゐる。横町の抜道をぞろ／＼通つてゐる人の姿は見えないで、足音や話聲のみ聞えた。おすゑも倉賀に付いて皆なの行く方へ出て見たかつたので、邪氣ない氣持でそつと叔母に許しを乞うたが、叔母は首を振つて、「今夜はいけないよ」と、没義道に斥けた。

意地悪く今夜は忙しかつた。倉賀の側へ行つて斷つて、二言三言話して来ると、帳場には坊主頭で顔のテカ／＼光つた愛嬌のある男が、煙管を指先で器用に廻しながら、老婆を相手にべら／＼喋つてゐる。

「一寸大急ぎで行つとくれ」と、叔母はおすゑに囁いた。

「あの人は誰れ？」と訊くと、
「お前だよ」と答へて、叔母は考へく二三人の
藝者の名を差して、

「あの人は決して同じ女を二度呼ばないんだか
ら……」

「まあ厭だ」おすゑは呆れたやうに云つて、輕
薄なその男を怖らしさうに見やつた。そんな
男に買はれる藝者を憐んだり卑んだりしなが
ら、二三軒廻つて歸ると、お前はお光を前に置
いて、爪弾きで縁かいたを唄つて聞かせてゐ
る。首で拍子を取りく、巫山戯て唄つてゐれ
ど、その聲は震ひつきたいほどによかつた。

お前は間もなく歸つた。おすゑは何にない氣
忙しい思ひに疲れて、ガツカリした。夜食が済
むと、老婆もお光も寢床へ入つた。叔母は手早
く跡始末をして、立膝で煙草を吸ひながら、仄
たさうなおすゑを見詰めて、

「お前も何時までこんな事をしてゐられまい
ね。もう厭になつたらう」と、相手の心を索る
やうに云つた。

「私些とも厭だなんて思つてやしないわ。さ
う見えて……」

おすゑは強ひて自分の辛抱氣を見せて喜ばせ
ようとしたが、叔母は意外にも、「こんな家に

永くゐたつて仕方がないよ」と呟いた。そして、
「一度よくお前に話したいことがあるんだがね」
と、意味ありげに云つた。

「話したいつてどんなこと？」
「さう急ぐこともないよ」

おすゑはそれを聞きながつて焦れたが、叔母
は進んで何も云はないで、話を客の噲に移し
ながら、裏支度をした。

「でも、倉賀さんは随分悪口言ひだわね。叔母
さんには落語家の情夫があるんだなんて、酷い
ことを云ふのよ」と、おすゑは笑ひく、何の氣な
しに云つたが、すると、叔母は厭な顔をした。

「乞食にも私の情夫があるんだよ。どうだらう
と大きなお世話さ」と、角立つた卑しい口調で云
つて、枕に就いて背を向けて口を噤んだ。

おすゑは變な氣がしたが、やがて、思はずしい
疑ひが萌すと共に、云はでものこを口に出し
た自分の方が極りが悪くなつた。

叔母さんも倉賀さんの云つた通りなのだらう
か。四十にもなつてゐるこの叔母でさへさうな
のだらうか。……おすゑは只一人手頼りにして
ゐる人が手頼りにならない様に思はれた。

「皆なさうなのだ……」おすゑは燈火を消し
て、叔母の側に敷かれた夜具の中へ息を殺して

入つた。更け行く夜に堪へたい淋しさを覺え
て獨り涙ぐんでゐた。

夜が明けると、叔母の様子は不歸と少しも異
つてはゐなかつたが、それでもおすゑの心には
妙に隔てが出来た。以前よりも一層素直に指圖
通りに働いてゐても、呢んだ口は決して利かな
かつた。

横濱からは妹が覺束ない筆で音信を寄越し
たので、皆が無事に暮らしてゐることは知れ
たが、此方から月末までにどれほどの金を送ら
れるかと、自分ながら不安心だつた。里親へは
成るべく十分の心付けをして置きたいのだけ
ど、浮かりすると、極めただけの仕送りも危ま
れた。

三月も最早片手で數へられるほどの日數を
してゐるばかりだ。おすゑは櫻の吹く町へ着て出
られるやうな衣服一つ持つてゐなかつた。

叔母は一度云掛けて止めたことを、二三日立
つてもハツキリ話さなかつた。只永くこの家に
勤めてゐても先の見込はないらしいことを折に
觸れては微めかした。だが、叔母が他所行の衣
服を幾袋も持つてゐないことはおすゑの目に
留つてゐる。幾年も此處に勤めてゐるために、

随分お金も溜めてゐるらしいと、横濱の親類で

嚇してゐたのに……

十三

二日置いて倉賀がまた遊びに来た。静かに雨が降つて薄ら寒い晩であつた。おすゑはこの人になら氣兼ねしないで、いろ／＼の噂の聞かれるのを喜んだ。方々の土地を浮かれ歩いてゐるこの人達の氣樂な暮らしは、言葉の端々から美しい夢のやうに描かれた。「今夜は暇らしいから、おれが叔母さんに斷つて、君を寄席へ連れて行かう」と、倉賀は云つた。

「私、東京の寄席へまだ一度も行かないんですよ」

さう云つておすゑは、此方の寄席で今どんな事をしてゐるのかと、乘氣になつて訊いてゐたが、ふと叔母が小聲で呼んでゐるのに氣付いた。で、叔母が立つてゐる小暗い處へ出て行くと、「今勇吉さんが来たから、お前さん階下へ下りちやいけないよ。——此處にはゐないことにしてゐるんだからね」と、顔を擦寄せて囁いた。

「さう？」と、おすゑは言葉は落着けたが、身體は震へた。

「お前さんは會はない方がいゝの。私がよく話をしとくから」と、叔母は獨りで吞込んで、私

が呼ぶまで来ちやいけないよ」と念を押して階下へ行つた。

おすゑはおど／＼しながら、階子段の側へ来て、耳を澄ました。物音に紛れて話は少しも聞取れないけれど、折々男の聲が聞えた。何を云つてゐるのか、どんな風をして來てゐるのか、自分も其處へ出て行つて、長い間隙に溜つてゐる事を思ふさま云つてしまひたくなつたが、叔母に遮られてゐるので下りる譯に行かなかつた。叔母の上手な口先で夫が説伏せられ、ば、最早一生、夫に會ふ道は絶えてしまひさうな氣がして、叔母の勝手な仕打が恨めしかつた……

と、やがて袂が開いて、豪所の障子が開いて、男の出で行く氣色がした。おすゑは階子段の側の障子を細目に開けて、見えない夫の姿を雨の中に見送りながら、懐かしい思ひを寄せてゐた。

「素直に歸つたよ」と、叔母は急いで上つて來て知らせた。「お前さんが見付からなくてよかつたよ。幾度も來られちや煩さいからね」

「今何をしてゐるんでせう？」

「なんにもしてゐないらしいよ。此方にゐても思はしくないので、二三日中に濱に歸るんだつ

て……私、うんと窘めてやりたかつたけど、汚い服裝をして萎れてゐるから可哀想でね、あんまり酷い口も利けなかつたよ。おすゑの居所を教へて呉れつて云ふから、自分が棄てて出た女の居所を聞いてどうするんだと云つてやつたら、只一言おすゑに會つて謝りたいんだつて……」

叔母はさう云つて笑つた。おすゑはもつと立入つて訊かうとしたが、そこへ倉賀が出て來て、「何をこそ／＼立語してゐるんだい」と近寄つたので、叔母一人を残して、自分は階下へ下りた。玄關脇の自分達の部屋には煙草盆と茶盆とが出してあつた。それを片付けたが、ふと見ると、一字を書いた小さい紙片が落ちてゐる。「四谷左門町×番地久本たね方」勇吉の名がその下へ書かれてゐる。おすゑは拾上げて慌てて袂の中へ入れた。梅屋の電話口で聞いた住所が確かに此處だつたと、今やうやく思出された。

「寄席へ行きたきや行つといで、少し早目に歸りさへすればいゝから」と、叔母は二階から下りて來ると勸めた。

「私さう行きたくはないの」と、おすゑは辛氣なく答へた。

「何故さ。今日のやうな暇な晩に行つといた方がいしだらう。折角連れてつてやらうつて人があるんだし。……叔母は煩さく勸めて、「面白話を聴いて少し笑つといで。気が清々していい保養になるよ。今夜はお前さんによく話したいことがあるんだけど、それは歸つてからでいいから」と口早に云つた。

おすゑは氣乗りがしなかつたが、皆なに勸められるのを拒むことが出来なくて、倉賀に隨いて行くことにした。

倉賀は戶外へ出ると、「寄席も語らないから、何か食べに行かうぢやないか」と、相手の氣を惹いたが、おすゑにはそんな後目たいことをする元氣はなかつた。倉賀が傘を並べて歩きながら絶えず親しい話を仕掛けるのを聞外しては、空々しい返事をした。

「君はいやにぼんやりしてるね、どうかしたのかい」と、倉賀に怪まれた。

「さうでもないんですけど」と、おすゑは言流んで、ふと目上げて今通つてゐる途の左右に心を留めて、「私、近々にあの家を出ようと思つてますの」

「そして何處へ行くんだい」
「……」

「外へ行つたら僕に知らしとくれよ。僕は其處へ遊びに行くから」と、倉賀は笑つて、「叔母さんに仕込まれると、おすゑさん人間が異つて来るだらうね」

二人の姿は度々往來の人に顧みられた。おすゑは若い男と連立つて歩くのは珍らしいので、人目が眩しかつた。寄席へ入つても隅の方を選んで座を占めたが、知合ひの藝者が此方を見て會釈した。

高座では上方辯の落語家が、不人情な女郎とのゝい男の話をし出した。女の心を試さうとして死ぬる約束をして橋の際まで連出したが、女は巧い言葉考へた。……同じ場所から一緒に身投げしたらあの世で添へぬと聞いてゐる、同じ時刻に場所を遊へて死なうではないか、南無阿彌陀佛の聲を合圖に、私はあちらの岸から身を投げますと、女は後をも見ずに駈出した。

……そして、闇を隔てて男にこの世の別れを告げながら、念佛の聲と共に大きな石を自分の身代りに投込んだ。……

聽手は腹を抱へて笑つてゐたが、おすゑは可笑しいよりも、女が憎らしくて男が可哀さうに思はれた。落語家の巧みな言葉や身振で、夫が女郎に逢つて騙されてゐる様子がまざくと見

せつけられた。そして、ふいと話が切れて、拍手の中に落語家が引下つてからも、その男と女との後日の成行が眞面目に考へられた。

引續いて支那人の曲藝や、白粉を塗立てた小唄の手踊りなどがあつたが、倉賀はさして興もないらしく、「もう歸らうか。君はまだ聴いてゐたいのかい」と訊いた。

「私もう澤山」と、おすゑは高座のお道化た身振りに最後の目を向けて立上つた。

倉賀は直ぐにさのやへ歸らうとはしないで、勸工場へ入つたり、ピヤホールへ入つたりした。おすゑは素直に引廻されてゐたが、やがて酔心地になつた倉賀は、手を執つて寄掛つて、さのや近くなると、「今夜僕は獨りで泊るから、夜中に僕の處へお出でよ。いゝかい待つてるよ」と囁いて、女の肩を擦つた。

おすゑは戲談としては聞けなくて、顔を赧くした。男の手をすり抜けて家へ駈込むと、叔母は機嫌のいい顔をして迎へて、

「面白かつたかい」
「え」と、曖昧に答へて、おすゑは冷たい手を火鉢に觸した。倉賀の世話は叔母に任せて、自分分は二階の座敷へ姿を見せなかつた。

倉賀は獨りで泊ることになつたらしい。とん

子は貰ひか利かないし、外の女を呼ぶ様子も見えなかつた。おすゑは外で嘔かれた言葉を出しては、胸を轟かせてゐた。叔母の命令で仕方なしに茶を持って上つたが、相手の顔は見ないやうにして逃げて来た。

雨は降るし客は少いし、早目に寝ることにして、叔母と二人女中部屋へ入つた。が、叔母は直ぐに寝ようとはしないで、おすゑを前に引据ゑて、「私はお前さんのためを思つて云ふんだから、そのつもりで聞いてお呉れよ」と、改まつた口吻で、かねて云はうとしてゐた話の縁口を披いた。

「勇吉さんとはとても見込みはないんだし、若い女が一人ぢや世は渡れないんだからね。それにお前さんは厄介者を背負つてるんだから、誰れか確かரிした後立てがなくなちや何かにつけて心細いよ」と云つて、暫らく言葉を切つてから、「私が話したのぢやないけれどね、老婆さんにも聞いたのだらうよ。お前さんの身の上をよく知つてゐる、そんな女なら世話をしてやらうつて云ふ人があるんだがね。……さうすればちやんとした家を一所持たせて貰へて、お前さんの望み次第で朝吉を側に置きたければ連れて来たつて構はないんだよ。こんな家に奉公し

てるよりや、その方がどの位勝しだか知れないと思ふがね。私にしても時々遊びに行ける家が出来て楽しみだし、お前さんも好きな處へ遊びに行かれるしさ――

まあ經くり考へて返事をせよと、叔母は口で云ひながら、座を動かないで、相手の顔を見詰めた。日付で返事を追つてゐた。

が、おすゑはこの意外の話に驚いてゐて、どちらとも答へる力はなかつた。

「その人は田舎の人だから、年中此方にあるんぢやないの。只ね、此方に来てゐる間宿屋暮らしは窮屈だから、氣立のいい女があつたら、一軒を借りて置きたいつて、かねてさう云つてゐるの――

叔母がかう話を續けたので、おすゑの心にもその男の姿形が浮んで来た。それは一度この家に泊つたことのある上州の商人で、大抵の藝者では納らないと叔母の零して居た、五十近いお客であつた。するとおすゑはこんな男の世話になれよと、平氣で勧めてゐる叔母の顔が怖く見えた。で、手を合せて許しを乞はぬばかりに、

「私はとても人様の御機嫌は取れないんですから」と哀げな聲を出す、

「お前さんも男で苦勞してゐる癖に、何時までも子供のやうだね」と、叔母は微笑して、「機嫌を取るも取らぬも、その人は滅多に此方にやらないんだよ。不斷はお前さん一人で、好きなやうにして暮らせるぢやないかね。これで朝吉でもなければ、また相當な處へ片付いて、其嫁ぎで世帯を持たうつて事もあらうけれど、あの子があつちや一寸六ヶ敷からうよ。それに、もう生娘ぢやなし、地道に世を渡つて苦勞してゐたつて詰らないぢやないかね――

生娘ぢやなしと云つた叔母の言葉は、おすゑの耳に鋭い錐のやうに應へた。「私なんぞ生きてゐたつて仕方がないんだわ」と、ホロ／＼落ちる涙を袂で蔽うた。

「何だよ、氣の弱いと、叔母は笑ひ／＼叱つて、「面白い日を送るのも、厭な思ひをして目を暮らすのも、人間は氣の持ちやう一つだよ。……お前さんのやうに何時も引込思案をして、いゝ運が向いて來かけても取逃してばかりぢや、いゝ後で後悔しても追付かないよ――

……ですけど、世間の人の眞似は私には出来ないの。こんな性分ですから」

「損な性分だね」と、叔母は、嘲るやうに云つたが、直ぐに柔しい調子で、「そんな事はどちら

でもいゝとして、二三日中には彼方へお金を送らなくちやなるまいよ。朝吉の方へもお母さんの方へも……」

「私此間からその事ばかり考へてゐるの」と云ひかけて、おすゑはふと叔母に助けを乞ふのが厭な気がしたので、「だけど、私一人でどうかしようと思つてゐるわ」と、言葉強く云ひ切つた。

話はそれで杜絶えた。叔母は明日の日もあると、おすゑを促して寢床に就いた。

おすゑの高ぶつた神經には、いたゞしい朝吉の姿や、田舎の商人や、夫の姿が今其處にゐるやうにまさゞ／＼と思出されてゐた。「もうかうしてはゐられない」と、ふと首を持ち上げては、きよろ／＼闇の中を見廻した。

帳場の柱時計は一時を打つた。便所へ行くのか、階子段に客の足音が響いた。その音を聞くと共に、おすゑの心に薄らいでゐた倉賀の言葉が、再び生々々として浮上つた。力強く胸に迫つて来た……あの足音は倉賀の足音で、一度云つた言葉を戯談にしないで、宵から眠らずに待つてゐるのではなからうか。……自分に思ひを寄せてゐる男を待呆けさせて夜を明かさせては

濟まない。……と、おすゑは溜息吐いた。

正體なく眠つてゐる叔母の側を抜出て、階子段を傳つて、廊下の電燈を消して、奥の座敷へ入つて行く。……おすゑはその有様を空に描き描きして、快い胸の鼓動を覚えてゐた。倉賀の手に纏りさへすれば何でも聞いて貰へる。皆なに意地められて術ない思ひをしてゐる私を庇つて貰へる。……

おすゑは眠苦しいこの暗い部屋を出ようとして、ふら／＼と身を持ち上げたが、足は進まなかつた。そして、暫らくして、薄明るい燈火の側で膝と膝とを擦寄せて、倉賀の顔を仰ぎ見ながら、身を震はせて何か訴へてゐたが、気がつくやうに、それはふと目落んだ間の夢であつた。夜は容易に明けさうではない。氣立たましい音をさせて猫は鼠を追掛けてゐる。

おすゑは気が疲れ果てて、最早物を考へ込んで苦んだり樂んだりする力は失せた。今は只夜の明けるのを待遠しがつて、いら／＼するばかりだつた。

牛乳配達達の俵の音が通つて、老婆の咳拂ひが聞え出すと、おすゑは早くも兩戸を開けて、雨雲の消えた朗かな朝景色に面を觸れてゐた。薄目を開けて此方を見た叔母は、何かブツ／＼

云つてゐたが、再び枕を仕直して眠つた。おすゑは叔母の寝顔を顧みて、世にも忘はしい小憎らしい人であるやうに蔑視んだ。

雀は庭先に囀つて、朝日は障子に冴えた光を投げた。おすゑは叔母の手助けなぞして働かぬ氣はなかつたが、老婆に聲を掛けられると不斷の通り襷掛けで、甲斐々々しく身體を動かした。

と、そこへ倉賀が二階から顔を洗ひに下りて来た。氣持よげにニコ／＼して、「一人の方が却つてよく眠れるよ」と、誰れに云ふともなく云つた。そして、おすゑが後で茶を入れて二階へ持つて行つても、昨夕の事は忘れたやうに何とも云出さなかつた。

おすゑには倉賀の心の底が分りかねた。いろ／＼に考へ直してゐたが、さうする中に、倉賀は色も香もなく歸つてしまつた。頼みになる言葉一つ後へ残さなかつた。

十四

朝の用事が片付くと、叔母は一人で湯へ行つた。おすゑは叔母の留守の間にこそ、自分の量見を極めねばならぬやうに心が急かされた。で、前後をとくと考へる暇もなく、「一寸其處

まで買物に行つてまゐります」と老婆に斷つて、羽織を引掛けて出た。夢中で坂下まで歩いて、其處から電車に乗つた。夫の居所は書殘して呉れた紙切を出して見なくても、空でよく覺えてゐる。

車掌に訊いて下りた處は、先日歩き廻つた處だつた。幾度も人に訊いてその家を探してゐる中にも、若しや叔母が後から追駈けて來はしないかと氣が氣でなかつた。分り難い路次裏をまご／＼して、やうやく「久本」といふ表札を見當てた時には、悦しさに聲が震へた。何となしに安心して、夫に會つた後のことなぞ碌に心に浮ばなかつた。

「二階にゐますよ」と、子供に添乳をしてゐる主婦が存在な聲を出して顧みた。

垢の付いた古い着物や、さまざまの古道具が上り口を塞いでゐる。おすゑはそれを避けて通つて、階子段に足を掛けたが、上り切るまでには可成りの時がかゝつた。隅へ身を潛ませて、そつと覗くと、毛布にくるまつて寝ころんでゐた男は、寢れた顔を持上げて此方に目を据ゑてゐた。

目と目を見合すと、おすゑは思はず顔を背けて、上り口に坐つた。

「お前も大層變つたぢやないか。今は何處にゐるんだい。暫らくしてかう云つた男の聲は哀れつぱく響いた。

おすゑは直ぐには答へないで、顔を背けたまま涙ぐんでゐた。

「東京へ出て來てからは、お前も些とは氣樂になつたらう」と、男は續いて云つたが、それが皮肉に聞えたので、おすゑは顔を上げて正面に男を見て、

「何が氣樂なの。……氣樂だなんて、私一日だつて氣樂な思ひしたことはありやしない」と涙聲で云つた。そして、かねて胸にまつはつてゐた恨み言が一時に込上つて來たが、氣強かつたあの頃の影もない弱々しい男の有様を見てゐると、つけ／＼と云ひたい事も云へなかつた。自分の所行を詫げてゐるやうに、男の目はしを／＼してゐる。

「私、東京へ來たくつて來たんぢやないわ、一日もこんな處にゐたいとは思つてやしないわ」

「それはさうだらうが、今は何處に奉公してゐるんだい。おれはお前が極屋に奉公してゐるつて此間伊勢崎町の兼公に聞いたから、電話を掛けたんだぜ。その時來ると云つときながら、何時

まで待つても來ないから、わざ／＼訪ねて行くつて、もうゐないんだもの」

「だつて、私、不意だから吃驚しちやつて、電話の話がよく聞えないだもの。……だけど、四谷と云ふことだけはうる覺えに覺えたから、東京へ來ると、幾度この邊を搜したか知りやしないわ」

「おれはまたお前がおれを怖がつて會はないんだらうと思つた」男は淋しい笑ひを浮べてさう云つて、毛布と枕とを隅の方へ投げやつた。

おすゑは筈を入れたこともなさうに埃の積つた部屋を見廻して、こんな處にごろ／＼してゐて何をしてゐるんだらうと怪みながら、別れて後の話が男の口から出るのを待つてゐた。

この人にしてはあれからい、事はなかつたのに違ひない。自分達を困らせた報いがない筈はない。「この頃になつて私の有難味が分つたらう」と思ふと、いくらか胸が透くやうだつた。

男は押入から煙草の袋を捜出して、粉煙草を煙管に詰めたが、お前はさのやにゐるんぢやないんか。叔母さんの話だと、お前は東京にはゐないつて云ふことだつたが、昨度あの人

の指金で、身體の極りを付けようとしてゐるんだなと、おれは感付いたよ。……どうせおれは

自分の勝手な事ばかりしといて、今になつてお前と元のやうにならうなんて、そんな圖々しい事は云へた義理ぢやないんだからね。云つたからつて誰れも信用すりやすまいしさ。だから、何處かい、處があつて、お前が仕合せな身になるやうなら、それに越したことはないと思つてるんだ。…叔母さんの口振りが何だかそんな風に取れたが、さうぢやないんかい」と、落着いてポツリ／＼云つた。

「あんな人の云ふ事が何で當てになるものかね。私あの人のためにどれほど迷惑したか知れないわ。騙して東京へ連れて來といて、私些ともし、事はしないの」

おすゑはさう云ひながら、ふと叔母が今にも跡を追つて來るかも知れぬと案ぜられ出した。「私、今日も叔母さんが行つちやいけないと云ふのに、隠れて來たんだから、此處で緩くりしちやゐられないよ。此處搜しに來るから」

「なに、構はないさ。おれの處へ來たつて叔母が愚圖々々云ふ譯がないぢやないか。おれの方でこそ文句を云つてやらあ」

さつきとは打つて變つて、男の聲には力が籠つてゐて、おすゑも氣丈夫に感じたが、叔母を離れたその後の身の始末を思ふと、流石に、心

細かつた。

「私ね、自分は死なうと生きようと、どうなつても構はないけれど、朝吉だけは饑しい思ひをさせたくないの。満足な身體はしてゐないし、長くつて二年か三年の壽命だと云ふから、その代り生きてゐる間、心残りのないやうに大切に育ててやりたいと思つてゐるの。あの子を打遣らかしくやうな不人情な心になれば、私東京なんぞへ來てまご／＼してゐやしないよ」

「さう云はれると、おれも面目ないが、しかし、おれも遠方へ行つてさん／＼苦勞して來たんだぜ。この一月に東京へ來てからは、性根を入れて眞面目に稼いで、先の見込みが立ち次第、ちやんとした服装でもして、久振りに濱へ歸らうと思つてゐたのさ。一年の餘も立つてるんだから、お前達の身もどうなつてることやら分らないし、浮かり手紙をやつても吃驚させるばかりだと思つて、おれが自分で會ひに行くまで居

所も知らさないつもりだつたよ。…ミシンの方ぢや仕事の方が目付からなくて、當座の口過ぎに、此處の主人の手助けをして吉道具の賣買をやつてゐたんだが、運が悪くなつちや仕事がないもんだ。上方で病付いた脚氣がこの頃また

ぶり返して毎日ごろ／＼してゐるんだ。…久振

りでお前に會ふのにこんな様で會ひたかあなかつた」

「ぢや、今は丸つきり遊んでるんだわね。病氣は醫者に診て貰つてるの」おすゑは次第に他人の事として平氣ではゐられなくなつた。

「さう心配するほどでもないんだ」と男は云粉らせたが、「しかし、働かないで他人の家にゐるのはつらいものだぜ。厭な顔もされんけれど氣が引けて、病氣よりもその方が餘程つらいよ」

そこへ、主婦が上り口から、顔を出して、茶盆を置いて、女の後姿を窺見した。男吉は主婦を呼んで、馴々しい口調でおすゑに引合せた後、階子段の側へ出て、誰れか來ても留守を使はせるやうに主婦に耳打した。そして女下駄をも隠させた。主婦は首肯しながら男吉と顔を見合せて微笑した。

最早飯時になつてゐるので、男吉は何か御馳走をしようと思つたが、おすゑはそれを遮つて、自分で使ひに立つた。手近の蕎麥屋へ行つて、主婦の分をも誂へて、代は拂つて來た。次に敷島を一つ買つて來て男に與へた。亂れた部屋を片付けて、一年あまり手一つで暮らして

来た自分の苦勞話をしながら、久振りで差向ひの食事をした。男が一々身を入れて聞いて呉れるので、おすゑは話しても話しても倦まなかつた。

「だけれど、お前も此方へ来てから磨いたと見えて、見違へるほど綺麗になつたぜ」と、男はふと話を逸つて、眞顔で云つた。

「厭だよ、冷かしたりして、私本気で話をしてゐるのに」と、おすゑは目を聳てたが、口元には微かな笑ひを洩らした。

男は脇枕で横になつて、息の通ふほどに膝を進めてゐる女の顔を見詰めて、「おれだつて本氣だれ。：で、何かい。もうあの家へ歸らないつもりなのかい」

「歸らうたつて歸れりやしないよ。二度と叔母さんの顔は見ないつもりで出て来たのだから。私何だかあの人が悪いよ」

「ぢや、これからお前はとうしようと思ふんだい」

「だから相談しようと思つてゐるんだわ。：どうしたらいいと思つて？ 今日にも横濱の方へ幾らか送らなきやならんのだし」

さう云つておすゑは、男の口から洩れる答へで、自分の運が極まるやうに、只管待構へてゐ

たが、男は「さうだなあ」と空々しく云つただけで、さして考へてゐる風もなく、一途に煙草の煙を吐いてゐた。

「私、濱へ歸つても、また伊豆屋の仕事をさして貰へるかどうか分らないのよ」と、おすゑはこゝろ細げに云つたが、男は、

「さうか。彼處の老爺も口先ばかり巧いけど、腹は強慾だからね」と、だるい聲で答へただけで、口を噤んだ。

おすゑは張合ひがなかつた。男の様子が如何にも氣力が盡きてゐるやうに思はれたが、すると自分の心も減入り込んだ、思ひの外に男の方から折れて出て、昔の邪慳な影もないのに長い間の恨みも忘れて、我れから懐かしい話に耽つてゐたけれど、よく思ひ直すと話した甲斐はなかつた。：で、おすゑも口を噤んだ。

部屋の中は寂とした。日當りは悪いが、顔に觸れる風は温かくて柔かい。直ぐ窓の下でザザ洗濯をしてゐる主婦が、隣の家へ向つて高聲で話を仕掛けてゐるのがはつきり聞えた。他所の猫に魚を取られた話だつた。おすゑはその話を聞くともなく聞いてゐるが、すると、男

は不意に身を起した。「ぢや、叔母の世話にならないで、も一度奉公に出たらどうだい」男の見据ゑた目にも聲にも力が入つてゐた。「譯を云つゝ頼むに此處の主婦がい、奉公公を見つつけ呉れるよ。お前もわざわざ思立つて東京へ来たほどなら、一つ辛抱する氣になつたらどうだい。お前も運が悪くて、おれのためには随分苦勞をさせられたのだが、いつそ苦勞の爲矢手に、朝吉やお袋のために、もう一苦勞する氣にやなれないかい。おれも何時までこんなぢやないよ。身體の加減が少しよくなりさへすれば、今度こそ死身になつて稼いで、お前達にも樂をさせたいと思つてゐるんだ。今まで困らせた理合せをしなけりや、おれも寝醒めが悪いやな。：だから、もう少しの間だから、お前は目を瞑つて、他所で勤めるといふ氣になつて呉れんかね」

情愛を含んだ口調でかう説かれると、おすゑの心には悲しいやうな悦しいやうな感情が波打つた。皆なを助けるためになら、自分の手足を握られたつて厭はないと、夢心地で思ひながら、「そりや身内の者のためになれば、私どんな辛抱でもするよ。梅屋だつて何處だつて、私決して我儘で逃出したんぢやないの」

「お前にその決心がありさへすりや、主婦にも相談して見るがね」と云つて、男は何か考へな

がらも、女から目を放さないで、「しかし、今月も後二三日だからね。奉公の口があつたつて、當前ちや前借りは出来ないしね。…お前いくらか持つてるんかい」

「持つてる譯がないわ。彼處から貰へるものも叔母さんが預つてるんだし」と云つて、おすゑは「矢張駄目だわね。…せめて今月一杯梅屋にゐればよかつたけど」と、溜息吐いた。

「さう氣を落さなくつてもいいよ。おれがよく主婦に相談して見らあ。…兎に角話が極まるまでは此處へ泊つてゐればいゝんだから、自分の家へ歸つたつもりでゐるがいい」

「…この家で變に思ふだらうね」

「何故？ 他人を引張り込んだのぢやあるまいし」

「だけど…」おすゑは自分で變な氣がした。夫と二人で東京の他人の二階で、かうして打明け話をしてゐるのは夢のやうだつた。夢にも見なかつた事だつた。

十五

おすゑは此處へ泊ることに極めると、押入を開けて、汚れたシャツや股引を出して洗濯したり、階子段にまで雑巾を掛けたりした。馴々し

い話を仕掛ける主婦に答へながら、目を醒ました赤ん坊を抱いて、綾したりした。「赤ちゃんに何を貰つて上げてみよう御座んすか」と云つて、表へ出て、朝吉に食べさせるやうな白い餡を買つて、自分の齒で噛碎いて與へた。

勇吉はおすゑが側を離れてゐる間に、主婦に向つて女の身の振方をひそく相談してゐた。

來るかと思つてゐた叔母は、長い日が暮れるまでつひに姿を見せなかつた。「今度は弱身があるから、叔母さんも諦めてるんだわね」と、おすゑは男に云つた。

晚餐も階下で家の者と一緒食べるのをおすゑは厭がつたので、二人だけ二階で別に食べることにした。

「お前さんは食料を拂つてるの」と、おすゑは箸を執つてから訊いた。

「そんな心配をしなくてもいいよ」

「でも、私まで御馳走になつて濟まないわね。かうしてお膳立をして貰つて食べるのは勿體ないわね」

おすゑは鹽辛い焼魚をも快く味つた。成らう事なら、何處へも行かないで、こんな家でも何時までも住んでゐたいと思ひながら、あゝ

甘しかつた。私ね、この頃は御飯炊きが上手になつてよ。明日の朝私が炊いて上げちやどう？」と、媚びるやうに云つた。

そして、ランプの側でシャツのボタンをつけたり、綻びを縫つたりしてゐると、男は壁に凭れて足を投出して、暫らく行つてゐた上方の話を面白さうにして聞かせた。巧みに話を真似ては笑はせた。おすゑも世智辛い話から心を遣

ざけて、何か男を笑はせるやうな面白い話をと考へたが、自分の横濱での暮らしには何も話の種がないので、儂かな間梅屋さのやで見た客の遊び振りを大袈裟に話し出した。が、話してゐる中に、倉賀や入江や、自分に親切だつた客の顔付が名残惜く浮んで、ともすれば心が沈み勝ちになつた。

階下では寢靜まつて夜は更けた。おすゑは夫の言付けるまゝに寢床を延べた。自分の枕には夫が出して呉れた古道具入れの小さい箱を手拭を掛けて用ひた。そして、窮屈な寢床の中にあ

ても、夫の息の音を聞いてゐると、何となく心が安まつて、この頃に珍らしくすやくと無邪氣な眠りに陥つた。

翌朝誰れかに呼起されたやうな氣がして、目

を醒ましたが、夫はまだ眠入つてゐる。おすゑは半ば夢の地で男の寝顔を見ながら、今日からの身の上を考へ出した。此處にゐたいにはゐたいけれども、食料をも収めないで二人が厄介になつてゐると思ふと、今朝の朝食さへ平氣で食べられさうではなかつた。室代も食料もちやんと拂つて、心置きなくしたいにも、自分の財布には横濱までの汽車賃ぐらゐしか残つてゐない。……濱へ歸つたところでいゝ當てもなければ、幾度も逃げて歸つては母親の手前が恥かしい。

おすゑは獨りでそんな事を考へてゐるのが堪へがたくなつて、男を拵起した。

「私ぼんやりしちやゐられないわ。どうしたらいゝだらうね」と、何かに脅かされてゐるやうに云つて男の憐みを求めた。そして、當てになりさうでない昨夕の話を頼む氣になつた。

「此處の主婦が世話をして呉れるつてどんな處？」

「一寸相談はして見たがね。おれはあまり望ましくもないんだ。五十や六十の金は直ぐ貸して呉れるといふんだけど……と、男はさも氣乗りのしないやうに云つた。

「そんなに貸して呉れて？」おすゑは信じかね

て、「ぢや、厭な商賣をするんぢやないの？」
「なにさうぢやない」と、男は方強く打消して、「そんな心配はないが、何しろ田舎へ行くんだからね。……實は主婦の従弟が上州の何處かで料理屋を出してゐるんでね、其處なら、主婦が口を利けば少しの無理は聞いて貰へるんだ。幸ひその従弟といふのが今東京へ奉公人を捜しに来てるさうだから、話を付けようと思へば、今日に今日でも事が運ばないことはないんだがね。……しかし、お前も田舎へ行く氣にはなれないだらう。上州なら汽車で僅か二三時間で行かれるんだけど」

男は遠慮勝ちに、勧めるやうな勧めないやうな口吻でかう云ひながら、物思はしげな女の素振から目を放さないで、「念のために、お前が直かに主婦からよく聞いて見るといゝよ」

「だつて、私そんな事は訊きたくないわ」と、おすゑは萎れて、「あゝ厭だ」と溜息を吐いた。知人のゐない心細い田舎へ行く氣にはとてなれなかつた。

「おれも無理に勧めたかないよ。しかし、今の場合だから、お前が我慢して行く氣になつたら、おれも早く身體をよくして、都合の付次第迎ひに行つてやるぜ。田舎だと不自由な代り東京か

ら行きや輻が利くし、それにお前が只の一月でも此方のお茶屋に奉公をして手心を知つてゐるんだから、さう勤めづらくはないだらう。鬼に角主婦によく聞いて御覽」

さう云つて、男は今直ぐにも主婦を呼んで来ようとして立上つたが、おすゑは慌てて引留めた。

「まあ待つて頂戴。私もつとよく考へて見たいから……」
目を開ませて首垂れた女と、坐り直して腕組みして乾いた唇を舐めずつてゐる男との間には、暫らく言葉が杜切れてゐた。が、やがて、男の方から口を開いた。

「おれも久振りで會つてこんな話はしたかないよ」

歎息して云つた男の言葉が柔しく耳に響いた。おすゑは追ひ詰められてゐた物思ひから放たれた。「お前さんが其處へ行つて云ふのなら、私行つてよ。だけど……と、言流んで、「私ね、かう思ふの。どうせ私達は運が悪いんだから、この先だつてとも樂な思ひは出来やしないよ。二人が久振りで會つたつて、朝吉やお母さんの側へ行つて皆な揃つて暮らす譯には行かないし、……また別れくくなるんなら、私生きてても詰まらないと思つてよ」

袂を顔に當てて吃逆上げながら、「お前さんさう思はないの？」と、男に迫つた。

男は相應しい返事の爲様もなくつて、軽く女の背を撫でて顔を上げさせた。「ぢや、今の話を止めにすればいいぢやないか。おれが何とか考へて、朝吉の世話をするにしよう」と看めると、

「そんなことが出来て？ 氣安めを云つたつて駄目よ」と、おすゑは甘えるやうに云つた。

「しかし今のおれの身になつて見て呉れ。お前はまた心の持ちやう一つで稼げんこともないが、おれは今に今稼がうたつて稼げやうはないし、一人ぼつちでこんな處に居候になつてらんぢやないか。どうかしてお前達に安心させる身分になつて、これまでの罪ほろぼしをしようと思へばこそ。そんな氣もなければ、おれはとつくに首でもくゝつて死んぢまつてらあ」

「お前さんも死にたい氣になる事があつて？」と、おすゑは、男の言葉に縋りついた。……死ぬる氣があるんなら、一緒に死んで呉れなくつて」と落着いた調子で云つた。

「おれこそ皆なに迷惑ばかり掛けて来たんだから、何時死んだつていいけれど、お前は苦勞ばかりして、今死んぢや詰らないぢやないか」

「いゝえ、私死ぬのは厭とは思はないの。田舎へ行つて奉公したり、知らない人の中へ出て意地められてるよりや、死ぬる方が餘程氣樂だと思つてゐてよ。お前さんが一緒に死んで呉れるなら、今直ぐにでも死んでよ。些とも怖かあないの」

「此處だね。その時になつて氣遣ははしないだらうね」

おすゑは男の膝の上に顔を伏せたまゝ、首肯いた。そして、このまゝぐつと刀を突刺されても構はないと覺悟をしてゐた。息が絶えたなら、何處か綺麗な處へ飛んで行けさうな氣になつて、うつとり夢見心地になつてゐた。

「おい、こんな所を主婦に見られたら變に思はれるぜ」と、男は階子段の方に氣をつけながら、おすゑを拵起して囁いた。「死ぬるにしても、今此處で死ねりやしないさ。晩まで待つて居れ、おれが薬を買つて来るから。……いよゝ死ぬと極まれれば、おれもこの世の心残りのないやうに始末をつけときたいし、お前だつて家の者に書置きくらゐはしなきやなるまい」

おすゑは黙つてゐたが、得心したやうな顔付で男を見た。「ぢや、今日一日だわね」と、やがて涙聲で云つて、今まで忘れてゐた部屋のまは

りに心を向けた。煙けた低い天井も赤茶けた曇も、見馴れない不思議なものやうに見えた。二人が此處に向合つて坐つてゐるのも不思議に思はれた。そして、子供の泣聲や賑かな物音を聞くにつけても、世間に變つた事が出来てゐるやうに感ぜられた。

階子段からは煙が舞上つて、部屋の中に淡く渦巻いた。男は吸ひかけの煙草を置いて、帯を締直して階下へ行きかけたが、すると其處へ主婦が手紙を投込んだ。見ると、半込の叔母からおすゑに宛てた手紙だつたので、男は後戻りして、

「何を云つて来たんだらう、おれが讀んでもいいかい」と訊いて、女の答へを待たずに、封を切つた。「訪ねて来ても會へないだらうと思つて、手紙で呼寄せようと思つてるんだ」と鼻で笑つて、手紙を投出して階下へ下りた。

おすゑはそれを拾つて目をつけた。「……兎に角この手紙消次第一度お出で下されたく呉々も頼み上げ候。決してお前様の爲にならぬことは申し上げず候間、安心してお出で下されたく候。お前様の望み通りのよろしき話も數々これあり候へば、至急お目にかゝりたく待居り候……」と書いてあつた。

「だけど、もうあの一人には會ひたくないと思つた。おすゑは最早知人の誰れにも會ふまいと思つた。主婦にも顔を見られないやうに、言葉は掛けられぬやうにと避けて、階下へ下りるにも拔足した。

財布をそのまゝ、男の手に渡して、食事は外から取寄せることにした。一刻も男の側を離れるのが心細くて、男が立上るたびに慌てて縫子付きさうにしたが、男は毒薬を買つて來ると云つて出て行つた。

おすゑは母親や叔母に宛てた遺書をつくらうとして、紙片を前に置いた。が、どう書かうかと思つてゐる間に、心は外へ逸れて、書馴れぬ六ヶ敷い文字などとても書けなかつた。只誰れにも會はないで、今夜死に果てる自分の身の上を思ひめてはうつとりしてゐた。

男は容易に歸つて來なかつた。おすゑは待ちあぐんで居ても立つてもゐられない氣がした。賑かな窓の外へ顔を出すのが怖いやうなので、そつと障子を細目に開けて覗いたが、見ても見ても夫の姿は現はれなかつた。打ちやつて逃げたのかとも疑はれたが、夫の甕れた顔付や元氣のない言葉を思ふと、疑ひは直ぐに打消された。「あの人にして、生きてゐたつて仕

方がないのだ。死にたいのに違ひない」と、男の心も自分と同じやうにのみ思はれた。

一刻々々時の立つほど今夜の迫つてゐるのが身に染みて、外から聞える物言も次第に遠いやうに耳に響いた。

午砲が鳴つて間もなく男は歸つて來た。手には小さい薬罐を持つてゐた。何處の薬屋でも變に思つて賣つて呉れないから、懇意な醫學書生の處へ行つて、騙して貰つて來た」と云つて、女の前に置いた。

「これで死なれて？」と、女は怖々薬罐を手にと取つて、水のやうに透過つた薬を不思議さうに見詰めた。これを口に入れれば直ぐに舌が爛れさうに思はれて、見ても口の内が痺れるやうだつた。が、

「私ぐつと呑むよ」と、強い決心を見せて、「これで二人分だわね」

「さうだとも。半分づつ呑むんだ。覺悟してゐるんだらうな」男は薬罐に目をつけながら、底氣味悪い聲で念を押した。

「何故そんなことを訊くの」と、おすゑは責めるやうに云つた。が、ふと恐ろしいものに襲はれたやうな氣がしたので、總付かぬばかりに男の方を見据えて、心に力を付けた。

「おれは結句死んだ方が氣樂だけれど、お前は奉公しようと思へば、前借もどつさり出來るし、身内の者も安心させて自分もいゝ月日が送れたいことはないんだから。……と、男が云掛つた。

「私もうそんな事は聞きたくないの」と、おすゑは耳を蔽うて首を振つた。そして、男の口から、絶え間なく情愛の籠つた哀れな話を聞かされて、目の暮れるまで泣きつゞけてゐたかつた。

温かい静かな春の日は容易に暮れさうではな

い。おすゑは意地悪く目につく薬罐を見まいとつとめた。

男は寢そべつて、香氣らしく煙草を吸ひながら、黙つて何か考へてゐた。

毒婦のやうな女

その翌日は雨が降頻つたので、事によつたらと座輿半分に云つて息込んでゐた七面山登りどころではなく、見残してゐる名所舊蹟の参拜をも止めて、陸路を俵や乗合馬車で歸ることにした。

「なんなら、もう一晩此處へ泊つて行つたつて構はないんだがね。外を出歩かなくつても、按摩でも取らせて休んでりやい、ぢやないか、近所が静かだから長く寝てゐられるだらう」と、新七は宿の勘定を濟ませて歸支度をしながら、まだ氣迷をしてさう云つたが、おかつは同意しなかつた。

「一度極めたんだから、迷はないで早く立つことにしませう。迷ふと決して後がよかないんですから」と云つて、自分で俵の催促をした。

幌を卸した俵の中に一人で身を置いてゐると、おかつは何となく氣軽になつて、むしろ雨天を喜ばしく思つた。……富士川下りの乗合船

や、紅装の色づいてゐる鷹取山や、癩病患者の療養所になつてゐるといふ深敬病院など、昨日鯉澤を出てから一日がかりで見えたさまざまな景物が旅馴れない彼女には、みんな珍らしかつたのであつたが、身延語での記念として何にも優つて鮮かに心の中に残つてゐるのは、仁王門の構内で見たある若僧であつた。

昨夕は食後の腹こなしと土産物の買入れのために、新七に誘はれて、山の夜風の身に染みる寒い淋しい町を散歩して、仁王門のほとりまで行つたのであつたが、信心氣のないおかつも、雲の往來が繁くて三日月が忙しさうに出たり隠れたりしてゐる山の端を仰いで、晝間案内者に聞かされた祖師の開山の縁起を思出してゐると、この世ならぬ靈場へ来てゐるやうで、この頃ひそかに思ひつやけてゐる濁つた思ひも、一時清められて、あの狂人じみた團扇太鼓の騒ぎも笑へないやうな氣持がした。

仁王門の内は参詣人の掻ける蠟燭の光で明るくて、調子を合せて太鼓を叩いたり拍子木を叩

いたりしてゐる婆さんや爺さんの顔がハッキリと見られた。どれも皆な田舎くさい頑丈な人たちで、振動かしてゐる手にも刀が籠つてゐた。口々に唱へる七字のお題目も彼女の母親などがよく口にしてゐる南無阿彌陀佛の聲に比べると遙かに勢ひがよかつた。見てゐる間に、二十をあまり越してはゐないらしい、若い若僧が入つて来て、取澄ました音聲で事々しい説教をした。彼女の立つてゐるところとは距離が遠かつたのでよくは聞取れなかつたが、お宗旨の有難さを説いてゐるには逆ひなかつた。

おかつは、あの若さで鹿爪らしいお説教なんかをしてと、人柄に不似合なやうに思ひながら、風にゆらめく蠟燭の火影に照らされて、夢のやうに浮出てゐる若僧の袈裟姿を見てゐるが、その柔和な蒼白い顔は次第に彼女の心を蕩けさせた。あのまゝ木か石に彫つたらいい、佛様が出来ると思つたりして見詰めてゐるが、あのまま珠数を持つて、若い盛りを佛様への御奉公をのみ勤めて、淋しい山の中で過させるのは惜しいやうにも思はれた。可愛らしく動いてゐる若僧で、婆さんや爺さんの垢の溜つた耳へ、佛の御利益なんかを説かせるのが惜しかつた。

「寒くなつたからもう歸らう」と、新七に云はれ

て、ふと振返ると、新七の下びた顔がこの時は際立つて彼女の目に映つた。何だつてかう頬が尖つてゐて、それにゲヂ／＼のやうな眉をしてゐるのであらう？

おかつは俵の中で、かの若僧の柔和な地蔵眉や潤んだ眼を思出した。未来は極樂へ行けるにしても、あんな山奥で不味い物を食べてゐるのでは話らないといふ氣にはならないのであらうかと思ふにつれて、自分が甲府のやうな田舎町で、怠けてゐられるだけの取柄で、いゝ當てのなささうな目を續けてゐるのが、いよく溜らなくなりだした。今に財産を船けて貰つたら、自分の一存で店が出せるやうになるのだから、それまでの不自由や退屈は辛抱してゐて呉れ、両親は心が融けてゐるんだから、その中いゝ機會を見てお前に會ひたいとさへ思つてゐると、昨夕も新七は云つてゐたが、おかつは最早さういふ事を有難がらなくなつてゐた。今更男の父親や母親に會つて見たつてはじまらないし、こんな田舎町の商店の主婦になつて醜態働いたつて何が面白からうぞと思ふやうになつてゐた。理窟もない分別もない、新七と一緒にゐるのが一途にいやになつた。このまゝ一人で東京の方へ向つて、俵を駛らせたら、さぞ清々

した氣持になるだらうと、慾も得も棄てた自儘な空想に耽つたりしてゐたが、後の俵の音は、何處までも彼女の跡を追つてゐるやうに、意地悪く耳に響いた。

飯富のある神社の前で俵から下りると、丁度乗合馬車が出掛かつてゐるところであつた。座席も空いてゐたので、二人は樂々と並んで腰を掛けることが出来たが、先客の目が無遠慮におかつの方へ注がれるのを、おかつは煩きがつて、茶代の返しに貰つた身延案内記を開けて、何となしに文字の上に目を落してゐた。雨避けの被幕に妨げられて外は見えず、車體はやゝもすと激しい動搖を續けるので、兩岸の秋景色を眺めながら川を下つた時のやうな樂みは得られなかつた。

新七は向う側の客の相手になつて、世間の景氣を話合つたり、途中の村々の舊家の盛衰や新出来の富豪を話題にしたりしてゐながら、心はおかつの方から暫らくも離してはゐなかつた。女の息の淺き深きをも絶えず耳に留めてゐた。

「ちよつと本をお見せよ」と云つて、女の手か案内記を取つて、昨日見た寺院や石段の寫眞のある處を開けて見て、

「この本は後でお母さんへ送つて上げるといふね。お宗旨違ひだけど、何時か身延の事を聞いてゐなさつたら」

「お母さんには柩の箇でも贈つた方がいゝの。この本は私がお詣りした記念に取つて置きますせう」

「それもよからう。餘程の決心でやつて来たんだからな。おれの親爺なぞも無信心の方だが、それでも身延の事といふと、土くれをも有難がつてるよ。外の土地へ遊びに行くよりも今度のやうなお詣りを喜んでだらうから、途中が面倒でも來甲妻があつた譯なのさ」

「今舟だの馬車だのと、まどろこしい思ひをしてお詣りしたんだから、餘程の御利益がなければ割に合はないわね」

おかつは何氣なく御者臺の方を覗いたが、すると、富士川の流れと、峻しい高い崖がちらと見えた。邪慳に鞭打たれてゐる馬は、その崖の方へ向つて驅けてゐるのであつた。乗客を跳飛ばしさうに車臺は動搖した。

「随分危い處ですわね」と云つて、胸を轟かしてゐると、向ひの客は、前年大雨の後に、この近所で乗合馬車が顛覆して、大勢の怪我人が出来たことを話した。

「この頃はこの街道を重いものを積んだ車刀がよく通るから、道がえらく壊れてゐる」と、他の客も調子を合せて、「若い衆さん、氣をつけてお呉んな。ひつくり返されてもしちや溜ねえからな」と、高い聲で云つて笑つた。

「あんまり馬を責めるのもよくねえだ。馬にだつて痛があるから、どんな拍子であれば用さんとも限らねえ」

左右の人たちのそんな話を聞いてゐると、おかつはますます恐ろしくなつた。運が悪くて崖から落されてもしたらどうしよう。自分はこの頃悪い運に見込まれてゐるやうでならないから尙更危かしいと、不安な思ひに胸を騒がせてゐた。

ある立場で長いこと馬車が留つてゐた間に、おかつは厠を借りるために側の茶店へ寄つた。そこは川に臨んだ見晴しのいいところで、向うから来る渡舟に雨の濺いでゐるのが厠の中からも見えた。嬰兒を背負つて番傘を傾けてゐる田舎女が激しい雨にも激しい流れにもめげないで、呆けたやうな平氣な顔してゐるのを見て、おかつは臆かな自分の心を顧みた。厠から出ると、被幕の間から顔を突出して茶店の方を見詰めてゐた新七が、手招きしながら「早く〜」

と聲を掛けたが、彼女はわざと落着き拂つて、馬車からは見えない處へ身を寄せて、髪を梳付けたり化粧紙で顔を磨いたりしてゐた。

渡舟が着くと、客が込合ふからと氣遣つて、わざと茶店の中まで迎へに來た新七に急立てられて、彼女は不承々々に窮屈な馬車の中へ戻つたが、やがて渡舟から上つて來た新客に割込まれて、身動きのならないほどに乗り苦しくなつた上に、濡れた汚い衣服や傘の雫で彼女の晴衣をも足袋をも汚された。激しく馬車が揺れるたびに頭の髪をも亂されさうになつた。

さういふことから、おかつの神経の惱むのを、新七は小聲で宥めてゐたが、宥められたりするとも、なほ更こんな餘計ないやな思ひをするのも男のせむであるやうに、おかつには思はれた。

二

鹹澤で名物の鰻でも食べて、緩くりして行かうと、新七は相手の心を咬つたが、おかつは譯もなく歸りを急いで、馬車を下りると直ぐに乗合自動車へ移つた。ところが、運が悪くも途中で自動車に故障が起つて、一時間あまりも泥濘の中で雨に濡れて待つてゐなければならなかつた。修復の見込みがないので、泣出した

思ひをして野道を横切つて、鐵道馬車の停留所まで辿りついた時には、下駄も足袋も泥まみれになつてゐた。洗ふ暇もないので、泥足のまゝで乗つたが、かうなればもう自棄見たいになつて、頭も衣服も構はなくなつて、べたべたした腰掛へドカと腰を据ゑて衆人の注視に不様な姿を曝して慥らなくなつた。

「日蓮様のお氣に障つたことがあつたと見えて、ひどい罰を當てられた」と呟くと、「だから、もう一日彼處にゐればよかつたのだ。せめて鹹澤でも晩まで遊んで來ればよかつたのに、お前があんまり急ぐからいけないのさ。早く歸つたつて仕方がないぢやないか」

新七はよく〜の思ひで出て來た旅行が、雨のために不首尾に終つたのを恨めしく思ひながら、恩癢つばい口を利くと、「一日延したつて明日の天氣が當てになりやしませんからね。それに昨夕は變な夢を見たもんだから、一時も早く歸りたくなつたんです」
「どんな夢?」
「夢の話なんぞ止ませせう」
おかつは先きとは打つて變つた快活な口調で、身延の山の秋景色や宿の女中の白粉くさい

厭味たらしい顔や、乗合舟にゐる滿商人の事などを話して男を喜ばせたが、この旅を最後として自分だけで永久に甲州の土地を離れようと、ひそかに決心を強めてゐると、何にも気づかないでゐる男の様子が愚しく見られた。傍の者の反對にもめげないで自分を庇つて、寵愛を續けて来て呉れた男に對しては、いくらおかつのやうな女だつて、深い事情もないのに俄かに不實な考へを起すのを、自分ながら快く思つてはゐなかつたが、すでにさうなつたのをどうすることも出来なかつた。今まで氣づかなかつた醜さが男の鼻にも口にも現はれだした。

よぼよぼの老婢が留守居をしてゐる假住ひへ着くと、おかつも流石に安易を覺えた。近所の風呂へ入つて来て、坐り馴れた長火鉢の側に坐つて、烏鍋で夕餐の箸を執つてゐると、生活の安樂に未練が残つて、明日の日に此處を立たうとした意氣込みが衰へだした。縁があつてこんな土地へでも來ることになつたのだから、迷はないで甲府の人になつて宮部の妻として一生を終らうかと氣を取直して男の心をつつくやうな口は利かなかつた。

「昨夕お前の見た變な夢つて、一體どんなのだい？」と、新七が氣にかけて訊ねると、

「人の夢なんぞ執念深く訊くもんぢやありませんよ。歸つて來ると何事もなかつたんだから、私すつかり安心しちやつたの」

「お前は時々出抜けに脅かすからいけない」

新七も安心した。そして、宵の間に兩親や

兄のゐる櫻町通の店へ顔出して來ることにし

て、食事が済むと滿腹の腹を掻でながら、「別

段用事はあるまいから、今夜は早く歸るよ」と云

つて座を立つた。

おかつは獨りである間に退屈醒ましに細刺

をしたり手習をしたりしてゐるのであつたが、

今夜は疲れてゐるので、長火鉢の側へ枕を持つ

て來て横になつてゐた。すると、隣の二階から

聞馴れた蓄音機の琵琶唄がガヤ／＼と響いて來

た。川中島の合戦に引續いてお極りの石童丸が

唄はれた。

「あれにも飽き／＼したよ。彼處でやる蓄音機

には氣の利いたものは一つもありやしない。そ

れにあんまり使ひ過ぎるから機械が壊れたと見

えて、いやな音を出すぢやないの。たまには新

しいのを仕入れて來たらいいだらうにね」と、鐵

瓶に水を差しに來た老婢の方へ目をやつて云つ

たが、老婢は何の感じもなささうに、

「左様ですね」と辛氣なく答へた。

「あなたは昨夕一人であつても淋しかなかつたの、おつるさんも遊びに來なかつたの」

「いゝえね、誰れも來りやしません。宵に早く

から月を締めて寢ました」老婢はさう云つて、

臺所の方へ行きかけたが、ふと後戻りして思

出したやうに、

「さう云へば今朝旦那の兄さんがこの家の前を

通つてゐなかつた」と、聲を潜めて云つて、「私

が御掃除してゐる時に、家の前に立つて此方を

見てゐる人があつたから、誰れか知らんと出て行

つて見ると、もうゐなくなつたんですけれど、

どうも櫻町の若旦那のやうで御座りました。朝

早く何處へお出でなかつたのか……」

「老婢さんは櫻町の方をよく知らない」と云つ

てゐたぢやないの。どうしてそれが分つたの」

「先日おつるさんと一緒にそれが分つたの」

で櫻町の若旦那に會ひましたんです。おつる

さんが指差して、あの人が此方の旦那の兄さん

だよと教へて呉れましたから、一心に見ときま

した」

「さう？　どんな人なの。此方の旦那様によく

似てるんですか」

「そりや御兄弟だから似ていらつしやるんで

せう。御立派な方ですよ。色の白い日の大きな

それで此方の旦那様よりも脊が高いやうに思はれました」

老婢の言葉が例になく熱を帯びてゐたのを、おかつは不思議に思ひながら、

「そんなに立派な人なの？ だけど、あんたは目が薄いから、ちよつと見たくらゐぢやよく分らないでせう。なんだか當てにならないわね」

「ぢや、おつるさんに聞いて御覽なされ。私の目がいくら悪くつても、闇夜でもなければ、人様の顔くらゐよく分ります。それを疑ひなさるんなら、姉さん御自身に櫻町のお店の前を通つてよく見ていらつしやればいゝ」

「さういきり立たなくつてもいゝわよ。…御立派でも貧相でも、お色が白くつても黒くつても、どちらでもいゝことなんだからね」

「でも、おつるさんはあの若旦那のことを褒めちぎつてゐますよ。主婦と連なつて歩いてゐなさる所を見ると、若旦那がいとほしくなるなんて云つてゐますよ。私は主婦は一度も見たこと御座いませぬけど、あの若旦那に釣合ふやうな女は、こんな土地にや一人もないだらうと思つてゐますんです」

「また老婢さんの悪口がはじまつた。あんたの口にかゝつちや甲府も毫無しだけれど、この近

所にもいゝ女がゐないこともないわね。佐渡屋の主婦もあか抜けがして意気な姿をしてゐるし、角の洋品店の娘さんも齒はみそつ齒だけど目が何時も笑つてるやうで愛らしいぢやないの」

「なんだな、あのくらゐな容色が」と、老婢はせせら笑つて、「あのくらゐな女は、東京なら軒並みにゐますさ」

「まさか」と、おかつは口では云つたが、腹の中では老婢の言葉に同感してゐた。そして、「あんたはこの土地にずうつとゐる氣になつてゐるでせう。たびゝ悪口は云つてゐても」と訊くと、

「それは姉さんがゐなさるのなら、何時までも御厄介になつてゐたいと思つてゐますけどな。…成らうことなら、まだ足腰の自由が利くうちに東京へ歸りたいと思つてゐますのです。あなたはまだ御存じないけど、甲府の冬の寒さつたらそれは格別なんぞ御座いますよ。私のやうな瘦せつぼちの老人には随分に應へます」

「さうでせうね。四方が山ばかりなんだからよぼゝの老婢でさへ都を戀しがつてゐるのが、おかつには可笑しかつた。で、一しきり二人で東京の話は何といふことなしにしてゐた

が、暫らくして老婢が妻所の方へ行くと、おかつはふと思立つて、手習机を火鉢の側へ持つて来て、東京の母親へ宛てた手紙を書きだした。いろゝな諷刺から親子の仲はいゝぢやなかつたけれど、久しく別れてゐると、流行に懐かし

いこともあつたので、筆を採ると、あれもこれもと書きたいことが胸、中に鞞がつつた。手習を踊んで字が上手になつたところを見せてやりた

いといふ氣にもなつた。先づ身延詣でをしたことから、山々の秋景色の美しかつたことを書いて、それから最近の自分たちの生活の平穩無事なことを書いて、「喜んで下さい」と、浮かと思つたが、

「喜んで下さいも變だ」と、自分の筆の跡を見詰めて馬鹿々々しい氣がした。お母さんの方でもそれほど氣樂な生活をしてゐるのならもつと小遣金を寄越したらいいぢやないかと云ふだらうが此方のお寺詣りだつて、人に羨ましがられるほどの面白いことぢやないもの。

「東京が戀しくなりました。氣の合つた話相手もないのに、こんな田舎の町に小さくなつてゐるのは心細くなりました」と、書いて見たが、それはお前の勝手ぢやないか、誰れも無理に勧めたのぢやなしと、母親の方で云ふだらうし、

「東京が戀しくなりました。氣の合つた話相手もないのに、こんな田舎の町に小さくなつてゐるの心細くなりました」と、書いて見たが、それはお前の勝手ぢやないか、誰れも無理に勧めたのぢやなしと、母親の方で云ふだらうし、

自分も母親や兄弟に弱々しい心を見せたくはなかつた。

で、いろいろに書惱んだ擧句に、おかつは、書きかけの手紙は反古にして、新に、簡単な時候見舞を述べて、梶の節を贈るに、次第だけを書いた。梶の節は小包にした。そして、風呂へ出掛ける老婢に託して、郵便局へ持つて行かせた。

三

横になつて黙つてゐると、次第に疲れが出て来て、このまゝグッスリ眠入つてしまひたくなつた。せめて今夜だけでも新七が櫻町の自宅の方に泊つて此方へ歸つて来ないで、自由な獨り寝をさせて呉れ、ばい、がと、おかつはそれを差當つての肝心な望みとしながら、ウト／＼してゐた。降頻る雨の音が彼女を眠りに誘ふばかりで、外には物の音はしなかつた。老婢は何時ものやうに長湯をして容易に歸つて来なかつた。

戸の開く音がしたやうだつたので、おかつはふと假寐から醒めて、頭を上げたが、誰れも入つては来なかつた。「老婢さん」と聲を掛けたが返事がなかつた。夢だつたのかと思直して再び枕に就いたが、何だか氣になるので、戸口

へ出て見ると、老婢が軒先に立つて誰れかと話をしてゐた。おかつが顔を出すと同時に、その影のやうな人間は、一左様なら。お大事にと、四十を過ぎた女のやうな聲を出して、傘を傾けて行つてしまつた。

「あの人は誰れなの。御近所の人？」と訊ねると、老婢は口の内、曖昧な返事をして、茶の間の方へ急いだ。そして火鉢の側へ坐つてから、譯ありげな忍び聲で、

「あの人は元八日町の塚本さんのお店で御飯炊きをしてゐただけど、この頃は娘がいゝ所へ縁付いたから、其處へ手傳ひがてら掛人になつて行つてゐるんでせう。お湯屋の前で行會つて久振りに話をして見ると、此方様の事もよく知つてゐるのに驚いちゃつたんです」

「立話が随分長かつたのね」おかつは老婢の方からこそ、餘計なお喋りをしたのであらうと察して、皮肉な目を向けたが、老婢は氣にもしたくないで、

「塚本さんでも臺所の方の人手が足りなくて困つてゐるんださうですよ」

「それで、あなたに助けに来て呉れと云つたんぢやないの」

「いんね。さういふ譯ぢやありませんで」

老婢の言譯は暗かつたが、おかつはどうでもしるゝいふ氣になつて追窮はしなかつた。いかにも大儀なので、今夜は寢床をも老婢に延べさせて、新七に構はないで枕に就いたが、すると、老婢も湯上りのいゝ氣持でコクリ／＼居眠をすだした。

そこへ、雨を冒して歸つて来た新七は、重苦しい思ひに屈託して、消えない顔をしてゐた。おかつは早寝の言譯をしながら枕を離れなかつたが、新七が直ぐに寢室へは来ないで、長火鉢に寄りかゝつて煙管をいぢりながら黙つてゐるのを、不慮と違つたこととして變に思つて、

「あなたはどうかなすつたの。櫻町で變つたことでもあつたんですか」と訊ねた。

「さうでもない」

「ぢや何を考へていらつしやるの」

おかつは打違つて置く譯にも行かなかつたので、寢衣の上へ羽織を引掛けて火鉢の側へ寄つた。そして、茶を入れて、濃いのを自分でも飲んで、たるんだ目蓋に力を入れた。

「私の事でまた六ヶ敷いお話があつたんでせう」とおかつはわざと微笑を浮べて軽く云つた。

「格別六ヶ敷い話つてこともないが、親類の奴

がみんな舊弊に分らず屋なんだからね。この土地の習慣で親類が巾を利かせて餘計な差出口を
していけないんだ」

「そのことはたび／＼あなたから承つてよく分つてゐます。今夜のお話を隠さないで聞かせて下さいな。驚きやしませんよ」

女が平氣でゐるのに新七は力を得て、「傍で愚圖々々云へばまた東京へ出掛けるまでのことさ。……だけど、折角親命の方で煩けてやるつていふ身代を棒に振つて他國へ行くのも辛抱氣がな過ぎるからね。どうせもう少しの間の辛抱だから、蟲を殺して待つてるんだね。そのかはり此方の物になつちまへば、大つびらで何をしようとな勝手な譯さ」と、自分で慰めるやうに云つて、「それで明日の日にでも親命がお前に會ひたいと云つてるんだから、お前もそのつもりでゐてお呉れよ。おれが店へ出てる間に、自分だけこの家へ来て會はうと思つてるらしいから、何時來られても構はないやうに、油斷しないでゐてお呉れよ。不斷云つてる通り、親命は極端な質素好きで、今風の整澤は非常に嫌つてゐるんだから、そのつもりで身づくりをしてゐてお呉れよ。質素な風をして家の中をキチンと整頓させて、働くことには骨を惜まないつていふ様子

を見せれば、親命はそれで満足するんだ。六ヶ敷い註文はない、至極簡單なものなんだ」

「でも私には大役ね」

「なに、親命やお袋はおれの云ふことを信用してるんだから大丈夫さ。親類の奴が誤解してからはいけないんだが、此方で真心さへ持つてれば、親爺だつてさう世間態ばかり害にすりやすまいよ」

身を壓めてこの土地で店を出すことに極まりさへすれば、相當の資本を出して貰へるし、二人しかない兄弟の一人として、財産の分前も少くはないことを、新七は何時ものやうに女の心を引立てるために話した。一人だけあつた娘が年頃になつて死んでからは、一層二人の子供に執着して、弟と新七を膝下から離して他郷で何時までも學問などさせて置くには堪へられなかつた父親の氣休めのために、新七も一先づ小さな商人にでもなる氣になつてはゐるもの、未永くこの田舎町で過す覺悟をしてゐるのではなかつた。

「今のやうに兄貴の下で働くんぢや張合ひがないが、自分が主になつてやる日にや商賣もなかなか面白いもんだよ」

今更珍らしいことではないが、新七の説明を

聞いてゐると、おかつも財産家の妻になつて、兄妹や知人に對して肩身の廣くなることに心が動かないことはなかつたが、一心を籠めてこの幸運を取逃さないやうに努める氣にもなれなかつた。

長い一生新七に連れ添ふことの懶さが感ぜられるのをどうすることも出来なかつた。靜かな茶の間で男と差向ひで、將來のいゝ事を聞いたり聞かされたりしてゐながら、楽しい夢心地にはたれないで、しまひには反事をするのも大儀になつてしまつた。

「今日はいろんな日に會つた。そのせみだか、一日が大變長かつたやうに思はれてよ」

おかつがさう云つて欠伸をすると、新七もそれに誘はれて欠伸をした。

翌日新七は、前夜注意したことを、も一度繰返して、日々の勤務としてゐる櫻町の本宅印傳の大問屋へ出掛けた。初めの間おかつは角帯に前垂の商人姿を外套で包んで、古い烏打帽子を被つて出て行く男を見送るたびに、いたしたく思つたり可笑しく思つたりしてゐたのだつたが、この頃は男の様子がスツカリ田舎商人らしくなり切つたのが不愉快に見えだした。

「本當に櫻町のお父さんが訪ねて来るのか知らん」と思ふと、自分の境涯が顧みられて心が引締つて来たが、素直に男の指圖に従つて、父親を待つてゐるのが馬鹿らしい氣がして、田舎の頑固親爺の御機嫌なんか取るには當らないと、譯の分らぬ不平の端くれをそんなことに對してでも洩らすつもりで、わざと身装をつくるつて待つてゐることにした。

空が綺麗に晴れて山々の眺めは美しかつた。

おかつは無駄足を厭はないで、齋者町の風呂屋まで行つて朝湯に入つて来て、丹念に化粧に取掛つた。此方へ来てからも時々結つて、彼女には似合つてゐるとおつるから云はれてゐる女優鬘にわざと結つた。

「姉さん、申兼ねますが、ちよつとお時々の家へ行かせてお呉んなさい。午餐前に屹度歸つてまゐりますから」と、老婢は頼んだ。

「あゝいゝとも」

おかつは快く許したが、老婢が昨夕の立話に釣られて給金のいゝ處へ行かうとしてゐるのを察して「よぼくの癖に何ぞ欲が深いんだらう。此處を止めたら東京へ行きたいと云つてゐた口の下から直ぐあゝだから呆れてしまふよ」と、鏡に映る自分の顔に向つて呟いた。

鐵瓶に湯を沸らせて、茶や菓子を用意をもし待つてゐたが、時が立つにつれて、新七の云つたことを眞に受けて、訪ねて来る譯のない人待つ氣でゐたことが馬鹿らしくなつた。こんな時におつるさんでも遊びに来れば、折角おつくりした甲斐があるのだがと思ひながら、退屈晴しに格子の間から表通を見てゐた。往來の人々に目をつけて、服装や顔形をひそかに批評してゐたが、暫らくして、ふと格子戸が開いて「御免」といふ聲がした。

さては父親が来たのかと驚いて、おかつは氣取つた返事をして慎ましかに障子を開けたが、土間に立つてゐたのは老人ではなかつた。新七の兄の幸吉であることは一目で察せられた。

「櫻町から来たんですが、上つてもいゝですか」

幸吉は極りの悪さうな顔して云つた。

「さあ、どうぞ」

おかつは茶の間を通つて奥の座敷へ客を導きながら、弟とは似もつかぬ兄の水際立つた日鼻立をウツトリ目の先へ浮べてゐた。

「いろ／＼お世話になりました」と小聲で挨拶して、お茶や菓子器を運ぶのに手間取つてから、

闕の側に小さくなつて首垂れてゐたが、生れてはじめてからいふ男に近づいたといふ意識は、彼女の胸を湧立たせてゐた。

「あなたにはもつと早くお會ひせにやならん筈だつたのだが、出抜けに此方へ上つてもどうだらうかと思つて、御無沙汰してゐました。……東京からこんな田舎へ来て暮らすのは不自由でせう」

「いゝえ、別段不自由な思ひはいたしません。……ですけれど、毎日何もしないで遊んでゐちや冥利が盡きるやうに思はれてならないんで御座いますわ。老婢さんなどお斷りして自分で家の事をしたいと始終思つてゐますのですけど」

「あなた一人で留守番してゐちや淋しいでせうから」

幸吉は彼女の母親の住所や兄妹の身の上について訊けたが、それは通り一片の話題としたばかりで、深い意味を含んだ質問ではなさうだつた。おかつの方でもいゝ加減に跋を合せてゐた。そして、相手の方で肝心なことを云ひ出しさうにしては控へ／＼してゐるのに氣を留めながら、肝心な話を待ちあぐんでゐたが、やがて、

「私はたとひこの土地で一生を暮らすことになつてもよろしいんですけど、私が此方へまゐつたために、お宅の皆さんに御迷惑を掛けちゃ濟みませんから、何時でも東京へ歸らせて頂くやうに新七さんにお願ひしてゐるんで御座いますよ」と自分の方から切出した。

「あなたの方からさう云はれると話がしよいんだが、私の家にはいろく、込入つたことがあつて、結婚どころではない些細なことでも當人の一存は容易に通らないことになつてゐるんです。何もあなたに難癖をつけて彼此云つてゐるんぢやないから、その點は誤解しないやうにして頂きたいんだが、たゞ最初に親の許しを得ないでこんなことになつたのが、一概に新七の不始末になつてゐるんです。普通の家なら何でもなしに收まつて行くんでせうが、私の家は例外に面倒なんで困るんですよ。……無論落度は新七の方にあるんだから、あなたの考へはよく承つて、私どもの方であんたに對して盡すだけのことは十分に盡す氣でゐるんです。だから腹藏なく、あなたのお考へを私に明して下さい。私が責任をもつてあなたの面目を潰さないやうにしたいと思つてゐるんですから」

幸吉が言憎さうに云ふのを、おかつは遊び半

分に聞いてゐた。今から一月も前であつたら、そして相手は幸吉でなかつたなら、持前の負けん氣を出して、手切金でも出せばいいと思つてゐるのか、金づくでどうでもなる私ぢやない。田舎者のくせに人を見くびるな」と、芝居染みた喉を切るか、それとも泣崩れてこの色慾に執着するところなのだが、今の彼女はそれほどには心を取亂さなかつた。

「新七さんはあなたの方にどう云つていらつしやるんでせうか」

おかつは落着いてさう云つて、顔を上げて相手を見詰めた。濃い眉や高い鼻が凜々しい男らしい男を現はしてゐたが、近づきたいやうな怖分つてゐた。少し含羞んだ眼差は弟とよく似てゐながら、見てゐると身震ひされるやうな色氣をもつてゐた。

新七の心はあなたにはよく分つてゐるでせう。あれは誰を吐く男ぢやない。あれが両親や兄弟や親類の者の信用を得ようと思つて、毎日店へ出て来て仕事に身を入れてゐるのを見てゐると、私も兄として不憫でならないんです。両親だつて新七の心は的んでゐるんだが、表立つてあなたと結婚させることはどうしても出来

ない譯になつてゐるんです。あれはまだ店の事はよく知らないから、自分の家が可成りの財産家でもあるやうに思つてゐるんだらうが、私どもの商賣は見掛けばかりで、財産なんぞあるものぢやない。この家で別世帯を今まで持續して來るために、あれも随分苦しい算段をしてゐるやうです」

幸吉はさう云つた後で、ふと調子を變へて、「それとも、あなたはどんな貧乏暮らしをしようとも、大げらに新七の妻として世間が通れなくつても、一生、弟に別れないといふ覺悟をしてゐなさるんですか」

「兄さんは何故そんなことを仰有るんですの」と、おかつはふと氣色ばんで、「私が欲得づくで新七さんに附纏つてゐると、お宅の皆さんは思つていらつしやるんですわね。私はそんなさもしい量見を持つてやしませんから、それだけはハツキリ申上げて置きます」

「それはあなたの誤解だ」幸吉は慌てて打消した。「私が今日出抜けに此方へ上つたのも、両親や新七には内所なので、私の一量見であんたの考へをよく知つときたいと思つたためなんだから、氣を悪くしないやうにして下さい」と云つて、座を立ちさうにした。

「私なんかお腑に落ちませんから、もつとハツキリしたお話を承りたいと思ひますの。私がかこれつきり新七さんにお目に掛らないで、今日の中にも東京へ歸ることにしましたら、それでお他の皆さんは御安心なさるんでせうか。新七さんも私も將來を樂みにして、かうして仲よく暮らして居りますのに、藪から棒に、お前たちは添遂げる望みはないんだからさつさと東京へ歸れと仰有るのは、あんまり酷過ぎるやうに、私には思はれるんで御座います。私とはと角、新七さんがそなたにお手帳に戀仲を裂かれて平氣でいらつしやれるやうな方だつたら、これまで皆さんに御心配を掛ける譯がなかつたぢやありませんか」

おかつは、幸吉といふ人は若い男と女との仲についてちつとも察しない人、こんな役目を以て来るには不似合な人、商賣にかけては腕があるのか知らないけれど、色戀の道には暗いに極つてる人、人のいゝ人に違ひないといふ獨り極めにしてゐた。しかし、損害賠償として相當な金を取つて東京へ歸るにはこんな人を相手にした方がいゝかも知れない、今の男に似ない果に類りに萌してゐた冷酷な忿念も持上らないではなかつたが、幸吉の顔を見てゐると、甲府と

いふ土地にも俄かに愛着の思ひが起つて、慾得を棄つてもつと辛抱してゐたくなつた。

幸吉は烈しい事を云つて、弟の氣を挫かないやうに両親が遠慮してゐることや、身延詣りを快く許したのも、それを最後にこの家を廢ませるやうにと思つたためであることなどを話したが、そんな話もおかつの心を脅かすよりも、彼女の氣だるい身體を刺戟して、生々として今日の目を見させた。幸吉の聲音は、言葉の意味が何であらうとも、彼女の耳に色づくばく聞えだした。

「両親に同意して二人の仲を裂く下心をもつて來たのやら、弟思ひで二人の仲を憫んで來たのやら、どちらだつておかつは關はなかつた。そして、却つて自分の方から、

「新七さんに自棄を出させないやうに氣をつけて下さいました。今日兄さんのいらしつたことも内所にして置きますから」と云つて、「後々のことは私後でよく考へて、あなたに御返事いたしますわ」と、淡白に云つて相手を喜ばせた。

四

昨夕の寢醒めに思用したりしてゐた、身延の若僧の青繻めた品のいゝ浮世離れのした顔は、幸吉の俗人らしい生々とした顔に蹴押されて、

おかつの胸の中から淡く消えてしまつた。長い間熱焦れてゐた男にめぐり會つたやうな氣持で、おかつは幸吉の顔形を何時までも目の前に浮べては弄んでゐた。二人きりの兄弟でありながら、何故あゝも違つてゐるのであらう。氣が弱くて人がよくて、物分りのよくなさうなところは兄弟よく似てゐるらしいのに肝心な顔形は何故あんなに雪と銀とほどに違つてゐるのであらう。若しかすると腹違ひなのかも知れない。

おかつは自分が東京でふとした事から馴染んだ男が、兄の方でなくつて、弟の方であつたことを忌々しく思つた。鏡の引損ひか、博奕の賽の日の出損ひのために、長い間の樂みをふいにしたやうな口惜しさが感ぜられた。

幸吉が行つてから間もなく、歸つて來た老婢は遅くなつた言譯をクドクとしてゐたが、おかつは取合はないでゐた。

「今日はどうなにかお客様でも入らつしやつたんでせうか」と、老婢は訊ねた。

「誰れも來るものかね」と、おかつは無愛想に答へて、自分一人の夢を見てゐた。

「でも、姉さんの御様子が変わつてゐますもの」老婢は、何時もながら自分が外から歸つて來る

と、さも待受けたやうに迎へて外の様子を訊ねたがるおかつが、今日はちつとも取合はないのを變に思ひながら、「かう申しちやお詔ひのやうに思ひなさるでせうけれど、頭髮をそんな風にしていらつしやるのが今日は特別によくお似合ひなさるんですよ。それに何かいゝ事の前觸れでもあつたやうに日本晴れの顔してゐなさるんですもの」

「さう、着つてもいいわね」と、おかつは悦しさに云つて、「老婢さんは目が薄い」と云つてゐながら、人の事にはよく目が利くから油断が出来ないのね。お客様は來なかつたけど、いい音信があつたんですよ」

「それ御覽なさい。……東京から郵便がまゐりましたのですか。東京からだとお手紙でも珍らしい御座いますね」

「さうね」おかつは快い笑ひを渡らして、「今日は綺麗になつて？ 不慮よりはちつとはいひ女に見えて？」と升えた口を利いた。そして、何時も美しいのに、今日はこと更美しく見ると、老婢にお世辭を云はれるのが、例のお世辭と思ひながらも悦しかつた。

おかつは午餐後の常例となつてゐる午睡もしなかつた。退屈過ぎと修養のために、新七か

らも勤められて日々少しづつでも努めてゐる手習や細刺にも、今日は手をつけないで、長火鉢の側や、冴えた目の差してゐる縁側で、ボンヤリしてゐた。新七と親しくなつた時分の有様や、その前に掛り合つてゐた男のことが、目の前に浮いたり消えたりした。手軽に掛り合つて左程の思ひを残さないで別れて來た二三の男については、今思出しても悔いも恨みも懐かしみも殆んど感ぜられなかつたが、最初ある知合ひの悪婆に易々と騙されて、頭の禿げた豚見たいな男に儲かた金のために、無垢の身體を汚されたことだけは、思出すと口惜しくてならなかつた。

「勿體ないことをした」と、自分の美しい肌を粗末に取扱つたことが、悔いても足らないのであつたが、いよく窮した時には、豚のやうな爺さんを訪ねたら助けて貰へさうな氣がして、知らず／＼心の底では手頼りにしてゐるのであつた。

「あのお爺さんは私を猫か犬かのやうに寵愛して、いろ／＼の事を教へて呉れた」おかつはそれを思ふにつけて、新七の無邪氣な戀の次第を連想したが、弟と性質は似てゐるらしい幸吉をも、同じ手組で馴染を深くして行かれさう

に思はれた。美しい女として自分の顔が幸吉の目に映つたに違ひないと思はれて悦しかつた。

「老婢さん、櫻町の若旦那の主婦さんといふのはどんな方なんでせうね」と出掛けに訊ねた。昨夕ちよつと聞いたのであつたが、あれだけでは物足らなかつた。

「おつるさんのお話では、主婦さんは御容色人ぢやないさうですよ。何しろ左所の方ですからね」

「在所といつて何方だらう」おかつは、身延詣りの途中の村々を思出した。雨の中を嬰兒を背負つて渡舟に乗つてゐた健氣な田舎女を思出して、それを幸吉の主婦でもあるやうに、幸吉と並べて見たが、さうしてゐると、田舎女の主婦が嫉ましかつた。さういふ田舎女に満足して陸じく暮らしてゐる幸吉の心根が尙痒かつた。……いくら身代を延ばしたつて、その主婦を有難がつて色戀も知らずに若い時を過して、何がいゝことがあるのであらう。

日暮近くなつて、隣家では例の著音機を鳴らしたしたが、今度は聞飽いた琵琶歌や勸進帳の外に、「行こか戻るかオーロラの下を、ロシヤは北國果て知らず」といふ哀れつばい流行唄が唄は

れたり、陽氣な馬鹿囃子が鳴つたりした。おかつはそれ等の唄に調子を合せて唄つてゐたが、哀れつばい唄には涙のこぼれるほどに哀れになり、陽氣な唄には踊りだしたいほどに陽氣になつた。

「老婢さん、今夜は御酒を取つて来て下さいな。それから蒲焼の三人前も誂へて置いてね」と、勢よく云ふと、

「御酒を召上るんですか、お珍らしい」と云つて、老婢も悦しうな顔した。

「みんなして飲みませうよ。旦那様も時々は酔つた顔でもした方がいゝのよ。あんただつて時々は寝酒の欲しさうな顔してゐるぢやないの」

「姉さんは口が悪い。……此間は者物のお酒の残りを、勿體ないから頂いただけなんで御座いますよ」

「老婢さんは正直ね。……私のお母さんが寝酒を飲みたがるんですよ。だから、私もちつとは御酒が頂けるんでせう」

老婢が使に出た後で、おかつは夕化粧をしてゐたが、そこへ、新七は静かな足音をさせて歸つて来た。

「お歸んなさい」と云つて、おかつは振返つた

が、新七は昨夕と同じやうに屈託に曇つた顔をしてゐた。本宅で何事か彼れの氣に掛かることを云はれてゐるに違ひないと、おかつは察してゐるが、兄の訪問については、彼れの方から言出さないかぎりには黙つてゐることにした。

「お前は今日は氣持がよさうだね」と、一層見まされた女の顔に、新たな愛着を感じながら云つた。

「毎日鬱いでゐたつてはじまらないんですもの」と、おかつは甘つたれた聲音で云つたが、彼女の機嫌がいゝのは新七には何よりも悦しかつた。

「本當にさうだね」と、彼れは曇りの拭はれたやうな目をした。

「お夕飯には久振りにお酒をつけることにしたのよ。いゝでせう」

おかつはいゝ匂ひのするクリームや練白粉や香油などを手の平で撫でたり、鼻だの頬だのと彼方此方の皮膚につけたりするのに、云ひ知れぬ樂みを覺えてゐたので、暇にまかせて鏡臺の前の長い間離れないでゐた。すると何時の間にか新七は鏡臺近く廻り寄つて鏡の中を覗きだした。あなたにもつけて上げませうかと、一度男の顔を化粧してやつたことがあつたの

で、新七は今もさう云はれたさうにしてゐるをおかつは察しながら、今はそんな戯れを樂む氣にはなれなかつた。

鏡に映つた男の顔は愚らしく淫らしかつた。

「私今夜おつるさんを誘つて町を散歩して来ようと思つてゐるの」と、わざと云ふと、

「約束してゐるのかい」と云つて、新七は直ぐに不快な目をして、「お前はあの女とうまが合ふんだね」

「だつて私にはこの土地に女のお友だちは一人もないぢやありませんか」

「それはさうだが……」新七は自分は今親しい友人の一人もないのを苦にしてゐないのと思ひながら、「僕はいつそ東京へ行つちまはうかな」と云つた。男の言葉は呻いてゐるやうにおかつの耳に響いた。

「あなたの辛抱氣のないのには呆れてしまふ。昨夕あなたに云つてゐなすつたのに。私そんな氣まぐれが大嫌ひさ」

「だつて、昨夕と今日とは僕の境遇が違ふんだからな」と、新七は聲を落して、「親耶の仕向け様次第で、僕はどんな酷い決心をするかも知れないよ」

「ぢや、何時まで経つても私はお宅の方の信用が得られないから駄目なのね。私さへ此處にゐなければ、あなたは御大家の御次男で文句はないんでせう」

おかつは他人事のやうにさう云つて、それよりも白粉の乗加減に一層興味を惹かれてゐるやうであつた。

「おれは明日から店へは出勤しないよ。早く自分の店が出せないくらゐなら、この頃やつてゐることは無駄骨なんだから。：：：兄貴や兄嫁に侮辱されたかないからね。：：：」

「兄さんと喧嘩したんですか。詰らないぢやないの。あなたは素直にさへしてゐれば、ひとりで財産が煩けて貰はれるんぢやありませんか。：：：」
「たび／＼繰返してゐる財産の話が出て、一月前のやうに、あるひは四五日前ほどにも、おかつの方で熱心に話に乗つて来ないのが、新七には低智しくてならなかつたが、相手の冷淡さを責めるのは躊躇された。「三分一でも四分一でも、お父さんの丈夫な内に煩けて貰はにや損よ」と、以前のやうにおかつに喋けられなくなつたので張合ひが抜けた。」

老婢の知らせで、「二人は支度の出来てゐる食卓の側へ寄つたが、新七は二ヶ月あまりを過

したこの隠家をやがて立退くための別れの酒宴のつもりで、盃を手にした。側にある女の晴々とした顔を見るにつけても、今日の午後本宅の奥座敷で両親や兄が顔を描へて評議した時の有様を明らかに話されなかつた。

「何をさう思案してゐるんですよ。店を分けて貰へないことなの。おかつは抑揃ふやうに云つたが、今朝幸吉が此處を訪れたことがどれほどの利目があつたのかひそかに知りたく思つてゐた。幸吉が訪問を隠してゐるらしいのも不思議であつた。」

「お前さへ覺悟すれば僕は何處へでも行くよ。さうなりや外の思案は入りやしないんだ」と、新七はふいと眞面目になつたが、かう眞面目になられたのに、おかつはゾツとした。何處へでも行くよなんて云ふのが、甲府に來る前の新七の言葉を、おかつの記憶に呼び起させた。一緒になら死んでもいゝと、どうかすると思つてゐるらしいのが恐ろしくつて、抑揃つてなどゐられなかつた。話を外して、老婢をも呼んで酒を振舞つたりして氣樂な世間話をして紛らせてゐた。

五

新七を煙たがつて、彼れが家にゐる時には、成

るべく遊びに來ないやうにしてゐるおつるが、格子窓の外から「今晚は」と聲を掛けると、おかつはそれをいゝ機會にして、座を立つて、家の中へ招いて、買物を兼ねて遊びに出掛ける道連れに誘つた。

「あなたはいらつしやらないでせう」と云つて、新七を家に殘して、おかつは不聲着に縮緬の羽織だけ引掛けて、おつるとともに外へ出ると、

「私、今夜は櫻町の方へ行つて見たいの。連れてて頂戴な」と云つて新七の本宅をはじめ、外からでも見ようとした。

「あなたはお店の皆さんをよく御存じなんですか。おかつは相手が平生遠慮して本宅の内輪の話に觸れないやうにしてゐるのを察してゐながらさう云つた。

「お顔だけなら皆さんを知つてますわ。」

「ぢや、あなたと一緒に本店へ寄りでもしたら、私つてことが皆さんに分るわね。」

「だつて、彼方では姉さんを知つてらつしやるんでせう。大旦那だつて若旦那だつて、疾くから姉さんを知つていらつしやるんでせう。」

「ほんとうに。私迂闊だつたわね。：：：どなたにもお目に掛つたことがないから、知らん顔してお店へ買物に行かうと思つてゐたのに、當て

が外れちやつた一

疾くから顔を知られてゐるのは意外であつたが、それに付いても、甲府といふ土地が一層狭苦しくなつたやうにおかつは感じた。「此方では知らないのに、先方だけに知られてゐるのはいやなものね」

「でも、姉さんはお店の若旦那にはお會ひになつたんでせう」

「……」おかつは、「いゝえ」と答へかけたのを危く思直して、「おつるさんはどうしてそれを知つてらつしやるの？」と、事もなげに云つた。

「だつて今朝お宅へお入りになつた方の後姿が幸吉さんのやうでしたから」

「私の方に叱られたのよ。彼處の人はみんな堅苦しきやうね」

「さうでせうか」

おつるは信じない口吻であつた。櫻町の本宅の方へ足を向けてゐながらも、おかつは最早間が悪くつて、はじめの興味は殺されてゐた。

彼女の住居の近所とは違つて、櫻町あたりは都合らしく明るくて賑かで、いろ／＼な夜店も出てゐた。おかつは久振りで雑沓の中へ足を踏込むと、東京の夜が戀しくて溜らなくなつて、新

七一人が男でももあるやうに自分の身體を彼にまかせてこんな土地へ来たことの煩悶さが、新たな悔いとなつて胸に浮んだ。町の左右の商店や飲食店や見せ物などについて、おつるが知つてゐるかぎりの説明を絶えず聞きながら歩いてゐたが、おつるに對して何となく打解けられなくなつて、その言葉の端々をも邪まに聞きがちになつた。

「宮部さんのお店はそこでですよ」と教へられると、足を留めて、電信柱に身を隠して其方を見詰めた。間口の廣い立派な、見るから身代の豊からしい店であつた。額の廣い老人が眼鏡を掛けて書付を讀んでゐた。

「さあ行きませう」と、おかつは詰らなささうに云つて後へ戻つた。

「何時も若旦那がお店へ出てゐるのに、今夜はどうしたんでせう」とおつるが云つたが、おかつの耳には冷かしのやうに聞かれた。で、平生なら、蕎麥でも汁粉でも奢るところなのだが、今夜は何處へも寄らないで、買物もしないで眞直ぐに家へ向つた。

「ステキな女だ」と、擦違ひに若い者から聲を掛けられると、自分がすべての男の目を惹いてゐるやうな誇りを覺えた。

おつるの家の前でおつるに別れると、おかつは自分の家を目の前に見ながら、薄暗い通へ道を外して、暫らく當てもなく歩いてゐた。明日から出勤したいと云つてゐる新七に、寝ても醒めても附纏はれるのは、思つても氣味が悪かつた。

よく知らない町を歩いてゐるうちに、ふと先き通つた賑かな處へ出て來たので、おかつは再び宮部の店の方へ行つて、横目でソツと店の中を覗きながら通過した。すると、老人の坐つてゐたところへ、幸吉が代つて坐つてゐて、小僧を相手に話しながら笑顏をしてゐたのが、おかつの目に留まつた。此方へ氣がついたら、幸吉がどんな顔をするであらうかと、おかつはだらけた好奇心に驅られて、も一度店の前を通つた。幸吉も今度は此方を見たに違ひなかつた。通過して電信柱の蔭から見ると、幸吉の様子には先きとは違つてゐた。口を噤んで滯つた顔付をしてゐた。

滯い顔をして見せつつて怖かない、顔や姿こそ違つてゐても性は弟と同じことなのだらうからと、おかつは可笑しく思つて、親しく幸吉に近づける手段を空想しながら、今度は足早く家へ歸つた。

新七はまだ酔ひの醒めきらない顔して、火鉢の側で仰向けに寝てゐた。

「たゞ今と、氣取つた聲で云つて、おかつは櫻町の本宅を見て来たことを話した。

「なんどつてそんな處へ行つたの？」

「だつて、おつるさんが連れて行つたんですもの。あの人はお腹の中にいけないところのある人ね。私これから成るべく懇意にしますまいよ。とんだ迷惑を掛けられるかも知れないから」

「だから僕が不斷さう云つてゐたのに」

しかし新七は、今の場合おつるの事などはどうでもよかつたので、重ねて訊返しはしないで、

今までも獨りで考へてゐたことを、粘つこい口調で話した。今夜中に必要な物を纏めて置いて、明日早く何處かへ行つて姿を隠さうといふのが、彼れの計りの企てであつたが、おかつは、

「私さへ辛抱してゐれば此處にゐたつていゝぢやないの。私があなたを唆かして他所へ連出したと思はれるのはいやですからね」と、熱心を粧つて、眉根に皺を寄せて云つた。

「誰れの口から知れたのか新聞にまで出されたから、なほいけなくなつたんだよ」

「新聞に？ どんなことが出たのか読んで見た

いわね。あなたはその新聞を持つていらつしやらないの」おかつは自分の事が生れてはじめて新聞に出されたのに興味を感じたが、新七は明らかにさまにはその記事を語らなかつた。

「僕は家の者や世間の奴から馬鹿者にされたつて構やしないが、お前は僕が零落したつて愛想を盡かしやすまいね。お前のお母さんにもつと氣樂な生活が出来るやうにして上げると約束してあるんだけれど、當分約束を果す見込みはなささうだ」

「そんな不景氣な話はお止しなさいよ。氣が滅入つちまふわ」

おかつは男の煮えきらないクドクドした話のお相手になつてゐると息苦しくなるので、露骨に

「私の情愛が薄くなつて、はじめの間ほどにあなたを大事にしなくなつたと思つて、いろ／＼に氣を廻して心配していらしやるんでせうけれど、私は現在あなた一人を手頼りにしてゐるんぢやありませんか。あなたの外に私の掛り合つてゐる男が一人も半人もある譯ぢやないし、こつちへ来てからは外の男の人とは口を利くことさへもないんですからね。念のために老婢にでも訊いて御覽なさい」

「僕はそんないやなことを思つてお前を疑つてやしない」と、新七は口を尖らせた。

「ぢや、それでいゝぢやないの」

それ以上に、自分から何を欲しがつてゐるのかと、おかつはこの男の物足らないらしい口吻を奇怪に思つた。最初に馴染んだ爺さんに仕込まれた色慾の水管に新七の満足しないのが不思議であつた。

「いやねえ、あなたは。涙を落したりして」

「お前は泣くことなんかないだらう」

「だつて、泣く譯がないのに泣けやしないわ。：口惜しくつて夜つびで泣いたこともありません。あなたはまだそんな思ひをしたことないでせう。：私とあなたとが、浮世の義理かなんかで別れなければならぬ時が来たら、その時こそお互ひに思ふ存分に泣きませうよ。今から泣いて見たりなんぞしないでさ。見つともないから」

子供を綾すやうに云つて、おかつは手巾で男の目を拭つてやつた。新七は黙つて綾されてゐたが、次の室でほどき物をしてゐた老婢が入つて来ると、つと起上つて、生眞面目に坐つた。そして、

「老婢はお時の家へ行くのなら、今から行つて

泊つて来た方がいゝだらう。明日の朝早く起きられちや願々しくつて却つていけないから」と云つて、おかつに向つて、先き老婢に急用があるといつてお時が迎へに来たことを話した。

「でも、泊りがけて行くほどのことはないんでせう」
おかつは今夜は二人きりで夜を過すのが何となく不安に思はれたので、老婢を離さないとしたが、老婢は新七の勧めを幸ひに、泊りがけて行くやうに願つて手早く支度をした。

よぼ／＼の老婢でもゐなくなると、俄かに家の中が寂しくなつた。身延の宿で二人差向ひで川の音を聞きながら過した先日の宵の寂しさよりも、一層氣味の悪い寂しさがおかつの心を震はせた。新七とはその前に掛り合つた二三人の男と別れた時のやうに、手輕に別れる譯には行かないのは、今はじめた氣のついたことではないが、今夜は相手の顔を見てゐると、早晚自分の身にふりかゝつて来る災難が、豫め彼女の神經に傳はつて来るやうであつた。「この人は死ぬるまで私を離さない氣でゐる」と思ふと、男の執念に自分の今後の幸福が暗闇にされさうで、櫻町の両親などの計らひで穩かに別れの道がつきさへすれば、自分に悪い名をつけら

れることなんか、どちらでも構はない氣になつた。

寢床に就くと熟睡を裝つてゐたが、不思議に日は冴えて容易に眠つかれなかつた。時雨の音さへ聞えて、人里離れた遠い處にゐるやうであつたが、すると、自分でも譯の分らない寂しさ語らなから、涙が枕に傳はつた。……をりをり夜半の寢醒めに、どうかすると涙のこぼれることがあるのを、書間は思出しても馬鹿らしくて、誰れにも話したことはなかつたので、寢返り一つしても氣がつくほどの新七も、いまだに氣づかないのでゐるのであつた。

六

「本當に今日は櫻町へいらつしやらないの」
翌朝おかつは非難するやうにさう云つて、兩戸を開けて澄んだ秋空を見上げた。老婢のかはりに拭掃除から朝餐の支度までも自分一人の手でしなければならぬのが煩はしかつたが、新七は缺勤の覺悟は堅く動かさないで、そのかはりに臺所まはりの用事を自分から先に立つてしだした。今日でも立退くと云つてゐた家の土間を掃いたり、四つ匍ひになつて縁側に雑巾を掛けたりした。

が、何時もの出勤時刻が來ると、新七も落着かなくなつた。暫らく引續いて勤めてゐたのに、無斷で一日でも休んだなら、角立つた話のあつた昨夕の後ではあるし、本宅の方で打遣つて置く譯はない、様子をみに誰れかを寄越すに違ひないと案ぜられたので、病氣にかこつけ缺勤を届けることにした。その使には近所のおつるを頼むことにして、おかつが流し元で食器を洗つてゐる間に、無斷で裏口から出ておつるの家へ行つた。

「オヤ、珍らしい。おつるが何時もお世話になりまして」と、家の側の溝で大根を洗つてゐたおつるの母親は、慌てて衣服を揃へせて、洗ひ物は打遣らして、家の中へ入つておつるを呼んだ。

新七は用事だけを云つて、直ぐに歸らうとしたが、親子に頻りに引留められて、せめてお茶の一杯でもと歎願されたので、上り櫃に腰を卸した。

おつるがお茶を入れてゐる間に、母親は細身の煙管と煙草の袋とを持って来て新七に勧め、「老婢さん」と姉さんとの名を先づ持出して、穩かな氣樂な三人暮らしを羨ましさうに褒立てた。

「あなたのお世話であんな手ごころない、家が借りられたのだが、近々にあの家を出るかも知れませんよ」と、新七は話の行きがかりで、うかと云はずとも云つた。

「それはまあ一母親は迂散くさい目をして、櫻町のお宅の御近所へでもお引越しになるんで御座りますか」

「いや、さうぢやないです。…僕なんかは一寸先きは開見たいなもんで」と、新七はまたうかと云はずとも云つた。

「あなた様がそんなことを仰有つてなるもんですか。お兄さんもこの頃はあなた様のお宅へ入らつしやるやうぢや御座りませんか。ハンデお會ひになつて此方の姉さんの御氣性が分りさへすれば、お兄さんのお心も融けるに極つてゐると、私どももさう申してゐるんで御座ります」

「兄貴は一度もこつちへ来たことはない筈だが：」新七は獨言のやうに云つて、おつるの方を顧みた。

おつるは頼まれた使に出掛けようとして、土間へ下りたところであつたが、新七の鋭しい目付を氣遣ひながら、「お母さんは當推量でいろいろなことを云ふからいけないよ」と言つて、急ぎ

足で外へ出た。

母親は娘の注意に氣づかないのか、そんなことには頓着しないのか、「此間中からたび／＼お兄さんをこの邊でお見掛けしてゐるんで御座います。お二人きりの御兄弟だから、お案じなすつてお出でになるんだらうと思つてゐましたんです」

「さうですか」

新七は不愉快な思ひを顔に現はさないやうに努めながら、口軽く暇を告げて家を出た。兄が此方の家の閤を跨いだことは一度もない筈なのだが、しかしおつるの母親が根も葉もない拵へ事を云ふ筈もないと、彼れは判断に迷ひながら、裏口からそつと自分の家へ入つた。

おかつは手紙を書いてゐたが、知らぬ間に歸つてゐる新七の屈託した顔を見つけると、吃驚しぢやつた。…あなたは黙つて出て行つて黙つて歸つて来るからいけない。何か旨い物を買ひに行つてゐたんですか」と云ひながら書きかけの手紙を静かに疊んだ。

新七は自分の邪推のためよりも、むしろ迂濶な問ひを出して女の感情を害れるのを氣遣つて、ちよつと躊躇したが、黙つて濟ます譯には行かなかつたので、「この頃兄貴が訪ねて来たこ

とがあるのか」と訊ねた。

「え、入らしてよ、昨日の朝と、おかつは即座に事もなげに答へて、何故今になつて言出したのかと、突然の問ひを訝りながらも、空呆けてゐると、

「矢張本當だつたのか」と、新七は呟いた。そして、おつるの母親から聞いたことをそのままに話した。

「あなたは何だつて不歸いやがつてたおつるさんの家へいらつしやるの？ 櫻町へのお使ひなら仲屋でも誰れでも私が頼んで上げますのに」と、おかつは忌々しさうに、ツケ／＼と云つた。

おつるの親子に對する昨日までの親しみを根こそぎ無くしてしまつて、「あんな人の云ふことを信用するやうぢやあなたも駄目。輕薄なお喋舌家だから、時の拍子でどんな出鱈目を言出すか分つたもんぢやない。…第一、兄さんは昨日の朝ちよつと顔出したすつただけぢやありませんか」

「兄が来たなら来たで、お前もおれに隠さなくつてもいいだらうに。兄貴も昨日そんな話はしなかつたよ。…ちや、親命のかはりになつて兄貴がお前に會ひに来たんだね。お前は兄貴の氣に障るやうなことは何も云はなかつたらうね」

「私、餘計なお喋舌はしませんよ」

「来るのなら親爺が来て呉れ、ばよかつたのに、兄貴が會ひに来たからいけないんだ。兄貴は自分の女房につまかれたりして、はじめからおれたちに好意を有つてやしないんだから」

新七は、夫婦の間の世間話の種にするつもりで、兄がわざ／＼此處の様子を見に来たのだらうと云つて、兄の訪問の秘密にされてゐたことについての不平を、おかつの方へは向けないで、兄の方へのみ怨みを寄せた。心の中に多少疚しかつたおかつは、煩さい詰問を受けないのを喜んだが、幸吉夫婦が寝物語に自分の噂をしてゐると思ふといふ氣持はしなかつた。

せめて甲府から、二里ほど距つた積翠寺温泉へでも行つて、當分身を隠してゐようと思つた新七が云ふのを、おかつは上の空で聞きながら、今日明日に迫つたやうに思はれる自分の身の處置を考へてゐたが、考へてゐると、分別くさい身の處置どころか、わざ／＼甲府三界まで鬼か佛かに引張られて来たのを縁に、思ふ存分の事を仕

遂げて見なければ、腹の蟲が収まらないやうに慾念が燃え立つた。「身延へお詣りして来ると、直ぐに新七さんと別れを急ぐ氣持になつたり、幸吉さんに會へたりしたのも、佛様のお導き

かも知れない。そんなに人の思惑を苦にしてお導きを袖にしちや佛様の罰が當るだらう」などとおかつは調子づいて自分の慾念に媚びてゐた。

「積翠寺とかへはあなた一人であらうしやつちやどう？ 私自身延で懲々してゐるんだから旅は御免ですよ」と云つて微塵動ぎもしない氣振りを見せた。

そこへ、櫻町から歸つて来たおつるが姿を見せて、頼まれた事を果した返事をすると、おかつは、「お使賃に何かお奢んなさいよ」と新七に云つて、自分は奥の室の机に向つて書きかけの手紙を書きつづけた。

それは幸吉へ宛てた手紙であつた。「……御親切なお言葉はおろそかにはいたしません。昨日一日いろいろに考へまして、お宅の皆さまのお計らひに背かぬやうに、私の身の極りをつける決心をいたしました。縁のある者縁のない者、人間わざではどうともいたし方のない定まり事と思はれますから、私は皆さまのお計らひにおとなしくおまかせして、自分の強情ははり通さないことに決心いたしました。つきましてはあなた様にお目懸つて、最後のお指圖を頂きたいと存じますから、おいそがしいでせう

けれど、至急にお目にかゝれるやうにして下さいまし。新七さまには内しよにして置きますから、左様御承知の上よろしくお計らひ下さいませ」

おかつはかう書いて封筒へ収めて袂へ入れたが、胸の鼓動を禁じ得なかつた。乗合馬車の窓から覗いて見た富士川の帷子のやうな危い處を動いてゐるやうな氣がした。自分の夢のやうな望みが遂げられないで、手紙の文面通りにスゴスゴこの土地を立退かされるやうになつても變なものがたと、おかつは何方向いても不安な影が身に迫るのを覺えたが、そんな甲斐性のないこととどうなるものかと自ら願つた。「ビクビクして尻込みしたつて災難が落ちて来る時にや来るんだから、思ふ存分やつて見なければ誰か。一日見た時から、この人になら命かけてもと思つたのだもの」

おかつはかう思ひながら、新七が自分で茶を入れて、珍らしくおつるを持成してゐるのを見てゐたが、ふと、

「私これから郵便を出しに行くから、次手に旨しいお茶受けを買つて来ますよ。お二人でゆつくりお話をしていらいつしやい」と云つて座を立つた。

手紙を直ぐにポストへ入れるのは流石に躊躇されたので、俣夫が誰れかを使にやらうと考へたが、傍の目に觸れないで、幸吉に手渡したのは六ヶ敷さうだつた。たとひ手紙がうまく届いたにしても、新七に知られないやうにして幸吉に會はうとするのは手順が困難であつた。幸吉の方で氣を利かせて呉れ、ばい、が、手紙の文面を上でだけで讀んで頓間なことをして呉れたら、折角の心を籠めた思付きも妙なことになる。折角の心を籠めた思付きも妙なことになる。折角の心を籠めた思付きも妙なことになる。

こんな時に老婢やおつる親子が心から自分の味方になつてゐないことが不便に思はれた。

おかつが廻り道して、風月堂で西洋菓子を買込んで家へ歸つた時には、火鉢の側に新七一人例の屈託した顔をしてゐて、おつるの姿は見えなかつた。

「あなたは大變仲がよささうに話をしていらいしたのね。不思議ですわね」と云ふと、

「あの女の顔を見ると滑稽だよ。横からだとさうでもないが、正面に見ると随分しやくれてからね」

「今日は何が気がついたの？」

おかつは空々しくさう云つて、火鉢の側を避けて奥の間へ入つた。心が咎めるといふほどではないが、男の顔を見たり言葉を聞いたたりしないでゐたかつた。

幸ひに新七が散髪に出掛けたので、彼女は一念を籠めて手紙の成行を見詰めてゐることが出来た。冴えた日の差してゐる縁側には隣の白猫が遊びに来て、細い目をして此方を見てゐた。

今のおかつには、幸吉といふ美しい面影を他所にしては、この甲府の土地に一刻もゐる氣はなくなつてゐたのだつたが、燃立つてゐる一念に冷たい水をぶつかけるやうな物があたりになつた。

ウヂヤ／＼してゐるのが小憎らしかつた。老婢でもおつる親子でも迂散くさい目を此方へ向けてゐるのが、おかつの大望に取つては、今から小煩さい邪魔物になつてゐた。……白猫は媚びを含んだ目をして柔しい鳴聲を立てた。おかつはその聲に惹かされて知らず／＼縁側へ出て、

白猫を抱上げて絞してゐたが、さうしてゐる間に誰れもいないといふ感じが、これまでとは違つて彼女を誘惑しだした。

おかつはふと猫の子を抱出して、自分の持物の中の大切なものを撰出して一つの行李に纏

めたりしてゐたが、するとそこへ歸つて来た老婢は、改つた挨拶をして、「申上げにいたんで御座います」と、今日中に暇を呉れと言出した。

「爲方がないわ」と云つて、おかつはそれ見たことかと、自分の豫想の中つたのをひそかに誇つて、「あなたは塚本さんへ行く氣なんでしょう」「あんな忙しいお家へは行きたかないんで御座いますけれど、おまきさんが自分のかはりに、

せめて十日でもお店の臺所を助けて上げて呉れ、自分がお引受けして奉公人を捜してゐるんだけれど、どうしても見つからないからと、手を合せて頼まれますので、斷り切れないんで御座いますよ」

「そんなら行つてお上げなさいな。私の方はどちらでもいゝんですから」

おかつは、くだ／＼しい言譯を續ける老婢の方を見向きもしないで、持物の整理をしてゐた。老婢も自分の押入を開けて、いろいろな物を風呂敷や行李の中へ掻集めてゐた。おかつはあらまし片付けてしまふと、突立つたまゝ皮肉な目で老婢を見ながら、

「あなたは旦那様のお許しがなくつても出て行くつもりなの？」

「姉さんにお願ひして置けば宜しいぢや御座いますまいか。どうせ旦那様にも御挨拶してやら、お暇はいたしますけれど」

「でも、老婢さんは旦那様が連れてらつしたんぢやないの。私にはこの土地の様子がちつとも分らないからつて。あなたに出て行かれやこんな小げな世帯でも、私のやうな無性者には持ち切れないかも知れないけど、それでも旦那様はいゝと仰有るでせうかしら」おかつは抑揚ふ氣で云つた。

「こちら様では私のやうな者はあつてもなくとも同じことぢや御座いませんか」

「でも、老婢さんがあなくなると、後が淋しくなるわね」

おかつはわざと哀れつばい口調で云つた。下女をかねて隠し目付のつもりで雇つてゐながら、新七の方で給金以外の心付をする事もないし、おかつ自身も、はじめから老婢を好いてゐないので、屢々物惜しさうな謎を掛けられても知らん顔して、餘分な施しをしたことはなかつたのだが、暇を願ひ出た今の場合になつて、おかつはこの老婢でも自分の味方に引込んで置きたいやうな氣持になつた。よぼ／＼のくせに、少しでも給金のいゝ方へと目がくられて、

寒い時節をひかへて忙しい家へ奉公しようとするやうな怨の深い老婆を手懐けるのは造作もないことのやうに思はれた。

「あなたは東京へ歸りたいと、先日の晩云つてゐたぢやないの。歸るのはお止めにして此方に長くゐつく氣になつたの？ 私に都合によつたら近い中に東京へ歸らうかと思つてるんですね」

「姉さんお一人で？」

「私一人だか、旦那様も御一緒だか、それはまだ決らないんだけど、どちらにしてもあなたと一緒に立つて貰ひたいと思つてたんです。ただあなたがお嫁本さんへ御奉公することになつたのなら爲方がないわね。私の當てが外れちやつた」

「東京へ連れて歸つて頂ければ、私何よりなんで御座いますがね、姉さんは急にお立ちになるんですか」

「何時立つことになるか、目取りはまだハツキリ決つてやしないけれど」

「私の方では嫁本さんにお義理がある譯ぢや御座いませんから」

老婢は東京へ行けるのなら、何時でも嫁本の家から暇を貰つて來るからお伴をさせて呉れと

熱心に頼んだ。おかつはこのよぼ／＼の老婆の氣迷ひを可笑しく感じながら、相手の心を惹くやうな返事をしてゐた。

七

老婢は新七が歸り次第、兎に角暇を貰つて直ぐに出て行くつもりで、身支度をして待つてゐたが、新七が歸つて來ない先に、幸吉が入つて來たのには、老婢もおかつも驚かされた。手紙がそんなに早く届かうとは思はれなかつたが、しかし、あの手紙の文面を胸に持つて幸吉が訊ねて來たやうにおかつには思はれてならなかつた。

「新七は加減が悪いんですか」と、幸吉は二人の何方に訊ねるともなく訊ねて、上り櫃に腰を掛けた。

「床屋へまゐりました」と、おかつは明らかに答へて、「もう歸つて來ますでせうから、お上んなさいまし」

「いや病氣でなけりやいゝんです」

幸吉は家の中を見廻した後で、おかつの顔に目を落したが、間が悪いやうに直ぐに目を外して、

「親爺が來ると面倒だから、私が代りに様子を

見に来たんですが、大した病氣でないのなら安心です。今日一日は休んで明日は店へ出勤するやうに云つて下さい。」

「承知いたしました」おかつは慎しやかに通り一片の受容へをしたが、ふと、ウツカリして大切な時を取逃してはならないと胸を波打たせながら、「新七さんはお勤めにいらつしやるかどうか分りませぬわ。私が勤めたつて無駄ですから兄さんが御自身でお勤めなすつて下さい」と云つて、老婢に向つて、「御苦勞だけど、あんた一走り床屋へ行つて旦那さんにさう云つて下さいな」

「いや、呼びに行かなくつてもよろしい。唯私が出来てさう云つとつたと新七に傳へて下さればそれでいゝんです」

幸吉がさう云つて、直ぐにも歸りさうに腰を浮かせたので、おかつは焦立つたが、手足ののろい老婢は成るべく使歩きを免れたい算段をしてゐるのか、幸吉の顔を見ながらちつとしてゐた。

「早く行つて頂戴ね」と、おかつに急立てられて、老婢はやうやく十間へ下りたが、逆散くさい目で二人を見かへつた。それがおかつにはいやに煙つたかつた。

「明日あれからよく考へまして、先きあなたに宛てて郵便でお手紙を差上げました。私のやうなものでも一心籠めて書いたのですから、兄さんお一人でもよく読んで頂きたいんで御座います。兄さんの御返事次第で、私が甲府にゐるもゐないも、一生の事が決るんですわ」

おかつは老婢が闕の外へ出ると、さう云ひながら心の中では神や佛の加勢を祈つてゐた。白々しい顔して煙草なんか吸つてゐても、これ程に思つてゐる私の事を何とか思つてゐるに違ひないと、獨り極めにして悪くないで、

「櫻町のお父さんや御親類の方にはどう思はれても構ひませぬけれど、兄さんにだけは私のお腹の中を聞いて頂きたいんです。どこへでもお伴ひいたしますから、あなたの御都合のよろしい處へ私を連れて行つて、私が申上げたいことを十分に云はせて下さいましな」と調子に艶をつけて云つた。

「昨日でああなたの心持は私にはよく分つてゐるんです。世間でどんな噂を立ててゐても、私はあなたが新七を騙したといふことは信じはしません。どう決りがつかうとも、あなたの顔を潰すやうなことは私が受合つてしないから、その點だけは安心しといて下さい」

「そんなことは私どちらでもいゝんですの。昨日お目に掛つた時とは私の量見も異つてゐますのです。それで、兄さんにお手紙を差上げてその御返事を貰いてから、この土地にゐるともゐないも決心するつもりで、御返事を待つてゐるんですわ」

「どんな手紙かしら。私の一存で御返事の出来るやうなことなんでしょうか」
幸吉が不安な好奇心に動かされてゐるのを、おかつはいゝことにして、
「私の申上げるとは兄さんは十分に聞いて下さるでせうけれど、私にしては生命定めなんですから、こんな處でお話する譯にはまゐりませぬわ。何時にどこへ来いと仰有れば私間違ひなく其處へまゐります。仰有つて下さい。私のためにいろ／＼御心配を掛けたんですから、御迷惑でもこのお願ひも聞いて頂きたいんです」

「しかし、ちよつと困つたなあ。…手紙で返事しちやいけないですか」
「新七さんに添はれなければ死ぬるの何のといふやうな馬鹿なこと云つて、あなたを困らしやしないかと心配していらつしやるんですか。そんなことを考へてゐるほどなら、兄さんに御

「そんなことは私どちらでもいゝんですの。昨日お目に掛つた時とは私の量見も異つてゐますのです。それで、兄さんにお手紙を差上げてその御返事を貰いてから、この土地にゐるともゐないも決心するつもりで、御返事を待つてゐるんですわ」

相談なんぞいたしやしませんわ。無教育な女の私が皆さんに悪く云はれながら、黙つてこの土地を立たうと決心してゐるほどなんです。兄さんも私が是非とも申上げたいと思つてゐることを聞くだけでも聞いて下すつても、お人柄に障ることはあるまいと思つてゐますのですが」

「……よろしい。ぢや、晩餐後鷹匠町の幾造の家へ行つとつて下さい。私が歸りにさう云つて置きますから」

「でも私のお宅のお知合ひの家はいやで御座いますわ」

「だつて知らない人の家であなただけに會ふのも困るからね」

「ぢや道を歩きながらお話してもよろしいんです。ハツキリ時間を極めて下されば、私太田町の公園へ行つて、日朝様のお堂の前でお待ちして居りますわ」

おかつは日朝様のお堂の前で願掛けをしてゐる風をして待つてゐようと空想しながら、幸吉を説きつけると、幸吉は躊躇しながらもやうやく納得した。

「あゝ悦しい」おかつは思はずはしたくない聲を洩らして、「ぢや、その時何もお話しますわ」

と云つて、時間の打合せをした。幸吉の方でも此方を何とか思つてゐればこそこんな頼み事を承知したのだと獨り極めにして、夢心地で相手の顔を見てゐたが、此處へ新七に歸つて來られて、兄弟の間に面倒な話の取りかはされるのを、傍で聞かされるのを豫想すると、ふといやな気がしたので、

「兄さん、今夜私に會つて下さるのなら、今は新七さんにお會ひにならないで歸つて下さいませんか。昨夕お宅でどんなことがあつたのか存じませんが、新七さんはあれから不機嫌で爲様がありませんの。兄さんには何を言出すか分りませんから、今日はこのまゝ知らん顔で歸つて下さいませ。後で私がいゝやうに言つて置きますから」と、先き自分で引留めたことは忘れたやうに云つた。

幸吉も此處で弟に會ひたくはなかつたので、短氣を起さないで今日一日はゆつくり休息するやうにとの言傳を頼んで忙しげに出て行つた。

おかつは身延詣での御利益があつたのか知らんが、まことしやかに佛様を崇める氣になつたが、男を惹く力が自分が備つてゐるのを誇るやうな氣持もした。あの人は新七に會ふより自分には會ひたさに來たのぢやないか、それに違ひ

ないふと思當つて獨りで微笑された。

「お容様はどうなさいました」歸つて來るとさう云つて怪んだ老婢の問ひには答へないで、「老婢さん、私今どんな人相をしてゐて？ 運が向いて來さうに見えて？」と、出抜けに訊ねた。

「いゝお話を聞きたすつたの。姉さんは昔からいゝ運にばかりお會ひになつてぢや御座いませんか」

「戯談お云ひなさい。今こんなにして暮らしてゐるのはちつともいゝことないぢやないの。だけれど明日の日にも私に幸福が向いて來たら、あなたにもお褌分けして上げますよ。縁があつたらばこそ、見ず知らずのあなたとこんな土地で二月も三月も一緒に暮らすことになつたんだから、これから先も懇意に附合つて頂戴な」

おかつは老婢に對して頻りに別れを惜むやうな口を利いた。そして、「旦那様には祝儀よ」と云つて、紙幣を包んでやつて、洗ひざらしの足袋をも添へてやつた。——もつとやり茶えのすゑ物をやりたかつたのだが、持物の豊かでない彼女には、外によささうな物が見つからなかつた。——でも、老婢は意外な賜物として頂いて喜んだ。

やがて床屋から歸つて来た新七は、兄のゐないのに拍子抜けがしたが、精句それをいゝ事にした。老婢が暇を乞ふのを快く許してやつて、「此方から出すとなりや、相當の事をしてやらなければならぬんだが、婆さんの方から出て行くといふんなら丁度いゝよ」と後で云つた。

「あなたも商人の子だから勘定高いのね」とおかつは冷かして、誰れとでも別れたいと御自分で思つた時には、先方からさう云つてくれた方が、あなたのために都合がいゝんでせう」と冷かに云ふと、新七は顔を赧らめて、「さういふ譯ぢやないよ……と、自分が吝嗇でない言譯をしだした。

「でも、あなただつて私だつて、金持になつたら吝嗇になるかも知れないわね。遣ふためのお金だから、惜まないでドシ／＼遣つたらよささうに思はれるけれど、持つて見ると、出惜みをするやうになるんでせうね」

おかつは努めて相手の話に相槌を打たうとしながら、日の暮までの待遠しさにいら／＼して時々はトンチンカンな返事をした。

「口では手強いことを云つてゐても、まさかおれたちを見殺しにすることも出来ぬんだね」

と、新七は兄の訪問をも自分の都合のいゝやうに解いて一時の氣休めにして、昨夕のやうに昇話はしなかつた。かねての希望通りに財産の分配をされる時を空想して、さうなつた時には惜しげもなく遣つて見せるやうな口を利いて得意な色を見せたりした。

「あなたが財産家になつたら、おつるさんに帯の一筋も買つてお上げなさい。物を欲しがつての人に物をやるのは張合ひがありますからね」おかつは自分の平生の養澤な望みなどは口に出さないで、淡泊にこんな返事をしてゐた。

「老婢でもゐなくなると淋しいわね」おかつはやゝもすると返事もしないで、空に物を思ひながら口を噤んでゐる言譯にさう云つたが、新七も何となく淋しかつた。

「さう云へばさうかも知れないね。……今度下女を置くやうだつたら、もつと小綺麗なのを雇ふんだね」

その日は夕餐を早目に済ました。そしておかつは食後風呂へ行くと云つて家を出掛けたが、出がけに何の氣なしに振り返ると、新七は淋しさに立上つて此方を見入つてゐた。その顔が暫らく彼女の目先にちらついて無氣味であつたが、湯屋の戸を開けるまでには目から消えてしまつた。

約束の時間のことを考へながら身體を洗つてゐたおかつは、餘裕があつても心が急がれたので、不斷の長湯に似ず、今夜は慄しく切上げで、火照つた顔を夜風にさらした。公園へ着くまでには、星が見えだして、細い月も冴えた空に照つた。身延の山の夜がふと彼女の胸に浮んだ。公園の片隅にある三階建の料理屋には賑かな人影が見えて三味線の音もしてゐたが、日朝様の方は薄暗くて燈火も點いてゐないで、たい蟲が鳴いてゐるばかりであつた。

おかつは周圍に人のゐないのを幸ひにして、薄暗い方へ道を探りながら、湯屋で貰つた釣銭を賽銭として投げるつもりで手に握つてゐた。が、お堂の前へ着かない前に、木陰から出抜ける人影の現はれたのに驚かされた。黒い帽子を日深に被つて外套をも着てゐたので分らなかつたが、近寄つてからよく見ると、それは幸吉であつた。おかつは既に心を許し合つてゐる戀人に會つたやうな氣持がして、打解けた微笑を洩らした。幸吉はわざと生真面目な態度を持して、

「私はあなたと約束したから來ることは來たんですが、こんな處に長くまごつてゐる譯には

行かないから、用事だけを早く云つて下さい」と云つて、あたりに目を注いだ。

「用事を云へと仰有られちゃ私困りますわ。……私の手紙はお読み下すつたんでせうか」

「見ました。……幸吉は池の方へ向つて歩きながら、手紙には私の指圖によつてどうとも決めるといふやうなことが書いてあつたが、私

も横柄づくの指圖は出来かねるんです。成るべくならあなたにも新七にも傷がつかんやうにして極りをつけたと思つてるんだから」

「お互ひに何時までも煮え切らんことを云つてゐてもはじまりませんわね。私は兄さんの権柄づくのお指圖を受けたいんですの」

おかつは池のほとりのベンチを見つけると、自分から先きに腰を卸した。そして、手に握つてゐた賽銭は池の中へ抛込んだ。私を嫌つてゐなければこそ此處まで来たのであらうのにと擦つたく思ひながら、

「でも、私に會ひによく此處まで来て下すつたわね。私の願ひが叶つたんですわ。昨日兄さんにお目に掛つた時から、私は今までのおかつちやありませんの、生命を棄てても、義理も人情も棄てても、といふ氣になりましたの。あなたも今朝訪ねて来て下すつた時から、さういふ私

の心を、ちやんと察していらつしやるんぢやありませんか」

「私にはあなたのいふ事がよく呑込めないが」と、幸吉は慌てながら、女の方から目を外して、

「新七を棄てるといふことなんですか」

「新七さんに關係したお話は、今夜は一口も仰有らないで下さいね。命に掛けて懸焦れた私の思ひを察して會つて下すつたんだから、今夜といふ今夜死んでも満足だと私思つてゐますの。私、今は甲府といふ詰らない土地にゐるやうな氣はいたしませんの。……私、兄さんのお指圖で地獄へでも監獄へでも行くと仰有れば喜んでまゐりますわ。どうにでもして下さい」

さう云つた女の熱い息に驚いたやうに幸吉はつとベンチから立上つた。

「全體あなたは私をどうしようと云ふんだね。此方ぢや眞面目に聞いてゐるのに戯談を云つちやいけないね」

昂奮してさう云つた幸吉の胸の鼓動は、おかつの神經にはよく響いた。

「戯談ですつて？ 戯談か戯談でないか、兄さんのお腹の中ではよく分つていらつしやる癖に。私のやうな馬鹿な女にでも、これだけの

事を云はせといて、恥を掻かせないやうにして下さい。兄さん、後生ですから」

「私は新七の兄だからね。そんなあなたの話を聞いたら行かない」

「新七さんと別れ、ば赤の他人ですわ」

おかつが追驅けるやうにさう云つた時には、幸吉は足早く池のほとりを離れてゐた。おかつは待つて呉れと聲を掛けようとしながら唇を閉ぢた。そして、幸吉の姿が闇の中に消えるまで、ぢつとして見送つてゐた。

「なんて卑怯な人だらう」

おかつは相手を構むやうに心の中であらう叫んだ。折角心を籠めて待設けてゐたこの最初の密會が色も香もなく卒氣なく終つたのが口惜しかつたが、幸吉の心の底は見透かされるやうだつたので絶望の惱みは感じなかつた。眞直ぐに家へ急ぐ氣にはなれなかつたので、當てもなく彼方此方の町を歩いてから、おつるの家の前へ出ると、外から聲を掛けた。

「私の家へ遊びにいらつしやらない？ 私、今一人で公園まで散歩して来たところなの」

「お一人で？」と、おつるは障子の中から顔を出して、「老婢さんは急にお暇を頂いたんですつてね。お困りぢや御座いませんか」

「老婢はお宅へお寄りしたんですか」
「いえ、え。私、先きお宅の前を通りがけに聲を掛けましたの。あなたのお歸りが遅いつて新七さんは心配していらつしやいました」

「さう？」
おかつは、何時かのやうに湯屋へ迎へに行つてゐやしないかと思つて、今さらのやうに煩さく感じた。うるさく待つてゐられるところへ歸つて行つて機嫌を取つたりするのがいやだつたので、無理におつるを誘出して、一緒に家へ連れて行つた。

夜の公園の寂しい有様を語つたり、日朝様へ願を掛けたことを語つたりして、自分の後暗い所行を言紛らせて、おつるを相手に賑かに背の内を過した。そして、今夜はどうしても新七と二人きりで夜を過すのが厭だつたので、いろいろに説勸めて、おつるを泊らせることにした。新七だけを奥の室へやつて、自分とおつるとは茶の間に寢床を並べることにした。若しも幸吉が今夜の事を彼れの妻や両親や、あるひは新七にまでも明らさまに知らせたならばと、ふと氣遣はれて、眠りかけた目も醒ましたが、それは彼女に取つては瞬間の迷ひに過ぎなかつた。……弟によく似てゐる兄ではないか。

不意打ちに吃驚したやうに一度は氣強くあゝ云つたものの、どうせ腹の中は分つてゐるのではないか。

おかつは幸吉がその妻と添寢しながら、今夜の事を思出しては眠りかねてゐる有様を想像して、「私を眺めつけて見たつて、今夜いゝ夢は見られやしないだらう」と、目の前に描出した男に向つて冷かすやうに云つたが、おかつ自身も夜つびていゝ夢は見られなかつた。

八

翌日の午過ぎまで櫻町から何の音沙汰もなかつたので、あの事については幸吉の胸一つに收められてゐることを察して、おかつは意を安んじた。そして、自分の不所存の詭言をして、氣持よくこの地を立ちたいから是非會つて呉れと書いてやつて、も一度幸吉を何處かへ引出さうかと企ててゐた。

「今日はちよつともお店へ顔出ししていらつしやいな」と、時々思出したやうに新七に出勤を勸めてゐるが、新七は出勤どころか、自分一人だけでは一步も外へ出まいとしてゐた。おかつの方で不平らしいことさへ一言も云はなくなつたのが、彼れには却つて氣掛りになつてゐ

た。早晚別なければならぬやうな破目になりかゝつてゐるといふ豫感は頗りに彼れを脅かしてゐた。

「家でボンヤリしてゐても詰らないぢやないの。ちよつとも出ていらつしやいよ。お父さんの氣に入るやうにしたい方が、あなたのためにも私のためにもいゝんですからね」と、おかつは暖かしても新七が動かないのがもどかしくて、

「ぢや、どうでもなさい。末を樂みにしてどんな辛抱でもすると、あなたが不斷云つてゐたのは謔だつたのね」と拗ねて見せたが、女に拗ねられるのに張合ひを覺えた新七は、その言葉に縫つて、いろ／＼の口説をはいじめた。

何時も同じやうな詰らない愚癡として、おかつの耳は惱まされた。男は何故こんな詰らない愚癡ばかり並べるのが面白いのやら知らんと、無理にも悅しがらせの一言も云へなくなつて、欠伸の出かゝるのをやうやく嘯殺してゐるが、そこへ櫻町の小僧が新七を呼びに来たので、彼女も油断してゐなれなくなつた。

「まだ加減が悪いからもう一日休むと云つて呉れ」と、新七は小僧を歸して、「また兄貴でもやつて来るだらう」と皮肉のつもりで云つたが、

おかつは受答へをしないで奥へ入つて夜具を出して横になつた。他所目には不貞腐れと見えるやうな態度で、新七の云ふ事する事の相手にならないで、強情に自分一人の思ひに耽つてゐた。若しも幸吉が愚にも卑怯にも裏切りでもしようなら、その時こそ負けてはゐない、此方から身を投出して宮部の一家に小つびとく恥をかゝせてやる。碌でもない男に長い間自分の身を任せたまに、ケチをつけられて、スゴくこの土地を去るやうでは甲斐性がな過ぎる。腹が癢えない。新七の實意や情愛が何の足しにもなるものか。

家の中は静かであつたが、ふと首を曲げてその目を開けて見ると、新七は茶の間で脇枕して足を曲げて假睡をしてゐた。寒さうで寢息も微かであつた。

おかつは喉が乾いてゐたので、新七の眠つてゐるのを幸ひに起上つて、鐵瓶の湯を呑んだが、湯は生温くて、長火鉢には火の氣もなかつた。

そこへ、櫻町からの使が再びやつて来たが、すとおかつは新七には知らせないで、自分で土間へ下りて、小僧を裏手の庭先へ連れて行つて本宅の様子を訊ねた。

「今直ぐに一緒に連れて来いと大旦那が仰有つたんですから、此方の旦那にさう仰有つて下さい」と小僧は手強く云つた。

「ぢや、今起しますから待つていらつしやい。：お宅の若旦那は昨夕もお店へ出ていらつしたの？」

「ええ。昨夕はおそく歸つて来ました」

小僧が好奇心に驅られた目でおかつの顔を見ながら、気軽な返事をするので、おかつは老人夫婦や若主人夫婦の氣風やこれ等の人々に対する店員の氣受けなどについていろ／＼と訊ねた。

主婦と若旦那とは仲がいかと訊ねると、小僧はニヤ／＼笑つた。

「待つていらつしやい」と云つて、おかつはふと思出したやうに家へ入つて、小紙幣を鼻紙に包んで来て、使賃として小僧の手に握らせた。この小僧にしろ老婢にしろ、僅かな金を悦びさうにして受けるのを、おかつは見るとつけて、もつと金が自由になつたら、かういふ人たちの手に播いてやつて、自分の思ふやうに皆なを使つて見たいと考へたりした。

「あなたに頼みたいことがあるんだけど聞いて下さつて？」と、懐っこさうに云ふと、

「へ、え」と、小僧は無邪氣な笑ひを浮べた。

「ぢや、待つてゐて下さいいな」

おかつはふと思ひついて、家へ入ると急いで机に向つて、「昨夜は申譯のないことをいたしました。お許し下さいませ。もはや皆さまにお目にかゝるも恥かしく、いつそ自殺しようかと存じましたが、一言あなたさまにお詫びして、許すとのお言葉を頂きませんと、この世に思ひが残つて死ぬにも死なれぬやうに思はれます。おしつけがましく何とも申譯は御座いせんが、昨夜と同じ時刻に同じ處へお出で下されて、私に會つて下さいませ。一分間ででもよろしいのです。私の一生の望みはこれ一つで御座いますから、人ひとりのあの世の迷ひを救つてやるとおぼしめして是非聞きとゞけて下さいませ」と書いた。

これだけ書くにも案外手間取つたので心が焦立つたが、幸ひに新七の眠りは醒めなかつた。おかつは針の先で小指の先を突いて、自分の名前の下を血汐で染めた。

「これを祕密で若旦那に上げて下さいいな。たゞ黙つて渡せばいいんですから、誰れにも見せないやうにね」と、手紙を小僧の内懐へしつかりと挟んで、「あなたのお名前は何と云ふの？」と訊ねた。

それから新七を揺り起すと、新七も不承々々に行く氣になつたが、おかつは不歸の出勤の時とは違つた他所行の時着を出してやつて、今日は度胸を据ゑて確かりした口を利かなきや駄目ですよと力を添へた。

「僕は大丈夫だ。直きに歸つて来るから、お前は何處へも出ないで、火でも熾して待つてい」新七は寢呆氣盡しながら快活にさう云つて、小僧と一緒に出掛けた。

いよゝゝこんな家に退屈して安閑としてはゐられない時が迫つて来たのを感じて、新七が歸つて来るまでに覺悟を極めなければならぬと、おかつは昇齋して頻りに心が急かれたが、しかし昨夕の所行についての悔悟の念はちつとも起らなかつた。むしろ、破壊なら破壊でよかつた。どうせ一度は免れることの出来ない新七との別れ際の争ひをも表立つて争ふのも結局いゝ氣持のやうであつた。獨角力は取れないために、煤つて着切らないで、面白くもない愚圖ついた生活のお附合をしてゐるよりは、掴み合ひの喧嘩別れでもした方がよささうであつた。

幸吉は昨夕おそく歸つて来たとき、使ひの小僧の云つた言葉も、彼女は自分の都合のいゝやう

に解いて、「私の云つたことが氣になつて、夢中で方々を歩いてゐたのだらう」と頼もしく思つてゐた。

立つてゐるおかつの頭の上にと電氣が點いた。時計は止つてゐるが、日の暮れかゝつてゐるのに氣づくとき、おかつは昨夕のやうに外へ出る身支度をした。どんな破目にならうとも世を憚つて騎甲妻なコッソリ逃げだす氣は最早なくなつてゐたので、自分の持物を新七の留守の間に持出したりなどしなかつたが、自分の手許にある金は財布に渡へ込んで表の戸を引寄せただけで外へ出た。

おつるの家の外には遊びに行く處のない彼女は、また風呂へ入つて時を過した。新七の前へどういふ話が出されてゐるかとおかつは櫻町の次の室に忍込んで立開きでもしてゐるやうな氣で、石鹼を片手に、茫然とした様子をして耳を澄ましたりしてゐるが、「入らつしやいまし」と、直ぐ側で聲を掛けられたのに驚いて目を掘ゑると、櫻町の家族の顔は湯氣の中へ散つて、おつるの母親のダブ／＼した身體が彼女の鼻先で場所を取つてゐた。

「オヤ、ちつとも存じませんで」おかつは悪い人に見つかつたと、いゝ幸先で

もないと思ひながら、一しきり愛想のいゝ受答へをして、母親よりも先へ湯から上つた。公園の入口まで行くと、おかつも流石に危かしいやうな愚しいやうな氣がして、ふと足が留つて進みかねたが、でも、スゴ／＼家の方へ後戻りして、新七の歸るのを待つてゐたつても、別にいゝことのあらう筈がなかつたので、ふとした氣おくれを振拂つて昨夕のところへ押進んだ。昨夕此方の魔力にかゝつて来た幸吉が今夜あの手紙に牽かれて来ないつてことはない、とおかつは疑はなかつた。

昨夕語りそこねた日朝様のお堂の前へ行つて、蹲んで見上げたが、お堂の中には燈火一つ點いてゐないで、陰氣で薄汚さうであつた。身延の仁王門の側で見た時のやうに、此處では佛様も尊げには見えなかつた。おかつは賽銭を關がりの中へ抛込みながら、參詣人のないかういふお堂の中こそ、精曳に都合のいゝ處だと不意にさう思つたが、さうすると、薄汚い陰氣なお堂の中も懐かしく見られ出した。昨夕のやうに星が冴えて、弱々しい蟲の音も足下から聞えた。

昨夕と同じ時刻になつたことはあたりの様子で知られた。おかつは階段の側に蹲んだり立つ

たりしてゐる間に、知らず／＼佛様に向つて熱心に祈願を籠める氣になつた。佛の御利益を説いてゐた身延の若僧の姿も、彼女の祈願に力を添へるやうに目の前に浮上つた。待焦れてゐる自分の思ひが佛の助けによつて幸吉の心に通つて、此處へ寄つて来るやうにと口の中で祈つてゐた。珍らしくも兩手を合せて目を瞑つて頷ぐたりした。

闇に包まれて本尊の御姿は見えなかつたが、暫らく瞑つてゐた目を開いて見据ゑると、お堂の正面には幸吉の姿が、まざ／＼と現はれた。驚く間もなく直ぐに消え失せたが、おかつはそれを佛の示現のやうに感じて、改めて眞心から合掌禮拜した。燈火も人影も見えないお堂のあたりが、色つばい不思議な靈場となつて彼女の心を落けさせた。風は動かないで冷々とした空氣は彼女の湯上りの肌の温みをさました。料理屋の方からは木の間を滑つて三味線の音が微かに聞えて来た。

おかつはいくたびか足音の近づくのを耳にしては欺かれてゐたが、やがて、人影が間違ひなく此方へ近づくのを見つけて夢から醒めたやうに目を見張つた。人影は屢々立留つたり、あるは横道へ外れたりするので、おかつは半信半

疑で、正體を見つづけるつもりで、自分から歩出して、木蔭に身をかくしながら星の光で相手の顔形の分るところまで近寄つた。

正體を一目見たおかつは、足下に蛇を見つけたやうに驚いて思はず後退りした。ボンヤリしてゐる薄暗い人影も、血眼になつて彼女を捜してゐる新七の面相を彼女の心に呼び寄せた。

おかつは後退りして、違つた道を求めて急いで公園を出た。後を氣にしてたび／＼振り返りながら、暫らく當てもなく歩いてゐたが、心が次第に鎮まるにつれて、幸吉が手紙の秘密を弟に告げたのぢやないかと疑はれて、その卑怯な所行は憎々しく思はれた。

佛様の御利益も何も滅茶々々になつたので、おかつはガツカリした。眞心を籠めたつもりで、誰れとも争はうとする力が抜けて、こんな土地に一日もゐたゝまらないやうな氣になつてしまつた。

「どうにでもなるが、いゝとおかつは弱々しく自分の心に向つてさう云つた。そして、新七の歸つて来るのを待って、彼の心まかせに最後の處置をつけて、自分一人で今夜にでも東京へ立てるものなら立つことにしよう」と考へなが

ら、フラ／＼と家へ歸つた。表の戸は開けつ放しになつてゐた。

火の氣のない火鉢の前にぢつと坐つて待つてゐると、新七の思惑などはどちらでもよくなつて口惜し涙が留度なく流れた。

新七が歸つて来たのは暫らく立つてからであつたが、先き出て行つた時とは見違へるやうな蒼靄めた方のない顔をしてゐた。「お前は何處へ行つてゐた？」と、咎めるやうに云つたが、女の身に異常がなかつたのに安心してゐることは言葉にも顔付にも現はれた。

「私、此處にぢつとしてゐたつて詰りませんからね」と、おかつは當てつけるやうに云つて、相手の鞭の下りるのを待つてゐると、

「僕は何が何やら分らなくなつたよ。親爺や兄貴には相變らず貞婦で首を絞められるやうな意見をされた上に、今日は變な事を云はれたのだから、それは別の話として、家へ戻つて来ると、お前はゐないしね。一人である、あれやこれやと考へられて氣持が悪くなつたから、昨夕お前が公園に行つたとおつるに話してたことを思出して、僕は氣晴らしに公園の方へ散歩に出掛けたのだ」と、新七は努めて靜かに云つて、おかつの方へ目を注ぎながら口を噤んだが、お

つは没表情のまゝで聴かりした受答へもしなかつた。

「さうすると公園で僕が誰れに會つたと思ふ？
……僕は吃驚したよ。……」

「へえ……ふとおかつの目はきらめいた。思はず訊返さうとしながら、言葉を囁殺して、相手の問はず語りを待設けてゐた。

「目朝様のお堂の側をまご／＼してゐる男があつたから、何の氣なしに側へ寄つて見ると、それが兄貴だつたよ……少し前に氣持のよくない事を聞かされた後で、思ひも染めんところまで出會つたんだから、僕は變でならなかつたが、兄貴の方でも吃驚しとつたよ。……お前は何とも思はないのかい」

「それが私にどういふ關係があつて？」

「僕には今日の事がみんな胸に落ちないんだよ。兄貴も氣が鬱してならないから散歩してると云つて、僕を誘つて田圃の方を歩いて、歸りには汁粉を蜜つて呉れたんだが、その間に僕の胸に落ちないやうなことをいろいろ話して

ゐたよ。この間中とは人が違つたやうに、兄貴は親身にいろいろな事を云つて呉れたが、途中で別れてから考へ直すと、親身な話でも以前

きりの兄弟で、子供の時分から大した仲たがひをしたことなしに大きくなつて来たんだが、この頃はどうかいふものか一人しかなない兄が本當の兄のやうに思へなくなつたんだよ。兄貴の事を考へるといやな氣がするんだ。今日に限らず不斷でも僕の爲を思つていろんな事を云つて呉れてるんだらうが、……」

新七はついで云はうとしたことを直ぐには云出しかねて、溢い顔して口を噤んだが、おかつも浮かりした口を利用して毒蛇になるのを恐れて黙つてゐた。火の氣のない火鉢の側に差向ひで黙つてゐる間の鬱陶しさつたらなかつた。新七は公園へ行かなかつたら、單通りに幸吉に會はれたのだと思ふと、おかつは新七に對してどうかしなければ腹が癒えないやうに焦立つたが、我慢して目を伏せてゐると、

「兄貴はこの頃僕等に對して嫉妬心をもつてゐるんだ」と、やがて新七は言ひづらさうに云つた。

「さう？ 可笑しいわね」

「そんなことは思つても不愉快だから思ひたかないだけれど、どうもそれに違ひないよ。お前は感づいてやしないのか。二三度兄貴に會つたんだから、話の中に自然に思ひ當ることがあ

りさうなもんだがなあ……
「分らないわ、あなたの仰有ることは。嫉妬と云つて何を嫉妬するんです」

「そんなことを立入つて口に出して云ふのはいやだ。考へるのもいやだ」ふと氣色ばんでさう云つた新七の聲は震へてゐた。そして、努めて心を鎮めながら、

「おれは今夜の中にでもこの土地を立ちたくなつたよ。お前もどうせ此處にゐる氣はなくなつてるんだらう。後の始末は後で考へりやいんだから、一刻も早く他所へ出て行かうぢやないか。此處にかうして居つちや先が恐ろしいやうに思はれてならないんだ」

「私と一緒にゐると恐ろしいことがあるんですからねえ」と、おかつは無感興な返事をして、「ぢや、私がゐなければいゝんでせう」辛氣なく云つて、長いこと坐つてゐた火鉢の側から立上つたが、すると、新七は今まで懸へ／＼してゐた疑念の榴み忿懣の思ひを最早、自分の心一つに收めかねて、われ知らず立上つて、おかつの後に立つた。

「お前は僕に苦痛を與へるつもりなんだな。僕を苦めといつて、氣になつてゐるんだな。……それなら僕は云ふぞ。お前は利益のために僕

等の家庭を亂してもいゝと思つてゐるんだらう。僕と一緒にゐたつて得になる見込みがないと分つたら、どんな手段でも取る氣になつてゐるんだらう。僕は傍で何といはれても、今まではお前を些とも疑つてなんかなかつたのだが、先きからのお前の様子で自分が馬鹿だつたことが分つて來たんだ」

新七の目に涙の溜つてゐるのをおかつはふと顧みながら、直ぐに顔を背けて、

「何でも仰有いよ。私が得をするためにどんなことをしたんですかねえ」と空々しく云つた。

そして、かねて別にして置いた風呂敷包を開けて、他所行の衣服を出して着替へようとしながら、まかり間違へば、打つたり蹴つたりぐらゐされるかも知れないと覺悟して待つてゐるが、それつきり荒い言葉も聞かれなくなつたのを却つて無氣味に感じて、そつと振返ると、新七は後に突立つたまゝ目を据ゑて此方を見入つてゐた。それが、怒つてゐるといふよりも、見惚れてゐるといふやうにおかつには思はれたので、これならいゝと安心して、手早く衣服を着替へて、

「私、これから母の處へ行つてよく相談して來ますからね。留めないで下さいね」と、軽く云

つて部屋を出掛けた。夜行で東京へ行くかどうか、まだ極つてゐなかつたのだが、とに角それを口實にするのが穩當だと思つたからであつた。

「此間から僕が誘つた時には、母親なんかに會ふのも詰らんやうに云つてたぢやないか。一人で東京へ行く氣になつたのか」と、新七は前を遮つて云つた。

「だつて、私は母にでも相談するより外は誰れも親身な話相手はないんですからね。私に邪魔をしないやうにして下さい」

「ぢや、どうでもしる。……こないやな思ひを残して別れてもお前は何ともないんだね」

新七が惡夢に襲はれてゐるやうで、藻掻きながら手出しはしかねて、ぼんやりした目で女の動作を見てゐる間に、おかつは心忙しく出て行つた。後から追馳けられるのを氣にしながら、横町から横町へ外れて、暫らくして後を顧み、新七らしい影の見えないのにやうやく安心してした。

案内無事に済んでよかつた。こんなことなら、今まで詰らない我慢をしてゐるには及ばなかつた、おかつは締めから解かれたやうで晴々した。それに、幸吉の心の中さへ疑ふ餘

地のないやうに知れて來たのに、空手で東京へ歸れる筈はなかつたので、足は無意味に停車場の方へ向ひながらも、幸吉を呼出す工夫を凝らしてゐた。

老婢がこの土地へ來たはじめに足がかりにした義理の姪にあたるお時の家は、停車場の近くにあつた。おかつは饅頭や果物などを僅かばかり店先へ置いてあるその家の前に立つた。そして嬰兒を抱へて店先へ出てゐるお時に向つて、急用があつて塚本さんの家にある老婢にちよつと會ひたいんだが呼んで來て貰へまいかと頼んだ。「東京へ歸るかも知れないんですからね。さう云つて下さいね。老婢さんと約束してるところがあるんだから」と言添へた。

お時はじろくおかつの様子を見ながら、嬰兒を背負つて、奥にある誰れかに店番を頼んで出て行つた。おかつは明るい處を避けて片陰に身を潜めて、旨く事の運ぶやうにと念じながら、表の人通りを見てゐた。停車場の近所であつても人影はまばらで、この頃明るい賑やかな町にあつてゐた彼女は、何處へ行つてもこの市中には自分の心を牽くやうな處のないのを今更のやうに感じて、どんなことがあつても、新七たんに誘はれてこんな土地へ來

たのだらうと、出京間際の自分の氣まぐれな考へを思出したりしてゐたが、ふと新七に違ひない若い男の影が目の前を横切つたのに驚かされた。脇目も觸らずに足早に歩いてゐた。

「何といふ煩さい人だらう。私を追つて停車場へ行つてゐるんだ。男のくせに見つともない」おかつは自分が直ぐに停車場へ行かなかつたことを喜んで、用心のために表から見えない處へ身を潛めた。

平生の新七の舉動から推して、彼れがあつて狂人見たいに彼女の行方を捜廻ることはおかつには明かに分つてゐたが、今はそれを苦に病むほどに恐ろしくはなかつた。もう私の身體をあなた男の自由にさせるこつちやない。あの人を親切くらはは、私ほどの女が二月あまりもこんな土地で弄び物になつてゐたので、十分過ぎるほどに返禮してゐる。

自分ゆゑにこの田舎の町に一騒ぎの起ることも、むしろいゝ氣持で想像された。そして、大きな騒ぎか小さな騒ぎか、騒ぎの起るのを覺悟してゐると、氣に張りが出来て、人には無理無體と思はれさうな無慕も難なく達了されさうに思はれた。

「老婢さん、お氣の毒でしたわね」と、蹲んで

ゐた暗い處から立上ると、忙しく息を吐いてゐた老婢は、

「何時もお立ちになるんですか。今夜のことぢや御座いますまいね」

「都合で今夜立つかも知れないわ。それについて、あなたにお頼みしたいことがあるんですがね」

おかつは低い聲でさう云つた。そして、お時に硯箱などを借りて急いで手紙を書いて老婢に渡しながら、幸吉を宮部家の代表者として會つて置く必要があることを囁いて言譯をした。

「成るべくお店の人に目立たないやうに、あなたが若旦那に直かに會つて、これを渡して御返事を聞いて来て下さいね」

「はい」

老婢は力のない返事をした。下女として雇はれてゐた間できへ使歩きは大儀だつたのに、わざわざ呼びつけられて可成り遠い處へ使にやられるのは不平であつたが、その大儀さうな風に氣づいたおかつは、

「成るべく急いで行つて頂戴な。そのかはりお禮は十分にしますよ。東京へ行つたら乾度あなたを呼んで上げてよ。…塚本さんとは仕

事が樂ぢやないでせう」と、人情のありさうな口を利いた。

「お禮なぞどちらでもよう御座いますが、東京へは連れて行つて下さいましよ」と、老婢は俄かに悦ばさうな顔をした。

「歩くのが大儀なら近所まで俵に乗つていらつしやいな」と、おかつは無理にいくらかの金を押付けた。そして、老婢が急ぎ足で行くのを見えなくなるまで見送つてゐたが、お時に勧められて、家の者の寢室になつてゐる二階へ上つて休んでゐることにした。すでに敷かれてゐる寢床をわざ／＼片付けられたりするのを、おかつは

氣の毒に思ひながら、新七と親む前に東京のある家のこんな二階である男と出會つてゐたことを遠い昔のこのやうに思出したりしてゐたが、一人になつて薄つぺらな座蒲團にキチンと坐つて待つてゐると、一刻々々が長く待遠しくて堪へられなかつた。

お時は濃茶を入れて来て、お愛想に世間話を持出したが、話が新七の事に觸れるので、おかつは返事をするのに苦んだ。老婢を雇入れたのもお時の世話だつたので、お時の亭主は以前宮部家へ出入りしたこともあつたのだから、おかつは油斷してはゐられなかつた。

「櫻町の旦那はそりや堅いんですからね。新七さんにもお氣の毒で御座いますよ」と、お時は的の外れた同情をしておかつが一人で東京へ歸るやうな破目になつたのを憐むやうな口を利いた。

私もこんな見窄らしい田舎の主婦に氣の毒がられるやうになつたのか知らんと、おかつは探つたい氣持がした。

餘程立つてから戻つて来た老婢は、階子段を上るや否や、先方の返事を傳へる先きに、「姉さん今其處でお宅の旦那様にお會ひしましたよ。私、何も申上げませんでしたがけれど」と、さもおかつの心を吞込んでゐるやうにキョトクしてソツと云つた。

「さう？ 何處へ行つたんでせう」おかつは空呆けてさう云つたが、驚きをかかず譯には行かなかつた。

「お前は何處へ行くとお訊きなすつたから、ちよつとお時の家へとお答へすると、歸りに寄つて行けと仰有いました」

「へえ……」おかつは煩ささうに云つて、「それで櫻町の方はどうだつたの？」と、老婢ののろさを商榷がつて訊ねると、

「若旦那様はお店の火鉢の側で青い顔して俯向

いていらつしやいました。お手紙を差上げると唖驚しなすつて、今夜はおそいから、話があるのなら明日にでもして呉れといふ御返事でした。そして大變慌てていらつしやいました」

「明日にしろつたつて、私はもうこの土地には家がないぢやないかね」おかつは、老婢の所爲でもあるやうに思はず氣色はんで突つかゝつたが、「あなたが出て行つた後で、私もあの家にははられないことに極めてるのよ」と後で顔を和けて云つた。

「こんな穢しい處でもおよろしければお泊んなさいました。私がお時にさう申して置きますから……姉さんもこのまゝ東京へ歸んなすつちや詰らないでせうから、櫻町のお家で道をつけて下さるまではこの家にも泊つて待つていらつしやいな。私もお役に立たなくつても御用があれば何でもいたしますよ」と、老婢は意外にも焚付けるやうに云つた。

「え、有難う」おかつは老婢の心は見え透いてゐながら、何となく心許なくなつてゐる今の場合さう云はれるのは有難かつた。「あなたにはまたお頼みしたいことがあるんですけど、今夜はもう歸つて下さいな。遅くなつたらお家へ悪いでせうから。私もお暇ませうよ」と、座

を立ちかける、

「姉さんは御遠慮なさらないでこちらへお泊んなさい。その方がよろ御座いますよ。姉さんは今夜からお時の家へいらつしやるつて、櫻町の若旦那にさう申上げたいのですから。若旦那にお會ひになつて話がつくまで此處をお動きにならない方がよろしいと思ひますよ……私はおつるさんにも塚本さんの方にも、どなたにもあなたが此方にいらつしやることを話しませんから。東京へお立ちになるまで、安心して何日でも此處にいらつしやいませうよ」

「ぢや、老婢さんは若旦那にいろんなことをお話したのね」

「私の方から申上げた譯ぢや御座いませんけれど、若旦那がお店の角まで私に隨いていらつしていろんなことをお訊きなさいますから……それは姉さんのことばかりお訊きになつたんぢや御座いませんです。實はおつるさんが櫻町の若旦那には大變な執心なので御座いますから」

老婢は自分の餘計なお喋舌を言紛らすためにおつるのことまで持出したが、おかつはおつるなどに對して嫉妬を起すにはあまりに自ら恃むところがあつた。むしろ嘲笑ふやうな氣持で聽

いてゐた。

度胸を据ゑて此處に泊ることに極めて老婢を歸してから、おかつは階下でお時や初対面のお時の亭主を相手に、就眠前の暫らくの時間を過したが、幸吉夫婦の話が出ると、疼いやうな刺戟を感じた。幸吉の妻の平たい肥つた顔が、自分が何處かで見たことがあるやうに明かにおかつの胸に映つた。そして、その女に對して嫉妬の思ひのむら／＼と起るのをどうすることも出来なかつた。……今夜は自分のところへ来る筈の幸吉が、自分の事を忘れてはゐないに極つてゐるのに、氣隠れして、そんな配偶のところは今まで通りに添寝するのを情無く思つてゐた。

卑怯な人、脂肪妻のない人と、おかつは男つてものみんなそんなのか知らんと、勝手に瘦視みながら、直ぐにも達せられさうな望みの容易に達せられないことの概括して、幸吉に對する戀しさは、夜の明けるまでどうしてぢつとしてゐられるかと思はれるほどに燃立つた。

二階へ上つて煎餅蒲團に横はつて枕に就いた時には、表の戸も鎖されて、外の足音にも夜の更けたことが知られた。汽車の音が耳近く聞えてから次第に遠くへ消えてしまふのが、おか

つの心を何となく哀れつぼくさせて涙をさへ

浮べさせた。無理にでもこの戀を遂げなければと覚れてゐる彼女の心もふと鎖められて、かの豚ふとりの老爺のことが思出された。無垢な自分を最初に弄んだ憎い爺さんだけれど、親切なことは親切なのだから、此方から泣きついて助けを乞うたら見殺しにはすりやすまい。「どうせ満足に世が渡られる身ではないし」無理な色戀には諦めをつけて、お爺さんの處へ行つてあの後の身の上話でもして、思ふさま泣いて見ようかと、おかつはふと心弱くなつたりした。涙に濡れた枕紙に顔を押付けて寝苦しい思ひをしてゐる間に知らず／＼眠入つたが、彼女の夢の中に忍込んで来たのは、幸吉でも新七でもなくつて、豚のやうに肥つた頭の柔げた老爺であつた。お爺さんはニコ／＼した顔してやつて来た。

老爺に枕を投げると同時に、おかつは目を醒ました。が、夢の中でいやらしかつた爺さんの舉動は、醒めてからも目の前にちらついて、おかつは寢衣を脱いで振拂きたいやうな氣持がした。眞夜中過ぎになると、俄かに冬が来たやうに、寒い空氣が薄い夜具の隙間から彼女の肌を冷やした。

つた。戸を叩く音と呼起す聲に、明け方の眠りを醒まされたおかつは、自分に關係したこと、誰れかが訪ねて来たのに違ひないと思はれたので、胸を蕪かせながら聞耳を立ててゐた。兩戸の隙間は薄明るくなつてゐた。お時が寢呆けた返事をして、愚圖々々してゐる間に、手早く衣服を着けながら、戸外の音聲に耳を澄ませ

九

一番の汽車に乗る客が外を通つてゐる頃であつた。戸を叩く音と呼起す聲に、明け方の眠りを醒まされたおかつは、自分に關係したこと、誰れかが訪ねて来たのに違ひないと思はれたので、胸を蕪かせながら聞耳を立ててゐた。兩戸の隙間は薄明るくなつてゐた。お時が寢呆けた返事をして、愚圖々々してゐる間に、手早く衣服を着けながら、戸外の音聲に耳を澄ませ

見當がつかなかつた。自分に會ひに来たのぢやないと思直すと、寒いのに早くから起きてゐたつて仕方がないので、再び寢床へ入りかけたが、すると、話聲が切れて、お時が梯子段を上つて来たので、おかつは先きよりも一層はげしく胸騒ぎをさせた。

「宮部さんの御親戚の方が、あなたにお目に掛りたいので入らしたんですが、お通し申してもよろしいでせうか」と、お時は側へ寄つて小聲で云つた。「御親戚の方ですつて？」おかつは氣拔けがしたやうにさう云つて、ちよつと間を置いて、「私、宮部さんの御親戚の方にはお會ひしたくないん

ですから、お断りして下さいな」と、キツバリ言放つた。

「若旦那の叔父さんに當る方なせう。ちよつとでもお會ひになつてお話を極めになつたらいかいでせう」

「いえ、私の方にはお會ひしたくないんですの。お氣の毒ですけど、断つて下さいな」

「さうで御座いますか」

お時は不機嫌な顔をして下りて行つた。おかつは張合がなかつた。寝衣に着替へて寢床へ入つて、日が差すまで、一眠入りするつもりになつてゐたが、階下では朝の支度やら子供泣の聲やらで騒々しくなつた。鐵道馬車の音も聞えだした。ふと壁一重の隣の二階から、拍子木の音に和して南無妙法蓮華經の聲がかしましく聞え正したので、おかつは自棄見たいな朝寢が出来なくなつて、夜具を片付けて階下へ下りて顔を洗つた。化粧道具さへ持つてゐないのが不自由であつたが、自分の荷物を取りに行く階には行かないので、お時の鏡を借りて頭髮だけ梳きつけてゐた。眠不足のためか、いやな夢に悩まされたためか、疲勞が目顔にあらはれてゐるのが、おかつ自身にもよく分つた。

「主婦さん、老婢さんの縁で此方の御厄介にな

つたのですけど、御迷惑なら直ぐにお暇しますよ」と、後から此方を見てゐるお時に云つた。

昨夕は一晚泊のさへ多少氣がひけてゐたのであつたが、最早さういふ些細なことに神經を病むには及ばないと度胸を握りて、自分の力一ぱい幸吉の家に取付いて離れない覺悟を極めて、どうかなるまで此處に寢起をしてみようとした。

「主婦さん、私、櫻町の若旦那の幸吉さんにお目に掛つて、私の顔の立つやうにして頂いて綺麗にお別れすることに約束がしてあるんですからね。幸吉さんの外の方がいらしたら、お断りして下さいね。若しも新七さんが訪ねて來ても私は此方にゐないつて云つて下さいな。お世話になり次手に、それだけは堅くお頼みしますわ」

「承知いたしました」お時は相手の手強い言葉に呆れて、押しして忠告めいた口は利きかねた。

「私のやうな者をかくまつて置いては宮部さんのお家に濟まないと思ひなされるのなら、さう云つて下されば何時でもお暇しますよ」

「姉さんをお泊めしたつて、宮部さんの方で私どもにもお小言を仰有る氣遣ひは御座いませぬよ」

お時が車下してさう云ふので、おかつは思上つて、自分が彼等の目上の者で、些少の金でもやつて彼等を自由に指圖するのが當然なやうに思つたりした。

「新七さんが來たら私は他所へ行つちまつたと云つて下さいな。大事なお願いなのよ」と、おかつは念を押して、お時が一も二もなく命令に従ふのを見て、ひとりで自分の部屋と決つた二階へ上つて身を潛めた。そして、幸吉に宛てて同じやうな呼出しの手紙を書いた。「……明日といふ日は待遠しくてなりません。今日の中に私の身もあなたのお身の上もどうなるか分りませんのですから、一ときも早くお目にかゝれるやうにお願ひいたします。人間はいつ何時じゆ命が切れるか分らないですもの。私は心がせかれてなりません」と、今の今心底から思はれて仕方がないことを書添へたが以前の手紙とは違つて、今度のは上べも底もない露骨な色文みたになつてしまつた。

おかつは躊躇しないで、お時に頼んでその手紙をポストへ入れさせた。一日を待暮らすのは容易ならぬ辛抱の入る課だつたが、おかつの昂奮した心は、退屈する暇のないやうに忙しかつた。新七の屈託してゐる顔や、血眼になつて

搜廻つて、顔なども、彼女の目の前に渦を巻いた。

おつるが訪ねて来たのを、知らないと云つて歸したと、お時は二階へ知らせに来て、「何だか言ひにくう御座んしたけれど」と、諷を吐くことの苦しさを洩らした。

「おつるさんにはなほ更會ひたくなかつたんです。よく斷つて呉れましたわね」

おかつはお時の手柄を褒めそやすやうにさう云つて、おつるの言つた事を訊ねた。新七が外に手頃な相談相手がないから、據なくおつる親子に頼つたことが、おかつにはよく察せられた。

時々窓を開けて富士を眺めたり汽車の煙を眺めたりしたが、午過ぎまで一步も外へは踏出さないでゐたおかつは、お時一人が内職のやうにやつてゐる高賣のあまりに暇過ぎるのに、氣づいて自分が店へ出て看板になつてやらうか、さうしたらもつと要旨するだらうと酔興な空想を起してお時にその考へを洩らして、この商ひのことを訊ねた。

「品物がよく賣れば、商賣は面白いものらしいわね。私もこの土地にゐて何か商賣をはじめようかしら」と云つたりして、價値のあるもの

のなささうな見窄らしい商品棚を覗き見などしてゐたが、鐵道馬車の煽り立てた埃風に包まれて店頭に立つた客は、ふと見ると、勢のない顔した幸吉であつた。

「オヤ入らつしやいまし」と、お時は悦しさうに云つて迎へて、「汚いですけれどもお二階へお上んなすつて」と、おかつに代つて案内した。

お時が無沙汰のお詫などしてゐる間に、おかつは幸吉の落着かない素振や落着かない返事に注意してゐたが、お時に行かれた後で何と云つて口を切つていかと氣迷ひされて、一人でゐた間の決心も鈍つて、明るい光が眩しかつた。

「なにか御用で御座んしたらお呼びなすつて下さいまし」と、お時が座を外した後で、底深い沈黙が二人の間に漲んでゐたが、

「私は緩くりしちやゐられないんだから、あなたの望みだけ早く云つて貰ひませう。あなたが此處にゐなされることは新七にも秘密にしてあるんだが、私に宛ててあゝいふ手紙をたび／＼寄越されちゃ非常に迷惑するんです。親戚の者を代りに來させても會つて貰へないから、私が責任を持つて來にくい所を無理に此方に來たんだから、そのつもりで話をして下さい」

「なぜそんなことを仰るの? ……私の心の中は分つていらつしやるくせに」おかつは相手の角張つた造り文句がいやになつて、笑ひをこぼしながら馴々しく云つて、「此間の唯公園でお目に掛つた時には、大層お怒りなすつたけれど、私はあなたの苦心の中はよく分つてゐますから、そんなに失望はいたしませんでしたの。本當に失望したなら、今まで生きてゐてこんな土地にウロ／＼してはゐませんわ。…でも、よく訪ねて來て下さつたわね。煩さく申上げた甲斐があつたと思つて悦しくつてなりませんの。…早く望みを云へると仰つたつて、かうしてお目に掛ると口へ出してはなんにも云へないんですから勘忍して下さいましな。お互ひに心の中が分つてゐればそれでよろしいぢやありませんか」

おかつの媚びを含んだ眼差しは幸吉を恥かしめた。自分の破滅を恐れたやうに思はず後退りして、「あなたのやうな人こそ毒婦と云ふんだらう」と、諷を震はせて云つた。顔にも血の氣を失つた。「こんなことは自分一人で穩便に始末しようと思つて誰れにも云はないで、昨夕は一晚中考へたくらむんだが、あなたの方で無理強情に私の家庭を亂さうと思つてゐるんですか。

私は家の者や世間に對しても迷惑するから、お時を呼んで立會つて貰つて、自分の潔白を明して置かう」と云つて座を立ちかけた。

おかつは引留めもしないで、夢でも見てゐるやうな目をしてぢつと見上げてゐた。

「お時さんなんかを證人にして、それであなたの潔白が通つて、この先何時までも安心してゐられるんでせうか」と、やがて、彼女でない誰れかが彼女の口を借りて云つてゐるやうな聲で、おかつは氣拔けのした顔して云つた。

立ちかけながら暫らく立上りもしないでゐた幸吉は、「私はもうこれきりあなたに會はないからさう思つてゐて下さい。あなたは無論新七には會ひなされるんだらうが、あなたのためにもなるやうに、相當な人を入れて話をつけることは承知として下さい」と云つたが、その言葉には力がなかつた。手應へがないので梯子段の方へ向ひながら躊躇してゐたが、おかつは夢から醒めたやうな目を向けて、

「それで事が済んだと思つていらつしやるの？ これからも、お家の中が穩かかで日が送れると思つてらつしやるの？ 男の人は卑怯にしてれば世の中が仕合せになるんですかねえ。あなたは何が怖くてビク／＼していらつしやるのか知れ

ないけど、私に會はないと仰有るのなら、私これきりお目に掛りやしません」

「それでああなたはこれからどうするんです？ 此處にゐるんですか」

「私はこれから新七さんの家へ歸りますわ。

私の荷物も置いてあるんですけど。新七さんは私が歸つて行きさへすれば、昨夕からの心配は忘れて生返つたやうに喜ぶに極つてゐますわ。おかつは愚問々々してゐる幸吉を侮蔑した目で見ながら、梯子段から下を覗いて、「主婦さん、若旦那はお歸りになるんですつて」と叫んだ。

幸吉は逃げるやうに出て行つた。

おかつは暗くなつてから、二度と足踏みすまいと思つてゐた新七の假宅へ歸ることにしてゐたが、幸吉が行つた後間もなく、老婢が姿を見せて、せか／＼息を吐きながらその後の新七の事を慌しく知らせた。

「私と姉さんと相談つてお家を出たやうに、若旦那は思つていらつしやるんです。だから私が姉さんの行先を知つてゐるに違ひないつて、私をお責めなさるんですよ。云はなければ私をどんな酷い目にも會はせて白状させると思つていらつしやるんだから怖くつてなりません」

「ぢや、正直にさう云つたらいいぢやないの」と、おかつは事もなげに云つて、「私これから家へ歸るところなんですからね。心配しなくつてもいいの」

老婢は呆氣に取られてゐた。やがて、新七の氣の立つてゐる所へ不用意に歸つて行く危険を説いたりしたが、「大丈夫で、よ」と云つて、おかつは取上げなかつた。見たところは雪と墨とほどに美醜の差別はあつても、氣心は同じい幸吉と新七との顔を彼女は目の先に浮べて見詰めてゐた。

人ごまご

秋の末から春先きまで、眺望のいい貸別荘に住んでゐた高山夫婦は、借受けの期限の切れたのを機会に、一先づ大磯へ引上げることにした。

立際には、家主の狡猾と因業とをまご／＼見せつけられたので、大磯といふ土地全體について不快な感じを起させられた。天気も悪いし、荷物の整理にも豫想以外に手間取るので、一日延ばして、翌朝繰くり出立したいと考へ直した。私たちは、何の氣なしに家主に向つてさう云つて許しを乞うたのであつたが、家主は「それは困ります」と頭から拒絶した。他の借手に契約をしてゐるので、その人が明日にも東京から来るかも知れないから、それまでに家の掃除をしたり、破損したところを修繕したりして置かなければならないと云ふのであつた。明日の一番で立つと云つても愚圖々々云つて聞入れなかつた。

「一日でも期限が延びれば半月分家賃を取るのが土地のきまりだと、此間家主が云つてゐまし

た」と、まつ子が云つた。

さうなると、彼等は一刻もその家にゐるのがいやになつたので、とに角大急ぎで荷づくりをするに於いて、偶然來合せた知合ひの土地の女にも手助けを頼んだ。運送屋の人も雇つて来て、やうやく日暮前に停車場へ荷物を送り出した。後片付けは手傳ひの女に頼んで、彼等は心當てにしてゐる發車時間に遅れぬやうに急いで出掛けてゐると、家主は手傳ひの女を通じて、まつ子に疊の修繕費を要求した。炬燵の火で焼焦がしたところがあるので、辨償しなければならぬまいと、まつ子も思つて居たのであつたが、数日前家主に知らせた時には、「まあ仕方がありません」と、家主自身寛大な口を利いてゐたのであつた。

忙しい間に争つてはゐられないので、高山は要求された一枚分の疊代を拂つたが、あまりに忌々しかつたので、「そのかはり疊替へをしたら、今の疊は手傳ひの人にやつて下さい。それから、井戸の樋だの物干竿だの、私が買った

物は一切あの人がやることにしときますから」と云つて手傳ひの女にも後で持つて行くやうに云つて置いて停車場へ急いだ。

食卓とか、洗ひ物の臺とか、その他大工に頼んでわざ／＼指へさせた嵩張つた物は、打遣つて置くのも惜いし、預け場所を捜す暇もなかつたので、方法のつくまで假りに運送屋に置いて行くことにした。

汽車に乗ると、夫婦は一安心した。「大磯の宿へ泊つて、明日の朝はつくり立つてもいゝんだが、大磯といふ土地はつく／＼いやになつたから、一刻も早く離れた方が氣持がいい。二度とこんな土地へは來ないよ」

高山はさう云つて、細雨のしめやかに降つてゐる窓外を眺めて、滯在中彼れの散歩の目あてになつてゐた小千疊や海岸の松林に別れを告げた。まつ子は身心の疲労でガツクリして殆んど口を利かなかつた。根を据ゑて落着ける家がなくなつて、あちらこちらと轉々としてゐる浮草のやうな生活は、彼女には詰らなく思はれた。二人とも、朝牛乳を飲んだばかりで、午餐も食べてゐないので、汽車に乗ると頻りに空腹を感じだして大船へ來るのを待ちかねて銅飯を買つたが、さて箸を探ると、まつ子の方はむかつい

て十分に腹を満たすことが出来なかつた。

彼等はつまりは、東京へ出て空家捜しをしなればならぬと思つてゐたが、今はとに角まつ子の故郷であるK市へ行つて、彼女の父母の家に寄寓することにしてゐた。彼等は近年其家を旅から旅を渡る際の中継ぎのやうにしてゐて、雑多な書籍や衣類や世帯道具などを預けてゐるので、季節の移りかはりは、衣類の預けかへをして來なければならなかつた。で、まつ子は云ふまでもなく、高山も一年に一度くらゐは其家へ立寄つて、数日あるひは數週を過すのを例としてゐた。其家を根城として、近傍の山河溪谷を見て歩いたり、あるひは温泉に浴したりすることもあつたが、海岸に生れながらあるひはそのためにか海の眺めよりも山の眺めを好んでゐる彼れは、甲州の山地に親むたびに清新な刺戟を受けて、懶い眠りから醒めるやうな氣持がした。輕井澤の高原に住んでゐる間に屢々そんな氣持がした。富士の晩秋の裾野を旅して、精進湖畔の見窄らしい宿に泊つて、雨中の半日、宿の窓から紅葉の山を見詰めてゐた時寂寥の靈氣が周圍の山の底にも、彼自身の心の底にも動いて、颯々然の煩悩も一時擱置されるやうな氣持がした。鹹澤から富士川を下つて

身延の靈域に辿り着いて、獨り御草庵の遺跡に立つて、蕪爛たる樹間から、暮れかゝる空を仰いだ時には、宗教心に乏しい、ことに日蓮宗の如きものを好まない彼れでも、宇宙に動いてゐる尊いものの前に跪きたいやうな氣持がした。(常住の住家である里へ下ると、直ぐに昏亂して、一日の安き心もなく、心に何の光をも見られないのが不斷的の彼れの習ひではあるが)彼れは、半年足らずの固定した大藏の住居に飽果てて、春の光の差す頃となつた山の色を見たくなつて、荷物の整理をかねて、K市へ向ふのを喜んでゐたのであつたが、今度はその外の俗用をも有つてゐた。それは、數年來行儀んでゐたまつ子の弟の縁談が纏つて、三月中には結婚式を擧げるといふ知らせに接してゐたので、彼等夫婦もその席に列しようと思つてゐたのであつた。高山は數年前止むを得ない譯で、妹の結婚のために柄にない世間的の斡旋をして、堅めの盃の席へも披露の席へも、親代りに出て行つたことがあつたが、その他には、幾人かの弟の結婚の時にも、親戚の結婚の時にも、顔を出したことは一度もなかつた。葬式にはたび／＼列席しても婚禮の式場へ行くことを彼れは好まなかつた。しかし、まつ子の弟

の良三には荷物の處分などについてたび／＼面倒を掛けてゐるのであるし、世間並の習慣を何よりも大事に思つてゐる良三の父親は、嗣子の婚禮には、親戚一同の列席を切望してゐるらしくもあつたので、高山の豫定の日程には、良三結婚式出席と、大きく書記されてゐたのであつた。まつ子は先日東京へ日歸りで行つて來た時に、三越へ寄つて祝ひの品を買調へて來た。話の種の少い夫婦の間には、今度の縁談の決るまでのイキサツや、結婚後の青木家の變化の豫想などが屢々話題に上つてゐた。「今度こそあなたとお別れ見たいものだ。これから後は、今までのやうな話らない戯談を書いた手紙の道取りは出来なくなりませう」と、まつ子は感傷的な氣持で書いた葉書を良三に宛てて送つたりした。「氣樂にN市へ遊びに行けるのも、これが最後見たいものだぜ。今度も式の前は何日泊つてゐてもいいが、式が済んだら直ぐにお暇にしなればならぬよ」と、高山が云ふと。「さうですとも。私もこれからは今までのやうに浮かり親の家へ行けなくなりますよ。良三の家になつてしまふのですから」と、まつ子も云つた。

「おれたちの荷物だつて、何時までもあの家へ厄介を掛けとく譯には行くまい。第一書物なんかおれにはどうでもいふんだからな。今度の機会にどうかして始末をつけたいものだ」

「諸道具が邪魔なら、箆笥なんかはおれの方で買つてもいふつて、お父さんは云つてゐるのだけれど、それもちよつと變ね」

「親爺さんがお前のために自分で選擇して買つて呉れた物を、自分の方へ買取るといふのも變だが、おれが邪魔物あつかひして、いくらにでも賣飛ばすといふから、勿體ないと思つてゐるのだらう」

「世帯道具が邪魔だなんて、私の家にはいくらの道具があるものぢやない。大抵の家にはもつといるんな物がありますよ。あなたが女の身になつて、家の用を足してゐたら、道具のない不自由さが分るのだけど」

「おれは昔自炊してたことがあつたが箸と茶碗と土鍋と七輪とくらゐで簡単なものだつた。今でもどこかの山へ入つて自炊して見たいと思ふこともあるよ。こゝらが親に似てゐるのであらうが、おれは煎餅蒲團にくるまつて寝てゐようそんなことは平氣だ。先日もAさんが訪ねた時に、行李の上に鞆を載せて机代りにして

るのを見て、どうも簡単なものですなあと、驚いてゐたつが、おれには紫檀の机なんかは無用の長物だよ」

「そんなことは自慢になりやしないわ。生活は豊富に氣持よくしようと思掛けなければ働く張合ひがないぢやありませんか。文明の利器を利用して、無駄な勞力や費用ははぶいて、氣持よく暮らすのが賢い人のすることだよ」

「それはさうだが、おれはも一度生れかばつて、はじめからやり直さなければ生活を愉快にすることは出来ない。K市の親爺さんなぞには、古い因習だか何だかが、佛か鬼かのやうに頭の中に取り付いてゐるのだが、おれにはそれと違つた佛か魂かが、頭の底に巢をくんでゐるかつら、もうどうしようもないよ」

「形容はどんなにもつけられるでせうけれど、生きてゐる間は今からでも生甲斐のあるやうに暮らさなければ損ですよ。…私だつて、もつと、いろんなことを知りたい。あなただつてまだ老い朽ちた歳ぢやなし、もつと世の中のいろんなことを知らなきや損ぢやありませんか。…私のお父さんはあんな風に、良三なんかのことばかり考へて、二十五にもなつた男が、ちよつと散歩に出るとか、活動寫眞を見に行く

とかするのさへ、心配して、容易に許さないくらゐるのですけど、それが子供のための幸福だか何だか分りやしません。私だつて、女學校を卒業した時に、學校の成績もまあ、悪い方ぢやなかつたから、先生にも勧められるし、自分ももつと學問したいつていふ氣になつて、女子高等師範へ——その時は、女子大學とか英學塾とかいふやうな學校はお友達の中で評判になつてゐなかつたの——入りたいと思つてお母さんに頼んで、お父さんに云つて貰つたことがあつたの。さうすると、お父さんは私を呼寄せて、何といふ不量見たと血相變へて怒つたんです。親に逆ぶつて氣は微塵も持つてゐなかつた時分だから、泣寝入に諦めて、裁縫でも習ふ氣になつただけれど、今になつて考へると、女だつて出来ることなら、學問をした方がよかつたの。今更後悔したつてはじまらなけれど、女も獨立して生活して行けるだけの藝は、身にそなへてゐなければ、安心して世が渡れないとしみじみ思はれることがありますよ。親や兄弟の人情を手頼りにするのは心許ないことだと私も思ふやうになつたんです。良三だつてお嫁さんが出来たり、子供が出来たりすると、次第に人間が變つて來るでせうし、それがまた

本當(ほんとう)なんでせう」

「おれだつて何時(いつ)死ぬるか分らないしね」と、高山(たかやま)は云(い)つた。

子供の無い上に世間(よこしま)の狭(せま)い彼等(かれら)は、ことにまつ子は、日常(じちじょう)心を紛(ま)らすすべがなかつた。そ

して、睡眠時(すいみんじ)以外(いがい)には、生きてゐる人間(にんげん)として絶えず動(うご)いてゐる彼女の心(こころ)は、自然(しぜん)と夫(つま)の一

言(い)一行(いっけい)の上に注(つ)がれた。日に月にさうしてゐるうちに、夫(つま)の人(ひと)となりについて、彼女(かのじよ)自身の解(げ)

釋(しやく)、自ら(みづか)つくやうになつてゐた。世間(よこしま)の人は何(なに)と云(い)つてゐようとも、當人(あたりにん)が自分(じぶん)をどう吹

聴(き)してゐようとも、夫(つま)は手頼(てより)りにならぬ人(ひと)、詰(つ)まらない人(ひと)、お坊(ぼく)つちやんで利己(りこ)的な人(ひと)、何(なに)

しら秘密(ひみつ)を持つてゐる人(ひと)、こんな人(ひと)、あんな人(ひと)と、彼女(かのじよ)の心(こころ)では思(おも)はれるやうになつてゐた。

夫(つま)が以前(いぜん)云(い)つてゐたこととこの頃(ころ)云(い)つたことと矛盾(むじやく)してゐるのに氣(き)がついたり、夫(つま)が知(し)つた

か振(び)りで豫言(よげん)したこと——たとへば、××なんかは將來(しょうらい)見(み)込みのない人間(にんげん)だと、夫(つま)がひとり

極(ごく)めにしてみることが外(ほか)れて、その××なんかは盛(さか)んな人(ひと)氣(き)を取るやうになるのを見(み)たりする

と、夫(つま)の言葉(ことば)にも信用(しんよう)が置(お)けなかつた。夫(つま)がをりく、常識(じょうじき)外(ほか)れの不思議(ふしぎ)な事(こと)をするのも、彼(かれ)女(にょ)に取(と)つては面白(おもしろ)く感(かん)ぜられなかつた。

子供の無い上に世間(よこしま)の狭(せま)い彼等(かれら)の心(こころ)や日(ひ)や耳(みみ)は、五(ご)ひに探偵(たんてい)のやうに相手(あつち)の上(うへ)に注(つ)がれてゐた。

東神奈川(とうかながは)から八王子(やちおうじ)行(ゆ)の汽車(きこ)に乗(の)ると、その薄暗(うすぐら)い粗末(ろまつ)な列車(れっせん)にはスチムが通(とほ)つてゐ

ないので寒(さむ)かつた。二等車(にとうしゃ)には、彼等(かれら)の外(ほか)に色の白(しろ)い官吏風(くわいふう)の男(おとこ)と、古いトンビを着(き)た、髯(ひげ)

は荒(あ)いが、眉(まゆ)の薄(うす)い、青肥(あおこ)りのし、田舎(いんか)くさい老人(らうじん)とが入(い)つて來(き)た。汽車(きこ)が動(うご)きだすと、老人(らうじん)

は誰(たれ)れに云(い)ふともなく、此間(こゝ)中(なか)から寒氣(さむか)がぶり返(かへ)したことを歎息(ためいき)したり、此間(こゝ)中(なか)から寒氣(さむか)がぶりに

旅費(たびひ)の減(く)じないことを訴(うた)へたりしてゐたが、やがて若い男(わかいらい)に向(むか)つて、

「あなたはどこらまでお出(い)でになります」と、駭(おど)々(とと)しく訊(き)ねた。

「八王子(やちおうじ)までです」と、若い男(わかいらい)は簡(かん)單(たん)に答(こた)へた。

「八王子(やちおうじ)も生絲(きし)がいけなくなつたので、町(まち)を通(とほ)つても、一二年(いちにふたねん)前のやうな活氣(かつき)は見(み)えなくなり

ましたね」

「さうでせう」

老人(らうじん)があまりに馴(な)々(とと)しいので、若い男(わかいらい)は顔(かほ)を曇(くも)らせて、「まあさうです」と答(こた)へたが、老人(らうじん)は相手(あつち)の無愛想(ぶあいしょう)なんぞは氣(き)にも留(とど)めない風(ふう)で、

「私は停(とど)まらず今度(こんど)濱(はま)の××會社(かいしゃ)へ奉職(ほうしやく)することになりましたので、今日(けふ)様子(ようす)を見てまゐりました。あなたも御存(ごぞん)じでせうが、櫻木(さくらぎ)町の停留(ていりゅう)所の近く(ちかく)に新築(しんちく)されて、なか／＼立派(りつぱ)な會社(かいしゃ)になりました。百萬(ひやくまん)といふ資本(しやほん)を運轉(うんてん)する人はちがつたものだ。自然(しぜん)と威嚴(いげん)が具(そな)はつてゐますな。

停(とど)まらず昨年(さくねん)××大學(だいがく)を卒業(そつぎやく)してから暫(しばらく)東京(とうきょう)の辯護士(べんごし)の家(いえ)に勤(こ)めてゐましたが、法律(はふり)いぢりはいやだつて當人(あたりにん)が申(まを)しますから、昨年(さくねん)きりで暇(ひま)を貰(もら)つて今度(こんど)のところへ出(い)でることになりました。話を(話を)續(つ)けたが、若い男(わかいらい)はもう返(かへ)事(こと)をもしなくなつた。老人(らうじん)は煙草(えんそう)を出(い)して火(ひ)を點(た)けた。

そして、相手(あつち)欲(ほ)しさに高山(たかやま)の方(かた)へ目(め)を向(む)けて、一(いち)二(に)言(ご)ひ問(と)ひを掛(か)けた。

高山(たかやま)は、煙草(えんそう)を持つて老人(らうじん)の左(ひだり)の指(ゆび)が曲(まが)つて自由(じゆう)な働(はたら)きを缺(か)けてゐるのに目(め)をつけて、その顔付(かほづか)をも思(おも)合(あ)せて、癩病(らいびょう)患者(びやうしや)ぢやないかしらと疑(うたが)ひだした。申譯(まをわけ)だけの受答(うけこた)へをしながらくよく見てゐると、薄明(うすあかり)りに映(うつ)つてゐるその皮膚(ひわ)の色(いろ)は無氣味(むきみ)であつた。

「夜汽車ぢやお困りでせう。それに八王子からは込合つて居りますので、緩くりお休みなさる譯にやまゐりますまい」

高山は身延の深敬病院で見た患者の顔や、沓掛で見た草津行の患者の馬上の姿を、疲れた頭の中に想起した。紅葉のあざやかな山に圍まれた病院の廊下では、むくれた顔のくづれかけたやうな患者が暮しく聲を立てて、互ひに笑ひ戯れてゐた。女の唄ふ聲も洩れてゐた。

「汽車には乗せて貰へないので」と、人の話すのを聞いて、雇ひ馬に乗つてゐる醜い患者を見た時に、高山はその患者に同情するよりも先づ、どんな目に會つても生きらされるだけ生きて行かねばならない人間のいたまじさを感じた。呪ひたいやうな気がした。さうして、患者同士で笑ひ戯れてゐる病院の廊下こそ、人生の眞の姿であるやうに、彼れは感じてゐるのであつた。さまざま人間の平素の饒舌も、病院の廊下の氣晴らしの戯れと同じやうに彼れには思はれてゐた。あれもこれもこの世の中の出来事であるのに關はらず、劇場の舞臺の席よりも、あるひは花嫁花婿の相並んだ美しい姿よりも、瘦馬に跨つた草津行の患者の狀態に、一層多

くの人生の眞實が現はれてゐるやうに、どうかすると、彼れは思つてゐた。

「八王子から先きは景色がよすがすが、この邊は晝間でも朧めの面白い處は御座いません」老人は聞き手の無愛想に頓着しないで、何かしら口を利いてゐたが、町田といふ處で、皆なに挨拶して汽車を下りた。

高山は向う側へ腰を掛けてゐた老人から受ける不快な刺戟から免れたのに一心にして、大きな合財袋に寄掛つて目を閉ぢた。八王子で乗替を待つ間は、待合室のストロブにあたつて、いろ／＼な男女のいろ／＼な話に耳を傾けてゐたが、久振りで異つた社會の話を聞くのは、彼れにも興味があつた。

「僕は此間東京へ行つた歸りに、上野の近所の洋食屋で、ひとりウキスキーを一本飲んで、新宿までの切符を買つて電車に乗つたら、どうにも溜らなくなつて眠込んぢやつて、上野から東京驛の間を三度行つたり来たたりしたよ。車掌に起されて目を開けると、今度こそ失敗らないやうにと、一心になるのだが、どうにも頭が云ふことを聞かない。直ぐに夢になつちまふんでね。しまひには車掌に大小言を喰つちやつた」

楮肥りのした中老の田舎紳士が、さう云つて大笑ひをすると、あたりの人もどつと笑つた。

「寒いと思つたら、雪になつたこと、ある男が云つたので、皆な目がガラス窓の外へ注がれた。

高山は外へ出て闇の中に降頼る雪を見て來て、「二日延びなくつて却つてよかつたよ」と、まつ子に向つて囁いた。因業な家主に對する不快な感じも自ら消失させた。

やがて彼等は、かの酒好きの紳士と一緒に夜行列車に乗つた。窮屈な寝様をしてゐる先客の中へ割り込んだ彼等は、ステームの過度な温かみや人いきれのために、疲れてゐる頭に痛みを覺えるほどであつたが、かの紳士は二三驛を過ぎる間に口を開けたまゝコクリ／＼居睡りしだした。山を登るにつれて雪はますます／＼繁くなつてゐた。をり／＼息抜きに窓を開けると、雪を伴つた冷たい風が吹入つたが、それが高山には氣持がよかつた。

「これで向うへ着きさへすれば、安心して眠られる家があるからいゝやうなもの、こんな寒い時に當てにするところがなかつたら心細いだらうな。どんな窮屈なところでも、屈託しないで熟睡の出来るやうになつたらいいのだが、

おれはどうしても眠れない。高山はだるい欠伸を漏らしながら、まつ子に囁いた。半ば眠りに落ちてゐるまつ子に云つたつて效のないことだつたが、一口でも術ない思ひを口に出して見なければ、退屈の遣り場がなかつた。

彼は窮屈な寝様をしてゐる一人々々の顔を見て夜を過ぎてゐるが、室内の顔の一つから記憶を呼び起されたのか、ふと東京の尾越夫妻へ宛てて音信をすることにして、靴の中から封緘葉書と万年筆とを取り出した。尾越夫婦とは去年の夏輕井澤で知合ひになつたので、年末に東京へ行つた次手に、その家を一度訪ねたこともあつた。

「お二人で大磯へお出でになるといふお話があつたので、心待ちにしてゐましたが、そのうち小生等は土地に飽いて來ましたから、今日大磯を引上げて、今中央線の夜汽車に乗つて居ります。近日また東京へ出掛けますから、その際にはまたお邪魔に上るかも知れません。今雪が降つて居ます。離れ山の麓の我々の小さな家は、今時分凍つてゐるでせうが……高山は不眠の退屈から、感慨を籠めた筆を運ばせかけたが、ふと自制して、少し詳しい轉居の報告だけに書つて、暫ら滯在する筈のK市の住居を明かに書

き添へて、葉書は車掌に頼んだ。

交友の乏しい彼れに取つては、尾越夫婦の如きは珍らしい知人になつてゐるので、輕井澤の生活を記憶から呼び起すたびに、その夫妻のことを思ひ出さないのであるなかつた。秋風が吹き出して、避暑客は日に／＼歸つて行つて、月見草の咲誇つてゐる高原も尾花の野となつた時分に、周囲の燈火の消えた闇の中に、尾越の家の一點の燈火のみが隅かに光つてゐるのを、彼れは懐かしい思ひをして見てゐたのであつた。夫妻の間は睦じさうであつたが、あたり前の夫婦とは思はれないやうなところがあつた。第一、細君が、派手なつくりをしてゐるのに關はず、尾越と釣合はぬくらゐに歳を取過ぎてゐた。二人とも遊惰な生活をしてゐた。

高山は、尾越の單純な話振りや、遊惰であつても惡氣のなさうな人柄を好んでゐるが、それよりも細君の色つぼい素振りに知らず／＼心を牽かれてゐた。

十月に入るまで踏留つてゐた高山夫婦は、その少し前に歸京することになつた尾越夫妻に誘はれて、告別の散歩を共にした。

「どちらが先きに退却するかと思つたら、私の方負けましたね。しかし、あなたもい

加減でお歸りなさい。野中の一軒家は怖いですよ」と、尾越は云つた。

「僕も大分東京が戀しくはなつてゐるんですが、しかし、東京へ行つて見たつて、面白くともなさうですからね」

「私にだつて、東京がいい、事を持つて待つてゐてくれるのぢやありません。むしろ煩さい思ひをしなきゃならぬでせうが、でも、東京はうまい物が食べられるだけでも有難いですね」

「尾越はこの頃食氣づいて、やれピステキが食べたいの、テンブラが食べたいのと食物の事ばかり云つてゐるので御座いますよ」と、細君は横から嘴を入れて、「辛抱氣がなかつたらひどいですからね。最初のうちは、私こんな淋しいところには十日ともゐられないだらうと思つてゐたのですけれど、住んで見ると、結構安心してゐられると、覺悟をいたしましたの。それに尾越ははじめはこんな涼しい空氣のいゝところはないつて、夢中で喜んでゐたくせに、餘程前からこの土地に厭いてしまつたらしんです。男の方が女よりは物に厭きやすいで御座いますかね」

「さあ、どうですかね。……人によつてさま／＼でせうが、大體男の方が物事に執着が深いん

ぢやないでせうか

物事と云つても、高山は男女間の情事を念頭に置いて、さう云つたのであつた。それについて、尾越も細君も頻りにめい／＼の意見を述べた。四人は山腹の四阿に憩うて、暫らく秋晴れの野を見廻した。此處で温かいコーヒーでも飲めたらいいと、誰れかが云つた。

その言葉を思出すとともに、高山は、續けざまの喫煙で荒らされた喉を潤して、だるい頭を力をつけるために、一杯の温かいコーヒーを飲みたくなつた。

夜明け前にK市に着いた時には、雪が可成り積つてゐた。湘南地方とはちがつた底冷たい、殺氣を含んだ風が彼れの頬に觸れた。どちら向いても春は萌してゐなかつた。

市を取圍んだ遠近の山嶽の雪晴の景色は美しくかつた。高山は市の真中にある青木家の二階の窓から、富士を中心にした連山が、碧空の下に鮮明に聳えてゐるのを新奇な思ひを寄せて、朝となく晩となく眺めてゐた。雪解道を荒川土手や古城のあたりまで散歩したりしたが、季節がまだ早いので、山奥を差して足を進めることは

出来なかつた。

婚禮を前に控へた一家の人々の動靜をも彼れは、新奇な思ひを寄せて、日に夜に眺めてゐた。高山自身の婚禮も、彼れが幹旋した妹の婚禮も、極めて手軽に取運ばれたのであるし、従來の冠婚葬祭の世間的の儀式に親しくたづなはつたこととはなかつたのだから、純日本の傳統的慣例や、この地方の習慣を巨細に渡つて守らうとしてゐる今度の婚禮の手順を見てゐると、事々に興味があつた。外目には結婚する當人同士の事はそつちのけにして、儀式のための儀式をしてゐるやうに見えるのが、奇怪不思議にも思はれた。

「結婚の日取りがまだ極まらないのです」と、青木家の老主人は低語しさに云つて、いろいろと應酬をしてゐた。去年の夏仲人の手を経て話が極まると、間もなく相手の田村家へ此方から親子連れで出掛けて、酒が入つたので、その儀式は土地の風習として、結婚の取交し以上に縁談の成立を保證するものであつたが、その後、先方からいろいろな口實の下に、輿入れの期日を延し／＼するので、青木家では心許なく思はれてゐた。氣拙い思ひをさせられるやうな噂も世間の口から時々傳へられもした。

「良三さんは當世の若い者には珍らしい堅いおとなしい方だし、稼業は繁昌するし、あなたはお仕合せですよ」と、親戚の者に云はれると、「いや、嫁を娶つてしまふまでは、安心して眠られませんよ。重い荷物を背負つてるやうでね」と、老主人はこぼした。

「お嫁さんの選好みに苦勞するぐるみ、親として樂みな苦勞ぢやありませんか。此方のお嫁さんなら候補者はいくらでもあるのでせうから」

「傍で思ふやうにやいかないものでさ」老主人は、おれの苦勞はおれでなきや分らないのだと、これほどの一家の重大事を、傍の者が軽く見てゐるのを不平に思つてゐた。四五年以來、時々持込まれる縁談を一々根柢り葉柢り調べて、些少の瑕理をも嫌つて拒絶して、自分で市中を物色して早くから日星をつけてゐた一人にのみ拘泥してゐた彼れは、自分の胸に描かれてゐる良縁に傍から水をかけられるのを好まなかつた。故障が起つたのぢやないかと疑はれるたびに心が萎れた。

當人の良三はすべてを父に任せて冷然と構へてゐた。「お父さんのお好きな××さん」と、浮いた調子で座興に云つて笑ふ者もあつたが、

「お父さんのお好きな××さん」と、浮いた調子で座興に云つて笑ふ者もあつたが、

さういふ時にも、老主人は眞面目な顔をして辯じた。

「おれは自分の道楽で勝手に嫁を極めるのぢやない。容色でも育ちでも、氣風でも、これなら青木家の嫁として、世間へ出して恥かしくない、世帯をまかせて大丈夫だと思へばこそ、お前たちにも相談して、こゝまで話を運んで来たのだ。だからお前たちもつと眞剣になつてくれなきや困るよ。誰れでもいゝ、當人の氣に入つた者なら誰れでも連れて来いといふやうな手輕にや行かないぢやないか。藝者や女郎を引張つて來られても困るからね。相續者は何事も家のためといふことを第一に考へてゐなければならぬのだ」

高山も老主人から屢々かういふことを聞かされて、それが世間の親の普通云ひさうなことだとは思ひながら、固定した家といふものを持つて居ない彼れは、そんなことは身に染みて感ぜられなかつた。

「私は早く世を繼いで、若い時から今までしみじみ湯治や見物の旅をしたことがありませんよ。今度の事の片がついたら、後は若い者にお譲り申して、時候のいゝ時には十日なり二十日なり、緩くり何處かへ行つて見たいと楽しみにし

て居ります」
老主人はたび／＼かう云つたが、ある時良三は、

「何時だつて行けたのぢやありませんか。今までに行けないやうなら、これからだつて駄目ですよ」と苦笑して云放つた。老主人は笑つて黙つてゐた。

若い健やかな良三は、稼業の暇には、せめて市中の散歩でも存分にして見たかつたが、それさへ自由にならなかつた。で、湯に入つて来るのさへ、馬鹿にならない享樂の一つになつてゐた。自分が二十年來住んで来た町でありながら、この市中が何時も珍らしく彼れの日を牽いてゐた。

「今夜は久振りで活動を見て来たんですけど」
と云つても、活動寫眞の見物さへ、快く許されない場合が多かつた。
「若い者はそんなに活動が見たいものかな」と、珈琲店だの活動小屋だのと、餘計な娯樂場の出来るのを、父親は歎息した。

「お父さんの若い時分には、何が楽しみだつたのせう」
良三の言葉には不平が籠つてゐたが、父親は笑つて黙つてゐた。
子供の外出を喜ばない老主人も、自分で終

自家の中に整居してゐると、頭が鬱陶しくなるので、何かに假託けてはちよつとでも外を歩いて来たがつた。暫らく寄寓することになつた高山が、日々の散歩に出掛ける時に、道案内として一緒に出掛けることもあつた。さういふ時には、世事に暗い高山をも、時に取つての相談相手として縁談に關はつた疑問やら意見やらを、隔意なく口に出した。

「祝儀事もこれからの時世では、成るべく質素にした方がいゝでせうな。當人同士の手掛けがよくつて、内輪が圓滿に收まりさへすればいいので、肝心なことはそれ一つですからね。しかし、先方はなかく、手が込んでゐて、手輕に濟みさうぢやありませんよ。仲人も財産家で、私のために一はだ腕いで骨を折つてくれてるんですが、のつちに、今度は青木さんお氣張りなすつてと切込んで來る有様で、此間も先方の交度は大變ですぜといふ觸込なんですよ。：：弱つてしまふ」

「それは構はないぢやありませんか、先方は先方、此方は此方だから」

「それでいゝものでせうか。：：私の方は昔からの家風で、家の中も御存じの通りに昔のままで何處にも飾りつ氣がないんですけど、先方は

一體に派手なやうです：尤も私の家の生活もあんまり控へ目過ぎるやうですから、これからは若い者次第で、少しは人前のいゝやうに華やかにした方がいゝかもしれませぬね」

「さうでせう。財産の餘裕があるのに、強ひて質素に暮らすには及ばないでせう。自分の力で得られるだけの樂みは樂んで今日を愉快に暮らしたいと、當節は誰れでも思つてるやうですから」

「ぢや、まあ、後々までの家の事なんかはどうでもいゝ、自分のしたいことを勝手にすればいいつていふ譯なんですな」

「さう。：しかし、世の中はどう變つて、金持の財産も何時叩潰されるかわからないつていふ時代ですから、自由に費へる間に費つとくのが利口かも知れませぬね。一寸先は闇の世ですからね」

「私どもは無理をしてまで儲けようといふ慾はなかつたものです。だから、お蔭で世間の信用も續いて來たし、親戚にも何かと云ふと、相談相手にされるつていふ風ですが、この先はどうなりますか」
「お嫁さんが來たら、家風も變つて來るでせう。何處の家でも、女房といふものは隠然非常に勢

力を持つてゐるやうですから」と云つて、高山は一二の例を擧げたりしたが、眞面目に聞かれるのをいゝこととして、年長者に向つて世態人情を説くのが、少し氣恥かしくなつたので、「結婚の儀式も儀式だが、一つ新婚旅行をおさせになつちやどうですか？ 人間の一生に一番樂しいことらしいですから。それに一度機會を取外したらあとではしようたつて出來ないことなのですから」と、半ば座興に云ふと、

「え、それはいゝでせう。結婚當時は家の中がごたつきますから、旅行にでも出てくれれば、家の者の手数が掛らなくつて、結句便利かも知れませぬよ」

老主人が家の事、子供の事に、老いの心を碎いてゐるのを感じるにつけて、高山は自分の父親の事を思出した。自分の故郷の家と青木家との氣風の相違をも思比べた。親の側へ置いて親の秘業をそのままに繼がせて、わが子の一舉一動、目録の晴れ曇りにも、言葉のはしはしにも心を配つてゐる一人の父親と、子供の勝手氣儘な行動を大抵は見過して、古い廣い家に獨りて産を守つてゐてあまり苦にも思つてゐない一人の父親との、二つの老いた姿を彼れは心の中に描いて、ぢつとそれを見てゐた。：高山

山は自分の妻を選ぶに當つても、事後承諾と些少の費用を求むる以外に、父親の頭をも手足をも煩はさなかつた。彼れの二三の弟の結婚もさうであつた。一人の妹でさへ自分で夫を選んだ。

「どちらが子供のために幸福なのだらう？ どちらが親自身に取つても幸福なのだらう？」高山は、若し自分が良三の親のやうな親を有つてゐたなら、自分の生涯はどう變つてゐたであらうかと、想像をめぐらしたりしたが、それはとに角、一人の子供もない、將來生む望みもない彼れには、親心といふものは些とも分つてゐなかつた。生物學者の説くところから考慮したり、日常見聞してゐるところから推察したりして、親心の概念は心得てゐても、身に染みて生々と感ずることはどうしても出來なかつた。世界の親々の心は、彼れの力では味ひ知ることの出來ない神祕不可思議の何物かであつた。
「おれの親爺は、いくらやりつ放しであつても、大勢の子供を育てて來たのだから、随分苦勞したのであらうが、親心といふ不思議な物を味ひ知つてゐるのだから、おれよりは幸福だ」
彼れは、故郷の家の奥座敷の炬燵に當つて、

算盤か帳簿かと睨めつくらをしてゐるか何かしてゐる今の親命を想像するにつれて、彼れが幼かつた時分の父親を回想した。……彼れが物覚えのいゝのを自慢してゐたらしい父親は、眞夏の休暇に、日本外史や、十八史略の素讀を授けようとしてゐたが、強ひて學ばせられる彼れに取つては、それが苦役のやうに感ぜられてゐた。満潮時を見計らつて水遊びに出掛ける近所の仲間から誘ひの聲を掛けられたりする時には、自己流の節をつけて朗々と讀立ててゐる父親の聲が憎くなつた。で、時々父が教へたがつてゐる時刻を豫感しては、そつと家を出て遊んで來ることがあつた。……あの時分の父親は、今のおれよりも若かつたのだと思つてゐると、自分の身のまはりが淋しいやうに、高山には思はれた。

支度は略出來上つたから、結納の日取りも式の日取りもそちらで極めて呉れと、先方から仲人を通じて云つて來たので、此方では俄かに勢ひづいて、曆を取出して吉日の穿鑿をはじめた。九星曆の外に日蓮宗の曆をも參考にしたのであつたが、二つの曆の所説が一致してゐな

いので迷はされた。

結納と送るために、京都へ染めにやつた花嫁の式服が着くと、家の者も寄寓者も目を欲てた。式服には孔雀が豹をひろげてゐた。

「成るほどよく染め上げてゐる」と、皆なが云つた。まだ見ぬ女がこの式服を着けた華美な花嫁姿を高山は想像しながら、先方のお好みださうですが、孔雀の模様は奇抜なのでせうね」

「孔雀は虚榮の鳥だといふぢやありませんか」老主人はそれを氣にしてゐるやうだつた。

「孔雀は蛇を喰ふさうですよ。孔雀明王の有ぬ佛畫を見たことがありますが、昔は呪ひをかける時に、僧侶がその前で祈つたのださうです」

兩親や花嫁の式服も、すでに新調されてゐたのであつたが、まつ子の式服は華美な場所に相應しいのがなかつた。持合せの物は着る機會のないうちに、自ら世におくれて見窄らしくなつてゐた。老主婦は頻りにそれを氣にした。先方の親戚は富家ばかりで、誰れとかさんは一萬圓のダイヤの指環を嵌めてゐるなんて、大袈裟な噂を聞いてゐるのに、さういふ人達の中へ、自分の娘をこんな見窄らしい物を着せて交はらせるのは、どうしても忍びられなかつた。

「これでいゝんですよ、どうせ一度お役目に着るきりなんですもの」と、まつ子は諦めてゐるやうに云つた。

「でも、年寄の私たちでさへ新調してゐるんだもの」

「着物のことなどどうでもいい、まつ子は何となく哀れを感じて、「それよりもね、……私は子供はないし、落着くところがないうらな氣がしてならないの。高山に死なれでもしたら、私の行き場所がないんですから、それを思ふと、淋しい野原を一人て歩いてゐるやうな氣がすることがよくあるんです」と、何時になくしみくと母親に訴へた。

「だつて、親もまだ生きてゐるのだし姉弟もあゝるのだから、あなた一人て心細い思ひをしてゐなくてもいゝぢやないか」

さう云つた母親の日は涙が浮んだ。まつ子が何故淋しい野原を歩いてゐるやうに思つてゐるのやら母親にはよく呑込めなかつたが、雨露の凌げるだけの小やかな家でも、まつ子のために建ててやつて置かなければ、安心してこの世を去ることが出来ないやうな氣がして、父親にその話をした。父親は笑つて聞いてゐた。「お父さんは他所から來るお嫁さんのことばか

り心配して、自分の娘のことは考へてくれないから仕様がなかつた。母親はこぼしたりした。皆なが忙しかつた。邪魔物の取片付や汚れ物の洗濯や、新しい調度家財の整理などにまつ

子も母親を助けて働いてゐた。自分たちが旅で汚した衣類の始末にも骨が折れた。仲人をはじめ、人の出入りも多かつた。

用事のないのは高山一人であつた。毎日御馳走になつて、市中から近郊へかけて散歩をして、午睡をして、時々、婚禮の準備を傍観してゐた。此處を立退いたら何處に住居を定めるかと考へて、まつ子などに相談することもあつたが、その場合が來たらどうにかならうと、軽く見做してゐた。

東京の知人の手紙の遺取りは殆んど絶えてゐたが、ある日計らずも、尾越の音信に接した。

「拜啓、小生先月末より郷里福島へ歸省いたし、昨夜上京仕候。お手紙の趣きによれば、最早大磯を御退去相成りし由、御訪問致さざりしを残念に存じ候。小生は一身上の都合により、東京に住みがたく相成り候故、近々家を片付けて郷里へ隠退いたすことに決定いたし居候。他日拜眉の機会も有之候はんが、

をりくくの御音信願上候。輕井澤の閑寂なる風色夢の如く思出され候。奥様へもよろしく」

高山はこの手紙を讀むと、九段の中坂のぼとりにある尾越の今の住居を目に浮べた。小さな家であつたが、二階が一室あるし、日當りがよささうで、借家としては手綺麗に出来てゐた。空家の拂底してゐるこの頃、あのくらゐな家が借りられ、ばいよと、ふと思ひついたので、まつ子にさう話した。

「式の日まではまだ大分間があるから、ちよつと東京へ行つて来よう。尾越の後が借りられるかも知れないし、あれがいけなかつたら外を捜して見てもいいよ」

「こんなゴタ／＼した家にゐたつて詰らないでせうから、明日でも行つて入らつしやい」

「東京で借家がうまく行かなかつたら、思切つて南九州の方へでも行つて見るんだね」
高山は退屈さまして二階で地圖を披いて、未見の土地を空想してゐた。人間や超人の事をいくら考へて見たつて、生れながら持つてゐる自分の智慧はつくに行詰りになつてゐて、新しい心の世界の開展する望みのないことを熟知して來た彼れは、身邊の事がつと自由になつ

たら、未見の土地を巡遊して殘生を送りたいとよく考へてゐた。海外の地圖をも屢々注視してゐた。長崎島原などを經て、薩南の湯の町掛宿に暫らく居を定めて見たいと思つたこともあつたし、日向の茶臼ヶ原の孤兒院を訪ねて見たいと思つたこともあつた。その孤兒院には、少年時代の彼れを愛撫して、基督の道を單純平明な言葉で傳へた昔の田舎牧師が老後の生涯を送つてゐる筈なので、高山はお互ひがこの世に生きてゐる間に、一度その牧師に會ひたいと思つてゐた。

「二十何年先生にも御無沙汰をして世の中を渡つて來ましたが、肝心な事はつまり何も分らないで、分らないじまひで私も一生を終りさうです」と云ひたかつた。昔でさへ頭髮が薄くつて瘦せさらばうてゐたかの牧師の今の有様はどんなであらうか。顔に似合はない鳩のやうな柔和な目付は、高山の記憶に今も懐かしみをもつてハツキリ残つてゐる。…都會から隔絶した

薄袴な小兒の教養などに従事してゐるのこそ、人間としての最も尊い生活であつて、現世と天國とをつなぐ梯子はさういふ處にかゝつてゐるのかも知れないが、それでは彼自身かの牧師等の下に隨いて安んじて働き得られるかと考

へて見ると、考へるさへ可笑しかつた。

(人を殺して心が安んじてゐられないのなら、人を助けたつて、わが心は安んじられないのだ。どちらにしたつて同じことだ)

階下へ下りると、仲人が結納取りかはしのために来てゐた。二三の親戚も座に加はつてゐた。縁起を祝ふための茂久録の用語も字配りも、人々に頭腦を絞らせて六ヶ敷かつた。いくつかの逆物臺に載せられた結納の品々は、翁の面や松に日の出などの模様のある風呂敷を掛けられて、仲人の宰領で持出された。同じ家の中も、不斷の夜とは違つて、奥床しく見られた。仲人が日出度く納めて歸つて來ると、祝ひの膳が並べられた。盃をやり取りしながら枝から枝へとうつて行く世間嘲も、たえず歡喜の色に照つてゐた。

「良三さんも荷が重くなりなすつたから、これからまた一奮發なさるんですね」と、仲人が云ふと、

「これで身が極まると、働くにも張合がつきますよ」と、老主人が應じた。

高山は翌朝東京へ行つた。

飯田町の宿屋に着いて、茶を一杯飲むと直ぐに外へ出た。田舎から出て來るたびに、こんな空氣の濁つた騒々しい處で、よく人は生きてゐられることだと感じるのであるが、それとともに自分の故郷へ歸つたやうな氣持もした。女の美しさも彼れの目を牽いた。筋肉の引締つた、蓄ひ顔した、天眞の生氣が身體に漲つてゐる大磯などの女よりも、虚弱な肉體を脂肪で色取つてゐる都會の女の方が美しく見えるのを如何ともしがたかつた。

神保町あたりまで行つて、醫藥など二三の買物をした後で、中坂の尾越の家を訪ねるつもりで、九段下まで來ると、數人の若い男女が電信柱へ大きな紙を貼りつけてゐた。立留つて見ると、××會主催の婦人問題講演會の廣告であつた。講演者には高山の知人もあつた。知名な社會主義者もまじつてゐた。財終つたところへ、巡查が急ぎ足でやつて來た。

「これは肩けてあるのかね」と訊ねた。

「いえ、別に肩をしてはゐないです」と、髪を長く延した袴を着けた學生らしい男が答へた。

「ぢや、いけない。剃いで下さい」巡查は凜として迫つた。

「剃がなくともいい」と思ひます」

「いけない、剃きたまへ」

二人は顔色を紅らめて二三の押問答をしてゐたが、やがて巡查は警察署までの同行を命じた。先きから後の方に立つてゐた、髪を七分三分に分けて束ねてゐる仲間の女は、微笑しながら、警察署へ行くんだつて。行け」と、小聲で云つて隨つて行つた。

街上のさういふ光景は、高山には珍らしかつたので面白かつた。

尾越は家にゐたが、家を片付けてゐる様子が見えなかつた。

「お移りになるのなら、後を譲つて頂きたいと思つてゐるのですが」と、高山は玄關へ上りながら云ふと、

「實は故郷へ引込む目取りは、まだハッキリ極まつてゐないのですよ」と、尾越は面差さうに云つた。

二階へ通されてから、高山は成るべく東京へ住みたくなつた自分の心持を話して、相手の郷里隱退の理由をも訊ねたが、尾越は暫らくその答へに躊躇してゐた。

「どうも思はしい職業が見つかりませんから、二二年田舎で親爺の手傳ひをしようかなんて思

つてゐるんですが、私の故郷はちよつと歸つて見てもいい處ぢやありませんからね。：：まだ當分は此方で遊んでゐたつて餓死する心配はないのですが、懐手をして暮らすのは社會に對して濟まないやうに思はれますよ」

「しかし、あせらないで、此方でゆつくり方針を立てたらいいぢやありませんか。資産家の御息が田舎でブラ／＼してゐるのは、尙更傍の者の目について遊惰な人間と思はれるでせう」

「いや、今歸つたら、一生懸命に汗を出して働くつもりなのです。遊んで暮らすのも傍で思ふほどに氣樂ぢやありませんからね」

尾越はふと昂奮した口を利いたかと思ふと、相手の言葉も耳に入らぬやうな風で、落着かない目をしてゐた。

これには何か譯があるのであらうと、高山は感付いたので、長座を遠慮して、間もなく暇を告げた。細君の顔を見ないのが物足らなかつたが、この夫婦の間に何か變つたことでも出来てゐるのではないかと危まれたので、細君のことは訊かなかつた。

去年の末に訪ねて来た時には、夫婦は他の中年増と三人で晝間からトランプを取つてゐた。輕井澤で退屈のあまり、はじめてこんな物を手

にしたのだと、細君は言譯をしてゐた。

「大晦日を目の前に控へてゐるのに、お宅は天下泰平ですね」と、高山は冷かして、「僕などは勝負事には興味がありませんよ。どちらが勝つても負けてもいいゝつて思つてゐるから」と、情つてゐるやうに云ふと、

「でも、詰らない遊び事にも負けるつてことはイヤなものですわ。損得の關係がなくなつても、負けるつてことは本當にイヤなものだと、私思つてますの」

「お前が今日は負けてばかりゐるからだらう」と尾越が横から言葉を挟んだ。

「あんなことを。まだはじめたばかりぢやありませんか。先の勝は養勝ですよ。昨夕だつて御覽なさいな。あなたが泣顔して焼芋買ひにいらつしやつたくせに」

「買つて来たのは僕だつたけど、食べたのは誰れだつたらう」

「私かも知れないわね。勝つた方が御馳走になるのは當り前ですもの。細君は無邪氣にさう云つたが、ふと眞面目な顔を高山の方へ向けて、「いゝ歳をして馬鹿なことを云つてるとお思ひになるでせう。：：私どもも遊び次手に今年一杯は怠けて暮らしても、年が明けたら、心を入

替へて一働きしようと思つてゐますのです。尾越は氣に入つた職業がなければいけないで、語學の稽古にでも行つたらいゝだらうつて、私勧めてゐるのですけれど、相變らずの無性者で仕様が御座いませぬの」

「だけど尾越君は語學は一通り修業済みなんでせう。輕井澤で外國人と何か話してゐたぢやありませんか。僕などは日常の挨拶も英語では云へないんですよ」

「毛唐と話したつて詰りませぬね」尾越は氣取つた口調でさう云つて、「私の従弟は横濱のS.N商會へ出て、何時も外人を相手にしてゐるのですが、その従弟は學生時代から語學が特別によく出来て英語の外に佛蘭西語も相當に話せるんです。此間うち四五日横濱へ遊びに行つた間に、家内は従弟の話振りを聞いて非常に感心して、それから、私を鞭撻しだしたので、

語學ばかりが學問ぢやありませんからね」

「學問のことはどうだか、私にはよく分りませんけど、英作さん(従弟)は働さ者ぢやありませんか」と、細君の言葉には棘を帯びてゐた。

「高山の手前、話は外へ轉じた。細君は部屋を出て客あしらひの準備に取掛つた。高山は尾越から芝居や寄席や活動寫眞などの事を

聞かされたが、それ等についての彼の批評や説明はすべて平凡であった。

「暇だから、見に行つてるやうなもの、大分飽いて来ましたよ。それで従弟のゐる商館へ勤めようかと思つて、略話がついてゐたんですが話らないことから中止になつて惜しいことをしました。私は俸給の多少に關はず働いて見たくなつてるので、運が悪くて私の決心の鼻先がいつも挫かれるんです。しかし、來年は京橋のある貿易商の會社へ出られるやうに昨今話がつきかゝつてゐるんです」と、尾越はしみんと云つた。

細君は再び入つて來た時には、服装を變へて顔をも飾つてゐた。

高山は二人の話相手として引留められるのを振切つて、夕餐の餐應は受けなくて、暇を告げたが、同じ夫妻だけの生活であつても、尾越の家には艶があつて、彼れの家のやうに、落莫としてゐないやうに思はれた。

「しかし、夫婦水入らずの生活も、はたの者の云ふほどに氣樂なものぢやないから」と、彼は簡單な批評を下した。

毎日、朝餐を済ますと、直ぐに飯田町の宿を出て、就眠時刻まで何處かで遊び暮らすのを、

彼れは例としてゐた。故郷へ歸つて來たやうな氣持と、獨りで旅へ出てゐるやうな氣持とを一しよに持つて、都會の人臭ひ臭ひに身體を浸して彼方此方を歩いた。一度は講釋場の書席へ行つて、日本人の心にまだこびりついてゐる古風な犧牲身の殘影を見て、彼れの如きものに、心にさへ、日本の國土に育つて來たため、講釋の英雄に感動する分子が微かながらもあるのを感じて、不思議に思つたりした。

知人に會ふたびに訊ねても、空家は絶対になさうなので、結婚式にはまだ間があつたが、兎に角五市へ後戻りすることにした。

ところが、出立の前夜に、尾越から電話が掛つて來た。一度お訪ねしたいのだが、時刻は何時頃がいゝのだらうと云ふのであつた。

「今からお出でになつても構ひません。……ぢや、待つてゐます」と、高山は返事をした。女中に客の案内を頼んで置いて、風呂に入つて來ると、尾越はすでに火鉢の側に坐つて、珍らしくも葉巻を吸つてゐた。

「なかく、寒いですね」高山は襦袍のまゝ火鉢の側に坐つて、「先日のお話のヴェリタスといふ活動寫眞を見ましたよ。活動のうちでは見應へのある方なのでせうね。獨逸物だけあつて

神秘的な理窟が映畫のうちに染徹つてゐるやうなところがありますね。三たび現はれ三たび消え、眞理は最後の勝利を占むと云つて、艱難を押し切つて眞實を守れ、一時の情に負けて諛を吐くなど云ふ全體の趣向は、近代劇や小説の中にはありさうなことで、いかにも西洋人の好きさうな理窟ですね」

「理窟に深みがあるし、指環が壁の中から出たり、漁夫の網にかゝつたりして、指環で筋が運ばれるのも面白いぢやありませんか。西洋人は思付がいゝんですね」

「そりや日本の講談なんかの趣向よりは巧ハ。……だけどあなた方はあんな活動や、イブセンの社會劇などを見て、眞實さへ云へば安心してゐられる氣になるんでせうか。……あの活動だつて、本當は、眞理が最後の勝利を占めたのぢやない、作者が眞理といふ世界の人氣者を持つて來て、お座興に勝たせるやうにしましたのですね。……諛と眞實だつて、眞劍に取組ませたら、どちらが勝つか分つたものぢやない」

「だけど、本で讀んでも、興行物で見ても、眞實が負けたてお仕舞ひになると、いゝ氣持はしないですからね。世の中の實際の事件についてもさういふ氣持がしますよ。あなたはさう思ひ

「それせんか」

「それはさうです：」

高山は、それから先きは、自分の智慧の行詰りで、考へたつて話したつて、果しがないので、さういふ茫漠たる疑ひの世界へ、尾越と一緒に進んで行く氣になれなかつた。

「空家は見つかりませんが、僕は明日あたりK市へ歸らうかと思つてゐるんです。親類の婚禮に出席しなければなりませんから：田舎の結婚式は舊弊で、いやに仰々しいがあなたのお國の方だつてさうでせうね」

「私は田舎の結婚式にしみ／＼出たことはいないので、姉の結婚の時には随分大袈裟だつたやうですが、私は東京にゐて、身體の加減も少し悪い時だつたから出席しなかつたのです」

「あなたの御結婚の時には、此方で式をお挙げになつたのですか」と、高山は何の氣なしに訊ねたが、すると、尾越は苦しきやうな顔をして、

「まあさうです」と、勢のない聲で答へた。そして、何か見てゐるやうに、上目を空間に据ゑてゐるが、やがて、

「私は當分の家で獨り住ひをすることにしました」と云つて、その調を高山が訊返すまでもなく、

「ワイフは私が福島へ歸つてゐる間に無斷で家を出して、行先を私に知らせないやうにしてゐたのです。いくら居所を晦ましたつて、略見當はついてゐたのですが、出て行つたものを追掛ける氣にはなれませんか、私は打ちやつとくつもりにしたのです。今度故郷へ歸るにいついちゃ、ワイフの事が問題になつてゐたのです、——實はまだ正式に籍に入つてゐなかつたので——當人は私の兩親の許しを得る望みはないと堅く信じてゐたやうでした。それが家出の原因と云へば云へますので、遺書にもその點に重きを置いてゐるのですが、本當はさうぢやないのでせう。入籍するしないは我々の考へぢや第二第三の問題なのですからね。……一體私の方でも別れて、當分一人であつた方が、自分のためにいゝんぢやないかと思つたこともたび／＼あつたのでした。世間ぢや妻を娶ると生活に張合ひが出来て、仕事にも身が入ると云つてゐますが、私は例外な人間なのか、ワイフと一緒に住んでからは、生活の進路が止まつてしまつたやうなのですよ。それで、獨りであつたら、何か相當な職業が得られて人並に働けるだらうと思はれてならなかつたのでした。京橋の會社の口も、私が獨身だつたら、俸給は薄くつて

も取逃さないで勤めてゐたのでせうが、ワイフがゐるために此方から駄目にしたのでした。故郷ぢや、はじめのうちは苦情を云つてゐましたが、この頃は黙許の形で、私たちが定職でも出来て眞面目に暮らしてゐたなら、早晚籍も入れて呉れるのでせうが、兩親に會つてその話をした時に、私の方でも黙心に親氣になれなかつたのです。當分アヤフヤにしてゐてもいゝつていふ氣で、ワイフに對する言譯を考へながら歸つて來たのですが、ワイフの奴、見透してゐるやうなのだから遺書を見た時にはちよつと驚きましたよ。だけど、私の心ぢや、二三時間も経たぬうちに今後の方針が定つてしまつたから大丈夫だつたのです」

細君が外に男をこしらへたのもなければ、退屈屈ましに隠れんぼでもやつてるのだらうと思ひながら、高山はお座なりの受答へをして聞いてゐた。

「ワイフは、年末にあなたがいらつしやつた時にトランプの仲間になつてゐた女か、あるひはワイフの弟の家に多分隠れてるか、さうでなくつても、この二人は居所を知つてゐるに極つてると思つてゐましたが、私はわざとこの二人の處へは寄りつかないで、葉書で訊合はすこと

さへ控へてゐたのです。無断で出て行つた女を追掛けると思はれるのはいやですからね。……ところが、高山さん、聞いて下さい。妙なことがあるんですよ。あなたが年末にお會ひになつたあの女が——石本さんと云つてワイフとは子供の時から知合ひだつてことですが——あれが一昨日の午過ぎに、顔色を變へて不意に私んところへやつて来て、奥様は本當にお宅にいらつしやらないのですかと訊ねるのです。白ばくれてゐるんだらうと思つて、

あなたは家の奴のぬいことを誰れにお聞きになりました？ と、私は荒つぱく訊返しました。

それであなたは奥様の今いらつしやる處を御存じのですか。

知つてる筈もないし、強ひて知りたいと思つてもゐません。

御存じないんですつて？ よくそれで平氣でいらつしやるのね。

あの女は呆れたやうに云つて、それから譯を話したのですが、ワイフは使に手紙を持たせてあの女の處へやつて、ある事情でかういふ處へ来て、今九死一生の場合なのだから、××圓くらゐの金を工面して届けるやうにしてくれ、着

換への衣服も何でもいゝから貸してくれつて頼んで来たと云ふのでした。九死一生と云つて何事が起つたのだらうと、私も吃驚しましたが、さう聞くや打違つて置けませんから、あの女と相談して、必要な金と着物を持つて、一緒に出掛けたのです、氣はあせつても大崎まで行くのだから途中が随分手間取りました。大崎の家にワイフの掛り合ひがあることは、これまで聞いたことがないので、電車の中で二人していろいろ考へて見たのですが、新宿で乗換へを待つてゐる間に、あの女が不意に思ひついたやうに、これは自分だけで先きへ行つて様子を見た方がいゝと思はれるから、あなたは大崎の停車場か何處かで待つてゐてくれと、かう云ひだしたのです。九死一生と云ふ場合に安閑と待つてられる筈がないので、私は飽くまでも反對して、一しよに行くと言張つたのですが、

おくめさんは出抜けにあなたに來られちゃ、面目のない思ひをするかも知れませんよ。御主人のお留守に家を出たことを、今は良心が咎めてでせうから、出抜けにあなたをお連れして脅かしたら、却つて穩かに事が濟まないだらうと、心配でなりません。ですから、私を信用なすつてお任せ下さいました。おくめさんのため

にもあなたのおためにも、決して悪いやうにいたしませんと、あの女は、どうしても私を連れて行くまいとするのです。ワイフに後目たいことでもあるのなら、尙更早くその家へ行つて見なければ承知出来ない譯なのですが、

ぢや、直ぐに私があなたを迎へに来るか、便を寄越すから、十分か五分でも待つてゐてくれつて、あの女は、いかにも當惑したやうな顔をして云つて、先方の家の名も番地も、ツキリ教へてくれましたので、私も讓歩して、停車場で少しの間待つてゐることにしたのです。

ところが、十分経つても二十分経つてもあの女からの音信がない。三十分を過ぎると、私はもうぢつとしてゐられなくなつて、慌ててその家を訪ねて行きました。番地が解りにくかつたので、大分手間取りましたが、家のあることは確かにあつたのです。宿屋でもなし料理屋でもなし、新築の普通の家でしたが、ひつそり閑として、人の聲は聞えないのです。入つて聲を掛けると、下女だか主婦だかハツキリしないやうな五十がらみの女が出て來ました。そして、私がかういふ女が今訪ねて來てる筈だから、その人に通じてくれと頼むと、さういふ方は先き入

らしつたけれど、お訪ねになる方が此家にいらつしやらないので、家が間違つたのかも知れないから外を捜して見ると仰有つてみましたと、親切に教へてくれました。

私は仕様事なしにまた停車場へ引返して、暫らく待つてみました。果しがないので、三番町のあの女の家へ急いで行つて見たのですが、無論家へは歸つてみませんでした。置手紙をして一先づ自分の家へ歸りましたが、どうも腑に落ちないので、情氣でしまひました。があの女が詐欺をした譯ではあるまいが、一生に、はじめて出くはした不思議な事なのですから、私は手を組んで一心に考へて見ました。

尾越はこゝでちよつと話を切つて茶を飲んだ。話してゐるうちにも、胸に蟻のりないやうな明るい顔をしてゐるので、高山は氣持よく聞くことが出来た。何よりも細君の素性を詳しく聞きたかつたのであつたが、露骨にそれを訊ねるのは氣おくれがされたので、

「その石本何とかいふ女の人は、どういふ素性の人なのですか？」と訊ねると

「亭主は質屋の通ひ番頭ださうですが大した収入はなささうです。女の方は私のワイフなんかとはちがつて口数の少い落ち着いた女ですが、ワ

イフは誰れよりも懇意にしてるくせに、あんまりよく云つてはゐないのです。弄花が好きで、そのために方々へ不義理なことをしてゐるつて云つたこともありました。……今度の事も、さういふ勝負事に關係してあの女が、私から金を引出すために企んだのぢやないか、事によつたら、私の留守中にワイフまでも勝負事の仲間

に擦込まれてるのぢやないかと、私も疑つて見ました。晩になつてあの女の家を訪ねて見ると、まだ歸つてゐない。いよゝ／＼私を騙したのにちがひないと思つて、復讐の手段を考へてゐたのですが、すると、昨日の夕方になつて、奥様の居所をやらよく捜し當てたから御安心なさい、それについてお話ししたいことがあるから

私の家へ来てくれといふあの女の手紙が速達で来たのです。私は直ぐに支度をして出掛けましたが、此處でいゝ氣になつて訪ねに行つたら、私はまた元の通りの生活を續けなければならんことになるだらうと、一生の岐れ目のやうな氣

がしましたから、道を變へて、他の方へ行つちやつたのです。停車場で待來けを喰はされたかはりに、私は他所へ行つて行方を晦ましてゐるんです。先きもある友人にこの話をすると、今時分細君は君の家へ歸つて待つてゐるだらうつて、

笑ひ事にするのですが、私は思切つて笑顔で歸つて行く氣にやなれないんです。……私は忍耐のない人間なのでせうが、自分のワイフに、鐵馬馬扱ひされて、矢鱈に鐵走さされるやうにされちや溜りませんからね。いくら勝負事が好きだからつて、女つてものは自分の夫までも勝負の道具に使ひたいのですかね」

「あなたのお奥さんはどうだか知りませんが、當世の女はみな負けん氣になつたんです。今に我々は女のお指圖を受けて生きて行くやうになるんでせう」

高山は、世間の男女關係の常例から推して、尾越は今夜にでも細君と妥協するだらうと堅く信じてゐて、彼の強がつてゐる一時の決心などには殆んど價値を置かなかつたが、細君の家出や石本の企みについては、尾越の打明話以外の隠れた真相を知りたかつた。

翌日、高山は前觸れはしないで、K市の青木家へ歸つて行つた。結婚式まではまだ数日の餘裕があつたが、家の人たちは寸暇もないやうに忙しさうであつた。

「東京では面白いことがありましたか」と、老

主人に訊かれると、

「東京の宿屋へ泊ると、夜眠れなくつて困ります」と、高山は答へた。

「商人でも東京の人はやり口が烈しいですね。私などもたまに東京へ行つて見ると驚みがつ

いてい、やうです。しかし、この頃は店員がみな東京へ出たがるので、油断がなりませんよ。先きへ行つてゐるものが、手紙を寄越して啖かしたり、たまに歸つて来ると、洒落た服装なんぞして見せびらかしに来るんだから始末が悪い。

東京へ行つたからつて、取つた給金は右から左へ消えて行くだけで、金を残す者は、十人に一人もないのですが、若い者はみんな腹の中がうはついてゐるから、ちよつとしたらまい口にも直ぐに乗せられてしまふのですな」

「他所の子息の使ひにくいのは當り前でせう」高山は人を使つて仕事をした経験は殆んど無かつたので、空々しい返事をした。

「以前は十年の年季に五年のお禮奉公をするやうな者もあつて、店員が落着いて働いてくれましたが、これからはやりにくくなりますよ、商賣を止めて小さい家で内輪だけの生活をすりや、氣骨が折れなくて至極安穩に日が送れる

ですが、何もしないで遊んで暮らすといふのも、

若い者のためによくないでせうかな」

「さあ、何もしないで生きてゐるのも案外苦しいかも知れませんね。どつちにしてもいゝ事ばかりはないとすると、働けるだけ働いた方がいゝんでせうね」

高山は自分の身についてもふとさう思つた。自分が長い年月やつて来た仕事で、たとひ無意味の事であつたにしろ、手を掛いて茫然として生きてゐるよりは、働き得るかぎりはお一杯働いた方が、まだしもましなのだと思つた。

さう思ひついた時の彼れの氣持は、主人の氣持とさして相違してゐなかつた。家財を譲るべき男子を持つてゐる老主人も、子供の無い彼れも、所有慾や世間慾に支配されて、生命を生きて行かうとするのに差別はなかつた。彼の胸裡に差してゐる光や影は同じやうな色をして同じやうに動いてゐた。相手の話すことが

五ひの耳によく順つた。今日までに店を仕上げた苦心談や今日までに社會的地位を得た苦心談が、二人の口から出て、炬燵の側の一夕の話が榮えた。老主婦の見立てのお茶菓子が持込まれた。側で雜物をしてゐるまつ子も、世の家庭團樂の悅樂をこの晩にこそ感じてゐた、彼女の式服も間に合つてゐた。

まつ子は一日、良三や店員の助けを借りて、預け物の整理をしたが、瀬戸物の食器が壊れてゐるのを見たり、桐の火鉢が紛失してゐるのに氣がついたりすると、住所不定の生活に氣を腐らせた。何時でも容易に運び出されるやうに荷造りをして土藏の一隅へ積重ねてから、土藏の入口で埃を拂ひながら、良三と肩を並べて一休みした。狭い空地に置かれた石燈籠の側には、春らしい光が笑つてゐるやうに描いてゐた。

「もう直きに櫻が咲くんだわね」まつ子は歸つてからも見たことになかつた故郷の澄んだ青空を仰いで、「あなたは今どんな氣持がしてゐて？」

「別に變つたこともないさ」

「だつて、あなたの一生の大切な時ぢやないの」

まつ子は押揃つて見たい氣がしたが、十年前の自分の結婚前後の事を考へると、弟を押揃ふ餘裕のないやうに、ある感じが胸に喰いつた。

夫との關係や夫の身内との關係など、自分の十年の間に経験させられて来たことが、轍をもつて一時に彼女の神經に觸つた。そして、男女の別はあつても、良三も今に知らないではゐられまいと、思はれた。

「お父さんはお嫁さんさへ来れば、家の中がいい事づくめになるやうに云つてゐるけれど、あなただつてこれから、痛い思ひをすることもあ
るわよ」

「そりや、何時までも獨身でゐる方が氣樂だらうね」良三は屋根の端で羽を光らせてゐる小鳥の愉快な運動に目を注いだ。

「あなたは責任が重いんだから、獨身でゐられるものかね。お父さんは家といふことばかり考へてゐるから、どの子供よりも相續者のあなたを重んじてるのだよ」

「家を大切にするのはいいが、少しでも新奇なことをすると、危かしがつて御機嫌が悪いんだ。去年の暮にも、×町の長屋の井戸が壊れたから、この機会に水道を引いたら、借家人も喜ぶし、新奇に井戸を掘るよりや經費もずつと廉くて上ると云つただけど、昔からあつた井戸を潰すのは縁起が悪いと云つてお父さんは聞かないんだ。それで手数を掛けて掘直すと、い
い水が溢れるほどに湧き出したものだから、お父さんはいよ／＼御自慢なささ：萬事がさういふ風なのね」

「しかし、商賣の方はいぢけてゐないで、勢一杯にやつて御覽よ。自分が見込みをつけてはじ

めたことが失敗したつて、それは諦めがつくぢやないの」

「僕の家は不景氣の打撃は受けないからいいやうなもの、商賣も傍で云ふほどにや儲らないものだよ。それに何だのかだのと出鱈が多
つてね」

「さうだらうね。大所には大きな風が吹くつて云ふから」まつ子は戲談のやうに笑ひ／＼云つたが、「でも、あなたは道樂をしないからいゝさ。今度の事には随分無駄なお錢がかゝつてゐるやうだけれど、道樂をして使ふ人のことを思へば何でもないからね」

まつ子自身の昔は云ふまでもないのだが、良三の結婚までの身體も純潔に保たれてゐるのを、彼女は結構な事として考へた。：：若い時は慌しく過ぎてしまふ。良三も二十五歳の今までをこの鬱陶しい家の中で過してしまつた。：：何が結構だか幸福だか分らないやうにも思はれた。

「あなたは丈夫だからいゝね。私はこれつばかり身體を使つても、足腰が挫けるやうに疲れるのよ。昔はさうぢやなかつただけど、一度悪くなつた身體はどうしても元のやうにはならないものよ」

良三なぞに話したつて甲斐がないと思ひながら、ふと起きて来た體内の疹みを口に洩らした。それにつれて、自分と同年輩の近所の知人が病んでゐるといふ噂を思出して、病氣の經過を良三に訊ねてゐると、女のやうな聲をした男の唄が、堀越しに聞えて来た。「春は／＼。春は花咲く向島。オール持つ手に花が散る。ヤートセー／＼」

「どうしました？ 荷物は片付きましたか」と、老主婦がニコ／＼して寄つて来た。

「おちかさんの病氣はどうしても癒らないんですかねえ」と、まつ子が訊くと、

「寢てばかりゐるんだつて。抄々しく癒り目が見えないから、病人も痾が起るんだらうよ。若い人の長患ひは本當に氣の毒だよ」

「若い時を患つて暮らすのは因果ですよ。病氣なら烈しくつても、癒るか癒らないか、早く極りがついた方がいゝのよ。鬮殺しにされるのはいやですすからね」

母子が話をはじめた間に、良三は二人の間を通過して店の方へ行つた。

春雨が音のせぬほどに降つた晩、花嫁持參の

品々が大勢の人夫によつて運び込まれた。通りがかりにふと立留つて傘を傾けて此方を見ては行過ぎる男女の様子が、高山には面白く見られた。路傍に差してゐる潤んだ光の中に現はれて来る一人々々がそれ／＼の目付を店の内へ注いでは、やがて闇の中へ消えた。

昔ながらの座敷の中に、箒箒や夜具戸棚や、いろ／＼な調度が坐るところもないほどに收められて、新しい光を放つた。人夫をねぎらつてから、内輪の祝ひの酒宴が別席で開かれたが、一點の非難も打ちどころのない行届いた支度について、みんなの話が賑つた。價額の評價もされた。幾棒のからいふ箒箒の中へ收められてゐる衣類の美を盡してゐることも豫想されたが、かういふ品物によつて花嫁其者のうちも数層の重みを加へたやうであつた。これぢや花嫁さんも家へ来て、家の中の汚らしいのに驚くかも知れないと、老主人は喜びのうちにも氣遣つたりした。

三十近い下女のおきくは、薄暗い臺所で店員の食事拵へなど、自分の受持の仕事にいそしみながらも、婚禮の話にはかねて耳を留めてゐたが、荷物が来てからは、彼女の神経も緊張した。箒箒や調度を覗き見して驚いたり、平生は

酒の氣のないこの家に、毎日贅澤な料理の匂ひや酒の匂ひのするの心を唆かされた。家の中に自然に漂つてゐる華やかな空氣は、臺所の片隅に舞つてゐる彼女をも包むことを忘れなかつたのであつたが、彼女は店員よりも誰れよりも烈しい刺戟を受けてゐた。結婚といふものが、衣類や調度やさまざまの儀式に装はれないで、結婚その者として、あるがまゝの正體を彼女の目前に鮮かに浮べてゐた。

私だつて相手さへありや、まだ子供一人や二人は生んで見せるよとおきくは先日笑顔をして云つてゐたが、彼女は一度子供を生んだこともあるし、戸籍面でも認められてゐる夫と名のつく男を有つてゐたのであつた。その男はノラクラして當り前の稼ぎをしない上に兇暴なところがあつたので、彼女自身もつひに愛想を盡かして、屢々両親の注意をも受けた擧句に、人を間に立てて、離別の話をつけたのであつた。別れからは、農事をもすれば女中奉公をもした。何處でも働き者として通つて来た。夫と一緒にゐた間は、絶えず生活に苦しんでゐたが、獨り者になつてからは、立派に自分の口を糊した上に、両親へも貢ぐことが出来た。「あの男にはもう會つちやならんぞ」と兩

親に云はれるたびに、「會ふものか、恐ろしい」と答へてゐた。

口ばかりでなくつて、堅く決心して獨り稼ぎの氣樂さを喜んでゐたのだが、日に月に以前の苦しかった記憶が薄らぐにつれて、懐かしい記憶のみが心の中に淀んで来た。ある時ある處で、店の若い人に戯談口を聞いてゐると、戯れに肩を叩かれたことがあつたが、それが何とも云へない、氣持がした。もつと強くどやしてくれよばいと思はれた。別れた夫にどやされた時には、もつと強い手答へがした。その夫にをり／＼打たれた時の、全身に響渡つた痛みが、今は怨み憎みの種になつてゐるか、戀しい懐かしい思出になつてしまつた。

で、年末のある夜、風呂の歸りに、別れた夫に久振りで會つた時にも、さして恐れなかつた。辛氣ない素振りをされないので、取合つて貰へるのが悦しかつた。そして、誘はれるまゝに木賃宿で一泊した。その後、外出の機會をつくつては二三度構曳した。

おきくは周囲に渦巻いてゐる婚禮の潮に自分も浸されて、別れた夫の面影を頻りに思出してゐた。お金が残つても人の家に奉公して人の家で寝起をしてゐるよりは、貧しい思ひをして

も自分の家にあの夫と一しよに住んでゐた方は
はるかに仕合せであるやうに思はれた。貧乏す
るといつても饑ゑるのでもないし凍ゑるのでも
ないのだもの、……

此方の思ひが先方へも通つたのか、別れた夫
はふと店先へ姿を見せた。しかもそれが、結婚
式の當日のことであつた。逢頭垢面の男が、塵
一つ留めてゐない土間へ泥下駄で入つて來るの
を見ると、家の者は眉を擧げた。目出たい席へ
不吉の影が差したやうであつた。

「おきくに會はせて下され。是非話さねばなら
ん大事な用事があるんです」と、その男は頻り
に首を垂れた。

「今日は忙しいんだから困る」と、家の者は一
度は斷つたが、その男は動かかなかつた。若し
無理な拒絶をして、こんな男を怒らせて怨みを
買つたら、今日の大事な日に傷のつくやうな不
愉快なことが起らないとも限らないと、氣遣は
れたので、とに角おきくに云つてその意志にま
かせた。

おきくはニヤ／＼笑ひながら、平然としてそ
の男を自分の部屋へ連れて行つた。男は「お宅
ぢや今夜目出たい式があるんだつてな。おら、
此間の晩お嫁さんの荷が入るのを、電信柱の

蔭に隠れて見とつた。豪勢なもんだな」と云つ
て、部屋の中に手足を伸した。

「私も忙しいんだよ」

「だからセツセと働けが、いや、おらあお前の
邪魔をしに來たんぢやねえ。疲れたから一休み
させて貰ひさへすればいいんだよ」

男はおきくが掛けてくれた夜具にくるまつ
て、いゝ氣持で眠りに就いた。おきくは豪所へ
出てセツセと働いたが、今までよりも仕事に張
合ひがついて來た。そして、酒の残りや肴の残
りを、寝てゐる男の枕許へ運んで行つた。家
の者は混雜に取紛れて、その男のことは忘れて
ゐた。

女たちが化粧や着衣に手間取つてゐる間に、
寄集つた親戚の男同士は、久振り顔を合せ
たものもあるので、お互ひの近狀について賑
かに話合つた。稼業がらで、經濟界の景氣不景
氣や、金儲けのことが、何よりも興味のある問
題になつてゐた。醫師の一人も、最近百日咳の

注射薬の新發見をしたので、××製薬會社から
廣く賣出すことにしたと云つて、その効果や莫
大な年收の豫想の説明をした。

「この土地には實業家が多いやうですが、學問
や新發見をして有名になつた人はあまりないや

うですね」と、高山が訊くと、
「この縣内には本當の實業家も少いんです。多
いのは相場師と賭博者だけです」と醫師は答へ
た。

前觸れによつて一回は店先へ列んで、兩親や
親戚に護られて到着した花嫁を出迎へた。……
下女部屋で着看冷酒に舌鼓を打つて、いゝ氣持
で寝そべつてゐたかの男は、どよめいた家の様
子に耳を留めると、あたりが暗くなつて人もゐ
ないのを幸ひに、障子の隙間から、顔を出し
て、狭長い土間の向うを見やつた。明るい光の
中を立派に着裝つた男女が、ごたくと入つて
來てゐる。おきくも小綺麗なのに着替へて、片
隅に立つて慎しやかに出迎へてゐる。

「金持のすることはちがつたものだ。だけど、
詰りは同じことだ」と呟いて、彼れはまたも安
樂なごろ寝をした。

借老同穴の堅めの盃や、兄弟親戚の盃事
や、兩家の親戚が合せの式が型の如く運んだ後、
自動車で新婦披露の式場へ出掛けた時には、夜
が可成り更けてゐた。

おきくは皆なが出て行つたあとで、下女部屋
へ入つて來た。
「お嫁さんは綺麗だつたらうな」と訊かれると、

「お前にも見せたかつたよ。だけど、花嫁さんは何處で見ても俯向いてゐるから變でねえかの」

「お前だつてもおらと盃事した時にや俯向いとつたでねえか」

「空ふでねえよ」おきくは無邪氣な笑ひを洩らして、「盃事といへば、今夜は何處かの女中さんが二人も三々九度のお酌をしに來てゐたよ」

「おらは手酌で頂戴した。：：もうけえらざるめいな。お蔭様で御馳走になつた」

披露の宴が首尾よく終つた時には、十二時が過ぎてゐた。高山夫妻は、まづ子の姉婚の注意でその家に一泊することになつた。離れの新しい座敷で絹夜具に包まれた。が、高山は夜更けての飲食のために胃腸を惱まされ、場馴れない窮屈な宴席で行儀を守つてゐたために神經を疲らされてゐたので、快く眠れなかつた。まづ子も饗宴の席で絶え間なく受けてゐたいろいろな印象や、青木家の今後の變化に關する想像などによつて刺戟されて、屢々熟睡を妨げられた。

彼岸は過ぎてゐたが山國の夜はまだ寒かつた。高山は屢々夜着を掻合せては腹匍ひになつて煙草を吸つた。氣を紛らす書物は傍にないのだから、雜念の虜になつてゐるより外はなかつた。平生やゝともすると眠づらひ夜を送つてゐる彼れには、今更珍らしいことではないが、深夜に連續して湧上る雜念ほど心を疲らせて、しかも何の役に立たないものはなかつた。：：何時どんな酷い病氣に罹るか、どんな酷い災難に會ふかして、苦しい死穢をするか分らないのだから、どうせ免れがたい死を偶然の運に任せきりにしてゐないで、自分の意志で、最も苦痛の對い方法を探つて死を早めた方がいゝのぢやないか。人間の眞の幸福はつまりこれ一つで、他の種々雑多な幸福は畢竟水の上の泡沫同様なものではないかと、彼れは自分に取つての最大な眞理はそれであると思込むことがあつた。

動脈を切つて滴る血潮を見ながら快く死に就いたといふ「クオ・ヴァチス」の中のペトロニスや、蠟に胸を吸はせて眠るが如くこの世を去つたといふクレオパトラの物語が思出された。さまじく自殺の方法が繪となり文字となつて空中に浮んだ。：：しかし、かういふ類の妄念や雜念は、明日の目になると、彼れの身に

何等の効果をも與へないで、水上の泡沫同様に消えてしまふのであつた。

「君は自殺の出來る人ぢやないよ」と、彼れは若い時分ださへ、ある友人に云はれたことがあつた。情熱が乏しくなつて理性に當んでゐる人には自殺は出來ないと云はれてゐた。

友人の評語の當否は兎に角、彼れは露國の文學に接觸しだしてから、情婦と心中したり、君のために切腹したりするやうな、彼自身の共鳴しがたいやうな自殺とは、根本の異つてゐる自殺がたまに書かれてゐるのを見て、大いに心を動かされた。：：アルツイバーセフ(？)の「死」といふ短篇に書かれてゐる見習士官は、姑息な感情の支配を受けないで、理性のみによつて、自己の探るべき最良の方法は自殺であると確めて、その所説を實行した。

「しかし、小説の筋をそのままに信ずるのは間違つてゐるかも知れない。どんな作者だつて思付を誇張して書くやうだから」

彼れはたび／＼心を動かされた露國の文學からも、實際上の感化は受けることがなくつて今日に至つた。それ等の文學は深夜の妄念雜念を助けるだけの力を彼れの上に揮ふに過ぎなかつた。

「今日歸つて見たら、様子がまるきり變つてゐるだらうな」と、高山は夜が明けてから云つた。

「私たちは明日のうちに立たなきやなりませんよ。お父さんもさうした方がいゝだらうつて云つてゐました。私たちに見られてゐちやお嫁さんが居づらいだらうからつて」と云つて、まつ子は今日から自分の生れた家にも安んじて身を託する譯に行かなくなつたことを、痛切に感じ

た。「東京へ行くと、差當り宿屋住ひをするんだが、厄介だな」

「普通の女で宿屋暮らしなんかしてゐる人は滅多にないでせう」

「安い賣家でもあつたら買つて見るんだね」

先目、青木家と取引のある東京のある商店の店員が、芝に住みいゝ格安な賣家のあることをわざと知らせて呉れてゐるので、夫妻は東京へ行つたら、先づその家を見に行くことに話を極めた。

夫妻は家族と一しよに、炬燵の上でパンと牛乳の朝食を饜ばれただけで、勿々に暇を告げた。青木家ではすでに朝の支度を済まして、珍らしく風呂も沸かされてゐた。老主人や花嫁や、

附添の老女などは、座敷に落着いて、茶器や菓

子皿を前に置いて、話してゐたが、老主婦のみは落着かぬ顔して、何となしに忙しさうにしてゐた。まつ子は昨日までのやうに、勝手にどの室へでも入る譯には行かなくなつたやうに思はれた。

老主人に招かれて、二人は座敷へ入つて話の中に加はつた。花嫁のたね子は、重くるしかつた昨夕の島田を崩して、軽快な束髪にしてゐた。その方がよく似合つた。「昨夕は久振りでグツスリ眠りましたよ。これで重荷を卸して安心しました。花嫁さんとも、今朝家の氣風なんかを、掛値なしにお話したら、異存はない結構だといふことで、私は何よりも喜んでゐますよ。私の家も今までは殺風景でしたが、若い人が一人殖えたので、これからは陽氣になるでせう」

老主人は、風呂の中で思出した古歌を例に引いて、寂しい庭の梅の木にきて留つた鶯を、花嫁に喩へたりして、自分の喜びを、高山夫婦にも配たうとした。

花嫁は憤みながらも、可成り快活に話をした。まつ子は明日の出立の準備をするために、奥の間へ行つて、荷造りには母の手や良三の手を借りた。

「明日はどうしても歸るの？ 何だか急に迫立

てるやうでいけないねえ」と、母親は氣が済まぬやうな顔をして囁いた。

明日の晩には、三ツ目とか云つて花嫁が實家へ歸つて泊つて來るのであるが、その時の慣例や親類廻りの方法などについて、みんなの意見が聞かされた。花嫁も一つ處に坐つてゐるのは苦しかつたので、機會を見ては座を立つて、胸に留つた鬱氣を洩らした。濕つたものを乾かしに物干臺へ行つたまつ子の後を追つて、「姉さん」と、懐つこい聲を掛けたりした。まつ子ははじめさう呼ばれたので、座敷の中で他所々々しい口を利用してゐた時とは違つた親しみを覺えて、「入らつしやいな」と招いた。そして、木遊のはびこつてゐる隣家の中庭を見下ろしたりしながら、打解けた話に耽つて笑ひ聲をも立ててゐるが、その聲を聞きつけた附添の老女は、

「たね子様階下へいらつしやいまし」と、階段の下から呼立てた。

島田は重くつて頭痛がするから、明日の里歸りには束髪に結つて行きたいと、花嫁は望んだが、老女は許さなかつた。明日の朝まつ子の出立の際には是非停車場まで見送つて行きたいといふ望みをも、老女は頑なに斥けた。花嫁さんは首尾よく里歸りを済ますまでは一歩も外へ

出るものではない、氣儘にさういふことをさせては、自分が側に隨いてゐる甲斐がないと云ふのであつた。

翌朝は雪がちらつてゐた。旅立には相應しい日ではなかつたが、高山夫妻は豫定通りに青木家に別れを告げた。何時ものやうに良三は停車場へ見送つて荷物世話などをした。

汽車が出るのと、高山は、平穩無事で終始した他家の婚禮の事などは念頭から遠ざけて、今後の自分の方針を考へたり、窓外の雪景色を眺めたりした。隧道を潛るにつれて雪は薄くなつて、武蔵の平野へ下つた時には、柔かい光があまねく照つてゐた。吉野寺中野あたりに、粗雑な家が建ちかゝつてゐるのが、住宅のない彼等の目を牽いた。

芝の賣家は早速見るとは見たが、問題にするに足らなかつた。彼等は、駿河臺の旅館から赤坂の宿へ、部屋は薄汚くつても閑靜なものを取得にして移轉した。そして、四五日は市中の見物を経て、貸家を捜したり賣家の檢分をしたり、建築會社を訪ねたりした。面倒な思ひまでして家を持つには及ばないといふ腹があるので、

住宅を求めると熱心が足らなかつた。折角知人が知らせて呉れた二三の家をも、缺點を見つけては斥けた。まつ子にしても、汚い小さな不便な家を無理に求めてまで、東京住ひをする必要はないと考へるやうになつてゐた。

「あなたも洋行なさるのなら今のうちです、ね、あんまり歳を取過ぎたら行けなくなるでせう」と、ある日、思詰めたやうに云つた。「そりや行つてもいい。日本の内地を見て歩くよりも異つていゝに違ひない」

高山はかねてボンヤリ心に描いてゐたことを眞面目に考へた。しかし、それにも煩しきばかりが目先にちらつて、熱心が加はつて來なかつた。歐洲人も歐米の文化をも今は崇拜して居ない彼れは長い航海の苦痛を凌ぎ、言語の不自由を忍び、外人に媚び、外人の生活と妥協するの累ひに耐へることを、想像してゐると、自ら決心がひるんだ。歐米人に對等に親しく附合つて貰つたことを、この上もない光榮のやうに感じて、お茶に纏はれたの、どういふ話があつたのと、自分が日本人以上になつたやうに誇りが書いてゐる洋行者の記事文を讀むたびに、無自覺の標本のやうに感じてゐた彼れは、自分も洋行したら、あんな風になるのぢやない

かと思ふと、可笑しかつた。

「自分が外國へ行つたからつて、えらくなる譯ぢやないが、異つた景色や異つた生活を見るのは面白いだらう。パリや倫敦でなくつても、知らない土地なら何處だつていいのだよ。おれは輕便に行ける方法があればベルシャ土耳古見たいな處へ行つて見たい。それも、一年とか二年とか云ふのでなしに、みられさへすりや一生でも住通す氣で行つて見たい」と、彼れはまつ子に向つて述べた。

まつ子は高山の空想が若しも實現される場合には、自分の身の振り方をどうつけていゝかと迷つて、日夜思煩ひだした。弟が結婚した後の實家へは最早安んじて身を寄せる譯に行かなかつた。女一人で東京の下宿屋に住む譯には行かなかつた。高山の故郷へも自分一人だけでは手頼つて行かれなかつた。東京で知人の家に寄寓するとしても、相應しい家が思當らなかつた。

宿の近くの山王臺の櫻が咲きかけた。K市の家族は花時には、用事をかねて東京へ遊びに來るのを毎年の例としてゐるのだが、今年はどうだらうと、まつ子は結婚後の實家の様子を知りたさに、誰れかが出て來るのを心待ちにして、

誘ひの手紙を出したが、それと行違ひに、老主人から高山へ宛てた端書が届いた。

「…御出立後拙宅にも種々の事あり候へども、ゆるく善後策を講じ居候」と、簡筆に書かれてゐるのを見た高山は、ふと心に浮んだことがあつたが、不吉な臆測をするのを躊躇して、

「下女がゐなくなりでもしたのぢやないかな」と軽く見做した。そんなことぐらゐだらうと、まつ子も思つてゐた。

ところが、その次の郵便で、良三からまつ子に宛てた手紙が届いたが、何氣なくそれを讀みかけたまつ子は、中途からおびえた顔して、一字一句を穴のあくほど見詰めた。

「お嫁さんは三ツ日に里歸りをしたつきり戻つて来ないんですつて」と云つて、重苦しい息を吐いた

「どういふ譯で、…高山は、縁談のはじまつてからの長い間の老主人の容易ならぬ心遣ひや、結婚前後の煩瑣な動搖を、親しく耳目に觸れてゐるために、世間に有りがちなこととして見過すことが出来なかつた。

一理由がハッキリ分らないから困ると、手紙に書いてあるのです。里歸りの晩には両親も招

かれて、大變御馳走になつて、田村家の内輪の人もみんな揃つて打解けて話をして来たのに、そのあくる朝になつて、たね子さんが頭痛がすると云つて、寝たつきりで、人に口も利かなくなつたのださうです。一日二日と歸りが延びるの

で、先方の心が分らないから、お父さんも行くし、良三も様子を見に行つただけれど、良三にもお嫁さんを會はさないんですつて。…多分駄目らしいつて良三が書いて来てゐますよ」

一家で可愛がられ過ぎてゐた女が、急に境遇が變つたので神經を痛めたのだらう。おみき（高山の妹）のやうな女でさへ、結婚したあくる朝、家へ騙込んで来て、上へ上らないうちから、聲を出して泣いて、一日寝て居たぢやないか。處女から人の妻になるのは一生の大事件なんだからね。…多分そのうちには収まるだらう。先方の親だつて、あんな立派な支度をして

寄越したものを輕卒に引取るつてことはあるまい」

高山は女の心の底を察してゐるやうに云つた。可憐な處女の心が年を取るにつれて次第に太々しくなることにまで思ひを進めた。

「ただ、お父さんはどんなに心配してゐるで

せう。何よりも先きに世間體を氣にしてゐる人が、世間體の悪い目に會つたのですもの。良三だつて、この結果が圓く行かなかつたら、人間が變つてしまひますよ」

今度の結婚は世間の注意を惹いてゐたために却つて始末が悪いと、二人は話合つてゐた。

引續いて葉書や手紙で情報が来た。どれも良三からまつ子に宛てたものばかりであつた。良三が例になく昂奮して筆を執つた有様が文字の上には現はれてゐた。事件の經過は、高山が樂観してゐるやうなものではないらしかつた。

「仲人を煩はしても要領を得ない。…當人は以前から病氣してゐるので、從來静養をつとめてゐたのだが、結婚のためにまた氣分が悪くなつたやうだから、今後引續いて養生をさせたいと云つてゐる。…云ふことに肺に落ちない點があるから、此方から押して訪ねて行くと、先方の父親は、お宅へは申譯がないと云つて

兩限に涙をためてゐる。…結果は覺悟してゐるが、考へてゐると頭が痛んで来てならぬ。往來の人が變な目付で店の方を覗いて通るので、帳場へ坐つてゐると、曝し物になつてゐるやう

だ」

二人は良三の手紙の文句を種にして敷衍し

て、青木家の昨今の鬱陶しい状態を互ひの心に描いてゐた。まつ子は慰めの手紙をながくと書いて良三へ贈つた。

「あまり立入り過ぎたことは書かない方がいゝぜ。からいふ問題で迂闊に差出たことを云ふと、後で怨まれることがないとも限らないから：男女關係になると、兄弟にだつて遠慮のない意見なぞしない方がいゝよ」と、高山は注意した。他に心を許して交つてゐる人のないまつ子は、良三とだけは何時までも、親しみを續けて、何か事があつた時には力になつて貰つた方がいゝと、高山は彼女のために思つてゐたのであつた。

「私が行つてお嫁さんに會つて、よく事情を訊いたらどうでせう。女同士だから、こちらの出様によつちや、案外打解けた話をするかも知れませんよ」

まつ子は手紙の遣取りだけでは、痒いところへ手の届かぬやうな低悟しさを感じてゐた。そこへ、季節の變り目で、衣類を取りに行く必要もあつたので、急に思立つてK市へ出掛けることにした。

高山は電車の停留場まで一緒に行つた。まつ子に別れた後で、赤坂見附から三宅坂あたりま

で散歩して、満開の櫻を見て、宿の方へ歸りかけたが、ふと、見附の側で、橋田といふ知人に會つた。橋田は高山の故郷の隣村の生れで、時々來訪してゐたので、高山の住宅についても氣をつけてゐたのであつた。

「今お訪ねしたのですよ。お家はまだ極らないのですか。：瀧の川に賣地があるんですけど、一度見にお出でになりませんか。××建築會社の所有で、建築も便利な方法で引受けることになつてゐるのです」と云つて、橋田はポケットから圖面を出して説明した。

高山は氣乗りがしなかつたが、暇な折だつたから、遊びのつもりで見に行くことにして、橋田が案内に立つた。途中で故郷の話が互ひの口から出た。

「さういへば、此間故郷へ歸つた時に、私を乗せた傳夫があなたの噂をしてゐました。あのくらゐな人物になつても、東京で生活を立てるのは六ヶ敷いと見えて、毎月お家から仕送りをしてゐるんだと云つてゐましたよ。まさか、さうぢやあるまいと橋田は訊ねた。

「それは無根の事でもないよ。仕送りで生きてるつていふ譯ではないがね」と、高山は立入つた

話を避けて、「昔僕の名前が出掛つた時分には、僕が月々二百圓づつ故郷へ送つてゐるといふ噂があつたさうだよ。：この頃は僕の借金は故郷の方ぢや形無しだらう」

「私も今度は、死んだ親爺の跡始末をして、持物は一切競賣にして來ましたが、これで私にはもう故郷といふものがなくなつたやうなものです」

「せい／＼していゝだらう。氣樂に食へる道さへありや、君のやうな一人ぼつちの寺住ひがいのかも知れないね」

「しかし三度々々辨當飯を食つて生きてるのはあき／＼しますよ」と云つて、橋田はふと思出したやうに、「財産が殖えれば殖えるで、それだけでは満足出來ない」と見えて、星野の銀助さんが東京へ學問しに來てるさうです」

「へえ、今から學問しよう」と云ふのかね、高山は奇異な感じに打たれた。星野は小學時代の彼の同級生で、首席を占めた時が多かつた。さして學才があつたので、學問が好きなのでもなく、一番になりたいために全力を盡してゐたので、一度その地位から落ちた時には、昂奮して首席の男を目の敵にしてゐた。小學卒業後間もなく結婚して、利殖の途に進んで、浮沈の多

かつた数十年を過ぎて、最近では早くから買占めてゐた朝鮮の土地の價格が暴騰したために、百萬長者になつたと噂されてゐる。

「神田の法律學校へ入つてゐるんださうですが、住所は秘密にして、知人には誰れにも會はないんださうです」

「金が出来たから、代議士にでもなりたくなつたんぢやないかね。今の政黨は頻りに地方の金持を誘惑してゐるらしいから」

「さあ。…しかし銀助さんは甘い口になつて乗りさうな人ぢやありませんからね。…朝鮮などで土地を持つてると、いろんな面倒な法律問題が起つて来るらしいから、辯護士まかせにしとくのが不安心なので、自分で法律を心得て置かうと思つたのぢやないでせうか」

「成程、星野の性分から見ても、あるひはさうかも知れないね。財産家になると、氣骨が折れるものだね」

二人は駒込橋で降りて、程近いところにある賣地を見た。二三軒新築が落成しかけてゐた。地所の賣買などにはまるで經驗のない高山は、ところ／＼に杭を打つて區切つてある地面を見てゐると、こんな土地に莫大な價格があるといふのが不思議でならなかつた。そして、其處に

居合せてゐた肥満した會社員が、鼻聲でこの地所の價値の説明をするのを、空々しい受答へをして聞流してゐた。

「偶然の力で人間は左右されるんだね。僕の故郷の家は、菜園や貸小屋や物干場なんかを合せると、持つてゐる地所が随分廣い。邊鄙な土地だから、地代なんか無代價同様らしいが、あれくらゐな地面を都會の近くに持つてゐたら、莫大なものだね。僕の親戚に手腕がなくなつて、この土地の地主が理財の手腕の傑れてゐた譯ぢやない。偶然なんだよ」と云つて、彼は莫大な價値を持つてゐるといふ空地の彼方此方を踏んで見た。

高山は橋田に別れて、獨りで上野へ出た。埃の立たない静かな日だったので、公園の花を見て、それから馴染の深い江戸川の花を久振りで見に行つた。電車が敷設されてからは其處は燕雑な騒々しい處となつてゐた。

次手だつたから、中坂の斥越の家へ寄つて見たが、斥越は不在であつた。下女に向つて、奥様はゐるのかと訊ねると、且那樣お一人です」と

下女は答へた。
「且那樣は毎日お勤めにでも行つてゐるのですか」
「いかゞですか。毎日外へお出掛けにはなりませうけれど」

高山は自分の今の住所を書置いた。尾越の細君が今まで歸つて來てゐないことが、彼れには不思議であつた。女の方で、尾越のやうな資産家の息子と輕々しく縁を切る筈はないが、男の方でも、あのくらゐな容色のいゝ女とたやすく離別しよう筈はないと思はれてゐた。

彼れは銀座へ出て食事をして宿へ歸つたが、朝から動き通しに動いてゐたため、足が邪魔になるほどに疲れてゐた。身體が羸弱であるといへ、まだ五官が人並の役目をしてゐて、手足も自由に動いて、自分の始末は自分でして出來ないことがないのだからいゝやうなもの、もう幾年かしたら人手を煩はさなければ生きてゐられなくなるであらうが、われも人の如く、老碌するまでも餘生を食つてゐる外はないのかと思ふと、心底に捕捉しがたい不安が感ぜられた。彼れは自分で寢床を延べて、疲れてゐる足を伸した。

が、まだ本當の眠りに落ちないでゐるところへ、電話が掛つて来たので、寢衣のまゝで出て行つた。掛けたのは尾越で、近日下宿へ移轉する筈だから、お望みなら家を譲つてもいいと云ふのであつた。

高山は即答しかねた。一兩日中に御返事すると答へて置いて、「相變らずおひとりなですか」と訊くと、

「え、さうです。ちよつと面倒なこともありましたが、當分一人であることにしました。元の下宿暮らしが私にはいいやうですよ。四五日前から鍛冶橋の側の××會社へ出勤してゐるんです」と、尾越は快活な音聲で答へた。

その音聲は、斷じて胸に惱みをもつてゐる人の聲ではなかつた。歳が若くつて氣性を大人しさうなのに、あの綺麗な細君に未練を残さないで離れることが出来たのかと、高山はいい氣持がした。人といふ人の殆んどすべてが（高山自身もあるひはその一人として）何事につけても執念臭いのを常としてゐる世の中に愛人との離別をさへ造作なくやつてゐる人が假りにも存在してゐると思ふのはいい氣持であつた。

一日花見をしただけで、翌朝からは、當分部屋に閉籠つて、机に向ふことにした。世人を喜

ばせるやうな材料をも手腕をも持つてゐない彼れも、十數年筆の上の修練を積んで來てゐるために、書きかければ何とか辻褄を合せて相當な物が書けないことはなかつたが、心と筆とピツタリ合つたものの書けたことは、これまでに殆んど一度もなかつたと云つていい。そして、自分の技術の不足も感ぜられたが、それよりも、文字によつて自分の心が存分に現はされるものであらうかと疑はれることが多かつた。

「あなたがもつと／＼眞實のことをお書きになると、お作が面白く拜見出來るんですがね」と、批評家でない老夫婦にある時云はれると、

「眞實の事を大切にするのなら、書かないのが一番いいのかも知れませんが」と、彼は答へた。虚偽か眞實か、彼れは三四日の間、机の前

に坐つて筆にのみ親しんで暮らした。そして住宅の事は忘れたやうに、尾越に對する返事さへ出さないでゐたが、すると、頭腦の倦怠した日暮頃に、ふと尾越の來訪に接した。部屋へ入つて來ると、尾越はあたりの穢しくつて陰氣な

のに驚いたやうであつた。高山は仕立卸らしい新しい背廣を着けた珍らしい尾越の洋服姿に、意味あげな目を注ぎながら、

「この頃は家内がゐませんから、まだ御返事をしなかつたのです」と言譯した。

「かういふ處でよく御勉強が出來ますねと云つて、尾越は珍らしい物を見付けたやうに、机の上の書き物に目を注いだ。

「僕の仕事は何處にゐたつて抄取らないのですが、あなたの方はどうですか？」

「二三日前から受持が極つて、正式に出勤してゐるんですが、生活が規則的になつて身體のためにもいいやうです」

「さうでせうね。僕などもある時間から時間までの間を、いやでも働かなければならんやうにした方が却つて自分のためにもいいのぢやないかと思ふこともありませよ」と云つて高山は會社の仕事の有様を訊ねて、「それで、あの石本とかいふ女の事はどうなりました？ いけない魂膽があつたのですか？」

「大した企みはなかつたのでせう。あの金はちやんとワイフの手に渡つてゐるんですから」と云つて、尾越はあの話の續きを話すのが義務であるやうに話したが、言葉に熱心は添はなかつた。

「あれから石本に會ひましたが、あの女は笑ひ事でも濟まして、ワイフを私の家へ收めて元の通りしようとする極めてかゝつてゐるんです。亭主の留

守に勝手に遊び歩くるは、私たちのこれまでの生活から云へば何でもないことなので、書置きまでして出たので、一時の氣紛れに過ぎない」と云へば云はれるので、私も世間の習慣を楯に取つていきり立つて争ふ氣はなくなつてゐたのですが、この先何時までも彼奴と一しよにゐるのぢや、私の精神が死んでしまひさうに思はれますから、今が天の與へた時機だと思つて頑強つて見たのですよ。無論私がいくら頑強つて見たつても、ワイフがツカ／＼歸つて来ようなら、私が負けてへこ垂れてしまふでせうが、彼奴意地つ張りな上に、私を離れたつて廢れ者になる女ぢやないですから、石本の手を経て私に拘つて来るばかりで、直接に私に打突かつて来ないから、私も助かつてゐるんです。：：ワイフには親戚が二三人東京にあるんですが、そんな處へは寄りつかないで、石本の家と同居してるやうです。：：特別に憎み合ふ事情があつた譯ぢやないから、會社の歸り途なんかには、ふつと會つて見ようかつて氣になることがあります、見てゐて下さい、私がワイフに會つて愚圖々々で一しよになるやうだつたら、私といふ人間はそれでもうおしまひなのですから」

「だけど、一度細君を持つたことのある男が、獨身で下宿住ひなんかしてゐられるものでせうか」

「私は女が嫌ひになつて、一生女を絶たうと思つてるんぢやありませんよ。：：それに、私のことだから、外の女にでも關係すると、ぢきにまた捲込まれるかも知れないんですがね」

「臆面のない尾越の言葉に、高山は不快な反感を起した。細君の素性の卑しくないことや恰柄なことや、遊び事にかけても敏捷なことなどを、尾越は平然と話してゐたが、やがて、「御飯前なら、晚餐を附合つて下さいませんか。この頃は晚餐は大抵友人と一しよに食べることにしてゐるんです」と云つて、高山を誘ひ出した。

「尾越は有名な飲食店の所在を可成りよく知つてゐた。そして、一二度来たことがあるといつて、お座敷天ぶらの出来る山王下のある家へ入つて行つた。料理の支度の出来る間に電話で、ある友人を呼び出して、明晩の會食の約束をした。

まつ子が、宿屋では思ふやうに出来ない汚れた物の洗濯をしたり、差迫つて入用な衣服を取

したりして、K市から歸つて来た時には、高山の取掛つてゐる机上の小さな仕事を終りに近づいてゐた。

「もう一日か二日でこれが片付くんだから、それまでは面倒な話は聞かないことにしよう」と云つて、彼は筆の運びの妨げられるのを恐れた。神経の少しの動搖でも直ぐに筆の上に影響響して、書きかけた物を引裂いたり反古にしたリすることが、たび／＼あつたが、彼れのさういふ癖がまつ子には可笑しかつた。そして、時々は、裂かれた物を貼合せたり棄てられた物を拾集めたりして机の上に載せとくこともあつた。そんな廢物も何時か高山の手で利用された。

「私も汽車で疲れて、話をするのも大儀だわ」と云つて、まつ子は横になつて休息したが、こんなない季節に、埃つぽい宿で徒らに日を過してゐるのが、腹立たしいほど詰らなく思はれた。

「あなたが早く方針を極めなければ、私の方針も極りませんよ」まつ子は焦躁の感じに堪へられなくつて口走つた。今度見て来た實家の内情よりも、自分たちの境涯が一層痛切に胸に迫つて来たのであつた。

「まあ、もう少し待つてゐる」

高山は、今の仕事が終わらへしたら、自分の身の處分について、いゝ考へが浮んで来さうに思はれてゐた。(自分が工夫して書いてゐる指事から、却つて反動的に刺戟を受けて、鈍つてゐる心が磨かれて、自分の實生活について、いゝ分別が出て来さうに思はれてゐた)

いよゝ筆を擱いて一息吐く間もなく、意外にも青木家の老主人が訪ねて来た。顔や態度に心の屈託が少しも現はれてゐなかつたので、高山もさしていたゞしい思ひをしないで、その後の経過を訊ねることが出来た。

「とに角親類廻りだけはさせて、祝つて呉れた家へも返禮をすましたから一安心です。身體が悪いと云ふのだから、先方の氣儘にさせて、當分養生をさせることにして置きました」と、老主人は答へた。

「しかし、急に身體が悪くなつたつていふのも變ですな」

「私の方でも、はじめのうちは先方の仕打がいにも誠意がないと思つてゐましたが、先方の両親の腹が多分分つて見ると、強いことは云へなくならずよ」

機嫌よく實家へ行つた花嫁が、歸つて来るべき時に歸つて来ないので青木家の人々は寢耳に

水のやうに驚いた。口ではあゝ云つてゐたものの、家の中が穢しくて舊式なのが、若い女の氣に入らなかつたのであらうと、老主人はかねて氣遣つてゐたことを思寄せて、獨り極めにした。仲人が先方の意を通じて来るのも空々しかつたし、譯を糺しに良三を先方へやつても、當人には會はれなかつた。花嫁持參の華美な調度を絶えず見せつけられながら、親子で善後の方法を講じてゐるのは苦しかつたが、何かにつけて出入する親戚や知人に返答のしようのないのが尙更苦しかつた。老主人はかつて経験しなかつた世間の狭い思ひに惱まされなければならなかつた。

「いつそ、道具を一切送返した方が綺麗サツパリになつていゝかも知れないのだが」と、老主人は歎息してその氣になつたが、此處まで運んで来た結婚の道筋や、そのために消費した労力や金の事を考へると、纏められるものなら平穩に收めたかつた。

「どうせいけないのなら、早く見切をつけた方がいゝぢやありませんか。長引かすだけ此方が馬鹿を見るんですからね」と、親戚の一人で冷靜な差出口を利くものもあつた。鬱陶しい日が何日か續いた後、先方の父親が

訪ねて来た時には、老主人もわれ知らず、昂奮した。

「あなたの仰有ることに誠意がない。仲人からいろゝ承つてはゐますが、どれがあなたの本心やら分らないのだから困るぢやありませんか。お預りしる物を何時お引取りになつてもいゝやうに、私の方では覺悟はして居ります」

「誠意がないとお腹立ちになつても、私の方では一言も御座いません。自分の注意が行届かなかつたことをお詫びする外はないのですが」と云つて、田村の老人は目を伏せたが、一二滴の雫が膝の上に落ちた。「しかし、青木さん、私は一人の娘を戲談に結婚させたのぢやないですから、私の心もお察しを願ひたい。長い目で見てゐて下さればお分りになることですが、此方との御縁に不平のあらう筈がないぢやありませんか」

「それでどうなさるおつもりなんです」老主人は相手の涙を見ると、強いことは云はれなかつた。

「何しろ身體が弱いのですから、閑静な處へやつてみたり養生させたいと思つてゐますのです。子供の持つてゐる壽命を見ずゝ縮めさせ

るの、私も親として忍ばれませんが、申上げにくいことも申上げる次第なのです。世間體の悪いことも、萬々承知しては居りますが、子供の壽命には替へられませんか

田村の老人は、一二年前からの娘の健康状態について話して、そのために此方との縁談を喜びながらも延ばし／＼して來たことを打明け

た。さう云はれて見ると、老主人は誰れを相手に争ふことも、憤ることも出来なかつた。せめて重なる家へだけでも花嫁に顔出しして貰つて、あとは向うまかせにする外に、執るべき手段はなかつた。

老主人の語振が概括的なので、高山はこまかい陰影を知ることが出来なかつた。かういふ場合の處置について意見を訊かれても、確信のある返答することが出来なかつた。

老主人が用足しに出でゐる間に、まづ子は高山に向つて、

「私が行つてゐる時に、たね子さんは一度お父さんに連れられて話に來ましたよ。その時良三に、お腹の中をよく打明けて話したのでせう。

……そのまゝ、落着くのかと思つたら、お父さんが急立てで連れて歸つたんですがね。念紗に

櫻の花を散らした衣服を着て帯を高々と結んだ花嫁さんが、店員が着掛けた薄緑の派手な模様をついた雨傘を持つて店先を出て行つた時は、誰れか目にも綺麗な花嫁さんに見えましたよ。良三には、尙更さう思はれたのちがひありませんよ。……だからこれからはお父さんの一存では行けなくなるでせう。良三も此間までの良三とは違ひますからね」

まづ子は田村の老人のやうな父親をもつた花嫁の心強さに思及んで、「世間體よりも娘の生命を大事にするんですもの」と、ある感じを籠めて云つた。

その夜、高山は老主人を誘つて、有樂座の名人會へ出掛けた。寺子屋を語つた呂昇の聲はまだ昔ながらの艶を有つてゐた。演奏には多少の興味をもつてゐる老人は、久振りで聴く名手の音曲に感歎しながらも、此間うち心勞が出て來たやうに、屢々目を閉ぢては假睡の寢息を洩らした。一仕事終つた後で心の弛んでゐる高山も、呂昇の聲に誘はれて、をり／＼首を垂れては昏睡の夢心地になりかけた。浮瑠璃の中の喜怒哀樂の聲々が、遠い浮世の騒ぎのやうに幽かに彼れの耳に響いた。そして、

“Anywhere, anywhere, out of the world”

いつた誰れかの聲が、彼れの力のない心の底で聞かれた。

いろはおくりの半ば頃にふと目を開いた二人は、座を立つて歸りを急いだが、その夜は、古人が美しと見た臘月が春の都會の空を照らしてゐた。

宿へ歸つて、狭い部屋に三人が枕を並べて寢床に就く前に、
「私の家も當分二階がみんな空いて居りますから、御都合で何時でもいらつしやい」と、老主人は云つた。

生まざりしならば

牛島夫妻は、芝の家を出ると直ぐに、小田原へ電報を打つて置いて、銀座でビスケットや餡パンや牛肉の罐詰や甘栗や、それに繪本だの玩具だのをドツサリ買込んで、豫定の時刻に新橋から汽車に乗つた。四五日續いた酷寒のあとで、今日は急に春になつたやうに温かつたので、重ね着した肌は汗ばんで、スチームで温められた車室にちつとしてゐるのが氣持が悪いので、あらわであつた。おそではセルのコートを脱いで地味な大島の羽織をも脱いだ。成るべく氣に留めないやうにと心掛けてゐるのに關はらず、汽車に乗るたびに、人々の風俗が目についてならないのであつたが、今日は土曜日で、箱根へでも行くらしい客と、丸詰に結つた藝者とが彼女の眞向ひに乗合せてゐたので、ことに無關心ではゐられなくなつた。さほどの容色ではないが、歳が若くつて身装がいゝから美しく見られると思はれるにつけて、自分が浮世を棄てた氣で身じまひをかまはなくなつたことが願みかられた。いやに取澄ましてゐるその女の目が絶えず

此方へ注がれてゐるらしいのが次第に煩さく思はれた。はれだした。「なんだい、鼻の下の長い緒つ面の、口の中の臭さうな男にねだつて、たまたまに出をするのに、企滿家の奥様にでもなつた氣でゐるから、チャンチャラ可笑しい」と、反抗的な氣持にさへなつた。「かう温かいと小田原は梅が咲いてるだらう」と、夫の長吉が窓外の春めいた景色を眺めて云つたが、おそでは返事をしなかつた。横濱から乗つた客の中にも、藝者連れの一組がまじつてゐた。この方は大勢で、誰れも様子ぶらないで、悪巫山戯をし合つては騒ぎだした。おそでは眞向ひの藝者によつて、焦立たしい思ひをさせられてゐたのを忘れて、新たな客の騒ぎを見ては、自分もその仲間に加はつてゐるやうな思ひをして笑つた。停車場で買ったサンドキツチや蜜柑なども、駄洒落を言ひ合つてゐるに戯れたながら食べてゐるのを見ると、いかにも旨さうに思はれた。男の一人が甘納豆を手玉に取つて、口を空へ向けてその一粒々々を巧

みに受けては自慢すると、他の男も藝者どももその眞似をした。若い藝者が紙摺をつくつてその男の襟に挿むのを見ると、おそでは自分たちが昔してゐた悪戯を思出して可笑しくなつた。一人の男が縁起結びにした紙を老妓に貰つて、それを額に載せて顔を仰向けにして、額の紙を鼻の下まで下り落して、突出した唇で受留めると、他の男も女も熱心にその藝當を眞似た。老いたる顔の長い男は、目をパチクリさせて紙を江らせたが、「おれは長つ面だから前途遠だ」と云ふと、おそでもみんなと一しよに聲を出して笑つた。「馬鹿なことをしてると、長吉は小聲で云つて、年甲斐もない老人の所行を苦々しく思つてゐるが、

「あんな人、氣さくでいゝぢやないの」と、おそでは云つた。この頃は次第に氣六かしくなつて來た夫も、昔はあんな馬鹿遊びをして目を暮らしたこともあつたのだと、昔を懐かしがつてゐるが、

「倭一は停車場へ迎へに來てゐるだらうかと、夫が話掛けると、周囲の騒ぎは他所事となつてしまつて、心は倭一の上へのみ集まつた。

「氣分が悪くさへなければ迎へに出てゐます

さ。上田さんにもこの前さう云つてあるんだから、楽しみにして出掛けてでせうよ。あの子の氣が向いたら明日は自動車で箱根へ遊びに行かうぢやありませんか。あの綺麗な湖水を一度見せてやりたいと思つてゐますの。此度喜ばますよ。湖水なんてまだ見たことないんでせうから」

「お前は時々妙なことを云ふね」と、長吉は柔和な切れの長い目に微笑を浮べて、「俊一が湖水を見たことがあるかないか、誰れよりもお前が一番よく知つてる筈ぢやないか」

「本當にさうでしたわね。上田さんが私たちに祕密で俊一を箱根なんぞへ連れて行きやまし、外にあの子をかまつて呉れる者はないんですから」と、おそでは自分と夫との外には、世界中で、あの羸弱い一人子の手頼りになるものは一人も半人もないことを、今更のやうに思ひ詰めながら、「でも、私、時々はかう思ふんですよ。……あなたは笑ひなされるかも知れないけれど。……俊一は私たちが氣がつかない間に、いろ／＼な變つた事を見たり聞いたりしてゐるんぢやないかと思はれるんです。あの子は突拍子もないことを云ふつて、あなたは笑ひなされるけれど、俊一にはさういふことを云ふ譯が

あるのかも知れませんが。私たちに分らないからつて、一概に笑つて済ましちやいけないでせう。……上田さんの不慮の事だつて、なか／＼よく知つてゐるんですもの。學校へ行けないから、讀書は十分に出来ないけど、智慧は人一倍にあるんです。あなたは小さいものだ、誰れでも見くびつていらつしやるからいけないの」

「智慧はどうでもいいから、身體がもつと丈夫になつて呉れ、ばい、んだがね」

「それは、身體だつて丈夫になりますさ。身體がよくなならないのなら、なんであの子一人を小田原なんぞへ打ちやらかして置けるものですか。五年しか壽命のない子は、何處にゐても五年しか生きられないと極つたなら、私は一日だつて、あの子を私の側から手放しすりやしませんよ」

「それはおれだつてさうさ」

長吉も今日は、今までに例のないほどに俊一の身の上を案じてゐて、それに關聯した自分たち夫婦の將來についてもおそでよりはもつと深刻に思ひ悩んでゐたので、黙つて獨りで考へてゐるのは堪へがたかつたが、俊一の事に深入りした話を觸れると、今日はおそでが人前をも憚らないで、非常識なことを云つたり、

泣聲をしたりする恐れがあるので、蟲を殺して彼女に逆はないやうにして、わざとニコ／＼したりしてゐた。

おそでは例の藝者連れの一組の方へまた目を注いだ。そちらでは魔法陣やボクツトウキスキーが取出されて、酒盛をはじめられてゐた。さつき泣きだしさうにしてゐたのに、もうあんなものを面白がつて見てゐると、長吉は妻の氣まぐれを淺聞しく思つたが、その方が昨夕のやうな狂態を見せられるよりは無事でよかつた。小田原通ひも既に一年あまりになるのであつたが、彼れは今度ほど暗い氣持で汽車に乗つたことはなかつた。部屋借りたぞして俊一に不自由な思ひをさせるのが痛々しさに、無理な工面をして、小さいながらも去年の夏に別荘を建ててからは、月に二三度夫婦連れで俊一を見舞に行くのは何よりも樂みになつてゐて、

「あの子のためにならどんな苦勞でも厭はない。衣服などどんな流行おくれの物を着てゐてもいい。たとひ借金に責められても、あの子だけは出来る限りの養澤をさせてやりたい」と、夫婦は心をつにして話合つてゐたくらゐであつたが、今日は別荘を建てたことをも長吉は後悔してゐた。自分が死んだあとまで俊一が生殘

つてゐたなら、どんなに悲惨であらうかと思ふと身の毛も竦立つやうで、いづそ今のうちに、自分たちに看護されながら穩かな往生を遂げて呉れればいと、かつて思ひもせまなかつたことを望んだりしてゐた。

國府津あたりまで來ると、俊一が出迎へて來てゐるかどうかと、二人は頻りに氣にしだした。が、小田原へ着いて見ると、看護婦の上田も來てゐなかつた。

「今日は加減が悪いのかしら」と、おそでは心淋しくなつた。

「電報がおくれたのかも知れないね」と、長吉は氣休めを云つた。雑沓してゐる電車に乗るよりも今日は歩いて行かうと云つて、土産物を兩手に提げて停車場を出た。そして、電車には乗れない俊一が、歩くか、俥に乗るかして此方へ來かゝつてはゐないかと、それを待設けながら向うへ目をつけてゐた。

おそでは藝者連れの一組を乗せた自動車、自分の側を威勢よく行過ぎるのを見送りながら、ちよつと眉を擡めた。

「あなたたまには、あんな風に陽氣に遊びたいと思ひなさない？」

「そんなことを思つたつて爲様がないぢやないか。いつになつても餘分な金は出來やしないのに」

「お金のあんなしに關はらないでさ。あなたは全くあゝいふ氣持になれなくなつたのかしら。人間の性分も歳を取ると變つちまふことがあるんですかね」

「おれは別段性質が變つたやうにも思はれないがな。變つたのは眞付ぐらゐなものだ」

「顔の變つたのは私ですよ。女は若くなくちや駄目ね。私たちの前にゐた丸髷に結つた藝者は若いから髷があつて綺麗だつたわね。あなただつて始終横目を使つて見てゐたぢやないの」

「何だ、馬鹿な。前にゐる女を見るのに横目を使つてどうするんだい」

長吉は苦笑した。彼れは若い時分の不身持のむくい、生れながらに病毒を宿してゐる俊一を生んだことを、この頃は果しなく悔いとともに、さういふ因果な子を自分のために生んだ田舎藝者の小千代に對して、やゝもすると憎惡の念を抱くやうにさへなつてゐたが、小千代ばかりではない、藝者といふすべての藝者を詛ふやうな氣持にさへなつてゐた。藝者が出る宴會をば成るべく避けるやうにして、たまにさ

ういふ處へ行つても不快な感じに苦しむのを例としてゐるほどで、さつきも、汽車の中でいゝるんな藝者連れの客と乗合せて、自分の愚な昔を見せられるやうなのに惱んでゐたのであつた。

おそでは、夫が若い美しい女を見て、以前のやうに心を動かさなくなつたらしいのが、本當だとして、喜ぶよりも、男としての衰へとしてむしろ物足らなく思ふのであつたが、さうして氣取つて上べだけ裝つてゐるのだと思はれて小憎らしかつた。

「でもあの藝者はちよつといふ女ね。あなただつてさう思ふでせう。高慢ちきなところがあるからいやだけど、驕いでた藝者とはまるで人柄がちがふぢやないの」

「それはさうだ……」長吉は、おそでが何時になつても、藝者といふ者を女の中の花でもあるやうに思極めてゐるのを卑んだが、自分が骨の髄までも藝者ぎらひになつてゐることは、おそでの痛む處に觸れる譯なのだから決して口へは出さなかつた。

「あのくらゐの藝者を自分のものにして大威張で旦那顔をしよるとするには大抵ぢやないわね」

「それはさうだ」

「あなたは四十にはまだ大分間があるのに、お爺さんじみちやつたんですね。男は陽氣なことが好きなやうでなくつちや出世しないのぢやないでせうか」

「お前は時々陽氣になつてはしやぎだすから仕合せだよ、尤も昨夕のやうに陽氣になり過ぎて取組合ひをやつたりしちや困るけれどな」と、長吉が笑ふと、おそでも笑つて、

「あの時は私の蟲の居所が悪かつたの。およねの奴もいやに突掛つて来るんですけど。……それは昨夕のやうな見つともない。姉妹喧嘩など止した方がいゝんですけれどね。でも、私時々陽氣な遊びをしたいと思ふことがあるんだから、今夜は俊一の處で、皆なで何か賑かなことをして遊ばうぢやありませんか、俊一だつて喜ぶでせうよ」

「それもいゝだらう。だが、俊一の喜びさうな遊びは何だらう？ あの子が心から嬉しさを顔するのを、おれは一度でも見たいと思つてんだけれど、駄目だな」

「さう思ふのはあなたの氣のせるなのよ。俊一の身體はいくら不自由だつても、他人が面白いと思つてゐることはあの子にも面白いんです。

嬉しくつてたまらないつていふやうにニコ／＼してゐるのに、あなたは感じないんですかね。あなたよりも私の方が俊一の氣持をよく知つてゐるんですよ」

ブラ／＼歩いてゐるうちに、土産物の重みで手がだるくなつた。電車の線路を横切つて狭い道を濱の方へ進むと、松葉杖をついた俊一の後姿がふと二人の目に映つた。

「俊一ちゃん、おそではあたりを憚らず、大きな聲で呼掛けた。まん丸い顔した看護婦の上田が、足を留めて振返つて會禮すると、俊一も重い足を留めてニヤリと笑つた。

「今病院へ行つて來ましたのよと、上田は夫婦の近づくのを待つて云つて、一しよに家の方へ向つた。

「今日は元氣がよささうね。血色もいくらよくなつたし」と、おそではいつも會ふたびに云ふやうなことを云つて、俊一に寄添つて、鼻の尖つた目のドンヨリした瘦せた顔を覗いて見ながら、彼れの身體中を舐盡したいやうな情火に燃えてゐた。彼れの腰のまはりには、骨膜炎のために蜂の巣のやうに穴があいてゐて、そこには、一日として醫者の手當てを怠つてはゐられない

ほどに多量の膿が溜るのであつたが、おそでは出来るものなら、俊一の骨をも肉をも腐らせてゐるさういふ膿を、自分の唇で吸取つてやりたかつた。

夫妻は俊一を中に挟んで何か話しながらトボトボと歩いた。

僅かに三室しかない小さな別荘で、間に合せの安普請なのだが、病弱な子供を木位として造られてゐて、風通しも日當りもよかつた。寢臺を拵付けて、そこから寢ながらガラス越しに庭や松林が見えるやうになつてゐた。庭には小さな池がつくられて、夏は金魚などを飼つたり水遊びが出来るやうになつてゐた。庭木戸から出ると、海は直ぐ近くなので、波の音はよく聞えて來たが、俊一は毎日の病院通ひ以外には、

戶外へ出ることを好まなかつた。退屈な思ひをしてゐる看護婦が、自分が遊びに行きたいために、屢々俊一を唆かすので、彼れは子供心に、断つてばかりゐては悪いやうな氣がして、三度には一度は誘ひに應じてゐたが、自分から進んで、活動寫眞を見たいとも海を見たいとも言ひ出したことはなかつた。庭にブランコが備へつ

けられてあつたが、それは近所の子供に利用されるか、時としては、看護婦と近所にゐる若い學生との遊び道具に用ひられるばかりであつた。彼れは寝臺に横はつてゐない時には、目當りのい、障子の側に、火箸のやうに細い、青白い足を投出して、冬になつても残つてゐる蠅の動くのを見たり、木立の多い隣の庭へ朝から晩まで来ては鳴いてゐるいろ／＼な小鳥の聲を聞いた。あるひは繪本を見ることがあつた。看護婦をり／＼聴かせて呉れる昔噺や怪談や人情話にも耳を傾けた。學校へは一度も行つたことのない彼れも、いつとなしに文字を習ひたくなつて、此方へ來てからは、看護婦が新聞や雑誌などによつて教へて呉れる文字を熱心に覚えようとした。

ある時、彼れは母親が送つてくれた子供の雑誌を開けて見てゐるうちに、「ねてゐてころんだためしはない」といふ文句を、自分ひとりで讀み得たのが嬉しくつて、屢々それを口に出した。

「うまいことを云つてるわね。全くその通りだわ。俊ちゃんのやうに何もしないで、家の中で寝てばかりゐるのが、間違ひがなくなつていゝんですね」と云つて、看護婦は欠伸凌ぎに小唄を唄

ふのと同じ調子で「ねてゐてころんだ」を繰返した。をり／＼遊びに來る分松葉の抱への三子にも「俊ちゃんの名言」として吹聴した。

上田にでも三子にでもをり／＼那楡はれるのが、腹部の痛みと同じやうに俊一の心に痛く響くのであつた。彼れは聲を揚げて泣くことはなかつたが、どうかすると、うな重れて萎れてゐることがあつた。ふと癩癩を起して繪本を破つたり玩具を壊したりすることもあつたが、元氣な子供のやうにあばれだす力はないのだし、顔付も薄弱に出來てゐるのだから、その癩癩も傍の者を驚かすには足らなかつた。

今日は日が温かかつたし、醫者の手當てを受けたあとだつたので、俊一の機嫌もよかつた。土産の玩具のうちでは、天狗の面を喜んで、それを自分の寝臺のそばに懸けた。「買った時にはこんなものは仕様があるまいと思つたのだが、かうやつて見ると、成るほど面白いね。しかしお前は夜こんなものを見ても怖くはならないか」と、長吉が訊くと、

「怖いものか。僕はこんな真赤い顔が好きだ」と、俊一は答へた。

「へえ、お前は赤いものが好きなの？ はじめに聞いたわね」と、おそでは俊一の好みの一つ

をはじめて發見したやうに喜んだ。

彼女は東京の家にある時とはちがつて、此方では、氣持よく臺所働きをして、新しい魚を材料に二三品の料理を注意して拵へて、四人で食卓を圍んだ。鈍子もつけて、彼女自身も久振り猪口を手にした。酒をうまいとは思はないのだが、昔自棄飲みをした癖が残つてゐるので、飲むとなると随分飲めた。「お母さんの顔はあの天狗様のやうになつたらう。女が眞ツ赤い顔しちや見つともないけれどね」と云つたりして、酔ふほどに飲んだ。長吉も不斷より快く餘分に飲んで、上田にも勸めて、無理強に二三杯猪口を重ねさせた。たゞ一人青白い顔してゐる俊一は、みんなの顔が紅味を帯びて來るのを不思議に思ひながら見廻してゐた。

「此間うちは寒う御座いましたから俊ちゃんは何處へもいらつしやうなかつたのです」と云つて、上田は公園の梅が咲きかけたといふ噂を傳へた。

「ぢや、明日はみんなでも梅見にでも出掛けませうね」と、おそでは調子づいて云つたが、するとふと片足の短い俊一の松葉杖突いた姿に乗人の意地悪い目が注がれる有様か思出されたので、人目の多い處へ遊びに出掛ける興味は薄

らいでしまつた。親子だけで、人通りの少い淋しい濱邊で野良の方を選んで散歩したかつた。それよりも今夜のやうに家中に閉籠つて、傍に氣兼ねしないで遊んでゐる方が却つてまじなにかも知れないと思はれたりした。

「俊一は今何處か行つて見たいと思つてる處があるの？ 公園へは行きたいの？ 箱根の山へでも登つて見たかあないの？」と訊くと、俊一は首を振つた。

「僕は船に乗つて見たいな。櫓を押せるといふんだけれど、僕は駄目だらうな」

「だつて海は危いぢやないの。この邊の海は荒いから船がひつくり返つたら助かりやしないよ。お前は船に乗つたことがないから、珍らしいもののやうに思ふんだね。それなら、もつと身體がよくなつてから汽船に乗せて上げようよ。みんなで房州へでも行きませう。ねえ、お父さん」と云つて、おそでは、長吉が悲しうな眼付で俊一を見詰めてゐるのを顧みて、「この頃、お父さんはお酒を召上ると、却つて沈んぢやつていけない、今夜は羽目を外して賑かに遊ばうつて、あなたも約束しなすつたぢやないの。俊一の氣に入りさうな遊びつて何だらうね」と云つて、看護婦の方へ向いて、「上田さん

は、いろ／＼な流行唄を知つてらつしやるから、唄つて聞かせて頂戴ね。私なぞ、長いこと、寄席へも芝草へも行つたことがないから、當節の唄は些とも知らないのよ。いつだつたか、雨がシヨボ／＼降つてゐた日に、あなたは井戸端で洗物しながら唄つてらしたわね。雨は降る降る城ヶ島の磯につて。聲が、いゝから、私聞惚れてゐたんですよ。私など喉が干枯びちやつて駄目なんだけど、あなたは病氣したことがないし、歳も若いから、聲もいゝんですね」

「でも何でも、上田さんに隠し藝があるんなら、一つやつて貰ひたいもんだね」長吉はいくら辭つても、今夜は妻子の顔を見るにつけて起つて來る鬱陶しい思ひを、搔散らさうとして、お世辭でなしにさう云つた。

「私は無藝大食だか駄目ですわ。奥さんの一度聽かせて頂きたいつて、三子さんによくさう云つてゐるんですよ」

「私は何をしてもカラツ下手なの。若い時分に逆立歩きはちよつと上手だつただけど、この歳でそんな眞似は出来ないわね」

おそではふと興に乗つて、汽車で見た劇輕た遊びの眞似をした。紙捻をつくつて額に載せて、仰向けた平顔をやすぶり／＼唇のところ

まで注りつけて、うまく行つたわね。あなたもやつて御覽なさい」と左右を見た。俊一は面白がつてニヤリと笑つたが、長吉は何を馬鹿など云つたやうな苦笑ひした。

「サア、やつて御覽なさい」と、おそでが上田の額へ紙捻を押し付けると、上田は半ばお義理に眞似て見たが、自分で笑つてばかりゐて熱心が足らなかつたので、二三度やり直しても、いつも鼻のところから横へ落ちた。同じ平顔でも、艶のある頬の肉を微動させながら、紅い下唇を突出して、接吻をでも待受けてゐるやうな上田の動作は、長吉の目についた。俊一は上田のしくじりを更に面白がつて笑つた。

「サア、あなたもやつて御覽なさいな。俊一が面白がつてるぢやありませんか」

おそでは夫にも迫つた。長吉は妻や看護婦の頬で撫でられ、唇で濡らされた紙捻を額に載せて、同じやうに道化た眞似をした。俊一はます／＼面白さうに、聲を立てて笑つたが、「お前もやつて御覽と母親に勧められると、いやだと首を振つて後退した。

「極りが悪いの？ だつて、此處にはお父さんとお母さんとみんなお前の好きな人ばかりゐるのぢやないの。遠慮することはありやしないよ。

どんな悪戯(いたづら)をしてもいいんだよ。思(おも)ひ切り暴(あざ)れて御覽(ごらん)下さい。誰(だれ)れも叱(な)りやしないから。…お母(おはは)さんは俊(しん)ちゃんとしよに暴(あざ)れてもいいよんてす。

「お前に暴(あざ)れられちゃ堪(た)まないね」と、長吉(ながきち)は戯(いたづら)談(だん)らしく云(い)ったが、心(こゝろ)の中では本當(ほんとう)にさう思(おも)つてゐた。喜怒哀樂(きどあいりやく)の昂進(あきん)した時(とき)のおそでの舉動(きどう)の物狂(ものぐる)ほしさを、彼(かれ)れは危(あや)かしがつてゐたのであつた。「俊(しん)一(いち)はお父(おとう)さんの髪(かみ)を梳(か)いてお呉(く)れ。以前(いぜん)は髪(かみ)梳(か)きが好(す)きだつたのに、この頃(ころ)はいやになつたのかい」と云(い)つて、綺麗(きれい)に分(わ)けてある白(しろ)分の長(なが)い髪(かみ)をわざと手(て)で掻(か)亂(らん)して、頭(あたま)を前(まへ)へ突(つ)出したが、俊(しん)一(いち)は母親(はは)の波(な)した櫛(くし)を手(て)に取(と)ることさへしなかつた。

「床屋(とや)さんはもう廢業(はいぎやく)したのね。お父(おとう)さんの髪(かみ)の毛(け)は長(なが)くつて煩(うる)さいから、鉄(てつ)でチヨキ〜と切(き)つて上げればいいのに。俊(しん)ちゃんが切(き)るのなら、お父(おとう)さんだつて怒(おこ)んなさりやしないよ」とおそでは、不斷(ふだん)看護婦(かんごふ)が細帶(こせたい)や膏藥(ごうやく)など切(き)るのに用(もち)ひてゐた剪刀(さきば)を引寄(ひきよ)せて、自分(おれ)で毛(け)を切(き)る眞(ま)似(に)をして見(み)せた。

「そいつは御免(ごめん)だ」と、長吉(ながきち)が頭(あたま)を引込(ひきこ)める

と、
「いゝぢやないの。俊(しん)ちゃんの恩(おん)みに切(き)らせ

ておやんなさい」と云(い)つて、おそでは俊(しん)一(いち)を嘖(げん)しかけた。

「切(き)らせたきやお前の髪(かみ)でも切(き)らせるさ」

「よ御座(ござ)んすとも。罪(つと)まほろぼしにいつか切(き)らうと思(おも)つてたこともあるんだから」

「俊(しん)一(いち)はお父(おとう)さんやお母(おはは)さんの髪(かみ)を切(き)つたつても、首(くび)を斬(き)つたつても、幸福(きふ)にも樂(たの)しみにもなりやしないね。サアお父(おとう)さんのところへお出(い)で。繪本(えほん)を讀(よ)んで聞(き)かせてやらう」と云(い)つて、長吉(ながきち)は危(あや)険(けん)な剪刀(さきば)は妻(つま)の手(て)から取(と)つて、後(うしろ)の方(かた)へや

つて、俊(しん)一(いち)を招(まね)いたが、俊(しん)一(いち)は萎(おそ)れた顔(かほ)して大儀(たいぎ)さうにして、坐(ま)つた處(ところ)を動(うご)かなかつた。夫婦(夫婦)が戯(いたづら)れるにしても、争(あざ)ふにしても、上田(うへだ)は傍(わら)で見てゐるのを快(こゝろ)しとしないで、湯(ゆ)に行(い)くと云(い)つて出支度(でしど)をした。

「どうせ明日(あす)はお風呂(ふろ)を立てさせるよ」とおそでは云(い)つたが、上田(うへだ)は買物(かひもの)をして來(き)ると云(い)つて外(そと)へ出(い)た。

「あの人はよく辛抱(しんぱう)して呉(く)れるけれど、他人(たにん)は他人(たにん)だから、やはり氣(き)が置(お)けていけない。親子(おやこ)三人(さんにん)でかうして暮(く)らしてゐられたら、私(わたし)迷(まよ)はな

いでゐるんだけど、駄目(だめ)ねえ」と、おそでは眞面(まじめ)目(め)になつて歎息(ため息)した。

「だからお前(まへ)が思(おも)切(き)つて此方(こちら)に居(ゐ)つくことにし

たらいいぢやないか。おれは下宿(げしゆく)住(す)みででも我慢(がまん)すると云(い)つてるんだから。さうすれば看護婦(かんごふ)の高い給金(きん)だけでも助(たす)かるんだから、お前(まへ)の收(と)入(にゅう)がなくなつても、どうにかやつて行(い)けんことはないだらう」と、長吉(ながきち)も眞面(まじめ)目に云(い)つた。

「そりや、私(わたし)にだつて、細帶(こせたい)の掛(か)け方(かた)がらゐは分(わ)らないことないから、看護婦(かんごふ)まかせにして置(お)くよりは、私が終始(しゅうじ)側(がは)についてゐた方が、俊(しん)一(いち)の身(み)體(たい)のためにもいゝに違(ちが)ひないんです。だ

けど、私(わたし)は一錢(いちせん)の稼(かせ)ぎも出(で)来(こ)なくなつてあなた

の收(と)入(にゅう)入(にゅう)ばかりを當(あた)てにするやうになつちや、心(こゝろ)細(こ)いんですもの。あなただつて下宿(げしゆく)生活(せいかつ)を平(へい)氣(けい)だなんて今(いま)こそ云(い)つていらつしやるけど、長(なが)くは辛抱(しんぱう)が出(で)来(こ)やしませんよ」

「なに、おれは辛抱(しんぱう)して見(み)せるよ。それにおれ一人(ひとり)だつたら、一週(いちしゅう)に二度(にど)ぐらゐは此方(こちら)へ泊(と)り

に來(き)られるだらう」

「私(わたし)を俊(しん)一(いち)の側(がは)へつけといて、あなたは東京(とうきょう)で一人(ひとり)で暮(く)らした方がいゝと思(おも)つていらつしやるの? 此間(このま)からの話(はなし)の様子(さまじ)ではどうもさうらしいわね」

おそでは、一刻(ひと)も俊(しん)一(いち)を離(はな)れてはゐられないと思(おも)つめるたびに、自分(おれ)の職(しやく)業(ぎょう)などは抛(な)げ出して小田原(おだわら)に定住(ていじゆう)する氣(き)になるのであつたが、

自分の口の届かなくなつたあとの夫の身持が疑はれるので、さうも極めかねた。近年夫はどんな女とも關係ひをつけてはゐないらしいけれど、機会さへあつたら誰れにでも手を出しさうな様子が見えてゐるのだから、少しでも油断は出来やしないと、彼女の猜疑の目は、留守番と臺所の手傳ひのために同居してゐる妹のおよねの上にさへ及んでゐた。

「お前が此方へ来たいのなら、さうしようとしてつたまでぢやないか」と、長吉は話を外さうとしたが、おそではこの頃の癖で、いやにこだはつて來だした。

「俊ちゃん、お父さんはね、お前やお母さんを何時棄てて、他所へ行つちまふかも知れないんだよ。だけど、心配しないでおいで。お母さんは大丈夫、俊ちゃんを離れやしないよ。どんなに貧乏しても、二人で仲よく暮らしますせうね」

おそではさう云つて、俊一を抱締めて頬擦りしたが、俊一が悲しさうな顔すると、彼女も涙を落して、夫に棄てられたあとの母子の境涯を想像しては悲みに耽つた。

「下らないことを云ふものぢやないよ」長吉は妻のいやみな泣つ面を見ると、酒の酔ひも醒めるやうに感じながら、「俊一は此方へおいで。」

お父さんが面白いお話を聞かせて上げようね」と、兩手を差延べて、俊一の細つこい身體をぐつと引寄せようとしたが、おそでは、取られまいとしてますくゞだき締めるので、俊一は出抜けて「いたいよ」と叫んで泣き出した。そして驚いた二人が手を離すと、彼れは力もたく横に倒れた。

やがて俊一が機嫌を直したころには、さつき峻しくなりかゝつてゐた夫婦の心も和いで、三人は火鉢を圍んで、甘栗など食べながら邪氣のない笑ひ話に耽つた。昨日は何をたべたか一昨日は何をたべたか、この頃は夜よく眠られるかといふやうなことを、おそでは俊一に訊ねたが、上田が側にゐないのを幸ひに、彼女の日常の行爲をも彼れから訊かうとした。

「上田さんは笠間さんと箱根へ行く約束をしたつたよ」と、俊一は先日耳に留めたことを話した。

「××にゐる書生さんとかいゝ。今度の人は親切でよく辛抱して呉れると思つてゐたけれど、ぢや、あの人もそろ／＼いや氣がさして來たのだね」

「上田と笠間といふ人との仲が怪しいのかい」と、長吉は横から口を出した。

「それは極まつてゐますさ。私は大分前から感づいてゐたんです。そんなことはどうでもいゝんだけど、あの人が行つちまふと、また代りを探さなければならぬから苦になるんです」

「どうでもいゝつてことはないよ。お前は何かと思つてゐないやうだけれど、若い男と女とが巫山戯た話なぞしてゐるのを俊一に聞かせるのはよくないよ」

「それは構はないぢやないの。この前の人もあつたし、どうせ若い人を頼めば、そのくらゐなことは大目に見てゐなきや駄目ですよ。看護婦が色男をこしらへたからつて、あなたが嫉妬やなくなつてもいゝのよ」おそではツケツケ夫をやつつけて、俊一には柔しく、「それで笠間さんはこの頃は毎日やつて來るの？」

一時々遊びに來るの。縁側へ腰を掛けて話をするんだけど、僕は側へ行かんやうにしてゐるんだ。昨日はお菓子を持つて來て、僕にもたべろつて云つたけれどね、僕行かなかつたの」

「なぜ？ 笠間さんは活潑ないゝ人ぢやないの」

「でも、僕はあの人好きぢやないよ」

「笠間さんがお前の氣に入らないことを云つたのかい。お前は何でもよく分るからね」

俊一は自分の病氣について侮辱的な言葉を笠間が云つたことをよく覚えてゐたが、それを両親の前に打明けては悪いやうな氣がしたので黙つてゐた。

「俊ちゃんば此頃も上田さんは好きなのだらう。あの人のすることで氣に入らないことがあつて？ かういふところがいけないと思つてることがあるのなら隠さないでお母さんに仰有いよ」

「そんなことない」

「お前は上田さんが好きなのね。この前の人より」

俊一が首肯のを見て、長吉が、

「ちや、少々給料を増してもいゝから、もつとゐて貰ふやうにするんだな」と云ふと、

「六十圓だつて特別なんですもの。この上出してたまるのですか」と、おそでは、はじめ高い謝禮を出した夫が、無造作にさう云ふのを怪しんだ。

「でも、俊一の氣に入つてゐるのなら、少々金の惜まないで、引留めといたらいいぢやないか」

「それはさうだけど、お金さへ出しやゐてくれるとは限らないわ」おそではさう云つて、置時

計を見て、「俊ちゃんばもう寝ねしなきやならないでせう。今夜はお母さんが寝かして上げようね」と、俊一に寢支度をさせて、十歳にもなる男の子としては輕過ぎる身體を横抱きにして、寢臺の上へ運んだ。柔かい夜具をふはりと掛けてやつて、おとなしく目を閉ぢた俊一の細そりした顔を暫らく見下ろした。

言葉が止切れると、東京とはちがつた周囲の寂しさが二人の心にしみ入つた。長吉は食卓の上に頰杖を突いて煙草を吸ひながら、寢臺の方へ目をやつてゐたが、おそでの身體が邪魔になつて、俊一の寢姿は見られなかつた。都會の濁つた空氣の中にもつては健康が長く保たれないといふ醫師の注意によつて、一人子をこの海岸に住はせることになつたのも、今になつて見れば、一時の氣休めに過ぎなかつたことが分るにつけて、自分たち親子三人の身は暗い闇に鎖されてゐるやうに思はれてならなかつた。そして、近年夫妻が、こんな不具な兒を生んだ罪亡

ぼしのために心を合せてゐたのが、昨今はお互ひの心に隙間が出来て來たので、大切な一人子の始末が長吉には言ひやうのない煩ひになつて來た。

「俊一さへ生まれれてゐなかつたら、こんな愚

な女とはとつくの昔に別れてゐる。三十を過ぎたばかりで生氣を失つて末枯れた顔や肉體をしてゐるやうな女を、男盛りの自分が、後生大事に守つてゐるにはあたらなかつたのだ。それも俊一が人並に健かになる望みがあるのなら、それだけを樂みにして、外の事には目を配つてゐてもいいのだが、どうせ望みはないに極まつてゐる」と思ふと、いろんな苦勞に堪へる張合ひがなかつた。

彼は寢臺の側に立つてゐるおそでの後姿を見ながら、せめて彼女を此方に定住させて、自分一人東京で氣儘な下宿生活をするやうにでもなつたらと望んでゐた。上田が俊一の氣に入つてゐるのなら、おそではどうならうとも、さういふ女に俊一の短い一生の介抱を頼むことにしたいと、おそでの亡くなつたあとを空想したりした。そんなことを空想するにつれて、若い學生と上田との關係が不快に感ぜられた。

「俊一はもう寢つきましたよ」と、おそでが火鉢の側へ戻つて坐つたところへ、看護婦も歸つて來た。湯上りで一層艶々してゐる上田の若い顔は、今度は不思議に長吉の目を惹いた。

「あなたも毎晩淋しいでせうね。波の音ばかり

聞えて」と、おそでが云ふと、

「さうでも御座いませんわ。この頃は私もスツカリ小田原に馴れたんですね」と、上田は爽かな聲で應へて、「今三子さんに會ひましたのよ。出拔けに後から私の目を壓へてお酒臭い息を吹き掛けるから、私吃驚しました。あの人は氣さくでいつも面白さうですのね。明日は此方へお伺ひすると云つてました」

長吉は、妻が若い藝者など相手にして、得意になつて自分の昔を語つたりするのを好まなかつたが、でも、三子の快活な氣質、太り肉の健かな若い身體に對しては不快な感じを寄せる譯に行かなかつた。

翌日もあたゝかい日であつた。俊一は誰れよりも早く目をさまして、兩戸の隙間から差して來る朝の光で天狗の面を見たり、窓際へ來て鳴いてゐる小鳥の聲を聞いたりしてゐたが、昨夕は不斷よりもよく寝れたために何が嬉しいともなく、ひとりで微笑まれた。先日上田さんが笠間さんに、「あの子はいくら手を掛けたつてどうせ駄目なんです。一度風邪を引いても、それでおしまひなんです。何も知らないんだから

可哀さうですよ」と小聲で云つてゐたのを、自分のことを話してゐるのだと、俊一は耳に留めてゐて、今もその言葉を思出したが、その言葉は少しも彼れを悲しませはしなかつた。父や母が傍にゐて呉れるのは何よりも嬉しくつて、時々來て呉れるのが待たれてはゐたが自分が兩親に隨いて東京へ歸りたいとも思つてゐなかつた。

炊事でも洗濯でも、すべての雑用を足して呉れる隣家の主婦が、臺所口から聲を掛けると、おそでは目を醒まして、「今日は朝からお風呂を立てますから水を汲んで下さいね」と、寢床から云つた。

東京のゴミくした處で働いてゐる夫妻は、兩戸を開けて田舎の朝の空氣に觸れると、日頃の疲れが拭はれてしまふほどの快さを覺えた。長吉は朝餐の支度の出來る間濱邊を散歩することにした。日はよく照つて風もないので、沙の上に蹲んで大海を見渡してゐたが、すると、そこへ笠間がやつて來て、顔を見合せると、先方から挨拶した。「お散歩ですか」と云つて、相手の顔をよく見ると、以前と違つて血色がよくなつて頬に肉もついてゐるので、「大變お丈夫になりましたね」と

云ふと、
「え、身體はスツカリよくなりました。月が變つて温かになつたら、此方を引上げようと思つてゐます」と、笠間は元氣よく云つて、目禮して行過ぎた。
「彼奴、おそでや上田にはよくお喋舌してるくせに、おれを煙たがつてあんまり話をしながらない」

長吉はさう思ひながら、笠間の方を見やつてゐたが、健かになつて東京へ歸つて行く笠間の幸福を思ふにつけて俊一の事が新にいたましく胸に迫つて來た。そして、同じ人間の形を具へて生れて來ながら、俊一のみが悲惨な生存を續けねばならないのを、考へれば考へるほど諦めかねた。

で、家へ歸つて、
「笠間さんは肺病が根治したのだらうか。見たところは、大變達者さうになつてゐるね」と、誰れに云ふともなく云ふと、
「海岸でお會ひになつて？」と、上田は訊ねて、「あの方はこの頃は、病氣しない前よりも強くなつたから寒い日にでも海岸を運動していらつしやるんですつて」と、手拭を姉様かぶりにして、障子に拂塵をかけながら云つた。

「難病が癒つたあとは格別に悅しいものでせうね。肺病のやうな病氣でも養生次第で完全に癒るんですかね」

「あの方も一時は絶望していらしたんです。だから、これからは生命びるひをした氣で勉強するのだと云つていらつしやるんです」

笠間の生國や通つてゐた學校について、二人が訊ねたり答へたりしてゐる間、おそでは側にゐながら口出ししないで浮かない顔をしてゐたので、長吉が氣にして、言葉を掛けると、

「さつき上田さんのお手傳ひをして、俊一の綑帯を取替へたのですけど、それはひどくなつてゐるの……と、おそでは萎れて云つたが、その顔は不圖よりも一層婆さん染みてゐた。「以前よりもつとひどいんです。五つも六つもの穴がべつたり膿でふさがつてゐて、ガーゼを通すと、穴の中は横の方まで空虚になつてゐて、此方からあつちへガーゼが通るんですもの。まるで田舎のお籠見に、口は別々になつても、奥は一しよに穴が開いてるんぢやありませんか。あなたも一度よく見ておやんなさい」

「それはおれも醫者からよく聞いてゐるよ」
長吉は今更にはなくつてもいいことを妻が口に出すのを苦々しく思ひながら顔を擧げた。

「聞いただけでは駄目ですよ。病氣の本元をよく見なければ」

「おれは醫者ぢやないし、見たつて爲方がないぢやないか」

「顔だけ見ると、俊一も次第に丈夫さうになつてゐるから、あなたは平氣でゐられるんです」

さう云つて夫の冷淡を攻めだしたおそでも、平生は俊一の患部を熟視することを恐れて、看護婦の手傳ひをする時でも、成るべく目を外らすやうにしてゐたのであつたが、今朝は、事によつたら今後自分一人で病兒の世話をしなればならぬと覺悟して、勇氣を出して、日々の手當ての仕方を看護婦に教はつた。そして、地獄をのぞいたやうな戰慄を覺えたのであつた。

掃除を済まして、不斷は亂雑になつてゐる家の中を綺麗に取片付けて、四人揃つて遅い朝食の膳に向つたが、夫妻は氣持よく食物を味ふことが出来なかつた。風呂が沸くと、長吉が入つたあとで、おそでは俊一のお身體を拭つてやつて、障りのない處を丹念に磨いてやつた。手の指先や手首などを、石鹼や垢磨を用ひていぢり廻してゐると、俊一はおとなしく、愛撫に依つて受ける快感を樂んでゐるやうにニコつた。

湯の温かみで彼れの青い皮膚にも、人間らしい艶が出て、頬にも紅味が差した。

「俊ちゃんの身體にはこれだけの元氣があるんだから、いゝ空氣を吸つておしい物をたべて養生してゐれば、次第に丈夫になるんですよ。さう心配することないの」と云つて、おそでは急にまた希望を回復して、自分の心を慰めた。

夫婦が案じてゐたやうに、看護婦が暇を呉れよと申出はしなかつたし、隣家の主婦の給金や家の費用も滞りなく支拂ふことが出来たし、子供を相手に一日遊び暮らして、夜の汽車で二人一しよに歸りさへすれば、例の通りなのであつたが、午過ぎに留守居のおよねから、盜難に會つたといふ意外な電報が来たので、二人は吃驚して顔の色を變へた。

「戸締りをよくしなかつたんだらう。家を空けて遊びに出てゐたのかも知れない」と、おそでは妹の不注意を憤つて、側にゐたら駭りつけてでもやりたいやうに昇奮したが、衣類持物のすべてを盜まれてしまつたやうな氣がするとともにドンヨリした萎れた兩眼に涙が浮んだ。

「大切な物をみんな盜まれてしまつたら、これからどうするんですよ。今日が日から着のみ着のまゝで路頭に迷はなきやならぬぢやありませんか」

せんか」

「さう慌てなくつてもいいよ……しかし、電報が来たのだから直ぐ歸らなきやなるまいな」長吉は努めて落着いて云つたが、この頃自分の心の内や外に微見えかゝつてゐた悪運のおとづれが、この盜難を最初として續々起つて來るのではないかと恐ろしく感じた。

「なに、家ぢう探したつて確な物はないんですよ」と、強ひて笑ひを浮べて、看護婦の慰問に答へて、おそでを促して歸支度に取掛つた。いくら急いだつて、汽車の中で二時間あまりもちつとしてゐなければならぬと思ふと、二人はもどかしくてならなかつた。

「お母さんは四五日したらまた來ますからね。上田さんの云ふことをよく聞いて、おとなしくしていらつしやいよ」と、おそでは俊一に別れを告げたが、俊一はいつもの通りで、ちよつと寂しい顔をしたばかりで、さして別れづらい様子を見せなかつた。

「俊ちゃんをお難めますよ」
「ぢや、お大事に」
上田は、月口でいつもの通りの挨拶を取りかはして、二人がアタフタと出て行くのを見送つたあとで、家の中へ戻つたが、盜難の話の間

されたために、病兒と自分との二人生活が俄かに心細く思はれた。東京のお家のやうに此處へ泥棒が入つたら困るわね」と云ふと、

「さうしたら何でも持つて行かせればいゝですよ」と、俊一は事もなげに云つた。
「泥棒つて、たゞ物を取つて行くばかりぢやないのよ」

「ぢや、どうするの？」
「刃物を斬つたり突いたりするかも知れないの。刃物を振廻されたりしたら、あなただつて怖いでせう。私今夜から此處で寝るのが怖くなつてよ」

「ぢや、あなたも東京へ歸つちまふの？」
「歸りたくつても、あなたを一人此處へ打ちやらかして歸りやしないわ」上田は、ふところの病兒を不憚に思つてさう云つて、「俊ちゃんはこの頃は東京へ歸りたかたかですか。たまにはお母さんに隨つて歸んなさるばいゝのに」
「歸りたい時にはいつでもさう云つてやればお母さんが迎へて來て呉れるんだからいゝ」
「お母さんが大事なひとり息子を田舎へ打ちやらかして置くのも不思議だけれど、あなたが孤

兒見たいにこんな處に一人ぼつちにされて、さう淋しいとも思はないのは私不思議でならぬ。親子の仲はそんな筈だと思ふんだけど……」

さう云はれると、俊一も母親の懐かしい思ひが胸に迫つて來たが、口へは出さなかつた。そして、自分で寢臺の方へ行つて横になつた。仰向けに寝たまゝ目をパツチり開けて、低い天井を見ながら、窓外の物音に耳を留めてゐたが、其處では近所の子供が羸しい聲を立てて遊んでゐた。俊一には言葉がよく聞き取れなかつたが、時々煩く感ぜられる子供等の騒ぎも、今日は心の慰みとなつた。彼れは障子を開けて、彼等の活潑な舉動を見下したりした。四人も五人もの子供が、向ひの危かしい石垣の上に登つて、互ひに他を突き落さうとし合つてゐた。拍子を取つて勢よく飛下りる者もあつたが、飛びおれて平氣で地上に立つのが、俊一の目には不思議なことに映つた。彼れは誰れの足にも腰にも怪我のないのを、彼れは誰れの足にも腰にも怪我のないのを、彼れは自由な此方へ飛んで來るのを、彼れの目は見のがさなかつた。

俊一が外へ心を惹かれてゐる間に、上田は

後側で日向ぼつこをしながら、朝のうち讀みそこなつた新聞を讀んでゐたが、そこへ三子が湯屋の歸り途に立寄つた。髪をハイカラに結つてゐて、面長な引締つた顔立も、中流の奥様らしいがベタ／＼したやうな歩きも振りが、どうしても田舎の藝者が酌婦見たいで本性をあらはしてゐた。

「あの人は顔ばつかりお上品らしくしようとしてゐるけど、胴から下がだらしない」と、おそでが上田に云つたことがあつた。

上田はいゝ話相手として迎へて、夫婦が例よりも早目に歸京した譚を話した。姉さんには是非聞いて貰ひたいことがあつたのに惜いことをしたと、三子は大袈裟に云つて、

「此方の御別荘へ、有りつたけのお金をつぎ込んで、箆笥の中も金庫の中も空つぽだなんて云つてたけれど、泥棒に取られるやうな物が有るんですかね」と、冷かすやうな口調で云つたが、「でも、お氣の毒ね。たまに俊ちゃんに會ひに来なすつたのにと、同情した表情をして、寝臺の方を覗いて、「俊ちゃん、寝ていらつしやるの？」と聲を掛けた。

俊一は振返つて微笑したが、直ぐに寢床に横はつて、二人の方から顔を背向けた。「あなた

のお母さんはあなたの生まれる前には三子さんのやうだつたのよ」と、かねて上田から聞かされてゐたのだが、彼れはそのために却つて三子に親しみがなくなつてゐた。

「私の頭思ひ餘つてることがあつて、姉さんの智慧を借りたいと思つてゐたのよ。姉さんがゐないから上田さんに聞いて頂かうかしら」三子は馴々しくさう云つて、温まつてゐた肌の冷たくなるのをふと氣遣つて、障子を締めて火鉢の側へ寄つて「かういふ家にゐて、氣儘に寝たり起きたりしてゐたらいくでせうね」と、何かを考へてゐるやうな目をしてあたりを見廻してゐた。

「淋しくつて爲様がないわ。それに大切な病人を預かつてるんだから油斷は出来ないんですもの。私さつきから考へてゐたのよ。俊ちゃん的身體に極まりがついたら、私の白衣生活もおしまひにしようと思つてゐたのですけれど、それまで待つてゐられさうでないの」

「でも、もう少しの間でせうから、勤めてお上げなさいな。あなたならこそ、牛鳥さんも安心して俊ちゃんを任せてゐられるのよ」

これまでにもをり／＼話合つてゐたやうに、おそでが病兒を打ちやつて置いて、夫の側に

唸付いてゐるのを二人で非難して、口では何と云つてゐても、子供よりは御高主の方が大切なのであらうかと、さういふ實感を持つてゐない二人は、いろ／＼に當推量をし合つたが、話がそつちへ外れて、いやに眞面目になりだすと、三子は最初話しかけた話を進めるのが後目たくなつた。

「此方の主婦さんは嫉妬深いのね。今度なぞ側で見るといやになるんですよ」と、上田が云つたので、

「それは焼餅やきですとも。だから、私牛鳥さんには成るべく口を利かないやうにしてゐるのよ。あなたも氣をつけてらつしやい。詰らない疑ひを受けちゃいけないから」と、三子は應へて、「でも、上田さん、何よ」と調子づいて、「一男でも女でも、あんまり焼かなさ過ぎるのも張合ひのないものよ。私の知つてる人の奥さんは、御主人が何をしても、本當に平氣であるらしいの」

「ケーさんで方でせう。主婦さんに聞いてよく知つてますわよ」

「ケーさんでもコーさんでもいゝから、上田さん親身で聞いて下さいね。：私、その人に月に三度ともしみ／＼會やしないのよ。一年の餘

も唯唯一つしないで照降なしに續いて来てゐるのだけ、その人のお腹の中が、私にはどうもよく呑込めないの。私の身をどうして呉れるんですよと、改まつて一つ訊けばいいのだけど、それを口に出すのが怖いやうで、何時會つても云はれないのよ。……私は前から氣をつけてゐたから、大した借金は残つてゐないのでせう。年末にも、濱の××屋だの此處の××からいろいろな反物を持つて見せに來るし、家の姉さんが傍から勸めるし、私ども去年の間に合はせるのは氣が利かないから、浮かり手を出しかけたの。下着も欲しい、長襦袢も欲しい、帯も欲しい、今年は山藪が流行つてゐるなんて、私だつて、お正月には切立ての新しい物を身體につけたいには極まつてゐます。だけどこゝが大仕事な所だと、私は考へちやつたの。まだ二年や三年稼がうと思へば稼げなかないし、ちつとやそつとの借金でこの先が暗くなるつてことはないのだけど、若しもあの人に心から私の身を引取つて呉れる氣があるのなら、私の方でも今のうちにその覺悟をして、あの人に成るべく餘計な迷惑を掛けないやうにしましなやならないと思つて衣服のことなど目を瞑つて我慢したのよ。御覽なさい。私は指環さへ一つ持つてゐ

ないのぢやないの。私だつて以前は負けること嫌ひな見榮坊だつたから、頭のものだつて、手足につけるものだつて、何處へ出てでも恥かしくない物を、一身上持つてゐたのだけど、ある事のために、さういふものはみんな無くしたのです。……年末にあの人に會つた時に、お前はお正月の支度は出來たかと訊かれたから、そんなものはどうでもいゝんですと、負惜みを云ふと、さうかつて、それつきりだつたの。見榮坊の私が物はよくつても去年のお古を着てまがひ珊瑚の簪なんぞ差して、見榮も外聞もかまはないで、お座敷へ出てゐるのは誰れのためだか何のためだか、あの人をよく知つてゐるに、とゞの詰りの肝心なことを私の前で言ひ出さないのだから、私じれつたくて仕様がな。先方も私の方から言ひ出すのを待つてゐるのかも知れないけど、私どうしても思切つて口には出せないのよ。家の事情でお前の一生を見てやる望みはないから、これまでの縁だと思つてくれと云はれはしないかと、詰らないことが氣になつてならないの。三子はずと聲に力を入れて、
「全體あの人のお奥さんが焼餅をやかないからいけないんだわ。騒いでくれれば、いゝか悪いか、どちらかにキツパリ道がつくのだけれ

ど、奥さんがおとなしいから、張合ひがないつたらない」と云つて、「上田さん、あなたはどうお思ひになつて？」
「私には分らないわ」上田は相手の手放しの體氣を座興として聞いてゐたのであつたが、ふと自分の胸に思ひ當るところがあつた。「それで、その方があなたの一生を見てやると仰有つたらあなたはすぐにも今の稼業をお止めになるの？」
「さうよ。私今が丁度廢業にいゝ沙時だと思つてゐるの。看板の空いたのがあるからつて、わたしの氣を引いて見る人もあるけれど、私氣乗りがしないの」
「あなたの稼業は傍で思ふほど面白くないんですかね」
「私別段稼業をいやだつて、思やしないんですけれどね。でも、好き好んで藝者などになるものぢやないわね。あなたの方の御商賣の方が尊いのよ」
「さうでもありませんよ。私ははじめは白衣生活にあこがれてゐたのですけれど、内輪に入つて見るといやなことはかりなのですよ」上田はかねて見聞してゐる内輪のいやな事を話さうとしたが、相手に蔑視まれるのが氣になつたの

で、話を轉じて、「ケーさんとかはいくつにお
なりなさるの？」
「牛島さんよりも一つか二つ上なんです。も
うお爺さん」
「さう」

「變に思つていらつしやるのね。でも、男で本
當に手頼りになるのは四十くらゐな人なのよ。
あなたは二十代の若い方がお好きなんでせう」

三子は平氣でさう云つたが、上田はドギマギ
して返事をしないで目を伏せた。等間のことを
三子に知られてゐるのではないかと思ふと、顔
が火照つて来て、向ひ合つてゐるのが堪へられ
なくなつた。

「俊ちゃん私は私たちの話を聞いてゐたのね」と、
三子は目をパツチリ開けて此方を見詰めてゐる
俊一の方を顧みて云つたので、上田はそれを
幸ひに

「俊ちゃんはお医者さんへ行かなきやなりませ
んね」と云つて座を立つた。

上田は三子よりは却つて三つ四つ年上であつ
たが、色慾についての經驗や知識は三子に及ば
ないと思つてゐたので、をり／＼此處へ来てお

そでや自分に向つて、無遠慮にしやべり立てる
彼女の話をいつも好奇心をもつて面白く聴い
てゐたのであつた。今日は三子が歸つたあとで
俊一を連れて病院へ往來する間に、三子の云
つたことを思出してゐると、等間に對する自分
の氣持がそれによく似てゐるのぢやないかと思
はれた。お互ひに心の中で思ひ合つてゐて

も、どちらかが口へ出して云はないかぎりは、
煮え切らない日がいつまでもつゞくのだと、上
田は等間と自分の仲をさういふことに極めて
しまつた。「でも、あの女はケーさんに一生を
見て貰へるか貰へないかが分らないだけで、一
年の餘も關係は續いてゐるのだけれど、そこ

へ行くと、私たちの間は綺麗なものだと、自
分の肉體の潔白を誇る氣にもなつたが、それを
ひそかに誇つたあとでは直ぐに、三子などのや
うに自由に自分の肉體をあつかひ得られる境

涯の人々の羨ましが力強く胸にわき立つた。
今までに二三度誘惑を斥けて自分の潔白を守つ
て來たことも、おそでなどに向つて口でこそ自
惚げに吹聴したもの、眞實は幸福を取逃した

口惜しさが感ぜられてゐた。……そして、今差當
つて自分をかまつて呉れさうな男は、等間の外
には無いのに、その等間も月が變つたら東京へ

歸つてしまふのだと思ふと、上田は愚圖々々し
てゐられない氣がした。

夜になると、平生の夜にまして淋しかつた。
退屈さまして、俊一に童話を一つ二つ讀んで
聞かせたが、氣乗りがしなかつたので、いつも
のやうな親切な説明は附加へないで、書物を押
やつた。どうせ等間は、近所の噂を揮つて夜

は遊びに來ないに極つてゐる、誰れか話應へ
のある人が訪ねて呉れればいと、頻りと心待
ちにされた。三子などは今時分、唄つたり喋舌
つたり、いろんな男に巫山戯られたりしてゐる
のであらうと想像すると如ましくなつた。いく

らか報酬がよくつて氣樂であるために、病兒
を相手に浮々として幾ヶ月も過したことが後悔され
た。

「泥棒が來たらどうしようね、俊ちゃん」と、
黙つてばかりゐるのが堪へられなくなつて、獨
言でも云ふ氣で、ふと話をしかけたが俊一が
返事をしないので、「泥棒だつて、あなたをどう

もしないだらうけれど、私はひどい目に會はさ
れるかも知れないから、氣味が悪いわ。等間さ
んにでも泊つて貰ふといふんだけれどね」
「さうしたらいいでせう。僕、等間さんが來た
つて構やしないよ」

「あの人は本當にいゝ人よ。あなたはさう思はない？」

俊「はあの人は嫉ひだと云ひかねて、ニヤリと笑つただけであつたが、上田は獨言を續ける氣で、

「私笠間さんがこの家へ毎晩泊りに来てくれるといふと思ふのよ。あの人がだつてあんな汚らしい貸間に一人ぼつちで寝てゐるよりや、此處へ泊りに来た方がいゝにちがひないのだけど、世の中は面倒くさいものね。俊ちゃんも身體が丈夫でもつと歳を取つたら、屹度好きな女の人が出来ると違ひないわ。あなたは今どんな女の人がいゝと思つてゐる？ 三子さんのやうな人？ 私のやうな人？」などと云ひながら、俊「一の側へ寄つて自分の額を押し出して見せたが、俊「は返事はしないで微笑してゐた。三子や上田の若い艶のいゝ顔は、母親の顔とはちがつた味ひをもつて、彼れにも感ぜられてゐたのであつた。

「あなたはお父さんに似て、顔立は悪かないのよ。病氣のために血色が悪いから何だけれど、本當はいゝ男なの。鼻筋が通つて面長でちよつと品がよいのね。鼻の恰好が笠間さんにも似てゐるのね」

上田はさう云つて俊「一の鼻を掴んでいぢくつて、彼れが後退すると抱きかゝへて頬べたをおつつけた。「私の鼻はあなたのとはちがつてペタンコでせう」と、俊「一の手を執つて強ひて彼女の鼻をいぢらせた。毎日大小便の世話までしてゐるので、俊「一の肉體のどこに觸れるのも珍らしいことではないし、いつも臭氣のある汚い肉塊のやうに彼れを見做してゐたのだつたが、今夜はかつて感じなかつた快感が感じられた。……空想の昂奮した今夜の彼女は鼻ばかりではなくつて、俊「一の肉體のどこをでも笠間「の肉體であるやうに夢見た。俊「自身も、彼女のくどい愛撫を避けるやうに身體を動かしながらも、彼女に手放されたくない氣持になつてゐた。

「さあお休みなさい」と、やがて、上田は俊「一を寢臺の上へそつと置いた。そして、火鉢の上で滾つてゐた鐵瓶の湯を金盥にうつして、肩を拭ひ手を洗ひ、戸締りに氣をつけて寢床に就いた。

今度牛島夫妻が來たら、何とか口實をつくつて暇を貰ふことにしよう、と、略極めて、上田は

四五日の間ソソくして過した。その間に二度笠間が縁側へ立寄つてくれたのだが、折悪く、隣の主婦が庭の掃除に來てゐたので、通り一べんの笑ひ話を取りかはしただけであつた。「今月一杯でいよゝゝ此方をお立ちになるの？」と訊くと、

「えゝ、もういつでも立てるやうに準備が出来てるんです。僕のために送別會でもやつて呉れませんかと、笠間は云つた。

「こんな土地にでも永くいらしつたんだから、いよゝゝお別れとなると、思ひ残ることもあるでせうね」

「そりやあるかも知れませぬね」
「私も少し事情が出来て近々に東京へ歸ることになるかも知れないんです」

「ぢや、僕と一しよに歸つちやどうです」
「御迷惑ぢやなくつて？」

それから互ひに抑揚ふやうな口を利き合つたのであつたが、上田はあとでの思出に、笠間の心の底がまだ見極められないので、低語しかつた。低語しさのあまりに、あたりが鎮まつて、隣の主婦も來てゐない夜には、病兒を側へ引寄せ、は、惜氣もなく、若い女の熱の籠つたキッスを、病兒の肉體のあちらこちらへ與へた。か

うして、病児が笠間と化してそこに寝てゐると思ふと、泥棒の恐怖も自ら忘られた。

「×時の汽車で行く」といふ牛島夫妻の電報を見ると、上田は四五日以来の事を考へて、稍後目たい氣持がした。早速鏡に向つて粉飾をして、俊一の顔をもよく洗つてやつて、時刻が来ると、外出をいやがる俊一を宥め難して、停車場へ連れ行つた。途中で、「お母さんにいろんなお喋舌しちやいけませんよ。よ御座んすか」と、いく度も言ひ聞かせたが、そのたびに、俊一は首肯いた。

窓から顔を出してプラットホームを見てゐた牛島夫妻は、汽車を下りると直ぐに、俊一のそばへ寄つて行つたが、彼れの顔が、この前よりも著しく蒼れて色が青褪めて、日元や口端に漏らした笑ひさへ凄いやうなのに驚いた。二人はこもも、上田に訊ねたが、上田は、「別段お悪いつてことないんです」と云つて、「暫らく家にばかりいらしたのに、久振りで此處までお歩きになつたのでお疲れなすつたのでせう」

「ぢや、お迎へに来て貰はなきやよかつたのにね」と云つて、おそでは俊一を衆人の目から庇ひながら停車場を出て、俵を運んで家へ行つた。

いつものやうに土産は多かつたが、俊一は嬉しい顔もしなかつた。

「先日あんな風に慌てて歸つたから、氣になつて、今度は早く様子を来たのよ」と云つておそでは、上田の問ひに應じて盜難の話をした。盗まれた物は二三點の衣類に過ぎなかつたので、留守居のおよねの身にも怪我はなかつたのだから、夫妻は歸つて見て安心したのだけれど、およねが恐れて、この後の留守番を堅く斷つたのに困つた。で、いつそのこと、これを機會に、おそではある商店への通勤をよして、芝の家を片付けて、小田原に定住することに、長吉は下宿住ひをしようかと、夫妻の間に話が略纏まりかけてゐるのであつた。

「さうなつたら俊ちゃんのためにもよろしいんですね」と、上田が云ふと、
「盜難も、弱い子供を打遣らかした天罰かも知れないのね。以後氣をつけろつて、何處かの神様が佛様が泥棒になつて私たちを戒めて下さつたのかも知れませんか」と、おそでは此間から殊勝らしく感じてゐたことを云つた。

盜難を神佛のお諭しのやうにまで、おそでが祭上げるのは、長吉には可笑しかつたが、それを縁に生活變更の覺悟を妻がしだしたのは、

彼れの思ふ盡に缺つた譯なので、何よりも嬉しかつた。それで、妻のその覺悟を弛めさせないやうにと、此間から自分も眞顔で盜難をあがめ奉つてゐた。

「お前が俊一の見護に一心になつてゐてくれれば、おれも安心して一生懸命に働かれるよ」と、屢々云つて、母親の愛情によつて子供の難病のよくなることを空想するとともに、彼自身の自由な生活の道が久振り新に開かれるのを空想してゐた。今來て見ると、俊一は意外に衰へてゐるが、上田はこれまでよりも艶かしいやうに、彼れには思はれた。

其後の病児の食事や睡眠などについて、夫妻は上田に訊ねて、變りはないと聞いて一時安心はしたが、俊一が例になく不機嫌に振舞つて、取つてやつた土産の西洋菓子を疊の上へ抛出したりするのを見ると、それが病氣の重くなつた爲ではないかと疑はれた。「氣持が悪いかい」と、左右から訊ねたが、俊一は返事をしなかつた。

で、不斷のやうな陽氣な遊びやお喋舌は自ら遠慮されて、しめやかな夜を過した。上田自身の希望でもあり、おそでも覺悟してゐたので、看護婦解雇の打合せもされた。

「私だつて二三日身をいれて上田さんに教はつたら、俊ちゃん看護や手當てが、間違ひなしに出来ないことはありません。長い間人まかせにして、いゝ氣になつてゐたのがいけなかつたのですと、おそでは決心を強めて云つた。そしてその夜は病兒の眠りを守るやうに、寢臺の直ぐ側へ自分の寢床をのべた。

俊一は寢支度をしてゐる上田の方を見やつて、彼女が昨夜や一昨日の夜とはちがつて、きつい顔をしてゐるのを不思議に思つた。留守中の上田の所行ををりく母親に向つて打明けてゐる彼れも、先日來の彼女の不思議な所行は誰れにも云つてはならないやうな氣がしてゐたが、上田が東京へ歸りさうな話をさつき傍で聞いてからは、彼女に別れることが何となく悲しくつて、母親が代りに來てくれることもさして悦しくは思はれなかつた。それに上田が笠間と一しよに歸るらしいことを考へると、不斷から何となく好きでなかつた笠間が憎らしくさへ思はれ出した。

「俊ちゃん眠れないの？」眞夜中にくと目を醒ましたおそでが、電氣を點けて、寢臺を覗いて云ふと、俊一は目を睨つて夜具の中へ顔を引込めた。

「氣分が悪かないの？ 背が痛かないの？」
「どこも痛かないよ」と、俊一は力を入れて答へた。

「それだといゝけれど、夜中にでも氣持が悪かつたら、お母さんを起しなさいよ」
「ハイ」

俊一はキツパリ答へたが、母親が電氣を消して寢床に就くと、再び目を開いて闇の中を見詰めた。遊び友達と云つては一人ももたないで育つて來た彼れは、この土地へ來てから知合ひになつた隣の主婦やその子供や、三子や笠間や、病院の醫師や看護婦などの言語動作を耳目に觸れて、わづかに世の中を知つてゐたのであつたが、みんなが彼れを、「死にかゝつてゐる人間」「可哀さうな人間」として取扱つたり噂をしたりしてゐるのを、彼れはつねに胸に留めてゐて、自分は足が悪くつて外の人やうに飛んだり跳ねたりが出來ないのに、夢の中では屢々外の人にもまさつて飛べもし驅けられもされるのを不思議に思つてゐた。そして、闇の中で目を開けてゐると、誰れかが寢臺の上へやつて來て、自分を捉へて何處か遠い處へ連れて行きはしないかと思はれて、多少恐ろしかつたが、連れられて行つて見たい氣もした。両親には平生

離れてゐるし、隣の主婦や三子や醫師など、彼れの世の中のでの人人々の言語動作に懐かしみも親しみも寄せられないでゐる彼れは、知らない誰れかに連れられて、遠い處へ行つても構ふことはない、ひとりり覺悟を極めてゐた。むしろさうなることを待設けることさへあつた。

今夜は闇の中で目を開けてゐると、ことにさう思はれた。…波の音は不斷よりも強く響いて來た。風が吹いて雨戸が音をたてた。今にも誰れかが寢臺の側の窓の戸を開けて入つて來さうな氣がして、俊一は顔をそつちへ向けたが、そのまゝで知らずく浅い眠りに落ちた。…再び目が醒めた時には、音のしてゐた雨戸の隙間は明るくなつてゐて、自分が同じ處に寝てゐるのを、彼れは知つた。

寒い風が吹いて日差しも鈍かつたので、夫妻は朝から火鉢に親しんで、内輪の暮らし向きの話に耽つて、外へ出ようとはしなかつたが、正午過ぎに三子の訪ねて來る前觸れがあると、長吉は彼女に會ふことを嫌つて、一人で寒さを冒して公園の梅を見に出掛けた。

おそでは三子の此間の話を上田から聞かされてゐたが、今日さういふ浮ついた他人の事に關はり合つて笑ひ興ずる氣にはたれなかつた。

で、「姉さんと三子が威勢のいい聲で呼び掛けて入つて来て、いつものやうに調子を合せて迎へはしなかつた。盗難の事や夫婦別居の事など一通り話が運んだあとで、三子は、

「姉さんが小田原へ越していらつしやれば、私は相談相手が出来て心強くなるわね」と、喜んで、「それで、牛島さんは一週に一度づつくらゐ此方へ泊りにいらつしやるの？」

「え、さう、毎日一しよにゐて喧嘩ばかりしてゐるよりや、その方が二人のためにもいいんですよ」

「姉さんも變つたわね」
「變つたつて？ 何が變つたのさ。私が何年経つても亭主一人を後生大事に守つて、一日だって放さないやうにしてゐるつて、あなた達は笑つたことがあつたわね」

「……でも姉さんは可愛い俊ちゃんのために、旦那様と別々に暮らさうといふのだから、結構なことだけれど、私を御覽なさいな。あの奥さんがあるために、いつまでも一しよにないで愚圖々々してゐるぢやありませんか」三子は思々しうに云つた。

「……私に本當の事は知らないけれど、話だけ聞いてゐると、あなたは全く愚圖々々ね。成つ

ちやゐないわよ。早くどちらかに極めたらいいぢやないの？ あなたに腕があるのなら、ケイさんとかをうまく引き込んで、奥さまでも何さまでも、さつさと追抛出させるやうにしたらいいぢやないの？ どうせ薬者稼業をしてゐるのに、お上品ぶつて、世間の人に遠慮や斟酌をするには當らないのさ」おそでは自分の昔を顧みて、三子のやうな場合を想像しながら、ふと昂奮して云つた。

「だけれど、あの人のお腹の中が私には分らないんですよ」三子は甘えた口調で、「それは私を可愛がつて呉れるのですけれど、私の一生の手頼りになつて呉れるのだから呉れないのだから、それがハツキリ分らないの。姉さんだつたらあにくらゐるな年輩の男の人の心がよく分るでせうけれど、私には見當がつかないのよ」

「歳を取つた男はずるいからね。家の人だつてさうですよ……三ちゃんはずるいお金の迷惑も掛けないやうにして慾も棄ててかゝつてゐるのに、その實意が先方へ通じなくつちや馬鹿らしいぢやないの？ いゝ加減あなたを釣つて、いざとなつたら背中を向けようつていふ腹なかも知れないよ。當てにしないで用心しなきゃいけないね」

「ケイさんは決してするかないのよ。餘計な嘘しがらせなんかは云はないのよ……姉さん一度ケイさんに會つて下さらない？」
「いやなことだね。お温かい所を見せつけられて溜るものぢやない」

「あら私眞面目なのよ……ケイさんの様子を通りがかりにでも、姉さんに見て貰ひたいの。姉さんなら、私なんぞとはちがつて、一目見たら、あの人の價値が分るでせう」

さう云はれると、おそでもうかと得意になつて、「全體ケイさんで云ふ人は何處の誰れだか、正體を明かして御覽な」

「姉さんが會つて呉れば明かしてもいいわ」と云つて、三子はおそでが首肯のを見ると、次の室にゐて此方の話を耳に留めてゐるらしい上田に遠慮しながら、疊の上に書いて見せた。そんなことではおそでがよく呑み込まないので、硯箱を持つて来て鼻紙に書いて、その人の家の道筋の圖取りでもした。

「小綺麗な、家なのよ。奥さんが實家へ行つてゐた時に、私夜おそく庭木戸から忍んで行つて、夜明頃まで泊つたことが一度あつたの。夜中に私が野をかくと、ケイさんは私の耳を引張つちや起し／＼するの」

「戯談ぢやないよ」おそでは睨みつける眞似をした。鼻紙に書かれてゐる名前は見ると聞かしてゐるやうな気がした。

「私姉さんにはまだ祕密で話したいことがあるのよ。姉さんに後楯になつて貰つて一仕事して見たいことがあるんですよ。一日箱根へも行つてゆつくり相談したいんだけど、姉さんは一人ぢや出られないかしら。旅費は私の分は私が出してもいいわ」

「箱根へでも何處へでもそのうち行つてもいいけれど、當分は駄目らしいの。それよりも私一度この土地のお茶屋で遊んで見たいよ。お金が出来たら、三ちゃんの家の人をみんな××へでも呼んで御馳走したいと思つてるんだけど、こんなに貧乏ばかりしてゐちゃ駄目ね」

「お止しなさいよ、そんな無駄なことは。…それよりも、姉さんは此方へ越していらつしやることに極まつたら、此方で一商賣はじめなすつちやどう？ 私いゝことを思ひついでるのよ」

「相談つてそのことなの？ あなたの思つてること大抵は察しがついてるさ」
おそでは意味ありげな笑ひを浮べた。上田を憚つて明らかに口へは出さなかつたが、三子がかねて他事のやうに話してゐたことを思出

して、「叔父さんのお店のやうな爺むさい商賣のお手傳ひは、私の性には合はないのだからね。倭一に手が掛らなければ、もつと面白い稼ぎを見たいのさ」と、ふと心が浮きくし

た。色氣のある社會には、牛島が好まないために、長い間遠ざかつてゐるし、藝者屋だの料理屋だのを營むには、いゝ手蔓もないし、資本も得られさうではなかつたが、三子から聞いてゐる暖味屋なるものは、自分の力ででもやつてやれないことはなささうに思はれた。地道な稼業ではうまい儲けの得られないことを長い間知

つて来た彼女は、昔通つて来た社會が利益の多いところだつたやうに慾の上から思はれたし、第一いろ／＼な男をあやつつたり、いろ／＼な男に擲擧げられたりする楽しみは、ともすると思出されてならなかつた。

「私には私の望みがあるのだしき。姉さんは智慧もあるし腕もあるのに、面白い稼ぎもしないで、陰氣な顔してボンヤリしてちや損ぢやないの」

三子がおそでを唆かして歸つたあとで、おそでは上田を顧みて、今日は自分が倭一を病院へ連れて行かうと云つたが、
「倭ちゃんは少し熱があるやうです。風邪をお

引きになつたのでせう」と云つて、上田は検温器を病兒の脇の下へ挿んだ。

長吉が公園から市街の方を散歩して、コーヒ店へ寄つたりなどして歸つた時には、病院の代診が上田に呼び迎へられて、病兒の腰部を洗滌をして、發熱に對する注意をもして歸つて行つたあとであつた。おそでは代診に聞いたことを話して、

「昨日寒いのには停車場まで迎へに出たのがいけなかつたんです」と、鼻奮して上田の不注意もなじつた。
「さうばかりでもあるまいよ。昨日停車場で見た時に非常に寢れてると思つた。醫者は別段變つたことも云はなかつたのだね」

「變つたことつて何も云はなかつたわね、上田さん」
「え、何も仰有いませんでした」
長吉は寢臺の側へ寄つて、萎れて老人らしい相をしてゐる病兒の顔を見入つて、

「氣分が悪いのかい。身體の何處が痛むなら痛い、氣持が悪いなら悪いと云つて御覽」と訊ねたが、

「僕はどうもないんだ」と云つて、俊一は額を擧めて目を瞑つた。

「それならいゝが黙つてゐちや駄目だぞ、上田さんでもお父さんでもお母さんでも、お前のために此處についてるんだから、安心して元氣を出さなきゃいけないよ」

俊一は目を開けてうなづいたが、父の顔を見るのが煩さかつたので、再び目を瞑つた。……發熱とそれに伴ふ五體の疲勞によつて惱まされたためか、平生茫然として人の顔を見たり人の話聲を聞いたりしてゐた彼れも、今は見馴れた人間の顔も自分を苦しめるものやうに思はれた。父母の顔でも繪本で見た赤鬼や青鬼のやうに見えだした。彼れはふと手を伸して、寢臺の側の柱に懸つてゐる天狗の面を引つたくつて臺の上へ抛出した。夫妻はそれを見て呆氣に取られた。

そこへ、隣の主婦が冷し水と病院の薬とを持つて來たので、上田は早速病兒に服薬させたが、俊一は顔や手を動かして彼女の接近を避けるやうに努めた。等間や三子の顔も目の前にちらつくやうで氣持が悪かつた。

「お薬はがくつて？」と、上田が訊ねると、「いゝえ、にがかない」

「お薬を飲んで温かくしてれば直ぐに好りますよ。お母さんは、今夜は此處に泊るんだから安心していらつしやい」と、おそでが云ふと、「みんなが黙つてゐて呉れるといゝんだけれどな」と、俊一はこの別荘へ來て以來はじめてさう云つた。

夫妻は聲を潛めた。俊一は水袋が額に載せられてゐるのも關はないで、顔を夜具の中へ引込めるやうにした。そして周圍の聲は暫らく聞えなくなつたが、これまでに耳に觸れてゐる人々の言葉が棘をもつて一つ一つ浮んで來た。

さつき聞いてゐた三子と母親との話だつてハッキリ耳に覺えてゐたのだが、その話の意味がいくら分ると、彼れの羸弱い頭には痛かつた。「風邪を引いてもあの子の身體は危い」と、上田がある日等間に話してゐたことを思出して、お医者さんや上田が云つてゐるやうに、僕が今風邪を引いてゐるのなら、僕は死ぬるかも知れないと、ひとりて考へられた。

「お前はとに角當分此方に泊ることにして、おれだけ歸つて行かう。俊一の病氣が若しも悪いやうだつたら、電報でも打てば直ぐにやつて來るよ」と、長吉はおそでに云つて、こま／＼した家の用事を互ひにさ／＼やいたが、今日は病

兒をうらしるに夫婦の別居生活に關はつた話をヒソ／＼としてゐるのが、おそでには手頼りなく淋しく思はれて、しまひには妻子を此處へ置いて自分一人東京で暮らさうとする夫の心根を無慈悲の至りのやうに言ひだした。

「だつて、お前がさうしよう」と云つたのぢやないか。おれがこちらから毎日東京へ出勤する譯には行かないのだから、止むを得ないよ」と、長吉が穩かに云つても、おそではさういふ條理の立つた言葉にも耳を貸さないで、ブル／＼首を振つた。

「今日の俊一は不調とはちがふんです。いつか悲しい思ひをしなければならぬと、何年もの長い間私たちが恐れてゐた日が來たのに、あなたは一人で東京へ行つて勝手な眞似をしようとするんぢやありませんか。あなたの顔を見ればあなたがお腹の中で何を企んでるか、私にはちやんと分るんですからね」と、いきり立つて、妹のおよねの事まで持出して聲を荒らげた。

「ぢや、おれが店を止めて此處で何もしないでボンヤリ暮らすのがお前の本望なのかい。俊一の治療代にも差向へるやうになつてもいゝつて云ふのかい」

「私は今のやうな陰氣な貧乏暮らしをするために、あなたの處へ来たのぢやないんですよ。若いうちを面白い目もさせないでこき使つて、俺一〇の身體に萬一事があつたら、それをいゝ機會に私を迫出さうと、あなたは思つてるにちがひないんだ」

二人の争ひが募つてくると、上田は傍にゐるのがゐづらくなつて、そつと座を外して、隣の家へ行つたが、他人がゐなくなると、おそでは夫の身體にむしやぶりついで惡態を吐きだした。殆んど一夜も離れないやうに同棲してゐながら、妻の肉體に嫌惡を覺えて疎々しくしてゐる長吉は、その代りに妻の惡態や取組合ひに苦しめられるのを我慢してゐたのであつたが、今夜は少しの理由もないのに、争ひを起されたのをつい、憤つて、拳をかためておそでの頬べたを殴つつけた。……十年の間お互ひに自分の望みを殺して同様してゐた鬱憤を相手に對して一度期に晴らし合つてゐるやうに、二人は次第に五體にある力を盡して争つた。火鉢を引くり返したり、障子を倒すまでも止めなかつた。

上田や隣の主婦が音を聞きつけて、そつと様子を見に庭先へ来た時には、おそでは青糞めた顔して、ヒツツと泣入つてゐた。そして物心

ついて以來、はじめてかういふ男女の争ひを見せつけられた後一が、ひとり寢床を出て松葉杖突いて、寒い風の吹いてゐる戸外へ出ようとして、玄關先に倒れたのを、夫妻は知らないでゐた。

オペラ

私は、この頃、ラムの「エリヤ隨筆」を机上に置いて愛讀してゐる。この人は趣味性に富んだ人であるが、音楽だけは分らなかつたらしい。

「私は天性音響について敏感だ。温かい初夏眞晝に響く大工の槌の音でさへ、物狂はしいくらゐに私をいら立たせる。しかし、さういふ意味のない音は、音楽の如く一定の目的をもつた毒音に比べると何でもないのだ。我々の耳は物を打つ音などには受け身になつてからいゝが、音楽に對しては受け身になつてはゐられない。……私はある日伊太利オペラ

を聴いてゐたが、次第に云ひやうのない苦痛に堪へられなくなつたので、最も騒々しい街上へ驅込んで、意味のない音響の中に身を没して、今までの果のない役にも立たない乾燥無味の注意に苦まされた心を慰めた。平和な日常生活の音響のする、氣取らない集合の中に隠れ場所を求めた」

彼れはかう書いてゐる。私は先夜帝劇で伊太利オペラ「お蝶夫人」を聴いたあとで、ラムのこの感想を讀んで、大いに同感した、ラムの聴いたのは、多分帝劇のよりもいゝオペラであつたのだらう。それでさへ彼れはさう感じ

た。

序幕の終りの、お蝶夫人の米國士官との掛合ひの唄など、まるで、さかりのついた牝猫牝猫が屋根の上で鳴合つてゐるのを聞いてゐるやうな氣がした。

かう云つても、私はラムのやうな音楽嫌ひではない。たゞ、時々日本へ来る程度の外國のオペラを好まないだけだ。

(白鳥隨筆集より)

人生の幸福

人物

安城 豊次郎

水島 喜多雄 (弟)

かよ子 (異母妹)

寺島 某 (學者)

別荘番 藤七

一

初夏の頃の夜明け前。芝生の庭園。その一端にある日本建の別荘の兩戸はまだ鎖されてゐる。庭園の一方は山の方へ接してゐる。豊次郎(四十近い風采のよろしき男。寝衣の上に羽織を着てゐる)山を下りて、何か考へてゐる態で、ブラ〜庭へ入つて来る。やがて、ステツキの先きで兩戸を叩きながら聲を掛ける。返事がない。彼れは部屋の方へ耳を留めて、再び山の方へ行かうとしてゐるところへ、喜多雄(三十餘歳

で、兄よりも健康らしい。同じやうに羽織を着てゐる)が入つて来る。

豊次郎は弟を見て、驚いた表情をして見詰める。

喜多雄(努めて懐っこさうに)兄さんは朝が早いと聞いてゐたが、こんなに早いとは思はなかつた。

豊次郎 お前はいつ此方へ来たのだ?(詰問するやうに云ふ)

喜多雄 昨夕遅く来たのさ。あんまり遅かつたから此方へ知らせなかつたのだ。来ると直ぐに、一人でビール二本ばかり飲んで寝たら、熟睡したものだから、今朝は馬鹿に早く目が醒めてね。寢床でもぐ〜してゐても話らないから、久振りに大磯の朝景色を見ようと思つて出て来たのだが、田舎はいゝね。

豊次郎 朝景色を見るにやまだ早過ぎらあ。あの通り月が照つてゐて、まだ夜のうちぢやないか。：：お前は朝景色を見るよりおれの様子を見に来たのだらう。おれが狂人にでもな

つてゐるかと思つて。

喜多雄 いやさういふ譯ぢやないよ。(努めて何気ない顔をして)今朝兄さんがこんなに早く起きてゐようとは思ひも染めなかつたんだからね。(兩戸の方を見て)かよ子はまだよく眠つてゐるんだらうな。

豊次郎 あゝ、朝早く目を醒ますのはおればかりだ。今朝はあいつに夜明け前の田舎の静寂な景色を見せようと思つて、さつき聲を掛けたのだが、なか〜目を開けない。しかし、眠れるうちは眠らせといた方がいゝのだらうよ。

喜多雄 かよ子も此方へ来てから丈夫になつたんだらう。此間僕に寄越した手紙には、大變元氣のいゝ快活なことを書いてたよ。兄さんだつてこの前よりも血色がよくなつてゐるぢやないか。

豊次郎 血色なんぞどうだつていゝさ。：：おれはお前にだけ話したいと思つたことがあるんだから、丁度よかつた。家の者が起きるまで、此處で、夜明けの景色を見ながら話すことにしようか。

豊次郎が芝生の上に無造作に腰をおろすと、喜多雄も同じやうに腰をおろす。

喜多雄 僕は煙草を持つて来ればよかつたのに、忘れたよ。兄さん持つてゐないのかい。

豊次郎 おれは一週間は酒も煙草も止めてるんだ。コーヒーや茶も成るべく飲まないことにしてゐる。飲食物や外界の刺戟なんかでおれの心を濁らされないやうに用心してゐるんだ。さうして、本當のおれの心を磨ぎ澄まして考へてゐることをお前に話すのだから、お前も煙草などを吸はないで聴いて呉れろよ。…おれが何を云はうと、眞面目に聴かなきゃいけないぜ。

喜多雄 それは眞面目に聴くがね。(強ひて笑ひを洩らして) しかし、膝の上に両手を突いて畏つて聴くには及ぶまい。芝生の上に寝ころんでゐても、心が眞面目ならいゝだらう。(芝生の上へ足を伸して) さつき家を出た時にや頭がボンヤリしてたが、冷つこいスガ／＼した空気を吸つたために、頭のドン底までハツキリして来たよ。かういふ時には何だか、話が聞かされさうだね。

豊次郎 (暫らく既想的な表情をしたあと) お前はかよ子のことをどう思ふ?

喜多雄 かよ子のこと?

豊次郎 僕は花が咲いてゐた時分に此處へ來

て、一ヶ月あまりもかよ子と一しよに暮らしてゐるんだが、かよ子は今のうちに死んだ方が、當人のためにも幸福だし、社會のためにもいゝと思はれるんだがね。お前はさうは思はないか。

喜多雄 (吃驚して) 出拔けにそんなことを云はれちゃ、僕も面喰つちまふ。かよ子がどうかしたのかい。脅かさないうで、詳しく譯を聞かせてお呉れよ。

豊次郎 あいつは丙午の生れだからね。俗に丙午の女は男を喰ふといふぢやないか。

喜多雄 何だい。眞面目な話つてそんなことなのか。(安心したやうに) お母さんがかよ子にケチをつけるために、時々そんなことを云つてたが、そんな舊弊なケチのつけ方ぢや、われわれに反感を起させるばかりだからね。

豊次郎 そりや、母親はかよ子に難癖をつけるためのいゝ口實にさう云つたのだからが、おれの云ふ丙午の意味はさうぢやないよ。…おれやお前は、かよ子がたとひ死んだ父親の罪惡の記念だつたにしても、たつた一人の妹として可愛がつて来たので、かよ子もおれたちを手頼りにしてゐるんだが、あの子はこの先き生きてゐても幸福ぢやあるまいよ。

喜多雄 そんなことはないさ。容貌は悪くないし、人間も馬鹿ぢやないし、相當な家へ縁づかせれば、幸福に世が渡れるだらう。寺濱さんも、此間いゝ縁談の口があるやうなことを云つてゐたよ。僕たちは、一人の妹のため

に、理想的の男子を捜して花々しく結婚させるんだね。しかし、僕等が傍からおせつかいをするまでもない。かよ子は、ちゃんとした當てがあるんぢやないかな。まだ子供だと思つてゐるうちに、案外なことがあるものだからね。…兄さんは此方へ來てから、何か感付いたことがあつて、さつき家のやうなことを云つたのぢやないか知らん。

豊次郎 お前はいつものやうに世間的事のことを云つてゐる。百人のうち九十九人までが云ひさうなことを云つてゐる。女が年頃になりや結婚させる。結婚させれば幸福になる。それに、十九にもなつたら、自分の好きな男のことを考へてゐるかも知れないなんて。さういふとを考へてゐるかも知れないなら、風手に軽く事を極めてしまつていゝのなら、おれも頭を痛めて物を考へたりなんかしないよ。…かよ子の胸の中には、まだ戀の芽は少しも萌してゐないね。それはおれが斷言するよ。

喜多雄 いくら兄さんが烟眼でも、その點はどうか。僕には信じられないからね。しかし、かよの胸中が白紙のやうに純白で、まだ男子の影で汚れてゐないといふのなら結構ぢやないか。

豊次郎 今日の日までは、あれの胸の中が純白でも、明日の日何處で誰れを見つけて、俄かに戀の芽が萌えださんとも限らないのをおれは恐れてるが、おれの恐れてるのはそればかりぢやないんだ。かよ子は一人前の女になるとともに、おれやお前にも復讐しようとするのに違ひないよ。生みの母親の靈魂があれの腹の中には完全に宿つてるんだが、それが今はまだ眠つてゐても、いつ目を醒ますかも知れない。いや、今日を醒ましておいてやるやうにおれには思はれるんだ。

喜多雄 何のための復讐？ 死んだ親爺に對する怨みを僕等にむくいるだらうと云ふのかい。女つて執念深いから、かよの母親は死ぬる間に、どんな恐ろしい遺言をしたかも知れないが、あの子は、怨みや憎みはどんなものだから、皆目分らないやうな女に生れつゝてゐるんだからね。時々お母さんに邪慳な仕打をされて、いつも無邪氣に受けてるぢやない

か。(ふと氣づいたやうに調子を變へて) こんならぬ話はもう止さうよ。僕は久振りで此方へ来たのだから今日は三人で愉快に遊ぶことにしようぢやないか。僕はこゝで朝餐を御馳走になるから、飯を食つたら三人で千疊敷へでも登つて見ようぢやないか。僕は土産に苺のいゝのを持って來てるから、あとで届けよう。

豊次郎 お前は悠長な顔をしておれに氣休めを云つてる。かよ子が手紙で何か云つてやつたために、お前はおれの身體を氣遣つて來たのに違ひない。隠さなくつてもいいよ。……おれは頭が狂つてやしないから安心しろ。不斷よりも頭の中がハッキリしてる位だよ。ただ、かよ子は早く死んだ方が、當人のためにも、傍の者のために幸福だと、おれが思つてるのを、あの子が多少感付いて、お前にそんな手紙を送つたのだらう。

喜多雄 なに、かよが此間寄越した手紙には、無邪氣な事が書いてあつただけだよ。あんまり退屈だから、兄さんに五目並べを教はつたとか、朝早く起きて、曳綱を見に行つて、鱈を買つて來て、自分で料理をして食べたが、まだビク／＼動いてゐる魚に庖丁を當てる

のは氣味が悪いから、一度で懲り／＼したとか、その時兄さんが鰻を一尾漁夫に貰つて來たけれど、食はずじまひで打遣つたとか、さういふやうなことが書いてあつただけだ。

豊次郎 それだよ。かよ子もいくら感付いてゐるんだ。(獨言のやうに云ふ)

喜多雄はふと、兄に對して不安な感じを起して、思はず後退りする。藤七水鳥家の別荘番(五十歳ぐらゐ)が裏木戸の側へ現はれ、此方を覗く。夜は明けかゝる。

豊次郎 何のためにおれがかよ子をつれて曳綱を見に行つたと思ふ？ 何のために鰻を買つて來たと思ふ？

喜多雄 何のためだか、僕はそんなことまで研究しやしないがね。(立上つて) さあ、もう家の中へ入らうぢやないか。東の方が薄明るくなつた。何處かで雨戸の開く音がしてる。

豊次郎 まあ、もつと其處にゐて、おれの話することを聞け。まだ誰れも起きやしないよ。おれの眞面目な考へを打明けられるのはお前一人なんだから。……かよ子を生かして置けば、あれのためにもおれ達のためにも決してよくないんだよ。おれは長い間考へ抜いた擧句にさう思つてる。(重々しく云ふ)

喜多雄 (笑ひく) だつて殺す譯にや行かないでせう。

二人は足音を聞きつけて、そちらへ目を向けると、藤七が入つて来る。豊次郎は吃驚する。

喜多雄 (怪訝な顔して) おれに急用でも出来たのかい。

藤七 いえ、別段用事があつて参つたのぢや御座いません。少し氣にかゝることが出来まして、旦那様はどちらへいらつしやつたのかと思ひまして。

喜多雄 氣にかゝることつて何だい。おれが家を出た時にや、お前はままだよく眠つてたやうだが、急に何か異つたことがあつたのかい。

藤七 戸倉さんの御別荘の裏で、若い女が殺されてゐるんで御座いますよ。隣の婆さんが、御嬢さんへ朝詣りに出掛ける途中で見つけて、近所で大騒ぎになつてゐるんです。喉をしめられたらしいんですが、女は土地の人ぢや御座いません。東京が濱の可成りに身分のいゝ人らしいんですよ。

喜多雄 それは大變だな。しかし、その人殺しがおれと關係がある譯ぢやあるまい。(口軽く云つたが不愉快な顔に現はす)

藤七 それは旦那様の御存じのことぢや御座いませんが、…その婦人の方が男の人と一よに、昨夕夜汽車で東京の方から来たのを見たといふ者が御座いますから、若しも旦那様もその人たちと同じ汽車にお乗りになつて、顔を知つていらつしやるのぢやないかと思ひまして。

喜多雄 知らないね。お前はいゝ加減なことを人に話しちやいけないよ。(叱るやうに云ふ) 藤七 はい。…私も久振りに死人の顔を見ましたが、死人なぞ見るものぢや御座いません。怨めしさうな目をして、鼻汗を滴らして。…旦那様はあんな者を御覽にならない方がよろしう御座いますよ。

喜多雄 誰れが死人なぞ見に行くものか。…あゝさうだ。お前は、昨夕おれが持つて来た母の箱を直ぐに此處へ届けて呉れ。

藤七 承知いたしました。(會釋して出て行く)

喜多雄 あいつは、慾に掛ちやすばしこいくせに、人間が少し抜けてるから、馬鹿なことを云つていけないよ。
豊次郎 藤七はおれたちの話を立て聞きしてゐたのだよ。油斷が出来ないよ。

喜多雄 聞かれて悪いことを云つてやしなかつたから、それは關はないがね。

豊次郎 いや、さうでない。おれ達はこゝで、大切な秘密を話してゐたのだから。
喜多雄 (はじめの快活さを失つた人間らしく) 兄さんは獨りでいやなことばかり考へて、それを僕に押付けるからいけないよ。僕には誰れに對しても秘密なんかありやしない。

豊次郎 おれはこの頃、頭のながか澄んでるから、いろんなことが分るんだ。かよ子の身に附纏つてる運命も、おれには分つてる。お前が藤七の云つた死人の話を氣に掛けてること、おれにはちやんと分つてる。

喜多雄 僕は氣に掛けてやしないよ。僕が夜汽車で大磯へ来たことや、今朝早く山の方を散歩したといふことが、ちつとも死人と關係があるんぢやないからね。

豊次郎 それはさうさ。おれはお前よりももつと早くから山の方を散歩してゐたんだよ。御嬢さんの側の暗い森の中も確かに歩いた筈だ。…しかし、喜多雄、お前は、ある女を殺さうと思つたことはなかつたか。(弟を見詰める)

喜多雄 ないねえ。男だつて女だつて、人間を

殺さうなんてことは、僕は一度も思つたこと
はないよ。そんな質問をされるのは今がはじ
めてだよ。兄さんは、なぜ、眞面目らしくそん
な不愉快な事に拘るんだね……(空を見上
げて)僕は久振りに夜明けの景色を見るん
だが、兄さんも話らない考へに凝らないで、
このよく澄んだ空でも見るといふ。

豊次郎 お前に教へられなくつたつて、澄んだ
空なら、おれは毎日よく見てるよ。日の出も
日の入りも、此方へ来てからよく見てるよ。
……だけど空を見たつて、朝日を見たつて、
おれの考へが變る譯ぢやない。……お前は本
當に、女でも男でも殺さうと思つたことは
なかつたか。憎いから殺したくなるばかりぢ
やない、その人間の幸福のためにも殺したい
と思つたことはなかつたのか。

喜多雄 ないよ。僕は蟲けらだつて殺すのは嫌
ひだ。

豊次郎 臆病だねえ。……おれは藤七が知らせ
に來た女殺しが、お前の所爲だと極つても、
そんなに驚きやしないよ。

喜多雄 (顔を覚めて)馬鹿云つちやいけな
(兄の顔を離れて)兎に角家の中へ入ること
にしよう。

喜多雄は兩戸の側へ寄つて、かよ子に聲を
掛ける。その間に、豊次郎は庭から外へ出
て行く。

喜多雄 ぢや、此方へ出ておいでよ。散歩した
きや一しよに散歩してもいゝから。

喜多雄は兄のゐないのに氣づいて、あたり
を見廻す。そして、却つてそれをいふこと
としたやうな態度で、空を見上げたり口笛
を吹いたりする。そこへ、かよ子(十九歳
の可愛らしい女、不鬪着のまゝ)が、横手
から入つてくる。

かよ子 豊兄さんはゐないの?(不思議さうに
見廻す)

喜多雄 あゝ。

かよ子 さつき、何だか、二人で面白さうな話
をしてゐたわね。わたし、話聲を聞いて喜
兄さんにちがひないと思ふと、直ぐに出て來
て、お話の仲間に入れて貰ひたかつたのだけ
ど、髪が壞れてゐたから、大急ぎで直してゐ
たのよ。わたし、寝相が悪いから、毎晩頭を
ぐちゃぐちゃにしてしまふの。

喜多雄 ぢや、お前はさつきから起きて、お
れたちの話の聞いてたのか。

かよ子 えゝ、よく聞取れたかつたけれど、今

日は三人で箱根へ遊びに行かうつて、そんな
相談をしてゐたでせう。わたし昨夕の夢見が
よかつたど喜んでゐたのよ。

喜多雄 (笑つて)うまいことを云つたらあ。
眞顔でそんなことを云つて。かよもずるくな
つたなあ。

かよ子 では、わたしの聞きちがひだつたかし
ら。若し聞きちがひだつたと分つたら、わた
し大變に失望してよ。

喜多雄 そりや、事によつたら、箱根へでも修
善寺へでも連れてつてやらないこともないが
ね。お前は身體の加減はいゝのかい。

かよ子 えゝ。わたし東京にゐた時よりも太
つたでせう。千疊敷くらゐなら一息で登れる
わ。

喜多雄 えらいなあ。……此方へ来てからは、
氣を使ふやうなことはないならうね。兄さ
んと仲よく暮らしてゐるんだらうね。

かよ子 えゝ、それは。……豊兄さんと喧嘩を
一度したこともないわ。わたしの養生にもよ
く氣をつけて呉れるのよ。

喜多雄 さうか……(胸に落ちぬやうな態度を
する。そしてあたりを顧みて)此間のお前
の手に、兄さんは暗いうちに家を出て外を

歩廻つたり、六ヶ敷い顔して獨りで考へ込んだりしてゐると書いてあつたが、それだけのことで、兄さんの不降の様子に格別變つたところはないんだらうね。

かよ子 え。(曖昧な調子で答へて) 死んだ義姉さんのことでも思出してらんぢやないと、わたしには思はれるんだけど、訊いて見たことないのよ。それで、兄さんが鬱いでる時には、わたし側へ寄付かないでソツとして置くのよ。…義姉さんがいくらい、人だつたにしても、死んだ人のことを考へるのは話らないぢやないの。(はじめの無邪氣に似合はない皮肉な調子で云ふ) わたしも、豊兄さんの氣持が傳染したのか、此方へ来てからは、どうかすると、死んだ人のことが考へられたりするんですけど、それはいけないことだと思つて、成るべく忘れるやうにしてゐるのよ。

喜多雄 かよちゃんも死人のことを思出すのかい。いやだねえ。お前のやうな、これから世の中の幸福ばかり味つて行ける女が、死人のことなど思出して、大切な純潔な心を濁らすつてことがあるものか。

ると、わたしうれしいわ。豊兄さんと喜兄さんとは云ふことが反對なのね。

喜多雄 なあに、兄弟だから性分はよく似てるんだよ。上べは違つてゐるやうに見えるも、腹の底は同じことなんだよ。(感慨を籠めて云ふ) おれはね、他家の家の人間になつてゐて、偶にしかな會はないから、お前にもよく分らないのだから、おれは兄貴と同じやうに鬱き込んでゐることもあるんだよ。

かよ子 いやなことねえ。…ぢや、喜い兄さんも死んだ人のことを考へてるの? でも、水鳥の義姉さんは丈夫で生きてゐるんだし、兄さんのお友だちで死んだ方もないやうだし、誰れのことを考へ出すのかしら。

喜多雄 おれが物を考へて鬱き込むと云つたつて、死人のことと極めなくつてもいゝよ。お前も今朝は少し變だ。(ふと嚴かな顔付をして、稍聲を潜めて) それよりも、兄貴の精神状態はどうも調子が外れてるやうだから、お前は氣をつけなさいいけないぜ。兄貴の云ふことや舉動に變なところがあつたら、一々おれに知らせるやうにして呉れ。

かよ子 豊兄さんの精神状態がどうかしてゐるの? 今朝此處で會つた時の様子が變だつ

たの? (物に驚いたやうに) それで、豊兄さんは今何處へ行つたんでせう。

喜多雄 御嶽さんの近くで、女が締殺されてるさうだから、それでも見に行つたのだからよ。

かよ子 女が殺されてる? …誰でせう。兄さんはわたしを脅かさうと思つて。

喜多雄 本當だよ。疑ふのなら見て來るといい。

かよ子 本當なら、わたし恐ろしい。(恐怖に震へながら空間を見て) …それは誰れが殺したんでせうか。殺した男は誰れだか分つたんでせうか。

喜多雄 加害者は誰れだかよく分らないだらうが、お前はなぜそんなに怖がるんだ。お前やおれに關係がある譯ぢやあまいし。

かよ子 でも、わたし、急に恐ろしい氣がしてならないの。…殺された女の人の顔が見えるやうだわ。首を絞められるのはつらいでせうね。同じ殺されるにしても、首を絞められるのと、刃物で喉を突かれるのと、どちらが苦しいんでせう。

喜多雄 おれはまだ殺された経験がないから分らないよ。…そんな役にも立たないやいな

ことを考へる必要はないね。……あの車の音は牛乳屋だらう。おれの持つて来た苺に牛乳をかけて直ぐに食べることにしようぢやないか。……穩かない朝だ。

喜多雄は努めて快活を装つてさう云ひながら、不安な思ひが、隠しきれないやうに微見えてゐる。藤七、風呂敷で包んだ苺の箱を提げて入つて来る。

喜多雄 御苦勞だつたな。そこへ置いて行けばいよ。

藤七 (苺の箱を下へ置く。そして、かよ子に目をつけて挨拶して) お嬢様は今度は一べんも爺やの處へお遊びにいらつしやいませぬ。此方の旦那様も寄つて下さらないし、何かお氣に障つたことがあるのぢやないかと、爺やは心配してゐるので御座いますよ。

かよ子 (返事するのが懶いやうに) わたし、この頃は減多に外へ出掛けなかつたのよ。

藤七 爺やは此間、太田の御隠居様が東京へお引上げになる時、緋鯉や金魚を頂いてお池へ放したときましたから、今日でも御一しよに見にいらつしやいませ。お氣に召したのがあつたら買つて頂きたいと思つてるので御座いますよ。

喜多雄 金魚は食べられないから、賣つて金にして一杯やらうと思つてゐるのかい。かよ子やんは用心してゐないと、詰らない金魚を爺やから高く買付けられるかも知れないよ。

藤七 へへ。旦那様は直ぐにわたくしの申上げのことをケナしておしまひなさると思ひましたから、旦那様にはお願ひしないで、お嬢様に高く買つて頂かうと思つてるんで御座います。あの金魚は、御覽になつたら、屹度お嬢様のお氣に召すだらうと思はれます。

喜多雄 爺やも商賣の時機が悪かつたよ。もつと早かつたら買つて貰へただらうが、かよちゃんば、今は金魚なんぞ見たかあないんだ。

藤七 どうかなすつたので御座いますか。(かよ子を見詰めて) さう云へば、お爺の色も悪いやうだ。

かよ子 (煩きさうに、顔を外して) わたし、どうもないのよ。そのうち爺やの金魚でも緋鯉でも見せて貰ふわ。

藤七 どうぞ御覽なすつて下さいませ。(歸りかけてまた後戻りして、喜多雄に向つて) さつきの女殺しの話で御座いますかね。伊豆屋の平吉が怪しい男を見たと言つて居りま

す。顔はよく見なかつたけれど、變な男が御嶽さんの方から下りて来るのを見たさうで御座います。どうも譯がありさうに思はれたから、突立つてあとを見てると、も一人の男が同じ道を驅けて来たさうです。それで、殺し手は一人ぢやあるまい、二人でやつた仕事だらうと、平吉は申して居ります。物取りぢやあるまいし、意恨があつてやつたことで御座いませうが、若い女一人を、男が二人がかりで殺殺すなんてあんまりむご過ぎるやうに、

わたくしは思はれます。

喜多雄 さうだね。(空々しく云ふ)……お前は早く歸つて庭をよく掃除して呉れ。今日はみんなを誘つて行くから。

藤七は出て行く。

かよ子 爺やは何だつてあんないやなことをわたしに話して行くんでせう。

喜多雄 人殺しの話なんか、誰れでも話したがるものなんだよ。本當に、いゝ加減な想像なんだよ。平吉といふ男が見たつて云ふのも當てにやなりやしなさい。

かよ子 わたし、此間豊兒さんに誘はれて、御嶽さんの裏山へ登つたのだから、あの邊のこ

海が見えて、そりや眺めがいゝのよ。：：殺された人は、御嶽さんへ行くまでは、自分がどんな目に會はされるか、ちつとも知らなかつたでせうのに。わたし、殺された人が殺した人に隨いて何も知らないで、あの坂を上つてつた様子が、今日の前に見えるやうなの。邪慳に絞殺されるくらゐなら、自分で海へ身を投げるとか、汽車の線路へ飛込むかして、早く死んぢやつた方がよかつたでせうのに、その女の人はなんにも氣がつかなかつたのね。

喜多雄 それは極まつてさ。殺されると知つて誰れが隨いて行くものか。(また不安な思ひに襲はれたやうに) 折角暇をこしらへて保養に來たのに、朝から縁喜が悪いよ。兄貴ばかりぢやない、かよまでもどうかしてゐる。(兩戸の方を見て) おきよはまだ寝てるのか。もう起したらいゝぢやないか。早く兩戸でも開けたらいいだらうに。いつまで庭に立つても爲様がないから、家の中へ入つて、氣分を變へて、その苺でも食べることにしようぢやないか。
かよ子 (兄に促されても家の中へ行かうとはしない) 此方にはお母さんがいらつしや

らないから、下女も寝たいだけ寝させるんです。

喜多雄 此方にはお母さんがゐないから、お前も氣が楽なんだらうね。(ふと柔しく云ふ) かよ子 え。(邪氣なく云つて) それは時々退屈して東京の戀しくなることもあるし、何かしら話らない氣持のする時もあつただけど、大抵はスーツとしたやうな氣持で毎日目を暮らしてゐたのだから。：：でも、それは今朝までのことなの。兄さんに呼ばれて此處へ出て來てから、わたしはじめて氣がついたの。今までわたし無智だつたのね。豊兄さんは死んだ義姉さんの事を考へて鬱いでるのだとばかり思つてゐたんですもの。

喜多雄 それは、兄貴の様子はちよつと變なやうにおれには思はれるんだが、おれがさう云つたからつて、お前は兄貴を怖がらなくなつてもいゝよ。おれが餘計なことを云つたために、お前に心配をさせて済まなかつたね。
かよ子 いゝえ。餘計なことぢやないの。(あたりを見廻して) わたし黙つてゐられないかと思つたこと云つちまふわ。豊兄さんの知つてる女の人がこの土地にゐるらしいのよ。暗いうちに外へ出て行くのは、その人に會ふた

めなんでせう。それで、しよつちうわたしに何か隠してるやうに氣兼ねをしてゐたのは、そのためだつたの。わたしに頼られやしないかと、豊兄さんがビク／＼してゐる譯が今やうやく分つたんです。：：だから、わたし怖くなつたの。爺やの話を聞いて、恐ろしいことが考へられてならないの。わたしの思違ひならいゝんだけれど。：：喜い兄さんも、豊兄さんの精神状態が今朝は變だつて、さつきさう云つたわね。

喜多雄 兄貴にそんな秘密があるつてことは、おれは今まで知らなかつた。(信じかねる風) 二人は陰鬱な顔して、めい／＼の思ひに沈む。やがて、
喜多雄 しかし、平吉が見たつていふ男は、兄貴ぢやあるまいよ。：：おれも話らない心配をしてゐた。：：いくら兄貴の頭が變になつても、そんな馬鹿なことがあるものぢやない。
かよ子 男が二人通つたのを見たといつたわね。
喜多雄 偶然其處を通つたために嫌疑を受けやたまらないね。
豊次郎が入つて來る。二人に對して疑惑の

目を放つ。

喜多雄 何處へ行つてゐたの？

豊次郎 戸倉の別荘の側まで行つて来た。死骸には鷹が掛つてたから顔がよく見えなかつた。

喜多雄 何だつてそんなものを見に行つたのだい。かよは非常に心配してゐたよ。

豊次郎 お前が何か餘計なことを喋舌つたんぢやないか。(詰問するやうに)

喜多雄 僕は餘計なことなんぞ云やしないよ。(ドギマギしながら)

豊次郎 だつて、かよ子はあの通り震へてるぢやないか。あんなに熟睡してゐたものが、三日も眠らなかつた人間のやうな元氣のない顔をしてゐるのに、おれが氣がつかないと思つてゐるのか。(怒りを含んだ聲で云ふ)

喜多雄 それは僕の所爲ぢやないよ。

豊次郎 ぢや、おれがちよつと出て行つた間に、お前の外の誰れかがやつて来て、かよ子に何か云つたのか。

かよ子 わたしどうもしてやしないの。兄さんこそ氣を鎮めて聴りしてゐて下さい。

豊次郎 おれこそどうもしてやしないよ。喜多雄が何か云つたか知らないが、誤解しちや

いけない。

かよ子 (外の方を氣にして) こんな處にいつでも立つてゐちやいけないから、家の中に入りませう。わたし、今雨戸を開けるわ。

かよ子は頼み勝ちに、豊次郎の方を氣にかけながら出て行く。

豊次郎 (弟に向ひ顔を和けて) お前は本當にかよ子に何も云はなかつたのか。おれはあの子の生きてるうちには、無駄な心配はさせまいと思つて、此方へ来てからも、おれの思つてゐることは微塵も外へ現はさないやうにしてゐたのだ。それに、無邪氣な相が消えてしまつた。一日でも一刻でも時を延してゐるうちに、人間の心は不意に邪念が芽を吹いて來るものだが、一度芽を吹いたが最後、この頃の草や木のやうに、どしどし蔓つて繁つて行くのだ。昨日までは、苦しみの種から生れてゐながら、苦しみを感じなかつたかよ子も、今はそれを感じだしたのだ。あれの母親はおれたちの母親に虐殺されたやうなものだからな。

喜多雄 虐殺だなんて考へるのは、兄さんの頭がどうかしてるんだよ。親爺のしたくらはなことは世間に有りがちのことなのだから

ね。：：かよは兄さんが、死んだ義姉さんの事か何か考へて毎日鬱いであると云つて心配してゐたのだ。

豊次郎 おれはかよ子だけには、おまきのやうな苦勞をして死なせたたくないよ。おれやお前の敵にしときたくはないよ。：：おれは今、氣にかゝつたから死人を見に行つたのだが、加害者は昨夕のおせい汽車で大磯へ來たのだと、みんなが噂をしてゐる。

喜多雄 それが僕にでも關係があるのかね。(反抗するやうに云ふ)

豊次郎 御嶽さんの邊は、人殺しをやるのにい處だ。おれはさう思つて、毎朝散歩してゐたのだ。

喜多雄 兄さんはどう思はうとも、僕はあすこが眺望がいゝから、行つて見ただけだ。かよもさつきあそこは眺めがいゝと云つてゐたよ。：：しかし、朝からこんないやな話をしてゐて爲方がないから、僕は一先づ家に歸つて用直して來ることにしよう。

喜多雄が行きかけると、豊次郎はふと手をばして引留める。喜多雄はその手を振放して行かうとする。そのはずみに、二人は芝生の上にくるぶ。

二

二十分後。前の幕の別荘の一室。食卓を圍んで、兄妹三人が苺を食べてゐる。

かよ子の居室らしく、鏡臺や箆笥などあり、西洋畫の額が掛つてゐるが、それは、觀客の目には見えない。

かよ子 この苺は随分おいしい苺ね。(匙を持つたまゝ、喜多雄の方を見る)

喜多雄 (夢から醒めたやうに) うん。うまいだらう。和泉屋へ頼んで特別にいいのを選択させたんだ。

豊次郎 この土地にはろくな果物がないうでね。(平靜な態度で云つて、皿の苺を見てゐる)

かよ子 水島の義姉さんでもおたまちやんでも、誰れか東京から遊びに来てくれればいいと、わたし此間うち獨言のやうに云つてゐたのよ。だから、今朝喜い兄さんの聲を聞くと、飛上るやうに悦しかつたのだけれど、出拔けに脅かされちやつたので、スツカリ情げたの。藤七がいけないのよ。いけ好かない爺やだわ。死人があらうと人殺しがあらうと、係合ひもないわたし達の處へ、朝つば

らから知らせに來なくつてもいいぢやないかね。

喜多雄 さうだとも。あいつ他所へ行つても餘計なおしやべりをしてゐるに違ひない。(それを氣遣つてゐるらしく思々しさに云ふ)

豊次郎 藤七のおしやべりくらゐは構はないが、お前は後暗いことはないのか。(聲を稍低めて) おれ達の前ではもう秘密にするには及ばないよ。さつき草原に轉んでた時に、おれはお前の心臓に觸つて、激しく鼓動してゐるのを知つたのだ。お前の胸の底には、何か異常な事を実行したあとのやうな震へが殘つてゐるのを、おれはちやんと感じてゐるのだ。

お前はおれだけには隠せないよ。二人は幼い時から一しよに育つて來た人間だもの、おれにお前の心の中が讀めないでどうする? : : 昨日までのかよ子になら、世間の者の恐ろし

がるやうなことは決して聞かせたかないのだけれど、今はかよ子も、恐ろしいことが自分の周圍に起つてゐることを感付いてゐるのだから、今更おれ達がかよ子の目に蓋をしてゐようと

したつてもう遅いんだ。だから、お前も遠慮しないで正直に打明けて見ろ。おれは決してお前を非難しようとは思つてゐない。輕

蔑もしない。都合によつたら、おれが責任を背負つてお前の身代りになつてやつてもいいと思つてゐるのだ。

喜多雄 僕の身代りになると云つて、何のために身代りになるんだね。(自分の胸をおさへながら) 僕はさつき芝生に轉んでた時、柔かい草が身體に觸つていゝ氣持だつたよ。あの上をいつまでもコロコロと轉んでゐたかつたくらゐだ。動悸も打つてやしないし、手も震へてやしないよ。

豊次郎 お前はまだおれのこの目を眩ましてゐようと思つてゐるんだな。(詰責する語調) ぢや、かよ子に訊いて見ろ。

喜多雄 (強ひて笑ひを浮べて) おれの額付が不斷に比べてそんなに違つて見えるか。かよの目でもよく見て、公平に判斷して呉れないか。

かよ子 (よく見て) さう云へば、喜い兄さんも今朝は變ね。目付が凄いいぢやないの。

かよ子は、喜多雄を見た目を轉じて豊次郎の方をぬすみ見て、それから、額を見上げて、ひそかにおびえる。

豊次郎 かよもいよゝゝ氣がついたのだな。お前があゝの親爺の肖像がよく出來てると云つて

此處へ掛けた時から、おれは氣遣ひでならなかつたのだ。親爺は一生のうち二人も三人も人間を殺してゐるのだよ。そのうちの一人は、西南戦争で殺したので、親爺自身も自慢をして人に話してゐたのだが、生物を殺したのは何のためだつて同じことだ。殺す生ずは戦争の時に限つたことではない。(厳然として)喜多雄、お前は、戦争でもない時に親爺と同じことをやつたな。他所の人間はどうか知らないが、親爺の一族は、一生に一度は親爺と同じことをやらなければ生きてゐられないと、おれは此間から考へてゐたよ。

喜多雄 親爺と同じことをやつたのならやつたでいゝから、兄さんは心を續めて下さい。

豊次郎 馬鹿、おれを狂人でも思つてゐるのか。おれはこの通り落着いてゐるぢやないか。おれが狂人なら、親爺も狂人だつたのだ。お前は狂人だ。…かよ子でも喜多雄でも、おれに何事でも訊ねて見る。それで、おれの返答が間違つてゐるか否か試験をして見る。この頃のやうに澄んでゐるおれの頭には、分り過ぎるぐらゐ何でも分つてゐるつもりだ。

かよ子 お父さんはいゝ方だつたのよ。だから、わたしもお父さんの肖像を此處に掛けてゐるんだわ。夜もお父さんに守つて貰つてから、安心してよく眠られるやうに思つて。

豊次郎 親爺の肖像が塵除けになると思つてゐたのか。人間にいろ／＼な苦しみを與へた根本の神様を、人間が崇拜してゐるやうに、かよ子は自分に苦しみの種を授けてくれた親爺を有難い神様にして奉つてゐるのか。…馬鹿なあ。

豊次郎、ふと立つて、肖像畫を取りおろす。そこへ、姿は見えないで、藤七の聲だけが、庭の方から聞えて来る。

藤七 旦那様、至急の御用がある方がいらつしやいました。此方へ御案内いたしました。此處へお通し申させようか。旦那様は直ぐにお家へお歸りになるでせうか。

三人はふと目を見合はす。喜多雄は慌てて立上つて、「ぢや、ちよつと行つて来よう」と獨言のやうに云つて出て行く。

豊次郎 (肖像畫を下に置いて) 彼奴はおれよりも先きに實行したのだ。(歎息する)

かよ子 喜い兄さんは何を實行したのよ。豊次郎 何を實行したか、お前も分つてゐるだ

らう。この母はおれのところへ手土産に持つて来て呉れたのか、外の者と一しよに食べた津だから分らないのだ。

かよ子 ぢや、爺やの話してゐたことが喜い兄さんに關係があるつて云ふの。

豊次郎 あいつ今は、その事で調べられるのだが、言逃げるすべはあるまいよ。…あいつ、おれよりも先きに實行したのだ。(次第にかよ子を見詰める)

かよ子 (おど／＼しながら) だつて、喜い兄さんのやうな快活な面白い人が、そんな恐ろしいことをする譯はないと、わたしには思はれてよ。水鳥の家に入つてからは、今まで幸福な日を送つてゐるのぢやないの。

豊次郎 世間の出来事の譯が一々お前などに分つてたまるものか。筋の通つた道を踏んで人間は日を送つてゐるんぢやないぜ。…お前は喜多雄のしたことを手はじめにこれから怖い世の中を見なければならぬね。

かよ子 わたし、兄さんが怖い。(座を立つて庭へ下りようとする)

豊次郎 いや／＼おれが怖くなつたのか。おれはお前を幸福にしてやらうと、いつも思つてゐたのだ。

庭へ下りようとするかよ子を、豊次郎は手を伸して引留める。

かよ子 兄さんは、わたしをどうするの？：：：
勘忍して頂戴。

豊次郎 お前はまだ誰れに對しても悪事をした

ことのない女だ。あやまるには及ばないよ。

かよ子 だから、兄さんは私を虐めないで下さい。

豊次郎 おれが虐めるものか。まあ、此處へ坐れよ。

かよ子は手を執られてゐるので、逃げようとしても逃げられないで、おどくしなながら、肖像畫の側に坐る。

かよ子 わたしお父さんの側に坐つてゐてよ。

豊次郎 おれたち三人は、その親爺に生みつけられたのだからな。よくその肖像を見ろとい

い。人間が神に似てるやうに、三人が親爺にだけだけよく似てゐるかを見ろといふ。

かよ子 わたし今から海へ行つて見たいのだけれど、兄さんは行きたくない？（隙間を見てゐるやうに目を左右に向ける）

豊次郎 まあ、もう少し此處に坐つてゐる。おれを恐れなくてもいいよ。おれはたつた一人の

妹の眞實の幸福を考へてゐるのだ。

豊次郎はやさしくさう云ひながら、出抜けにかよ子を後から抱へて、喉を締めようと

する。かよ子は微かに聲をたてて藻掻きながら抵抗する。豊次郎は女の苦しき顔

面を見ると、知らず／＼手をゆるめる。すると、かよ子は猛烈な抵抗をはじめ、兄

の手から脱出するや否や、鬼女の如く兄の喉佛を壓へ付ける。豊次郎は脆くも氣絶

する。かよ子はよろ／＼と食卓に凭れて俯伏しになる。そこへ、喜多雄が入つて來

る。二人の様子を怪しんで、かよ子の肩を叩いて、

喜多雄 おい、どうしたのだ？

かよ子（目を見上げて）わたし、兄さんに殺されかけたの。何の罪もないのに兄さんに喉を

締められかけたのです。わたしどうもしたのぢやないの。兄さんがどうなつてゐてもわた

しの所爲ぢやないの。兄さんは氣が狂つてゐるんです。（昇氣した調子で、しかしあたりを憚つてゐるやうに云ふ）

喜多雄 お前はよくそれで無事だつたな。兄貴は頭が變だと、今朝から思つてゐたのだ。

かよ子 兄さんの氣の狂つてゐることを、あなたはよく知つてゐるんでせう。

喜多雄は氣絶してゐる豊次郎の様子を側へ寄つて薄氣味悪さうに見る。

喜多雄 兄さんは狂人だかどうか、おれには分らない：：。兎に角、早く醫者を呼んで來なきゃならないよ。

かよ子 若しも豊次郎が息を吹返したら、わたしまたどんな目に會はされるか知れないから此處にゐられないわ。

喜多雄 だつて、おれ達が打遣つといひて逃出す譯には行かないよ。

かよ子 ぢや、お醫者と一しよに藤七をも呼んで、豊次郎さんがあばれだしたら、取鎖めて貰

はなきや恐いわよ。それに、喜い兄さんは、豊次郎さんの狂人だつてことを、よく證明して下さいね。

喜多雄 おれにはよく分らん。とに角直ぐに醫者を呼んで來させよう。

喜多雄が出て行くと、かよ子は、怖々豊次郎の側へ寄つて、警戒しながら、兄が氣絶してゐるか否かを検査する。そして、あたりを見廻しながら、兄の喉をおさへつける。

腕くも息の根の絶えてゐるのを認めたあとで、鏡の前に寄つて、亂れた髪を直しにか

かる。喜多雄が入つて來る。

喜多雄 兄貴は寝てるんぢやないか。気が變になつたからつて氣絶する譯はあるまいよ。

かよ子 さうかも知れないわ。兄さん、側へ寄つてよく見て御覽なさい。わたしは怖くつて寄りつけないわ。

喜多雄 (兄の側へ寄つて、その死相を注意して) 變だなあ。昇奮して心麻痺でも起したのかしら。

かよ子 さうかも知れないわね。(落着いた顔して振向いて) 豊兄さんはもういやなことを考へてゐないで幸福ね。あんなことばかり考へて目を暮らしてのよりは、氣絶でもしてゐる方が幸福だつてことが、わたし今やうやく分つてよ。

喜多雄 お前は どうしてそんな呑氣なことが云つて居れるの？

かよ子 さつき、急用があつて兄さんに會ひに来た人は誰れだつたの？

喜多雄 おれはスツカリ忘れてゐた。お前も知つてゐる琴平の寺濱さんが、偶然此方へ来てゐておれを訪ねて来たのだ。兄貴の様子があたりまへなら、此處へ通さうと思つて、外に待たしてゐるんだが、こんな風ぢや駄目だな。

かよ子 お通ししたらいいぢやないの。わたし、異つた人に會ひたくつてたまらないのよ。

喜多雄 かういふ時だ、寺濱さんの意見でも訊いてゐるんだ。

喜多雄が與へ入つて行くと、かよ子は鏡面を見入つてクリームなどで顔の磨きに取り掛る。庭の方から藤七が入つて来て、「旦那様」と聲を掛ける。かよ子、聞耳を立てて、不安な態度で座を立つ。外を覗いて、

かよ子 爺だつたの？ まあいゝ所へ来て呉れたわね。此方の旦那様はさつき不意に目を廻してお倒れになつたのよ。上へ上つて御様子を見ておくれな。

藤七 それは大變だ。お顔へ水でもぶつかけたら息をぶつ返しなさるかも知れない。(上へ上つて、豊次郎の側へ寄つて) こりや、あたりまへの氣絶ぢやねえな。

かよ子 たゞの氣絶ぢやないつて。(驚いたやうに云ふ)

藤七 お醫者様に見て貰ふまでもない。わたくしが一目見てさへ分りませう。全體旦那様はいつの間にこんなにおんななさつたんでせう。お嬢様は御存じないんで御座いますか。

かよ子 わたしはちつとも知らないわ。朝御飯の支度に亭所の方へ行つてる間に、兄さんはそんなになつたのよ。……早くお醫者さんが来て下さればいいのに。

藤七 書間に外から人が入つて来て、御主人を殺して行くつてことはない譯だ。まさか、昨夕の女殺しぢやあるまいし。(獨言のやうに云つて) お嬢様、こりや、お醫者様を呼ぶさきに、警察へ届けなきやなりませんまいよ。

かよ子 爺は自分で警察へ届けに行かうつて云ふの？ (答めるやうに云ふ)

藤七 わたくしは家の旦那様のお指圖次第でどうにでもいたします。

かよ子 それで、御獄さんの人殺しの殺し手は誰れだか分つたのかい。

藤七 いゝえ、まだハツキリ分らないやうですよ。殺された女を連れて停車場を下りた男があつたらしいので、警察では昨夕のおそい汽車で来たお客を調べると云つてゐます。殺した男が、いつまでも、この土地に愚圖々々してやしまいと云つてゐますが、御獄さんの死人も殺されてゐるし、此方の旦那様もこんなになつていらつしやるし、……

かよ子 わたし、此處にゐるのが怖いわ。
藤七 爺やも氣味が悪う御座いますよ。こりや、たゞ事ぢやない。

かよ子 喜い兄さんも氣が變になつてるやうだから、わたし怖いわ。

藤七 わたくしも今朝此方へお伺ひした時からさう思つてゐました。(耳を澄まして) 旦那様の聲がする。不斷のお聲とはまるで違つて。お嬢様も御用心なさいませ。

藤七は事があつたら庭の方へ飛出せるやうに身構へをする。

三

ある田舎町の街上。夜。電柱につけられた街燈が暗い道をかすかに照らしてゐる。今様の耳かくしに髪を結つて、派手な浴衣を着たかよ子が、一方から入つて来る。向うから寺濱某(四十餘歳、體格逞しき男)が入つて来る。行きぢがひさま、

寺濱 かよ子さんぢやないか。
かよ子 あら。…先生が此方へ来ていらつしやるとは、ちつとも存じませんでした。
二人は留つて、顔を向合つて立つ。しかし、かよ子の顔のみハッキリ電燈の光を受け

て、寺濱の顔は光の外にあつて、絶えずボンヤリしてよく分らない。

寺濱 通りをかねてあなたに會ひたいと思つて、夕方此方へ来たんです。明日の朝はお訪ねしようと思つてゐたのだが、此處で會つてよかつた。どうです、身體の工合は？

かよ子 おかげで大變よくなりまして、この頃は薬も頂かないので御座いますわ。

寺濱 それは何よりだ。
かよ子 先生は最近に兄にお會ひ下さいました？

寺濱 それについてあなたをお訪ねしたいと思つてゐたのだ。兄さんはこの頃は精神狀態がよつほどよくなつてゐますよ。もう大丈夫でせう。此間會ひに行つた時には、あの時のことを夢のやうに思出して話してゐましたよ。それから、あなたのことも六つてゐました。安城家の血統はかよ子一人に残つてゐるんだから、結婚をさせるやうに骨を折つてくれど、わたしに頼んでゐました。わたしは以前、自分から縁談を持出したことがあるくらゐだから、お受合ひはして置きましたがね。
かよ子 わたしの結婚のことなど仰らないやうにして下さいました。二人の兄が一度期に

あんな恐ろしいことになつたのですもの。

寺濱 しかし、あの時の記憶を消すためにも、あなたに結婚なすつた方がいゝでせう。わたしのためにいゝんですよ。わたしもあの時には關り合ひがあつたので、あの時の氣持が今でも頭の中に残つていけない。

かよ子 それで、若しも兄の精神狀態が完全に回復しても、罪人になるやうなことはないので御座いませうか。

寺濱 そのことは心配なさらなくつてもいいでせうがね。…わたしはあの後、心の落着いた時分に時々思出しては、不思議でならぬんです。あなたによくお訊ねしたいと思ふこともあるんですよ。かういふことをお訊ねしちや、あなたがいやに思ひなされるかも知れないが、…わたしが門の外で會つた時には、不斷とそれほど變つてもゐなかつた喜多雄君が、その前から發狂してゐてあゝいふ恐ろしい犯罪をしたといふのも解らないことだし、ことに、御縁さんの前の殺人が喜多雄君の所爲だと極つたのも、僕にはよく呑込めないんです。警官や検事の訊問に對しては、わたしは批評がましいことを口へ出すのは遠慮して、藤七の云つた通りに同意したのでつた

が、警官や検事の解決した問題が、わたしにはどうも得心の行くまでに解決されてゐないのです。

かよ子 ぢや、先生は、兄の罪は冤罪だと思つていらつしやるんでせうか。

寺濱 わたしは疑つてゐる。…人間以外に、

魔物とか何とかいふやうな物があつて、豊次郎君に仇をして生命を取つて、御嶽さんの側でも女の生命を取つたのだと信じられれば、至極都合がいゝのだが、我々はさういふことを信じられなくなつたので、都合が悪い。喜多雄君は、御嶽さんの側の殺人も自分のしたことだと思つてゐるやうだが、わたしは、

どうしてもさう思はれませんな。

かよ子 でも、上の兄などは、上へは何ともないやうでも、精神に異状があつたのですから。

寺濱 喜多雄君の精神が何かの刺戟で突然狂つたにしても、理由のないのに、兄さんの喉を締めにかゝつたのは、不思議でならない。二人は不仲のいゝ兄弟だつたのだから。それに、豊次郎君が抵抗もしないで、たやすく息を取つたのも、わたしには理解の出来ない問題なのです。…喜多雄君自身は、精神が壊まつて来ると、自分が續けて二度も殺人

をしたつてことを認めてゐるやうな口を利くので、當人さへさう認めてゐることを、わたし一人が疑ふのは變だが、かよ子さんはどう思ひます？ あなたはあの時刻にゐたことだし、ことにあなたのやうな無邪氣な女の方の觀察は参考にして置きたいと、わたしは思つてゐるんです。これはわたしとあなただけの間の話にして、決して外に洩らすやうなことはしないから、腹藏なく聞かせて貰ひたいんですがね。

かよ子 それでは、兄は自分を罪人として認めるので御座いますか。(氣色はんで云ふ)

寺濱 さうです。喜多雄君のやうな不愉快な生活だつた青年が、自分が犯したかどうか分らないやうな罪を自分で認めてゐるのが、わたしには、一層不憚に思はれるんです。むしろ狂人になり切つてゐる方が、兄さんのためには幸福なものでせう。なまなかに、ボンヤリした自意識があるのがみじめです。

かよ子 先生のやうな方がさう仰るれば、わたくしもさういふ氣がいたしますわ。死んだ兄は、兄弟に殺されたにしても、魔物とか何かの手で殺されたにしても、結局幸福なのぢや御座いますまいか。ですから兄は自分を手に

掛けた者に逆ひはしなかつたので、恨んでもゐないのだらうと思はれますわ。

寺濱 ホウ、かよ子さんはあの事件をそんな風に考へてゐるんですか。(不愉快さうに云ふ)

かよ子 さう思つてゐるぢやないんで御座いますか。

寺濱 いけないこともないだらうが、あなたは二人の兄さんのたつた一人の妹さんだ。兄さんがあんまり死方をしたのを幸福だといふのはあんまり無邪氣過ぎますね。

かよ子 わたし、先生にだけ、打明けてお話しいたしますわ。…精神に異状があつた兄さんが、わたしを幸福にしてやるつて、わたしの喉を絞めようとしたから、わたし、怖くなつて逃出さうとして、思はず知らず、兄さんの喉を壓へつけてやつたのです。御嶽さんの女殺しは誰れの所爲か知りませんが、兄さんの死んだのは、喜多雄兄さんの所爲ぢやないんですわ。わたしのしたことです。

寺濱 かよ子さんはなぜそんなことを云ふんです？ あなたがあんなことをする筈もないし、第一あなたのか細い手で、何で大の男の生命を取ることが出来るのですか。わたし

が、心安立てで、出抜けに變な事を訊いたの
がいけなかつたか知れないが、昂奮しないで
心を落着けて下さい。

かよ子 検事も捜査も誰れもわたしに疑ひを
かけないから、何も知らなかつたと云つて、
藤七の云ふ通りに、喜多雄兄さんの所爲にし
てすましたのですけれど、本當はわたくしの
この手が兄の喉を壓へつけたのです。それを

喜多雄兄さんは御自分の所爲のやうに、今思
つてゐるのなら、わたし怖う御座いますわ。
喜多雄兄さんが、無實の罪だつたことも知ら
ないで青い顔して、狂人らしい目をして御自
分の手を兄殺しの手としてボンヤリ見てゐる
ことを思ふと、わたしちつとしてゐられなく

なりました。(自分の手を出して電燈の光で
見ながら物氣はしい態度をする)
寺濱 そんな華奢な手で人間の生命が取れるも
のですか。(かよ子の手を執つて) あなたは
安城家のたつた一人の相續者なんだから自
重しなければいけませんよ。…わたしがか
れからあなたの宿までお送りしませう。

二三人の人間が薄暗いところを、影の如く
通り過ぎる。一人の男、片端に立留つて此
方を見てゐる。その男の顔は分らない。寺

濱はかよ子の手を執つて歸りを促しても、
かよ子は動かない。

かよ子 わたしはあの時、次郎兄さんにおとな
しく絞殺されてゐたら、却つて幸福だつたか
も知れせんわ。逃げようと思つたばつかり
にあんな恐ろしいことをして。…先生、
わたしはこれからどうしたらよろしいのでせ
う。

寺濱 …あなたも兄さんのやうになつたんだ
な。(歎息する)

立つて見てゐた男、野卑な嘲笑を洩らして
行く。寺濱驚いてその後姿を顧みる。

私に取つては死の恐れを滅さない限りは、社
會がどんな風にならうとも、真正の幸福は得
られないだらうと思はれる。冤罪で死刑に處
せられようとも、正義のために犠牲的の死を
遂げようとも、あるひは近親知友に看護され
名醫の診察投薬を受けた果に温かい病床で
眠るが如く死なうとも、死はつまり同じだら
うと思つてゐる。

人間の煩惱、執着、愛と憎み、生と死、私は
懐手して食を得ながら、十年二十年の昔と
同じやうに今なほさういふ事を考へては心
を暗くしてゐる。當今の喧しい問題でもさう
いふ人心の現はれとしてのみ私の興味を惹
いてゐる。

(『文藝評論』の「田圃雜記」より)

安土の春 (三幕)

時代
天正九年三月十日頃

人物
織田 田勝 柴田 勝家 村瀬 新八 堀内 三郎 四兵衛 小姓 源吾 侍 七之丞 同 夕月 女 若菜野

湖水に近い街道。路傍に松や柳が植ゑられ

(一)

てゐる。桃や櫻も咲いてゐる。旅人の装ひをした四郎、衛(三十歳前後)、荷物をおろして、大きな松の木に凭れて居眠りをしてゐる。

安土城内の侍女夕月(二十歳あまり)、花野(二十歳以下)、あたりの春景色に見惚れながら、うか／＼と出て来る。

花野 (ふと氣づいたやうに、不安らしく) こんなに遠くまで遊びに出てよろしいのですか。お天氣はよし、あなたのお話があんまり面白いので、ついうか／＼とこんなところで来てしまつて。わたし、何だか恐ろしいやうに思はれますわ。

夕月 (お轉變らしい身振り) まあ、花野さんのお氣の小さいこと。大丈夫で御座いますよ。上様が御参詣になつた竹生鳥は、こゝからは陸と海とで片道十五里もの遠いところぢや御座いませぬか。たとひ、上様が韋駄天のやうにお駆け遊ばしても、日のうちにお歸りなさる氣遣ひはありませんよ。それに、羽柴様が

お待受けなされて、賑かなお持做しがあるに極つて居りますから、今夜は、御小姓衆も御一しよに長濱に御逗留遊ばすだらうと思はれますわ。

花野 昔様はさう仰有つて、大勢で御安心なすつて、桑實寺のお法師様へもお詣りになつたりしたのですけれど、留守のうちは氣をつけると、お服様がお出掛けの時に、大きな聲で岩淵様にお吩咐けになつた、あのお聲が、わたしには氣になつてなりません。

夕月 それは、あなたが御城内の生活にお馴れなさらないからです。わたしなどもはじめのうちはお上のお聲を襖の外で聞いてさへ身震ひしたこともあつたのですけれど、馴れるとそれほど御座いませぬわ。今の時世では、この御城内に住まつてゐるほど安心なことはないのださうです。わたしの叔母は朝倉様に御奉公してゐたために、敗軍の飛ばつちりを受けて亡くなつたのださうですわ。今の時世では御威勢のつよい信長公のお側にゐるほど、氣丈夫なことはいと、父がさう申してゐました。あなたもお迷ひにならないで、此方に御辛抱なさいました。

花野 さうは思つて居りますけれど、...

夕月 それに、上様は、先日京でお馬揃へを遊ばしてから、大變に御機嫌がよろしいんです。竹生島からお歸りになつたら、幸若太夫をお召しになつて舞を御覽になる手筈になつて、わたしもまでも見せて頂けるのですから、樂みで御座いますわ。

花野 (ふと元氣づいて) わたしはまだ世間で評判の幸若太夫の舞を一度も見たことは御座いませんの。

夕月 同じ太夫の舞でも、外で舞ふ時と、信長公の御前で舞ふ時とは、舞振りがまるで違ふと、お侍衆がよく申して居ります。上様もお氣が向いた時には、御自分で小鼓をお打ちになつたり、女踊りをお踊りになることもありますのですよ。

花野 (微笑して) あのお殿様が……

夕月 (向うを見上げて) 此處から見たお城の眺めの立派なこと、御覽なさい。高欄の振寶珠が春の日できらめいて……キリシタンのお説法で聞いた天國とかは、あんなところぢや御座いますまいか。

花野 はじめて父に連れられて此地へまゐりました時に、丁度この邊からお城を見上げて、あのやうな立派な處に御奉公が出来たなら

と、わたし、どんなに喜んだか知れませんでした。

夕月 同じ町人でも、このお城下の町人ほど仕合せなものはお座りませんの。(ふと旅人に目をつけて、面白さうに) 花野さま、御覽なさい。この旅商人がいゝ氣持で眠ておますこと……わたしたちも此處で休んで、往來の旅の人でも見て、ゆつくり歸ることにいたしましたせう。まだ日は高いし、今日を過ぎたら、いつまた外へ自由に用られるか分らないのですから。

二人は松の木蔭に腰をおろす。旅人は薄目を開けて二人を見る。
そこへ眉目美しき村瀬新八(二十歳あまり)の青年、瀟洒たる身装をして現はれる。考へ事をしてゐる。

夕月 新八さま、何方へいらつしやいましたか？

新八、足を留めて評しげに二人を見る。
新八、あなたこそ、此處で何をしてゐなされる？

夕月 風は吹かず、花は眞盛りで、ホカ／＼と温かくつて、こないゝ日和は、一年のうち

に、今日の外にまたあるもので御座いませうか。
新八、それで、お前さまたちは、鬼のぬぬ間に

生命の洗濯に出なすつたのか。鬼でも、今日のやうな長閑な春風に誘はれると、氣保壺がてらの神詣でをする氣になるのだから。

夕月 鬼とは？……新八さまは何故そんなことを仰る？
夕月が顔色を變へると花野はおびえた顔色をする。

新八 あなたがさう思ひなさらなければ仕合せだ。(口調を變へて) わたしは、今日は愛智川べりをひとり歩いてみました。花も花だが、堤には若草が萌出て、空には雲雀が鳴いてゐました。わたしは、堤の上に寝ころんで

元氣のいゝ雲雀の聲を聞きながら、目を開けて面白い夢を見てゐたのです。
夕月 面白い夢と仰るのは？……あなたは岐阜の若殿様のお供をして、甲州征伐にお出掛けなさる筈ぢや御座いせんか。目醒ましいお手柄をなさるやうに、戰場の夢を見ていらつしやつたの？

新八 ハ、さう思ひたければさう思つてゐなされるが、……わたしは、城之助様にお願ひして安土へ來たのは、この頃、寝ては夢み醒めては思つてゐることを爲し遂げたいと思つたからなんです。ロームとかリスボアと

かは、同じ下界の都でも、安土や岐阜とは違つて、人といふ人は神の子らしく睦じく暮らしてゐるさうな。

夕月 あなたも物好きな。南蠻へお渡りになりたいと思つていらつしやるの？ オルガンチノ和尚様にしろ、フラテン破天連にしろ、鬼か獸のやうな身體してゐるぢや御座いませんか。あんな人ばかり住んでゐるところへ、あなたのやうな柔しい方がいらつしやつたら、頭から食はれてしまひますわ。異人の女子はまだ見たことはありませんけれど、さぞ雲をつくやうな大きな身體をしてゐるので御座いませう。

花野 夕月さま、いつまでもこんな處にゐて、人に見られてはいけませんから、もう歸りませう。(旅人の方を氣にする)

夕月 え、もう行きませう。眞晝間、街道の眞中で新八さまとお話なんぞして。(ふと、氣にしないで立上つて) さう云へば、先日、上様は、新八が岐阜から來たら直ぐに呼べと、岩淵様に仰付けになつてゐました。

新八 上様がわたしを？(顔を曇らせて) わたしのことは、誰れにも云はないやうにして下さい。

二女出て行く。新八も物を考へながら行きかけたが、ふと、旅人に目を留めて、新八 お前さんは何處から來なすつた？

旅人 (訊かれるのを待受けてゐたやうに) わたくしは甲州から漆桶をかついで京へ商ひにまゐりまして、これから歸るところなので御座います。

新八 甲州者だなどと、大きな聲で云ふものぢやないよ。お前も生命知らずだな。遠州の武田方の高天神の城も徳川勢に攻めまくられて今日にでも落城してゐるかも知れないのだ。隙頼どのがいくらジタバタしても、今となつては、籠の中の鳥も同然なのだ。お前はそんなところへ歸つたつて爲様がないぢやないか。第一甲州境は、四方八方法道といふ道は塞がつてしまつて、歸りたくも無事に歸られまいよ。

旅人 (氣樂さうに) いや、それはわたくしもよら存じて居ります。先日、京の町で此方のお殿様のお馬揃へを拜見して居りますと、側にゐて世間話をしてゐた男が、甲州言葉で物を云つてゐましたので、わたくしは懐かしくなつて、故郷の様子をよく訊ねました。その男

は信玄公御在世の頃の御威勢が影も形もなくなつたのに諦めをつけて、御奉公先から出奔して、いゝ御主人を捜しに京へ來たと申して居りました。わたくしは、親も子も女房もないので御座いますから、世の亂れた危かしい山奥へ、わざ／＼歸つて行かうと思つては居りませぬ。今の世に住めば安土と、世間の人の申してゐますやうに、わたくしは、成らうことなら、このお城下で生活を立てて行きたいので御座います。：：かう申してはあまりに不しつてお叱りになるかも知れませんが、あなた様のお屋敷でも使つて頂く譯にはまゐりますまいか。どんな御用を仰付けになつても、骨身を惜まないで御奉公をいたします。

新八 おれなどを主人と頼んでは出世する見込みはないよ。上様にお仕へ申したらよからう。お前は身體構へもしつかりして一くせありさうだ。戰場へ出ても役に立ちさうだな。(相手をよく見る)

旅人 御威勢の強い此方のお殿様にお目通りいたすのは恐れ多う御座います。お馬揃への折のお姿を一目拜見しただけで、目がつぶれさうに思はれました。

新八 ハ、い。皆なが衣服で脅かされるのだ。

：前代未聞の馬揃への儀式だつて、大きな虎が綾や錦で着飾つて、小さな虎を引連れて駈廻るだけのことだ。(獨言のやうにさう云つてから、親しきをもつた口調で)世間では何と云つてゐるか知らんが、上様は氣さくな方だ。お前の面つきを一目御覽になつたら、こいつ役に立つ奴だと、餘計な穿鑿をなさらないで直ぐにお召抱へになるかも知れない。さうしたら、お前も羽柴筑前どのぐらゐに出世しないとも限らないな。ハ、ハ、ハ、。

旅人 何ぼわたくしが世間知らずの山家猿でも、そんな癡人の夢見たやうな大それたことを考へるもので御座いませうか。さつき、ホカ／＼した天道様のお光を浴びて、いゝ氣持で夢を見て居りますと、お女中様のお話のうちに、あなた様は、岐阜のお殿様のお供をなすつて、甲州征伐へお出ましなさるとか承りましたが、若しもそれが本當で御座りますなら、わたくしをあなたのお伴になされて下さいませ。お草履を持つなり、馬の轡を取るなり、何なりと生命をかけて御奉公をいたします。

新八 さうして、虎の威を借りて、自分の生れ

故郷を荒らさうと云ふのか。(相手が氣にするのを見て)なに、おれはお前を咎めるんぢやないよ。昨日まで莫大な知行を宛けて呉れた主人に、今日は自分の都合で弓を引くのは、當世有りうちのことなのだ。それはそれでいいのかも知れないな。：しかし、旅の人

武家奉公は、まあ止にした方がよからうぜ。御主君から相應にお目を掛けられてゐるおれでさへ、この大小の人物刀は抛出して、戦争騒ぎのないところで暮らしたいと思つてゐるのだよ。土百姓や素町人から、一國一城のあるじと成上つた人を、傍で見ると、あれこそ人の中の人だと羨ましく思はれるであらうが、さて成上つて見ると、さまざまに苦勞があるのだ。あの陽氣な羽柴どのも戰場で、水攻火攻の掛引に智慧を絞るよりは、お上の御機嫌を害ねまいと、その屈託に骨身を削つてゐられるのだ。徳川どのも、虎狼の牙商を退けるためには、物領の信康どのに無理往生に腹を切らせた。お前も武家奉公なんぞ思立たないで、どこか安穩な土地を見つけ

て、こつそり生活を立てることにしろ。あの山に光つてゐる七重のお城も、いつまであたま立つてゐることやら。四日市の濱で見え

る和のわたり(盛氣樓)見たいなものだ。

旅人 安穩な土地を見つけると仰有つても、安土の町の外に、どこか安穩な土地が御座いませうか。
新八 小田原か山口はまだ榮えてゐるさうだが、それともいつまでも安穩ぢやあるまいよ。大きな虎や小さな虎があらはれてゐる世の中だ。おれも安穩な土地を捜さうと思つてゐるのだが、ロームカリスポアか? : (夢見るやうに天の一方を見る)

旅人 さつきからあなた様の仰有るやうなことを承つたことは御座いませんで何とも合點がまゐりません。：わたくしのお願ひをお聞届け下さらぬのなら、外の奉公口を捜しませうが、戰場へ出て氣おくれのするやうなわたくしぢや御座いせん。わたくしの祖父も父も、名もないもので御座いましたが、武田家御先代のお伴をして、人並の働きはいたしました。
新八 (微笑して)それはえらいな。それなら、信長公の竹生島參詣のお歸りを此處でお待ち受けして、直々にお願ひするといふ。そこへ堀内三郎・新八と同年輩で、彼れよりは質素な服装をしてゐる)が入つて来る。

三郎 新八どのの此方に来てゐられたのですか。キリシタンの學校の建築も大分抄取つてゐるから、それを見にお出でなされたのですか。建築が落成したら、あなたは御入學なさるのであらうと噂をいたして居りました。

新八 安土にセミナリオが建つたなら、早速入學して異國の學問を修業したいと思つて、城之助様にお願ひしてゐたのだが、それはもう止めにした。わたしは大望を胸に持つて、岐阜から出て來たのだが、…そんなことをあなたに話しても爲方がないな。…それよりも、此處にゐる旅の人は奉公口を捜してゐるのだが、あなたは、お世話しておやりなさらぬか。

三郎 いや、この頃は諸國からいろ／＼な奴がやつて來る。今に安土から八幡へかけて、野にも山にも、人間がウジャ／＼するやうになるであらう。(旅人を見詰めて) しかし新八どの、この男はたゞの商人ではありません。油斷のならない面をしてゐる。

新八 たゞの商人でも、何處かの落武者でも、どちらでもいいではないか。

三郎 淺井が朝倉の殘黨が、旅商人に姿を窺して、信長公を附狙つてゐると思つて見ると

一興だが、(刀を抜いて、旅人の前へつきつけて) 貴様は亡君の恨みを晴らさうと企んでゐるのか。

旅人 これは飛んでもないことを仰せられます。(警戒しながら) こちらの旦那様は、わたくしの身の上をよく御存じなんで御座います。

新八 (笑つて) 心配するな。戯れだよ。…豫讓や景清のやうな男は昔嗜の中の人物ぢやないか。しかし、それだから、上様もお仕合せだ。死んだ主人の恨みを返したい男があちらにも此方にもあつた日にや、信長公が首を百も持つてゐらせられても足りないくらいだ。…三郎どの、脅かしはもうお止しなさい。

三郎 わたしはこの土地にすつ込んでゐたため、暫らく血のにほひを嗅がなくなつて退屈してゐたのです。春の日をノラリクラリ遊び暮らしただけで、このまゝ屋敷へ歸つちや興がないと思つてゐたのだが。(刀を鞘に收めて) 新八どののお言葉がなかつたら、斬り菜えのする此奴を見のがしてなるものぢやない。

旅人 わたくしは決して迂散な者ぢや御座いません。どうぞお許しなすつて下さいまし。

旅人は二人に向つて恭しく挨拶して、荷物を背負つて急ぎ足で出て行く。

新八 可哀想に。(旅人の後を見送つてゐたが、何かを見つけたやうに當惑する)

三郎 春の日に毎日因循としてゐちや退屈でなりませんよ。武田征伐には是非ともお供しようと思つて居ります。

そこへ、侍女若菜(二十歳ばかり)が道を急いで入つて來て、二人の青年と顔を見合せ

新八 若菜どのはお一人で、どこへ行つてゐなすつた? 今日若い女が供をも連れないうで、よく出歩いてゐるから驚く。

三郎 天下泰平の目出度いしるしてせう。それに、今日はお上の御不在をいゝ夕時にして御城内も奥御殿はガラ空きで、御女房たちも山をお下りなさらぬまでも、二の丸までお出でなされて、春の日を樂んで居られます。

若菜 わたくしは、皆様と御一しよに桑實寺へお詣りしてゐました。只今、長老様が皆様のために御説法をなすつていらつしやいます。わたし、何だか聞きづらく思はれましたから一人でそつと聽問の座を脱出してまゐりました。

新八 それでは、あの梅干坊主が、徴臭い佛の道を説いて、廻らぬ舌でキリシタンの毒口を利いてゐたのだな。若菜どのもなぞ桑實寺などへお詣りなされた？ 先日のおたよりでは、オルガンチノ様のお導きで、まことの道が臘に分りかけたと云つてゐられるではないか。それを、わたしはどれほど喜んでゐたか知れないのに。

若菜 わたくしの心が弱う御座いました。…：わたくし、外の方のやうに、氣保養にお寺まゐりをいたしましたのでは御座いませんの。新八さまは若殿様が御召連れになつて、甲州の征伐にお出でなされると、皆さまがさう仰有つてゐましたから、お身體にお怪我のないやうに、人に俵れたお手柄をおあげ遊ばすやうにと、一心にお祈りしたので御座います。

新八 (ながくしげに) 若菜どのは何を云はれる？ 古い木の林や石ころで作つた佛に祈つて御利益があると思つてゐられるのか。愚なことだ。

三郎は二人の陸じい様子を羨ましげに見てゐる。

若菜 長老様のお説法を承つてゐるうちにふとわたくしの迷ひに氣がついて、急いで逃

げてまゐりました。どうぞ勘忍して下さいまし。

新八 それに、わたしは、戰場へは行くまいと思つてゐるんです。春の光のやうにまことの神の光に包まれてゐる國をたづねて行きたいと思つてゐるんです。

若菜 それはどこで御座いますの？
新八 …：ローム、リスボア、ヴェネチヤ。(あ

こがれてゐるやうに云ひ) 高麗大明天竺よりも遠いところで、女子などの行けるところぢやないんです。

若菜 (悲しさに) なぜ、さういふところへいらつしやいますの？
三郎 新八どの南蠻へお渡りにならうと思つてゐられるんですか。上様の天下統一の大事業を見ようとはなさらないで…

そこへ、鎌田信長(四十八歳。黒い南蠻笠をかぶり、唐錦の服装にて虎の皮の向はぎを腰に當つ) 駿馬にまたがつて氣をせはしく入つて来て、若菜と新八とを見ると、馬を留める、三人は愕然として、匂ひつくばふ。

信長 (眉を擡めて) 女郎は此處へ何し来た？
新八、うぬも、おれの目通り許さぬさきに、

どんな面してこの街道をほついでゐた？…：
どいつも面を上げる。

三人は恐るゝ顔を持上げる。
新八 今朝参着いたしました、上様は御他出と承りました。

信長 それで女郎を引張出して、氣儘な遊びをしてゐるのか。

彼れはつか／＼と新八の側へ寄つて、鞭を上げて、その顔を打つ。

新八 (痛みを忍びながら) 若菜どの桑實寺へ参詣せられて、只今偶然此處で行合ひましたので御座います。

信長 なに、桑實寺へ？
三郎 大奥の方々がお揃ひで桑實寺へお詣りになつて居ります。

信長 不埒至極だ。三郎、其方はこれから桑實寺へ行つて、一人残らずふん縛つて来い。坊主どもが留立しても容赦するな。急いで行け。…此奴等二人はおれが此處で成敗する。

三郎は、ハツと答へる間もなく、一さんに、後をも見ずに馳けて行く。

信長は馬から飛び下りるや否や、刀を抜いて、すでに半ば死んだやうな若菜をさきに、新八をも、大根でも切るやうに斬倒す。

斬られると同時に、「ジエス、キリスト」と呼ぶ新八の哀切な聲が聞える。信長その聲に耳を留めてあたりを見廻す。そして、刀にしたる血汐を振つてゐるところへ、かの旅人が、松の木蔭から恐る／＼近づいて、死骸の上衣を取つて刀を拭はうとする。

信長（聲に心惹かれてゐた彼れも、ふと旅人に氣づいて）誰れだ？

旅人 御奉公いたしたいと存じまして、上様の御歸城をお待受申して居りました。

信長 さうか。…死骸を片付けて後から隨いて来い。

そこへ、二人の小姓、馬に跨つてへと／＼になつて入つて来る。

信長 オ、源吾、七之丞、急いでおれより先へ歸つて、城外へ遊びに出てゐる女子どもをふん掴まへて、珠數つなぎにく／＼置いて。…（獨言のやうに）こんなことがあらうと思つて、長濱の響應を打ちやつて、馬を飛ばして戻つて来たのだ。

(二)

安土城内、信長の居室。襖には懸簾から駒の出た繪が描かれてゐる。

銀燭まばゆきなかに信長は宵いだ服装にて、夕餐の膳に向つて、盃を取つてゐる。小姓、源吾、七之丞など、傍に待す。

信長 其方たちも今日はくたびれたであらうな。

源吾 ハイ。…上様のお姿を見失つてはならないと思ひまして、無我夢中で駆けました。

信長 おれもやがて五十になる筈だが、まだ若い時分と異はないよ。今日は一つ根氣だめしと思つて、十里の道を一息にやつつけたが、左程に疲勞もしなかつた。二十年前に桶狭間へ驅つけた時のことが思ひだされる。…

思ひだすと云へば、今日の歸り道に街道で遊んでゐた百姓の子を二人ばかり踏潰したやうに思ふが、其方たちは氣がつかなかつたか。

七之丞 わたくしも無我夢中で駆けましたから、何處の村であつたか、見分けはつかないの

で御座いますが、百姓共が大勢で、血みどろになつた子供を抱へて騒いで居りました。

それでは、あの子が上様の御乗馬の蹄をお汚し申したので御座いませうか。

信長 人間は脆いものだな。（ちよつと感慨に打たれたやうに云つて、小姓に酌をさせて）

おれが長濱泊りを止したために、其方たちは御馳走を食へ損つて残念であらうな。秀吉のことだから、氣の利いた料理を拵へて待つてゐたであらうのに。…そのかはり、このおれの膳の物を頒けてやらう。

信長は箸を取つて、皿の肴をはきんで、源吾に突きつける。源吾は、恐縮してゐる。

七之丞 わたくしどもは、後ほど御膳部のお餘りを頂戴いたしたう存じます。

信長 馬鹿な奴だ。さあ手を出せ。小笠原流とかの禮儀作法を心得てゐるつもりか。馬鹿もあつたものか。おれが許す。肴を掴んで食へ。

恐る／＼差出した二人の手へ、肴を與へる。二人は謹しやかに食べる。

信長 將軍らしく、公卿らしくと、酒を飲むにも氣取つてゐた奴等は、おれの馬の蹄にかけると、今日長濱街道で踏潰した餓鬼見たいなものだ。

そこへ、三郎が入つて来て不伏する。

三郎 仰せつけ通りに、桑實寺詣りの御女房たちを、召捕つて御城内へ連れて、歸りました。

信長 中庭へ出して、一人残らず首を打て。

三郎 かしこまりました。…あの、桑實寺の

長老様が、お願ひの筋があつてお目通りいた

したいと、お次の間に控へて居りますが、い

か取計ひませう。

信長 枯木のやうな坊主に會ひたくはないが、

来てゐるのなら、ちよつと會つてやらう。そ

こへ顔を出せと云へ。

三郎 ハイ。

三郎 三郎が行きかけると、

信長 坊主にはかまはずに、其方は早速女郎ど

もの成敗に取りかゝれ。一刻も猶豫はならん

ぞ。

三郎 仰せつけ通りにいたします。

三郎 三郎、出て行く。

信長 (小姓達に向ひ) 其方どもも腕試しがし

なければ、三郎の手助けをして、罪人の首を

斬つて来い。

源吾 (ハハ) 答へただけで座を立たない

七之丞) 三郎へ、老僧が珠数を手にして入つて来よ

うとする。

信長 そこでよい。用事を聞かう。

老僧 襖の外で平伏する。

老僧 上様のお慈悲をお願ひ申したう存じま

す。

信長 それはならぬ。重ねて申すな。

老僧 せめて、皆様のお生命だけはお助け下さ

いますやう、愚僧の身にかへてもお願ひ申し

ます。

信長 くだく云ふな。

老僧 皆さまは、上様の御武運を佛に祈願し

てゐられました。その心根をお酌取り遊ば

して。

信長 タハケたことを申すな。おれの武運が木

や石に刻んだ佛との關係がある？ おれ

はおれの力で、手向ふ奴を片づけしから征伐

して来たのだ。其方たちに現世の勝利や死

後の冥福を祈つて貰はうとは、夢にも思つて

ゐないのが、其方にはまだ分らぬのか。うつ

け者め。

老僧 愚僧の身につきましたは兎に角。…上

様も竹生島へ御参詣遊ばした當日で御座いま

すから、か弱い女性の方々を御成敗遊ばすの

はいかいかと存ぜられます。

信長 何だ。おれに意見するの。おれは

怒りたければ怒り、斬りたければ斬るのだ。

老僧 左様なれば、罪をお恕しなさりたく思召

それがどうしたといふのだ。

してお怒し遊ばしますやうに。

信長 くだい。…それほど女郎どもを庇ひた

ければ、其方も一しよに冥土へ行つて、福樂

へでも淨土へでも、勝手なところへ連れて行

け。…源吾、この坊主を引立てて、三郎の手

に渡して首を打たせる。おれの日ざはりだ。

早く引立てる。

源吾 直ちに立つて行つて、老僧を捉へる。

源吾 御上意だ。お立ちなされ。

邪怪に老僧を引張つて出て行く。

信長 (ふと耳を留めて) 七之丞、あれを聞け。

中庭から泣喚く女子の聲が聞えて来るではな

いか。…人間は脆いものだ。(盃を口にし

たが前へ抛出して) 酒がぬるくなつた。温

めて来い。

七之丞、出て行く。信長、何かの聲を拂ひ

のけるやうな態度をする。

信長 (獨言) 新八ももうこの世にはゐないの

だな。…人間は脆いものだ。

そこへ源吾、入つて来る。

信長 坊主は三郎へ渡したか。

源吾 たしかに三郎どのへお手渡し申しまし

た。

信長 あんな枯木のやうな坊主は、斬つても血

は出まいな。

源吾 柴田修理亮様が只今参着いたされまし
た。明朝お目通りがかなひませうかとお訊
ねになつて居ります。

信長 (喜んで) 修理亮が来たか。丁度いよと
ころだ。直ぐに呼べ、…それから膳部は一
先づ次の室へ下げて、其方達はおれが呼ぶま
でそちらで休息しろ。

源吾、膳部を持つて出て行く。

信長、長押から槍を取下して、幾たびかし
ごく。

そこへ、柴田勝家(五十二歳、無骨な身)が
小姓に導かれて入つて来て、槍の手なみ
に感心しながら座に就く。

信長 よく来た。(槍を収めて) 近う寄れ。今
まで京で遊んでゐたのか。

勝家 上様の御威光をもちまして、京の町も静
謐になりましたので、此たびは罷出ました
次手に、神社佛閣名所古跡の見物をいたしま
した。それよりも御馬揃へのお催しは前代未
聞言語に絶した御盛況で、老後の思出、こ
れに過ぎたことは御座いません。上様の御威
光によつて、天下がかやうに泰平に相成りま
しては、わたくし如きは、もはや御馬前の御

奉公をいたす場合もなくなりしました。先日拜
領いたしました城口の釜に湯を沸らして、北
國の遅櫻でも眺めて、この年までの手柄話で
も若武士に聞かせることにいたしました。

信長 ハ、其方は愚直だから、そんなこと
を云つてゐられて気が樂だ。何が天下が治ま
つてゐる?

勝家 高天神はまだ開城いたしませんか。

信長 いや、昨日家康から早打を奇越して、あ
の手附い城も今日か明日かの生命だと知らせ
て来た。あの城が潰れたなら武田四郎も狼を
もがれた小鳥同様だ。あの武田の小倅など、
おれは最初からさして心に掛けてはゐない
のだが、中國の毛利勢には一骨折らされさう
だ。四國には長曾我部がある。九州には島
津が居る。腹に一物ある高野の坊主どの始
末も何とかしなければならぬ。(魚込むや
うに云つて) 北國の景勝などは其方に任せて
ゐても安心だが…

勝家 上様もお心弱うおなり遊ばしましたな。
(微笑する)

信長 何だ。

勝家 今日の上様の御威勢では、毛利如きは春
の日に照らされる残雪のやうなものでは御座
りませぬか。(獨言のやうに) 羽柴め、幸
福な男だ。中國征伐を一手に引受けやがつ
て。

信長 筑前に筑前には筑前の役目があるのだ。其方は
おれに代つて北國を押へてゐて呉れ。(勝家
の顔を見詰めて) つい忘れたが、修理亮は今
年幾歳になる?

勝家 五十二歳に相成ります。

信長 さうだつたな。おれも人間の定命が近
くなつたのだ。

勝家 でも、上様は十年の昔と今日と少しもお
變りにならないぢや御座いませんか。わたく
しなどはこの通り頭が白くなりました。…
でも、元氣だけは昔と變らないつもりで御座
います。

信長 おれも元氣だけは、今時の若い奴等には
負けなかつてもりだが、年齢は年齢だ。おれも
夢如の世の中に、五十間近まで無事に生き
て来たのだが、年齢のことを考へると、何と
なく氣が焦かれる。毛利や長曾我部をわが
膝の前に匂ひつくばはせるのは、あと一年か
二年か、おれが定命に達するまでには日
本統一の大業も略目鼻がつくと、おれは信長
てゐる。…しかし、修理亮、このことは今日

はじめて其方に話すが、おれは日本統一だけで満足は出来なくなつてゐるのだ。高麗や大明に馬を駆けてゐる夢を、おれは毎夜のやうにこの頃見てゐるのだ。

勝家 (驚いて) では上様は、御馬揃へを異國の都で御催しなされたいので御座いますか。

信長 異國と云つても、高麗だけではない、明だけではない。先日、愛智川べりへ鷹狩に行つた歸りに南嶺の寺へ寄つて、伴天連どもの異國話を聞いたので、ひどく面白い思ひをしたのだが、その時から、南嶺の國々をも残らず、おれの手のうちに収めたくなつたのだよ。

勝家 (呆れて) わたくしには、南嶺の國々は、佛者の説かれる十萬億土と同様な遠い處にあるやうに思はれます。

信長 遠くも近くも下界の中にあるのぢやないか。

勝家 わたくしども雪の中に埋つてゐる田舎武士は、異國のお宗旨は薄氣味が悪いやうに思はれますが、上様には御信心遊ばすので御座いますか。

信長 日本の佛も異國の神も、おれに信心が出来ると思ふのか。しかし其方も明日にも作

天連に會つて聞いて見る。南嶺の坊主どもの話は、日本の坊主どもの古くさい話よりや、どれほど面白いか知りやしないぜ。

勝家 城之助様や三七様をはじめ、當地の若い方たちは、伴天連のお宗旨に凝つてゐらせられると承りましたが、それは本當で御座いますか。

信長 若い奴等は直ぐに珍らしいものにかぶれるが、淺はかなものだ。…おれは伴天連の説法はたび／＼聞いた。…聞いてみると、おれはそのジョースといふ異國の神と角力を取つて見たくなつたのだ。異國の神の前に匍ひつくばつてお慈悲を願ふなんて以ての外だ。

勝家 それはわたくしも御同意申上げます、角力なら、わたくしとても異國の神と取組んで負けることぢや御座いせん。(快げに笑ふ)

信長 (快げに笑ひ) おれも今日はうかと夢話をしてしまつたな。…さうだ。明日は其方が歸國いたすのなら、別れに何か御馳走しよう。温かい春の宵だ。誰れかに舞はせて見せようか。

信長 信長は手をたく。源吾、入つて来る。膳部を調へて来い。修理亮にも相伴を

させるのだから、その用意を吩咐けて来い。それから酒興を助けるやうに踊り子をも呼べ。三郎はどうした? 死骸の後片付は他の者にまかせて、直ぐに此方へまゐれと云へ。骨折賃に鬼柴田の酒の相手をさせて武勇にあやからせてやると申傳へよ。

源吾、出て行く。

勝家 御城内に何か變事があつたので御座いますか。

信長 なに、些細なことだ。其方などに話すほどのことでもないよ。

勝家 今日御城内は何となくお淋しいやうでは御座いせんか。

信長 この頃の京の町の賑ひを見た目には、安土の町はいくらか淋しく見えるのかも知れないな。淋しいと云へば、おれは何ぼ歳を取つても、樂隠居して公家業のやうに歌でも作つても、泰平を樂しむ氣持にはなれないよ。一日でもちつとすると氣が滅入つて来る。今日も長濱から竹生島まで五里の海上が退屈でたまらなかつた。小波も立たない鏡のやうな湖水は、見てゐて退屈なものだぜ。龍巻でも起ればいゝと思はれたよ。だから、南嶺の坊主どもが、世界のはてから萬里の波濤を凌いで

来た話を聞くと、おれの心が湧立つのだ。
勝家 上様にお目通りいたすたびに、勝家の全身にも活気が湧いてまゐります。

そこへ、三郎が入つて来る。

信長 罪人どもの首は刎ねたか。

三郎 仰せの通りいたしましたし御座います。死體は右近どののお計ひで、御新參の四郎兵衛どなどに運ばせて、桑實寺へ埋葬いたすことにいたしました。

信長 左様か。(軽く首づいて) さつきから其方に訊ねたいと思つてゐたが、新八と若菜とは云ひかはした仲ででもあるのか。隠さずに云つて見ろ。

三郎 わたくしはよく存じませんが、今日の二人の話は傍で聞いて居りますと、二人の間には何か譯があるやうにも思はれました。

信長 おれもあの時、咄嗟にさう睨んだのだ。二人はどんなことを云つてゐたか、修理亮への御脚走に話して聞かせたらどうだ。今時の若い男女の戀話は、おれや修理にも皆目見當がつかないのだよ。

勝家 新八とは村瀬左門の遣子のことで御座いますか。

信長 さうだ。城之助がおれにないしよで引

立ててゐた奴だ。

勝家 文武兩道に傑れてゐると承りましたが、……その若者は御城内へまゐつてゐるので御座いますか。

信長 おれが城之助に命じて新八を呼寄せたのは、戰場へ引連れるためではなかつた。新八には敦盛の舞を舞はせたかつたのだ。あれが舞つたなら、おれが鼓を打つてつかはしたのに。幸若大夫や清洲の友閑は、いつ舞はせても藝はうまいが、新八なら、敦盛が生れかはつて眼前に現はれたやうであらうな。

勝家 新八どのは舞も勘能なので御座いますか。

信長 知らなければ習はせる。敦盛の舞なら太夫の手をかるまでもない、おれが傳授してやる。……三郎、其方のまづい面では、牛若にも敦盛にもなれまいな。人の戀話を指をくはへて立聞きしてゐるのが相應してゐる。(嘲笑をもらす)

勝家 武士たるものは顔形などどうでもよろしいでは御座いせんか。三郎どのも、上様へさうお答へなさい。

信長 修理は自分の身に引くらべて、左様なことを云つてゐる。其方も大勢の美女や少人を

弄んで来たのであらうが、當世の若い男女のやうな、まことの戀の情は知らないだらう。

勝家 これは異な事を仰せられる。勝家とても戀の口説は身に染みて心得て居ります。

信長 これは面白い。話して見ろ。鬼柴田の戀物語は面白い。

そこへ、小姓たちが酒肴を運ぶ。

信長 皆な聞けよ。殿軍にかけては天下に類のない鬼柴田が、戀物語を聞かせてくれるぞ。

信長 小姓をして勝家に酒をすゝめさせる。

勝家 鯨飲す。

勝家 (生眞面目で) まだ三郎どのくらゐの若さで御座いました。はじめで上洛いたしました時、供をも連れず、吉田山あたりを遊び歩いてゐましたところ、上臈とは思はれませぬ、女房が、白綾の肌着に平絹の袴を裾短くつけて、薄色の短册をさげて、小童を一人連れて宮司の家へまゐるのを見つけました。あまり床しく思はれたので、その女房のあとを随けてまゐりますと、女子の方でも艶いた目でわたくしの方を見返りました。わたくしは目はまばゆく胸は騒いで、心も空になりました。流石は京の町だ、那古野や清洲の田舎

町とは違ふと思ひましたが、その女房の姿は今でもまぎ／＼と、わたくしの目さきにならつくので御座います。

信長 女子は京の女子に限るのだ。それから其方はいかゞいたした。その女房と戀仲になつたのか。

勝家 いや、それは勝家一生の心残りのある思出となりました。その日はうか／＼と宿へ歸り、あくる日から毎日、吉田山あたりを夢心地でうろつきましたが、再び行會ふことは御座いませんでした。

信長 權六も臆甲斐ない奴だな。掟も法度もない市街にゐて、何の遠慮が入るものか。なぜその女房を引かついで戻らなかつた？

勝家 恐入りました。

信長 權六と云つてゐたその頃の勝家は、おれの弟の信行に加擔して、おれを殺さうとしたのではないか。どんな身分の女であらうとも、女の子の一人や二人、奪つて來るのを遠慮するには及ぶまい。…三郎などは知るまいな、この勝家も、三十年の昔にはおれに手向つて、おれを十死一生の危い目に會はしたのだぜ。おれは負けなかつた。おれが勝つたからこそ、勝家も頭を刺つて詫びに來た。母上

のお取做して罪を許して、おれの臣下に加へてやつた。それが今では織田家第一の忠臣になつてゐるのだから不思議ではないか。…三郎、其方たちはまだ若いから知るまいが、これが世の中だ。おれが強かつたからだ。おれに力があつたからだ。おれの力にヒビが入つたら、おれも最後だ。おれの足許からでも敵が飛出して來るのだ。

勝家 若い昔のことを仰せられてはわたくしの身體にも冷汗が流れます。大罪はお許し下された上に、三十年の間、須彌大海にもたとへられぬ御高恩を蒙つたわたくし、未來永々、弓矢八幡、日本はおろか、南蠻の神にまで誓をかけ、上様に忠勤を怠ることは御座いませぬ。この勝家を筑前などと御同様に御覽遊ばされては、勝家も御恨みに存じます。

信長 舊弊な臺詞は止めにする、おれは善言はきらひだ。たつて誓ひたければ、織田信長にかけて誓へ。佛も神も踏みにじつた信長の力にかけて誓へ。力のあるうちは神と角力の取れる信長だ。力の衰へた信長は、美人形の内大臣だ。鳥おどしにしきやなりやしないよ。ハ、ハ、ハ。室町の案山子將軍の喜びさうな臺詞は止して、今夜はうんと飲め、おれ

が酌をしてやらう。酔つて槍踊りでも踊つて見せろ。

信長、勝家に酌をする。勝家、感謝して受けて、快く飲干す。

勝家 冥加にあるお持成しのお禮として、わたくしが無様な舞の手振を御覽に入れませう。踊り子たちの支度の出來るまでのお座興として御覽下され。

信長 修理亮の舞は珍らしい。舞つて見せろ。

勝家 ハツ。

勝家、立つて諷ひながら舞ふ。

「この世はつねの住家にあらず、草葉に置く白露。水に宿る月よりなほあやし。…人間五十年、化轉の内をくらぶれば夢幻の如くなり。一度生を受け滅せぬもののあるべきか。これを菩提の種と思ひ定めざらんは口惜かりき次第ぞと…」

信長 感じ堪へ恍惚として見てゐたが、ふと、

信長 そこで止める。それで十分だ。勝家、舞を止めて平伏す。

勝家 見苦しきものを御覽に入れました。信長、いや面白かつた。其方がかやうな隠し藝を有つてゐようとは思ひもつかなかつた。

勝家 上様の敦盛の舞を見やう見真似に覺えま
したので御座います。

信長 (恍惚として)「人間五十年、化轉の内を
くらぶれば夢の如くなり」(と詠つて)「一
たび鞭を上げると、百萬の馬を集めること
の出来るおれも、明日とも云はず今夜のうち
に誰れかに寢首を掻かれぬともかぎらない
のだ。」(と云つて、座中をじろりと見渡して、
三郎に目を留め)「三郎、其方たちは修理亮の
舞を見てゐたのであらうが、おれは新八の敦
盛の舞を見てゐたつもりだ。其方はあの時、
なぜ新八と若菜とおれの目から遮りなかつ
た。新八は其方を恨んでゐるぞ。人の寢首で
も掻きさうな面をしてゐやあがつて。」

信長は、さう云ふや否や、つと立つて、長押
の槍を取りおろし、

信長 この鋒先を、除けられるなら除けてみる。
其方生死の境だ。

三郎突きつけられる槍の穂先を外して、
三郎 御免遊ばせ。上様の御馬前で討死したす
まで、三郎の生命を三郎にお預け下さいま
し。

信長 よく云つた。今夜は許してやるから、勝
家にあやかつて、戦場で功名をしろ。

勝家 (不思議さうに)「新八どのはどうかした
ので御座いますか。」

信長 あの男はもうこの世にはゐないのだ。
：人間は脆いものだな。

勝家 (合點の行かぬらしく)「御意に御座いま
す。」

信長 (小姓たちに向ひ)「今夜は踊りは止めに
するから、さう云つて来い。勝家の舞だけで
澤山だ。」

(三)

その翌日の早朝。

城内の庭園の一部。

四郎兵衛、仲間男らしい新しい服装をし
て、庭を掃いてゐる。

そこへ、三郎が出て来る。

四郎兵衛 お早う御座います。

三郎 お前こそ馬鹿に早く起きて働くぢやない
か。忠實な働き振りが上様のお目に留つて、
今に出世するだらうよ。

四郎兵衛 わたくしなんぞ、大した望みは持つ
てゐやしません。寒い思ひ、ひもじい思ひを
しないで、今日がおくれれば、それで満足し
て居ります。

三郎 口先ではそんなへり下つたことを云つて
ゐても、腹の中では、天下を望んでゐるんだ
らう。しかし、お前は運がよかつた。昨日い
いところで上様のお目にかゝつて。

四郎兵衛 さう思つて喜んで居りましたが、
何だか寢醒めが惡う御座いますよ。あの時新
八さまとは、わたくしに親切に御意見を聞
かせて下さつた上に、わたくしがすんでのこ
とにあなた様に生命を取られかけたところを
助けて下さつたのですから、わたくしに取つ
てはあの方は大恩人なので御座います。その
大恩人が、どういふ罪があるのか存じませ
んが、上様のお手打になつたのぢや御座いま
せんか。：：：

三郎 本心からさう云つてゐるのか。どうも眞
に受けられないよ。おれが刀を突付けて脅か
した時に、お前は上べだけは驚いた風をして
ゐたが、腹の中は泰然自若としてゐた。おれ
はお前の度胸を見届けたつもりだ。

四郎兵衛 ハ、それは、今の時世に、刀や
槍の光に目が眩むやうぢや生きてゐられませ
んからな。：：：しかし、今夜はあんな怖い脅
かしは、眞平御免家りますよ。
三郎 昨日の無禮は謝るよ。おれも街道でお前

に會つた時には、血のほひに饑ゑてゐたのだが、天罰觀面、いやな首斬役を仰付かつた上に、自分の土手つ腹まで、槍の穂先で抉られようとしたのだ。それで、昨夕は變な夢に襲はれ通しだつたが、朝の冷つこい風に當ると、おれの頭もやうやく自分の頭のやうになつた。…あ、何處かで鶯が鳴いてゐる。

四郎兵衛 今日もし、お天氣で御座いますな。此處から湖水を眺めますと、繪のやうに思はれます。

三郎 たとひ繪のやうでも、おれたちは此處の生活には厭いでしまつた。あいたのは今日に はじまつたことぢやないが、今日は格別お城 住ひがいやになつたよ。

三郎 え。上様はもうお目醒めになつたのですか。

花野 三郎を呼べと、お寢間のうちで仰せられ たさうです。

三郎 早朝わたくしに御用のあつた例はなかつたのだが、…(訝しげに思ひながら入つて行く)

花野 (四郎兵衛に近づいて) あなたは昨日街道で荷物をおろして居眠りをしてゐた方ぢやありませんか。

四郎兵衛 左様です。あなたが今一人のお方とお話をなすつていらつしやるのを、居眠りをしてながら、いゝ氣持で承つて居りました。

花野 あの時の旅の方が御城内に御奉公をなさらうとは思ひませんでした。

四郎兵衛 昨日のお連れの方も此方にいらつしやるんで御座いませうな。

花野 (親しきうに) それが、わたしたち二人ともに仕合せだつたのですわ。皆様と御一しよに桑實寺にお詣りしないまでも、あの街道で、もう少し長く休息してゐたなら、若菜さまと同様な、恐ろしい目に會つたのに違ひありませんの。

四郎兵衛 ほんたうにあなたはお仕合せで御座いました。若菜さまとかはあんなにお美しくつて、お歳も若くつていらつしやつたのに、おいたはしい目にお會ひなされたが、でも、戀しい方と御一しよにお手打になつたのですからお心残りは御座いますまいよ。

花野 それでは、ほんたうに新八さまは若菜さまと睦まじいお話をしていraftしやつたんで

せうか。夕月さまはじめ、お知合ひの方は、それはまこと空言かと、疑つていらつしやるんですけれど。

四郎兵衛 いや、わたくしは松の木陰で、すつかり立開きをいたしましたから、よく存じて居ります。(興に乗つて) 天が裂け地がわれでも、二人の仲は變らないと云つてゐました。眞夜間街道の眞中であゝいふやうなお睦まじい様をお見せになつては、上様が御立腹遊ばすのは御無理も御座いますまい。

花野 (鼻奮して) そんなはしたないことを云つて、何方かのお耳に入つちや大變ですわ。あなたのためにならないからお恨みなさいよ。

四郎兵衛 恐入りました。…でも、新八さまはわたくしどもでさへ惚々するやうなお美しい方で御座いましたな。お姿が美しいばかりではなかつて、お氣立ては電しくつて武藝もお出来になるに違ひない。上様のなされ方もあんまり無慈悲ぢや御座いせんか。

花野 さう思ひなされるのなら、あなたは何故この御城内に御奉公をなすつたのです？

四郎兵衛 食へないからでさあ。(投付けるやうに云つて) 明日の日お上の氣紛れで、首が

朋から離れようとも、今日食へなきや困りませうからな。いや、危い綱渡りだ。

花野 たゞ御飯を頂くためだけの御奉公なら、こんな恐ろしいところにゐなくつても、よきさうに思はれますけれど。：：あなたがほん

たうにその氣でゐなさるなら、今夜にでもわたしを連れて、両親の家へ送届けて下さいませんか。両親は京の町外れで豊かに暮らしてゐるので、あなたに相當のお禮はいたしますわ。

四郎兵衛 飛んでもないことを仰有る？ わたくしばかりではない、あなたやあなたの御両親がどんなお咎めを受けるか分りません。

彼は、あたりに目を注いで、花野には取合はないやうにして掃除に取りかゝる。

そこへ、夕月が入つて来る。

夕月 花野さまはそこで何をボンヤリ考へていらつしやるの？

花野 何も考へてやしませんわ。

夕月 危い生命を助かつたらばこそ、今日一日でも、こんな美しい春景色が見られるのぢやありませんか。：：三郎さまも昨日のお手柄の御褒美に、上様から何か拜領なさるのでつて。

花野 三郎さまはどんなお手柄をなすつたのでせうか。

夕月 それは桑實寺參詣の方をお召取にいらつしやつて、首斬役までも首尾よくお勤めなすつたからぢやありませんか。

花野 武士衆の上様への御奉公は、そんなことなので御座いますか。昨夕中庭から聞えて

来たあの氣味の悪いうなり聲が、三郎さまのお手柄になつたのでせうか。不斷は陽氣だつた桂木さまや朝霧さまの、今際のお聲は、わたしの耳に染みついて、何時までも離れませんでした。：：夕月さま、どうぞあなたから岩淵様へお願ひなすつて、わたしがお暇を頂いて、両親の家へ無事に歸られますやうにして下さいまし。(歎願する)

夕月 (呆れたやうに) お氣の弱いにも程がある、：：あなたがお手打になるのぢやなし、取越苦勞をなさらなくつてもいゝぢやありませんか。今の時世では、あなたの御両親のお家よりも、この御城内にゐた方がどれほど安穩であるか知れないんですわ。日本の内でも、信長公のお城だけは、敵に攻められる氣遣ひはないんですから。

花野 あなたは御親切にわたしに力をつけて下さいませけれど、わたしはどうしても恐ろしくつて、よく晴れた春の日も暗闇のやうに思はれますの。そこで鳴いてゐる鶯の聲も昨夕の中庭から聞いた氣味の悪い聲のやうに思はれますの。(恐怖に震へる)

夕月 あなたはそんな聲を正直にお聞きになるからいけないの。わたしなんぞ、両手で耳を壓へて、いやな聲を耳に入れないやうにしてゐるんです。さうすれば、大風の吹通つたあとも同様になるんですもの。

四郎兵衛、さつきから掃の手を休めて、二人の方を見てゐたが、

四郎兵衛 昨夕は御奉公はじめに、大勢様の死骸の跡片付をされましたが、これぢや武家奉公も隠亡のやうで御座いますな。新八さまの仰有つたこともほんたうだ。

夕月 新八さまはどんなことを仰有つたの？

四郎兵衛が何か答へようとしてゐるところへ、三郎、前とかはつた立派な身づくりして、馬を牽いて出て来る。

三郎 (得意らしく) おれは、岐阜のお城へお使者として出立するのだ。大切な御用を承つてゐるのだ。これ見よと云はねばかりに、所謂武士らし

い氣取つた態度をして、馬に乗つて、

三郎 上様御龍愛のお馬に跨つて、春の街道を岐早まで驅つ付けるのだ。おれが使者の役目を果すと、天下にいかなる騷ぎが起るか、四郎兵衛、よく見て居れ。(芝居の武士らしく氣取つて云ふ)

四郎兵衛 無事に行つていらつしやい。(手軽く云つて挨拶する)

三郎、わざと庭の中を一廻りしてから、馬に鞭打つて驅出す。

四郎兵衛 三郎さまはうまくやりましたな。(羨ましうに見送る)

花野 また戦がはじまりますの？
夕月 だからこの御城内にあるのがまだしも安心なんですよ。

四郎兵衛 大戦がおつばじまつたら、おれも、どうかして自分の手で死骸の山を築きたいものだ。他人の斬つた死骸の跡片付だけぢや語らない。(獨言のやうに云ふ)

鶯鳴く。

私は織田信長の一生やその時代について興味を感じてゐる。それに關する書類を可成り讀んでゐる。それで、信長の一生を題材として長篇の小説か戯曲を書かうと、かねて企ててゐたのであつたが、それは手取り早く運ばないので、ふと思ひついて、短いものを書くことにした。

三月十日、信長御小姓衆五六人召しつけられ、竹生島御参詣、長濱羽柴筑前の所まで、御馬にめされ、これより、海上五里、御舟にて御社參、海陸共に片道十五里の所を、日の内に上下三十里の道、御歸城なされ希代の題目也。しかし御機力も餘人にかはり、御達者に御座候の處、諸人奉感候也。

遠路に候へば、今日は長濱に御逗留候はんと、何れも存知の處、御歸り候て、御覽候へば、御女房達、或は二丸まで出られ、或は桑實寺薬師參りも有、御城内は行きあたり、もだえ焦れ、仰天、無限。則ちくり縛り、桑實寺へ女房共出し候と、御使を遣はされ候へば、御慈悲に御助け候へと長老託事申上られ候へば、其長老を

も、同時に御成敗候也。

蘇峰氏の「近世國民史」によつて教へられた、信長の最も正確なる生活記録である太田牛一の「信長公記」中の一節を種子として空想を送らうしたのであつた。空想劇であると云つても、私は當時の時世や信長の一生については、可成り知つてゐるのだから、自ら歴史の片影がそこに現はれてゐるだらうと思ふ。

信長が無造作に人を斬るのを、私の好みから恣にさうさせたやうに、新潮合評會で云つてゐた人があつたが、信長は時として、蘇峰氏の所謂血に渴した魔鬼の如くやたらに人を斬つたものだ。小山内薫氏の「吉利支丹信長」にも出てゐるやうに、安土城新築の際には、信長自身白刃を提げて監督して、仕事をなまける人夫を斬らうと目を配つてゐたのだ。

しかし、これまでと同様に、「安土の春」だつて書きつ放しである。筆を探りはじめた時に、結末がどうなるかさへ分つてゐなかつた。戯曲や長篇小説について、豫め立案構圖を微細に定めてかゝることは、私には出来ない。だから實際の上演に際しては、随分差支へが起るだらうと思ふ。

(「文藝評論」の「人形芝居など」より)

歓迎されぬ男

人物

- 染井 久三 (三十歳前後)
- 伊東 秀雄 (三十餘歳)
- 大山 明三 (六十五六歳)
- 大山 治助 (明三の次男、二十五六歳)
- 夏江 (久三の妻、二十六七歳)
- くに子 (秀雄の妻、三十歳くらゐ)
- おちか (二十四五歳)
- その他数人

初夏の頃

(一)

本郷彌生町大山明三宅の應接室。以前醫師の家だったので、患者の待合室であつた部屋が應接室になつてゐる。畳の上にテーブルが置かれて、椅子が二三脚。壁に添つて、青いクッションのついた長いベンチが置

かれてある。大地震のための破壊の痕がまだ残つてゐる。

染井久三(三十歳前後、風采の揚らない貧弱な男で、質素な洋服を着てゐる)ベンチに横はつて新聞を読んでゐたが、退屈したらしく、欠伸をしながら起上つて、部屋の中をうろついてゐると、上手から、おちか(二十四五歳、大山の縁者だが、貧しいために、此家に寄寓して下女同様に働いてゐる)が、風呂敷をもつて買物に行かうとして庭へ出て来る。

久三はおちかの顔を見ると、微笑して庭の方へ寄つて、

久三 何處へ行くの？

おちか 牛肉屋まで。

久三 もうそろ／＼お午饭支度か。僕も大分腹が減つたが牛肉の御馳走になれるかしら。

おちか さあ、どうですかね。(辛氣なく云つて行過ぎようとする)

久三 ちよつとお待ちよ。(おちかを呼留めて)

僕は聞きたいことがあるんだよ。

おちかが足を留めると、久三は端近く乗出して、相手をも側へ寄せて、

久三 (あたりを憚るやうに) 治助さんの結婚問題が大分進んでるさうだが、どうなつてゐるんだね。伯父さんは今度は望みを囁して、纏めようとしてゐるさうだが、どうなつてるのかしら。治助さん自身はどんな考へでゐるのかしら。

おちか (不愉快さうに) あなたはそれを聞いてどうなさるの？ どうだつていゝぢやありませんか。あなたには御自分の御用がいろいろおあんなさるでせうのに。

久三 いくら僕が忙しくつても、人の結婚の噂を聞くぐらゐの餘裕はあらあね。おちかさんがさうツケ／＼邪慳な返事をするのは少し可笑しいね。…僕がこの頃一家團樂の茶の間へ入れて貰へないで、こんな殺風景な應接室でボンヤリ待たされてゐるのを、おちかさんだけは同情して呉れてもよきさうなものだ

が。

おちか (少し機嫌を直して) でも、この家では、一家團樂の樂みなんか、影もありやしませんが。それはあなたも御存じなんだけれど、

この頃はことに乾燥無味なんです。…
あるひは水の如き生活…久三さんこそ、宝借り生活をしていらつしやつても、一家團樂のお温かい家庭を樂んでらつしやる譯ぢやありませんか。

久三 お世辭にでもそんなことを聞かされるのははじめてだな。だけど、一家團樂でも、お温かい家庭でも、金がなくちゃ駄目だね。僕の求めてゐる金銭は、極めて僅少なものをだけれど。

おちか 今日、そのお金のことでいらつしたの？

久三 今日とはひどいね。僕はこの前来た時にも、金銭の無心なんか一言も云やあしなかつた。今日だつて、借金をしに来たのぢやない。僕の貧相な顔はいつも無心顔や乞食面に見えるのかな。

おちか へえ。それは不思議ですわね。伯父さんも伯母さんも、久三が金を借りに来るとたび／＼云つてらつしやつたから、わたしもさうとばかり思つておました。…それにあなたもお金の御用でもなければ、こんな家へいらつしやる必要はないぢやありませんか。

久三 成るほどね。余でも借りるためでなければ、僕がこんな家へ何しに来るのかと、おちかさんが思ふのも無理はないね。(大いに感ぜたらしく)僕は此處の伯父さんから金を借りようなんて、そんな不可能なことは思はなくなつてゐるつもりだが、腹の中で金が欲しい金が欲しいと思つてゐるから、その思ひが自ら顔付や言葉の端々に現はれるのかも知れないね。

おちか でも、あなたなんか男だから、いくらでもお金の取れる仕事が見つかるでせうのに。

久三 僕の家の奴がよくさう云ひますよ。男のくせにと云つて、我々男子をケナスのが女の常識なのかも知れないが、僕から云はせると、當節は女の方が金の蔓を掴まへることが手易いんぢやないだらうか。おちかさんほどの婦人がこんな家で牛肉買ひなんかに使はれてくすぶつた生活をしてゐるのを、僕は不思議に思つてゐるんだ。

おちか でも、わたしたちに適當したい、仕事は何處にあるんでせう。あなたが御存じなら教へて下さいね。

久三 さうだなあ。戯談にも僕に職業の相談

をしてくれる人は、あなたくらゐなものだ。…人間の職業はいくらでもありさうで、さ考へて見ると無いものだね。やつぱりこの家で辛抱してゐるのが一番いいんだらうな。

おちか …：こんな天氣のいい日曜に、お午餐のお惣菜の買出しに出掛けるなんか、こんな詰らないことつたらありやしない。

久三 ハ、ハ、ハ。治助さんの結婚話を聞かうと思つたのに、あなたが云はないものだから、所帯染みた詰らない話になつてしまつた。…まあ、早くお使に行つていらつしやい。僕に好意を持つてゐるおちかさんには、もつと面白い話を聞かせたいんだが、僕にはそんな面白い話の持合せは全くないんでね。

おちか ほんとに愚圖々々しちやゐられない。(ふと我に返つたやうに云つて、久三の側を離れて)御ゆつくりしていらつしやいと云ひたいけれど、あなたは、此處の家では、歓迎せられないお客様なんですからね。

久三 それはあなたに注意されるまでもないことだ。何處へ行つてもあまり歓迎される男の子ぢやないことは、御當人が百も千も承知してゐるよ。両親がかういふ風に僕を生みつけたのだから、今更ジタバタしたつて爲方

がない譯さ。

おちか あなたが其處にさうしていらつしやるのを見ると、病人がお醫者の家へ来て御診察の順番を待つてるやうに見えますよ。(笑ひながら云つて行きかける)

久三 うまいやがらせを云つたね。(淋しく笑ふ)

おちか、下手へ入つて行く。久三、何か咳きながら、ベンチに腰を掛ける。と、そこへ明三(六十五六歳、體格は逞しいが、リューマチスを病んで弱つてゐる)が足を引摺るやうに歩いて、訪問者島田某(四十歳くらゐの立派な男)を見送つて出て来る。久三立上つて、二人に向つて一しよにお辭儀をする。

島田 オ、梁井さんでしたか。(立留つて挨拶して)この頃はどちらへお勤めになつていらつしやる?

久三 お聞きに入れるほどのところぢや御座いません。

明三(島田に向つて)梁井は丸内の信託會社に出てゐます。今度は落着いて勤まりさうです。

島田 それは結構です。……ちと、お遊びに

らつしやい。

島田、香脱ぎへ下りる。明三は足のだるさを忍んで玄關先に立つて、客が靴の紐を結ぶのを待つてゐる。久三は壁の上に坐つて丁寧に見送る。

島田が出て行くと、明三は、苦痛を感じてゐるやうな顔付をして、椅子に腰をおろす。

久三 相手の様子に氣を留めながら、
久三 伯父さんはこの頃氣分がよくないんですか。

明三 ウ、ン。陽氣の加減で持病が出ていけない。去年まではこんなぢやなかつたのだが。

久三 陽氣の加減と云つても、この頃は晴天續きで温かくて、一年中の一番いゝ時節ぢやありませんか。

明三 お前たちにはよくつても、おれの身體にはよくないよ。

久三 それは病氣をもつてる人には、いゝ時候といふものはないんでせう。金に不自由してゐる人間にもいゝ時候はないんでせうかね。

明三(相手の言葉には耳を留めず、外を見ながら、少しの間黙つてゐたが)おれは今朝から二三人の來客に攻められて話疲れをし

てゐるのだが、お前は何か急な用事でもあるのかい。

久三(少しドギマギして)いや、差當つて用事があつてお伺ひした譯ぢやありません。……東京では身内は伯父さんのお宅だけだから、時々お伺ひしろと、故郷の母がいつも云つて來まして、時々は此方の御様子を、手紙で知らせてやらないと、叱られますので。

明三 それで、ちよいと、おれの家の様子を確認に來るのかい。何のことだ。(不快な顔して)しかし、これからは、わざと、來てくれるには及ばないよ。おれが死んだ時には、死亡通知を送らせるから、それでいゝぢやないか。

久三 わたくしがお伺ひすることが、そんなに伯父さんのお氣に障るのなら、御遠慮してもよろしいんですが。

明三(少し言葉は軟けて)絶対に來ちやいけないとは云はないがね。……しかし、あゝいふ同棲者が出來た以上、おれの家とは家風が合はないんだから、そのつもりでゐて呉れなきや困るよ。

久三 でも、故郷の両親の許可を得てるんですから、伯父さんも認めて下さらなければ……

明三 だから、おれはお前がどんなことをしようとも妨害はしなかつた。そのかはり、お前もおれの家へ害を加へないやうにして呉れなきやいけないね。

久三 害を加へる？：へえ。わたくしは伯父さんの身内だつてことを、誰れにも云やしません。こんなヤクザな御名譽にもならないでせうが、別段不名譽にもならないだらうと思はれます。治助さんの縁談だつて、身内にとくしのやうな奴がゐちや困ると、先方で鉄砲を喰はしたりなんかしないでせう。

明三 治助の縁談のことを、お前は誰れから聞いた？

久三 さういふ話は、誰れの口から出たともなく、直ぐに知れるものですな。(ふと気がついたやうに) さう云へば、今歸つて行つた鳥田さんは、縁談のことでやつて来たんですね。あの人は仲人稼業をよくやつてゐるやうだから。：伯父さん、わたくしの身についてもたまには考へて見て下さい。わたくしには鳥田さんのやうに縁談の世話をして呉れる者があるぢやなし、この年齢になつて獨身ではゐられないし、あなたの方のお氣に入らないやう

な同棲者でも拵へなければ爲方がないぢやありませんか。
明三 身勝手なことを云つてゐる。お前はあの事でもまだおれを恨んでゐるのか。(不意に神經を失はせる)

久三 あのこと？(考へて、ふと氣づいたが、詰らなさうに) ハ、ア。あのことと云つてくに子さんのことですか。随分以前のことですな。今やうやく思出したくらゐで、平生わたくしの頭からは消えてしまつてゐたんですよ。あんなことは根に持つても葉に持つてもゐませんよ。伯父さんはお年寄のくせによく覺えていらつしやる。

明三 おれがあのことと云つたのは、くに子のことぢやないよ。

久三 ハテナ。：しかし、何事についても、伯父さんを恨んでなんかゐませんから、安心していらつしやい。身内の者に恨まれてゐると思つたら、御病氣にも障るでせうから。
明三 おれは椅子に腰を掛けてゐると、足がだるくてたまらない。これで御免を蒙らう。(椅子を離れて) お前も用事がないのなら歸つたらよからう。
久三 (咄嗟に言葉に力を入れて) 伯父さんに

お願ひしたいことがあります。
明三 (驚いた顔して振返つて) 何だ？
久三 金を貸して下さいとは申しません。さう思つて心配していらつしやるかも知れないけれど。

明三 おれの家に有り餘る金がある譯ぢやなし、たとひ、貸してくれと云つたつて貸せるものか。

久三 わたくしは、伯父さんのお心をよく存じて居りますから、今日の米櫃が空になつても、決して御無心は申しませんが、今お願ひしたいことは、全く別なことなんです。(首垂れて思詰めてゐるやうに) わたくしはこの應接室を拜借したいんです。

明三 この部屋を貸して呉れつて？ 妙な無心だね。それでどうしようと思ふんだ？ 誰れかに此處で會はうと思つてゐるのか。

久三 ：誰れに會ふ必要があるものですか。わたくしは、この應接室の、あのクシヨンの上に横になつて、永久に眠つてしまひたいんです。この世にお暇を告げたいんです。
明三 (誰とも思へないやうな相手の顔付を見入つて) 戲談もいゝ加減にしる。おれを擲槍ふつもありか、脅かすつもありか。

久三 どちらでもありません。今から何分間かの間、あのベンチを貸して頂ければよろしいんです。今生にわたくしが伯父さんから求めるところは、たつたそれだけなんです。

明三 馬鹿を云へ。自慢でもする奴が、豫め人に斷るつてことがあるものか。それに、死ぬと極まつたら、適當な死場所はどこにでもあるぢやないか。

久三 いえ、わたくしにはあのベンチの上が何處よりもいゝ死場所なんです。(と云つて、ベンチの方へ近寄つて) このベンチには、以前いろ／＼な患者が腰を掛けてゐたのですね。この家の前の持主だつた醫師は山師で、いゝ加減な注射治療を賣物にして、一本の注射で二三十圓つづも儲けたといふことですが、役に立たない治療を受けて、金ばかり取られて死んだ人間が随分あるんでせう。……さういふ不幸なる患者の思ひの残つてゐる椅子だ。(と、意味ありげな目をベンチに向けて腰をおろす)

明三 この家にケチをつけるものぢやないよ。以前はどうだらうと、買取つた今は、ベンチ一つでも椅子一つでも、おれの所有なんだから。……お前はさういふいやがらせを云つて、

おれを脅かして、いくらかの金をまた持つて行かうと云ふんだね。……オイ。そこへ腰を掛けちやいけないよ。早く歸んなさい。彼れは久三の腕を捉へて立たせようとする。しかし、久三は動かない。

久三 「また」と仰有つても、わたくしは、伯父さんから何も頂いた覚えはありませんよ。誰れにでも物をやることのお嫌ひな伯父さんも、眠つてる間には、わたくしなんか金を下さる夢を御覽になることもあるんですね。さつき申上げた通り、わたくしは、今日お金を恵んで貰はうなんて、毛頭そんな考へをもつて參つたのぢやありません。

明三 ぢや、はじめからおれの家で自殺しようと思つて来たとしても云ふのか。馬鹿な奴だ。久三 いえ、必ずしもさうぢやありません。(まだ彼れの腕を捉へてゐる伯父の顔をぢつと見上げて) 伯父さんがわたくしの申上げることを聞きたいと思つていらつしやるんならお話ししますが、……

明三 事によつたら、話を聞くだけは聞いてやつてもいいが、おれの病氣に障るやうな話なら御免蒙るよ。

久三 (相手にかまはない獨言のやうに) 昨夜

から今朝まで、たまらない不愉快なことがあつて、わたくしは朝餐も食はないで家を飛出したのです。天氣がよいので、いくらか氣が紛れましたが、誰れかの處へ行つて、親身な話でも聞きたつてたまらなくなつて、うかうかと此方へまゐりました。伯父さんが伯母さんか、春雄さんか、治助さんか、此方のどなたかに會つたら、元氣がつくだらうと、當てにもならないことを考へてやつて來たんです。が、その結果はアベコベだつたんです。

明三 (そんな話には興味を感じないらしく) 生きてる人間に愉快なことばかりあるものか。たまには不愉快なことのあるのは當り前だ。

久三 (目を空間へ注ぎながら、なほ獨言のやうな言葉を續ける) 頑丈だつた伯父さんが病み疲れて、この前お目に掛つた時に比べてさへ見違へるやうになつていらつしやるのを見て、わたくしは、スツカリ無常を感じました。金があつても、子供が人並みに育つて嫁入り嫁取りをするやうになつても、かうなつちや、何の生きてる樂みがあるものか。……
明三 (相手の話に心を惹かれた態度を示す)

久三 年節と病氣の重石に壓されて、ウン／＼呻きながら、辛うじて生きてゐるといふだけで、何の樂みがあるものか。わたくしなぞは、親の遺産が手に入る望みがあるぢやなし、自分で出世もしさうでないのに、伯父さん見たいになつちやたまらない。と、さう思ふと、昨夕からの不愉快なことが胸に一杯になつて、此處から浮世におさらばをした方が結局自分を取つて得策ぢやないかと思はれるんです。

彼れはさう云つて、今まで外へ向けてゐた目を明三の方へ落とすと、明三は彼れの側を離れて、疊の上へたばる。

明三 そんな氣味の悪い目で、おれの顔を見て呉れるな。

久三 伯父さんの顔こそ、死相を帯びてゐるぢやありませんか。わたくしの顔なんか平凡ですよ。みんなに馬鹿にされて来た顔だ。

明三 餘計なことを云はないで早く歸れ。……今日は鳥田がおれの家の爲になる話を聞かせて呉れたと喜んでる矢先きへ、お前のやうな奴がやつて来て、おれの頭を臺なしにしゃがめる。……早く歸んなさい。……たつて死にたいのなら、上野の森で首をくゝるか、不忍池

(身を投げるかするがい。おれの家に迷惑を掛けるな。……お前はおれを脅かさうと思つてそんなことを云ふが、自殺の用意に刃物でもピストルでも持つて来てるのか。)

久三 此處にこんなものを持つてゐます。(ポケットから布片に包んだ小さな薬瓶を取り出して見せる)

明三 (その薬瓶を見上げて) それを魔薬だといふのか。變な色をしてゐるぢやないか。消化薬か何かだらう。

久三 ぢや、さう思つていらつしやればいゝ。わたくしは、この消化薬を飲んで、このベンチを拜借して、一眠入りさせて貰ひますから、伯父さんはわたくしに關はないで、奥へいらつしやつてお休みなすつて下さい、わたくしは誰れにも遺言することはないんです。……(と云つて、自分の心に向つて云ふやうに) 遺言? そんなものを残す必要があるものか。

そして、彼れは、もはや明三には關はないやうな態度で、何事かを思詰めたがら、部屋を歩き廻つたあと、咄嗟に薬瓶の薬を飲んで、ベンチに横はる。

明三は不安らしく、側へ寄つて久三の寝顔を見詰める。そこへ、次男の治助(二十五、

六歳の、可成り立派な容姿をした男)が歸つて来る。

明三 オ、いゝ所へ歸つて来た。今、久三が自殺すると云つて、變な薬を飲んで此處に寝てるのだ。何か目算があつて狂言を打つたのかも知れないよ。此處へ来て様子を見て呉れ。

治助 呆れたものだ。久三さんが狂言をやるなんて。人間で分らないものだな。(驚いた風もなく、好奇心をもつてベンチに近づく)

明三 まさか、本當に毒を飲んだんぢやあるまい。

治助 さあ、どうですかね。(久三の顔をソツと見下して) オイ、君。(と、久三を搦動かす)

久三、薄目を開ける。

治助 戯談ぢやないよ、君。

久三 治助さんか。僕の心を亂さないやうにして呉れたまへ。

明三 爲様のない奴だ。(稍安心したが、急に足腰の苦痛を覺えたらしく) おれは腰の骨が挫けさうに痛みだした。あちらへ行つて休んでから、お前が久三によく話を訊いて、早く家へ歸すやうにして呉れ。……こいつ、一文にもならないのに、おれの胸にこたへるや

うな不吉なことを云やあがつて。(獨言のやうに云ふ)

そして、彼は、足を引揃つて入つて行く。

久三は目を閉ぢ、両手を胸の上で組合せてちつとしてゐる。

治助 君も滑稽な眞似をしたものだね。身體は何ともないんだらう。サア、起きたまへ。僕の部屋へ行つてユツクリ話をしようぢやないか。

久三 僕の心を亂さないやうにして呉れたまへ。藥の利目が出かゝつて、僕は今死と闘つてゐるんだから。

治助 君のその變挺な目付や口付が、死と闘つてゐる證據なのか。そんな風ぢや、生と死の争ひも、莊嚴でも凄惨でもないね。道化た眞似はい、加減で止したらどうだ。…全體君の狂言自殺の原因はどんなことなんだい。僕の親命に要求したことが入れられなかつたためなのか。…僕が紅茶でも入れるから、起き、話したまへ。…サア、僕が今生に加勢して、死々追拂つてやるぞ。

治助が元氣よくさう云つて、久三の手を捉へて、勢ひ強く引起すと、久三は、それと争つたはずみにベンチから轉げ落ちたが、

立上つて、憤怒を顔に現はす。

久三 君は殘酷な人だ。僕に無用な口を利かせようとするんだね。…僕は伯父さんなんかにも要求すりやしないよ。親類のよしみで、君の家で、僕の死骸の跡片付をして呉ればいゝと思つてゐるだけなんだ。僕の死生の問題に立入つて貰はなくてもいゝよ。

治助 君は氣が狂つてゐるやうにも見えないが、妙だね。まあ椅子にでも腰を掛けて、落着いて見たまへ。君がそんなに怒つた顔したのを見るのは、今ははじめてだが、不思議なものだ。

そこへ、おちかが、久三の内縁の妻夏江(二十六七歳、世傳れのしらしい卑しい女)と、一しよに入つて来る。

おちか ア、よかつた。久三さんはまだいらした。(と、夏江に向つて云ふ)

久三は夏江を見て驚く。

おちか (久三に向つて) 今そこであなたの奥さんにお目に掛りましたの。此方の家をお捜しになつてゐて、偶然わたしにお訊ねになったのです。(夏江に向つて) さあ、お上んなさいます。

おちかは、買物の風呂敷を持つたまゝ上り

口に腰を掛ける。

夏江は應接室へ上つて、恭しく治助に挨拶する。治助は訝しげな顔して會釋する。今まで憤つてゐた久三は俄かに打委れて

マゴ／＼する。

久三 お前はこんなところへ何しに來たのだ？ (力なく云ふ)

夏江 あなたこそ何しに此方へいらつしやつたの？ あたし、どんなに心配して方々を捜したか知りやしない。(ふと、ベンチの側に置かれた藥瓶に目をつけて訝しげに) あなた、そのお藥を召上つたの？

久三 今日になつて飲む時が來たのだ。(感慨を籠めたやうに云つて、よろけるやうにベンチに腰をおろす)

夏江 なぜ、そんなお藥を飲む時が來たんです？…今朝あなたが出ていらしつてから、ふつと氣がつくと、その藥瓶がいつも置いてあつたところに見つからないでせう。ぢや、あなたが持つて行つたに違ひないと思ふと、こりや、打ちやつて置けなないと、あたし慌てだしたんですよ。(袂の中から、同じ形をした小さな藥瓶を出して) でも、よかつた。かういふことがあらうと思つて、中味をすり變

へて置いて。……あなたが飲みになつたのは、あたしが松下先生から頂いた持薬なんですよ。……あなたは、また何だつて此方のお家でそんなものを召上つたんです？

久三 ぢや、さつき僕が飲んだのは、婦人病の薬だつたのか。(苦笑を洩らして唾を吐出す)

治助 聲を立てて笑ふ。夏江は侮蔑した笑ひを洩らす。おちかも何となしに笑ふ。

久三 僕にあんな薬を飲まして、僕を笑ひ物にしようとしたのか。

夏江 でも、あたしがお薬をすり變へたお蔭で、あなたの生命は助かつたんぢやありませんか。此方のお宅にも御迷惑が掛らなくて済んだのぢやありませんか。

治助 それはさうです。此方で本気で自殺なんかされて溜つたものぢやない。……しかし、この家は元藪醫者の家だつたのだから、薬の間違ひぐらゐは有りさうのことなんですよ。

夏江 (馴々しい態度して) あたし、このお宅へ今日お伺ひしたのをいゝ機会に、あたしたちの内輪の事を、此方のお家の方に聞いて頂きますわ。(治助に向つて) 失敬ですが、あなた様はどなたでいらつしやいますか。

治助 (相手を見下した態度で) 僕は此處の家族の一人です。

夏江 ぢや、あなたに聞いて頂いてもよろしいんです。お身内の方に立合つて頂いて、わたくしたちの間の最後の解決をつけたいんで御座いますから。

治助 さういふ面倒な話には、僕なんか関係しちやいけないでせう。

夏江 たゞお身内の方に聞いて頂きさへすれば、あたし、気がすみますのよ。

久三 お前が持つて廻つた口を利くにや及ばない。僕が簡単に云つちまはう。簡單なことなんだから。

夏江 (慌てて遮つて) いゝえ、あなたはどうかすると根も葉もないことを仰有るからいけないわ。あたしに云はせて下さい。(口調に重味をつけて) あたしは自分の身體を引當てに、五百圓の借金をしてゐるんです。久三さんが保證に立つてゐて、そのお金に二人の生活、費つたのですから、期限までにどうにか極りをつけて貰はなきゃ困るんで御座いますの。

久三 それで、その借金を拂つちまふまで、僕に魔薬を飲ませないやうに警戒してゐるんだ

ね。御親切さまだ。夏江 (悠然として) あなたは死にさへすりや責任がのされるやうに思つていらつしやるんでせうけれど、若しもあなたが、今自棄な死方をなすつたら、お國の御兩親をはじめ、譯を知らない方は、みんなあたしの所爲になさるに極まつてるぢやありませんか。あなたが御自分でどうしても死にたいのなら、それは御勝手なだけけれど、あとの事はちやんと置いて置いて下さらなさいけませんよ。

久三 それで、僕を擱まへにこんな處までやつて来たのか。……お前の借金拂ひが出来るくらゐに、金の工面がついたなら、僕だつて死ぬ氣にならなかつたかも知れないよ。(おちかに向つて) おちかさん、お茶を一杯飲んで下さい。水でもよろしい。あんな薬を飲んだので、胸の中がむか／＼して來ていけない。おちかは入つて行く。

治助 兎に角、君は物騒な男だね。出鱈目に自殺なんか企てるやうなヒステリックな男には、婦人病の薬が利目があるかも知れないね。細君と二人でその薬を持薬にしたいよ、かも知れない。

久三(前と違つて元氣づいて) 僕はさつき伯

父さんの顔を見てゐるうちに、ふつと死になつたんだが、自分でも變だ。……しかし、もう大丈夫、もう決して死なない。人が僕を殺さうとしたつて殺さりやしない。(自分に力をつけるやうに云つて) 治助さん、僕はね：：昨夕いく度、これを(夏江を指差して)殺さうとしたか知れないんだよ。いや殺さうとしたのぢやない、殺した方がいゝと昨夕いく度思つたか知れないんだよ。……ところが、敵をでも、悪人をでも一思ひに殺せるやうな昂奮状態が、僕の心にはどうしても起つて来ないんでね。

治助、久三の言語と態度とを研究的に見聞してゐる。夏江は、何を云つてゐるのだと思つてゐるやうな冷笑を洩らす。

久三 僕が柄にない過激なことを云つたのを變に思つてゐるんだらう。(誰れに云ふともなく云つて)こいつが戀人をほかに拵へてゐるとか、僕を欺いて僕を踏付けるやうなことを企んでゐるからしてゐるのなら、僕だつてムカムカとして極端なことが出来るんだが、さうぢやないんだからね。

夏江 何を話らないことを仰有るの？
久三 そりや話らないことさ。……だけど、昨

夕べから今朝へかけて、二人であんないやらしい暗嘩をしつづけたことを考へて見るがい。色男でも出来かゝつてゐるやうなことを云つて、僕の氣をひいて見たり、僕の側を離れたら、世間がちやんとお臍立をして、お前を待つてゐるやうな蟲のいゝことを云つたりしてゐるのを、お前は淺聞しく思はなかつたのか。僕がお前の借金を綺麗に拂つてやつたにしたらところが、拂はないで死んだにしたらところが、お前の落行くききは大抵分つてらあね。

夏江 (腹立たしげに)それは大きにお世話よ。そんなことを他人の前で云つて、事情を知らない人は、あたしといふ女をどんなに誤解するか知れないぢやありませんか。
久三 だつて、お前の方から望んで云ひだしたことぢやないか。……お前は僕を離れさへすりやどうかなると、さきを樂みにしてゐるか知れないが、僕は、……

夏江 (相手の言葉を慌しく遮つて)何をくどくどと説言見たいなことを云ふんです？あなたの身内のお家に來たからつて、急にえらさうな口を利用して。……あたしは當然取るべきお金は取らなきやなりませんよ。えらさう

な口を利用して、人前であたしに恥を掻かせたきや、出すべきお金を出したあとでなさい。
夏江は久三を小突きまはす。久三はそれに抵抗して相手を突飛ばす。

久三 昨夕のやうにお前に負けてばかりはゐないぞ。おれが能無しで小汚い男なら、お前だつて薄汚い女だ。

夏江、昂奮して、身を起して、無我夢中になつて武者ぶりつく。

おちかはお奥からお茶を運んで來て、さつきから二人の様子を、呆氣に取られて見てゐる。

治助は、おちかを見て、ニヤ／＼笑つて、久三夫婦の醜態を見つと目顔で知らせる。

そして、打遣つても置けないので、二人を引分けて、

治助 僕の家へ来て夫婦暗嘩のおさらひなんかされちや迷惑だよ。

久三 いや、どうも濟まなかつた。(頭を下げて面目ないと云つた表情をする)

夏江はテーブルに寄りすがつて泣く。
明三(威厳を見せて)お前たちは直ぐに歸つてくれ。……人の家へ來て自殺の眞似したり、

夫婦喧嘩の眞似したり、恥知らずにも程がある
と云ふものだ。おれから金を引出すための
狂言だらう。馬鹿め。それがおれに分らな
いと思つてゐるのか。：：さあ、早く歸つて
くれ。(久三の背を突く)

久三 これに驚いた。：：わたくしは芝居氣な
んかちつとも持つてゐない人間だから、そん
なことは夢にも思ひつかかなかつたのですが、
伯父さんにさう云はれて見ると、成程狂言
のやうでした。わたくしも生れてはじめて、
人の前で芝居をしたのですね。

明三 それに氣がついたのなら、今日は大人し
く歸つて呉れ。

久三 歸りますとも。(キツパリ云つて) 大變
御迷惑を掛けて申譯がありません。：：しか
し、伯父さん、わたくしは今日此方へお伺ひ
した時とはまるで違つた人間になつてお暇す
ることが出来さうですよ。だから、狂言も
わたくし自身に取つちや無駄でなかつた譯で
す。：：(夏江の肩を叩いて) オイ、兎に角
歸らう。伯父さんがあゝ仰有るんだ。

夏江は、さつきから、自分の顔を明三に見
られまいとしてゐる。明三は夏江の顔を見
ぬ振りをしながら、コソソリ見ようとして

ゐる。

久三 小さくなつてゐるなんて、不斷のお前に
も似合はないな。顔を上げて伯父さんに御挨拶
して行け。一生にまたと伯父さんにお目に
掛けることはないだらうから。(夏江を引抱へ
て、明三の方へ無理に顔を向けさせて) これ
が不斷お噂をしてゐた伯父さんだ。(明三に
向つて) これが、かねてあなたの擯斥してい
らつちやつた女です。

夏江は萎れた顔して挨拶する。明三は苦い
顔して會釈をする。

その時をいゝ機會として、おちかは、夏江
と久三とにお茶を出す。

久三 (茶を飲んで) おちかさん、面白かつた
でせう。あなたは結婚してもこんな馬鹿な眞
似はしないやうに、今から氣をつけていらつ
しやい。(明三などに向つて) 御迷惑を掛け
て済みませんでしたね。：：我々二人のほん
たうの芝居はこちらの門を出てからなんです
よ。：：左様なら。

久三は附け元氣でさう云つて出て行く。夏
江は、薬瓶をベンチの隅に置いたまゝ、そ
れに氣づかないで、コソ／＼と出て行く。

明三 二人ともあつかましい奴だ。これからあ

んな奴は寄せつけやいけない。(我れとも
なくベンチに腰をおろして、治助を見て、稍
機嫌を直して) さう云へば、さつき鳥田が來
ている／＼話をして行つたよ。

治助 (冷淡に) さうですか。

明三 先方では非常に氣乗りがして、一日も早
く話を極めたいと云つてゐるさうだよ。此方で
もあんまり迷はないで、早く極りをつけた方
がよいだらうね。

治助 さうです。(冷淡に云つて) お母さんは
どこかへ出掛けたんですか。(おちかの方を
見て) 兄さんの家へ行つたのかい。

おちか えゝ。何だか急に思立つてお出でにな
りました。

彼女はさつきから、奥へ行かうとしながら、
父子の語に心残りかしてゐるらしく躊躇
してゐる。

明三 お母さんがゐなくなつてよかつたのだ。あ
れがらたら、久三やあの女のしだらな様を
見てどんなにいやな思ひをしたことか。目を
まはしたかも知れないよ。(おちかの方を見
て) お前は早く午餐の支度をしなさいけな
いよ。おれも腹がへつた。

おちか、不承々々に奥へ入る。

治助 お父さんもお疲れになつてるやうだから、あちらでお休みになつちやどうです？

明三 ウン。…おれも今日はひどく疲れたよ。

心の疲れが顔にまで現はれてゐるのだからな。久三がおれの顔を見ていやなことを云つた。おれの顔に死人の相でも現はれてゐるやうなことを云つた。それに、あいつ、おれの胸にギツクリ應へるやうな氣持の悪いことを云つた。

治助 どんなことを云ひました？

明三 どんなことつて、別段珍らしいことぢやないんだが。…珍らしくないことでも、時と場合でひどく胸に響くこともあるものだ。

治助 あの人には無能で金もないんだから、自棄な口を利くやうになつたんでせう。信託會社の方も免職になつたらしいですね。

明三 さうだらうとおれも思つてゐたよ。身内にあんな男がゐると、おれたちの信用に關はつて困るんだが。…

治助 さうですね。(冷淡に云つて、ふと調子を變へて) わたしは今朝、木村さんの家へ寄つて頼まれたんですが、あすこでは、この頃手不足で困つてゐるから、少しの間、おちかきんを貸してくれないかと云つてゐました。貸

して上げる譯に行きませんか。

明三 いや、それは困るよ。家では一日でもおちかきに出て行かれちゃ困るよ。あれがゐなくなつちや、おれも飯も食へなくなるぢやないか。

治助 他所から手頼つて來てるおちかきさんがゐなくなつてさへ、お父さんの日常生活に差支へがあるのなら、なぜ兄さん夫婦を外へ出して置くんです？ この家に住はせて家の用事をさせたいいぢやありませんか。(責めるやうに云ふ)

明三 理窟はさうだが、春雄はこの家にゐたかないのだから、どうも爲方がないよ。

治助 むたかないのは、兄さんばかりぢやないでせうね。

明三 お前も結婚したら、直ぐに別居するつもりだらう。それはおれも覺悟してゐるんだよ。

治助 結婚の話はまあ待つて下さい。…それよりも、たび／＼わたしが云ふやうに、この家は人に賣るか貸すかして、郊外にでも住みいゝ家を新築したらいいぢやありませんか。…この家がいけないんですよ。お父さんの身體の加減の悪くなつたのも、一つはこ

の家の所爲なんです。舊弊な言草だが、この家が祟るのかも知れませんか。…山師の悪徳醫者のために治療法をあやまつて死んだ者の怨みが、この家に残つてるのかも知れませんか。我々がこの家に移つてから、碌なことはないんだから。…今日だつて久三さんを晒ひ物にしてすんだやうなもの、危いところだつた。この後またどんな不吉なことがないとも限りませんよ。

明三 久三もお前の云ふやうなことを云つてゐたつね。…お前たち若い者がそんな迷信を有つてゐるから不思議だ。この年齢で新奇に家を建てたりなんか、そんな面倒くさいことが出来るものか。此處は廉い價で買つて、あの大地震にも焼けなかつたやうな運のいい家ぢやないか。お前たちがどこへ行かうとも、おれはこの家の空氣を吸つて、生きてゐられるだけ生きてゐるつもりだ。新奇な家を建てたつて珍らしいのは當座ばかりだよ。…いや、から身體が悪くなつちや、家の新しいか古いかよりも柔しい人間の手が欲しいよ。だから、おちかきのやうな柔しい氣の利いた女に、出て行かれやしないかと、おれは氣遣つてゐるのだ。お前たちもあの女に邪慳なことは

しないやうにして呉れ。一日でも長くゐて貰はにや、第一おれが不自由な思ひをするんだから。

治助 お父さんは、そんなにおちかさんがお好きなんですか。

明三 あれが明日でも出て行きやしないかと、氣遣はれるのだが、お前はどう思ふ。

治助 (面差げに) 何をです?

明三 (あたりを憚るやうに) おちかにもこの頃は、心に思つてる男があるのぢやなからうか。急におめかしし身を入れだしたりして。

様子がどうも變だ。…年齢が年齢だから無理もないが。

そこへ、坂本某(二十代の男)が訪ねて来る。

坂本 伊東さんの奥様は、お宅へいらつしやらなかつたでせうか。

明三 いえ、来ておません。くに子はこちらへ来ると云つたのですか。(足を引指つて訪問者の方へ行く)

坂本 奥様は今朝からお家にいらつしやらないので、何處へお出ましになつたのかと、旦那様

がさつきから心配していらつしやいます。明三 どうしたんでせう。何か事があつたので

すか。

坂本 わたくしはよく存じませんが。治助 (ふと、奥の方を見て微笑を洩らして) 姉さんが此方へ来たら直ぐお知らせしますから、あなたは外の心當りを捜して下さい。

坂本 ぢや、さういたしません。

治助 抛つといつても心配なことはありませんよ。迷ひ兒にはなりやしないでせう。

坂本は、心配してゐる明三の顔を見上げて、挨拶して出て行く。

くに子(伊東秀雄の妻、三十くらゐ。神経性の女) 奥から出て来る。明三 (安心して) くにには其處にゐたのか、いつの間に来てゐたのだ?

くに子 あたしさつきから、あしこに立つてゐて、立聞きしてゐました。こちらにはお客様がいらつしやるやうだつたから、裏からソツと家の中へ入つたんです。久三さんが女のひとしよに歸つて行くのを、氣の毒な思ひして見てゐましたのよ。(と云つたあとで、直ぐに侮蔑したやうに) あんな人なんですかね、久三さんが同様してゐるといふ人は。

明三 人の事よりも、お前はどうして無醫で家を飛出して来たのだ?

くに子 それがお父さんにはお分りにならないの。…治助はよく察してくれるわね。治助 僕にも分りやしないさ。

くに子 さう? あたしには…あたしだけに、治助が島田さんの持つて来た談話に不同意なことはよく分つてゐるのに。

くに子 は不平らしくさう云つて、ベンチに腰をおろして、夏江の置いて行つた薬瓶を何氣なく手に取つて、指の先でいちぢりながら、

くに子 あたし、此處へ来たら懋めて貰へるだらうと思つて、家を飛出して来たのだけれど、お父さんの顔を見たら、とても望みの叶ふ見込みのないことがよく分つたの。治助が云つた通り、この家がいけないんですよ。改築するか、移轉するかしたらいいでせうのに。

明三 どいつも勝手なことを云つてる。…それよりもお前が此處に来てゐることを、早く伊東へ知らせなきやなるまいな。

くに子 打ちやつといつていゝのよ。おちか、奥から顔を出して、

おちか お勝老が出来ました。くに子さんも召上るんでせう。くに子 あたしはよろしいの。…おちかか

んは相變らず一人で臺所仕事をしてお忙
しいでせうね。お母さんは今日の日曜にもま
た兄さんのお家へ行つてゐるらしいのね。煩さ
がられに行かなくつてもいいでせうにね。

治助 やうやく飯が食へるんだな。

明三 くにも一しよに來い。食べながら話をし
よう。

くに子 ほんたうにあたしは何も食べたくあり
ませんの。…皆さんの御飯のすむまで、あ
たしはこゝで玄關番をしますわ。

明三と治助とが奥へ入る。今まで快活な
口を利いたくに子も、俄かに萎れた様子を
して、ベンチから立上つて椅子に腰をおろ
し、物を思つてゐるやうに空間を見詰め
る。

そこへ、伊東秀雄(三十餘歳、不斷着で着
こなしが亂れてゐる)下手からアタフタと
出て來る。くに子を見つけると、悦しさが
胸から込上げる様にして上へあがる。

秀雄 やはり此方へ來てゐたのか。…坂本は
お前を捜しに來なかつたか。(くに子の側に
腰を掛ける)

くに子 (顔を上げて) どうですか。…それよ
りもあなたは何しにいらつしやつたの? あ

たしに何か御用がおありなさるの?

秀雄 空呆けてゐるね。…昨夕お前がヒステ
リーを起して、絶望的なことを云つてはゐた
が、まさか世間の物笑ひになるやうなことは
しないだらうと思つてゐた。

くに子 あたしはいくらあなたに侮辱されて
も、どうもしないで、泣寝入りに寝てしまふ
女だと思つていらつしやるの?

秀雄 まだそんなことを云つてゐるのか。おれは
お前を侮辱した覚えはないよ。…此處の
お父さんやお母さんに訊いて頂かうか。おれ
は、たゞつゆ子といふ不仕合せな女を庇つて
やつただけなんだ。それでお前の氣に障る
のなら、今後絶対にあの女を家へ入れないや
うにしてもいいのだ。つゆ子はおれが世話を
してやらうとやるまいと、どつち道不幸に落
ちる女なんだから、此方で世話をするのも無
駄骨折見たいなものなんだよ。これから知ら
ん顔してゐてもいいんだね。

くに子 此處へ來てまで、そんな言譯なんぞ、
聞かして貰はなくつてもいいよ。…今に
お父さんが出て來て、あなたと一しよになつ
て、微臭いお説法を聞かせるのだと思ふと、
あたしたまらないんです。(相手を脅かすや

うな目をして、言葉に力を籠めて) あたしは、
親兄弟に異疑をこぼしたくつて、今日此處へ
來たんぢやありません。あなたが、勝手にき
う極めないやうにして下さい。…あたしの
死骸は、伊東家の世話にならないで、両親の
手で跡片付をして貰ひたいと思つて、今日此
處へ來たんです。…あなたはそちへ行つ
ていらつしやい。

彼女がヒステリックにさう云つて、秀雄を
押退けるやうな手付をして、椅子を離れて
ベンチに横はつて、かの薬瓶を取上げて
飲む。

くに子 これは、この家の前の持主だつたお醫
者から、兄さんが貰つたモルヒネなんです。
眠りながらいゝ氣持で死ねるやうに調合して
あるんですわ。あたし、兄さんの机の引出か
ら盗んで、死にたくなつた時にいゝ氣持で死
ねるやうに、しよつちう自分の身につけてゐ
ました。今丁度このお薬を役に立てる時が來
たんです。(感傷的な口調で) あたし、こん
な冷酷な人生に生きてゐるよりは、早く夢の
世界へ行つた方が幸福なんです。…あたし、
今いゝ夢を見かけてゐるんだから、誰れもあ
たしの側へ來て、あたしの夢を擾亂さないや

うにして下さい。

秀雄 戯談もいゝ加減にしろよ。(氣遣はしげに傍へ寄つて)まさかモルヒネぢやあるまいな。芝居の眞似をして脅かすなよ。(くに子に身體に手を觸れる)

くに子 芝居なら、さう思つて稀敷に坐つて觀ていらつしやるといゝ。…それはいい夢をあたし見かけてゐるの。

彼女を目をつぶつてさう云つてゐるうちに、ふと苦痛を感じたらしく、くに子 あたし變だわ。どうしたのだらう。オ、苦しい。

胸を押へて藻掻きながら、ベンチからすべり落ちる。

秀雄 馬鹿な眞似をするからだ。(と、小言を云つてから、奥の方を睨みて、大聲で慌しく)誰れか来て下さい。早く。(と叫んで、くに子を抱上げる)

くに子、秀雄にしがみついて苦悶する。治助を先きに、明三とおちかが奥から出て来る。

秀雄 くにが今變な藥を飲んだのです。早くお醫者を呼んで来て下さい。

治助 (藥瓶に目をつけて)それは、久三さん

の細君が忘れて行つた毒藥ぢやないか。どうして、そんなものを飲んだのだい。…おちかさん、大急ぎで醫者を呼んでお出で。…どうしてそんなものを。…今日はどうも變な日だ。

明三 早く醫者を。早く。

明三 痛む足を引摺りながらウロウロする。おちか奥へ入る。

くに子 (ますく)苦みながら)あたし、お父さんの不斷の持樂かと思つて、戯談に飲んだんです。…あたし、死ぬ氣ぢやないんです。…ア、苦しい。…早くお醫者を呼んで来て下さい。あたし、今死ぬるのはいや。…助けて下さい。

治助 指を喉へ突込んで、腹のものを吐出したらいいでせう。

治助と秀雄と力を合せて、くに子を部屋の上へ抱へて行つて、飲んだものを吐かせようとする。

明三 何といふことだ。(溜息を吐いて)お母さんがゐたら目をまはすだらう。

足を引摺りながら、皆なの側へ寄つて行くに子、うめき続ける。

(二)

バラック建の伊東秀雄の住宅の客室。前幕の大山明三の應接室よりも粗雑であるが、現代風で明みがある。

油繪の額が掛つてゐて、蓄音器も置かれてある。

秀雄は獨りで蓄音器の側に坐つて、陽氣な西洋樂を聴いてゐる。そこへ、くに子が衰弱した様子をして入つて来る。顔の面に現實離れのした、稍凄味のある、普通人でないやうな粉飾を施してゐる。

くに子 今日はお天氣がよいのに、何處へもいらつしやらないの?

秀雄 今朝からさう極めてゐるぢやないか。くに子 でも、一週に一度の休日(きゆうじつ)に家にばかりいらつしつちや、身體のためによくないぢやありませんか。

秀雄 ハ、ハ、今日に限つてそんなことを云つてる。…お前が外出したい氣持になつたのなら、夕方から一しよに散歩に出てもいいんだがね。

くに子 あたしに清慮(せいりょ)なさらなくつてもいいのよ。…どうせ、あたしはもう人の中へは出

て行けなくなつたんですから。

秀雄 下らないことを氣に病む必要はないぢやないか。新聞に出された譯ぢやないし、一時の戯談としてもう済んでしまつてゐるぢやないか。

くに子 あなたがそんな空々しいことを仰有つたつて駄目よ。あたしにはちやんと分つてますわ。あたしが自殺なんか出来る人間ぢやないつてことを、あれ以來、あなたは見破つて安心していらつしやるんでせう。

秀雄 そんなことはどうだつていゝぢやないか。自殺の出来る人間がえらいつてことはないんだし。

くに子 あなたの思惑は兎に角、あたし自身、自殺の出来ない人間だつてことが自分によく分つて、急に世の中が淋しくなりました。

秀雄 馬鹿なことを云つてゐる。自殺の出来ない人間こそ、世の中が面白く暮らせるんぢやないか。……あの日のことは、もう忘れておしまひよ。

くに子 忘れようとしても忘れられるのですか。あたし、身體がよくなればなるほど、あの時のごとがハッキリ思ひ出されますわ。お父さんも治助もあなたも、おちかさんでさへ、みんな

な蔑視んだ目であたしを見てゐましたわね。秀雄 蔑視んだのぢやない、心配して見てゐたのだよ。

くに子 本當は、あの時あたしはあのまゝで死んでた方がよかつたの。

秀雄 ちや、以前のお前はあの時死んだことにして、新しくに子が生れ出したことにしたらいゝぢやないか。

くに子 新しいに子？ こんな頭の中に塵屑の詰つてる様な氣持をしてゐて、新しくに子も何もあつたものですか。

蓄音器はまだ響いてゐる。
そこへ、下女が名刺を持つて入つて来る。
秀雄、その名刺を見て眉を擡める。

秀雄 兎に角此處へ通してくれ。
下女、出て行く。

くに子 どなたが訪ねていらつしたの？
秀雄 あんまり會ひたくもない人間なんだが、斷る譯にも行くまい。お前はあちらへ行つてゐたらいいだらう。

くに子 あたしが會つちやいけないの？ (言葉を送らせて) それ御覽なさい。あなただつて、あたしをお客様の前へ出すことをいやがるやうになつたぢやありませんか。あたしを

劣等な人間扱ひして。

秀雄 (不快を忍んで) ちや、此處にゐてもいいよ、……染井久三が来たんだよ。あいつ何の用事があるのか。

くに子 (不快らしく) 久三さんが？ 何しに來たんでせう。

そこへ、久三が入つて来る。服装は序幕と同じなのだが、顔面に現實離れのした、普通の人間でないらしい印象を與へるやうな粉飾を施してゐる。

久三 今日よく御在宅でしたね。(と、秀雄に挨拶してから、微笑を浮べてくに子の方を早上げて) くに子さんは身體がスツカリよくなったの？ 二三日前に、往來で治助さんに會つて、藥違ひの話聞いて大笑ひをしたんですよ。

くに子 (不機嫌らしく) あなたはあたしを揶揄ひにいらしつしたの？

久三 飛んでもないことだ。大笑ひしたことがくに子さんのお氣に障るのかね。僕の獨り心中のしそこなひも大笑ひなんだから、お互ひさまです。

秀雄 (ますます不機嫌らしく) 君は滅多に僕の家に來たことのない人だが、今日は何か用

事があるんですか。

久三 特別に用事がある譯ぢやありませんかね。一應くに子さんにお詫びをして置かうと思つて。：：あんな薬をうっかり置忘れのために、飛んだ御迷惑を掛けて済みませんでしたね。

くに子 治助が餘計なお喋舌をするからいけない。自分の同胞のことを面白づくで人に話すなんてひどい奴ね。：：(昂奮して)頑固なお父さんでさへ、あれから神經を病んで、一刻も早く家を變りたいと云つてるんぢやありませんか。兄は兩親を嫌つて外へ出てゐるし、治助はおちかさんに誘惑されて兩親の勧める縁談を嫌つてゐるし、あたしの實家は早晩破滅するでせうよ。

久三 なに、彌生町のあの家は破滅してもしなくつても、大山家は大丈夫だ。第一資産があるんだからな。

くに子 偉かな資産など、手頼りになるものですか。

久三 さう思はれるだけでも有難い譯だね。でも、生れ變つたにしても、異つた世界に入つてゐるにしても、僕といふ人間はなさない譯だ。：：あの後は、僕が戸外へ出るたびに、僕のあとに、影が形に添ふ如くに僕にくつて來る者があるんですよ、危険人物が刑事

巡查に尾行されてるやうなものでせうな。

秀雄 (生真面目に) 君が警察の注意人物になつてる譯ぢやないんですやう。

くに子 あたしには分つてるわ。あなたの影も此處へ連れていらつしやるといふわ。あなたの影には、あたし一度お目に掛つたことがあるのよ。

秀雄 それは何のことだ。

久三 僕は自分の身を亡ぼさうとしたことはあつても、まだ殺人も強盗もしたことはないのだから、警察に御厄介は掛けないでせう。その點は安心して下さい。

で)あなたもそんな目で人の顔を見るもんぢやないわ。

久三 僕はやはりあの時死んでゐたので、今地獄に住んでゐるのかも知れない。

くに子 (強ひて戯談らしく)地獄に住んでゐる人間に訪問されちやたまらないわね。

そこへ、下女が入つて来たので、三人の緊張した態度が破れる。

下女 お客様のお連れ様がいらつしやいました。

久三 (夢から醒めたやうに、そして當惑してゐるらしく) 僕の云つたのは本當だつたでせう。

くに子 こちらへお通ししてお呉れ。

下女、出て行く。

久三 御迷惑でも爲方がありませんね。秀雄 さつきから影々と云つてゐたのは、君の細君のことでですか。僕はまだお目に掛つたことはないんだが、君は細君と此處で落合ふやうに打合せをしてゐたんですね。それなら早くさうと云つて呉れよばよかつたのに。

久三 打合せなんかしてゐた譯ぢやないんですが。

くに子 あたし、此間彌生町で、奥さんの後

姿をちよつと覗いて見たつもりで、どんな方だか、よくは知りませんのよ。

久三 僕に取つて、名譽なことぢやない。(獨言のやうに云ふ)

三人がそれらの思ひを注いで入口を見てゐるところへ、夏江が前よりもつと見窄らしい服装をして入つて来る。しかし、來馴れてゐるところへ來たやうに、含羞んではゐない。

くに子 さあ、此方へいらつしやい。

夏江、挨拶する。秀雄は侮蔑を含んだ目を向けて答禮する。

久三 お前の住みたい家はこんな家なんだらう。：：よく見て置くが、：：だけど、お前はおれに喰つついてゐるやうとも、おれの側を離れて行かうとも、こんな當世の文化的な家で、現代的の華やかな生活の出来る見込みはないだらうぜ。

夏江 あなたは人様の前であたしに恥を掻かせようと思つて、こんなところへ連れていらつしやつたの？ (強い微笑を浮べながら云ふ)

久三 誰れが隨いて來いと云つた？ お前が勝手に隨いて來たのぢやないか。

夏江 誰を仰ぐ。：：あなたはあたしが隨いてゐなければ、一人歩きは出来ないぢやありませんか。今日此方へ來る途中でも、何處往來で倒れたか知れない。あたしが、抱起して介抱したからこそ、此處まで無事に來られたのぢやありませんか。

久三 お前こそ誰つ吐きだ。

夏江 あなたは伯父さんのお家で死にそこねた時から、記憶力が悪くなつて、御自分のしたことや言つたことさへ忘れるやうになつたんです。：：今日はお前の望み通りに、身内の者に立合つて貰つて、最後の解決をつけてやると仰有つたぢやありませんか。：：彌生町から曙町に、曙町から天神町に、あちらこちらと、あなたのお身内の家へ一軒々々引張り廻されて、此方のお家でああなたの御親類が品切れになるぢやありませんか。

久三 最後の解決は金のことか、金なら何處へ行つても、おれのために出してくれる處はなささうだよ。此處には蓄音器もあるし本箱もあるし、油繪の額もあるし、いづれ、金庫もは金が一林詰つてるのだらうが、それはお前やおれには何の關係もないのだ。諦めるがい。(秀雄やくに子に向つて)この女の身

の代金が五百兩になつてゐるんださうですがね。全體それくらゐの値段がこの女にあるんでせうか。

くに子 久三さんの言葉はまるで無頼漢のやうね。自分のことでなくつても、あたし聞きづらくつてならない。何だか怖いやうだから、もう歸つて下さい。

久三 あなたの怖がるのは、僕よりも、僕の連れのこの女のことなんでせう。でも、怖がるには及びませんよ。こんなに見えても、この女はあなたに激意を有つてはゐりませんよ。

秀雄 用事がなければ、今日はこれで歸つて下さい。

久三 何處へ行つても歡迎されない僕だ。叩きだされぬさきに歸りますかね。僕は強請に來たのぢやありませんよ。…本當は僕に影の如く隨き纏つてゐるこの女から綺麗に離れようとしてまご／＼してゐるんですよ。自分の家にある間は、二人がでんでに勝手な獨言を云ひ合つて、お互ひに相手がゐなかつたらと思つてゐるくせに、僕が他所へ出ると、此奴は屹度あとから隨いて來るんだから不思議だ。そして、さつき云つたやうに、僕が往

來て轉んだの辻つたのと、僕の歩き振りにまで餘計なおせつかいを云ひ出すのだから不思議だ。…どうも最後の解決が金銭だけで付きさうぢやありませんよ。

夏江 付くか付かぬか、當然あなたの出すべきお金を出してから仰有るとい。人のことよりは、あなたこそ影のやうな人だわ。あたしはこの通り丈夫な身體をして、ちやんと生き

てゐるぢやありませんか。
くに子 煩さいね。…影でも形でもあたしたちの構つたことぢやないから、早く歸つて下さい。…あたし、この人の置いて行つたあの藥を飲んだのかと思ふと、今でも胸が苦し

くつてならないんです。この人、あたしに飲ませるつもりでわざと置いて行つたのかも知れなかつた。そして、あたしがどうなつたかと、今日二人で様子を見に來たのかも知れないんだわ。(身ぶるひする。そして、秀雄に向つて)あなた、この人たちを歸して下さい。

怖くつて、あたしの頭が變になりさうだから。
秀雄 早く出て行つて下さい。
夏江 あなたは座を立つて、久三に手を掛ける。夏江 あなた、また彌生町のお家のやうに追出

されるの？(久三を睨ますやうに云つて)あなたはあつちでもこつちでも追出されて、しまひには、地球の外へでも追出されなければ収まりがつかない人なのね。…意氣地がないつたらありやしない。

久三 此處もおれの家ぢやないから爲方がないさ。
久三は座を立ちかけたが、その際、冷笑憎悪を含んだ顔付をする。秀雄はふとその現實離れのした相手の顔に恐れを感じたらしく、我知らず久三の側を離れて、逃げるやうに奥へ入る。くに子も同じやうな態度で隨いて行く。

久三 どうしたのだ？ 可笑しな人だ。追出さうとした人の方が逃げて行つたぢやないか。
夏江 あなたが彌生町の伯父さんの顔を見て死にたくなつたやうに、あの人たちはあなたを恐れたのよ。(ふと、悪辣な目を光らせて)さあ、この隙間に金庫のお金をさらつていらつしやい。(權威をもつて命令するやうに云ふ)

久三 金庫なんか何處にも見えないぢやないか。
夏江 あなたは目まで役に立たなくなつたの？

金庫はそこにあるぢやないの？

一方を指差すと、久三は小さな皮文庫を見
て、そちらへ寄つて行く。

夏江 それを持つて、早く庭から逃げていらつ
しやい。

久三 おれはまだ泥棒をしたことはないよ。：

お前はおれに泥棒までさせなければ承知が
出来ななんだ。：地球の外へ追出される
人間だと、お前に云はれたおれだ。泥棒を遠
慮するには及ぶまい。

そこに、くに子があたりを憚りながら顔を
出して、

くに子 久三さん、これを貸して上げますから、
おとなしく歸つて下さいね。(情味をもつて
云ふ)

同時に紙包を抛出して引込む。

久三 余か。

紙包の方へ寄つて覗込む。夏江も不思議

さうに覗込む。

久三 おれは泥棒の代りに乞食にされたのか。

：お前が欲しいのなら、それを持つて歸
れ。

夏江 (喜んで) 持つて行つてもよくつて？：
あなたも早くお歸んなさい。途中で轉ばな

いやうに。

彼女はスツと出て行く。久三はさつき開
けかけた皮文庫をソツと開けて、中を覗い
て合點の行かない顔付をして、それを閉ぢ
る。

くに子 入つて来る。

くに子 あなたはなぜお歸りにならないの？

久三 僕も物欲しさうな目をして、あつちこつ
ちの身内を訪ねて行くものだから、乞食か強
請のやうに思はれて：僕も落ぶれたものだ
ね。(くに子の顔を見上げて) だけど、あなた
だつて随分憔悴したやうだな。治助さんは何
でもないやうに云つて笑つてゐたつが、毒
がまだ抜け切らないんぢやないかしら。不
斷のくに子さんとは思はれないほどに寝れてゐ
る。：大山家の一族のうちでは、類のないほ
ど美しかったくに子さんとは思はれないが、
僕の目がどうかなくなつたのかな。

くに子 あなたのことも、あなたこそ、何

といふもじめた顔していらつしやるの？ 秀

雄は、人間離れのしたあなたの顔を薄気味悪

く思つてるのよ。

久三 男の僕は鏡を見ないから、自分の顔がよ

く分らないのだけれど、女のあなたに自分の

顔が分らないのは變だね。僕の連れの女も顔
が荒んで来たのだけれど、あなたのやうぢや
ない。

くに子 あたし、そんなに寝れてゐるんですか
ねえ。あの方よりも見つともなく寝れてゐる
んでせうか。(しみぐと云つて) 秀雄はあ
たしの心を引立てようと思つて、あの後は毎
日あたしに口當りのいゝことを云つて呉れる
のですけれど、あたしもう勝負になつてゐる
のね。あの後一週間はかりの間に、あたし

十年も歳を取つたやうな氣持がしますよ。

：あたしがどうなつても、秀雄はちゃんど

候補者があるんだから、結局辛ひだと思つて

るらしいんです。

久三 それは秀雄さんは仕合せだ。僕には、あ
の女が行つちまつても、僕の道連れになる候

補者は一人もないんだ。そして、あの女は、

僕の體力でも過去の記憶でも、みんな奪つて

しまつたのだから、新に外の女に捧げる力

は、僕には何も残つてゐないんだよ。

くに子 ぢや、あの方をまだ思つていらつしや

るのね。

久三 あの女には未練は残つてやしないつもり

だが、僕のいやな記憶のありつたけを持つて

外の男に行かれるのは、僕のやうな男でも不愉快に思はれるね。

くに子 あたしだつて、自分の身はどうなつてもいゝとしても、秀雄と秀雄の思つてる女が一しよになつて、あたしを嘔吐話の種にすることが、いまくしくつてならないの。

二人は釘付けになつたやうに、相對して坐つて、相手の顔を見詰ながら、取りすまして話をしてゐる。

久三 くにさんと差向ひで話をするのは、何年振りだらうな。

くに子 さうね。…でも、そんなことはどちらでもいゝぢやありませんか。

久三 成程、それはどちらでもいゝ諷刺だ。僕は昔から、誰れにも歓迎されない男だつたのだから、他人に、思出の夢を描かせる力もありやしない。…それで、今くにさんが僕に話しかけてたことは何だつたかな。…あゝ、さうか。(取りすました調子にかへつて) 秀雄さんは品行方正だと聞いてゐたが、あなたの外にも、愛してゐる女があるんですか。

くに子 どうもさうらしいの。こなひだまであたしの家へよく出入りしてゐた若い女もあつたよ。その現代的な女も少し怪しいんだ

れど、それよりも、あたしの知らない女で、誰れか諷刺のある女が、外にありさうに思はれるの。

久三 それはあなたの邪推ぢやあるまいか。僕の女などは、外に手頼りになる男は、はしくれもありやしないのに、さもありさうなことを云つてるんだよ。

くに子 あなたの奥さんはさうかも知れないけれど、あたしの家の秀雄は、それとは違ふわよ。

久三 そりや、秀雄さんは御立派だからね。(皮肉らしく素直に云つて) それで、秀雄さんの女といふのは、何處の何方だね。あなたが自分だけでそんな夢見たいたなことを云つてヤキモキしてゐるんぢやないとするよ。

くに子 秀雄のところへ、その女の手紙がいくつも来てゐるらしいの。その皮文庫を開けて見て御覽なさい。あなたはさつき眠いて見てゐたぢやないの？

久三 僕の女は、あれを金庫だと云つてゐたつけが、ぢや、秀雄さんの秘密の手紙があの中にしまつてあるのか。…ラブレターなんて、僕はかつて見たことがないが、後學のために、一つ讀ませて貰はうか。

くに子 御覽なさいな。その手紙を見たあとで、あなたにお頼みしたいことがあるのよ。

久三 何を？

くに子 その女の居所を突留めて貰ひたいんです。

久三 乞食同様の僕だ。暇にまかせて捜しますよ。

彼れは座を立つて、皮文庫を開けて、中の手紙をいくつか取出して、どれが所謂ラブレターであるかと云つた態度で選り分ける。そして、そのうちの二つを取上げる。

久三 どうもこれらしいな。…讀んでもいいんだな。(と、念を押して、封筒の中から手紙を出して、小聲で讀みながら) なる程、女の文章だ。

くに子 (不思議さうに) 女の文章ですつて？ かまはないから、あたしに聞えるやうに讀上げて御覽なさい。

くに子、手紙の方を覗くと、さつきからそつと顔を出してゐた秀雄が足早に出て来る。

秀雄 何を馬鹿な真似をするんだ。それはおちかさんの寄越した見舞の手紙ぢやないか。(久三に向つて) 君は早くお歸んなさい。奥さんが門の外で、さつきから君を呼んでゐますよ。

久三 さうですか。あいつ、まだそこらをウロウロしてゐるのか。

久三、詰らなさうに出て行く。秀雄、笑ふ。くに子も、今まで歴へてゐた笑ひを洩らす。

くに子 あんな人たちに恐れて逃出すなんて、あなたも意気地がないのね。あたし擲擲つて見たよ。反古籠同様な皮文庫を、金庫とか秘密の手紙入れとか思つて、頻りに目をつけるんだから、滑稽でならないわ。

秀雄 あの人には貧乏ばかりしてゐても、不斷物を考へてるやうな男だから、突詰めて氣でも狂つたのかと思つてゐたら、何のこつた。元來が骨までも愚鈍な人間だつたのだね。(笑ふ)

くに子 はじめからそのつもりで、もつと擲擲つてゐればよかつたのに、あんな人たちの云ふことを生眞面目に聞いて、いゝ加減頭を痛めたことぢやない。(笑ふ)

秀雄 でも、お前、あの人に金をやつたのぢやないか。

くに子 五圓のお札をたつた一枚。：あの人たちはあの紙幣を百圓札とも思つてゐたんでせう。(笑つたが、ふと氣になつたやう

に)でも、あの人、あたしの顔を侮辱したやうな口を利いてゐたけれど、あたし、そんなに見つともなく變れてゐるんでせうか。

秀雄 そんなことはないよ。もう四五日も休養してゐたら元のやうになるんだから、安心しておいでよ。

くに子 さうかしら。

そこへ、治助が案内もせず、帽子を被つたまゝ、突如として入つて来る。

秀雄 君はそこで染井に會つたらう。

治助 染井? 久三さんにか。いや、會はなかつた。どうしたのだ?

秀雄 今まで此處にゐて、今家を出たばかりなんだが。

治助 あの人が君の家なんかへ遊びに来るのは變だね。(それには興味を感じないらしく軽く云つて、それからくに子に向つて)それよりも、今夜姉さんに、彌生町へ来て貰へまいか。：お父さんが、われ／＼四人の兄弟を集めて、遺言見たいなことを云ひたがつてゐるんだよ。

くに子 遺言? お父さんはそんなに病氣がいけないの?

治助 なに、遺言の必要があるほど悪かあない

んだがね。われ／＼兄弟が親の言ふことを聞かなかつたり、いろ／＼親困らせをしたりするものだから、親命も失望してゐるんだらう。

くに子 だつて、あたしは親困らせなんかしないわ。結婚だつて親の命令に逆はなかつたのぢやないか。

治助 ぢや、遺産は姉さんに全部やると遺言するから知れないよ。

くに子 まさか。

治助 とところで、兄貴なんかとも相談してゐるんだが、親命が若し財産配けの話でもししたら、みんなが口を揃へて、財産なんか入りませんと返答したいんだよ。衆議一決してゐるんだから、姉さんもさう云つてお呉れよ。

くに子 (不思議さうに) なぜそんな話らない相談をしたの?

治助 親命が舊弊な頭でわれ／＼を見くびつてゐるから、皆なでさう云つて思ひ知らせるのだ。：第一、姉さんは金なんか入らないだらうし。

くに子 あたしだつて、使ひ切れないほどのお金を持つてやしないよ。：それよりも、お前は結婚でも何でも、自分の事は自分の勝手に

していゝだらうけれど、あたしのことを、面白くで久三さんなんか言觸らしちや困るよ。あたしが馬鹿にされるやうで……

秀雄 そんなことはまあ、どうでもいゝぢやないか。そして、彌生町へはお前も今夜出掛けることにしたらいゝだらう。

くに子 彌生町の應接室のことを思ふと、あたしゾツとするわ。當分あそこへは行きたかありませんよ。

秀雄 だつて、お父さんの遺言を聞きに行かない譯には行くまい。

くに子 あたし、まだ家の外へ一歩も出る氣にはなれないの。

治助 ぢや、姉さんはまだ身體が回復しないから来られないと云つて置かうか。

治助 それで、用事は相済みだ。今日は急ぐから、これで失敬しよう。

秀雄 あの男も不慮とは違つて、いやにそはしてゐる。今日は来る奴がみんな變だよ。……おれも何だか頭が疲れて来たから、氣晴

らしに、そこらを散歩して来ようか。いゝだらう。(くに子の同意を乞ふやうに云ふ)

くに子 あたし、今日は一人であるのが、何だか淋しくなつた。

秀雄 ぢやお前も一しよに散歩するさ。彼れがさう云ひ棄てて奥へ入つて行くと、くに子も後から入つて行く。

間もなく、久三が庭の裏手から入つて来て、疲れた態度で、部屋の上り口に腰を掛ける。「誰れもゐないのか」と、獨言を洩らす。そしてふと、蓄音器に目を留めて、上へ上つて蓄音器をかける。偶然選んだのは悲調を含んだ音楽であつた。それに耳を傾けながら、彼れはその前に寝そべる。

と、そこへ、くに子が顔を出す。

くに子 (吃驚して) あなたはまだお歸りにならなかつたの? いつの間に何處から此處へいらしたの? ……そこにあるのは、眞實の久三さんなのかしら。(夢に壓されてゐるやうに云ふ)

久三 僕も、自分で本當の久三のやうに思はないのだよ。本當の久三はやはり、あの時に死んだのだね。さつき秀雄さんの話だと、僕の連れの女が、僕を門の外で待つてるといふ

ことだから、そのつもりで出て見ると、何處にもゐないんだ。それで、家のまはりをウロウロ捜してゐるうちに、またこの部屋へ入り込んだ譯なんだが、……

くに子 早く歸つて下さい。

久三 (泰然として) さういふくにさんも、本當のくにさんかい。あの時、彌生町の家で二人は同じ薬を分け合つて飲んだのだ。昔の久三とくに子の抜け殻が此處にゐるんだね。抜け殻同士が並んで昔の夢を見てるんだよ。

くに子 あたし、あのお薬はあなたのために飲んだのぢやないわ。

久三 僕だつて、あの薬をくにさんのために飲んだのぢやなかつた。……でも、自然にそんなことになつたのだよ。この蓄音器は、二人の夢を叩ふのに相應しい音楽だ。

くに子 は骸骨が倒れるやうに、久三の側に倒れて、非現實な顔を並べる。蓄音器は鳴りつゞける。

光秀と紹巴

人物
 明智光秀
 明智左馬助
 同次右衛門尉
 齋藤内藏助
 藤田傳五
 溝尾勝兵衛
 野武士三人
 侍者、飛脚など

(一)ノ一

時は、五月二十八日夜。
 所は、愛宕山の西の坊。
 書間の連歌興行に用ひた文臺が、書類筆硯などを載せたまゝ置かれてある。その側にほの暗い燈火が置かれてあつて、寢床を並べて寝てゐる二人の姿をかすかに照らして

ゐる。一人は明智光秀(五十五歳)で、一人は連歌師里村紹巴(五十歳くらゐ)である。光秀、ふと何ものかに脅かされたやうに起き上つて、室内を見廻し、やがて窓を開けて外を見る。紹巴も頭を上げて、近散くさい目で光秀の方を見る。光秀、何か考へながら寢床へ戻つたが、横になるのを忘れてゐるやうに、蒲團の上に坐る。

紹巴、起きる。

紹巴 殿様は御氣分がお悪いので御座いますか。

光秀 いや、氣分は悪くはない。(慌てて打消し

て)おれは面白い句を考へてゐたのだ。

紹巴 面白い句と仰有るのは?(光秀の顔を見

守つて)今日の百韻の連歌のうちでも、殿様

のお作りなされた發句はこの外凜然として

ゐるのに驚きましたが、それに飽足りないので、

もつと奇抜な面白い句をお考へ遊ばしてゐる

ので御座いますか。

光秀 いや、年甲斐もなくあんな血氣に逸つた

やうな句を作つたことを、おれは後悔してゐる。古格に通じた其方などの氣にも入らないに違ひない。

紹巴 (感慨を籠めて) わたくしどもの守つてゐる連歌の道はもう末で御座います。誰れも彼れも、前人の模倣ばかりをして、千篇一律無味乾燥になりましたから、近年ますます連歌の衰へるのも無理は御座いますまい。山崎宗鑑や荒木田守武の開いた俳諧の道に志す者を、一概に下賤な好みとして嘲る譯にはまゐりません。

光秀 其方がそんなことを云ふのは不思議だよ。庶安の新式目とか、宗祇や兼良卿の新式追加とか、舊來の連歌道の講釋を後生大事に聴かせて呉れてゐる紹巴先生が、今日の卑俗な流行を是認するのは可笑しいぢやないか。

紹巴 さう仰せられると一言も御座いません。

……わたくしも今夜は眠つてゐながら、いろ

いろと物を考へて居りました。

光秀 其方はさつきまでよく麝を搦いてゐた

よ。

紹巴 でも、あなた様がをり／＼溜息をお吐き

遊ばすのを、夢のうちに耳に入れて居りました。

光秀 おれが溜息を吐いたかしら。それは其方の夢ぢやないか。…おれは今日連歌を終へたあとで、直ぐに丹波へ歸城すればよかつたのに、皆なの風流な話に引込まれて愚圖々々してゐるうちに歸りそこねてしまつた。こんな静かな處で考へ事をしてると、却つて頭が疲れるものだな。其方などは氣樂で羨ましいよ。

紹巴 それはあなた様は中國筋御出陣の日は追つて居りますから、何かとお心遣ひをしていらつしやるので御座いませう。

光秀 おれも長い年月、戰場では艱難辛苦して來たのだ。今度の門出に格別に心を悩ます譯はないのだが、この頃の蒸暑い鬱阿しい空模様がおれの頭を壓しつけるやうで爲様がないよ。今も外の爽かな夜風に吹かれて頭を冷すつもりだつたが、今夜は外の風もじめ／＼していけない。…かういふ時に氣持のいい晴々とした句は思浮ばないものだな。

紹巴 左様で御座いませうか。でも、一時は今天が下知る五月哉。…御元氣過ぎるほどはいき／＼とした名句では御座いませんか。光秀 あんな句が何で名句なことがあるものか。徒らに文字を並べただけのものだ。西の

坊の脇も平凡であつたが、其方の附けた第三の句だけは、何だか譯がありさうだ。意味深長に思はれるよ。おれは、さつきも、獨りでその句の意味を考へてゐた。…「花落する流れの末を闇とめて」

紹巴 (慌てて打消すやうに) わたくしの句には何の意味も御座いません。

光秀 いや、さうであるまい。連歌興行の折から、其方の目がおれに何か云つてるやうに思はれてならなかつた。不斷は剽輕な風流人の其方の顔がおれには眩しくつてならないのだ。

紹巴 どうか左様なことを仰せられないやうに。(恐怖に打たれたやうに) わたくしには、今日はあなた様の御眼力が胸に響いて怖う御座います。光秀 いや、其方の眼力が恐ろしいよ。耳を留めて聞いて見る、何處かで鼻が鳴いてるだらう。

紹巴 (耳を澄まして) なるほど鳴いて居ります。それに一時止んでゐた雨の音がまた微かに聞えだしました。光秀 外は眞暗だ。おれが生れてから見たことのないほどに氣味の悪い眞暗な闇の夜だ。そ

の闇の中に鼻が鳴いてゐるが、其方の目が鼻の目のやうにおれには見えるよ。

紹巴 どうか左様なことは仰せられないで、お心を鎮めておやすみ遊ばしませ。夏の短夜は明けると間も御座いますまいから。

光秀 おれはさつきは、夜の明けのを待焦れて、窓の外を覗いて見たのだが、今其方の顔を見てゐると、もつと夜が續けばいゝと思はれるのだ。

紹巴 あなた様の仰ることが、わたくしにはどうも合點がまゐりません。

光秀 おれも合點が行かない。(燈火の方を見て) その弱々しい燈火を、おれの溜息で吹消したら、部屋の中も眞暗だ。外の暗さにはいけない闇の夜になるのだ。おれと其方の二人きり、闇の世の中に差向ひでゐることになるのだ。

紹巴 どうか燈火はお消しなさらないやうにお願い申します。ふと、窓から洩れ來る風で燈火が消える。舞臺眞暗になる。紹巴 (震へ聲で) 殿様、どうなされましたか。光秀 おれはどうもしない。燈火は自ら消えたのだ。…其方とおれとは暗闇の中に向ひ

合つてゐるのだが、梟のやうな其方の目では光秀の心が見えるのか。
紹巴 わたくしはあなた様の御晶眼に預つてゐる平凡な連歌師で御座います。どうしてあなた様のお心の中が分りませう。……わたくしは燈火を持つてまゐりませう。

光秀 まあ待て。……其方は書間、連歌興行の最中に、おれが本能寺の溝の深さ淺さを訊ねたら、勿體ないお訊ねだとおれを咎めたではないか。この頃降りつゞく五月雨に、何處の溝も水量が増したであらうのに、それを訊ねたのが何故いけないのだ？

紹巴、答へず。
光秀 オイ、紹巴、返事をしろ。……おれの心に疑ひを掛けてゐる者は、天下に其方一人だ。……おれが句作に心を取られて、糞を包葉のまゝ嘔つたのを、其方はうろんな目付で見つてゐた。……おれの溜息の數までも數へてゐたのだらう。

紹巴、答へず。直ぐ側で、梟が鳴く。
光秀 貴様は聲までも梟の眞似しておれを脅かすつもりか。
そこへ、ふと、小姓吉之丞が手燭を持つて入つて来る。光秀一人が端坐してゐて、

紹巴の姿は見えない。

光秀 紹巴は何處へ行つた？

小姓 わたくしどもの臥所へまゐつて居ります。

光秀 紹巴を此處へ呼べ。それから、夜明け前に出立するから、其方どもも今から支度に取り掛れ。

小姓 はい。……まだ眞夜中で御座いますが。小姓は燈火を點ける。

光秀 暗ければ松明の用意をさせろ。闇にも雨にも構はないで急いで丹波へ歸るとおれは決心した。

小姓 お供の衆に左様申傳へます。

小姓、次の間に入る。

光秀、文臺を引寄せて、連歌用の懐紙に向つて、發句を書きつける。

紹巴は恐るゝ入つて来る。

光秀 これを讀め。

紹巴、懐紙を受取つて讀みながら、光秀の顔色をぬすみ見する。

光秀 「時は今天が下知る五月哉」(儼然と言放つて)……おれは闇を冒して雨を冒して歸城する決心をしたよ。それで、其方をも一しよに連れて行かうと思つてゐる。

紹巴 (當惑して) わたくしに龜山までお供しと仰有るので御座いますか。

光秀 いやとは云ふまいな。

紹巴 御座付けは有難う御座いますが、旅の用意はいたして居りませんので、一度歸宅いたしました上へ。

光秀 それはいかんよ。用意も何も入るものか。……其方の目付顔つき言葉つきの一つ一つが、おれの心を動かしてゐるのだ。梟のやうな其方の口がおれの心をつ突つてゐる。おれは其方を離す譯には行かない、龜山へも連れて行く。戰場へも連れて行く。おれの發句の意味が實際にどう働くか、其方のその目でよく見るやうにしる。

紹巴 臆病者のわたくしは、戰場は恐ろしく御座います。

光秀 今日のおれの心の動きをいろ／＼に監視してゐた其方だ。これから先きも、おれの側に附添つてゐて、よく見てゐるといふ。(脇差を手に執つて) おれはお前と寢床を並べて、連歌の語をしてゐる間に、いく度この刀に手を掛けようとしたか知れなかつたのだが、今は其方に對して毛頭害意を持つてゐないから安心してゐる。

紹巴 (おどくしながら) お殿様は何故今日に限つてわたくしをお憎み遊ばすので御座いますせうか。

光秀 安心しろ。只今は決して其方を憎んでゐないよ。躊躇逡巡してゐたおれを其方は刺戟して、行くところまで行くやうに決心させて呉れたやうなものだ。今書いた發句と、晝間書いて神前に收めた連歌の發句と、同じ文字でも、おれの心の現はれが違ふのが、其方に分らないことはあるまい。…晝間はまだ文字に遊びがあつた。

紹巴 何の御決心で御座いますか。

光秀 空呆けるな。…其方の首を出陣の血祭りに備へるかはりに、其方を召連れて、闇の夜を驅廻るのだ。おれの發句がおれの出陣の旗じるしだ。…さつき其方に云つたやうに、人眞似ばかりして古くさい文字の並べつこをしてゐる連歌師も、生命懸けの戰場を往來したなら、少しは活氣のある句が作れるやうになるだらう。

紹巴 いえ、わたくしどもは、師匠譲りの連歌の眞似事さへいたして居ればよろしいので御座います。大それた望みを持つては居りません。

光秀 自分で望まなくつても、其方はおれと一しよに行くとともに行かなければならぬ。其方はおれの目の届くところから放す譯には行かないよ。覺悟をしる。

紹巴 (やうやく決心したやうに) ハイ。…では、何處までもお伴いいたしませう。

光秀 おれは馴染の深い其方を決して苦しみようとは思つてゐないよ。たゞおれの心に最初疑ひを挟んだ其方を打ちやる譯に行かないのだ。だから其方も覺悟をして、行く先々で面白くてもつくつて、おれを慰めて呉れ。そこへ、小姓入つて来る。

小姓 御出立の用意が調ひました。

光秀 さうか。…紹巴先生も丹波へ御同行なさるのだ。(紹巴に向ひ) さあ、行かう。一しよに闇の中をつゝ走らう。

光秀 紹巴の腕を取つて引立てる。

(一)ノ二

闇の中を松明で道を照らして、四五騎が駈せてゐる。そのうちの一人は光秀で、一人は紹巴である。紹巴は半死人の如く喘ぎ喘ぎ隨つて行く。

光秀 鬱陶しかつたおれの頭も次第に晴々しく

なりかけたよ。東の空もいくらか白んで来たではないか。今日は久振りだ五月晴のうらかな空が見られさうだな。

紹巴 御意に御座います。(苦しげに云ふ)

光秀 光秀はもう、昨夕のやうに溜息ばかり吐いてはゐないぜ。(ふと、向うを見つけて馬を留める) みんな馬を留める。向うから怪しい奴がやつて来る。…紹巴、其方の目ではあれが何だと思はれる?

紹巴 さあ、何で御座いませうか。

光秀 吉か凶か。先見の明のある其方に分らないのか。…燈火を持つて夜道を急いで此方へまゐる奴は、おれの前途の運に關はりがあるさうだ。

紹巴 御殿様の御運に關はりのあるかないかは分りませんが、今時こんな淋しい野道を通つてゐる人間は、たゞものでは御座いますまい。…さう云へば、わたくしも、何のために殿様にお隨き申して、こんな夜道を通つてゐるか、われとわが身が分らなくなりました。(泣言のやうに云ふ)

光秀 歌詠みといふ者はよく、意氣地がないものだ。(笑ふ)

そこへ、飛脚某が急足で入つて来て、ふ

し、光秀の一行を見て驚く。會釋して道
を避けようとする。

光秀 オイ、待て。其方は何者だ？

飛脚 龜山のお城へまゐる者で御座います。

光秀 龜山の城へ？：おれはさつきからさう

だらうと思つて見てゐた。：其方はいゝと

ころでおれに會つたのだ。龜山まで行くには

及ばん。用事を云へ。聞いてやらう。

飛脚（相手の顔を注視して）あなた様は龜山

のお殿様でいらつしやいますか。

光秀 おれが光秀だ。おれの顔も知らないやう

な雑兵を使者に寄越したのか。：：そんなこ

とけ兎に角、早く用事を云へ。

飛脚 森お亂所様からの御書状を持参いたし

ました。

光秀 何、蘭丸からの手紙？（昂奮して云つ

て）見せる。

飛脚、背負つた包の中から文箱を取出す。

從者の一人、それを光秀に捧ぐ。光秀それ

を開けて、從者の差出した松明の光にて讀

む。

光秀 承知した。

讀終ると、さう云つて、ふと、手紙を松明
の火にて燃す。

飛脚（それに驚きながら）お亂所様への御返
事は承らせて頂く譯にはまゐりますまい
か。お殿様へ確かにお届申上げた證據を
頂きたう存じます。

光秀 おれの返事が欲しいといふのか。欲しけ

れば返事をしてやらう。

光秀、咄嗟に飛脚を斬殺す。紹巴、その他

の從者驚く。

光秀 信長公の御上意に、中國、出陣の用意が

出来たなら、人數のたきつき、家中の馬など

の様子を見たいから、早速引連れて京へ上れ

と仰せられたと、蘭丸からおれに知らせて來

たのだ。主君の御寵愛を笠に着て、權柄づく

でおれに物を云ふ森の小伴の手紙を焼いて、

使者を斬つた。（泰然として云つて）紹巴に

はおれの心が分つてゐるだらうだ。

紹巴 虚弱なわたくしは、疲勞して夢のやうで

ございます。

光秀 もう一走りだ。みんな急げ。

光秀馬を走らす。

(一)ノ三

龜山城外の廣場。六月朔日の夕暮。
明智光秀、小姓吉之丞を連れて出て來る。

光秀 紹巴は城内の何處にもゐないと云ふの
だ。

小姓 午の刻までは、あの方は死人のやうな顔

して寝てばかり居りましたが、暫らく立つて

部屋を覗くと、何處へか行つて姿が見つか

りません。

光秀 出陣の準備に取りまぎれて、あの男の

ことは忘れてゐたのだ。：あの臆病者、逃

げたつてどうもしないだらうが、念のため、

も一度捜して見う。

小姓 出て行く。光秀床几に腰を掛けて、

五月晴れの夕空を仰ぐ。そこへ、明智左馬

助、同次右衛門尉、齋藤内藏助、藤田傳

五、溝尾勝兵衛が入つて來る。

左馬助 皆なを召連れてまゐりました。

光秀（ふと元氣づいて）かうして五人の揃つ

たのを見ると、おれも非常に心丈夫だよ。

左馬助 殿には人拂ひをなされて、我々五人の

者に、火急な御談合があると云ふのだ。（他

の仲間に向つて云ふ）

光秀 おれ一人でよく物を思つてゐるより

も、早く其方たちに相談すればよかつた。長

い間おれと艱難を共にして哭れた其方たち

に、おれの心中を打明けけるのを躊躇したのは

思なことであった。

内藏助 殿には先日來、ひどく物を察じていらせられたやうに思はれました。愛宕山御參籠を終へて御歸城なされた時には、殿の御顔色はひどくお寝れなされたやうに拜察いたしました。

光秀 愛宕山中の一夜は、おれも気が狂つたかと思はれるほどの苦勞をしたよ。一夜のうち頭の髪も白くなつたかと思はれる。(苦笑を洩らして、ふと調子を變へて) さつきこの廣場で人数調べをした時に、内藏助は、大丈夫一萬三千人は揃つてゐると斷言したが間違ひはあるまい。

内藏助 それに相違は御座いません。皆なよく食つて十分に休息してゐる元氣者ばかりで御座いますから、中國へ押出しても、戰場の稼ぎは、羽柴殿の軍勢に勝るとも劣る氣遣ひは御座いますまい。

光秀 それは頼もしいな。(喜色を浮べて向うを見る)

次右衛門尉 (もどかしさうに) 我々五人の者への内密の御談合は何事で御座いまするか。出陣の手配りはすでに出来上つてゐるので御座いますか。

光秀 ……まあ、おれの申すことを心を落着けてよく聞いて呉れ。…おれも上様のお取立てで、三千石の小身から、俄かに二十五萬石も拜領いたすやうになつたのだが、岐阜表で三月三日の節句には、大名高家列座の前で、面の皮を剥がれるやうな目に會はされたし、その後、信州上諏訪の御本陣では、櫓干に頭を押し付けられて騾り飛ばされて、衆人稠座の中で恥を掻かされた。今度は今度で、徳川殿御變應のことから、無残なお叱りを受けて、俄かな西國出陣を仰せつけられた。こんな有様では、この次には、どんな我身の大事に及ぶかも知れないと、おれは案ぜられるよ。

次右衛門尉 殿の御胸中は御推察申上げて居ります。

傳五 わたくしども、人知れず無念の涙を石んだことも御座いました。

光秀 この年齢になつて、子供か何ぞのやうに、打撻されてゐるのを見た者は、さぞ胸甲斐ない奴だとおれを嘲るだらうな。

勝兵衛 上様はかやうな御氣性だと思ひになつて、御忍耐遊ばしたらよるしからうと存ぜられます。上様は特別に殿に對しておにくしみを持つていらせられるのでは御座いますまい。

光秀 勝兵衛はおれを忍耐力の薄弱な男とも思つてゐるのか。

勝兵衛 決して左様のことは。…

光秀 いや、今はくどくと思はれをこぼすために、其方どもを寄集めたのではないよ。おれは非常な決心をしてゐる。

五人は目を凝らして光秀を見上げる。光秀は床几を下りて、敷皮の上に居直り、五人の者に近く接す。五人は光秀の言葉待設けてゐる。

光秀 ……最後の思出に、一夜たりとも天下をおれのものにしたいと決心をしてゐる。(獨言のやうに云ふ)

五人の者驚いて言葉を發せず。光秀 有爲轉變、榮枯盛衰の世の習ひだ。一日たりとも望みを遂げればそれでいゝと覺悟を極めた。…其方たちが同意して呉れなければ、おれ一人、本館寺へ刺込んで、腹を擡切るまでのことだ。…其方たちは何と思ふか。

少時沈黙の後、左馬助 殿御一人の御胸中で左様思召された上は、天知の地知る我知ると申すたとへの通り、そのまゝでは済みませぬ。まして、五

人の者にお打明けなされたのだから、御實行遊ばす外はあるまいと思はれます。

内藏助 これほどの大事をよくも御決心遊ばしました。

次右衛門尉 お目出たら存じます。わたくしども、多年の胸のつかへが下つたやうに存ぜられます。

傳五 わたくしも雙手を擧げて御同意申上げます。

光秀 (勝兵衛を見て) 其方は何と思ふ。おれにもつと忍耐しろと申すか。

勝兵衛 どういたしまして。…明日から、わが殿を上様として仰ぎ奉られるやうに相成りました。こんな喜ばしいことは御座いませぬ。…この上の御談合は御無用かと存ぜられます。

光秀 五人が五人とも同意してくれて、おれも満足だ。こんな時には、一人や二人は、唐人の古い言葉など持出して諷言立てをしたがるものだが、皆な符節を合はせたやうに意見が一致したのは愉快だ。

左馬助 この頃は夜が短う御座いますから、これから直ぐに寝足いたしませう。ほのゝと夜の明ける頃に本能寺をひた〜と取巻い

て、成るべくしたら、五つより前に本能寺を片付けて、それから妙覺寺の若大將を討果すやうに手順をつけることにいたしましたう御座います。

光秀 おれもさう思つてゐた。…人数の少い本能寺を片付けるに手間暇は入らないが、何よりも味方の士卒に二心を起させぬやうに注意するのが肝心だよ。

左馬助 その御心配は御無用で御座います。右へ向はうと左へ向はうと、士卒どもの出陣の氣持にかはりは御座いませぬ。毛利の軍勢へ斬込むのも、本能寺へ矢を向けるのも彼等の氣持に差別は御座いませぬ。…京近くなつてから、殿が天下様にお成り遊ばすと觸れ廻らせませう。下々の者草履取以下にいたるまで、手柄次第で知行を與へると觸れましたら、皆な揃つて喜び勇むに相違御座いませぬ。

内藏助 から極つたら一刻も時を遅らせてはならない。速刻出陣のお觸れを廻さなければならぬ。

光秀 皆々立上る。あとかから立上る。

(二)ノ一

六月十日の日暮頃。

下鳥羽の陣屋。

光秀、入浴後の輕装にて、例の陰鬱な顔して獨酌でデビ〜やつてゐる。

そこへ、侍者が入つて来る。

侍者 紹巴どのがお目通りを願つて居ります

が、いかゞいたしましたせうか。

光秀 紹巴が来ようとは思ひも掛けぬことだ。

侍者 上様は御多用でお疲れ遊ばしてゐるから

と、一應は斷りましたが、たつてお目通りいたしたいと申しますので。

光秀 會つてやるから直ぐに此方へ通せ。

侍者 ハイ。

出て行くと、光秀、また、物を考へながら盃を舐める。をり〜團扇をも使ふ。

紹巴、恐る〜入つて来て、恭しく平伏する。

光秀 其方にまた會へるとは思はなかつたが、

あの後何處で何をしてゐた?

紹巴 戰場を見せせてやらうとの仰せに背きました、お許しをも乞はないで、龜山のお城を退

去しまして、申譯のいたしやうも御座いませ
ん。

光秀 それはもうすんだことだよ。…しかし、
今度の事には、其方も關係があるのだから、
時々はその方を思出しつゝたよ。

紹巴 恐れ入ります。(やゝ安心して) 上様が
わたくしを憎んでいらつしやるやうに思はれ
ましたので、お城を抜出して、丹波の山中に
二三日潛んで居りました。路用の金は持つて
りませんので、食ふや食はずのひどい思ひを
いたしました。

光秀 馬鹿な奴だ。其方には骨折賃を興へよう
と思つてゐたのに。

紹巴 上様の御大業に何一つお役に立たなかつ
たわたくしにまで、御勝利をお裾分けをして
下さるので御座いますか。天下様におなり遊
ばしたお喉を、山中で承りまして、それ
では、お祝ひに上らなければならぬと思ひ
まして、急いで京へ戻つてまゐりますと、洛
中の地子御免怨の有難い御高札を拜見いたし
まして、御仁政に感涙を催しました。

光秀 梟のやうな目をした其方も、おれの側
に隨いてゐなかつたから、眞相はなんにも分
らないのだな。…まあ一杯やれ。…愛宕山

の西ノ坊の一夜のことが、おれには遠い昔の
夢のやうに思はれるよ。

光秀の差す盃を紹巴は受ける。
紹巴 上様お手づからのお酌は勿體なう御座い
ます。それに、あまり御酒をお嗜みにならな
い上様が、今夜はお一人で召上るのは不思議
に思はれますが。

光秀 成程さう思ふだらう。おれもこの頃は連
歌をつくる氣持にはなれず、外に鬱憤晴らし
の手段がないから、酒でも飲むことにしたの
だよ。

紹巴 さすがは風雅の道を辨へていらせられる
ので、尊い御身分で、お手酌を楽しんでいら
せられるのは恐入ります。

光秀 ところが、かうしてゐても、なか／＼風流
な氣持にはなれないのさ。酒といふものは人
の心を浮立たせるものと極つてゐるので、そ
の名前に惚れて無理に飲んでではゐるもの、
ちつともうまくないよ。心が浮立ちもしな
い。…酒と云へば、おれは七杯入りの大杯
を内府殿に押付けられたことがあつたのだ、
御辭退すると、酒を飲まんのなら、これを飲
めと、鼻先へ白刃を指しつけられたので、お
れは夢心地で大杯を飲干したが、内府殿は、

さては生命は惜しいものなんだと冷笑なさ
れたよ。

紹巴 内府様は残忍な方で御座いました。
光秀 最早おれに、飲めない大杯を押し付けら
るのは、天下に一人もなくなつた譯なんだが、
それがおれに取つていゝことだから悪いことだ
か、おれにサツパリ分らなくなつた。

紹巴 それはお身分が尊くお成り遊ばすほど、
お心遣ひも多う御座いませう。わたくしど
もは、上様御仁政の下に安穩に日が過ぎられま
すれば、それで満足いたすので御座います。

光秀 其方はおれの力で天下がをさまると思つ
て訪ねて来たのか。愛宕の山の闇の中を突抜
けて来たおれの名が天下に輝きたしたのを慕
つてやつて来たのか。

紹巴 もはやわたくしに對するお疑ひは解けた
ことと存じまして。

光秀 其方があの時おれの事を本能寺へ進誼す
るか知れないと氣遣つてゐたのだが、それは
もう済んだことだ。…これからおれの側に
ゐて呉れ。決して無慈悲な取扱ひはしない
よ。…たとひ、まだ連歌の遊びをする氣に
はなれなくつても、其方のやうな男が側にゐ
て呉れると、おれは好きでもない酒をチビチ

てチビチ

ビ飲むよりは、氣晴らしになつていゝのだ。

紹巴 上様のお側に置いて頂ければ、これほど仕合せなことは御座いませぬが、戰場のお役に立たないわたくしが、お側でまご／＼してゐましては、却つてお目障りになりさうに思はれます。

光秀 いや、其方も知つてゐる通り、おれは、内府殿や以前の朋輩とは好みが違つて、女子共を側に置いて酒宴を催すことには、あんまり興味をもつてゐないのだよ。其方のやうな男と、とほけた話でもしてゐる方が、おれの柄に合つてゐるのだらうな。……ところで、紹巴、おれはひどく人氣の悪い男だよ。大望を遂げた今日、しみ／＼それに気がついたよ。松永彈正でもおれほどには世間から毛嫌ひされてはゐなかつたらうな。

紹巴 わたくしには左様存ぜられませぬが。……

光秀 其方は巖の山でおれの心を見破つた最初の男だが、今日以後のおれの運勢をどう思つてゐる？(相手を注視する)

紹巴 わたくしはたゞの連歌師で御座います。上様の御運勢のよろしいやうに願つて居りますばかりで、世上の事は何事も分りませぬ。

光秀 今まで神隠しに隠されてゐたやうな其方が、今日出拔けにやつて来たのは、何か深い譚

がありさうにおれには思はれるのだが。……兎に角、今夜から、おれの陣所へ留めて置くから、その覺悟をしてゐて呉れ。荒武者ばかりに取りまかれてゐるので、おれの息が詰りさうなのだ。

紹巴、當惑してゐる。そこへ、内藏助が入つて来る。

内藏助 紹巴殿か。悠長らしく酒のお相手などして。……早くお立ちなさい。

光秀 さう六ヶ敷く云ふな。この男は陣屋に留めて置いて呉れ。この男はおれの運を左右する魔力を持つてゐるさうに思はれてならないのだから。……今日出拔けに訪ねて来たのが、おれの仕事に關係がありさうに思はれてならないのだよ。この男を歸さないで留めて置いて呉れ。……紹巴、其方は暫らく次の間に控へてゐる。

紹巴、おど／＼して入つて行く。

内藏助 あんな坊主をなせお相手になさいます。(不機嫌に云つて)……只今、郡山から使の者が歸りましたが、筒井順慶はお味方に加はる望みは全くなくなりました。郡山

の城内に兵糧を貯へて、我々に敵たふ準備をしてゐるさうで御座います。此方から持出した有利な條件さへ受入れる見込みはなさうで御座います。

光秀 あの打算的の男がさう思つたのは、いよいよわが軍勢に勝目がないと見込んだのだな。

内藏助 どうせ他人は頼みになりませぬ。われわれだけでやれる所までやるより外爲様が御座いますまい。

光秀 姫の忠興にさへ憎まれたおれだが、かうまで四方八方から愛想を盡かされようとは思はなかつた。……しか、内藏助、其方たちはまだおれに背かうこはしないか。

内藏助 何を仰せられます。衣服に火のついたやうな只今の場合に、無用な口を利いてはゐられませぬ。

光秀 それもさうだ。速刻皆なを集めて置け。今後の方針を極めよう。……どうせ、龜山出立の際のやうに、衆議一決といふ譚には行くまいな。

内藏助 しかし、仲間内は主君と生死を一つにする覺悟がついて居りますから、それだけは御安心遊ばしませ。

光秀 ウ、ン。(氣乗りのしない返事をする)

内藏助、出て行く。光秀はなほ、盃を紙めてゐる。顔には憂鬱の色が加はる。ふと側の團扇を取つて煽ぐ。やがて、隣室から唸り聲が聞える。光秀、不思議さうに耳を傾けて座を立ちかける。

光秀 誰れだ? 唸つてゐるのは。

紹巴 わたくしで御座います。紹巴で御座います。

光秀 どうしたのだ。腹痛でも起したのか。

紹巴 只今内藏助様に手足を縛られました。

光秀 (微笑して) 内藏助に縛られたのか。なぜそんな目に會はされた?

紹巴 生死の騒ぎの場合に邪魔つけだ、不吉な奴だとお怒りになつて、あの榮螺のやうな拳でわたくしの頬骨をお殴りになりました。それでわたくしを柱に縛りつけて、此處を動くなと仰有つて行かれました。

光秀 内藏助は素早い奴だ。…龜山ではおれが其方の身體を自由にさせて置いたから逃げられたが、さうして置けば大丈夫なんだ。

紹巴 どうかお押揃ひ遊ばさないで、お小姓衆でもお呼びになつて、わたくしの縛めをお解きなすつて下さいまし。

光秀 連歌興行の折、おれの旗上げの心を最初に讀んだ其方だ。おれが、ドン詰りまで行つて腹でも切る時には、辭世の發句を詠むから、其方が脇をつけて呉れ。…連歌師は花見月見の句は詠めても、死生の境にはそれどころでないと言ふのか。…しかし、無意味に苦しめては可哀さうだ。おれが縛めを解いてやらう。

光秀 座を立たうとしてゐるところへ、侍者 某アタフタと入つて来て、跪くや否や、

侍者 羽柴筑前殿の數萬の人数が、攝州境に近づいたとの御注進が御座いました。

光秀 なに、秀吉が、…秀吉がもう此方へ向つたのか。

光秀、慌しく立ち上る。

侍者 他侍者某入つて来る。平伏して、

侍者 上様には速刻御評定の席にいらせられるやうにと、内藏助様がお願ひ申して居ります。

光秀 只今出掛けるところだ。

光秀、出て行く。

「どうぞ、わたくしの縛めをお解きなすつて下さいまし」と、紹巴の聲。

「それどころではないのだ」と、光秀の聲。

(二)ノ二

陣屋の一室。あたりは薄暗い。

紹巴、紐で縛られてゐる。

齋藤内藏助、溝尾勝兵衛と一しよに評定の室から出て来る。

内藏助 (早急して) 此方が堅まつてゐないところへ、かう早く秀吉に乗込んで来られちゃ、味方に勝目はないよ。一先づ坂本へ退却して籠城して工夫を凝らすのが差當つての良策だが、おれの説を用ひないと、大將もあとになつて思當るだらう。

勝兵衛 しかし、秀吉に恐れて退却したやらぜ、味方の意氣が沮喪するかも知れないよ。どうせ此方には世間の人望がないのだから、破れかぶれでやつつけるより外爲方があるまい。

上様も腹の中はさうならならう。お前も我慢して、多數の意見に従つて、やれるまでやつて見て呉れ。

内藏助 どうせ、おれ一人で退却する譯には行かないからな。

二人はさう話しながら、ふと、紹巴の方を見る。

紹巴 内藏助様、お慈悲で御座います。この縛

めをお解きなすつて下さいまし。

内藏助 坊主、まだそこにゐたのか。

勝兵衛 紹巴どのぢやないか。何をして縛られたのだ。

内藏助 こいつ、大將のところへ胡麻を摺りに來やがった。それで忌々しいからおれが縛つたのだ。

勝兵衛 可哀さうに。

内藏助 連歌師だの繪師だの禪坊主だの、今日の時世に煩さい奴だ。大將もこんな奴に取合つてゐるから、勇氣が減つて気が迷つていないのだ。

勝兵衛 しかし可哀さうだな。風流といふ名は立派だが、鼠鼠の旦那がなければ生きてゐられないのだから。

内藏助 此處の大將が天下を取つたから御機嫌伺ひに來たのだらうが、今に、秀吉の軍が勝ちでもしたら、今度は猿奴のお髯の塵を拂ひに出掛けることだらう。

さう云ひながら行過ぎる。勝兵衛も一しよに出て行く。紹巴、怨めしさうに見送つて、自分で縛めを解かうとして藻掻く。

そこへ光秀が考へ事をしながら入つて來て、紹巴に氣付かないで行過ぎようとする。

紹巴 上様、お慈悲で御座います。

光秀、ふとその方に氣がつく。

光秀 其方はまだそこにゐたのか。

紹巴 どなたにお願ひしても紐をほどいては下さいません。

光秀 其方がもう少し辛抱してゐれば、戰場に連れて行つてやらう。

紹巴 さつき、上様は縛めをほどいてやらうと仰有つたのをお忘れになつたのです。……さつきお手づから酌を下すつたやうに、恐れながら、お手づから縛めをほどいて下さいまし。

光秀 さつきと今との間に、光秀の胸には槍の穂先が突きつけられたのだ。其方の縛られた身體はおれの身體見たいだ。

紹巴 わたくしの目の前にも白刃が突きつけられてゐるやうに見えます。どうぞお許しなされて下さいまし。

光秀 なに、おれは其方を斬りも突きもしないよ。お前が秀吉の間者になつておれの軍の準備を索りに來たのぢやあるまいし。

紹巴 わたくしは上様の御勝利をお祝ひに上つたので御座います。

光秀 上様だの、御勝利だのといふ其方の言葉

は、冷かしのやうにおれには聞えるよ。……其處に坐つてゐて、おれのために辭世の句の用意でもしてゐる。

光秀、行過ぎる。紹巴、怨めしさうに見送つてゐる。

鎧武者幾人も通過する。怪訝、輕蔑、さまざまの表情をして紹巴を見ながら行く。

紹巴 わたくしも戰場へお伴いたします。縛めを解いて下さい。

皆な黙つて行く。あたりは暗くなる。暫らくして、覆面した野武士三人忍んで來る。甲 大丈夫、この陣屋は空つぽだ。(次の室へ入つて行く)

乙 オイ、誰れか縛られてゐるぜ。(紹巴の方を見る)

紹巴 助けて呉れ。

乙 お前は罪人か。

紹巴 お前たちは野伏か。それなら、この紐をほどいて呉れ。おれが案内して一儲けさせてやらう。

丙 そんなことを云つて、この男を信用出來るだらうか。

乙 刃物を持つてゐないから大丈夫だらう。古

ばげた弱さうな奴だ。
紹巴 おれは歌泳みだ。安心して縛めを解いて呉れ。

甲 待て〜。今の時代に人間にんげんの云ふことが信用出来るか。此處の大將たいしょうは大恩のある信長公を暗打に會はせたのだ。さういふ世の中に迂闊うくわんに他人の云ふことが信用出来るか。

紹巴 なに、羽柴筑前はつたいしゅうぜんどのが其處まで攻寄せてゐるのだから、此處の大將たいしょうの壽命じゆまいはもう知れたものだよ。

甲 どちらが勝たうと、おれ達の知つたことぢやないよ。負け軍の落武者らくぶしどもの物の具を剝取るのが目のつけどころだ。
丙 全體お前は何をして縛られたのだ？
紹巴 (氣取つた口調で) 此處の大將たいしょうを打取るつもりで、頭あたまを刺つて連歌師れんがしになつて入込んだのだ。

乙 それがばれて縛られたのか。誰だれに頼まれてそんな危あやういことをやる氣になつたのだ？
紹巴 信長公のお身内みみうちの方のお吩咐おんぷだよ。

甲 お前は貝掛けかいかけによらない太い奴だ。信長公の仇討あつかひを一人でやらうとしたのか。
紹巴 おれを助けて呉れ。あとで御主君ごしゅくんに御褒美ごほうびを貰つてやらう。

乙 そんな方なたなら、兎うさぎに角かくお助け申さう。
乙は手早く紹巴の縛めを解く。
甲 さあ、おれたちを案内あんないしろ。
紹巴 おれに隨したがつて来い。

(二)ノ三

十三日の夜、深更ふかやみ。
小栗栖の田舎道。
野武士三人。紹巴、疲勞ひろうした様子で一しよに歩いて来る。
甲 おれたちの目を忍んで逃げようたつて駄目だ。信長公のお身内みみうちの家來けらいだと云つたのが、諷ふうでもまことでも、光秀公の御陣所ごじんじよへ突出とつしゅつすことにしよう。大罪人だいざいじんを引捕ひきとらへたのだから、いくらかの御褒美ごほうびが貰もらへるだらうよ。

乙 いくらかの御褒美ごほうびになるもんぢやあるまいが、二三日ふた三日騙だまされてゐた腹癪はらごせに突出とつしゅつしてやらう。此處こゝでぶち殺したところで一文いちもんにもなるもんぢやなしさ。

丙 何か由緒よしゆのありさうな男だが、おれたちの仲間なかまに入いれらせる譯わけには行かないし。
紹巴 お仲間なかまにでも何なににでも入いれりますから、どうぞ生命せいめいはお助けなすつて下さいまし。

甲 天下てんか様を暗打あんうちに會あはさうとした奴やつが弱い音ねを吐はきあがる。
紹巴 本當ほんとうはわたくしは、詰つまらない連歌師れんがしで御座まいます。

甲 さう云つて、おれたちを誤魔化ごまかさうとするのか。お陣所じんじよへ連れて行つて調ていへて貰もらつたら分わかることだ。：：おれたちもこの頃はいゝ目に會あはなかつた。

乙 何處どこかへ御奉公ごほうこうしようとしたつて、今日の時世ときぜぢや、何處どこの大名だいめいが勝かつか負まけるか分わからんのだから。

丙 いや、強い方かたを選えらんで行つたつて、戰場せんじやうへ出て殺ころされちや三文さんもんにもならないからな。どうせ生命せいめいがけなら、追おひつかはれないで、隙間すきまを見て野暮やまきをした方が氣きが利きいてゐる。

乙 それにしても、この頃のやうに不流ふりゅうが續ついぢや篤あつ様さまがない。
甲 まあ、こんな坊主ぼくしでも飯いの種くさねにして見るか。

丙 しかし、此奴こいつは本當ほんとうに、磔はりつけ刑けいになるほどの大罪人だいざいじんだらうか。空巢くわくねらひのコソ〜泥棒どろぼうだつたら、陣所じんじよへ連れて行つたつて、三文さんもんにもたりやしない。
乙 この面魂めんたまはどうしてもたいの者ものぢやない

よ。…さあ、行かう。

紹巴を引立てて行かうとしてゐるところへ、馬の音聞ゆ。

甲 オイ。こんな夜更けに馬の音するのは變ぢやないか。

乙 落武者だな。…占めた。隠れる。(紹巴を引連れて、皆なが藪蔭に隠れる)

光秀、二三の従者と、疲れた馬に乗つて、トボくとしてやつて来る。藪の中から槍の穂先が現はれて、グサと光秀の脇腹を突く。紹巴、月光にて藪の隙間から苦悶してゐる光秀の顔を見て驚く。光秀もそちらを見て驚きながら、トボくとして行過ぎる。

その行過ぎたあとで、野武士と紹巴現はれる。

甲 たしかに一人だけはやつつけた筈だが。(と、あたりを見まはす)

乙 血が滴れてゐるぢやないか。おれが見て来よう。(入つて行く)

紹巴 今のはたしかに日向守どのだ。

丙 お前が暗討に會はさうとした光秀公か。い加減なことを云ふな。

紹巴 たしかにさうだ。おれは、あの方の謀反

のはじめからしまひまで見せつけられた。おれだけが見たやうなものだ。おれも恐ろしい世を見せつけられたものだ。あの方もおれの方を見てゐられた。(震へてゐる)

甲 あれが大將なら、占めた。…さあ行つて見よう。

丙 用心しろ。あれが天下様なら、お供の者も相當の腕利きだらうぜ。

甲 なに、落武者に大將も草履取も差別があるものか。へとくになつて、半死人も同様だ。おれが行つて見る。お前、この男の番をしてゐろ。

丙 あれが天下様なら、天下様を暗討にしかけたこの男など何處へ連れて行つたつて、もう賣物にならないぢやないか。召取つても御褒美の種になりやしない。

甲 成程さうだ。…この坊主、三文の値打もなくなつた。どこへも行かあがれ。

紹巴、悲しいやうな悦しいやうな顔して、トボくとして出て行く。

劇場の芝居は劇中劇と云つてもいい。地球を劇場として、我々は各々一役づつ演ずべく生まれて来たやうなものだ。善人も悪人も馬鹿も狂人も、それ々に役をふられて、死の幕が下りるまで何かやらされるのだ。勘平の候補者が多いやうに、どうせ舞臺へ引摺り出されたかぎりは、誰れしも立者になりたいのだが、天がさう命じてゐなければしたばしたつて爲方がない。まづい脚本を書くべく役づけられたものは、一生まづい脚本を書きつづけるだらう。

(『白鳥蘭筆集』の「演劇雑感」より)

人 生 五 十

時黒の死の洞門へ一歩々々足を進めてゐる我
我人間に何の眞の幸福があらうぞと私はつね
に思つてゐる。屋上の羊に異ならない身であり
ながら、幸福を夢みるのは不思議なことだと思
つてゐる。それに關はらず、生きてゐるうち
は幸と不幸、快と不快の感じに動かされな
い時はない。

十幾年目で再び手に取つた「即興詩人」を讀
み終つた今夜、昔馴染の如くに懐かしいアヌ
ンチャタやアントニオの面影を偲んで、珍らし
く感傷的になつた私は誰れかに向つてこの氣
持を洩らさうとしても相手がないので、微かな
波の音のみ聞きながら自分ひとりの思ひに耽
つてゐた。自分の通つて来たやうな生涯と、
アントニオの經て来たやうな生涯とを比べた
りした。
「自分が幸福を感じたのは、一生のうちで何時
であつたらう、どういふ場合であつたらう」と、

すでに一生を終つて將來に何等の期待を有つ
てゐない人のやうな氣持で、私は過去を顧み
て自問自答してゐたが、私のやうな幼い頃か
ら萬事に用心深かつた人間でも、詰りは運命の
波に漂はされ、流れ流れて今日に達したので、
幸も不幸も偶然に起つて偶然に消えた泡沫に過
ぎないのであつた。アヌンチャタなどある特種
の人々の身の上のみが浮草に似てゐるのではな
くつて、老若男女の、人といふ人のすべてが、
よく考へて見ると、浮草のやうに世を生きてゐ
るのである。

私は十歳にも満たぬ頃から、新古の小説類を
手に入るかぎり讀んでゐたため、色戀の興味
は早くから騰げにでも感じるやうになつてゐた
が、故郷にゐた間は現實の女には思ひを寄せ
たことはなかつた。むしろ、知つてゐる村の女
を老若ともに申し込んでゐた。これは、書物を讀
んで空想に浮べる女は、美しく、言語舉動
も奥床しいのに、私の故郷である小さな漁村
の女どもは、みんな醜くつて、言ふことなす

ことが汚らしく私に思はれてゐたためかも知
れなかつた。幼い私を揶揄ふやうな態度をす
る女はあつたが、そのたびに私はいやらしい
氣持がしてゐた。

十六の春岡山の宣教師の經營してゐる私塾へ
入學した時には、傍ら病院通ひをしたければ
ならないやうな虚弱な身體になつてゐたが、寂
しい田舎からはじめて都會へ出た悦しさに、こ
も身體ものび／＼とした。半年足らずの間にぐ
つと脊が高くなつたと云はれたほどであつた。
發育盛りの少年期で急速に心に一轉化の起ると
きであつたが、かねて小説などの耽讀によつて
肥料をかけられてゐた私には色情の芽も早く萌
したのであつた。目に觸れる女的美醜が氣にか
かりだした。丘の上の小さな洋館に住んでゐる
宣教師の娘が、ことに私の目を惹いた。そこに
は二人の娘がゐて、妹の方は瘦せてギス／＼し
て意地の悪さうな顔をしてゐたが、姉の方は紅
味を帯びた豊かな頬をしてゐて愛嬌があつた。
金髪碧眼が却つて女の美を増してゐるやうにさ
へ思はれた。聖母や天使やその他聖書の中に現
はれてゐる女を、私はこの姉娘によつて想像
するやうになつた。これを初恋と名づけるのは
少し不穩當に思はれるが、私はその時生れては

じめて敬愛の念を寄せて異性を眺めたのであつた。後年外國の小説を讀んで、アマンチャタなど美しい若い女に接する時にも、屢々岡山で見た宣教師の姉嬢を思出すほどに、彼女は深く私の幼い胸に刻まれた。

しかし、私は在學中一度も彼女に接して彼女の言葉やハツキリ聞くことが出来なかつた。私たちが教へを受けた會話の教師は、鼻ばかり高い精顔の極めて醜い老嬢であつた。「西洋人にもいろ／＼あるんだなあ」と、私は二人の女を比較してゐた。

學校は傳道を目的としてつくられてゐたので、學生は五年級を合して三十人に足らなかつた。半ば信者の子弟であつたが、その他は官立の中學へ入れないやうな少年であつた。大抵の學生は自宅から通學してゐたが、私は素人下宿に泊つてゐた。一年間の在學中私は四五度も轉居した。そして一度は轉居によつて危いところを免れたのであつた。

二

はじめは軍人の未亡人の家に下宿してゐた私は、同宿の二人の醫學學生が屢々酒を飲んで騒ぐのに惱まされたので、同宿者のない家を探

して轉居することにした。其家には口數の多い主婦と、平生はムツツリしてゐて時々癪癪を起す亭主とが、二人の娘と住んでゐた。その頃の私の目には、姉嬢は餘程歳を取つてゐるやうに思はれたが、その實二十を左程過ぎてはゐなかつたのであらう。

私は物置部屋の側の半分は板敷で、壁は二疊しか敷かれてゐない處を借りたのであつた。自炊する筈であつたが主婦が、「當分は此方で一しよに御飯をお上んなさい」と云つて呉れたので、さうすることにした。前の宿にゐた醫學學生はよく、「米が十錢すりや唐米は臭い。ノウちよさん」といふ流行唄を唄つてゐたが、まだ諸式の賤い頃だつたので、賸付で宿料が一月二圓であつたと覺えてゐる。尤も食物は粗惡で、朝晩の副食物は鹽つ辛い漬物きりのことが多く、晝飯にだけ野菜か豆腐くらゐがついてゐた。(前の宿にゐた時も同様だつたことを思ふと、その頃日本人の生活程度がいかに低かつたかが察せられる)ある日、亭主は晝餐の副食物を焼豆腐にしろと命じて置いたのに、たゞの豆腐を用ひたといつて、主婦を叱りつけたが、主婦はそんなことを聞いた覚えはないと強辯して、恐ろしい夫婦喧嘩がはじまつた。側で食事をしてゐ

た私は迷惑しながら腹の中でこの夫婦を侮蔑してゐたが、今三十年目にその夫婦喧嘩の有様を思出すと、必ずしも笑ひ事ではないやうに思はれる。(大抵の人間の家庭生活にはこの夫婦の言合ひ見たいことがつねにあるのであらう)

私は暑中休暇に郷里へ歸つたら新鮮な魚がウンと食べられると期待してゐたので宿の食物の良否に心を悩ますことはなかつた。それに學校の歸り途に、しば／＼饅飩屋や汁粉屋へ獨りで立寄ることもあつた。机の引出へは賣來豆や氷砂糖をよく貯へてゐた。さういふ物をボリ／＼噛みながら、教科書その他の書物を讀んだ。

その家の者は何によつて生計を立ててゐたのか分らなかつたが、亭主は大抵半日ぐらゐは畑を耕してゐた。二人の娘は、宣教師の娘とは人種が違つてゐる如くに容貌風姿も違つて醜かつた。私は彼女等と減多に話を交へることはなかつたが、同窓の丸尾——この宿の紹介者——は、遊びに来るたびに娘たちと面白さうに話をしてゐた。私の部屋へ連れて来て、私の煩さがるのを構はないで、讚美歌を教へてやつたり、指角力を取つたり、あるひは自分の首へ紐

を纏はつて小さい娘に引張らせるやうな滑稽な遊戯をしては、みんなでキヤツキヤツ笑つたりすることもあつた。

丸尾は私よりも三つほどの年上で、學課の出来は悪かつたが、快活で人がいゝので、私は入學當時から親しくしてゐた。丸尾自身には信仰はなかつても、基督信徒の家庭に育つた爲めか、男女關係の話は決して口へ出さなかつたが、彼れが無邪氣だか有邪氣だか、二人の娘に戯れてゐる有様は無言のうち私に私の官能を刺戟した。宣教師の娘が姉妹で、庭に設けられてあるシーソーとかいふ遊戯機械に乗つて、びえた聲で何か喋りながら遊んでゐるのを見ると、天國の天使の戯れのやうに思はれたが、丸尾が私の宿の娘たちと戯れてゐるのを見ると、下等ないやらしいもののやうに思はれた。けれど、私は一しよになつて笑ふやうな氣になつて目を注がないではゐられなかつた。初夏の頃で薄着をした娘たちは遊戯に興じると、自然に肉體のあちらこちらを露出した。

あるやうに云つてゐたが、ある日珍らしく一人で私の部屋へ入つて来て、「貴方は今夜××のお祭を見に行きませんか。丸尾さんが來たら連れて行つて貰ふことにして居るんですけれど」と云つた。××は宿から半里ほど離れた田舎であつた。「行つてもよろしい」と、私はこの時に躊躇しないで答へた。

三

待つてゐた丸尾は夜になつても來なかつたが、私は姉妹と連立つて祭見に出掛けた。蛙の鳴いてゐる田圃を渡る初夏の夕風は、太鼓の音を幽かに傳へて來た。神社の森から洩れる燈火が遠く見られた。田舎育ちの私にも、その夜の田舎景色が何とも云へず面白かつた。姉妹の顔までも不斷に美しく見られた。私は打解けた話を仕掛けることは出来なかつたので、讚美歌を唄つたり、半歳ばかり田舎の漢學塾にゐた間に習ひ覺えた詩吟をやつたりして、獨りで浮れてゐた。「丸尾さんよりもお上手ぢや」と、姉妹は感心してゐた。神社に近づくにつれて、參詣の人々で小徑も雑沓してゐた。通りがかりの若い女に戯れかかる醉拂ひの若い衆にも會つたが、姉妹はさういふ者に對しても怖ぢなかつた。神社の境内には眼鏡などの見世物や駄菓子などの露店があつたが、私たちは何を見るでもなく、何を買ふでもなく、たゞ參詣人にはたゞで飲ましてくれる薄い甘酒を小さな土器で一杯饗はれただけで歸途に就いた。でも私ばかりでなく、娘たちも大變に面白いことをしたやうに喜んで、あくる日訪ねて來た丸尾にも大袈裟に吹聴した。そして、姉妹は一度の散歩によつて急に私の親しみが増したやうに、遠慮なく頻りに私の部屋へやつて來だした。貧しい無教育な娘だから、無遠慮になると、(私を子供のやうに思つてゐたためもあつて)随分検査のない話をもするのであつた。大川の側にある遊廓の話をしてさういふ處へ行つて見ると私を唆かしたこともあつた。私はこの姉妹によつて生れてはじめて、小説本や空想だけでは得られなかつた智慧をつけられたのであつたが、一概にそれを排斥しなかつたので、丸尾に向つても彼女の事をさう悪くは云はなかつた。彼女も丸尾が來てゐる時には、外觀は彼れを相手に無遠慮に戯れてゐても、私一人の時とは話振りが非常に

ちがつてゐた。

私の心身にも、異性に對するある拘りが出来かゝつた。丁度その頃市中を散歩してゐるうちに、ふと思ひついで、父の知合ひで私の保護人になつてゐる人の家へ寄ると、其家の近所に、おとなしい學生を置きたいといふ家があるから、移つて来ないかと勧められた。連れられて行つて見ると、家の中は靜かで部屋は小綺麗であつた。私は轉居したくはなかつたのだが、保證人の熱心な勧めを拒ける理由はなかつたので、われにもなく轉居することになつてしまつた。

「私の家に何かお氣に入らんことがあるんですか」と、姉嬢は不平らしく云つた。

「××さんの言ふことを聞かん譯には行かんのぢやから仕様がなない」

私は言葉をしてその宿を出た。それつきりその娘には會はなかつたし、さして思ひの残ることはなかつたが、もう十日か二十日でもその宿を動かないでゐたら、私の一生は變つてゐたに違ひないと今回願すると痛切に感ぜられる。

男女關係について思慮が出来たのは、その後二三年経つてからであつた。私は宣教師の私塾には一年ほど學んだだけで退學して、あと一

年ばかりの間は、病氣のために、また故郷でブララして目的のない日を送ることになつたが、その間は絶えず陰鬱であつた。日に觸れ耳に觸れるものがみんな唖はしかつた。二十前の發育盛りに病患に傷つけられたものは、人間の有つて生れた幸福の芽も、後で取返しつかないほどに萎けてしまふやうに思はれる。十五六歳までは晴々としてゐた私の頭が、その後は絶えず曇つてゐるやうに思はれる。爲方なしに宗教の方へ入つて行つたのであるが、私の宗教には明るい幸福はなかつた。いつも曇つてゐた。

不治の病氣に罹つたものが、急に宗教心を起して、病氣は神の恵みであるとか、あるひは神を見たとか云つて、自ら慰めてゐるのはいたしくはあるが、私は早くから自己の經驗によつて、さういふ自己欺騙をやつてゐる人たちに對しては寸毫の敬意も寄せられなくなつてゐる。……他人のことは兎に角、私は次第に素直に伸びかゝつてゐた異性に對する情念が、病氣と暗い宗教とのために、行手の路を杜絶されてしまつた。

四

近年流行してゐる新進作家の自傳體の長篇

小説を讀むと、どれも極つて功名心と戀愛との交錯が一篇の筋立となつてゐる。ある青年は貧家に生れて學資に苦み早くから生活難を経験し、ある青年は富家に生れて順路を通過つて世間へ出てゐるといふやうな差別はあつても、誰れもみな文學その他の事業で、自己の天分を發揮しようとなつてゐる。それとともに必ず、殆んど例外なしに異性と交渉をつくつて喜愛してゐる。それ等の異性は小間使であつたり、女學生であつたり、あるひは下宿屋の娘であつたり、さまざまであるが、彼等はそれ等の異性のために若い心を左右されてゐて、しかも自己の戀愛の妨害になる周囲の人々や事件に對しては必ず怨恨の目を注いでゐる。……時世がいくら變つても、昔の世でも人間の心は同じことなので、斬新なことにはなささうである。

しかし、かういふ長篇小説を讀んだあとで自分の過去の顧みるに、青年期の私は學問慾や功名心こそ人並に有つてゐたのであらうが、面白いエピソードとなるべき戀愛沙汰には少しも拘らないで通り過ぎたのであつた。少年時代には萌してゐた異性に對する好奇心も、二十前後には却つて衰へてゐたらしい。清教徒を理想として、情慾を排斥し、色戀の話など耳に觸

れるのも穢はしく思はうと努めてゐた。それが私の一生から見て幸福であつたか不幸であつたかよく分らないが、私の心は少くも異性に對して柔しい素直な感じを寄せることの出来ないうやうになつてしまつた。新進作家の自傳體的戀物語にあるやうな、心の落けるやうな甘い戀の醜味を味ふ力は私にだつて具はつてゐたであらうのに、二十前後に自分で努力して、それを押し消してしまつた。學窓を出た後、自繩自縛の苦みを解いて、自由に五慾の動くに任せるやうになつても、まだ二十代の若い時分できへ、私は永久に春を失つた人間のやうであつた。

「即興詩人を讀んで、アモンチャタを戀したアントニオの柔しい心持に涙ぐむ思ひして惹入れられたが、私には美しいアモンチャタも、醜いアモンチャタもなかつた。現實の女に對して私が敬愛の念を寄せて仰ぎ見たのは、少年時代に見た宣教師の姉嬢ぐるゐるものであつた。さう思ふと、あの頃が私の一生の中で最も心が清くて純であつたのかも知れない。世間へ出て自分で働いて口を糊するやうになつて、女性に接する機會も多くなつた時分の私は、婦人を尊ぶといふ氣持は、どこかへか置き

忘れたやうに失つてゐた。かういふ心を持つてゐる作家の書いた小説が若い婦女子に喜ばれないのは當然である。男子を天國へ導くのは婦人の愛であるとか、日本の社會を救ふのは婦人の力によらなければならぬとか、歐洲の大詩人や日本の流行作家の云つてゐるやうな數々のやさしい文句は、私の腸からはいくら捻つても出て來ないのであつた。

婦人といふものは、罪推深くつて諷つ吐きで、お喋りで空世辭だけが上手で、いやに涙脆くつて云ふまでもなく虚榮心が強くつて……女の何處に尊いところがあるのであらうと私は思つてゐた。大智大能の神が人間を造つたと假定したら、男子を地球上の男子のやうに造つたのが間違ひであつたよりも、女子を現實の女子のやうに造つたのが一層多く間違ひであつたのだと、私は思つてゐた。シェークスピアの書いた女性や、ダンテの書いた女性の尊いのは、大詩人の空想に描かれた造り物であるためなので、この點ではエホバよりも彼等詩人の方が一層すぐれた創造者なのである。神は現實に生きてゐる欲もない女を濫造した。詩人は尊い美しい女を造つた。論より證據で、シェークスピアは舞臺の上では、オフェリアだのロザリンだ

のウイオラだのを活躍させてゐても、現實の彼の細君は眠ふべき人間であつたらしい。ダンテは幼いころ一目見た女を一生戀しつゞけて、永遠の空想を託したが、幾人も子をませた現實の彼の細君については、一篇の小詩をさへ作つてゐないではないか。

五

「いやな浮世ならサツサと棄ててしまふがよい」と思つても、生身の人間は、容易なことでは自分で自分が亡ぼせない。容貌の醜い性質の卑しい女などに懸り合はなければいゝと思ひながらも、男として生きてゐる限りは、いやな女でも無くつちや目が送れないやうに極められゐるのだから因果だ。彼方でも此方でも醜男醜女が手に手を執合つて幸福を嚙いてゐる。

私は青年期から壯年期にかけての、自分と異性ととの關係を追懐すると、幾つもの斷片的な醜惡な場景に惱まされなければならない。「即興詩人」のうちに漂つてゐるやうな情調や、新進作家の長篇の主人公が經驗してゐるやうな柔しい悲喜憂歡は私には絶対に浮んで來ないのである。あの時分の知合ひの女の誰れにも

會ひたいと思つたことはない。私の知つてゐる女は、特別にヤクザな女ばかりだつたためであらうか。舊知の現實の婦人よりも少年時代の愛讀書中の人間の方がどれほど懐かしいか知れない。

私は、一つの仕事にかじりついて何年も續けて来たためと、時の廻り合せがよかつたためとで、豫想外の名聲が得られたので、時々々は思ひ上つた量見を起すこともあつたが、常人に傑した素質を有つてゐるのぢやないと、日常反省してゐる。容貌や言語動作に婦女子の心を惹くところのないことは、なほ更早くから知つてゐたので、賣色の女以外に、戀の口説はまるで知らないで通つたのであつた。

ところが、さう謙遜するには當らないのであつた。成るほどこの頃の若い者が、世の風潮が寛大になつたのに乗じて、人間の本性を露はして顔りに色を稼いでゐるのはそれが賢いのかも知れない。私に思ひを寄せてゐた女が二人や三人はあつたことは、後になつて、私の髯に白毛が出来てから、自ら知れて来たのである。

何年か前秋雨の降つてゐた日、私は腹こなしに飯倉の通をブラ／＼歩いて、次手にある雑誌

店へ寄つたが、そこで買物をしてゐた色の白い細そりした三十代の女が私の方を顧みると、ふと微笑した。何だか見たことのあるやうな女だと思つたが、頭を絞つて思出すほどの價値のある女でもなさうなので、それに拘らないで公園を一周した。そして再び飯倉の通へ出たが、すると再びその婦人が向うから来るのに出會つた。彼女は微笑して足を留めて會釈した。私もお辭儀をして、そちらを見詰めたが、すると、彼女は、

「私は××にゐました辰子で御座います」と云つた。

「あ、さうでしたね」

私は十数年前の彼女の顔を思出しながら、その後の事を二三言訊ねたきり行過ぎた。その後どういふ生活をしてゐたのか、もつと詳しく訊きたかつたが、自分から進んで近所のカツフェーなどへ誘ふのは變だつたので、簡単に別れたのであつた。以前はフックラと肥つてゐて顔立が愛くるしかつたのに、かうも變るものかと、私は薄ら寒い雨の中を興もなく歩きながら、女の容色のはかなさを考へた。辰子といふ人とは昔も碌に話をしたことはなかつたのだが、顔は始終見てゐて、友人間の戯談まじりの噂に

上せてゐた。「君があんな女が好きなら、僕から××さんに話して周旋をして貰ひたまへ」と、眞顔で云つた女人もあつた。

しかし、一人の女に對して熱情を寄せられなかつたその頃の私はかういふ話にはいつも身を入れないで通り過してゐた。そして、殆んど記憶にも留まつてゐなかつたのであつたが、久振りに行會つたあと、二三日して意外にも辰子から私へ手紙を寄越した。

懐かしさうなことを書いて、自分の住所も知らせて、「お通りがかりの際にはお寄り下さい」なんて書いてあつた。それに對して私は葉書で簡單な返事をした。彼女に夫があるのかなのかさへ私は知らなかつた。

六

それから年賀状が來たり、旅先から繪葉書が來たりした。私に職業の周旋でも頼まうとする下心があるの知らんと思つてゐたが、すると、ある日彼女からの厚ぼつたい手紙が届いた。それには、色つばいことが遠慮會釋なく書流されてあつた。十年前の利であつたら、こんな手紙に接したら、多シドギマギしたかも知れな

つたが今はたい笑つて讀むことが出来た。原稿執筆以外には文字を書くことの嫌ひな私は、返事をさへ出さなかつた。

四十にもなつてこんな色文を書く女はいやらしいやうにも思はれたが、しかし、他の女だつて他所行の白粉を落して、心の中をさらけ出したなら、大抵同じことなのぢやないかと思はれた。兎に角若い時分に私の方から一步踏出しなすれば戀を得る機會はあつたことが知れて、自分があまりに用心ぶかかつて、青春の幸福を取逃したことが後悔された。

私は學校を卒業しても家庭などつくる氣はなかつたし、自分のやうなものには、妻子を十分か養へないだらうと思つてゐた。そしてどちらを向いても、一軒の家には夫があり妻があり子供があるのを變な事のやうに感じてゐた。多くの男子は妻子を養ふために營々として働いてゐる。碌な容色でなくつても女房といふものは可愛いものなのだらうか、子供といふものは可愛いものなのだらうかと、社會人類の常識にさへ、私は疑ひを挿んでゐた。一人の男一人の女と、相手を固定してしまつた生活が幸福なのだらうかと疑つてゐた。

二十代の私がさう疑つてゐたのは、他の青

年のやうに眞實の戀愛を経験しなかつたためかも知れない。私が、新聞社へ入つて、辛うじて下宿料を拂へるくらゐな月給の得られるやうになつてから間もなく、故郷へ歸ると、両親の知人の大村といふ老人が、私に向つて頻りに結婚を勧めた。「獨りで食つて行ける収入がありや、夫婦の生活が立たんことはない。困つたらお父さんに助けて貰ひなさいやい、ぢやありませんか」と云つて、彼れの縁續きのある女を、適當な候補者として話した。その女は倉敷の可成りな資産家の長女なのだが、繼母と折合ひが悪くて、この頃は大阪へ行つて従兄の家に寄寓してゐるといふことだつた。

「私が手紙でさう云つてやりますから、東京へお歸んなさる時に大阪へ寄つて當人を御覽になつちやどうです？ あの人なら苦勞してゐるから家持は至極よろしいに違ひありません」大村はそのことを私の両親によく話した。「お前の氣に入つたら嫁に貰へばい」と父は私に向つて簡単に云つた。深く考へもしないやうだつた。

「ぢや、次手だから大阪へ寄つて見ようか」私は軽い興味をもつてさう願めた。大村は

私の事を豫め先方へ吹聴して訪問の日取りも打合はせてくれた。曆の上の吉日が選ばれたらしかつた。

その時は年末であつた。私は豫定された日に故郷を出立して、大阪で下車すると、停車場の前の宿屋へ寄つて晚餐を食べた。そして食後の散歩として暮の街の上を見物しながら大村から聞いてゐる玉造の北島といふ家を訪ねて行つた。この見合ひと云ふことについて、私は嚴肅な考へも抱いてゐなかつたし、色つばい空想をも描いてはゐなかつた。たゞ通り掛りにある女の顔を瞥見するといふ安易な氣持で訪ねたのであつたが、其家へ入つて二階へ導かれて部屋の中の様子が目につくと、少し驚いた。先方では私の訪問を重く見てゐたのであつた。狭くつても整頓された部屋の眞中には、綺麗な炭火の盛られた丸い桐の火鉢と糊の座蒲團が置かれてあつた。私は不斷着のまゝで着流しだつたが階下から上つて来た主人は羽織袴の改つた服装をしてゐた。主人が大村の手紙を見て非常に喜んでゐたことを改つた口調で述べ立てるのが私には揆つたく思はれた。

やがて盛装した主婦が酒肴を持込んで、夫婦は左右から私に向つて従妹の身の上を話した

り、私の東京の生活について訊ねたりした。強ひられるので、下戸の私も知らず、杯を重ねて、苦ししくらゐるに酔つたところへ、女が静かに階子段を上つて来た。

七

笠のやうな大きな扇髪、自粉を塗りこくつた平たい顔、ガツシリした逞しい體格の女が目の前に現はれたが、はじめから多くの期待を寄せてゐなかつた私は、失望もしなかつた。

「ようお出でんさつた」と女は平然として挨拶した。

「田舎よりや大阪の方が面白いでせう」と私が云ふと、

「此方へ来ても滅多に外へ出ませんから」と、女は答へて口元に微笑を湛へた。

私はいゝ加減で暇を告げようとして、意外な御馳走になつたお禮を云つて、座を立ちかけたが、すると、急に胸が苦しくなつた。便所を借りようとしたが、階子段を下りる間の辛抱も出来さうでなかつたので、二階の障子を開けて、屋根の上へ食べた物を吐出した。皆が側へ来て介抱して呉れた。女は主婦の指圖によつて、階下から金盥と嗽ひ水を持つて来て呉れた。

私は初対面の人々に迷惑を掛けたので恐縮して、「少しお横におなさい」と枕を提出されたのを斥けて、慌しく挨拶して其家を出た。吐きたいものを吐きつくした後で、戸外の寒風に觸れると、スツカリ酔ひが醒めて元氣が回復した。で、道頓堀の側まで俥に乗つて、俥を下りると、その表通や裏通を足に任せて歩いた。裏通の髪な家へも立寄つた。

この見合ひの光景が、今夜は久振りに思出された。そして、北島といふ家の人たちに對して氣の毒な感じがした。私は東京へ歸ると、故郷の大村老人へ宛てて、「都合により結婚は見合せ申し候」といふ簡単な葉書を出した。だけて事を済ましたのであつた。見ず知らずの私に酒を飲ませたり、嘔吐の後始末までさせられたりしたかの人々の心境を、私はこの頃になつて推察することが出来るのであつた。

それから間もなく大村老人が死んだので、私は大阪で瞥見した女の成行について何も聞かされなかつたのだが、その時分の私は、別に理想の女を頭の中に持つてゐたのではないから、両親などが熱心に勧めて生活の保證をして呉れたなら、その女とでも結婚したかも知れなかつた。

新聞記者になつて日々熱心に勤めてゐた私は、偶かな俥に有りつくのも容易なことではないと痛感してゐたのであつた。同僚の様子を見てみると、容易に妻子など持つべきものではないと教へられてゐるやうな氣がした。「獨身ならどうでもなる。いよく困れば故郷へ歸ればよい。妻子のために恥を忍んで勤めに服するのはいやなことだ」と極めてゐた。が、それはすぐれた考へであるといふよりも、あまりに生活難を恐れ過ぎた卑怯な考へであつたのかも知れない。

私は本郷の下宿屋で五六たびも正月を迎へた。その間に日露戦争があつたが、私は自分の「死生の問題」といつたやうなことにのみ心を凝してゐて、毎日、新聞社で聴かされてゐる戦争話に何の感じをももつてゐなかつた。旅順陥落の祝賀會が、社の前の牛肉屋で開かれた時にも私は飲食の外に何の意味をも感じなかつた。たゞ一度戦争否定論を書いて紙上へ出さうとしたのを主筆に咎められて没書にされたことがあつた。

「あなたの御意見はどうであらうとも、現在出征軍人は國家のために艱苦を嘗めてゐるのだから、その意氣を削ぐやうなことを新聞へ出すの

はよろしくないと思ふ」と戦争好きの主筆は、私を説諭した。

私は不心得を詫びた。自分でも戦争の是非に拘泥してゐたのではなかつたが、輜重輪卒として出征してゐた弟の手紙に接したので、それを讀んでふと戦争を呪ふ氣になつたのかも知れなかつた。

日比谷で講和反對の大會があつた夜、早くから寢床に就いてゐると、下宿の主婦が慌てて二階のある客を起しに來た。焼打がはじまつたと聞いて私は跳起きて兩戸を開けると、盛んな火の手があつてゐた。私は其頃讀んでゐた「クオ・ワデス」のローマの焼打を想像しながら、「かういふ時には獨りものは氣樂だ」と、思つてゐた。

人間は、作者が好みのみまゝ作つた戯曲を演ずべき一俳優たるに過ぎない。我々は貧民となるも不具者となるも、支配者となるも素町人となるも、それは作者に極められた通りに扮しなければならぬ。極められた役をよく演ずることだけが、我々の爲すべき勤めであつて、役の選り好みは出来ないのだ。ローマの賢帝マールカス・オーレリアスの人生觀の根柢はかうであつた。ネロの廷臣の一人に附隨してゐたエビクテタスの人生觀もかうであつた。びつこで、羸弱で、貧乏で、日蔭者として一生を過した奴隸の人生觀も、榮華の頂上にあつた帝王の人生觀も同様であつたのは不思議だが、一つの哲學に徹底したこの奴隸は、役不足を云はないで、甘んじて戯

曲を終始一貫して演じた。

しかし、私は思ふ、極められた役をよく演じるのが、我々の義務であると信じて柔順に勤めようとも、それに不平を起してじたばた暴れ廻らうとも、どちらにしたつて、人間は、ある作られたる戯曲の俳優たるに過ぎないのではあるまいか。割當てられた役を演じないつもりのも、その生涯を後から顧みるとそれ〴〵に自分の役を演じてゐるのだ。

現在だけでは、明瞭に分らないが、歴史を讀むと、人間がそれ〴〵に割當てられた役を演じてゐることがよく分る。誰れがえらかつたとか、誰れがやりしくじつたとか云ふよりも、皆なが作者の傀儡となつて活動してゐたといふ感じがする、さう感じて、私は人類史を淋しく思ふが、私がそれを淋しく思ふのは、すなはち、私自身が「淋しく思ふ人」といふ役を振當てられてゐるためである。

(女權觀劇の「日記抄より」)

東京

私は大蔵に蟄居してから、すでに二年の歲月を過した。此處から東京へは汽車で略二時間の距離があるので、出掛けるのはちよつと億劫であるが、それでも月に三度か四度は用事を兼ねて出向くことにしてゐる。七八年前の私なら、さう長く都會を離れてはゐられない譯なのだ。が、年齢のせむと、一生の仕事を爲盡したといふ感じがしてゐるためとで、都會に對する執着が今は極めて薄くなつてゐる。残生を過すのに何か心を紛らす方法が、田舎にでもありさへすれば、今後都會生活はしなくつてもいゝと思つてゐる。

東京へ行つても、雜誌社や新聞社へをりく立寄つて、文壇その他の社會の噂を聞くことはあるが、知人の私宅を訪問することは殆んどないと云つていゝ。簡単な用事を果したあとでは、當てもなくブラ／＼歩くとか、食事をするとか、興行物を見るとか、何としかかとかして、半日か一日を過して、疲勞した身體を汽車に載せて歸つて來るのである。

東京に定住してゐた時よりも、時々覗いて見ると、東京といふものが私の頭にハツキリ浮ぶやうな氣がする。品川から新橋までの間に、汚らしい粗末な家が線路に沿うて並んでゐるのを見て、東京驛で下車して、外へ出ると大磯では鮮明であつた太陽の光が鈍くつて薄暗いやうなのに氣がつく。だけど、都會の濁つた空氣や騒音は私の神經を刺戟して、生存の力を感じさせるのである。二十餘年も東京に住みつけて、自然美や田園の雜事よりも人間美や人間臭に興味を持ち、野趣よりも人工を好んでゐた私は、停車場から踏出すと、その瞬間は本當の故郷へ歸つて來たやうな氣がする。海邊の色の黒い頑健な人々は蒼白い、都人よりも生物として勝れてゐるのだらうが、私はどの點からもさういふ人々に伍して、共に樂み共に喜ぶことが出來なくなつてゐる。先方でも私たちが都會人視して上へは尊敬して内實は私利を計らうとしてゐるので、眞實の親みは我々の間に成立つてゐないのである。私は田舎生れで、

生れた家は嚴として存在してゐるのであるが、その生れた故郷へ歸つても、郷人と親むことは出來ないのである。一つは私の性癖によるのであるが、都會生活で得た教養は我々をして田舎人と福利しがたくしてゐるのである。私は農村の疲弊をこの頃はしみ／＼と感じてゐる。このまゝに放任してゐては日本國家の前途が危いと思つてゐる。つねに田舎人の生活を氣の毒に思つてゐるが、しかし、私は個々の田舎人に對しては好感を持つてゐない。たまに田舎を旅行して地方人に接するとか、机の上で筆を執つてゐる時には、自分の空想によつて田舎生活や地方人を讚美することが出來るが、私の如く田舎生れで田舎者をよく知つてゐるものは、空想によつて、純林誠實な田舎者を造り上げることなど、馬鹿らしくて出來ないのである。かつて幸田露伴氏の「新浦島」といふ小説の一部を讀んで、都會生れの文學者は、こんなに突飛な空想をもつて漁夫生活を書くものかと呆れたことがあつた。二春は霞が棚曳いて蓬萊の島も何だとか一雁めが飛んで磯の苫屋へ月が洩れて王公の樂みもおれたちの境涯に及ぶものかと、長々と綺麗な文字で書立ててあつたが、歌詠みのお公卿様が夢に漁夫になつたのなら知らず、

道樂に釣魚でもする人なら兎に角、諸式の高い世に腕二本で稼いで生命を繋いでゐる眞實の漁夫に、蓬萊の島も磯の古屋もあるものかと、その時のわたしは思はれた。

私は釣魚の楽しみも知らない。土いぢりの楽しみも知らない。田舎人と一しよに浪花節を喜んで聞くことも出来ない。居酒屋で會飲することも出来ない、時々小學校の教室などで催される××中將や××子爵などの講演を聴く氣にもなれない。と云つて、先覺者氣取りで地方人を指導しようとするやうな大それた考へは毛頭持つてゐないし、煩さい思ひを我慢して地方の青年などに調子を合せて人氣を得ようとする虚榮心をも持つてゐない。

で、私は、讀書や執筆や海邊や田圃道の散歩だけでは、頭が堪へられなくなると、一東京へでも行つて来ようか」と云ふ氣になるのである。鬱積した息を吐きに出掛ける氣になるのである。

電車の運轉の系統が屢々變更されるので、たびたびまごつくことがあるが、電車の中で都會人の顔や、身振や動作を見てゐると、さまざまに人間的の標本を見てゐるやうで面白い。野良に働いてゐる農夫や地曳漁などしてゐる漁夫の十

人一種なのとは違つてゐて、私をして人間生活に對するいろ／＼な想像を起さしめる。さういふ私自身も田舎の水に染んで、四十時代相應の慾の深い田舎の小金持の標本にでも見えるやうになつたのか、古い手提カバンを抱へて、兜町の取引所のあたりを、先日朝ブラ／＼歩いてゐると、仲買店の客引が次から次へと私に挨拶して話をしかける。

「今日は少し高きです。…私の店は直ぐそこですからお立寄り下さい」と云つて、私の風態をじろ／＼見る奴もある。

日暮頃雷門で電車を下りて、中清でも晩餐を食べようと思つて、中店の雑沓から横へ外れてブラ／＼歩いてゐると、宿屋の番頭が乾度辭を掛ける。後から追掛けて來たりする。田舎にゐると都人士あつかひされ、都會へ行くといふ者あつかひされる。そのどちらつかずの中ブラインの人種に屬することは、今の多くの文學者が、プロレタリアとブルジョアとのどちらつかずのアカヤフヤな階級に屬してゐると同様なのである。

私は足休めのためや、夜芝居の開幕を待つ間の時間つぶしのために、講釋場の書席へ寄ることがあるが、此處で舊弊な顔した男の讀立てる

軍記などを聞いたあとで、デンバリストのヴァイオリンを聴いたり、アンナ某女の踊りを觀たりすると、藝術の鑑賞にも頭の轉換の忙しさが感ぜられる。私は必ずしも外來の藝術に驚喜溺仰する氣になれないし、日本の舊藝術を樂むことも出来ないが、肉體の衰弱によつて食色の慾も衰へてゐる私は、かういふものによつても日々の單調な生活から來る倦怠を紛らさうとするのである。そして、私自身は帝劇の座下をブラ／＼ついで外國の音樂や舞踏を六ヶ敷い言葉で批判し合つてゐる新進氣鋭の鑑賞家よりも書席の定連の方に心持が似てゐるやうに思はれる。古めかしい講釋にでも、藝の巧拙はあるものだ、時代の反映があるものだ、私は文學の現状に比べて感じることもある。典山の枯れた讀み口はうまいが、伯山の藝は油が乗つてゐて、詰らない事柄を喋舌つてゐると思ひながら、私もふと聴き耳を立てることがある、藝の光に打たれることがある。さういふ時の感動は、デンバリストやパーロワの音樂の妙味を感じた時の氣持と、差別があるのであらうかと私は疑ふ。三十錢で聴かれる安來節と、十圓近い入場料を要するデンバリストと、どちらにしても、曲の音に恍惚とした時の氣持は同じこと

ぢやないのだらうか。伯龍といふ若い講釋師が、死んだ落語家の小せん見たいに、新聞雜誌で學んだやうな當世の流行語を頻りに使つて、獨創のお喋舌をして人氣を持つてゐるところに、今の文界や美術界の現状に似てゐるところがあつて、私はひとりで微笑まされる。講釋の畫席のやうな都會の一隅にも、日本現代の影は、ちやんと宿つてゐるのである。

私は田舎に住むやうになつてからは東京へ出るたびに都會の風呂へ入るのを樂みにするやうになつた。都會に定住してゐた頃、田舎の温泉を渴望してゐたやうに、この頃は、「東京の風呂へ入つて來たい」と思ふことがある。市中を歩いて、汗と埃に汚れたあとの入浴の快樂を、私はこの頃ほど感じることはない。

私は都會を歩いてゐて、労働者の汗の惱みを見る。そして田舎で見るよりも、もつと痛切に生存の苦みを見てゐるやうに感じる。ある日、久振りに川蒸汽に乗つて百花園の秋草を見に行つたが、その時牛鳥神社の大祭で、町々の山車が續いてゐた。大勢の若い衆は炎天に汗みどろになつて騒いでゐて、通り掛りの私でさえ、汗の臭ひに逆吐くほどであつた。自ら好んで自分の汗に浸つて喜んでゐる彼等、その汗の

臭ひを嗅いで喜んでゐる大勢の見物。私は人間生活の真相がさういふ所にもあるやうに思つて見てゐたが、すると、ふと、前の夜見たアソナ某一座の舞踊が思出された。一座のうち若い踊り子どもの豊麗な背中に汗がにじみ出て、電氣の光つてゐるのが艶かしくて何とも云へず快く見られたのであつた。「この汗わいの」と、博多小女郎が云つてゐる。私は労働者の汗、祭に興ずる若い衆の汗、アソナ一座の汗と、都會の彼方此方で流される汗について考へた。

私は退屈の氣晴らしをさせてくれる東京といふ大都會に對して好意を寄せてゐる。古今東西の種々雑多なものが、統一もなくそこに現はれるのが、傍觀者には面白い。整頓した文明國や文化社會が出來上らないでゴタ／＼してゐるところが面白い。舊幕時代のやうに一般の思想や道徳が一致してゐないで、みんなが我は顔して勝手な事を云ひ合つてゐる今の精神的狀態が、今日の東京市街の外観によく現はれてゐるのが面白い。

たまに街上や電車の中や劇場などでいろ／＼な知人に出會ふことがあるが、時によつて、その人は資本主義滅論者であつたり、非愛國者であつたり、あるひは勤儉貯蓄家であつたり、遊蕩兒であつたりする。人間の標本を見てゐるやうで面白い。

「今に大地震か何かの大災難があつて一坪が千圓も一萬圓もするといふ東京の市街が無價値な灰燼になる時はないだらうか」と丸の内や日本橋あたりの七層八層の大建築を仰ぎ見ては、杞憂を感じながら、私は大磯の巢へ向つて飛んで歸るのである。

クリスマスとお正月

去年の暮、私が偶然東京へ遊びに出掛ける時、その日はクリスマスであった。京橋際の七階で午餐を食べると、平生の定食よりも皿数が多くつて、七面鳥だの、クリスマスケーキだのと、おいしい饗待たれた料理が出た。食後餘興場へ行くと、踊り場があつて、私は玩具の馬を抽當てた。手品や物真似や、落語の餘興があつたので、私は子供達の中に交つて、暫らくさういふものに耳目を觸れて心を遊ばせてゐた。

其處を出ると、いやに量張つた玩具を提げて、クリスマス気分が従来よりも濃厚になつてゐる銀座通を歩いた。家へ持つて歸つても、玩具の土産を喜んで呉れる子供があるのではなし、散歩の邪魔にもなるのだが：と云つて、棄てる氣にもなれなかつた。クリスマスツリーのサンタクロースだのと、西洋の今日の祭を思出させる裝飾を見たり、祭にちなんだ品物を若い男女が買つてゐるのを見たりすると、日本人の趣味がますます西洋くさくなるのが感ぜられた。昔は生死の問題に關はつてゐた宗教が、

肝心の信仰はそつちのけにされて、たゞ生活を色取る方便、娯樂の道具として用ひられるやうになつてしまつたことも感ぜられた。佛敎だつてどの宗教だつて、大抵はさうなので、今更珍らしさうに感じるにはあたらない譯だが、私自身、キリストの降誕については、何等の感じをも起さないで、その祭の御馳走だけを食べたことが、人の心の變遷を思ふ所縁となつて、去年や一昨年、のクリスマスの時とは違つた感慨に打たれたのであつた。私は二十餘年前にキリスト敎に歸依して教會に加はつてゐた頃には、讚美歌や祈禱や説教や、日曜學校の生徒の唱歌や諸節演説などの催しのある祝賀會に列して、儀式的に主の降誕を祝した上に、自分一人の理想に於て、この尊い記念日を祝したのであつたが、しかし御馳走と云つては、蜜柑に煎餅ぐらゐりで、幾年かの信者生活の間に、今日の料理のやうな料理の皿をも、祝日に味ひながら、神の恵みを讚美したことはなかつた。私ばかりではない、あの教會の兄弟姉妹のうち

には、あの頃七面鳥の料理なぞ食べてクリスマス祝つたものは一人もなかつたであらう。七面鳥などの料理を、たゞうまいからと云つて食べるよりは、クリスマス御馳走だと云つて食べる方が、今日七階の食堂に一杯になつてゐた客人には興味があらうと思ふ可笑しかつた。

私は日暮頃まであちらこちら散歩してゐるうちに、帝國ホテルでも毎年の例として、クリスマス祝賀の催しがあることを思出して、晚餐をそこへ食べに行くことにした。まだ胃の腑に飽満を感じてゐたので、入浴したり書店へ寄つたりして時間を過してから行つたが、導かれて餘興場へ入つた時は、踊りの「辰橋」の幕の下りる一瞬間前だつた。鬼女の顔は分らなかつたが、語り收めた太夫の顔を見ると、それは落語家の小さんであつた。小さんの常磐津を聴いてキリストの降誕を祝するなんて、世の中も變つたものだと思ひしかつた。三味線を悪魔の音楽のやうに思つてゐた昔のU先生にでも聴かせたら、さぞ舊約の豫言者張りの憤慨をするであらうと思ふと、なほ更可笑しかつた。

私は時間が遅れたために、小さんの美音の聴けなかつたのを残念に思ひながら、衆とともに

食堂へ入つた。食事中絶えず管絃樂が奏せられたり、ハイカラに盛装した男女がこの夜を樂んでゐるやうな顔してゐるのを見たり、うまさうな料理が運ばれるのを見たりしてゐると、質素な生活に馴れてゐる私には、贅澤至極のことのやうに思はれた。：しかし、煎餅と蜜柑とを食ひながら神の國などを空想してゐた昔の私と、この盛宴に列しながら、信仰の餘燼も起さないでゐる私と、どちらが幸福なのであらうか。

私の前には、鼻眼鏡をかけた赭顔の中老の紳士がゐた。多年歐米に滞在してゐたらしく、かの地のクリスマススの話を私にして聞かせた。料理の説明をした。

「クリスマススの料理として立派なものです。アメリカだつたら十倍以上のものですよ。このメニューにゲームとあるのは、今獵で取つて来たばかりといふ意味で、鴨か何かの料理ですな。：彼地では、會ふ人ごとに、メリークリスマス、メリークリスマスと云つてお互ひに祝ふのです」と云つて、その紳士は、外國の風習を私に見せようともするやうに、外人が側を通るたびに、腰を浮かせたり、立上つたり、手を差出したりにして、「メリークリスマス

ス、メリークリスマス」と、表情入りで頻りに叫んだ。

しかし、私は午餐に満腹したあとなので、此處の料理が十分に味はられなかつた。側にあつた角の包紙を破つて、辻占見たいなものを開けて見ると、「お前とならば何處までも」といふやうな色っぽい唄が英字で書かれてあつた。

食事を終へると、私は再び餘興場へ行つて、さまざまの奇術を見た。踊り場をも覗いた。この頃流行してゐる社交ダンスといふものは、輕井澤のホテルでちよつと見た外に、私は見たことはなかつたので、珍らしかつたが、さして面白いものとも思はれなかつた。かういふ踊りにも種類はいろ／＼あるのであらうが、私の見たのは、ことに日本人の踊り振りはノロ／＼してゐて齒痒いやうであつた。

「おはじめになつちやいかゞです。二三週間で覺えられますよ」と、ダンス好きの洋服屋のY君は、會ふたびに私たちに勧めてゐるが、私は社交的に陽気に世を樂むやうな氣分を失つてゐるのである。私でも子供の時分には、盆踊りの仲間に入つたことがあつた。唄や踊りは子供の時分から好きであつた。が、さういふ遊藝の嗜好を、二十歳前後にキリスト教によつて厭

迫されたのであつた。終列車に乗遅れないやうに、私は踊り場を出ると、急いで停車場へ向つた。玩具の馬は無事に家へ持つて歸つた。

年が押詰つても、私の家では迎春の準備は大になかつた。庭には多少の樹木があるが、私のものになつてからは一度も手入れをしないで、散髪をやらない頭髮のやうに、松などがボウボウと葉が茂つてゐた。知合ひの植木屋は來るたびにそれを氣にした。

「松の縁は取つた方がよう御座んすよ。打ちやつといちや木が悪くなります。このくらゐな松は今時は安か買へません。此家をお拂ひにするにしても、植木の手入れをして綺麗にして置くと、それだけ高く賣れる譯合ですからね。なに、私が大あばれに働いたら、三日もかゝりやちやんと丹付けてしまひます。手入れをしとけば、葉が落ちないから、掃除にも骨が折れませんよ」と云つたが、私たちは他所の家のことのやうに思つて取合はなかつた。葉が落ちたつて松の形が悪くなつたつて、いゝぢやないかと思つてゐた。

この頃世間が不景氣なため、植木屋の仕事も暇で、遊んでゐる日が多いのに困つて、些細な

儲けにも有りつかうとあせつてゐる彼れのために、私の家の荒れた植木の一本々々が、紙幣が銀貨でもあるやうに見えてゐるらしかつた。「ぢや、あの人に門松を立てて貰ふことにしませう」と、私の妻は云つた。

門松も飾りも私の家には無用なものなのに、家が大通に面してゐるのに、一軒だけ松を立てないのは町内の者に變に思はれる恐れがあつたので、世間の慣例に習ふことにした。別荘ばかりある山の手の方に住んでゐるのなら兎に角、私たちのやうに町家にまじつて家を持つてゐると、周囲の噂は實際にうるさいので、私は減多に接しないからいゝが、妻の方では神經に觸ることが絶えずあるらしかつた。此方へ越して來た當時、私が帽子も被らないで不斷着のまゝ汽車の三等へ乗つたと云つて、近所へ報告に來た女があつたと云ふのを一例としても、噂のうるさいことが察せられるであらう。門松を立てるについても、そのことを誰れかに話すと、その噂を聞きつけて、「安くするから是非立てさせてくれ」と、近所の者が早速申込んで來た。が、私たちは義理を守つて、知合ひの植木屋に頼むことにした。

すると、植木屋は早速大きな丸太を二本持込

んで來た。「そんな大きなものを何にするんだね。家では門松はおしるしだけの小ぢやいものでいゝんだよ」と、妻が云ふと、「これを門松の杭にしとけば、あとで垣根を直す時に役に立ちます」と、植木屋は崩れかけてゐる垣根の修繕に目をつけて云つた。

松に添へる竹は、庭の竹を用ひさせた。略出來上つた時分に、近所の人は辻散くさい目を此方に向けてゐたが、さうしてゐるうちに、八百屋の主婦が妻を手招きして道の向うへ呼んだ。事ありげな様子なのを、妻は不審に思つてゐたが、主婦は、小聲で、「あの竹は女竹ですよ。女竹はお葬ひの時に使ふもので、お日出た時に使ふものぢや御座いません」と教へてくれた。妻は極りの悪い思ひをして、早速植木屋に云つて、既に結びつけてある竹を取はづさせた。「女竹だつていゝぢやないか。冥途の旅の一里塚だから、葬ひに使ふ竹でいゝぢやないかと、私は笑つた。

植木屋が仕事を済まして歸つたあとで、八百屋の主婦は野菜を肩に來た次手に、「私も餘計なことを申上げたければよかつた

んですよ。植木屋があとで、無駄な手間をかけやがつてと私に當てつけました。主人が使へといやあ、女竹だつて何だつていゝぢやねえか。おテナタ婆あが餘計なおせつかいをしやがる、自分で手間を一銭も出しやまいしと、サン／＼云はれましたよ」と、興がつて云つて笑つた。

成程、外へ出た時に氣をつけて見てゐると、何處の門松にも、私とこの庭にあるやうな竹は用ひられてゐなかつた。萬事世間の習慣に従つて、家の内外を正月らしく装つてもいゝので、強ひて異を樹てるには及ばないと思つても見たが、人手のない私の家では、さういふことをしてはゐられなかつた。門松以外には平生と異つたところもなくつて、新年を迎へた。ある新聞に、ロシアの政府ではキリスト教に對する人民の盲信を打破するために、クリスマスのいろ／＼な習慣的の催しを止めさせるやうにしてゐるといふ記事が小さく出てゐたが、さういふことが徹底的に實行されたら、世の生活はさぞ淋しくなるだらうと思はれた。盆も正月も、氏神の祭禮も、惠方詣りも、いろんな祝日や祭日がみんな廢止になったら、人間

の樂みはそれだけ無くなるので、さういふ世は

何時までも讀かないだらうと思はれる。一つの迷信を破れば他の迷信がそれに代つて現はれるに極つてゐる。人間が何千年も何万年もかゝつて造り出した神や佛が、消えてなくなることには違ひない。「ジタバタして考へて見たつてはてしがない。成るべく世間の多數の人のするやうにして世を渡ればいゝ」といふのが、縁側で日向ぼつこしながら、私の考へた年頭の感であつた。

近所の貧しき家の娘が、新調の春衣を着て髪を島田に結つて、毛糸のシヨールを長く垂れて、歩きつ振りまでも氣取つて通つてゐるのが、垣根越しに見られた。それを見つけた妻が庭へ下りて、「××さん」と聲を掛けたが、娘は不斷のやうに馴々しく近づいては來ないで、勿體ぶつた會釋をして行過ぎた。

「あの衣服を拵へるのが大變だつたんですよ。年頃だから、今年は銘仙でも一そろひ拵へてやりたいつてお母さんが意氣込んでゐたんですよ。年末に反物を呉服屋から持つて來ると、あの娘は直ぐに八百屋へ見せに來たんです。あのお母さんも女の手で三人も四人もの子供を育ててゐるんだから、私不思議でならない」と、妻は云つた。

この近所にはどの家にも、子供の三人や五人ゐない家はなかつた。どうして生活を立ててゐるのか、私たちにはいつも不思議に思はれてゐた。

「八百屋の娘がこのごろ金主がついたので、せつせといふ衣服を拵へるから、隣の娘も羨ましくて溜らなくなつたんでせう。だけど八百屋にはかなやしないの。八百屋ではまた別荘の奥さんやお嬢さんの服装を見ては、その眞似をしようとしてゐるんだから、金を出す人の身になつたら、大抵ぢやないでせう」

裏通を通つてゐる町の人々の正月姿を見ながら、私たちは噂をしてゐたが、やがて、私は年賀状を出さうとして玄關を下りて、ふと見ると、隣との界の垣根には、小便可さい蒲團や勝のはみ出た座蒲團がズツシリ掛けられて、元日の麗かな日に曝されてゐた。古くなつた垣根は、蒲團の重みでますます崩れかけるので、私の方では、隣の物干場になるのを免れようとしたが、口で譯を云つたつて駄目なことは分つてゐるから、年末に植木屋に頼んで、垣根の上に釘金を張らしたのであつた。ところが、今見ると、釘金の上に藁を掛けて、その上に蒲團を掛けてゐた。以前よりも藁だけ重みが

餘分に加はつた譯だ。二軒つゞいてゐる隣家の右手の家には、ことに子供が多くて、赤坊もゐるのだから、毎日汚れた蒲團や襦袢を干さねばならないのだらう。そして、私の家の垣根が壊れるのは隣家に取つては微塵も損にたることではない。

追 憶 記

「拙月死す」といふ電報に接して驚いたのは、五年前の晩秋の頃で、その頃私は麻布の我善坊に住んでゐた。死者S氏の演劇事業について關係の極めて薄かつた私は、氏の近状を知らなかつたので、その死因についていろいろに疑ひを起した。あるひは自殺ではなからうかとさへ考へた。

私は急いで横寺町の藝術俱樂部へ行つたが、その階上には、すでに大勢の先輩や知友が集まつてゐた。跡始末について何か話してゐられたI博士の顔面は、私がかつて見たことのないほどに峻厳であつた。他の人々の顔にも不意の死に動かされてゐるやうな感じが現はれてゐた。私はソと一隅へ寄つて、話し易い人に向つて死因や臨終の様子を訊ねた。流行感冒から肺炎を起したのださうだが、S氏がかねて心臓が弱いといつてゐたことを、私は思ひ出した。そのために飲酒を慎んでゐるとある宴會の席で氏はいつてゐた。椿名山で出會つた時にも、心臓が弱いから上り途だけ駕籠に乗つてゐると

いつてゐた。

私は、文壇へ出掛けた當時は、氏の最初の間弟の一人といつてもいいやうな關係で、氏には随分引立てられてゐたのであるが、近年は疎遠になつてゐたし、ことに先輩が數多ひかへてゐるのだから、死後の處置について喙を入れられはしないので、人々の意見を聞くともなく聞きながら、そこらをマゴ／＼してゐた。氏が病氣に對して我儘強かつたこと、演劇の開演中だつたので、當時氏の情人として盛んに世に唄はれてゐたM女も氏の死に日に會はなかつたことなどを、私は傍人から聞かされたが、氏の遺骸に接して今生の別れを告げようとも、靈前に線香の一本を捧げようとも考へてゐなかつた。…電報で驚かされた心が鎮まるにつれて、私はこの一事件について自ら興味を覺えてゐるのに氣づいた。死を悼む思ひがいかに強くつても、それは卓上へ運ばれた脂の味ひをまづくするほどではなかつた。藝術座の將來やM女の將來について囁いてゐる人々も、

るのである。

「あちらへ御案内しませうか」とある人がいつて呉れたので、私は隨いて行つたが、そこはS氏の不慮の部屋であるらしかつた。遺骸は横へられてゐて、M女は上り口の部屋に坐つて涙に濡れて客に接してゐた。私はM女に目禮して遺骸の側へ寄つて、恭しく顔の蔽ひを取つて死者を一瞥したが、何ともいへない無氣味な感じがした。泥色をした小さな顔であつた。私は直ぐに側を離れたが、「××さん察して下さい」と、相手の女客に訴へて嗚咽してゐるM女の聲が、ふと私の耳を穿つたので、私は思はずそちらを顧みながら、M女の顔は、いくら悲みに惱まされてゐても美しかつた。

私は溺死人や斃死者を通りがかりに見たことはあつたが、知人の死面を見たのは此の時がはじめてであつた。そして生死の差の激しいのを身に沁みて感じた。聰明であつて柔和な目をし居た生前のS氏と、あの小さな泥色をした醜い顔とが同じ人であらうとは思はれなかつた。

人間は一たび息が絶えたらそれつきりで、靈魂も何もあつたものぢやないと、私は不斷考へて居ることを、S氏の死面の一瞥によつて確めたやうな気がした。「億年前に死んだ生物も、今死んだS氏もはや同じことなのである。

みんなが葬式その他のことで騒いでゐるのも、S氏のためではない。自分々々の心に残つてゐるSといふ人の影を捉へて騒いでゐるのである。

「Sさんは頭がいゝんだね。差向ひで話をしてみると、此方の腹の底までも見破られるやうな気がするよ」と、私は昔未明君にいつたことがあつた。その時物に感動し易い未明君は、「さうかねえ」と同意して、さういふやうな、思詰めた表情を見せたが、近年になつてM女のことなどがあつてから、ある時、同君は私に向つて、「君はいつかS氏は相手の腹の底まで見破るなんていつてゐたが、そんなえらい人でもないぢやないか」といつて笑つた。

私も笑つた。軽々しく人を崇拜する癖のあつた自分の昔を思出して揅つたく感じた。しかし、私がS氏から眞に學ぶところのあつたのはその晩年の行爲からであつた。

氏が育英の職を執ることとなつた時に、最初

に教へを受けたのは私たちであつた。支那文學史と美學とが氏の受持の教課目であつたが、氏が教師としてまだ不馴れであつたのと、今から思ふとさういふ方面の學殖が深くはなかつたためとで、私はさして氏の講義によつて得るところはなかつた。同窓の先輩であつて文名も高いといふのに免じて、我々はまだるいのを我慢して、不平もいはず反抗もしないで教授を受けてゐたやうなものであつた。氏は下しらべを怠つてゐたのか、屢々時間の半ばも過ぎないうちに講義を止めた。

しかし、私をはじめて文章を世に公けにするやうになつたのはS氏の誘導によつたのであつた。それまで、私は懸賞金が欲しさに、「萬朝報」へ二度短篇小説——どちらも非常に苦んで、無骨な筆でコツ／＼と實感を書並べたもの——を寄せて落選した外には、同窓の同覽雜誌へも書かず、文筆で口を糊する氣にはなつてゐなかつたのであつた。ところが、その頃名士訪問をよくやつてゐた徳田秋江君が、ある日教室でひそかに私を招いて、「昨日S氏を訪ねたら、『讀賣』の月曜附録がこの頃振はないので、どうかして賑はせるやうにしてくれと主筆に頼まれてゐるから、合評會でも拵へようと思つて

るといつてゐた」といつて、同級生のうちから四五人の人選をしたことを話した。私は文章は書けなくつても、學課の成績がよかつたので、その一人に選ばれたのであらう。私は氣おくれがしたが、兎に角出席することにした。

合評の最初は泉鏡花氏の「註文帳」であつた。私は再三熟讀したので、今でも懐かしみをもつてよく覚えてゐる。チュウ／＼タコカイナのチュウといふ言葉が分らないので、宿の主婦に訊ねた。伊豫紋といふ下谷の料理屋の名前をこの小説によつて覚えて、あとでそこへ行つた。その時は鏡花氏が賣出した當時で、T博士も湯島詣を教室で推稱された。S氏も、紅葉門下では非凡な作家だといつてゐた。

私は、いくら讀んでも、何處がいゝのやらどこが悪いのやら、サツパリ見當がつかなかつたが、とに角何か理窟を捏ね廻して批評を書いた。S氏の筆で添削されて紙上に掲げられた。

一二年間、月曜附録への寄稿がとどげられた。その間に田山花袋氏に反駁されたり、讀んでもゐないウオーターペーターのことを書いて、千葉鏡藏氏に酷く罵られたりした。さうして人に採まれてゐるうちに、私もやうやく文壇の一人として認められるやうになつたのであつた。

やがてS氏は歐洲へ行つた。氏の不在の間に私は新聞社へ入つて、記者として氏の歸朝を迎へたのであつた。氏は家庭の生活状態においても文壇の方面においても、舊套を脱して清新なる自己を發揮しようと思氣込んでゐたやうであつた。世間の期待も大きかつたし、早稻田の人々はことに氏を擁して事をなさうと思つてゐたらしかつた。久しく休刊してゐた早稻田文學が、氏を主筆として再興されて、雜誌の少かつたその頃では重きを置かれてゐたが、氏の一時の意氣も次第に衰へて倦怠の色が顔にも現はれた。花袋氏などが熱烈に唱へた自來主義に和して、それに理窟をつけたのも、氏の内心の生命に觸れたためであつたにちがひない。西洋で學んだ事はむしろ皮相なことだったので、日本で起りかけた新しい思潮は氏の内心の生きた要求を動かしたのである。沈滞した日常生活から脱して新しい生命を得ようと思つてゐたのちがひない。一教師の生活は詰らない」と、私に向つてもをりく渡らしてゐた。氏の如く公人としては多數の子弟に圍繞され、家庭においては多數の兒女を有つてゐる人は、生活の面目を改めるのは容易ではあるまいと、私は思つてゐた。しかし氏はいつとなし

に新しい生活に向つて進んだ。世間の冷笑や罵聲を冒して進んだ。私が氏によつて教へられる所のあつたのは、それからであつた。藝術の仕事を範圍にどれだけの効果を奏したか知らないが、それは私に取つてはどちらでもいゝのである。生前の氏も、芝居のことなどは眞實はどちらでもよかつたのかも知れない。私は氏が謹直な學者として、やがて文學博士に推薦されて、醜態を上品な上衣に包んで、鹿爪らしく尊敬されて一生を送つたよりも、あゝした生々した喜びと悩みとを経験されたことによつて、一層深刻な教へを受けた譯なのである。…衆人環視のうちの情事は心がひけるものなのであらうが、氏は意外にも闊太いところがあつた。

私は——秋江君もさうらしいが——先輩の信頼を受けるやうな人間ではなかつたので、あとから出たK君とかS君とかいふ人たちのやうに、氏の内面生活に立入つた相談を受けたり、仕事を共にしたりするやうなことはなかつた。私の方から氏の宅へ伺候することも次第に稀になつたが、氏の方から、私を訪ねて来ることは一度もなかつた。

ところが、ある秋の末頃、天神町の私の家

へ氏が訪ねて來たので私は意外な感じがした。何か特別な用事があるのではあらうかと思つてゐたら、「高田さんの所へ行つたら留守だつたから：こいつて、その歸りを待つ間、私の家へ寄つたらしい口吻であつた。

その後、間もなく、氏は再び私の家へ立寄つた。私の妻は挨拶に出て、「先生はお瘦せなすつた」と、何氣なくいふと、氏は、「さうですか」と淋しく笑つた。そして、何か御馳走をしようとする、氏は押留めて、「水を一杯頂きませう」といつた。

二度とも氏は十分も経たぬうちに歸つた。私は何だか變な氣がした。間もなく氏が奈良から京都の方へ旅行して、年末には湯河原まで歸つてゐることを、新聞の記事で私は知つた。氏の紀行文が讀賣に出でゐたが、そのなかには、大和の三山を例にして戀の三角關係が論ぜられてあつた。かつて、「マグダ」が演ぜられた時、協會員の一人が、「MEのマグダにはSの魂が入つてゐるんだよ。稽古の時にでも、マグダを見計めてるSの目付けはあたりまへぢやないね」といつてゐたことを私は思出してゐた。耳に觸れるMEとSとの噂は次第に激しかつた。

私は年末も押詰つてから二三日小田原へ行つ

てゐたが、その間に一夜泊りて湯河原へ出掛けた。若しもM女でも来てゐたなら變だと思つたが、幸ひに氏は一人で火鉢に寄つてちつとしてゐた。食事を共にして、二人で火鉢を扱んで冬の宵を過したが、お互ひに話はずまなかつた。

「紀行文はあれで中止になつたのですか」と訊くと、

「あれは旅費にするつもりで書いたのだが、原稿料がよくないので、それなり書きたくもないから止めたのです」と、氏は答へた。机の上には何かの洋書があつたが、氏はそれを讀んでゐるやうではなかつた。「楠山が熱海に来てゐるから電話で呼ばうか」と、氏は欠伸まじりにいつた。私は撞球場へ行つて長い夜の退屈をまぎらして、別の部屋で睡眠に就いたが、翌日様子を見ると、氏は火鉢の側に正坐して、上べは何もしないでゐた。

氏は正坐して苦んでゐたのである。泡鳴氏のやうではなかつた。しかし、そのS氏が、話甲斐のない私に向つてさへ、一度くどくどと思つた。それは藝術座創立前のごとく、M女を中心の問題にして、早稻田の一部の人々が騒いでゐ

た頃であつたが、私がふと、郊外の氏の宅を訪ねて行くと、氏は例になく昂奮した顔して、T博士の主宰してゐる協賛の墮落を慨嘆した。「思ひ出」のやうな通俗劇を演じたことが憎敷の一つの理由になつてゐるらしかつたが、その劇は通俗であつても面白い芝居であつた。氏自身も以前「歌舞伎」誌上で、日本向きの面白い芝居として推稱したときへあつた。

「T博士に宛てて僕は手紙を出して置いた。僕は責任を帯びて書いたのだから、後で問題になつた時の用意に思つて、手紙の下書は保存してゐる」といつたが、外交問題か裁判事件見たいに、T博士とS氏との間に手紙の控へを必要とするのは、私には愛に思はれた。協會の仲間に陰謀のあることをも氏は洩らした。その他その他……師弟水魚の交はりも、一婦人のために打碎かれるのを、この時痛感した。親子の間、兄弟の間、朋友の間、婦人のために造作なく反目されるのである。主義の争ひ見たいにいつてゐたあの時の早稻田の人々の心持は可笑しい。

泡鳴君はその點で露骨で正直であつた。K女史と親しくなつた時に、彼女を筆か口かで非難してゐたらしい柴田柴庵君と、精養軒であつ

たある會で椅子を並べると、いきなり突つ掛つた。

「君は婦人のいふことばかり聞いて、一概に友人を罵倒するのはいけないぢやないか」と、柴田君が青い顔していふと、

「いや、女は弱いから、僕が辯護してやるんだ。君のいつてゐることはみんな出鱈目なんだ」と、泡鳴君は剛い顔して鼻を鳴らした。

私は側で聞いてゐて、女が弱いか泡鳴が強いのかを疑つてゐた。

藝術座が組織されて急に勢づいてからのS氏の行動は、新聞の記事や知人の話によつて、私は間接ではあつたが、つねに心に留めて、あひは悲みあるひは喜びあるひは淋しい思ひに打たれた。藝術座の芝居よりも、氏の行動によつて、人生の本體を見せられてゐるやうに思つてゐた。

「先日伊勢の山田へ行つてゐた男が、藝術座の乗込みがあつて、S氏が廣告旗をたてた俵に乗つて町を引廻されてゐるのを見て、氣の毒な思ひをしたといつてゐたよ」と、ある知友が私に話した時には、私は、威嚴のあつた昔の氏と、今の氏とを思ひ比べてちよつと暗い思ひがしたが、それは皮相な同情ではないかと直

ぐに思ひ返した。早稲田の講壇で美學などの講義をするよりも、M女の「先生」として、廣告旗を翻して町廻りをした方が、S氏自身に取つては遙かに生存の興味も豊かだつたかも知れない。

私は打たれても殴られてもへたばりさうでなかつた泡鳴君の死顔は見ることは出来なかつたが、S氏の死顔は、今なほ明かに覚えてゐる。

私は梅雨降り頻る今夜、故郷の家の二階で、薄暗いランプの下で、S氏の死面を目の前に浮かべながらこの原稿を書いてゐる。この廣い舊屋には老父母が二人住んでゐるだけなので、家中には勢のいゝ聲一つ聞えず、淋しさは身に沁むやうである。舊知は近年相ついで倒れて、昔から少かつた私の知友はますます少なくなつた。私の壽命も餘すところ幾干もないことは分つてゐる。私はしばし筆を擱いては、さういふことを考へてゐる。

私は藝術至上主義を信奉したことはなかつた。書きはじめの頭島村氏に向つて、「私は物を書きだすと、頭が痛くなつて、夜はよく眠れないし、壽命が縮まるやうに思はれます」と云ふと、「いゝぢやないか、倒れるまでやつたらいゝぢやないか」と、氏は云つた。氏は見掛けによらない熱烈な所があつた。岩野泡鳴は、「物が書けなくなつた、頭が役に立たなくなつたら舌を嚙んで死ぬるさ」と云つてハツ／＼と苦もたげに笑つた。

私は、一つは思ふやうに筆が運ばないためでもあらうが、さういふ熱情を文學に對して持つたことはなかつた、何かの因縁で道連れになつた女を、振切れることも出来ず、不承々々に一生の旅をしてゐるやうなもので、有島武郎氏の如く女に殉じるやうな氣持には、私はつひになれないのである。

四十になつたら止めようと思つてゐたので、その頃東京の家を引拂つて故郷へ歸つたのであつたが、自分の思ふやうにはならなかつた。自分の筆の稼ぎで巨萬の富を著積し

てゐたのなら、安んじて氣儘に暮らせるのだが、祖先の財産が、たとひ残つてゐたにしても、それに總つて生きよとするのはいゝ氣持はしない。それに、兄弟の多い私の家では、自分だけが祖先の餘澤にあづかることは出来なかつた。第一、私の名前が新聞や雜誌に出て何とか云はれてゐればこそ、兄として立てられるのだが、文筆稼業を止めてしまへば、外に能はないし、家のために何の役にも立たない厄介者とされるのだ。

それで廢業を思ひ留まつて、習ひ馴れたことに努力することになつた。私の文學は才氣や感興によつて生れるのではなくつて、すべて、努力によつて現はれるのである。石や土を運んでゐる労働者の如く文字を運んでゐる労働者である。處女作以來二十年、私が同じ道を努力して進んだり退いたりしてゐる間に、文學の風潮はいくたびも變つた。私はいつの間にか、年齢に於ても作風に於ても、老いたる作家の一人となつた。

(「白鳥隱筆集」の私の文藝後談により)

推敲を重ねた作品よりも、手軽に書かれた手紙や日記に於て、作家の本性はよく現はれるものである。ある傑出した作品を理解するために、批評家の説明によるよりも、作家自身の手紙や日記によつた方が確かで、明瞭だと思はれることが多い。私はこの頃、ツルゲネーフが佛蘭西の友人に與へた書翰文集や、フロウベルがジュールジャンに與へた手紙を読んで、さう感じてゐる。この二大文豪の日常生活があり／＼と分つて面白く思はれるのみならず、彼等の創作の根柢までも見徹されたやうで面白い。

ツルゲネーフの晩年は故國を離れて巴里で過ぎたので、自然主義系統の文人とつねに親しい友情を保つてゐたと云はれてゐるが、異郷の人として、佛人に對しては氣兼ねしてゐたやうなところが書翰集に微見えてゐる。ツルゲネーフの死後に、彼れが生前故國のある知人に寄せてゐた感想文や、筐底に藏してゐる記録が發表された時に、ドーデーなどはツルゲネーフに慕ふ中からおれたちを鞭打つと云つて憤慨し、兄弟

同様に親しくしてゐたことを忌々しく思つてゐたらしいが、私はこれによつて、異郷生活の不自由さを痛感した。ツルゲネーフもトルストイやドントエフスキーなどを率直に批評したやうには、ドーデーやゾラを批評し得なかつたのである。日本に住んでゐる朝鮮人や亞米利加に住んでゐる日本人が、精神上の不自由を感じるのには云ふまでもなく、毛色の同じい文明の程度の同じい國人でも、他郷に居を定めると、周囲との妥協に心をつかはねばならぬのであらう。

「私は一語をも人とまじへることなくして一週を過すことがある。そして、一週の終りにその週間の経過を回顧すると、取立てて云ふべき事件の一つもないのに氣付くことが多い。私は日曜毎に母と姉とに會ふだけである。屋根裏の鼠の群だけが私の社會である。雨や風の荒れない時には鼠ともが私の頭の上で氣味の悪い音を立てる。夜といふ夜は炭よりも黒く、私の周囲は沈黙のみである。沙漠に於ける如く無限にさうだ。人間の感覺はかゝる境界に於ては、驚くべく鋭くなつたもので、私の心は些少の音にも感動する。」これは、フロウベルの手紙の中の數節だ。

「私が人生に於て求めるものは、罪で汚すための幾重ねかの紙片のみである。私は果しのない沙漠を當てもなくさまよつてゐるやうに感ぜられる。しかも、私は旅人でもあり駱駝でもあり、あるひは沙漠でもある。……私が支へてゐるただ一つの希望は、やがてこの世に別れを告げることであるが、私はあの世の存在は無いと信じてゐる。有れば一層苦しい世界なのであらうが。……否、否。悲惨はこの世だけで十分だ」これもフロウベルの手紙の中の文句である。

私は傑出した藝術を後世へ殘して世界に名を知られてゐる此等の文豪の心にも、屢々不安の暗い影が差してゐたことを、あたり前のやうにも思ひ、不思議なやうにも思つた。迷妄に提はれない聰明鋭利な彼等の眼には、常軌的な宗教観などで好ましい安心は得られなかつたであらうが、しかし、自己が安んじて動じない所を、老の到るまでに見出し得なかつたのは淋しい。

ツルゲネーフはフロウベルに宛てて病苦を訴へ、「自分はつひに犬の如く死ぬるのであらうか」と歎じてゐる。フロウベルは死の近きを豫

感して、影が予を包みつゝありと悲んでゐる。かうなると、その二偉人の歎聲が凡人の愚癡と同じやうに思はれる。私の少年時代に知つてゐた田舎のある耶穌信者は、神の御許へ赴くといふ確信を有つてゐたためであらうか、死に際して、歡喜を面に湛へて最後の息を吐いた。永遠の生命を信じた田舎者の心は迷妄の巢で、かの二偉人の如き心持が人世の真相を捉へてゐるのであらうかと、私は考へ直して、解けがたい謎に暫らく惱まされた。そして、際立つた事業は何もしなくつても、絶えず平和な心を有つてゐて、笑つて死生の溝をも飛越えた田舎信者のN氏の方へ、いつか私の心は惹かれて行つた。

少年時代の私の目には、餘程の老人として映つてゐたN氏も、その頃五十にまだ間があつたので、今の私の年齢とさう違つてゐなかつたのであつた。若い時からの努力で可成りの身代を造り上げて、雜穀商として近郷に顔を知られてゐて、田舎の小きな教會では中心人物の一りになつてゐた。私は日曜ごとに會堂通ひをした時分に、たび／＼N氏の宅で午餐を獲られた。暑い日には夕方まで其處で休んだこともあつた。時々は教へに關した話も聞かされた。元來單純な信仰をもつてゐるだけで、學問は辛う

じて聖書を讀み得るくらゐに過ぎなかつたN氏の話には、その頃の私は、あまり重きを置いてゐなかつた。ジョーンソンといふ米國の宣教師が説教に來た時、N氏などがソーンといふのは日本の尊と同じ意味だと云つて有難がつてゐるのを聞いて、私は噴きだした。

私が東京に留學して、はじめ、歸省した夏であつた。久振りに會堂へ行くと、N氏が病氣してゐて日曜の集まりにも暫らく出て來ないといふ噂を聞いたので、歸りがけに見舞に寄つたが、その時の彼れは、最早一ときも寢床を離れてはゐられないほどに病が重くなつてゐたのであつた。多分春臨の病氣であつたやうに記憶してゐたが、氏は少しでも身體を動かすと疹みを覺えると云つてゐた。

「私も丈夫な時にや、商賣のことや家の用事に氣が散つて、基督のお恵みを一心に考へることが出來なうだが、この頃は聖書を讀んで聞かせて貰うても、讚美歌を唄つて貰うても、身に沁みて有難いことが分るやうになりました。私は僅かな身代でも親から譲つて貰うたのぢやなし、誰れのお世話になつたのぢやなし、自分の腕一本で稼いだのぢやから、威張つて居れると自慢したこともありましたが、やうも身

の程知らん借上なことを考へて居つたものぢやと、この頃になつて氣がつきました。御覽なされ。私は御飯を食べることから、大小便の始末まで、みんな人に厄介を掛けて居りますのぢや。人の情の有難いことがこの頃はよう分りました。家内や娘の介抱を受けるのは當然のことぢやと、誰れしも云うて居りますが、家内にも娘にでも情深い心が自然に備つて居るのはどういふ譯ぢやとお思ひなされる？ 神様がさういふ情深い心の種を人の心にお植ゑになつたからぢやありませんか。播かん種は生えはしません。：：それぢやで、私は家内にも娘にでも、この頃は頭を下げたお禮を云ひます。笑ひ事ぢや御座いませぬぞな。娘や家内の心に映つてる神様の惠深いお姿に私はお禮を申上げて居りますのぢや。：：私の病氣がよくありませんすれば御恩報じに教會の方へ身を入れて、永い間皆様も考へてゐなすつた會堂の新築が出來上るやうな運びにしたいと思つて居ります。が、神様が早く私をお側へお招きになるのなら、私はとやかうこの世の事に心を痛めますまい。：：私は時々夢の中で美しいあちらの世界を見ることがありますのぢや。

N氏は仰向きに寝たまゝ、落着いた調子でさ

う云つてゐたが、元氣のよかつた時分のN氏の田舎くさい信仰話よりも、どれほど深く私を感動させたか知れなかつた。私は病床の傍に恭しく坐つて黙つて耳を傾けてゐた。

「私も身體の骨節が疼んでならん時にや、苦しい顔もするし、家の者につらく當りもしますのぢやが、神様は私に辛抱氣のないことをお叱りにはなりません。神様が見てお出でになるのに、體裁つくつて居るには及びますまい。泣きたい時にや泣いたらいいぢやありませんか」

やがて、東京の事を訊かれたので、私は取留めなく學生生活の有様などを話すと、

「私は貧乏な家に生れましたで、読み書きも碌に出来んやうな人間で歳を取つた譯ですが、これからの若い人は學問せにやなりません。學問がありや、詰らんことに迷はされなくて済みますから。……と云つて、N氏は牧師に説明されたヨブ記の話を持出した。ヨブの如き正しい者が苦しい試みに會はされたことが、多少胸に落ちない暗い影を彼れの心に印してゐたのであつた。

「僕にもよく分りません。あれには神學上の六ヶ敷い理論があるんでせうね」と、私は答へた。一私も丈夫な時には、上の空で聖書を聽いて

居りましたが、私のやうな無學な者には分りかねるところもあります」と、N氏はちよつと疑ひの眉を擡めたが、それは一時の曇として掻消されたやうに、「しかし、神様のお側へ行けば、何もかも分ることせうから、解離するには當りますまい」と安んじて、聖書のうちの有難い文句を彼れ此れと口の上にした。

その年、夏季休暇が終りに近づいて、上京の支度に取り掛つてゐる時分に、N氏逝去の知らせがあつたので、私は追悼の心を寄せるためにわざ／＼訪ねて行つたのであつたが、その時に私の目に映つた氏の死相には、苦しい病氣の果とは思はれないやうな平和が宿つてゐた。無智の平和と輕んじることが出来ないやうな氣がした。

爾後數十年間に得た私の書物の上の知識も、ヨブ記の謎を解くことが出来ないが、さういふ煩はしい疑問に多くの悩みを浪費しないで、平和な心をもつて死の扉を開けて行つたN氏の單純な信仰が羨ましい。

フロウベルの淋しい懷疑や、ツルゲネーフの不安な心境に共鳴する自分の濁つた心を私は憎む。……しかし私は今更どうすることも出来ない。

根本の憂ひを拭はれて、暗夜に光を得るのは、宗教心に籠るより外にないであらう。亂世の人々が淨土宗に歸依したことや、中世記に、修道院の築えたことが私にはよく思出される。文藝復興後の世界よりも、あの頃に本當の安心があつたのではないかと思はれる。歴史家は中世紀を暗黒時代と稱して、いろいろにケチをつけてゐるが、永遠に生命を確信してゐた人には、他の瑣末な日常生活の不足はどうでもよかつたのではないか。

私は深夜に目醒めた時、すべての事について信念がない、風に吹かれる木の葉の如く、水に漂ふ浮草の如き、自分の生存について、悄然として心の消え入るやうな思ひのされることとがある。神とか佛とかいふ時代の垢のついた、既成の言葉で現はされるものを信じる信じないの問題ではない。自分を永遠の自分として信じ得る境涯を望んでゐるのである。

(『白鳥隨筆集』の「あの夜の感想より」)

泉のほとり

私は日の出前に起きて、顔を洗ひに山麓の泉まで出掛けるのを毎朝の例としてゐる。水質の悪い井戸水を用ひるのは氣持が悪いからでもあるし、朝食前の散歩が健康上に必要なためでもあつた。

人家の間の汚らしい道を急いで通り抜けて、小川の橋を渡り、大根畠の側を横切り、墓地への通ひ路から岐れて、石ころ道を數十歩も上ると、苔の蒸した石に圍まれた清冽な泉が目の前に現はれるのである。古い石地蔵が傍に安置されてゐて、後に繁つた竹藪が奥深く續いてゐる。其用の大柄杓で碧く澄んだ清水を汲んで、口を漱ぎ顔を洗ひ、あるひは全身を拭つたりしてゐると、爽やかな朝風が身に沁みて氣持がいい。空を仰ぐと、残月が竹の葉越しに見えたり、少し時刻の遅れた時には、向ひの山の端が微細くなつてゐたりしてゐる。

少しぐらゐの雨が降つてゐようと、霜が置くほど冷たい朝であらうとも、私はまだこの習慣を止めないでゐる。たまに水汲み女に出會ふ

こともあるが、出稼ぎの漁夫の揃つて歸村してゐる時節とは違つて、早朝の泉に人影を見ることは甚だ稀れだ。

はじめの間は、私の顔が珍らしさうに見詰めてられて、一方へお出でなさる？」と、途中で誰れ彼れから訊ねられることもあつたが、この頃は事情が沿道一帯の人々に分つたので、顧みるものもなくなつた。私は歸郷するたびに、日毎に山へ上り濱へ出るのであるが、村の人々と打解けて話をしたことは殆んど無かつた。自分の家以外の家の閤を跨いだことも殆んど無いと云つていゝ。

したがつて、村の誰れからも懐かしげに話しかけられることはなかつたが、たゞ一人仙太といふ男は、何處でも私を見つけると、いかにも懐かしさうに大きな聲で呼び留めて、傍へ寄つて來るのを例としてゐた。彼れの家の前を通るたびに、「お奇んなさい」と私を招かない事がなかつた。彼れの方で私の住んでゐる離れ座敷の側を通る時にも、をり／＼は堀越しに話を

仕掛けた。それなのに、今度は歸郷して以來暫らく彼れの聲を耳にしない。私が歸つて來た事は村中の噂になつてゐて、無論彼れの耳にも入つてゐるだらうのにと、私は怪しんでゐた。泉へ行く途中から見上げられるところに彼れの家があるの、私は時々、曉の光を通してその方を見やつたが、彼れの姿は一度も見られなかつた。

しかし、私の方では強ひて會ひたくはないのだから、この男の動靜を家の者に訊ねることもなかつた。十九の年に親分を殺害して北海道の監獄へ十六年三ヶ月も入つてゐた彼れは、七年前に放免されて歸郷して以來、薄資本で魚類や穀類の荷ひ賣りをしてゐたのであつたが、若い時に苦勞を掛け、兩親には入牢中に死なれ、僅か十七の年齢に娶つた最初の女房も、入牢中に行方知れずになつてゐるし、村の中からはやゝもすると疎外され勝ちだつたので、二十代三十代の若い盛りを監獄の中で苦しみながら、ひそかに懸焦れてゐた生れ故郷も、彼れに住みよき感じは與へなかつた。彼れの兩親や幼い頃の彼れには家事を手傳はせて、昔風の主従のやうな關係で生活の保護をしてやつてゐた私の家でも、出獄後の彼れには關り合はないやうにし

てゐた。

「己れでさへ、何年置きか故郷へ歸るたびに、村の様子の變つたのに氣がつくが、お前は尙更さう思ふだらう。十六年も世間の風に吹かれないでゐると、世間はすっかり變つて居るんだから、生れた土地へ歸つて來ても狐に抓まれたやうな氣がするだらう」と、數年前、彼れとの話の間に云ふと、

「さうですか。昔は皆なが親切だったやうに思はれます」と、彼れは細い目をパチ／＼させながら、附に落ちぬやうな顔して云つた。

「今時の十六年は昔の百年よりも世の變りやうが烈しいんだから」

「しかし、若旦那、この村は昔の方がよゝ御座いましたなあ。あの時分には私一人が悪人で、他の人はみんなえゝ人であつたやうに思はれますが、今はみんなが意地が悪うなつたやうに思はれますがな」と彼れは感愧を籠めて云つた。

彼れはその後獨り住みに堪へられなくなつて、二度も三度も他村から女房を連れて來たが、どれも長くは居つかないで、徒らに村人の物笑ひとなつて居た。

歸郷後彼れの消息をはじめ私の耳に入れたのは、山の泉のほとりて手足を洗つてゐる

時であつた。珍らしく見目に水汲みに來たある男は、私の側に立つて擔桶に水を入れながら、「どこのお人かと思ひました。あなたも歳をお取んなさつた」と話しかけた。

「君は誰れだつたね。忘れちやつた」

「私は藤吉で御座います。この頃は西谷の方に家を持つとります」

「あゝ、さうか。私は相手の顔を見上げるともに、彼れが子供の時分に仙太に庖丁で顔を深く傷つけられたことを先づ思出した。顔の傷は薄く痕を残してゐた。で、仙太はこの頃どうして居る？」と、咄嗟に訊ねた。

「あれは今年の四月からまた半へ入つとります。巡查さんの主婦さんの肩を斬つたんで、三年の懲役にやられました」

「相變らず無茶をやるぢやないか、巡查の身内を斬つちや罪が重いだらう」

幼い時から感情を壓へ得ない彼れの所行としては不思議とも思はれなかつた。

「去年の暮に、備後から二人も連れ子のある四十くらゐな女を連れて來とつたんですが、その女もはじめから永う辛抱する氣ぢやなかつたらしいんです。仙太の方ぢや今度逃げられちやかなはんと思つたと見えて、わしの居らん間に逃

げでもしたら、何處まででも追かけて見つけ次第叩き殺してやる、そのつもりで居れと商賣に出掛けるたんびに脅しとつたさうですが、そんなことを云はれるから、尙のこと氣味が悪うなつたと見えて、その女は巡查さんの家に手助けに行つてる間に、主婦さんに頼んで×村へ姿を隠したんでさあ。また女が逃げたなと、仙太の奴、前後見ずに巡查さんの家へ怒鳴り込んで、主婦さんが言譯するのを疎に聞きもせずに、側にあつたサーベルを抜いて斬りつけたんださうです。その時巡查さんは便所に入つとつたんださうですが、大變な騒ぎでした」

「そして、その女や連れ子はどうして居る？」

「それつきりこの村へ姿を見せません」

「以前米造を殺した時には、鹽に乗つて逃出したさうだが、今度はさうは行かなかつたらうね。今時分仙太の奴、あの細い目をパチ／＼させて後悔してゐるんだらう」

「何しろ、五人の女房に逃げられたんですからな。一度は女の方で専主と馴合ひで仙太の女房になつて、折角資本に借りて來ると金をみんな持つて、逃げたことがありました」

さう云つてゐる間に、藤吉は擔桶へ水を満たして、坂道を下りて行つた。私も隨いて下りた

が、話は續けられなかつた。
幼い頃、仙太と私とは屢々寢床を並べて眠つたことがあつた。

「月はあるのに小さく見えても大きいんだ。周圍が何百里もあるんだ」と私が教へると、

「阿呆云ひなさい。本にはさう書いてあるかららんけれど、わしの目でどう見ても、そんなに大きいもんとは思へん」と、彼れは例の細い目で澄んだ大空を見上げた。

仙太がゐないとすると、他に私を懐かしがつて聲を掛けて呉れるものはこの故郷に一人もゐないのだ。私は道すがら仙太のゐた家の方を見詰めた。其處の軒先からは朝餉の煙が洩れてゐた。

生存競争

文壇に縁のないある知人が、私を訪問して半日を過ぎた間に、雜誌に倦んだ果の暇潰しに、座側の新刊雜誌を見てゐたが、「新潮」のことに興味ありげに飄して、その讀後感として、「文學者もなか／＼煩さいものだね」と云つた。それは通り一遍の感想に過ぎなかつたのだが、私はその言葉を縁として、不辭自分

が文壇の波に浸つてゐるために、ともすると氣づかないでゐることを、新に感じた。「新潮」といふ雜誌は、文壇の一面を窺ふには最も便利なるものであるが、その十二月號を手に取つて見ると、文學者とても、決して閑日月を樂んではゐられないことがよく感ぜられるのである。

私なども、自己の生涯を顧みると、文壇の風波を凌いでよく今日に至つたものだと思つた。感傷的な氣持にさへ襲はれる。自分で、一度かういふ生涯を繰返さうと思はないばかりでなく、年少の徒が文學の社會に身を投じるところを、危かしく、いぢらしく思つてゐる。人間は生きてゐる限りは、何處にゐても、運命

に翻弄されて生存競争に慣まなければならぬのだが、文學藝術の社會だつて、決して風流平和の別天地ではないのだ。

「新潮」十二月號の文藝時評欄に於て、宇野浩三氏は、宮地嘉六氏の近作「累」を激賞してゐる。室生犀星氏も推讃してゐた小説であつて、私もそれを佳作として認めるに躊躇しないのである。私は數年前に、宮地氏のある、可成り長い小説を讀んだ時から、作家として

いゝ素質を持つてゐることを知つてゐた。しかし「累」を室生、宇野氏などの云つてゐるほどの傑作であるとは、私は信じ得ない。……私が、この小説の事を持出したのは、過分の好評に反對しようとするためでなく、文學藝術の鑑賞は、傍から見たら分に過ぎると思はれるほどに惚込むやうでなければ面白くないと感じたためである。過去の藝術品

が時代によつて毀譽褒貶に動搖の生じると同時に、今日の作品も、時と場合と人によつて、高く買はれ過ぎたり、低く値踏みされたりするのを例としてゐる。そこが、藝術家に運不運のある所以であり、他の窺ひ知られない苦みと喜びとのある所以である。

(「文壇觀測」より)

わが文學小觀

我々は馴れつこになつてあまり感じなくなつてゐるが、毎日の新聞の廣告の大部分が、雜誌と著書の廣告で埋められてゐることは、驚嘆に價ひするのである。一つ一つの賣高は僅少なのであらうが、兎に角こんなに頻繁に發刊されるのによつて見ると、購讀者の數は、全體に於ては非常な數に達してゐることが察せられる。古文學の豫約出版が近年續出して留るところを知らないやうな有様であるのも、私には不思議な現象と思はれる。萬葉源氏の類も、過去十年の間に印刷されてゐた數よりも、最近五年か十年の間に印刷された數の方が、遙かに勝つてゐるかも知れない。神祕の珍本扱ひされ、むしろ神聖視されてゐた古典も、古ぼけた姿を明らみに持出された。そのためにいよゝく眞價を發揮するものもあるだらうが、少數者が愛玩してゐた骨董品の箱が剥けて有難味の失せるものもあるであらう。

私なども、新聞の廣告面を見ると、絶えず購讀慾を喚ばれるのであるが、讀みたいと思ふ

のを一々讀んでゐたら際限がないので、成るべく讀まない分別をしてゐる。森鷗外氏のやうに、三時間の睡眠で満足して、讀書三昧で一生を過したにしても、その讀破した分量は、古今東西の書籍に對しては、九牛の一毛にも當らないであらう。私は、この頃夏目漱石氏の作品を、暇々に讀んでゐるが、鷗外氏と同様の多讀家であつた彼れば、その「文學論」の序文に於て、青年の學生に告げて、「春秋に富めるうちには、自己が専門の學業に於て、何者かを貢獻せんとする時、先づ全般に通ずるのを必要ありとし、古今上下數千年の書籍を讀破せんと企つる事あり。かくの如くせば、白頭に至るも、遂に全般に通ずるの期はあるべからず、余の如きものは、未だ英文學の全體に通ぜず。今より二三十年の後に至るも、依然として通ぜざるべしと思ふ」と云つてゐる。

書物が容易に手に入る時代になつたのも、學者に取つて心ずしも幸福とは云はれない。落着いて、少數の書物を十分に味ふ昔の學者の心

境には達せられなくなるかも知れない。塵芥のやうな書物まで搜し集めて印刷するやうな世の中になつた。明治初年以來の新聞雜誌を全部蒐集し保存する計畫も出来たさうだが、世の中も煩しくなつたものだ。

徒らに讀書するのも精神の浪費である。いろいろな物識りになるだけでは詰らない。私などはどちらかと云へば、直接に人生に接觸するよりは、書物を通して人生を知ることが多かつた。作家としては、傾倒であるまい。鷗外漱石の大才にしても、その作品が書齋奥を帯びてゐるらしく感ぜられるが、私などは殊更さうであらうと思はれる。先頃の時事新報(二)に徳田秋聲氏が、文學者と小説家の區別を論じてゐたのを、東京滞在中に一回だけ讀んだ。續けて讀む機會を失つたので、氏の論旨が十分に分らなかつたが、さながらの眞人生を寫した小説と、學者の頭から割出した小説とを區別したのではあるまいか。論據をそこに置いて、一を是とし一を非としてゐるのなら、私も大體に於ては同感である。しかし氏の論中、漱石や鷗外よりも紅葉の方が傑れた作家であるらしい意見が微見かされてあつたが、その説には、私は同意をすることを躊躇する。鷗外の小説が、いかに

書齋奥で濁つてゐても、その晩年の傳記小説「江抽草」北條霞亭の如きは、幅に於ても深きに於ても、とても紅葉などの及びもつかないものであると確信してゐる。

書物を通じて世相人世を見ることの多かつた私などは、小説の材料を取扱ふに當つても、ある概念でそれを片付けてしまふことが多かつた。自分の過去の作品が濼刺たる生氣を缺いてゐるのである。

讀書に於ても、私はある一つの事を徹底的に研究する根氣を缺いてゐるが、人生に觸れるにしても、底の底まで入つて行くやうな氣力を私は有つてゐない。戀愛その他さまざまの人情でも、身を滅ぼすまでに突詰めて行つたら、そこに恍惚境が出現するであらうが、それは今までの私には遂げ得られることではなかつた。

しかし、性癖はいかんともし難い。私は人生の渦中に身を投ずることは嫌ひである。歳を取るにつれて、ますますさうなつて行く。方丈記や徒然草の作者や芭蕉などに、日本の文學者の心には傳統的に滑んでゐる微温的厭世觀、微温的無常觀に、私の心は浸つて行くばかりらしい。

私は、水火に鍛えられた實際生活を直寫し

た小説戯曲の類を好む。海邊の砂丘に蹲つて激浪怒濤を見るのを好む如く好んでゐる。しかし、自分がその波濤の中に突進しようとは思はない。幾十尺の海底に滑り込まなければ眞珠は掴んで來られないのだが、藝術の眞珠も、そのくらゐの苦難を經なければ手に入れることは出來ないのであらう。数十年の作家生活を經驗した今日、いくら鋭敏に目を働かせても、傍觀的態度だけを保存してゐる作家の作品は、體驗をぶちまけた作家の作品に及ばないところのあることを、私は痛感してゐる。いろ／＼な作家があつて色彩がそれ／＼に異つてゐるから面白いのだが、悲喜哀歡の體驗が作中に漂つてゐないものは、讀者を捉へる力が乏しいに極つてゐる。他人の話を書くにしても、史上の人物を取扱ふにしても、自分がそれ等の人物と心を一つにしてゐるでなければなるまい。それは分りきつたことなのだが、私は、自作に不満を感じるたびに、そのことを考へてゐる。實人生について經驗の乏しい私は、作中の人物の心に入つて行くことが出來ないため、つねに自分の書齋的空想で補綴するやうになり、従つて作品に生氣を失ふやうになるのだ。

私は更に一步を進めて、藝術と實行について

考へることがある。藝術至上主義などを唱へる人もあるが、藝術は實行の影見たいなもので、實行に没頭してゐる間こそ人間は全心的に生きてゐるので、さういふ人には、藝術なんかどうでもいゝものではあるまいか。戀愛に耽溺してゐる人、戰闘に従事してゐる人に取つては、いかなる戀愛小説も、いかなる戰闘劇も、稀薄な影に過ぎないのである。いかによく眞實を寫したと云つても、寫された眞實は眞實に合まれてゐる微妙な生命の脱殻見たいなものであるまいか。私はそこまで考へて行くと、體驗を文字によつてぶちまけた作品だつて、畢竟それは體驗の影法師に過ぎないので、文字にうつす瞬間に、眞生命は逃げて行くのではないかと疑はれる。他の傑れたる作家は、自己の體驗を遺憾なく現はしてゐるのかも知れないが、と自身は、時として自分の平凡な體驗を作品のうちには現はさうとしてさへ、思ふやうに現はし得られない憾みを何時も感じてゐる。文學上の技巧の不足もその一つの原因になつてゐるのだが、文學といふものは本來さう云ふもので、現實に對して畢竟、「繪そら言」たるに過ぎぬのではあるまいか。歌舞伎劇ばかりがそらん／＼しいのではない。近代劇だつて、文學上の遊戯と思はれない

ことはない。我々はいろ／＼な作家の描く幻影を見、人生の影法師を見て、それを弄び、それを銷閑の具としてゐるのである。

雜書を讀續けて来た私は、自分の頭をさまざまな作家の影法師の巢にしてしまつた。それ等のものが、人生の真相を知るにどれだけ役に立つたかと疑つてゐる。

強盜詩人

共同生活をする人類には、古來自ら道徳といふものが出来てゐて、それに反することをすると他人に斥けられるし、自分で遺傳的に良心の苦悶を感ずるやうになつてゐる。

その苦悶が詩や小説や戯曲の重要な題材になるのであるが、道徳と云つても、時代により國によつて異なるのみならず、同じ時代の同じ國に於ても、職業によつて寛嚴の差があるから面白い。政治社會教育社會文學社會など、それ／＼に道徳律の働き方が違ふ。乞食には乞食社會の道徳があり、賭博者にはそ

の仲間特有の道徳があるらしい。

文學者の仲間では、世間の常識道徳の束縛があまり厳しくはないやうで、教育界であつたら、直ぐに免職になり世間に顔向けもならんやうなことを、作者が得々と書立てて、却つて世上の喝采を博したりするやうなこともあるが、しかし、文學者間にも、誰れが極めたともなく一種の微妙な道徳はあるらしい。

現在のどの國の文壇でも、盜賊は排斥されるやうである。強盜文學者も盜賊文士も存在しないやうである。泥棒の告白文學には私は、まだ接したことがない。

ところが、昔はさういふものもあつた。この頃西洋文學大系を讀むと、中世紀の終りに Francois Villon といふ泥棒詩人のあつたことが出てゐる。その肖像はなか／＼いゝ顔をしてゐて、私の知人に肖てゐる。彼れは佛蘭西人で、千四百三十一年に生れた。強盜をし殺人をもした。巴里の醜窟で世を過し屢々入牢したが、奇蹟的に死刑を免れ最後には誰れにも分らないとこへ身を隠してしまつた。それで死んだ時が分らないし、墓所も分らない。

彼れは、古代の佛蘭西の詩の形を取つてそれに新生命と新詩美を與へた。その詩には憂鬱がみなぎつてゐる。彼れは人生を嘲笑し、自己の罪を誇つてゐる。しかし、常に絞首臺の側で筆を執り、絶えず死の恐怖を感してゐた。

評者が彼れの詩を評して、ダンテの詩が中世紀の莊嚴美と大理想を具體化してゐる如く、またチヨーサーが中世紀の幸福なる笑ひを現はしてゐる如く、彼れの詩は中世紀の苦痛と恐怖とを具體化してゐると云つてゐるのは、私には甚だ面白く思はれる。この強盜詩人は、ダンテ、チヨーサーの如き詩人と文學史上に鼎立してゐる譯だかららしい。

スキンハーンは、その美しき詩に於てその強盜詩人を讚美してゐるからます／＼面白く「涙と火から作られし懐かしい頃の王よ。娼婦は汝の乳母にして、神は汝の祖先なり」など。

日本には、まだ泥棒からえらい詩人は出ないらしい、出ない方が仕合せである。

(文壇觀測より)

ダンテについて

聖書は面白い書物である。基督教の神を信ぜず、基督教の教理に心服しない私も、一部の新書全集を、一生座側に具へ置くべき愛読書の一つとしてゐる。私はそれを古代史として、人生記像として、素朴なる小説として、純新なる詩歌として、愛讀してゐるので、イザヤ、エレミヤなどの慷慨悲憤の豫言書や、ポーロの傳道的書翰などには、左程の興味を寄せてゐない。エバがアダムを誘惑し、カインが嫉妬のために弟アベルを殺し、エサウが一杯の美酒のために弟に家督の權を譲り、ヨセフが自分を挑んだ主人の妻に眩鐵砲をくはしたために冤罪を背負つたことなど、創世紀の古代人の物語は、さながら現代人の生活を映してゐるやうに私は思はれる。出埃及記、刑末記など、人類の集團的生活を寫した寫實小説のやうに思はれる。

しかし、私は、近來、しみじみと本書に心を潛めたことがなかつた。毎日々々、日に觸れ

てゐる文章は多く新聞のそれである、雑誌のそれである、新刊書のそれである。世に遅れまいとして現代の雜駁な知識をそれ等から得るのに急がしい。自然速讀の習慣がついた。一巻の書物を手にしても、汽車の窓から外を見るやうな態度で讀むやうになつてゐる。山を下り谷を渡り、一歩々々移行行く光景を靜かに眺め靜かに味ふやうなことは稀になつた。

私は、時としては印刷術の幼稚だつた昔を羨ましく思ふ。歐洲の中世紀、日本の徳川期以前には、多數者は殆んど文字を解しないのであつたが、その頃少數の讀書力を具へてゐた人々は、自分の趣味に適した書卷を一字一句反復熟讀して、そこに含まれた滋味を残るところなく味得したのであつた。私なども幼少の時分には、一篇の小説一巻の史傳を珍重して、殆んど誦讀するほどに耽讀したことがあつた。種々雜多の書物の目まぐるしく出版される今日は、書物の有難さ尊さが薄らいだ。

書物の尊さを云へば、少年の頃、まだ都會の

地を踏まない前に、僻陬の郷里の、古ぼけた二階の一室で、東京から取り寄せた雑誌や新刊書を読んでゐるうちに、西洋では、ホーマー、ダンテ、シェイクスピア、ゲーテといふ人々を、古今を貫いた大詩人として尊崇してゐることを知つた。それは、團菊左の三人が、當時の東京の劇場での三大名優であることを知つたのと同様であつて、東京へ行つたら、それ等三名優の芝居を觀なければならぬ、東京へ行つたら、早く英語に熟達して、それ等西洋の四大詩人の傑作を讀まなければならぬと、前途に樂しい希望を描いた。

私は今、薄葉に印刷された、攜帶に便利な、ケリー英譯の「神曲」を座右に置いてゐる。葦篇三たび絶つと云ふほどでなくつても、方々が手垢に汚れてゐる。"Forgotten Virtues"といふ言葉を學窓でマコーレーのミルトン論譯讀の際に學んだことを覚えてゐるが、私の所持してゐる「神曲」は、私の "Forgotten Dante" である。扉に、鉛筆で小さく、三十八年六月十九日といふ、丸善で買った時の日附が記されてゐる。沙翁全集や近松全集すら持つてゐないほどに、藏書に乏しい私も、二十餘年間、この英譯「神曲」は手離さないで、旅中にもたび／＼これ

を懐に入れて、あちらこちらの一曲あるひは一章を、恣に讀誦してゐたのである。外國の書籍のうち、私がこれほどに親しんだものは他に一つもないと云つていゝ。……それに關はず、私はまだダンテを十分に理解したとは云はれない。英譯「神曲」を一通り讀みこなしたと云ふのも躊躇されるくらゐである。

少年の頃すでに名前だけを知つてゐたダンテに關して具體的知識を最初に與へて呉れたものは、例のマコーレーのミルトン論であつた。

(それには、「失樂園」と「神曲」との比較論がされてあつた。ダンテの地獄の描寫は繪の如く、惡魔の身の丈を物差しで計つてゐるやうに筆が具體的であるといふ風に説いてあつたと記憶してゐる) それから、カーライルの「英雄崇拜論」であつた。内村鑑三氏の「文學講演」であつた。

内村氏は、例の不敬事件に基いた迫害を誇張して考へ、自己を「國人に棄てられし」人としてしまつて、ひそかにおのれをダンテに比べてゐたらしく、峻銳の語調は、年少にして感じ易い、思慮の單純な私の心胸を、少からず刺戟したのであつたが、それにもまして、私をして、六百年前の外國の詩人に對して、正體を見ぬさきから、隨喜滿仰の掌を合せさせたものは、

例の「英雄崇拜論」中の、詩人としての英雄の一章であつた。今日はどうだか知らないが、この論文は、以前は諸方の學校の英語の教科書とされてゐて、カーライルの著作中最も廣く讀まれたものであつた。「サルトルレザルタス」とか「フランス革命」とか云ふやうな難解な著書に比べると、遙かに讀易いためでもあつたが、第一、「英雄崇拜」といふ題目が、内容の如何に關はず、日本の青年の心を動かしたのであらう。文學鑑賞の幼稚であつたその頃の讀者は、スコットを讀むにしても、まづ「湖上の佳人」を選んだ。

「英雄と英雄崇拜について」の講演は當時の聴衆であつた鈍重な英人をも昂奮させたであらうと思はれるやうな、言々風霜を合んだ峻烈な調子のものである。カーライルが自己の不平の鬱憤晴らしをしてゐるやうで鋒芒を現はし過ぎてゐる感じがあるが、兎に角、今でも、一氣に讀通されるほどの興味に富んだものである。「詩人としての英雄」の章下には、シェークスピアとダンテとを並せ論じて、例の「印度帝國を失ふ」とも我々はシェークスピアを失ふ能はずなどと叫んでゐるのだが、ダンテについても「世紀間歇してゐた歲月がダンテによつてはじめて聲を放つた」と云つてゐる。

「ダンテの神曲は、中世紀千年間の沈黙の聲なり」と云つたカーライルらしい評語は、はじめそれを聞いて以來、數十年後の今日まで、神曲を讀むたびに、私は思出すのである。私は、基督教を信奉してゐた二十歳前後の當時から、基督教とその信者とを嫌思してゐる今日まで、——矛盾してゐるやうだが——歐洲の中世紀に對してある憧憬を寄せてゐる。早くから中世紀千年の人生を具體化した神曲の前に跪する心を起したのは當然であつた。

信者であつた青年の私は、教理の繪解きのやうなバンヤンの「天路歷程」を面白く讀んだ。無學者の筆になつたこの書物は、通俗ではあるが、話上手が浮世嘲を語してゐるやうな劇的筆致に富んだ傑れた宗教文學であつた。しかし、ダンテは六ヶしかつた。六ヶしいのが當り前なので、伊太利人でさへ、ダンテ歿後間もなく、神曲を讀むのに註解を必要としたほどなのであつた。

開卷第一の長詩の一聯、「われ正路を失ひ、人生の羈旅半ばにありて、とある暗き林のなかにありき」云々は、ファウスト開卷の獨白と同様に、續いて起る物語の意味の深さを豫想させて、先づ私の心を緊張させた。それから、地

獄の門の頂に、「我れを過ぐれば、憂ひの都あり。我れを過ぐれば永遠の苦患あり。我れを過ぐれば滅亡の民あり。……永遠の物の外物として我れよりききに造られしはなし、しかしてわれ永遠に立つ、汝等此處に入るもの一切の望みを棄てよ」と黒く記されてゐる言葉を讀むあたりまでは、兎に角喘ぎ／＼隨いて行けたのだが、そこから私はへこたれて讀憊んだ。シェークスピアのハムレットなんかは随喜湧仰したゲーテは、ダンテの「地獄篇は嫌惡すべく、煉獄篇は茫漠たり、天國篇は倦怠を齎す」と云つてゐるさうである。近代思想の權化であつたゲーテには、中世紀の陰氣な思想や感情が厭はしく思はれたのであらうが、ゲーテをも徳の生えた前代人として取扱ふやうになつてゐる日本の現代人には、尙更ダンテなどの迎へられよう筈はない。全體彼れは、西洋の文學者のうちでも、最も日本向きでない一人なのだ。

しかし、私自身は、中世の煩瑣なスコラ哲學には何等の興味をも感ぜず、ダンテの人生觀にも必ずしも共鳴してゐるのではないが、中世に對してある種の羨望を寄せてゐる。「神曲」をも今なほ、棄て難い良書としてゐる。……日本も文運隆盛の結果日本向きでない、ダンテ

に關しても、その翻譯や研究書が可成り出版されるやうになつた。「神曲」の全譯も二つ世に出でゐるが、私は山川丙三郎氏のそれを購讀した。譯者は多分カトリックの信者であるらしく、文學上の名譽心よりも宗教上の信仰を動機として、この神聖なる喜劇の翻譯に着手したのであらうが、譯文の態度は甚だ忠實である。原詩に含まれてゐると云はれる音楽の響きや詞句の風韻が缺けてゐるとしても、あんな難解な長詩を、日本文でこれだけに譯しこなすことは大事業である。近代小説の出鱈目な翻譯とはその難易同一視すべきものでない。私は、ケリーの英譯本では曖昧模糊の感じのしたところを、山川氏の日本語によつて明かにした。ことに、首尾を通じて精細な註釋が附せられてゐるのは、譯者の誠意を推察することが出来る。

ダンテばかりは註解に依らなくつては、いかなる人も讀みこなし得られないのである。山川氏は、宗教以外に文學上の名譽心はないのか、これほど丹念に仕上げた譯書に於て翻譯の苦心談、あるひは自己のダンテ觀などを一言一句も述べず、ダンテの略傳さへも添へないで、たゞ氏の師である新井先生の、村學究然たる面白くない感想録を、毎巻の巻頭に有難さうに掲げ

てゐるのは、今日の文學者氣質とは、全く類を異にしてゐる。私は蔭ながら、氏の翻譯の勞を感謝しながら、その浮世離れのした氏の人となりを想望してゐる。山川氏の外に、中山昌樹氏は「神曲」をはじめ、ダンテの著作全部を譯述してゐる。氏は、その上「ダンテ傳」と「神曲研究」の二書を著してゐる。日本のダンテ學者の隨一人は、多分中山氏であらうと思はれる。氏の感想は隨所に現はれてゐるが、それによつて見ると、氏も宗教信者であるらしい。そして、西洋の多くのダンテ學者の如く、氏も、神曲を以て、人類所産の最高の作品であると極言して、禮讃してゐる。

私が寄せ集めた日本のダンテ書類は、以上二氏の譯者の外に、黒田正利氏の「ダンテと其の時代」と、阿部次郎氏の「ダンテの神曲とニイチェのツアラツストラ」及び「ダンテ 雑話」(評論集「地獄の征服」中に編入されたもの)などがある。黒田氏のは、今まで日本に現はれたダンテ傳中、最も浩瀚なもので、一通りダンテの生涯について知らうとするには、これで澤山なのである。西洋では、ダンテに關する書類の夥しきこと、むしろシェークスピアをも凌ぐほどで、最近に至つてダンテ研究は、ますます旺盛

で、新著が續々と現はれるさうだが、ダンテ自身は著作の数は少く、その實生活についても、調べ得られる限りは大體知り盡されてゐるのだから、さう新しい発見のあらう筈はない、と私は讀まないで推察してゐる。しかし、この中世紀の詩人に關する研究が旺盛で、新著が頻りになるのによつて見ると、西洋でも、中世紀を夢想し憧憬する人々の少くないことが推察される、私は人生の歸趨について考へさせられるのである。「現世を苦の世界とし假りの住ひとして、修道院に籠つて、天の一方を夢む」中世紀氣質は、いかに強烈な近代の力、文明の光を以てしても人心から消亡させ得られないのである。私は歴史の表面では陰慘であつたらしい中世紀の人々を、羨望の日をもつて見詰めることがある。

阿部氏の「神曲とツアラッストラ」論は、氏の哲學的知識と聰明な批判力を示した大論文である。私はこれによつて、はじめて、ダンテに對する日本人の獨斷の見解に接したので、學ぶところが尠くなかつた。翻譯して歐米のダンテ學者に示すに足るものである。…しかし、私は必ずしも氏の所説に贊同してゐるのではない。英國のダンテ學者の中、最も深遠らしい哲學的

考察を試みたムーアの所論と同様に、それに暗示されて出立した阿部氏の、ダンテの罪惡觀についての批判にも、左程の興味を感じ得ないのである。

私が、年少にしてケリーの譯本を手にして以來、ところ／＼拾ひ讀みしながら、感動した詞句には鉛筆やインキで線を引いたが、今その二三を選出して見ると、

「浄火篇の第十一曲、傲慢罪を淨めつゝある雷家オデリジと、ダンテとの會話が、その一つである。

「あゝ、君はグツピオの譽れと云はれた人で、巴里で色彩畫として持囀す繪の名人のオデリジさんではないか—
—いや、兄弟よ。ポローニア人フランコの描いた繪の方が、僕のよりは華やかで勝つてゐる。今はあの人が名聲を一人占めにして、僕の名譽はほんの一部分に過ぎないのだ。…僕も生きてもゐる間は、頭りに人を凌がうとして、心がその方へばかり向つてゐたから、今のやうにこんなに人に讓る氣にはなれなかつたが、…あゝ、人間の方は空しい。先輩を凌駕する者の出て来ないやうな衰へた世なら死に角、さうでない限りは、青々と茂つた名聲の頂上も、直ちに

枯れつ葉になるのだ。…昨日までチマーブエが繪畫界で覇を唱へてゐたと思ふのに、今はジョットの呼聲が高くなつて、あの男の名譽は微かになつた。…それと同様に、一人のゲイドが、他のゲイドから文章の名譽を奪つたが、間もなくこの二人を裏から逐出す者が生れて来るだらう。…浮世の名譽は、此方へ吹き、彼方へ吹いて、處次第で名前までも變るやうな風の一息に過ぎないのだ。…」

分り易い現代語に譯したから、こんなに冗漫になつたが、ケリーの翻譯によつても、實に簡潔に含蓄のある文辭で言現はされてゐる。西鶴の文章が思出される。ストリンドベリーの「ダマスクスへ」にも、雷家を例に擧げて、浮世の毀譽褒貶の頼み難いことが詳しく述べられてゐるが、さう云へば、「ダマスクスへ」はストリンドベリーの神曲であり、神曲はダンテの「ダマスクスへ」である。一人は中世紀の末期に生れたためにあゝいふ形に於て、おのが心の記録を留め、一人は十九世紀末期に生きてゐたためにあゝいふ形に於て、おのれ的心灵の經驗を記したのである。古今の文人の中でも類を絶してゐたと云はれほどに高貴な相をして、沈鬱と思慮とが面に現はれてゐたダンテと、山猫のやうな顔

して世を睨んでゐたストリンドベリーとは、容貌からして非常に違つてゐる。それで私は、この二人の肖像を並べて見て、中世紀と近代と二つの時代の象徴の如くに感じてゐるのだが、この二人は、根本に於てはそんなに相違してゐないのだ。ストリンドベリーは、世評で極められてゐるほどの憎人家でも、女嫌ひでもないし、ダンテもダンテ學者によつて理想化されてゐるほどの愛の權化ではないのだ。そして、かの北歐の近代詩人も、近代らしい形に於て、地獄と煉獄とを通過して自己の心魂を鍛へてから、つまりはカソリックの宗教的恍惚境に老後の平安を求めたのであつた。

私は、また、「わが血は嫉妬のために湧きたり、われ若し人の幸福を見たらんには、汝はわれの憎惡の色に被はるゝを見たりしなるべし」(淨火篇第十四曲、グイード、デル、ツーカーの言葉)といふ詞句に線を引いてゐる。「不幸な境遇にゐて、幸福だつた昔を思出すほど大いなる悲みはなし」と云つたフランチェスカの有名な歎息に圈點をつけたのは云ふまでもない。「いと深く愛する物をば汝悉く棄て去らん。これすなはち流罪の弓の第一に射放つ矢なり。……他人の麵麴のいかに苦く、他人の家の

階子段の昇り下りのいかに苦かり、つきかを汝自ら験すならん」(天堂篇第十七曲)これは、ダンテが天上で會つた自分の祖先のカチヤグイダから、ダンテ自身の將來の不幸なる生涯を豫告されるころであるが、云ふまでもなく、祖先の豫言に託して、ダンテ自身の流罪の艱苦の一端を徴見させたのだ。「他所の家の飯には骨がある」と日本でも「寄食者の苦み」が云はれてゐる。二階背りの苦しさは東西古今同じことである。

かういふ風にダンテを拾ひ讀みしても、現實の世相現實の人生の描寫が、至るところにきらめいてゐるのだ。たゞ、ダンテは中世紀らしい表現法を用ひ、ストリンドベリーなどは近代らしい表現法を用ひた相違があるだけだが、一かし、あれほど強烈な主觀的詩人であつたダンテが、自己の心魂の苦悶と解脱の經路——すなはち自傳傳を筆にしたが、なぜストリンドベリーなどとは違つて、自己の生活の直寫を讀みなかつたか。彼れが二十年間の流離の生涯を何處でどうして過したかについては、斷片的に知られてゐるばかりで、後世のダンテ學者をしてその穿鑿に苦心させてゐるのだが、彼れは何故に、自己の實生活については自ら語るに

躊躇したのであらうか。

私はそれについて考へた。そして、中世紀の詩人氣質について大いなる興味を覺えてゐる。

二

「我々が今日實世界と云ひ事實と云ふものも、中世紀の人々から見ると、それらは人智で窺し得られない神の眞智の深淵が象徴されたものに過ぎない。現實の世界、それがすでに、アレイゴリーである」實生活は影であり幻であつて、眞の事實の天の彼方にあると確信してゐた中世紀の人の考へに、私の心は惹かれてゐる。さういふ夢想を羨望してゐる。

ダンテは、その自傳的「神曲」に於て、自分の子供や妻や兄弟については一言半句も記してゐない。両親についても、彼等がイタリー語を用ひたことを記してゐるばかりである。彼れには姉が二人あつたが、そのうちの一人については姉が二人ある條下に、一度ボンヤリした事を「新生」のある條下に、一度ボンヤリした事を書留めてゐるに過ぎない。彼れの肉親について云つてゐることはこれつきりである。彼自身の行爲にも殆んど筆を觸れてゐない。さういふことを敢てするのを恐れてゐるやうな態度を執つてゐる。何故であるか。

この頃讀んだ、グランドゼントの「ダンテの威力」といふ講演集のうち、「中世紀に於て最も尊敬された修辭學の權威はアリストートルとシセロであつた。十三世紀では、修辭學ばかりでなく、辯論術と論理學とが、大學で重んぜられた。そして、その修辭學は文章を没個性たらしめるやうに教へたので、ダンテのやうな強烈な個性を持つた作家でもそれに感化されるを免れなかつた。彼れが修辭學を學ばなかつたならば、「新生」と「神曲」との心靈的自傳に於ても、自分の物質的實際生活についてもつと何かを書留めたに違ひないだらう。誰れでも必要がないのに自分について語ることは、修辭學者に許されてゐないと、彼れは云つてゐる……と説いてあつたが、かういふ修辭學が信奉されたのは、中世紀の人生觀に深い關係があるのである。人間の實生活、すなはち外形的の生活は、さして重んずべきものではないので、重んずべきはたゞ心靈の生活だけであつた。だから、今日の日本の小説のやうに、自分の煩瑣な日常生活をゴタ／＼と書く必要はなかつたのである。自分の個人的行爲を喋々と語ることは恥とされてゐたのだ。

「ダマスクスへ」が私戯曲である如く「神曲」

も私戯曲である。しかし、それは自己日常の行動をゴタ／＼と書並べた日本の私小説などとは、正反對の文學である。それで、今日の雜誌文學を讀んだ私は、屢々目を「神曲」などに注ぎやうになつた。

それでは、ダンテは、人間を描くこと亡靈のやうであつたかと思ふと、決してさうではなかつた。ケリーの英譯本には「ダンテの幻相」と題目がつけられてゐるが、この幻相が寫實を極めてゐることは、地獄篇の幾曲かを熟讀すれば、誰れにでもよく解るのだ。天性の洞察力と寫實の才とは、地獄を描いても、天堂を描いても、人間を描いても天使を描いても、それ等を讀者の眼前に浮上らせるほどの妙境に自ら徹してゐたのだ。彼れの寫實の手腕は、シェイクスピアなどの及ぶところでない、私は確信してゐる。有名なフランチェスカの情話やウゴリノ伯の慘話は云ふまでもなく、火氣や焦土を手で拂ひながら、それ／＼に頸に懸けた財布を見て日を喜ばしてゐる高利貸でも、雨や雹や濁水で悪臭を放つてゐる地上を轉つてゐる貧食家でも、作者の主觀と場景とが融和して、繪の如く描かれてゐる。神曲がダンテの存命中すでに、イタリーの有力な貴族達に興味をもつて

愛讀され、また一般人民も街上でその一部を愛唱したと云はれるのは、さもあるべきことと思はれる。辛辣な寫實の筆が面白かつたのだ。時としては他を怒らせたであらうと思はれるくらいに無遠慮に、辛辣に、當時の人々の知つてゐる人間や事件を描いたのだから、我々が時處を隔てて今日此處で讀んでゐるよりも、當時のイタリー人には遙かに興味が多かつたに違ひない。……現在の大任や代議士や陸軍大將や大學教授など知名の人物を「神曲」の地獄中の罪人どものやうに取扱つた演劇が今日實演されたとしたらどうであらう。

驚くべきことは、ダンテがこの書の發表を決定した以上、彼れが書中の地獄へ追込んで恐ろしい刑罰を受けさせた人々の子や弟妹や妻などが、その父や兄や夫の處遇を如何に感じたかと云ふことである。その上、驚くべきことは、ダンテによつて地獄圏内の極刑に處せられた人は、死者ばかりではなかつたので、たとへば、地獄篇の第三十三曲に現はれてゐるアルベリゴやブランカ(殺人者で、千三百年頃には二人ともまだ生きてゐた)は、地獄でダンテに會つたことになつてゐるが、肉體はまだこの世に残つてゐたのだ。……また、フロレンスの樂器製造

家のベラツカは、かつて戸口に坐つて、膝に頭を當てて笑はれたことがあつたために、またに見られて笑はれたことがあつたために、また生きてゐるのに、ダンテのために、その作中の淨罪人の態に、膝や頭をあのみで坐らせられ、懶けものだから山へ登れないことを現はされねばならなかつた。

かくて、ダンテは自己の生活の直寫は試みなかつたが、その幻想には人生の諸相が織込まれてゐるのであつた、寫實味に富んでゐるのであつた。ところが、この人生觀察を、中世紀の神學によつて鍊磨されたダンテ自身の主觀で如何に取扱つたかといふことが、ムーアや阿部氏などのダンテ學者の重大な問題になつてゐるのである。前に云つた如く、阿部氏の哲學的倫理考察は面白い。地獄の境界から最後の第九獄までの罪人に對するダンテの態度について、細かに批判し、高貴なる道徳を説いてゐるところは、哲學にも神學にも暗く、聖書をもたゞ、古代史として人生記録として鑑賞してゐる私には、物珍らしく感ぜられたのであつた。

（我々は哀憐エレオス）と同類感（フィラントロピア）との差別を何處に置くべきであるか。哀憐は對者の價値に同感することを條件とする

同情である。同情感とは對者が凡そ我々の同類であることを條件とする同情であつて、必ずしも彼れに人間としての價値があるかないかを問はない。たとひ彼れが極惡非道の者であつても、苟く彼れが劇痛に襲はれて輾轉するのを見れば、我々の心にはフィラントロピアの感情なきを得ないが、この感情には對者を是認する心境が缺けてゐるが故に、それはエレオスと呼ばれることが出来ない。エレオスは唯價値ある者の苦惱に對してのみ可能である。アリストートルの有名な悲劇論に従へば、それは唯、當然以上に苦惱する者、價値ありてしかも罪過ある者に對してのみ可能である。哀憐と同類感とは其のうちに價値の——人格價値の——見地を含むか含まないかによつて、明瞭な差別を持つてゐるのである。……ピエタに對する詩人ダンテの態度は、神曲のある箇所於て甚しく註釋家を悩ました。しかし、ピエタの中には哀憐と同類感との二つの意味が含まれてゐることを悟れば、彼れがピエタを是認する場合と非認する場合との差別は、必ずしも戸惑ひを要するほど混雜してゐるのではないのである。大體から云へば、ダンテは罪人に對するエレオスを是認してフィラントロピアを非認する。これは

冥々の間に高貴の道徳を奉ずるダンテに取つては當然のことであるが、それだけに、我々は益々この視點を見失はぬやうにしなければならぬ。

阿部氏はかういふ倫理觀を抱持して、ダンテに隨つて地獄の門へ入つて、詩人の行動について注意深き研鑽を試みた。

私は敢て氏の見解に反對しようと思はないのみならず、さういふ見解も自己修養のよすがとなるのであらうと思つてゐるが、しかし、私は、超人を説いたニイチエの倫理觀を具體化したやうな人間の見本としてダンテを見ることを好まない。彼れは彼れの心に地獄と煉獄との修業を積んでやうやく天堂に達したのではないか。道案内にグアジルを頼んでおどろししながら暗黒裡の旅をした彼れではないか。煉獄は他人のこ

とよりも彼自身の心の鍛鍊の道場であつた。前に「神曲」から引用した言葉でも、「自分が幸福であることよりも他人が不幸であることを喜んだ」と云ふ嫉妬深い貴婦人サビアの懺悔の言葉でも、ダンテ自身にさういふ感ぜしを経験してゐればこそ、他の心が洞察されたのだ。地獄旅行最初の用意として、「われは唯ひとり、旅路と同情と二つのいくさに、兼ねて堪ふべく身装ひ

しつと心構へをしたのは當然であつても、恐怖の世界を辿るにつれて、同情（或はある翻譯語の恐れ）の念に動かされて、用意の亂れるのも當然であつた。中世の神學に基いて、それ／＼の罪人をそれ／＼の適所に置きたがらも、知人としての個人的感情から心の亂れるのも當然であつた。ダンテならぬ者もさうではあるまいか。男色の徒の群の中に、舊師プルネットを見て、その罪に對する憎みを忘れて、思はず優しい感情を起すのも當然であるし、一人の女を一生思ひ詰めたほど戀に徹してゐたダンテが、フランチェスカなど所縁の二人に哀憐の感じを寄せるのも當然であつて、殊更高貴の心として批判するほどのことではないのではあるまいか。ダンテは神經過敏で感情の激しい皮肉な男であつたらしい。今日では創作中の人物となり切つて分らなくなつてゐたが當時は、モデルに對する作者の愛憎の感じが讀者に認められてゐたであらうと察せられる。政争のために故國を放逐されて、二十年間の艱苦を嘗めたダンテだもの、背信の裏切り者に對して憤激して、その髮の毛を引抜くがら當然であつて、強ひて倫理問題を云爲するには及ばないのである。彼れが流竄の生を送つてゐる間、夜半の寢醒めに、

いくたびか、政敵や賣國奴に對して憎みを覺えて、彼等の髮の毛でも引つこ抜かうと空想したか知れなかつたと、私には察せられる。それが地獄の幻想となつて現はれたと見てはいけないのだらうか。ウゴリノ伯の慘事は、ダンテが二十餘歳の頃に起つたのだから、多感な彼れは、ピサから傳はつて來た報告を耳にして、若き心に戰慄を覺えたであらうと察せられる。凄慘な詞句の響きが、無縁の私などの心にも脈々として傳はる譯である。

私は神學の規定によつて罪人を配置しながら、七情を備へたダンテの心がいろ／＼に動搖したところに、彼れの心の自然傳を見てゐる。そして、そこに共鳴を感じてゐる。

三

放浪してゐたダンテは、巴里へも行つたと傳へられてゐる。その途上、ある僧院に宿を求めると、その僧侶は、旅人の誰れにでも訊ねる通りに、「お前さんは何を求めに此方へ來たのか」と訊いた。ダンテが返事をしなかつたので、僧侶は驚いて、同じ問ひを再び發した。すると、ダンテは、たゞ「言、平和」と答へたさうである。

この逸話によつて私は、早くからダンテの心境を想望してゐた。

彼れは、聖フランチェスコの教團のある人々の如く、絶対の平和に安住し得られる聖人ではなかつた。辛辣な皮肉や、機智や、痛快な激語が、彼れの逸語として残つてゐる如く、彼れは浮世の事相、周囲の人間の言行から超然としてゐられる人ではなかつた。……彼れは彼れの政治的見解から望みを喝してゐたハイインリツヒの死によつてイタリー統一の平和の夢が消えてしまつたので、俗界に斷念して、ある山腹の修道院に隱退して心を安んじようとしたさうである。その修道院の光景らしいものが、天堂篇の第二十一曲に、他人から聞かされた話に託して書かれてゐる。

「伊タリーの二つの岸の間、汝の郷土よりいと遠くはあらざる處に、雷の音遙かに下に聞ゆるばかり高く聳ゆる岩ありて、一つの峰を成す。この峰カトリリアと呼ばれ、これが下にはたゞ禮拜のために用ゐる習ひなりし一つの庵清めらる。……かしこにてわれひたすらに神に事へ、默想に心を足はしつと、橄欖の液の食物のみにて、軽く暑き寒きを過せり」といふのは、ダンテ自身の経験であつたかも知れないのだが、彼れ

は、その聖境で神を讚美し永遠を願ひ、あるひは詩作に耽つてゐるだけでは堪へられないで間もなく里へ下つて、あちらこちらの貴族の家などに寄寓して「他人のパンの如何に辛きか」を味つたのであつた。あるひは冷嘲の目を向けられ、あるひは尊敬を寄せられたりする境地へ、進んで身を置いたのであつた。「おゝ恵まれし孤獨よ、おゝたゞ一つの祝福よ」といふ、僧院の闕に立つた修道僧の囁きは、六百年後の今日、なほ私の耳底に響いて、思はず首を垂れさせられるのであるが、ダンテはその修道院の神聖なる孤獨と祝福とに心身を埋没してはゐられなかつた。

さういふダンテなればこそ、九歳の幼時に見染めたベアトリチエを、五十を過ぎた老境に達してまでも思ひ詰めて、「久遠の女性」に仕上げたのであつた。世に戀物語多しと雖も、この大詩人の不變の戀ほど世に名高いものはない。：：：ベアトリチエに關するダンテ學者の解釋や批評のうるささよ。戀愛の神秘境を私が窺ひ得ないためであるか知らないが、彼等がわれ劣らじと持出す勿體ぶつた見解に、私はをりをり噴散するのである。：：：そして、簡潔鋭利にさまざま人間を描いたダンテも、肝心なベ

アトリチエだけはよく書けてゐないと、私は思つてゐる。私は彼女よりも地上樂園のマチルダの方に懐かしみを有つてゐる。このマチルダを豎景人物とした地上樂園の描寫は、詩の極致のやうな感じがされるのであるが、肝心の天上界は、時世の相違してゐるためでもあらうが、私には甚しく興味索然として感ぜられない。

J、A、サイモンズも云つてゐる如く、淨罪界の終りに近いところの、ウイルジリオとベアトリチエとのパセチツクな對立ほど、讀者の心を傷ましめるところはない。地獄煉獄の苦艱の忠實な案内者であつた彼れも、天堂の女王である彼女のの前では、曉の光によつて影の薄らぐ月しるの如くなるのである。：：：ダンテに別れて、永しに救はれないリンボの世界へ落ちて行く彼れウイルジリオの悄然たる孤影を眺めて、サイモンズは一擲の涙を漉いだのである。サイモンズはまた「新生」では、最も若い天使のやうに美しい少女であつたベアトリチエが、ダンテに對して、氣取つた説教師か乾涸びた自動人形のやうに行動するのを難じてゐる。人間はウイルジリオによつて表象されてゐるやうな理智によつては救はれないで、ベアトリ

チエによつて表象されてゐるやうな愛によつて救はれることが、誰れでも云つてゐる如く「神曲」一篇の眼目なのであらうが、此處に現はれてゐる天堂の光景は、我々には甚しく無味乾燥である。それは時代の相違上止むを得ないとして、ベアトリチエの愛の光が私などには痛切に感ぜられないのはどういふ譯であらうか。：：：愛を得たり救ひを得たりした人生至上の恍惚境は文字をもつて傳ふるに困難なのであるまいか。艱苦哀傷の事相は、詩に唱へ文字に現はして他に傳へ得られても、自足した境

地は文字では現はせないのかも知れなハ。近年「ヒステリーの研究」をはじめ、さまざまの精神分析の新研究を發表し、舊套を脱した所説によつて世を驚かしたフロイドの性慾觀に據つて批評すると、「神曲」の天堂も、必竟ベアトリチエに對するダンテの壓迫された性慾の變形と見られるのである。シエークスピアは萬人を描き得てもデイヴァインな人間だけは描き得なかつたとか、ダンテの肖像にあつてゲートの肖像に缺けてゐるものはデイヴァインな相だとか、ダンテと云へば「divine」高貴、神聖の形容を附するのが、古來の常例になつてゐるので、フロイド流の解釋は、大いにその神聖を

害する譯であるが、しかし、「久遠の女性」といふものは、男子が婦人に對して充されない思ひをしてゐる結果として現はれる迷妄ではあるまいか。……ダンテは實生活に於てはゼンマといふ女を妻としてゐたのであつたが、ボツカチオの傳ふる所によると、ゼンマは猜疑深くつて、ダンテは妻の前では溜息一つ自由に出てなかつたからで、結婚後は良友との交際をも斷つやうになつたさうである。晩年のトルストイの妻、ストリンドベリーの妻、盲詩人ミルトンの妻の事など思出される。この傳説の眞否は疑はれるにしても、現實の妻に飽き足りない思ひを、空想裡のベアトリチエによつて充たす事は、ダンテならぬ今日の男子にても、常に經驗することではあるまいか。そして、ダンテが流竄の日夜の淋しさをベアトリチエの追想によつて慰められたことは推察される。日常の喜憂を分つた實在の妻や情婦を理想化して天上に奉ることは困難であるが、少年期の空想の女をエンジェルとすることはさう困難ではあるまい。その代りさういふ空想の女には生氣が缺けてゐる。

私は「神曲」に親しんでゐる。しかし、六百年前の伊太利の小都會で短い生涯を送つた

一少女子に久遠の救ひを求めためではない。

昔高山樗牛は、中世紀の神學に對して、人間がいかにか馬鹿なことに頭を使つたかといふことを現はしてゐるに過ぎないといふ意味の評語を放つた。今日は誰れしもさう思ふだらう。私なども神學には何の興味も有つてゐない。しかし中世紀の人々の心境を羨望してゐる。憧憬さへもしてゐる。そこには現代文明人のとても味ひ得られない靜寂な恍惚境が出現してゐたのに違ひない。「靈魂は地上に於ける巡禮」であつた。「この世は一夜の假りの宿で故郷は彼方にあつた」すべてを棄てて修道院へ行け。そこに「橄欖の液の食物のみにて、軽く暑さ寒さを過したり」

表面的歴史の記述によると、中世紀は所謂暗黒時代なるもので、僧侶や帝王の横暴な專制政治の下に、一般人民は悲惨な生活をしてゐたことになつてゐるのであるが、しかし、その時黒專制の世は、徳川專制治下の陰鬱な泰平の世とは違つてゐたやうに思はれる。壓迫の下に徒らに蠢動してゐた賤民ではなくつて、蜂蟻の生涯のうちに、美しい夢を見てゐたやうに思はれ

る。煩瑣な哲學も、その夢を夢ませる藥として役立つてゐたのだから、彼等には無用でなかつたのだ。……「どうせ一夜の假りの宿ではないか」地球が圓からうとも平からうとも、自轉してゐようとゐまいと、そんなことはどうでもいいではないか。……彼等は不安な思ひをしておどおどしてゐないで、地上の巡禮の終るを待つてゐた。……私は思ふ、人間はさうなり切ればそれでいゝのではあるまいか。

歐洲でも大戰後は、中世紀渴仰者が殖えたさうである。従つてダンテ研究がますます盛んになつたさうである。私も、馴染深いダンテを、新に讀み直さうと思つてゐる。

跋

私は長篇らしいものは稀れにしか書いてない。「深淵」は、私の作中では最も長いものと云つてもいいのだが、作者自身でも好感を持ち得ないのでこの集には収めなかつた。

私は可成り努力する方だが、根氣に乏しいためか、長いものに取りかゝると中途でいやになつて、筆力の鈍るのを例とする。

この集中に収めた多くの短篇あるひは中篇)は、比較的世評のよかつたものである。作者自身はどれを好むかといふと、作家臭のない淡々たる作品を好むのだ。

「玉突屋」は、初期の好小品と云つていい。「地獄」と「徒勞」には、ある時期の作者の心境が現はれてゐると思ふ。「微光」「泥人形」などは、どうして評判がよかつたかと疑はれる。

私は隨筆とも小説とも論文ともつかぬやうな、十枚内外の短い雑文を何百篇となく書いてゐる筈だが、つまりは、からいふ片々たる雑文のうちに、私の作品としてのいいものがあるのではないかと思はれる。

私は同じやうな小説を書きつゞけるのに飽いて、大地震後、しきりに戯曲を書いたが、この方面でも、同じ事の繰返しになりさうである。人物評論には、近來、自分も可成り興味を感じて筆が執れた。

藝術的評價は別として、自分の書いたものには、いかなる種類の作品にも、自分の影が映つてゐるにちがひない。個々の作品をよく見る人に對しては、作家は自己を自己以上に自己以下にも現はし得ないのである。

正宗白鳥

私は小説に於てチエホフを尊重してゐる如く、脚本に於ても、イブセンのよりもストリンドベルヒのよりも、この人の愛誦してゐるのである。先頃ダンセニーの戯曲集を讀んで、非常に面白く感じたのであつたが、しかしこのくらゐなものなら、日本人にでも書けさうに思はれた。彼れの戯曲ははじめ讀んだ時ほどには二度目には面白くないのである。チエホフの如く、讀むたびに新たな面白味の出て來るものとは違つてゐる。小説でもアンドーレフのやうな作風のものには、讀んで飽き易く、書いても書き易く、チエホフやトルストイの作のやうなものは、いつ讀んでも感歎させられ、書かうとしても眞似られないのである。私は今日までチエホフの小説のやうなものは、つひに一篇も書き得なかつた。脚本に於てもさうだらうと思はれる。それで、私は、自分の心に映る快不快な空影空想を、筆の動くにまかせて、脚本の形を借りて書きなぐるつもりである。

〔文藝評論の「脚本について」より〕

年譜

明治十二年

三月三日、岡山縣和氣郡伊里村穗浪に、正宗浦二の長男として生る。本名忠夫。幼少の頃、痼強し。

明治十六年

村内の抱島尋常小學校に入る。一絲、犬、猫の繪入讀本によつてはじめて文字を學ぶ。同讀本には「神は天地主宰にして人は萬物の靈長なり」といふ六ヶ敷い文章が編入されてゐて、それを誦誦させられた。

明治二十一年

隣村片上村の小學校高等科へ入學。成績よきも、圖畫、算術、體操を厭ふこと甚し。

明治二十五年

春、卒業す。それより近隣の私塾「閑谷齋」に入學す。池田光政時代よりの藩校なり。漢文籍を主とせり。二年未滿にて退學。

明治二十七年

身體衰弱、胃殊に惡し。近村香登村の基督敎講義所に行きその教を聽く。岡山市に寄宿して病院に通ひ、傍ら、米國宣敎師の經營せる微陽學院にて英語を學ぶ。在學約半歲。この學校の校長は安部磯雄氏なりし。

明治二十八年

故郷に蟄居して文學書類を亂讀す。

明治二十九年

二月下旬上京、牛込横寺町に下宿した。早稻田大學の前身たる東京專門學校英語事修科に入學。夏、大患に罹り臥蓐二ヶ月餘。

明治三十年

植村正久氏によつて洗禮を授けられ、市ヶ谷の日本基督敎會の會員となつた。内村鑑三氏の著書や講演によつて感化せられしこと尠からず。

明治三十一年

東京專門學校に史學科新設せられ、入學。

明治三十二年

史學科廢止のために文學科へ轉じた。

明治三十四年

島村抱月氏の指導の下に、數名の同級生とともに「讀賣新聞月曜附録」へ批評文を寄稿した。最初の批評の題目は鏡花氏の「註文帳」であつた。

明治三十五年

文學部卒業。學校附屬の出版部に奉職し、文學科講義録を編輯す。この年、基督敎を棄つ。出版部辭職。

明治三十六年

六月、讀賣新聞社に入社。美術、文藝、教育に關した記事を擔當した。

明治三十七年

輿評をはじめ、「痲瘋」と題する小説を「新小説」紙上に載す。處女作と云ふべし。この原稿料一枚五十錢。全額二十餘圓の半ばを割いて蒲團を新調した。

明治三十九年

文壇の風潮大いに變化せんとす。「讀賣新聞」の文藝欄は新時代を代表してゐた。「早稻田文學」へ「二階の窓」と題する小品を寄せ、「新小説」に「舊友」を寄せ。稍長きものなり。漱石の「草枕」と同時に掲載された。

明治四十年

「塵埃」を「趣味」へ寄せ。世評大いによし。この短篇によつて新進作家として囑目せられた。

明治四十一年

「何處へ」、「玉突屋」、「五月轍」、「世間並」

「大家族」などを相次いで發表して大いに認められる。この年九月、長い間の下宿生活から轉じて、老婢を雇ひ一家を構へた。

明治四十三年

六月、讀賣新聞社退社。在職七年間、胃弱と不眠症に苦められた。「徒勞」、「微光」を出す。後者は非常な評判を得た。

明治四十四年

四月、甲府市清水徳兵衛次女つね子と結婚す。年末より長篇「毒」を「國民新聞」に掲ぐ。この年、「泥人形」など短篇十數の作あり。

明治四十五年 (大正元年)

「朝日新聞」へ「生靈」を寄せた。脚本「白壁」などの作あり。

大正三年

脚本「秘密」、短篇小説「初旅」外十數篇。

大正四年

百日間、胃腸病院に通ふ。「入江のほとり」外十數篇の作あり。

大正五年

「牛部屋の臭ひ」「死者生者」等評判よきものを出す。「朝日新聞」に長篇「波の上」を掲ぐ。

大正六年

肛門病院に入院。

大正七年

近年次第に執筆難を感じ、且つ人生に對する倦怠を覺ゆること甚し。

大正八年

十月十五日、當時借家住ひしてゐた麻布我善坊町を離れ、夫妻相携へて伊香保に赴き、中仙道を経て京阪に遊び、十一月中旬、歸郷した。出来ることなら文學を棄て、都會生活を止めようと思ふ。

大正九年

郷里の生活にも堪へられなくなり、五月出

立、伊香保と輕井澤にて四五ヶ月を過す。

『毒婦のやうな女』『尾花の蔭』など執筆。

十一月、大磯へ轉居。

大正十年

三月、大磯を離れ、六月、再び大磯に来る。東京にい、借家が見つからなかつた爲である。

『人さまざま』『冷涙』など執筆。

大正十一年

『穉妻』を『婦人世界』に掲ぐ。

大正十二年

『生まざりしならば』など短篇十数篇。

大地震には家は半ば壊されたが、危く生命を免れた。

大正十三年

二月、戯曲『景法師』を『中央公論』に掲げしより、数年間頻繁に戯曲を草す。『人生の幸福』『光秀と紹巴』最も世評高し。

この年、痔疾治療のため東京の病院へ四十日間入院した。

大正十四年

長篇『人を殺した』を『週刊朝日』に掲げしむ。

大正十五年（昭和元年）

引きつゞき文學や演劇やその他の事について評論の筆を揮ふ。評判よろし。

小説にも戯曲にも評論にも長大なるものは殆んどなし、長篇はいづれも出来榮え悪し。

昭和三年

十一月二十三日、横濱出發、夫妻相伴うて世界漫遊の途につく。

自分にも、両親があり、弟妹があるのだと思ふと、不思議に感ぜられることがある。しかし、私自身が老境に入った今日、なほ、両親が生きてゐて多数の弟妹も生きてゐることを幸福に感ずる時もある。私のやうな他人に親しみが無い人間が、一人の肉親もなくつて世に生きてゐたら、世の中は淋しくつてたまらないだらう。この頃は、私は心にも歳を取つて氣が弱くなつたためか、両親の長生や、弟妹の無事息災を願ふやうな氣持になつた。

（『白鳥隨筆集』の「両親の印象」より）